

ホープライトプリキュ
ア

SnowWind

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒き闇、空を覆わんと拡がりし時、

4つの光、闇を照らすべく大地に降りる。

其の名はプリキユア。汝は世界の希望なり。

子供の夢を育む都市、夢ノ宮市。一之瀬 蛍は、春からこの街に引っ越してきた。

右も左も見たことのない景色が広がり、道行く人々も知らない人ばかり。

人見知りが強く臆病な蛍は、新しい街を前に不安を募らせるが、

そこで1人の少女、リリンと出会う。

よかつたら少し、お話ししない？

2人の出会いが、光と闇の新たなる戦いの引き金となるのだった。
一歩踏み出す小さな勇気と、希望を胸に、がんばれ、わたし。

プリキュアシリーズが好きで書いてしまった処女作。

趣味全開、GL描写多々、途中加筆修正の可能性あり。

初作品ゆえ至らない点等々が多いと思われませんが、
楽しんで頂ければ幸いです。

ご意見、ご感想等あれば、遠慮なくお願いします。

目次

人物紹介	1
第1話	
第1話・プロログ	18
第1話・Aパート	28
第1話・Bパート	52
第2話	
第2話・プロログ	74
第2話・Aパート	77
第2話・Bパート	112
第3話	
第3話・プロログ	154
第3話・Aパート	158
第3話・Bパート	193
第4話	
第4話・プロログ	237
第4話・Aパート	240
第4話・Bパート	286
第5話	
第5話・プロログ	335
第5話・Aパート	339
第5話・Bパート	373
第6話	
第6話・プロログ	425
第6話・Aパート	430

第6話・Bパート

469

第7話

第10話

第10話・プロログ

833

第7話・プロログ

第10話・Aパート

836

第7話・Aパート

第10話・Bパート

876

第7話・Bパート

第11話

第8話

第11話・プロログ

919

第8話・プロログ

第11話・Aパート

924

第8話・Aパート

第11話・Bパート

966

第8話・Bパート

第12話

第9話

第12話・プロログ

1014

第9話・プロログ

第12話・Aパート

1017

第9話・Aパート

第12話・Bパート

1021

第9話・Bパート

第13話

1062

730

735

783

624

628

675

518

523

568

第16話・プロログ	第15話・Aパート	第15話・Bパート	第15話・プロログ	第14話・Aパート	第14話・Bパート	第14話・プロログ	第13話・Aパート	第13話・Bパート	第13話・プロログ
1375	1333	1295	1290	1243	1206	1200	1151	1111	1171

第19話・Aパート	第19話・プロログ	第18話・Aパート	第18話・Bパート	第18話・プロログ	第17話・Aパート	第17話・Bパート	第17話・プロログ	第16話・Aパート	第16話・Bパート
1650	1647	1599	1561	1557	1505	1460	1456	1415	1378

第19話・Bパート

第20話

第20話・プロログ

第20話・Aパート

第20話・Bパート

第21話

第21話・プロログ

第21話・Aパート

第21話・Bパート

第22話

第22話・プロログ

第22話・Aパート

第22話・Bパート

1697

第23話

第23話・プロログ

第23話・Aパート

第23話・Bパート

第24話

第24話・プロログ

第24話・Aパート

第24話・Bパート

第25話

第25話・プロログ

第25話・Aパート

第25話・Bパート

第26話

178617511747

207620392035

187318281824

215121192114

198419321929

223521942190

第26話・プロローグ

第26話・Aパート

第26話・Bパート

第27話

第27話・プロローグ

第27話・Aパート

第27話・Bパート

|

|

|

|

|

|

233422862283

242323832380

人物紹介

夢ノ宮中学校

2年1組

一之瀬 蛍／いちのせ ほたる

身長 130cm

好きなもの 料理、お菓子作り

苦手なもの 運動

本作の主人公である少女。

臆病で人見知りが強く内向的だが、そんな自分を変えようと努力する前向きな一面も持ち合わせている。

森久保 要／もりくぼ かなめ

身長 163cm

好きなもの スポーツ（特にバスケット）

苦手なもの 勉強

明朗快活なスポーツ少女。

誰に対しても友好的で、男女ともに友達の多いクラスのムードメーカー。

藤田 雛子／ふじた ひなこ

身長 160cm

好きなもの 読書、人形集め

苦手なもの ホラー映画

知的でメガネと絵に描いたような文学少女。

穏やかで大人びているが、可愛いものを目にする性格が変わる。

柳原 真／やなぎはら まこと

身長 162cm

好きなもの サッカー

苦手なもの 考えること

要、雛子の小学校からの親友で、要と並ぶスポーツ少女。

ポジティブな性格で本人曰く、悩みを抱えたことがないと言うある意味スゴイ子。

宮内 愛子／みやうち あいこ

身長 156cm

好きなもの 漫画

苦手なもの 美術

要、雛子の小学校からの親友で財閥の令嬢。庶民的な感覚を持つ漫画大好きなお嬢様。

上田 健太郎／うえだ けんたろう

身長 172cm

好きなもの 野球

苦手なもの ノリの悪いやつ

努力、友情、勝利を信じる熱血スポ根男子。

2年1組男子たちの中心的人物で、要と並ぶクラスのムードメーカー。

東條 かな子／とうじょう かなこ

身長 150cm

好きなもの メガネ

苦手なもの 黒いアイツ

2年1組の学級委員であり生徒会所属のメガネ少女。

やや生真面目だが責任感が強く、クラスメートからの人望は厚い。

長谷川 勇人／はせがわ ゆうと

身長 175cm

好きなもの 食べ歩き

苦手なもの 酒

2年1組の担任。

まだ若いが生徒思いなイケメン教師であり女子人気が高く、ファンクラブが作られるほど。

2年3組

姫野 千歳／ひめの ちとせ

身長 169cm

好きなもの 故郷

苦手なもの 機械

『孤高のクイーン』の通り名で呼ばれる学校一の有名人。

モデル顔負けの容姿と文武ともに学年トップの能力を持つ完璧美少女。

真鍋 未来／まなべ みく

身長 155cm

好きなもの 自由

苦手なもの 努力

要の部活仲間である少女。

冗談好きで自称マイペース、細かいことは気にしない主義。

相羽 優花／あいは ゆうか

身長 152cm

好きなもの 小動物

苦手なもの 料理

未来の親友である少女。

からかい好きで毒舌家だが根はお人好し。

吉川 夕美／よしかわ ゆみ

身長 166cm

好きなもの 缶ビール片手にスポーツ観戦

嫌いなもの 野次。

2年3組の担任であり夢ノ宮中学校女子バスケット部の顧問である女性。サバサバとした男勝りな性格でやや放任主義などところがある。

2年4組

竹田 理沙／たけだ りさ

身長 170cm

好きなもの バスケット

苦手なもの チームプレイ

夢ノ宮中学校女子バスケット部のエースで、要とは小学校のバスケットクラブからの付き合い。
い。

無口無表情でクールな印象を与えるが、バスケットに対する情熱は誰よりも熱い。

3年2組

水瀬 薫／みなせ かおる

身長 170 cm

好きなもの ウィンドウショッピング

苦手なもの 子ども

夢ノ宮中学校女子バスケット部のキャプテンで、通称『ムチのキャプテン』。
普段はノリが良く、部活中は鬼のように厳しい。

加々山 菜々子／かがやま ななこ

身長 154 cm

好きなもの 落語鑑賞。

苦手なもの 洋食

夢ノ宮中学校女子バスケット部の副キャプテンで、通称『アメの副キャプテン』。
包容力のあるおっとりとした性格で、やや古風な趣味を持つ。

フェアリーキングダム妖精

チェリー／サクラ（人間時）

身長（人間時） 155cm

好きなもの 蛍の作った料理

苦手なもの 虫

蛍のパートナーであるピンクの妖精。

しっかりもので面倒見が良く、蛍にとっては厳しくも優しい姉的存在。

ベリイ／ベル（人間時）

身長（人間時） 180cm

好きなもの 観察

嫌いなもの 無責任

要のパートナーである青の妖精。

気遣い上手で紳士的だが責任感の強すぎる一面も。

レモン／レミン（人間時）

身長（人間時） 142cm

好きなもの 昼寝

苦手なもの 厳しい人

雛子のパートナーである黄色の妖精。

マイペースでちよつぴり我儘な甘え上手さん。

アツプル／リン子（人間時）

身長（人間時） 175cm

好きなもの 仕事

苦手なもの 特になし

千歳のパートナーである赤の妖精。

千歳が赤子の頃から世話役をしている、もう1人の母親と言える存在。

一之瀬家

一之瀬 健治／いちのせ けんじ

身長 177cm

好きなもの 娘

蛍の父。

ゲームや特撮を嗜むオタク気質なところがあり、蛍の趣味の半分は彼の影響。親バカであることを自覚している。

一之瀬 陽子／いちのせ ようこ

身長 153 cm

好きなもの 娘

蛍の母。

良妻賢母を体現したかのような美人だが、夫に対しては少し強かな。親バカであることを自覚している。

森久保家

森久保 瞬／もりくぼ しゅん

身長 180 cm

好きなもの バスケツト

要の兄。

関西人気質の強い賑やかな性格だが、バスケットにはストイックに取り組む。勝ちも負けも成長に繋がると言う考えは要に大きな影響を与えた。

藤田家

藤田 菊子／ふじた きくこ

身長 157cm

好きなもの 和食

雛子の祖母。夢ノ宮中学校の卒業生。

温和な性格で老齡ながらも上品な雰囲気を漂わせる。

夢ノ宮市の人々

ユウ

夢ノ宮商店街でクレープ屋を開いている青年。

夢を叶えることに悩んでいたが、ある出来事を機に吹っ切れた。

ミカ

蛭が商店街で出会った少女。

幼いがしつかり者で母親のことが大好き。

たこ焼き屋のおっちゃん

たこ焼きの屋台を経営している恰幅の良いおっちゃん。

職人気質で気難しいが、たこ焼きの味は絶品。

ドーナツ屋の青年

とある町で評判の良いドーナツ屋に弟子入りし、夢ノ宮商店街に店を構えた青年。

謎の技術で作られた全自動ドーナツ生成マシンを受け継いでいる。

花屋の夫婦

花屋を営む夫婦。

アットホームで良い雰囲気のお店と好評を受けている。

ハーブ店の青年

新装開店したハーブ店の店員。

夢ノ宮市出身ではないが、礼儀正しい性格で街の人からは慕われている。

フェアリーキングダム

ガレット・オベロン・フェアリーテイル

フェアリーキングダムの国王であり、千歳の父親。

厳格な風貌と穏やかな性格を併せ持つ理想の国王として、国民たちから慕われている。

アン・テイターニア・フェアリーテイル

フェアリーキングダムの女王であり、千歳の母親。

全てを慈しむかのような母性の溢れる女王として、国民たちから慕われている。

伝説の戦士プリキュア

キュアシャイン

武器 シャインロッド

浄化技 プリキュア・シャイニング・エクスペロージョン

蛭が変身するプリキュア。

基礎能力は最も低いですが、計り知れない潜在能力を秘めている。

キュアスパーク

武器 スパークバトン

浄化技 プリキュア・スパークリング・ブラスタ

要が変身するプリキュア。

雷の力を操り、パワーとスピードを兼ね備えた高い戦闘力を持つ。

キュアプリズム

武器 プリズムフルート

浄化技 プリキュア・プリズミック・リフレクション

雛子の変身するプリキュア。

守りの力に突出しており、多彩な防御の術を扱う他、治癒術も心得ている。

キュアブレイズ

武器 ブレイズタクト

浄化技 プリキュア・ブレイズフレアー・コンチエルト

千歳が変身するプリキュア。

炎の力を操り、接近戦、遠距離戦、そして守りの術を幅広く使いこなすオールラウンダー。

永久の闇ダークネス

リリス／リリン

身長 140cm

アモン配下の行動隊長の1人。

キュアシャインに対して異常なまでの執着心を抱いている。

サブナック／サブロー

身長 220cm

アモン配下の行動隊長の1人。
武人氣質で好戦的な性格。

ダンタリア／グリモア

身長 185cm

アモン配下の行動隊長の1人。

皮肉屋な策略家で、心の弱い人を選び絶望に貶める手段を好む。

アモン

身長 190cm

リリスら3人の行動隊長たちを束ねる司令官。

普段は研究室に籠っており、世界の侵攻は行動隊長たちに一任している。

アンドラス

身長 187cm

かつてフェアリーキングダムを侵攻したダークネスの司令官。

冷徹な性格で行動隊長のことも駒程度にしか思っていない。

ハルファースとマルファース
かつてフェアリーキングダムに侵攻した2人1組の行動隊長。
キュアブレイズとの戦いに敗れる。

第1話

第1話・プロローグ

「黒き闇、空を覆わんと拡がりし時、

4つの光、闇を照らすべく大地に降りる。

其の名はプリキュア。汝は世界の希望なり。」

ここは、人と妖精が共存する世界、フェアリーキングダム。

古き本が立ち並ぶ王立図書館の中、1人の少女が、生まれ故郷に伝わりし伝説を読み上げていた。

子供の頃からよく読み聞かされたこの伝説は、空想のものだと思っていたが、伝説に記された黒き闇は、ある日突然、フェアリーキングダムへと現れたのだ。

黒き闇は空を覆い陽光を散らし、大地を侵して住む土地を奪い、ついに人々も蝕み始めた。

闇に蝕まれた人々は視覚を、聴覚を次々と失い、やがて五感を全て奪われ、生きる希望さえも無くし、そこにあるだけの『モノ』と成り果てていく。

このまま故郷は、空も大地も、生きとし生けるものたち全てを、失ってしまうのだろ

うか。

そんなことは絶対に嫌だ、と強く願った時、強い光が少女を包み込んだ。

そして光が収まった時、少女は伝説に記された世界の希望、プリキュアへと覚醒を果たしたのだ。

プリキュアとなった少女は、それから世界を蝕む黒き闇との戦いに身を投じていった。

たった一人で、世界を守る為に。

「ここにいたのか。」

すると書庫を訪れた国王が、少女に優しく声をかけてきた。

「4つの光、闇を照らすべく大地に降りる。其の名はプリキュア。」

その伝説の通りであれば、プリキュアは、お前の仲間となり得る者は、後3人いるはずだ。

1人で戦い続けるのは辛いと思うが、かの者たちが見つかるまでの辛抱だ。」

「大丈夫です。この世界を守る。それが私の使命ですから。私は世界の希望。」

この世界から黒の闇を祓うまで、決して希望を捨てはしません。」

少女は、凜とした雰囲気ですう告げる。

「苦勞をかけるな。せめて私にも戦う力があれば・・・。」

その言葉を聞いた国王は、悲しい表情を浮かべるのだった。

少女1人に世界の命運を託さなければならぬ状況を、憂いているのだろう。

だが世界の希望と命運を1人で背負うことは、少女にとっては何の重みにもならなかった。

なぜなら少女は、この世界を心から愛しているのだから。

「せめて、お前に妖精の祝福があらんことを……。頼んだぞ、キュアブレイズ……。」
国王の優しい言葉が胸に響く。その言葉だけで、少女は戦う希望を持つことが出来る。

自分が愛するこの世界を、必ず黒き闇から守って見せる。そんな強い決意を胸に秘めて……。

：

なぜ急に、あの時のことを思い出したのだろう。今はそれどころではないというのに。

キュアブレイズは今、4人の妖精と共に森の中を駆けていた。

辺りは僅かな光もないが、彼女は何の迷いもなく、鬱蒼と茂る木々の間を駆け抜けていく。

「闇の力が近づいてくるわ!」

赤の妖精がキュアブレイズに告げた直後、空より、全身黒色の巨人が降下した。

10メートルは容易にあらうその巨人は、着地点の木々を踏み倒しキュアブレイズに襲い来る。

だがキュアブレイズは、その華奢な体躯のどこにそんな力があるのか、自身の10倍はあろうその巨体を一撃で殴り飛ばしたのだ。

「まだ来るぞー!」

だが妖精たちの警告は止まらない。

蒼の妖精の言葉と共に、黒の巨人が1体、また1体と空より姿を現した。

先ほど吹き飛ばされた巨人も立ち上がり、再びキュアブレイズに襲い来る。

「キュアブレイズ!これだけの数を1人で相手するのは無茶よ!」

ピンクの妖精が警告する。キュアブレイズは、一瞬躊躇う素振りを見せたが、妖精たちを抱え、その場を全速力で離れるのだった。

迫りくる巨人たちに追いつかれぬよう、振り向きもせず駆けていくと、やがて森を抜け風車の立つ丘へと出た。

丘を駆け上がり振り返ってみると、巨人たちはまだ追いついていないようだ。

呼吸を整えたキュアブレイズは、巨人たちから逃れる為に再び駆けようとするが、

「……太陽も星も、何も見えないね……」

黄色の妖精が寂しそうにそう呟く。

その言葉を聞いたキュアブレイズは、辺りを見渡して思い返した。

この場所は小さいの頃、よく遊びに訪れていた場所だ。

朝に訪れば、陽の光と共に妖精が唄い人々が活気立ち、日暮れに訪れば、星が煌めき、街灯が街を彩っていく。

そんな景色が眺められる素敵なお場所だった。

僅かな回想の後、懐かしさに駆られたキュアブレイズは、丘の上から景色を一瞥する。
「っ!？」

だが直後、息を飲み言葉を失った。

上を見れば、陽や星の光はおろか、雲一つ見当たらない。

下に広がる街は、一切の光も音もなく、街に留まる人も妖精も、ただいるだけの『モ

ノ」へと成り果てていた。

今が朝なのか、夜なのかすらわからない、人も妖精も生きている気配のない。かつての記憶にある景色は、既に面影もなく消え去っていた。

永遠に闇と静寂に包まれた世界。それが今の故郷の惨状だと、改めて思い知らされたキュアブレイズは、悔しさから唇を噛みしめる。

「黒き闇、空を覆わんと拡がりし時……、

4つの光、闇を照らすべく大地に降りる……。

其の名はプリキュア。汝は世界の希望なり……。」

「キュアブレイズ？」

伝説の序章を読み上げるキュアブレイズ。

伝説の通り、黒き闇が空を覆い、光が大地へと降りたはずだ。

そして伝説では、4つの光が大地を降りるとされている。

その通りならば、プリキュアの光は4つある。

4つの光が揃った時、この世界を巣食う闇を祓うことが出来る。それだけを信じて、戦い続けて来たのに……。

「そして……4つの光が集いし時……。」

キュアブレイズは、伝説のその先を口にすることが出来なかった。

震えた声を殺し、必死に涙を堪える。

その時、

「キュアブレイズか」

不意に自分と呼ぶ声があった。キュアブレイズが声の先に視線を向けると、そこには一人の少女が宙を飛んでいた。

外見は10代前後。

140cm程度と、自分と比較すると小さな背丈と、エメラルドの髪をなびかせている。

だがその少女は、背に翼を、両手足には鋭利な爪を、そして尾には牙を生やした口を持っていた。

悪魔。そんな単語が脳裏をよぎらせる、人非ざる姿をした少女。

「まさか・・・ダークネスの新しい行動隊長？」

「この世界でたったひとりのプリキュア。生まれ故郷と共に闇に堕ちるといわ。」
悪魔は鋭く尖らせた爪を立て、キュアブレイズに襲い来る。

「くっ！」

突きたてられた爪をかろうじて防ぐが、その力は先ほどの巨人を凌駕していた。

予想以上の力の前に態勢を崩したところを、牙を持つ尾と蹴りによる攻撃が立て続け

に迫り来る。

その全てを寸で避けたキュアブレイズは、一旦距離を取り態勢を立て直そうとするが、

「キュアブレイズ！」

妖精たちの声がし、背後を向くと、先ほどの巨人たちが追いついてきた。

キュアブレイズ達は、前方を悪魔の少女、後方を黒の巨人の群れに挟み込まれてしま
う。

「キュアブレイズ！止むを得ないわ！一旦この世界を離れましょう！」

「嫌よ！そんなこと！」

赤の妖精が警告するが、キュアブレイズは目を潤ませながら首を振るう。

愛する故郷がこんな状態に陥っているのに、この場を離れることなんて出来るわけが
ない。

「ここでキュアブレイズが倒されたら、本当に全てが終わってしまうわ！」

いつか必ず、この世界を取り戻す為にも、今はこの場を退いて、残りのプリキュアた
ちの誕生を待ちましょう！」

だが赤の妖精は、そんなキュアブレイズの我儘を聞いてはくれなかった。

尚も納得のいかない様子のキュアブレイズを待たず、赤の妖精は、他の3人の妖精た

ちに呼びかける。

「チェリー！ベリイ！レモン！力を貸して！」

4人の妖精たちはキュアブレイズを中心に、四角の陣を組む。すると妖精とキュアブレイズを包むように七色の光が立ち上った。

「何？」

驚く悪魔を余所に、キュアブレイズと妖精たちは光に包まれ、天へと昇って行った。光の中、キュアブレイズは切ない表情を浮かべながら、再び丘の下の街を見る。

まるで音も光も全て無くした故郷に、別れを告げるように。

「大丈夫よ、キュアブレイズ。必ず……また帰ってこれるから。」

「アップル……。」

やがてキュアブレイズと妖精たちを包んだ光は、七色の光を放ちながら霧散した。

最後にキュアブレイズの流した、涙の一粒を大地に残して。

「……逃げられたか。」

そう呟いた悪魔は、額に手を当てる。

「アンドラス様、こちらリリース。キュアブレイズには逃げられました。後を追いますか？」

「……了解。一旦本部へと戻ります。……ええ。そちらは成功しました。」

この世界は、フェアリーキングダムは、もう二度と、光を浴びることはないでしょう。」
リリースと名乗った悪魔がそう告げると同時に、空に大地に闇が満ちていき、程なくして闇は、世界の全てを包み込んでいった。

一切の光を失った妖精の王国フェアリーキングダムは、その姿を完全に消していくのだった。

第1話・Aパート

伝説の戦士誕生！希望の光、キュアシャイン！

「蛍、蛍、まだ寝ているの？」

下の階から聞こえる母の声で、一之瀬 蛍（いちのせ ほたる）はようやく目を覚ました。

身長130cm程度。肩の位置まで伸ばしたピンク髪セミロングの少女は、もぞもぞと布団の中で動き、枕元に置いてある目覚まし時計に手を伸ばす。

寝ぼけ眼をこすりながら、時計の針に目をやると・・・。

「え・・・10時!？」

一瞬で眠気が吹き飛んだ蛍は、飛び上がるようにベッドから跳ね起きた。

目覚まし時計の音が嫌いな蛍は、休日には基本的に使わない。

寝坊の許されない平日では、仕方なくアラームをセットするが、毎日寝る時間、起きる時間をしっかり決め、規則正しい睡眠サイクルを習慣付けた今では、アラームが鳴る前に目を覚ます。

休日も朝7時起きを習慣付けている為、自然とその時間に起きることが出来ていたのだ。

それなのに10時まで寝てしまうとは、普段の習慣を考えれば寝坊した、なんてレベルではない。

急いで服を着替え、愛用のヘアピンを前髪の両端に留め、早足で階段を駆け下りリビングへと向かう。

「おかーさんごめん！ごはんは・・・」

「やっと起きたわね。おはよう蛍。ご飯ならもう作つてあるから。」

母の陽子（ようこ）は、慌てて来た蛍を諫めるように声をかけた。

10時まで寝ていたことを、特に怒っている様子ではないが、朝食の支度を母一人に任せてしまい、蛍は申し訳なく思う。

「ごめんなさい・・・おひるはわたしがつくるね。」

「いいわよ。いつもはお母さんが助かってるんだし。」

ほら、お昼までに洗い物済ませたいから、早く食べちゃいなさい。」

「うん・・・」

蛍は重い足取りのまま、テーブルへついた。

目の前にあるソファでは、父の健治（けんじ）が寛ぎながらテレビを見ている。

「蛍、おはよう。今日は珍しくお寝坊さんだな。」

「おとーさん、おはよう。」

蛍に気づいた父が声をかける。父に返事をした蛍は、そのまま黙々と朝食を食べ始めた。

「お父さんとお母さん、お昼にはご近所の方々に挨拶に回るけど、蛍はどうする?」

父の言葉に、蛍は一旦、手を止めた。昨日は一日中、家の整理と後片づけで忙しく、近隣の住民へ挨拶する時間がなかったが、

例え時間があったとしても、蛍と一緒に回るつもりはなかった。

初対面の人を相手に、ちゃんとした挨拶が出来る自信はない。

そんな自分がついて行つては、両親の印象も損ねてしまうだろう。

それに蛍にはまだ、今の状況を受け入れられるだけの余裕がない。

「……わたしはいい。」

「……わかった。じゃあ蛍は、明日の準備でもしておきなさい。明日から新しい学校だろ?」

「うん……」

父はそんな蛍の心境を察してか、無理強いはしなかったが、続けて放たれた一言が、再び蛍の胸に重くのしかかる。

新しい学校、そのことを考えるだけで、昨夜一晚、不安で寝付くことが出来なかった。今日10時まで寝てしまったのも、きっとそれが原因なのだろう。

そのまま父との会話は途絶え、蛭は遅めの朝食を取り終えるのだった。

朝食を終えた蛭は、食器を流し台まで運び、自分で洗い始めた。

「そうだ蛭。お母さんたちが挨拶に回ってる間に、夕飯のお遣い、頼んでもいいかしら？」

「ええっ!？」

母が突然、とんでもないことを言い出す。

蛭は驚きのあまり、手から滑らせてしまった食器を慌てて取り直した。

「こら、危ないでしょ。」

「ごつごめんなさい……でもどうしてわたしが?」

「蛭、良く学校の帰りに、お遣いに行ってくれてたじゃない?」

だから早いうちに、この街のお店の場所とか覚えた方がいいと思つて。

昨日この辺りのことを一通り調べてみたのだけど、商店街の方まで行けば、スーパーや市場もあるみたいよ。」

「でも……。」

母の言うことは建前である。

本当のことを言えば、蛍に早くこの新しい環境に慣れてほしいのだろう。

そんな母の気持ちは嬉しいが、蛍はすぐに首を縦に振ることが出来なかつた。

「ね？お願い。夕飯は蛍の好きなものを作ってあげるから。」

「・・・わかつた。」

だが母の頼みを断る理由が思いつかなかつた蛍は、不安な表情のまま、お遣いを承諾するのだった。

：

夢ノ宮市。それなりの大きさを持つこの市に、蛍たちはつい昨日、引つ越して来たばかりだ。

正午が過ぎ、昼食を終えた蛍たちは、それぞれ家を出ていった。

「蛍、最初の内は、慣れないことが多くて、不安かもしれないけれど、

これから、ここに暮らすことになるのだから、怖がつてばかりいないで、

少しずつ慣れていきましよう。ね？」

家を出る前の母の言葉を思い出す。

だが、そんな母の優しい言葉も、今の蛭には慰めにならなかつた。

蛭は小さな体をさらに丸めながら、重い足取りで街を歩いていく。

当たり前だが、右を見ても左を見ても、見慣れぬ風景ばかりが続いた。

道行く人々も皆、見知らぬ人たちばかりだ。

(なんで……こんなところにきちやつたんだろ……)

そんな理由など、とつくにわかりきっていることだつた。

幼い蛭では、どうすることも出来なかつたということも。

だからこそ蛭は、今の状況を悔やんでも、悔やみきれなかつた。

去年の一年間のことを思い出す。あともう少しのところ、自分の『夢』に近づくとが出来たのに。

(わたし……これからどうしたらいいんだろ……。どうしてこんなことに……)

見慣れぬ街並み、見慣れぬ人々、明日に控えた新しい学校。

蛭を取り巻く様々な状況が、胸いっぱい不安を作り出す。

そんな不安に押し潰されそうになり、目に涙を浮かべたその時、

「ねえ、そのあなた？」

「ひっ。」

突然、後ろから声をかけられた。

驚いて振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。

背丈は自分よりも少し上。膝まで届く長い黒髪と、前髪の合間から見える赤い瞳が印象的な少女だ。

「ごめんなさい。急に話しかけられたらびつくりするよね?」

この街に住む子だろうか?でもなぜ自分なんかに声をかけたのだろう。

「ねえ、よかつたらすこし、お話ししない?」

すると少女から、さらに驚きの言葉が出て来た。

「え……?」

目の前の状況が飲み込めず、戸惑う虫だが、

突然声をかけられた驚きから、上手く返事をする事が出来ず、

「ほら、こつちに噴水広場があるから。」

「わっ……」

結局、反論も出来ないままに流され、目の前の少女に手を引かれていった。

繋がれた少女の手は、妙に冷たい気がした。

…

少女に手を引かれた螢は、本来の目的地であった商店街を抜け、噴水公園を訪れた。螢と少女は、噴水周りにあるベンチへと腰掛ける。

「そういえば、名前まだきいてなかったね。あたしはリリン。」

「いちのせ ほたる・・・です。」

「ほたるって言うんだ。」

「あの・・・どうしてわたしとおはなしがしたいって？」

「どうしてっていわれても・・・放っておけなかったから、かな？」

「だってあなた、今にもなきだしそうな顔をしてるんだもの。」

「たったそれだけのことで、見知らぬ自分のことを気にかけてくれたのだろうか？」

「半信半疑の螢ではあったが、リリンの声色はとても優しかった。」

「ねえ、悩み事があるのなら、はなしてみない？人にはなすだけでも、

気持ちがお楽になるかもしれないし、あたしでよければ、ほたるの力になるよ？」

「.....」

普段の螢なら、初対面の相手に悩みを話すことなんてしないだろうし、そもそも会話

すら出来るのか怪しい。

だが引つ越しが決まった時から、ずっと抱え込み続けてきた不安が、初めての土地に足を踏み入れたことで表面化していった。

そんな不安を前に、蛍の心はもう押し潰される寸前だった。

そんな中で初めて出会った相手が、歳の近い少女という親近感と、悩みを聞いてくれる、と優しい声色で話しかけてくれたことが、蛍の不安を少しずつ、取り除いていったのだ。

この子になら、話してもいいかもしれない。そう思えてくるほどに。

「……わたしね、きのうここに引つ越してきたばかりなの……。」

もう、限界だった。

1人で抱え込むことが出来なくなった蛍は、自分が抱いていた不安を全て、リリンへと話し始めるのだった。

蛍は、昔から人と接するのが苦手だった。

臆病のあまり、話しかけられても言葉に詰まり、話す時も声が擦れ、目を合わせるこ
とが出来ない。

人の多い場所には怖くて近寄れず、誰かが近寄ればすぐに逃げ出してしまふ。

そうやってずっと人を避け続けた。

「ほんとうはね．．．ずっとトモダチがほしかったの．．．」

でもわたし、おくびようだから、ひととはなすのがにがてで．．．

そんなわたしじゃ、だれかとなかよくするなんて．．．ぜったいにむりだつて．．．」

臆病だけど、独りぼつちは寂しいから嫌だ。

独りぼつちは寂しいけど、臆病だから友達が出来ない。

そんな負の感情を連鎖させていった蛭は、臆病な自分を責め続けていく内に、何事に対しても後ろ向きで、消極的な考え方しか出来なくなつていった。

蛭はそんな自分のことが、大嫌いだった。

「でもね．．．このままじゃダメだつて、おもったんだよ．．．」

かわらなきゃ、かわつていかなきゃダメだつて、わたし、がんばったんだよ．．．」

友達に囲まれた周りの人たちを妬みながらも、ずっとその輪に入りたいと思つていった。

友達という存在に、強い憧れを抱いていたからだ。

一緒にお喋りをしたり、お昼を食べたり、休日には家を訪ねて遊んだり、どこかで待ち合わせの約束をしてお出かけをする。

テストが近づけば一緒に勉強をして、学校の行事があれば力を合わせて取り組む。

そんな友達同士で仲良く過ごせる日常を、ずっと夢に見続けてきた。だからこそ蛭は、自分を変えるのだと決心した。

そしてその為に、自分なりの努力をしてきたのだ。

同じ学年の女子生徒は、クラスの異なる子も含めて顔と名前を全て覚えた。

女子の間で話題になっている、流行もののファッションや音楽、女性人気のある芸能人やアーティスト。

これまで興味のなかったことも、友達が欲しいという一心で勉強した。その為に去年の一年間を全て費やし、

今年の春、新学期が始まると同時に、新しい自分に変わろうとしたのだ。

ずっと胸に抱き続けて来た、友達が欲しいと言う夢を叶えるために。

「それなのに・・・きゆうに転校することになっちゃって・・・。」

そんな蛭の努力をあざ笑うかのような、最悪のタイミングだった。

しかもその理由は、父の仕事の都合。引越しの理由としてはごくありふれた、だが子供の蛭にはどうしようもない、残酷な理由だった。

蛭は初めて、父から転校の話聞いた時のことを思い出す。

（なんで転校なんかしなくちゃいけないの！

あたらしいところなんて、おとーさんひとりでいけばいいじゃない!!

ぜったいにイヤだ!!おとーさんなんか大キライ!!)

父に対してあそこまで酷いことを言ったのは初めてだった。

その後も駄々をこねて泣き続けた。今だって、理不尽だと思うときがある。

変わろうとした自分の決心を折られてしまったのだから。

「もうわたし、じぶんのことをかえたいってがんばるの・・・むりだよ・・・。」

抱えていた悩みを全てリリンに打ち明けた蛍は、気が付いたら涙を流していた。

初対面の人を前に泣き出すなんて、情けないと思いながらも、溢れ出す涙を止めることが出来なくなった。

蛍は両手で涙を拭いながら、リリンから目を反らす。

リリンは蛍の話をずっと静かに聞いてくれた。

そして全てを聞き終えたリリンは、しばらく考え込む素振りを見せたから、蛍に問いかけてきた。

「でも、かわりたいって気持ちは、いまでもあるんだよね?」

「え・・・?」

突然の言葉に驚き、蛍は思わず顔をあげる。

「ほたるは、そこから一步踏み出せないだけで、

かわりたいって気持ちは、今でもずっとあるんだよね?」

リリンの言葉を聞き、蛍は改めて自分の胸中を振り返る。

理不尽な転校、新しい場所、新しい学校への不安。

蛍を取り巻く全ての環境が、蛍に夢を捨てろと訴えているかのようだ。

「……。」

だがその中でも蛍は、自分の中に未だに燦り続ける思いがあることに気が付いた。ずっと抱き続けて来た、友達が欲しいと言う思いを。

「うん……。わたし、かわりたいよ。かわることができればのなら、かわりたいって、いまでもおもっているよ。」

でも……。ずっと暮らしてたところでも、かわることができなかつたんだよ……。それなのに、この街でかわることなんて……。」

するとリリンはベンチから立ち上がり、蛍の正面へと体を向けた。

蛍が不思議そうにリリンを見上げると、彼女は右手を胸元へ運び、左手を右手の甲に添えた。

そして祈るように両手を握った後、柔らかく蛍の胸元へと両手を添えた。

「きゅっ。」

突然胸を触られた蛍は困惑する。

「なっなに・・・？」

だが恥じらう蛭を気にせず、リリンは静かに答える。

「今、あなたにおまじないをかけたの。」

「おまじない？」

「あなたに足りないものは、ほんのちよつとの勇氣。一步踏み出すための、小さな勇氣。」

「一步・・・踏み出すための・・・。」

ほんの少しの勇氣？ たったそれだけが足りていないものなのか？

自分に足りないものであれば、いくらでも思いつく蛭は、不思議そうな顔でリリンを見る。

「今、あなたにそんな勇氣が出るおまじないをかけたから。ほら、やってみて？」

リリンは再び、先ほど見せたおまじないのポーズを取り、蛭にやってみるよう促した。

蛭もリリンに倣い、右手を胸元に運び、左手を右手の甲に添え、そのまま拳を握り、自分の胸に手を当てた。

（ほんのちよつとの・・・勇氣。）

蛭は勇氣と言う言葉を念じる。

「ね？勇氣、わいてこない？」

すると先ほどリリンに触られたあたりが、熱くなつていく感じがした。

まるで彼女の優しさが、胸に染み渡っていくように、冷めきった蛍の心に浸透していく。

彼女から得た勇気のおまじないが、蛍の隅々にまで染み渡る。

(一歩ふみだすための・・・ちいさな勇気・・・か・・・)

このおまじないがあれば、自分にも、ほんの少しの勇気を出すことが出来るかもしれない。

我ながら単純だなと思いつつも、蛍にとってはこのおまじないは、もう一度、頑張ってみようと思うことができるきっかけとなったのだ。

「ありがとう。リリンちゃん。わたし、もう一度だけがんばってみるよ。」

蛍は微笑みながらリリンにお礼を言う。

「よかった。ほたる、今日初めてわらったね?」

「え・・・?」

リリンにそう言われて、蛍は自分が、笑っていることに気がつく。

誰かの前で笑顔を見せることが出来たのなんて、初めてかもしれない。

リリンに対して笑顔を見せることができた。それがまた、蛍の背中を強く押す。

「がんばれ、わたし。」

「ほたる、がんばってね。」

「うん！ありがとう、リリンちゃん！」

一度折れた蛍の決心は、リリンとの出会いを機に蘇っていくのだった。

∴

「え？じゃありリンちゃんも、この街にきたばかりなの？」

「うん、だからほたるが、はじめての街で不安を抱えていたこと、なんとなくわかったんだ。」

「あたしも、最初はそうだったから。」

それからしばらくの間、リリンと他愛のないお喋りを続けてたが、気が付けばお遣いの為に家を出てから、だいぶ時間が経っていた。

「あつ、もうこんなじかん・・・わたし、おつかいたのまれてるんだった。」

「そっか。」

「ここでお別れになるのは名残惜しいが、あまり帰りが遅くなると、両親が心配するだろう。」

歳の割には子供っぽさが抜けない蛍に対して、両親はやや、過保護気味なところがある。

「リリンちゃん。今日はありがとう。えと・・・またこんど、おはなし、できたら・・・」
「うん、いつでもいいよ。あたし、普段はこの辺にいるから。」

リリンとまた会える約束が出来た。

それだけで蛍はとても嬉しくなり、明るい笑顔を浮かべた。

「うん！じゃあ、またね！リリンちゃん！」

「またね。」

来る時とは打って変わって、晴れやかな気持ちの中、蛍は噴水公園を離れ、商店街へと戻っていった。

：

蛍の背中を見送った後、リリンは人目のつかない場所へと身を潜める。

「あの程度の言葉で、単純なものね。」

初対面の自分に対して、抱えていた悩みを全て話してしまうなんて。だが所詮、人間の心なんてそんなものだ。

相手の心を揺さぶる僅かな甘言さえあれば、容易く本心を晒してくれる。

その上、心を意のままに操るための常套句なんていくらでもあり、後は相手のパターンに応じて、常套句を組み合わせた文章を組み立てていくだけでいい。

それを読み上げれば、人は容易く扇動することが出来る。

先ほどの少女も、本心を隠し、殻に籠っているように見えたが、その中身を引きずり出すなど造作もなかった。

最も、あの程度の常套句であそこまで気を許してしまうあたり、彼女は特別、扱いやすいようだが。

しかもあんなデタラメなおまじないを信じ込むなんて、何て単純な生き物だろうか。

彼女に近づいたのは、程良い『素材』が欲しかっただけだと言うのに。

最も彼女の場合、『素材』はよかったが、些か自分で傷を付け過ぎていた。

よほど自分に自信のない、弱い生き物なのだろう。

「その場合は、ほんの少しでもいいから、機嫌を取るような会話をしろ・・・か。」

リリンは、そう学習してきた。

実際今の彼女であれば、十分に『条件』を満たしてくれる。

「あなたの絶望、頂くわよ。蛍。」

言いながら彼女は、左手を横へ伸ばし指をスナップする。

すると、両手足の爪は鋭利に伸び、背には翼を、尻には牙を持つ尾が現れた。

黒髪はエメラルド色に変わり、服装も別のものへと移り変わる。

リリンの姿が、一瞬にしてリリスへと変わるのだった。

「ターンオーバー。希望から絶望へ。」

その言葉と同時に、リリスの周囲から眼に見えない空間が拡がっていった。

空間は瞬く間に夢ノ宮市を飲み込んでいき、そこにいる人々が一人、また一人と姿を消していった。

∴

「ようやく……ここまで来た。」

僅かに感じる仲間たちの気配を探り、チェリーはようやくこの場所へと辿りついた。

この世界では、妖精の力は存分に発揮できない為、力の正確な場所も数もわからない

が、この地に仲間がいることだけは確実だ。

辿りつくのにかかるの時間を費やしたが、ようやくチェリーは、仲間の手がかりを掴めるところまで来たのだ。

「っ!?!闇の力!?!」

だがチェリーは、その地に目に見えない空間が拡がっているのを感じた。

自分の故郷を飲み込んだ空間と同じ気配、まさかやつらがこの世界にも現れたのだろうか。

自分たちの故郷を消した、あの黒き闇が。

「闇の牢獄が拡がっている．．．早くキュアブレイズと合流しないと。」

チェリーは急ぎ、黒の闇に飲み込まれていく地、夢ノ宮市へと飛んでいくのだった。

：

お遣いを終えた螢は、足取り軽く帰路についていた。

(あしたから、あたらしい学校．．不安だけど、

リリンちゃんからおしえてもらった、このおまじないでがんばろ。)

リリンから学んだ勇氣のおまじないを胸に、蛍は明日へと思いを馳せる。

その時、ふと、寒気を感じた。

「?」

ほんのりと冷たい風が肌に当たるような感覚。

4月に入ったとはいえ、まだ微かに寒さの残る時期だからだろうか。

そう思い、特に気にせず帰ろうとしたその時、

変わることが出来るって思ってるの？

「え．．．?」

突然、声が聞こえた。蛍は辺りを見回すが、周囲に人はいない。

気のせいかな?と思ったが

今までずっと、臆病だったわたしが、本当に変わることが出来るなんて思ってるの？

「なに・・・？いまのこえ？」

思わず耳を塞ぐ螢。

何度変わりたいって思ってきたの？

何度挫折してきたの？

そんな弱虫な私に今更何ができるの？

だが、その声を遮ることは出来なかった。

声は頭の中に直接響いていく。

突然の怪奇に震える螢だが、やがて気が付くことがあった。

「わたしの・・・こえ？」

響いてくる声は、自分の声だ。自分の声が頭の中で木霊する。

友達が欲しいとか、独りぼっちが嫌だとか言ってるくせに、

誰とも仲良くしない、話そうともしない。

諦めきれずに周りを僻み続けて、でも一度だって行動しなかったじゃない。

「なに? なんなの!？」

頭の中に木霊する声は、さらに数を増していく

どうせわたしは変われなかったよ。

引つ越しなんて関係ない。

あの町にいたって同じ、

友達なんて作れなかったに決まってる。

「なんなのよこれえ!!？」

これ以上聞きたくなかった。

心を扶えるその言葉は、これまで自分が抱えてきた思いの数々だった。

決して否定することのできない、蛍自身の心の内側。

奥底に封じ込めていた負の感情が、自分の声で無理やり引きずり出されていく。

今までと同じことの繰り返しよ。

新しい学校が始まったって友達なんて出来っこない。

「やめてえ!!わたしは・・・わたしは、今日からかわるんだ!

この・・・おまじないで・・・。」

蛭はリリンから教えてもらったおまじないをしようとする。だが、

そんなおまじない、本当に効果があると思ってるの?

「っ!?!」

自分の声が、リリンのおまじないを否定する。

わたしは、ずっと独りぼっちだよ。

これまでも・・・これからもずっとね・・・

蛭が心の一番奥底に、閉じ込めていたはずの言葉が響く。

「いやあああああああああつ!!!」

蛭の叫び声が、静寂に包まれた空に響き渡っていった。

第1話・Bパート

「ご近所方へと挨拶を終えた健治と陽子は、家に戻り蛍の帰りを待つていた。

「蛍、少し遅くないかしら？」

時計を見ると、時刻は15時を回っていた。商店街までは徒歩10分ほどの距離だ。

正午の過ぎにここを出たにしては、帰りが遅すぎる気がする。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。あの子はああ見えてしつかりしてるし、初めてのところだから、色々と見て回っているだけじゃないのか？」

「・・・それもそうかしらね。」

健治の言葉に、陽子は一先ず納得することにした。

幼い容姿と性格故に、つい心配性になりがちだが、蛍は真面目でしつかりものだ。

臆病な性格を嫌い、自分を卑下してしまうところがあるが、そんな自分を変えようと、陰ながら努力を重ねていたことを陽子は知っている。

優しく素直で健気な頑張り屋さん。

未だに反抗期が来ないことは、手がかからない一方で少し不安も感じるが、それもあの子の個性の内だろう。

「明日から新しい学校だし、今日ほうんと、美味しいものを作って、あの子を元気づけてあげなきゃね。」

陽子のその言葉に、健治も微笑む。蛍の明日を思いながら、2人は帰りを待つのだった。

：

リリスがその場を訪れた時、蛍は黒い瘴気に覆われ、道中に倒れ込んでいた。

「なかなかいい絶望じゃない。」

瘴気の内側にいる蛍の目には、既に生氣はなく、その場を動く気配もない。

そんな蛍に向けて、リリスは手をかぎす。

すると蛍を覆う瘴気が、リリスの掌へと集まっていき、黒い球体へと形を成した。

「ダークネスが行動隊長、リリスの名に置いて命ずる。」

ソルダークよ、世界を闇に染め上げろ。」

リリスがそう唱え、黒い球体を宙に放り投げる。

すると球体はさらに形を変え、人型となり、10mは越えるであろう黒の巨人が誕生した。

「ガアアアアアア!!」

ソルダークと呼ばれた黒の巨人が、甲高い産声をあげる。

「ソルダーク。」

そしてリリスの呼びかけと共に、ソルダークは、全身から立ち上る黒の瘴気を、一気に空へと解放した。

まだ夕方にも満たないというのに、見る見るうちに空が黒く覆われていく。

すると消えていった人々が再び街の中に姿を見せ始めた。

だが街に現れた人たちは皆、黒い瘴気に覆われており、ある者は頭を抱え錯乱し、ある者は絶叫と共に泣き叫び、ある者は力なくその場に倒れ込んでいった。

：

闇の気配を探っていたチェリーは、この市一体に拡がる闇が、さらに勢いを強めてい

くを感じ取った。

その度に街には人々が姿を現し、黒の瘴気に覆われながら呻き出している。ふと目に留まった噴水広場の時計に目をやると、時刻は15時を指していた。だが時計も秒針も動く気配がない。この辺り一帯の時が止められているのだ。故郷と同じ現象が、この世界でも発生している。

この世界にもついに現れたのだ。伝説上で語られた黒の闇、ダークネスが。「急がなきゃ……これ以上絶望の闇が拡がる前に。」

このままではこの街も、故郷と同じようになってしまう。音も光も全て失い、生きとし生けるものが全て『モノ』となってしまう。

するとチェリーは、闇へと近づいていく1つの力を感じた。闇の波動とは対を成す、光の波動の気配。

「この希望の光は、まさか！」

ずっと探し求めていた人が、ついに見つかったのだ。

チェリーは光の気配がする方へ体を向けると、光と闇の力がぶつかるのを感じとった。

ついにこの世界で、光と闇の戦いが始まってしまったのだ。

:

「……ん？」

街が闇へと覆われていく様を、リリスは満足そうに眺めていたが、ソルダークの放つ瘴気は徐々に勢いをさらに強めていき、空を覆う黒い闇も、加速度的に濃度を高めていった。

「絶望の闇が拡がるのが早い……。」

フェアリーキングダムと聞いたか。

あの世界でも何体かソルダークを作り出したが、ここまでの速度で絶望の闇を染めていくものはあっただろうか。

リリスが自身の生み出したソルダークを不審に思っていると、こちらに迫り来る力を探知した。

「この気配……まさか。」

リリスの持つ、闇の力とは正反対の性質の力。それが速度を増してこちらへと近づいてくる。

やがてそれが目前まで迫ってきたところで、力のする方向へ振り向くと、

そこには一人の少女が立っていた。燃え盛るような赤いツインテールの髪をなびかせた

その少女は、フリルとリボンに飾られた、一見すると可愛らしい衣装に身を包んでいるが、

その双眸には強い敵意が込められており、力強い雰囲気を漂わせている。

リリスはその姿に身に覚えがある。あの時取り逃がした、亡国のプリキュア。

「キュアブレイズ。まさかあなたもこの世界に来ていたとはね。」

「ダークネス！」

キュアブレイズから確かな憎しみを感じる。だがリリスはそんなものに興味はなかった。

プリキュアは計画の邪魔だから消す。リリスにとってはそれだけの存在だ。

「丁度いいわ。あの時は取り逃がしたけど、今度こそ墮としてあげる。ソルダーク。」

「ガアアアアアアアアアアア!!」

獣のような雄叫びと共に、ソルダークはキュアブレイズへと襲い掛かっていった。

:

キュアブレイズは、迫り来るソルダークの拳を正面から受け止めるが、ソルダークの力はキュアブレイズを上回っており、彼女の足が地面にめり込み始める。

「くっっ！」

キュアブレイズはソルダークの腕を払いその場を離れようとするが、直後ソルダークは、背中から無数の鎖を解き放った。

縦横無尽に空を舞う複数の鎖は、キュアブレイズに狙いを定めて一斉に襲い来る。

さながらマシンガンのように矢継ぎ早に放たれた鎖を、キュアブレイズは無駄な動きなく回避するが、防戦一方の状態が続いていった。

「このソルダーク、強い。」

フェアリーキングダムでの戦いで、数え切れないほどのソルダークを相手にしてきたが、これほどの力を持ったソルダークを相手にしたのは初めてだ。

迫り来る鎖をかわし、捌きながら反撃のチャンスを伺うキュアブレイズだが、ふと、近くに闇の気配を感じた。

そちらに目をやると、黒の瘴気に覆われながら倒れ伏す、小さな少女の姿があった。

彼女から放たれる黒の瘴気は、目の前のソルダークのものと同じ気配がする。

「あの子が、ソルダークの……。」

目の前にいる行動隊長は、あんな年端もいかない少女を傷つけ絶望させ、あの黒の巨人を作り出したと言うのか。

生気を失った少女の姿を見て、キュアブレイズの脳裏に故郷の惨事がよぎる。

街を歩く人が、妖精が、全て生気を失い、ただの『モノ』へ成り果てていく。

勿論そこには、子供の姿も大勢あった。故郷のみならず、この世界の子供たちすら、やつらは躊躇いなくソルダークを作り出すための『素材』に出来るのだ。

キュアブレイズはダークネスの蛮行に、静かな怒りを燃やし憎しみを滾らせていく

「ダークネス……。」

キュアブレイズは力強い踏み込みと共に、ソルダークへと突撃した。

強烈な体当たりを受けたソルダークの巨体は宙を舞う。

あの少女の絶望を、これ以上やつらの目的の為に好き勝手させるわけにはいかない。

間髪入れず、キュアブレイズは追い討ちをかけていくが、ソルダークは空中で態勢を立て直し、再び鎖を解き放った。

だが空中であるにもかかわらず、キュアブレイズは軽やかな動きで鎖を回避し、勢いを落とすことなく、ソルダークへ拳を突き立てた。

「さすが、プリキュアといったところかしら。」

ソルダークだけでは劣勢と判断したのか、リリスも前線に参加し、鋭い爪を尖らせ、キュアブレイズの背後へ奇襲を仕掛けた。

キュアブレイズはそれを左の肘で受け止め、体を捻って右の拳をリリスへ振るう。

リリスは尾でその拳をはたき落とす、両者は一旦距離を開けた。

直後、キュアブレイズの上空を取るソルダークが、再び立ち直り鎖を周囲へと展開する。

地に降りたキュアブレイズは、鎖による攻撃を回避し、リリスとソルダークの元へと再び飛び上がる。

キュアブレイズとソルダーク、そしてリリスを交えた空中戦は激しさを増し、戦いの場所を少しずつ変えていくのだった。

：

光の気配を追っていったチェリーは、やがて荒れた場所へと辿りついた。

大地が抉れ、建物が倒壊している。

間違いない、キュアブレイズはついさつきまで、この場所でダークネスと戦っていたのだ。

そしてここより僅かに離れた場所に、光と闇の気配を感じる。

「ようやく見つけた！キュアブレイズ！」

未知なるこの世界に迷い込んでから、どれだけの間を彷徨い続けただろうか。

故郷とは異なり、妖精が存在しないこの世界は、まるで自分の存在を否定されたかのように、とても心細かった。

チェリーは何度も心が挫けそうになったが、仲間の妖精とキュアブレイズもきつとこの世界にいる。

その希望だけを頼りに、今まで頑張つて来られたのだ。

そしてついに、キュアブレイズを見つけることに成功した。

この時をどんなに待ち望んだことだろう。

チェリーは急いでキュアブレイズの元へ駆けようとしたが、その最中、道中に倒れる1人の少女が目にと留まった。

「この子……」

整った顔立ちと小柄な体躯、きつと人形のように可愛らしい少女だったのだろう。

だが黒の瘴気に覆われた姿は、纏う衣服も素肌も色を失いモノクロとなっており、生気を失った瞳は虚空を覗き、表情は悲痛に満ちていた。

そして少女の放つ闇からは、街中で見て来たどの人よりも黒く、大きな絶望を感じた。もしかしたらこの子が、今のソルダークを生み出したのかもしれない。

「かわいそうに……こんな小さな子供まで。」

子供でさえ平気で絶望へと落とすダークネスのやり方に、チェリーは改めて憤りを感じる。

でもこの世界にはキュアブレイズがいるのだ。

彼女なら必ずソルダークを倒し、この子を闇の牢獄から解放してくれるはず。

この子を助けるためにも、早くキュアブレイズと合流し、今後の対策を立てよう。

そう決意したチェリーは、身を翻して再び進むとしたその時、

「え？」

僅かだが、少女の体が動いたような気がした。

：

(いっいっ……どっこの……)

どれだけ眼を凝らしても、自分の姿さえ映らず、
どれだけ耳を澄ましても、何も聞こえなかった。
ただ1つを除いて。

変わることもなんて出来るわけないよ。

友達なんて作れるわけない。

わたしはずっと独りぼっち。

呪詛のように繰り返される自分の声だけが、音も光もないはずの空間に延々と響き渡る。

(もういや……いつまでつづくの……)

繰り返される言葉の数々は、ほんの少し前まで抱くことが出来た、蛍の希望を粉々に砕いていく。

それでも尚、終わる気配のない声を聞かされ続け、蛍の精神は疲弊仕切っていた。

あの子のおまじないなんてデタラメ。
あんなもので勇気が沸くはずないじゃない。

(わたし・・・そんなことおもって・・・。)

思っていたはずよ。

だからわたしは、こんなことになってるんじゃない。

(・・・。)

あの時頭に響いた声。それを聞いた直後、
蛍は音も光もない世界に墮とされた。

頭に響く声を、否定することが出来なかったから。

(リリンちゃん・・・ごめんね・・・。)

変わることが出来ず、変わろうともせず、

初対面の自分にも優しく接してくれたリリンの思いさえ踏みにじってしまった。

彼女からおまじないを教えてもらった時、もう一度だけ頑張ってみようと思ったはず

なのに、本当の自分はこんな酷いことを思っていたというのか。

最初からリリンのおまじないなんて信じていなかった。

そのことを自覚した螢は、さらに深い自己嫌悪へと陥っていく。

そして頭に響く声の数は、さらに数を増していった。

(わたし・・・ずっとこのままなのかな・・・。)

自分の声だけが永遠と呪詛のように繰り返される世界で、

一生自己嫌悪しながら生きていくのだろうか。

(もういや・・・なにもかんがえたくない・・・。)

あまりの辛さに耐えかね、螢はついに思考さえ放棄しようとした。

その時、

あなたに足りないものは、ほんのちよつとの勇氣。

一歩踏み出すための、小さな勇氣。

リリンの言葉が、頭をよぎった。

(・・・でも・・・わたしはあの子のおまじないを・・・。)

信じてなんていなかったはずだ。なのになぜ、リリンの言葉が脳裏をよぎったのだろ

う。

(一歩・・・踏み出す・・・ちいさな勇気・・・そうだ。

今までだつてずつと、そうだった。いやなこと、こわいことからにげてばかりで・・・そんなじぶんをかえたくて・・・でも、こわくて一歩も踏み出すことができなかった・・・)。

もしかしたらリリンは、そんな自分を勇気づけてくれたのかもしれない。

(・・・わたし、かんちがいしてたんだ・・・。ごめんね、リリンちゃん。)

あのおまじないは、唱えれば勇気が天から降ってくるようなものじゃない。

リリンが、蛭に勇気を出せるようにと、その背中を押すためにしてくれたものなのだ。

勇気を出すのは、自分自身。ほんの少し、ほんの少しの勇気を出すだけで良い。

(ほんのすこしだけの勇気なら・・・わたしにも・・・)。

蛭は両手を胸元まで持つていき、祈るように強く握りしめた。

あの時リリンが触れた胸元に、強く意識を集中させる。

彼女から感じられた温かさを、優しさを思い出すように。

(こんな場所に・・・ずつといたくない！)

まだあたらしい学校にもいつてない！

じぶんをかえることだつてできていない!!

なにより・・・)

蛍はありつたけの思いを、一步踏み出すための勇気へと込める。

(なにより！リリンちゃんに、もういちどあいたいから!!)

「がんばれ！わたし!!」

思いを勇気に込めた蛍は、一步だけ、前に踏み出した。

その直後、蛍の胸から強烈な光が発した。

「え？」

発せられた光は、おまじないをしている両手から零れ、蛍の周囲を明るく照らす。

直後、蛍に五感が戻ってきた。手のひらが見え声が聞こえ、胸から放たれる光が

目を照らし発光音が頭に響く。やがて光が止むと、目の前にピンク色のパクトが現れた。

蛍はそれを両手で受け止める。すると、このパクトを開いた時に何が起こるのか、頭の中にイメージが流れ込んできた。

そして蛍の体が無意識に動き始める。

両手のパクトを天に掲げ、ある言葉を口にした。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

直後、掲げたパクトが自動で開き、中からピンクに輝く光が解き放たれた。

放たれた光は、ヴェールのように蛍の全身を包み込む。

すると蛍の服が一瞬で、フリルとリボンで飾られた、ピンクのドレスへと変わった。髪も肩までの位置だったのがつま先の長さまで伸び、

両サイドがりボンで結ばれ、ツーサイドアップになる。

元々ピンク色だった髪は、さらに一段と明るくなり、光沢を持って光を反射した。

そして瞳の色も、同じピンク色へと変わる。

『変身』を遂げた蛍は、自分の名前とは異なる名乗りを挙げる。

「世界を照らす、希望の光！ キュアシャイン！」

蛍が変身を遂げた直後、強烈な光が世界を覆い、蛍の視界を照らしていったのだ。

：

蛍の視界を照らす光が収まると、いつの間にか服が変わっていた。

それだけでない。頭に違和感を感じ髪を手にとってみる。

「え？あれ・・・？なにこのかつこう・・・？あれ？え？えええ!!！」

髪がつま先に達するまで伸びていたのだ。

だが蛍は、あの音も光もない世界から脱出した時の記憶がなく、どうしてこうなったのか状況が掴めないままだった。

「わたしになにが・・・あれ？」

さらに視界に拡がる景色をよく見てみると、コンクリートがえぐれ、屋根が吹き飛んだ家が点々としていた。

その景色を見るに元の世界に戻って来られたはずだが、目の前に拡がる光景は戻って来られたことへの安堵を抱かせないほど恐ろしいものだった。

「いつ、いつたいなにがあったの・・・。」

声を震わせ今にも泣きそうな蛍だったが、更なる衝撃が続く。

足元に目が届くと、そこには20cmほどの小さなぬいぐるみがあった。

可愛いぬいぐるみだな、とあまりにも場違いな感想を抱いたのも束の間、そのぬいぐるみは突然大きな声で叫び出したのだ。

「プリキュアに変身した〜!!！」

叫びながらぬいぐるみは飛び跳ね、宙を舞いだした。

ぬいぐるみが空を飛べるはずがないとかそもそも喋るわけがないとか声も可愛いか

なとか様々な思考が働き、蛍を一層困惑させる。

「ぬっぬいぐるみさんがしゃべったああ!!」

グルグルな思考がどんでん返しをし続け、そんなベタな反応で返すことしか出来なかった。

だが混乱を極める蛍をよそに、そのぬいぐるみは蛍の腕を引く。

「お願いプリキュア! キュアブレイズを助けて!」

「え?」

プリキュアとは何なのかキュアブレイズとは誰なのか助けてとはどうゆうことなのだろうかなんでぬいぐるみがしゃべりながら空を飛べるのか、尽きぬ疑問が次々と浮かび上がってくるが、ぬいぐるみは蛍の悩みが解決するのを待つてはくれなかった。

「こっちよ!」

「わっ! ちよつと!」

蛍はまたしても考えがまとまらない内に、

見知らぬ喋るぬいぐるみに手を引かれて連れていかれるのだった。

∴

「うっ……。」

ソルダークとリリンの連携の前に、キュアブレイズは押され始めた。

2対1と数の差で不利になっていることもあるが、

このソルダーク、先ほどよりもさらに力を増している。

戦いの中で力を高めていくソルダークも初めてのタイプだ。

持久戦に持ち込まれては今以上に不利になる。早く決着を付けなければ。

だがキュアブレイズが危機感を募らせた直後、突然ソルダークの動きが鈍くなった。

「どうしたソルダーク？」

リリスも困惑の色を見せている。どうやら彼女にも原因はわからないようだ。

だがこれは好機だ。この機を逃せば、またいつ力を高めて来るかわからない。

ソルダークを全力で叩き潰そうと、キュアブレイズが構えたその時、

「え？」

こちらに近づいてくる力を感じた。それも闇の力ではない。自分と同じ光の力を。

キュアブレイズが力の感じた方へ向いた時、1人の少女が、チェリーに手を引かれて

姿を現した。

自分と似たようなドレスに身を包んだ、ピンク色の少女の姿を見て、キュアブレイズは驚き目を見開く。

「まさか・・・プリキュア?」

「キュアブレイズ!」

チエリーの声が嬉しそうに響き渡る。彼女が連れてきたということとは、あのピンクのプリキュアは、こちらに加勢に来たのだろうか?

だがそんな疑問を抱いた直後、ピンクのプリキュアの表情が見る見る内に青ざめていった。

「まっまほうつかい!? かつつかいぶつ!? あっあくままで!!」

「いっいたい、なにがおこってるのおお!!」

そしてピンクのプリキュアの情けない叫び声が、闇に覆われた空へと木霊するのだった。

∴

次回予告

「まほうつかいにかいぶつにあくままで出てくるなんて！ いったいなにが起こってるの!?」

「おちついてキュアシャイン！」

魔法使いはプリキュアで、怪物はソルダーク、悪魔は行動隊長って言う呼び方が

「そんなのいわれてもわからないよ！」

「とにかく！ キュアブレイズと力を合わせてソルダークと戦うの！」

「あんなかいぶつと!? そんなのむりむりむり!!」

「無理じゃない！ プリキュアの力があればソルダークとだつて戦えるんだから！」

「も〜！ あしたから学校はじまるのに、わたしどうなっちゃうの〜!!」

次回！ ホープライトプリキュア 第2話！

「勇気を胸に！ 蛍、波乱の転校初日！」

希望を胸に、がんばれ、わたし！

第2話

第2話・プロローグ

螢はまず自分が置かれている状況を整理するところから始めた。

突然眩しい光に包まれ、

気が付いたら服が変わっており、

髪が伸びたし何か色も明るくなり、

喋る飛ぶぬいぐるみに話しかけられ、

ついて来たら魔法使いと怪物と悪魔が戦っており、

現在に至る。

うん、わからない。

もしかしたら、映画か何かの撮影現場に偶然迷い込んだのかもしれない。

あるいは、あの喋るぬいぐるみは遠隔操作出来る新型の玩具なのかも。

いや、実はこれは全部夢でありレム睡眠状態であるだけだ。

等々、様々な思考が働いたが、考えれば考えるほど頭の中は混乱していき、どこまで

が現実で、どこまでが幻なのかわからなくなってきた。

そしてそんな蛍を待つてくれるほど、この非現実的な現実には優しくなかった。

「まさかこの世界にもプリキュアがいたとはね。」

いいわ。キュアブレイズ諸共、墮としてあげる。」

「え?」

悪魔がそう囁くと同時に、怪物が蛍の目の前に降り立った。

蛍の10倍以上は軽くあろう巨体は、真っ赤に輝く双眸で蛍を睨み付ける。

「ひっ。」

一瞬で現実を引き戻された蛍だが、今度は怪物の恐ろしさを前に足が竦んでしまう。

「ガアアアアアアアアアア!!」

そして怪物は、耳をつんざくような甲高い奇声を上げ、蛍めがけて拳を振り下ろした。

「きゃあああ!!」

絶叫をあげ、頭を抱えながらその場を立ち退く蛍。

目を瞑りながらも、怪物の拳を寸でのところで避けることが出来たが、直後凄まじい

地鳴りが起き、同時に粉塵が巻き上がり、蛍の元へと飛び交った。

粉塵が収まり、蛍が恐る恐る目を開けてみると、先ほどまで自分がいたところに巨大

な拳が振り下ろされていた。

それはアスファルトで舗装されている地面を抉りめり込んでいた。

余りにも恐ろしい光景を前に、蛍は涙ぐみ再び現実逃避したくなつたが、鳴り響く轟音も、巻き起こる粉塵も、全てありのままの現実として蛍に襲い掛かった。

現実離れた恐ろしい光景の数々を前に、蛍は限界などあつという間に振り切り、パニック状態に陥り、この場を逃げ出そうと走り出した。

「もういやー！ いったいなにがどうなってるの〜!!」

だがそんな蛍のことなどお構いなしに、再び怪物の双眸が蛍を捉えた。

「ちよつと！ キュアシャイン!!」

敵を前にして逃げ出す蛍を、喋るぬいぐるみが表示するが、無我夢中で走り出す蛍に、その声は届かなかつた。

「逃がすな、ソルダーク。」

だが悪魔もまた、蛍を逃がそうとしなかつた。

悪魔の命令を聞いた怪物は、再び蛍へ襲い掛かってきた。

第2話・Aパート

勇気を胸に！蛭、波乱の転校初日！

「ガアアアアアアア!!」

怪物の雄叫びが空から聞こえる

蛭は一瞬だけ怪物の方を振り向き、着地点から離れようとするが、怪物が着地すると同時に、衝撃が起こり蛭に襲い掛かった。

「いたっ。」

その場で尻もちをつく蛭。

早く立ち上がろうとするも、足が震えて思う通りに動かなかった。

「やれ。」

そして身動きが取れない蛭にめがけて、怪物が容赦なく拳を突き出した。

「きゃあああ!!」

蛭は逃れられることが出来ず、怪物の拳を受けてはるか後方に吹き飛ばされる。

その小さな体は、石垣に深くめり込んでいった。

「つ……いたた……、え？いたい？」

痛い、とはどういうことなのだろうか？

アスファルトさえ抉る怪物の腕力で思いつ切り殴り飛ばされた挙句、体が石垣にめり込んだのだ。普通に考えれば痛いで済むはずがない。

だが蛭の体は一切の傷がついておらず、他にも異常があるようには思えなかった。

あの一撃を受けても、蛭の体は無傷だったのだ。

「わたしのからだ……どうしちゃったの？」

自分自身に起きた変化に困惑する蛭だが、怪物は尚も蛭のことを追い詰めて行く。

石垣にめり込み、逃げ道を失った蛭めがけて、再び拳を繰り出した。

逃げられない蛭は、反射的に両手を差し出すと。

「うけとめた!？」

何と蛭の華奢な腕は、アスファルトを抉るほどの腕力を誇る怪物の拳を正面から受け止めたのだ。

怪物の腕力⇨アスファルトを抉るほど、という図式が蛭の頭の中に定着していたのだが、それだけ蛭にとっては衝撃的かつショックな光景だった。

普通に考えればどんな腕力自慢だろうと、人間に受け止められるはずがない。

常識外れの力を身につけてしまい、蛭は自分自身が怖くなってきたが、逆にこれは

チャンスだと思った。

蛭は受け止めた怪物の拳を、力任せに押し出した。

すると思つた通り、怪物がバランスを崩しその場に転倒する。

怪物に隙を作することに成功したのだ。

「いついまのうちにも！」

石垣から脱出した蛭は、すぐさまその場を走り去ろうとしたが、

「キュアシャイン！なんで逃げようとするの!!？」

自分を連れて来た喋るぬいぐるみが、困惑と怒りを滲ませた声で話しかけてきた。

だが蛭だつてこれ以上、こんな恐ろしいところにいたくないのだ。

「だつだつて、あんなおつきいかいぶつと、たたかえるわけないじゃない!!」

「大丈夫！プリキュアの力があれば、ソルダークと戦えるんだから！」

お願い！キュアブレイズと一緒に戦つて！キュアシャイン！」

だがぬいぐるみは尚も蛭に戦うように呼びかける。

蛭は今一度、怪物の方に目を向けると、怪物の赤色の双眸が蛭を睨み付けてきた。

「そんなのむりだよおお！」

蛭は特撮やアニメに出てくるような、ヒーローでもなければ魔法使いでもない。

現実の範疇で考えたとしても、訓練を積んだ自衛隊ですらない。

ただの普通の女の子だ。

いくら怪物と戦えるだけの力が身に付いたとはいえ、あんな恐ろしいものを相手に立ち向かえる勇気も度胸も持ち合わせているわけがない。

泣き叫ぶ蛍に対して、怪物が再び拳を振り下ろしたその時、
「情けないわね。見ていられないわ。」

真紅の魔法使いが、蛍と怪物の間に割って入ってきた。

・
・
・

キュアブレイズはソルダークの拳を片手で受け止めた後、もう片方の手で思い切りソルダークを殴りつけた。

ソルダークの巨体が大きく揺らぎ、無防備になったところを、キュアブレイズは逃さず追撃を浴びせていく。

「どうしたソルダーク。なぜいきなり押され始める?」

リリスが疑問に思うのも無理はない。

先ほどまでキュアブレイズを相手に引けを取らなかったソルダークが、突然力を大きく落とし始めたのだ。

キュアブレイズもそれに違和感を覚えたが、ここで追撃の手を緩めるつもりはない。好機とばかりに徹底的にソルダークを追い詰めていく。

蹴りで宙に浮かせ、拳の嵐を叩き込み、最後に頭部を踏みつけ跳躍し、ソルダークの真上から勢いよく踵落としを繰り返した。

一連の攻撃を受けたソルダークは、地面に叩き付け、その場から身動きが取れないほどのダメージを負う。

「これで終わりよー！」

キュアブレイズは拳に炎を宿し、地に埋もれるソルダークを目掛けて降下し、炎を纏った拳を突き付けた。

キュアブレイズの拳を受けたソルダークは、全身を真っ赤な炎に焼かれ、直後巨大な火柱がソルダークの巨体を包み込んだ。

「ガアアアアアアアアアア!!!」

ソルダークは断末魔と共に、跡形もなく消滅していった。「キュアブレイズ、それに新しいプリキュアか。」

リリスはその言葉だけを残し、姿を消したのだった。

:

「すごい……」

あつという間に怪物を退治してしまった魔法使いの前に、蛭は感嘆の声しか出なかった。

すると、空を覆う闇が晴れ、戦いの中で壊れた道路や壁、建物が全て元通りに戻っていた。

蛭は驚き、本当に全て夢だったのかと疑ったが、自分の姿はまだ元に戻らず、目の前にいる妖精と魔法使いの姿も消えていなかった。

一連の出来事は夢幻なんかではなく、現実起きたことなのだと、改めて突き付けられる。

すると魔法使いがこちらへと歩み寄ってきた。

一応助けてもらったのだから、一言お礼を言おうと思ったが、魔法使いは険しい表情で蛭を睨み付けてきた。

「あなた、何をしてるの？」

「え・・・？」

「ソルダークを相手に背を向けて逃げ出そうとするなんて、それでもプリキュアなの？」

「ダークネスと戦い、世界を守ることが、プリキュアの使命ではないの？」

「えと・・・その・・・。」

「プリキュア、ダークネス。」

「蛭にとってはこの場で初めて聞いた言葉ばかりであり、魔法使いの言うことが理解できなかつた。」

「だが反論しようとも、鋭い眼差しで睨み付ける魔法使いを前に怖気づき、上手く言葉を返すことが出来なかつた。」

「あの、キュアブレイズ、きつとこの子は、今日初めてプリキュアに変身したんだと思う。」

「そんな蛭に対して、喋るぬいぐるみが助け舟を出してきた。」

「その言葉を聞いたキュアブレイズは、僅かに驚きの表情を見せる。」

「・・・チェリー。」

「なに？キュアブレイズ。」

「明日には迎えに行くわ。今日は一日、その子の側にいなさい。」

「え？」

「プリキュアのこと。ダークネスのこと。」

「この世界でこれから起こるであろうこと。それをその子に伝えなさい。キュアシャインと言ったかしら？」

「あなたもプリキュアに変身した以上、無関係ではられないわ。」

「そっそんな……。」

「そんなのは勝手な言葉だと、蛍は思った。」

「少なくとも蛍は、このプリキュアと言うのになりたくてなつたわけではないのに。」

「あなたが戦わなければ、この世界がどうなるか。チェリーからちゃんと聞くことね。」

「この世界がどうなるか。」

「そんな不穏な言葉を残し、キュアブレイズと呼ばれた魔法使いは、この場を立ち去ろうとしたが、チェリーと呼ばれた喋るぬいぐるみが彼女を呼び止める。」

「まつ、待って、キュアブレイズ。他のみんなは？」

「……アップルは一緒にいるわ。後の2人は、まだ見つかっていない。」

「チェリーの質問に簡素に答え、キュアブレイズは今度こそこの場から離れるのだつた。」

「キュアブレイズ……。」

立ち去るキュアブレイズを、チェリーは悲しげな表情で見送る。

本当のことを言えば、蛍は今すぐこの非常識な事態から解放されたかった。

だが、他のみんな、後の2人はまだ見つかっていない、と言う言葉を聞き、悲しい顔を浮かべるチェリーを1人で放っておけるほど、蛍も薄情にはなれなかった。

「……あの……チェリーちゃん……だっけ？」

突然蛍に話しかけられたチェリーは、驚いてこちらを振り向く。

「え？ うん、そうだけど。」

声をかけたはいいが、何から話せばいいのかわからない。

むしろ、こちらが話を聞きたいところではあるが、どちらにしても、喋るぬいぐるみと道端で話すわけにもいかず、

「……とりあえず、わたしのおうちに……くる？」

一旦、家に招待することにした。

両親が恐らく帰ってきているだろうが、チェリーにぬいぐるみのフリをしてもらえれば、上手く誤魔化すことは出来るだろう。

生きているチェリーにモノの振りをしろと言うのは、少し心が痛むが。

「……じゃあ、お言葉に甘えてお邪魔します。」

チェリーが承諾してくれたことに、少しだけ安堵する蛍。

だが声をかけておきながら、蛭はまだ帰るわけにはいかなかった。

「……ところで、ひとつきいてもいい？」

「なに？」

「……このかつこう、もとにもどれる……よね？」

「……え？」

無意識の内にこの姿に変身した蛭には、変身した時の記憶がないからだ。

当然、変身を解除する方法を知らず、そもそも元の姿に戻れるかも分からない。

だがチェリーはその言葉に、困惑と呆れの入り混じった表情を見せ、とりあえず力を抜けばいいんじゃない？というテキスト極まりないアドバイスをしてきた。

蛭はそれを受けたが、力の抜き方も上手くわからず、結局人目につかないところに身を潜め、5分ほど時間をかけてようやく変身を解除したのだった。

：

蛭はチェリーを連れて、無事に家に帰宅した。

時計を見ると、時刻は15時20分を過ぎていた。

大地を挟り街を壊す巨大な怪物を相手に変身して戦うと言うのは、特撮ヒーローのようにフィクションの世界かつ、視聴者の立場だからこそ楽しめるものだと、改めて実感する蛍。

当事者の立場には、出来ることなら金輪際一切立ちたくないと思った。

「ただいま。」

「お帰り蛍。」

「蛍、遅かったじゃない。」

家に入ると、既に帰宅していた父と母が、蛍を出迎える。

「ごめんね、おとーさん、おかーさん。」

「あら？見たことないぬいぐるみを持つてるわね。」

「えっ？・・・えと・・・。」

早速カバンに入れているチェリーについて指摘された。

「ははん、さてはオモチャ屋さんかどこかに寄り道してたな。」

だが蛍が言い訳を考える前に、父がそう言ってきたので、蛍もその話題に合わせて誤魔化すことにした。

「そっそうなの。ぐうぜんとおりかかったオモチャ屋さんでみかけて、カワイかったか

ら、つかってきちゃった・・・。」

上手く自然と誤魔化しただろうか。

昔から親に嘘をつくのが苦手だと言われてきた蛭は少し不安になる。

「その分のお金、来月のお小遣いからちやんと引きますからね。」

だが何とか誤魔化したようだ。

お小遣いを引かれたことに少しショックを受けるが、この場を無事切り抜けることが出来たのだからよしとしよう。

「だっだいいじょうぶ。あとでちやんとおかね、かえすからね。」

「よろしい。それじゃあ、今日はお母さんが夕飯を作るから、蛭はお部屋で、明日の準備をしてらっしゃい。」

「はい。」

父と母との会話を終えた蛭は、そのまま私室へと戻っていった。

蛭の部屋は、両親から良く質素だと言われている。

普段から部屋の片付けを心掛けているため、必要以上のものが出ていないのだが、そもそも私物が少ないのだ。

勉強机の上にはノートと参考書と筆記用具。

小物入れの中には裁縫道具と、携帯ゲーム機およびゲームソフトが数本。

唯一レパートリーに飛んでいるのは本棚であり、蛍の趣味である料理とお菓子作りに関する本が多く並んでいる。

そんな悪く言えば地味な部屋だが、蛍がピンクを始めとする暖色系の色を好んでいるため、カーテンの色やベッドのシーツは、ピンク色で統一されており、見た目だけなら華やかな部屋でもある。

「・・・もう、だいじょうぶかな？」

「ごめんね。ぬいぐるみのマネさせちゃって。」

「気にしてないわ。この世界に妖精はいないのでしょ？」

怪しまれないようにぬいぐるみの振りをしなきゃいけないのは、わかってるから。」

話を聞きながら、蛍は改めて目の前にいるチェリーを観察する。

外見はピンク色のウサギのぬいぐるみのよう。

大きさは20cm程度。姿形こそ可愛らしいぬいぐるみだが、

それに反して言葉遣いや態度は落ち着いているように見えた。

「あの・・・このせかいってことは、チェリーちゃんはホントに、こことはちがうせかいからきたの？」

「ええ、私と、あの時一緒にいたキュアブレイズは、こことは違う別の世界から来たの

よ。」

改めて突き付けられる現実には蛍は言葉を失う。

「こことは別の世界とは、まるでSF映画に飛び込んでしまったかのような気分だ。

「それじゃあ、あのときたまたかった、かいぶつたちも？」

「あれは、わからないわ。」

「わからない？」

「順を追って説明するわ。」

私たちの世界のこと、プリキュアのこと、ダークネスのこと、そして今この世界で、何が起ころうとしているのかをね。」

「……。」

その話を聞くのは恐ろしいが、ここまで来て聞かないわけにはいかなかった。

蛍は意を決して、これから話すチェリーの言葉に耳を傾けるのだった。

∴

「フェアリーキングダム。それが私たちのいた世界よ。」

この世界のように、機械や化学が発達しているわけではないけど、自然豊かで人間と妖精が手を取り共存している、とてもステキな世界だったわ。」

妖精と人間が共存しているファンタジーな世界。

それを聞き、蛍は幼少期に読んでいた童話の世界を思い描いた。

「そのフェアリーキングダムにはね、プリキュア伝説と呼ばれる伝説が、古くから語り継がれているの。」

「プリキュア伝説？」

あの時自分が変身した姿は、伝説上の存在なのだろうか？

蛍がそう考えていると、チェリーは一つ間を置いてから伝説について語り始めた。

「黒き闇、空を覆わんと拡がりし時、4つの光、闇を照らすべく大地に降りる。」

其の名はプリキュア。汝は世界の希望なり。これがプリキュア伝説の序章よ。」

「・・・ふしぎなでんせつ。」

ひかりなのに、まるでひとみたいな言い方だね。」

「そうあなたの言う通り、ここに出てくる光、プリキュアと言うのはね、伝説の戦士、光の使者とも呼ばれ、絶望の闇と戦う光の戦士のことを指しているの。」

そして、この伝説で語られている絶望の闇こそがダークネス。

あの時あなたに襲い掛かってきた、悪魔と黒い巨人のことよ」

あの恐ろしい悪魔たちを思い出し、螢は思わず身震いする。

「ダークネスはある日突然、私たちの世界へ侵略してきたわ。

やつらがどこから来て、何を望んでいるかはわからない。

唯一わかることは、ダークネスの目的が、世界を闇で覆い尽くすということだけよ。」

「・・・せかいをやみで覆いつくすって、どうゆうことなの？」

「光も音も一切なくなり、そこにいる人々は全員、生きる気力を失う。

何も見えない、何も聞こえない、人はただ、そこにいるだけの『モノ』になる。

そんな世界にすることよ。

その目的のために、やつらは闇の牢獄を生み出して人を閉じ込め、黒の巨人、ソルダークを創り出すの。」

ソルダークとはあの怪物のことだろう。

だが1つ初めて聞く単語があった。

「やみのろうくく。」

首を傾げる螢に対して、チェリーはやや躊躇うような素振りを見せてから、続きを話した。

「人を絶望させる為にダークネスが生み出す、目に見えない空間のことよ。」

そこに閉じ込められた人は、一切の五感を失うの。でも五感を失い、自分の姿も声もわからないはずなのに、ずっと頭の中に声が響き続けるの。

絶望へ誘う、自分の声だけが。」

「っ!？」

その瞬間、蛍の脳裏にあの時の記憶が蘇った。

自分の声で、自分の内だけに秘めていた言葉がずっと繰り返されていくあの記憶。

蛍は頭を押さえ、その場にうつ伏す。

「蛍！大丈夫!？」

「おもいだした・・・あのとき、わたし・・・。」

「・・・うん、蛍は闇の牢獄に囚われていたわ。」

闇の牢獄に囚われた人間は、無理やり心の内をさらけ出されて、絶望へと誘われるの。

それが絶望の闇と呼ばれる力に変わる。

やつらはその力を使って、ソルダークを創り出すのよ。

そしてソルダークが、絶望の闇をまき散らし、その闇が、牢獄の強度をさらに強くする。

闇の牢獄の強度が強まれば強まるほど、よりたくさんの人たちが囚われていくのよ。

いずれは、世界中の人々を全て閉じ込めた牢獄になる。

でもね、私たちの世界にダークネスが現れて、ソルダークが絶望の闇を撒き散らしていった時、フェアリーキングダムのある人が、プリキュアへと変身したの。」

「その人が、キュアブレイズなの？」

「ええ。悪いけど、あの人の正体はまだ言えないわ。」

でも私たちにフェアリーキングダムの人にとつて、とても大切な人とだけ言っておくわ。

キュアブレイズは1人でずっと、フェアリーキングダムを守るためにダークネスと戦い続けたわ。

伝説の通りであれば、プリキュアは全部で4人いるはず。

ダークネスの侵略で、世界がどんどん闇に覆われていく中でも、ずっと残りのプリキュアたちの誕生を願って、戦っていたの。

でも、結局私たちの世界に、キュアブレイズ以外のプリキュアは誕生しなかったわ。

キュアブレイズは、最後の最後まで戦い続けたけど・・・私たちの世界は・・・」
チエリーはその先を言うことが出来なかった。

だが言わなくても、何があったのかはわかってしまった。

フェアリーキングダムは、ダークネスの侵略を受けて、世界中に人々が皆、闇の牢獄に囚われてしまったのだ。

皆、五感を失い生きる気力を失い、そこにいるだけの『モノ』となってしまうた。

この世界に逃げ延びて来た、キュアブレイズと、チェリーたち数人の妖精を除いて。だから私たちは、この世界へ逃げてきたの。

一緒に逃げ延びて来た仲間たちとは、離れ離れになっちゃったけどね。」
「……。」

「そして、とうとうこの世界にもダークネスがやってきたわ。

この世界も、絶望の闇で覆い尽くすために。

でもようやく、2人目のプリキュアも見つけることが出来たの。

それがあなたよ、蛍、いいえキュアシャイン！

だからお願い！キュアブレイズと一緒にダークネスと戦って！

あなた達プリキュアだけが、ダークネスと戦うことが出来る唯一の戦士なの！」

チェリーの話聞き終えた蛍は、チェリーの話疑うつもりは無かった。

彼女の言う通り、伝説の戦士プリキュアだけが、伝説に出てくる黒き闇、ダークネスと戦うことのできる唯一の光なのだろう。

それに、ここへ呼んだ時点でチェリーから戦って欲しいと頼まれることは予想できていた。

だけど、

「……ごめんなさい。」

わたし、ダークネスとたたかうことなんてできない……。」

蛍は、チェリーの頼みを聞くつもりはなかった。

「え……?」

蛍の返答に、チェリーは言葉を失う。

「わたし、運動なんて大の苦手だし、それに、いくらちからがあつても、あんなおつかないかいぶつとたたかう勇氣なんてないよ……。」

先ほどのように、どれだけ強い力を持ったとしても、臆病な自分では敵を前にして背を向けて逃げることは出来ない。

そんな自覚があるから、蛍は戦いを頼まれても断るつもりだった。

「でも今、キュアブレイズを助けられるのはあなたしかいないのよ!」

キュアブレイズは……ずっと一人で戦っているのよ……。」

だからお願い、キュアブレイズを助けてあげて!」

チェリーはキュアブレイズのことを心から心配しているのだろう。

故郷を失つても尚、ダークネスと戦うキュアブレイズの心境は計り知れない。

それを思えば心が痛むし、何て残酷なことをチェリーに言っているのだろうとも思うが、

蛍は自分の意見を変えるつもりは無かった。

「それに、わたしみたいなの、なんの取り柄のないひとだってプリキュアになれたんだよ？ そのうち、わたしなんかよりずっとたよりになって、つよいプリキュアがきてくれるって。」

「……」

言葉を失うチェリーの体は震えていた。

「……わたし、いまはじぶんのことだけで手いっぱいだから、だから……ごめんなさい……」

しばらくの沈黙の後、チェリーが重い口を開ける。

「……そう、ごめんね。無理なお願いしちゃって……」

チェリーは唇を震わせながらそう伝えた。

その口調からは怒り、悲しみ、失意、失望を感じとれる。

それでも蛍を責めるようなことは言わなかった。

そんな彼女の優しさに、蛍も苦しい表情を浮かべる。

「……あの、キュアブレイズがむかえにくるのは明日なんだよね？」

よかつたら今日、ここにとまってく？」

「ううん、いいわ。まだ見つけられていない仲間たちを探さなきゃいけないし……。」
せめてものお詫びとして提案するが、断られてしまった。

とはいえ、この状況では、承諾されても重苦しい空気が続くだけだろう。

蛭はほんの少しだけ、断られたことに安堵する。

「そつ、そつか……。」

だが蛭はふと、あることに疑問を抱いた。

「……ねえ、ひとつだけきいてもいいかな……?」

「なに?」

「チエリーちゃんたちは、いつこっちのせかいにきたの?」

「……いつだったかしら。」

暦なんてもう数えてないから、忘れちゃった。

でも、この世界にも、季節はあるのね。」

「え?」

「私が来て少ししてからかしら?雪が降り始めたのは。」

この世界では暖房の設備が充実していたから、何とか冬も乗り越せたけど。」

蛭はその言葉に息を飲んだ。

去年、雪が降り始めたのは12月の頭だ。

それより少し前と言うことは、11月頃。

今が4月だから、半年近くもこの世界を放浪していたということになる。

「キュアブレイズとあえたのって、今日がはじめて・・・？」

「ええ、やっと思つけることが出来た。

後は、はぐれてしまった2人の仲間を見つけるだけ。

もう1人は、キュアブレイズと一緒にいるみたいだからね。」

「……。」

「・・・それじゃあ、私もう行くね。

お話、聞いてくれてありがとう。

それから、戦うつもりがなかったとしても、

自分がプリキュアだってこと、誰にも話しちゃだめよ。

当然、家族にもね。

あなたのまわりの人たちを、危険に巻き込まない為に。」

「うん・・・わかった。ありがとう・・・。」

こんな状況でも、チェリーは自分と周囲の身を案じてくれた。

「・・・じゃあね。蛍。」

その言葉を残し、チェリーは窓から飛び去って行った。

チエリーの姿が見えなくなるまで、蛍はその後ろ姿を見送る。

「これで……よかつたんだよね。」

戦う意思もなければ勇気もない。

そんな蛍が戦いに出たところで、キュアブレイズの足枷になるだけだ。

ちょうど今日みたいに。

チエリーには申し訳ないけど、自分みたいな人間でもプリキュアになれたのだ。

新しいプリキュアが見つかるのも、そんなに時間はかからないだろう。

蛍がでしゃばらなければならない理由など、どこにもない。

「いまは……あしたからの学校をがんばらなきゃ。」

今日、リリンから教えてもらった勇気のおまじない。

それを胸に、明日から変わる。

今日の出来事を振り切るかのように、そう強く願い、蛍はカーテンを閉めるのだった。

・
・
・

日が暮れ、闇夜が世界を包み始めた空に、リリスは姿を現した。

この街にプリキュアがいるのであれば、しばらくはここを拠点とし、プリキュアの討伐も兼ねた方がいいだろう。

キュアブレイズはまだしも、あのキュアシャインという戦士は容易く墮とせそうだ。同時にリリスは、今日の戦いを振り返る。

ソルダークが突然力を落としたあの現象は、結局何だったのだろうか。

「所詮は脆い心から生み出したもの。力も不安定だったということかしら。」
蛭といったか。今にも壊れてしまいそうな脆い存在。

あんなものを素材としたから、不安定なソルダークが出来上がってしまった。

少し目をかけたが、あまりアテにすべきではなかったのかもしれない。

だがリリスは全くとっていいほど失望はしていなかった。
もとい自分にとってはどうでもいいことなのだ。

弱くて脆い人間。

そんな弱い人間から創りだされるソルダーク。

この世界。

そして蛭という少女。

何もかもが全て。

ただ与えられた命に従うだけ。リリスとは、行動隊長とはそういうものだ。とはいえ、今回のようなトラブルはなるべく避けたい。

単純に作戦遂行の上での効率が悪くなるからだ。

「あんな小細工はもうおしまい。少し時間をかけて、より良い素材を探しましょう。」
闇夜から地に降りたりリリスは、その姿をリリンへと変えた。

：

翌朝、螢は自室の鏡の前に立っていた。

新しい制服に袖を通し、黄色のリボンを結ぶ。

鏡の前でおかしなところはなにかをチェック。

襟は乱れていない、リボンの結び目もバツチリ。

スカートを翻し、折れていないことを確認。

最後に前髪の両脇に、愛用のヘアピンを留める。

よし。

気合を入れた蛭は、ふと窓の外に目をやった。

「昨日の出来事が思い返される。」

思い返すと胸が痛むが、今は目の前のことに集中だ。

今日から自分は変わって見せる。

新しい学校で、ちゃんと人と話せるようになって、そして友達を作るんだ。

蛭は胸の前で両手を強く握りしめる。

「がんばれ、わたし。」

リリンから教わったおまじないの後、学校へと向かうのだった。

∴

晴天に恵まれた登校路を、森久保 要（もりくぼ かなめ）は足取り軽くスキップしていた。

身長は160cmをやや上回るくらい。

髪はオレンジ色のセミショートで、活発な印象を与える少女だ。

夢ノ宮中学校の制服に身を包んだ要は、胸に結ばれた黄色のリボンに目をやる。去年の一年間は、先輩が身に着けていたこのリボンにほのかな憧れを抱いていたものだ。

だが今日から新学年、つまり進級。とうとう自分にも念願の後輩が出来るのだ。

誰しも一度は憧れを抱くだろう、先輩と呼ばれることに！

それが楽しみで仕方なかった。

それともう一つ、要には楽しみがあった。

春休みに入る前から、密かに噂されていたこと。

と、新学期開始に胸を躍らせながらスキップしていると、目の前に見知った後ろ姿を

発見した。

「ひつなこ〜！」

スキップの勢いのまま、手にした鞆で盛大に背中をどついたのだ。

：

「きゃっ！」

藤田 雛子（ふじた ひなこ）は、後ろを振り返り、要を鋭く睨み付けた。

「こらっ要！危ないでしょ！」

身長は160cm程、要よりやや低いくらい。

紫がかつたストレートな長髪に丸い縁のメガネをかけた、

知的な雰囲気を漂わせる少女だ。

新学期早々、背中を鞆でどつくなどという愚行をやらかしたこの要とは、小学5年生からの付き合いです。

「はいはい、そう睨まない睨まない。」

まるで悪ぶれた素振りを見せない要に、雛子はわざとらしくため息をついた。

「なっそれよりもさ、いよいよ今日やる？噂の転校生が来るの。」

両親が関西出身である要は、時折喋りに方言が混じる。

「またその話？言葉通り噂だし、来るとしても私たちのクラスには限らないじゃないかい。」

「いくやくるね！ウチの直感がそう告げている！」

そんな根も葉も根拠もない直感よりも、針金を使ったダウジングの方がまだ信頼出来そう。

「いったいどんな子がくるんだろな。」

男子だったら運動得意かな？スポーツで勝負したいな。」

早くも来ること前提で話を進めていく要。

「もし女子だったら・・・雛子はどんな子が来ると思う？」

「・・・なんで私に聞くのかしら？」

一見すると何とでもない会話だが、

要のあからさまに含みを持たせた言い方に雛子は目を吊り上げる。

要もそれ以上は追及しないが、ヘラヘラと笑っていた。

雛子にはわかつている。からかわれているだけなのだ。

ならばムキになった方が相手の思うツボだ。

これ以上相手のペースには飲まれまいと早歩きを始める雛子だが、要は歩調を合わせて隣を歩く。

2人はそのまま、夢ノ宮中学校へと向かうのだった。

・
・
・

市立夢ノ宮中学校。

創立60年を超える由緒ある中学校だ。

子供の夢を叶える為の学び舎であることを教訓とするこの学校は、授業のレベルが一般的な中学校の平均よりも高めになっており、中間及び期末試験の他、学力を図るための小試験も定期的に行われている。

また、図書館に並ぶ参考書の質、量は目を見張るものがあり、様々な分野に関する参考書が並んでいるのだ。

自習という形式ではあるが、早い段階で専門的な勉強も可能である。

だがあくまでも市立であるこの中学校は、私立とは違って受験制度はない。

学校付近の街に住む子供たちであれば、小学校を卒業したらそのまま入学することになるのだ。

つまるところ、勉強が苦手で大嫌いな子どもたちからすれば、レベルの高い勉強を、望んでもないのに強要されるわけだ。

要もその1人であり、それだけが中学生生活における唯一の不満点であった。

去年の1年間を思い出すだけでも鳥肌ものである。

という話を以前雛子にしたところ、

普段から勉強サボってる方が悪い

という温もりの欠片もない言葉を浴びせられたものだ。

全く、グチに対して本音のツツコミを入れるとは、酷い悪友である。

登校した2人は新しい教室、2年1組へと足を運んだ。

席は左端、最後尾の一つ前で、要と雛子は隣同士だった。

実は去年のクラスも場所こそ違えど隣同士だった。

ついでにいうと一昨年小学校の時も。腐れ縁もいいところである。

「よっ、森久保。また同じクラスみたいだな。」

「要ちゃんおはよう。また一緒だね。」

「おう、健太郎、かな子。」

早速見知った生徒たちが、要に声をかける。

要は男女問わず友人が多く、雛子にもそれは要の数少ない長所だと言われたことがある。

数少ないは余計だ。

「ヤッホー、要、雛子。」

「要、雛子。おひさしぶり。」

「おっ真に愛子。なくんや、自分らも腐れ縁か？」

「おはよ。真、愛子。」

柳原 真（やなぎはら まこと）。

身長は要と同じくらい。

茶髪のショートカットで、ボーイツシユな印象を与える少女だ。要とはスポーツ仲間である。

宮内 愛子（みやうち あいこ）。

身長は150cm後半。

カールがかつた金髪の少女で、一見するとおっとりとしたお嬢様のような雰囲気漂わせるが、実は大の漫画好きである。

2人とも、小学校の頃からの付き合いである。

「2人とも聞いてよ。何人かの生徒がさ。」

先生と一緒に教務室へ行く子を見かけたんだって。」

早速真が例の噂話について、新着情報を仕入れて来た。

「おっその子、噂の転校生に間違いないな！男の子？女の子？」

真の話に食いつく要。

愛子もそんな2人の間に割って入り、転校生について妄想し始める。

「楽しみよね。今度はどんな子が来るのかしら。」

イケメン？美少女？やっぱり転校生ってだけで、なんか期待しちゃうよね。漫画では大体、ハイスペックの持ち主で……。」

「いや、皆して勝手な期待を押し付けられないの。」

盛り上がる要たちを雛子が注意する。

確かに、まだ見ぬ転校生に対して余計な希望を抱くのは、少しデリカシーに欠けていたかもしれない。

要たちがそう反省していると、

「皆、席につけ。」

担任の教師である長谷川 勇人（はせがわ ゆうと）が教室へと入ってきた。

身長は170付近。年齢は20代後半。

まだ若いが、生徒たちの進路相談に最も親身になってくれる教師と評判だ。

ちなみにメガネをかけた中々のイケメンであり、女子生徒の間では密かにファンクラブが作られているほどだ。

さらに余談だが、そのファンクラブの中でも、メガネをかけたインテリ風イケメン派と、メガネを外したナチュラル風イケメン派とで派閥が別れているとかいないとか。

とにかく女子に大人気の先生である。

「さて、春休み前に少し噂されていたかと思うが、今日からこのクラスに転校生がくる

ぞ。」

「おー！ほら雛子。ウチの言う通りやる？」

「要、騒がないの。」

直感的中し、はしやぐ要を雛子が諫める。

「さっ、入っておいで。」

長谷川先生の合図と共に、転校生が教室へと足を踏み入れた。

どんな生徒が入ってくるのかと、要は身を乗り出したが、

「・・・はい？」

緊張のあまり表情と体をガチガチに固めた、

小学生とおぼしき少女を目にし、要は思わず固まってしまった。

第2話・Bパート

要は黒板の前に立つ少女を見る。

身長は130cm程か。自分と比較すれば30cm近い身長さがありそうだ。

小柄のあまり、通う学校を間違えてないかと一瞬思ったが、着ている制服は明らかにこの学校のものであり、身に着けている黄色のリボンが同年代であることを裏付けている。

そんな見た目小学生と見紛う少女が、表情も体もガチガチに固めた状態で、一歩ずつ教卓へと向かっている。

相当緊張しているのだろうその姿に要は、大物モノマネ芸能人のロボットネタを思い出した程だ。

そしてようやく教卓までたどり着いた転校生。

だが正面を向いて固まったまま、何も動こうとしなかった。

「……それじゃあ、黒板に名前を書いて。」

見かねた長谷川先生が転校生に声をかける。

「ひゃあっはい!!」

半ば叫びに近い声を上げる転校生。

チヨークを手に取り、黒板に名前を書こうとするが、立ったままでは位置が低いと思ったのか、うんつと背伸びをして名前を書き始めた。

そんな姿に要は今一度、目の前の転校生が本当に同学年であるかを疑う。

「い、ちのせ……。」

「ほたる、つて読むのよ。」

「へえ、蛩つて漢字でああ書くんだ。」

「そうよ。……可愛い子じゃない。」

予想通りの言葉を、これまた予想通り頬を綻ばせた表情で呟く雛子。

「そーですね。」

要はそんな雛子にカタコトで返事をする。

雛子がこちらを睨み付けてくるが、その視線を無視し転校生の方を向いた。

すると、名前を書き終えた転校生が、こちらの方を向き直った。

「じゃあ、自己紹介を。」

「……あつ……あの……。」

歯切れが悪く、今にも消え入りそうな声で呟き始める転校生。

「……その……えと……。」

だが一向に自己紹介が始まらず、

両手を顔の前で、もじもじさせながら若干涙ぐみ始めた。

クラスメートたちも、不安げなその姿に心配を覚えるが、その転校生は突然、両手を胸の前で握り祈るような姿勢を取る。

「がっ、がんばれ、わたし．．．。」

そしてかろうじて聞こえる程度の小さな声で自分を鼓舞し、

「．．．ひゃひめぼっ!!!」

裏返った大声で盛大に嘔むのだった。

∴

蛭は恥ずかしさのあまり、すぐこの場を立ち去りたくなかった。

緊張で頭の中が真っ白になりかけていた中、ようやく勇気を出して始めた自己紹介で盛大に嘔んでしまったのだ。

直後、クラスから笑い声が漏れ始め、顔を見られたくなかった蛭はその場に屈みこん

でしまい、結局自己紹介をやり直すのに2分近くかかったのだ。

先生に案内され、最後尾の席に着いた蛍は、その場ですぐに顔を伏せなくなったが、ころうじてそれを堪える。

最悪なスタートとなつてしまつたが、ここでクラスメートから顔を背けては意味がない。

何が何でも今日から変わるんだという蛍の意思が、逃げたくなる思いを踏み止まらせた。

「一之瀬 蛍、だっけ？」

目の前に座るクラスメートから声がかかる。

「ウチは森久保 要。よろしくな。」

「私は藤田 雛子。よろしくね、蛍ちゃん。」

隣に座る子からも声がかかる。

「・・・もり・・・くぼさんと、ふじた・・・さん。」

「そんな苗字でなんて呼ばないでさ、要でいいよ。」

「私も、雛子でいいわ。」

「えと・・・かな・・・。」

だが蛍はそのまま黙り込んでしまった。

(はじめであつたばかりだし、いきなりなまえでよんだら、しつれいだよね・・・) 良いと言われているにも関わらず、思考が後ろ向きに働いてしまう。

だがこれまで友達のいなかつた蛭にとつて、クラスメートを名前で呼ぶのはハードルが高すぎた。

「・・・ごめんなさい。」

急に名前で呼んでいいだなんて、馴れ馴れしいわよね。」

「え・・・?」

「私たちも、一之瀬さんって呼ぶことにするから。」

雛子の氣遣いに胸が痛む。

そんなことはない。

馴れ馴れしいだなんて思っていないし、むしろ積極的に話しかけてくれたことが嬉しかった。

本当は2人のことを名前で呼び、名前で呼ばれたい。

そして友達になりたいのだ。

蛭は勇気を出してそのことを伝えようとするが、

「あの・・・ちがつ、」

「皆、そろそろ始業式の時間だ。急いで体育館へ移動しろ。」

担任の長谷川先生から移動の声がかかってしまう。

「それじゃ、ウチらも移動しよつか。」

「一之瀬さん。体育館まで案内するね。」

「あ……。」

結局自分の本心を伝えられないまま、体育館へ向かうことになった。

始業式の間、虫はずっと午前中の自分の行動を悔やみ続けるのだった。

：

始業式を終え、新しい教科書がクラス全員に配布されてから、学校の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

時刻は午後の12時だが、今日は授業がない為、このまま下校の時間となる。

本格的に学校が始まるのは明日からだ。

「よし、今日は部活も休みだし。ほた、一之瀬。帰り道はどっち方面？」

「え……？」

「途中まででもいいから、良かったら一緒に帰らん？」
突然の誘いに戸惑う蛍。

だがクラスメートと一緒に登下校したいと言うのは、蛍が学校生活において望んでいたことの1つだ。

「……一之瀬ちゃんさえ迷惑でなければ、どうかな？」

雛子も蛍に声をかけてくれた。

2人とも初対面である自分にも優しく接してくれる。

そんな2人の気持ちに応えたいと思う蛍だったが、

「えと……わたし……」

返事をしようとした矢先、脳裏に過去の記憶が蘇った。

小学生の頃、何人かのクラスメートと一緒に帰ろうとしていた時、蛍にも声がかかったのだ。

皆の輪に加わりたかった蛍は、その声を受けたが、帰り道、話を振られても返事をすることが出来ず、かと言って自分から話題を振ることも出来なかったので、誰とも言葉を交わすことなく家に着いてしまった。

そしてあの日以来、一緒に帰ろうと誘われることがなくなってしまった。

そのことを思い出した途端、蛍は急に怖くなった。

2人と満足に会話出来ない今の状況では、同じことを繰り返してしまふのは目に見えている。

そうなればあの時みたいに、2人から一緒に帰ろうと誘われなくなってしまうかもしれない。

もしかしたら、つまらないやつだと思われて、話しかけてすら来なくなるかもしれない。

悪い考えばかりが頭を巡り、蛍の不安を圧迫していく。

考えたくもない最悪のシナリオばかりが、頭の中を回り始めた蛍は突然立ち上がり、「あつ、蛍ちゃん！」

靴を取り、急いで教室から出ていくのだった。

：

蛭は校舎の陰に隠れ、膝を抱えてその場に座り込んでいた。

「せつかく・・・はなしかけてきてくれたのに・・・」

いっしょにかえろうって、いってくれたのに・・・」

2人の声を最悪の形で無視してしまった。

それだけでなく、あんなに優しくしてくれたのに、心の中で酷いことを思ってしまった。

「どうして・・・いつも・・・」

今日から変わる。

そう決意したはずなのに結局いつもと同じだ。

後ろ向きな考えを勝手に抱いて、それに勝手に押し潰されてしまう。

そして、最後にはこうやって逃げ出すのだ。

「ひっく・・・うう・・・」

リリンのおまじないがあっても、勇気を出すことが出来なかった。意気消沈した蛭は、その場で声を殺しながら泣き続けるのだった。

：

夢ノ宮市商店街。

街中に、午後12時を知らせるベルが鳴り響いた。

それを聞いたチェリーは、仲間たちの捜索を一旦止め、休むことにした。

人目の付かない路地の陰に身を潜ませ、飛んでる状態から地に降りる。

「やっぱり上手くは見つかからないか。」

微かだが、妖精の気配を感じ取れるが、正確な位置や方角まではわからない。

この市のどこかにいるという事実だけを頼りに、しらみつぶしに行くしかない。

だが今のチェリーはそれとは別に気がかりなことがあり、仲間探しに集中することが出来なかった。

「蛭に・・・悪いことしちゃったな。」

考えてみれば、とても自分勝手な願い事だ。

自分には戦う力がないからと、戦う役割を蛭に押し付けようとしたのだから。

しかも相手は『自分よりも幼い』小さな女の子。

いくらプリキュアの力を持つとはいえ、子供に対してあんな恐ろしいバケモノと戦えだなんて、怖いに決まっている。

それに自分は知っていたはずだ。

「蛍は、闇の牢獄に囚われて、物凄く怖い思いをしたんだよね……。」

闇の牢獄は、チェリーも一度体験したことがある。

頭の中に、自分の声で自分を呪う言葉が延々と繰り返される。

あの時はキュアブレイズがすぐに助けてくれたから、五感を失うまでには至らなかったが、蛍は完全に闇の牢獄に囚われ、ソルダークを生み出しているのだ。

その時の彼女の恐怖は、自分では想像することも出来ない。

そんな怖い思いをした直後に、ソルダークと戦えなんて言ったのだ。

思い出せば出すほど、蛍の心境を全く考えていなかった自分に腹を立てる。

「蛍に、ちゃんと謝らなきゃ。」

だがその一方で、蛍には一緒に戦って欲しいと思う自分もいるのだ。

故郷を失い、この世界に逃げ、暦を忘れるほどに彷徨い続けて、ようやく見つけた2人目のプリキュア。

ずっと1人で戦い続けてきたキュアブレイズの為にも、蛍には一緒に戦って欲しい。

蛍の家の場所はちゃんと覚えている。今からでも向かって謝ろう。

そして、もう一度だけ、ちゃんと蛍にお願ひしよう。

答えは今すぐ出てこなくてもいいから、いつか戦う決意が出来た時に、キュアブレイ

ズを助けてほしいと、ありのままの本心を蛍に打ち明けるのだ。

そう決意したチェリーは、一旦仲間の捜査を打ち切り、蛍の家へと向かおうとするが、
「っ!?!闇の力!?!」

突然、闇の力の気配を感じ取った。

「うわああああああつ!!」

近くで男性の叫び声が響く。

そして、

「ダークネスが行動隊長、リリスの名に置いて命ずる。

ソルダークよ。世界を闇に染め上げろ。」

空を飛びリリスの姿が、はつきりと目に移った。それに続いてソルダークが姿を現す。

「ダークネス……。」

キュアブレイズはまだ来ていないのか。

彼女が来るまで、ここで身を潜めておこうとするが、

「……蛍に戦うことを強要したのに、自分は逃げるつもりなの……?」

そんな不公平なことが許されるはずがない。

蛍に、一緒に戦ってほしいと望むなら、まずは自分が同じ土台に立たなければならな

い。

安全なところに隠れているだけの身の上で、蛍には危険を冒して戦えだなんて、何様のつもりだ。

「私が・・・ソルダークと戦うんだ！ダークネス！」

決心したチェリーは、リリスの前に姿を見せる。

「・・・キュアブレイズと一緒にいた妖精。」

だがリリスと、そしてソルダークの姿を前にしてチェリーは恐怖で足が竦んだ。体中が震え、声が詰まる。

思えばダークネスとこうして真正面から向き合うなど、今までなかったことだ。

これまでどれだけ、キュアブレイズのことを後ろ盾にしてきたかがわかる。

それと同時に、この恐怖を蛍に押し付けていたことを思い知る。

（私は、こんな怖いことをあの子に押し付けようとしたんだ・・・。）

だがもう、逃げ隠れるわけにはいかない。

蛍と一緒に戦ってほしいから、自分から同じ土台に立つんだ。

「こっこれ以上、この世界で好き勝手はさせない！」

勇気を振り絞ってソルダークへと立ち向かうチェリー。

「ふん、力のない妖精が。」

そんなチェリーに、ソルダークの巨大な拳が容赦なく降り降ろされた。

：

校舎裏で泣いていた蛍は、突然、体中に電流が走るような感覚に見舞われた。

「……なに、いまの？」

一瞬の衝撃が過ぎ去った後、今度は炎天下の中から、冷房に効いた部屋に移動したかのような感覚に陥る、だが感じるのは寒気ではなく、怖気だ。

全身の肌がザワつく。直感的に良くないことが起きているというのがわかる。

そんなおぞましいものに、蛍は覚えがあった。

「まさか……ダークネス？」

またあの、悪魔と巨人が現れたのだらうが。

すると今度は、ひと際大きい気配を感じた。

気配のする方に目をやると、空が徐々に黒く染まってきている。

間違いない、ダークネスが再び姿を現したのだ。

そしてダークネスが現れたということは、誰かが闇の牢獄に囚われてしまったのだらう。

「でも・・・わたしは、たたかうことなんてできない・・・」。

それにキュアブレイズだっているんだし、

わたしなんか、でていかななくてもいいよね・・・」。

どうせ出て行ったところで、精々逃げ回ることしか出来ないのだ。

だがキュアブレイズならば、ソルダークが現れても颯爽と倒してしまうだろう。

わざわざ怖いのを我慢してまで、自分が戦いに赴く必要なんてない。

「・・・ほんとうにそれでいいのかな・・・？」

今この瞬間にも、闇の牢獄の中で自分自身の声に苦しむ人がいる。

その恐ろしさを、螢は身をもって実感している。

そんな人たちを、このまま見捨ててしまってもいいのだろうか。

それにキュアブレイズを頼ると言うことは、自分の代わりにこの世界を守る戦いを強

要することになる。

故郷を失ったキュアブレイズに、この世界の命運まで背負わせる。

それはキュアブレイズの身を案じ、一緒に戦ってほしいと願うチェリーの思いを、さ

らに踏みこむことにもなるのだ。

「……わたしは……どうしたらいいんだろ……」

それでも、臆病な螢は、戦う覚悟を持つことが出来なかった。

戦わなくなつたつていいよ。

すると、頭の中に声が聞こえた。

この前と同じ、自分の声が。

いつもみたいに逃げちゃえばいいよ。

そうすれば、何も怖いなんてしないで済むのだから。

だがその声は、今の螢には気味の悪いくらい心地よかつた。

(うん……わたし、にげてもいいんだよね……)

全部、キュアブレイズに任せてしまえばいいんだよ。

わたしなんかが無理して戦う必要なんてない。

(そう……だよね……。わたしが、がんばるひつようなんて……)

頑張る必要なんて、どこにもないよ。

闇の牢獄の囁きに、蛍が身を委ねようとしたその時、
ほたる、がんばってね。

(え……？リリンちゃん？)

リリンの声が、聞こえた気がした。

彼女のおまじないを思い出し、蛍は自分の胸に手を当てる。

あなたに足りないものは、ほんのちよつとの勇氣。

一歩踏み出すための、小さな勇氣。

リリンの声が思い出し、頭の中で反復する。

手を当てた胸が、昨日のように彼女の優しきで満ちていく。

(リリンちゃん……わたし……)

そして蛍は、改めて自分に問う。本当は、どうしたいか。

(わたしは……ほんとは……)

「たすけたい……ダークネスにおそわれた人たちを、

ひとりでたすけたい……つづけるキュアブレイズを、

そして、チェリーちゃんを……
でも……こわい……」

だけどその恐怖は、今までと一緒なだけ。

あと一步踏み出す、ほんの小さな勇気が足りていないだけだ。

そして昨日、その一步を踏み出すことが出来たはず。

蛍はプリキュアへ覚醒した時のことを、頑張つて思い出し始める。

「リリンちゃん……。おねがい……。わたしに勇気を……。かして。」

本当にしたいことは確認できた。

後は一步、踏み出すだけの勇気を思い出すだけ。

戦いに行つて何になるの？

どうせまた逃げ回るのでしょ？

キュアブレイズの迷惑になるだけだよ？

わたしが無理して戦う必要なんてないんだよ？

頭の中に繰り返される声。でも、もう決めたのだ。蛍は胸の前で両手を握る。

「がんばれ！わたし！」

リリンのおまじないを胸に、ほんの少しの勇気を出して、蛍は一步踏み出した。その時、蛍の胸元から光が放たれた。

光の中から現れたのは、昨日と同じパクト。

蛍はパクトを両手に取る。

だけど今度は無意識の内に、流されるのではない。

自分の意思で、大きくその言葉を唱える。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

光に包まれた蛍は、キュアシャインへと変身を遂げたのだ。

「世界を照らす、希望の光！キュアシャイン！」

：

キュアブレイズは陰ながら、そんな蛍の姿を見つめていた。

彼女がキュアシャインに変わるのを見て、ある疑問が脳裏をよぎる。

（昨日ダークネスに襲われた子が、キュアシャインだったなんて。

ということはあるの子、自力で闇の牢獄から脱出したということ？)

変身したキュアシャインは、そのままソルダークの気配がするところへと飛び立つた。

キュアブレイズは気づかれないように、彼女の後を追うのだった。

：

ソルダークの気配を追った蛍は、ついにその姿を捉えた。

ソルダークの肩には、昨日見た悪魔の姿もある。

悪魔はまだこちらの気配には気づいていない。

今ならまだ引き返せるという考えが一瞬よぎるが、蛍はそれを振り払うように大声をあげた。

「ダツダークネス!!」

悪魔が声に気づき、こちらを振り返る。

「キュアシャインか。」

悪魔はまるで血のような赤い眼で睨み付けてくる。

一瞬それに怯む蛍だが、その眼を真つ直ぐに捉える。

「(こつこつ)これいじょう、すきかつてはさせ、」

だが蛍の言葉を待たずに、悪魔はこちらへ飛び掛かってきた。

「えっ?」

鋭利に尖った爪が正面から襲い来る。

蛍は反射的にそれを腕で防御した。

悪魔の爪が腕に深々と突き刺さるかと思つたが、蛍の腕は、まるで鉄板のようにその爪を跳ね除けた。

両手は傷一つついていない。少し痛みがあるくらいだ。

だが跳ね除けられた悪魔の爪も、折れることなく鋭利な原型を留めたままだった。

常識が一切通用しない世界を前に、蛍は尻込みそうになる自分を必死に奮い立たせる。

「ふん。」

悪魔は体を捻り、勢いよく尾を蛍へとぶつけた。

「うっ」

想像以上の衝撃を受け、蛍は態勢を崩してしまふ。

だが悪魔は追撃の手を緩めず、両手で交差するように爪を払った。

「きゃあああつー！」

突き立てられた爪が体を這う。その衝撃と痛みが蛭を襲う。

体に傷はつかず、ドレスが裂かれることもなかったが、痛覚までは消せなかった。

痛みを前に蛭は涙ぐむ。

今すぐにも逃げ出したいが、弱気になる自分を必死に堪える。

このまま攻撃を受け続けるわけにもいかない。

こちらからも反撃をしなければ。

「たあああつー！」

蛭は勢いめがけて拳を悪魔へと振る。

「素人が。」

だが悪魔は僅かな動きでそれを回避し、逆に勢い余った蛭は自らバランスを崩してしまった。

隙だらけになった蛭に、悪魔は再び尾を払う。

直撃を受けた蛭はコンクリートの上に叩き付けられ、さらにソルダークが追撃を拳を

繰り出した。

「きゃあああつー！」

ソルダークの一撃を受け、何十メートルも先へと飛ばされる蛍。

地に叩き付けらると同時にコンクリートを転がり、衝撃と摩擦熱が体に襲い掛かる。さすがのこの体にも擦り傷が出来始めた。

「いたっ……。」

実力の差は歴然だった。

どれだけ強い力を手に入れたとしても、蛍はケンカ一つ満足にしたことがない。

それでも戦うと決めたのだ。蛍は痛みを堪えて立ち上がる。

「あれ……?」

だが蛍の視線をあるものが横切った。

そちらに目を向けると、酷く傷んでいるぬいぐるみのようなものが地に転がっている。

「っ!? チェリーちゃん!!」

蛍は悪魔たちから視線を外し、チェリーの元へと駆け寄った。

その小さい体を抱き、必死に呼びかける。

「チェリーちゃん! チェリーちゃん! しっかりして!!」

蛍の呼びび声が聞こえたのか、チェリーはうめき声をあげながら、僅かに目を開く。

ひとまず、息はあるようだ。

だが妖精の生態を知らない蛍でも、一見してわかるほどの大怪我だ。

「ほた．．．キュアシャイン．．．なんで．．．?」

「それはこっちのセリフだよ! どうして．．．なんでこんなことに!!?」

だがチェリーの返事を待たず、ソルダークが襲い掛かってくる。

迫りくる巨人の拳を、蛭は避けながら、それでも必死でチェリーを落とすまいと両手に力を込めた。

「ごめんね．．．あなただって．．．怖かったはずなのに．．．、戦えだなんて．．．でも私．．．やっぱりあなたに．．．キュアブレイズを．．．助けて欲しかったから．．．だから．．．私も．．．逃げていないで．．．戦おうって．．．。」

蛭はその言葉に息を飲む。

チェリーは自分に戦えと言ったことを後悔している。

だけど、チェリーはただキュアブレイズが心配なだけだったはずだ。

故郷を失っても尚、一人で戦い続けるキュアブレイズを思っ、蛭に戦ってほしいと言ったのだ。

「でも結局．．．なにもできなくて．．．」

あなたにどれだけ怖いことを．．．押し付けたのかを知っただけで．．．

ごめんなさい．．．。」

違う。悪いのは全て自分だ。臆病で逃げてばかりで、チェリーの思いを踏みにじっ

て、自分の本当の思いさえ見失っていた。

そのせいでチェリーを必要以上に追い詰めた挙句、身も心も傷つけてしまったのだ。

(わたしのバカ……。

どうしてさいしよから……たたかうっていえなかったのよ……)

蛭は自分に対する怒りで体を震わせる。

全ては、自分の臆病な心が招いてしまった結果だ。

だからこそ蛭は、この場で決意する。

もう、絶対に逃げ出したりしないと。

執拗に続くソルダークの攻撃を躲し続けた蛭は、チェリーを一度避難させるべく、大

きく距離を開けるように跳躍した。

「チェリーちゃん、すこしだけここであまって。」

「キュアシャイン……。」

チェリーを物陰に置いた蛭は、すぐさま戦いに復帰する。

「わたしはもう、にげたりなんかしない！はああつ！」

果敢にソルダークへと立ち向かう蛭。だが、

「ソルダーク」

悪魔の呼びかけと共に、ソルダークの周辺に無数の黒い矢が生成される。

「え？」

生成された黒い矢は蛍へと一斉に飛び掛かり、巨大な爆発を引き起こした。

：

「キュアシャイン……。」

チェリーは傷ついた体を上げ、爆発のした方を見ようとする。

「チェリー。」

そんなチェリーの元に、キュアブレイズが姿を見せた。

「キュアブレイズ……。」

「あなた、その傷は……。」

キュアブレイズが心配そうに、自分の体を抱き上げた。

そんな彼女の様子に少し安堵するチェリーだが、すぐに蛍のことを思い出す。

「私のことより……キュアシャインが……。」

爆発が収まり、巻き上がった粉塵が晴れると、そこには、力なく横渡るキュアシャイ

ンの姿が映った。

その姿を見たチェリー表情が、悲痛に歪む。

「キュアブレイズ・・・お願い・・・キュアシャインを助けて・・・。」

チェリーはキュアブレイズに懇願するが、キュアブレイズは涼しい顔のまま、この場を動こうとしなかった。

「キュアブレイズ。」

「あの子の覚悟と力、今のうちに見定めておく必要があるから。」

「え・・・？」

すると横渡るキュアシャインの体が、僅かに動き出したのだ。

∴

粉塵が収まり、視界が鮮明になったところでリリースはキュアシャインの姿を見つけた。

全身に無数の切り傷を作り、虫の息で横たわっている

何て弱い戦士なのだろうか。

ソルダーク一体とすらまともに向き合えないなんて。

「脆いわね。キュアシャイン。もういいわ、これで墮としてあげる。」

ソルダークにトドメを刺すのを指示しようとした矢先、キュアシャインの体が僅かに動いた。

キュアシャインは力を振り絞り、その場から立ち上がる。

「……きめ……たんだ……。」

だが弱々しいその動きと声色が、戦う力が残されていないことを証明している。瀕死の状態で抵抗されても何ら問題はないが、これ以上は時間の無駄だ。

「ソルダーク。」

リリスの呼びかけと共に、ソルダークはその拳をキュアシャインに振り下ろした。

だがその拳を、キュアシャインは両手で受け止めた。

「なに？」

「たすけるって……きめたんだ……。」

ダークネスにおそわれたひとを……

ひとりでたたかいつづけるキュアブレイズを……

そして……チエリーちゃんを、たすけるって……。」

キュアシャインの体が徐々に強い光を帯びていく。

「わたしは！きめたんだあああああああつ！！」

キュアシャインは雄叫びと共に、全身から凄まじい光の力を解放した。

「なに!?!」

「はああああああつ!!!たああつ!!!」

ソルダークの拳にキュアシャインの拳が叩き込まれる。

直後、ソルダークの巨体が遥か後方へ吹き飛ばされた。

「ちっ!」

突然のパワーアップに戸惑うも、所詮は瀕死の相手。

こうなったら直々にトドメを刺してやる。

リリスはキュアシャインへ向けて飛び上がり、引つ掻くように腕を払った。

だがキュアシャインはそれを難なく片手で跳ね除けた。

「なにっ……」

直後キュアシャインは、腕を大きく振りかぶり、振り下ろしてきた。

これまでのように隙だらけな動き。

だが、

(速い……)

リリスは反射的に爪を突き立てて応戦する。

だがキュアシャインの拳は、突き立てられたリリスの爪を粉々に砕いた。

言葉を失うリリスだが、同時に溢れ出る力の奔流に巻き込まれ、そのまま後方へと吹き飛ばされた。

「なに・・・なんなのよ！その力は！」

だがリリスは、眼前に力を集中させるキュアシャインの姿を捉えた。

「ひかりよ、あつまれ！シャインロッド!!」

キュアシャインの呼びかけと共に、虚空からは小さな杖が現れる。

キュアシャインがその杖を正面に構えた瞬間、膨大な光の力が集約され始めた。

リリスは直感で危機を感じ取る。

あれを放たれる前に倒さなければならない。

「ソルダーク!!」

リリスの呼びかけと共に立ち上がったソルダークは、

持てる全ての力を凝縮させ、巨大な矢を生み出しキュアシャインへと放った。

「プリキュア！シャイニング・エクスプロージョン!!」

だがキュアシャインも集約させた光を一気に解放した。

解放された光は、巨大な光線となってソルダークへと放たれる。

光線は、ソルダークが全力で作りだした闇の矢を容易く消し飛ばし、全長10m以上はあろうソルダークさえも、容易く飲み込んでいった。

「っ!?!」

迫りくる光線はリリスの真横を掠めたが、その衝撃で大きく吹き飛ばされる。

「ガアアアアアアアアッ!!!」

そして光に飲み込まれたソルダークは、断末魔をあげながら消滅していった。

∴

「はあっ……はあっ……」

急激に力が抜けた蛭は、シャインロッドを落とすし、その場に膝をついた。

無我夢中だったので、何が起きたのか覚えていないが、ソルダークの気配が去っていることから、どうやら無事に撃退できたようだ。

安堵した蛭だが、直後に闇の力の気配を感じると同時に、悪魔が目の前に姿を現した。

(そんな……。もう力はのこっていないのに……。)

だが感じ取れたその力も、とても弱々しかった。そして今も、その力は失われ続けているようだ。

「……キュアシャインと言ったわね……。」

突然悪魔が自分の名を訪ねてくる。

「え……？」

「あたしは、ダークネスが行動隊長、リリース……。」

覚えておきなさい……。いつか必ず……。」

それだけを言い残し、悪魔は姿を消した。

「おわった……。」

悪魔の姿が見えなくなったのを確認した蛍は、改めて安堵する。

今頃体が震え出した。

腰が抜けてしばらくは立てそうにないかもしれないが、蛍には、まだやるべきことがあった。

「キュアシャイン……。」

すると物陰に避難していたチェリーが、キュアブレイズに抱えられた姿を見せた。

:

戦いの顛末を全て見ていたチエリーは、驚愕を隠せなかった。

突然キュアシャインが強大な光の力を発現し、ソルダークを一撃で浄化してしまったのだ。

あれほど強大な光の力は、今まで見たことがない。

ひよっとしたらキュアブレイズよりも……。

「チエリーちゃん。ケガはだいじょうぶ？」

「うん。……あの、キュアシャイン、」

チエリーが話しかけようとするが、キュアシャインは辺りを見回し始めた。

何をしているのかを聞くより早く、キュアシャインが目的の人物を見つける。

「いたっ。」

キュアシャインが駆け付けた先には、壁に背をかけ、項垂れている青年の姿があった。僅かに感じられる闇の牢獄の気配。

先ほどのソルダークを生み出した青年だろう。

「あつあの、だいじょうぶですか？」

キュアシャインが青年に声をかける。

「……俺は一体……。」

「……ずつと、ここどうなだれていました。

あの、きぶんはわるくないですか？」

「……。」

しばしの沈黙の後、青年が口を開いた。

「……怖い夢を見ていたようだ。

何も見えない暗闇の中で、自分の声だけが聞こえて、

ずつと、後悔の言葉だけが繰り返されて、それ以外は何も聞こえなくて……

ちよつと、イヤなことがあった後だったから、疲れていたのかもな……。」

キュアシャインは青年の独白を静かに聞き続ける。

「でも、あの程度のこと、あんな悪夢を見てしまうなんてな。

一度イヤなことがあったくらいで、なんで自分だけが、なんて偉そうに落ち込ん

じゃってさ。」

「……がんばれ、わたし……。」

「本当に、自分のどうしようもなさにウンザリするよ……。」

「だっただれだって！きぶんのこと、いやになることがありますよ！」

「えっ?」

「自分がいやで、どうしようもなくって、

大きらいにおもうこと、なんどもあります!

だから・・・あなたはなにも・・・わるくない・・・。

・・・わたしだって・・・なんども・・・

だから・・・だから・・・

・・・おちこんだって、いいとおもいます。

いやなことがあつたら、たくさん泣いて、たくさんおちこんで、

そして・・・また次、がんばれば、いいんです・・・。」

涙を流しながら、必死で青年を励ますキュアシャイン。

そんな彼女の言葉を受けた青年は、その場から立ち上がり、

「・・・ありがとう。」

キュアシャインにお礼の言葉を述べた。

お礼を言われたキュアシャインは、涙を拭いながら顔を上げる。

「君のおかげで、少しスッキリしたよ。

見ず知らずの女の子に励まされるなんて、男としてカッコつかないけどさ。」

「えと・・・ごめん・・・なさい・・・。」

「はははっ冗談だよ。．．．君の言う通りだ。

もう一度、いや、もう何度だって頑張ってみるよ。」

「．．．はい。」

青年はそう言い残し、この場を立ち去っていった。

その光景を見たチェリーは、キュアシャイン、蛍の人物像を垣間見たように思えた。

誰かを助けたいという思いから勇気を出し、闇の牢獄に囚われた人を助ける為に、戦う覚悟を決めた蛍。

なぜ彼女がプリキュアに覚醒したのか、ほんの少しだけ分かったような気がした。

「チェリー。」

青年を見送った後、キュアブレイズが声をかけてきた。

「約束よ。一緒に帰りましょう。チェリー。」

キュアブレイズがそう呼びかける。

だがチェリーは、一つ心に決めたことがあった。

「．．．キュアブレイズ。」

私、しばらく蛍と一緒にいようと思う。」

「え？」

驚いて声を挙げたのは蛍の方だった。

「蛍が、プリキュアとして戦う決心をしてくれた。

だから私は、そんな蛍を全力で助けたい。

私には戦う力はないけど……まだ蛍に教えなければならないこと、話さなければならぬこと、沢山あるの。

だから私……蛍の力になりたい！……蛍、いいかな？」

「……わたしは、もんだいないよ。

チェリーちゃんがいつしよにいてくれると、心強いから。」

「蛍、ありがとう。」

キュアブレイズはチェリーの言葉を聞いた後、抱えていたチェリーを静かに手放した。

手放されたチェリーは、彼女の意をくみ、蛍の元へと飛んでいく。

「わかったわ。チェリー、その子のこと、ちゃんとサポートしなさい。」

「うん。」

「キュアシャイン、ダークネスと戦う覚悟をしたのなら、もう逃げることは許さないわよ。」

「うん……。あの、キュアブレイズ。このまえはたすけてくれて。」

だが蛍の言葉を待たずに、キュアブレイズはその場を飛び去った。

「あっキュアブレイズ。」

その様子を、チェリーは寂しげな表情で見送った。

「・・・蛍、改めて謝らせて。」

「ごめんなさい。嫌がるあなたを無理やり戦わせようとして。」

「・・・わつわたしこそごめんなさい・・・。」

たたかう勇気がなかったから、チェリーちゃんにむりをさせちゃって・・・。」

蛍が気に病むことはない為、本当は謝罪の言葉も受け取りたくなかったが、そう言ってもきつと納得してくれないだろう。

このままではお互いに謝り合戦が続きそうなので、チェリーは無言でその言葉を受け取った。

「それじゃあ、これからよろしくね。蛍。」

「こちらこそ、よろしくおねがいます。チェリーちゃん。」

陽が沈みかけ、夕焼けが空を焦がす頃、蛍とチェリーは静かに握手した。

それはチェリーが、蛍のパートナーとなったことを静かに物語っていた。

：

色のないモノクロの空間の中、リリスは肩を抱えていた。

体中から闇の力が抜け落ちていく。満身に力が入らず、近くの壁にもたれかかる。

容易に倒すことが出来る相手だったはずだ。

振る舞いは素人同然。ソルダークすらまともに相手を出来ない、キュアブレイズの足元にも及ばないほどの脆弱な戦士。

それが突然、強大な力を覚醒させた。

「くっ……うぐっ。」

力が削がれていくのが治まらない。あの浄化技を受けたせいだろう。

だが直撃を受けたのはソルダークだったはずだ。

自分はそれを掠めたに過ぎない。それでもこれだけの重傷だ。

もしも、あれが直撃していたら……。

「っ!?負けていた……あたしが、あんな脆いやつに……?」

その事実を認識した直後、リリスは胸に痛みを覚えた。

「キュアシャイン……」

焼かれるような黒い衝動がリリスの胸を焦がす。

「キュアシャイン。」

その名を反復する度に、炎が火力を増していく。

胸を焼く炎は徐々に電流へと変わり、リリスの全身を駆け巡る。

「キュアシャイン、キュアシャイン、キュアシャイン。」

やがて電流が脳に到達し、やつの声が、顔が、仕草が、次々と脳裏に焼き付いていく。

「キュアシャイン、キュアシャイン、キュアシャイン!!」

自分に何が起きているのか、リリスには理解できていなかった。

ただ一つわかることは、リリスの頭の中は今、キュアシャインのこと以外何もないということだけだ。

「キュアシャイン!!」

砕けた爪で空を薙ぐ。標的のない虚空に尾をぶつける。

「あなたは！あなただけは!!あたしが、あたしがああ!!」

再びキュアシャインの姿が、リリスの脳裏にフラッシュバックする。

「つ?!キュアシャイイイイン!!!」

胸に渦巻く初めての『感情』に駆られ、リリスは彼女の名を叫び続けた。

∴

次回予告

「これからよろしくね、螢。」

「よろしくね。チエリーちゃん。」

さっそくだけど、わたしはこれからなにをすればいいの？」

「まずは、残りの2人のプリキュアを探さないで。」

プリキュアが4人揃えば必ずダークネスを倒すことが出来る！」

「わかった。わたし、がんばってさがしてみようね！」

「なにになに？何の話をしてるん？」

「あつ、もりくぼさん。えつとね、プリキュアを」

「きやー！プリキュアの話をしちやダメー！」

「あつそうだった！」

「つてヌイグルミがしゃべったあああ！」

「はっ！」

次回！ホープライトプリキュア 第3話！

「電光石火！雷光の戦士、キュアスパーク！」

希望を胸に、がんばれ、わたし！

第3話

第3話・プロローグ

夢ノ宮市へようこそ！

そう大きく掲げられた看板を、一人の青年が通過した。

身長約180cm程度。ライトブルーを基調とした服装に短く切られた金髪。

「はいか。」

ようやくここまで辿りついた。眼前に拡がる都市を前に、青年は歓喜に震える。

だがここがゴールではない。スタート地点だ。

青年はある『探し物』を求めて、ここまで来たのだから。

「長旅で疲れたし、ひとまずは休憩とするか。」

だが焦って無理をしては元も子もない。

まずは体力の回復を図り、それから『探し物』の探索に当たるとしよう。

夢ノ宮市。情報によればこの都市は子供の夢を育み叶える場所とされているが、『大人』である自分の夢は叶えることが出来るのだろうか。

青年は首を横に振るった。大人は自分の手で夢を叶えてこそ大人だ。

全ては自分の手にかかっている。その思いを胸に青年は、夢ノ宮市へと足を踏み入れるのだった。

・
・
・

夜。 蛍が初めてキュアアシャインとして戦い、ダークネスの行動隊長リリスを退けた日の夜。

蛍の家に招かれたチェリーは、彼女から傷の手当てをしてもらい、夕飯の支度に取りかかる。蛍の姿を横で見ている。

蛍の話によれば、両親が共働きで帰りが遅いため、彼女が毎日母親に代わり家事全般を担っているようだ。

それにしても手慣れている。

チェリー自身も料理に多少の心得はあるが、蛍のそれは見るからに熟練の域に達していた。

「今日の（ご）はんはハンバーグにするんだ。」

「ハンバーグ?」

「んつとね、ひきにくを練ってつくりようりのことを、このせかいではハンバーグっていうの。」

「ふ〜ん。」

しばらくして蛭はハンバーグとやらの調理を終え、野菜を添えたお皿に盛り始めた。

綺麗に形作られたハンバーグからは香ばしい肉の匂いが立ち込め、チェリーは思わず喉を鳴らす。

「ひとくち、たべてみる?」

すると蛭から試食を薦められた。

妖精は人間と違い、基本的に食事をとる必要はないが味覚はある。

感性も人とそう違わないため、人間と同じ感覚で食事を味わうことは可能だ。

「じゃあ、一口だけ。」

お言葉に甘えてハンバーグを一口だけ試食する。

「パクッ。」

次の瞬間、チェリーに衝撃が走る。

この世界は自分たちの世界よりも科学技術の発展が目覚ましい分、食料の品質、鮮度も遥かに優れている。

そもそも素材となる野菜や肉の味が天と地ほど違うのだが、差し引いても蛍の料理の腕は確かなものだったのだ。

「くっつ!!?!」

そしてチエリーは余りの美味しさに自分でもこんな声出せるのか、とびつくりするくらい金の切り声をあげた。

その後両親が帰って来たので、チエリーは急いで蛍の寝室へと戻っていくのだった。

第3話・Aパート

電光石火！雷光の戦士、キュアスパーク！

それからしばらくして、夕食を終え、皿洗い諸々の家事を終えた蛭は、お風呂から上がり自室へと戻ってきた。

「そだつ。チェリーちゃん、ちよつとからだのサイズをはかってもいい？」

おもむろにメジャーを取り出す蛭。

「別にいいけど。」

何を始めるのだろうかという疑問を抱くチェリーを余所に、蛭はチェリーの体のを測った後、裁縫道具を一式取り出した。

「何か作るの？」

「えへへ、おたのしみに。」

言うや否や、蛭は布を切り取り綿を詰めあつという間に小型の掛布団を作りだした。

「わっ、すごい！」

「そんなことないよ。おおきくないし、むずかしくもないから。」

例えそうだとしても、ここまで短時間に作れるものだろうか？

「あとはこの小型のバスケットにわたをつめて、ぬのをかぶせれば、はい、チェリーちゃん専用のベッドのできあがりだよ。」

どうやら蛭は料理だけでなく裁縫も得意なようだ。その鮮やかな手腕にチェリーは驚く。

それと同時に嬉しさも込み上げて来た。怖がる蛭に戦うことをお願いしたのに、住む家を与えてくれただけでなく寝床まで自作してくれたのだから。

「蛭、ありがとう。」

「えへへ、どういたしまして。」

さっそく今日から使ってみることにした。半年ぶりのベッドは、蛭の優しさが込められていたこともあり、とても寝心地が良かった。

：

午前6時30分より少し前、チェリーは物音で目を覚ました。

部屋を見渡すと、蛍が制服に着替えているところだった。

「蛍……？」

「あつチエリーちゃん。ごめんなさい、おこしちゃって。」

「どうしたの？まだこんな時間なのに。」

確か蛍の学校は8時30分から始まると聞いた。学校まではここから徒歩で約20分程度。

食事と身支度の時間を考慮しても、今の時間に起床というのは早すぎる。

「えっとね、わたし、まいにちこのじかんにおきてるんだ。」

「え？」

「チエリーちゃんはまだゆっくりねてていいよ。」

おかーさんもおきてるから、へやからはあまりでちやダメだけどね。」

そう言つて、蛍は部屋を出ていった。

すっかり意識が覚醒してしまったチエリーは、身を包んでいた小さな掛布団を畳み始める。

「そういえば蛍、毎日家事をしてるって言つてたっけ？」

だからこんな早朝から起きたのだろうか？

気になったチエリーは、蛍の両親に見つからないように、蛍の一日を観察することに

した。

：

午前6時。

起床した螢は30分までに身だしなみを整え、制服に着替えてキッチンへと向かう。向かう途中、洗濯機のスイッチを入れる。

台所に着くと、既に母親の陽子が朝食の支度をしていた。

螢をそのまま大人にしたような、優しそうな雰囲気を持ち主。

どうやら螢は母親似のようだ。

陽子の隣に立った螢は、母の手伝いをしながら3人分のお弁当を作り始めた。

螢の両親は共働きの為、両親の分まで作っているのだろう。

それから30分ほどして、螢の父である健治がリビングへと訪れる。

螢曰く、家族の為に夜遅くまで頑張ってお仕事をする、とても素敵なお父さんとのこと。

尚、チェリーの私的な感想だが、夫婦そろって美男美女。

2人の血を引く蛸の容姿が、とても可愛らしいのも頷けるほどだ。

既に陽子は朝食の支度を終えており、3人揃ってリビングにつく。

「いただきます。」

家族3人でいただきますを合唱し、朝のニュースを見ながらの朝食が始まった。

時に談笑しながら朝食を取る一之瀬家。その平和な光景にチェリーは思わず綻ぶ。

20分ほどして朝食を取り終えた蛸は、食器を流し台へ置いた後、洗濯機へと向かった。

天気予報によると、今日は一日快晴、降水確率は5%とのこと。

絶好の天日干し日和の為、蛸は洗濯物を取り出した後、外へ干し始めた。

その間、陽子は3人分の食器を洗い終わり、健治は新聞紙を読み終えた。

7時30分。洗濯物を干し終えた蛸は、両親を見送る為、そのまま玄関へと向かった。

「それじゃあ、お父さんたちは仕事へ行くから、蛸も学校を頑張るなさい。」

「ありがと、おとーさん。」

「蛸、今日は早く帰れそうだから、一緒に晩御飯を作りましょ。」

「うん、おかーさん。ふたりとも、いつてらっしゃい。」

両親を見送った蛸は、そのまま自室へと戻っていった。

：

「ふう〜。」

朝の仕事を終えた蛍は、部屋につくなりベッドに座った。

時刻は午前7時35分。既に身支度は終えているため、後は家を出るだけ。

学校までの登校時間を考えると、家を出るのは約8時頃。

20分近く余った時間を、蛍は時に休息に、時に予習に使うことにしている。

「お疲れ様、蛍。」

「あつチエリーちゃん、ひよつとしてみてたの？」

「うん、蛍、あれを毎日続けてるの？」

「そうだよ。」

「大変だね。これから学校もあるのに。」

「そんなことないよ。もう何年もつづけてるから慣れちゃったし、わたしよりも、おとーさんとおかーさんのほうが、おしごとたいへんだもん。」

だからわたし、なるべくおとーさんとおかーさんのちかちかになりたいたんだ。」
そう語る蛍には一切の迷いがなかった。

本当に両親のことが大好きなのだろう。

親の力になりたいから、朝早起きして家事を手伝う。

簡単に言うが、それを毎日続けるのは生半可なことではない。

容姿や口調こそ幼い蛍だが、家事をこなす蛍の姿は、普段と違って大人びた印象を受けた。

「それにわたし、りょうりするの好きだから、ぜんぜん、たいへんってきがしないんだ。」
蛍は楽しそうにそう語る。

そういえば昨日は、絶品のハンバーグを調理し、あつという間に妖精用の寝具を一式作り出し、今朝も母親の朝食作りを手伝いながら、3人分のお弁当を準備し、洗濯物を干す時もシワを作ることなく手際よく干していた。

改めて振り返ると、蛍の家事スキルのレベルは非常に高い。

日々継続できることも含め、立派な能力だし特技である。

(全く、何が自分には何の取り柄もない、よ。)

得意げになれとまでは言わないが、ここまでのものを持っていて、自分に自信が持てないのは、少し勿体ない。

蛭はもう少し自分に自信を持つべきだと思うチェリーだった。

：

チェリーとしばらく談笑していると、時刻が8時を回りかけていた。

「あつそろそろ学校へいかなきゃ。」

蛭は立ち上がり、鞆を両手に持つ。

「いってらっしゃい、蛭。」

「うん。あつそだ、わたしが学校へいってるあいだ、チェリーちゃんはどうするの?」

「私は昨日と同じで、まだ見つからない仲間を探しに街に出るよ。」

「そっか、ほかの人にみつかからないように気をつけてね。」

喋るぬいぐるみが見つかったなんてことになっては、たちまち全国ニュースで報道されてしまう。

「その心配はないわ。私たち妖精には戦う力はないけど、いわゆる魔法みたいなものは使えるの。」

それを使えば、人間の姿に変身することだって出来るのよ。」

「え？・そうなの？」

「ええ、見ててね。えい！」

言うなり、チェリーの姿が煙に包まれた。驚いて目を閉じる蛍。僅かに間を置き目を開けると、少しづつ煙が晴れていった。

そして煙から人影が見え始め、その姿が映し出された瞬間、

「・・・へ？」

蛍は口を大きく開けたまま、目を丸くした。

「どろろ？・ちゃんとした人間の姿になれたでしょ？」

確かに人の姿だ。

紛れもなく人の姿だ。

そして聞こえてきたのはチェリーの声だ。

チェリーが人に変身したというのは疑いようがなかった。

だが問題はその容姿にあった。

自分より20cmは高そうな身長。

ピンクを基調としたセーラー服に赤いリボン。

少し赤みがかった茶髪のアストレートは腰の位置まで伸びている。

その容姿は、蛍の目から見れば立派な『おねーさん』だった。

「・・・？蛍、どうしたの？ひよつとして何かおかしなところでもある？」

おかしなところは何か一つない。ただし一つ疑問に思うことはある。

「チエツチエリーちゃん・・・そのすがたは・・・。」

「え？だから人の姿だって。」

あつ、見た目は私を人間年齢に換算させたの。

私、人間的には18歳くらいなんだって。

だからこの世界のジョシコーサー？ってというのが着ている服を参考にしたんだけど、

もしかして何か変だった？」

姿も服装も何らおかしくはない。

強いて言うなら女子高生の発音がカタゴトだったくらいだが、それ以上に、蛍の疑問を解決させた一言が頭の中から離れなかった。

「チエツチエリーちゃんって・・・。」

「蛍？」

「チエリーちゃんって、」

「・・・？」

「わたしより『年上』だったの〜!!？」

「・・・はい?」

この日一番の衝撃が蛍を襲った。

∴

大きさ20cm程度の可愛らしいウサギのぬいぐるみの姿をした妖精が実は自分よりも5つも年上だったという衝撃的事実が頭から抜け切れていないまま、蛍は夢ノ宮中学校へ辿りついた。

いけないいけない、今日は朝からやるべきことがあるのだ。

上手く気持ちを切り替えないと、また言いたいことが言えなくなる。

教室に入る前に、蛍はいつものおまじないをする。

よし、意を決して蛍は、教室へと入った。

「あつ、一之瀬。」

こちらに気づいた要が声をかけてくる。隣には雛子も座っていた。

蛍は自分の席につき、二人を正面から見据えた。

「あつあの……きのうはごめんなさい！」

「え？」

雛子が不思議そうな声をあげる。

「せつかく……いっしょにかえろうってきそつてくれたのに……」

わたし……にげだしちゃって……」

蛭は目を潤ませながら、2人の厚意を無駄にってしまったことを謝罪する。

そして深々と頭を下げながらも願うのだった。

また、一緒に帰ろうと誘ってほしいと。声をかけて欲しいと。

勝手な願いなのはわかってる。でも、もう絶対に逃げ出したりしないから。

すると、要の方から返事があつた。

「別に気にしてないよ、あれくらい。」

「え……？」

蛭は恐る恐る顔をあげた。

「私たちこそごめんなさい。転校初日で、不安なことも多かつたはずなのに。」

一之瀬ちゃんに無理させようとしちゃつて。」

「そつそんな……あやまらなきやいけないのは、わたしのほうです……」

「じゃつ、この話はもうおしまい！」

「一之瀬ちゃん、少しずつ、この学校に馴染んでいこ？」

2人の優しさが胸に染みる。蛍は、今度は嬉しさから泣きそうになった。「もく、そうしよんぼりしないの一之瀬。笑う門には福来るやで？」

要の言葉を聞きながら、蛍は深呼吸をする。

まだ1つ、2人に伝えたいことがあるのだ。

今なら、それを伝えられるかもしれない。

「あつ、あの！」

「一之瀬？」

「一之瀬ちゃん？」

突然大声を出した蛍に困惑する2人。

「その……。」

だが徐々に語尾が小さくなっていく。

あと少し、ほんの少しだけ勇気を出せば……。

蛍はリリンの言葉を頭に思い描き、おまじないをする。

ほたる。がんばってね。

「がんばれ、わたし……。」

胸に勇気を宿した蛍は、あと一步を踏み出した。

「ほたる！ほたるって！よんでください！」

蛍の声がクラスに響く。

クラスメート達が一斉にこちらを振り向くが、蛍はそのことを気にしていられなかった。

周囲からの注目を浴びた要は、ややバツの悪そうな顔をするが、やがて笑顔を見せ、「オツケー。わかったよ、蛍。」

蛍の頼みを受け入れてくれた。

「ほっほんとうですか……？」

「ああ、もちろん。」

「私からもよろしくね。蛍ちゃん。」

続いて雛子も同意する。

「っ！はい！」

嬉しきで感極まった蛍は、目に涙を浮かべながら満面の笑顔を見せた。

勇気を出して言つて良かった。

これでまた、2人と距離を縮められた気がする。

このまま一歩ずつ前進していけば、そう遠くない内に友達になれるかもしれない。そう思ったのも束の間、

「じゃあや。」

要から思わぬ提案がふつてきた。

「ウチのこと、要つてよんでな？」

「え……？」

この展開は予想外、いやむしろなぜ予想できなかつたのか。

お互い名字で呼びあつていたもの同士が名前で呼んでくれと頼めば、相手からも同じことを頼まれるのが自然だろう。

「はっはい！ええと……あの……。」

ダメだ弱気になつてはいけない。

ここで名前を呼ぶことが出来れば、一気に距離を縮めることが出来る。

もしかしたら今日にでも、2人と友達になれるかもしれないのだ。

「その……か……。」

だがなかなか声が出てくれない。

そうだ勇気のおまじないを……と思つたが既に胸に両手を当てていた。

「……蛭？」

蛍は2人に名前で呼んでほしいと頼んだ時、持てる勇気を全て出し切ってしまった。

そこから間を置かず、立て続けに勇気を振り絞ることは出来なかったのだ。

「……うう……ごめんなさい……。」

ようやく出てきたのは謝罪の言葉だった。

ほんの少し前とは打って変わって、申し訳なさそうな表情で涙を浮かべる。

「いや、謝ることもないけど……。」

要はそんな蛍の落差に困惑する。

「要、蛍ちゃんに無理強いしないの。」

「え？ウチのせい？」

「蛍ちゃん。」

「はっはい……。」

「大丈夫、私たちはクラスメートなもの。」

いつでもこの学校で会うことができるから。

蛍ちゃんの気持ちに整理がつくまで、私たち待ってるからね。」

雛子が優しく励ましてくれた。

「まっウチとしては早く慣れてほしいけどな。」

「要。」

要の言葉を雛子が注意する。

だが要もまた、こちらに笑顔を向けてくれたので、彼女なりに励ましてくれているの
だろう。

「ただし、これだけは頑張つてほしいかな？」

雛子は一つだけ蛍にお願いをする。

「敬語は禁止。」

「えと・・・はい・・・じゃなくて、うん。」

それなら今からでも頑張ることが出来そうだ。

優しい2人の気持ちに応えるためにも、いつか勇気を出して名前でも呼べるようにしよう。

もしもその時が来たら・・・。

蛍は、そう遠くないであろう未来に期待を寄せる。

(すこしずつ、ほんのすこしずつでいいから、勇気をだして、一歩ずつすすんでいこう。)
 リリンのおまじないを胸に、蛍はそう決意するのだった。

…

その日の放課後。

帰り支度を始めた蛭に、要から声がかかった。

「蛭、部活動は何するか決めてるん？」

「え？」

「もし決まってるなら、一緒にバスケやらない？ 新入部員、絶賛募集中やねん。」
運動が大の苦手な蛭は、仮に部活をやるとしても運動部には入らないつもりだ。

だがそれとは別に、蛭には部活動が出来ない理由があった。

「えと・・・ごめんさい。わたし、ぶかつはやらないってきめてるの。」

「なんで？」

「わたしのおうち、おかーさんもおとーさんもおしごとしてるから、おうちのこと、わたしがぜんぶやってるんだ。」

きょうも、はやくかえっておゆうはんのしたく、しなきやいけないから、ぶかつはで
きないの。」

最初に始めたのはいつからだろうか。

もう随分と長く家事全般を担っている気がする。

こんな性格の為友達のない螢は、幼いころから両親に心配をかけてばかりだった。家族の為に夜遅くまで仕事をしている両親に、自分のせいで迷惑かけてしまうことがとても申し訳なかった。

だからせめて、家にいる時くらい両親の負担を減らそうと、家事全般を手伝うようにしたのだ。

「へへ。おうちのことぜんぶって、毎日掃除したり選択したり夕飯作ってるの？」

「うん。」

「偉い。要とは大違いね。」

「そんな、エラくなんてないよ……。」

「謙遜しちゃって。」

謙遜でもなんでもない。

本当にエライ子というのは、そもそも両親に心配をかけたリなんかしないものだ。それに料理が好きな螢にとっては、半分は趣味でやっているようなものだ。

「つたく、いちいちウチを引き合いに出すなつての。つか、雛子も人のこと言えんの？」
「私は時々、おばあちゃんのお手伝いしてるもん。」

でもそうゆうことなら、一緒に委員会のお仕事も出来なさそうだね。」

「ふじたさんは、なんの委員会にはいつてるの？」

「図書委員。こいつ小学校の頃から本の虫だから。」

「こら、なんで要が答えるのよ。」

売り言葉に買い言葉。

赤の他人なら喧嘩になりそうなものだが、言葉のやり取りとは裏腹に、2人からは険悪な雰囲気は感じられなかった。

喧嘩するほど仲がいい。親しい間柄だからこそ出来る、遠慮のないやり取りなのだろう。

蛭はそんな2人の関係が、少し羨ましく思えた。

「それじゃ、ウチは部活があるから。蛭、また明日な。」

「うっうん。またね。」

要は活き活きとした表情で、教室を後にした。

「・・・もりくぼさん。たのしそう。」

「要はスポーツバカだからね。」

スポーツバカとはひどい言われようだが、それだけ要にとって体を動かすことは楽しくて仕方がないのだろう。

最もそれだけではないようにも感じられた。

そんな蛍の様子を雛子は興味深そうに観察する。

「・・・ねえ蛍ちゃん。」

お家のことをするために、今すぐ帰らなきゃならいけなかつたりする？」

「え・・・？そんなことないけど・・・。」

すこしくらいは、よりみちできる時間、あるよ。」

「だつたらさ、要の部活、少し見学していかない？」

「え・・・でもそれ・・・メーワクじゃないかな・・・？」

「気にしなくていいわよ。私も時々見学に行つてるし。」

「・・・じゃあ・・・ちよつとだけ・・・。」

「決まりね。ついてきて。」

雛子の後を追ひ、蛍は要の部活動を見学することになったのだった。

：

夢ノ宮中学校の体育館では、男子バスケット部、女子バスケット部がそれぞれ部活動に励んで

いた。

か。 体育館の隅でドリブルの練習やダッシュをしているのは、今年入った新入部員だろうか。

男女入り混じった体育館は、想像以上に賑やかだった。

蛍と雛子はグラウンドを訪れ、女子バスケット部が見学できる位置から体育館内の様子を眺める。

見ると、女子バスケット部の2年と3年が、2チームに別れて練習試合をしているところだった。

「要ー」

チームメイトから要にボールが渡る。・

要はボールをキープしながら、相手のディフェンスと睨み合う。

そして一瞬の隙を突き、素早く相手を追い抜いたのだ。

「わっ、はやい。」

蛍はその速さに驚きの声をあげた。

要はそのまま相手のコートまでボールを運ぶ。

相手ゴール下で守りを固めるディフェンス陣と再び睨み合いになった要だが、追い抜こうという素振りを見せて相手の気を引いた後、味方へパスを送った。

パスを受けた味方は、ディフェンスが要に気を引かれている隙にシュートを決める。その次も要は、素早い身のこなしで相手のボールを奪い取りターンを取り返した。先ほどのパスを警戒した相手チームは、今度はチームメイトに対しての当たりを強くする。

だが自身への警戒が弱まったと見た要は、今度は自らゴールまで切り込んだ。

相手のディフェンスを素早く切り抜けた要は、そのままシュートを決めてみせた。

電光石火

そんな単語が蛍の頭に思い浮かぶ。それほど要の動きは、素早くそして鮮やかだった。

「あのスピードが要の持ち味。要の瞬発力は先輩たちを凌いでチーム1位よ。」

そう語る雛子の様子は少し誇らしげだった。蛍は改めて試合中の要の姿を見る。

コート上を駆け回る要の姿はとても楽しそうで、活気に満ちていた。

「要のやつ。進級して一層気合が入ってるわね。」

「そうなの？」

「去年の1年間はベンチウオーマーだったからね。」

今年こそはスターティングメンバーの座を勝ち取ってやるって言ってたの。

一応去年の公式試合も、途中交代で何度か出場経験はあったのだけど、要はそれじゃ

納得できなかったみたいよ。」

一年生の時点で試合経験があること自体凄いことだと思っただが、要の向上心はそれを許さなかったようだ。

それだけ要は、バスケットというスポーツに対して真剣に向かい合い、取り組んでいくのだろう。

「もりくぼさんは、バスケットが大好きなんだね。」

「ええ。小さいころからずっと、続けて来たスポーツだから。」

真摯にバスケットに打ち込む要の姿勢に、蛍は感嘆した表情で眺めていた。だがそんな要の活躍も、長くは続かなかった。

要の様子を静観していた相手チームの選手が、静かにボールを構え始めた。

「あちゃあ……。」

雛子の口からため息のような言葉が漏れる。

何が起こるのだろうか？と蛍が疑問に思ったのも束の間、試合が再開された直後、その相手は一瞬の隙をついて要のボールを奪い取った。

「しまった。」

要は自分のコートへ先回りし、ディフェンスの態勢に移ろうとするが、相手はそれを許さず、巧みなドリブルでゴール下まで辿りつきシュートを決めた。

「理沙が本気を出してきた。皆警戒して。

要、理沙のことは任せるよ。」

「はいよっ。」

同チームの3年が、要たちに声をかける。理沙と呼ばれた生徒の相手を任された要だが、その後もボールを奪われる、ディフェンスを突破される展開が続いた。

「あのひと……すごい。」

たった1人の選手が本気を出ただけで、試合が大きく傾き始めた。

そんな蛍の様子を見ながら、雛子は相手の選手について説明する。

「竹田 理沙。私たちと同学年で、入った当時から3年生を含めた部員の中で一番で上手くて、去年、1年生の中で唯一スターティングメンバーに選ばれたの。」

名実ともに、夢ノ宮中学女子バスケット部のエースプレイヤーよ。」

身長は要よりも高い。170cm近くはありそうだ。

長い黒髪をポニーテールでまとめしており、凜とした表情には静かな闘志が宿っているかのようなのだ。

先ほどの話によれば、要は去年スタメンには選ばれなかった。

だが理沙は選ばれた。

同学年に自分が望んでいたものを持つものがあるというのは、どんな気持ちなのだろう

うか。

今の蛍には想像出来なかった。

「もりくぼさん……。」

蛍が要の方へ眼をやると、先ほどまで楽し気にプレイしていた時とは表情が変わっていった。

鋭い目つきで理沙を睨み付けている。その視線から、理沙への対抗意識が見え隠れしていた。

だが要は、傾いた試合の流れを戻すことが出来ないまま、試合終了の笛が鳴った。

序盤、要を中心として優勢な状況を作ることが出来たが、後半、理沙の活躍によって全て巻き返されてしまったのだった。

「……。」

「ドンマイドンマイ。」

要で止めることが出来ないのなら、誰にもあの子を止められないんだから。」

「そうだよ要。要のおかげでここまで粘れたんだから。」

先輩やチームメイトから励ましの言葉が飛んでくる。

だが要は、悔しさを表情から隠すことが出来なかった。

そんな要の様子を、蛍は沈痛な思いで見っていた。

「……そろそろ帰ろっか？」

すると雛子から優しく声がかかった。

「……うん。」

2人はグラウンドを後にする。

校門まで来た2人だが、雛子はしばらく図書館で本を読むと言うので、ここで別れることになった。

「それじゃ、また明日ね。」

あつ要のことは気にしなくていいから。あれくらいのこと日常茶飯事だし。」

「え……?」

「要は負けず嫌いで、理沙ちゃんへ強い対抗心を持つてるからね。」

だからいつも、勝負を挑んでは負けるを繰り返しているの。」

その言葉を聞いて、蛍は逆に驚きを受けた。

要は部活動をする度に、あのような悔しい思いをしているのだろうか。

雛子と別れた蛍はそのまま真っ直ぐ家に向かった。

だがその帰り道、要が試合後に浮かべた表情が、頭から離れることはなかった。

…

要が部活を終え正面玄関へ向かうと、2年1組の下駄箱の前に雛子が立っていた。

「よっ雛子。まゝた待ち伏せか?」

「人聞きの悪い。いつも言ってるでしょ?」

図書館で本を読んで帰ろうとしたら、たまたま要の部活が終わる時間と重なっただけよ。」

それで騙せるだなんて自分でも思っていないせに、何で素直に一緒に帰ろうと言えないのか。

要に部活がある日は、雛子は時々、図書館で時間を潰して要の帰宅時間に合わせる日がある。

そして雑談と口喧嘩を交わしながら、それぞれの家に帰るのが日課だった。

だが今日の雛子はいつもと様子が違った。

そして長いこと一緒にいる経験から、雛子から何か大切な話しがあるのだと分かった。

ついでに言うと、要には話したい内容も大体想像がついていた。

学校を後にした2人は、いつものように並んで下校する。

そしてしばし無言の間が続いたが、雛子の方からようやく話を切り出してきた。

「蛍ちゃんのことだけけど。」

(ドンピシャだ。)

「あまり要の方からグイグイいつちやダメよ?」

そうでもなくても、要は強引などころがあるんだから。」

グイグイいくなどは無理を言ってくれる。第一なぜダメなのかが要にはわからなかった。

要は自分なりに蛍の心情を察しているつもりだ。そしてあの子の思いを理解するならば、他の子と同じように接するな、というは矛盾していると思えない。

「蛍ちゃんの方から歩み寄ってくれるのを待ちなさい。いいわね?」

念を押す雛子だが、物言いに反して口調は穏やかだった。

自分の思いにも理解を示してくれているからだろう。

だが同時に納得ができないことも事実だ。

あちらから距離を縮めて来たかと思えば、こちらから近づけば離される。

あちらの思いを理解できても、こちらから行動を起こしてはいけない。

押せばいいのか引けばいいのか。

曖昧な距離感を保ち続けなければならぬ今の状況は、思いのままに人と接することを良しとする要にとつてとても窮屈だった。

「・・・はあく、めんどくさい。」

思わず本音を零す要。

「こらっ！ そんな言い方しないの。」

さすがにこれには雛子も語気を強くして注意するが、要は今更、雛子を相手に上辺を取り繕うつもりはなかった。

思いのままの本音を雛子に打ち明ける。

「いやだつてさ。雛子もわかるやろ？ ウチはとつくに・・・。」

だが言い終わる前に、雛子の人差し指が要の唇に触れた。

「ストツプ。それ以上は言つてはダメよ。」

要が何を言おうとしたのか悟った雛子は、強引に言葉を遮つてきた。

そこから先の言葉は、蛍から直接聞かない限りは口にしてはいけないということか。

「・・・蛍ちゃん、頑張っているんだよ？」

雛子が諭すように話す。だが要もそれくらいは承知だ。

「・・・それはわかるけどさ。」

蛍は相当、臆病で人見知りも強い性格だ。昨日と今日見ただけで一目瞭然である。

そんな蛍が頑張つて自分を奮わせ、持てる勇気を振り絞つて話しかけてきているのだ。

そんな蛍の力になりたいと、要は心から思っている。

だからこそ多少面倒とは思つても、蛍のことを見捨てるつもりはなかった。

最も、要が蛍の力になりたいと思う理由はもつとシンプルなのだが、今はその理由は言わせてもらえないようだ。

「だから、私たちはあの子のこと、見守つてあげよう？」

いつかあの子の口から、要の言いたい言葉が聞けるまで。ね？」

まるで子供を見守る母親のようだ。

蛍を慈しむような雛子の言葉を聞いて、要は白旗をあげることにした。

こうなつた以上は雛子に任せよう。

人付き合いに頭を使うタイプでない自分では、事態を引つ掻きまわしてしまふだろうが、雛子ならその心配は不要だ。

思いのままに人と接することが出来ないのは、要にとつては歯がゆいものだが。

「大丈夫よ。要の良いところは、ここを乗り越えた先に輝くから。」

そんな歯がゆさが表情に出ていたのだろうか、雛子が珍しく自分を褒める言葉を向ける。

全てを見透かされているかのような雛子の対応に、敵わないと思う要だった。

：

モノクロの世界の中、リリスは自分の状態を確かめていた。

「まだ、回復できてないのね。」

キュアシャインとの戦いで受けた傷の治りが遅い。恐らく浄化技のせいだろう。

プリキュアの浄化技は、絶望の闇の化身であるソルダークを消滅させることから、闇の力を打ち消する特性があると学んだ。

リリスはソルダークと違い肉体はあるが、有する闇の力は、身体能力や自然治癒力の強化など、様々な方面に働きかける。

だから浄化技の余波を受け、内包する闇の力を失った今は、普段の能力を行使することが出来ないのだろう。

こうなれば、失った力が戻るのを待つしかない。

ダークネスが根城としているこのモノクロの世界は、過去に闇の牢獄へと囚われた世

界の成れの果てだ。空間は絶望の闇で満ち溢れている。

力の補給には困らないが、それと合わせて肉体の回復まで待つとなると、まだしばらくは前線に復帰できないだろう。

「キュアシャイン……。」

どれだけその名を呼んだだろう。

今すぐにでもやつつ元へ向かいたいのに、出来ないという現状がリリスの胸を焦がす。

その時、リリスは背後から一つの気配を察した。

「随分手酷くやられたようだな。」

「……サブナック。なぜここに？」

リリスが名を呼びながら振り向くと、そこには2mを軽く超えた大男が立っていた。

外見は30代後半くらいの男性。

だが黒く光沢を帯びた皮膚と、全身に広がる赤のタトウのような文様は、一見しただけで彼が人外であることを伝えている。

逆立った白髪。

両肩、両肘には赤色の角が生え、その両手はガントレットと同化していた。

「貴様が任された世界にプリキュアが現れ、貴様が敗北したと聞いてな。」

招集命令を受けてここに来たのだ。」

「招集命令？」

リリスを含め、この辺り一帯のエリアの侵略を担当する行動隊長は3人いる。

サブナックは同じエリア内にある、別の世界の侵略を任されていたはずだが、プリキュア出現と共に招集命令が下されたようだ。

ということとは、この場にはいないもう1人の行動隊長もいずれ現れるのだろうか？

「その様子では、まだ傷は癒えていないようだな。ならば次は俺が行かせてもらうぞ。」

「何ですって……。」

まさか自分よりも先にプリキュアを倒すつもりか。

そう思った時、リリスは強い反発心を抱いた。

キュアブレイズはどうでもいいが、キュアシャインだけは自分の手で……。

「何か問題でも？」

だがサブナックのその言葉を聞き、リリスは落ち着きを取り戻す。

プリキュアはこの先も計画の障害となるものだ。

早々に排除しなければならない。

ならば誰がそれを担うかなど関係のないことだ。

出来るものが実行すればいい。

特定のモノに対して個人が執着するなど、作戦の効率を妨げるだけだ。

そう、自分がキュアシャインの排除に固執する必要などない。

「……いいえ、何でもないわ。」

その言葉を聞いたサブナツクは、リリースを一瞥した後はその場を離れる。

「伝説の戦士プリキュアか。面白くなりそうだ。」

その言葉とは裏腹に、サブナツクの表情に笑みはなかった。

第3話・Bパート

蛭が夢ノ宮市に引越して来てから、最初の一週間が経過した。

今日は休日。蛭はこの時間を使い、チェリーからプリキュアに関する話を聞いていた。

「えっと、ダークネスたちもつ、やみのちからが、ぜつぼうのやみつてよばれていて、わたしたちプリキュアのもつ、ひかりのちからが、きぼうのひかり・・・と。」

「そう。希望の光には、絶望の闇を打ち消す特性がある。」

だからプリキュアは、絶望の闇から創りだされたソルダークを倒すことができるのよ。」

「えっと、きぼうのひかりは、ぜつぼうのやみをうちけす・・・。」

蛭はチェリーから教えてもらった内容を、逐一メモにまとめていた。

それにしても希望の光か。

奇しくもそれは、自分が変身するキュアシャインの二つ名にも宛がわれている言葉だ。

「よし、今日はここまでかしら。最後に、伝説の一文を復唱してみて。」

「うっうん、えと・・・」

黒きやみ、そらを覆わんとひろがりしとき、4つのひかり、やみをてらすべくだいちにおりる。

其の名はプリキュア、なんじはせかいのきぼうなり。

それから・・・えと、

4つのひかりがつどいしとき、おおいなる奇跡がおとずれん。」

「グッド。それじゃつ、休憩しましょうか？」

「うん。」

今日の抗議を終えた蛭は、ベッドの上で今日までの日を振り返つてみた。

プリキュアへの覚醒、ダークネスとの闘い、そして今隣にいる妖精との出会い。

夢なのではないかと疑いたくなる出来事の数々だ。

だが悪いことばかりではなかった。

新しい学校では、自分に親身になってくれる素敵なクラスメートと出会えたし、プリキュアとしての戦いがなければ、チエリーと出会うことはなかった。

そんな多くの出会いを経験したこの一週間で、蛭にとつて最も大切な出来事。

全てのきつかけとなつてくれた、一歩踏み出す勇気のおまじない。

彼女からそれを教えてもらえなければ、蛭はこの一週間、これまでと同じことを繰り返す

返していただろう。

あのおまじないのおかげで勇気を出せたから、蛭は今、長年の夢に手を伸ばしかけて
いる。

「……いまごろ、どうしてるのかな……。」

蛭は、リリンとあの時交わした会話を思い出す。

リリンちゃん。今日はありがとう。

えと……またこんど、おはなし、できたら……

うん。いつでもいいよ。

あたし、普段はこの辺にいるから。

「蛭、どうしたの?」

隣にいるチェリーが怪訝そうに声をかける。

「ううん。なんでもない。」

蛭は適当なことを言っってはぐらかした。

確かにリリンは、普段は噴水広場の近くにいると言っていた。

今日はちょうど休日だし、もしかしたら会えるかもしれない。

「ねえチェリーちゃん。すこしおでかけしない？」

蛍はチェリーを誘って、噴水広場へ向かうことにした。

：

噴水広場を訪れた蛍は、あの時リリンと一緒に腰掛けたベンチに座った。

うくん、と背伸びをした後、天を仰いでみる。今日は雲一つない快晴だ。

渡り鳥が気持ちよさそうに空を飛んでいる。

「キレイなところね。」

ぬいぐるみの振りをしているチェリーが、蛍にしか聞こえないように小声で囁く。

噴水からは心地よい水の音が聞こえ、隣の原っぱでは子供達が鬼ごっこをしていた。

近場に見える屋台には、人々が屋台の前に列を作り、外に並ぶテーブルで食事を談笑している。

「うん……。」

あの時は景色を楽しむ余裕がなかったが、とても綺麗で平和な場所だ。

ひとしきり、その平和な光景を堪能した蛭は、改めて周囲を見渡す。

だがリリンの姿はどこにも見当たらなかった。

「……そう、うまくはみつからないか。」

蛭は想像以上に落胆する自分に驚く。よっぽどリリンに会いたかったようだ。

せめて連絡先だけでも教えてもらえばよかったと、今更ながらに後悔する。

だが落胆したところで仕方がない。

あの時リリンは、普段はここにいると言ってくれた。

それなら明日から、出来るだけ毎日ここを訪れてみよう。

その内また、リリンと会えるかもしれないから。

噴水広場を後にした蛭は、その後しばらくチェリーの仲間を探すのを手伝い、家に帰った。

そして次の日、再び噴水広場へ訪れてみるが、リリンの姿を見つけることは出来なかった。

：

翌週、蛍はいつも通り登校し、教室へと訪れた。

「おっはよー蛍。」

「蛍ちゃん、おはよう。」

要と雛子から声がかかる。

「おっおはよう、もりくぼさん、ふじたさん。」

転校してから一週間が経ち、蛍も少しずつではあるが、新しい学校に慣れてきた。

特に要と雛子に対しては、普通に会話が出来ようになっていた。

まだ少しだけ緊張するが、転校初日、会話すら出来なかったことを思えば大きな進歩である。

とはいえ、2人相手でも、まだ目を合わせたまま話すことは出来ず、名前でも呼べていない。

2人以外の生徒となれば、まだ会話できる自信もなかった。

それでも一歩ずつではあるが、確実に前へ進めている。

今日もまた、一歩ずつ踏み出していこうと蛍は胸に誓うのだった。

…

その日の放課後、蛍は部活動へ行く準備をする要を見る。

「もつもりくぼさん、きょうもぶかつ?」

「ああつ、今年こそは絶対!スタメンの座を勝ち取るからな!」

楽し気に語る要だが、蛍は先週、要の部活動を見学していた時に見た悔し気な表情を思い出した。

「蛍、どうかしたの?」

急に黙り込んでしまった自分を見て、要が声をかけてきた。

言っているのか迷ったが、要がなぜ悔しい思いをしてまで部活を続けるのか理由が知りたかった蛍は、その疑問をぶつけることにしたのだ。

「…もりくぼさん、ぶかつイヤだっておもったこと…ない?」

「なに、いきなり?」

「えと…その…かてればうれしいかもしれないけど…」

まけたりしたら…イヤ…じゃない?」

言いながら蛍は徐々に要から視線を反らし、頭を下に向けていった。

ほんの一度、要の部活動を見学した程度で聞いてよかったのか、少しずつ後悔し始める。

だが、

「・・・ああ、ひよつとして先週見学した時の練習試合、気にしてる?」

蛍は驚いて顔を上げた。

「えっ? きづいてたの?」

「あの場所はよく雛子が見学に来るからね。」

自然と目が行っちゃうのよ。あの時は蛍と一緒にいたから、ちよつと驚いたけど。」

黙って見学していたことを申し訳なく思う蛍だったが、

要が状況を理解しているとなれば、今更話題を止めるわけにもいかなかった。

「・・・あのときもりくぼさん、すごく、くやしそうなお・・・してたから・・・。」

どんどん歯切れが悪くなる。

最後の方などほとんど眩きにしかならなかったが、要にはちゃんと聞こえていたようだ。

「だからイヤだと思ったことがないかって?」

「・・・うん。」

「ないね。」

「え?」

あまりにも迷いのない即答に、蛍は驚く。

「そりゃ、負けたら悔しいって思うし、勝てない自分に腹立つよ?」

それでも部活を、うん、負けるってことを、イヤだと思つたことはないね。」

「そう・・・なの?」

蛍にはその言葉がわからなかった。

悔しいし腹が立つというのは、負けてイヤな思いをしたということじゃないのか?

それなのに負けることはイヤじゃないとは、どうゆうことだろうか?

「うん、負けは勝つための第一歩、だからね。」

「かつ・・・ための?」

「うくん、例えば蛍の場合、毎日ご飯を作ったり、家の掃除してるんだよね?」

「え?そうだけ?」

唐突に自分の家事の話題を振られて戸惑う蛍。

「じゃあさ、今までにご飯作ってる時、魚焦がしちゃったとか、掃除の時、綺麗に出来なかつた、とか思つたことない?」

そんな時、もつと美味しく作れるはずだったのに、シクシク!とか、なんでもつとうまく出来ないんだわたしは! ムツキー!とか、悔しかったり、自分に腹立つたりしなかつ

た？」

やや表現がオーバーだが、そのくらいのことは家事を長年続けていれば、誰しもが思うことだろう。

「あるけど・・・それがどうして・・・あつ、」

だが虫はその言葉に、要の言いたいことを理解することが出来た。

「そうゆうこと。その後、次はもつと上手くやってやるって、思えるようになったでしょ？」

勝負に負けるって、そうゆうことだと思ふの。

だからウチは、負けることはイヤじゃないよ。それは自分の成長に繋がるから。」

「でも、わたしのは家事だから、もりくぼさんとはちが、」

「違わないよ何も。家事だろうがスポーツだろうが、悔しい思いしたら、次はもつと上手くなろうって気持ちは同じ。」

それに対する心構えに違いなんてないよ。」

「・・・だから、悔しくてもイヤにならない・・・？」

「そつ。つつても、勝った方が気持ちいいし、楽しいことに違いはないけどね。」

そして要は満面の笑顔で語る。

「勝負は、勝てば嬉しくて楽しい。負けたら悔しくて楽しいってね。」

例え悔しい思いをすることになっても、それは自分の成長に繋がる。

だから楽しむことが出来る。要のバスケットに対する姿勢は、どこまでも前向きなのだ。

「じゃつウチは部活にいくね。蛍、また明日、」

「あいつ！」

「なっなに？急に大声出して。」

蛍が抱いていた疑問は、要の答えで解決出来た。

だが蛍は、お礼よりもまず、どうしても要に伝えたい言葉があった。

「……がんばって。わたし、おうえんしてるから。」

「……うん、ありがと。」

蛍からの声援を受け取った要は、はにかむような笑顔を見せて部活動へと向かうのだった。

：

蛍は帰り道の中、要の言葉を頭に思い浮かべた。

勝負は勝てば楽しい、負けても楽しい。

悔しいという思いさえもバネとし、さらに上へと飛んでいく。

強い心の持ち主だと、蛍は思った。

「そういえば・・・ひとのこころをすぐいって、おもったことって、あったっけ?」

ふと、蛍はそんな疑問を抱いた。

運動の出来る人、勉強の出来る人。

これまで能力面で優れた人達を見て、凄いと思ったことはあったけど、心についてはどうだったろうか?

答えは簡単に出てきた。あるわけがないのだ。

その人と話すこと以外に、相手の内面を知る術はない。

要から心の強さを教えてもらえたということは、人と踏み入った話しが出来るようになったと証拠だ。

先ほど要と交わした会話は、蛍にとっては大きな進歩となったのだ。

「また・・・一步すすめたかな。」

確かな前進を感じる蛍。そして蛍にとつての収穫はそれだけではなかった。

「わたしも、もつとがんばらないと。もりくぼさんのように。」

要の心の強さは、蛍の心にも良い影響を与えたのだ。

彼女のようによくありたい。そんな新たな決意を胸に秘める蛍。だがその時、蛍の全身に悪寒が走った。

「っ!?!……いまのつて!」

全身がザワつく。心底から冷え込む寒気が襲う。

間違いない。先週、感じたのと同じ。

「蛍!」

すると人間の姿をしたチエリーが姿を見せた。

だが周りを見渡しても、チエリー以外の人影が一切見られない。

チエリーは妖精の姿へと戻ってから、こちらに走りよつて来た。

「チエリーちゃん!これつて!」

「ええっダークネスよ!」

チエリーの言葉で、ダークネスが再び現れたことを確信する。

その時、

また戦うつもり?

頭の中に、自分の声が響いた。

いい加減に諦めたら？

そう何度も上手くいくはずがない。

強がったって、どうせ最後には逃げ出すんでしょ？

だが蛍はだんだん分かってきたことがある。

頭に声が響くのは迷っている証拠だ。

蛍はまだ戦うことに恐怖を感じている。

(ほんとうに……どうしようもないくらい臆病だな、わたしって。

……だけど、いつまでもこわがってばかりいられないの！)

そんな恐怖、勇気を出して払ってしまえばいい。蛍は勇気のおまじないを取る。

(だいじょうぶ……さつき、もりくぼさんのつよさをすこしだけ、わけてもらったから
！)

何度だって聞こえてくればいい。その度に全部追いかけてやる。

「がんばれ！わたし！」

蛍から光が発し、上空にパクトが出現する。

蛍はその手にパクトを取った。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

パクトから放たれる光が、蛍を包み込む。

「世界を照らす、希望の光！キュアシャイン！」

キュアシャインへと変身した蛍は、チェリーと共に闇の波動を追った。

：

要は部活動へ向かう途中、蛍との会話を思い出した。

「ちよつと、カッコつけすぎたかな。」

蛍に話した内容には一点だけ嘘があった。いや、嘘というほどではない。

現に今はそんなことは思っていない。

今は、だが。

「イヤだと思つたことはない。じゃなくて、イヤだと思つていた、なんだよね……。」

元々要は、負けることが嫌いだった。

負けるということは弱いことの証だと思つていたからだ。

だから弱いというレッテルを貼られたくなかった要は、負けたくない一心で練習を続けてきた。

だけど要は、大きな壁にぶち当たってしまった。バスケの天才、竹田 理沙という名の壁に。

理沙とは、小学生の頃に所属していた、ジュニアバスケクラブから一緒である。付き合いの長さだけなら、雛子よりも上だ。

当時から理沙のバスケは、上級生を圧倒し、大人から将来有望と一目置かれるレベルだった。

そんな理沙は、一人だけ専属のコーチを付けられ、特別コースの練習を受けていた。だが理沙にだって負けていないと勝手に思っていた要は、彼女が妬ましかった。

理沙だけが特別扱いされていることが許せず、彼女への対抗心を燃やし出したのだ。だがそんな身の程を知らない、文字通り子供だった要は、理沙に勝負を挑んでは完膚無きにまで叩きのめされる、というのを繰り返し返していった。

そして、その内自分に自信を無くしていき、ついにはバスケを辞めようとさえ考えたのだ。

実際一時期、バスケから遠のいたことがあった。

だけどバスケをやらなくなり、手持無沙汰になった要は、ある日、兄に2人でバスケ

をしようと誘われたのだ。

久しぶりに行った2人だけのバスケットの中で要は改めて、自分はバスケットが好きなのだ
と確信した。

それでも負けるのはイヤだから、どうすれば理沙に勝てるかを真剣に考えるようになつたのだ。

そして理沙に勝負を挑んでは負け、負けた内容を振り返り、自分の改善点を探していく内に、要は勝つための結論を出すことが出来た。

それが負け続けることだった。

負ける度に改善点を探し、克服し、また負けたら新たな改善点を見つけて克服する。

そして負けを繰り返していく中で、確かに成長していく自分を実感した時、要は、負けることさえも楽しめるようになったのだ。

「とはいえ、負けが続くとさすがにへこむけどねえ。」

実際のところ、それで理沙との差は縮まったかと言えばそんなことはない。

それもそのはず。理沙だって成長しているからだ。

要は理沙ほど向上心に溢れる人を知らない。

現状の自分に決して満足せず、飽くなき鍛錬を積み重ねていくのが理沙だ。だから理沙との差は縮まるどころか、昔よりも離されているかもしれない。

それでも、今更立ち止まるわけにはいかなかった。
自分を応援してくれる蛍の為にも。

「がんばって・・・か。」

あの子の『がんばって』を思い出す。

不思議なことに、あの時の蛍の応援は、要の頭にでなく心に直接響いたのだ。

蛍は自分の感情を隠すことが苦手だ。

不安に思う気持ち、怖いと思う気持ち、そして最近見せるようになった、嬉しいと思
う気持ち。

その全てが彼女の顔や態度、雰囲気を通じてありありと伝わってくる。

そんな外面を取り繕うことが出来ない蛍だからこそ、がんばって、と言う言葉が要の
心の隅にまで浸透したのだ。

蛍の声援のおかげで、今日の要は一段と、気合に満ちている。

「よしっ今日こそは勝つ！その気持ちでいくか！」

自分自身に喝を入れ、部活へ向かおうとした。

だがその時、要は周囲の空気が変わったのを感じた。

「?..なんや急に...?..」

突然外気が冷たくなったような錯覚に陥る。そして、

いつまで無駄な努力を続けるつもり？

「え．．．？」

突然、声が聞こえてきた。自分の声だ。

こんなこと続けても、勝てるわけないやん。

相手は天才、こっちは凡人。

生まれた時点で、勝負はついてるんよ。

「なに．．．これ．．．？なんでウチの声が．．．？」

負けることが楽しい？

何かツコつけてん？

そんなん負けを認めたくないただの言い訳や。

負け犬の遠吠え。

ただ単に自分を納得させたいだけやろ？

聞こえてくる声は、要が今まで理沙に抱いてきた思いの数々。

負けを繰り返し、負け続けることが嫌になっていた頃の、紛れもない自分自身の言葉。
「何なん……くそっ！やめろ！」

鞆を落とし、耳を塞ぐ要。だが声は直接頭に響いてくる。

本当はわかっとなるんやろ？自分じゃ一生理沙には勝てないって

「やめろ……。ぐっ……。う……。」

要はうめき声をあげながら、誰もいなくなった校舎へ寄りかかった。

∴

「いたっ！」

チェリーが指さす方を向くと、そこには大柄の男が佇んでいた。

「プリキュアか。」

「リリスじゃない？あつあなたはだれ!？」

だが大男は蛍の質問には答えず、右手に集約させた闇の力をかざした。

「ダークネスが行動隊長、サブナツクの名に置いて命ずる。」

ソルダークよ。世界を闇で食い尽くせ！」

サブナツクと名乗った大男の呼びかけと共に、ソルダークが姿を現した。

「ガアアアアアア!!」

ソルダークが甲高い奇声をあげる。蛍は耳障りなその声に怯むが、

「キュアシャイン！」

チエリーの声を聞き、かろうじて踏みとどまった。

怯んではダメだ。こちらから攻めに行くくらいの勇気を出さないと。

「たああつ！」

蛍は拳を振り上げ、勢いよくソルダークに叩き付ける。だが、

ガキイイイン！

甲高い金属音が響き渡り、

「つ!? いったあああいい!!」

蛍が涙目になりながら叫んだ。

「キュアシャイン! 大丈夫!」

「このソルダーク、スゴくかたいよ!」

涙目で訴える蛍の姿を、サブナックは一瞥する。

「軟弱な。ソルダーク!」

ソルダークは跳躍し、両手を地上にいる蛍めがけて勢いよく叩き付けた。

蛍は跳躍して回避するが、続けざまサブナックが正拳を繰り返す。

蛍はその一撃をガードするが、サブナックの腕力は凄まじく、ガード態勢のまま蛍を吹き飛ばした。

何て力任せな戦い方、だが腕力だけならリスよりも遥かに上だ。

「いたた・・・。」

砂埃の中から蛍は起き上がるが、ソルダークもサブナックも自分より遥かに強い。

その上で2対1、絶望的の状況だ。

「キュアシャイン! このままじゃまずいわ! 浄化技を使って一気に勝負を決めましょう!」

チエリーが蛍に呼びかける。

だがその単語は、蛭にとつて聞き慣れないものだった。

「え……? ? ? じょうかわざ?」

戦闘中にも関わらず、困惑の表情でチェリーを見る蛭。

「あの時! リリスとソルダークをまとめて倒した時の力を使うのよ!」

あの時、と言うのはリリスを追い払った時のことだろう。

だが、

「……えと、どうしたらつかえるの?」

蛭にはあの時の記憶、つまり浄化技を使った記憶と自覚がないのだ。

「どうしたらって……まさかあなた、あれだけの力を無意識に使ったの?」

蛭の言葉にチェリーは絶句する。

「えと……おぼえてない……」

あの時は、ただ皆を助けたいとがむしゃらに願ひ、気が付いたらソルダークの気配が消えていたのだ。

後にチェリーから自分がソルダークとリリスをまとめて一撃で倒したと聞いたが、力を思い出してと言われても、あの時のことを蛭は覚えていない。

「嘘でしょ……? キュアシャイン?」

信じられない、と言わんばかりの表情を浮かべるチェリー。

「作戦会議は終わったか？」

そこへサブナツクが割り込んでくる。

「策がないならば、このまま終わらせてやる。」

サブナツクが蛍めがけて突撃し、そのまま再び正拳を繰り出した。

蛍はバランスを崩しながらもそれを回避、そしてサブナツクの懐に潜りこみ、

「てやあああ！」

渾身のパンチをサブナツクの腹部めがけて繰り出した。

だが、

「・・・この程度の力か？プリキュア。」

「え？」

サブナツクは顔色一つ変えずに、逆に蛍の拳を捕らえる。

そして蛍の体を空へと放り投げる。

「きゃあああつー！」

「ソルダーク！」

ソルダークは無防備に空中を舞う蛍へ、その巨大な拳を叩き付けた。

「キュアシャイン!!」

チェリーの叫び声も空しく、蛍の体は勢いよく地面に叩き付けられるのだった。

・
・
・

要は、頭に響く自分の声を聞き続けていた。

い。
どれだけ耳を塞いでも決して途切れない。どれだけ首を振っても決して否定できない。

そして大好きだったはずのバスケットが、憎たらしくなった時の記憶が蘇る。

(理沙に負け続けて・・・バスケットがどんどん嫌になって・・・)

その記憶が思い出されていく中で、要の視界は少しずつぼやけていった。

(もう・・・何もしたくない・・・って思ってたっけ・・・。)

耳に聞こえる音も、自分の声以外がどんどん聞こえなくなっていく。

ついには意識さえも遠のき始めた。

(やっぱあの時、蛍の前でカツコつけすぎたかな・・・。)

本当はこんななんて知ったら、あの子、幻滅するやろな・・・。)

薄れゆく意識の中でさえ、はつきりと聞こえる自分の声。

ウチは別にバスケットが上手いわげやない。
ウチより上手いやつなんていくらでもいる。
負けず嫌いなんてバカげてる。勝てない相手の方が沢山いるのに。

(まだ聞こえる・・・ウチの声・・・あれ?)

だがこの時、要はあることに気が付き始めた。

(ウチの声・・・ウチが思ってたこと・・・)

そう、今聞こえてくる声は全て、『かつての』自分が思ったものだ。

だから否定することが出来ないのだ。『あの時』の自分自身の本音だから、何も間違いない。

だけどそれは、『かつて自分』でしかないはずだ。

(否定できないウチの言葉は・・・弱かった頃のウチ自身・・・)

そして一度、そんな自分の弱さに真っ直ぐ向き合うことが出来たはずだ。

その上で、バスケットが好きなのだと気がついたはずだ。

バスケなんか大嫌い。もう何も頑張りたくない。

努力したって全部無駄。理沙には一生勝てるわけがない。

尚も響く自分の声。だが、

「……ごちゃごちゃうるさいな……人の頭ん中で。」

要は遠のき始めた意識を繋ぎ止め、自分自身に笑った。

「はっ、一体いつの時代のウチが話しかけてきてるのやら。」

まだ悔しい思いを続けるん？

この先ずつと報われることないのに。

ウチがしてきたことなんて、最後には全部水の泡になるだけや！

声はなおも響き、数を増していく。

だが要は怯まない。

「その程度の悩み！とつくの昔に乗り越えて来たわ!!」

全て受け入れてきたはずだ。

弱い自分も嫌いな自分も、自分より強い理沙の実力も。

簡単には叶わない目標も、全てを受け入れたから、今の自分がここにいるのだ。

バカみたい、まだ諦めてないの？

負けを繰り返したところで、理沙になんか勝て・・・。

「勝てる！いつか必ず勝つてやる!!だってウチは！ウチのことを信じてるから!!」

要は必死に自分自身に抗う。

「勝負は！勝てば嬉しくて楽しい！負けたら悔しくて楽しい!!」

負けから目を背けることしか出来なかった頃のウチが、今のウチの心を！折れると思
うなあああ!!」

要は過去の自分の亡霊を、振り払うように大きく叫んだ。

その時、要の胸から強力な光が放たれる。

「っ!?何・・・これ?」

光を浴びた要は、失いかけた五感を取り戻した。

そして放たれた光はやがて収束し、要の手元にパクトとなつて降りてくる。

要がそのパクトを手にとった時、頭の中にイメージが流れ込んできた。

要は悟る。これをなぞれば、ここから脱出できると。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

自然と口から出た言葉と共に、要は体に光を纏った。

光はやがて雷鳴を呼び、青白い稲妻が全身を駆け巡る。

そして要の身を纏う稲妻は、形を変えフリルとリボンで飾れたドレスへと変わった。

そして要の髪が伸び、ライトブルーへと色を変え、ポニーテールへと結ばれる。

ライトブルーを強調としたドレスを纏う戦士へと変身した要は、自ら名乗りを上げる。

「世界を駆ける、蒼き雷光！キュアスパーク！」

要は3人目のプリキュア。キュアスパークへと変身を果たしたのだった。

：

気が付くと、要は校舎の中にいた。

相変わらず人の気配はないが、ひとまず元の場所には戻ってこられたようだ。

「一体さっきのはなんだ・・・え？ええ！？なんやこれ！？」

気が付くと要は身に覚えのないドレスを身に纏っていた。

それだけでなく、髪もいつの間にか伸びているし、何より色が変わっている。

「いつ一体ウチに何が……?」

さつきまでも記憶を振り返ってみると、何か物凄く恥ずかしいセリフと共に変身していたような……。

「つてそんな魔法少女ものじゃあるまいし。」

どこまでが現実で、どこまでが夢だったのか困惑する要だったが、その時あることに気づく。

「……なんだろこれ?なんかエラく嫌な感じの雰囲気……。」

気配が3つ、ここより少し遠いところから感じられた。

2つは嫌な感じの気配、そしてもう1つは、自分に似た気配。

「……行ってみよう。何かわかるかもしれない。」

今自分がどんな現状に立たされているのか確かめる為に、要は学校を後にしようし、
「え……?」

目にも止まらぬ速度で走り出したのだ。

「ちよつ!ストップストップ!」

自分のことなのにまるで他人事のように注意し出す要。

何とか校門にぶつかかる前に止まることが出来たが、急激な肉体的変化に理解が追いつ

いていない。

「なっなんなん一体・・・？何であんな速く？」

混乱しながらも冷静に状況を見極めようとする要。

そう言えば変身したと思われた時、頭の中にイメージが流れ込んできたような気がする。

「・・・もしかして、ウチはもう、全部『知ってる』のか・・・？」

頭に流れ込んだイメージを全て掘り返そうと、要はまず、自分の記憶を辿ることにしたのだった。

∴

地面に叩き付けられた蛭は、辛うじて起き上がった。

だが受けたダメージは大きく、足元がフラつく。

「リリスを倒したプリキュア、どれほどのものかと思ったが、期待外れだな。

ソルダーク、トドメを刺してやれ。」

蛍の目前にソルダークが迫る。

このままでは負けてしまう。何とかして浄化技の使い方を思い出さないと。
その時、

「ちよつと待った〜!!」

蛍の目の前を青白い光が横切った。

光はそのままソルダークへぶつかり、ソルダークが後ろによるめく。

「え・・・?」

何が起きたのかわからないまま、青白い光が蛍の前に降りたつた。

やがて光が収束し、目の前に1人の少女が姿を現す。

自分に似たドレスに身を包み、自分と同じ力の波動を感じる少女。

「まさか・・・3人目のプリキュア!?!」

チェリーが驚きの声をあげる。

「3人目、新しいプリキュアだと?」

サブナックも目の前の状況に驚く。

閃光と共に現れた青いプリキュアは、蛍とサブナックを見比べて息をついた。

「は〜、急に光に包まれたかと思えば、

こんな魔女っ娘みたいな格好になって、いや々な気配を辿ってきてみたら、

目の前には悪い面したおっさんと怪物、喋るぬいぐるみにお姫様？

なにこれ？ファンタジー映画の世界にでも迷い込んだんか？」

愚痴り終えた青いプリキュアは、そのままサブナックとソルダークを睨みつけた。

「まあ事情はさっぱりわからんが、これだけはわかる。

あんたら、ワルモンやろ？」

「何？」

「この状況、どうみたってワルモンが、か弱いお姫様を襲ってるようにしか見えないけど？」

「何のことかわからんが、プリキュアであるなら叩くまでだ。ソルダーク！」

ソルダークが青いプリキュアを目掛けて拳を振り下ろす。

青いプリキュアは蛍を抱えてその場を離れた。

「わっ。」

「つと、大丈夫？お姫様？」

「はっはい……。」

蛍は頬を赤くする。

プリキュア同士とはいえ、『初対面』の女の子にお姫様抱っこされながら、お姫様と呼ばれるのは正直恥ずかしい。

「ごめんな。さっきこの姿になったばかりだから、ぜんっぜん事情がわからんの。だから後で話、聞かせてな？」

ソルダークが再び蛍たちに迫り来る。

「まずは、あいつらを追い払わんと。あんた疲れとるみたいやし、ここで休んでて。」

「え？でも！」

「大丈夫。この力の使い方、大体わかってきたから。」

そう言いながら、青いプリキュアは自分の手のひらから電気を発生させた。

まさか、さっき変身したばかりと言うのに、もう力の使い方まで理解できているのか？

「それに、」

今度は全身から電気を帯び始める。

「か弱いお姫様《ヒロイン》を助けるのは、主人公《ヒーロー》の役目ってね！」

次の瞬間、青いプリキュアは、目にも止まらぬ速さでソルダークへ突撃、電気を纏った拳を叩き付けた。

蛍の一撃では微動だにしなかったソルダークが怯み呻き声をあげる。

何て重い打撃なのだろうか。

青いプリキュアは一旦着地し、今度はソルダークへアッパーを繰り出す。

ソルダークは倒れる直前で態勢を立て直し、青いプリキュアへと攻撃を仕掛けるが、高速移動する青い光を、補足することができなかつた。

「どんくさいわー！」

一瞬でソルダークの背後へと回り込んだ青いプリキュアが、そのまま高速の肘鉄をお見舞いした。

電気を纏い、青白い光となって高速移動するその姿は、まるで生きた雷のようだ。

彼女はこれが初めての変身だと言っていた。

だがソルダークを前に逃げることに出来ず、今でも力の使い方がわからない自分と違い、青いプリキュアはソルダークを相手に臆せず立ち向かい、自分の力を最大限に活用しているのだ。

そしてソルダークが劣勢な状況になったのを見かねたサブナックが、ついに青いプリキュアに攻撃を仕掛けてきた。

サブナックの拳を回避した青いプリキュアは、彼に拳を打ち付ける。

サブナックは蛍の時と同じように、あえて一撃を受けて見せた。

「ほお・・・中々の拳じゃないか。」

「タフやな。おっさん。」

直後2人は、目にも止まらぬ速度で打撃の応酬を繰り返す。

2人の拳が正面からかち合い、ぶつかった力の余波が衝撃波となって周囲に拡散する。

そんな中、青いプリキュアの背後をソルダークが取った。

だがソルダークの気配に気づいた青いプリキュアは、高速移動で逆に背後に回り込み、ソルダークの巨体を蹴り飛ばした。そして青いプリキュアは、右手を横にかざし始めた。

「光よ、走れ！スパークバトン！」

青いプリキュアの呼びかけと共に、一筋の光が走り、バトンへと形を変える。

青いプリキュアが、新体操のようにバトンを振り回すと、バトンは徐々に短くなり、手のひらの中に納まった。そして手のひらから、青い電気がスパーク音と共に迸る。

「プリキュア！スパークリング・ブラスター!!」

手のひらから発生した電気を全身に纏った青いプリキュアは、閃光となってソルダークへと突撃した。

そしてソルダークを通過すると、上空から巨大な雷鳴と共に、青い雷がソルダークへと落ちてきた。

「ガアアアアアアアアア!!」

閃光が収まり、蒼いプリキュアが姿を現すと同時に、雷に包まれたソルダークは断末

魔と共に消滅していった。

「3人目のプリキュアか、面白くなってきた。」

その言葉を残し、サブナツクは姿を消すのだった。

：

キュアスパークへと変身した要は、何とか怪物を退治することに成功した。

あれだけ大きな怪物と戦うことに、恐怖がなかったとは言えない。

当たり前だが、要は戦うスーパーヒーロー何かではない。真正正銘の女子中学生だ。

それでも臆せず立ち向かえたのは、自分が怪物相手に戦う力を得たのだという実感
と、あんな怪物を野放しにしておくわけにはいかないという、ちよつとした正義感に駆
られたから。

それと、

「あつあの、たすけてくれてありがとうございます。」

こんな可愛いお姫様を前に、情けないところを見せては女が廃ると言うものだ。

「別にいいよ。あんた名前は？」

「えっと、キュアシャインって言います。」

「キュアシャインか。じゃあウチは、キュアスパークってことになるのかな？」

あの時の自分が無意識にそう名乗っていた気がする。

「じゃあ？」

「いや、気にしないで。それより、これって一体どういう・・・」

「あつ、ちよつとだけまってください」

話を途中で切ったキュアシャインは、辺りを見回し始めた。

やがてキュアシャインは、項垂れている一人の女性を発見し、その女性とひとしきり会話を終えた。

会話の内容から察するに、悩みを抱えていた女性を励ましていたようだが、それがこのファンタジーな出来事と、どうゆう関係があるのだろうか？

「よかった・・・これで・・・」

力なく呟くキュアシャインの体が光に包まれる。そして光が弾けた後、

「え・・・？」

要は言葉を失った。弾ける光の中、姿を現したのは蛍だった。

「あつ蛍。勝手に変身を解いちゃダメだよ。」

蛍の近くにいた喋るぬいぐるみか注意する。

「ごっごめんなさい。あんしんしたら、ちからがぬけちゃって……。」

この幼い口調、幼い仕草、紛れもなく蛍だ。

「……蛍？」

「え？あつあれ？なんでわたしのなまえを……？」

要は蛍の前で変身を解いた。

「え……？えええっ!?!もつもりくぼさん!!?」

「蛍、知り合いなの？」

「わたしのクラスメートだよ！なっなんでもりくぼさんがプリキュアに!!?」

あつちもあつちで驚きを隠せてないようだが、それはこちらのセリフだ。

あの臆病な蛍が、あんな怪物たちと戦っていたというのか。

だが要へのサプライズはこれだけでは終わらなかった。

「チエリー？」

突如男の声が聞こえた。

3人とも声のする方へ向くと、そこには一人の男性が立っていた。

身長は180cmくらいだろうか。

ライトブルーを基調とした服と金髪のせい、どこか明るい印象を与える。

「・・・あなたは？」

突然声をかけられたチェリーは驚く。

「チェリーだよな？わからないか？俺だよ、ベリイだ。」

ベリイの名を聞いた直後、チェリーの表情が一変した。

「ベリイ？ベリイなの!？」

「ああっ！ようやく見つけられた！」

「ベリイ！」

一人の青年とぬいぐるみが同じタイミングで飛んでいく。

そして次の瞬間、ベリイと名乗った青年が、ぬいぐるみへと姿を変えたのだった。

「え・・・？」

要は目の前の状況に再び言葉を失う。

「良かったベリイ！無事だったんだね！」

「そっちこそ！ここまで来た甲斐があったよ！」

「うわああん！ベリイ！」

察するに感動的な再会シーンなのだろうが、要にはその光景に涙を流す余裕はなかった。人間がぬいぐるみになってぬいぐるみが飛びながら喋りながら再会を喜びあう。

どこからツツコミを入れたら良いのだ？

「ひっ人がぬいぐるみになったあ!!」

結局そんなベタなツツコミしか思い浮かばず、

「ふたりめのようにせいさんだあ!!」

蛭の妖精という言葉に更に困惑し、

「これで、後はレモンさえ見つければ全員揃うよ!」

「ということは、キュアブレイズとアップルさんもこの都市に?」

「うん! 2人で頑張って探そうね!」

「ああ!」

そんな要の心境を余所に、未来へ希望を見出すぬいぐるみもとい妖精たちだった。

絶句する要。目が点になる蛭。そして戯れる妖精2人。

常識外れの世界へ飛び込んだ要の初体験は、最後の最後まで常識が通用しなかった。

：

図書委員の仕事を一通り終えた雛子は、真つ直ぐ家まで帰宅した。雛子は時折、1人でいたいと思う時がある。

そして今日がそんな気分だった為、要を待たずに帰宅したのだ。

だが玄関前まで来たとき、雛子は家の前にぬいぐるみを見つけた。

「あら？」

誰かの落とし物か？

しかしぬいぐるみを自分の家を持ってくるような知人がいただろうか？

雛子はそのぬいぐるみを手に取ってみた。

体毛は黄色。見た目は熊に近い為、テディベアのようなうだ。

だが手に持ったぬいぐるみは、妙に生暖かった。

体毛も作り物とは思えないほどの手触りだ。

しかし雛子は、それ以上に重大なことに気が付いた。

ぬいぐるみの口から、明らかに寝息が漏れていたのだ。

口元に手をやると、微かな吐息がかかる。

試しに胸の当たりに手を置いてみると、僅かな脈動が感じられる。

「なに……これ？」

虫と要の知らぬところで、雛子もまた、常識外れの世界へと足を踏み入れたのだった。

：

次回予告

「これでのこりのプリキュアはあとひとりだね！」

「ウチがキュアスパークで、蛭がキュアシャインだから、あと一人はキュア何になるんだろ？」

「ん〜つと、キュアぴかぴか？」

「いやないわ。」

「キュアぴかりん！」

「可愛らしいな！いやそうじゃなくてもつとカツコよく！」

キュアスパークウルトラアルティメットスパーク！みたいな！」

「あつそれカツコイイ！」

「つてボケ倒すなあ！ツツコミ入れんかい！！」

「2人とも、騒がしいわよ。一体何の話？」

「ギクツ！雛子!？」

「ふっふじたさん!？」

次回！ホープライトプリキュア 第4話！

「みんなを守る！水晶の戦士、キュアプリズム！」

希望を胸に、がんばれ、わたし！

第4話

第4話・プロローグ

夕食を終え、明日の宿題と予習も終えた雛子は、読書を始めた。

雛子にとって、1人で本を読む時間は、

要を始めとする友人たちと過ごす時間と同じくらいに大切なものだ。

本を開けば、雛子の意識は現実から切り離され、本が生み出す世界へと飛び込んでいく。

その世界では、雛子は女子中学生ではない。物語の主人公だ。

時には可憐なお姫様、時には百戦錬磨の勇者、時には頭脳明晰な探偵。

時には女性、時には男性、時には性別不明な宇宙人。

ジャンルを問わず本を読む雛子は、何にでもなることができた。

雛子にとっての創作物とは、現実では体験出来ない事を、仮想的な現実として体験するためのものである。

特に本の場合、全ての情景を自分自身で想像しなければならぬ分、他の誰から与えられたものではない、自分だけの現実イマジナリーを持つことができる。

風景の細部に至る視覚的描写から、目には映ることのない登場人物の心理的描写さえも綿密に描かれていることから、その人物と同じ視点と心境に立つことが出来る。

これらの要素は、視覚的に映像化された漫画やアニメ、ゲームにはないものであり、本は創作物の中でも、よりリアリティの伴った仮想現実バーチャルを体験出来るものである。

だから雛子は読書が好きなのだ。

だが今日は、読書に集中することが出来なかった。

雛子は自分のベッドで健やかな寝息を立てながら眠る、集中できない理由へと目を向ける。

学校の帰り、玄関の前で拾った謎の生きたぬいぐるみ。

いや、生きている以上はぬいぐるみではないのだろう。ぬいぐるみに似た生き物だ。

そしてそんな生き物は、この地球上には存在しないはずだ。

ならばこの生き物は、一体どこから来たものなのだろうか？

雛子は本を閉じて立ち上がる。

ダメだ。今日のように他のことに気を取られ集中できない日は、想像力が欠如してしまふから、物語の世界に入り込むことが出来なくなる。

かと言って集中出来ないまま流し読みをするのは、作者に対して失礼だ。

本を閉じた雛子はベッドまで近づき、眠るぬいぐるみのような生き物のほっぺを人差

し指でつく。

その柔らかか感触に雛子は頬を綻ばせる。

「はあ……可愛い。」

読書以外にも雛子が好きなこと。

雛子は昔から可愛いものに目がなかった。

幼少の頃から集めている着せ替え人形やぬいぐるみの類は、今でも大切に保管してあるし、幾つかはこの部屋に飾っている。

この明らかに地球上のものではない生き物に対して、何ら恐怖を覚えなかったのも、単純に可愛いからだ。

とは言え、さすがにこの状況を楽観視しているわけではない。

何か自分の常識が通じないようなことが起きている。そう漠然と思えてきた。

「さて、この可愛い妖精さんは一体どこから来たのかしらね？」

ひとまず、ぬいぐるみのことを妖精と称するようにした雛子は、この妖精が起きたら、一体どこから、何をしにこの世界に来たのかを聞くことにした。

いつもは現実から本の世界へと行っていた雛子であるが、どうやら今回は、本の世界が現実の方へ来てしまったようだ。

第4話・Aパート

みんなを守る！水晶の戦士、キュアプリズム！

少し遡り、キュアスパークへと変身を遂げた要が、ダークネスを撃退した後の事、チエリーはようやく仲間の一人、ベリイとの再会を果たした。

蛭は、突然目の前に現れたもう1人の妖精に驚くも、再会を喜び合う2人を見て胸をなでおろす。

そこへ混乱のあまり硬直していた要が、ようやく声をかけてきた。

「あのく、そろそろウチに事情を説明してくれたら嬉しんだけど……。」

要は今日変身したばかりだと言っていた。まだプリキュアに関する事情を知らないのだ。

「ああつごめんなさい。えと、要ちゃんだっけ？」

チエリーが要に返答する。

「ちゃん付けなんてこそばゆい。要でいいよ。」

「じゃあ、要ね。ええと、まずはどこから説明すれば……。」

「つてちよつと待って。なんか大事なことを忘れてるような……。」

「え?」

自分から声をかけて起きながら、突然考え事をし始める要。

どうしたのだろうと一同が首を傾げた直後、大声で叫んだ。

「……あく!部活!!ごめん蛍!ええとぬいぐるみさんたち!話はまた今度!!」

そして自分から頼んだのにも関わらず、話を切り上げたのだ。

「えつちよつと……。」

蛍は、要にとつての部活の大切さを理解しているが、事情を知らないチェリーには、身勝手な行為に映った。

だが要の強行はこれだけでは終わらず、

「ええい間に合わん!プリキュアホープインマイハート!」

何と再びキュアスパークへと変身したのだ。

「え〜っ?!」

そしてプリキュアの力で、雷のごとく速度を手に入れた要は、驚くチェリーを無視して颯爽と学校へ向かうのだった。

「わあすごい、もうへんしん、つかいこなしてる。」

未だにリリンのおまじないなしでは変身できない蛍は、要の順応さに素直に感心す

る。

「蛭！感心してる場合じゃないでしょ!？」

「え？でもすごいことだとおもうけど。」

「凄いかもしれないけど使い方がよろしくくない！ただの移動手段にプリキュアの力を使うなんて！」

伝説の戦士の力を何だと思ってるのよ！蛭も絶対見習っちゃダメだからね!!」

「うっうん……。」

チェリーの烈火の如く剣幕を前に萎縮する蛭。確かに魔法の類が存在しないこの世界で、プリキュアの奇跡の力を日常で使うのは問題はあるだろうが、今回の場合、ダークネスの奇襲が原因なので、多めに見ても良いのではないだろうか。

「でも、もりくぼさん。ぶかつをほうつてまで、わたしたちをたすけに来てくれたんだし。」

今日くらいは、目をつむってあげよ。」

「むう……。」

さすがのチェリーも、そう言われては咎めることも出来ないようだ。

そして会話がひと段落したところ、ペリイと呼ばれた青い妖精が話しかけて来た。

「ところでチェリー。彼女たちはこっちの世界で見つかったプリキュアか?」

声を掛けられた蛍は、ベリイを改めて観察する。ライトブルーの体毛。

大きさはチェリーとそう変わらない。見た目は犬のぬいぐるみようだ。

「ええ、この子は一之瀬 蛍。キュアシャイン。」

さつき走って行つた子は、確か森久保 要よね。」

「うん、もりくぼ かなめさん。キュアスパークだよ。」

「驚いたな。俺たちの世界にはキュアブレイズしかいなかったのに。」

この世界では、もう2人のプリキュアが見つかったんだな。」

ベリイの言葉に、蛍は以前チェリーから聞いた話を確信する。

なぜフェアリーキングダムではキュアブレイズ以外のプリキュアが誕生しなかったのか。

そのことについて疑問を抱くが、蛍は一先ずベリイに挨拶することに。

「あの、はじめまして。いちのせ ほたるっていいいます。」

「俺の名はベリイ、よろしくな。」

外見が犬のぬいぐるみのため可愛く見えるが、声、口調ともに男性的である。

そういうえば、先ほど少しだけ見た人間の姿は、20代くらいの青年だったか。

人間年齢的には、チェリーより上かもしれない。

「はい、よろしくおねがいます。」

「そんなに畏まらなくていいよ。」

ところで、キュアブレイズとアップルさんもこの街にいるんだよな？」

「それは・・・そうだけど。」

ベリイの言葉に暗い顔をするチエリー。

「チエリーちゃん？」

「どうしたんだ？ひよつとして、まだ居場所がわからないとか？」

「ううん、そうゆうわけじゃなくて・・・。」

あついや、今キュアブレイズとアップルさんが、どこに住んでいるかはわからないわ。」

そう言われてみれば、キュアブレイズがこの夢ノ宮市のどこに住んでいるのか、蛍も聞いたことがなかった。

「わからない？一緒に暮らしているんじゃないのか？」

「私は今、蛍のところにいるの。」

蛍がプリキュアとして戦うって決めてくれたから、それをサポートしようと思つて。」

ベリイはしばらく考える風の姿勢を取った後、話を簡潔にまとめる。

「つまり、キュアブレイズとはこの地で会ったけど、どこに住んでいるのか聞く前に蛍ちゃんと一緒にいることを選んだから、今2人がどこにいるかは分からないってこと

か。」

「うん、そんなところ。」

だがベリイは、話をまとめた割には釈然としない表情を浮かべている。

それもそうだろう。これまでの話を聞く限りでは、チェリーたち妖精とキュアブレイズは、かなり親しい間柄なのだろうし、キュアブレイズとはこれまで2度、会っている。せめてチェリーにだけでも連絡先くらい伝えても良かっただろうに、キュアブレイズは多くを語らないまま姿を眩ましたのだ。

「とにかく、キュアブレイズとアップルさんについては心配はいらないわ。」

それよりもまず、行方のわからないレモンから探しましょう。」

チェリーが半ば無理やり話題を変えて来たので、蛭もベリイも一先ずその話題に合わせることにした。

「そうだな。レモンは俺たちの中では一番幼い。心細い思いをしていなければいいが。」

「レモンって子は、どんなすがたをした、ようせいさんなの？」

蛭も出来る限りレモンの搜索に協力しようと思いい、レモンの特徴について尋ねてみる。

「黄色の妖精よ。ええと外見は・・・。」

「テディベアだな。黄色のテディベア。」

「テディベアという単語が出るとは。ベリイは多少なりこちらの世界についての知識がみたいだ。」

「つてことは、くまさんのぬいぐるみ？」

「テディベアを熊と呼んでいいかはわからんけどな。」

「全くよくあんな凶暴な生き物から、あそこまでファンシーなぬいぐるみが連想できたものだ」

「褒めているのか皮肉を言っているのか判断の難しい言葉である。」

「それからフェアリーキングダムにも熊は出るようだ。」

「と、そんな話をしている内に、気が付けば夕食の支度をしなければならぬ時間まで迫っていた。」

「あの、そろそろ、おうちかえって、ごはんのしたくしないと。」

「そうね。ベリイ、あなたはこれからどうするの？」

「そうだな・・・。」

「わたしは、ベリイさんさえよければ、おうちにきてもいいけど。」

「蛍の提案を聞き、しばし逡巡するベリイ。」

「さっきの子。キュアスパークって言ったか？あの子、今日初めて変身したんだよな。」

「うん、そうだけど。」

「・・・チェリー、ちよつと考えがあるんだが。」

この後、ベリイの話をきいた蛍とチェリーは、少し考えてから彼の提案を承諾するのだった。

：

部活を終えた要は、下駄箱前に雛子がいないことに気づいた。

どうやら今日の雛子は本の世界に旅立ちたいようだ。

待ち人がいないことを確認した要は真っ直ぐと家に向かう。

しかし、てつきり部活に遅刻するものだと思っていたが、初学校で嫌な気配を感じてから今まで、5分程度しか経過していなかった。

キュアスパークに変身してすぐさま学校まで戻って来たが、闇の中で自分が初めて変身してから怪物を倒し、再び変身してこの学校へ戻るまでの間が、僅か5分とは思えない。

そこで要は一つの仮説を立ててみた。

あの嫌な感じの空間は、現実と時間の進み方が違うのだろうか？

それに自分たち以外の人の姿も気配もなかったような気がする。あの空間は漫画やアニメなどで良くある、現実の空間とは切り離された異空間、

「・・・はあ、ホンット、現実から遠のいてしまったんやなあ・・・。」

こんなことを大真面目に考える日が来るとは。要は明日こそ蛍とぬいぐるみたちから詳しい話を聞かせてもらおうと思った。

その上で、自分はどうするべきか、は考える必要はない。どんな話にせよ、要はこの先どうするか既に決めているのだから。

そんなことを考えている内に、要は家の前までたどり着いたが、家の目の前には、先ほど見た青いぬいぐるみが佇んでいた。

「よっ、やっど帰って来たか。」

青いぬいぐるみは気さくそうに話しかけてくるが、要は目を丸くする。

「ちよっあんた、こんなところに堂々と立ってちゃあかんやろ。」

「別に問題ないさ。通行人の目くらいはちゃんと気にしてたから。」

率直に聞くけど、家が上がってもいいか？君に大事な話がある。」

「・・・。」

可愛い見た目に反して声と口調は男性的だ。

そんなカツコイイ声で『君に大事な話がある。』なんて言われたら、

大抵の女子はトキめいてしまっただろう。外見が『可愛い犬のぬいぐるみ』でなければ、
だが。

「・・・何か失礼なことを思わなかったか？」

顔に出ているだろうか？ペリイは見るからに不機嫌そうな表情を浮かべた。

「・・・一応言っておくけど、俺は男だからな。可愛いぬいぐるみつてのは
褒め言葉にならないぞ。」

思ったことをすんなり見透かされた要。それとその辺りの感性は妖精も人間と大差
がないようだ。

だが要はそんなん気にすんなと言わんばかりの悪戯めいた笑みを見せる。

「はあく、とりあえず、お邪魔します。」

そんな要に対して、青いぬいぐるみはわざとらしく大きなため息をついた。

このあたりの反応は雛子にそっくりだ。

「はい、どうぞ。」

要はこのぬいぐるみの姿をした、異世界からの来客を招き入れることにした。

要の部屋は、よく男子っぽい部屋と言われている。

本棚には漫画やアニメのDVD、ゲームの攻略本などが揃っており、机の上には、親に無理やり買って買って買ってもらった

新型の携帯ゲーム機とそのソフトが置かれている。

壁に貼られているのは、要が尊敬するアメリカのバスケットボール選手のポスター。

そして極め付けは、本棚の上に飾られたマイバスケットボール。

ハンガーにかけられた夢ノ宮中学校女子生徒用の制服がなければ、女の子の部屋とは思われないだろう。部屋主である要自身もそう思う。

「まっ、なくんもおもてなし出来ないけど、テキトーに寛いだけで。」

「いや、俺の方から突然頼み込んだんだし、上がらせてもらえただけで十分だよ。」

本当はお茶くらい出そうと思ったが、妖精が人と同じ食事を取るのかを知らない為、止めることにした。

「改めて自己紹介させてもらおう。俺の名はベリイ。」

「こことは違う世界、フェアリーキングダムから来た妖精だ。」

ベリイと言う名前も中々にキュートである。さすがに言わないが。

「ウチは森久保 要、真正正銘この世界出身の、ごくごく普通な女子中学生です。」

敢えてこの世界出身の部分強調する要。しかしこことは違う世界ときたか。

要は改めて目の前の妖精が、異星人であることを認識する。

「こことは違う世界つつうことは、宇宙人になるわけ？」

要がそう例えを持ちかける。

「この世界での認識なら、そんなところになるかな。」

その例えをあつさり肯定されてしまった。要の中で宇宙人といえ、大きな頭と細い体でカメレオンみたいな目をしておりゴーホームと言いながら人間と指を合わせるイメージしかなかったが、そんな印象がポロポロと崩れ落ちていった。

いや、本当は可愛いぬいぐるみの姿なんですよと言えば、むしろイメージアップにはなるのか？

と、しようもないことを考えている内にペリイが話の本題に入り始めた。

「今日、俺がここに来たのは他でもない。」

要、君はまだプリキュアのこと、ダークネスのこと、俺たちの世界で何が起きたかを何も知らないよな？」

いよいよその話を聞く時が来たか。要はおふぎけモードをやめて、真剣に話を聞く姿勢になる。

「せやね。さつきはすまん。」

ウチから話しかけておいてとんずらしてしまって、どうしても部活だけは外せんかったから。」

「それは気にしてないよ。君にとつての部活がどれだけ大切かは、蛍ちゃんから簡単に聞いたからね。」

「あの子……。」

少し嬉しそうに頬を綻ばせる要。

「かといつて、いつまでも君に知らないままにいるわけにもいかない。」

何より君自身に決めて欲しいんだ。プリキュアとしての力を手に入れた君が、この先どうするべきなのかを……。」

回りくどい言い方だと思った。一緒に戦ってくれと一言いうだけでいいのに。

とは言え、彼らが何者で自分が起こったのかを知りたかったので、ベリイの話に合わせることにした。

「それを決めるためにも、君には聞いてもらいたいんだ。」

俺たちの知る限りの全て、プリキュアとダークネスのことを。」

「わかった。聞くよ。てゆうか、元々ウチから聞くつもりだったんだし。」

これを聞けばもう後には引けない。要はそう思った。

これまでの現実とはおさらばだ。ここから先は常識が一切通用しないファンタジーの世界。

要は多少の恐怖と緊張を滲ませながら、ベリイの話聞くことにした。

:

ベリイの話を全て聞き終えた要は、一つ大きな息をついた。

「ダークネスの目的は、この世界を闇で覆い尽くすこと……。」

「そこであんたらの世界はもう……。」
話を終えたベリイは、要の様子を伺う。

フェアリーキングダムが失われたことを聞いた時は、さすがにショックを隠せなかったようだ。

「それもそうだろう。やつらを野放しにしては、この世界も同じ運命を辿ることを暗示しているのだから。」

「それで、プリキュアだけが、ダークネスに対抗できるっちゅうことか……。」
要はベリイが伝えたかったことをちゃんと受け取ってくれたようだ。

ダークネスと戦えるのはプリキュアのみ。だからベリイは要に戦って欲しかった。

故郷を失ってしまった今、この世界に誕生したプリキュアが、ダークネスに対抗でき

る

唯一の希望なのだ。だがベリイは、要に戦いを強制するつもりはなかった。

「そう。君たちの持つプリキュアの力、希望の光だけが、ダークネスの絶望の闇に対抗できる唯一の力なんだ。

だから要、出来ることなら俺たちに協力してほしい。

勿論、すぐに答えが欲しいなんて思っていない。ゆっくり考えてからでいい。

君にも今の大切な日常が・・・」

「いいよ。」

「あるわけだし、ってええええ!!?」

あまりにあっさりとした回答に驚くベリイ。

「なにその反応? カッコイイ声が台無しやで?」

台無しにしたのは誰だと思ってるのだ。

「こんな時に冗談を言うな! いや、簡単に引き受けてるけどいいのか?」

「まあ実際、簡単な話だし。」

「はっ。」

「だってそうでしょ? やつらはこの世界も闇に飲み込もうとしている。

ウチはそんな絶対許せない。それでウチには対抗できる力がある。

だから引き受けるってだけやないか。」

確かにそこだけまとめれば、至極簡単な理屈だろう。

だが、彼女は事を単純に捉え過ぎてはいないだろうか？

「・・・だけど、そんな簡単なことじゃない。」

とても危険だし、とても怖い思いをすることになるんだぞ。」

気が付けばベリイは、要が自分の望みを承諾してくれたのにも関わらず引き気味の態度を取っていた。

「つたく、ウチを仲間にしたいあんたが、そんな物言いはどうすんの？

怖いのも、危険なのも承知の上だよ。それでも、ウチはここが、夢ノ宮市が大好きだから。」

「……が……?」

「この夢ノ宮市が奪われるのが、ウチにとっては一番怖いことなの。」

それを思えば、あんなデカイだけの怪物と戦うことなんて、怖い内には入らんよ。」
「要……。」

ベリイは要を上辺だけで判断しかけたことを恥じた。彼女は既に確固たる決意を持っていたのだ。

恐らく自分の話を聞く以前、プリキュアとして覚醒しソルダークと戦った時から、や

つらが要にとつての、大切な居場所を奪わんとしていることを感じ取ったのだろう。

同時にその言葉から、彼女の並々ならぬ正義感が伝わってきた。

「すまなかつた要、君のこと、少し誤解していたよ。」

「気にしてないって。昔からよく、口も態度も軽いつて言われてたし。」

「そうだな。そこは直してもらわないと。」

「いや便乗すんなし！」

要の表情から、さっきまでの謝罪はどこへ行つた!?と言う言葉が読み取れる。

「ははっ、要、プリキュアとして戦うことを引き受けてくれてありがとう。」

「おう、このキュアスパーク様がいれば百人力や。」

「頼もしいな。あと、それとは別にもう一つ頼みたいことがある。」

ベリイは再び神妙な面立ちで尋ねてきた。

「なに？」

「・・・俺を君のパートナーとして、しばらくの間ここに置かせてもらえないか？」

ある意味では、先の提案よりもよっぽど重大な問題だ。

何せ種族の違いがあるとはいえ、『男』の自分が『女の子』の部屋に寝泊まりしているかと聞いているのだから。

「こゝよ。」

だが再び飛んできたあまりにも軽い返答にベリイは盛大にコケる。

「随分とあつさり引き受けるんだな……。」

要はボーイツシユなどところがあるが、まさか自分が女の子であることへの自覚すら薄いのだろうか？

「ウチだつてこう見えても女子だし、可愛いぬいぐるみを部屋に置いていても不思議やないよ。」

なるほど、女の子としての自覚が薄いからでなく、自分が異性として見られていないわけか。

だが2度も可愛い扱いをされては男の立つ瀬がないというものだ。

「言っておくが、俺は妖精の間ではカッコイイって評判だぞ。」

「知らんがなそんな情報。」

しかしあつさりと言われる。最もベリイも本音を言えば、要を異性として意識はしていない。

種族の違いがあるのもそうだが、それ以前に年齢に差があるのだ。

ベリイの人間年齢は、だいたい20歳に相当する。一方で要はまだ13歳。

女性として意識しても、良くて妹分程度である。

「まあ、俺は君より年上だからな。子供の要に相手にムキには……。」

先ほどの仕返しとばかり皮肉を言おうと思ったが、要に鼻をつまれ言葉を中断させられる。

「花も恥じらう乙女に対して失礼やない？」

「俺の立場は無視かよ……」

こんな時だけ乙女をアピールしやがって。

内心毒つきながら、ベリイは納得のいかない表情で鼻を摩る。

「まっともかく、そうゆうことなら心配いらんよ。」

それにいくら妖精とは言え、2人も蛍ん家にけしかけんのは失礼だろうし。」

先ほどまで好き勝手ベリイのことをからかったかと思えば、

こういったところではきちんと礼儀は弁えている。不真面目なのか真面目なのか。

「それは俺も思ったことだ。」

それにチェリーは蛍ちゃんのことをサポートしていくみたいだからな。

だから俺も、要のことをサポートしたいと思っただ。

俺には戦う力がないから、せめて俺の出来る範囲で、プリキュアとして戦う君を手助

けしたいんだ。」

「心強いよ、ベリイ。これからよろしくな。」

「ああっこちらこそ、よろしく頼むよ。要。」

口と態度は軽いが、誰よりも強い信念を持つ少女、森久保 要。
ベリイは彼女のパートナーになることを、ほんの少しだが、誇りに思うのだった。

∴

ベリイと別れた帰り道、チエリーは蛍と会話しながら帰路についていた。

「要、ベリイの話、聞いてくれるかな？」

「きいてくれるとおもうよ？」

もともと、もりくぼさんからおはなし、ききたがつてたんだし。」

それもそうか、とチエリーは思う。チエリーは、要がベリイの話を承諾することを期待していた。

キュアスパークの力は戦力的に大きなプラスとなる。これで蛍への負担も大きく減るだろう。

「要と一緒に戦ってくれることになれば、心強いね。」

「・・・そうだね。」

だが蛍はどこか浮かない顔をしていた。

一緒に戦ってくれる仲間が増えることは、彼女にとっても喜ばしいことではないのだろうか？

「蛍？どうしたの？」

「……もりくぼさんには、もりくぼさんにとつて、たいせつなじかんがあるから。

ぶかつとか、ともだちとあそぶじかんとか……。

もし、プリキュアとしてたたかうことで、そんなじかんがなくなっちゃうとしたら、なんかやだなつておもつて。」

「蛍……。」

確かにダークネスがこちらの都合を考えてくれるとは思わないが、彼女の身の安全とか周囲の安全とか、もつと他に心配することがあるだろうに。

それよりもプリキュアとして戦うことで、要の『日常』に支障が出ないかを心配するところが蛍らしい。

「でも、一緒に戦ってくれるのなら心強くない？」

あんな真つ直ぐで勇敢な子、そうそういないわよ？」

「それは、そうだけどね。」

そしてこんなところでは素直なのも蛍らしい。やはり戦うのは今でも怖いのだろう。

「蛍は戦うことを思い出した恐怖心と、要を戦いに巻き込んでしまうことへの申し訳なさが入り混じった表情を浮かべた。

「チェリーは少し暗いムードになったことを読み取り、努めて明るく振る舞うことにした。

「それにしても、ベリイも要を選ぶなんて失敗したよね。」

「しっばい？」

「だって、蛍を選べば、蛍の美味しい手料理が毎日食べられるのよ。」

「・・・ふふつ、もうなにそれ？」

「もりくぼさん家のゆうごはんだって、すっごくおいしいかもしれないじゃない。」

「蛍は少し恥ずかしがりながら、クスクスと笑ってくれた。やはり蛍には笑顔が一番だ。

「いや、蛍の料理が一番よ。ねっ蛍、今日の晩御飯はなに？」

「実際のところ、チェリーにとって蛍の手料理を食べることは日々の楽しみになってきている。

「蛍の料理は味は勿論だが、バリエーションにも富んでいるので、次々と初めて見る料理が食卓に並ぶのだ。

「場を明るくしようと振った話題だが、言葉には本音が多分に含まれているのである。」

「そうだね……。今日はカレーにしようかな？」

「それはどんな料理？」

「んつとね、ちよつとドロドロとしたスープみたいなもので、からいんだけど、ごはんにのせてたべると、すつごくおいしいの。」

わたしは、からいのがにがてだから、あまくちにしちやうけどね。」

「新しい料理か、楽しみだな。」

蛭の作る新しい夕食に胸を弾ませ、チエリーは家へと向かうのだった。

…

自室のベッドで眠る妖精を眺めていた雛子は、その臉がうつすらと開くのを見た。

「おはよう。」

「っ!？」

妖精は臉を擦つてこちらを見た後、慌てて飛び上がり距離を置いた。

「あつごめんさい。驚かせてしまつて。」

雛子が謝罪するも、妖精はこちらを警戒し、表情を強張らせている。

「そんなに警戒しなくても大丈夫よ。何もしないから。」

なるべく相手を不安にさせないように、柔らかく話しかける雛子。

すると妖精は、周囲を見渡してから、少しずつ表情を和らげていった。

「・・・怖くないの?」

妖精は開口一番、その疑問を雛子に投げかける。

だがそれよりも驚いたのは、妖精の口からはつきりとした日本語が飛んできたこと

だ。どうやら言葉は通じるようだ。

「どうして?」

「だって・・・この世界に妖精はいないはずだよね?」

これはまた驚いた。妖精と勝手に呼んでいたが、どうやら『本物』の妖精だったようだ。

「あら?あなたみたいな可愛い妖精さんを、怖がる理由なんてないわよ。」

実際、雛子には恐怖と呼べる感情はなかった。

というよりは、妖精の方がよっぽどこちらを怖がっているのです、そんな相手を怖がるのは申し訳ないと思った。

「・・・そっか。」

少しずつ安堵の様子を浮かべ始めた妖精。さて、ここからが本題だ。

「ところで、君の名前は何て言うの？」

「……えっと、レモンはね……」

童話の世界から迷い込んだレモンから、本物のおとぎ話をたくさん聞かせてもらう。

雛子の心は今、そんな好奇心に満ちていくのだった。

∴

モノクロの世界の中、リリスとサブナックが対談していた。

「新しいプリキュア？」

「ああ、キュアスパークを名乗る青いプリキュアが現れたぞ。」

話は聞いたものの、リリスは新しいプリキュアに興味はなかった。

リリスにとって、キュアシャイン以外のプリキュアに価値などないからだ。

「これでプリキュアは3人か。伝説の通りであれば、あと1人いるはずだ。楽しみだ

な。」

どうでもいい。リリスがそう思った時、

「やれやれ、負け犬同士が傷の舐め合いかい？」

影の中から、1人の青年が姿を現した。見た目は20台前後の男性。身長は180後半。

両手と一体化したマントを翻し、爬虫類のような細い眼で睨み付けてくる。

リリス、サブナックと肩を並べるダークネスの行動隊長。

「ダンタリア・・・やっぱりあなたまで来ていたのね。」

「敗戦続きの君たちが情けなくてね。次は僕が行かせてもらうよ。」

久々に姿を見せたかと思えばイヤミの連続だ。だがサブナックはそんな彼を見下すように

視線を送る。

「ふん、ほとんど事を起こすことのなかった貴様に言われたくはない。」

サブナックの抗議に対し、ダンタリアは涼しい顔だ。

「僕は念入りに下準備するタイプなんだよ。」

脳みそまで筋肉で出来ている君と違って、出撃の回数を重ねる必要はないのさ。」

そんなサブナックにダンタリアは痛烈な皮肉をぶつけた。だがサブナックは意を介

することなく、

「脳が筋肉で出来ているわけないだろ。バカか。」

否、通じてすらいなかったようだ。このバカには。ダンタリアも呆れ顔で彼の言葉を流す。

やれやれ、騒がしいやつらが集まってきたものだ。

「伝説の戦士プリキュアか。実に興味深い連中だ。」

その言葉を残し、ダンタリアの姿は闇の中へと消えていった。どうやら本当にイヤミを言いに来ただけのようだ。

最もリリスは、その程度のイヤミなど意に介してはいなかった。リリスの心を焦がす存在。

それはキュアシャイン以外にないのだから。

：

次の日、学校の昼休みの時間、蛍は要と二人で話す機会を伺った。

「もりくぼさん、ちよつといい？」

「ああつ、昨日のことか？」

「うん。」

蛭と要は、人通りの少ないところへ場所を移す。

「きのう、ベリイさんが、もりくぼさんのおうちに、いったとおもうんだけど。」

「ああ、来たよ。話も全部聞かせてもらった。」

と言うことは、要も聞かれたのだろう。戦うかどうか、という問いかけを。

「それで・・・もりくぼさんは、これからどうするの？」

「どうって、そりゃ、戦うけど？」

「え？」

「だって、プリキュアになれるのは、今んとこウチらだけなんやろ？」

「だったら、ウチらが戦うしかないやん？」

「その通りだ。」

キュアブレイズを除けば、この世界でプリキュアに変身できるのは、蛭と要しかない。
い。

蛭たちが戦わなければ、この世界をダークネスから守ることは出来ないのだ。

それでも要の答えには余りにも迷いがなかった。

蛭は未だに自分が抱いている気持ちをも、要にぶつけてみる。

「……もりくぼさんは、こわくないの?」

蛭は恐怖から、一度戦うことから背を向けた。

今だつてダークネスと戦うのは怖いし、出来るなら戦いたくないと思つている。

「蛭は、戦うことが怖い?」

だがそんな蛭に対し、要は逆に質問を返してきた。

「えと……。」

正直な気持ちを述べていいのかどうか悩んでしまい答えに戸惑うが、要はその迷いを肯定として受け取つたようだ。

「そりや、怖いよな。あんなバケモン相手に戦えなんてさ。」

蛭は、要の言葉に言い返すことが出来なかつた。

「ウチだつて怖いよ、戦うこと。でも、ウチはここが大好きだから。」

「() () ……?」

「夢ノ宮市、夢ノ宮中学、学校の皆に先生、商店街、ご近所さん、それでウチの家族。

この街で育つたから、ウチはここでの暮らしが大好きなん。

でもやつらを放つておいたら、この暮らしも、全部闇に覆われてしまうかもしれない

やろ?」

そんなこと、ウチは絶対に許さない。」

要の言葉一つ一つには、とても力強い意思が込められていた。

「だからウチは、戦うよ。ここを失ってしまうこと、それがウチにとって一番怖いことだから。」

それを思えば、やつらと戦うことなんて、怖くないよ。」

夢ノ宮市が大好きだから、戦うことを恐れない。

蛍は、要の本質を見た気がする。彼女は、生粋の戦士ビロイのようだ。

以前、自分がチェリーに言った言葉を思い出す。

自分よりもプリキュアに相応しい人はいくらでもいると。

彼女がまさしく、プリキュアに相応しい人だ。

不謹慎かもしれないが、要がプリキュアで良かったと思う蛍だった。

「あつても、蛍まで怖がるなどは言わないからね。」

「え?」

「蛍が戦いたくないって言うのなら、無理しなくていいよ。ウチだけでも何とかなるって。」

そして要は、心身共に強いだけじゃない、他人のことを気にかける優しさまで兼ね備えている。

素敵な人だ。そしてその言葉は蛍にとつて有難かった。

それは、代わりに戦うから、もう戦う必要ないよと言ってくれたようなだから。

だが、要の優しさに甘えるわけにはいかなかった。蛍は息を飲み、勇気のおまじないをする。

「蛍？」

「わっわたしだつて！わたしだつて！たたかうつてきめたの！

だからわたし．．．にげないよ。ぜったいに．．．。」

蛍にだつて、戦いたい理由がある。助けたい人がいるから戦うのだ。

ダークネスに襲われた人、キュアブレイズ、そしてチェリーたち。

もう二度と、戦うことから逃げ出したりしないと、あの時キュアブレイズに誓ったのだ。

「．．．声、大きいよ。」

「あつ．．．。」

「もう、プリキュアであることは皆には内緒、やろ？」

そんなにワキが甘いと、すぐにバレてまうよ？」

「ごっごめんなさい．．．。」

「いやいや冗談、ウチこそごめんな。蛍の気持ちも知らないで、勝手なこと言っちゃっ

て。

「……内緒、か。」

ふと要は、遠くを見るような顔をする。

「もりくぼさん？」

「いやちよつとね。他の皆は大丈夫だけど、雛子の目は誤魔化せるかなって。」

そしていきなり、雛子の名を挙げてきたのだ。

「ふじたさん？」

「あの子はウチと違って頭良いし、察しもいいからな。」

それにウチはどうも、雛子相手に隠し事するのは苦手みたいで、大体バレちゃうんだ

よね。」

確かに、要は思うことを素直に伝えられる人だ。

蛍はそんな彼女の人柄に対して好意的だが、裏を返せば隠し事が苦手とも取れる。

「まっそれでも、雛子を巻き込むわけにはいかないからなあ。」

「そうだね。わたしも、かくしごとするの、にがてだけど……がんばらなきゃ。」

「あくわかるわ。蛍思ったことすぐに態度に出るタイプっぽそうだもん。」

「ええっ!?!」

昔から親に、蛍は感情がすぐ表に出るタイプだからわかりやすいと言われてきたのだ

が、まさか出会って一週間の要にまで見透かされるとは。

「わたし・・・そんなにわかりやすいかな・・・。」

「まあそれも蛍の良いところから。」

「え？」

それはどういう意味？と聞こうと思ったその時、

「2人とも何してるの？」

「雛子!？」

「ふじたさん!？」

雛子が声をかけてきたのだ。

「何よ2人して、人の顔を見るなり驚いちゃって。」

「いや別に、急に声かけて来たからびっくりしただけやて。」

「ふくん、ところで、2人とも何でこんな人気のないところに？」

「ちよくつと気分転換にっと思っただけ。ほら、はよ教室帰ろ？」

そろそろ昼休みが終わる時間だし。」

そう言うとは、半ば強引に話題を切り上げ教室へ戻るように促した。

「・・・。」

雛子はそんな要を訝しむような目で見ていた。

確かに蛍の目から見ても、今の要の態度はらしくないように見えたが、自分が要の立場だったら、もっと大混乱に陥っていただろう。

話題を切り上げることが出来ただけで十分だ。友達になりたいと思っっている人を相手に

隠し事をするのは心が痛むが、雛子を巻き込まない為にも上手く誤魔化していくしかないのだ。

：

放課後、授業を終えた蛍は帰り支度をし始めた。

「要、今日部活休みでしょ？久しぶりに公園でサッカーしない？」
クラスメートの真が、要をサッカーに誘う。

「おっ、いいねえサッカー。言っとくけど負けないよ、真。」

「いくらスポーツバカのあんただからって、現役選手の私に敵うわけないでしょ？」
にこやかな笑顔で挑発的な言葉を送る真。どうやら彼女はサッカー部のようだ。」

「言ったな、よくし、現役選手の鼻っ柱へし折ってやるわ！」

んじやつ蛭、雛子、また明日な〜。」

「雛子、蛭ちゃん。またね〜」

「うつつん、また明日。」

「またね、真。」

「ウチは無視かい！」

要のツツコミを最後に、2人は学校を後にした。

「ぶかつない日もうんどうするんだ……。」

要のアクティブすぎる行動に呆気にとられる蛭。

「スポーツバカは体を動かさないと病気になるみたいよ。」

雛子の容赦ない言葉に呆気にとられる蛭。

「それじゃあ、私も図書館寄ってから帰るから。」

「図書館……。」

そういえば、学校の図書館にはまだ立ち寄ったことがなかった。

噂によれば、ここの図書館はかなりの大きさを誇るらしいので、前から興味はあったのだ。

「蛭ちゃん、良かったら一緒に図書館に行ってみない？」

「えと・・・じゃあ、少しだけ。」

雛子と2人きりと言うのは少し緊張するが、せっかくの機会なので螢は承諾するのだった。

：

図書館へと訪れた螢はその広さに驚いた。

ズラリと並ぶ多くの本棚には、大小様々な本で隙間なく埋められている。

そして立ち並ぶ本棚は1つの階には収まり切れず、階段を登った先にも多くあるのだ。

とても学校の図書館とは思えない大きな空間に、螢は感嘆とした声をあげる。

「ふわあ・・・、スゴくひろいね。」

「とはいっても、半数くらいは参考書や専門書だったりするけどね。」

物語の類の本は、ほとんど読み切っちゃったかな。」

「え!?!」

残りの半数の内、何割がその類を占めるのかはわからないが、この規模を考えれば相当数あるのではないだろうか。

「つて言つても、ここに置かれているもの全部読んだわけじゃないわよ？」

街の図書館とかに置かれているものと被るものもあるし、

自分で買つて読んだものもあつたから。」

雛子そう言いながら、鞆からそれなりの厚さの本を取り出した。

その表紙には蛸も身に覚えがある。小学校の頃、好きで読んでいた童話だ。

「あつそれ、ベストセラーになつたがいこくのどーわ・・・あれ？」

よく見るとタイトルが英語で書かれている。

「その原文版。英語の教材として、この図書館に置いてあるのよ。」

暇つぶしに参考書を読もうと思つて見て回つていたら、思わぬ収穫があつたわ。」

暇つぶしに参考書を読もうという発想が凄いが、それ以前に原文版と言う言葉が気にかかる。

「もしかして、ぜんぶ英語でかかれてるの？」

「勿論、元々英語圏で書かれたものよ？」

日本語版は翻訳者の視点で訳されたものだから、本の世界も、その翻訳者が見た世界になつてしまうのよ。」

それも素敵なものだけど、原文版なら原作者の創った本の世界を直接見る事が出来るのよ。

さすがに全部翻訳は出来ないから、辞書を片手に読んだのだけど、日本語版とはまた違う世界を見ることが出来て、とても素晴らしい体験だったわ。」

本を読むことで、作者が創る本の中の世界を見る。

抽象的な表現ながらも、雛子の読書に対する姿勢と熱意がありありと伝わって来た。

しかも雛子は、同じ本でも書き手によって見る世界を変えられるのだ。

初めて見る雛子の読書家としての一面に、蛍はただ圧倒された。

「今日はこの第二章を借りに来たの。蛍ちゃんも読んだことあるのなら、借りてみる？」

「えと……やめておくれ……。」

彼女の厚意を無下にするのは気送れるが、例えば辞書を片手に添えても、読むことが出来ないだろう。

「そっか。」

雛子はそんな蛍に気を悪くすることもなく、微笑みながら第二章のある本棚へと向かった。

蛍も雛子に続き、本棚から適当な本を見繕い始めた。

そして読みたい本を借りた後、雛子を探して図書館を見回る。

「あつ、いた。ふじたさん。」

既に席についていた雛子は、先ほど見せた童話の原文版第二章を読み始めていた。

片手に英和辞典を開きながら、真剣な表情で本を見つめている。

自分が声をかけたことにも気づいていないようだ。

(ジャマしちゃわるいか。)

蛍は雛子の目の前の席に座り、借りた本を読み始めた。

読みながら時折、雛子の様子を伺う。常に真剣かと思われたその表情は、時には微笑

み、時には息を飲み、時には吸い込まれるように文字を目で追っていた。

今の雛子の視界に、蛍の姿は映っていない。その目は既に本の世界の中だ。

彼女の目の前には今、どんな世界が、景色が拡がっているのだろう。

そんなことを考えながら、蛍も久しぶりに読書に励むことにした。

しばらくして蛍は、本から顔をあげ、図書館の時計を見上げる。

「わっ、もうこんなじかん。」

そろそろ夕飯の支度に取りかからなくてはならない時間だ。

久しぶりに読書をしたが、やはり本を読み出すとあつという間に時間は過ぎるもの

だ。

帰るために蛍が席を立つと、

「あつ蛍ちゃん。」

椅子を引く音が聞こえたのか、雛子が本の世界から戻って来たようだ。

「あつごめんなさい、ふじたさん。じゃましちゃった？」

「ううん。私こそごめんね。私から誘ったのに、

蛍ちゃんが目の前にいたことに気づかなくて。」

「ぜんぜん、きにしてないよ。ふじたさん、スゴくたのしそうにほんをよんでたもん。

じゃましちやわるいなおもったから。」

「ふふつ、ありがとう。そろそろ帰るの？」

「うん、ゆうごはんのしたくしなくちやいけないから。」

「良かったら、一緒に帰る？」

「え？」

急な誘いに驚く蛍。てつきりまだ残って本を読むのかと思つたからだ。

「わたしは、だいじょうぶだよ。」

蛍としても、特に断る理由はないため、蛍は雛子と一緒に帰ることにした。

：

帰り道。雛子と今日読んだ本の話題に花を咲かせていた蛭は、誰かと一緒に帰るのは、今日が初めてだということをも今になって気づいた。

(そういえば、一週間前は、あんなにふあんだったつけ……。)

あの時は誘ってくれた要と雛子の前から逃げ出してしまったが、この一週間で2人と普通に会話が出来ようになった今、自然と一緒に帰られるようになったのだ。

(……かわれたかな……わたし……。)

また一つ、確かな変化を実感する蛭。

「蛭ちゃんは、ファンタジーものが好きなんだ。」

「うん、まほうつかいさんとか、ようせいさんとか、むかしはあこがれてたんだ。」

まさか自分が魔法使いになった上に妖精のパートナーが出来るとは夢にも思っていなかったが。

「ふじたさんは、どんなほんがすきななの？」

「私は……なんでも読むかな？」

ファンタジーにSF、サスペンス。あつても、自叙伝やノンフィクションとかもたま

に読むけど、どちらかと言えば創作物が好きね。」

「ふじたさんはほんとうに、ほんがすきなんだね。」

何気なく語った言葉だが、雛子はなぜかその言葉を聞いて、複雑な表情を浮かべた。

「……ふじたさん？」

雛子の様子が気になる蛍。すると雛子の口から驚きの言葉が語られた。

「私ね、昔友達いなかったんだ。」

「え？」

突然の告白に蛍は驚く。

「自分から友達を作ることが苦手で、学校にいる間、ずっと一人だった。」

でも私は、一人で本を読むのが好きだから、一人で過ごせる時間があればいいって、ずっと自分に言い聞かせていたの。

ホントは友達が欲しかったくせにね。」

蛍にとつては耳を疑うような内容だ。

少なくとも今の雛子は、人と接することが苦手のようには見えない。

転校初日、自分に対しても分け隔てなく優しくしてくれたし、要を始めとするクラスの友人達とは、遠慮のないやり取りをしていた。

例え昔の話であつたとしても、雛子のそんな姿は想像できないのだ。

「もしも、要と会っていなかったら、今も一人だったかもしれない。」
「もりくぼさん？」

「要はね、私が嫌だと言ってても、ずっと私を引っ張りまわして、無理やり自分の輪の中に、私を巻き込もうとしたのよ。」

全く、失礼な奴だと思わない？」

だが雛子の言葉には、一切の不快感を感じられなかった。むしろ昔を懐かしむような感じだった。

「でもね、気が付いたら私の周りには、たくさんさんの友達が出来ていたの。」

要に、真に、愛子。みんな私の大切な友達。

だから・・・蛍ちゃんの気持ち、少しだけわかるんだ。」

「そう、だったんだ・・・。」

「ごめんね急に、こんな話をしてしまって。でも、蛍ちゃんにはいつかこの話をしようと思っただの。」

「え・・・？」

「人付き合いに悩んだり、落ち込んだりすることは、別に不思議じゃないってこと。」

だから蛍ちゃん、あんまり自分の事、責めたり思いつめなくてもいいからね。」

私はいっただって、蛍ちゃんの味方だから。」

もしかしたら雛子は、自分を励ます為に自身の過去について話してくれたのかもしれない。

同じような経験を、過去に雛子もしたことがあるから、あまり気に病む必要はないと。それは自分と同じ境遇に立つ人を見た故の、同情から来るものなのかもしれないが、そもそも蛍にとって、ここまで親身になって心配してくれる人はいなかったのだ。

だから、蛍は雛子の厚意が、素直に嬉しかった。

「ふじたさん……うん、ありがとう……。」

「どういたしまして。」

話をしていると、蛍と雛子は分かれ道までたどり着いた。

「じゃあ、わたしのおうち、こっちだから。」

「うん……ねえ、蛍ちゃん。」

別れの挨拶をしようと思った蛍だが、ふと雛子が声をかけてきた。

「なに？ふじたさん。」

「お昼休み、要と何を話していたの？」

「えっ……。」

昼休みのことを突然訪ねられ、蛍は息を飲む。

本当のことを話してしまうと、雛子を戦いに巻き込んでしまうことになる。

だが嘘をつくことが苦手な蛭は、自分でもわかるほど狼狽する。

これでは雛子の不信感を募らせるばかりだと言うのに、落ち着くことが出来なかつた。

「……私には、言えないことなの？」

結局蛭に出来ることは、口を割らないことだけだつた。

不審に思われるだろうが、真実を告げて雛子を巻き込んでしまうよりはマシだ。

だが雛子は過去の自分を重ねてまで、蛭の事を心配してくれたのだ。

そんな彼女に対して隠し事をしなければいけないことに胸が痛む。

いつそ全て打ち明けられたら、どれほど楽だろうが。

「……ごめんなさい。でも、おはなしするわけには、いかないから……。」

蛭が告げられる言葉は、これが限界だつた。

「……こつちこそごめんね。急に聞いちやつて。」

だが意外なほど、雛子はあつさりとは折れてくれた。

「じゃあ、蛭ちゃん、また明日、学校でね。」

「え？うっうん、またあした。」

雛子はやや早歩きで、家まで向かつた。

その背中を見送りながら、蛭はこの先ずつと、雛子に秘密を抱えていかなければいけ

ないことを気に病むのだった。

第4話・Bパート

帰り道、蛩と別れ家に着いた雛子は自室へと戻っていった。

「あつ雛子くおかえりく。」

すると、レモンが自分を出迎えてくれた。そんな彼女に雛子は笑顔を見せる。

昨日聞いた話によれば、レモンは離れ離れになった友人たちを探して、この夢ノ宮市まで来たようだ。

だがこれまで野宿同然の生活を送っていたらしく、雛子はしばらくの間、レモンに自分の部屋を宿代わりに貸すことにしたのだ。

当然、家族には内緒で。

「レモンちゃんもお帰り。お友達は見つかった？」

「ぜんぜん。でもこの近くにいることは間違いないからく」

レモンががんばって探しちゃうよく。」

独特の間延びした口調を持つレモンは、その口調の通りのんびり屋でマイペースな性格のようだ。

「そっか、無理しないでね。」

雛子はそう言い、ベッドに腰掛ける。

「?雛子。今日何かあったの?なんか暗い顔してるよ?」

「・・・ちよつと、色々あつてね。」

雛子は蛍との会話を思い出す。蛍と要が何かを隠していることはすぐにわかった。だから蛍からその隠し事を聞くために、自分の過去を打ち明けた。

自分が彼女と同じ境遇を持つことを話し、親近感を与えることが出来れば、ひよつとしたら打ち明けてくれるのではないかと思つたのだ。

(酷いやり方よね・・・。)

雛子は今になって罪悪感にかられる。

大体自分と蛍の境遇は、似ているようで全く似ていない。

確かに雛子も昔は人付き合いが苦手で、友達がいなかったのは事実だ。

だが現実の受け止め方が、蛍とは大違いだった。

雛子は友達が出来ない理由を他人のせいにし、自分から人を遠ざけたのだ。

不愛想な態度、冷たい物言い、他人に嫌われる振る舞いは何だつてしてきた。

私が嫌われているのは自分のせいじゃない。

私を受け入れてくれないお前たちのせいだと、そんな意味のない自己主張を込めて。

拳句の果てに他者と過ごす時間がないことも、1人で本を読むための時間が増えたの

だから、喜ばしいことだと思ひ込むようになった。

趣味の読書さえ、友達が出来ない理由を正当化する材料にした。

そんなどうしようもなく捻くれ者な自分に対して、蛍は自分の弱さを受け止め、自分を変えようと必死に頑張っているのだ。

同じ境遇だなんて失礼にもほどがある。

(それでも、どうしても知りたかった……。要が何を隠してるのか。)

雛子は横にいるレモンを見る。昨日の夜、彼女から聞いた話は、レモンはこの世界とは違う、別の世界から来たということ。

そして離れ離れになった友達を探して、この世界を彷徨っていたということだけだ。

なぜレモン達はこちらの世界に来たのか、という質問には答えてくれなかった。

代わりに返って来た答えはこうだ。

雛子を巻き込みたくないの。雛子はいい人だから。

最初の内は、この部屋を宿にすることさえ渋っていたのだ。

さすがに放っておくことも出来ないから、半ば無理やり言うことを聞かせたが、巻き込みたくないというからには、ただ事ではない事情を抱えているのだろう。

そして雛子は、要と蛍がその事情に巻き込まれているのではないだろうかと思ひ始めた。

無論、何の関連性もなく突拍子もない事だと思うが、それ以外に要が自分に隠し事を
する理由が思いつかないのだ。

要と雛子はこれまで、どのような悩みでもお互いに相談し合ってきたが、今回は違っ
た。

あんな風に余所余所しい態度まで取って、無理やり話題を切り上げようとする要は、
今までみたことがない。だから雛子は要のことが心配なのだ。

蛍の良心を利用してまで、話を聞こうとするほどに。

(やっぱり明日、もう一度話を聞こう。)

どうしても要の事が気がかりだった雛子は、明日、改めて問いかけようと思ったのだ。

：

次の日、蛍は雛子の様子を伺っていたが、特に変わった風には見られなかった。
要ともいつも通り口喧嘩する光景から、2人の間に溝があるようにも思えない。

だが、昨日の別れ際の様子では、話を聞くことを諦めたようにも見えなかった。

もしまた同じことを聞かれたら、どう答えるのが一番なのか。

蛍がそんなことを考えている内に、あつという間に時間が過ぎ放課後を迎えていた。

「蛍ちゃん。もう帰るの?」

雛子から声がかかる。

今日は食材の買い出しに行かなければならないので、いつもよりも早くに学校を出るつもりだ。

「うん、いまから、かいものにいかなくちやいけないから。」

「そっか。・・・昨日はごめんなさい。」

雛子が蛍にしか聞こえない小声で謝罪してきた。

「え?」

「蛍ちゃんに私の過去を話したことなんだけど、私、自分の過去を話せば、蛍ちゃんが私に隠していること、教えてくれるかなって思ったの。」

蛍ちゃんの思いを利用するような真似して・・・本当にごめんなさい。」
なんだそんなことか、と蛍は思った。

それでもあの時かけてくれた、『自分の事を責めたり、思いつめたりしなくても大丈夫。』という言葉に嘘があるとは思えないし、元を辿れば、雛子に隠し事をしている自分が悪いのだ。

彼女が気に病むようなことはない。

「ううん、わたしがふじたさんに、かくしごとをしてるのがいけないんだし、わたしこそ、はなせなくてごめんなさい。」

蛍も雛子に対して、『隠し事がある』ことは隠すつもりはなかった。

最も、隠し事をしていること自体はバレているのだが、

「蛍ちゃんが謝ることなんてないよ。呼び止めちゃってごめんね。」

「ううん、だいじょうぶ。それじゃあ、またあしたね。ふじたさん。」

「うん、また明日。」

どうやら雛子との仲がこじれることはないようだ。

その事に安堵しながら、蛍は買い物へと向かうのだった。

∴

放課後、雛子はいつも通り図書館で時間を潰し、要の部活が終わるのを待っていた。だが、本を読むのには集中できなかつた。

図書館にいた時間はいつもと同じはずなのに、こんなにも長く感じたのは初めてだ。すると、部活を終えた要が姿を見せた。

「雛子……?」

その表情はいつもと違い、どこか怪訝を感じているように見えた。無理もない。いつもと違うのは、要だけではないことは自覚している。

「要、一緒に帰ろう。」

普段ならこんな言葉、要に対して素直には言わない。

どうやら思っていた以上に、今の自分には余裕がないようだ。

「……うん。」

要から少し間を置いた返事を聞き、2人は一緒に帰ることにした。

要と並んでの帰り道。雛子は要と一言も口を利かなかった。

今までだって、特にお喋りすることなく帰ったことはあるが、ここまで重苦しい空気は初めてだ。

だが、要との間にここまでの確執を感じるのもこれで終わりだ。

「雛子……。」

すると要の方から先に声があがった。雛子はその場で立ち止まる。

だが要から二の句がなかなか出てこなかった。

重苦しい空気に耐え兼ねて、名前を呼んだだけなのだろう。雛子はこの機を逃さず、要から隠し事を聞き出すことにした。

「要。私さ、要に対しての物言いには遠慮がないって自覚あるんだ。」

「え？」

よく周りからも言われることだ。雛子は要に対してだけは辛辣だと。

「でもね、それは私が、要に対しては上辺を取り繕いたくないからなんだよ？」

穏やかでおっとりとした文学少女。周りからの雛子の評判は大体がこうだ。

そんな清楚なものではない。独りぼっちだった自分に多くの友達を与えてくれた要に対して、素直に感謝の気持ちも伝えられない捻くれ者。

彼女に対する好意を素直に向けるのが癪だから、辛辣な態度と物言いでも誤魔化す。

藤田 雛子とはそういう少女だ。でも要は、そんな雛子を受け入れて友達になつてくれたのだ。

だから雛子は、要に対して素直になれない自分を、敢えて直そうとは思わなかった。

それが自分なりの『正直』な態度だから。我ながら捻じ曲がった考え方だと思う。

「だから……今までみたいになら直に言うね。要、私に何を隠しているの？」

「……」

しばらく無言の間が続いたが、要は静かに口を開いた。

「ごめん……言えんよ。雛子を巻き込むわけにはいかないから。」

雛子にとってその答えは予想通りのものだった。

それでも雛子の中に怒りに似た感情が、ふつふつと込み上げてくる。

「巻き込みたくないって……今更何よ。」

「雛子?」

「あの時、嫌がる私を無理やり引つ張りまわしたのはどこの誰よ!?

友達なんていらなくて言ったのに勝手に友達になつて!

勝手に自分のコミュニケーションに私を加えて!

あなたの都合に巻き込まれるなんて、今までだつてずっとそうだったじゃない!

だから!もつと私の事、巻き込んでよ!!要!!」

なぜこんな捻くれた言葉でなければ、思いを伝えることが出来ないのだろう。

要のことが心配だ、悩みがあるなら力になりたい。

それだけのことを素直に伝えればいいのに、わざわざ逆上するような態度を取つてし

まう。

それでも要なら、こんな言葉でも

自分の真意を紡ぎ取ってくれると、雛子は信じているのだ。

そしてしばし逡巡した後、要はようやくやく笑顔を見せた。

「……ははっ、やっぱこうなるよな。わかってたことなのに。」

「要……。」

「ウチの降参だよ。やっぱり雛子には隠し事は出来ない。ううん、したくないや。」

その言葉を聞き、雛子は安堵した。やっぱり要は要だ。自分の良く知る要なのだ。

「とんでもない話だし、雛子にも危険が及ぶかもしれないけど、それでも聞いてくれる？」

「勿論よ。聞かせて要。」

「……実はね。」

だが要が隠し事を話そうとしたその時、

要は本当に、私の友達なの？

「え……？」

雛子の頭の中に、声が聞こえた。

：

雛子の様子がおかしい。突然頭を抱え、辺りを見回し始める。

「雛子……?」

彼女に問おうとしたその時、要の全身に悪寒が走る。

「っ!?まさか!」

初めて変身したあの時と同じ感覚だ。体中が震え、全身の感覚が危険信号を送り続ける。

間違いない。ダークネスが現れたのだ。

「いや……何?何で私の声が……。」

そして雛子の様子から、彼女に何が起こったのか分かった。

自分の内側の声が、頭の中に響いているのだ。

「雛子!」

要は思わず彼女の手を取る。だが、

要は本当に私の友達なの?

彼女の手を取った途端、要の頭にも声が聞こえた。

「これって・・・雛子の・・・？」

私は一人でいたかったのに、要は私から一人の時間を奪ったのよ？

そして望んでもいない時間を押し付けてきた。

そんな要を、本当に友達だと思ってるの？

雛子の手を通じて、雛子の声が要の頭に響く。

闇の牢獄の中で響き渡る声は、その人が今まで隠してきた本心だ。

それは要自身が身を以って知っている。

ということは、これが雛子の本心・・・？

そもそも私は友達なんて必要なかったのよ。

それなのに勝手に友達呼ばわりされて、ずっと迷惑だったじゃない。

鬱陶しかったじゃない。

私は、ずっと一人でいたかったはずよ？

要は血の気が引いていくのを感じた。

もしかして自分は、雛子のことをずっと誤解していたのではないのか？
彼女の何を何も理解できていなかったのではないだろうか？

「いやっ……いやあああつ！」

だが雛子の叫びを聞いて、要は我に返った。

雛子は今苦しんでいる。

ずっと心の奥底に閉じ込めていた思いを無理やり引きずり出されているのだ。
今は自分のことで悩んでいる場合ではない。

「要ー！」

するとベリイがこちらに駆けつけてきた。

「ベリイー！どうしよう、雛子が！」

「雛子？彼女のことか？」

ベリイは雛子を一瞥する。

「この空間に残っているということは、闇の牢獄に囚われかけているのか。
でもまだ閉じ込められてはいない。早く元凶を絶つんだ。

この空間を作り出しているダークネスを追い払おう！」

「でも……それって、雛子を1人でここに置いてくつてこと？」

この状態の雛子を1人で放つておくことなど、要には出来なかった。

例え雛子が本心で自分のことを邪険していようと、要に取つて雛子はかけがえのない友達なのだから。

「だけど、それしか彼女を助ける方法はない！」

自分を叱咤するベリイに、要は表情を曇らせるが、

「かな……め……。」

「雛子……。」

それでも、今にも闇の牢獄へ囚われそうな状態の雛子を、独りぼっちにするなんて出来なかった。

「……ごめんベリイ、ウチ、雛子のこと放つとけんよ。」

「要！キュアシャインがもう戦っているのかもしれないぞ！」

彼女を一人で戦わせてもいいのか!？」

「っ!？」

だが雛子の事で頭がいっぱいだった要は、蛍のことを失念していた。

あの子が1人でダークネスと戦えるはずがない。

もしもこのまま雛子の側にいれば、蛍を見捨てることになるのだ。

「ウチは・・・どうすれば・・・。」

雛子と蛍。2人を天秤にかけられた要は、その場で佇むことしか出来なかった。

：

買い物から帰った蛍は、さっそく夕食の支度に取りかかる。

今日の献立は肉じゃがだ。

昨日、自室に置いてある料理本を読んだチエリーが、どうしても食べてみたいとリクエストしてきたのだ。

手早く野菜と牛肉を切り終えた蛍は、それらを鍋に入れて煮込み始める。

「わく、いい匂い。」

肉じゃがの匂いにつられたチエリーが、鍋に顔を近づける。

「チエリーちゃん。ちゃんと、にこんでからじゃないとたべれないから・・・。」

だが次の瞬間、蛍の体に悪寒が走った。

「っ!？」

「闇の波動!?!」

続いて隣にいたチェリーも反応する。

「うっ……。」

そしていつものように、蛍の頭の中に声が響く。

「蛍、大丈夫!?!」

「だいじょうぶ……、へいきだよ。」

これ以上、自分の声に惑わされてたまるか。

コンロの火を消した蛍は、両手を胸に添える。

(リリンちゃん……。)

リリンを想い、彼女の言葉を思い出し、勇気のおまじないをする。

「がんばれ、わたし!」

そして光の中からパクトが現れた。蛍はパクトを手取る。

「プリキュア!ホープ・イン・マイハート!」

光に包まれた蛍は、キュアシャインへと変身した。

「世界と照らす、希望の光!キュアシャイン!」

蛍はようやく声に惑わされず、変身出来るようになったのだ。

「いそごっ、チェリーちゃん。」

「ええー！」

チェリーと共に家を出た蛭は、ダークネスの反応がする方へと向かって行った。

蛭がダークネスの気配がする地点まで辿りつくと、眼前に一人の青年が宙を飛んでいた。

リリースでも、以前戦ったサブナックでもない。

サブナックと比べると、幾らか人に近い形状をしていたが、マントと一体化した両腕、頭に生えた二本の角、脚部は鳥類のように鋭く尖った鉤爪が人外であることを訴えている。

蛭はその外見から、『吸血鬼』を連想した。

「また新しい行動隊長のようね。」

隣にいるチェリーがそう呟く。一体、行動隊長とは何人いるのだろうか。

するとその青年は、右手に抱えた黒の球体を宙に差し出した。

「ダークネスが行動隊長、ダンタリアの名に置いて命ずる。」

ソルダークよ、世界に闇を撒き散らせ。」

ダンタリア。それがあの吸血鬼の名前のようだ。

ダンタリアの号令と共に、黒の球体はソルダークへと形を変える。

「ガアアアアアアアア!!」

そして甲高い産声をあげるソルダーク。いつ聞いてもこの声には慣れそうにない。「キュアスパークはまだ来ていないみたいね。」

言われてみれば、キュアスパークの気配はしなかった。

彼女の到着を待とうかと思つたが、ソルダークの体から放たれる絶望の闇が空を覆い始める。

「1人であいつらと戦うのは不利よ。一先ずキュアスパークの到着を待ちましょう。」

チェリーがそう提案する。確かに蛍1人では、行動隊長とソルダークを同時に相手をすることは出来ないだろう。以前サブナックと戦つた時のように。

チェリーの判断は正しい。だが蛍はこのままじつとしていることが出来なかった。

「・・・でも、あのぜつぼうのやみがひろがれば、やみのろうごくに

とらわれる人がふえていくんだよね?」

確かチェリーがそう言っていたはずだ。

絶望の闇は、闇の牢獄の強度を高め、闇の牢獄の強度が高まると、囚われる人たちも数を増やしていくと。

「そう・・・だけど。」

「それなら、ほうっておけない。」

「え？」

「こうしてるあいだにも、たくさんの人が、やみのろうごくにつかまって、こわい思いをしているのかもしれないだよ。」

「そんなの、みすごすことなんて、できない。」

一度、闇の牢獄に完全に閉じ込められた蛍だからこそわかる恐怖。

あんな怖い思いを他の人にさせないためにも、蛍はプリキュアとして戦うことを決意したのだ。

「わたしがたたかえば、わたしとたたかうために力をつかってくれるはず、ぜつぼうのやみがひろがるのを、おさえられるかもしれない。」

絶望の闇はダークネスの力の源とも聞いた。ならば戦う力としても使われているはずだ。

戦うことに力を使わせれば、闇の牢獄を強化することは防げるかもしれない。

「そんなの無茶よ！ 蛍一人であいつらを相手にするなんて！」

「前だってそれで危ない目にあつたじゃない！」

「それに、だれかのぜつぼうが、せかいにまかれるなんて、そんなのぜつたいに、みのがせない！」

「蛍はそう叫ぶ。誰もが抱えている心の内側に封じ込めた思い。」

それを無理やり引きずり出して、絶望に変えて世界へと撒き散らす。

そのダークネスの行いが、蛍には何よりも許せないのだ。

「蛍！」

チェリーの静止を聞かず、蛍は一人でダンタリアの元へと飛んでいった。

：

「ダークネス！」

蛍がダンタリアの前に姿を見せる。

「君がプリキュアかい？それもピンク色の……。」

「そうか、君が噂に聞く弱虫キュアシャインだね？」

「よわむし……。」

一体ダークネスの間でどんな噂が流れているのやら。それに初対面なのに酷い言い草だ。

これまでの行動隊長とは違い、ダンタリアは随分と饒舌なようだ。

だが自分が弱虫であることは、自分自身が一番よくわかっている。今更他人に指摘されたところで狼狽えはしない。

「おや、意外と冷静だね。」

それに今は、そんな言葉に心を乱されている暇はない。

キュアスパークが来るまでの間、1人で戦わなければいけないのだから。

「これいじょう、ぜつぼうのやみをひろがせはしない！」

蛭はダンタリアの元へ飛んでいく。

「いいだろう。少し遊んであげる。ソルダークー！」

ダンタリアの呼びかけと共に、ソルダークが蛭へ拳を降ろしてきた。

蛭は空中で体を翻し回避するが、地面に叩き付けられた拳がコンクリートを抉り、粉塵と共に衝撃を巻き起こす。

蛭は粉塵に巻き込まれながらも、何とか地面に手を付き態勢を立て直す。

「はああっ！」

そしてそのままソルダークへと飛び、勢いよく振りかぶった拳を叩き付けた。

ソルダークは僅かに唸り、後方へとよろめく。

よし、前に戦ったソルダークと違って、自分の打撃でもダメージは受けるようだ。

「ふっ。」

だがダンタリアは不敵な笑みを浮かべる。

「ソルダーク！」

そしてダンタリアの呼びかけと共に、ソルダークは両手を蛍へ向ける。

すると指先が分離し、蛍めがけて飛んでいったのだ。

「えっ!?!」

放たれた指先はジェットを噴射させ空中を飛び交う。

蛍はそれを次々と回避するが、最後の一発を回避しきれなかった。

両腕を交差して受け止めるが、直後、蛍に触れたソルダークの指先が爆発を引き起こす。

「きゃあっ！」

「キュアシャイン!!」

チエリーの叫び声が聞こえる。爆発を受けた蛍は大きく吹き飛ぶも、何とか立つことが出来た。

それにしても、あの指先の性質はまるでミサイルのようだ。

「ソルダーク。畳みかけてしまえ！」

気が付くとソルダークの指先が再生していた。そして10本の指先を放ち再生するが4度も繰り返される。

40発ものあれを立て続けに受けたら、さすがにタダでは済まない。

蛍は自身に狙いを定めて飛んでくるミサイルを無視しソルダークの元へと走って行った。

やがてミサイルが蛍に迫り、着弾しそうになるが。

(いまだ！)

蛍はギリギリまでミサイルを引きつけ、ミサイルを潜るように前方へと跳躍した。

先ほどまで蛍がいた地点にミサイルが着弾、爆発し、その爆風を利用して長距離を飛び上がる。

目前まで迫った全てのミサイルを一度に回避しながら、ソルダークの元へと急接近したのだ。

蛍は後ろを振り返らずソルダークの元まで一気に迫る。

だが、

「キュアシャイン！後ろ!!」

チエリーの声が聞こえ、蛍が後ろを振り向くと、

「え・・・？」

先ほど回避したはずのミサイルが、こちらへ方向転換してきたのだ。

だが既にミサイルは目と鼻の先まで迫っており、回避することが出来なかった。

「きゃあああつ!!」

立て続けに巻き起こる爆発を受け、螢は地面に倒れ込む。

「僕が厳選し、熟成した素材から創りだしたソルダークだ。

リリスやサブナツクのものと一緒にしてもらっちゃ困るね。」

「ううっ……。」

まだ、手足を動かすことは出来る。力を入れれば立ち上がれるはずだ。

「やれやれ、大人しくお仲間の到着を待てば良かったのに、絶望の闇を払げたくないから？」

そんな個人的感情で自らの身を危険に晒すなんて、君はバカだね。

それに、気づいているかい？」

ダンタリアはソルダークを指さす。見るとソルダークの頭上から、絶望の闇が放たれていた。

「っ!？」

「君みたいな弱虫、絶望の闇を撒く片手間で相手が出来るんだよ。

恨むのなら、自分の弱さを恨むんだね。」

自分一人でも戦いに力を使わせれば、絶望を払げるのを食い止められるかもしれない。そんな考えが既に甘かったのだ。

蛭は唇を噛みしめるが、悔しがるのは後回しだ。

絶望の闇を払げないために、何が何でも戦いに力を使わせるしかない。

「はあああつー！」

蛭は力を振り絞って立ち上がり、ソルダークへと立ち向かう。

だが次の瞬間、物陰から一斉にミサイルが姿を現した。

「待ってキュアシャイン！それは挑発よ！行つてはダメ！！」

それに気づいたチェリーが警告する。先ほど放たれた40発の内、幾つかが爆発に紛れて物陰に潜んだのだ。

ミサイルは既に蛭を包囲し、一斉に降り注いだ。

「キュアシャイン！！」

ミサイルの同時攻撃を受けた蛭は、その場に膝崩れに倒れ込む。

「呆気ないな。想像以上の弱さだよ、君。」

先ほどまでの挑発的な物言いとは異なり、明らかに侮蔑の入り混じった言葉だった。だが蛭はそれに意を介さない。

地面を這いつくばりながらソルダークに近寄り、その足を掴む。

「なに？」

「ぜっつたいに．．．させないから．．．。」

僅かな力を振り絞り、必死に立ち上がろうとする蛍。侮蔑な眼差しでそれを見ていたダンタリアから、徐々に笑みが消えていく。

「……へえ、しぶとさだけは一人前だね。いいよ。望み通りまず君を潰すことに

全力を出してあげる。ソルダーク！」

ダンタリアの声を聞いたソルダークは、絶望の闇の放出を中断する。

そしてその分の力を込め、再び蛍へ向けてミサイルの雨を放った。

：

雛子は自分の頭の中に響く声にずっと抗い続けていた。だが同時に聞こえてくる要の音が

やがて聞こえなくなり、彼女の手のひらの温もりも遠ざかっていく。

やがて雛子自身の意識さえも昏倒とし始めた。

(私はずっと……要のことを……。)

邪魔だつて思っていたはずよ。今だつてそう。
彼女にだけ辛辣に当たるも、本当は鬱陶しいからでしょ？

(違う……私は……。)

私は、1人が好きなの。だから友達なんて、いらない。

(私は……。)

否定できなかった。それは事実だからだ。雛子は1人の時間を好む。
誰にも邪魔されない1人だけの世界に浸れる時間を。

だから読書が好きはずよ。

本を読んでいる間はずつと1人だけの世界でいられるから。

(だから、要が鬱陶しかった……。勝手に付きまとして、勝手に友達扱いして……。)

そうよ。私は要のことを嫌っていたはずよ。

(・・・これが私の本心・・・なの・・・)

捻くれ者である自覚はあった。でも想像以上に、醜い本心だった。

こんなのが私、藤田雛子の本来の姿だなって・・・。

だが雛子が絶望に身を委ねようとしたその時、『ある事』に気がつく。

(・・・あれ・・・この感情・・・前にも感じたことが・・・)

雛子の脳裏にかつての記憶が蘇る。友達が出来なかった時の記憶。

クラスメートとわざと距離を離し始めた時の記憶。そして、要と出会った時の記憶。

(・・・そうだ・・・私、昨日蛍ちゃんに言ったばかりじゃない・・・)

友達が出来なくて・・・大好きだった読書を逃げ道にして・・・本当は1人が寂しかったのに、素直になれなくて、勝手に付きまとう要を鬱陶しく思ってたって・・・)

雛子は徐々に認識し始める。声の主は過去の自分だ。

だから否定することが出来なかったのだ。それは過去の自分が抱いた本心なのだから。

(じゃあ、今は・・・?)

今なお、要のことが鬱陶しいか?

1人の時間だけが好きか?

読書が好きなのは、他人と関わらなくて済むからか？

答えはもう、わかっていた。

「その通りね……。私は1人の時間が好きよ……。要のことだって……

ずっと鬱陶しく思っていたわ……。でも、今は違う！」

雛子は過去の亡霊を振り払うように、言葉を強める。

「要は確かに、私から1人の時間を奪った！」

でもその代わりに、みんなといられる時間をくれたの！」

そんな時間に何の意味があるの？ 私にとって、1人の時間以上に大切な時間なんて。

「違う！ 要と出会えたおかげで私は、1人じゃ決して知ることのできない世界を

知ることが出来たの!!」

図書館に引きこもり、家に閉じこもり、本を読んでいるだけでは決して経験することが出来なかつた世界。

出来なかつた世界。

「それに要は……。今でも私が1人でいたいと思えば1人にしてくれる。

一緒にいたいと思えば一緒にいてくれる。そんな私のわがままを、要は許してくれる

の!!」

みんなと過ごす時間も大切なものとなった今でも、1人の時間は捨てられない。

そんな自分のわがままを許容してくれる要は、雛子にとって最高の親友だ。

雛子は1つ息を継ぐ。そして過去の亡霊を追い払うために、ありつたけの気持ちを込める。

「私は……1人でいる時間も!!要と、みんなと一緒に過ごす時間も!!」

大好きなんだからああああああ!!」

すると雛子の胸から、強烈な光が解き放たれた。

「え……?」

光は周囲を明るく照らし、雛子は失いかけていた五感を取り戻す。

やがて光が収束し、1つのパクトが姿を現した。雛子がそれを手に取った瞬間、頭の中にイメージが流れ込む。

雛子はそれを無意識の内になぞっていった。

「プリキュア!・ホープ・イン・マイハート!」

直後。パクトから放たれた光が雛子を包み込んだ。

光に包まれた雛子は、重力を無視して回転する。雛子を纏う光も彼女の周囲を高速に旋回する。

天高く掲げた両手、地に向けて伸ばした両足を纏う光はやがて回転を止め、身に纏う光と共に弾け飛び黄色のドレスとなつて雛子に纏う。

そして飛散した光は再び雛子の頭部を旋回し、髪を先端までなぞり始めた。

光を受けた雛子の髪は黄色に染まり長く伸びていく。

やがて先端まで辿りついた光は、2つの輪を形作り、雛子の髪を2つに分けて結つていく。

髪を結つた光は雛子の頭上まで登り再び弾け飛び、雪のように降りかかつてドレスをリボンとフリルでデコレーションしていった。

そしてメガネが弾け飛び、瞳の色も黄色に変わり笑顔でウィンク。

最後に雛子の周囲を覆う水晶が万華鏡のように彼女の姿を映し出し、雛子の全身から放たれた光が周囲を覆う水晶に反射、輝かしいライトアップと共に新たなプリキュアが誕生した。

「世界を包む、水晶の輝き！キュアプリズム！」

雛子は4人目のプリキュア、キュアプリズムへと変身を果たすのだった。

：

雛子の視界が晴れやかになると、元いた景色が徐々に見えてきた。

音もはつきりと聞こえる。そして目の前には驚く表情を見せる要がいた。

どうやら戻って来たようだ。と思い自分の姿を見てみると、

「あれ？私……なにこの格好!？」

いつの間にかリボンとフリルでデコレートされたアイドルの衣装のようなものを身に着けているのだ。

「雛子ー!」

だが困惑する雛子をよそに、要が抱きついてきた。

彼女の力で抱きしめられたので、少し苦しいが我慢する。安堵したのはこちらも同じだからだ。

要と離れてしまうかもしれないと思ったのだから。

「要……。」

「でも驚いた。雛子が4人目のプリキュアだったなんて。」

そして要から聞いたことのない言葉が飛んでくる。プリキュア？私が？

「プリキュアって……?」

要に問いかけようとした直後、彼女の胸が光だし、何も無い空間からパクトが出現した。

突然、魔法のような出来事が目の前に起こり、驚く雛子。

そしてそのパクトは彼女にも身に覚えがあった。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

ついさつき自分も同じことを言った気がするその言葉と同時に、青い光が要を包み込んだ。

青い光は一瞬で消し飛び、中から自分と似たような青い服を纏う要の姿が現れた。

いや、要に似た姿だ。雛子の知る要はここまで長髪ではないしそもそも青髪ではない。瞳の色もカラーコンタクトを入れたかのように青かった。

「要……なの？」

思わず聞いてしまう雛子。

「細かいことは後で説明する。急ぐ、要が待ってる。」

「蛍ちゃん？」

なぜそこで蛍の名が出てくるのだろうか？

次々と目を疑うことばかりが続いたが、要は雛子の手を取る。

「え？」

「ベリイ、こつち。」

「ああつ」

ぬいぐるみが喋った!と言おうとする前に、雛子とぬいぐるみもろとも青い光を纏った要は、驚異的な速度で移動し始めた。

「ちよつ！ええ〜!!？」

「しつかり捕まり！振り落とされんなよ！」

新幹線だつてここまでのスピードは出ないであろう速度で、一気に嫌な気配がする方向へ移動する要。

この先に蛍がいるのだろうか？そしてよく見ると周囲の景色もおかしかった。

確かに今は夕方だが、今の時期はここまで暗かっただろうか？それに自分たち以外、まるで人の気配が感じられない。

「いやしかし、改まって言われると、さすがに恥ずかしいな。」

そんな雛子の心境など無視して要がとんでもない爆弾発言をする。雛子は一瞬でその言葉を

理解する。要が恥ずかしがるようなことを今しがた叫んだばかりだったから。

「まさか・・・聞こえてたの!？」

無言で首を縦に振る要。自分でも顔が蒸気していくのが分かる。

まさか要にあの言葉を全て聞かれていただなんて・・・。

雛子は顔を赤くしながら、要とは反対の方を向く。

「忘れなさい・・・絶対に忘れなさいよ！いいわね！」

いつもの通り、捻くれた言葉を彼女にぶつけた。

「はいはい。」

そして彼女も、まるでその反応を待っていたかのように、いつもの調子で軽く流すのだった。

∴

一体いくつもの爆撃を受けただろう。

蛍はもう、両足に力が入らなかつた。地面へと倒れ込む蛍に対し、何度目かわからない爆撃が飛んでくる。

抵抗できない蛍の体は爆風と共に宙を舞う。

「本当にしづといね……。いい加減に諦めたらどうだい？」

地面へと落ちた蛍だが、まだ両手には力が入る。

うつ伏せの姿勢に変え、腕の力だけで地を這い、ソルダークへと距離を詰めていく。

「ぜつたいに……。あきらめない……。」

せめてプリキュアの力を使いこなすことが出来ていれば、まだ戦えたかもしれない。

だがもう蛍には戦う力が残っていないかった。

戦うことが出来ないのなら、せめて気を引かせなければ。

「キュアシャイン！もうやめて！」

チエリーの悲痛な叫びをあげる。

「終わりだ、キュアシャイン。」

ダンタリアが蛍にトドメを刺そうとしたその時、

「キュアシャイン！」

青白い光が後ろから駆けてきた。

「オラアツ！」

女の子には似つかわしくない雄たけびをあげながら、ソルダークを殴り飛ばすキュアスパークの姿が、蛍の前を通過する。

同時に蛍の目の前に、もう一人少女が舞い降りた。

自分やキュアスパークに似た、黄色のドレスを纏う少女。

「4人目の・・・プリキュア・・・？」

チエリーが驚きのあまり言葉を失う。

「キュアシャイン！大丈夫!？」

キュアスパークが蛍の元へと駆け寄る。

「だい・・・じょうぶ・・・。」

「全然大丈夫やないやん・・・ごめんな、遅れてしまつて。」

キュアスパークが心配そうな、それでいてホツとしたような表情を見せる。

「キュアスパーク。ここは私に任せて。」

そこで黄色のプリキュアが名乗りを上げた。

「ここに来るまでに、力のイメージは見てきた。私の力は・・・。」

そう言うとき黄色のプリキュアは、蛍へ両手を掲げた。

すると彼女の両手から放たれた温かな光が蛍を包み込み、その傷を見る見るうちに治していったのだ。

「治癒能力だと？」

目の前で蛍の傷を治す黄色のプリキュアを前に、ダンタリアは驚く。

そして黄色のプリキュアが、蛍に顔を近づけ自分にしか聞こえない声で囁いた。

「本当に、蛍ちゃんなの?」

「え?」

蛍が驚いて顔を上げる。なぜ彼女は自分の名を知っているのだろうか?

すると黄色のプリキュアは蛍に優しく微笑みかける。

その言葉も、表情も、蛍を優しく包み込んでくれるように温かかった。

蛍はそんな彼女の仕草に、ある人物を思い出す。

「もしかして……。」

すると黄色のプリキュアは、自分の口元に指をあてた。静かにシートと声を出す。

「キュアプリズム!」

キュアスパークが黄色のプリキュア、キュアプリズムへと声をかける。

「一気に決めるで。ウチの背中、ちゃんと守れよ!」

「全く、誰に対して言ってるのよ!」

その遠慮のないやり取りに、蛍はキュアプリズムの正体を確信した。

直後バチン!と静電気が飛んだような音と共に、キュアスパークが全身に電気を纏いソルダークへと突撃する。

だがキュアプリズムは、蛍の前を一步も動かなかった。

「え?」

てつきり共に戦うとばかり思っていた蜚は困惑する。

「キュアスパーク一人で挑むつもりか？」

ダンタリアも同じ疑問を抱いたようだ。

ソルダークはキュアスパークを迎撃すべく、両手からミサイルを放つ。

だが曲線を描いて迫り来るそれを、キュアスパークはわき目も振らず真つ直ぐに突き抜けた。

正面からミサイルを突破したキュアスパークは、そのまま正拳をソルダークへ叩き込む。

だがキュアスパークが通過したミサイルは、彼女の元へ向きを変え、背後から一斉に襲い掛かった。

危ない、蜚がそう叫ぼうとした瞬間、キュアスパークとミサイルの間に、突如巨大な水晶が現れたのだ。

「何？」

その光景にダンタリアは驚く。

人の背丈ほどある八角形の水晶は、ミサイルを全て受け止める。

直後ミサイルが一斉に爆発したが、水晶にはヒビ一つ入らなかつた。

水晶はキュアスパークの盾となつてミサイルの攻撃から彼女を守ると、役目を終えた

かのように粒子となって飛散する。

そしてソルダークの攻撃を逃れたキュアスパークは、再び青い光となって突撃する。「治癒の術に盾。サポートに特化したプリキュアか。ならば。」

これまで不動だったダンタリアがついに動き始めた。翼のようにマントを開き羽ばたく。

そして鋭く尖った鉤爪をキュアプリズムへと向け、一気に急降下し始めた。

キュアプリズムもそれに気づき、キュアスパークとソルダークから目を離しダンタリアを補足する。

そして自身とダンタリアの間に水晶の盾を展開した。

そのまま盾に蹴りを入れるダンタリアだが、ソルダークの爆撃を受けてもヒビ一つ入られないほどの強度だ。当然傷などつかない。

距離を開けたダンタリアは、ならばとキュアプリズムの後方にいる蛍めがけて闇の力を凝縮させた黒い球体を投げつけた。

蛍を囿にしキュアプリズムの気を引きつけようとしたのだろう。

だがその球体は、蛍へ当たる直前に四散する。蛍の周囲はドーム状の黄色の光が囲っていた。

いつの間にか蛍は、バリアーみたいなもので守られていたようだ。

キュアプリズムはバリアと同じ色の光を自分の右腕に纏い、ダンタリアへと拳を振るう。

ダンタリアはそれを迎撃すべく、後退しながら黒の球体を投げつけたが、球体は黄色の光を纏ったキュアプリズムの拳と接触した瞬間、四散した。

「っ!？」

驚くダンタリアだったが、咄嗟に腕を交差しキュアプリズムの拳をガードする。

恐らくあの黄色の光は、蛍の身を守っているバリアーと同じものだろう。

バリアーを身に纏うことで攻防一体の打撃を可能にしたのだ。

態勢を立て直そうとするダンタリアだったが、その後方からキュアスパークが光を纏って接近する。

すれ違いざまの攻撃を間一髪回避したダンタリアは、ソルダークを自分の元へと呼び寄せた。

だがキュアスパークは持ち前の速度で一瞬で旋回し、ダンタリアの元へと向かうソルダークへ再び突撃、強烈な肘鉄をお見舞いした。

蛍1人を相手にしていた時とは違う。戦況は完全に逆転したのだ。

「ソルダーク！」

するとソルダークを呼びながら、ダンタリアはマントを払って空中へと飛び上がった。

た。

同時にソルダークも両足からジェットを噴射し、空高く飛び上がったのだ。

ダンタリアとダークネスの姿が見る見るうちに小さくなっていく。

いくらプリキュアの超人的な身体能力を持ってしても、あそこまでの高さを飛び上がるのは不可能だ。

「さすがの君たちも、ここまで高度を上げられては届くまい。やれ、ソルダーク！」

遙か上空へと飛んだダークネスが、両手を地上へ向ける。

このままでは反撃出来ないまま、一方的な爆撃が始まる。

蛭は焦ってキュアスパークとキュアプリズムを見るが、2人とも落ち着いた様子を見せていた。

「キュアスパーク。」

するとキュアプリズムがキュアスパークへとアイコンタクトを送る。

キュアスパークはその意味を理解したと言わんばかりの笑みを浮かべると、ソルダークの元へと飛びだった。

「えっ!?!」

蛭は驚く。届くはずがない。案の定、最高点に達しても、ソルダークの元へは届かなかった。

だがそのまま落下するかと思われたキュアスパークの足元に、水晶の盾が現れたのだ。

「なっ!?!」

盾本来の用途とは余りにも離れた運用に、ダンタリアも絶句する。

キュアスパークは次々と上空に現れる盾を足場にし、ソルダークよりもさらに上を取り、

「どっ!?!いせっ!?!」

落雷のごとく渾身の正拳をお見舞いする。

直撃を受けたソルダークの巨体は一瞬で地上へと落ちていった。

そしてソルダークの落下地点には、キュアプリズムが待ち構えていた。

「光よ、降りろ!プリズムフルート!」

キュアプリズムの元に光が降り、フルートへと形を変える。

キュアプリズムがフルートを吹くと、心が癒されるような綺麗な音色が響き渡った。

その音色と共に、ソルダークの周囲に複数の光が点のように現れ、それを頂点とした多角形が結ばれていく。

やがて全ての線が結ばれた多角形は、水晶となり、ソルダークはその巨大な水晶の中に閉じ込められた。

「プリキュアー！プリズミック・リフレクションー！」

キュアプリズムがフルートの先端をソルダークへと向け、先端から一筋の光が放たれる。

ソルダークを囲む水晶の中にその光が入り込み、水晶内で乱反射し始めた。

やがて光の乱反射と共に、水晶の中は光で満たされていき、ソルダークを身を包み込む。

「ガアアアアアア!!」

光に包まれたソルダークは甲高い断末魔と共に消滅し、ソルダークを囲む水晶も粉々に砕け散った。

「ふっ、まあいい。今日のところは挨拶の代わりだよ。また会おう、プリキュア。」
ソルダークの姿を確認したダンタリアは、姿を消したのだった。

∴

キュアプリズムへと変身した雛子は、何とかあの巨人を倒すことが出来た。

初めての戦いだっただ、不思議と恐怖はなかった。

とは言ってもほとんど戦っていたのはキュアスパークことで、自分はそのアシストをしただけだが。

それでも戦場と言える場所で恐怖心を抱かなかつたのは、要と一緒に戦ってくれという安心感のおかげだろう。

当然本人には言わないが。

それと……。

「もう、大丈夫みたいね。蛍ちゃん。」

「やっぱり……ふじたさんだったんだ。」

蛍の前で情けないところを見せるわけにはいかないのだ。

雛子は蛍が臆病であることを知っている。

そんな彼女がこの場にいるということは、相当な勇気を振り絞っているに違いない。

だからこそ、自分が彼女に対して不用意に不安を煽ってしまうわけにはいかなかった。

「それにしても蛍、一人で戦うなんて無茶したらあかんやろ。」

要は怒ったような呆れたような表情で蛍に詰め寄る。

「うっ……ごっごめんなさい……。」

「遅れてきたことは正直に謝るけど、蛍、この前だってウチが来なかつたら危ないところやったろ？」

「なんでおんなじ無茶すんの。」

要としては蛍が心配だからこそ言葉を強めているのだろうが、叱られる蛍はどんどん落ち込んでいった。

「うう……。」

「要、その辺にしなさいよ。」

すると雛子が静止に入る。

「雛子。」

「あのまま闇の牢獄つてのが強まっていたら、私、閉じ込められてたかもしれないんだよ？」

「蛍ちゃんが絶望の闇が拡がるのを食い止めてくれたおかげで、私は無事だった。」

「だからありがとう、蛍ちゃん。」

「ふじたさん……。」

「もく、雛子は蛍に甘いなあ。」

「自覚はあるが本音も半分だ。今振り返ると、あの時点では閉じ込められる寸前だったとしか思えない。」

(これが、要と蛭ちゃんが隠していたことか。)

確かにこんなファンタジーかつ物騒な出来事に巻き込まれているだなんて誰にも話せないだろう。

あの時、安直に聞き出そうとしたことを雛子は反省する。

そして、

「でもようやくプリキュアが全員揃ったね！」

目の前にぬいぐるみの姿をした妖精たちが姿を見せる。

プリキュアへと変身し、黒い巨人と戦う要と蛭。

そんな彼女たちと一緒にいる妖精。

同じく自分の家にいる、ぬいぐるみの姿をした妖精レモン。

彼女が探しているという仲間。

故郷を追われるほどの大きな事情。

そして世界を覆う闇の牢獄の話。

雛子の中で全ての出来事が一本の線に繋がった。

「あとはレモンさえ見つかれば。」

「きつとこの街にいるはず。頑張つて見つけ出そう！」

そしてこうも早く裏付けが取れるとは。だが同時にこれは好機である。雛子は皆の

前で話し始める。

「あのさ、その子、今家にいるよ。」

「・・・え？」

何を言ってるんだと言わんばかりの表情を浮かべる2人の妖精。

「だから、そのレモンちゃんって妖精。今、私の家で預かっているの。」

妖精に加えて要と蛍もポカンとした表情のまま硬直し、

「「「ええっつ!!!」」」

4人の叫び声が一斉に木霊したのだった。

∴

次回予告

「ようやくプリキュアがぜんいんそろった!」

「これからは私も協力するわ。3人で力を合わせて頑張りましょう。」

「よっしそうと決まれば！」

「決まれば？」

「プリキュアのチーム名を決めよう！」

「何だよ。」

「はい！わたし、おもいつきました！」

「言うてみ。」

「ぴかぴかぴかりんプリキュア！」

「好きやなそのフレーズ！」

「可愛いから採用。」

「すんな！」

「よし！じゃあチームめいは、ぴかぴかぴかりんプリキュア」

「やめーい！！」

次回！ホープライトプリキュア 第5話！

「チーム結成！ホープライトプリキュア！」

希望を胸に！がんばれ、わたし！

第5話

第5話・プロローグ

ここは藤田家、雛子の私室。

部屋の面積の半分を占める大きな本棚に、隙間なく本が立ち並んだ如何にも文学少女の部屋とでも呼ぶべき場所で、ぬいぐるみに似た姿をした『3人』の妖精が顔を合わせていた。

1人は蛍のパートナーであるチェリー。1人は要のパートナーであるベリイ。

そしてもう1人は……。

「レモン……本当にレモンなのね。」

「わーい、チェリーとベリイだ〜。」

「レモン！心配したんだから！」

探し続けてきた仲間の中で最後まで行方が分からなかったレモンの姿を見たチェリーは、喜びの涙とともにレモンへと飛びつく。

ベリイも目を潤ませながらレモンの頭を優しく撫でる。

「も〜苦しいよ〜チェリー。」

言葉とは裏腹にレモンも笑顔を浮かべていた。そして僅かなだが涙ぐんでいる。

「1人でよく頑張ったな。偉いぞレモン。」

「へへくん、レモンは1人でも大丈夫だったのだぞ。」

そう強がるレモンの声は、少し擦れていた。そんなレモンに雛子は優しく声をかける。

「良かったねレモンちゃん。お友達、見つかった。」

その言葉を受けたレモンは、涙を堪えきれなくなり、

「・・・うん！」

笑いながら涙を流すのだった。

故郷を逃れ、離ればなれになっていた妖精たちは、半年以上もの月日を経てついに再会することが出来たのだ。

「一先ずこれで、プリキュアも妖精も全員集合かな？」

隣にいる要が、蛍にしか聞こえないようにつぶやく。

「そうだね。」

蛍はこの場に集まった人たちを見渡す。

自分を始めプリキュアへと変身した3人の少女と、そのパートナーたる3人の妖精。だがここにいる人たちが全てではない。

フェアリーキングダム出身のプリキュア、キュアブレイズは最初に会った時以来、行方を眩ませており、そのパートナーであるアツプルという名の妖精の姿はまだ見たことがないのだ。

それでも当初の目的であったプリキュアを4人見つけるといのは、ここでひと段落ついたと言つていいだろう。

それも、蛍のクラスメートである要と雛子が覚醒するという形で。

その事実には蛍の心は大きく動く。

キュアブレイズと合流するまではここにいる3人で協力して戦わなくてはならないのだ。

だが親友同士である2人と違って、自分だけが曖昧な距離にいる。

それではきつとダメだ。

もつと2人のことを良く知り理解しなければ、いざというときに連携が取れなくなる可能性がある。

何よりプリキュアとして共に戦うという使命を除いても、蛍は長年抱き続けた夢がついに手元まで来ているのを実感しているのだ。

あともう少しだけ勇気を出して手を伸ばせば、それはきつと届いてくれる。

(もりくぼさんと、ふじたさんと・・・ともだちになるんだ！)

蛭は勇気のおまじないを胸に、夢を叶えることを決断するのだった。

第5話・Aパート

チーム結成！ホープライトプリキュア！

雛子がキュアプリズムへと変身し、初めてダークネスと戦った日。

あの後、行方のわからなかった最後の妖精、レモンを雛子が保護していたことが判明したのだ。

本来ならばすぐにでも雛子の家に訪れたかったところだが、既に夕刻を過ぎた時間で大勢でお邪魔するわけにもいかず、螢は夕食の支度に取りかかっている最中だった。

結局、その日は逸るパートナー2人を宥めて帰ることになり、翌日の放課後に雛子の家に集まることになった。

そして妖精たちの再会を無事見届けることが出来たのがつい昨日のこと。

つまりキュアプリズム誕生から2日が経過していた今日の昼休み、螢はいつ胸に秘めた思いを打ち明けようかを考えながら、要と雛子に連れられ夢ノ宮中学校の学食へと初めて訪れたのだ。

夢ノ宮中学校の学食は安く美味しくそして広いと評判である。

その評判通り、備え付けられたテーブルとイスは室内だけに留まらず、外のバルコニーにまでズラリと並んでいた。

そして学年問わず多くの生徒たちの食事と談笑で賑わっていた。

初めて図書館を訪れた時も思ったが、この中学校の校内施設の広さには驚かされてばかりである。

これで私立ではなく市立なのだから恐れ入る。

学食のお品書きを一瞥すると、これまた評判に違わず中学生にとってリーズナブルな価格で、定食、カレー、ラーメン等の定番のメニューが並んでいた。

そして隣に立つ購買には様々な種類のパンとお弁当が陳列している。

多くの生徒が学食または購買から昼食を購入しているが、蛍のように持参したお弁当を持ち込んでいる生徒も何人かいた。

蛍たちは一番奥の角に面した席を取り、各々椅子に腰掛ける。

蛍は自前の、雛子は学食で購入したお弁当を、要はパンをそれぞれ食べ始めた。そして食べながら要は、蛍を学食へ誘った理由を話し始めたのだ。

「つうわけで、今週末ウチの家に集まって作戦会議するよ。」

「……」

だが何の脈絡もなく口に出された作戦会議という言葉に、蛍は混乱してしまう。

すると横に座る雛子から大きなため息が漏れた。

「あのね要、いきなり作戦会議をするって言われても、わけがわからないに決まってるでしょ。」

「察し悪いな。プリキュアのことには決まってるやん。」

そう、蛭たちがこの学食に集まったのは他でもない。

プリキュアとしてのこれからの活動について話し合う為に集まったのだ。

今後はこの3人で戦っていくことになるのだが、プリキュアであることを公言してはならない以上、教室内で話すわけにはいかず、かといって放課後は要は部活、蛭は家事の為に早めに帰らなければならぬ為、集まれる日は自然と休日、しかも3人の内誰かの家に場所が限られてくる。

そこで校内でもある程度話せる場所はないかと探した末、この学食を見つけたのだ。

ここならば大勢の生徒たちのお喋りで喧騒としていたため、蛭たちの話し声は目立たずにかき消されてしまうし、角際ならば向かい側に席もない。

木の葉を隠すなら森の中である。

「行方がわからないキュアブレイズを除けば、ウチらでプリキュア全員集合ってことやろ。」

だから今後のプリキュア活動について話し合わんかなって思ってる。

学校だとさすがにベリイたちは連れていけないからね。」

喋るぬいぐるみを人前に晒すリスクが当然あるわけだが、それ以前に一般常識として校内にぬいぐるみを持ち込むわけにはいかないだろう。

「そうね。それに妖精たちから聞いた話も、一度全員でまとめてみたいし。」

雛子がそう続く。そう言えばここにいる全員が、各々のパートナーから話を聞いていただけだ。

チエリーやベリイが言うには、妖精たちの間で知っていることの差はほとんど無いため、話す内容に大きな違いが表れることはないと言っていたが、雛子の言うように一度全員が知っている情報をまとめた方がいいだろう。

「蛭は土日どつちが都合良い？」

「えと・・・わたしはどつちでもだいじょうぶだよ。」

「私もよ。」

蛭と雛子はそれぞれ週末に予定がないことを要に伝える。

「じゃつ明日、土曜日にウチに集合な。蛭、これ。」

要は、蛭に紙切れを渡した。見ると電話番号と住所、簡単な手書きの地図が描かれていた。

「昼食べ終わったらここに集合な。」

「わっわかった。」

「よし、第一回プリキユア作戦会議、開催決定ってね！」

「要、周りがうるさいからって大声出さない。」

「あはは、ごめんごめん。」

こうして明日、要の言う第一回プリキユア作戦会議が開かれることが決定した。

蛭は昨日、内に秘めた決意を思い出す。臆病な蛭は心が揺らぐのも早い。善は急げ、決意が鈍る前に思い切って勝負を付けよう。

(あした・・・つたえるんだ・・・。)

要と雛子に、友達になつてくださいと。

∴

翌日の土曜日、昼食を終えた蛭は、母親に夕ご飯の支度前には帰ると約束し、チェリーを連れて家を出た。

他人の家に私服で尋ねるのは初めてのことで、どのような格好なら失礼でないか

を昨日一晩中悩んだが、結局普段から着慣れている、襟付きのピンクのトレーナーに白のミニスカート、膝まで届く紺のハイソックスと言うお気に入りの服装で出かけることにした。

スカートの丈が少し短いかもしれないが、門前払いを受けるほど失礼な格好でもないだろう。

紙切れに書かれた住所と地図を頼りに進むと、しばらくして一軒家にたどり着いた。ネームプレートには森久保の性。間違いないこの家だ。

蛭は玄関前まで足を運び呼び鈴を鳴らそうとしたが、直前で手を止めてしまう。

「……」

徐々に表情を強張らせていく蛭に、チェリーが声をかける。

「蛭? どうしたの?」

(どうしよう……いまさらになって緊張してきた……)

これまで友達がいなかった蛭には当然、クラスメートの家を尋ねた経験はない。

一昨日、雛子の家に立ち寄った時は要も一緒だったし、そもそも妖精たちの再会が目的であり、しかもその後すぐにお暇したので、クラスメートの家を尋ねたという実感が湧いてこなかったのだ。

だが今回は違う。

第一回プリキュア作戦会議を行うこと目的だが、前日にちゃんと約束し招待され、こうして1人（正確にはチェリーも一緒にいるが）で来たのだ。今になって余計な思考が働き始める。

（このまま、よびりんをならしても、もりくぼさんじゃない人がきたらどうしよう・・・。わたし、ちゃんとあいさつできるかな・・・。

できなかったから、もりくぼさんのごかぞくにしつれいだよね・・・。いんしょうわるくならないかな・・・。

そもそもこうゆうときって、つまらないものでもいいから、お茶菓子とかもつてくるべきじゃなかったっけ？

ああどうしよう・・・このまま、おうちにあがってもいいのかな・・・。）

そしていつもの悪い癖が始まる。考えれば考えるほど後ろ向きな思考に陥っていく。

だが、このままでは何時まで経っても家にかかることが出来ない。

（だっだいじょうぶ、もりくぼさんとはもうちゃんとおはなしできる仲間もん。

それに今日は、がんばって、ともだちになってくださいって、つたえにきたんだから！）

ずっと抱き続けてきた夢を、今日叶えるのだ。

虫はその思いを胸に勇気のおまじないをし、意を決して呼び鈴を鳴らそうとする。

その時、

「・・・蛍？」

「!?ひやあああつ!!」

不意に後ろから声をかけられ、驚いて振り返ると、

「・・・人ん家の前で、何固まってんの？」

薄手の橙色の長袖に、ブルーのスキニーデニムという動きやすさを重視したスポーティな私服姿の要が、両手にお菓子とジュースの入ったビニール袋を持ちながら、呆れた口調で話しかけてきたのだった。

∴

頑張る間もなく、要本人から家にあげてもらった蛍は、素つ頓狂な叫び声を要に聞かれたことの恥ずかしさからまともに顔をあげられなかった。

やがて部屋の前まで案内されると、要が蛍を部屋へ招き入れるためにドアを開ける。

「はいどうぞ、ウチの部屋にござようたくい」

部屋に入ると、要のベッドの上で読書をしている雛子の姿があった。

ライラック色のロングワンピースに白のカーディガンという私服姿の雛子は、彼女が要と並んで同世代の中でも背が高めであること、メガネをかけて読書に励むと言う文学少女特有の知的なイメージ、そして同世代どころか大人さえ羨むであろう彼女のスタイルの良さも合わさって、中学生とは思えない大人びた雰囲気を漂わせていた。

そんな雛子の隣には、レモンが昼寝をしている。

「あつ蛍ちゃん、チエリーちゃん。いらっしやい。」

「こっこんにちは。」

「いらっしやい蛍ちゃん。って俺が言うのも変だけどな。」

勉強机の上にはベリイの姿があった。部屋に上がった蛍は、一度全体を見渡してみる。

本棚に置かれている少年詩の漫画本、机に置かれているゲーム機、壁に貼られているバスケット選手のポスター。

要の人となりを知る人が見れば、一見して彼女のものだと分かるような部屋だった。

部屋と言うのはここまで人の個性を反映させるものなのかと、蛍は不思議な気持ちで見渡す。

「男子っばいでしょ？要の部屋。」

すると雛子がそんなことを言ってきた。

確かにそう思ったが、さすがに失礼だと思つて言葉に出すつもりはなかった。

だが雛子はそれをあつさり言つてのけたのだ。蛍は無遠慮な雛子の物言いに少し戸惑う。

「こらゝ、男子っぽいって言うな。せめてウチらしいって言えゝ。」

要がそう抗議するも、雛子は涼しい顔で流して本を畳むのだった。

「まあいいや、よろし、さつそく準備を始めるで！」

すると特に気にはいかなかったのか、要は話を切り上げ、先ほどまで手に持つていたビニール袋からポテチを取り出した。

袋を破り、それをシートの代わりにしてポテチを床の上に広げ、さらにポツキーを取り出してその隣に並べる。

それが終わると再びビニール袋に手を入れ、今度は紙コップを取り出した。

そして机の上に人数分並べジュースを注ぎ、蛍と雛子に手渡す。

一体何の準備なのだろうかと蛍が疑問に思つた矢先、

「それでは、第一回プリキュア作戦会議！開始〜！」

「……。」

それは作戦会議の準備であつたことが判明したので。

だが会議どころかパーティーが始まりそうなノリで高らかに開幕宣言をする要を前に、蛭は硬直してしまう。

ちなみに雛子はいつものように涼しい顔で肩を落としていた。

「かんぱーいー!」

要はそんな蛭と雛子の様子には目もくれず、乾杯宣言をしながらジュースを掲げた。

蛭は唾然としながらも、要に倣ってとりあえず形だけ乾杯をする。

雛子はそんな要のノリをいつも通りスルーし、乾杯せずに一人でジュースを飲み始める。

「・・・やれやれ、それじゃあ、まずは何から話し始めればいい?」

するとその場を呆れた表情で見守っていたベリイが、任せてられないと言わんばかりに話を切り出した。

「とりあえず、あなた達が知っていることを、今一度振り返ってもいいかしら?」

雛子がそれに乗る形で、ようやく話が進み始める。

「わかったわ。とは言っても、特に真新しい情報はないと思うけどね。」

「それでもいいわよ。」

一旦この場にいるみんなの中で、意識を一つに合わせることが目的だから。」

これから共にダークネスと戦っていく以上、全員が同じ情報と目的を共有するべきだ

ろう。

それは蛍だけでなく、この場にいる誰もが同じ見解だった。

「それじゃあ、もう一度最初から説明するわね。

フェアリーキングダムのこと、プリキュア伝説のこと、そしてダークネスのこと。チエリーとベリイが3人の顔を見渡す。

そしていつの間にか起きていたレモンを交えて、このパーティーとしか思えない第一回プリキュア作戦会議がスタートするのだった。

…

「黒き闇、空を覆わんと拡がりし時、4つの光、闇を照らすべく大地に降りる。」

要がポテチを頬張りながら伝説を復唱する。

「其の名はプリキュア。汝は世界の希望なり。」

雛子がポツキーをかじりながらそれに続く。

「そして4つのひかりがつどいし時、おおいなる奇跡がおとずれん……。」

最後の一文を復唱した蛍は、ジュースを飲んで一息つく。

何とも緩い空気の作戦会議だが、ちゃんと進行しているようだ。

「このジュースおいしい・・・。」

と思われていた矢先、蛍が思わずジュースの味について簡潔な感想を口にする。
「でしょ？ちよつと高いけど、ウチのお気に入りなんよ。」

それを皮切りに、話が少しずつ傾き始めた。

「要、ポテチ食べ過ぎ、私たちの分も残しておいてよ。」

「雛子こそ、ポッキー食べ過ぎ。」

「食べ過ぎてなんかないわよ。まだ開封していない箱がこんなにあるから・・・。」

「おーい！脱線するなあー！」

そして徐々に脱線し始めた空気に耐え切れず、ベリイがついに一喝した。

「わっ、ごっごめんなさい・・・。」

蛍が慌てて謝罪し、軽く咳払いをしてから話を戻す。

「コホン、おおいなる奇跡ってなんのことだろうね？」

「きつと、黒き闇を世界から追い払えるってことよ。」

つまり、4人のプリキュアが力を合わせれば、必ずダークネスを打ち破ることが出来る！」

チエリーはそう力説する。

伝説では4つの光、プリキュアが闇を照らすとあったので、蛍自身もそう思っていたところではある。

「ダークネスね。」

今んとこ戦った行動隊長は、サブナックつておっさんと、ダンタリアつて優男だったっけ？」

要が指を折りながら、これまで戦った行動隊長の数を数える。

「それから、リリスだっけ？ 蛍ちゃんが倒したって言う。」

「たおせた、わけじゃないとおもう。にげられちゃったし。」

リリス、サブナック、ダンタリア。ダークネスの行動隊長たちはいずれも強敵だ。

伝説では光が闇を照らすとあるが、行動隊長とソルダークの強さを目の当たりにしている蛍は、現実では本当に伝説の通り行くのだろうかと不安に思う。

「少し気になっていただけけれど、この世界で活動している行動隊長達が、ベリイ君たちの世界を襲ったの？」

すると少し考え事をしていた雛子が、妖精たちに1つの疑問を投げかけた。

「いや、俺たちの世界を侵略してきたのは、別の行動隊長たちだったよ。」

ベリイから返ってきた答えは、蛍と要を驚かせるには十分なものだった。

「え？そうだったの？」

「あいつら、あんたらを追ってこの世界に来たわけじゃなかったんだ。」

チエリーたちに責任を押し付けるつもりはないのだが、蛍はてつきりフェアリーキングダムから逃げたチエリーたちを追って、ダークネスがこの世界へ侵略してきたと思っていたのだ。

だが実際にはそこに何の関連はなく、ダークネスがこの世界を侵略したのとチエリーたちがこの世界へ逃げ込んで来たのは、全くの偶然だったのだ。

「俺たちの世界で活動していた行動隊長は、ハルファスとマルファスという2人1組の悪魔たちだった。」

新しく出てきた行動隊長の名前に蛍は体を強張らせるが、
「安心して、2人ともキュアブレイズが倒してくれたのよ。」

続くチエリーの言葉に、蛍たちはさらに驚いた。
「倒した？行動隊長を2人も？」

だが要と雛子は、キュアブレイズが行動隊長を倒したことに驚いたようだが、この3人の中で唯一キュアブレイズの実力を目の当たりにした蛍だけは驚かなかった。

ソルダークさえ容易く倒してしまう彼女ならば、行動隊長を倒すことが出来ても不思議ではないだろう。

すると少し考え込んだ要が、ハツと顔を上げて1つの疑問を口にした。
「でもちよつと待って。」

それって行動隊長を倒しても、絶望の闇を止められなかったってことにならん？」
「あつ……。」

要の言葉に螢は声をあげる。

チエリーたち妖精から聞いた話では、行動隊長がソルダークを作り、闇の牢獄を世界に広げ、ソルダークから放たれる絶望の闇が、牢獄の強度を高めるといふ話だったはずだ。つまり行動隊長がいなければ、

闇の牢獄もソルダークも生まれないはず。

それなのに行動隊長を失っても尚、フェアリーキングダムに広がる絶望の闇は止まらなかったというのだろうか？

「……そうゆうことになるな。最もハルフアスとマルファス以外の行動隊長がいたのかもしれない。現に俺たちがこの世界へ逃げる直前に、リリスが姿を現したからな。」
「リリスがフェアリーキングダムにも？」

「ああ。」

ひよつとしたら、サブナックとダンタリアも、俺たちが遭遇しなかっただけで、フェアリーキングダムにもいたのかもしれないな。」

そう語るベリイだが、言葉にはあまり自信が感じられなかった。

そんなベリイに要は質問を重ねる。

「行動隊長を全員倒せば、ダークネスは壊滅するんかな？」

「・・・わからないな。もしかしたら行動隊長よりも上の立場のものがあるかもしれない。」

ダークネスに関する会話が行われていく中、蛭はある疑問を抱き始めた。

そしてその疑問に答えてくれるかのように、雛子が口を開く。

「・・・やっぱり、そうよね。」

「雛子？」

「私たち、敵であるダークネスについて、わからないことが多すぎるのよ。」

故郷を侵略された妖精を含め、この場にいる全員がダークネスについてほとんど知らないのだ。

どれだけの戦力があるのか、行動隊長は何人いるのか、行動隊長以外の構成員がいるのか、トップは誰か、そもそも組織だって行動するものたちなのか？

その疑問に答えられる人がこの場にはいないのだ。これまでは姿を見せた行動隊長と戦うだけであつたが、こうして見返してみると、敵の存在はあまりにも未知数だ。

蛭は今になって、未知の部分が多いダークネスと戦うことに対して不安を抱く。

「……すまない。ダークネスについては、俺たちもほとんど知らない事ばかりなんだ。」
「ベリイ君が謝ることじゃないよ。ベリイ君たちにとつても、突然現れた侵略者なんだし、

これまで教えてもらつた情報だけでも十分よ。」

落ちこむベリイを優しく励ます雛子。

「まっ、当面は姿を現した行動隊長を片っ端から撃退するしかなさそうやな。」

すると要がそう簡潔に結論付けてきた。

「そうね。幸い敵の目的ははっきりしてるんだし、私たちはそれを防ぐことに注力しましょう。」

雛子もそれに賛同した。蛍もその言葉に異論はなかった。

敵の戦力どころか拠点さえわからない今の状態では、こちらからは仕掛けようがない。
い。

だがダークネスの目的が世界を闇で覆うことであれば、これまでのように向こうから必ず仕掛けて来るはずだ。

それを迎え撃つことは出来る。

結局のところ、今の蛍たちに来れることはと言えば、向かってきたダークネスを退治すること以外にないのだ。

「うっうん、ソルダークをたおして、ぜつぼうのやみがひろがるのをくいとめなきゃ。今はまだ、後手に回ることしか出来ない。」

それでもダークネスに襲われた人たちを助ける為に、蛍は戦うことを決意したのだ。「ただし、これだけは守りなさい！」

すると、チェリーが突然声を荒げ、険しい表情で蛍を睨み付けてきた。

「絶対に無茶な戦いはしないこと！特に蛍！」

「はっ、はい！」

チェリーの剣幕に蛍はつい萎縮してしまう。

「前にも言ったけど、1人でダークネスに戦うなんて無茶、もう絶対にやっちゃダメだからね！」

どうやらチェリーは、まだ蛍が1人で戦ったことを根に持っているようだ。

一度ならず二度も1人で戦おうとした挙句、手も足も出ずに打ちのめされたのだから、チェリーも気が気でならないのだろう。

蛍はチェリーに2度も同じ心配をさせてしまったことを反省する。

「安心しい、チェリー。もう蛍を1人で戦わせるなんてことはしない。」

ウチはもう絶対に迷わんから。」

「そうよ。これからは私も一緒に戦うのだから。蛍ちゃんの事も、私が必ず守るわ。」

「だから蛍。もう無茶はしなくていいからね。」
「そうさせない為に、私たちがいるんだから。」

要と雛子は共に強い決心を語る。2人とも蛍のことを大切に思ってくれている。

それはとても嬉しいことだが、同時に蛍は1の懸念を抱いていた。

要ことキュアスパークは、行動隊長のサブナックとさえ渡り合えるパワーと、何者にも捉えることのできないスピードを兼ね備えたプリキュアだ。

個人の戦闘力ならば、3人の中で最も優れているだろう。

雛子ことキュアプリズムは、あらゆる攻撃を遮断する強固な盾と、どんな傷でも瞬時に治療する癒しの術を扱うプリキュアだ。

そして2人はコンビネーションも抜群だ。

お互いの性格を知り尽くしているからこそ、雛子は状況に応じた最適なバックアップを行い、元々強力だった要の攻撃性能は、限界以上にまで引き出される。

2人さえいればダークネスと戦う上での戦力は十分なのだ。

そのうえで行動隊長を2人も倒した実績を持つキュアブレイズの実績も存在もある。

だが自分はどうだろうか？未だにプリキュアの力、希望の光の扱い方を知らず、浄化技を自分の意思で放つことも出来ない。

身体能力もキュアスパークは勿論、キュアプリズムにも遥かに劣っている。

かといって、キュアプリズムのようなサポートに面した力も持っていない。

もしかしなくても、自分はいなくても問題ないのではないだろうか？

むしろいると、かえって2人の足を引っ張ってしまうのではないだろうか？

「・・・蛍？」

すると、要が自分を呼ぶ声が聞こえた。

「なっなに？」

「いや、なんか不安げな表情してたから。」

どうやら不安が顔に出ていたようだ。蛍は慌てて場を取り繕う。

「ううん、なんでもないよ。ふたりとも、ありがとう・・・。」

だがその声は、自分でもわかるほどか細かった。

自分を見る2人の心配そうな視線が胸に突き刺さる。

「それから、繰り返しお願いすることになるけど、プリキュアであることの正体は、誰にも知られては駄目よ。友達にも家族にも、勿論、ダークネスにもね。」

そんな不安な空気を感じ取ったのか、チェリーがやや強引に話題を変えてきた。

「せやな。もしもダークネスに正体がバレたら、何してくるかわからんし。」

「ダークネスは目的の為なら手段を選ばない。」

あなた達の友達や家族を平気で巻き込みかねないから、みんな変身するときには周りに

気を付けてね。」

チエリーからの忠告を噛みしめる蛍たち。

すると雛子が一つ間を置いてから、蛍と要に話しかけてきた。

「ねえ？」一つ聞いてもいいかしら？」

「なに改まって？」

「蛍ちゃんと要は、どうしてプリキュアとして戦おうって思ったの？」

突然の質問に蛍と要は顔を合わせるが、雛子の表情は真剣だった。

「初めて変身して戦った時からずっと考えてたの。」

これから先もあんな恐ろしい怪物たちと戦うことになるのだと思うと、私は一体何のためなら戦えるのだろうかとなって。

でも、考えてもどこかモヤモヤして、でも中途半端な気持ちで戦っちゃいけないと思つて。

だから、あなた達の思いを聞かせて。

蛍ちゃんと要は何のためにダークネスと戦う決意をしたの？」

雛子の心髓な思いを受け止める蛍。

ふと要を見ると、彼女もいつになく真剣な表情を浮かべていた。

要も雛子の強い思いを受け止めたのだろう。

蛍は雛子の思いに応えるために、自分の決意を伝える。

「わたしは、ダークネスにくるしめられるひとたちを、みんなたすけたいから、だよ。」
闇の牢獄に囚われた人々。フェアリーキングダムから逃れてきたチエリーたち。

そして、今も1人で戦い続けるキュアブレイズ。全てが、蛍にとつて助けたい人たちだ。

「ウチは、この街を守る為だよ。この街の人々、平和な生活、ウチがウチでいられる場所。それを奪われたくないって思うから戦える。」

蛍も以前、要の決意を聞いたことがある。

その決意は以前にも増して強まっているように見えた。

雛子はそんな2人の思いを受け止め、逡巡し、

「・・・ありがとう。おかげで私の戦う決意を決められたわ。」

そう宣言した。蛍と要は驚いた顔を見せる。この僅かな間で一体どんな決意をしたのだろうか？

「ずっとかかっていたモヤモヤが、やっとわかったの。」

プリキュアは、ダークネスと戦い、世界を覆う闇を照らす戦士。

でも私には、蛍ちゃんや要みたいに知らない人たちの為に戦うことはできない。

きつと、こんな私は、本来プリキュアになるべきではなかったんだわ。」

そんなことない。蛍はそう言おうとしたが、雛子が先に言葉を述べてきた。

「でも、そんな私でも、私の知る人たちの為になら、戦える。」

「え？」

「私は、蛍ちゃんと要を守る為に戦うよ。」

皆を守るために戦うあなた達を、私は、私の全てを賭けて守って見せる。」

強い意思が込められた言葉だった。

決して大きな声を出したわけではないが、彼女の決意が込められた言葉は、部屋中に響き渡り反響したかのようにだった。

そして、その決意は蛍にとって嬉しいものだった。

蛍は雛子の包み込んでくれるかのような優しさが大好きだった。

その優しさが、プリキュアとなっても自分のことを守ってくれる。

蛍にとってこれほど心強く、温かいものはない。

「ありがとう。ふじたさん。」

「雛子がそう言ってくれると、ウチらも安心して戦えるよ。」

「雛子、君は優しいな。その優しさがあるからこそ、君はプリキュアになれたのだろう。」

「あなたの力は守りの力。大切な人を守りたいって思いはきつと、

あなたの力にも応えてくれるわ。」

「へへへん。やっぱり雛子は凄いのだろ。さすがレモンのパートナー。」

決意を固めた雛子に対して、それぞれが思い思いの言葉を伝える。

雛子は少し恥ずかしそうに頬をかいた。

「うっし、これからはどんな時でも、3人チームで行動しような。」

「ええ、1人では無理なことでも、3人なら必ず乗り越えられる。」

1人で無茶はせず、正体がバレないように気を付け、常に3人チームで行動する。

それぞれが戦う決意を胸に、プリキュアとして活動していく上での方針を定めていく。

「うまい具合に3つ揃ったな。プリキュア3か条つてやつ？」

そして要が冗談交じりで3か条と名を付けた。

「プリキュア3か条。いいわねそれ。はい、じゃあ1人ずつ復唱して。」

「ひとつ、ひとりでむちやなたたかいはしない。」

「2つ、プリキュアの正体は誰にも喋ったらあかん。」

「3つ、どんな時でもチームで行動。」

最初の1か条は半ば蛍の為にあるようなものだが、こうしてプリキュア3か条が定められることになった。

それは今回の作戦会議の成果の1つと言えるだろう。

「オツケー。3人とも、必ず守りなさいね。」
チエリーがそう念を押すと、

コンコン

扉をノック音が聞こえた。3人の妖精は慌てて要の机の下に隠れる。

「は〜い。」

要が返事すると同時に、部屋のドアが開けられ、高校生くらいの男性が姿を見せた。
身長はおよそ180cm。

半袖のワイシャツにジーンズというラフな格好で、短く切られた髪の色は、要と同じ
オレンジ色だった。

もしかしてこの人は……。

「お兄、どうしたん？」

蛍の想像通り、要の兄のようだ。

「要、この前お前に貸したゲーム返し……おつ、雛子ちゃん来とったんか。」

「瞬さん。お邪魔してます。」

瞬と呼ばれた要の兄は、雛子と親し気に挨拶を交わす。すると蛍に気が付き、

「こちらを向いてきた。」

「んっ？新しい顔やな。」

「クラスメートの、一之瀬 蛍って言うの。」

「クラスメート？」

瞬はクラスメートという言葉聞いて一瞬驚いた表情を見せたが、

特に深い意味はないのだろうと信じることにした。

「へへ可愛い子やん。ひよつとして雛子ちゃんが誘ったん？」

するとなぜか雛子の名が呼ばれた。

「なっ、なんで私なんですか!？」

その言葉を聞いた雛子が、慌てふためく。こんな雛子の姿を見るのは初めてだ。

「え？だって、どう見たって雛子ちゃんの好きそう・・・」

「わくっ!!瞬さん!!それ以上言っちゃダメです!!」

どう見たって雛子ちゃんの・・・の後の言葉が雛子の叫び声によってかき消される。

それにしてもこの雛子の慌てぶりは一体何なのだろう。

聞こえなかったが、瞬はそこまで雛子を狼狽させることを言ったのだろうか。

「蛍ちゃん!今の言葉絶対に気にしちやダメだからね!!」

今度はこちらを見て顔を真っ赤にしながら訴えてきた。

今の言葉、とは一体どの言葉のことを指しているのかさっぱりわからない蜚であつたが、とりあえず雛子にとっては蒸し返してほしくない話題のようなので、領き忘れることにした。

「蜚ちゃんだっけ？ オレは森久保 瞬。 要の兄で高校3年。 よろしゅうな。」

「えつえと……その……」

瞬の自己紹介に答えようとするが、つい言葉に詰まつてしまふ。

同性でさえ要と雛子を相手によく緊張せずに話せるようになったばかりだと言ふのに、家族以外の異性で、しかも学年すら違う人となれば、蜚にとってそれはもはや、未知の生物と言つても過言ではない。

「お兄、この子人見知りが強いんよ。せやからあんまし怖がらせんといて。」

「つと、すまんすまん。いきなりこんな高校男子に声かけられちゃびつくりするわな。」

特に悪びれた様子もなく、明るい調子で謝る瞬。

「蜚、バカ兄のことなんていちいち覚えんでええからな。」

あそこのポスターの隅に映つてる観客程度の存在やと思つてええよ？」

要の指差す先を見ると、確かに隅の方に偶然観客席が映りこんでいたが、躍動感ある選手の動きをそのまま納めたかつたのか、ポスターの隅はピントがブレており、映つてゐる観客は顔はおろか性別すら判別できないものだった。

「せめてパス受けとるチームメイトにせやー！」

そんな要のあんまりな例えに大声で反論する瞬。

だがそんな賑やかな森久保兄妹のやり取りは、蛍の緊張を和らぐには十分だった。

ひよつとして要と瞬は、蛍が話しやすい雰囲気を作るために、あえて軽い調子で話してくれているのだろうか？

そう思った蛍は、心の中で2人に感謝しながら、瞬に挨拶をする。

「いついちのせ、ほたるです……。はるに、この街に引越してきました……。」

「おう、いつも要がお世話になってます。

女つ気の欠片もないバカ妹の相手は疲れるやろけど、これからも仲良うしてってや。」

「バカ兄のくせしてエラそうにすんな。ほら、はよゲーム持つてどつかいき。」

「んじやつ、2人ともごゆっくり。」

要からゲームソフトを受け取った瞬は、そのまま部屋を後にした。

「瞬さんの賑やかなところ、要にそっくりでしょ？」

すると落ち着きを取り戻した雛子がそんなことを口にした。

確かに性別の違いこそあれど、雰囲気は要にそっくりだった。

それに口喧嘩のような漫才をしたりゲームを貸し合ったりすると、見ると、兄妹の仲の良さが伺える。

「お兄にそっくりなんて言われても、嬉しくないっての。」

口を尖らせる要であったが、言葉にはそこまでの不快感は感じられなかった。

単なる照れ隠しなのだろうが、それを口にすれば要の機嫌を損ねてしまいそう

「照れ隠ししちゃって。」

・・・どうして雛子は蛭が言わないでおこうと思ったことを、躊躇わず口に出来るのだろうか。

「(こら)、余計なこと言わんの。」

だが機嫌を損ねるかと思った要は、いつも通りの軽い口調で返すだけだった。

もしかして相手の顔色を窺い過ぎなのだろうか、と蛭は自分自身に疑問を抱く。

言葉を選ぶのに慎重になり過ぎている自分と、遠慮なく言葉を投げ合う2人。

ひよつとして友達と、ただのクラスメートの差は、自分自身が作っているのかもしれない。

遠慮なく言葉を言い合える2人の輪の中に早く入りたい。

そう願う蛭は、今一度ここに来た目的を心の中で反芻するのだった。

：

モノクロの世界、サブナックとダンタリアが対談していた。

「貴様も無様に敗戦してきたというわけか。」

開口一番、サブナックがダンタリアを侮蔑する。だがダンタリアは涼しい顔だ。

「4人目のプリキュアが現れるという不測の事態が起きたからね。」

今回の敗戦は次に勝つための布石さ。」

4人目のプリキュア、キュアプリズム。

本人の実力はそこまで警戒するものではないが、あの支援能力は厄介極まりない。戦

力の中核を成すキュアスパークの力を高めてしまうからだ。

「つまらん言い訳だな。」

サブナックはそんなダンタリアの言葉を一刀両断するが、ダンタリアは眉一つ動かさず反論する。

「では君ならば上手くやれたとでも?」

「言い訳をするなど言っている。敗北した理由など、貴様が弱い以外に必要なない。」

売り言葉に買い言葉が続く2人だが、両者の間に火花が散っているわけでもなく、2人とも無表情で言葉を返しているだけだった。

やがてサブナックは片手を鳴らし、寄りかかっていた壁から離れる。

「次は俺が行かせてもらう。」

「4人目のプリキュアに関する情報、聞くかい？」

「必要ない。この目で確かめれば済むだけの話だからな。」

ダンタリアにとっては予想できていた答えだ。

この脳まで筋肉で出来ているとしか思えないバカは、行動隊長にあるまじき非効率な行動を好む傾向がある。

敵の情報を前もって知り得ておけば、それだけで戦いにおけるアドバンテージとなるというのに。

だが拒否されたところで特に思うことはない。無様に敗北するのはサブナックなのだから。

「そうかい。せいぜい頑張るがいいさ。」

「ふん、言われるまでもないわ。」

そんなやり取りを終えた2人だが、ダンタリアはしばし間を空けてから、再びサブナックに問いかけた。

「ところで、君はキュアシャインとは対峙したかい？」

「それがどうした？」

「彼女のこと、君はどう見る？」

ダンタリアの問いかけに、サブナックは闇の中に視線を送り、珍しく困惑の色を見せた表情で答えた。

「・・・脆弱な戦士だ。ソルダークの相手すら出来ないほどのな。」

なぜあのような小娘がプリキュアなのか、不思議で仕方がないな。」

「僕も同じ意見だよ。あんな弱虫にリリスが敗北したなんて、未だに信じられないね。」

さすがにこればかりは、サブナックと見解が一致したようだ。

ダンタリアも彼に倣い、闇の中に視線を向けた。

あの闇の先にいるリリスは、そのキュアシャインに重傷を負わされ、未だに戦線に復帰できずにいるのだ。

彼女はキュアシャインが自分に傷を負わせたと言ひ、今もしきりにキュアシャインの名を呼び続けている。

あの様子では、嘘をついているようには見えないし、何より嘘をつくメリットがない。

だがダンタリアが対峙した時、キュアシャインから大きな力は感じられなかったのだ。

恐らくサブナックも同様だろう。

「まっ、それでも油断はしないことだな。」

それでも念を入れて警戒しておくに越したことはない。

行動隊長の能力には、多少の個人差はあれど、総合的な部分では大きな差がない。

リリスが敗北したということは即ち、サブナックも、そしてダンタリア自身も敗北する恐れがあるということだ。

「油断などあるものか。弱者であろうと強者であろうと全力で潰す。それだけだ。」

どうやらこの脳筋には不要な心配だったようだ。

ダンタリアはサブナックを見送った後、自身も闇へと姿をくramsのだった。

第5話・Bパート

プリキュアとして活動していく上で守るべき3か条を決めた要たち。

作戦会議もひと段落し、軽く雑談をし始めた頃、

「そうだな。あれ、そろそろ出してみたら？」

「あつ、そうだね。」

チェリーと蛍がそんなやり取りをすると、蛍が自分の鞆の中から小型のバスケットを取り出した。

口は布で包まれており、その上には小さな枕と掛布団が置かれている。

片方の布が青色で、もう片方が黄色。そんなバスケットが2つテーブルの上に置かれた。

「これ、もしかして妖精用のベッド？」

雛子がそう答える。

「うん、まえにチェリーちゃんにつくったのとおなじものを、

ベリイさんとレモンちゃんの分もつくってみたの。」

「作った？これを蛍が？」

驚く要。確かに妖精用のベッドなど市販品にあるはずもないが、インテリアとして売られている小物だと言われたら信じてしまおう。

それくらいの出来栄えだった。

「蛸は料理だけじゃなくて、裁縫も得意なのよ。

これだつてあつという間にパパッと作っちゃったんだから。」

なぜか蛸ではなくチエリーが得意げに語る。

「そつ、そんなたいしたものじゃないよ……。」

一方で、急に褒められた蛸は困惑していた。

だが大したことないとは言うが、いくら小型でも要には寝具一式を手作りしろと言われて作れる自信はない。

「そんなことないわよ。色も形も凄く綺麗だし、こんな上等なもの、私には作れないわ。」

「あ、ありがとう……。」

雛子の素直な称賛を聞いた蛸は、顔を赤くして黙り込んでしまったが、今度は照れているだけのようだ。

慌てたり赤くなったり、相変わらず表情の変化が忙しい子である。

「ねえねえ、これ使ってみてもいい〜?」

さつそく昼寝が大好きなレモンが食いついてきた。

「どつどつぞ。」

蛍の許可を得、遠慮なくベッドへとダイブするレモン。

「わーい、フカフカ。気持ちいい。」

満面の笑みでベッドから跳ねるレモンを見るに、チェリーのお墨付きは本当のようだ。

「昼寝好きのレモンの目に敵うなんて凄いじゃないか。」

「こんな良いものを本当にタダでもらってもいいの？」

「もつもちろんどうぞ。あげるためにつくってきたんだから。」

蛍からすれば、日曜大工みたいな感覚で作ったものなのだろう。

お金を払おうか？と言わんばかりのベリイを前に慌てる。

「ありがとう蛍、大事に使わせてもらおうよ。」

ベリイにお礼を言われ、再び頬を赤くする蛍。

半年ぶりの再会を果たしたことで気持ちに余裕が生まれたのか、ベリイの言動は出会った数日前よりも軽くなったように見て取れた。

そんな彼の様子に安堵しながらも、要は1つの疑問を抱く。

「ところで、ウチらプリキュアの活動方針は決まったとして、

ベリイたちはこれからどうするん？」

ベリー達の目的と言えば、離れ離れになった仲間たちを探すことだった。

こうして3人の妖精が集まり、まだ姿を見せない仲間、妖精アツプルとキュアブレイズは、居場所こそわからないが無事は確認されている。

となれば、これからダークネスと戦う決意を新たにしたい要たちとは違い、ベリー達の目的は一応、果たされたと言ってもいい。

要に問いかけられたベリーはしばし逡巡し、

「そうだな……。」

俺たちはこのまま、キュアブレイズとアツプルさんの居場所を探すことにするよ。」
無事であることはわかってても、居場所がわからなければ安心出来ないということか。

「レモンも早くキュアブレイズに会いたい。」

いや、この様子を見る限りでは、単純にキュアブレイズに会いたいだけのようだ。

3人ともキュアブレイズのことを慕っている。

マイペースなレモンも再会を心待ちにしている当たり、キュアブレイズには懐いていることが窺い知れる。

「チェリ、キュアブレイズは元気だった？」

だがレモンがそう問いかけると、チェリーの表情が陰り始めた。

「?チェリ……?」

「えっええ、元気だったわよ。あんまりお話は出来なかったけど……。」

「そっか。またキュアブレイズと一緒に昼寝したいな。」

無邪気に語るレモンとは対照的に、チェリーは沈んだ様子を見せた。

蛸もどこか憂いを帯びた表情でチェリーを見ている。

確か2人はこの街でキュアブレイズと会ったことがあると言っていたが、その時に何かあったのだろうか？

レモンの記憶にあるキュアブレイズと、蛸たちが会ったキュアブレイズとは、抱いているイメージが異なっているように思えた。

「ねえ、あなた達って、人間の姿に変身出来るのよね？」

もしかして、街に出る時は人間の姿をしているの？」

そんな雰囲気を通り切ったように、雛子がベリイたちに1つの質問を投げた。

言われてみれば要たちが学校へ行っている最中、ベリイたちは外でキュアブレイズを探していたというが、どのようにして街を出歩いているのかは聞いたことがなかった。

「そうだな。外を出歩くときは極力人間の姿であることを心掛けているよ。」

「良かったら、見せてくれないかしら？」

私はまだ、あなた達の人間の姿を見たことないから。今のうちに覚えておきたいし。」

「わかったわ。ほら、レモンも立って。」

「むにやゝ、人間の姿つて疲れるんだよね。」

中々ベッドから離れないレモンを無理やり起こし、3人は人間へと変身した。

ポンツと風船が割れるような音と共に煙を出し、煙の中から3人の人の姿を現す。

ピンクの基調としたセーラー服の女子高生。

青を基調としたカジュアルな服装の青年。

そして黄色のワンピースを着た10代前後の少女だ。

要と螢は、チェリーとベリーの人間の姿は見たことあるが、レモンの人間の姿を見るのは初めてだ。

身長は140cm程度。

茶髪のボブカットに黄色の水玉模様のワンピースを着ており、猫のような口元であくびを噛み、半開きの目を擦っている。間違いなくレモンである。

「わゝ、レモンちゃん可愛い。」

雛子が嬉しそうに声をあげる。その予想通り過ぎる反応に要は呆れる。

「とゞぜゝん、レモンは可愛いからね。」

一方のレモンは褒められて上機嫌だ。

「レモンは人間年齢に換算すれば、だいたい10歳、11歳つてところだったな。」

「へゝ、じゃあウチら含めても最年少やな。」

要はそう言いながら、レモンの頭を撫でた。20cm近い身長差がある為、ちょうどいい位置に頭があるのだ。

嬉しそうに微笑むレモンを見ながら、要はふとあることに気が付く。

(・・・あれ？ひよつとして蛍よりも背が高い？)

そう言えば蛍の身長は130cm程度だったか。

実際見比べてみるとレモンの方が僅かに上回っていた。・・・蛍が背の低さを気にしているかは知らないが

一応胸の内に留めておこう。そんな要の視線に気づき、不思議そうに首を傾げる蛍。

一方雛子は、人間の姿となった妖精の面々を見た後、1つの提案をあげてきた。

「あなた達、その姿の時の名前を付けてみない？」

「人間の時の名前？どうしてわざわざ付けるの？」

「こつちの世界で、人間として自然に振る舞うためよ。」

あなた達の名前を悪く言うつもりはないけど、チェリー、ベリー、レモンって、こつちの世界だと果物の名前になるのよ。

いくら人間の姿をしても、街中で果物の名前呼び合えば、周りから余計な注目を集めてしまうかもしれないわ。」

確かに雛子の言う通りだ。

子供のレモンはまだしも、大人の姿であるチェリーやベリーがお互いをそのままの果物の名前と呼び合うのは、傍目から見ると不自然に映るだろう。

「言われてみれば、柑橘類の果物にレモンって名前があつた気がするな。」
相変わらずこの世界について妙に詳しいベリー。

「確かに、人の姿で活動する以上、この世界の人間として怪しまれないようにした方がいいわね。」

チェリーも雛子の提案に納得してくれたようだ。

「それじゃあ、さっそく名前を考えましょうか？」

「そうね……。チェリーちゃんの名前は……。サクラ、なんてどうかしら？」

「サクラ、チェリーにはほんごでさくらんぼだから、サクラちゃん？」

「蛸ちゃん正解。どうかしら？サクラちゃん。」

「サクラ……。可愛らしい名前ね。ありがとう。」

チェリー改めピンクの女子高生、サクラは嬉しそうに礼を言う。

「んじやつ次はベリーな。ウチが決めたるわ。んく……。ベルってどう？」

「ベル？」

「深い意味はないよ。ベリーとニュアンスが近いからベル。」

それにベリーの人間の姿、どことなく外国人っぽいし。ベルって名前でも問題ないや

ろ？」

実際ベリイの人間の姿は、金髪碧眼に青いデニム生地のカジュアルファッションで、どこことなくアメリカンスタイルな印象だ。

この容姿では、逆に日本人の名前の方が浮いてしまいそうだ。

「ハイ、ベル。って挨拶しても違和感ないな。」

「なんでハイ、ジョン、みたいなノリで挨拶するんだよ。」

異世界から来た妖精がなぜそんな俗なツツコミが出来るのか。

「まあでも、悪くはないな。よし、俺はこの姿ではベル、だな。」

ベリイ改めアメリカンスタイルのベルもまた、人間としての名前を受け入れたようだ。

「さいごは、レモンちゃんだね。レモンちゃんだから・・・。」

蛭が名前を考えていると、レモンは大きくあくびを1つし、

「ふわあああ、レモンの名前はレモンでいいよ。」

そんなことを言いながらベッドへ仰向けで寝だした。

「え?でも、」

「どうせレモンはレモンのことレモンって呼んでるし。」

レモン以外の名前を付けられてもレモンって言っちゃおうと思うよ。」

レモンがゲシユタルト崩壊しそうだが言い分はわかった。

確かに普段使い慣れている一人称まで変えなければいけないのは面倒だろう。

「ん〜、でもそうゆうわけにもいかないから。

せめて覚えやすい名前とかにすれば・・・。」

だがさすがに雛子はレモンの言い分を真に受けるわけにはいかないようだ。

どんな名前にしようか考えているところ、

「あの、レミンってどうかかな?」

蛍がレモンの名前を提案してきた。

「ひともじちがいのなまえだったら、もとのとそんなにかわらないから、レモンちゃんもおぼえやすいかなっておもって。」

レミンは欠伸をしながら、だがつかり話は聞いているようでレミンと言う名を反復する。

「レミン、レミン、レミンか〜。うん、レモンレミンって名前可愛いから気に入ったよ〜。よろし、レモンはこの姿だとレミンなんだね〜。」

レモン頑張つてレミンの時はレミンって呼ぶように努力するよ〜。」

レモンとレミンが入り混じり、もはや何がなんだかわけがわからなくなってきたが、とりあえずレモン改めレミンは蛍の付けた名を気に入り、それを名乗る努力はしてくれ

るようだ。

だが再び欠伸をし始めたレミンを見て、要はこの先のことを少し不安に思うが、
「ふわ〜。レモン疲れちゃった〜。ちよつとお昼寝しよ〜。」

否、その不安は5秒も持たずに実現してしまった。努力するよ、とは何だったのか。
「少しは頑張れよ……。」

呆れ顔で注意するベル。

「どうせ……にはレモンのこと知ってる人しかいないし〜、

レモン街に出てから頑張るよ〜おやすみ〜。」

それ絶対明日から頑張ると同じ理屈で何時まで経っても頑張らないやつだよな、

と要が思うも束の間、レモンの姿に戻るや否や再び5秒も経たずに昼寝してしまっ
た。

ちやつかり蛭が作ってきた妖精用ベッドの上で。

「やれやれ……。」

「まあでも、レモンはこう見えてやる気出すときはやる気出すから、心配しなくて大丈夫
よ。」

……多分。」

こればかりはサクラもさすがにフォロー出来なかつたようだ。

どこまでもマイペースなレモンに呆れながら、サクラとベルも妖精の姿に戻るのだった。

…

「これで一通りのことは決まったかしら？」

プリキュア3か条、妖精たちの今後の活動、そして人間の姿での名前。

パーティかぶれの第一回作戦会議の中で、当面の活動指針となるべきものは全て決まったと思う雛子だったが、

「いや、まだ大事なことが決まってないよ。」

雛子、君は何か重大なことを忘れてはいないかね？」

要が妙に芝居がかった口調でそんなことを言い出す。

「重大なこと？何かしら？」

「ズバリ！チーム名！」

これから3人チームで活動するんやから、ウチらに相応しいチーム名を決めな！」

「……」

あきれ顔で要を見る雛子。だが要はお構いなしにテンションを上げていく。

「そう、3人揃って『プリキュア戦隊サンニンジャー』！みたいな！」

果てしなく絶望的なネーミングだが、本人も勢い任せで言っている当たり、その場のノリで決めただけだろう。

そしてチーム名は毎週日曜日の朝、通称キッズタイムに放送されている、5人組のヒーローが、時には変身して、時には巨大ロボットに乗って悪と戦う子供向け特撮ヒーロー番組、『レンジャーシリーズ』を意識しているようだ。

全く、このノリと勢いの悪さに定評のある悪友は中学生にもなった今でも、レンジャーシリーズを毎週リアルタイムで視聴しているから、何時まで経っても思考が子供っぽいのだ。

そんなことを思いながら、雛子はそのレンジャーシリーズについて振り返る。

確か今期は、レンジャーシリーズ30周年を記念して、歴代のレンジャーたちの力を借りて無限の可能性を引き出していくのをコンセプトとした、『無限戦隊オルレンジャー』という作品だ。

毎週歴代のレンジャーたち本人がゲストとして出演しているので、雛子としてもとても楽しみな作品である。

ちなみに雛子が一番好きな作品は、シリーズ第19作目にあたる大自然との調和と共存をテーマとした『共鳴戦隊レゾネイジャー』だ。

人もまた自然の一部であること謳うストーリーは、当時3歳だった雛子には当然理解できるものではなかったが、それでもあの森と草原を舞台とした牧歌的な世界観には、言葉通り自然と魅入られるものがあつた。

そして小学6年の時に再び見直して、作品に込められた深いメッセージ性に人知れず感動したものだ。

オルレンジャーは、ゲストとして出演したレンジャーの世界観を出来る限り再現することに力を入れており、毎回作風が異なってくるのも特徴だ。

つまりレゾネイジャーのゲスト回では、雛子の大好きだったあの世界が最新の映像技術で再現されるのだ。

それだけは絶対に見逃すわけにはいかない。

・・・とどのつまり雛子もこの歳になるまで同シリーズを毎週欠かさず視聴しているわけだが、さすがに要みために触発されてチーム名を決めようと提案するほど子供ではないと自分に言い聞かせた。

「もう、蛍ちゃんからも何か言つて・・・」

言いかけて蛍の方を振り向いてみると、

「レンジャーシリーズ・・・チームめい！」

蛭が顔を輝かせていた。

それはもう『ペアツ』という効果音と共に光のエフェクトが周囲に放たれているかのよう^にに輝いていた。可愛い。

「それ！いいかも！レンジャーシリーズみたいなチームめい、かんがえよ！」

そして要と同じかそれ以上のテンションで賛同してきた。まさか蛭までレンジャーシリーズの視聴者だったとは。

しかも要の提案に乗ってくるあたり、彼女は見た目だけでなく性格面も子供っぽいうだ。可愛い。

だがこどもっぽいことは決して悪いことではない、むしろ童心を忘れないということ
は素晴らしいことだ。

世間一般で所謂思春期、反抗期と呼ばれている中学生にもなると、勸善懲惡を王道に
行くヒーロー番組は、やれ子供だましたのやれご都合主義だのと言われ敬遠されがちだ
が、彼女には今でも純粋にレンジャーシリーズを楽しんでいるようだ。

それはもはや一種の美德だと言ってもいい。何より可愛い。

「おつ、蛭もレンジャーシリーズ見てるんか？」

「うん！わたし、『マジカルせんたいマホレンジャー』だいすきだったの！」

マジカル戦隊マホレンジャー。シリーズ23作目にあたる魔法をテーマとした作品だ。

魔法使いを主人公とし、石畳の街道に煉瓦の家が並ぶという中世ヨーロッパをイメージとした古風な世界観でありながら、魔法のアイテムである杖や箒には、流行りもののおしゃれ要素を取り入れており、敵対する怪人たちも可愛らしくデフォルメされたものがほとんどだった。

そんなポップかつファンシーな作風は、従来の硬派な作風からはかけ離れており、ファンから否定的な意見も多い一方で多くの女性ファンを獲得することに成功した、シリーズでも特に異色の作品である。

確か蛭は、昔魔法使いや妖精に憧れていたと言っていた。

彼女がマホレンジャーをシリーズで一番好きと言うのも頷ける話だ。

「蛭ちゃんはどんなチーム名が良いと思う？」

そう蛭に話しかけると、彼女の顔がますます明るくなった。

チーム名を決めて良いと言われたことが嬉しくてたまらないようだ。可愛い。

すると要がジツとした目でこちらを睨み付けてきた。その視線は

ウチと蛭で随分と対応が違うんやな、

と訴えているようだ。

当然だ。要と蛭を同じに扱うなんて、可愛い蛭に対して失礼である。

「どんなチームめいがいいかな。かわいいのにしたいな……。」

「いや、どちらかと言うとカツコいい方が……。」

何を言う。カツコよさよりも可愛さの方が大事だ。

「はい！おもいつきました！『ぴかぴかぴかりんぴかレンジャー』ってどうかな!?」
「……。」

要はげんなりとした表情を見せる。ないわー、と声に出さなくても思っているのがわかる。

一体何がいけないというのだ。ぴかぴかぴかりんぴかレンジャー。

蛭らしい幼さとあどけなさを兼ね備えた素晴らしいネーミングセンスだ。

この世の全ての女子中学生に聞いても2つとして同じ名前は出て来ないだろう。

何より提案した時の蛭の仕草が可愛かった。それだけで即採用ものである。

「可愛いから採用。」

「やったー！」

「ちよつと待て雛子！その可愛い絶対意味がちやうやる!!」

要の言葉を意識すると、

今のはチーム名が可愛いんじゃないやなくて、蛭が可愛いから採用するつもりだろ！

となる。無論、後者だ。

可愛い女の子の言葉は異性は勿論、時として同性でさえ全てを許し肯定したくなると思えるほどの天性の魅力に満ち溢れているもの。

つまり可愛いは常に正しい、正義なのだ。

「待つて蛭！ そんなチーム名じゃプリキュアだつてわからんし！

そもそも戦隊も入ってないからレンジャーですらないんだけど！」

「あ……そっか。」

指摘された蛭は少ししよんぼりとした様子を見せる。全く無粋なツツコミだ。

プリキュアのチーム名だからと言って、プリキュアという言葉を入れなければならぬい決まりはない。

少なくとも要がノリと勢いで提案したプリキュア戦隊サンニンジャーよりは遥かにマシだ。

「……じゃあ『ぴかぴかぴかりんプリキュア』！」

すると髪入れず笑顔で別のチーム名を提案してきた。可愛い。

どうやら蛭にとって『ぴかぴかぴかりん』というのは絶対に外せないフレーズのようなのだ。

そんな拘りも可愛いし、これならプリキュアもチーム名に入っている。

何も問題はないだろう。

「じゃあそれで決まりね。」

「やったあ！」

「待たんか〜い!!」

だがそれも要によって却下された。

提案したチーム名を2度も却下された蛭はさすがに落ち込んだ。

全く、可愛いのかの字も知らないくせに、蛭を悲しませるとは何事だ。

結局この場は要によって無理やり中断され、後日各々が候補を考えてくることになった。

自分で提案したというのに身勝手なものである。

∴

第一回プリキュア作戦会議もいよいよ佳境を迎えたころ、

蛭は話を切り出すタイミングを伺っていた。

「今日のところはこんなもんかね？」

「そうね。当面の活動指針は決まったことだし。」

「早くキュアブレイズも見つかるとええな。」

「見つけて見せるさ。何としても。」

各々が解散に向かって動き始めている。

要と雛子はお菓子の空き袋を片付け始め、チェリーは未だにお昼寝中のレモンを起こしていた。

作戦会議が終わり、これ以上の話題はないはずだ。切り出すのは今しかない。

(がんばれ・・・わたし！)

「じゃつ、今日はもう解散、」

「あつ、あの!!」

蛍は大声で要の言葉を遮った。この場にいる一同が、驚いて蛍の方を振り向く。

「あの・・・。」

だが直前になって、蛍に胸いっぱい不安が広がり始めた。

もしも断られたらどうしようと、今になって悪い方向に思考が傾き始める。

(だいじょうぶ・・・ふたりならぜつたいに・・・だいじょうぶだから！)

1つ、2つ、大きく深呼吸をし、蛍は心を落ち着かせる。

そして要と雛子の顔を交互に見てから、胸に置く両手に力を込めた。

「……おはなし、したいことがあるの。あの……わたし、」

友達になれると思ってるの？

「っ!？」

だが2人に思いを打ち明けようとした蛍の頭に、自分の声が響いた。

「闇の波動!？」

続いてチエリーが声をあげ、蛍の全身に悪寒が走る。

要と雛子も、闇の波動を感じ取ったようだ。2人とも驚いて立ち上がる。

ずっと友達が出来なかった私に、友達になってくれる人がいると思ってるの？

頭の中に声は、これまでよりも大きく響き渡る。

「うっ……。」

「蛍!大丈夫!？」

「蛍ちゃん!」

雛子が蛍の隣まで行き、手を取った。

(だいじょうぶ．．．ふたりならぜつたいに．．．。)

森久保さんと藤田さんは優しい。それは私に対してだけじゃない。

今まで優しくしてくれた人がいなかったから、勘違いしてるだけだよ。

(それでもいい．．．それでも、もりくぼさんとふじたさんは．．．)

わたしにやさしくしてくれたんだから．．．。

頭に響く声の通り、これまで同い年の人から優しくして貰えたことなんてなかった。

でも、だからこそ嬉しかったのだ。

こんな自分でも、他の人と、彼女たちの友達と同じように接してくれたことが。

「だい．．．じょうぶ．．．いつものことだから．．．。」

蛍は現実を意識を戻し、要と雛子にそう答える。

「いつものことって．．．蛍あんた．．．。」

要が驚いて声を失うが、蛍は再び自分の意識と向き合った。

どうせ、私の事なんて、ただのクラスメートとしか思っていないよ。

心の中ではバカにされてるかもしれないよ？

こんな弱虫で何の取り柄もない私に、親しくしてくれる人がいると本気で思ってるの？

(ほんきだもん！ふたりはぜつたいに、そんなひとじゃない！)

友達が欲しいなんて見苦しい夢、いい加減捨てなさいよ！

そんな夢、私に叶えられるわけがないんだから!!

長い間友達がいなかった自分の本心は、ここまで卑屈になつていたのか。

本当に、嫌になつてくる。自分のことなんて大嫌いだ。でも、それも今日までだ。

絶対に夢を叶えると心に決めたのだから。リリンが教えてくれた、大切なおまじないで。

蛭はおまじないを胸に、万感の思いを込めて自分と向き合う。

(かなえる・・・ぜつたいにかなえるの！)

今日わたしはそのために、ふたりと、ともだちになるために！

(ここにきたんだから!!)

そして声を振り払うかのように、心の中で雄たけびを上げた。
「がんばれ！わたし!!」

すると蛍の胸に光が灯り、シャインパクトが現れた。

「はあっ……はあっ……プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

光に包まれた蛍は、キュアシャインへと変身を遂げ、頭の中に響く声をかき消すような大声で名乗りをあげた。

「世界を照らす！希望の光！キュアシャイン!!」

そして、頭の中に響く声は、いつの間にか消えていたのだった。

「蛍ちゃん……」

そんな蛍を、雛子が不安な表情で見ている。

どうやらまた、臆病な自分のせいで2人に心配をかけてしまったようだ。

「もりくぼさん、ふじたさん、しんばいかけてごめん。」

「……いこつ、ダークネスをやっつけなきゃ。」

「……せやな。雛子。」

「……うん。」

「プリキュア!!ホープ・イン・マイハート!!」

蛍に続き、要と雛子は同時に変身する。

「世界を駆ける、蒼き雷光！キュアスパーク！」

「世界を包む、水晶の輝き！キュアプリズム！」

変身を終えた3人は妖精たちと共に、闇の波動がする方向へと飛び立っていった。

∴

蛭たちが闇の波動の気配を追った先には、ダークネスの行動隊長サブナックが待ち構えていた。

「来たな、プリキュア。ん？貴様が4人目のプリキュアか。」

サブナックはキュアプリズムを見ながら問いかける。

「女の子じゃないってことは、あの人サブナック？」

「ああ、見た目通り筋肉バカのおっさんや。」

キュアスパークが毒を含んだ言葉で答える。するとサブナックが眉間にしわを寄せてきた。

「どいつもこいつもバカバカと、口ではなく拳で語れないのか？」

「何言ってるん？拳が喋るわけないやろ。」

サブナツクの抗議に対して、キュアスパークは涼しい顔で皮肉を返した。

「・・・それもそうだな。」

だがサブナツクはなぜか妙に納得してしまったようだ。

それを聞いたキュアスパークは盛大にズッコける。どうやら期待していた反応とは違っていたようだ。

「いや納得するのかよそこ・・・。」

「ならばなぜ拳で語ると言う言葉があるのだ？」

そしてなぜかその言葉を発した本人からあまりにも根本的な問いが飛んできた。

「知るか！辞書引いて自分で調べ！」

「辞書とはなんだ？」

「だくもう！何やねんこのおっさん！」

ツツコミに疲れたのか、キュアスパークが呆れ交じりにそう叫ぶ。

「キュアスパーク、無駄口が多いわよ」

そしてキュアプリズムに注意された。

一連のやり取りを横で聞いていた蛭もつい気を緩めてしまった。

いけないいけない。こちらも気を引き締めていかないと。

「はいはい、ちゃっっちゃとこいつを追っ払うよ。」

「面白い、やれるものならやってみるがいい。」

サブナックは右手に集めた絶望の闇を天に掲げる。

「ダークネスが行動隊長、サブナックの名に置いて命ずる。

ソルダークよ。世界を闇で食い尽くせ！」

そしてサブナックの言葉と共にソルダークが誕生した。

「いけっ！ソルダーク！」

「ガアアアアアア!!」

ソルダークが雄叫びをあげる。するとソルダークは脚部をバネのように縮ませ始めた。

「2人とも、気を付けて！」

後方からキュアプリズムがそう呼びかける。

次の瞬間、ソルダークは縮めた脚部を伸ばし、その反動を利用して勢いよく飛び掛かって来た。

「え!?!」

「キュアシャイン！」

キュアスパークが蛍の手を取り、その場を離脱する。キュアプリズムも元いた場を離

れた。

突撃してきたソルダークの勢いは止まらず、そのまま市街地まで突っ込み、いくつもの建物を破壊する。

プリキュアに変身しているとはいえ、あの突進を正面から受けたら重傷を負ってしまうだろう。

キュアスパークが手を引いてくれなければ、危なかつたところだ。

だが起き上がったソルダークは再び体をこちらへ向けた。

「ピジョンピヨン飛ばれたら罫が明かん。こっちからも仕掛けるよー！」

キュアスパークが電気を纏いながら、ソルダークへと突撃する。蛭も置いて行かれぬよう、

キュアスパークの元へと向かおうとするが、その前をサブナツクが横切った。

蛭は驚いて足を止めるが、サブナツクは蛭めがけて拳を振り下ろしてきた。

避けられない。

そう思った瞬間、蛭の目の前に水晶の盾が現れる。

「キュアシャインー！」

蛭を寸で助けたキュアプリズムは、そのままバリアを右手に纏い、サブナツクへ拳を振るった。

だがサブナックはそれをガントレットで受け止める。

「盾を纏わねば拳を振れぬか。身を傷つけるのがそんなに怖いか？」

サブナックはそのまま、全身から闇の波動を噴出する。

「笑止！」

波動を受けたキュアプリズムは後退するも、サブナックは彼女へと距離を詰め寄る。

「キュアプリズム！」

キュアプリズムを助けなきや！

蛍はその場で地を蹴り、サブナックへと拳を振るう。

だが蛍の拳はサブナックのガントレットに防がれ、逆にガントレットに直撃した振動が蛍を襲う。

「いったっ……。」

「相変わらず軟弱だな、キュアシャイン！」

サブナックはそのまま蛍の手を掴み、力任せに投げ飛ばした。

「きやあああつ！」

「キュアシャイン！」

キュアスパークがこちらに気づき、駿足で駆け付け蛍を抱きとめた。

サブナックはその隙をつき、キュアスパークへと突撃するが、前方をキュアプリズム

の盾が遮る。

キュアプリズムはその隙に蛍たちの方へと合流した。

だが一連の攻防の中で、蛍の不安は徐々に現実なものとなってきた。

「やはり貴様は話にならないな。味方の足を引つ張ることしか出来ない弱者が。」

「っ!？」

胸中に抱いた不安を、サブナックに指摘される。蛍はその言葉を否定することが出来なかった。

これまででも、この戦いの中でも、2人に助けられてばかりだったのだから。

「伝説の戦士が聞いて呆れる。なぜ貴様ごときがプリキュアなのか。」

サブナックの言葉が、蛍の心を大きな影を落とす。

こんな弱い自分が仲間でもいいのか、2人とチームでいる資格はあるのか。

ここ数日ずっと悩んでいたことだ。そして今もその悩みは、心の中に染みついて落とせない。

(それでも・・・いっしょにいたいっておもうから・・・)

蛍は弱い自分の本心に負けないよう、意思を強く持つ。

「キュアシャイン、あいつの言葉なんて気にせんでええよ。」

「大丈夫、あなたは弱くなんかないから。」

(・・・ありがとう。やっぱり、ふたりはやさしいな・・・。)

2人の優しさが蛍の不安を取り除いていく。やっぱり自分は2人と仲間でいたい。

2人の隣に立ちたい。だから蛍は、自分に出ることを精いっぱい頑張るために1つの決断をする。

でもこの決断は、またチェリーを怒らせてしまうだろう。

(チェリーちゃん。ごめんなさい。)

心の中でチェリーに謝罪する蛍。

「馴れ合いか、くだらん。ソルダーク！」

サブナツクの掛け声とともに、ソルダークは再び足を縮め始めた。

臨戦態勢を取るキュアスパークとキュアプリズム。

だが、

「はああっ!!」

蛍は突然、ソルダークへ目掛けて飛び出していった。

：

要が制止する間もなく、キュアシャインは目の前を横切り、ソルダークへと体当たりした。

あまりにも予想外の出来事に、要は勿論キュアプリズムも、敵であるサブナックさえも啞然としている。

「キュアスパーク！」

するとキュアシャインが名を呼んできた。見ると体当たりを受けたソルダークがよろめいている。

今のうちに隙を付いてほしい。

そう呼びかけていると悟った要は、キュアシャインが突拍子もない行動に出た理由を考えるよりも先に動き出した。

「はあっ！」

雷を纏った正拳を繰り出しソルダークへダメージを与える。

ソルダークはこちらに気づき攻撃を仕掛けようとするが、今度はキュアシャインがソルダークの顔面へと飛びついた。

「え、ちよっ!?!キュアシャイン！」

突如視界を奪われたソルダークは、キュアシャインを払おうと首を勢いよく振り出し

た。

キュアシャインは飛ばされないうよう必死でしがみついている。

恐らく敵の隙を作るための行動なのだろうが、いくらなんでも危険過ぎる。

だが止めようと思うも、実際にソルダークが無防備な状態を晒しているため、要はキュアシャインの意をくみ、攻撃を仕掛けることにした。

「はああつー！」

渾身の一撃を腹部に叩き込んだ要。

だがソルダークが大きく仰け反った反動でキュアシャインは手を離してしまい、体が宙を舞ってしまった。

「しまったー！」

要が助けに駆けつけるよりも先に、キュアプリズムがキュアシャインを受け止めた。

一先ずは安堵するも、キュアプリズムの腕の中から降りたキュアシャインは、再びダークネス等を正面から見据える。

「キュアシャイン！無茶な戦いはしちやダメって言ったでしょ!!」

そんなキュアシャインの戦いを見ていたチェリーが、ついに怒鳴り声をあげた。

当然だ。これまでも2度、1人で戦い窮地に陥り、つい先ほどプリキュア3か条で無茶な戦い方はしないと誓ったのにも関わらずこれだ。

キュアシャインからすれば敵の隙を作るための作戦なのだろうが、要も見えていられないくらい無茶苦茶な戦い方だった。

だが、要がチェリーに続いて注意しようとするも、キュアシャインの叫びに中断される。

「ムチャくらいしなくちゃいけないの!!」

「えっ?」

チェリーが言葉を失う。要もキュアプリズムも、キュアシャインの方を振り向いた。

「わたしは・・・キュアスパークやキュアプリズムほどつよくないから・・・」

それでも!ふたりといっしょに、たたかいたいから!ふたりのとなりに立ちたいから!

よわいわたしは、ムチャくらいしないと!ふたりとならんで立つことなんてできないの!」

「キュアシャイン・・・」

要は虫の内に、ここまで強い意思があつたなんて思つてもいなかった。

人と接することに消極的で、ダークネスと戦うことにも怯えていた、臆病な少女。

少なくとも要はそう思っていた。そしてその認識に間違いはなかったはずだ。

なぜなら彼女は戦う前に、闇の牢獄で自分の声を聞いていたのだから。

それは自分自身が不安、弱さを抱えていることの証。

現に過去の亡霊を振り切った要は、初めて変身して以来声を聞いていないだ。

だからこそ、要は蛍をなるべく戦わせないように、自らが先陣を切るつもりでいたのだ。

戦うことを恐れる蛍に怖い思いをさせない為にも。

だけどそれは、無意識の内に、蛍のことを下に見ていたのかもしれない。

(ウチは、蛍のことバカにし過ぎてたのかもしれないな……。)

蛍は臆病で、か弱いから、自分が守らなければならぬ。

そんな認識を改めなければならぬようだ。

なぜなら蛍は、今尚離れることのない自分の不安と恐怖を、無理やり振り払えるほどの強い意思を、胸に抱いていたのだから。

「ちよこざいな。弱者が無駄なあがきをするな。」

キュアシャインの突然の猛攻に対して、サブナックが毒づきながら攻撃を仕掛ける。

「もう、ひとりでムチャなたたかいはしない。

でも、3人でなら、ムチャするんだからああ!!」

だがキュアシャインは雄叫びと共に、真正面からサブナックに突撃する。

その強い意思を込めたキュアシャインの一撃に、これまでキュアシャインを見下して

いたサブナツクが、一瞬怯んだような表情を見せた。

1人ではなく3人だから無茶をする。何とも屁理屈の利いた言い分だろうか。

だがそんな蛍の戦う様子と、彼女の決意の前に怯むサブナツクを見た要は、蛍は近い将来、このチームの中心になるのではないかと、漠然と思いはじめたのだった。

：

「3人一緒なら、無茶をする・・・か。」

蛍の無茶苦茶な戦いを見ながら、雛子は要の家での出来事を思い出す。

あの時、闇の牢獄の中、頭を抱え出した蛍の手を取った時、雛子は蛍の声を聞いたのだ。

友達が欲しいなんて見苦しい夢、いい加減捨てなさいよ！

そんな夢、私に叶えられるわけがないんだから!!

かなえる・・・ぜったいかなえるの！今日わたしはそのために、

ふたりと、ともだちになるために！ここにきたんだから

理由はわからないが、闇の牢獄の中では、触れた人の心の声を聞くことが出来るようだ。

雛子にそのつもりはなかったが、結果として雛子は蛍の本音を知ってしまったのだ。ずっと友達が出来なかつた故に卑屈になつてしまったこと。

そのために、自分や要のことを信じる事が出来なかつたこと。

そしてそんな自分の心と向き合える彼女の思いの強さ。

蛍はきつと、これまでも自分の弱い心とずっと戦つて来たのだろう。

弱い自分、大嫌いな自分から目を背けず、そして勇気を出して乗り越えいく。

そんな健気な蛍のことを、雛子は心の底から助けになつてあげたい、守つてあげたいと思つた。

雛子にとつて蛍は、ただのクラスメートではないのだから。

(ずっと抱き続けてきた夢か、形になるにつれて取り戻せた夢かはわからない。

それでも蛍ちゃんは今日までずっと、夢を捨てないで来たんだよね・・・。

闇の牢獄の中、自分の絶望の声が何度聞こえようと、希望を捨てずに

・・・あつ。）

その時、雛子はあることを思いついた。

「きやつ。」

「よつと、キュアシャイン、大丈夫?」

「うつつん、ありがとうキュアスパーク。」

するとサブナツクに振り払われたキュアシャインをキュアスパークが受け止めこちらに合流した。

サブナツクもソルダークを側に置き、お互いに態勢を立て直す。

「ねえ、2人とも、ちよつといいかな?」

雛子はさつそく、先ほど思いついたことを2人に話し始める。

「なに?急に。」

「チーム名、思いついたの。」

「は?」

キュアスパークはこんな時に何を考えてるの?と言いたげな顔をして呆れる。

雛子自身も場違いであることは承知だ。それでも今、この場で伝えたいのだ。

このチーム名は、3人の心を1つに繋げるものだから。

「私たちプリキュアは、世界の希望となる4つの光。」

空を覆う絶望の闇を照らせば、世界は希望の光で満ちる。」

雛子は一拍起き、隣に立つキュアシャインを見て微笑む。

「そう、世界を照らす、希望の光。」

「え？」

驚いて声をあげるキュアシャイン。無理もない。それは彼女自身を表す二つ名だ。だからこそ、このチーム名は、自分たちプリキュアに最も相応しいと思ったのだ。

「ホープライトプリキュア！」

なぜならこのチームには、伝説の戦士、世界の希望を体現するプリキュア。

キュアシャインがいるのだから。

「え？えええっ!？」

自分の二つ名がそのままチーム名に使われ、大きな声で驚くキュアシャイン。

「ホープライト、希望の光か……。ええやん。」

「でしょ？」

「え……。えと、ホントにいいの？」

「なんで？ウチらにピッタシやん。」

キュアスパークは同意してくれた。彼女も雛子と同じことを思ったのだろう。

そう、誰よりも強い希望を持つキュアシャインは、蛍は、いつかこのチームの中心になるのだろうか。

「どうかな？キュアシャイン？」

キュアシャインはしばらく悩むも、やがて顔を赤くし、

「えと……ふたりがよければ……。」

静かな声で同意してくれた。

「よっし！そうと決まればキュアシャイン！ピシッと決めセリフを言ったれ！」

そんな無茶ぶりを笑顔で振るうキュアスパーク。

「ええええっ!!？」

「ほら、キュアシャイン。」

先ほど以上に驚くキュアシャインと、珍しく要の悪ノりに付き合う雛子。

「えと……。」

困惑するキュアシャインだが、やがて意を決して顔をあげる。

「みつ、3つのひかりが、でんせつを紡ぐ！」

そして『せくの』で3人、声を揃えてその名を叫んだ。

「「ホープライト！プリキュア！」」

：

ホープライトプリキュア。

自分の二つ名がチーム名として採用されたことに驚く蛍だったが、その名のもとに、キュアスパークとキュアプリズムは集い、蛍の隣に並んでくれた。

2人と一緒のチームに集えたこと、隣に並んで立てたことが、蛍には嬉しかった。

「それじゃ、」

「いくよ、2人とも。」

「レッツ！」

「Go！」

「プリキュア！」

そして3人同時に大地を蹴り、ダークネスへと立ち向かう。

「ソルダーク！」

サブナツクの呼びかけと共に、ソルダークが足をスプリングにして飛び出す。

「はっ！」

だがソルダークの突進を、キュアプリズムの盾が遮った。

初見は突拍子もない攻撃方法と突進速度に気を取られてしまっていたが、体を向けた

方に直線にしか飛べないのであれば、自前に進路を防ぐのは容易い。

そしてキュアスパークが、ソルダークを遮る盾を跳び箱の様に飛び越え、そのままソルダークの頭上に踵落としを叩き込む。

「おのれ！」

地上へ着地したキュアスパークにサブナックが襲い来る。

だが蛭が真正面からサブナックへ迫り、彼の拳を両手で受け止める。

「なにっ?」

蛭から一歩引き、彼女に狙いを定めるサブナック。

だが直後キュアプリズムがドーム状のバリアを蛭の周囲に展開し、サブナックの拳を跳ね除けた。

サブナックはすぐさまキュアプリズムの方へ振り向くが、間髪入れずバリアが砕け散り、蛭がサブナックに体当たりをする。

「ちよこまかとー！」

息つく暇も与えないプリキュアたちの連携に毒づきながらも、サブナックは再び蛭に拳を振るい、蛭もまた、それを両手で受け止める。蛭はそのままサブナックに対抗するが、両手で抑えこんでも、サブナックの腕力の方が勝っていた。

やがて蛭は押され始め、片膝を付いてしまう。

「ふん、その程度の力で、俺と張り合おうなど……。」

だが言いかけたサブナツクの言葉を、雷の音が中断する。

サブナツクが音のする方を見ると、キュアスパークが片手に雷を纏っていた。

その目先には大きなダメージを負い、倒れているソルダークの姿があった。

「しまったー！」

慌てるサブナツクの様子を見て、蛍は作戦の成功を確信する。

蛍達の目的はあくまでもソルダークを倒し、絶望の闇が拡がるのを防ぐこと。絶望の闇さえ拡がらなければ、闇の牢獄も強度を維持することが出来ず、自然と消滅していくことは、これまでの戦いから推測出来た。

そう、絶望の闇を撒き散らすソルダークを倒すことさえ出来れば、闇の牢獄は解放されるのだ。

わざわざ行動隊長の相手をする必要はない。

だから蛍は、浄化技を使いこなしているキュアスパーク達がソルダークを倒せるように、身をもってサブナツクを引きつけるための、囹役を買って出たのだ。

結果キュアスパークとキュアプリズムは、ソルダークを行動不能へと追い込むことに成功した。

その作戦に気づいたサブナツクは、すぐさまキュアスパークの方へ向かおうとする

が、蛍はがむしやらにしがみ付く。

「貴様っ！」

「ぜったいに！いかせないから!!」

後はキュアスパークが浄化技を決めるだけだ。もうほんの少しだけ、時間を稼げればいい。

「プリキュア！スパークリング・プラスター！」

蛍の足止めが功を成し、サブナツクの援護が間に合わないまま、ソルダークはキュアスパークの浄化技を受ける。

「ガアアアアアアア!!」

そして巨大な落雷に打たれたソルダークは、断末魔をあげて消滅していった。

ソルダークの浄化を確認した蛍は、サブナツクから飛び退き、距離を置く。

そしてその蛍を守るように、キュアスパークとキュアプリズムが、彼女の一步前に立った。

「ホープライトプリキュアか。そのチーム名、覚えたぞ。」

無勢とみたサブナツクは、そう言い残し姿を消したのだった。

…

ソルダークを撃退した3人は駆け寄り、大きくハイタッチをした。

「やったな、キュアシャイン。」

「キュアシャイン、お疲れ様。」

「キュアスパーク、キュアプリズム、ふたりとも、ありがとう！」

労いと感謝の言葉をそれぞれが述べる。すると、

「蛍〜！」

「きやつ〜！」

「何が3人でなら無茶するよ！そんな屁理屈が通じると思っているの！

全くもう！無茶な戦い方するなって何回言ったら！」

チェリーが大声で怒りながら、蛍の戦い方を注意する。

そんなチェリーと蛍の間にベリーが割って入って宥めようとする。

「まあまあチェリー、ソルダークは倒せたんだから落ち着け・・・」

「ベリーは黙ってて！これは蛍のパートナーである私の役目なの！」

「わ〜、チェリーこわ〜い。」

そしてレモンはマイペースにそんな感想を述べていた。

パートナーである3人の妖精たちも交えて、賑やかに談笑するプリキュア達。

そんな彼女たちの姿を、キュアブレイズは1人、物陰から見ている。

「ホープライトプリキュア。希望の光……。」

キュアシャインに続き、2人のプリキュアが覚醒したことは、力を感じたことからわかっていった。

だがなぜ僅か2週間の中に、3人ものプリキュアがこの世界で誕生したのか。

「どうして……私の世界は……。」

胸に痛みが走る。納得のできない思考を振り切りながら、キュアブレイズはその場を後にするのだった。

∴

ダークネスを撃退した蛍たちだったが、要の家からはかなり遠いところまで来てしまった。

プリキュアの状態であれば、すぐにでも家に帰ることが出来るが、1人ならまだしも3人でそんなことをすれば、さすがに家にいる瞬に気づかれてしまう可能性が高い。

仕方なく蛍と雛子は、この場で解散することにした。

「んじゃ、2人とも、また学校でな。」

「蛍ちゃん、またね。」

要と雛子が、それぞれ別れの挨拶を言う。きつとこれが最後のチャンスだ。

そう思った蛍は、後ろ向きな考えに引かれる前に行動に出ることにした。

「あっあのっ!」

蛍に呼び止められ、2人とも蛍の方を振り向く。蛍は深呼吸をし、心を落ち着かせてから、

今一度勇気のおまじないをする。

「がんばれ．．．わたし．．．。」

小さな声で自分を鼓舞する蛍。そして、

「かつ．．．かなめちゃん!! ひなこちゃん!!」

2人の名前を、大きな声で叫んだ。

突然名前を呼ばれた2人は困惑するが、蛍はその様子を確認する間もなく、ありつたけの思いを込めて叫ぶ。

「もし、よかつたら！わたしと・・・わたしと!!ともだちになってくれませんか!!」

2人と初めて出会った時から、ずっと願っていたこと、ずっと伝えたかったことを、ついに言葉にすることが出来た。

ほんの少しずつ勇気を出して、一歩ずつ歩んで、ようやく打ち明けられるだけの勇気を胸に抱くことが出来たのだ。

「・・・」

ほんの少しの間、無言の間が訪れる。ものの5秒もしない時間が、蛍に取ってはとても長く感じられた。そしてついに、要が口を開いた。

「え？蛍。今までウチのこと、友達だと思ってなかったん？」

「えっ？」

だがイエス、最悪でもノーの返事が来るかと思っていた蛍は、予想外の要の返答に戸惑う。

「ウチはずっと、蛍のこと友達やと思ってたのに。」

蛍はそう思ってくれてなかったんだね・・・」

そして落ち込み始める要。傍目から見ればあからさまな演技だが、今の蛍はそれが判断できるほど冷静ではなかった。

「えっ!? えとちがうの!! ふたりとはずつともだちになりたいっておもって!」

でもなかなかいえなかっただけで! もりくぼさんのこと、そんなふうにおもってたわけじゃなくて!!」

もしかして、とんでもなく失礼なことを言ってしまったのではないのだろうか。

そう思い始めた蛍は、言葉にならない言葉で必死に要に弁明するが、そんな様子を見て雛子は大きくため息をつく。

「要。こんな時に蛍ちゃんをからかわないの。」

「え・・・?」

「別にええやろこれくらい? 今までずつと待たされたお返しだよ。」

からかわれていただけ? それに待たされていたお返しとはどうゆうことなのだろうか?

蛍が混乱していると、要はさつきとは打って変わって、真剣な表情で話し始めた。

「ずつと、その言葉を待ってたよ。蛍。」

「ごめんね、蛍ちゃん。でもどうしても、あなたから直接、その言葉を聞きたかったの。」

2人の突然の告白に、蛍は呆気にとられる。

「さつき言ったこと、半分は本当。ウチはずつと、蛍のこと友達だと思ってたよ。」

入学式の時からずつとね。」

「私もよ、蛍ちゃん。私たちはもう、蛍ちゃんのことを友達として受け入れてる。

だから後は、蛍ちゃんの気持ちだけ。蛍ちゃん、あなたの気持ち、私たちに聞かせて。」

2人の言葉を聞き、蛍は自分が大きな勘違いをしていたことに、今になって気付いたのだ。

要も雛子も、入学式で初めて会った時から、ずっと自分の事を友達だと思ってくれていたのだ。

だが2人と距離を置き、友達であることを拒み続けていたのは、他ならぬ自分自身だった。

蛍はこの2週間、すごく遠回りをしてきた気分になった。

もし最初から勇気を出すことが出来ていれば、入学式の時に既に願いを叶えることが出来たのかもしれない。

だからこそ後悔よりも先に、2人の気持ちにちゃんと答えよう。

蛍は再び深呼吸をし、今一度、2人に自分の素直な思いを伝える。

「・・・わたしは・・・かなめちゃんと、ひなこちゃんと、ともだちになりたい・・・。

ふたりのこと、ともだちだと、おもってもいい・・・?」

「勿論。」

「当たり前じゃない。」

その問いに対する答えは、すぐに返ってきた。蛍は、見る見るうちに目に涙をためていく。

そんな蛍に要と雛子は、優しく手を差し伸べる。

「これからは、クラスメートじゃなくて、友達、だね。」

「改めて、よろしくね。蛍ちゃん。」

蛍は涙を止めることなく、差し伸べられた2人の手を取る。

そんな光景を見ていたチエリーは、蛍を慈しむような笑顔で泣き、ペリイはチエリーの頭を撫で、レモンは笑顔を浮かべていた。

「・・・うん!!ありがとう!!かなめちゃん!!ひなこちゃん!!」

蛍は、泣きながら満面の笑みを浮かべる。

ずっと願っていた夢が今、最高の形で叶うのだった。

：

次回予告

「ついにわたしにも、ともだちができた！」

これからはともだちといっしょにあそんだり！おべんきようしたり！
いっしょにお弁当をたべたり！

あはっ！いままでいっしょにやってみたかったことが、ぜんぶかなうんだ!!」
「良かったね！蛭！」

「うん!!みんな、リリンちゃんのおかげだね!!・・・そういえばリリンちゃん、
最近みないな。いまごろどこで、なにをしているんだろ・・・？」

「蛭？」

「・・・リリンちゃん・・・また、あいたいな・・・。」

次回！ホープライトプリキユア 第6話！

「リリス再び！狙われた蛭！」

希望を胸に！がんばれ、わたし！

第6話

第6話・プロローグ

晴れた週初の朝、陽子と健治は仕事へ向かうために家を後にする。

「それじゃあ蛍、学校頑張るんだぞ。」

「うん！おとーさんとおかーさんも、おしごとがんばってね！」

「蛍、行ってきます。」

いつも通り、愛娘に見送られる朝。

ただいつもと違うのは、その愛娘の声が普段よりも明るく大きかったところか。

「蛍、朝から上機嫌だったな。」

「朝からじゃないわ。一昨日帰って来てからずっとよ。」

2人は一昨日の夕方のことを思い出す。

上機嫌に帰って来た蛍は、親である健治と陽子ですらほとんど見たことないような高いテンションで、

「おとーさん！おかーさん！わたしね！今日はじめておともだちができたの！！

おなじクラスのかなめちゃんといなこちゃんって人でね！ふたりともすっごくやさ

しくて！

かなめちゃんは運動がすつごとくいで！ひなこちゃんはものすごい読書家で!!」
と、生まれて初めて出来た友達のことを一時間に渡って熱く語ったのだ。

そして昨日も朝早くからずつと、早く明日にならないかと一人で呟いていた。

健治と陽子の知る限り、蛍が学校のある日を心待ちにしていた記憶はない。

別段、クラスでいじめを受けていたわけではないが、仲の良い友達同士でコミュニケーションを作ることが多い学校は、蛍にとってはひと際、孤独を感じる場所だった。

友達がいらない寂しさの余り、不登校になりかけたことさえあったほどだ。

そんな蛍が、学校へ行くことが楽しみで仕方がないと言う。

その心境の変化は、親である健治と陽子にとっては嬉しいことであり、同時に感慨深いことでもあるのだ。

「だからって、何もあそこまで張り切らなくてもいいのにね。」

クスクス、と笑いながらも若干呆れた調子で話す陽子。

健治もその様子を見て苦笑し、昨日の晩と今朝、台所に立っていた蛍の姿を思い出す。

親の目から見ても、少し『やり過ぎ』と思うことではあったが、友達相手に『それ』を振る舞うところを想像し、不安げな表情と楽し気な表情を交互に見せられては、止め止められないというものだ。

『親バカ』と思われるかもしれないが、蛍にとつては友達と過ごす初めての学校生活となるのだ。それならば成功するにせよ、失敗するにせよ、蛍の好きなようにさせてみたかった。

「だけど、楽しそうで良かったじゃないか。」

「そうね。・・・蛍、学校、楽しんでらっしゃい。」

一旦家の方を振り向き、今ごろ学校へ行く支度をしているであろう蛍を思いながら、2人は仕事へと向かうのだった。

∴

蛍は逸る気持ちを抑えながら、学校へ行く支度をする。

今日から学校へ行けば友達に会うことができる。

ずっと願っていた、友達と一緒に学校生活を謳歌するという夢がついに叶うのだ。

蛍の頭の中に、内に秘め続けて来た思いが次から次へと浮かび上がっていく。

その全てが今日から現実のものになると思うと、学校へ行きたくて仕方がなかった。

学校へ行きたくないと思うことは数あれど、学校へ行きたいだなんて思うことは今まで一度もなかったのに、友達が出るだけで、こんなにも印象が変わると思わなかった。

「よし、じゅんびできた!」

昨日の晩から準備し、いつもよりもさらに早起きして作った『とっておき』を鞆に入れる。

「蛍、いつてらっしやい。」

そんな蛍を、チエリーが笑顔で見送る。

「うん!いつてきます!」

蛍も大きな声で返事をし、駆け足で学校へ向かった。

駆け足で学校へ向かった蛍は、いつもよりも早い時間に学校へ着いた。

それでも今の蛍には、学校までの道のりはとても長く感じられた。

ようやく教室の前まで辿りつき、引き戸を開ける。

自席の方へ目を向けると、前の席には要と雛子の姿が会った。

2人の姿を確認した蛍は表情をさらに明るくし、小走りで自席へと向かった。

すると蛍に気づいた2人が、こちらへと振り向いた。

蛍は自席に鞆を置いた後、2人に向かつて大きく手をあげる。

今日からクラスメートではなく、友達として2人と接するのだ。

心機一転の意も込め、まずは元氣よく挨拶をするところから始めよう。

大きな声で、2人の名前で、他人行儀にならないように、そして笑顔で。

「かなめちゃん！ひなこちゃん！おっはよー！」

大きな声で挨拶する蛍に対してクラス中の生徒が注目する。

だが蛍はその視線に気づかず、目の前にいる要と雛子のことしか視界に入っていない
かった。

「……」

「……」

だが視線はちゃんと合っているのに、いつまで経っても2人から返事が来なかった。

そればかりか、2人も鳩が豆鉄砲を喰らったかのような表情で、蛍を見たまま固
まってしまう。

「……あれ？」

そんな2人の様子を見ながら、蛍も笑顔のまま固まるのだった。

第6話・Aパート

リリース再び！狙われた蛍！

要はしばし呆然とした後、冷静に状況を分析し始めた。

まず始めに、目の前にいる少女は本当に蛍であるかを検証する。

要の知る限りでは、蛍はあんなに笑顔で元氣よく挨拶をしたことがない。

決して聞こえないわけではないが、細々とした小さな声で、呟くように一言おはよ、
と言うだけだった。そうでなくても要の知る蛍の人物像から、あんな笑顔ではつきり
とした

挨拶する姿は想像出来ない。

では目の前にいる少女は蛍ではないのか？と聞かれたら答えはノーだ。

なぜなら声から容姿から何から何まで要の知る蛍そのものだからだ。

そうでなくてもここまで

小学生と見紛うほど幼い容姿をした同級生は、この学校には蛍以外存在しない。

となると次なる疑問はこれは夢ではないかどうかだ。

だが頬を抓るまでも抓られるまでもなく、要は今朝起きてから朝食を食べ母から食器を流しに出せと怒られ身支度を済ませ兄と別れ雛子と合流し学校へ向かい教室に入り鞆を置き席に着き真と愛子に挨拶をし4人で談笑し各々席へと戻り目の前の少女を見つめ挨拶され固まりそして現在に至るところまで余すことなく振り返ることが出来た。さすがにここまで正確な記憶を辿れてしまうと、これが夢だと言う結論には至れない。

であれば、目の前にいる少女はやはり蛭本人ということなるのだが、最初の疑問を解決出来ない限りは、蛭と言う確証を得ることが出来ない。

結果、思考が出口のない迷宮へと彷徨い始め、要は目の前の少女を見つめたまま固まってしまう。

そして視界の隅に映った雛子もまた、同じように固まっている。

常識的に考えれば、目の前にいる少女は蛭以外にあり得ないのだが、その結論に辿りつけないほど、2人は蛭の態度の変化に大きな衝撃を受けていたのだ。

「……おっおはよー！」

目の前にいる少女は再度、大きな声で挨拶をするが、その声には若手の不安が滲み出ていた。

その笑顔も少しずつ陰り始めている。だが未だに要と雛子は固まったまま。すると

少女の表情が見る見るうちに不安に満ちていき、

「あ……あれ？ひよつひよつとしてうるさかったかな？」

えつえと、ともだちになれたから、まずはげんきよくあいさつしなきやと

おもっただけで……。そつそれとも、やつぱり、なまえでよぶのはなれなれしかった？

あつあの……。ともだちどうしはなまえでよびあうものだとおもったから、

だからえと、わたし……」

狼狽する少女の姿を見て、要は不思議な安堵をしながらようやく迷宮から脱出した。

（あつウチの知ってる蛍だ。）

やはり目の前にいるのは正真正銘の蛍だった。

だが安堵も束の間、蛍の思考がどんどんネガティブな方向へ傾き始める。

これは危ない。せつかく友達になれたと言うのに、名前で呼ぶのは馴れ馴れしい等、こちらが思ってもいないことを勝手に思われては、また距離を離されかねない。

この2週間のように、蛍の様子を伺うだけの、受け身な付き合いはゴメンだ。

自分も蛍も変な遠慮なんてせず、思うままの気持ちをつづけて接していきたい。

それこそが、蛍と出会ってから要がずつと望んでいたことなのだ。

そう思い当たった要は勢いのまま行動に移る。

「いや全然うるさくないし馴れ馴れしくないよ!？」

ただ普段の蛍と違ったからびびっくりしたただけやって!」

それを聞いた蛍は、今度は見る見るうちに表情が和らいでいく。

「そつそつかあ、よかつたあ・・・。」

普段と違うというところはスルーされたがむしろそこが一番疑問に持つてほしいところだが、とりあえず蛍を落ち着けることができ、要はホツと一息つく

「ねえねえふたりとも!」

のも束の間。元気を取り戻した蛍が、もの凄い勢いで食い気味に話しかけてくる。

「おひる、みんなでいっしょにおべんとうたべない!? 今日ね、おかずちよつとおおめに

つくってきたの! だから3人で、おべんとうのおかず、こーかんしょ!」

今までにないハイテンションで提案してくる蛍。

3人で一緒にお弁当を食べるなんて友達になる前(と蛍は思っていた)頃からしてきたはずだが、なぜ今になってそれをはしやぎながら持ちかけてくるのか。

「まあ・・・それくらい別にいいけど。」

困惑しながらも答えると、蛍は目を輝かせながら感動の声をあげた。

「わつわたし!ともだちといっしょにおべんとうのおかず、こーかんするの、夢だったの!!」

「そつそつか・・・。」

どうやら友達同士でおかずを交換し合うというシチュエーションに憧れを抱いていたようだ。

これまでとのテンションの違いには驚くものの納得は出来るし、その程度ならば面白い御用と思う要だつたが、蛍のテンションはさらに斜め上へと駆けあがつていく。

「あとねあとね！今日のほうが、いっしょにかえろ！かなめちゃん今日はたしか、

ぶかつやすみだよね！」

「そつそつただけど・・・。」

雛子と一緒に帰ったことはあると聞いたが、自分を含めて3人で下校したことはまだなかったか。

あといつの間にか女子バスケット部の活動日を覚えられたようだ。

「今日のためにね！きのうずっとおはなしする内容かんがえてきたの！かなめちゃんとひなこちゃんとおしやべりしたいこと、たつくさんあったから！どれからはなそうかまよつちやつて！」

はしやぎながら語る蛍だが、要から言わせれば放課後に友達と一緒に帰る為に、わざわざ前日から話題を準備してくる必要はない。

友達とのお喋りなんてその場で思いついたことを話せばいいだけだし、思いつかなけ

れば聞き役に回るだけだ。

この子、実現させたいシチュエーションが先行し過ぎて形にとられ過ぎていないか？

特に意識をしなくても自然と接すればいいだけなのだが。

・・・と、ここまで考えて要は嫌な予感がした。

蛭がこれまで友達と一緒にしてみたことについて熱く語るのは、自分と雛子と言う友達を得た今、その願いを実現させることができるからだ。ということは・・・

「それからそれから！今週の土曜日か日曜日ひまかな!? 3にんでどつかあそびにいいかな!?!

おかいものしたり!ごはんたべにいたり!あつ!よかつたら噴水広場にいつてみない!?

あそこつてたしかスイーツ屋さんの屋台があつて!休日があつこうのおともだちといっしょにくるちゆうがくせいとか、こーこーせいとかもたくさんきてるんだよ!!

ねっ!わたしたちもいっしょにいこつ!あとねあとね!らいげつのゴールデンウイーク!

3にんでお泊まり会できないかな!わたし、パジャマパーティーつてやってみたかつたんだ!!」

そして恐れていた自体が間を置かず見事に現実となる。

蛍がこれまで内に秘めた願いが爆発し、さながらマシニングの如く次々と発せられていったのだ。

それは留まることを知らず、決壊したダムのように溢れ出てくる。

何とかしてこの場で蛍を食い止めなければ、13年間積もりに積もった思いを全てこの場で語り尽くしかねない程の勢いだ。

「あつあのさ、蛍」

「それからそれから!!試験がちかづいたらいっしょにおべんきようかいとかも

やってみたくない!!あとねあとね!!なつやすみにはみんなでうみにでかけて!!」

だが止めようとするも、蛍の勢いに飲まれて言葉を遮られてしまう。

そうこうしている内に文化祭はこうしたいだの修学旅行はああしたいだのと矢継ぎ早に語られていった。

ちよつと待て、夏休みですらだいぶ先の話なのに、文化祭と修学旅行に至っては2学期の行事だ。

気が早いというレベルではない。

そんな先々のことまで今から約束できるわけがないのだ。

あとさり気なく運動会がスルーされているのは気のせいか？

それから勉強会だけはさすがにごめんだ。

だが反論の余地を与えられないまま、蛍の夢想はまだまだ続く。

半ばお手上げ状態となった要は、隣に座る雛子に助けを求める視線を送るも、逆に雛子の方から同じ視線を返されてしまった。

予想はしていたが、やはり雛子に止めることは出来ないか。

なぜなら今の蛍はそれはそれは嬉しそうに、楽しそうに夢想の数々を語っているのだ。

こんな幸せ満開な笑顔を浮かべながら語る蛍の前に、彼女に対してダダ甘な雛子が無理やり話題を中断させることなんて出来るはずがない。

要は少しばかり心を痛めながらも腹をくくる。ここは自分がやるしかないようだ。

「それからそれから!!」

「蛍!!」

「ひゃっ。」

要は蛍に負けない大声で無理やり言葉を遮断する。

そして蛍が怯んで止まるや否や肩に両手を置き、

「少し落ち着き!!」

力任せで無理やり席に座らせた。

ようやく押し黙った螢は、要たちを巻き込みクラス中の注目を一身に受けていたことにやっと気が付くのだった。

：

多少強引な手段ではあったが、ようやく螢を鎮めることが出来た要。だがその表情は浮かないままだ。

「・・・螢？」

「・・・。」

螢は黙り込んだ後、机に顔を俯せたまま動かなくなってしまった。このテンションの落差は一体何だと言うのだ。

「・・・ぐすん、うう・・・。」

オマケに隙間からすすり泣きが聞こえてくる。どうしてこうなった。うう・・・ごめんなさい・・・わたし、まいあがつちやつて・・・。

ふたりにメーワクかけるつもりなんてなかったのに・・・。」

小聲で懺悔の言葉を呟き続ける蛍。

確かに少しばかり煩わしいとは思ったが、泣かれるほど迷惑と思っていたわけではないし、何よりこの状況、まるで自分が蛍を泣かせたようではないか。

「はあ……。」

頭を抱えながらため息を1つ吐く要。

(この子……想像以上にメンドくさいわ……。)

出会った当初、あちらが友達になりたいと思いつながらも、なかなか歩みよって来ず、かといって意をくみここちらから近づいたら距離を離れていた蛍だったが、友達という認識が生まれた途端、これまでの消極的な態度はどこへやら。急激に距離を詰め寄って来たのだ。

結果だけなら要の望んだ関係を築くことが出来たと言えるが、いくらなんでも極端過ぎである。

以前から思っていたが、どうも蛍は自分の感情をコントロールすることが苦手のようにだ。

思っていることはすぐに表情に出るし、嘘をつく時も態度でわかる。

加えて彼女の感情を示すバロメーターはメモリが0と1しか無い。

つまり全てを抑え込むか、全てをさらけ出すかの2択しか取らないのだ。

要として、思いのままに行動することを良しとしているが、螢はある意味、自分以上にその傾向があるようだ。

オマケに人付き合いにおける間合いとさじ加減、というものがまるで身に付いていない。

多少なりとも人と接する機会があれば自然と身に付くものを、螢は何一つとして持ち合わせていないのだ。

それが極端な2通りでしか感情を表現できない性格と合わさった結果、今の状況に陥っている。

これから先もこのように極端な一喜一憂を見せるのだろうか？

そう思うと少々気が重い。

喜びを全力で表現する分には、多少の煩わしさがあっても要も嬉しいものだ。

だがこれでは何の弾みで彼女を傷つけてしまうのかわからないのだ。

現に要は今、螢を泣かせるつもりなんてなかったというのに、結果として泣かせてしまっている。

何とかして妥協点を見つけて、上手く折り合いをつけていくことは出来ないかと考え込むが、

頭を使うのが苦手な自分にそんな名案など思い付くはずもなかった。

「蛍ちゃん。」

すると、ようやく落ち着きを取り戻した雛子から声がかかり、蛍は机から僅かに顔を上げた。

「前にも言ったよね？ 私たちは友達で、クラスメイトだから、いつでもこの教室で、この学校で会えるって。

だから焦らなくても大丈夫よ。

蛍ちゃんの側にずつといるから、蛍ちゃんが友達と一緒に叶えてみたかったこと。ゆつくり時間をかけて1個ずつ、一緒に叶えていこ。」

「ひなこちゃん……。うん、ありがとう！」

「それじゃ、今日はお弁当のおかず交換と、放課後、一緒にお喋りしながら帰ろ？」

今週末のことや、ゴールデンウィークのこと、それから先のことは今はまだわからないから、また今度、どう過ごすか一緒に考えよ？」

「うん!!」

長期的にだが、一緒に願いを叶えていこうという雛子の言葉に、蛍はようやく落ち着きを取り戻したようだ。

こうゆう時、要領の良い雛子は本当に頼りになる。

要は内心、雛子に礼を言いながら、先ほどの自分自身の考え方を見つめ直した。

蛭に翻弄されるあまり、上手く折り合いをつけていこうと思ってしまったが、やはりそんな付き合いは自分の望むものじゃないし、何より自分らしくない。

感情の振幅が極端に激しい彼女を刺激しないように言動に細心の注意を払って接しなければならぬと言ふのなら、これまでと何が違うと言ふのだ。

妥協点を探すなんて止め、頭を使うのも止めだ。

思うままに蛭と接していこう。

そして、蛭にも妥協なんてしてほしくないから、彼女の思いも全て受け止めよう。

今日見たいに、極端に浮き沈みする蛭に振り回されることもあるだろうが、度が過ぎたら注意すればいい。

傷つけてしまったら謝ればいいだけだ。

(友達、やもんな蛭。お互い遠慮なんてなしに、ドーンとぶつかってこ。)

蛭とは本当の意味での友達になりたいし、何も知らない彼女に、その意味を教えてあげたいから。

：

午前の授業が終わり、待ちに待った昼食の時間。蛍たちは机をくつつけ、それぞれが鞆からお弁当を取り出した。

「それじゃ、蛍ちゃん。一緒にお弁当を食べましょ?」

「うん!」

蛍は嬉しそうに頷き、鞆の中に手を入れ。

「よいしょっと。」

風呂敷に包み込まれた大きな重箱を机の上に置いた。

「え……?」

絶句する要と雛子。だが蛍は構わず風呂敷を拡げる。

「えへへ、みんなといっしょにたべるのがたのしみで、ちょっとおおめにつくつてきちゃった。」

蛍が重箱を空けると、そこには色とりどりの料理がぎっしりと詰められていた。

ざっと見ただけでも伊達巻卵、栗きんとん、かまぼこ、焼き鮭、黒大豆・・etc。

季節外れも甚だしいおせち料理が蛍の机の上に並べられる。

見た目は豪華絢爛だが、軽く3人前はありそうなボリュームである。

「……えと……ちよつとどころかかなり多めに作つて来たね。」

「どう考えても作り過ぎやろ……。」

「さつ、たつくさんたべていいからね!」

啞然とする2人を余所に蛭は上機嫌だ。

お弁当のおかずを交換し合うことは、蛭には親しい友達同士だからこそ行えるコミュニケーションの1つとして認識されている。

だから蛭は要と雛子を相手にお弁当のおかずを交換できるのを楽しみにしていた。実践できれば、2人が友達であるという事実をより確固たるものにできるからだ。

そのために昨夜から仕込みを始め、いつもよりも1時間ほど早く就寝し、いつもよりも1時間ほど早く起床して準備をしてきた。

「ウチらとおかず交換するはずなのに、蛭が1人で3人分作ってきたら意味ないやろ?」

2人分余るで?」

「え?」

要が注意するも、蛭はその言葉の意味が理解できていなかった。

2人に食べてもらいたいから2人分を作つて来たのに、なぜ余るのだろう?

「私たちに食べてもらうことだけで頭がいっぱいで、自分がもらう分を全く計算に入れてないみたいね……。」

「なんでウチでも出来る簡単な計算が出来んな．．．」

雛子と要が蛭に聞こえないように呟く。

その時、

「あらっ、蛭ちゃんのお弁当豪華だね。」

「わく、おせち料理だ。きれ〜い。」

クラスメートの真と愛子が話しかけてきた。

「真に愛子か。」

「どしたのさ？2人して銅像みたいな顔しちゃって。」

「いやあ、これから3人でお弁当のおかず交換しようと思っただけだよ。」

「あら？楽しそうじゃない。」

「蛭ちゃん、私たちも混ぜてもらってもいい？」

「え．．．えと．．．。」

急に声をかけられ、返事につまる蛭。

要と雛子と交流のある2人だから、これまでもあいさつ程度なら交わしたことがあるが、こうしてお話しするのは初めてだ。

(だっだいじょうぶ．．．ふたりはかなめちゃんといなこちゃんのともだちだよ．．．。

ちゃんと．．．おはなしできるはず．．．。)

一昨日、要と雛子に友達になりたいと打ち明けた時、蛍にはわかったはずだ。

要と雛子と友達になれるまで2週間もかかったのは、結局友達になれるかわからないという不安を言い訳に自分自身が距離を置いてしまっていたことが原因だ。

だからもう、不安を盾に周りから逃げるのは止めよう。

ほんの少しの勇気を出して、一步踏み出すことが出来れば、簡単に友達になることができるのだから。

「……ごめんね蛍ちゃん。急に話しかけたりして……。」

「あっあのー！」

真の言葉を遮り、蛍は叫ぶ。

「だっだいいじょうぶです！ いっしょにおひる、たべよ！

まっ、まことちゃん！ あいこちゃん！」

僅かに不安を滲ませながらも、2人を名前で呼ぶのだった。

真と愛子は少しだけ驚くが、すぐに表情を和らいでいき、

「うん。ありがとう、蛍ちゃん。」

「じゃつゴチになります！」

近くの席の椅子を取ってそれぞれ空いたスペースへと着く。

「それじゃ、いただきますーす！」

そして要の号令と共に、5人を囲んでの昼食が始まるのだった。

蛍を除く4人はまず、蛍のお弁当へと一斉に箸を伸ばした。

見た目が豪華な蛍のお弁当は、量の多さ故に少人数では食べるのを躊躇ってしまうが、4人も揃えば数の恐れるなどなくなり、食欲が勝るといふもの。

各々目当てのおかずを箸に取り、それぞれの口へと運ぶ。

そしてゆつくりと咀嚼して味わいながら嚥下する。

「……どつどうかな？」

友達に手料理を食べてもらうのは初めてである蛍は、口に合わなかったらどうしようと不安気に声をかけるが、

「美味しい！とても美味しいよ、蛍ちゃん！」

「いやあ、料理が趣味ってのは聞いてたけど、こりや想像以上だわ。」

雛子と要がそれぞれ感想を述べる。

2人に気に入ってもらえ、蛍はホッと胸をなでおろす。

「こんなもの自分で作れるなんて、蛍ちゃんやるじゃん！」

「本当。味は勿論だけど、形も盛り付けもすごく綺麗。」

真と愛子も、蛍のお弁当を絶賛してくれた。

半ば初対面に近い2人からそこまで褒められるのは、さすがに気恥ずかしさを感じて

しまい、蛍は顔を赤くして俯いてしまう。

「あ……ありがとう。」

「はい蛍、おかず交換やる？ウチはこれあげるよ」

すると要からエビフライをもらい、

「はい、蛍ちゃん。」

雛子からは春雨ロールをもらい、

「はい蛍ちゃん。」

「わたしからもどうぞ。」

真と愛子からもそれぞれおかずをもらった蛍は、

「ありがと、みんな……あれ？りようがおおい！」

「今気づくんかい!!」

ようやく致命的な分量ミスに気が付き、要からツツコミを受けるのだった。

∴

雛子は、久々の満腹感と共に少々苦しいお腹を擦っていた。

食べきれないかと思われていた螢のお弁当だったが、予想以上の美味しさに4人ともつい箸を運ぶ速度が速まり、気が付けばあつという間に平らげていた。

どちらかと言えば小食である雛子でさえ、美味しさのあまり食べた量を忘れてしまっていたほどだ。

もしも真と愛子が来なかつたら、要と2人で完食したのではないだろうか。

そうなるとお腹の苦しみは今の比ではなかつただろう。

それほど螢の料理の腕は、想像以上のものであった。

「ふう、食べた食べた。ごちそうさま。」

「さすがにもうこれ以上は入らないね。」

女子の中では食事の量が多めの要と真も、さすがに満腹の様子だ。

愛子は苦笑しながら、お腹を抱えているこちらを見ている。

表情から彼女もどうやら自分と同じ心境のようだ。

つまり食べ過ぎた。

だが、4人から手料理を絶賛され、完食もされた螢は、なぜか浮かない顔をしていた。

どうしたのだろうか?と心配すると、蛍が申し訳なさそうに口を開く。

「あ……あのっ。」

「蛍?どうしたん?」

「えと……しよくこのデザートも、いちおうもつてきたんだけど……。」

「え……?」

真の表情が強張る。それもそうだろう。

あれだけの量のお弁当を持ってきた上に、デザートまで出てくるとは思いもしないものだ。

当然、雛子を含めた全員が満腹である。

これ以上お腹にもものを入れる隙間などない。

「や、蛍。さすがにあれだけの量を食べてからデザートは……ね?」

柔らかに断ろうとする要だが、

「うう……そう……だよね……。」

蛍の表情は一層沈んでしまった。

要も蛍の様子を見て申し訳なさそうな表情を浮かべる。

今回ばかりは雛子も要に賛成したいところだが、蛍の沈んだ表情を見ると胸が痛む。

仕方なく雛子はある提案をすることにした。

「見るだけ見てみよっか？」

「見るだけ？」

「せっかく持つてきてくれたんだから、どんなデザートか見てみようよ。それで、

食べられそうな量だったら、みんなで食べよ？ね？」

ひとえにデザートと言っても千差万別だ。

一口サイズであれば腹に収まるかもしれない。

食べるか食べないかは見てから決めても遅くはない。

すると蛍の表情が一点して明るくなった。可愛い。

今朝のことを思うに、蛍は感情の移り変わりが極端なようだ。

一喜一憂に様々な表情を見せてくれる。可愛い。

ご機嫌な蛍は再び鞆の中に手を入れ、1つの箱を取り出し蓋を開けた。中を覗き込む

と、ココアパウダーが塗されたマカロンが6つ並べられている。

それは色合いも形もとても綺麗に作られており、雛子を含めた4人はさっそくマカロ

ンに釘づけになった。

「ゴクっ……」

隣の要から唾を飲む音が聞こえる。

はしたないと思いつつも、雛子も目の前に置かれたマカロンを見ているだけで食欲

が沸いてきた。

さつきまで膨れたお腹を擦っていたはずなのに、甘いものは別腹、とはよく言ったものだ。

「ひと口だけ、もらつてもいいかな？」

堪えきれなくなつた真から声があがる。

愛子もマカロンの前まで手を伸ばしていた。

「うっうん！どうぞ！」

食べる気を見せた皆を前に、蛭は一層嬉しそうな声で答えた。可愛い。

蛭の許可が下りるや否や、雛子を含めた4人は一斉にマカロンに手を伸ばし、それぞれ一口食べる。

そして4人とも一斉に固まつてしまった。

「・・・あれ・・・？えと・・・みんな・・・？」

一切の言葉を発さなくなつた4人を見て、蛭は不安げな声を出す。

だが、よく見ると口元は動いている。黙々と食す4人だが、やがて一口目を食べ終え、

「・・・蛭ちゃん。」

真がまず声をあげた。

「なっなに？」

「これ、どこで売ってたの？」

「え・・・？」

「こんな美味しいマカロン、今まで食べたことないんですけど。

どこで売ってたか教えて。

今日の帰りに買って家でまた食べたいわ。」

「あの・・・。」

「私も是非聞きたいわ、蛍ちゃん。これだけ美味しいのだから。」

「えと・・・。」

持参したマカロンを真と愛子に絶賛された蛍は、なぜか恐縮そうに2人から目を背けた。

そんな蛍の様子を見ながら、雛子は二口目を食べる。

柔らかい生地の食感に程良く絡むチョコクリーム。

それでいてしつこ過ぎない甘さゆえに後味も良い。ここに紅茶があれば、ちよつとした貴族な気分になれるだろう。

分量、焼き加減、見るだけで食欲をそそる綺麗な形。

どれをとつても完璧な出来栄だ。

もしも売っているのであれば、雛子も帰り際に買いに出かけただろう。

これが本当に『売り物』であればだが。

取り出す前の、蛍の妙に落ち込んでいた仕事。

取り出すときの嬉しさに満ちた表情。

そして最高の賛辞を受けてからの恐縮している蛍の様子から、雛子は察しがついていた。

このマカロンは恐らく、

「それ……わたしのてづくり。」

「……え？」

予想的中。やはり蛍の手作りなようだ。

そしてこれも予想通り、蛍の言葉に3人とも凍り付いた。

「……わたしが……つくったの……。えと……おいしかったみたいで、よかった……。」

恥ずかしそうに顔を赤くしながら、呟くように伝える蛍。可愛い。

「うそ……これが手作り!?!」

ようやく我に返った要が、遅れて驚きの声をあげた。

「うん……じつはわたし、おかしつくりはちよつとだけ得意で……。」

そして雛子は蛍の発言に驚く。

自己評価が極端に低い蛍は、他の人から見れば、明らかに熟練の域に達している自分の料理や裁縫の腕でさえ大したものではないと評価してしまう。

その蛍が、お菓子作りは得意だと言ったのだ。どう考えてもちよつというレベルではないところは蛍らしいが、この売り物としか思えないマカロンの完成度の高さも領ける話だ。

蛍のお菓子作りのスキルは、鼻屑目で見なくてもプロのレベルである。

「これ、ちよつと得意なんてもんじゃないよ。お金取つていいレベルだよ。」

「そつそこまでじゃないよ……。」

「いいえ、そこまでよ。絶対に売り物だと思ったもの。」

「てゆうか、裁縫、料理に続いて、こんな特技まであつたんかい、蛍。」

「え？何？蛍ちゃん、裁縫まで得意なの？」

「女子力高っ！」

各々から褒められ、困惑する蛍を見ながら雛子は思う。

今まで友達がいなかったということは、蛍には家族以外の人と会話でコミュニケーションを取る経験がほとんどないのだろう。

それに彼女の特技である家事、裁縫、お菓子作りは、いずれも学校ではお披露目する機会が減多にないものばかり。

勉強や運動と違って、学校内では評価される状況が限られてくる。

こんな風に他人から自分の能力を評価され、褒められるのも初めてではないだろうか。

それを思うと、蛍の自己評価の低さは、自分に対して卑屈になりがちなこと以外に、周りから特技を評価される機会がほとんどなかったことも原因ではないかと思えた。

「蛍ちゃん。デザート、ありがとう。とても美味しかったわ。また、機会があったら、作ってきてくれないかしら？」

「ひなこちゃん……。うん！まいにちだつてつくつてくるよ！」

「まっ毎日は、さすがに多いかな……。でもありがと。」

雛子はお礼を言いながら、蛍に次の機会を約束する。

蛍の作るお菓子をまた食べたいと思う気持ちが半分、もう半分は、こうして蛍の特技を披露する機会を増やせば、自ずと彼女の自信に繋がるかもしれないと思ったからだ。

蛍が人と接することが苦手なのは、自分に自信が持てないことが一番の原因だ。

彼女の特技が周りから高く評価されれば、それは蛍の自信に繋がるし、これだけの能力を持つていながら、他者から評価されないというのは

勿体ない話だ。

そんなことを思いながらも、雛子は蛍の手作りお菓子がまた食べられる日をちゃっか

り楽しみにするのだった。

：

3人分作ってきた重箱のお弁当と、デザートのマカロン。

両方とも美味しいと褒め、完食してくれた4人に内心お礼を言いながら、蜜は後片付けをし始める。

「そう言えば今週の部活から練習試合に向けての選抜が始まるんだってね？」

「ああ、今年こそはレギュラー取ったる！」

「その言葉何回目よ？」

要と真はそれぞれの部活動について語り、

「雛子、昨日のオルレンジャー、レゾネイジャーのゲスト回だったね！」

「ええっ、私もう昨日の内に5回くらいは録画で見直したわ。」

「あはは、さすが雛子。」

愛子と雛子は昨日放送された、無限戦隊オルレンジャーについて語っている。

昼食が終わりながらも、途絶えることのない談笑を見ながら、螢はリリンのことを思い出す。

(リリンちゃん、ありがとう……。あなたにくれたおまじないのおかげで、

わたし……。こんなにステキなともだちと出会えたよ……。)

リリンのことを思いながら、螢は勇気のおまじないをする。

「それ？おまじないか何かかな？」

すると螢の様子に気づいた雛子から、そんな質問が飛んできた。

「え？」

「螢ちゃん、自分を奮い立たせて勇気を出すとき、いつもそう、胸に手を置いて、頑張れ私、って言ってたから。」

さすがに毎回続けていたので、雛子には気づかれていたようだ。

「……。うん、勇気がでるおまじないなの。」

一歩踏み出すための、ほんのちよつとの勇気が。」

「一歩踏み出す為の、勇気？」

「はじめて、ここに引越してきたとき、このおまじないをおしえてくれた子がいるの。」

……。その子がいたから……。わたしは……。」

言いながら螢は、リリンと初めて出会った時のことを思い出す。

あの時のリリンの優しき、仕草、声、笑顔、そして胸に触れた手の温もり。それらは今でも、鮮明に思い出すことが出来る。

「リリンちゃん……。」

あれから2週間、学校の放課後、買い物帰り、休日、ほぼ毎日時間を見つけては噴水広場へと足を運んだが、リリンの姿を見つけることは出来なかった。

もう一度、リリンに会いたい。

会ってお礼が言いたい。友達を紹介したい。それ以外にも話したいことが沢山あるのだ。

そして、リリンの声が聞きたい。あの優しくて、大好きな声を。

「あいたいな……。」

無意識の内に小声で、だが周囲には聞こえるような声で呟く蜚。

「……まるで恋する乙女やな。」

「え?。」

そんな蜚に対して、要がからかい交じりに声をかけてきた。

言葉の意味を認識した蜚は、見る見るうちに顔を赤くしていく。

「なっ……なななにいつてるのかなめちゃん!……こいだなんて!」

そっそんなんじゃないから! だいたい、リリンちゃんはおんなのこだし! だからええ

と！」

しどろもどろな言葉で慌てふためきながら反論する蛍。

「こら、要。蛍ちゃんのことからかわないの。」

そして雛子が要を叱る。

「にしし、ごめんごめん、ほんのジョークやって。ジョーク。」

「もつもう、かなめちゃんつたら・・・。」

悪ぶれもせず謝る要を見て、からかわれていただけと気づいた蛍は、少しずつ冷静になっっていく。

自分とリリンは女の子同士。

恋心なんて芽生えるはずがないのだ。

だがそう頭では理解できても、蛍の火照った頬と、高鳴る心臓の鼓動が収まるまで、時間がかかるのだった。

：

モノクロの世界。

左手を目の前に掲げたリリスは、その爪が完全に修復したのを確認する。

「長かったわね。」

ダークネスに時を詠む習慣はない。

治療に費やした正確な時間を測り知ることはないが、リリスにとっては悠久に感じられた。

傷が癒えたリリスは広間へと訪れると、そこには既にサブナツクとダンタリアの姿があった。

「で、君も無様に敗北してきたというわけか。」

「……」

「言い訳は、何だったかな？ 確か君が弱い以外は必要ない、だったか？」

「言いたいことはそれだけか？ それ以上は貴様がプリキユアを倒してから口にするんだな。」

相も変わらず下らない『茶番』を繰り広げている2人にため息をつく。

「おや？ ようやくお姫様のお目覚めのようだね。」

「傷は癒えたようだな。リリス。」

2人が口々に述べるが、リリスは一切の言葉を返さなかった。

そして3人の行動隊長が集ったその時、
「プリキュアが4人、揃ったようだな。」

大広間の中央にある玉座から声がした。

3人が声の方へ振り向くと、そこには1人の男が佇んでいた。
身長は190cmほど。

全身を黒いローブで覆い、フードで顔を隠している。

「黒き闇、空を覆わんと拵がりし時、4つの光、闇を照らすべく大地に降りる。

其の名はプリキュア。汝は世界の希望なり。」

ようやく4つの光が全て、大地へ降りたというわけか。」

その男は玉座へと腰掛け、フェアリーキングダムに伝わりし伝説を語る。

男の姿を確認したりリスは、彼の前に膝をついた。

「アモン様。」

「リス。傷は癒えたのか？」

「はい。」

男の名はアモン。

リス等3人の行動隊長に命令を下す、ダークネスの指令塔に当たる存在だ。

「おやおや、普段自室に引き籠ってばかりのあなたが、姿を見せるなんて珍しいですね。」

「あなたからの指令は既に受けている。何の用ですか？」

だが事実上の上官に当たるアモン相手にも関わらず、ダンタリアは口調こそ敬語だがいつものように皮肉を口にし、サブナックは両手を組み壁にもたれたままの姿勢でいる。

最もリリースも形を取り繕っているだけであり、この男に忠義心を抱いているわけではない。

アモンにとつてもそれは承知のことであり、3人の行動隊長の無礼な振る舞いも特に気に留めていない。

それでも上官であるアモンの命令は行動隊長にとつては絶対であり、それに代わるものなど存在しない。

この忠誠を誓ったわけでもない相手の命令を遂行することを、リリース達は使命としなければならぬのだ。

だが誰もその事について何も思うことはない。

行動隊長とは、そういうものなのだ。

「かの地に誕生した3人のプリキュアが、一丸となって行動しているようじゃないか。」

流石の君たちも、伝説の戦士が3人も相手となれば、思うように事を運べないようだな。」

アモンは普段、このモノクロの世界にある自室に閉じこもっている。

これまでの戦いを直接見ていたわけではないが、この世界から、かの地の力の動きを感じ取り動向を全て把握できるようだ。

リリース達も力を感じることもだけならできるが、正確な状況を把握できるほどではない。

行動隊長たちの上に立つだけの事はあり、アモンの闇の力は、リリースにとつても計り知れないものがある。

「我らの目的はかの地を闇へと誘い、新たな闇の世界を創り出すこと。悲願の達成にブリキュアを倒すことは絶対ではない。

現にフェアリーキングダムはキュアブレイズを討つことなく、闇へと誘うことが出来た。

だが、やつらが計画の障害となることも事実だ。

邪魔な芽は早急に摘んでおく必要がある。」

その程度の事、改めて言われることではない。

ここににいる行動隊長全員がそう思った。

「あたしにひとつ、考えがあります。」

そこでリリースが、アモンに対して提案を投げかける。

「聞こうか。」

「キュアブレイズ。やつらの正体は確か、フェアリーキングダムの子供残りの人間でしたね。」

であれば、かの地に誕生したプリキュアもまた、その正体は人間の小娘のはず。

普段はプリキュアの力を隠し、人間として生活を送っているものと推測されます。」

かの地で素材を捜し歩いている間は、やつらの力を感じ取ることが出来なかったが、こちらが闇の牢獄を展開すると、必ず力が感じられた。ということは、やつらは普段は人間として活動し、こちらの力が感じとれた時にプリキュアの力を解放しているのだろう。

「であれば、人間の姿の時は、無力で脆弱な存在である可能性が高いでしょう。」

やつらの正体を突き止め、プリキュアの力を解放する前に叩くのが一番かと。」

「なるほど・・・一理あるな。」

作戦の内容を聞き終えたアモンが、リリスの提案に賛同する。

「無駄な作戦だな。」

「やつらがそう簡単に、正体を明かしてくれるかね?」

サブナックとダンタリアは意を唱えるが、リリスは無視する。

やつらの言葉に価値はない。価値があるのは、アモンの命令だけだ。

「だが、ダンタリアの言う通りだ。

やつらも、おいそれと正体を明かすことはないだろう。

リリス、君はどうやってやつらの正体を突き止めるつもりだ？」

その言葉を聞いたリリスは、即座にリリンへと姿を変えた。

「あたしが人に扮し、やつらの世界に潜伏します。

そしてかの地の人間から、プリキュアの正体に関する情報を聞き出して見せましょう。」

「あの世界の人間たちと、お喋りをするってことかい？」

君にそんな相手がいるのかい？」

ダンタリアは尚も非の意見を唱える。

今度は無視せず、リリンはその言葉に反論する。

「1人、アテがあるわ。」

「なに？」

「素材を探している中で見つけた子がいてね。

興味なかったけど利用出来そうだし、このまま利用させてもらおうわ。」

名は確か、蛭と言ったか。

儚く脆弱な人間の少女。

あんな価値のない小娘でも、悲願達成のための人柱程度には役に立つてもらおう。

「そこまで考えがあるのなら、いいだろうリリース。」

君をプリキュア討伐の第一人者としてこの命を授けよう。

プリキュアたちを倒せ。手段は君に任せる。」

「仰せのままに。」

「サブナックとダンタリアは引き続き、この世界に絶望の闇を広めていくのだ。」

だがその過程でプリキュアが障害となるのであれば、リリースに遠慮はいらん、排除せ

よ。」

「はっ。」

余計な命令を。やつらに先を越されてたまるものか。

ようやくチャンスを得ることが出来たのだ。

プリキュア討伐任務の第一人者として、プリキュア討伐を最優先事項として行動出来る。
る。

いつでも、キュアシャインを倒しに向かうことが出来る。この時をずっと、待ちわびて来たのだ。

（待っていないさい、キュアシャイン。）

必ずあなたの正体突き止めて、抵抗する間もなく墮としてあげるわ……。）

黒い衝動に胸を焦がしながら、リリンはかの地へと足を運ぶのだった。

第6話・Bパート

午後の授業を終えた螢は放課後、要と雛子と一緒に下校していた。

「このまえね、ちよつとはなれたデパートにあるおみせにね。すつごいおいしいケーキ屋さんがあつたの！」

下校中、螢は自分が好きなスイーツの話をして二人に話していた。

料理以上にお菓子作りが好きな螢は、当然食べるのも好きだ。

興味のあるスイーツを見つければそれを食べ、自分なりに味を再現するのが、彼女の一番の趣味である。

「そのケーキはね。クリームがとってもおいしいって有名だったんだ！」

たべてみたらホントにおいしくて！がんばってクリームの味をさいげんしてみようとおもったんだけど、なかなかうまくいなくて。

でもね、おかげでおいしい生クリームのつくりかた、いっぱいべんきようできたんだ！

「へへ、生クリームって手作り出来るんだ。螢、今度そのケーキ、作ってきてよ。」

「うん！」

「それから蛍、今度プリキュア作戦会議をするときは、是非お菓子を差し入れに……。」
「こら、蛍ちゃんに注文ばかりしないの。」

「いいの、ひなこちゃん。」

わたし、うれしいの！こんなふうになつたおかしを、ほかのひとによろこんでもらえるの、はじめてだから！」

「蛍ちゃん……。」

蛍が料理とお菓子作りを趣味としているのは、調理の過程で食材が徐々に『料理』として認識できる形に変わっていく様子を見るのが楽しいから。

同じ料理でも材料と分量を少し変えるだけで異なる味を作れることがパズル遊びのようで楽しいから。

そして相手に美味しいと喜んでももらえると自分も嬉しいからである。

不安はあつたが、皆に喜んでくれていたので、お弁当とデザートを作つて持ってきたのは正解であつた。

最も、昨日チェリーに喜んでももらえなかつたらどうしようと相談した時は、

「本当にあなたって子は！どうしてそこまで自分に自信が持てないのよ!!」

蛍の作った料理とお菓子を不味いつて言う人がいるわけないでしょ!!
明日必ず両方とも作って持っていきなさい!

そして要と雛子に食べてもらいなさい!!

いいわね!!」

と、すごい剣幕で怒られたが……。結果として取り組んで良かったと思う。
「蛍ちゃん、帰り道は確かこっちだっけ?」

話している内に、蛍の家への分かれ道まで辿りついたようだ。

「あつホントだ……。」

まだおはなししたいこと、たくさんあつたのに……。」

「友達と話していると、時間なんてあつという間やからな。」

大丈夫、明日は部活だけど、明後日だったらまた一緒に帰れるよ。」

落ちこむ蛍を要は励ます。

「かなめちゃん……。ありがとう!」

「それじゃあ蛍ちゃん、また明日ね。」

「うん!またあし……。あつ。」

雛子にお礼を言おうとした蛍は、帰り道とは別方向を見て立ち止まった。

「蛭？」

「そつち、商店街の方よね。何か用事でもあるの？」

「え？えと・・・。」

商店街に用事があるわけではないが、あちらは噴水広場にも繋がっている。

今日のお昼以降、リリンに会いたいという気持ちが強くなっている蛭は、噴水広場へ訪れてみようと思つたのだ。

「ちよつと、よりみちしたいところがあつて。」

「じゃあ、ウチらもついてこつつか？」

「え？」

ウチら、と付けている当たりちやつかり雛子も巻き込んでいるが、当人は特に気にしていないようだ。

「目的地につくまでの間、もう少しお喋りできるやろ？」

「・・・うん、ありがとう！」

自分に気を使つてくれた要。

雛子も言葉こそ発しなかったが微笑みを返してくれたので、一緒に来てくれるのだらう。

2人の優しさに感謝しながら、蛭はリリンに会えることを願い、噴水広場へ向かうの

だった。

：

地上へと降りたりリンは、まず噴水広場へ訪れた。

作戦を実行する為には蛍を探す必要がある。

となればまずは、人が多く集まる場所から当たっていこう。

確かこの噴水広場は、街に住む人達の交流の場であつたはずだ。

この地と、交易の場にあたる商店街とデパート、あとはこの世界の子供は確か、学校という教育機関へ通うことを義務付けられていた。

その4点を中心に探し当たるのだ。最も、さほど時間がかかる作業ではないだろう。

人間の活動というものには一定のサイクルが存在している。

教育機関へ通う日程は厳格にスケジューリングされているし、交易の場も一日の活動時間が定められている。

この世界のルールを紐解き、蛍程度の年代の少女が主にどのようなサイクルで活動し

ているかを導き出せれば、すぐ足取りを掴むことが出来るはずだ。

と、ここまで考えてから辺りを見渡すと、リリンは身に覚えのある後ろ姿を発見した。自分より僅かに低い背丈、ピンクの髪、そして体型も全て記憶にあるものと一致している。

まさかこうも早く見つけられるとは、リリンはかつて螢の前で演じた時の記憶を探りながら、目の前にいる少女へと近づいていった。

∴

「いつ見ても、綺麗な噴水よね。」

噴水広場へと訪れると、雛子が感嘆とした声をあげる。

「子供の頃は、ここでよく遊んでたなあ。」

要が噴水広場の隣にある原っぱの方を見ると、小学校低学年くらいの子供たちが鬼ごっこをしており、保護者と思われる女性たちがベンチに座り、子供たちへ視線を向けながら談笑していた。

老若男女問わず多くの人たちの交流の場となっているこの噴水広場で、蛍はリリンとひと時を過ごした日を思い出しながら、周囲を見渡した。

(リリンちゃん……)

会いたいと思う気持ちが強まれば強まるほど、もう会えないのではないかと不安が募っていく。

蛍が沈んだ表情で、肩を落としたその時、

「ほたる。」

「えっ……?」

後ろから、自分を呼ぶ声が聞こえた。

忘れられるはずもない声で。

そして蛍が振り向くと、そこには一人の少女の姿が立っていた。

「ひやしごぶり。」

白い素肌。黒い髪。前髪の合間から見える綺麗な赤い瞳。

その笑顔も、声も、仕草も、蛍の忘れられない記憶のものと全て一致した。

「リリン……ちゃん……。」

本当に嬉しいことが起こると、人は本当に現実であるかと疑いたくなるものだ。

蛍もこれは、夢なのではないだろうか、あるいは幻が見えているのだろうかと思つた。

だけでもこれは、夢でも幻でもない。蛍がずっと会いたいと願っていた人が今、目の前にいる。

「リリンちゃん……リリンちゃん……。」

「ほたる?」

擦れた声でリリンの名を呼び続ける蛍を見て、リリンは首を傾げる。

そして、

「つーリリンちゃん!」

感極まった蛍は、リリンへ向けて駆け寄り、彼女へ抱きついた。

「きゃっ、ほたる!」

突然の蛍の抱擁に戸惑うリリン。

だが蛍は、リリンをさらに強く抱き締めた。

この2週間、ずっと探し続けた。もう二度と、会えないかもしれないとさえ思った。

抱き締めた彼女の体から、蛍はリリンの存在を確かに感じ取る。

夢でも、幻でもない。確かにリリンは、ここにいるのだ。

「リリンちゃん!リリンちゃん!リリンちゃん!」

蛍は何度も、リリンの名を呼び続けた。

リリンは確かにここにいると自分に言い聞かせるように、リリンの存在をこの場に繋

ぎ止めるように、何度も名前を呼び続けた。

「リリンちゃん！」

「ほたる、一体どうしたのよ？」

「あいたかった！」

「え？」

「ずっと……ずっとあいたかったよ！リリンちゃん!!」

「ほたる……。」

友達と一緒にお昼を食べて、お喋りをしながら下校して、それだけでも十分だったのに、リリンと再会することができるなんて。

今日は、何てステキな一日なのだろう。

蛭は今日に訪れた数々の奇跡に喜びながら、泣きながら、笑いながら、リリンを強く抱き締めるのだった。

：

リリンは蛍に強く抱きしめられながら、今置かれている状況に困惑していた。目の前にいるのは確かに蛍だ。

だが記憶にある蛍は気弱で今にも消えてしまいそうな儂い存在だったはず。ここまで自分の存在を大きくさらけ出せるような子ではない。

だが目の前にいる少女が、蛍でないはずもない。

姿も声も記憶にある通りだし、何よりも自分のことを覚えているのだ。

「蛍ちゃん、そろそろ離してあげよ？その子、困ってるよ？」
すると初めて見る少女が、蛍に話しかけてきた。

「あ……ごめんねリリンちゃん！」

少女に注意された蛍は、飛び退くようにリリンから離れる。

「別に大丈夫よ。ちよつとびっくりしちやっただけど、どうしたの？」

急に飛びついてきて。」

「……リリンちゃんとまたあえたのが、すごくうれしくて……。」

頬を赤く染め、恥じらいながら蛍はそう答えた。

(嬉しい？あたしと再会できたことが？なぜ？)

だがその疑問を蛍に口にする前に、蛍が話しかけてくる。

「あつそだ。リリンちゃん、しょうかいするね。」

わたしのともだちの、かなめちゃんとひなこちゃん。」

「トモダチ?」

「ども、森久保要でくす。」

「藤田雛子よ。そっか、あなたがリリンちゃんだったのね。」

紹介しろと言った覚えもないし、覚えるつもりもなかったが、今後も蛍には情報源として役に立ってもらおうつもりだ。

それを考えれば、蛍と接触するための駒は多く持つておいて損はない。

リリンは2人の名前と顔を記憶する。

「ねえねえリリンちゃん! またこないだみたいにおはなしできない?」

わたし、リリンちゃんとおはなししたいこと、たつくさんあるの!」

「ええ、いいわよ。」

まさか向こうからその話題を持ちかけてくれるとは、こちらから誘う手間が省けた。

だがリリンがどうやってプリキュアに関する話題を引き出そうかを考える前に、満面の喜びを表情に出した蛍が、リリンの手を引く。

「え?」

「じゃあ、いこつ! ほら、このまえみたいに、噴水前のベンチにすわろ!」

「あつちよつと、ほたる。」

考えがまとまらない内に、半ば無理やり蛍に手を引かれ噴水前のベンチに座ることになる。

(この子、ほんとうになにがあつたの?こんな積極的に子じやなかったはず……。)
自分の手を無理やり引いて連れていくなんてこと、記憶にある蛍が出来ただろうか?
依然とは別人となつた蛍のペースに振り回され続けるリリンだったが、

蛍は手を自身の手に添え、正面から見据えてきた。

「リリンちゃん、あのときはほんとうにありがとう。このおまじないをおしえてくれて。」

蛍はかつて自分が教えたおまじないを行う。

「それ……。」

「このおまじないのおかげでね、わたし、ステキなどもだちができたの!」

ぜんぶ、リリンちゃんのおかげだよ!」

そう言えば以前会つた時の蛍は、ずっと友達が欲しかったと語っていたか。

「そつか、トモダチ、ちゃんと作ることできたんだ。」

「うん!」

自分が蛍に教えた勇気のおまじないと、蛍がずっと願っていた、友達を作るといふ夢なるほど、リリンは全てを悟つた。

蛍はあの時自分が教えた『デタラメ』なおまじないのおかげで、一歩踏み出す勇気を
得ることが出来た、と『勘違い』しているわけか。

そして友達を作ることが出来た蛍は、おまじないを教えた自分に恩義を感じ、再会を
心待ちにしていたと。

それならば先ほどの行動にも納得がいく。

(そうゆうこと・・・。ふふっ、バカみたい。)

リリンは蛍を侮蔑する。

あんなデタラメなおまじないに縋って勇気を得られた『つもり』になり、変わるこ
が出来たと『思い込んで』のだ。

つくづく単純で愚かな小娘だ。

目の前にいる友達とやらも、そんな『まやかし』な勇気で作られた産物。紛い物に決
まっている。

「おまじないのおかげなんかじゃないよ。

ほたるががんばって勇気を出したから、トモダチを作ることが出来たんだよ。」

だがこれはまたとないチャンスだ。

蛍がここまで自分に気を許しているとは思ひもしなかったが、これならば、自然と会
話することが出来るし、多少危ういラインを踏むことになっても、彼女から得た信用

を隠れ蓑と出来るだろう。

何より、蛭と言う生き物は単純で扱いやすい。

墮とす手段ならいくらでもある。

「リリンちゃん……。ありがとう！」

ほら、あんなどこにでもある定型文を口にしただけでこれだ。

つくづくバカな子だ。

「ねえねえリリンちゃん！ほかにもおはなしたくないこと、たくさんあるのー！」

「ええ、会えなかった分、たくさんお話ししましょう？あたしも、蛭とお話したいこと、あるから。」

「うんーじゃあねじゃあね！わたしからおはなしするね！」

今は、彼女の機嫌を取るために付き合うとしよう。

プリキュアの、キュアシャインに関する情報を聞き出すのはその後でいい。

仮にこの子が情報を持っていなくても、この子を中心にコミュニティを拡げることができれば、こちらの情報網も拡大できる。

(役に立つにせよ、立たないにせよ、利用させてもらおうわよ。

ほたる。)

リリスとしての本心を隠す為に、彼女の良き恩人、リリンという仮面を被りながら、蛭

の話に耳を傾けるのだった。

：

要と雛子は、やや離れた位置から蛍たちを見守っていた。

リリンと再会出来た蛍は、それはそれは幸せに満ちた笑顔を浮かべながら彼女とお喋りをしている。

傍から見ても、リリンと再会できた蛍の喜びが十二分に伝わってきた。

「要、少し広場を見て回ろっか？」

雛子がそんな気を利かせたことを言ってくる。

要としても、どこはかとなく漂う甘い雰囲気からちよつと離れたくなつたので、雛子についていくことにした。

噴水広場の隣にある芝生公園は、遊具こそないものの、その広さから子供たちの遊び場となっている。

かくいう要も、小学校の頃はよく男子と混じって鬼ごっこやプロレスごっこをしたものだ。

そして子供の遊び場となっている、一番広い面積の原っぱを少し離れると、スイーツを筆頭に多くの出店が並んでおり、パラソルの開かれたテーブル席は下校中の学生たちで賑わっていた。

要と雛子はひとしきり、出店を見て回ることにした。

ここにある出店は日替わりで入れ替わるので、毎日のラインナップが異なってくる。花より団子を地で行く要にとっては、見て回るだけでも飽きないものだ。

「うひゃー、相変わらずこのドーナツ屋台は繁盛してるな。」

要は行列の出来るドーナツ屋台を見て感嘆する。

並ぶことは嫌いなのでこの出店を利用したことは数少ないが、評判に違わぬ味であったことはしつかり覚えている。

「確か、他の街で人気のあるドーナツ店に弟子入りして、そこで修行を積んでからお店を開いたみたいって話よね。」

噂によれば、その弟子入りしたってお店、あのクローバーが常連さんのところみたいよ。」

「クローバーって、あの4人組のダンスユニットの？」

「そつ。」

「なるほど、有名人のお墨付きってことね。」

「あつ、見て要。ここ、新しくクレープ屋が開店されるみたいよ。」

雛子が指さす先には、『スイーツのお姫様クレープ！五月上旬に解禁！』と看板が立てられていた。

「マジで？とうとうクレープ屋まで参入するんだ。」

スイーツからファーストフードまで一通りの出店が並ぶこの一帯で、クレープ屋だけがありそうでなかったが、ようやく当店するようだ。

これまではクレープを食べようと思ったら、少し離れたショッピングモールまで足を運ばなければならなかったので、有難い話である。

「あとで蛍ちゃんにも教えてあげましょ？」

「せやね。あの子お菓子好きだし。」

と、蛍のことが話題に出たことで、先ほどの様子を思い出した2人の間に沈黙が訪れる。

思えば蛍とリリンの距離は妙に近かったし、蛍は右手でリリンの左手をずっと握っていた。

まるでリリンをこの場から離さないように。

からかいのつもりで言ったが、あれでは本当に恋する乙女である。

「蛍ちゃん、とても嬉しそうだったね。」

「え？まあ。」

「蛍ちゃんにとつて、それだけリリンちゃんは大切な人つてことかしら？」

「大切な人……か。」

一歩踏み出す為の勇気が出るおまじない。

転校してから蛍は、勇気を出すときは必ずそのおまじないを唱えて来た。

そして勇気を得た蛍は今こうして、要と雛子と友達になり、クラスメートとも少しづつ打ち解けて来ている。

転校初日、挨拶一つ満足に出来なかつた頃と比べれば、見違えるほど変わったと言つていい。

その蛍を変えたおまじないを教えたのがリリンなのだから、蛍にとつてのリリンは、自分が変わるきつかけを与えてくれた人、ということになるのだろう。

（自分が変わるきつかけ……か。）

要はふと、自分のことを振り返つた。

大好きだったはずのバスケットが憎くなり、クラブ活動をズル休みしていた時、そんな自分をずっと見守り支えてくれた人がいた。

勝負は勝ったら楽しい、負けても楽しい。そう思えるようになったきつかけをあの人はくれた。

要にとつて、その人はどのくらい大切な人だろう。

・・・考えても答えは出なかった。

言葉に表現することが出来なかったからだ。

それほどまでに大切な人。もしもその人と急に離れ離れになり思わぬ再会を果たしたら、自分がどんな反応をするのだろうか。

もしかしたら要も、蛭と同じような反応をしていたのかもしれない。

だとすれば、自分は蛭のことを笑えないだろう。

「友達でも家族でも、自分が変わるきつかけを与えてくれた人は、言葉では表せられんほど、大切な人なんやろな・・・。」

要はそう呟いた。

蛭にとつてリリンは、自分を変えてくれた、心の底から大切に思える人。

今はそれで納得しておこう。

「・・・そうね。」

雛子は、やや間を空けてからそう答えた。

どうやら雛子にも自分が変わるきつかけをくれた、心の底から大切に思える人がいる

ようだ。

果たして誰のことなのか、要は敢えて考えないようにするのだった。

：

蛭との会話をかわしながら、リリンはこちらの話題を振るタイミングを見計らっていた。

蛭が話題を振っている最中に、むやみに割り込むのはよろしくない。

もしも彼女の機嫌を損ねてしまえば、こちらの話を聞いてもらえない可能性があるからだ。

かと言って、興味のない話を延々と聞いてやるつもりもない。

話題の途切れるタイミングを見定める為に、虎視眈々と機会を伺う。

すると、ひとしきり話し終えた蛭が息継ぎをした。

彼女が呼吸を整え終えたタイミングで、リリンはようやく、自らの話題を切り出した。

「ところでほたる。ひとつ聞きたいことがあるのだけいい？」

「なに?」

まずは小手調べだ。この質問に対して、彼女はどんな反応を見せるだろうか。

「ちよつと小耳に挟んだ噂話なんだけど、『光のお姫様』の噂、聞いたことある?」

「……えつ……?」

少し考えた後、蛍の顔に動揺の色が浮かぶ。予想通り、この子はわかりやすい。

感情がすぐに顔に出るようだ。

『光』と『お姫様』というキーワードに、随分と大袈裟な反応を示してくれた。

「……えと……しらないけど……どんなうわさばなし?」

嘘だ。声が微かだが震えている。平静を装うと抗っている証拠だ。

「たしか、真夜中の街に迷う人の前に女の子が現れて、その人を光のある場所へと導いてくれるって、うわさだったかしら。」

その女の子がね、お姫様みたいに可愛いドレスを着て体中から光を放ってるんですけど。」

蛍の表情がいつそう強張る。

落ち着きのない視線が空を彷徨い、表情から不安が見て取れる。

「そつそうなんだ……。リッ、リリンちゃんはどうして、そのおひめさまのことがしりたいの?」

声色にも困惑が見て取れ、震えも徐々に大きくなっていく。「だってその子、お姫様みたいな恰好をしているのでしょ？」

お姫様っておんなの子にとつてのあこがれだし、光の、なんてつくほどのキレイなお姫様だったら、見てみたいっておもわない？」

無論、こんなものは話題を隠すための建前だ。

そもそもリリンには、可愛い、綺麗、まして憧れなんて概念は持ち合わせていない。だがそんな建前でも、単純な蛭には十分に有効だ。

「そつ、そつか。そうだよね。」

すると蛭の声の震えが突如として途絶えた。

原因がわからないが、これまでの反応を見ただけでも十分だ。

「だからほたる、もしなにか、光のお姫様についてのうわさを聞いたら、

あたしに教えてくれないかしら？」

「わかった。」

「それから、このことは誰にも話さないでね。」

かなめとひなこつてトモダチにも、ナイシヨだよ？」

「どうして？」

「だって、お姫様に憧れてるなんて知られたら、恥ずかしいじゃない。だから、あたしと

ほたるだけのヒミツ。ね？」

「うん！わかった！」

秘密を共有するということは、信頼のおける間柄であることの証。

彼女は自分と秘密を共有できたことを喜んでゐる。

建前もここまで効果があると清々しいものだ。

これほど扱いやすい子から信頼を得られたというのは、今後の作戦遂行に大きく働くだろう。

欲張る必要はない。

まだ『やるべき』ことも残っている。

今日のところはこのあたりで引き上げよう。

「それじゃ、あたし、そろそろ帰るね。」

「え・・・もうかえつちやうの？」

すると蛭は途端に表情を暗くした。

もう、とは言うが、だいぶ話し込んだはずだ。

この後に及んでまだ話し足りないと言うのか。

「また、ここに来るから。そしたら、今日みたいに、いっぱいお話ししよ？」

今度は一転して表情を明るくする。

「っ！うん！わたし、まいにちここでまってるからね！」

「ありがと、それじゃあ、またね。ほたる。」

「うん！きょうはありがとね！リリンちゃん！」

そして蛍と別れの挨拶を交わし、リリンは噴水広場を後にするのだった。

：

一之瀬 蛍。彼女はプリキュアについて何かを知っている。

希望の『光』であり、『光』の戦士と呼ばれているプリキュア。

その外見は『お姫様』とも取れる服装をしている。

彼女はその2つのワードに反応を見せた。実際にプリキュアと遭遇したことがあるのか、それともトモダチからプリキュアの話聞いたか、あるいは、彼女自身が……いや、そんなはずはないか。

あの蛍と言う少女に戦う勇気があるとは思えないし、自分が一度、闇の牢獄に墮としたこともあるのだ。

それほどまでの弱い心の持ち主に、光の使者たるプリキュアの資質などあるはずがない。

「まあ、何でもいいわ。

何か情報を掴んでいるのは確実。

次の機会があればまた、その時に情報を引き出していけばいい。」

次に会う約束も出来た。予想以上の戦果と言つていいだろう。

リリンとしての『作戦』は、一先ず終わりとし、次は『リリス』の作戦に移るとしよう。

リリンは左手を伸ばし指を鳴らすと同時に、その姿をリリスへと変える。

次なる手は実力行使だ。プリキュアの正体を探り、変身前に叩くというのは、あくまで作戦の1つでしかない。

やつらを討つ為ならば打てる手は全て打っておく。

それにアモンは、あの2人にもプリキュア討伐の指令を与えているのだ。

やつらに後れを取るわけにはいかない。そしてそんな細かな理屈を抜きにしても、リリスは今日、プリキュアの前に立つ予定だった。

「ターンオーバー、希望から絶望へ。」

リリスを中心とし、闇の牢獄が展開されていった。

⋮

リリースと別れたから程なくして、要と雛子が戻って来た。

「あれ？リリースは帰ったの？」

「うん、ついさつきかえっちゃった。でも、また会うつてやくそくしてくれたの！」
蛍は上機嫌に答える。

この2週間、会えなくて不安だったが、こうして再会出来たことで、そんな不安も吹き飛んでしまった。

ここを訪ればまたいつでも会えることが出来る。

そんな確信が、蛍の中で生まれたのだ。

(リリースちゃん……)

光のお姫様の噂。

その聞いた時は、プリキュアの活動が噂話として広まってしまったのではないかと驚いたが、恐らくは都市伝説の類だろう。

それにリリンはお姫様に憧れているということも知った。

正直なところ、それは意外だった。

リリンはどちらかと言えばクールな印象を与える少女だ。

決して無表情なわけではなく、むしろ笑顔が素敵な少女で、優しくて、

女の子である蛍の目から見ても、とても可愛い容姿の持ち主なのだが、彼女の雰囲気はどこか幻想的で、浮世離れしている感じがある。

そんなリリンが、女の子の憧れの的と言えるお姫様に興味を持っているということ
で、急に彼女を身近に感じることができた。

(そういえばきょうは、わたしのことばかり、はなしちやつたな・・・。)

リリンからその話を聞いた後、すぐに別れることになった。

それまではずっとこちらの話を聞かせてばかりだった。学校にいた時もそうだが、今日は自分の事を優先し過ぎて、周りに気を遣わせてしまうことが多かった。

友達に迷惑をかけない為にも、今後の反省点としていこう。

それならば、次に会った時はリリンの話をいっぱい聞こう。

こちらばかり話をしては不公平だし、何よりもっとリリンのことが知りたいのだ。
だ。

もつとリリンと距離を縮めたいから。

そう蛍が思いを馳せていると。

「っ!？」

不意に、全身に悪寒が走った。

「蛍ちゃん!」

雛子が駆け寄り、蛍の肩に手を置く。

「え．．．？」

すると雛子が、不思議そうな表情でこちらを見た。

「蛍、雛子、これって。」

「うん、やみのろうごくだよ。」

要の質問に蛍は答える。

この全身が震えるような嫌な冷たさ。間違いなく闇の牢獄だ。

だが蛍は自分に現れた変化に気づく。

(こえが．．．きこえない．．．?)

今までずっと、聞こえ続けて来た自分の声が聞こえないのだ。

(かなめちゃん、ひなこちゃん、まことちゃん、あいこちゃん、そして．．．リリンちゃん。
ん。

みんなから．．．勇気をもらえたおかげだ。)

勇気のおまじないを胸に、心の中で皆にお礼を言う蛍。

「蛍ちゃん、大丈夫？」

雛子が心配そうに声をかけてくれた。

そんな雛子の優しさが、蛍にさらなる勇気をくれる。

「だいじょうぶ、かなめちゃん、ひなこちゃん。

いこつ、ダークネスをやっつけなきゃ！」

「蛍・・・、ああつ！」

「うん！」

3人同時に、光の中からパクトを手取る。

「プリキュア!!!ホープ・イン・マイハート!!!」

初めて3揃つての変身。

3人の体が一齐に光に包み込まれ、そして光が弾けると同時に、ピンク、青、黄色のプリキュアが姿を現す。

「世界を照らす、希望の光!キュアシャイン!」

「世界を駆ける、蒼き雷光!キュアスパーク!」

「世界を包む、水晶の輝き!キュアプリズム!」

「3つの光が伝説を紡ぐ!!!ホープライトプリキュア!!!」

3人が変身を終わると、キュアブレイズの捜索に当たっていたであろう、チェリー、ベリイ、レモンが姿を見せた。

「いたっ！プリキュア！」

「ダークネスの気配はこっちだ！」

「みんな、ついてきて！」

妖精たちと合流し、3人は闇の波動がする方へと向かうのだった。

∴

蛭たちが闇の波動を辿ると、目の前に悪魔の姿が見えた。

エメラルド色の髪を持つ、悪魔の少女だ。

その姿に蛭は身に覚えがある。

「リリース！」

「あの子がリリース？」

初対面のキュアプリズムとキュアスパークが驚く様子を見せる。

「まさか、あんな小さい子が行動隊長……。」

するとなぜかキュアスパークの目線がリリスから蛍の方へと向いた。

続けてキュアプリズムもなぜか蛍へと目を向ける。

「え? え? なつなに?」

「いや、それを言ったら今更かなと思って。」

「え?」

それを、とはどのことを言っているのだろうか?

疑問が全く晴れないまま、キュアスパークとキュアプリズムは再び視線をリリスへと戻した。

「キュアシャイン……。」

するとリリスの口から自分の名が呼ばれ、蛍は反射的に身構える。

「キュアシャイン……キュアシャイン……キュアシャイン……。」

だがリリスの様子がおかしい。

仕切りに自分の名前を呟き続けるだけで一切動こうとしなかった。

「キュアシャイン!!」

だが次の瞬間、リリスが目にも止まらぬ速さで蛍へと飛びついた。

あまりの一瞬の出来事に蛍も、そしてキュアスパークもキュアプリズムも反応が遅れ

る。

「きやあつー！」

「キュアシャイン！」

キュアスパークが叫びをあげる。

辛うじてリリスの一撃をガードした蛍は、そのままリリスと組み合う。

「どれだけ、この時を待ち望んだか！キュアシャイン！！」

リリスが片腕を高く掲げて爪を振るう。

避けられないと思ったが、蛍とリリスの間を、蒼い稲妻が駆け抜けた。

「おっと、これ以上キュアシャインに手を……」

「あたしのジヤマをするなああ！！」

「え？」

だがキュアスパークがカッコよくセリフを言い終わる前に、リリスの叫びがそれを中断し、尾でキュアスパークを薙ぎ払う。

「うわつとー！」

叩き付けられた勢いのまま、キュアスパークは宙がえりをして姿勢を整える。

「ダークネスが行動隊長、リリスの名に置いて命ずる！ソルダークよ！世界を闇に染め上げる！！」

するとリリースがソルダークを召喚した。

ソルダークは産声をあげると同時に、キュアスパークへ拳を振り下ろす。

「キュアスパーク！」

粉塵が巻き起こり、キュアスパークの姿を見失った蛍だが、

「キュアシャイン!!」

そんな蛍の元に、リリースが執拗に迫り来る。

だが今度はキュアプリズムの盾が展開され、彼女の進行方向を塞いだ。盾がリリースの足を止めている間に、キュアプリズムがこちらへ合流する。

「そらっ！」

そしてソルダークを殴り飛ばしたキュアスパークも、2人の元へ合流した。

「キュアシャイン、あんたあの子に何やらかしたん？」

やや呆れた様子で尋ねてくるキュアスパーク。

「ええっ!？」

蛍は私が悪いの?と言わんばかりに驚く。

「あの様子、普通じゃないわよ。キュアシャインのことしか眼中にないって感じだけど。」

キュアプリズムも冷静に状況を分析した。

「そっそんなこといわれても、おぼえてないよ！」

前にリリスと戦った時、蛍はがむしやらに浄化技を使ってリリスを破つたらしいが、当時のことを全く覚えていないのだ。

だがその一言がまずかった。

「おぼえていない・・・あたしに、あれだけのことをしておいて・・・？」

愕然とした表情の後に、リリスの体が小刻みに震え始める。

「あれ？地雷踏んだんやない？」

「どこまで・・・どこまであたしを侮辱したら気が済むのよ！」

キュアシャイン!!

感情を爆発させたリリスが、怒りのままに蛍へと向かう。

それを見たキュアスパークが蛍の援護へ向かおうとするが、行く先をソルダークに防がれてしまう。

「このっ！」

「キュアスパーク！だいじょうぶだから！」

「キュアシャイン？」

「わたしは！だいじょうぶだから！いつもどおりにいくよ！」

「あたしを無視するなあ!!」

リリスは自分と戦うことにしか目が行き届いていない。

それならば逆にチャンスだ。

戦闘力に長けたキュアスパークが、ソルダークと戦うことに専念出来る。

「堕ちろ！キュアシャイン!!」

だがリリスの攻撃は想像以上に苛烈なものだった。

リリスの爪が再び蛍の眼前へと迫る。

「はっ!」

すると、ドーム状のバリアが蛍の周囲に展開された。

バリアはリリスの爪を弾き、すかさずキュアプリズムがリリスへ追い討ちをかける。

「ジャマをするなど言ったでしょ!!」

「邪魔をするに決まってるじゃない!!」

リリスの気迫にも動じないキュアプリズムは、そのままリリスとの応戦に入った。

爪を薙ぐリリスの攻撃を時にはかわし時にはバリアで流し、丁寧に捌き続ける。

「ちっ!」

「たあああっ!」

そして隙を見て、蛍はリリスへと体当たりした。

直撃を受けたリリスは僅かに怯むも、直後に距離を開けて態勢を立て直す。

「どうしたのキュアシャイン!? あなたの力はこんなものではないはずよ!」

「えっ?」

「あの時の力はどうしたの!?!なぜ使わない!?!」

「あなた、さつきから何を言ってる……」

「あたしには必要ないとしても言うの!?!キュアシャイン!!」

蛍の困惑にもキュアプリズムの疑問にも答えず、一方的に言葉を投げかけるリリス。

最早会話が成り立つような状況ではなかった。それほどまでに今のリリスは蛍に対する憎しみに満ちていた。

そのことを認識した蛍は、僅かに不安な表情を見せる。

だが隣にいるキュアプリズムは違った。

目の前で憎しみを膨らませるリリスではなく、その先の光景を捉えていた。

蛍もその先へ視線を移し、キュアプリズムの真意を読む。

そうだ。目の前のリリスに怯んでいる場合ではない。

ここに来た目的、自分がプリキュアとして戦う理由を、見失ってはいけない。

キュアプリズムと視線を合わせ、蛍はその『チャンス』を伺うのだった。

…

わたしは！だいじょうぶだから！いつもどおりにいくよ！

蛍のその言葉を思い出し、要は後ろを振り返らず、ソルダークと睨みあった。

あのリリースという行動隊長は、執拗に蛍を狙い続けている。

要はそのことが気がかりだったが、雛子がサポートについてくれるのであれば安心出来る。

だから目の前の戦いに集中しなければ。

いつも通りで行くと宣言した、蛍の覚悟を無駄にしないためにも。

「はあっ！」

要は雷を纏った拳を、ソルダークめがけて振るう。

だがソルダークはそれを跳躍でかわし、

すかさず爪を立てて急降下してきた。高速移動でそれを回避した要はすぐに反撃に出るが、ソルダークも即座に反応し、応戦する。

このソルダークは強い。

スピードと反応速度に優れているためロクに攻撃が通らない。

何とかして浄化技を叩き込む隙を作りたいが、ここまで手強いと要一人では厳しいものがある。

そう思考を働かせている隙に、ソルダークの爪が振り下ろされる。

「くっ。」

両手でそれを抑え、ソルダークの腕力に対抗する要。

迂闊な隙をさらすことはできない。

せめて雛子のサポートがあれば、まだ思考を挟む余力もあるだろうが、今はそれも望めない・・・と思ったが、ふと視界の端にこちらを見据えるキュアプリズムの姿があった。

それを見て要は、雛子の真意を悟る。

(全く、ウチが一番良く知つとることやん。雛子のことを甘くみたらアカンって。)

雛子にサポートを望める状況ではない、なんてことを思った先ほどの自分を恥じる要。

こちらを見据えるキュアプリズムとキュアシャイン、そしてその前にはキュアシャインのことしか見えていないリリスの後ろ姿。

要は雛子の策を悟り、仕掛ける『タイミング』を見計らうのだった。

：

「キュアシャイン!!」

再びキュアシャインを狙い、飛び出すリリス。

そしてその背後には、手のひらに雷を纏い、こちらを見るキュアスパークの姿。2人の姿が直線状に重なるタイミングを躰子は逃さなかった。

(今よ! 要!)

「はあああつ!!」

「なにっ!?!」

突如としてキュアスパークがリリスへ高速移動で接近し、雷を纏った拳で突く。

リリスはそれをガードするも、勢いまでは殺しきれずに飛び退いた。

「くっ! ソルダーク!!」

リリスの呼びかけに答えたソルダークが、こちらへ高速で向かってくる。

「はあっ!」

う
だが雛子はソルダークの目の前に巨大な盾を展開した。勢いに任せてこちらへ向か

う
ソルダークは、突如現れた巨大な盾に頭部をぶつけ自滅する。

た。
その隙にキュアスパークは再びソルダークへと方向転換し、雷を纏った拳を突き付けた。

キュアシャインのことしか眼中にないリリスに奇襲をかけ、焦りで呼びかけたソルダークの自滅を誘う。

雛子の作戦は成功し、ソルダークは蓄積されたダメージから動きが鈍くなり、自慢のスピードを発揮できなくなっていった。

そして追い討ちをかけるべく、雛子もキュアスパークへと続く。

「まあいいわ。あたしが堕としたいのはキュアシャイン！あなただけよ!!」

ソルダークがこれだけのダメージを受けていながら、自分とキュアスパークがリリスから視線を外せば、こちらには見向きもせずキュアシャインの元へと向かう。

これも雛子の目論見通りだ。

そしてキュアシャインは、リリスが迫っていながら今いる場を一步も動こうとしなかった。
か。

雛子は自分の狙いを悟ってくれたことを確信し、感謝と、そして謝罪を心中でする。

(ありがとう、蛍ちゃん、それからごめんささい。あなたを囿に使って。)

「キュアシャイン!!」

リリースが身動き一つ取らないキュアシャインへ、容赦のない一撃を振り下ろした。

だが、次の瞬間、キュアシャインの周囲にバリアが展開された。

「なっ!?!」

驚くりリリース。なぜなら雛子はこちらを見向きもしてないからだ。

だが守る対象と迫る攻撃の位置を正確に見なければ機能しない盾とは違い、ドーム状に展開されるバリアは、守る対象の位置さえ把握できれば四方からの攻撃も防ぐことが出来る。

目を見ずとも対象の力の探知するだけで何とかなるものだ。

さらにキュアシャインが一步も動かなかったので、より正確な位置にバリアを展開することができたのだ。

「きゃあっ!」

勢いを止められなかったリリースの爪は、音を立ててバリアに弾かれる。直後バリアが砕け散り、中にいたキュアシャインが攻撃態勢に入った。リリースは反射的に防御の姿勢を取る。

だがキュアシャインは、そんなリリースを無視し、後方にいるソルダークへと飛んで

いった。

「なっ……。」

「たあああっ!!」

キュアシャインの体当たりを受けたソルダークは、その場に崩れ落ちる。

「キュアシャイン!!」

「わたしたちのもくてきは、ソルダークをたおして、ぜつぼうのやみがひろがるのをふせぐ」と！

リリース!!あなたとたたかうことじゃない!!」

「なんですって……。」

「光よ、降りろ!プリズムフルート!」

雛子は崩れ落ちたソルダークを、水晶の中へと閉じ込める。

「あたしは……。ソルダークよりも劣ると言うの……。?」

「プリキュア!プリズミック・リフレクション!!」

愕然とするリリースを余所に、雛子はソルダークを浄化する。

「……。っ!キュアシャイン!!」

我に返り、立ち上がったリリース。

だがキュアスパークが前に立った。

雛子も彼女に並び、キュアシャインを守るように前に立つ。

「どきなさい!!」

「どくわけあるか。これ以上は好きにさせんよ。」

「リリス、これでもまだ戦うつもりなの?」

雛子もキュアスパークも、リリスに対して静かに怒りを燃やしていた。当然だ。

キュアシャイン個人に対して、執拗なまでの攻撃を繰り返してきたのだ。

そんな横暴、許せるはずがない。

だがリリスはしばし2人を睨み付けた後、自嘲気味な笑みを浮かべ始める。

「・・・ふふつ、あははは・・・そう、どうしてもあたしのことを見てくれないと言うのね。」

リリスの視線は既に、雛子にもキュアスパークにも向けられていない。

その後方にいる。キュアシャインだけを見ていた。

「だつたらいいわ・・・。あたしのことしか見えないようにしてあげる・・・。」

「え・・・?」

「あたしのことしか考えられないようにしてあげる・・・。」

あなたを、あたしだけのものにしてあげるわ・・・キュアシャイン・・・。」

息を飲むキュアシャインの反応を見て、薄ら笑いを浮かべながらリリスは姿を消して

いった。

「大丈夫？ キュアシャイン？」

「うん……だいじょうぶ……」。

まだ……やることがあるから……」。

まだやること、今回被害にあつた人を助けることだろう。

キュアシャインが闇の波動を探知しながら、辺りを見渡す。

雛子はそんなキュアシャインの肩を取った。

手のひらに掴んだキュアシャインの肩が、微かに震えていた。

…

「……ありがとう。また、次に頑張ってみるよ。」

「はい、がんばってください！」

闇の牢獄に囚われていた青年を見つけた蚩たちは、各々が励ましの言葉をかけたことで、何とか青年の闇を祓うことが出来た。

これで終わった。そう思った瞬間、蛍の変身が解け、膝から崩れ落ちた。

「蛍ちゃん！」

「蛍！」

雛子と要が、蛍の両肩に優しく手を添える。

「ごっごめんなさい……おわつたとおもつたら、きゆうに気が抜けちゃって……。」

声を震わせる蛍は、今にも泣きそうだった。

今日ほど戦いが怖いと思ったことはなかった。

思い出すだけで体が震える。

喉が渇き、呼吸も荒くなつていく。

リリースから感じられた、自分に対する明確な憎しみと怒り。

あれほど激しい負の感情を、正面からぶつけられたのは初めてだ。

何度も、あの場から逃げ出したいと思った。

「蛍。」

するとチェリーがサクラへと変身し、蛍を優しく抱き締めた。

「もう、大丈夫。怖くないから、ね？」

サクラの温もりが、蛍のことを励ますのように、心の底にまで伝わっていく。

「うん……ありがと……。」

そして蛍の手を、雛子が両手で優しく取ってくれた。
震える手を温めてくれるように。

要は、蛍の頭を優しく撫でた。

今日の戦いを、頑張ったね。と褒めてくれるように。

「みんな……。」

不思議なことに、先ほどまで感じていたはずの恐怖が、自然と晴れていった。

皆の優しさが、蛍から恐怖を振り払ってくれた。

そして、これからも戦っていける勇気をくれる。

「……ありがとう。わたし、もうだいじょうぶだよ。」

どんなにこわくても、プリキュアとして、ダークネスとたたかうってきめたのは、わたしたちから……。」

「蛍、本当に怖くない？」

要が心配そうに声をかけてくれた。

それだけでも、蛍にとっては勇気へと変わるのだ。

「……わいよ。」

こわいけど、みんながいてくれるから、だいじょうぶ。

みんながいてくれるから、わたし、こわくても、こわくないよ。」

「蛍ちゃん……。」

要、雛子、チェリー、ベリイ、レモン。皆が側にいてくれたら、どんな恐怖だって乗り越えていける。

蛍はそう思い、これからの戦いに向けて、決意を新たにするのだった。

：

「キュアシャイン！キュアシャイン！キュアシャイン！！」

モノクロの世界。リリスは一心不乱に爪を払っていた。

まさかここまで相手にされないとは。

あの子はどこまでこちらを見下せば気が済むのだ。

「はあつ、はあつ……。」

ふふつ、今のうちに目を背けておくといいわ。次はこうはいかない

……あなたも、

ずっとキュアシャインのことばかりを考えてきた。

やつをこの手で墮とすことだけを考えていた。

脳裏に浮かぶのは常にキュアシャインの姿しかない。

キュアシャインのことしか見ることが出来ない。

キュアシャインのこと以外考えられない。

リリスの心に渦巻く『憎悪』は、リリスの全てを支配し始めていた。

「あなたも、あたしと同じにしてあげるわ……。キュアシャイン。」

邪悪な笑みを浮かべながら、リリスはキュアシャインの名を叫び続けるのだった。

∴

次回予告

「うおおおおお!!」

「わっ、かなめちゃんげんきいっぱいだね!」

「次の部活で練習試合のレギュラー選抜が決まるからな!

今のうちに気合入れてかんと、勝てる勝負も勝てないってもんよ！」

「空回りして坂から転げ落ちないでよ？」

「そんなヘマせんよ。それに、勝てば嬉しくて楽しい、負けたら悔しくて楽しい。

それを忘れるつもりはないからね。」

「前から気になってたんだけど、それってやっぱりあの人の影響よね？」

「あのひと？」

「要にとつて、とつても大切な人。」

「そんな言うほどじゃないよ。あのバカ兄は。」

次回、ホープライトプリキユア 第7話！

「兄妹の絆！要と瞬、約束の思い出！」

希望を胸に、がんばれ、わたし

第7話

第7話・プロローグ

陽が傾き、空が赤く染まり始めた頃、要は1人近所の公園でブランコを漕いでいた。暇な今日に限って、真は部活、愛子は習い事、雛子は委員会の仕事と相次いで不在だ。誰も遊ぶ相手がいない、要は仕方なく持て余している時間を1人で潰している。

「はあ……」

ブランコを漕ぎながら要が大きくため息をつく。

心が少しだけチクリと痛んだ。本来ならば今ごろ、バスケットの『クラブ活動』に参加しているところだ。

だが要は一週間ほど前から、クラブ活動に顔を出さず、ズル休みを続けていた。

どれだけ頑張っても、自分のような『凡人』では、神に愛された『天才』には敵わない。

持つて生まれた『才能』だけで全ての結果が決まるのであれば、努力を重ねるだけ時間の無駄だ。

そう思い始めてから、要は好きだったはずのバスケットを続けていくことが辛く

なってしまう。

続ける意味さえ見いだせなくなってしまった。それなのに、

「バスケ辞めたら、やりたこと、楽しいこと、好きなものだけ出来ると思ってたのに。」

まだ親が仕事から帰ってこない内にリビングの大型テレビを占領し、好きだけゲームで遊び、ソファに寝転がってお菓子を食べながら、好きだけ漫画を読んでアニメを見る。

そんな遊び三昧な日々は、最初の内こそ楽しかったが、程なくして何をしても満たされなくなった。

バスケット以外にも好きなことが沢山あったはずなのに、どれも心の底から楽しめなくなっていた。

「はあ……。」

何もしない時間を一人で過ごす要は、無気力なため息を一つ吐く。

「こんなところにおったか。」

すると要の兄、瞬が姿を見せ、一人ブランコで遊んでいた要に声をかけた。

「お兄?」

「なぐんも楽しんないって顔しよって、退屈なら家でゲームなり何なりしてりやええやろ。」

「うっさい。ほっとき。」

要はぶつきらばうな言葉で返す。

兄の瞬は、夢ノ宮中学校男子バスケット部のキャプテンにしてエースプレイヤーだ。

同世代の中でも卓越したスキルを買われ、近隣にあるバスケットの有名高校へと推薦を受けている。

それほどの実力を持った兄は、要に取って幼い頃からの憧れだったが、今は『あの子』と同様、天才であるが故に嫉妬の対象でしかない。

「サボり出してから一週間、そろそろオヤジとお袋も気づくころやと思うぞ？」

「・・・お兄には関係ないやろ。」

ズル休みをしていることは当然親には内緒だ。

バレたら雷を落とされるどころじゃ済まないだろう。

だが瞬の言う通り、隠し通すのも限界な頃合いだが、今の要は不機嫌だ。バスケットを続けても辞めても、何一つ自分の望み通りにはならない。

そんな状況が要を苛立たせており、瞬の言葉を素直に受け入れる気にはなれなかった。

「まっバレても怒られんのはお前だけやから、オレはどつちでもええけど。」

だったら最初から忠告なんかするな。

そう言葉に出そうとした要だが、瞬が肩からマイバスケットボールを下げていることに気づく。

「……お兄、なんでそれ持つてるん？今日は部活休みやないの？」

すると瞬が、ようやく気が付いたか、と言わんばかりにニヤリと笑った。

「要、暇やったらオレとバスケしないか？」

：

セツトした目覚まし時計の音が聞こえ、要は目を覚ました。

だがすぐに体を起こす気にはなれない。

「夢……か。」

夢で見た出来事は、要が小学生だった頃のことだ。

あれから3年ほどしか経っていないと言うのに、随分と懐かしく感じられた。

同時に、出来れば思い出したくない過去でもあった。

あの頃のように何をしても満たされず、楽しむことが出来ないなんて思いは二度と

したくないし、何より要にとって、とても大切な人である兄の事を嫌いになってしまっていた時期

だからだ。

「・・・さつさと顔洗ってご飯食べよ。」

目覚めの悪さに尾を引かれながら、要はベッドから体を起こすのだった。

第7話・Aパート

兄弟の絆！要と瞬、約束の思い出

日課である朝の家事を終えた蛭は、両親を見送る為に玄関前に立っていた。

「いってらっしゃい……。」

「蛭。」

「わわっ、なに？おかーさん。」

母の陽子に呼ばれ、慌てて見送りの挨拶を止める蛭。

「お母さん。今日は早く帰って来られそうだから、夕飯の支度はお母さんがするね。」

「え？」

「せっかく蛭にお友達が出来たんですもの。」

お母さんが早く帰って来れる日くらい、少し遅くまで、お友達と一緒にいてもいいのよ？」

蛭にとって初めてできた友達だから、母は少しでも長く友達と過ごせるように気を遣ってくれた。

だが、仕事を早くに終えた母と2人で家事をすることはあれど、全てを母1人任せてことはない。

仕事から帰り疲れているであろう母に家事の負担を押し付けることは、蛭が家事を担うことになった理由に反するからだ。

その一方で、要たちと一緒に過ごせる時間が増えることは、蛭にとっても嬉しいこと。友達と過ごす時間を取るか母を助けるかの板挟みになり、蛭は戸惑う。

「でも……。」

「蛭、蛭だって、出来るだけ長く友達と一緒にいたいんじゃないのかい？」

戸惑う様子の蛭を見て、父の健治も母の言葉を後押しする。

「おとーさん……それは、そうだけど。」

「それなら、そうしなさい。せつかくお母さんがこう言ってくれてるんだから。」

「……。」

父からの言葉があっても尚、蛭は決めることが出来ずに黙り込んでしまった。

そんな蛭に母は優しく声をかける。

「お母さんもお父さんも、蛭が毎日一生懸命、家事を頑張ってくれてるの、凄く感謝してるのよ。」

でも、もっと蛭の時間を、蛭の好きな様に使っていいのよ。

蛍が、お友達と一緒にいたいと思うのなら、そのために蛍の時間を使いなさい。

その方が、お母さんは嬉しいから。」

「おかーさん……。」

母の言葉に蛍は目頭が熱くなった。母はこんなにも、自分のことを思ってくれている。

ここまで来ると、母の厚意を無下にするわけにはいかないだろう。

思いに応えるべく、蛍は言葉に甘えることにする。

「……うん。ありがとう！おかーさん！おとーさん！」

「ふふつ、じゃあ今日は、お母さんが腕によりをかけて、美味しい夕ご飯を作ってあげるから。」

「わあっ！たのしみ！」

「それじゃ、行ってきます。蛍も学校頑張つてね。」

「うん！いつてらっしやい！おとーさん！おかーさん！」

胸いっぱい広がる愛を受け、蛍は両親を見送るのだった。

∴

「それじゃあ、今日は帰りが遅くなるのね。」

にこやかな笑顔を浮かべた蛍から、チエリーは今日の予定を聞いた。

「うん。だからおそくなっても、しんぱいしないでね。」

「わかったわ。いつてらっしやい、蛍。」

「うん！いつてきまーす！」

蛍と一緒に外へとでたチエリーは、彼女を見送った後に静かに微笑む。

「ふふっ、はしゃいじやって。」

要と雛子と友達になってからの蛍は、毎日素敵な笑顔を浮かべて登校するようになった。

幼い頃からの夢を叶えて以来、蛍は充実した日々を送っている。

たまに心のブレーキが効かずメーターを振り切ってしまう、友達2人を振り回すこともあるが、そんな欠点も全て含めて、チエリーは蛍の変化を好ましく思えた。

それは蛍の両親も同じなのだろう。

だから彼らは、蛍の時間を好きに使ってほしいと願ったのだ。

「本当に、素敵な家族だわ。蛍、学校楽しんでらっしやい。」

チエリーも蛍の両親と同じように、蛍が要と雛子と一緒に有意義な時間を過ごさせることを願いながら、キュアブレイズを探しに行くのだった。

：

夢ノ宮中学校2年1組の教室。

今日の授業を終え、放課後を迎えた要は部活へ向かう為の準備をしていた。

「よっし！準備終わり！」

「かなめちゃん、いつにもまして、気合がはいってるね。」

「来月の頭に他校との練習試合があるからね。」

今日と来週の部活で、そのスターティングメンバーの選定が決まるの。

今年こそは絶対にスタメンの座を取ったるからな！」

去年は公式試合でも練習試合でも、要はスターティングメンバーに選ばれなかったのだ。

その悔しさをバネにこの一年間、練習に励んでいた。

来週までの部活動はその集大成である。

要は十分な気合の中に僅かな緊張を忍ばせる。

「気合の入れ過ぎで空回りしないようにね。」

捻くれた物言いながらも、雛子から珍しく応援の言葉が出る。

その言葉は要の緊張を少し和らげてくれた

「大丈夫、大丈夫。うっし行ってくるわ。」

「いつてらっしやい。」

「それじゃ、私も図書館へ行くわね。」

雛子はいつも通り図書館で時間を潰し、こちらの上がりをつか先に帰って読書に励むつもりだろう。

「あの、ひなこちゃん、ひなこちゃんはいつも図書館で、かなめちゃんのぶかつがおわるのをまつてるんだっけ？」

だがそんないつも通りの放課後となるかと思いきや、蛍がそんなことを雛子に聞いてきたのだ。

「え？まあ、いつもってわけじゃないけど、大体はそうよ。」

質問する相手が蛍のせいかわ、雛子にしては妙に素直な返答である。

「きょうは、わたしもいっしょに、ついてっついていいかな？」

「別にいいけど、家事の方は大丈夫なの？」

蛍と雛子の会話を耳に挟んだ要は、まさしく雛子と同じ疑問を抱き足を止める。

母親思いの蛍に限って家事をサボりたいだなんて言うことはないだろうが、それだけに彼女が家事を放っておく理由が気になったのだ。

「えつとね、おかーさんがね、きようは早くかえつてきて、ごはんをつくつてくれるから、ほたるはトモダチといつしよに、いいよつて、いつてくれたの……」。

だから……今日はかなめちゃんどひなこちゃんと、いつしよにいたいな……」。

恥ずかしそうに俯きながら、上目遣いで答える蛍。雛子も要もそんな蛍の仕草に頬を綻ばせる。

「よし、じゃあ今日は2人で、要の部活を見学しながら待ちましようか？」

「はい？」

だが、続く雛子の提案に要は思わず間の抜けた声をあげてしまった。

断るつもりは無いのだが、今の気合と緊張が妙に入り混じった状態を、雛子はともかく蛍に見られるのは正直こそばゆい。

「うん！かなめちゃん！わたし、おうえんしてるからね！」

だが蛍もその提案に乗ってしまう。

それもとびきりの笑顔で応援してるからね。と言われてはこちらも観念するしかな

かった。

（蛍の手前、カッコ悪いとこ見せるわけにもいかんし、こりやいつも以上に気張らなあかんな。）

先ほどとは別の理由で、要は改めて気合を入れるのだった。

：

要は部室で着替えを終えた後、体育館へ向かった。

既に女子バスケット部の上級生たちが集まり、各々ストレッチをしている。

「要、遅いぞ〜。」

「いやいや、先輩たちが早すぎるだけですって。」

そう軽口を交わすのは3年の水瀬 薫。

要が所属する夢ノ宮中学校女子バスケット部のキャプテンだ。

170cmを超える高身長に茶髪のショートカットという容姿の薫は、一見すると男子と見紛うほどのボーイッシュな雰囲気を持ち主だ。

そんな薫は部活中は鬼キャプテンと呼ばれ恐れられているが、それ以外では気さくで面倒見の良い先輩であり、後輩たちからも慕われている。

かくいう要にとつても、尊敬する先輩の一人だ。

「そうゆう要も、2年生の中では一番早かったわね。」

そう声をかけてくるのは、薫と同じ学年の加々山 菜々子。

女子バスケット部の副キャプテンだ。

身長は150cm後半。

黒髪を後ろで束ねた温厚な雰囲気を持ち主で一見すると運動部所属とは思えないだろう。

その雰囲気は変わらず、薫と対照的に優しく温和な性格で、ムチのキャプテンに対してアメの副キャプテンなんて称されているほどだ。

そんな菜々子も、薫と並び要が尊敬している先輩の一人である。

「そりゃあ、練習試合のスタメンがかかった大事な練習ですからね!」

「うんうん、要、去年一年間すつごく頑張ったもんね。」

「あなたの頑張りにはアタシも保証するが、色眼鏡をかけるつもりはないからな。気を抜くなよ?」

「えーそう言わずに。今度ケーキ奢りますから。」

「アホなこと言つてないで、早めに来たんなら早めに準備運動しな。」

「イエツサー！」

「ママだろ！」

鬼キャプテンなんて言われている薫だが、練習外ではこんな漫才に乗ってくれる。

そんなオンオフの切り替えの上手さは、要にとつては見習いたいところである。

そして要が1人で準備運動をしている内に、2年生と1年生も徐々に集まつてきた。

その中には理沙の姿もあつた。要は理沙の姿を確認すると静かに闘志を燃やし始める。

「……。」

理沙もこちらに気づき一瞥したが、程なくしてそっぽを向いた。

そんなクールな対応もいつも通りなので、要は気にせず準備運動を続ける。

「いたいた。要く、あんた来るの早すぎじゃない？」

そんな要に、真鍋 未来（みく）が声をかけてきた。

要と同じ学年で2年3組の少女だ。

クラスこそ違うもののバスケット部員の中では要と一番気が合うので、休日も良く遊ぶ仲間である。

ちなみに雛子とも面識があるが、良く冗談を言い人をからかう性格同士なのに、雛子

は未来に辛辣に当たったことはない。差別である。

「未来が来るのが遅いだけやろ。」

「あんまし気合入れ過ぎると、空回りして逆効果だよ？ 私みたいになりラックスしなきゃ。」

マイペースを自称する未来は、部活中でも特に熱を帯びた面を見せないが、一方でやる気がないわけでもないの、薫も特に注意はしてこない。

そんな絶妙な力加減で、相手が怒らないギリギリの調節を利かせられる未来に対して、

「マイペースどころかめっちゃ計算高くない？」

と質問したことあるが、

「ご想像にお任せします。」

と誤魔化された。最も否定しない当たり自覚があるのだろう。

「ところで要々。今日は奥さん、子供を連れて見学に来てるわよう。」

「は？」

言いながら未来はグラウンドの方へ指をさす。要は確認するまでもなくその意味を悟った。

雛子との仲を夫婦とからかわれるのはとつくに慣れているが、蛍が子供まで来ればさ

さすがに無視できない言葉だ。

だが普段ならツッコミか敢えてのボケ殺しで返すところだったが、スターティングメ
ンバーの選抜を控えた今はそんな気分にはなれず、代わりに大きなため息を吐く。

「ツッコミどころ多すぎるから、スルーさせてもらおうよ。」

「珍しくノリがわるいじゃない。余すことなくツッコミ入れてよく。」

「却下。今は余計なことに体力使ってる暇はないの。」

「ちえっ。ところでさ、あの子だれ？もしかして妹さん？」

要の心境を察した未来が話題を変え、蛍のことを聞いてきた。

「なわけあるかい。」

ウチらと同じ制服で同じリボンの色しとるやろ？ウチのクラスメートで、友達の一之

瀬 蛍。」

「え？クラスメート？」

マイペースを自称する未来が珍しく絶句する。

だが要からすればはつきり言って想定通り過ぎる反応なので、特に気にしない。

するとこちらに気づいた蛍が、笑顔で両手を高く振り出した。

声は聞こえないが、口の動きで、がんばって〜と言っているのがわかる。

そんな蛍の幼い言動に、改めて未来は凝固するが、要はそんな未来を無視して蛍に軽

く手を振った。

「全員集合！点呼取るぞ〜！」

そして薫から招集を受けるのだった。

今週から来週にかけての活動内容は、来月の練習試合に向けての最後の仕上げとして2チームに分かれての模擬試合の時間が多く取られることになっている。

要たちはストレッチ、ランニング、パスにドリブルといった基礎練習を軽く終えた後、薫の指示で2チームに分かれることになった。

すると女子バスケット部の顧問にして2年3組の担任、吉川 夕美が姿を見せた。

身長は160cm後半、外見からして恐らく30代前後と言ったところ。

やや放任主義なところがあり、部活の内容は基本的に薫と菜々子に委ねているが、今回のチーム

分けは、薫と菜々子、先生が相談して決めたようであり、重要な部活動の内容にはちゃんと参加しているようだ。

ちなみにスターティングメンバーの選定も、この3人で決められるらしい。

「今日と来週の内容で、スターティングメンバーが決まるから、皆気合入れていきなさいよ！」

吉川の言葉に要は緊張を滲ませる。

「・・・緊張らなあかん・・・。」

「おつ、今日は要と同じチームか。いや、よかつたよかつた。要に任せりや一安心だね。」

するとそんなムードとはあまりに場違いの、ひと際明るい声で未来が話しかけて来た。

「相手には理沙がいる。マジでやらんと勝てないよ。」

「マジでやつても私じゃ勝てない。要に任せた！」

「あのね。」

呆れるそぶりを見せるも、要は本心から呆れているわけではない。

未来なりに緊張をほぐそうとしてくれたものだと思っているからだ。

こんな空気の読めるところも、彼女の自称するマイペースとは、良い意味で程遠いものである。

「大丈夫。それ以外のことはちゃんとやるから。」

そして基礎練習では程々に力を抜く未来でも、試合中に力を抜いたことは無い。

要もそんな未来のことを信頼している。

彼女との会話で程良くリラックスできた要は試合への集中力を研ぎ澄ます。

「では、試合開始！」

菜々子が吹くホイッスルを合図に、試合が開始される。

最初のボールが要へと渡る。要は持ち前の速さで一気に敵のコートまでボールを運ぼうとするが、目の前に理沙が立ちはだかった。

だが、ここで彼女への対抗心から周りが見えなくなるような要ではない。

バスケットは5人のチームで戦うスポーツだ。

誰が誰を相手にどれだけの得点を奪えたかを競うものではない。

チームの総得点が、相手チームを上回らなければ負けなのだ。

理沙に勝ちたい。そんな独りよがりの自己満足でチームメイト全員を負かせることは許されない。

要は理沙からボールを守りつつ、視界の端に捉えたフリーの味方にパスを送った。

そして理沙がボールに気を取られている隙をつき、敵のコートへと切り込む。

スピードを武器に、ゴール下まで一気に潜り抜けた要は、そのまま味方からパスを受けシュートを決めた。

「よっしー！先制得点!!」

未来とハイタッチしながら、要は自軍のコートへと戻る。

理沙の方を一瞥するが、特に悔しがる様子を見せず、クールに自分のポジションへと

戻っていった。

いつも通りだ。理沙はまだ本領ではない。

試合の後半から調子を上げていくタイプだ。

だが周りから良くスロースターターと称されている理沙だが、小学生の頃から彼女のバスケを知る要から言わせれば、そんなことはない。

理沙はただ本気が出せないだけだ。

上級生も含め、理沙を除く部員と理沙との実力差は遥かに大きい。

故に彼女からすれば、この練習は園児たちのごっこ遊びと一緒に混じっているようなものなのだ。

そんな状況下で本気なんて出せるはずもない。

だから理沙に、これ以上追い詰められたら負けだ。

と思わせない限りは、彼女も本気を出そうとはしないのだ。

(さっさと本気出させてやるからな理沙。

そして今日こそあんたに勝ってやる！)

理沙が試合の後半から全力を出し始めてしまうと、対抗できない内に負けてしまう。

早い内から彼女の全力を引き出し、こちらもそれに対応していかなければならない。

それに細かな理屈抜きにしても、本気でない理沙を相手に勝てたところで要には何の

意味もないのだ。

チームへパスを回し流れを組み立てながら、要は理沙への対抗心を募らせていくのだった。

：

体育館内が見えるグラウンドの隅から、雛子は穏やかな表情で要を見守っていた。

2チームに分かれての模擬試合は、要が部活動の中でも特に好きな練習メニューである。

要曰く、チームメイトと戦える機会はこの時しかないから、とのこと。
そんななプレイヤーと戦ってみたいと願う彼女らしい理由である。

そんな生き活きとした様子の要を見ながら、雛子はふと昔のことを思い出した。

小学5年生の時だったか。要のクラブ活動の見学に行くと、ちょうど今日みたに2チームに分かれての模擬試合が行われていた。

要はチームメイトのことを何も考えず、ひたすら理沙を相手に1対1を挑んでは負

け、得点を取られるを繰り返し、見かねたコーチが、

自分勝手なプレーでチームに迷惑をかけるようなやつに、バスケットをやる資格はない。

と、意地を張って協調性を欠いた要を注意したのだ。

するとヘソを曲げた要は、何と次の日から1週間ほどクラブ活動をズル休みしてしまつたのだ。

あの時と比べたら、理沙を前にしてもチームを優先して動くようになっており、大きく成長したものだと思つた。

そのことを本人に言えば、何年前の話だよ。と口を尖らせるだろうが。

「わあ、すごいー!」

すると隣で見学している蛍が、要のロングシュートを見て感嘆の声をあげる。

その表情は要がシュートを決めたら笑顔を見せ、相手チームが得点を取れば不安に変わり、要が持ち味のスピードで相手のコートをかき乱せば驚きを浮かべた。

試合の内容1つ1つに反応して、コロコロと表情を移り変えていく。可愛い。

そして両手を大きく振るいながらその場で飛び跳ねた。

グラウンドでは他の運動部が部活動に励んでいるため大声を出して応援しては周り

の迷惑になる。

だから声を出す代わりに、リアクションで要への応援を表現しているのだろう。可愛い。

「やっぱり、かなめちゃんはすごいね。」

スポーツバカな要はどんな運動でもそつなくこなせるが、仲でも幼い頃から続けているバスケットは、他のどのスポーツよりも遙かに動きが洗練されている。

同学年の中では理沙を除けば一番で、上級生にも引けを取らないだろう。

「バスケットはあのスポーツバカの中でも、一番得意なスポーツだからね。」

「んつと、それもあるんだけど、かなめちゃんのチーム、なんだか、かなめちゃんを中心にまとまってるようにおもえて。」

「え?」

だが予想もしない蛍の言葉に雛子は驚いた。

「・・・蛍ちゃん、バスケットのルールは知ってるの?」

「えと、5にんチームで、ボールをリングにいれたら2点はいって、あとは、サッカーとちがつてボールを足で蹴つちやいけない、くらいしか知らないよ。」

蛍は運動が大の苦手だと言っていたし、スポーツ観戦が好きと言う話も聞いたことがない。

案の定、バスケットのルールについても最低限の知識しかないようだ。

「じゃあ、どうして要を中心にまとまってるって思ったの？」

結論から言えば、蛍の感想は的中している。

要のポジションはポイントガードであり、ボールを運びパスを回して味方を動かし、ゲームを組み立てていくのが仕事だ。

その役割からコート上の監督と呼ばれており、チームの中核を成す非常に重要なポジションである。

だが積極的にシユートを決めて得点を量産していくポジションと比較すると、ポイントガードはドリブルでボールを運び、味方にパスを回していく時間が大半なので、プレイスタイルとしては地味な印象を受けてしまうものだ。

そしてバスケットに限らず、スポーツは得点を入れた瞬間が最も盛り上がるところであり、素人目線だと、試合を一番盛り上げた人物こそが中心的存在。

つまり得点を稼ぐシユーターがチームの中核を成すポジションと移ってしまうのだ。

要は自らも積極的にシユートを決めるべく行くタイプなので、この練習試合も先取点を決めたのは要だが、それでも試合全体で見ればドリブルとパス回しの時間の方が多い。

シユートを決めた回数だけなら、チームメイトの未来の方が多いだろう。

それなのに蛍は、未来ではなく要がチームの中心であることに気付いたのだ。

雛子はその理由に興味が沸いた。

「ええと・・・なんていえばいいのかな？かなめちゃんのチーム、みんなわらってて、とてもたのしそうにバスケしてて、そんな雰囲気、かなめちゃんがつくってるように、」

みえたから・・・かな。」

「雰囲気・・・作る？」

その言葉に雛子は以前、要の部活仲間である未来から聞いた話を思い出した。

要と同じチームだと、自分の力を存分に発揮できるからとても気持ち良くプレイ出来るのだと。

確かに要はチームメイト全員の持ち味と弱点を全て把握しており、味方の長所を活かし短所をカバーするゲームを組み立てるのが非常に上手い。

理屈の上では、要の組み立てる試合の中では個々のプレイヤーが強みを最大限に発揮出来るので、それがチームメイトのモチベーションと士気の向上に繋がるのだと説明が付けられる。

だが、蛍から語られたのはそんな理屈ではない。

場のムードやチームメイトの表情から、要が中心人物だと感じ取ったのだ。

「・・・そっか。」

蛍の豊かな感性に雛子は感心する。

「えと……ごめんね。うまくせつめいできなくて。」

だが本人はそれを、困惑と感じてしまったようだ。

なんでこんなところでは鈍いかな、と思いながらも、そんなところさえ可愛く思える。

「ううん、ちゃんと伝わったよ。」

「え……?」

不思議そうにこちらを見上げる蛍。可愛い。

そんな蛍から視線を外した雛子は、再び要の試合を見始めた。

要を中心に団結し勢いがついていき、一気に得点を重ねていく。

だがその時、

「あつ……。」

隣にいる蛍が感じ取ったように、雛子にも場の空気が変わるのを見て取れた。

追い込まれた理沙が、ついに本気を出して来たのだ。

これまで見学してきた練習試合も、劣勢な状況から理沙1人で試合をひっくり返して

きたことは数多い。

それほど理沙の実力は群を抜いている。

本気を出した理沙は、相対する要を容易く抜き去りシュートを量産し始めた。

そして理沙一人に徹底的に叩きのめされた要のチームは、逆転負けを許してしまうのだった。

：

部活動を終えた要を、雛子と一緒に迎えた蛍は3人で並びながら帰路についた。

いつもなら夕ご飯の支度をしている時間に、学校から帰るといふのは妙に不思議な気分である。

そんな時間に3人一緒に帰れることを、蛍は内心楽しみにしていたのだが、

「はあく……。」

隣を歩く要が大きなため息をついた。

心なしか表情も暗い。

だが部活に行く前の、要の気合に満ちた様子を思えば、あそこまで徹底的に負かされては落ち込むのも無理はない。

その相手がライバル心を抱いている理沙であれば尚のことだ。

「かつかなめちゃん、げんきだして。」

そんな要を何とかして励ましたいと思う蛍は、慌てた口調で彼女に話しかける。

「蛍の前では、負けるなんてカッコ悪いとこ見せたくなかったのにな……。」

「え……?」

だが続けて放たれた一言に衝撃を受けた。

思えば要は今日の部活動は大切な日だと言っていた。

と言うことは、活動内容に練習試合があることは前もって知っていたのかもしれない。

そんな大切な日に見学に行きたいだなんて、ひよつとして我儘だったのだろうか?

本当は見学に行つてはいけなかったのだろうか?

蛍はいつもの癖でマイナス思考を働かせてしまう。

「えと……、ごめんね。れんしゆうみたいだなんて、ワガママいっちゃつて……。」

「え? イヤイヤイヤ! 全然我儘なんかじゃないよ!」

だが蛍からの謝罪を聞いた要は大きく慌てて否定する。

「そうよ、蛍ちゃん。」

それを気にしだしたら要の部活なんて見学に行けなくなるわ。」

そして続けざま雛子からいつもの毒舌が飛んできた。

「雛子く。それどうゆう意味かな？」

ガツクリと肩を項垂れながらも、要はいつもの口調で雛子の毒舌に反応する。

なし崩しな状況になった気がするが、思っていたよりも要が元氣そうだったので、蜚は安堵した。

「あれ？要に雛子ちゃん、蜚ちゃん。奇遇やな。こんなところで。」

すると要の兄、瞬が偶然近くを通りかかった。

制服姿で鞆を手を持ち、肩にネットに入れられたバスケットボールを担いでいる。

恐らく学校帰りなのだろう。

「お兄。いつもなら、もうちよい遅い時間に帰って来るやろ。」

「今日はたまたま早く部活が終わってな。」

それよりもどうした要？エラく辛氣臭い顔しよって。」

蜚から見れば、今の要はいつも通りの元氣を取り戻しているように見えるが、流石は兄だ。

要が先ほどまで落ち込んでいたことを見抜いているようだ。

「ええと・・・。」

兄である瞬に指摘されたせいかな珍しく口ごもる要だったが、

「ははん、さてはまた理沙ちゃんにコテンパンにやられてきたな。」

瞬の口からあまりにも直球過ぎる言葉が飛び、螢は目が点になった。

要の胸に『グサツ』という文字が刺さる錯覚が見える。

「なくんで、ウチが落ちこんどるの知つとるくせに、そうゆうこと平気で言えるかなあ？
このバカ兄は。」

今度は要から『ゴゴゴ』という擬音語が沸きあがる錯覚が見えた。

そんな謎の迫力ある様相で瞬をバカ呼ばわりし、森久保兄妹による睨めっこが開始される。

「へくそりやすまん。バカ妹が負けに落ち込むほど繊細なメンタルしとるとは思わなかったわ。」

瞬も負けじと悪口を返す。

「もく、今日と言う今日に勘弁ならんわ。」

ケリ付けようやないかバカ兄。」

「はっ、ケリつけるもなにも、今までオレに勝てたことないやろバカ妹。」

「そうやって余裕ぶっこいとるとええわ。吠え面かいても知らんで？」

「上等や。そつちこそ泣いても恨めっこなしやぞ？」

「ボールはっ。」

「ハハハ。」

「市民体育館は？」

「まだ営業中。」

売り言葉に買い言葉と言うのがこれほどまでも似合うやり取りを繰り広げた2人はしばし沈黙し、

「おっしやバカ兄ついてこい！晩飯の時間までlonelyや！」

「望むところや！部活で疲れてましたを言い訳にすんなよ!!」

「その言葉そのまま返したるわ！雛子！蛍！また明日な〜！」

「雛子ちゃん！蛍ちゃん！帰り道気いつけや〜！」

そして2人とも市民体育館を目掛けて、猛烈な勢いで走り去っていった。

「まっまたね〜・・・。」

スポーツ兄妹から溢れ出るバイタリテイに終始圧倒された蛍は、目が点のまま2人を見送る。

「ほんと、仲のいい兄妹よね。」

「うっうん・・・さつきまでケンカしてたのがウソみたい・・・。」

仲が良いか悪いかと聞かれたら良いのだろうかあれほど口喧嘩をしておきながら2人でバスケットに興じられることが蛍には不思議に思えた。

「あれくらい喧嘩の内に入らないわよ。あの2人なりのコミュニケーションなんだか

ら。」

「そつ、そうなの？」

驚く蛍だが、考えてもみれば雛子と要も普段からあれくらい喧嘩腰の言い合いをしているか。

両親とすら喧嘩した記憶がほとんどない蛍には、喧嘩腰で言い争うのもコミュニケーションの手段、というのがイマイチ理解できないが、実際喧嘩しているように見えて、気が付けば要が元の元気な姿に戻っているのだから、コミュニケーションとして成功しているのだろう。

「まあ、蛍ちゃんに真似をしろ、とは言わないけどね。」

蛍ちゃんは蛍ちゃんなりに、要と接してくれればいいよ。」

あの喧嘩のようなコミュニケーションは、要と瞬、雛子の関係だからこそ成り立つのだろう。

だから2人の真似をしても意味がない。蛍には、蛍と要との間で成り立つコミュニケーションがきつとあると、雛子は言っているのだろう。

「ひなこちゃん。うん、わかった。」

「じゃあ、また明日、学校でね。」

「うん、バイバイ。」

とは言え、喧嘩を使ったコミュニケーションなんて自分には到底無理だろうな、と思
う輩であった。

・
・
・

夢ノ宮市市民体育館。

一通りのスポーツを行える設備が贅沢に備えられているこの施設は何と、夢ノ宮市に
住む中学生以下の子供までは、無料で利用することが出来るのだ。

スポーツ用具のレンタルにはさすがに料金がかかってしまうが、そこも自前のものを
持ち込んでしまえば問題ない。

「おつ、要ちゃん。こんな時間にお兄さんと一緒に来るなんて珍しいね。」

窓口にいる係員が要に声をかけてきた。

「うゝす、おつちゃん。晩飯の時間まで体育館使わせてもらおうよ。」

「はっは、部活帰りだろうに、若い子は元気があっていいね。」

「おつちゃんだって、まだ髪フサフサやないかい。」

「どうせあと5年もすれば禿散らかしてくるさ。」

「おっさんならスキンヘッドでも似合うから問題ないよ。」

こらバカ兄遅いで。ちやつちやと始めんと晩飯出来てまうやろ」

係員と軽口をかわしながら、要は体育館へと入っていった。

本来ならば学生証の1つでも見せなくてはならないのだが、幼少のころから兄につられてこの施設を利用している要は、顔パスで済ませられるほど、係員とすつかり顔なじみなのである。

「そう急かすなて。」

後ろから追いついてきた瞬が、少し呆れた口調で答える。

確かに急かしているが、要は今すぐにもバスケットがしたかったのだ。

癪なことに雛子と瞬の毒舌コンボのおかげでいくらか紛らわせたが、それでも今日の

悔しさはまだ完全に消せてはいない。

いくら部活内の練習試合だったとはいえ、今日だけは絶対に負けたくなかったからだ。

理由は3つある。

1つ目の理由は、今回の部活ではやる気・コンディション共にベストであったから。

その上での敗北だから、実力不足以外の言い訳が思いつかない。

2つ目は、他校との練習試合におけるスタメン選定の評価に関わるものであったから。

負け試合となつてしまつた以上、スタメン選定ではマイナス評価になるのは明らかだろう。

そして3つ目は、蛍が見学に来ていたからだ。

蛍の目の前で情けなく負けてしまつては、この先彼女の前で格好がつかない。

要にとつても予想外だったが、蛍の前で格好がつかなくなることは、スタメン選定の評価を落とされたのと同じくらいのダメージだつたのだ。こうゆう時は思い切り体を動かして、心にたまった嫌な気持ちを含めて発散するに限る。

そしてどうせ動かすならば、好きなスポーツで動かしたいものだ。

瞬に挑発される形でここに来てしまつたが、結果オーライである。

「あれ?」

だがふと、要の視線に一人の少年が映つた。身に覚えのある後ろ姿に、バットとグローブ、そして野球ボールを持ち込んでいる。

「・・・健太郎?」

上田 健太郎。要たちのクラスメイトで、野球部所属の根っからのスポーツ男子だ。スポーツ好き同士のため、男子の中では要と一番親しいのである。

明るく自分に自信を持つ彼は、男子のムードメーカー的存在だが、そんな彼が、妙に沈んだ表情を見せているのだ。

要はしばしばその様子を見続けていたが、

「おいどうした要？」

「え？ああ別に、なんでもないよ。」

兄に声を掛けられ、我に返る。

健太郎に何があつたのか気になる要だったが、ひとまず兄との勝負に専念する為、体育室へと向かつていくのだった。

∴

モノクロの世界。3人の行動隊長が1つの空間に集つていた。

「ホープライトプリキュアか……。」

サブナックが何かを考え込むように、腕を組んで壁にもたれ掛かる。

「キュアシャイン……。」

リリスはいつものように、憎きキュアシャインの名を呟く。

「まさかサブナックに続いて君までもが、2度に渡って敗北するとはね。」

そしてダンタリアもいつもの調子で、リリスにイヤミを飛ばしてきた。

「・・・言いたいことはそれだけかしら？」

普段なら聞き流している言葉だが、今のリリスはとても不愉快だった。キュアシャインに徹底して相手にされなかった挙句、精彩を欠いたままソルダークを浄化されたのだ。

実力行使こそ失敗したが、蛭という情報の収集源を得ることが出来たので、今回のリリスの戦果は、長期的に見ればプラスと言えるだろう。

だがそんなことよりも、キュアシャインに無視されたと言う事実がリリスの心をかき乱していた。

「・・・ふうん。」

そんなリリスの様子を、ダンタリアは興味深そうな目で観察する。

そしてリリスがダンタリアから視線を外した時、サブナックが口を開いた。

「だが現実には、我らはやつらに敗北を重ねている。」

伝説の戦士の力を持つものとはいえ、ただの小娘を相手になぜ我らが勝つことが出来ないのか。

我らの敗因は何であるのか。それを考える時が来たようだな。」

「へえ、君にしては珍しく、まともなことを言うじゃないか。」

頭の使い方なんて、すっかり忘れてしまったのかと思つたよ。」

ダンタリアの興味の対象が、リリスの様子からサブナックの言葉へと移る。

「ふん、無駄口を考えることにしか頭を使わぬ貴様に言われたくはない。」

「そこまで言うからには、答えの1つくらいは持っているらうね？まさか口先だけなんて言うつもりじゃないだらうね？」

「オレを侮るなよ。」

我らの敗因は、我らには欠けているものがあるからだ。

そしてやつらにあつて、我らにないものは既にわかつている。」

「ほう。」

ダンタリアは珍しくサブナックに対して感心の眼差しを向けた。

この場を離れようと思つていたリリスも、その言葉を聞いて足を止める。

やつらにあつて、こちらにないもの。そんなものが本当にあるとは思えないが、一応聞く価値はあるだらう。

「聞こうじゃないか。」

ダンタリアが興味深そうにサブナックへ問い始めた。

そしてサブナックが自身気に口を開いた。

「チーム名だ。」

「……」

ただでさえ音も光もない世界に一層の沈黙が訪れた。

だがそんな静寂をサブナックが打ち破る。

「やつらは、ホープライトプリキュアという名の下に集い、団結して我らを打ち破った。ならば我らに足りないものはチーム名だ。我らも1つの名の下に集い……」

「バツカみたい。」

サブナックがこの上なくバカなことを語っている自覚がないままバカな話を続けようとしたため、リリスは侮蔑の意を込めて話を切り捨てた。

「なんだと?」

「チーム名ですって?」

ホントにそんなものが欠けてるせいだと思ってるの?」

「やれやれ、やつぱりバカは何を考えてもバカみたいだね。」

ダンタリアも呆れた表情で肩を落とす。

多少サブナックの言葉に感心をしていただけに、落胆が大きかったようだ。

チーム名などと言う集団の呼称を表すものがあるせいで、行動隊長であるリリス達

が、たかが小娘ごときに敗北を重ねていると本気で思っているとは救いようがないが、それよりも問題点は後者だ。

「それに、1つに集うだなんて冗談じゃないわ。

あなたみたいなバカがいたところで邪魔にしかならないわよ。」

サブナックもダンタリアもチームメイトなどでは断じてない。

むしろリリースの目的にとつては邪魔な存在だ。

キュアシャインを取られたくないから単独で動いていると言うのに、なぜ2人と組まなくてはいけないのだ。

「同感だよ。

君みたいなバカと組んでしまつては、返つて作戦の効率が悪くなつてしまうからね。」
そしてダンタリアはダンタリアで、サブナックに対して邪険の意を込めた言葉を吐き捨てる。

サブナックが邪魔だという点では意見が一致したりリスとダンタリアは、矢継ぎ早に彼に対して暴言を飛ばしたてた。

「だが事実、我らとやつらの差があるとすればそこしかない。

我らも然るべきチーム名を考える必要が……。」

「断るよ。」

そんなバカなことを考えるために頭を使うつもりは無いからね。」

「どうしても欲しかったら1人で考えたら？」

尚もチーム名の必要性を説こうとするサブナツクを、2人は無理やり引き離す。

そしてこれ以上、こんなバカげた話は聞いていられないと言わんばかりに、リリスはリリンへと姿を変え、かの地に降りるべくこの場を立ち去り、ダンタリアもまた、サブナツクに背を向けてこの場を離れる。

そして1人取り残されたサブナツクは、再び腕を組み考え込む。

「……やはりここはオレが考えるしかなさそうだな。」

一生やってなさいバカ。

一生やってろバカ。

最後の最後まで意見の一致したりリスとダンタリアは、内心盛大に呆れながらサブナツクのことを見下すのだった。

∴

要と瞬がloniを繰り広げている内に、時刻はあつという間に夕方を過ぎていった。

「つと、もうこんな時間か。」

兄の瞬が体育室にある時計を見る。

「お兄ーラストー一回ー！」

要がそう叫ぶ。

今回も瞬を相手に一回もシュートを決めることが出来なかった。

兄の方が実力も年齢も上だし、男子高校生の瞬と女子中学生の要とでは身体能力に大きな差がある為、半ばわかりきった結果ではあるが、それでも得点ゼロというのは悔しいものである。

「いやお前、それ絶対終わらせてくれないパターン……。」

「ラストー一回!!」

洩る瞬に対して要は無理を押し。

「……はいはい。」

呆れた声で答える瞬だが、言うや否や、要がディフェンスの姿勢に移る前にそのまま

シユートを放ったのだ。

「ちよっ!!」

そしてボールはそのまま綺麗にゴールへと吸い込まれていった。

「はい終了。悪く思うなよ。1回は1回やで。」

どこかの漫画で見たような卑怯な手口を、これまたどこかのアニメで聞いたようなセリフでやらかした瞬間に要は声を荒げる。

「さすがに今のはノーカンやろ!!」

「アホ、そろそろ帰らんと、おふくろに怒られるやろ。」

晩飯抜きにされたいんか？」

「ぐぬぬ……。」

完敗した上にいっぱい食わされたわけだが、元々我儘だったのは承知なので、渋々兄の言うことに従うことにした。

帰り支度を整え、体育館を後にしようかと思つた要だが、

「あつ健太郎。」

「森久保、偶然だな。」

偶然、健太郎と鉢あつたのだ。

ここに来た時の健太郎の妙に浮かない顔を思い出した要は、ついまじまじと彼の顔を

見てしまう。

「なっなんだよ。俺の顔に何かついてるのか？」

「え？ いやすまん。そういうわけじゃないんだけど。」

少々不審な要の態度を、健太郎は訝しむが、程なくして視線を要から外した。

「じゃあ俺、これで帰るから。」

「あつ、ちよつと待って。」

「なんだよ?」

思わず呼び止めてしまう。

正直聞いていいのかどうか悩むところだが、あの時の彼の姿にどこか既視感を抱いていた要は気になって仕方がなかったのだ。

「ここ来るときさ。なんか悩んでるような顔してたけど、何かあったん？」

「……。」

健太郎は沈黙するが、やがて何があったのかを話してくれた。

「俺、今度の練習試合の選抜メンバーに選ばれたんだ」

「え!?! やったやん!」

奇しくも同じ目標を持っていた健太郎に、要は少しばかりの対抗心を燃やすが、それでも素直に彼のことを賞賛する。

だが要の言葉を聞いた健太郎はさらに浮かない顔をしたのだ。

「でもさ、うちの野球部、去年すごかったじゃん？」

県大会出場まであと一步のところまでいくことが出来たし。」

「そういえば、そうだったね。」

「だから今は、地域内でも一目置かれる野球部になってんだ。

でも、あの時のレギュラーはほとんどが3年生で、今はもういない。」

「・・・そっか。」

その言葉に要は健太郎が抱えていることを悟った。

「正直、重いんだよ。」

先輩たちの後釜につくつてのが・・・。

もしも次の練習試合に負けてしまったら、卒業した先輩たちの顔に泥を塗ってしまっ

んじゃないのかって。

そう思うと、負けるのがすげえ怖くなったんだ。

去年なんか、レギュラーになりたい一心で猛烈に練習してたのにな。

なんでこんなこと思うようになったんだろ・・・。」

「・・・。」

彼にかけてやれる言葉が思いつかない要は、そのまま黙り込んでしまう。

「なあ、要は負けることが嫌だつて思ったことはあるか？」

「え……？」

かつて虫に似たような質問をされた時、要はすぐに答えを出せたはずだ。

だが健太郎相手には、その言葉がすぐに出てこなかった。

「……わり、急に变なこと聞いちまつて。俺、帰るわ。」

「あつ、健太郎。」

最後まで健太郎にかける言葉が見つからなかった要は、プレッシャーに押し潰されそうな彼の背中を見送ることしかできなかった。

…

瞬とのlonlを終えた要は、家へ帰宅し夕食とお風呂を済ませて、自室で寛いでいた。

「はあ〜。」

盛大にため息をつきながら、自分のベッドに飛び込む要。

「ため息なんて珍しいな。何か悩み事でもあるのか？」

すると机の上からベリイが話しかけてきた。

まるで悩みのない人間だと言いたげだ。

「ウチにだって、悩み事の1つや2つくらいあるもんですよ……。」

別にショックを受けたわけではないが、要は冗談半分で敢えて大げさに落ち込んで見せる。

「ははっ、気を悪くしたなら謝るよ。」

ただ君の場合、悩むよりも先に行動をするか、悩みがあつてもすぐに吹っ切れてる印象があつたからな。

そんな風に引きずるところは初めて見るから気になったのさ。」

ベリイは謝ると言いながらも笑っている。

冗談半分の仕草であつたことに気づかれたようだ。

だがあまりにも正確に自分のことを言い当てられてしまい、今度は困惑する。

「むむむ……よう見てるな。」

「これでもパートナーとして、君のことをよく理解しようと努力していたからね。」

それに君は裏表がない分、蛭ちゃんとは違う意味でわかりやすいからな。」

妖精たちの中で誰よりもこの世界についての知識を深めたベリイのことだ。

観察や分析の類は得意なのかもしれない。

それでも短期間でここまで自分のことを理解してくれるのは、パートナーとして嬉しく頼もしい反面、小つ恥ずかしいものである。

「何かあつたのかい？」

優しく話しかけてくるベリイに対し、要は健太郎との会話を話すことにした。

「そんなことがあつたのか。」

要の話を全て聞き終えたベリイは、静かにそう呟いた。

「ウチ、何も言つてやることが出来なくて……。」

「勝負は、勝つたら楽しい負けても楽しい。」

それが君の信条だったよな？」

「うん……。」

その言葉には、なぜそれを伝えなかつたのだ？という疑問を含んでいるかのようだった。

だがそれは要自身も思つたことだ。

どうしてあの時、健太郎を相手に負けることも楽しめと言えなかつたのか。

「要、さつきも話したが、俺は君のパートナーとして、君のことをもつとよく知りたいと

思っている。

良かったら話してくれないか？君がそう思うように至った理由を。」

するとベリイが真剣な眼差しでそう聞いてきた。

パートナーとして自分のことを理解したい。

そんなベリイの気持ちは要には素直に嬉しかった。

「別にいいよ。つても、何も面白い話でもないけどね。」

ベリイの気持ちに応えるため、要は自分がそう思うように至った、兄との思い出を話すことにしたのだった。

第7話・Bパート

「今から、3年くらい前のことやったかな……。」

要は静かに語り始め、懐かしき記憶を遡った。

…

「要、暇やったらオレとバスケしないか？」

今から3年ほど前、バスケクラブのコーチに指摘されたことに拗ね、クラブ活動を一週間ほどズル休みしていた要は、ある日、兄からバスケツトをしようと誘われたのだ。

「え？でも……。」

「どうせ暇を持て余してるんやろ？」

退屈な時間をただボクツと過ごしとるくらいなら、何でもいいから体動かした方がええと思うぞ？

それが例え『嫌いなこと』でもな。」

「っ……。」

嫌いなこと。それを聞いた時、心の中に強い反発心が生まれたが、要はすぐにそれを否定する。

バスケなんて嫌いだ。嫌いなはずなんだ。

そう自分に言い聞かせるが、心に生まれたざわつきを振り払うことが出来ない。

「……ええよ。少しだけ一緒にやっただけ。」

それならばいい、兄の誘いに乗ってみよう。

どうせ兄には勝てないだろうし、負けてしまえばバスケットが嫌いであることを再認識できるかもしれないのだから。

要は瞬と一緒に市民体育館を訪れた。

体育館に着くなり、瞬は要にバスケットボールを渡す。

「先行はお前からでええで？」

1週間ぶりに手に取るバスケットボールの感触。

それだけで要はどこか安堵の気持ちを抱いたが、すぐに首を振るった。

「じゃあ、いくよ。お兄。」

「おう。」

案の定兄は、年の離れた妹である自分を相手にも手加減をしてくれなかった。

だが一方的な負けが続けば続くほど、要の闘志はさらに燃えていった。

「くそっ！もう一回！」

「来いや！」

「もう一回！」

「何度でも来な！」

気が付けば要は時間が経つのも忘れ、兄との1on1に夢中になっていた。

「もう一回！」

「ストップ。これで終いや。直に晩飯の時間やで。」

兄の言う通り、そろそろ帰らなければ母親に叱られる時間だが、このまま負けっ放し

で引き下がっては腹の虫も収まらない。

「イヤや！勝つまでやめん！もう一回！」

「要。おふくろに怒られるで？晩飯抜きにされてもええんか？」

「む……。」

だが兄がやや強い口調で注意してきたので、要も仕方なく言う通りに従う。

「次は絶対に負けないからな。」

そして要が無意識の内に口にしてしまった『次は』と言う言葉に、瞬は含みのある笑み見せた。

「要、久しぶりのバスケットはどうやった？」

「え？」

一週間ぶりのバスケットは、兄にボロ負けした上にリベンジを断られると言う、お世辞にも楽しいとは思えない結果に終わったはずだった。

それなのに要は、この1週間では味わうことの出来なかった充実感を得ていた。

「楽しかったやろ？」

だが瞬が笑顔で告げるも、要は複雑な思いを抱かずにはいられなかった。

要にはバスケット以外にも好きな趣味が山ほどある。

その全てが楽しく思えなくなった今でも、バスケットは楽しむことができたのだ。それが要には納得出来なかった。

「なんで・・・ゲームすんのもアニメ見るのも、何も楽しくなかったはずなのに。」

「それお前が一番好きなことを我慢しとるからやろ。」

「一番・・・好きなこと？」

「そつ、いくら他に好きなことがあっても、一番好きなことに手が付けられないんじや、心を楽しむゆとりなんて出来ないわな。」

「・・・そっか。」

要は兄の言葉を噛みしめた。

自分にとつて、一番好きなことに取り組めるから、要の一日は充足している。

そんな充実感があるからこそ、要の心には他の趣味を楽しむ余裕が生まれたのだ。

考えてみれば何も難しいことではなかった。

兄とのバスケで要は改めて思い知らされたのだ。

やっぱり自分はバスケが一番好きなのだ。

だがそれでも、この一週間で爆発した悩みは解決できなかった。

「でも、ウチもう、負けるなんてイヤや。」

でも、ウチじやどう頑張ったって理沙には勝てない。

ウチは凡人、あつちは天才。一生頑張ったって勝てっこない。

そんなんでどうやって、この先バスケを楽しんでけばええの？」

そして要は、自分が抱えていた悩みを全て兄に打ち明けた。

その言葉を聞いた兄は、普段はほとんど見せることがない真剣な表情で要に問いかける。

「要は、なんでそんなに負けるのがイヤなん？」

「え？」

だが要は、兄の問いかけの意味がわからなかった。

「だって、負けたら悔しいし腹立っし、それに相手より弱いつて言われるようなもんやろ？」

そんなん、バカにされるようなもんやないか。

ウチは、誰からも弱いだなんて思われたくないよ。」

負けていいことなんて何も無いはずだ。

気分は最悪になるし、見たくもない実力の差、才能の差を見せつけられる。

少なくとも、要にとつて負けるとはそうゆうものだ。

でも兄は違うのだろうか？

「なるほど。」

確かに俺だって、勝つのと負けるのとどっちがええ？つて聞かれたら勝つ方がええつてし、負けたら嫌な気分になるは悔しいつて思うな。

でもお前は、負けるつちゆうことをちよつとネガティブに捉え過ぎやで。」

「え？どうゆうこと？」

負けても良いつて思えることなんてあんの？」

「俺から言えるのはここまでや。それにお前はもう気づいとるはずや。」

「ウチが・・・気づいて？」

「今日俺にボロ負けした時、お前は何を思ってたか。」

それを思い出してみ？」

その時はまだ、要は兄の思いを理解することは出来なかった。

その後家に帰り、要は両親の前でクラブ活動をズル休みをしていたことを謝罪した。

だが両親からは、ズル休みしたことよりも、黙っていたことについて叱られた。

それにクラブ活動を再開したことで激励をもらえた。拳骨の1つでも覚悟していた要は少し拍子抜けしたが、それだけ両親にも心配かけていたのかもしれないと、自分の身勝手な行いを反省する。

そしてクラブ活動を再開した最初の日に、兄から再び助言を受けた。

「要、負けるのは嫌かもしれないけど、ちよつと我慢してまた理沙ちゃんにぶつかってみ？」

「・・・わかった。」

兄の助言通り、要は負ける悔しさを噛みしめて理沙に挑み続けた。

そしてその中で、かつて兄に挑んだ時と同じように、負ける度にどうすれば勝てるか？どこを改善すれば良いかを模索していることに気づいたのだ。

そして要は初めて、兄の言葉の意味を理解することが出来た。

負けるというのは勝つこと以上に、自分の欠点、改善点を見つけることができる。

だから負け続けることになっても、自分は成長していくことができるのだと。

「そっか、見つけられたんやな。」

負けることの『良い意味』を。」

その日、要は瞬に自分が見つけた負けることの意味を話した。

「でも、後どれだけ負けたら、理沙に勝つことが出来るんやろ・・・。」

だが意味は理解できても気持ちを変えることは出来ない。

負けると悔しいと思うことに変わりはないのだ。

理沙に勝てるようになるまでに、自分は後どれくらい、嫌な思いをしなければいけな

いのだろう。

「さあな。」

1000回か10000回か、そんなもの、勝つ日が来なきやわからんよ。」

1000も10000も嫌な思いをしなくてはいけないと思うと、いつかこの前みたい
に、またバスケットを嫌になり、辞めたいと思ってしまうかもしれない。

そう言えば兄は同じ悩みを抱えたことはないのだろうか？

「ねえ、お兄はバスケット辞めたいって思ったことない？」

「ないよ。」

返つて来たのは余りにも迷いのない言葉だった。

「俺には夢があるからな。」

その言葉に、要はまだ小学生に入る前の頃、兄と交わした約束を思い出した。

おにーちゃんの、しょーらいのゆめはなに？

おれのしょうらいのゆめは、にほんいちのバスケットマンになることだ！

かなめは、しょうらいのゆめは？

ウチはね、おにーちゃんといっしょがいい！

だからウチも、にほんいちのバスケットマンになるの！

「日本一のバスケットマンになる、だったっけ？」

「おっよく覚えとったな。」

嫌だつて思う時があれば、いつもそれを思い出すようにしてんねん。

ここで止まったら、俺の夢は叶わんよつて、自分に言い聞かせている。だから今まで辞めようつて思ったことはないよ。

俺は俺の夢を諦めるつもりはないからな。」

撒けることで自分が抱く思いを、兄は夢を叶えたい一心で振り払ってきたのだろう。絶対に叶えたい夢を持つことが、今の兄の強さを支えているのだ。

「夢……か。」

「要の将来の夢は、おにーちゃんといっしょがいい。だったか？」

すると兄が意地悪な笑みを浮かべた。

「お兄も覚えとるやん、というツツコミが頭に浮かぶも、それ以上にあんな恥ずかしい言葉を復唱されてしまい、要は慌てる。」

「まっ真に受けんでよ！そんな子供の時のこと！」

「ははは、別にええやん、それでも。」

「え？」

「日本一の選手ってことは、理沙ちゃんよりも強い選手ってことやろ？」

「それは……そうだろうけど。理沙にも勝てんのに日本一って……。」

日本一の選手になると言う将来を思い描いたことはあるが、身近に理沙という、自分よりも遥かに優れた能力を持つ子がいるにも関わらず、そんな将来の夢を持つことは余りに無謀と言わざるを得なかった。

「それなら、こうゆうのはどうだ要？」

俺は絶対に、どんな苦難も乗り越えて日本一の選手になって見せる。

そう約束する。

だから要も、嫌なことがあっても立ち止まらんで、前に進んでみ？」

俺が苦難も悩みも乗り越えられることを証明してやるから要も諦めずにバスケットを続けて見ろ。

言葉の内に込められた兄の真意を汲み取った要だが、そんな一方的な『約束』なんて不公平だ。

「だったら、ウチも約束するよ。」

ウチも必ず、日本一の選手になって見せる。」

「要……。」

「だから、お兄も約束破ったらあかんよ？」

すると兄は、自分の頭の上に手を置き優しく撫でてくれた。

兄の温もりを得た要は、自分の心を縛り付けていた気持ちが解けていくのを感じた。

「当り前やろ。必ず守るから、お前も約束守れよ？」

「うん！」

兄と交わした約束。

2人で日本一の選手になること。

その約束は要にバスケットを続けていく強さをくれた。

そして負けることさえも楽しめる余裕が生まれ始めたのだ。

負けることで確かな成長を実感できる。

それは兄との約束に近づくことを指し示しているから。

：

「負けることも成長に繋がる。」

お兄のおかげでウチは、そんな風に思えるようになったの。」

「そうか・・・素敵なお兄さんだな。」

「・・・うん。ウチにとつて、とても大切な人。」

あの時お兄がウチに気づかせてくれなかったら、ウチ、きっと後悔してたと思う。」

「ふふつ、嬉しいよ。君の素直な言葉を聞くことが出来て。」

「え・・・？」

そこまで言われて要は、ベリイの前で兄への想いまで打ち明けていたことに気づいた。

「や……その……。」

語る必要のないことまで話してしまった要は、恥ずかしさで俯いてしまった。

そんな要を見たベリイは思わず微笑む。

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。大丈夫、今の言葉は誰にも言わないよ。」

「雛子にも言うたらあかんよ?」

「わかつてるって。」

でも、なるほど、それが君の信条の原点か。」

要の話聞いて納得するベリイ。

要もまた、話の中で自分の気持ちに整理していくにつれ、なぜ健太郎の問いに答えられなかったかをようやく知ることが出来た。

「でもウチの場合、ウチ個人の問題やから気楽だけど、健太郎は卒業した先輩たちのプレッシャーから、負けられないところにまで自分を追い込んでいる。」

そんなやつに、負けても楽しいと思えばええなんて、気軽には言えんよね。」

健太郎が背負う夢ノ宮中学男子野球部の看板は、去年の1年間、先輩たちが築き上げた実績が積み重ねられている。

それなりに有名校となってしまうた今、練習試合とは言え負ければ他校にその話が広まってしまいうだろう。

「君は、優しいな。」

「はーっ。」

「君は本気で、健太郎という少年の力になりたいと思ってる。」

だから今、悩んでいるんだろ？

不用意な言葉は彼のプレッシャーを強めてしまうかもしれないから慎重に言葉を選んでる。

優しさがなければ、そんな悩み方は出来ないよ。」

「でも、結局何を言ってるのかわかってないし、それにウチ、頭使うの苦手やし……。」
「思いつかないのなら、それでもいいよ。」

中途半端な思いで彼を思い詰めてしまうくらいなら、いつそ何も言わない方がいい。

それも一つの優しさだと俺は思うよ。」

「……その方がよっぽど中途半端やん。」

ウチはそんな絶対イヤだ。」

「君ならそう言うと思っただよ。」

それなら存分に悩むといいさ。

悩んで悩んで悩みぬいて見つけた言葉を、彼に伝えてあげればいい。」

せっかくなにかけてくれた言葉をつっぱねるような要の物言いにも、ベリイは気を悪

くすることなく自分を案じてくれた。

要はそんなベリイに心から感謝する。

「ベリイ……ありがとう。」

「少しは君の力になれたかな？」

だとしたらパートナー冥利に尽きるといふものだ。」

「また妙に難しい言葉知つとるな。」

「故事ことわざの類なら、要よりも詳しい自信があるよ。」

「ふふつ、言つてくれるやん。」

ベリイにしては珍しく、要をからかうような言葉だ。

だが要はそんなベリイとのやり取りにどこか安心を覚えるのだった。

∴

翌週の月曜日。

前日の夜まで健太郎を励ます言葉を考えていた要だったが、結局良い言葉が思いつか

ず、さらに今日の部活でスターティングメンバーの選定が終わることによる緊張から中々寝付けずに寝坊してしまった。

学校に着いたのは予冷が鳴る2分前。危うく遅刻するところだった。

「ふいふ、あつふないあふない。」

「要、遅刻ギリギリ。」

席に着くや否や、横から雛子の叱りが飛ぶ。

「雛子。家まで起こしに来てくれても良かったんよ?」

「バカなこと言わないでよ。私まで遅刻しちゃうじゃない。」

そしていつも通りのやり取りを終えた要はふと後ろの席に目をやると。

「……ん?」

何やら非常に上機嫌な蛍の姿が目映った。

緩んだ頬に両手をつけ、眩しい笑顔を見せている。

「かなめちゃん、おはよ。」

「おっおはよう。」

そしてその幼い声もいつも以上に甘ったるかった。

「……何かあったの?」

「昨日、リリンちゃんと会ったんですって。」

「あゝ。」

それでこの上機嫌かと、要は妙に納得してしまう。

「えへへ、きのうはね、このまえとちがって、にちようびだったから、いゝつぱいおはなしできたんだ。

あとねあとね、ふたりでこうえんをおさんぽしたり・・・。」

話してくれとも言っていないのに、昨日リリンと過ごした出来事を甘い声で語り始める
蛍。

要は心の中で大きなため息を吐く。

日頃男子つぼいだの何だの散々言われているが、そんな自分も年頃の女の子だ。

花も恥じらうなんとやら、色恋沙汰には興味津々なわけである。

これがもし本当に同級生からの恋愛話であれば喜んで食いついていたところだが、何が悲しくて女の子同士の子ロケ話を聞かされにやならんのだ。

「皆、席につけ。」

そんなことを考えている内に担任の長谷川先生が教室へ入って来た。

「蛍、先生来たよ。」

「あつホントだ。」

お互い席につく蛍と要。

だが授業中、後ろから終始甘い雰囲気、背中がむず痒くなった要は、なかなか授業に集中できなかったのだった。

：

その日の授業が終わり、放課後を迎えた要は、いつも以上に緊張した面立ちで部活の準備を始めた。

「要、部活へ行く前にちよつといいかしら？」

「なに、雛子？」

「蛭ちゃんもいい？」

「え？いいけど。」

2人に声をかけた雛子は、交互に顔を見る。

「今週末からゴールデンウィークだけど、2人とも今週の土日、予定はある？」

「えと・・・わたしはとくにないよ。」

「ウチも、今んとこ何の予定もない。」

「良かった。」

私の両親がね、ゴールデンウィークを使って久しぶりに夫婦水入らずの旅行へ行こうって話をしてたの。

その日程が今週の土日で、私のおばあちゃんが、2人きりと言うのも寂しいから、友達を呼んでみたらって言ってくれたの。」

そう言うと、雛子は蛍へ微笑みかけた。

「蛍ちゃん、前に言ってたよね？」

「ゴールデンウィーク中にパジャマパーティーをしたって。」

「えっ……おぼえててくれたの？」

まさか雛子はあの時蛍がマシンガントークで語った夢想の数々を全て記憶しているのだろうか？

(……雛子ならあり得るな。)

蛍のことを溺愛している彼女ならではの記憶力と言える。

「勿論よ。」

言っただでしょ？一緒に少しずつ叶えていこうって。

「蛍ちゃん、今週の土日、私のお家でパジャマパーティーしましょう？要もいいよね？」

「意義なくし。」

要としても願ってもないことだ。

思えば蛭とはプリキュア作戦会議で自分の家に招いたことはあっても、遊ぶために家へ呼んだことはない。

今回の会場は雛子の家となるが、プライベートで一緒に遊ぶことに変わりないし、要は蛭のことを友達としてもつと良く知りたいたいと思っっている。

そしてお泊まり会となれば、単純に一緒にいられる時間も多くなるし、寝食という、普段家に招いて遊ぶだけでは一緒にいられない時間も共有できるので。

まだ見ぬ蛭の一面を知る機会が増える良い機会である。

そしてそんな細かな考えを差し置いても、一晩中友達と一緒に遊べるというだけで、要にとつては有難い話であるのだ。

「ホントに……いいの……?」

だが蛭は目を大きく見開いて、口元を震わせていた。

「ええ、勿論いいけど……?」

そんな蛭の様子に戸惑う雛子。すると

「つーありがとうー! ひなこちゃん!!」

感極まった蛭が、雛子へ勢いよく抱きついてきたのだ。

「つ!? ひええあ!」

いきなり蛭に抱きつかれた雛子は、裏返った声で珍妙な叫びをあげる。

「わたし！とつてもうれしいの!!みんなで、パジャマパーティーできるんだね!!」

だがそんな雛子のことなどお構いなしに、蛭は雛子を抱く力をさらに強めた。

身長差的に、蛭の頭が雛子の胸の位置に来るため、雛子の胸に顔を埋める構図になる。

「ええええとどどどどういたしまして!?!」

なぜか疑問符で返答するまでに動揺をあらわにする雛子。

蛭に抱きつかれたくらいでなぜそこまで動揺するのか？

と普通は思うかもしれないが、要はその理由を知っている。

自分の『本性』を露わにすまいと必死に抗っているようだ。

「かなめちゃんも、ありがとう!!」

「どっどっどういたしまして。」

「あはっ！たのしみだな！なにもつてこうかな!?こうゆうときの定番って、やつぱりト

ランプだよね！あつわたし！またおかしつくつてもつてくから！みんなでいっしょに

たべよ!!」

「そつそだね。」

「やった！じゃあわたし！おかいものあるから、これでかえるね！ひなこちゃん！ほん

とつにありがとう!!」

「うっうん、また明日ね……。」

「うん！またあした!!かなめちゃんもバイバーイ!!」

「ばっ、ばいばーい。」

絶好調に上機嫌な蛭は、そのままのテンションで駆け足に学校を去っていくのだった。

「……ふう。」

一方雛子は、安堵の息を一つ吐き、昂ぶった心を落ち着かせている。

そして要には見えた。

雛子の顔に盛大に書いてある、彼女の心境が。

なんとか堪えることができたわ……。

蛭の前では『まだ』隠せている雛子の『本性』を知る要は一抹の不安を覚える。

(……こんなんでお泊まりなんかしてホントに大丈夫なんやろか……。)

何にしても今週末、ゴールデンウィーク最初の土日に、プリキュアパジャマパーティーが開催されることになったのだった。

:

女子バスケット部の活動は、今日も2チームに分かれての模擬試合が行われていた。

「今日が最終審査日だからな。皆いつも以上に気合を入れてけよ！」

薫からの言葉を聞きながら、要はゼツケンを受け取る。

「げげっ！要、今日は理沙とチームなの!？」

すると未来から驚愕の声があがった。

「あれ？ホントだ。初めてやない？ウチらがチーム組むの。」

「そうだったかしら？」

対して理沙は冷静に返す。

「要の裏切り者！2人で私たちをボッコボコにするつもりでしょ！」

漫画のワルモノが無抵抗な一般市民に手をあげるみたいに悦に浸るつもりね！」

「いやそう言われても・・・チーム決めたのキャプテンたちやし。」

「薫先輩！なんであの2人組ませたんですか!？」

普段のおちやらけた態度はどこへやら。

未来は真剣な声色と怯えた表情で薫に訴えて来た。

よく見ると未来のチームメイトも皆、彼女と同じ表情をしている。

「腰の抜けたセリフを言うんじゃないよ！」

毎回要か理沙を頼りに出来ると思ったら大間違いだよ！

たまには自分で根性見せろってんだ!!」

「ひいつー！ イツイエッサー!!」

だがそんな未来を薫は体育館中に響き渡るような大声で一喝した。

その鬼と見紛う迫力を前に、未来たちのチームは目に涙を浮かべながらポジションにつく。

そんな様子を一瞥した要は、理沙の方を振り向いた。

「一緒にチーム組むなんて、小学6年のクラブ活動以来かな？」

「どうだったかしら？ 覚えてないわ。」

「まっ、何にしても今日はよろしくな。期待してるで？」

要は理沙に手を差し出す。

「・・・そっちこそね。」

理沙も要の手を取り、2人は固い握手を交わすのだった。

:

隣に立つ菜々子のホイッスルを合図に、模擬試合が開始された。

薫はレフエリーをしながら、試合の内容を観察する。

予想通りだが、試合の内容は要たちのチームが圧倒していた。

スタンドプレーをすれば右に出る者がいない理沙と、チームメイトの長所を最大限に引き出すことが出来る要。

未来の抗議にもあつたように、この2人が同じチームにいると言うのは、チーム分けのバランスを大きく傾けていた。

だがそれでも、薫は一度、要と理沙を同じチームにしたかったのだ。

それは薫だけでなく、菜々子と夕美も同様である。

「理沙！」

要から理沙にパスが渡る。

パスを受け取った理沙はそのままシュートを決める。

「要、ちゃんと協力できているじゃない。」

「そうだな。」

要が理沙に対して強いライバル心を抱いているのは、自他ともに承知のことだ。

理沙への対抗心から彼女には活躍させまいとパスを回さないのではと危惧していたが、要にそんな素振りはなく、理沙にシュートチャンスがあれば、積極的にパスを回していた。

試合の中で要は、理沙への対抗心を見せようとはせず、むしろいつものように彼女の長所を最大限に活かそうと立ち回っている。

「しかもあの子、ちゃんと他の仲間にも気を配っている。」

夕美が重ねて要を評価する。

要は理沙だけでなく、味方全員に行き届くようにボールを回し、全員の長所を活用しながらゲームを組み立てていた。

これまで理沙とチームを組んだメンバーは、積極的に理沙にボールを回し、理沙のスタンドプレーに任せるスタンスを取っていた。

だが要は違う。理沙一人に任せて勝ちに行くのではなく、あくまでも5人のチームで勝ちに行くというムードを作っている。

それが理沙以外のチームメイトのモチベーションも高めており、全員が勝つために精を尽くしているのだ。

「よっし、みんな！一気にかたをつけるよ！」

「「おおーっ!!!」」

「ひい〜！要の鬼！悪魔！」

対して実力のみならず勢いでも負けてしまった未来のチームは、要と理沙のタッグを前に終始震えていた。

そんな試合の内容を見ながら、隣に立つ菜々子が声をかけてくる。

「薫、あなたの不安は杞憂に終わったみたいね。」

「・・・ああ。」

薫と菜々子は、要の様子を見て微笑む。

個人の實力で秀でた理沙を、練習試合の選抜メンバーに抜擢することは最初から決まっていた。

だが理沙と『同じチーム』に要を加えたらどうなるか？

ポイントガードと言うゲームを組み立てていくポジションであるのをいいことに、理沙をないがしろにしたゲームを作らないか、あるいは理沙に期待するあまり、彼女以外のチームメイトを蚊帳の外に置いてムードを悪くしないか。

それが薫が抱いていた懸念事項だった。

そう、この一方的な試合展開を予想できてでも、理沙と要を同じチームに入れたのは、

要のポイントガードとしての采配を裁断するためのものなのだ。

そして彼女は見事に、薫の抱えていた懸念事項を全て払拭してくれた。

「今のあの子なら、任せることが出来そうだわ。」

そして夕美の言葉に、薫と菜々子は静かに頷くのだった。

：

夢ノ宮市へと降り立ったサブナツクは、腕を組みながら宙を浮いている。

「・・・思いついたぞ。我らに相応しいチーム名を。」

正確な時間など数えてはいないが、長いこと頭を使い続けていた気がする。

最初から期待していなかったとはいえ、あの2人が知恵を貸してくれたらここまで悩むことはなかったのだが、時間をかけた分、自信のあるチーム名が思いついたのだ。

それはこれ以上ないくらい、自分たちに相応しいものだろう。

「やつらが、希望の光、ホープライトの名の下に集うのであれば、我らは永久の闇、ダークネスだ！」

闇の世界でもなければまだ闇の牢獄も展開していないはずなのになぜかサブナツクの周辺は物音1つしなくなつた。

この場にリリスとダンタリアがいれば、静寂を破つてバカにバカを重ねた罵詈雑言を飛ばしていただろうが、生憎と2人は不在。

その代わりにサブナツクの背に映る夕焼けを背景にカラスの鳴き声が木霊した。

それからさらに間を置き、サブナツクは自分が思いついたチーム名が、自分たちの集団を表す言葉と同じであることを宣言してから気づき自ら沈黙を破つた。

「……ふつ、元々我らにチーム名など不要だつたと言うことか。」

そして何の解決にもなっていないどころかチーム名の必要性を自らの手で完全否定するという斜め上を登り切り下り坂を転がり落ちるような結論を出したサブナツクは、1人満足気に自己完結しながら闇の牢獄を展開するのだった。

：

部活が終わり、部員たちが帰り支度を始めた中でも、健太郎は浮かない顔のままグラウンドに立っていた。

「いよいよ今週末……か。」

去年の3年生は高い実力と高度なチームワークを武器に、地区大会の準決勝まで勝ち進んだ。

健太郎だけでなく当時の1年、2年生はみんな3年生に憧れを持って部活動に打ち込んでいた。

いつか彼らと同じように、レギュラーとして良いチームを築き、試合に出て勝ちに行きたいと。

そして健太郎はようやく、練習試合とは言え憧れの先輩たちと同じ場所まで辿りつけたのだ。

それなのにいざ実現すると、嬉しさよりもプレッシャーの方が大きかった。

「上田、あんまり1人でしよい込むなよ。」

試合はお前1人でやるわけじゃない。

俺たちだっぴ一緒いるんだから。」

「みんな。」

部活仲間からの励ましに、健太郎は少しだけ心を落ち着けるが、それでも内に巢食う黒い影が晴れたわけではない。

もしも自分のミスが原因で負け、先輩が築き上げた夢ノ宮中学校野球部の評価を落としてしまったらと、つい不安に思ってしまう。その時、

「え．．．？」

健太郎は目の前の出来事に目を疑った。

突然、周りにいたはずの仲間が全員姿を消したのだ。

いや、野球部だけではない。

グラウンドにいた生徒たちが全員何の前触れもなく姿を消した。

「なんだよこれ．．．なにが。」

どうせ勝てるわけがないよ。

「っ!?!俺の．．．声?」

俺の力が先輩たちに及んでるわけじゃないじゃないか。

無様に負けて、先輩たちの顔に泥を塗るだけ。

他校の生徒からは笑いものにされるだろうな。

自分の声がどんどん拡がっていく。

言葉の数を増し、声を大きくし、健太郎の脳内を埋め尽くす。

「やめろ……やめろ!!俺はそんなこと、考えてない!!」

こんな面倒なことを背負うためにレギュラーなりたかったわけじゃないのに、去年、先輩たちが活躍しなければこんなことにはならなかつたんだ。

「違うー俺はそんなこと考えていないー」

だったらなんで、こんなプレッシャーを感じなきやならないんだ。

望んでもないことを押し付けられていい迷惑してんだろ。

先輩たちのことは尊敬していたはずだ。憧れていたはずだ。迷惑だと思ったことはない。

それなのに頭に響く声を否定することができずにいる。

キャプテンも何でこんなことを俺に押し付けてくれたよな。

こんなことなら、レギュラーなんかを選ばれるんじゃないやなかった。

そしてずっと、心の中に押しとどめていた声が響く。

「うわあああああああ!!!」

やがて健太郎は絶叫と共に、全身から黒の瘴気を放出するのだった。

∴

部活動を終え、制服に着替え終わり帰ろうとした矢先、要は闇の牢獄が展開されるのを感じ取る。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

急いでスパークパクトを召喚し、変身する要。

「世界を駆ける蒼き雷光、キュアスパーク！」

そして絶望の闇を探知すると、かなり身近なところから気配が感じられた。「ちよつと待つて、この場所つて！」

夢ノ宮中学校の敷地内、それもグラウンドの方だ。

今日のこの時間、グラウンドは男子野球部が使っていたはずだ。

要は嫌な予感がした。

今この時間にいる生徒の中で大きな悩みと不安を抱えている人に心当たりがあるからだ。

「キュアスパーク！」

すると図書館のある方から、既にキュアプリズムへと変身している雛子が姿を見せた。

蛭は今頃、夕飯の準備のために家にいるのだろう。

それならば彼女がここに駆け付けるまでの間、2人で戦うしかない。

キュアプリズムと合流した要は、急いでグラウンドの方へ走り出した。

グラウンドへ訪れると、そこにはサブナックの姿があった。

そして横には黒い瘴気に覆われた健太郎の姿があった。

「現れたなプリキュア。」

「健太郎!!」

不幸にも嫌な予感が的中してしまった。

だがそんな要のことなど気にかけず、サブナックは右手に絶望の闇を集中させる。
「ダークネスが行動隊長、サブナックの名に置いて命ずる。」

ソルダークよ、世界を闇で食い尽くせ!」

サブナックの掛け声と共に、健太郎の絶望を素材としたソルダークが姿を現す。

「ガアアアアアアアアアア!!」

そして産声をあげるソルダークの前に、要は悔しさから唇を噛みしめた。

(ウチが……もつと早く、健太郎に声をかけていれば……こんなことには)

かけてあげる言葉が思いつかなかったから。

自分の部活動のことで手一杯だったから。言い訳なんていくらでも思いつくが、それを口にしたところで意味がない。

健太郎が悩みを抱えているのを知っていたのに、力になることが出来なかった。

その現実が要の心に重くのしかかる。

「キュアスパーク!」

だがキュアプリズムの声を聞き、要は我に返る。

そしてソルダークが雄叫びをあげながら、こちらへ向かってきた。

要は罪悪感から押し潰されそうになった自分の心を奮い立たせる。

そうだ。今すべきことは後悔することではない。

ソルダークを浄化して健太郎を闇の牢獄から助け出すことだ。

後悔するのはその後でいくらでもすればいい。

「はああっ!」

要はソルダークの元へ飛び立ち、電気を纏ったパンチを繰り出そうとするが、

「なっ。」

ソルダークの目前まで迫った時、急に地面に片膝をついた。

「なにこれ……? 体が急に重く、」

思うように体が動かない要に対して、ソルダークが拳を振り下ろす。

「危ない!」

要の目の前にキュアプリズムの盾が展開されるが、盾はソルダークの拳を受け止める寸前、地面に引つ張られるように落ちていった。

「えっ!?!」

突然の状況にキュアプリズムは驚き、盾を失った要にソルダークの拳が直撃する。

「うわあっ!」

「キュアスパーク！大丈夫!？」

「いったた・・・。」

慌てて要の元へと駆け寄ったキュアプリズムは、治癒の光を当ててダメージを回復させる。

「あのソルダークに近づいた瞬間、急に体が重くなった。」

「私の盾も、突然地面に引き寄せられて・・・まさか。」

「重力?！」

要とキュアプリズムの間で答えが合致する。

恐らくあのソルダーク周辺の重力だけが、通常よりも強くなっているのだろう。

その証拠にソルダークの足元だけが地面にめり込んでいる。

これまでのソルダークも変わらず巨体だったが、足が地面にめり込むことはなかった。

そして要もキュアプリズムも、今は特に体が重くない。

僅かに距離を開けるだけで高重力の影響がなくなっているのだ。

「離れてさえいれば、やつの力の影響を受けることはない。でも、」

「それでは、こちらから打つ手がないわ。」

自分もキュアプリズムも、攻撃手段と言えば徒手空拳のみだ。

近寄る以外に攻撃する術はない。

だが近寄れば高重力の影響で立つことすらままならない。

そしてどうすればいいのか悩む暇を、ダークネスは与えてくれなかった。「打つ手がないようだな。ならば今日こそ終わりにしてやる。」

サブナックとソルダークが同時に攻撃を仕掛けてくる。

「考えても仕方がない！ キュアプリズム！ サブナックは任せたよ！」

「任せたって、まさか！」

「ソルダークはウチが引き受ける！」

自分の方がパワーもスピードもキュアプリズムより上だ。

力を振り絞れば、高重力下でもギリギリ動くことは出来るだろう。

キュアプリズムもそれがわかってしているためか、止めには入らなかったが、その表情は不安に満ちていた。

「そう思い通りにはいかせるか。」

だがサブナックがそうはさせまいと、自分の前に踊り出る、その時、

「たあああつ！」

背後からキュアシャインが飛び出し、サブナックに体当たりをしてきた。

「キュアシャイン！ ナイスタイミング！」

「みんな！ おそくなつてごめん！」

「小癩な。」

サブナツクがキュアシャインに拳を振るおうとする。

「させない！」

キュアプリズムがキュアシャインをバリアで守る。

「キュアシャイン！2人でサブナツクを足止めよ！」

キュアスパーク！ソルダークはあなたに任せたわ！」

「はい！」

「おっしー！任せろ！」

キュアシャインを加え、3人揃ったホープライトプリキュアは、いつものように息を合わせてダークネスへと立ち向かうのだった。

跳躍し地上へと降りるソルダークの一撃をかわし、要は反撃に出る。

だが目前で高重力下に入ってしまったスピードを削られる。

「ちっ。」

速度を失った拳では満足なダメージを与えられず、要は一度後退しようとするが、ソルダークが拳を振り下ろして来た。

要はその拳に目掛けてパンチで反撃するが、高重力下で振り下ろされた拳を抑えるこ

とが出来なかった。

重さに耐えられなくなった要はソルダークの一撃を受け、地面へと倒れ込む。

「くっ……。」

何とか力を入れ、その場から立ち上がるが、ソルダークはすかさず両手の拳を合わせて振り下ろした。

要はそれを両手で受け止めるが、徐々に足元がめり込み始める。

「健太郎……。」

今受けている重圧（プレッシャー）。

要はそれが健太郎が今背負っている重さではないかと思えた。

彼は選抜メンバーに選ばれた時から、ずっとこの重みに耐えていたのだ。

正直、重いんだよ。先輩たちの後釜につくつてのが……。

もしも次の練習試合に負けてしまったら、卒業した先輩たちの顔に泥を塗ってしまうんじゃないのかって。

要は負けることが嫌だって思ったことはあるか？

あの時の健太郎の言葉を、浮かない顔を思い出す。

彼の感じていた重圧、彼の力になれなかった自分への不甲斐なさ。

助けられなかった罪悪感、プリキユアとしての使命。様々な思考が要の中で駆け回り、ついに片膝をついてしまう。

その時、

悩んで悩んで悩みぬいて見つけた言葉を、彼に伝えてあげればいい。

ベリイに言われた言葉が脳裏を過る。

(ごめん、ベリイ。結局言葉見つけられなかったよ。だから……せめて。)

「……こんなもんに負けてんじゃないよ。健太郎。」

重圧に押しつぶされた健太郎を気遣うのも、傷つけないように言葉を選ぶのももう止めた。

要は心のままに思ったことを吐き出す。

「先輩の後釜が重いか、負けたら泥を塗るかもしれないとか、そんなつまらないことで、自分を押し潰してんじゃないよ!!」

直後、要の体から青白い光が発される。

光はやがて電気へと形を変え要の全身を纏い始める。

「ガアアアア!!」

だがソルダークの方も重力をさらに強めて来た。

それでも要は怯まず地についた片膝を少しずつ上げ始める。

「負けるのが嫌? そんなん当たり前やん!

誰だって負けたくないよ!

でもな、負けることを嫌がつてばかりじゃ、勝ちにいくことだって出来ないんだよ!!」

そして要は高重力を力任せに振り切り、ソルダークの拳を持ち上げた。

「あんたの悩みは、勝たなきゃ晴れないんだ!

だったら勝ちに行けばええだけやろ!

こんなプレッシャーなんかには負けんな!

この程度の重さ、勝ちたいて思いで跳ね除けるお!!」

要はソルダークの両手を跳ね飛ばす。

そしてバランスを崩したソルダークに全身全霊を込めたパンチを繰り出した。

「ガアアアアアアア!!」

その一撃を受けたソルダークが大きくよろめき後退する。その時、

「グッ、ガアアア・・・。」

「え?」

「ガアアアアアア!!」

ソルダークの動きが止まり、天を仰いで叫び出した。

それと同時に要を圧していたはずの高重力が突然解除されたのだ。

「なに?」

ソルダークの異変に気付いたサブナックがこちらの方を振り向く。

「もしかして・・・健太郎のやつ。」

自分の絶望に抗っているのだろうか。

そして力を失ったソルダークは反撃する様子を見せない。

力なく一歩ずつ後ずさるその姿は、まるで自分を浄化してほしいと懇願しているようだった。

「・・・待つてな健太郎。今助ける。光よ、走れ!スパークバトン!」

スパークバトンを振り回し、手に雷を集中させる。

「くっ。」

サブナックが駆け付けようとするが、キュアシャインとキュアプリズムが前に立ちはだかる。

「いかせない!」

「キュアスパークの邪魔はさせないから!」

「プリキュア！スパークリング・プラスター！」

2人の足止めが功を成し、要は無抵抗のソルダークに浄化技を当てる。

「ガアアアアア！」

そして巨大な雷の中、ソルダークは断末魔と共に消滅するのだった。

「くっ、チーム名以外にも原因があると言うのか。」

何の事だかさっぱりわからない捨て台詞を残しサブナックは姿を消すのだった。

：

ソルダークの浄化に成功すると、健太郎を纏っていた瘴気は消えていった。

同時に空を覆う闇も晴れていく。

「ちよつと待って、ここにいるとグラウンドにいる人たちに姿を見られるんじゃない？」

「あつ……。」

キュアプリズムの警告と共に、3人は急いで物陰に隠れた。

すると闇の牢獄が消え去り、消えていった人々が徐々に姿を現し始める。

危うくプリキュアの姿が大勢の生徒の前で見られるところだった。

「危なかった……。」

安堵する要は、視線を野球部の方へ向ける。

すると横たわっていた健太郎が体を起こし始めた。

「上田！」

部活仲間が慌てて健太郎の元へ駆けつける。

「あれ……みんな？」

「大丈夫か！ 具合でも悪いのか!？」

「……いや、大丈夫だ。悪いな心配かけて。」

「……。」

そこで会話が途切れてしまった。

みんな健太郎が抱えている悩みを知っているが、自分と同じようにかける言葉が見つからないのだろう。

「……ちよつと行ってくる。」

「要?！」

絶望の化身であるソルダークを浄化しても、本人の抱えている悩みが消えるわけではない。

要は変身を解いて、健太郎の元へ駆け寄るのだった。

「健太郎。」

「森久保……?」

突然声をかけられた健太郎は、怪訝そうな表情でこちらを見る。

要は一呼吸おく。この言葉で健太郎の悩みが解決するとは思えない。

それでも彼に伝えたい言葉があるのだ。

ソルダークを生み出してしまった彼を救う為とか、プリキュアとして闇の牢獄に囚われた人を助けたいとかではない。

ただ、上田 健太郎の友人の1人、森久保 要として友達を助けたいだけ。

要を突き動かしているのは、その感情だけだった。

「……前に聞いたよな? 負けるのが嫌だって思ったことないかって。」

「え?」

「そりゃ、あるよ。」

今だつてしょっちゅうあるし、健太郎が、負けたら先輩の実績を傷つけてしまうんじゃないかって、不安に思う気持ちもわかるよ。

でもさ、もう少し自分の事信じてみたら?」

「俺のことを？」

「健太郎は、どんな気持ちで去年の一年間頑張つて来たの？」

絶対にレギュラーになつてやるつて、俺ならなれるんだつて思つてたんじゃないの？」

「それは……。」

「そうだよ上田。」

すると、部活仲間が声をかけてきた。

「お前、これまでですげえ頑張つてきたじゃん。」

一緒に見てた俺たちが保証するよ。」

「お前のそんな頑張りと実力が認められたから、キャプテンやコーチだつてお前をレギュラーに選んだんだよ。」

お前は、去年の先輩たちにも負けてないつてことだよ。」

「みんな……。」

仲間たちの声援を受けて、健太郎の表情が少しづつ晴れて来た。

そんな健太郎に要は声援の言葉を重ねる。

「皆の言う通りだよ、健太郎。」

健太郎は実力を認められたから、先輩たちの後を継いだの。

だから、負けたらどうしようじゃなくて、俺なら勝てるって自信、持ってもええと思うよ?」

「俺なら……勝てる……。。」

「俺たちなら、だろ?」

「そうさ、皆で力を合わせて、次の練習試合勝ちに行こうぜ!」

「みんな……ああ、そうだな!」

要の、仲間の言葉を受けた健太郎はいつもの明るい調子を取り戻した。

「よし、次の練習試合、俺たちは先輩にだって負けてないってことを、勝って証明してやろうぜ!」

「おおーっ!!!」

「なんで森久保まで一緒にノッてるんだよ?」

健太郎が苦笑しながらツツコミを入れる。

その様子は、既に悩みを吹っ切っているように見えた。

「いやあ、ウチ空気読めるから?」

「なんだよそれ。……森久保。」

「ん?」

「……ありがとう。」

「……へへっ、どういたしまして。」

要は、いつもの明るさを取り戻した健太郎を見て、安堵の笑みを浮かべるのだった。

：

2日後、部活動が終わり、スターティングメンバーの発表が行われていた。

顧問の吉川先生により、3人までのメンバーが発表される。

「3番、スモールフォワード。竹田 理沙！」

4人目のメンバーに理沙が抜擢される。

残るは1人のみ、要は手に汗を握った。この日のために去年の一年間努力してきたのだ。

グラウンドでは、雛子と蛍が静かにこちらを見守っている。

「最後、1番、ポイントガード。森久保 要！」

「え……？」

「要！やったじゃん!!」

横から未来が飛びついてくる。

その様子を見た雛子と蛍も結果を悟り、雛子は微笑み、蛍は大きく手を振り出した。

「ウチが・・・スターティングメンバー・・・？」

「もく何ボケつとしてんのよ。」

「要、おめでどう。」

未来と同級生たちが称賛の言葉を送ってくれる。

「っ！ありがとうございます！！」

そして要は、吉川先生たちに深々と頭を下げてお礼を言い、未来たちとはしゃいで喜ぶのだった。

...

「かなめちゃん、おめでどう！」

「ありがとう蛍！」

雛子と蛍と並びながらの帰り道。

蛭はまるで自分のことのように喜んでくれた。

「はしゃいじやつて、スタメンつて言つても練習試合でしょ？」

その喜びは、公式試合まで取つておきなさいよ。」

実に雛子らしい言葉だが、その声は穏やかで表情は微笑んでいる。

「なに言つてるの？練習は本番のようにつてね。」

公式試合に備えた喜びの練習つてやつよ。」

「もう、何よその練習。．．．要。」

すると雛子は少し間を置いてから、改めて声をかけてきた。

だがいつもなら、真つ直ぐこちらを見るはずなのに、珍しく視線を泳がせている。

「なに？雛子？」

「．．．おめでどう。」

失礼だと思いながらも、要は一瞬自分の耳を疑った。

普段どんな言葉でも捻くれた言い回しに変えてくる雛子が、自分に対して素直におめでどう、と言つてきたのだ。

だけどそれだけに彼女の言葉は嬉しかった。

要は程なくして満面の笑顔を見せる。

「ありがとう、雛子。」

だがそんな要の返答に、雛子は意外そうな表情でこちらを見る。

「めっ珍しく、素直じゃない。」

「それ雛子が言うこと？」

そのまま雛子に返してやりたい言葉を聞き、要は小さく吹き出す。

そして雛子はこれまた珍しく顔を赤らめながら視線を外したのだ。

その様子を蛭はニコニコしながら見守っている。

「おっ、またまた奇遇やね。」

すると学校帰りの瞬とまた偶然鉢合わせた。

誰よりも先に今日のことを伝えたかった要は、駆け足で瞬の前に躍り出る。

「お兄！聞いて！今日……。」

「そのはしやぎよう、スタメンに抜擢されたな？」

だが直前で盛大に言葉の頭を折られてしまった。

「も〜！自分の口で言わせてな!!」

「はははっ、すまんすまん。おめでどう、要。」

そして次は素直に褒められてしまい、要は怒っていいのか照れていいのかわからなくなつた。

それでも兄からの言葉は嬉しく、要は静かに笑みを浮かべるのだった。

：

この一週間はさすがに色んなことがありすぎた。

スターテイングメンバー選抜への不安、健太郎の悩み、身近な人がソルダークにされ、戦わなければならなくなったこと。

心身ともに疲れ果てた要は、帰宅するや否や真っ先に自室へと向かって行った。

「おかえり、要。」

扉を開けるとベリイが出迎えてくれた。

出会った当初は、彼の『おかえり』という言葉がとてもこそばゆかったが、今は慣れて来たし、彼の『おかえり』は要の心労を回復してくれる良い薬となっていた。

「ただいま。」

「部活の方がどうだった？」

「おかげさまで、スタメンに選ばれたよ。」

すると要から報告を受けたベリイは机から立ち上がり、人の姿であるベルへと変身し

たのだ。

「え？ちよつとベリイ、じゃなかったベル。こんなところで変身して、もし見られたら。」
「大丈夫、少しだけだから。」

そう言いながらベリイは要の方に近寄り、要の頭に手を置いた。

「おめでとう要。」

「ベリイ……？」

ベルは優しく要の頭を撫で始める。

「もう……何なん突然？」

「別に、何でもないさ。」

何でもない、と言われながらも要にはベリイの心が伝わって来た。

この1週間、自分の周りで様々なことが起き、これまでにない負担がかかっていたことを見透かされたのだろう。

ベリイは自分のことをよく見てくれるし、よく理解してくれている。だから要はベリイに対してパートナーとして絶対の信頼を置いている。

同時に要は、ベリイから妙にこそばゆい安心感を得ていた。

必ず守るから、お前も約束守れよ？

(・・・お兄と同じ・・・)

かつての自分を変えてくれた、記憶の中にある兄の温もり。別にベルと兄を重ねているわけではなく、そもそもただ単に年上の男性という共通点でしかないのかもしれない。しかし、それでも要は静かにベルの胸に頭を置いた。

「要?・・・。」

そしてベルも要の心境を悟ってか、微笑みながら彼女に胸を貸すのだった。

∴

次回予告

「まちにまつたパジャマパーティーだ!」

「蛭、気合満々やね。」

「そっそだね・・・。」

「たのしみだなあ。みんなとおしゃべりしたり、トランプしたり、あとあと！みんなでごはん

たべたり！」

「ゲームも出来るし、そして夜更かしもし放題！」

「ええと・・・。」

「雛子、何かあつたん？」

「ひなこちゃん？どうしたの？」

「ほっ、蛍ちゃん実はね！私ずつと言いたかったことがあるの！」

「え？」

「蛍ちゃんって・・・どうしてそんなに可愛いのに!？」

「・・・へ?」

次回！ホープライトプリキュア 第8話！

「雛子の秘密!?!パジャマパーティーで大騒ぎ!」

希望を胸に、がんばれ、わたし

第8話

第8話・プロローグ

ゴールデンウィーク最初の土曜日。今日は雛子が提案したプリキュアパジャマパーティーの日だ。

朝食を終えた雛子は自室で一人、要と蛍が来るのを待っていた。

レモンは早朝からチェリーとベリーと一緒に、キュアブレイズを探しており、祖母は今買い物に出かけている。

話し相手もいなく特にやることもない雛子は、今朝要からかかってきた電話の内容を思い出す。

「ごめん、まだ宿題終わつたらんの。

午後までには終われると思うから、蛍にも少し遅れるって言つといて。」

昨日聞いた話によれば、要は土日の泊まり会のことを家族に話すと、母親からゴールデンウィーク中に出された宿題を全て片付けなければ遊びに出てはいけないと言われ

たようだ。

その時雛子は、要のこれまでの身の振り方を思い出して大きなため息をついた。

全くあの悪友は、普段から宿題は忘れるし、長期休暇の宿題もいつもギリギリまでやらずにため込んでおくから、親からそんな難題を押し付けられるのだ。

蛍があれだけパジャマパーティーを楽しみにしていたと言うのに、何と間の悪い。

とはいえ、要は昨日一日中、遊ぶ時間を返上して宿題に取り組んでくれたみたいだし、そうでなくても、あの夢ノ宮中学校の宿題である。

要の成績では、到底一日と半で終わらせられるようなものではない。

だが要は今日の午後までには終われると言うのだ。

要も蛍の期待を応えるために、相当な無茶をしてくれた証拠である。

それを思うと、要に対していつものように毒舌を言うのも気が引けるが、自業自得でもある。

今日と言う日を楽しみにしている蛍のために、なるべく早く終わらせて欲しいものだ。

ピンポーン

すると呼び鈴が鳴った。

レモンから聞いた帰り時間には早いし、要は恐らくまだかかるだろう。

ということは蛍が来たのだ。雛子は玄関まで行きドアを開ける。

「こんにちは。」

案の定目の前にいるのは、以前要の家へ来た時と同じ、ピンクのトレーナーに白のミニスカートという私服姿の蛍だった。可愛い。

「いらつしやい、蛍ちゃん。」

「あつあの！今日と明日、おせわになりますー！」

興奮を抑えきれないのか大声で礼儀正しく挨拶する蛍。可愛い。

「ううん、私の方こそ、来てくれてありがとう。」

雛子の立場からすればむしろ感謝する側だ。

何せ今日は一日中蛍の笑顔を見ることができなのだから。

するとお礼を言われた蛍は満面の笑みを浮かべた。可愛い。

「あの、これ、チョコレートケーキつくってきたの。」

「わあつ！ありがとう。後で一緒に食べましょ？」

「うん！ところで、かなめちゃんは？」

「要は少し遅れて来るって。だから先に上がっちゃってよ。」

「はいーおじやましませーすー」

玄関前でいつまでも立ち話をするわけにもいかず、一先ず雛子は蛍を私室へと招き入れる。

チエリーと一緒にいないということは、同行しているレモンもしばらくは帰って来ないだろう。

そこで雛子はあることを思い当たった。

(あれ・・・?ちよつと待って。)

祖母は買い物中だし、要とレモンたち妖精は遅れて来る。

と言うことは、今この家にいるのは・・・

(誰か来るまで私、蛍ちゃんと2人つきり・・・?)

私室で蛍と2人きり。それを意識した途端、雛子は硬直する。

そんな自分の様子を、蛍は上目遣いで不思議そうに見上げるのだった。可愛い。

第8話・Aパート

雛子の秘密!? パジャマパーティーで大騒ぎ!

蛭は初めてのお泊まり会に昂る気持ちを抑えながら、雛子の部屋を訪れる。

ここに来るのは2度目だが、最初の時はレモンとの再会が目的だったし、蛭も家事があつたからすぐに部屋を後にしたのだ。

こうしてゆつくりと雛子の部屋にお邪魔するのは初めてである。

そこで蛭は改めて彼女の部屋を観察した。

第一印象は、とにかく広い。

自分の部屋の2倍以上は優にありそうな部屋の面積は、3人くらいなら一切窮屈さを感じさせないほどの広さだった。

人間に変身した妖精たちを入れてようやく丁度良いくらいである。

そもそも雛子の家自体が、敷地面積が広くて周辺の一軒家と比べても際立っていた。

本人に直接聞くのは少し憚られるが、もしかしたら雛子はとてもお金持ちなのかもしれない。

次に目にとどまったのは、広い部屋の中で特に存在感を放っている2つの大きな本棚だ。

先頭の本棚をスライドさせると奥の本棚が現れる二重構造になっており、普通の本棚よりも多くの本を収納することが出来るタイプだ。

それでも2つの本棚は既についてぱいであり、タイトルを見ると、以前雛子から聞いていた通りファンタジー、SF、サスペンス等、様々な本がジャンル別に整理されていた。勉強机やベッドの上も綺麗に整頓されていることから、彼女の几帳面な性格が伺える。

そんな雛子の部屋は広さ以外はイメージ通り、文学少女の部屋と言った印象だが、机の上や本棚の空いたスペースには、小さなぬいぐるみや人形が飾られており、部屋を可愛らしく彩っていた。

それを見つけた蛍は、以前要の家でプリキリア作戦会議を開いた時、雛子がレモンの人間の姿であるレミンを見て目を輝かせたことを思い出す。

「もしかしてひなこちゃんって、かわいいものが好きなの？」

「うっうん、人形やぬいぐるみを集めるもの趣味で、部屋に飾ってあるものは、中でも特にお気に入りのものよ……」

やや歯切れの悪い調子で答える雛子だが、蛍は気にせず部屋の観察を続ける。

部屋一面に映る本棚を人形とぬいぐるみで可愛らしく飾られたこの部屋は、雛子を知る人が見れば、彼女の部屋だとすぐにわかるだろう。

要の部屋を訪れた時もあったが、私室と言うものはこうも部屋主の人柄を表現するのだ。

「わあ〜っ。」

蛍は幾つか目にとどまった人形を見て瞳を輝かせる。

自分も昔は人形が好きで、よく親に買ってもらった着せ替え人形で遊んでいたものだ。

こうして人形たちに囲まれた部屋にいと、童心を思い出す。

また、雛子の人形やぬいぐるみは、いずれも一見しただけで分かるほどの上質な素材で作られており、とても高価なものであるようだ。

自分のお小遣いではまず買うことの出来ないであろうものを見て、蛍は思わず手に取りたくなる。

「ひなこちゃん、このぬいぐるみさん、ちょっとさわってみてもいいかな？」

「どっどっど。」

蛍は表情を輝かせ、丁寧にぬいぐるみを手に取る。

渦巻きキャンディを模した耳と尻尾、ハートをあしらった模様が顔に書かれた可愛ら

しい妖精のぬいぐるみだ。

その生地はとても柔らかくて触り心地が良い。

「かわいい……。ほかにも、てにとってみていい?」

「うっうん、好きなのをどうぞ。」

「ありがとう! ひなこちゃん!」

雛子から許可を得た蛭は、今度は隣に置いてある人形に手を伸ばす。

だが雛子のコレクションを手取ることに夢中になっていた蛭は、雛子の応答が徐々に歯切れが悪くなってきていること、そして蛭を見る雛子の目が変わっていることに気が付かなかった。

：

雛子は軽はずみに蛭を部屋に招いたことを後悔する。

今日は要を含めて3人でお泊まり会。

チエリーとベリイが一緒に来ることも想定済み。

そして両親は不在だが祖母は家にいる。

この条件下でまさか蛍と2人きりになる機会があるとは思っても見なかったのだ。

そして今、この家にいるのは自分と蛍のみという事実が改めて雛子の理性を壊しにかかると。

(落ち着きなさい雛子……ここは頑張つて堪えるのよ。)

そう、私と蛍ちゃんはまだ会つてから1か月友達になつてから2週間しか経つてないのよ。

『スキンシップ』はもつとお互いの関係が親密になつてから……)

心の中で必死に抗い続ける雛子だが、そんな彼女の心境など当然知らない蛍は、

今も目の前で無邪気にそして無防備に人形と戯れていた。

ミニスカートがふわりと浮かぶ度に頭を殴られる感覚が走る。

ミニスカートとハイソックスの合間に覗く僅かな領域が瞼の裏に焼き付く。

無垢な笑み、無邪気な声、そしてあどけない蛍の仕草を見た雛子は実は彼女は地上に舞い降りた天使なのではないかと思ひ始めた。

そんな蛍の年齢不相応、かつ容姿相応の愛くるしい仕草一つ一つが、雛子の中で鳴り続けている警報を全力で壊しにかかった。

そして蛍に隠し続けて来た『秘密』の素顔が少しずつ表面化していき、音を失った警

報に代わり脳内を支配する。

少しくらいいいんじゃない？

(ダツダメよ雛子！蛍ちゃんが無防備なのは私を信頼してくれている証拠！

彼女の信頼を裏切らない為にも、ここは我慢・・・)

「わあっ！ひなこちゃん！ひなこちゃん！」

すると蛍が感嘆とした声をあげながら自分の名を呼んできた。可愛い。

彼女は自分のコレクションの中でも一番お気に入り着せ替え人形を手に取り、瞳を輝かせていた。可愛い。

「このおにんぎょうさん！スツゴくかわいいね！」

満面の笑みを浮かべながら、人形を自分の頬に当てギョツと抱き締める蛍。可愛い。

その瞬間、雛子にとっての一番のお気に入り着せ替え人形が目の前にいる天使へとシフトする。

同時に雛子の頭の中は真っ白になった。

(あつまリ。)

そして早くも己が理性の限界を悟った雛子は湧き上がる感情に身を委ねた。

:

蛭は、突然ゼンマイが切れた人形のように硬直した雛子を見て困惑する。

「・・・ひなこちゃん？」

無心になって人形を手を取ってしまったが、ひよつとして手荒に扱っていたのだろうか？

確かに雛子から許可は貰ったが、見るからに高価なものだし、雛子にとって大切なコレクションなのだから、もっと丁寧に扱うべきだった。

そう思った蛭は一先ず謝ろうとしたが、

「・・・ほ。」

ようやく雛子が口を開いた。

しかし聞こえて来たのは『ほ』の一言のみで、何を伝えたいのかわからない。

「ほ？」

「ほ。」

「・・・ほ？」

ひたすら『ほ』を繰り返す雛子。『ほ』から連想される言葉を思いつく限り考える蛍だったが、

「蛍ちゃんの方が可愛いよおお!!」

突然、雛子が甲高い叫び声あげながら自分に抱きついてきたのだ。

「きゃあああつ!!」

身に起きた出来事が信じられなかった蛍は思わず叫び声をあげてしまう。

「ひっひなこちゃん!?!ひなこちゃん!!」

「はっ!?!ごっごめんね蛍ちゃん、驚かせちゃって!」

蛍の呼びかけに我に返った雛子だが、声の抑揚は落ち着いておらず表情も浮かれたまままだ。

「でもね、私!ずっと思っていたことがあるの!」

「蛍ちゃんって・・・蛍ちゃんって!」

「どうしてそんなに可愛いのか!?!」

「・・・へ?」

そして雛子から飛んできた余りにも恥ずかしい言葉を前に今度は蛍が硬直してしま

う。「ほんつとうに可愛くって可愛くって!」

一体どんな星の下でならこんなに可愛い子が生まれてくるのか不思議でならなかったの!!」

どんな星の下でと言われても雛子と同じ星の下なわけだが、両手を頬に当て首を振るう雛子の異様なテンションに蛭は圧倒されてしまう。

普段の落ち着いて大人びた雛子とは余りにもかけ離れた言動に何が起こったのか理解が追いつかないが、1つだけ気づいたことがあった。

「あつあのーひなこちゃん！わたし、おにんぎょうさんじゃないんだよ!」

自覚するのは恥ずかしいが、雛子は自分のことを『可愛い』と思ってくれている。

だが人形やぬいぐるみが大好きな雛子は、もしや小柄な自分のことをそれらと同じように扱っていないだろうか？

「え？そんなの当り前じゃない。」

「え？」

だが雛子はその抗議はあつさりと受け入れる。

「蛭ちゃん、私が好きなものはね『可愛い』もの全てなのよ!」

例え『人形』だろうと『ぬいぐるみ』だろうと『妖精』だろうと『蛭ちゃん』だろうと!

この世の全ての可愛いものはみんな私にとって愛でるべき存在なの!!」

「・・・はい？」

と思いきや、結局人形やぬいぐるみと同じ枠組みに当てはめられてしまった。

それも『この世の全ての可愛いもの』という余りにも壮大過ぎるスケールの中に、自分自身が『蛭ちゃん』という1つのカテゴリとして確立されてしまったのだ。

「そして蛭ちゃんは私が今まで見て来た可愛いものの中でも一番可愛いのだよ!!」

今度は『今までの中で一番可愛い』と言われ蛭はついに言葉を失った。

女の子とつて最大級の賛辞を受けたはずなのに、人形やぬいぐるみと同列で比較された上での評価なので『人』として素直に喜ぶことは出来ない。

(ひっひなこちゃんって、こんなにかわいいものが好きだったんだ・・・)

言葉を失いながらも、雛子の『可愛いもの』に対する並々ならぬ情熱と愛情を真正面から受けた蛭は、初めて見る彼女の一面を少しづつ受け止めていく。

思えば雛子は元々、趣味に対して並々ならぬ情熱をかけるタイプだ。

読書好きな雛子は、本を読んでいる時は周りから声をかけられても気が付かないほど本の世界に夢中になっており、描かれる場面ごとに豊かな表情を見せるほどだ。

そして同じように、可愛いものが大好きな雛子が読書と同じくらいの情熱をその趣味に向けたのであれば、今の状況が生まれるのも必然ではないだろうか。

そう思うと意外なくらいあっさりを受け入れることができた。

それでもテンションがエキセントリックな方向へ暴走している気がするが、まだ納得のできる範疇である。

「だから蛍ちゃん！ギューって抱き締めてもいい!?!」

だが蛍がようやく現状を受け入れて落ち着きを取り戻しかけていたと言うのに、先と変わらず浮ついた表情の雛子がとんでもない爆弾を投下してきた。

「えーっ!?!」

この歳でギューっと抱き締められること自体恥ずかしいことだと言うのに、いくら相手の外見が大人びているとはいえ、同世代のしかも友達を相手にされるなんて、恥ずかしさ余つてこの場にいらなくなるレベルである。

「え．．．えと、それはさすがにはずかしい．．．。」

「．．．ダメ?」

さすがに断ろうとした蛍だったが、雛子がしょんぼりと肩を下げ、視線を落としてきたので、言葉に詰まってしまう。

「．．．うう．．．。」

そんな悲しそうな眼差しを向けなくて欲しい。これでは非常に断り辛い。

かと言って聞き入れてしまえば少なくとも今日一日、雛子相手に顔を向けられなくなるほど恥ずかしい思いをしなければならぬのは明白だ。

だがふと、蛍は雛子と過ごしたこれまでのことを振り返った。

(・・・そういえば・・・ひなこちゃんにはずつと、たすけられてばかりだったな・・・)
出会ってからの一か月。

雛子はずつと、時に優しく声をかけ、時に優しく見守ってくれた。

その包み込むような優しさで自分を励ましてくれたのだ。

そして友達になった今も自分の夢を叶えるために協力してくれる。

この泊まり会だつて発端は、雛子が自分の語った夢の1つを覚えていてくれたからだ。

(・・・ちよつとくらい、恩返ししなきゃダメだよね。)

この場には自分と雛子しかないないので、第三者に見られるわけではない。

自分がほんの少し恥ずかしいと思う気持ちを我慢するだけで、これまでの彼女への恩を少しでも返せるのなら、安いものかもしれない。

蛍は覚悟して雛子の願いを受け入れることにした。

「えと・・・すこし・・・だけなら・・・。」

「つ!? ありがとう蛍ちゃん!!」

そして感極まった雛子は、飛びつくように蛍を抱きしめた。

「ふわわっ。」

だが力任せにギューっと抱き締められるかと思いきや、雛子は自分の体を支えるように優しく抱きながら頭を撫でてくれた。

それはまるでゆりかごの中にいるような感覚で心地よかった。

慣れているのかな？と無粋なことをつい思ってしまった。蛍は心の中で首を振るう。

そしてふと雛子の顔を見ると、目線も頬も口元も緩み切っていた。

その表情に苦笑しながらも、蛍は自分を包み込む雛子の体温に懐かしさを感じていた。

(そういえば……さいごに、おかーさんにギュってだきしめてもらったのって、いつだったっけ……)。

雛子の温もりが、蛍の幼き日の記憶を刺激する。

小学生に上がった頃から、親に迷惑をかけたくない一心で家事を担うようになった蛍は、それ以来母親に甘えるのも止めたので、この懐かしい感覚はそれよりも以前のものであろう。

蛍はその記憶を探ってみたが、残念なことに母に最後に抱きしめてもらった時の記憶は既に風化しており、朧気なものだった。

(おかーさん……)

そして蛍は瞳を閉じて静かに雛子に身を委ねた。

記憶の隅に置かれている懐かしの母の温もりを求めて。

「蛍ちゃん？」

急に力を抜いた蛍に雛子も首を傾げる。

すると、

ピンポーン

呼び鈴の音が聞こえ、蛍は我に返った。

「つ!? えつえとーかなめちゃんかきたんじやないかな!!?」

蛍は飛び上がるように雛子の腕から離れる。

先ほどまで自分がしていたことを自覚し、顔が一瞬で真っ赤になった。

いくら雛子の容姿が大人びているとはいえ、同級生に対して母親の温もりを求めてし

まうだなんて、幼稚が過ぎるし雛子に対して失礼だ。

「むゝ。そうみたいね。」

一方雛子は一転、不機嫌な表情を浮かべた。

そしてそのまま部屋を出ていく雛子に続き、蛍は呼吸を落ち着かせながら後を追うの

だった。

∴

宿題を終えた要は、道中で妖精たちと合流し4人で雛子の家を訪れた。

「あれだけの量の宿題を、朝の内に片付けるとはね。見直したよ要。」

ベリイからお褒めの言葉を預かり、要は少しだけ上機嫌になる。

「蛍のためにわざわざありがとね、要。」

続いてチェリーからお礼を言われる。

人間年齢的には蛍より5つも上なチェリーは、すっかり蛍の保護者さんだ。

「まっウチにかかればあれくらい、どうってことないって。」

「要って実は頭良かったんだね。」

そして雛子に似て来たか素なのかはわからないが、レモンがさらりと毒を吐く。

「まっまあね……。」

だが要はレモンの言葉に、昨日の『生き地獄』を思い出した。

頭痛を抱え涙を流し兄には頭を下げ親には土下座をして宿題を見てもらいようやく終わらせることが出来たのだ。

願わくばあのような地獄に落ちるのは二度と御免である。

するとガチャツと音がして扉が開き、雛子が顔を出して来た。

「いや〜ごめんごめん遅れて・・・。」

「遅い!それから早い!」

「どっち!?!」

だがこちらの顔を見るや否や、雛子が非常に不機嫌な表情で、極めて矛盾に満ちた言葉を怒り任せにぶつけてきた。

そして背後から蛍の姿が見えた。が、彼女は彼女で顔を真っ赤に染めている。

そんな様子を見た要の脳裏に、雛子が不機嫌である理由が1つ思い当たった。

「・・・蛍、雛子と何かあった?」

「ふええっ?! なっなんでもないよ!!」

要を含めたこの場にいる誰もが『わかりやすい』と言う感想を抱く。

そんな蛍の反応を前に、要は『何かあった』ことを確信するのだった。

不機嫌な雛子に連れられるまま、要は蛍の顔が真っ赤になるほどの何かがあったであ

ろう部屋へとあがった。

とは言え、「この世の全ての可愛いものは等しく『愛でる』そして『守る』べき存在である！」という、カッコ良いのやら気持ち悪いのやら訳の分からない信条を持つのが雛子だ。

間違つても蛍の気を悪くするようなことはしていないだろう。

その程度には信用はしているし、現に雛子と蛍の間に険悪な雰囲気は見られなかった。

「よっしーでは改めて、プリキュアパジャマパーティーの開催をここに宣言しますー！」
要が片手を伸ばしながら高らかに宣言する。

要の宣言を聞いた蛍は、この日をどれだけ楽しみにしていたのか一目でわかるほど笑顔を見せた。

「1人だけ遅れて来ておきながら何を偉そうに。」

一方で雛子は相変わらずの毒舌をぶつける。だが表情こそ不機嫌なままだが、声色はいつも通りに戻っていた。

そして昨日の生き地獄を始めとするトラブルはあったものの、無事泊まり会に参加できたことに要も安堵する。

「それじゃ、初、泊まり会ってことで。」

蛍、何して遊ぶか蛍が決めていいよ。」

この泊まり会は、蛍が友達と一緒に叶えて見たかった夢を雛子が実現させるために開いたものだ。

その趣旨がある以上、要も蛍のリクエストは出来るだけ聞くつもりだったが要は、この話題の振り方は蛍の導火線に火をつけるものであることを言った後から気づいた。

そして予想通り、蛍の顔が見る見る内に輝いていき、

「じゃあねじゃあね！みんなでおしゃべりして！みんなでおかしたべよ！

わたし！きょうはチョコレートケーキをつくってきたの！！

それからそれから！みんなでトランプしよ！あとね！ウノも！

わたし！おとーさんから借りてもってきたの！！

それでねそれでね！！100えんショップでうってるオセロとか将棋とかチェスとか

！

ケータイできるゲームもたくさんかってきたんだ！！それもみんなであそぼ！！

あとねあとね！！クラッカーとかヘリウムガスとかもかってきたの！！

わたししらべてきたんだ！！こうゆうときって！パーティーグッズは必需品なんだね

！！

泊まり会の中でやってみたいことを言葉を弾丸に乗せて次から次へと放っていった。

要は2週間前のことを思い出して頭を抱える。

だが、さすがに2回目となれば耐性もついているし、この状況を打破する方法も、あの時見つけているのだ。

要は蛍の両肩に手を置き、

「蛍、落ち着き。」

力に任せて彼女を無理やり座らせた。

「あ……ごめんなさい。わたしまた……。」

そして予想通り蛍の思考が一転してマイナス方面へと傾く。

要は彼女の思考が傾ききる前に手を打った。

「はい落ち込まない。大丈夫、怒ってないからね。」

「うう……はい。」

蛍の扱い方を心得た要は、見事彼女を落ち着かせることに成功したのだった。

「あと、クラッカーとヘリウムガスは別にいらんよ?」

「え? そうなの!? わたし、おとまりではぜったい、もってくるものだとおもってた!」

近所の友達同士で頻繁に行われるお泊まり会は言わば友達の家遊びに行く延長線上でしかないと言うのに、その都度パーティーグッズを一式持ってくる人がいるなんて話は聞いたことがない。

お弁当のおかず交換でおせち料理を作つて来たときといい、相も変わらず蛍の想像と現実のギャップは激しいようだ。

「ね〜ね〜、蛍チョコレートケーキ持つて来たんだよね。

早く食べよ、食べよ。」

すると、チョコレートケーキと言う言葉を聞き逃さなかったレモンが、瞳を輝かせながら蛍に迫る。

「そつそだね。おやつにはまだはやいけど、もうたべちゃおつか？」

「わーい。」

雛子が蛍の作つたお菓子はとても美味しいって言つてたから、楽しみにしてたんだ。

「そつか。ありがと、レモンちゃん。」

レモンにお礼を言いながら、蛍はテーブルの上にチョコレートケーキを入れた箱を置く。

雛子は下へ降りて食器とフォークを取りに行ったので、要も飲み物とコップを取りに後についていった。

しばらくして準備を終えた後、各々は蛍の作つたチョコレートケーキを食べ始める。

するとベリイとレモンが早速、体に電流が走つたかのような衝撃を受けフォークを口

にくわえたまま固まってしまった。

「・・・これを、蛭ちゃんが手作りしたのか？」

「うつつん・・・。」

ベリイとレモンの反応を見て、要は2週間前の自分も同じ反応をしたことを思い出す。

あの時食べたマカロンと同様、このチョコレートケーキも、売り物と比較しても遜色のない味だ。

そして我に返ったベリイはまるで高級な食品をじっくりと味わうかのように少しずつケーキを口に運ぶ。

一方レモンは、わき目も振らずにチョコレートケーキを食った。

「あく美味しかった。ねえねえ、チェリーのケーキもレモンにちよーだい。」

早くも平らげたレモンが、チェリーの分まで強請り始める。

「嫌よ。これは私の分なんだから。」

「むくケチく。」

どうせチェリーは毎日こんなに美味しいお菓子を食べてるんでしょ？

だったらレモンに分けてくれたっていいじゃくん。」

「毎日なわけないでしょ。」

お菓子作りは料理以上に手間と時間がかかるんだから。

普段学校と家事で忙しい蛍に、毎日作れる時間があるわけじゃないじゃない。」

チェリーの言い分は最もだが、レモンの言いたいこともわかる。

毎日とまでいかずとも、チェリーがここにいる誰よりも蛍のお菓子を食べる機会が多いことは確かだろう。

それに関しては要も羨ましいと思っっている。

「レモンちゃん。よかつたら、わたしのぶん、どうぞ。」

「え? いいの?」

「わたしは、たべたいときに、じぶんでつくってたべられるから、きにしないで。」

「ありがと〜蛍〜。」

蛍の分をもらったレモンは、さっそく上機嫌になってケーキを食べ始めた。

そんなレモンを、チェリーは冷ややかな目で見ながら、蛍は優しく微笑みながら見守り、妖精も交えた賑やかなおやつ時間は過ぎていくのだった。

⋮

ケーキを食べ終えた蛸たちが談笑しているところ、扉をノックする音が聞こえてきた。

「ヒナちゃん、ただいま。」

姿を見せたのは60代くらいの女性だ。

温和な雰囲気の中にどこか気品を感じさせる姿に、蛸は『貴婦人』と言う言葉を思い浮かべた。

「おばあちゃん、お帰りなさい。」

「カナちゃんもいらっしやい。」

「どうも、お邪魔してまーす。」

どうやら雛子の祖母のようだ。

要のことをカナちゃんと呼ぶ当たり、要は雛子の家族とも親しいことがわかる。

すると雛子の祖母が、蛸の方へ視線を向けた。

「あら？もしかしてあなたが蛸ちゃん？」

「はっはい。」

突然名前を呼ばれた蛸は驚きながらも、表情と姿勢を正した。

雛子の祖母の前で失礼な態度を取るわけにはいかない。

「ヒナちゃんから良く話に聞いてるわ。ヒナちゃんの祖母の菊子です。」

「はっはじめまして、いちのせ ほたるっていいいます。」

蛭は僅かに緊張を忍ばせながら挨拶をする。

雛子から両親と祖母の4人で暮らしていると話は聞いていたが、こうして会うのは初めてだ。

「あらあら、礼儀正しい子ね。それにしても・・・」

ふふっ、ヒナちゃんのご熱心な理由がわかったわ。」

「え？」

「ちよっちよっつと、おばあちゃん。」

慌てて雛子が止めに入る。

普段雛子が自分のことをどのように伝えているのか少し気になったが、知ったら知ったで居た堪れない気持ちになりそうなので聞かないでおこう。

「蛭ちゃん、確か4月から夢ノ宮中学へ転校してきたのよね？」

学校にはもう慣れた？」

「はっはい、ひなこちゃんとかなめちゃんがいたおかげで、がっこう、すごくたのしいです。」

「そう。ふふっ、懐かしいわね。」

菊子の『懐かしい』、という言葉に蛍が首を傾げると、

「おばあちゃんね、夢ノ宮中学校の卒業生なの。」

雛子からその疑問に対する答えが語られた。

「え？そんなんですか？」

確かに夢ノ宮中学校は創立60年を超える学校だ。

菊子が中学時代、在籍していたというのも不思議な話ではない。

だが当然、当時の夢ノ宮中学校を知らない蛍には、自分たちの通う学校が60年以上も昔からあるということを実感することが出来ない。

「だが60年以上を生きる菊子は、その当時から現在に至るまでの中学校を知っている。」

「ええ、もう50年以上も前かしら。」

あの頃と比べると校舎は改装されて変わってしまったけど、『子供の夢を育む学び舎』という学校の教訓は変わっていないわ。」

「私たちが今歌っている校歌、おばあちゃんも歌っていたんですって。」

「ふわあ……。」

蛍たち中学2年生の年齢は13歳から14歳。

だが菊子は自分たちのおよそ4倍近くを生きている。

その菊子が、自分が生まれる遥か以前から、自分と同じ学校で、同じ教訓の中で学び、同じ校歌を歌っていたのだ。

蛍はその事実に驚愕する。

創立60年という数字は全国的に見れば決して大きな数字ではない。

創立100年を超える学校だって、日本にはたくさんあるのだ。

それでも50年以上前の『生徒』である菊子が目の前にいることで、蛍は自分たちが通う学校の歴史の長さを目の当たりにしたのだ。

「それじゃあ蛍ちゃん、かなちゃん。今日はゆつくりして行ってね。」

「はい。」

「ありがとうございます。」

菊子が部屋を後にすると、蛍は気が抜けたようなため息をついた。

「……すごいんだね。わたしたちの学校って。」

「ええ。おばあちゃんの代、ううん、それよりもっと前からあるのなもの。」

蛍は、長い歴史を持つ夢ノ宮中学校に畏敬に近い念を抱くのだった。

：

それからしばらくの間談笑し、菊子が作った夕食を取り終えた要たちは、各々順番で入浴を終え、パジャマ姿で雛子の部屋に集った。

「ひなこちゃん、おふろありがとう。」

湯上りの蛍が雛子に礼を言う。

着ているパジャマはピンク色でデフォルメされた猫の刺繍が入っている

・・・要するに子供っぽいパジャマだった。

「はあ・・・蛍ちゃん！そのパジャマ凄く似合っているよ！」

だが雛子はそのような蛍のパジャマ姿を絶賛する。

確かに幼い容姿の蛍には似合っているが、中学2年生に対して猫の刺繍入りパジャマが似合うというのは褒め言葉になるのだろうか。

「え？えと・・・ありがと・・・。」

絶賛する雛子に複雑な表情を浮かべながらも、とりあえず礼を言う蛍。

「ねえ？写真撮ってもいい？」

そして雛子はおもむろにトイカメラを取り出し欲望剥き出しなりクエストしてきた。

「えええっ!?それはさすがに、はずかしいよ!!」

「さすがの蛍も断固拒否する。

どうやら雛子はもう蛍の前で自分の『本性』を隠さなくなったようだが、少しは自重しろ、と思わざるを得ない有様だ。

このまま雛子のテンションに飲まれるわけにもいかないのです、要はひと際声を大きくして宣言する。

「よっし！皆パジャマに着替えたことやし、ここからがパジャマパーティーの醍醐味！

今日は目いっぱい夜更かしするで!!」

「ええ!?でつでも……。」

すると意外なことに蛍から反対の声が上がった。

「なに、蛍?夜更かしは苦手?」

パジャマパーティーを誰よりも楽しみにしていたはずの蛍が、喜ぶどころか不安げな表情を浮かべている。

なぜだろうと思う要だったが、

「だっだつて……よふかしなんてしたら、おとーさんとおかーさんにおこられるかも……。」

返つて来たのは、あまりにも子供っぽい理由だった。

その言葉に要は小学生の頃、つい夜更かしをしまい親から盛大に雷を落とされた

ことを思い出して、少し意地悪気な笑みを見せる。

「あくそういえばウチも小学生の頃、夜更かししてオカンに怒られたことあるなあ。」

言葉の裏に『そんなんで怒られるのは小学生やで』という意味を含めて蛍をからかってみる。

どのような反応が返ってくるのか少し楽しみな要だったが、

「っ!?!わっわたし、ちゅーがくせーだよ!!」

「ん?」

「え?」

言葉の意を捉えた蛍が、予想以上に本気の声色で反論してきたのだ。

要も雛子も、初めて見る蛍の態度に目を丸くするが、要はここである『実験』を試みる。

「・・・蛍、そのパジャマの柄ちよつと子供っぽくない?」

「え?でもでも、かわいいでしょ?こどもっぽいかもしれないけど、わたし好きなの。」

『子供っぽい』という自覚はあるのかと思いつつも、この言葉には特に気を悪くする様子は見られない。つまり『ハズレ』だ。

「蛍、そのパジャマってちよつちやい時から使ってる?」

「そうだよ。しょーがくせいときからつかってるものなの。」

「まだ着れるし、かわいいから、すてるのがもったいなくて。」

「ああ、蛍背低いから、小学生のときに着てた服まだ着れるんだ。」

「うん、だから好きなお洋服は、まだとってあるんだ。」

「事も何気に言うあたり、蛍は背丈の低さも気にしているわけでもないようだ。つまり『ちっちゃい』と言うのも『ハズレ』だ。」

「じゃあ小学生のときに着てた服着たら、子供料金利用出来そうだね。」

「わたしおないどしだよ!!?」

「ようやく『アタリ』へと辿りついた。」

「蛍は、『子供っぽい』や『小さい』と思われるのは気にしないが、実年齢よりも『年下』として扱われるのだけは捨て置けないようだ。」

（この子・・・面白い。）

「人をからかうことが大好きな要は、本気で反論する蛍の反応を見ながら、新しいオモチャを見つけた子供のような笑みを浮かべた。」

「かなめちゃん!」

すると蛍は、餌をくわえたハムスターのように頬を膨らませながら睨んできた。

「わつわたし!ちっちゃくって、こどもっぽいかもしれないけど、かなめちゃんとは、おないどしなんだよ?どーきゅーせーなんだよ?」

そして両腕を水車の如く振り回しながら精いっぱい怒りを表現する。

「ちゃんと、おないどしとして、あつかってくれなきやダメだよ！」

蛭が子ども扱いされることに対して本気で抗議しているのは見ればわかるが、頬をぶつくりと膨らませて、両手をブンブン振り回しながら、舌足らずな言葉遣いで抗議されても何も説得力がないわけで。

「要、蛭ちゃんの言ってることちゃんとわかってるんでしょね？」

すると蛭を目に入れても痛くないほど可愛いがっている雛子が念を押して来る。

「はいはい、精進しますよ。」

だが要は内心は無理だと思いながらテキトーな返事で流す。

その態度に雛子は眉を潜めるが、同時に困惑の表情を浮かべた。

要にはわかる。雛子も内心、そんなことは無理だと思っているのだ。

外見が幼いだけならばまだ何とかかなっただろう。

中身が幼いだけならばまだ何とかかなっただろう。

だが蛭は外見も中身も両方とも幼いのだ。

130cm程度の小柄な体躯。

字面に起こせばほとんど平仮名で表現されるであろう舌の足りていない言葉遣い。

そして全身を使って感情を表現するせいか、ボディランゲージがやたらと多い。

嬉しいときは両手を大きく仰いで飛び跳ねるし、怒れば両手を水車の如く振り回す。強いて彼女の歳相応な部分を挙げるとすれば、身体の『ある部分』がちやんと成長していることくらいだろう。

控えめながらも形はしつかりと見て取れる。

大人すら羨む『規格外』の大きさである雛子は隅に置いてくとして、自分のなんて『断崖絶壁』などと不名誉な称号を得て以来、一切『自己主張』してくれる気配がないので、軽く嫉妬の念を覚えたくらいだ。

とは言え、こんな理由だけで同世代扱いされても蛭は納得しないだろう。

「全くもう、確かに蛭ちゃんはおつちやくつて可愛くつて思わずギョツて抱きしめちゃったくらいだけど。」

何さらりと爆弾発言を飛ばしてるんだこいつは。

「要のそうゆうところ、蛭ちゃんに悪影響よ。」

もし蛭ちゃんが要みたいな悪い子に育つちやたらどうするのよ。」

「わたし、おないどしだつてば!!」

だが雛子にフオローに見せかけた華麗に追い討ちをかけられてしまい、蛭はどうとう目に涙を浮かべた。

「あつーごごめんね、蛭ちゃん。私そうゆうつもりじゃ……。」

からかい交じりの自分と違い、フォローのつもりで自然に蛭を年下扱いするとは。
(雛子よ、ウチよりタチが悪くないか?)

自分のことを全力で棚に上げながら、慌てて謝罪する雛子を見る要だったが、せつかくのパジャマパーティーに、主役の蛭を泣かせてしまうのはさすがに申し訳がない。
今日はこのくらいにして、からかうのはまたの機会にしよう。

「まあ、でも蛭。」

要はこれまでのふざけた態度から一転、真面目な口調で話しかける。

「友達と遊ぶ時のハメの外し方、1つや2つくらい覚えてもええと思うよ?」

勿論、雛子のおぼあちゃんに迷惑かけたらアカンから、度が過ぎたらダメやけど。

せつかくの泊まり会やもん。

迷惑をかけない程度なら、少しくらい遅くまで騒いでもバチは当たらんよ。

それに夜更かしするってことは、その時間だけ普段よりも長く友達と遊べるってことやで。」

親が鋭く目を光らせている普段の生活では、子供である要たちはハメを外す機会自体なかなかないもの。

だが友達同士のお泊まり会と言うのは不思議なもので、その時だけは親も少しだけ寛容になってくれるのだ。

多少の夜更かしやゲームのし過ぎには目を瞑ってもらえる。

お泊まり会と言う言葉は、ハメを外す許しを親からもらえる魔法の言葉でもあるのだ。

「かなめちゃん……うん、わかった！」

わたし今日はがんばって、よふかしするね!!」

蛭は一転、気合を入れて夜更かし宣言をする。わざわざ気合を入れ直すほどのことでもないが、本人がここまでやる気であるのなら、水を差すのも悪い話だ。

「その意気やで蛭！今日は夜通しで遊び倒すぞお！」

「おーっ！」

気合十分な要と蛭は、夜更かしして遊ぶことを決意する。

「……無理だと思っけどなあ。」

そんな蛭の様子を見ながら、チェリーは呆れた口調で呟くのだった。

：

「じゃあ蛭、まずはウチとゲームで対戦しない？」

要は2つの携帯ゲーム機を取り出し、1つを蛭に渡した。

ソフトは既に起動されており、画面にタイトルが映し出されている。

「あつ、ラストエピソード・オールスターズだ！」

ラストエピソードは、国内で最も知名度が高く、世界的にも有名なRPGだ。

現在シーズン10まで発売されており、シーズン1の発売から既に20年以上も経過している長寿シリーズである。

余談だが、ラストエピソードと言うタイトルでありながら長寿シリーズ化していることを良くやり玉として挙げられているが、これはシーズン1発売当時、開発元の会社が倒産寸前まで追い込まれており、世に出す最後の作品という意を込めて『最後』の名を冠したようだ。

そのような経緯で発売された初代ラストエピソードは、悪の魔王に連れ去らわれた姫を正義の勇者が助けに行くと言う王道RPGでありながら、作りこまれた世界観とシナリオ、敵味方問わず魅力的なキャラクター、シンプルながら奥深いゲームシステムが高く評価され、国内でも未曾有のベストセラーを叩き出し、国外でも大ヒットしたのだ。

結果、倒産寸前だった会社は一気に黒字回復して持ち直し、初代をシーズン1として次々と続編が作られていくことになったのだ。

「おつ、蛭もラストエピソードやったことあるの?」

そして今、要たちの手にあるのは、シリーズ20周年記念のファンサービスとしてリリースされたラストエピソードシリーズの派生作品、オールスターズである。

これは歴代シリーズの主人公とヒロインそしてライバルキャラが集って戦うという、シリーズ初の対戦型アクション形式のゲームだ。

だが複雑な操作は必要とせず、ボタン1つで全ての行動が操作できるので、アクションゲーム未経験者にも優しい設計となっている。

何よりこれまで1人用のゲームであったラストエピソードシリーズでは初めての2人用ゲームであり、泊まり会などで友達と一緒に賑やかに遊ぶには打ってつけのものがある。

要は今日のために、兄に無理やり頼み込んで彼の携帯機を借りて来たのだ。

「うん、おとーさんがシーズン1からソフトぜんぶもってて、わたしもやったことあるんだ。」

このゲームも、おとーさんからかりて、やったことあるよ。」

女子力が高く、家庭的なイメージの強い蛭が、少年的な趣味を持っているとは意外だと思っていたが、父親の影響だったのかと要は妙に納得する。

偏見かもしれないが、蛭が自分から進んでゲームに興味を持つ姿はなかなか想像出来

ないものだ。

ひよつとしたらレンジャーシリーズを見ていたというのも、父親の影響かもしれない。

「それじゃあ操作の説明はいらん。さっそく勝負や！」

「よゝし、まけないぞ〜！」

操作キャラクターとステージ選択を終え、さっそく対戦がスタートした。

蛍が選んだキャラクターは、シーズン6の主人公にしてシリーズ唯一の女性主人公である魔法使いの少女だ。

多彩な魔法を遠距離から放って戦う、いわゆるシューティングキャラである。

だがレンジャーシリーズではマジカル戦隊マホレンジャーが一番好きと言う蛍が選んだキャラクターだ。

恐らく性能よりも見た目を重視しているのだろう。

一方の選んだキャラクターは、シーズン10のライバルキャラである筋骨隆々とした中年の男性キャラだ。

見た目通りのパワーがありながらスピードも兼ね備えている屈指のインファイターである。

要は別段、筋肉好きというわけではなく、このキャラにも特別思い入れがあるわけ

はないが、重さと速度を活かして戦うというスタイルが一番馴染みやすいので使っているのだ。

見た目よりも性能重視である。

「えいつーやあつーたあつー！」

蛍の操作するキャラが火炎玉、つらら、雷を次から次へと放ってくる。

要の操作キャラはそれをガードすることなく、スピードを活かして弾幕を掻い潜る。

「よーしー！これならどうだー！」

すると蛍の操作キャラはその場に立ち止まり、長い呪文を詠唱する。

最強の古代魔法スーパード・ノヴァを唱えて来たのだ。

(ん？・蛍。なんでスーパード・ノヴァを？)

古代魔法スーパード・ノヴァはひとたび放てば、ガード不能、回避不能、そして一撃で勝負を決めることが出来る威力を備えたロマン溢れる大技である。

だがそんなものが簡単に決まるようでは対戦ゲームとして成り立たない。

代償としてスーパード・ノヴァは呪文を唱える時間が極端に長く設定されており、その間は一切身動きが取れないのだ。

そもそも蛍の操作するキャラは多彩な飛び道具を駆使して相手を近寄らせることなく戦うことをコンセプトとしている分、接近戦が極端に弱くなっている。

スーパー・ノヴァの使用は相手に接近する隙を与えてしまうので、原則使わないものだ。

まして要の操作キャラはインファイター。ここまで来ると勝負を捨てた行為も同然である。

（中絶する気配もなし。そっか、蚩やもんな。ガッツリ対人するタイプじゃないわな。）
なぜそんなコンセプトにもそぐわない技を与えられているのかと言うと、単純に原作の設定を忠実に再現した結果である。

オールスターズは対戦における実用性を無視してでも、原作の再現度に力を入れているところが多くあり、スーパー・ノヴァも、長い呪文の一字一句、展開される魔法陣の模様、魔法のエフェクトから効果音まで全て余すことなく再現されているのだ。

原作を知るものが見れば、再現度の高さに涙を流すことだろう。
現に要は感涙した。

本来はRPGであるラストエピソードシリーズのファンの中には、アクションゲームが苦手な人も決して少なくない。

そんなユーザー達が、『見る』だけでも楽しめるように作られているのだ。

対人やアクションが苦手な人は、ファンサービスの一環として再現されている原作の演出を身ながら楽しむ。

自分みたいに人と競うことが好きな人は対戦における駆け引きやセオリーの理解を深めて勝ちに行く。

オールスターズはこの2通りの遊び方が出来るゲームとして高く評価されているのだ。

蛭は前者で自分は後者。恐らく本気を出せば一方的に勝負が決めることができるだろう。

だが後者である自分が本気を出すのは大人げないと言うものだ。

(蛭も楽しんでるみたいやし、程々に力抜いて遊びますか。)

泊まり会でみんなとゲームをして遊ぶのは、楽しく過ごすことが一番の目的だ。

この楽しい空気を壊さないためにも、ここは勝ち負けに拘らず……

(あれ?でもちよつと待って。これ決まったらウチの負けだよね……?)

だが負けず嫌いのスイッチがこんな時にも入ってしまった、要は条件反射でキャラを動かし始めた。

「あれ?わっ!わっ!」

慌てふためく蛭を余所に、要は一方的なワンサイドゲームを繰り広げる。

気が付くと、画面にはWINと輝かしい文字、そして隣には涙を流して膝を抱える蛭の姿が目に入り、要は深く後悔するのだった。

…

「もう要、少しは手加減しなさいよ。」

「ほんつとごめん、蛍！」

呆れた声で注意する雛子と謝罪する要の声が蛍の耳に入る。

確かに自分はアクションゲームの類は苦手だし、最初から要に勝てるとは思っていない。かかったが、それでもあそこまで何も抵抗出来ずに負かされるとさすがにショックである。

「蛍ちゃん、ラストエピソードは止めにして、みんなでトランプしない？」

そんな蛍を気にかけて、雛子がトランプを提案してきた。蛍は涙を拭って顔をあげる。

「じゃあ、ババさんぬきしよう！ババさんぬき！」

蛍が気合を入れて遊ぶゲームを提案する。ババ抜きであれば、ババを取るか取られるかの運に左右されるところが大きいはず。

要が相手でも勝負になるだろう。

現にまだ小学生の頃、両親と一緒に遊んだ記憶があるが、その時は勝てたのだ。

「ん？ババさん抜き？」

だが要が首を傾げた。

ババ抜きと言えばトランプを使った遊びの中でも定番中の定番。

この中では誰よりも遊びに詳しいはずの要が知らないはずないと思うのだが。

「うん、ババさんぬき。」

「・・・ババ抜きじゃなくて？」

なぜ聞き返してくるのかわからないが、やっぱり知っていた。

「そだよ、ババさんぬき。」

「・・・ババさん？」

だが要は困惑したままだ。

もしかしたらババ抜きよりもジジ抜きの方が好きなのだろうか？

ジジ抜きはババ抜きと違い、手札のどれがババに当たるカードなのかわからないので、ババ抜きとはまた違った楽しみが生まれる。

勝負事を好む要はジジ抜きの方をやりたいのだろうか？

「ひよつとして、ジジさんぬきのほうがよかった？」

「・・・いや、ババさん抜きでいいです。」

だが結局、要が困惑した理由もわからないままババ抜きに決定したのだった。

「チェリーちゃんたちもいつしよにやる?」

「え?でも私たちルールわからないわよ。」

「だいじょうぶだよ。スゴくかんたんだから、すぐおぼえられるよ。」

ね?みんなでいつしよにやる?」

「じゃあ、ご一緒させてもらうか。」

「わーい、レモンも参加だ。」

チェリー、ベリイ、レモンの3人も交えた6人によるババ抜きが始まった。

初回は妖精たち3人だけが参加し、それぞれのパートナーがルールを教えながら実践する。

さすがにトランプの中でも特に単純なゲームなだけあって、3人ともすぐにルールを覚えることが出来た。

ちなみにこの時の勝負はベリイが1番に抜けて、2番がチェリー、最下位がレモンだった。

ややハソを曲げたレモンを雛子が優しく宥めてから第2ラウンドが始まる。

今度は蛭たちも参加し、改めて6人によるババ抜きが開始された。

(よーし、まけないぞー!)

先ほど要に完敗した分も巻き返す勢いで、ババ抜きに臨む蛍だったが、

（ふわわっ！ババさんきちゃった！）

蛍がババを引けば、要が呆れた表情で蛍を見る。

（はわわっ！ババさんとなりだったのに！）

雛子が非常に申し訳なさそうな表情でババ以外のカードを取っていく。

「あれ？レモンのカード全部無くなっちゃった。」

「おめでどうレモンちゃん。一位よ。」

「わーい、レモンがいつちばくん。」

「よっし、ウチの上がり。ペリイ、ウチの勝ちみたいやな。」

「今はおめでどう。だが次は俺が勝って見せるさ。」

その間次々と蛍以外の人たちが上がっていき、残りは蛍とチェリーの2人になった。

「よーし、チェリーちゃん、しようぶだ！」

「うっうん……。」

気合十分な蛍に対して、チェリーはどこか遠慮がちだ。

初めてのババ抜きに緊張しているのだろうか？

するとチェリーの手が蛍のカードへと伸びていき、

（はわっ！ババさんはとなりなのに！そのカードとられたらまけちゃうよ！）

チェリーは少し逡巡し、隣のカードに手を向ける。

(よかった・・・。ババさんとつてくれるなら、まだわたしにもかつチャンスあるよね。)
そしてチェリーは大きなため息を一つ吐いて、その隣のカードを手に取った。

「あーっ!!」

「私の上がり。」

結局ババのカードは最後まで蛍の手に残り、蛍はビリになるのだった。

「ううう・・・。なんで、かてないの・・・。」

対戦ゲームに続きババ抜きにまで完敗し、蛍は再び膝を抱える。

「いやなんでって・・・。」

「あれだけ分かりやすく顔に出てちゃね・・・。」

蛍に聞こえない程度の声で要とチェリーは呟く。

「おかしさんとおとーさんには、かてたことあるのに・・・。」

「優しいご両親だなあ・・・。」

そんな蛍の呟きに反応する雛子だったが、やはり蛍の耳には届かなかった。

「よーし、次もレモン勝っちゃうぞー!」

「ほら蛍、いつまでも落ち込んでないで次やるわよ?」

連勝に意気込むレモンと、蛍に声をかけるチェリー。

蛭は賑やかにババ抜きを楽しむ妖精たちを見ながら、ふとある事に気がついた。

今まで自分は負けて悔しいと思ったことがあるだろうか？

勝負は相手がいなければ成り立たない。

そう、ずっと友達がいなかった蛭にとって、一緒にゲームをしてくれる相手がいること自体、喜ばしいことなのだ。

「……ふふつ、あははははっ！」

「ほっ蛭？急にどうしたん？」

「ごめんね急に、でも、たのしいね！」

「え？」

「だって、いっしょにやってくれるひとがいなきや、まけることだってできないんだよ？

まけるってことは、いっしょにあそんでくれるひとが、いるってことだもん！」

だから蛭は、この場にいられることがとても嬉しかった。

「だから、もつとみんなといっしょにあそびたい！」

「しょうぶは、かつたらたのしい、まけてもたのしい！そうだよね、かなめちゃん！」

「蛭……ああ！そうやな！」

「よし、蛭ちゃんの気が済むまで、いろんなゲームで対戦しましょう！」

「せっかく蛭がオセロやら将棋やら、色々買って来たものね。」

「そうなるよ、男としてこれ以上負けてやるわけにはいかないな。」

「え、レモンが次も勝つ。」

「みんな！ありがとう!!」

その後蛍たちは、トランプ、ウノ、オセロ・・・etc。持ってきたゲーム全てを遊び尽くした。

遊び疲れたら、要がこっそり持ってきた夜食用のお菓子を食べながら談笑を始める。

その中で要が、蛍の買って来たパーティーグッズを使って場を荒らし、

ベリイがそれを止めようとしてさらに場をかき乱し、チェリーとレモンはお菓子の奪い合いを始め、雛子は蛍の写真を撮ろうとトイカメラ片手にシャッターチャンスを狙っている。

そんな混沌とした中でも蛍は終始笑顔を浮かべていた。

蛍にとって初めてのパジャマパーティーは、大切な思い出として心に残るのだった。

第8話・Bパート

雛子がふと時計を見上げてみると、時刻は夜の11時30分を過ぎていた。

「あら、もうこんな時間。」

皆がパジャマに着替えたのが夜の8時頃。それから既に3時間以上が経過している。賑やかな時間と言うものは、あつという間に過ぎていくものだ。雛子は改めて実感した。

「ふっふっふ。何を言ってるの雛子？」

夜はまだまだこれからでしょ？

夜更かしは深夜を回ってからが本番やで！」

要が泊まり会をする時は、深夜付近を回るといつもこのテンションだ。

普段滅多に出来ない夜更かしをする、というのに細やかな背徳感を覚えるが楽しいらしい。

あまりにもちっぽけ過ぎる要のワルな言動にいい加減慣れている雛子は、やれやれと小さなため息を吐きながら横を見ると、珍しくレモンが起きていた。

「レモンちゃん、こんな時間まで起きてて大丈夫？」

自分も要たちと一緒にになって、およそ寝付けるとは思えないほどに賑やかかつ騒がしい空間を作っているながら何を今更とは思うが、レモンは人間年齢的には10歳前後だ。

深夜付近の時間まで起きているのは辛いのだろうか、寝ぼけ眼を擦っていた。「むにゃ〜、眠いけど楽しくて、何だか寝るのが勿体ないの〜。」

だがレモンにこやかに笑いながらそう答えた。

思えばレモン達は半年もの間ずっと1人でこの世界を彷徨い続けていたのだ。

仲間の妖精たちと一緒にになって賑やかな時を過ごすのは、この世界では初めてなのだろう。

「ふふっ、そっか。」

寝ることが大好きなレモンが、寝るのが勿体ないと思えるほど楽しいひと時を過ごせたことを、雛子は喜ばしく思いながら微笑む。

「あんまり無理はするなよ。体を壊したら元も子もないぞ。」
「は〜い。」

そんなレモンをベリイが優しく注意する。

妖精たちの中で最年長のベリイは、年少のレモンを気にかけることが多い。

「蛍、もうすぐ深夜回るけど、それまで何して・・・あれ？」

一方要は、蛍に声を掛けようとして言葉を止めた。

雛子も同じ方へ目を向けると、蛍は枕を両手に抱えながらうとうとしていた。可愛い。
い。

「やっぱり、こうなると思ったわ。」

するとチエリーが、人の姿であるサクラへ変身しながら、蛍の布団を敷き始める。

「毎日早寝早起き。」

規則正しい習慣を身に付けている蛍が夜更かしなんて出来るはずないって思ったのよ。」

チエリーの話によれば、親に代わって家事全般を担っている蛍は、休日でも早寝早起きのサイクルを崩さない生活を送っているようだ。

深夜付近の時間まで起きていられるのは奇跡に近いが、それも限界が来たようだ。

半開きの目が開いたり閉じたりを繰り返し、眠りに落ちそうになるところをギリギリで堪えている。

可愛いが、さすがにこんな状態では無理せず寝かせた方がいいだろう。

「蛍、そろそろ寝た方がいいんじゃない？」

蛍に夜更かしを教えた要自身も、寝ることを促してきた。

「……んんん……まあ、らいようらよ。」

えへへ、きよきはね、いっばい、よふかひすうの。」

だが蛭は半開きの目のまま、いつも以上に幼く呂律の回らない言葉で答えた。

可愛いが、『まだ大丈夫、今日はいっぱい夜更かしする。』と本人は言つても傍から見ればどう見ても大丈夫ではない。

要が蛭に教えたように、夜更かしは友達と遊ぶ時間を普段より長く確保することが目的だ。

だがここまで朦朧とした意識で無理やり起きては、ロクに遊ぶことも出来ないまま情性に夜を更かすことになるだろう。

恐らく明日の朝にはこの時間のことを覚えていないはずだ。

それでは夜更かしのメリットがまるでない。

今の時間を睡眠に回し、その分明日早く起きた方がよっぽど時間を効率よく使えるはずだ。

そう思いながら、雛子も蛭に寝るよう促す。

「蛭ちゃん。明日もう一日あるのだし、今日はもう明日に備えて寝ましょう?」
「うゝ、やあ!まあ、ねない!」

だが雛子の言葉を聞いた蛭は、枕を強く抱き締め首を振るい、赤子のようにぐずり始めた。

そんな普段の蛭らしからぬ行動に驚きながらも、いつにも増して幼くそしてあざとさ

全開の蛍の仕草が、過去最大級の破壊力を持つて雛子の理性に襲い掛かる。

危うく理性どころか意識すらふっ飛びかけた雛子だが、何とか唇を食いしばって堪えることが出来た。

そんな雛子の様子を要が、呆れたような心配しているような複雑な表情で見ている。

「もう蛍。そんな状態で夜更かし出来るわけないでしょ。

わがまま言わないでもう寝なさい。」

サクラが蛍を無理やり布団へ運ぼうとするが、蛍はやだやだの一点張りで抵抗を続ける。

寝ぼけているせいか自制が効かなくなっている蛍の様子に、さすがのサクラも困り果てている。

その様子を見かねた雛子は、蛍の近くに座り込み、彼女を優しく抱きしめた。

「……まあ、ねないもん……。もっとおしやえりして……。もっど……。あそんで……。」

「うん、わかってる。」

蛍もレモンと一緒に、今の時間が楽しくてを寝るのが勿体ないと思ってくれていたのだ。

彼女がそこまでこの泊まり会を楽しんでくれたことに、雛子はとても嬉しく思う。

「ねえ蛍ちゃん、私とお喋りしよつか？」

「……うん……。」

「蛍ちゃんは、明日は何をして過ごしたい？」

「……あひたはね……みんなでおるれんら〜みて……。」

喋りながら、雛子は蛍が気づかないように、少しずつ彼女の頭を自分の膝の上に乗せていった。

蛍が自分の膝を枕にして寝る姿勢へと誘導する。

「そえかあ……みんなあで……」はんたえて……。」

そして蛍を愛撫するように、優しく彼女の髪と頬を撫でる。

「そ……えか……あ……。」

すると蛍の臉が徐々に重たくなつていった。

内心、あと一息と思ひながら雛子は彼女が寝付くまで話し相手になる。

「それから、皆でどこかお出かけしよつか？」

「おえかけ……うん、すう。みんなあで……おえかけ……。」

えへへ〜たのしみ……みんなあ……いつしよ……。」

やがて蛍は健やかな寝息を立てて眠り始めた。

「……よ……。」

2度、3度頬を撫でてでも起きる気配がない蛍を見て、雛子も一息つく。

思えば蛭は今日の一日中ずつとはしやぎつ放しだった。

普段夜更かしの習慣がないだけでなく、遊び疲れたのもあるだろう。

(本当に、幼いんだから。)

中学生と言う実年齢を考えると幼い行動かもしれないが、雛子はそんな蛭を慈しむように微笑むのだった。

：

雛子が蛭を寝かしつける様子を見ながら、要は苦笑する。

雛子が蛭のことを特別愛でていることは以前から分かり切っていたが、先ほどの彼女の姿は、まるで母親のようだった。

雛子とは3年以上の付き合いになるが、あんな雛子の姿は初めて見たのだ。

どうやら蛭は、雛子の母性を強く刺激するようだ。

自分が良く知る友達も、新しい友達が出来れば、今までとは異なる一面を見せてくれる。

プリキュアパジャマパーティーは要にとつて大成功な結果となった。

蛍と雛子、2人の友達のまだ知らぬ一面を知ることが出来たのだから。

すると蛍が起きる気配がないのを悟ったサクラは、蛍の手放した枕を取り寝床を整える。

「ありがとう雛子。」

そして雛子に礼を言いながら、起こさないように優しく蛍を抱きかかえ、静かに布団まで運んでいった。

「あら？ 私は別にこのままでも良かったけど。」

「え？？」

「ふふつ、冗談よ。」

今の冗談9割方本気だったろ、と思っていると雛子がこちらの方へ振り向いてきた。

「さつ要、私たちも今日はもう寝るわよ。」

「え？ウチらも？」

「当然じゃない。蛍ちゃんの話聞いてなかったの？」

明日の朝は、皆でオルレンジャーを見るんだから。

寝坊して、蛍ちゃんの楽しみを奪うようなことがあったら、承知しないからね？」

あれだけ呂律の回らない言葉遣いだったのによく聞き取れたものだと思心半分呆れ

半分で雛子を見るが、自分に釘を刺す物言いととは裏腹に、彼女の声は優しく穏やかだった。

要としてはもう少し起きて談笑したいところだったが、蛍のためと言われては断れない。

蛍にとって楽しいお泊まり会にしたいと言う気持ちは、自分も同じだからだ。

「はいはい、わかりましたよ。」

多少の夜更かしをしたところで、毎週の楽しみである日曜朝のヒーロータイムを寝過ぎしてしまうなんてポカはしないが、大事をとって早めに寝ておくに越したことはない。

それに今回の主役である蛍がこの状態では、要たちだけで夜更かしする理由もないだろう。

「それじゃあ、電気消すわよ?」

「おう、お休み。」

「うん、お休み。」

すぐに消灯するのかと思いきや、雛子は最後にもう一度だけ、蛍の髪を静かに撫でる。

「お休み、蛍ちゃん。」

およそ同世代の友達に接する態度ではない雛子の姿に、要は再度苦笑しながら部屋の

明かりが消えるのを待つのだった。

：

翌朝、要たち3人は着替えを終え、リビングで子供向け特撮ヒーロー番組、無限戦隊オルレンジャーを視聴していたが

「わっっ!!マホレット!!マホレットだ!!」

「……。」

広々としたソファに蛍を中心として座っているため、隣に座る蛍の大声が要の耳を直撃する。

レンジャーシリーズ30周年記念作品であるオルレンジャーは、毎週歴代のレンジャーがゲストとして出演するのだが、今日に限ってそのゲストが、蛍が一番好きなシリーズと語っていたマジカル戦隊マホレンジャーだったのだ。

マホレンジャー放送終了から実に6年ぶりに姿を見せたマホレットの役者は、その歳月を感じさせないほど若々しい姿のままだった。

そしてマホレットの扱う魔法の演出や変身シーンは、当時と同じ音響を使いながらも6年もの歳月の中でさらに進化を遂げたCGを使ってフルリメイクされている。

それだけでもセピアに色あせた思い出を鮮明に蘇らせるには十分であり、昨日と同じくらいにテンションが高かった蛭は、完全に周囲のことを忘れて画面に夢中になっていた。

「マジカルフレイムチェンジ！炎の貴公子！マホレット！！」

あまねく生命に奇跡の魔法を！マジカル戦隊マホレンジャー！！」

マホレンジャーの変身時の音声コードと名乗り口上、レンジャーシリーズではお決まりとなっているキャッチコピーを一字一句間違えることなく、画面の向こう側にいるマホレットとシンクロしながら大声で叫ぶ蛭。

しかもソファに座りながら変身時の腕のポーズだけを完全に再現するオマケ付きである。

これまでも雛子や真たちと泊まり会をする時は、一緒にレンジャーシリーズを見ていたので、今回も同じように軽く雑談しながら視聴するつもりだったのだが、蛭のこのテンションは完全に想定外である。

おかげで要はオルレンジャーを見るのに一切集中出来ない。

はつきり言って五月蠅いのだ。

ちなみに雛子と言えばそんな蛍を迷惑がるどころか、画面の方には一切目もくれず大はしやぎする蛍の姿を恍惚とした表情で眺めていた。

一緒に見るといふ約束を破っている気がしてならない要は、普段雛子が自分に対してそうしているように、ワザとらしく大きなため息をつく。

が、画面に夢中になっている蛍と、蛍に夢中になっている雛子には残念ながら届かなかった。

「蛍、悪いけどちよつと静かにしてもらえろ？」

物事には限度がある。要はついに蛍のことを注意した。

例え蛍が心の底からこのお泊まり会を楽しんでいたとしても、要とて毎週のこの時間を楽しみにしているのだから妥協したくないし、何より友達だからと全てを許容するわけにはいかない。

蛍と友達になった時、要は互いに遠慮なんていらぬ、言いたいことははっきりと言合える関係でありたいと願った。

それはつまり、嫌なこともはっきりと嫌だと言合える関係でありたいのだ。

そうでなければ蛍と本当の意味で友達になることは出来ないし、それは蛍のためにもならない。

「あ……つづつづめんなさい……。」

「別に騒ぐなとも言わないよ？」

「ただもうちよつとだけ声落としてな？ウチも見たいから。」

「うん、わかった。」

「素直でよろしい。」

すると蛍は、これ以上は騒がないという意味表明なのか自分の口を両手で抑え込んだ。
だ。

ちよつと声を落としてほしいと頼んだのに、一切声を発さないつもりのようなのだ。

相変わらず0か100の両極端の選択肢が取らない子だなと思いつつも言うことを聞いてくれたことに感謝し、要はオルレンジャーの視聴を再開するのだった。

：

オルレンジャーの視聴を終えた蛍は、雛子の祖母と一緒に朝食を準備に取り掛かった。
た。

要と雛子は、オルレンジャーの後番組であるマスクライダー・スペースを見ていると

ころだ。

マスクライダーシリーズは、仮面を被り素顔を隠したヒーローが、怪人によって構成された敵組織と戦うという子供向け特撮ヒーロー番組だ。

だが勧善懲悪を一貫したテーマとして描くレンジャーシリーズとは異なり、人間VS怪人という構図を作りながらも、人にも悪の心を、怪人にも善の心を持つものがあるので、正義と悪の境界線が曖昧となっているのがマスクライダーシリーズの特徴だ。

敵側である怪人達にもドラマがあり、ヒーローと怪人による群像劇が描かれていくというレンジャーシリーズとはまた一味違った作風が大ヒットし、今やレンジャーシリーズと双璧を成す特撮ヒーロー番組となっているのだ。

だが一般人が敵の怪人の手にかかる、戦いの中で流血するシーンが多く含まれる等、子供向けの番組としてはショッキングな映像が多くあるので蜚は苦手としており、興味はありながらも未だにシリーズを満足に視聴したことがない。

そのため蜚はこの時間を使って朝食の準備をし、マスクライダーのさらに後番組に当たる魔法少女キュアピュアまでの時間を繋いでいるのだ。

魔法少女キュアピュアは、蜚が幼少の頃から続いている女兒向けに制作されたアニメであり、妖精から魔法の力を与えられた女の子が、変身して悪の組織と戦うという物語だ。

まさかこのアニメと似た魔法のような出来事が、自分の身に振りかかるとは思いもしなかったが。

事実は小説より奇なりと言っても、ここまで現実離れた体験をしたものは他にないだろうと蛭は自分のことながら思うのだった。

「ヒナちゃんから聞いたわよ、蛭ちゃん。

毎日お母さんの代わりにご飯を作ってるんですって？

どうりで、上手なわけだわ。」

横に立つ菊子から料理の腕について褒められるが、蛭は少しだけ緊張していた。

と言うのも、雛子の家はキッチンも自分の家のものと比べるのが憚れるくらいスペースが広く、設備や器具もお遣いの時に母から預かるお金を全てつぎ込んでも買えないであろう高価なものが揃っているのだ。

間違っても壊すわけにはいかないので、普段よりも慎重かつ丁寧に作業する。

食材だけは自分が普段利用しているものと同じで、商店街にあるスーパーや八百屋で購入したものを使っていたが、冷蔵庫の中に眠っている見るからに高価な霜降り肉を前に目を丸くしたことは忘れられないだろう。

「えと・・・そんなたいしたことないです・・・。」

自分よりも遥かに長い時を家事に費やしているであろう菊子に褒められたものだけ

ら、蛍はつい恐縮してしまう。

「ふふ、将来いいお嫁さんになれるわよ。」

「えっ!?! えと・・・。」

恋人どころか異性の友人すら存在せず、恋すら経験したことのない蛍には、お嫁さんの具体的なイメージなんて想像出来るはずもなく、そもそも将来良いお嫁さんになれるというのは、家事の出来る女性への褒め言葉として使われているものであることもわかってはいるが、それでも親にも言われたことのない言葉に、蛍は顔を赤くして言葉を詰まらせた。

菊子はそんな蛍の初心な反応を見てクスクスと笑うのだった。

やがて朝食の準備が終わり、蛍たちは朝食を食べながら今日の予定について話し合っ
た。

「いつも商店街の方ばかり行ってるし、せっかくだからモールまで行ってみない?」

「モールって、夢ノ宮ドリームプラザのことよね?」

「もっちりん。」

雛子の確認に要が頷く。

夢ノ宮ドリームプラザとは、夢ノ宮市最大のショッピングモールのことだ。

この街からはやや離れており、夢ノ宮中学前のバスを利用して20分ほどかかる場所にある。

およそ徒歩では向かえない夢ノ宮ドリームプラザに、週末の休みを利用して親と一緒に車で訪れるのは、蛍の休日の楽しみの一つだった。

そんなところへ友達と一緒に向かうというだけで、蛍の気持ちを高揚させるには十分だった。

「そうしょ！みんなでドリームプラザまでいこつ!!」

「蛍、食事中に騒がない。」

「わわっ、ごめんなさい。」

ついテーブルを大きく揺らしてしまい、要に注意されてしまう。

「まあでも、蛍ちゃんが行きたいって言うのなら決定ね。」

「賛成。蛍、朝ごはん終わったらドリームプラザまで行こうな。」

「うん!」

今回の泊まり会、2人は自分の意見を率先して聞いてくれている。

蛍はその事に深く感謝しながら、朝食を食べ終えるのだった。

：

朝食を食べ終えた蛭たちは、雛子の祖母にお昼ご飯は食べてくると伝えて、夢ノ宮ドリームプラザへと向かった。

夢ノ宮中学校前バスまで徒歩で行き、そこから約20分ほどして目的地の前にあるバス停まで辿りつく。

バスから降りた蛭たちはまず、人目のつかないところまで移動し、チェリーたちが人間に変身するのを待った。

やがてサクラ、ベル、レミンへと変身した妖精たちが姿を見せ、6人で改めて夢ノ宮ドリームプラザへと足を運び入れた。

夢ノ宮ドリームプラザは、中央に休息用の空間を大きく取り、両サイドから三階層に渡って小ささまざまなお店が並ぶ作りになっている。

そのため、正面の入口である自動ドアから中に入ると、大広間を中心として両サイドに広がるお店が、三階層とも目に映るといふ見晴らしの良い空間になっているのだ。

当然、入り口から見渡せるお店が全てではないが、この場から見渡せるお店の数だけでも、商店街のものとは比べものにならない数であることがわかる。

夢ノ宮市最大のショッピングモールの名は伊達ではないのだ。

「これはすごいな……。」

「ふわあく、ひろく……。」

「ベルさんとレミンちゃんは、ここにくるのははじめて?」

「買い物といえば、地元の商店街にしか行ったことがないからな。」

「レミンも。」

ここに来るのは初めてと語るベルとレミンは、目の前に広がる広大なショッピングモールにすっかり目を奪われていた。

ちなみにサクラは一度、蛍が親と出かける時に連れて行ってもらったことがある。

中央の広間には、買い物物の合間に一息入れている人たちがベンチに腰掛け談笑しており、両サイドに分かれて立ち並ぶお店には、多くの人々が入り出していた。

休日のしかもゴールデンウィーク中なので、いつも以上に多くの人で賑わっている。

「じゃつ、まずどこから見て回ろっか?」

「わたし、さいしょジェラートのおみせにやりたいな!」

ゴールデンウィークに新作発売の情報を入手していた蛍は、何よりもまず先にその店を訪れたいと思っていたところだ。

「つてことは、この階のスイーツエリアね。」

「んじやつ、行きますか。」

「うん！」

妖精たちも合わせて計6人。

それなりの人数で夢ノ宮ドリームプラザを見て回るようになった。

：

新作のジェラートをじっくりと堪能した雛子たちは、しばらくの間は6人でウインドウショッピングを楽しんでいた。

すると、ここに来るのが初めてのベルとレミン、一度した訪れたことのないサクラたちの間で見て回りたいお店がはつきりと分かれたのだ。

とはいえ、昼食を食べた後に帰ると祖母と約束しているので、午前中の内に見て回れる数は限られてくる。

そこで蛍が、ここまで一緒に見て回れただけでも十分と言うので、昼食までの間はそれぞれのパートナー同士で別行動を取ることになった。

雛子は、レミンのリクエストである子供用おもちゃ売り場を見て回った後、今は本屋へと足を運んだところだ。

レミンが児童向けの絵本売り場にいることを確認した雛子は、自身の目的の本があるコーナーへと向かう。

「あつた。」

雛子が手に取ったのは、『小説家を夢見るあなたへ』というタイトルの本だ。

小説を書く上での基本的な技術、プロの小説家によるアドバイスやインタビュー等が掲載されている他、一般応募の中で最優秀賞を受賞した作品が載せられている。

ネットで見かけたレビューによると、今年度の最優秀賞受賞作品である『海賊ハリケーン』はとても面白いと評判だったので、読んでみたくなったのだ。

「……。」

手に取る本は決して分厚いものではないのだが、雛子にはそれがとても重たく感じられた。

それは雛子がまだ自分の『夢』と正面から向き合えていない証である。

「あら？ 雛子じゃない。」

すると背後から声がかかった。振り向くとそこにはクラスメイトであり、小学生からの友人の1人である愛子が立っていた。

「愛子、奇遇ね。こんなところで。」

「欲しかった新作の漫画、今日発売日だったからね。」

お父様がこちらに来る用事があったから、ついでに買いに来たのよ。」

そう言いながら、愛子は嬉しそうに手に持つ漫画を見せてきた。

愛子が大の漫画好きであることを知る雛子は、そんな姿を見て微笑む。

「雛子こそ、こんなところで何して……。」

言いかけた愛子は、自分が手に持つ本を見て、ここに佇んでいた理由を悟ったようだ。

「……ついにやってみる気になったんだ？」

「ううん、そんなんじゃないわ。」

今年の最優秀受賞作品が面白かって評判だったから、読んでみたくなっただけよ。」

「でも、ボクツとしてたつてことは、考えてないわけじゃないんでしょ？」

雛子の将来の夢なんだよね？小説家になること。」

さすがに付き合いが長いだけあって、愛子の目は誤魔化せなかつたようだ。

そう、この本を買うのは海賊ハリケーンが読みたいだけが目的ではない。

小説家になるために必要な知識を得ることが、何よりの目的だった。

小説家になるという自分の夢のために。

だが未だに煮え切らない気持ちになっているのは、まだその将来のビジョンが明確に

見えていないからだろう。

「夢だつて断言出来るものでもないわ。

なれたらいいくらいにしか、まだ考えていないもの。」

幼い頃から夢見た職業。

これまでも何度か物語を書きたいと思い、筆を取ったことがあった。

だがいざ書こうとしても、自分が思い描くものを上手く文章で表現することが出来なかつた。

本を読むことと、本を書くことは、全く別の次元の話であつたことを雛子は痛感した。以来、小説家になるという将来を夢見ることに臆病になつてしまつた。

それでも未だに雛子は、その夢を断ち切れずにいる。

「でもそうやって、必要な本を手にとって前を向こうとしてるだけ雛子は立派だと思うわ。」

すると愛子は、どこか憂いた表情でそう話しかけて来た。

愛子の将来を『夢』を知る雛子は、首を傾げながら彼女に問う。

「愛子だつて、漫画家になりたいって将来の夢のために頑張つているでしょ？」

この前だつて『漫画王に俺はなる！』つて本、買つてたじゃない？」

「あはは、実はあれまだ封を開けてないんだ。」

それにほら……うちの都合もあるから……。」

歯切れ悪く答える愛子の視線の先には、1つの雑誌が置いてあった。

その雑誌の表紙には『宮内コンツェルン、新事業開拓!』と大きく書かれている。

「宮内コンツェルン現社長のご令嬢として恥じぬ振る舞いを身に付けろつて、昔からそう言われてきたからね……。」

宮内コンツェルンの名は、世間的にもそれなりに知れ渡っている。

そして愛子は宮内コンツェルンの社長の娘だ。

愛子から聞いた話によれば、社長令嬢として恥じない素養を身に付けるために、幼い頃は淑女としての作法を学び、社長令嬢として著名人たちの集うパーティーにも何度か顔を出すこともあったようだ。

だが愛子の両親は、彼女の人生を縛るようなことはしなかったはずだ。

雛子は愛子が以前話していたことを思い出す。

「私の両親は、よく漫画とかに出てくる、お前は家の後を継ぐために生まれて来たんだ! 後継ぎのことだけを考えろ! と言う感じの親じやないのよ。」

お父様もお母様も、家を継ぐことに縛られる必要はない。

お前の好きなことをすればいいつて言つてくださつたわ。

だから私は漫画家を目指すの!」

そう嬉しそうに話していた。

だから雛子は今になって家に縛られる彼女の心境を測りかねていた。

「時々思うの。」

宮内コンツェルンの令嬢が漫画家を志しているってことが知られたら、お父様とお母様の名に傷をつけてしまうんじゃないかって。

そうでなくても、漫画家ってかなり茨の道じゃない？

沢山の人が志して、でも沢山の人が挫折している。

もし私が将来の夢をかなえられなかったら、お父様とお母様の思いを無駄にしてしまったら……そう思うとね……怖くてね。」

自分の心境を見透かしたように、愛子は心境を打ち明けて来た。

日本では漫画は子供の娯楽、大人になれば卒業するものと言う考えは未だに根強く残っている。

雛子はそれが納得できなかった。

漫画も小説と同じ、書物を媒体とする創作物だ。

創られた世界を表現する方法が文章か絵かの違いでしかないのに、なぜ漫画だけが子供の娯楽だと扱われなければならないのか。

そもそも漫画を描いているのは、他でもない大人だと言うのに。

だが愛子は、宮内コンツエルン社長令嬢が漫画という子供の娯楽に現を抜かしているという世間体を気にしているのだ。

それは愛子の両親の評価さえ落としかねないから。

両親から自由を許されたことが逆に愛子自身を縛り付けている。

そんな天邪鬼な愛子の立場がとても悲しく思えた。

「ねえ、雛子にはわかるでしょ？ 雛子だって、私と一緒にじゃない？」

確かに雛子の両親も、それなりに大きな会社を経営している社長だ。

つまり自分も社長令嬢、そして自分の家は、一般で見ればお金持ちであることも自覚している。

だが雛子は愛子の言葉に頷くことが出来なかった。

雛子は愛子と違い、著名人の集まるパーティーに出席したことがなければ、淑女の作法を学んだこともない。

両親には悪いなと思うが、雑誌で取り上げられるほど名が知れ渡っている宮内コンツエルンと比較すれば、両親の経営している会社なんて小企業もいいところである。

そもそも両親からはほとんど仕事の話も聞いたこともなく、家業を継げと言う言葉さえ出たことがない。

雛子にとって両親が会社を経営していると言うのは、他の子よりもお小遣いを多くもらえるのと、他の子よりも両親と過ごす機会が少ないという程度の認識でしかなかった。

同じ社長令嬢でも、愛子とは育ちも立場も違う。

だから雛子には、愛子と同じ心境に立つことなんて出来なかった。

「あつ……ごめんささい。失礼なこと聞いちゃって。

そんなことまで言うつもりじゃなかったのに……。」

沈黙した自分を見て、愛子は慌てて謝罪してきた。

だが言うつもりのないことまで吐露してしまったあたり、彼女は相当に思いつめているのかもしれない。

「愛子。」

「なっなに?」

「少しでも、一人で抱え込むのは無理だって思ったら、遠慮なく私にぶつけてね。

私、愛子の気持ちも苦労もわかってあげることが出来ないけど、悩みを聞くことなら出来るし、一緒に悩むことだって出来るから。」

友達が思いつめ悩んでいるのであれば、出来る限り力を尽くす。

それが友達として雛子ができる恩返しだ。

雛子にとって友達は、1人では知ることの出来ない世界を教えてくれる大切な存在だから。

「・・・ありがとう、雛子。」

それじゃあ、お父様たちを待たせているから、私はこの辺で失礼するわ。」

「うん。」

「雛子、また学校で会いましょう。」

「うん、また学校で。」

別れ際、愛子は少しだけいつものような明るい笑顔を見せた。

将来に対して漠然とした不安を抱いているのは自分だけではない。

雛子は愛子の将来を思いながら、自分の将来とも向き合っていくのだった。

∴

夢ノ宮ドリームプラザを、1人の青年が歩いていた。

190cmに近い身長。

水色の髪に青の瞳を持つ青年は、ドリームプラザを歩いていながら、道行く店には目もくれなかった。

青年の目的はただ一つ。自分が『選別』した『素材』のみ。

だが青年の前を一人の少女が横切った。

小柄な体躯のピンクの髪をした少女の方に青年は僅かに視線を向ける。

少女からは、ほんの少しだけ『闇』を感じる事が出来た。

だが意識しなければわからないほど微小なものであるにも関わらず、その闇は、底の知れない黒さが垣間見えた。

『表面上に感じ取れる闇』と『潜在する闇』がここまで極端に違うとは、非常に興味深い素材だ。

是非とも『熟成』してみたいところだが、初めて見るタイプだけに、もう少しだけ観察した方がいいだろう。

今回は大人しく、本来の目的である素材を使うことにしよう。

「見つけた。」

青年は視界の中に金髪の少女を捉えた。

その少女から感じられる闇こそ、青年がこの世界で選別してきたものの一つだ。

あとはあれを熟成させるのみ。

少女の姿を捉えた青年は、店の影に身を潜める。

そして右手を上には伸ばし指をスナップすると、青年の両足が鳥類のような鉤爪に、手は背に羽織るマントと同化し、その瞳は赤く染まっていった。

ダークネスの行動隊長、ダンタリアへと姿を変えた青年は一つの言霊を呟く。

「ダーンオーバー、希望から絶望へ。」

そしてダンタリアの足元から目に見えぬ空間が広がり、夢ノ宮ドリムプラザを覆っていた。

∴

雛子と別れた愛子は、買ったばかりの漫画を片手に見つめながら、親の元へと向かって行った。

「はあ。」

だが途中、ため息を一つ吐いてその場にとどまった。

先ほど雛子に投げた言葉を思い出し、後悔の念に苛まれる。

「雛子……ごめんね。」

この場にはない大切な友人に謝罪する。

愛子は自分の生まれや親のことを憎んだことは一度もないはずだ。

父親はいくつもの事業を抱える宮内コンツェルン社長としての責務を果たしているし、母親はそんな父を公私ともに支えている。

そんな両親は、愛子に取って心から尊敬する人たちだ。

昔は家業を継ぎ、両親の力になることが自分の夢であったほどに。

だけどもある日、愛子は漫画という本を知ってしまった。

様々な技法を駆使して描かれる漫画は、まるで絵の中に本当に世界が拡がり、そこに登場するキャラクターたちが生きているかのような錯覚を覚えた。

一瞬にして漫画の世界に魅了された愛子は、その日から将来思い描く夢も形を変えていった。

自分を心の底から楽しませてくれた漫画を描く側に、いつか自分も立つてみたいと思うようになった。

「ただ今はその夢も揺らいできている。」

「……私は……どうしたいんだろうね?」

愛子が自問自答をしたその時、

いつまで引きずっているつもりなの？

「え．．．？」

突然、声が聞こえた。自分に似た声が。

「見つけたよ。」

そして背後から男性の声でした。

これまで気配どころか物音一つしなかったのに、突然自分の両肩に手が置かれる感触があった。

「なっ．．．なに．．．？」

愛子は怖くて振り向くことが出来なかった。

「なるほど．．．それが君の絶望か。」

何かを納得したように、男性が呟く。そして

「君は、自分の夢が叶えられないのを、親のせいにするつもりなんだね。」

「っ!？」

わけもわからぬまま、背後に立つ男性に核心を突かれ、愛子は絶句する。

「ちがう．．．私は．．．。」

宮内家に生まれたから、社長のご令嬢だから、漫画家になりたいって夢は諦めるしかないって、そう言い聞かせれば納得出来るものね。

だが否定しようとした愛子の言葉を、愛子自身の声が遮った。

「親のせいに、生まれた家のせいにすれば、君は君の夢が叶わない『本当の理由』を隠すことが出来る。」

だから君は両親を、夢が叶わない言い訳の材料にするつもりなのだろう？」

男性から告げられた言葉を愛子は拒絶したかった。

だが男性の声が、自分の声が、少しずつ心の奥底に隠したはずの思いの浮上させていく。

そんなに認めるのが怖いのか？

私の部屋に置いてある白紙の用紙、インクの減っていないペン、そして未開封の『あの本』。

これだけのものを残しておきながら、よく目を背ける気になれるわね。

「叶うはずのない夢をずっと引きずり続けてきた証拠だよ。」

でもさ、いい加減目を背けるのは止めたら？

親のせいになりたい時点で、君は自分を納得させたい外的原因を探しているだけなんだよ。」

「いや……。」

「そう、もうわかっているはずだよ。君には。」

「いやだ……。」

私には

「やめて……。」

「夢を叶える才能なんて、ないんだから。」

「やめてええええええ!!」

自分には絵心がない。漫画を描く上での根本的な才能が欠如していた。

愛子はそのような自分の能力を認めなくなかったから、尊敬しているはずの両親に、夢を叶えられない責任を擦り付けていた。

自分の能力に対する嫌悪と両親への罪悪感。

心に封じていた内側を暴露された愛子は、絶叫と共にその場に倒れ込む。

そして彼女の周囲から膨大な黒い瘴気が噴出する。

背後に立っていた青年は、それを満足気な表情で眺めていた。

「クククツ、先ほどよりもさらに深く、大きな闇が生まれたね。

これだから『素材』の『熟成』は興味深い。

ダークネスが行動隊長、ダンタリアの名に置いて命ずる。

ソルダークよ、世界に闇を撒き散らせ！」

愛子から生まれた絶望の闇を使い、ダンタリアはソルダークを創り出す。

「ガアアアアアアア!!」

人々が姿を消し静寂に包まれたドリームプラザの中、ソルダークの産声だけが木霊するのだった。

：

レミンは雛子と一緒に中央の広間へと向かう途中、先ほど会話をかわした金髪の少女

について雛子に聞くことにした。

「雛子、さっきの金髪の子、雛子の知り合い？」

「ええ、私の友達で、宮内愛子って言うの。」

「その子と何かあったの？」

「どうして？」

「だって雛子、その子と別れてから、ちよつと元気ないよ？」

普段マイペースでフリーダムだと言われているレミンだが、雛子のごことは心の底から大切なパートナーだと思っている。

だから何かあったときに力になればと思ひ、彼女のことはよく見ることにしているのだ。

「心配してくれてありがとう。」

何かあったってわけじゃないよ。

ただあの子、ちよつと悩み事を抱えていてね。

私で良ければ力になりたいと思ってるのだけど、それも少し難しくて。

だからどうすれば力になれるのかなって考えていただけよ。」

そんな雛子もなるべく自分には隠し事をしないようにしてくれている。

お互いに本音をさらけ出せるような信頼を築いていきたいからと言ってくれたのだ。

レミンは包み隠さず打ち明けてくれた雛子に感謝しながらも、

つい『またか』と思ってしまう。

「もく、相変わらず雛子は優しいな。」

「え？」

褒め言葉の中に呆れを滲ませたレミンの口調に雛子は困惑する。

「レミンが初めて雛子のお家に来た時も、力になりたいって言ってくれたし、蛍の夢を叶えることにもすごく一生懸命になってくれてるじゃん。」

雛子く、そんなに人のために力を使えばっかりだと、その内疲れて倒れちゃうよ？」

「・・・私、そんなに人のためばかりに動いていたかしら？」

レミンの予想通り、雛子には自覚がないようだ。

友達思いの雛子はその献身的過ぎる性格から、友達のためとあらば身をすり減らしてまで尽くそうとする。

なのに身を削っている自覚が全然ないものだから、レミンは大きいため息をついて肩を落とす。

「・・・まあ、そんな雛子が好きだからいいんだけどね。」

自分に呆れられたことがショックだったのか、雛子は僅かに眉を落とす。

だが直後、レミンの全身に悪寒が走った。

「え．．．？」

「雛子！今のつて！」

そして周りにいる人々が次々と姿を消していく。

間違いない、ダークネスが闇の牢獄を展開したのだ。

「行動隊長の気配は．．．。」

雛子が周囲の気配を探り始めたその時、

「やめてええええええええええ!!!!」

物音一つしない空間に、少女の叫び声が響き渡った。

しかもその声は、レミンにも聞き覚えのあるものだった。

「ウソ．．．愛子!!」

そして最悪の事態を思い描いた雛子が絶句する。

動揺とショックが表情から隠せないでいる彼女を叱責するのは心が痛むが、レミンは心を鬼にして雛子の名を呼ぶ。

「雛子！」

雛子はレミンの声を聞き、すぐに我に返ってくれた。

「待ってて愛子。プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

キュアプリズムへと変身した雛子。

それに合わせてレミンはレモンへと姿を戻す。

雛子はレモンを肩に乗せ、叫び声が出た方へと飛び立っていった。

：

やがて雛子は、ダンタリアとソルダークの姿を補足した。

そしてソルダークの横には、黒の瘴気に覆われた愛子の姿があった。

「っ!? 愛子!!」

瘴気に覆われ色を失い、虚ろな目で空を見つめている友達の痛ましい姿に、雛子はた
まらず叫んでしまう。

「来たね、プリキュア。」

「その子から離れなさい!!」

激しい怒りの情に駆られながらも、雛子は決して我を忘れない。

自分の力は守りと治癒に秀でた力であって、要のように直接的な戦闘は得意ではな

い。

相手から攻撃を仕掛けてくる分には身を守ることは出来ても、自分から行動隊長とソルダークを相手に挑みかかったところで勝てるはずがないのだ。

「いいよ。お望み通り言うことを聞いてあげる。」

ソルダークを創り出せた今、もうこの子は用済みだからね。」

「っ……！」

愛子を侮辱されたことを、歯を食いしばり精いっぱい堪える。

ダンタリアの表情、口調から自分を挑発しているのが丸わかりだ。

愛子を確実に助け出すためにも冷静であればと、雛子は自分に強く言い聞かせる。

「ふっ、君はつまらないね。いけ！ソルダーク！」

すると自分の反応に興味をなくしたダンタリアは、ついにソルダークを向かわせた。

甲高い叫びと共に迫り来るソルダークを前に、雛子はいつでも盾を展開出来るように構える。

だが直後、目前まで迫ったソルダークが一瞬にして姿を消した。

「え？」

そして背後から強い衝撃が雛子を襲う。

「きゃあああっ！」

急ぎ態勢を立て直し振り向く雛子だが、やはりソルダークの姿は見られなかった。

だが再び背中に重い衝撃が襲い掛かる。

「うぐっ……。」

二度に渡って重い一撃を受けた雛子は足元をふらつかせるが、痛みを堪えて自身の周囲にバリアを展開する。

すると今度はバリアの表面に思い打撃音が鳴り響いた。

二度の攻撃とも、姿はおろか攻撃を受けるまで気配を感じることもさえ出来なかった。

だがバリアを透過することは出来ないことから、相手の能力はあくまでも姿と気配を消すだけのもののようだ。

それでもバリアを展開している内は相手の攻撃を受けることはないが、姿も気配も感じ取れないとなればこちらから攻撃を仕掛ける術がない。

受けたダメージを治癒の光で回復しつつ、雛子は打開策を練ろうとするが、ソルダークの打撃音が絶え間なく鳴り響き、ついにバリアがひび割れ始める。

「そんな守りでいつまで持ち堪えられるかな?」

ダンタリアが嘲笑する。

バリアに亀裂が生じ、ついに天井が崩壊し始めたその時、

「キュアプリズム!」

後方から青白い光が駆け付けて来た。

その後ろにはキュアシャインと妖精に戻ったチェリー、ベリーの姿もある。

仲間が駆け付けて来たところで僅かに安堵する雛子だが、直後キュアスパークが目に見えない何かに衝突した。

「いった！・なんやこれ!?!」

「ガアアアアツ!!!」

だがソルダークの苦悶の声も聞こえた。

どうやら相手にもダメージが入ったようだ。

「気を付けてキュアスパーク！キュアシャイン！

相手は姿と気配を消せるソルダークよ!」

「すがたとけはいを!」

「また厄介なソルダークを．．．え?」

キュアスパークが視線の先に何を見たのかを悟った雛子は、沈痛な面立ちで顔を下げ
る。

「愛子!!」

「え．．．あいこちゃん!!」

愛子の姿を目にした2人は、すぐさま駆け寄ろうとするが、雛子はそれを制した。

「落ち着いて2人とも！敵の姿が見えない以上、迂闊に動いては思う壺よ！」

「でも、姿も気配もわからない敵をどうやって探すってのさ！」

キュアスパークが声を荒げて反論するが、雛子はそれに動じない。

「だから落ち着いて！」

私に考えがあるから、2人は私の合図と同時にダンタリアを足止めして！

愛子を助けるためにも、お願いだから冷静になつて！」

叫びかける雛子は、2人の反応を待たずにバリアを展開した。

直後キュアスパークに展開したバリアに鈍い打撃音が響き、続いてキュアシャインのバリアにも同じ音が鳴り響いた。

だが雛子は自身の周囲にバリアを展開していなかった。

「キュアプリズム…あぶないよー」

キュアシャインがそれに気づき声をかけるが、キュアスパークはこちらを一瞥しただけで何も言わなかった。

それを彼女が自分を信頼してくれていると悟った雛子は内心お礼を言いながら、ダンタリアの方を向く。

（やっぱり、動かないのね。）

以前の戦いの経験から、ダンタリアはソルダークが不利にならなければ動かないと推

測できる。

彼は有利だと思っっている内は傍観する姿勢を崩さないのだ。

ならばその慢心を逆手に取り、ソルダークを今のうちに追い詰める。

だがその方法は1つしか思いつかなかつた。

それも策とは到底言えないような無鉄砲な方法だ。

「キュアシャイン、ここはキュアプリズムに任せよう。」

「・・・わかつた。」

キュアスパークが、キュアシャインを諫める。

バリアに守られていると言えば聞こえはいいが、裏を返せば2人ともバリアの中に閉

じ込められているため身動きが取れない。

キュアスパークから全てを委ねられた雛子は、打撃音が鳴り響く方向へと迫り拳を振

るつた。

「はああつ！」

そしてその拳には確かな手ごたえを感じられた。ソルダークは今、この拳の先にいる

のだ。

「なるほど、バリアを囷にソルダークの居場所をあぶり出そうってわけか。

だけど、考えが甘いね。」

だがダンタリアその言葉に、雛子は自分の作戦が成功したことを確信する。

そして『狙い通り』背中に再び重い衝撃が走った。

だが雛子はすぐさま背後に手を伸ばし、目に見えない何かを掴む。

「捕まえた。」

「なに？」

ダンタリアが驚きの表情を浮かべた直後、雛子は自身の中心に広大なバリアを展開した。

そして振り向き、目に見えない空間に拳を振るとその拳は確かに何かに当たった感触があった。

「この狭いバリアの中なら、闇雲な攻撃でもソルダークに当たるでしょー」

雛子は目の前に広がる空間に目掛けて、がむしやらに拳を振り回す。

その一撃一撃が確かな手ごたえと共に鈍い打撃音を轟かせた。

おおよそ知略とは言えない、なりふり構わない作戦だが、愛子を助けるためにも手段を選んでいる場合ではない。

「ふっ、僕が熟成したソルダークをなめてもらっては困るね。」

支援専門のキュアプリズム1人でいつまで相手を出来るかな？」

だがダンタリアは相変わらずその場を動こうとはしなかった。

そしてソルダークの反撃が始まる。

雛子には姿の見えないソルダークの攻撃をかわす術はなく、自分ごとソルダークをバリアに閉じ込めているため、距離を置くことも出来なかった。

キュアスパークと異なり、雛子の純粋な力はソルダークには及ばない。

力比べに持ち込まれた途端、雛子は徐々に押され始め、ついに膝をついた。

「キュアプリズムー！」

キュアスパークが叫ぶが、雛子は彼女を覆っているバリアを解除しなかった。

そしてソルダークを見据えるように視線をあげる。

「待っててね、愛子。もうすぐ助けるから。はあああああっ!!」

雛子は力強い雄たけびと共に、全身に治癒の光を纏った。

そのまま治癒の光を解除することなく、そのまま再びソルダークと応戦する。

雛子とソルダークは互いにダメージを受け合うが、雛子身に纏う治癒の光で再びダメージを即座に回復する。

「なに?」

ダンタリアが驚きこちらを見る。

雛子は治癒の光を常時展開し、受けたダメージを一方的に回復し、ソルダークのダメージのみを蓄積させていく作戦に出たのだ。

雛子の希望の光が尽きるのが先か、ソルダークが倒れるのが先か。

一か八かの根競べだが、雛子は不思議と負けるなんて微塵も思わなかった。

愛子を助けたいという一心が、雛子に無尽蔵の力を与え続けているかのようだった。

「ちっ。」

そしてついにダンタリア自らが戦場へと狩り出る。

だがそのタイミングを見計らい、雛子はキュアスパークとキュアシャインを守っていたバリアを解除した。

「つと、よし、ダンタリアを止めるよ。キュアシャイン！」

「うん！」

キュアスパークとキュアシャインは2人がかりでダンタリアの足止めに向かう。

さすがのダンタリアも、プリキュア2人を相手にするのは分が悪いと見たのか、積極的に攻撃を仕掛けようとはしなかった。

やがて雛子の攻撃を受け続けたソルダークが力尽き、ついにその姿を現した。

だが既に身動き一つ取れないほどのダメージを蓄積させていたためか、姿を見せるや否やその場に倒れ込む。

「妙だね。君のどこにそれほどの力があると言うのだい？」

「わからないでしょうね。」

奪い壊すことしか出来ないあなたたちに、大切な人を守りたいって思いが強い力を生み出すってこと、一生わからないでしょうね！

光よ、降りろ！プリズムフルート！」

ダンタリアの問いに応えながら、雛子はプリズムフルートを吹き、優しい音色と共にソルダークを水晶に閉じ込める。

「プリキュア！プリズミック・リフレクション！」

そしてフルートの先端から放たれた光が水晶の中で乱反射し、ソルダークを包み込み浄化していった。

「キュアプリズム、君の評価を改める必要がありそうだね。」

ソルダークを失ったダンタリアはそう言い残し、その姿を闇へと消すのだった。

：

闇の牢獄が解除され、消えていった人々が再び姿を現し始めた頃、雛子たちは変身を

解除し、愛子の元へ駆け寄った。

雛子は愛子を抱え、静かに体を揺さぶる。

「愛子、愛子。」

そして名前を呼びかけると、愛子は目を開き、雛子の顔を覗き込んだ。

「あれ・・・？雛子？」

「大丈夫？具合悪くない？」

「平気・・・だけど、何で？」

「良かった！」

愛子の無事を確認した雛子は、たまらず彼女を抱きしめる。

だが闇の牢獄にいた時の記憶がないのか、愛子は困惑を隠せないでいた。

「わっ、ちよつと雛子、一体どうしたのよ？」

「まっ、大丈夫そうで何よりだね。」

「あいこちゃん、よかった。」

「あれ？要に蛍ちゃんまで、一緒に来てたんだ。でも良かったって？」

「愛子が将来の夢のことで悩んでいるって聞いて、2人とも心配してたのよ。」

雛子も少しずつ落ち着きを取り戻し、愛子を解放しながら2人の言葉をフオーロした。

当然、2人はまだ話していない内容だったが、2人とも本当のことを隠すための詭弁だと悟ってくれたので、それ以上のことは聞かずに静かに同意してくれた。

すると愛子は少しだけ表情に陰りを見せた。

愛子が闇の牢獄に囚われた理由に心当たりがある雛子は、敢えて追求せずに彼女の言葉を待った。

「さっき雛子に話したことね、実は・・・ウソなの。

ホントはね、お家とか両親とかって関係ないんだ。

ただ・・・私、絵が下手で、そんな私じゃ漫画家になるなんて夢、叶えられっこなくて。

それを認めたくなかったから・・・誰かのせいにしたかっただけなの・・・。」

愛子の静かな独白を雛子は黙って聞き入れる。

雛子は彼女が自分に嘘をついたことも、誰かのせいにすることで自分を納得させようとしたことも、怒りを感じることはなかった。

それでも友達が間違ったことをしたら、それはちゃんと注意しなければいけない。

それは要からの受け売りだ。

「確かに、誰かのせいに、まして自分の親のせいにするというのは、

褒められたことではないわ。」

雛子の言葉を受けた愛子は、いつそう沈んだ表情を見せる。

「でもそれって、愛子が夢を諦めたくなかったからだよね？」

「え？」

「愛子は、夢を叶えられないってことを認めたくなかった。

だから他の理由を見つけて、自分を無理やり納得させようとしたのでしょ？」

自分の能力に対する不満と、将来の夢に対する不安。

それは雛子自身にも覚えがある。

雛子も小説を書くことの難しさを知り、何度も挫折を味わったのだ。

でもその度に、叶えたい夢の大切さを思い知り、何度も立ち上がって来た。

だから雛子は、愛子の夢を応援したかった。

今なら彼女の気持ちに分かることが出来るから。

「だったら、自分を無理やり納得させるよりも、もっと頑張ってみようよ？」

下手でもいい、失敗したっていい。それでも、将来叶えたい夢があるから、私たちは今、勉強しているんだよ？この、夢ノ宮市で。」

子供の夢を叶える街、夢ノ宮市。

雛子はそのキャッチコピーが大好きだった。

雛子は自分が買った本を愛子に見せる。

それを見た愛子は、自分の手元にある漫画に視線を落とし、両手で強く抱き締めた。
「・・・そうだね。もう少しだけ頑張ってみようかな。」

「うん。」

「・・・ねえ雛子、もし、私がまた夢のことで悩んでたら、お話聞いてもらってもいい？」
「勿論、愛子の悩みならいくらだって聞いてあげるし、愚痴りたくなったら、サンドバッグにだってなつてやるんだから。」

雛子の言葉に、愛子は思わず吹きだした。

だが冗談交じりに聞こえたその言葉は雛子にとつては嘘偽りのない本心だった。

「もう、雛子には敵わないわ。でも、ありがと。」

「愛子、頑張つてね。」

「うん！」

そう答える愛子の顔は、一切の不安がなく晴れやかなものだった。

雛子は今の一時だけでも、彼女が不安から解放されたことを喜ぶのだった。

∴

「蛍ちゃん、お泊まり会、楽しかった？」

夢ノ宮ドリームプラザを後にした雛子たちは、バス停前でバスが来るのを待っていた。

「うん！とつても、たのしかった！」

満面の笑顔で答える蛍。可愛い。

「良かった。」

「わたし、きょうのこと、一生わすれないから！」

「なに一度きりの思い出みたいに言ってるの？」

また暇があつたらいつでもお泊まりしような？」

「いいの!？」

「勿論よ。」

「ふたりとも、ありがとう！」

喜びはしやぐ蛍の姿を可愛いと思いつながら、雛子は次に叶えられそうな彼女の夢を探った。

あの時自分と要の目の前で蛍が語った夢想の数々は、今でもはつきりと記憶に残っている。

「それじゃ、次は勉強会をしましょうか？」

「げっ!?それもやるの!？」

だが蛍よりも要の方が先に勉強会と言うワードに反応してきた。

要のためにやるわけではないと心中で毒づきながら、雛子は要が忘れていた情報を伝える。

「当然でしょ? ゴールデンウィーク明けたらすぐに中間試験よ?」

「忘れてたあああ!!」

「だから蛍ちゃん、中間試験の前に、みんなで勉強会しましょう?」

「わーい!!」

対照的に蛍は両手を大きく振りながらその場を飛び跳ねた。

そんな可愛い蛍の姿を見ながら雛子は思う。

勉強会の時は、蛍はどんな風に喜んでくれるのだろうか。

この先、彼女の夢を叶える度に、こんな素敵な笑顔を見続けることができるのだろうか。

自分は蛍の笑顔が何よりも好きだ。

だからこれからも先、ずっと彼女の笑顔を守って行こう。

そのためならきつと、自分は何だって出来るだろう。

そう思いながら雛子は、また近いうちにお目にかかれるであろう、彼女の笑顔に思いを馳せるのだった。

：

次回予告

「おカーさん、いつもおそくまでおしごと、おつかれさま。

おカーさんのちからになりたくて、おりようりとか、おそうじとかおぼえたけど、

ほたるは、おカーさんのちからになれたかな？

あしたは、ねんにいちどのたいせつな日。おカーさんに感謝のきもち、つたえるね。」

次回！ホープライトプリキュア第9話！

「いつもありがとう！母の日のプレゼント大作戦！」

希望を胸に！がんばれ、わたし

第9話

第9話・プロローグ

ゴールデンウィーク最後の週末。

蛭は外出の支度をしながら、小学校に入る少し前のことを思い出していた。

保育園から帰って来た蛭は、たまたま休みだった父と遊びながら母の帰りを待っていた。

そして日が暮れた頃、仕事を終えて帰宅した母は、部屋に鞆を置いて着替えてから休み間もなく夕食の支度に取りかかったのだ。

蛭はそんな母の姿に細やかな疑問を抱き、父に問いかけた。

「ねえ、おとーさん。おかーさん、つかえてないの？」

蛭には自覚がなかったが、父と母が言うには当時の蛭は今以上に舌足らずで、特にラ行の発音が上手く出来ていなかったらしい。

そんなまだ呂律も上手く回っていないなかった頃の蛭だが、幼いながらも、母の一日の生

活が重労働であることに気づいていた。

朝早くから夜遅くまで外で仕事をし、家に帰れば夕ご飯の支度。

休日も炊事、洗濯、掃除と主婦業に追われ、まともに体を休めているような日がないように思えたのだ。

「大丈夫、お家の中のこと、お母さんの仕事だからね。

蛭はお母さんのお邪魔しないように、ここで遊んでなさい？」

その時の父の『大丈夫』という言葉が、蛭を不安にさせないための優しいウソであることには気づいていた。

同時に母の顔がどこか優れていないことにも気づいたのだ。

そしてその日の夜、父と母の間で寝ていた蛭は、自分よりも早くに熟睡した母を見て、母が疲れている原因を自分なりに考えるのだった。

(おしごとでつかえて・・・ごはんつくって、つかえて・・・そえかあ・・・)
そこで蛭はもう1つの原因に思い当たる。

人見知りの強かった蛭は、保育園に通っていた頃から友達がいなかった。

その上両親以外の大人のことはみんな怖がっており、先生のことも恐れていたのだ。

その反動で、父と母にはベツタリであり、特に母に対しては、自分の言うことであれば何度も聞いてくれると信じていたので、随分と無理な我儘を言ったのだ。

我儘を聞いてもらえなければ、大声で泣くこともしよっちゅうだった。

(ほたうの・・・せい?)

もしそんな自分の面倒を見ることが、母の疲労に繋がっているとしたら。

弱虫な自分が、我儘な自分が、母に負担をかけていたのだとしたら、

そう思った時、蛭は弱虫な自分が大嫌いになった。

(・・・ほたうのせい、おかーさんがつかえてるなんて、

そんなの、やあ・・・)。

その時から蛭は、せめて母の負担を減らすために、家での仕事を手伝おうと思ったのだ。

そして次の日、その思いから朝早起きをすることが出来た蛭は、母の立つキッチンへと向かった。

「蛭?こんな時間にどうしたのよ?」

普段なら、母に起こされて起きる自分が、一人で起きてきたことに母は驚いた。

「あのね、ほたう、きよおから、ごはんつくうの。」

「え?」

「おかーさん、つかえてうの。だから、ほたうがおうちのおしごと、

おかーさんのかわいに、ぜんぶやうの!」

最初は驚いていた母だったが、次第に笑顔を見せて蛍に料理を教えてくれた。

それ以来蛍は料理だけでなく、母から家事全般を教わるようになった。

そして小学生に上がると同時に、一人で自立するために母にはもう甘えないと誓った。

一人部屋を与えてもらい、目覚まし時計も買ってもらったので、母に起こしてもらうこともなくなっていた。

母親つ子であることを自覚している蛍は、母親離れすることが寂しかったが、それ以上大好きな母の力になれることを喜んだのだ。

「おかーさん……。」

そして今の自分は、母に教えられたことを全て身に付け一人で家事全般をこなせるようになり、その過程で料理の楽しさを覚え、それが転じてお菓子作りも学んだのだ。

懐かしの記憶を振り返った蛍は、現実へと意識を戻してカレンダーを見る。

明日は5月の第2日曜日。つまり母の日だ。

日頃から母への感謝の気持ちをおぼわすことはなく、明日はそれを形として伝える、蛍にとっては一年で最も大切な日なのだ。

「ことは、どんなプレゼントをしようかな・・・。」

ここに引越してから初めての母の日。

商店街やショッピングモールにはどんなプレゼントが売っているのだろう。

虫はプレゼントに思いを馳せながら、家を後にするのだった。

第9話・Aパート

いつもありがとう！母の日のプレゼント大作戦！

夢ノ宮市民体育館に、バスケットボールが床を弾む音が鳴り響く。

蛍と雛子は妖精たちを連れて、夢ノ宮市民体育館で行われている女子バスケット部の練習試合を見学していた。

要が初めてスターティングメンバーを務める試合は既に佳境を迎えており、要たちのチームが1ゴール差でリードしている。

「かなめちゃん！がんばってー!!」

要にボールが渡り、蛍は大声で応援する。

このまま無理に攻めず、ボールをキープし続けることが出来れば要たちのチームの勝利だが、要はその選択肢を取らず理沙と共に敵コートへと駆け出した。

「ペースダウンして敵に反撃のゆとりを与えるくらいなら、勢いに任せて徹底的に攻める。」

「要らしい考えね。」

隣に座る雛子が微笑みながら解説する。

電光石火の如く敵コートに切り込んだ要は、そのままシュートの姿勢に入り、

「理沙！」

後方にいる理沙にパスを送った。

敵の要にディフェンスが集中し、フリーになつていた理沙はそのまま鮮やかにミドルシュートを決める。

「ピィ〜!!」

そして試合終了の笛が鳴り響いた。

「やったあー！」

「わっ！ちよつと蛍ちゃん！」

蛍は嬉しさの余り雛子に抱きつき、雛子は困惑しながら蛍の頭に手を置きながら、要に向かつて静かに微笑んだ。

蛍も要に視線を向けると、要はチームメイトに囲まれながらはしやぎ理沙に向かつて手をあげた。

要の意図に気づいた理沙は、無表情だが、同じように手をあげハイタッチをする。要の初試合は、理沙とのコンビネーションで見事に勝利を収めるのだった。

「さく、午後から何して遊ぼっか？」

帰り道、要からまさかの遊びの誘いが来たことに蛭は驚いた。

「え？かなめちゃん、つかれてないの？」

「練習試合の1つや2つ、昼飯前だって。」

要の言う通り今はちょうどお昼時、蛭も家に帰って昼食を食べようと思っていた：、ではなく、あれだけ激しい運動をしたのであれば疲れも相当なものではないのだろうか。

自分なら丸一日ベッドの上で動けなくなっているだろう。

「心配しなくても、要はバスケの試合をやれば1日くらい飲まず食わずでも持つわよ。」
すると雛子が、要はスポーツを主食に動いていると言わんばかりの皮肉を飛ばした。

普通に考えれば運動した分、体力を消耗するはずだが、要は以前雛子に身体を動かさなければ病気になるまで言われており、実際ここまで常日頃動いていないと気が済まない彼女の様子を見ると、どこまでが冗談なのかわからなくなってきた。

「蛭、真に受けていいから。」

例によつて顔に出ていたのか、要が呆れた口調で注意する。

蛭も要に対して失礼な印象を少し持つてしまったことを反省した。

「まあ別に私は暇だからいいけど、蛍ちゃんはどうか？」

「えっと、ごめんなさい。わたしちよっと、用事があつて。」

蛍は申し訳なさそうに視線を下げながら謝罪する。

「用事つて？」

「あした、おかーさんの日、だよね？」

「お母さん？ああ、母の日ね。」

「うん。」

だから、今日はごはんたべたら、商店街までプレゼントをかいにいこうつておもつたの。」

「蛍はエライなあ。ウチなんて母の日のことなんかすっかり忘れてたよ。」

「え？」

その言葉に蛍は顔をあげて要を見る。

蛍にとつて一年で最も大切な日を、要は『なんか』、『忘れた』で片づけてしまったのだ。

「まっ、どうせお兄あたりがなんか買ってくれるだろうし。」

それに、いつも宿題しろだのゲームし過ぎだのご飯食べたなら食器片付けろだのつて口うるさいオカんにプレゼントしろつて言われてもねえ。

ウチのなけなしのお小遣いをそんなことに使いたくないよう。」

反抗期知らずの母親つこである蛭には、母に悪口を飛ばすことなんてとてもじゃないが、できないが、対照的に要の言葉は、大事にも小事にも小言を言う親のことを鬱陶しく思う、実に反抗期真つ盛りの言葉と言える。

だが叱られている内容のほとんどが本人に非のあることを百歩譲って置いたとしても、要にとつては口うるさくて嫌な母だとしても、毎日要のために家事をしてくれる母に対する感謝の言葉もないまま、嫌なところだけをあげてきたのに対して蛭は少しだけムツとなった。

「む、ダメだよかなめちゃん。」

「蛭？」

「かなめちゃんにとつて、どんなにおつかない、おかーさんだつたとしても、まいにち、かなめちゃんのために、ごはんつくつて、おせんたくして、おそうじしてくれてるのは、そのおかーさんなんだよ？」

「だから、あしたくらい、おかーさんにちゃんと感謝のきもちを、つたえなきやダメなの。」

「むむむ……。」

珍しく眉をひそめて注意する蛭に対して、要は言葉を詰まらせる。

すると雛子がやや呆れた表情で、要に代わって会話を繋いだ。
「安心して蛍ちゃん。」

こうは言ってるけど要、ちゃんとおばさんに感謝してるのよ？

母の日なんて忘れてたとか言いながら、毎年おばさんへのプレゼントを欠かしたことはないんだから。」

すると要のことを良く知る雛子が、反抗期真っ盛りな態度に隠された要の真意を暴露した。

その言葉を聞いた要は、顔を赤くして狼狽える。

「ちよっ、雛子。」

「おばさんや瞬さんの前ならまだしも、蛍ちゃんの前で意地張ってもしょうがないでしょ？」

照れ隠しは家族の前だけにしなさい。」

「誰が照れ隠ししてるって!？」

要の様子を見て蛍は、彼女が普段母親に対して反抗的な態度を取ってしまったている分、素直にプレゼントを渡すのが恥ずかしくて意地っ張りになっていただけであることを確信した。

雛子のおかげで要の母に対する本当の気持ちを知ることが出来た蛍は、要の方を見て

微笑む。

そんな虫に要は、バツの悪そうな表情を浮かべた。

「それじゃ、お昼を食べたらみんなでお母さんへのプレゼントを買いに行きましようか？」

「え? いいの!?!」

そんな雛子の思わぬ提案に虫は喜ぶ。

遊ぶ予定を断つてしまっていたので、今日はもう、要たちと一緒にいられないと思っていたのだ。

「要もいいわよね?」

「・・・はいはい、わかりましたよっと。」

そして要はそっぽを向いて頭を掻きながら、雛子の提案を承諾するのだった。

：

「それじゃ、おゆうはんの、おかいものしてからかえってくるね!」

「いつてらっしやい、蛍。」

昼食を終えて玄關に立つ蛍は笑顔で家を出ていった。

陽子はそんな愛娘の姿を見て微笑む。

クラスの友達と一緒に出かけることが楽しみなのだろうか、それだけでないことを陽子は知っていた。

蛍の見せた笑顔は、毎年今の時期に良く見せるものだからだ。

そして蛍自身はサプライズのつもりでプレゼントを渡す直前まで頑張つて隠そうとしているのです、例えば表情と態度でわかっている、見ぬふり知らぬふりをしなければならぬのだが、そんな時間さえも自分にとつては愛しいのだ。

「蛍、今年はどうな素敵なプレゼントをくれるのかしらね？」

そんなことを期待してしまうのは親バカたる所以だろうが、蛍から貰えるプレゼントは真心がとでも込められており、陽子を幸せな気持ちで満たしてくれる。

愛娘が一生懸命考えて買ってくれたプレゼントを楽しみにしない親なんていないのだ。

「やれやれ、お前もいつもこの時期、蛍と同じ顔をするな。」

「あらっ？そうかしらっ？」

夫の健治が茶化すように笑う。

夫だつて父の日は、それこそ自分以上にだらしない顔でニヤけていくくせに。来月の父の日には、今日言われたことを言い返してやろうと心に誓う陽子だった。

：

モノクロの世界。リリスはかの地へ降りるために自らの姿をリリンへと変えていた。「仕事熱心だね。ここ最近、頻繁にかの地に降りているじゃないか。」

するとダンタリアとサブナックが姿を見せる。

「・・・何かようかしら?」

「プリキュアの正体を探ると言う任務は順調か?」

「あなたたちには関係ないでしょ。」

言葉には出さないが、実際のところ順調とは言えなかった。

あの虫と言う少女。隠し事が苦手なくせして、予想以上に口が固いのだ。

彼女と再会してから既に3度ほど接触しているが、いずれもプリキュアを連想させるワードに反応を示しながらも、何を知っているかについては話してはくれなかった。

当初想定していたよりも事が上手く運ばずにいるリリンは、蛍以外の情報源となる人間を見つけることも視野に入れる必要が出てきたので、かの地の情報を集めるためにも、以前よりも頻繁に地上に降りることになっていったのだ。

「その様子だと、思っていた以上に手こずってるみたいだね。」

聡いダンタリアからそのことを見抜かれ、リリンは彼を睨み付ける。

「ならば、我らが得た情報を一つ、貴様にくれてやろう。」

するとサブナツクから思わぬ言葉が飛んできたのだ。

「なんですって?」

2人がかの地に降りたときの動向など気にしたことはないが、2人に与えられた指令は、かの地を闇に堕とすことのみのはず。

その障害となるプリキュアとの戦いには積極的だが、自分のように情報収集に専念するようなことはないと思っていただけに意外だったのだ。

「夢ノ宮中学校。かの地にある教育機関の名だ。」

以前その施設を利用している人間を素材にしたことがあつてな。

その時キュアスパークが素材の名を知っていたのだ。

ならばプリキュアたちも、普段はその施設を利用している可能性があるとは思わんか

？」

サブナックにしては珍しく良識的な見解だが、リリンはため息をつく。

「古いわね。その程度の情報、とつくに掴んでいるわよ。」

「何？」

それはプリキュアの正体を暴くという指令を受けた時から既に考えていたことだ。

リリンを含め、ダークネスの行動範囲の中で一番近い教育機関が夢ノ宮中学校であることは調べがっている。

プリキュアたちがあの街で人間の小娘として生活しているのだとしたら、間違いなくその施設を利用しているだろう。

無論、プリキュアが本当にあの街に住んでいるのかは定かではないが、キュアブレイズを除く3人があの街で覚醒したことから可能性は高いはずだ。

第一そんなところまで疑い出せば、それこそプリキュアの居所を突き止めるために、かの地をくまなく探して回らなければならなくなるので、その結論に至るにはまだ早いのだ。

「さすが、僕たちの中で一番、かの地に足を運んでいるだけのことはあるね。」

おおよそ褒めるつもりがあるとは思えないほど皮肉めいた口調で語るダンタリアを、リリンは無視する。

「これ以上あなたたちと話すことはないわ。」

そして2人に背を向け、かの地へと降りていくのだった。

夢ノ宮市へと降りたりリリンは、いつもの噴水公園を訪れた。

時計を見ると時刻は正午を少し過ぎたところ。

暦や時間を数えることにも少しずつ慣れて来たリリンは、この時間なら虫はまだ学校であることに気づく。

それならばいつも通り、この人間社会のルールについて学ぶとしよう。

リリンと言う人間としてこの街で過ごすことが多くなつた以上、怪しまれない行動は心掛けなければならない。

そのためにもこの世界のルールを覚えておく必要があるのだ。

もしもこの地の行政機関に目を付けられるようなことがあれば、この街に訪れること自体が困難となるだろうし、この街から離れることになつてしまえば、任務の遂行に大きな支障をきたすことになる。

キュアシャインから受けた雪辱を晴らすためにも、今は必要以上に慎重に行動しなければならぬのだ。

と、そこでリリンは、今日が『土曜日』であることを思い出した。

「そっか・・・たしか今日は『休日』だったかしら。」

この世界についてリリンが最初に覚えたのが、人間たちの時間の使い方だ。

時間を知らないリリンはまず1秒の感覚を体で覚えるところから始め、そこから時の数え方を学んだ。

60秒を1分、60分を1時間、そして24時間を1日と定め、1日には7つの呼称があり、そして7日間を1週と定めている。

そして今日は『土曜日』であり、『休日』であるならば、学校は休みだったはず。

正午を僅かに過ぎたこの時間でも、蛍がこの場を訪れる可能性が高いのだ。

そう思い当たったリリンは、しばらくこの場所で時間を潰そうと思ったが、

「あっ・・・リリンちゃん!!」

後ろから上擦った声で自分の名を呼ばれた。リリンには振り向かずとも、誰だかわかる。

そして声の方へ向いてみると予想通り、笑顔を浮かべてこちらへ駆け寄る蛍の姿があった。

「ひさしぶりーリリンちゃん!!」

挨拶しながら蛍はこちらに飛びついてくる。

だが蛍に抱きつかれることにもいい加減慣れてきたリリンは、いつも通りトモダチの

仮面を被って微笑む。

「ひさしぶり、ほたる。今日はどうしたの？」

「あのねあのね、あした、おかーさんの日だから、

みんなでおかーさんへのプレゼントをかいにきたんだ！」

そう語る蛍の後ろを見ると、以前も一緒にいた要と雛子、それから要と同じ色の髪をした男性の姿があった。

外見から察するに、蛍たちとは歳が離れているように見える。

最も蛍のような『例外』もいるため、見た目だけで歳が決まるわけではないが。

「つたく、お兄まで来んくて良かったんに。」

「オレもお袋へのプレゼント買おうと思ってたところやからな。」

心配せんでもちやつちやと買って、ちやつちやと引き上げるから邪魔せんよ。」

「あつ、しょうかいするね、リリンちゃん。」

このひとはしゅんさんっていつて、かなめちゃんのおにーちゃんなの。」

「どくも、要の『おにーちゃん』の瞬でくす。」

「うっわ、キシヨクわる。」

「リリンです、はじめまして。」

リリンは形式ばったお辞儀をする。

使い物になる可能性はほとんどゼロに近いが、駒のアテを多めに持つておくに越したことはない。

念のため瞬の顔と名前を記憶する。

「リリンちゃんも、明日のプレゼントを買いに来たの？」

雛子からそう質問されたリリンだが、当然明日が何を意味するかは分からなかった。

だが、聞き方から察するに、この世界の人間ならば知っていて当然のことを聞かれているようだ。

その答えを導き出すため、リリンはここで交わした僅かな会話を辿る。

蛭は明日のことを『おかーさんの日』と言っていた。

『おかーさん』は母親を表す呼称の一つ。その言葉にリリンは商店街に掲げられていた『母の日のプレゼントキャンペーン』という横断幕を思い出す。

つまり蛭の言う『おかーさんの日』とは『母の日』のことだろう。

祝日の類まではさすがにまだ覚えられていないリリンは、その母の日とやらが何を意味するかはわからないが、少なくとも蛭たちはその日に母へプレゼントをするつもりのようなのだ。

「そうゆうわけではないのだけど、よかつたら一緒にしてもいいかしら？」

リリンは敢えて、雛子の質問に対して正直な返答をする。

嘘でも肯定の意を示せば相手に容易に取りつけるが、ただでさえトモダチの仮面を被り、偽りの姿を持って接している今、不用意な嘘はリスクが伴う。

言葉の大半を嘘で塗り固めてしまうと、いずれどこかで言動の整合性が失われてしまう危険性があるからだ。

無論、まだ知らぬことが多い以上、この世界の人であれば誰もが知っていることを知らない、非常識なやつであると思われるリスクも孕んでいるが、今回に関しては手は打ってある。

間髪入れずに蛍に『一緒にいてもいい？』と言う意を含んだ質問を返せば。

「もちろんだよーリリンちゃんもいっしょにプレゼントかおっー！」

予想通り、こちらの行動を不自然に思う間もなく、蛍が大きな声で了承してきた。

念のため要と雛子を観察するが、プレゼントを買いに来たわけではないことを訝しむ様子はない。

どうやら警戒しすぎていたようだ。

そして自分を抱く蛍の力が強まる。

一緒にいることの何がそんなに嬉しいのか未だに理解出来ないが、相も変わらず扱いやすい子だ。

蛍と自然に同行することが出来たリリンは、いつものように蛍の隠していることを暴

くタイミングを伺いながら、トモダチのフリを続けるのだった。

：

要たちは母へのプレゼントを求めて商店街へと訪れた。

毎年この時期の夢ノ宮商店街は、『母の日感謝セール！』と言う名のセールスキャンペーンで持ち切りだ。

プレゼントの定番であるカーネーションを大量に仕入れる花屋を始め、多くの店が母の日限定の商品を仕入れている。

それも普段扱っている商品よりも単価が高めであることに、随分と商魂の逞しさを感じるものだ。

だがプレゼントは気持ちが一番大事と言うが、良質な品であればそれに越したことはない。

そして値段と品質と言うのは得てして比例するものだ。

蛍が言うところの日頃の感謝の気持ちを込めた母へのプレゼントに、より良いものをあげようと思う人も多く、母の日限定商品の売れ行きは自然と高い傾向にあるのだ。

「プレゼント、何買おつかね〜。」

かく言う要もよほど高額なものでない限りは、母の日のプレゼントにケチをするつもりはなかったが、今回ばかりはそうはいかない。

「つても、お前の財布もう余裕ないやろ？」

「まあね。」

はあ・・・今年のプレゼントは、だいぶ侘しいものになりそうやな。」

兄の言う通り、今の要はあまりお金に余裕がない。

今月入ってからすぐに、貯金したお小遣いを兄と出し合つて、新型のゲーム機とソフトを数本、買ってしまったからだ。

おかげで5月に入つてまだ上旬だと言うのに、懐事情は非常に寂しいものになっている。

そもそも要自身、月々もらうお小遣いはほとんどその月の内に使い切つてしまふ、典型的な宵越しの銭を持たないタイプなのだ。

ゲーム機など、数万単位の額がするものを欲しがらない限りはお金を貯金しようとは思わないし、ゲーム機なんかは一台買えば同じハードで数年は遊ぶことが出来るので、貯金する周期も必然的にその同じような時期になつてしまふ。

結果として要には貯金するという習慣がなかなか身につかなかつた。

「まつ、どうせあの鬼オカンへのプレゼントなんやし、『美味しい棒』でも何でもいいからテキトーに買ってこ。」

「お前お袋がないからって……。」

兄が聞いている隣で、この場にはいない母への悪態をつきながらお店を見て回る要だが、ふと花屋の方を見ると、バスケットの中に添えられた綺麗なカーネーションが目にとまった。

「……あれ？これももしかして造花？」

近づいてよく見るとペーパークラフトで作られたものようだ。

一瞬、本物でないことに落胆してしまったが、上品な紙材で作られているそのカーネーションは、隣に並べられた本物と比較しても遜色のない鮮やかな赤色をしており、要は思わず目を奪われる。

それに、いずれは枯れて散る本物の花とは違い、造花は枯れることなく形を保つものだ。

母への感謝の気持ちをずっと形に残すことが出来るのも悪くはない。

要は商品にかけられた値札を見てみるが、

「げっ……。」

高すぎる、と言うほどではないが、財布の中身が大恐慌状態である今の要には、到底

支払える額ではなかった。

ゲーム機の発売日と母の日が連なる問題があったとはいえ、こんなことになるのならもっとお金を貯めておくべきだった。

そんな後悔をしながら深くため息をついた要は、花屋を後にしようとするが、

「ほい、オレからも半分だすわ。」

「え？ いやいや、さすがに悪いよ。」

確かに兄に半分を負担してもらえれば、今の要でも支払うことが出来るだろうが、自分が払えないからと兄に気を遣わせてしまったようで、要は申し訳なくなる。

「変な遠慮はいらんよ。」

オレもこれプレゼントしたいって思っただけやし、やからお互いに半分ずつ出し合っ
て買う。それだけやて。」

兄の言葉がどこまで建前かはわからなかったが、同じものを母にプレゼントしたいと思えたことに要は少しだけ喜びを感じた。

「・・・ありがと、お兄。」

「綺麗な造花やん。お袋、絶対に喜ぶで。」

「.....」

こちらを見て微笑む兄から視線を反らしながらお金を受け取り、要は顔を赤くしてレ

ジへと向かうのだった。

：

要が花屋でプレゼントを買い、包装してもらっている間、雛子は蛍たちと他のお店を見て回った。

「あつ、わたし、あつちのアクセサリーショップみにいくね。」

蛍がアクセサリー店の前で止まり、店を指でさす。

「ひなこちゃんはどう?」

「ん、私は他のお店を見て回るわ。」

雛子は毎年、母の日のプレゼントには今、母が必要としているものを選ぶようにしている。

そして母がアクセサリーを欲しがっていた記憶はなかった。

「それなら、あたしがついてくわ。」

「わかった。リリンちゃんいこっ! ひなこちゃん、またあとでね。」

蜜が手を振りながらリリンとアクセサリーショップへ入っていくのを見届けた後、雛子は母が何を欲しがっていたかを考えながら店を探して回る。

「あらっ。」

すると古くからあるお店が並ぶ中、ひと際小奇麗な店舗が目にとどまった。

雛子はそのお店が、数年前にオープンしたハーブティーの専門店であることを思い出す。

店の前に立っている看板には、『家事で忙しいお母さんへ』と書かれており、疲労回復の効能を持ったハーブティーが割引で売られていた。

「お母さん、今年に入ってから働き詰めだったし、こうゆうプレゼントもありかしら。」

今年の始め、父が経営している会社の事業を拡大すると話していた。

社長夫人にして秘書である母は、そんな父をずっと陰ながら支えているのだ。

そのために、これまで以上に多忙な日々を送っており、父と共に家に帰らない日も多かった。

ゴールデンウィークの頭に、夫婦で旅行に行けたことが奇跡なくらいである。

母がハーブティーを欲していた記憶もないが、雛子は多忙な母にリラクゼーションの効能があるハーブティーをプレゼントしたいと思ったのだ。

「お客様、どのようなハーブティーをお探しでしょうか？」

雛子が難しそうな顔で立ち並ぶ商品を吟味していると、店員が声をかけて来た。

「あつ、すみません。」

リラクゼーション効果があるハーブティーはどれですか？」

「それでしたら、こちらのカモミールなんかは如何でしょうか？」

雛子は店員と話しながら、母へのプレゼントを選ぶのだった。

：

夢ノ宮商店街にあるアクセサリーショップは、決して大きなお店ではないが品揃えは豊富で、蛸のお小遣いでも購入できる金額の品も多くあった。

蛸は指輪にイヤリング、ネックレスにブローチなど、棚に並べられた品々をじっくりと見ながら、母が身に付けているところを想像して吟味する。

そして1つの商品に目を付けた。

赤いカーネーションをハートマークの中心においたネックレスだ。

形からして恐らく母の日限定の商品なのだろう。

蛍はそのネックレスへと手を伸ばすが、

「あつ。」

隣に立つ少女が、先にそのネックレスを手に取ってしまった。

少女は、蛍も自分と同じものを手に取ろうとしていたことに気づき、こちらを向く。

「……。」

170cmに迫るほどの高身長と、長い青色の髪をサイドテールで束ねた少女は、釣り上った眼でこちらを見る。

少女は無言だが、自分を見据えるその鋭い瞳は、強い意志が込められているかのよう
に真っ直ぐだった。

蛍は、そんな彼女の瞳にどこか身に覚えがあるような気がした。

「……何かしら?」

落ち着いた、それでいて底の知れない力強さを感じさせる声で話しかけてくる。

そこで蛍はようやく、自分が目の前にいる少女をずっと見ていたことに気が付いた。

「あの……えと……。」

だが謝ろうとしてもうまく二の句が継げない。

要たちに友達に対しては無邪気に話せるようになった蛍だが、人見知りの強いところが直ったわけではない。

初対面の人を相手に普段要たちと同じように接することはまだ出来ないのだ。

加えて自分よりも40cm差近くある背の高さから見下ろす彼女の鋭い目つきと淡々とした声に蛭は気圧されていた。

要するに、目の前にいる少女が怖かったのだ。

「その……っ……めんなさい……。」

だがリリンから与えられた小さな勇気が、蛭をほんの少しだけ奮い立たせる。

何とか謝ることは出来たものの、蛭はその少女から視線を反らした。

「……これ、欲しいの?」

すると少女は、先ほどと変わらぬ口調ながらも、手に取ったネックレスを蛭へ差し出した。

蛭は驚き、譲ってくれることに一瞬感謝したが、形からして母の日のプレゼントを意識したその商品を手に取ったと言うことは、彼女も自分と同じで母への感謝の気持ちを込められるプレゼントを探していたのだろう。

そして先に手に取ったのは彼女だ。そのネックレスに母への感謝の気持ちを込める資格があるのは彼女である。

「えと……だい……じょうぶです……。」

首を振りながら精いっぱいの声で蛭は答える。

「そう……。」

その一言だけを残し、少女はレジへと向かって行った。

若干冷たい印象を受けたが、自分にネックレスを譲ってくれようとしたし、母の日のプレゼントを買いに来たところを見ると、悪い人ではなさそうだ。

「……きをとりなおして、ほかのプレゼントをさがさなきや。」

何もアクセサリーに拘る必要はないし、まだ見て回っていないお店も多い。

レジで商品を購入した少女を見送った蛸は、他のプレゼントを探すためにアクセサリーショップを後にするのだった。

∴

蛸と2人きりで話せるチャンスを伺い、一緒にアクセサリーショップへと訪れたリリのだが、肝心の蛸はプレゼントとやらを探すのに夢中で、話を振る機会がなかった。

いつもなら自分と話すことに何よりも夢中になるはずの蛸が、それを差し置いて他のことに現を抜かしている。

その状況にリリンは、かつてキュアシャインに無視されたことを思い出して不愉快になるが、それを表に出さないように注意しながら蛍のプレゼント探しを手伝うことにした。

こうなってしまった以上、この状況から早急に脱するには、蛍の目的を達成させるのが一番の近道だろう。

だが、プレゼントに関する知識など当然持ち合わせていないリリンには、何を送ればいいのかなんてさっぱりわからなかった。

（イライラするわね・・・なんでこんなことをしなきゃいけないのよ。）

当初予定していた計画からどんどんズレていくばかりか、何の興味も価値もないことに付き合わされることにリリンは苛立ちを募らせるが、ここで短気を起こしては全てが水の泡だ。

これまでの反応から蛍がプリキュアの情報を握り、隠していることは明白だ。せめてキュアシャインに関する情報を得なければ彼女から信頼を得た意味がない。

こちらの目的を達成するまでは、トモダチの仮面を被り続けるしかないのだ。（全く、面倒だったらありやしないわ。）

心中で愚痴りながらリリンは一度店の外に出て、苛立ちを静めようとする。すると、アクセサリーショップの向かい側には本屋があった。

リリンは店頭に並べられた雑誌に目を移す。

表紙には『母の日のプレゼント大特集!』と書かれている。

リリンはその雑誌から情報を得るために、向かいの本屋まで歩き雑誌を手に取った。

「人気ナンバーワンのプレゼントは赤いカーネーション。」

最初に立ち寄った花屋にあつたけど、蛍は買おうとはしなかったわね。

ホント、花なんてもらつて何が嬉しいのかしら・・・あら?」

雑誌を読み進めていくと、手作りプレゼントの特集があつた。

その中には『誰でも簡単に作れる手作りスイーツでプレゼント!』という記事がある。

「そう言えばあの子、お菓子作りが趣味だつて言つてたかしら?」

その記事を見たリリンは、この状況から脱するための策を思いついた。

人間と言うものは自分にとって好きなこと、得意なことであれば簡単に引き受けるも

のだ。

蛍の特技であるお菓子作りを母の日のプレゼントとして振る舞うと話せば、彼女も悪い気をせずに承諾するだろう。

リリンはその提案を進めるための最適な文章を頭の中で組み立てる。

思いつく限りの定型文を組み合わせ、かつ蛍の性格を考慮して・・・。

「・・・こんなところかしら。」

蛭に伝える言葉を作り終えたリリンは、アクセサリーショップへと翻す。

「あつりリンちゃん、こんなところにいたんだ。」

すると、丁度アクセサリーショップから出て来た蛭が、こちらを見つけて駆け寄って来た。

リリンはチャンスとばかり、先ほど思いついた言葉を蛭にかける。

「ほたる、おかーさんへのプレゼント、こうゆうのはどうかしら?」

そう言いながら、リリンは手に取った雑誌を掲げ、手作りスイーツ特集のページを蛭へと見せる。

「てづくりスイーツ・・・でも、お菓子はたべたらなくなっちゃうよ。」

蛭から想定通りの答えが返ってくる。それを聞いたリリンは予定通りの言葉を口にする。

「べつにいいじゃない。」

「え?」

蛭は驚いた表情でこちらを見るが、リリンは言葉を続ける。

「プレゼントには気持ちが一番大事っていうでしょ?」

ほたるの、おかーさんへの感謝の気持ちを込めてつくれば、きつとおかーさんにとつて、とつてもおいしいお菓子が作れると思うの。

だから形にのこらないけど、そのお菓子の味は一生、おかーさんの心に残ると思うわ。」

リリンの言葉に蛍は瞳を輝かせ、次第に笑顔を浮かべていった。

「そうだね・・・わたし、ことしはてづくりのお菓子、おかーさんにプレゼントしてみよう！」

「うん、ほたるのおかーさんも、きつと喜ぶわ。」

「ありがとう！リリンちゃん！」

・・・えへへ、

リリンちゃんのおかげで、今年はサイコーのプレゼントができそうだよ！」

リリンが優しい言葉をかけるほど、蛍の表情は輝きを増していく。

(本当にバカな子・・・)

あたしの言葉をここまで真に受けるだなんて。)

先ほどの言葉は、その雑誌から得た情報を元に当たり障りのない文章を作っただけ。

リリンにとっての蛍は、所詮プリキュアに関する情報を得るためのただの『道具』に過ぎない。

上辺だけの言葉で外面を取り繕い、蛍を相手にトモダチの仮面を被り続けているだけだ。

(本当に……)

それなのに蛍は、自分が彼女のことを想ってかけた言葉として受け取るのだ。

これまでもそしてこれからも、自分が彼女のことを気に掛けるなんてあり得ない。

そもそも『感情』を知らないリリンには、『気持ちを含める』だの、『一生心に残る』だの不明瞭かつ空想的な言葉の意味なんて理解出来ていないのだ。

「ありがとう、ほたる……。」

「おれいを言うのはわたしのほうだよ！リリンちゃん！」

笑顔でお礼を返す蛍を相手に、リリンは不意に視線を反らす。

自分はただ、この扱いやすい『道具』が『用済み』となるその日まで、体よく利用しているだけなのに、そんなことを知らない蛍は、自分に対して盲目的な信頼を寄せている。

そんな蛍に対してリリンは、彼女の眩しいまでの笑顔を段々と正面から見られなくなっていた。

だがその意味について気づかず、同時に知ろうとも思わなかったのだ。

：

母へのプレゼントを購入した雛子が店を出ると、同じくプレゼントを購入し終えた要と合流した。

先ほどまで隣にいた瞬の姿はない。どうやら最初の約束通り、家へと帰ったようだ。

そして要と一緒に蛍とリリンを探していると、本屋の前で話している2人の姿を見つけた。

「いたいた、蛍、リリン。」

要の声に気づいた蛍は、リリンと一緒にこちらへ歩み寄ってくる。可愛い。

「かなめちゃん、ひなこちゃん。プレゼントはみつかった？」

「バッチリ。」

「私もこの通り見つかったわ。蛍ちゃんの方は？」

「えっとね、今年はおかーさんにてづくりのお菓子をプレゼントすることにしたんだ。」

笑顔でそう答える蛍。可愛い。

一瞬リリンを横で見ていたので、彼女と話し合って決めたのかもしれない。

いずれにしてもお菓子作りを得意とする蛍ならではのプレゼントだろう。

「蛍ちゃんらしくていいじゃない。」

雛子の言葉に要も頷く。

同時に要は、蛭が無事プレゼントを決められたことに胸を撫で下ろしていた。

この遊び好きの悪友のことだから、せっかく友達同士で集まったのに、親へのプレゼント探しばかりでいるのを堅苦しく思っていたのだろう。

要するに、いつものように冗談を言っつてふざけて遊べる時間を欲しているのだ。

「良ければウチの分も……。」

すると要が手始めとばかり、冗談半分本音半分であろう言葉で蛭にねだった。

「要。」

内心やれやれと呆れつつも、要の期待通り間髪入れずにピシヤリとツツコミを入れる。

こちらの意図に気づいた要は白い歯を見せニヤリと笑い、蛭も笑顔でこちらを見た。

「よっしープレゼントも無事決まったことやしーどつか遊び行こっしー！」

「さんせー！」

そして自分のツツコミを合図に、友人2人は遊ぶ気満々の本心を惜しみなくさらけ出す。

ならばと、雛子は2人にとってうってつけの情報を提供した。

「だったら芝生公園まで行きましょ？」

「確か5月の上旬にクレープ屋が参入するって話だったじゃない？」

「雛子ナイスアイディア！」

「要が親指を立てて珍しく自分を褒め、

「リリンちゃんもいっしょにいこつ！」

「え？ちよつとほたる・・・。」

「蛭は困惑するリリンを余所に、彼女の手を引く。」

「しゅっぱ〜っ！」

そして要の号令と共に、リリンも交えた4人はクレープ屋を求めて芝生公園へ向かうのだった。

：

芝生公園まで着いた要たちは、さつそく屋台を見て回った。

ドーナツ、ジェラート、シユークリーム。

スイーツだけでも選り取り見取りの屋台が並び目移りする気分だが、要はここでよう

やくあることを思い出す。

(忘れてた・・・ウチ今お金ほとんどないんやった・・・。)

そう、母へのプレゼントを買ったことで手持ちの残金がほとんど底を尽きたのである。

兄に半分出してもらったとは言え、元々財布の経済が破綻寸前だったところに無理やり資金を捻出したのだ。

コストパフォーマンス最高峰のスナック菓子の金字塔『美味しい棒』くらいなら買えるが、クレープを買えるだけの資金すら今は持ち合わせていない。

つまりこのままでは目の前で友人たちがクレープを食るところを、指をくわえて眺めるだけの、以前とはまた違った意味での生き地獄に落とされかねないのだ。

「あった。クレープやさんだー」

だが時既に遅し、蛍がクレープ屋を見つけてしまった。

開店して間もないそのお店は、既に多くの人たちが列が作られていた。

これまでは夢ノ宮ドリムプラザまで行かなければお目にかかれなかったクレープ屋の参入を待ち望んでいたのは要たちだけではなかったようだ。

だがその列に並ぶ人々が1人また1人とクレープ屋を離れていく様が、さながら地獄への階段を1段ずつ下っていくように映ってしまい、要はつい足を止めてしまう、

「早いところ並びましょ？要、何ボケっとしてるの。」

すると雛子が、当然そんな要の内情など知らず・・・

否、この頭が良さだけが取り柄の悪友は全てを見透かしたうえで内心『自業自得でしょ?』と呆れながら自分が落ちていくところを涼しい顔で見送るつもりなのだろう。

「かなめちゃん！かなめちゃん！はやくならばー！」

そして今度は蛍が待ちきれないと言わんばかりにこちらの手を引いてきた。

この無邪気な天使は相当方向音痴なようで、天国への登り階段ではなく地獄への下り階段へと要を誘おうとしている。

だがこの天使の笑顔（エンジェルスマイル）で手を引かれてこの場に留まる人間がいるだろうか？

観念した要は地獄の階段もといクレープ屋前の行列に並びながら、この先待ち受ける生き地獄をどう回避しようかと必死で考えるのだった。

例によって要にそんな妙案など浮かぶはずもなく、地獄へ入り口もとい、クレープ屋は既に目の前に迫っていた。

こうなれば恥も外聞も無い。

一緒に並ぶ友人たちに自分の分も買ってくれと素直に頼もう。

要は意を決して後ろに並ぶ蛍へ振り向き、

「どしたの、かなめちゃん？」

「……」

直前で踏み止まった。

容姿性格ともに幼い蛍にクレープを買つてとせがむ自分の姿を想像してみたが余りにも情けない。

恥も外聞も無いと言つたがあれは嘘だ。

流石に蛍に対してそんなカツコ悪い真似は出来ない。

「いや、ちゃんと並んで良い子やな〜って。」

「わたしおないどしだよ!!」

そして冗談交じりに発した言葉で盛大に地雷を踏んでしまった。

しまったと思いつながらも蛍を宥めるように頭を撫でるが、蛍は頬を膨らませたままだ。

これでは仮に頼み込んだとしても断られてしまうだろう。

だがこの中でクレープを譲ってくれそうな子は蛍くらいだった。

ほぼ初対面に近いリリンにはさすがにねだれないし、残る悪友はそんな我儘を聞いて

くれるとは思えない。

つまらない見栄で最良の選択肢を逃してしまった要だったが、このままでは地獄へ一直線だ。

こうなればイチかバチかである。

「雛子〜。」

要は冗談めかした態度なら雛子も100万が1の確率で笑って許してくれるのではない、努めてわざとらしい猫なで声で話しかける。

「イヤよ。」

「まだ何も言っていないのに!？」

「浪費癖を直さない要が悪い。」

だが本題に入る前に断れた上に、自分の目的はおろか理由までもドンピシャに言い当てられてしまった。

とは言えこれくらいは想定内の範囲内。

そして想定済みと言うことは相応の『対抗策』もバツチリ用意してあると言うことだ。

要は後ろに立つその『対抗策』へと振り返り、悪代官のような不適な笑みを浮かべてから再び猫なで声で雛子に話しかけた。

「雛子〜。」

「くどいわよ要。買えないのなら今月は我慢しなさい。」

「そうじゃなくて、蛍が2つ食べたいからもう1個買ってだつて。」

「え?!わたし?!」

要は蛍の両肩を掴んで雛子の前へと無理やり立たせた。

言い覚えのないことを告げられ蛍は大いに困惑しており、そもそもあからさま過ぎる大ぼらであるのだが、蛍に対しては砂糖菓子よりも甘い雛子であれば、そんな細かいことを気にすることなく、クレープ1つくらい買ひ与えてくれるだろう。

そして雛子は特に訝しむ様子を見せなかった。

勝った。そう確信した要は、後でそれとなく蛍から譲ってもらおうと思ひ・・・

「お店ごと買ひましょうか?」

「店ごと!!?」

だが雛子が財布を取り出しながらお金持ちのテンプレート的なことをあつさりと言つてのけたことでそんな目論見は淡くも消し飛んだ。

さすがに冗談だろうと思つたが雛子の口元は笑つておらず、ならば彼女の目を見て判断しようと思つたが、太陽の光が雛子のかけるメガネのレンズに絶妙な角度から差し込んでおり、光の反射のせいで内に隠された彼女の瞳がまるで見えなくなつていた。

これでは表情から嘘か誠かは暴けないが、いずれにしてもこの悪友は自分にはクレー

プーつも買うつもりはないのに、蛍のためとあらば屋台一つ丸ごと買い与えることも辞さないようだ。

「そこまで待遇違うとさすがにシヨックやわ!!」

元を辿れば蛍をダシに雛子を釣ろうとした要の自業自得であるが、悪友からあまりにも露骨すぎる差別を受けたことでさすがに涙目になる。

「お財布いっぱいのおかねでかえるの!!?」

「そつち!!?」

一方蛍は、この場において余りにもどうでもいい疑問を投げてきた。

確かに在庫の商品と材料、調理用の機材器具そして屋台の全てを合わせた金額が中学生の持つ財布一つで足りるかは疑問の余地があるか、それよりもまずこの格差社会と露骨な差別に疑問を抱いて欲しかったものだ。

落ち込みムードの要だったが、身体に流れる関西人の血が条件反射でツツコミを入れてしまう。

「大丈夫よ。私カード持つてるから。」

「カード!!?」

そして雛子が蛍の疑問に答えながら財布からクレジットカードを取り出して来たので、要は再び脊髄反射でツツコミを入れてしまった。

中学生がクレジットカードを持つていて、というだけで要の常識から外れているというのに、『大丈夫』と言うことは、それこそ自分にとって天文学的数値と言える金額が登録されているのだろう。

そんな雛子によつてもたらされた混沌（カオス）を前に、要の常識は崩れ始め眩暈すら覚えた。

「はっ！カードならわたしももつてた！」

すると蛍がクレジットカードを披露した雛子に対して、何の益体もない謎の対抗意識を燃やし出し、財布の中から一枚のカードを取り出した。

「・・・それはスタンプカード。」

だが蛍が手に持つカードは、商店街の催し物として無償配布されているスタンプラリー用のカードだった。

要たち未成年者には親の許可なしでは手に入れることが出来ないクレジットカードに対して、年齢問わずに配布されるスタンプカードなど、比べるだけ失礼である。

ちなみにこのスタンプラリーは、親にお遣いを頼まれた小学生以下の子どもたちを対象、お遣いを宝探しゲーム感覚で楽しんでもらおうと開かれたレクリエーションだ。

子どもに買物学ばせながら商店街の活性化を狙うことを目的としており、商店街中を楽し気に回りながらお遣いをしている子どもたちの様子を見る限りでは一定の成

功を収めていると言える。

そして蛍のスタンプリカードをよく見ると半分以上のスタンプリが押されていた。

彼女が小学生以下の子どもたちと交じってスタンプリを楽しんでいるところがありありと想像出来てしまい、要は再び頭痛に見舞われた。

「……つちもあるよー」

そんな要に更なる追い討ちをかけるかのように、蛍が財布から2枚目のカードを取り出す。

「それはポイントカード。」

半ばウンザリとした様子で、だがしつかりとツツコミは入れる要。

確かにポイントカードの用途はクレジットカードと似通う部分はあるが、蛍が手に持つのは商店街にあるスーパーが店舗専用として発行しているものであり、当然そのお店以外では利用できない。

スタンプリカードと比べたらまだいくらかマシかもしれないが、それでも月とスツポン、木の枝と伝説の剣くらいの差はある。

「はっ!?!」

すると蛍が掲げたポイントカードを財布にしまう寸前、カードの表面を見て何かに気づく。

「・・・今度はなに？」

嫌な予感しかないが、それでも何があつたか問いかける要。

「きょう、ポイント2ばいデーだつて！」

そして蛭は、帰り際にいいお買い物が出来ると言わんばかりに両手を振って喜んだ。

そのスーパーの良く利用している要の母から、あそこは定期的にポイント2倍のサービスを行っている、という話を聞いたことがあるが、予想通り、今この場では本当にどうでもいい情報だった。

「知るかあああ!!」

雛子のブルジョワリテイ溢れるポケと蛭の純度100%の天然ポケのダブルパンチを受けた要は、大声で叫びながらツツコミを放棄するのだった。

：

蛭が要たちと賑やかに談笑していると、気が付けば自分たちの前に並ぶ人たちが減

り、屋台に掲げられたメニューの札をようやく見ることが出来た。

蛭はどのクレープにしようかを悩みながら、隣に並ぶリリンに話しかける。

「いつばいあるね。リリンちゃんはなにがたべたい？」

「えと、あたし、お金もつてなくて。」

「あつ、そうなんだ。」

リリンくらいの歳の子なら、親からお小遣いをもらえているものと思つていた蛭は驚くが、もしかしたら財布を忘れただけかもしれないし、親がお小遣いをあげないほど厳しいのかもしれない。

いずれにしても金銭的な話は子どもにとつてもデリケートな領分だ。

幼い頃から家事全般を担当している蛭だが、特にお金に関することは、母からタダほど高いものはないのだと、厳しく躰られてきたのだ。

それでも一緒に並んでいるのにリリンだけがクレープを食べられないと言うのを寂しく思ったところ、ふと目の前でクレープを一口寄越せ渡さないといい争う要と雛子の姿が目映った。

(そっか！ともだちどうしならひとくちたべてみる？ できるんだつた！)

異なるスイーツを買った友達同士で一口食べてみる？を合図に一口分だけ交換し合う『食べ比べ』と言うのも、蛭の知る友達同士のコミュニケーションの1つだ。

友人同士の親睦を深めるコミュニケーションとしての手段であれば、金銭的なしがらみは発生しないだろう。

今回の場合、厳密には食べ比べではなく、こちらが一口譲るだけになるが、それこそ要の言葉を借りれば、

友達同士なんだから細かいことは気にするな！

である。

(わたしとリリンちゃん、ともだち・・・だよね?)

思えばリリンには友達になってと伝えたことはなく、彼女からそのような話を聞いたこともない。

だが同じ学校でないのに、何度もこの噴水広場で会い、談笑したことのある仲だ。

友達だと思っても、リリンがそれを迷惑がるようなことはないはずだ。

(・・・あれ?ともだち?)

だが虫は、リリンとの仲を『友達』と認識することに違和感を覚えたのだ。

リリンと友達になれることは、虫にとって喜ぶべきことであるはずなのに心の中に霧が生まれる。

それはどんなに手を振っても、文字通り霞を掴むことは出来ず、手のひらは空しく宙を切る。

だが、今すぐに理由を知ることが出来ないかと悟った蛭は、気を取り直して目前まで迫った屋台の方へ視線を戻した。

するとようやく店員である、20代前半くらいの青年の顔が目映った。

「あれ……?」

そして蛭は店員の姿を見て驚いた。

なぜなら彼は、蛭がキュアシャインに変身して初めて助けたときの青年だったからだ。

「よかったね、ユウちゃん。夢を叶えることが出来て。」

小さな子どもと並んでクレープを買う主婦が、青年を『ユウちゃん』と呼び親しげに会話する。

「ええ、親に反対されて、友達にもバカにされたけど、ずっとこの街で、俺が好きなこの街の広場で、クレープ屋を開くのが夢だったから。」

今はまだ屋台だけど、将来は商店街に店舗を構えて見せますよ。」

「ユウちゃんならきつと叶えられるよ。」

「ありがとうおばさん、はいお釣り。」

「ありがとうございます。またご利用ください。」

主婦と青年の会話をひとしきり聞き終え、蛭は安堵する。

これまでプリキュアとして闇の牢獄から救出してきた人たちのことはずっと気になっていたので。

一度、闇の牢獄から抜け出すことが出来ても、心に不安を抱えている限り自分の声が繰り返し聞こえてくることは、蛍自身が身を以って知っていることだ。

となれば、これまで闇の牢獄に閉じ込められた人たちも、ダークネスが闇の牢獄を展開する度に、同じ思いをしてきたのかもしれないのだ。

だが彼は今こうして、自分の夢を叶えてクレープ屋を開いている。

「いらつしやいませ。」

蛍の番が回つてき、にこやかな笑顔で迎える青年。

所謂営業スマイルではない、それは心からの笑顔であると蛍にはわかった。

夢を叶えることが出来たから、クレープを作るのが楽しいから、自分が育った街に恩を返すことが出来るから、いらつしやいませの一言に込められた、様々な思いが伝わってくるかのような笑顔だったから。

（プリキュア、がんばってきてよかった・・・。）

巨大な怪物と恐ろしい悪魔たちと戦うことに足が竦みそうになった時も、自分のいる場所が戦場と化する恐怖から逃げ出さなくなった時も、踏み止まって、小さな勇気を出して、そして一歩踏み出して、戦ってきた。

それでも助けてきた人たちが、本当に自分の抱える絶望を克服出来たのかは分からないが、少なくとも目の前にいる青年は、絶望を乗り越えて夢を叶えたのだ。

プリキュアとして戦ってきたことの意味を確かに実感出来た螢は、これからもダークネスと戦い続けることが出来る『希望』を青年から得るのだった。

第9話・Bパート

一同はクレープを買い終えた後、近場にあつたベンチに腰掛けた。

蛭と雛子はそれぞれクレープを頬張り、要が物欲しそうな目で雛子のクレープを凝視し、その視線に耐えられなくなった雛子が仕方なく、一口だけと言いながら要にクレープを差し出す。

「あつ、ちよつと要！食べ過ぎよ！」

「そんな食べ過ぎでもないやろ！」

「私にとつての一口の範疇を超えているわ！」

「何それ！雛子のケチ！」

「ふふつ、もうふたりとも、ケンカしないで、なかよくたべよよ。」

要と雛子が言い争い、蛭が微笑みながら2人の喧嘩を制する。

そんな3人の様子をリリンはずつと横で眺めていた。何とも姦しく浅ましい光景。

ただど蛭は笑顔を浮かべており、要と雛子は言い争いながらもちやんと『会話』をしていた。

だが言葉で思いを伝えるなんてことを自分が理解できるはずもなく、そもそも理解す

るつもりなんてないはずなのに、自分だけが無視されているかのような錯覚を覚えた。蛍でさえ要と雛子の方を向き笑っている。

あの笑顔は、誰よりも蛍から信頼を得ている自分だけが独占できるものだと思うっていったのに。

(どいつもこいつも・・・なぜあたしを不快にする・・・。)

リリンには、この場の空気が酷く不愉快に感じられた。

そうでなくとも今日は不愉快なことの連続だ。

いつも自分とのお喋りに夢中になるはずの蛍が、それを差し置いてプレゼントを探し、自分にだけ向けられるものだと思っていた笑顔も、あの2人のトモダチとやらに向けられている。

ただの道具でしかない蛍でさえ、自分のことを眼中に入れていないのだ。

「リリンちゃん、はい。」

すると要と雛子から視線を外した蛍が、こちらに向けてクレープを差し出してきた。

「え?でも、ほたるが買ったクレープだよね?」

「ひとくちだけなら、だいじょうぶだから、リリンちゃんもどうぞ。」

とつても、おいしいよ。」

一瞬戸惑うが、親しい間柄の人間同士が物を分け与えるというのはコミュニケーション

ンの手段として不思議なことではない。

表面上、蛍と親しい間柄として接している自分に、蛍が物を分け与えると言うのも自然の流れだ。

であれば、ここは断らずに受け取るのがいいだろう。

「ありがたい、じゃあ、ひとくちだけでもらうね。」

一口、と言うのがどれほどの量を表す単位かは知らないが、言葉通りの意味で捉えたリリンは、一口だけクレープを頬張り、咀嚼する。

「どう?おいしい?」

「ええ、おいしいわ。」

そして『美味しい』と言う当たり障りのない言葉で即答する。

「おいしいよね!あまくて、ちよつとだけイチゴがすっぱくて、

でもそのすっぱさが、クリームのあまさをうまく引き立てていて!」

「・・・ええ。」

否、『美味しい』と言う当たり障りのない言葉でしか返せなかったのだ。

『美味しい』とは、食糧の味に対する肯定的な言葉でしかないため、リリンにも理解はでききる。

だが『すっぱい』『甘い』と言った『味』そのものを表す概念は、リリンには理解でき

ない。

そんなものは、プリキユア討伐の任を遂行する上で不要な知識のはずだ。それなのになぜ、理解できないことにここまでの苛立ちを覚えるのだ。

「ねえ、もうひと口もらってもいい？」

「どうぞで。」

再び差し出されたクレープを一口もらい咀嚼する。

(・・・わからない。)

どれだけ噛んでも舌を転ばせても何も感じない。

自分だけがこの中でただ一人、『美味しい』を知ることが出来ない。

(・・・不愉快だわ。)

なぜ分からなくてもいいことが分からないのが不愉快なのか。

リリンはやり場のない不快感を抱えながら、蛍と取り止めのない会話を続けるのだった。

：

不愉快な感情を表に出さないようリリンが努めていると、噴水広場にそびえる時計が、午後3時のベルを鳴らした。

「もう3時か。」

「キリもいいし、そろそろお開きにしましょうか?」

「うん、わたしも、おかいものして、おうちにかえらなきや。」

ようやくこの場の不愉快な空気から解放されることに、リリンは内心一息つく。

「それじゃ蛍、また学校でな。」

「蛍ちゃん、バイバイ。」

「うん!また学校であおっ!バイバーイー!」

そして各々は別れの挨拶を済まして解散し、リリンは蛍と2人でこの場に残った。

「リリンちゃんは、どうするの?」

どうもこうも決まっている。ようやくチャンスが回って来たのだ。

この機を逃せば今日はもう会話する機会がないだろう。

「えつと、もうすこしおはなしできない? ほたるにききたいことがあつて。」

「いいよ、なにかな?」

「この前おはなしした、光のお姫様のこと。なにかわかったことある?」

「えと・・・ごめんなさい。なにもわからなくて。」

「まだだ。この話題を振れば必ず同じ意味の言葉で返されてきた。」

「だが顔色と声色を伺えば、彼女がウソをついていることは一目瞭然だ。」

「・・・ウソ。」

「え？」

「ほたる、あたしになにか隠してるよね？」

「っ!？」

「あたし、どうしても光のお姫様にあつてみたいの。」

「だからほたる、あなたが隠してることを、あたしにおしえて?おねがい。」

「・・・。」

突然態度を変えてしまったことを怪しまれないかを危惧するが、ここまではぐらかされてばかりでは埒が明かない。

危うい行動だが、ここらで強引に話題を引き出さなければ、蛍に近づいた意味がないのだ。

すると蛍はしばし逡巡した後、ゆっくりと口を開いた。

「・・・ごめんなさい。わたし、リリンちゃんにかくしてることで、あるよ。」

でも、おはなしすることはできないの。」

「え……?」

だが続けて放たれた一言にリリンは言葉に詰まる。

「どうして? どうしてはなしてくれないの?」

語気がつい強まり責めるような口調になってしまう。

ようやく尻尾を掴むことが出来たかと思ったのに、はつきりと話せないと言われたのだ。

トモダチの仮面が僅かにズレるが、リリンはそれを直す余裕を失っていた。

隠し事をしていることは打ち明けるのに、なぜその肝心の内容は教えてくれないのだ。

彼女から隠し事を聞き出すにはまだ信頼が足りないのか、それとも今の態度を怪しまれたのか、聞き出せない理由を頭の中でいくつも思い描く。

「……リリンちゃんをまきこみたくないから。」

「え……?」

だが蛍の口から語られた理由は、リリンの想像を覆すものだった。

巻き込みたくないからと言うことは、蛍は自分の身を案じてくれているのだろう。

だがリリンには、なぜ彼女が自分の身を案じてくれているのかが、理解できなかった。

「……。」

再び沈黙の間が続く。蛍は二の句をどのように継げばいいのか言葉選びに悩んでい

る。そしてリリンは、自分にかけてられた言葉の意味が分からずに困惑していた。

「それ・・・どういう。」

「あれ？ちよつとまってる。」

だがリリンが蛍に言葉の意味を問おうとした瞬間、蛍が自分に対して向けていた視線を反らした。彼女と同じ方を向いてみると、そこには蛍よりも小柄な少女の姿が映った。

その少女は花屋の前で目に涙をためており、男性の店員が対応に困っている様子だ。

「リリンちゃん、ちよつとごめんね。」

「あつ、ほたる。」

そして蛍はその少女の元へと駆け寄って行った。

またしても邪魔が入ったが、蛍の思わぬ言葉に動揺してしまったリリンにとっては、ある意味好都合だったのかもしれない。

リリンは一旦、思考を切り替えるために蛍の後を追うのだった。

…

螢はリリンとの会話の最中に、ふと目に映った少女のことが気にかかった。

外見は自分よりも幼く、まだ小学校に入る前くらいの年頃だろうか。

そんな子が1人で花屋の前に佇み、泣くのを堪えているのだ。

その様子を見た螢は、その子が母の日のプレゼントを買うことが出来ずに泣いているのではないかと思った。

もしそれが本当だとしても、お金を貸すことなんて出来ないし、それ以外にも自分に来ることなんて何もないと思うが、それでも母を思い涙を流しているであろうその子を放っておくことなんて出来なかった。

少女の元まで駆け寄った螢は、店員に話を聞こうとする。

だが花屋の店員とは言え、30代くらいの大人の男性が相手だ。

螢はつい緊張してしまい、声を詰まらせるが、少女を助きたい思いが螢を突き動かす。

螢は勇気のおまじないをして、店員に話しかけた。

「あつあの、すみません。なにかあつたんですか？」

「ああ、その子が花を買いたいって言うんだけど、お金を持ってないみたいだから、それ

じゃ買えないよって話したら、泣き出してしまつて。」

「おかね、ちゃんともつてるもん……。」

少女は涙声で訴えながら、その小さな手のひらにある1000円玉を見せる。

「だから、それで買えるものはうちにはないんだつて、参つたな……。」

困惑する店員の口調は少女を責めている風ではないが、確かに1000円で購入できる品はこの店には置いていない。

すると少女の目から堪えきれなくなった涙が零れ始めた。

今にも大声で泣き出しそうだったので、螢は少女を慰めるために頭を優しく撫でた。

「よしよし、もうなかないで。」

「ぐすん……。」

鼻をすすりながらも、少女は言うことを聞いて泣くのを堪ええてくれた。

「わたし、ほたるつていうの。きみのおなまえは？」

「……ミカ。」

「ミカちゃんね。ねえ、どうして、ミカちゃんはお花がほしいの？」

「……おかあさんに、ははのひのプレゼントしたくて……。」

おかあさん、まいにちおしごとと、おうちのことと、たいへんだから、

ミカ、いつもありがとうつて、いいたくて、あした、おかあさんにプレゼントする

の……」

「そっか、だからここに、お花をかいにきたんだね？」

「うん：あかいおはなが、ははのひのプレゼントだって、ミカ、おぼえてきたから……」

だからおかねもって、ここにきたのに……」

概ね、蛍の予想通りの事情だった。

そしてこの子の、外でも家でも日々身を粉にして働く母へ感謝の気持ちを込めてプレゼントしたいと言う気持ちに、蛍はシンパシーを感じた。

自分もまた、その思いを胸にこうしてプレゼントを買いに来たのだから。

「……こつちも力になってあげたいのは山々なんだけど、こればかりはね。」

苦笑しながら店員がぼやく。

当然蛍にも店員の言うことが正しいと言うのはわかってはいるし、大人の事情がわからないなりに、年端のいかない少女が相手でも、商売を妥協するわけにはいかないと言うのも理解できる。

だがそれはそれとして、ミカのために何かしてあげたいと思うのも事実だ。

明日は、母の日は、年に一度しかない大切な日なのだから。

それは店員も同じなのだろう。

すると店の奥から、女性の店員が一輪のカーネーションを持って現れた。

「ねえ、ミカちゃんだっけ？これなら100円で買うことができるけど、どうかしら？」
「え……？かえるの？」

「ええ、今日限りの特別サービスよ。」

女性店員の言葉を聞き、ミカは涙を拭つて笑顔を見せる。

「おっおい、いいのかよ？店の商品から一輪だけ引っこ抜くなんて。」

「心配しないで。これは私個人のもので商品じゃないから。」

ミカには聞こえないように2人の店員が小声で会話する。

個人のもの、と言うのはもしかしたらこの女性が母の日のために購入した花束から一輪だけ抜き取ったものなのかもしれない。

「ありがとう！これ！かいます！」

「はい、まいどあり。」

100円を受け取った女性の店員は、手に持つ一輪のカーネーションをミカへと手渡す。

レジすら通さないそのやり取りに男性の店員は苦笑しながらも、その目は穏やかだった。

蛸は心優しい2人の店員と、母を思うミカの心温まるやり取りを見て微笑むのだった。

「よかったね、ミカちゃん。

おかーさんへのプレゼントをかうことができて。」

「うん！これで、おかあさん……。」

花屋を後にした蛭は、無事にプレゼントを購入でき上機嫌なミカに声をかけた。

だが、おかあさん、と言いかけたミカの表情が打って変わって不安に変わっていく。

「ミカちゃん、どうかしたの？」

「……おかあさん、さいきんずっと、おしごとばかりで、ミカがあそびたいっていつも、おしごとあるから、またこんどって、おはなししようとしても、つかれてるから、またこんどって……。」

ミカ……おかあさんにきらわれないよね……。

おかあさん、プレゼント、よろこんでくれるかな……。」

「……。」

俯きながら母に愛されていないかと不安を口にするミカ。

蛭はかつての自分も同じ思いを抱いたことを思い出した。

母が仕事に忙しくて構ってくれなかった時、自分のことが嫌いになったのかと不安に

思うことがあった。

構つて欲しいと駄々をこねて泣き、無理やり相手をしてもらったことも一度や二度ではない。

今思い返しても、多忙な母に追い討ちをかけていた酷い子どもである。

でもミカは違う。

母を思い、幼い身一つで商店街まで訪れ、母の日のプレゼントを買いに来たのだ。

ミカからそれほどまでに大好きに大切に思われている母親が、ミカのことを嫌つてい
るはずがないのだ。

虽がそのことを伝えようとすると、

「だいじょうぶよ。

ミカのおかーさんが、ミカのことを嫌っているわけないじゃない。」

これまで一言も発せず、事の成り行きを見守っていたリリンがミカに話しかけてきた
のだ。

「・・・ほんとうに・・・?」

「もちろん。

だってミカはおかーさんのことが大好きで、おかーさんのことをとても大切に思つて
いるよね?」

「うん、もちろんだよ。」

ミカ、おかあさんのことだいすきだもん！」

「だったら、おかーさんだって、ミカと同じくらい、ミカのこと大好きで、ミカのことを大切に思っているはずよ。」

だって、ミカの大好きなおかーさんが、ミカのことを嫌いだんてこと、あるわけないもの。」

初めて会った自分にそうしてくれたように、リリンは優しい声で、優しい言葉をミカにかけてくれた。

そして励ましの言葉の内容が、自分がミカに伝えようとしていた言葉であったことに、蛭はリリンと同じ思いを共有できたことが嬉しかった。

同時に蛭は、リリンが自分以外の人に、自分の大好きな声をかけていたことに、ほんの少しだけ胸がチクリと痛んだ。

「・・・そうだね。ありがとう！・・・えと。」

「リリンよ。」

「ありがとう！リリンおねえちゃん！ほたるおねえちゃん！」

だがミカの笑顔を見て、そんな些細な痛みも消えていった。

日頃、周りからよく実年齢よりも子ども扱いされる蛭に取って、おねえちゃん、と呼

ばれるのはこそばゆくも嬉しいものである。

「それじゃっ！ミカ、かえっておかあさんにプレゼントするから！」

「ふふっ、ミカちゃん、おかーさんの日はあしただよ？」

「あっそうだった！」

「じゃあ、またね！ほたるおねえちゃん！リリンおねえちゃん！」

「またね。」

「バイバイ。」

そして笑顔で喜びながら、駆け足で帰るミカを見送った。

「・・・ありがとうリリンちゃん。」

ミカちゃんのこと、はげましてくれて。」

「ううん、たいしたことじゃないわ。」

母の日は、子どもにとつても、おかーさんにとつても大切な日だものね。」

笑顔で何とでもないことだと語るリリン。

そんな彼女の優しい声に蛍の胸は大きく高鳴る。

「それじゃあ、あたしもそろそろ帰るね。」

「うん、リリンちゃん。」

きょうはありがとう。またこんど、ここでおはなししようね。」

「うん、またね、ほたる。」

そして蛍はリリンと再会の約束をし、この場を離れるのだった。

：

蛍と別れた後、リリンは人気のない路地に身を潜める。

「あの子・・・なんであたしのことを・・・？」

今日の会話から確信した。

蛍はプリキュアと接触したことがある。

そして自分を巻き込みたくないと言うことは、彼女はプリキュアが自分たち
ダークネスと戦っていることを知っているのだ。

だからプリキュアに近づぐことは、戦いに巻き込まれることになるから危険だと警告
したのだ。

そこまで思い当たれば、恩人として自分のことを慕っている蛍が、こちらの身を案じ
ることは当然のことだが、あまりにも真っ直ぐな言葉で自分の身を案じてくれる蛍に、

リリンは僅かに動揺していた。

「……まあいいわ。」

今は蛍の言葉に惑わされている場合じゃない。

せっかく良い『素材』をみつけたのだから、見失う前に行動に移らなくちゃ。」

リリンは今日の前で成すべき事に思考を切り替える。

蛍の思わぬ言葉に困惑してしまっただが、たかだか道具程度の彼女に惑わされている場合ではない。

次なる作戦に移るにあたって、あのような上質な素材をみすみす見逃す手はないのだ。

リリンは左手を横へ伸ばして指を鳴らし、その姿をリリスへと変えた。

「ターンオーバー、希望から絶望へ。」

そしてリリスを中心に闇の牢獄を展開する。

やがて闇の牢獄は1つの絶望の闇を捉えた。

リリスはその絶望の元へと飛び立つ。

「いやああああ!!おかあさん!!おかあさん!!」

そこにはしきりに母を呼びながら泣き叫ぶミカの姿があった。

その小さな体を覆う絶望の闇は、少しずつだが確実に純度を高めていく。

「うわあああああん!!!」

やがて叫びが収まり、ミカはその場に倒れ伏した。

フェアリーキングダムするときも、彼女くらいの幼子からソルダークを作り出したことがあるが、幼子と言うのは大人は勿論、ある程度成長した子どもと比較しても、心身ともに未成熟なために自製の効かない心を持っている。

それは御しずらいという欠点を抱えているが、同時に底も知れないのだ。

そしてこの、ミカと言う少女は偶然にもアタリだった。

これほどの絶望の闇ならば、以前よりもさらに強力なソルダークを作り出せるだろう。

「……現れたわね。キュアシャイン。」

するとそれほど間のない距離からキュアシャインの力を感じ取った。

この力を使うのはもう少し後だ。

下手にソルダークを解き放つては、また以前のようにキュアシャインに無視されてしまう。

今はまだやつ一人の力しか感じ取れていないのなら、ソルダークを作るのは邪魔者が訪れるまで待つとしよう。

リリスはミカから吸い上げた絶望の闇をその身に隠し、そう遠くないキュアシャイン

の元へと飛び立つのだった。

：

リリンと別れてから程なくして、蛭は闇の牢獄が展開されるのを感じ取った。今日一日の幸せの余韻を壊す最悪なタイミングだ。

蛭はダークネスへの怒りを僅かに滲ませながらシャインパクトを生み出し、キュアシャインへと変身する。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

世界を照らす希望の光！キュアシャイン！」

そして絶望の闇の気配がする方へと向き直る。

するとその方向から感じ取れた絶望の闇がこちらへ急速に向かってきた。

ダークネスが自らこちらへと赴くのは初めてだ。

つまり今回の目的は自分たちプリキュアを倒すこと。

となれば、思い当たる行動隊長は一人しかいない。

「キュアシャイン!!」

そしてこちらの名前を呼びながら姿を見せたリリスが、そのまま爪を向けて切り込んできた。

「リリス!」

蛭はリリスの爪を受け止めそのまま押し返す。

リリスは空中で反転し浮遊したまま蛭を見下ろした。

「今日こそあなたを墮としてあげるわ! キュアシャイン!!」

リリスは空を踏み、蛭目掛けて勢いよく距離を詰める。

蛭はリリスの突進を横にかわし、そのまま回転を付けてパンチを繰り出した。

リリスはそれを振り返ることなく尾で払い、身体を反転させて蛭へ爪を突き付ける。

蛭はその攻撃をガードし、一旦互いに距離を置く。

「キュアシャイン!」

すると自分の名を呼ぶ声があった。

振り向くと、キュアスパークがキュアプリズムの手を引き、高速移動でこちらに合流した。

2人の到着に蛭は安堵し、リリスは苦虫を噛み潰したような表情で舌打ちをする。

「ようやく邪魔者の登場のようね。」

「誰が邪魔者だつて？」

「あなた達以外に誰がいるのよ！あたしたちの邪魔はさせない！」

ダークネスが行動隊長、リリスの名に置いて命ずる。

ソルダークよ！世界を闇に染め上げろ！」

リリスが球状の絶望の闇を手のひらに作り宙へと放ち、その闇がソルダークへと姿を変えた。

「ガアアアアアアアアア!!」

「邪魔をさせないとは随分な言い草ね。」

あなたの好きにはさせないわ！」

キュアプリズムがリリスの言葉に静かな怒りを燃やす。

「いくよ！キュアシャイン！キュアプリズム！」

「ええ！」

「わかった！」

そしてキュアスパークの掛け声とともに、3人は一斉にソルダークへと向かった。

だがリリスは今いる場を動かなかった。

以前のようにキュアスパークたちの相手をソルダークに任せ、自分の元に飛び掛かってくるのかと思ったが、ソルダークの力を過信しているのだろうか？

だが理由はわからないが、今ならソルダークに総攻撃を仕掛けるチャンスだ。

「おらあつー！」

「たあつー！」

「はっー！」

3人のプリキュアの正拳を立て続けに受け、ソルダークはバランスを崩す。

「このまま一気に畳みかけるわよー！」

そしてキュアプリズムがソルダークの後方に盾を展開し、蛭はソルダーク目掛けて体当たりする。

蛭の体当たりを受けたソルダークはそのまま吹き飛び、後方に設置された盾に叩き付けられた。

ソルダークは背後の盾に背を滑らせ、その場を動かなくなる。

「これで決めてやる。光を走れ！スパークバトンー！」

そして間髪入れずキュアスパークが武器を召喚してソルダークを捉えた。

今のソルダークは身動きする気配がない。浄化技を当てるチャンスである。

「プリキュア！スパークリング・プラスターー！」

キュアスパークが雷を纏いソルダークへと突撃する。

これで終わった。そう蛭が思ったその時、

「ソルダーク！」

リリスが名を呼ぶと同時にソルダークが両手をキュアスパークに向けて掲げる。するとソルダークの身を守るように、その両手から黒色の障壁が発生した。

「何っ!？」

驚きながらもキュアスパークは勢いを止めずに、ソルダークと自身の間にそびえる障壁へと突撃する。

だが威力に任せて突破しようという彼女の意に反して、障壁はヒビ一つ入らず、キュアスパークの浄化技を受け止めるのだった。

「このー！」

尚も障壁を突き抜けようと雷の力を高めていくが、ソルダークを守る障壁はビクともしない。

やがてキュアスパークの力が徐々に弱まっていき、ついに彼女の身に纏う雷が弾け飛んだ。

「そんな・・・ウチの浄化技が。」

浄化技を受け止め切れられ、キュアスパークは絶句する。

蛸も目の前の状況が信じられずにいた。

プリキュア最大の威力を誇る浄化技は、これまでのソルダークを全て一撃で消滅させ

てきた。

それが初めて通用しなかった。

その事実には呆然とするキュアスパークへ向けてソルダークが拳を振り降ろす。

「キュアスパーク！」

キュアプリズムがソルダークの攻撃を辛うじて防ぎ、その隙についてキュアスパークを救出する。

「キュアスパーク！ だいじょうぶ!?!」

「あかん……力が入らん……。」

だがまだ戦いが始まって間がないのに、キュアスパークは早くも息を荒げていた。

足元をふらつかせるキュアスパークを一瞥したりリスが、不敵な笑みを浮かべて蛭を睨みつける。

「ふふっ、これで心置きなくあなたと戦えるわ。キュアシャイン！」

そしてこの時を待っていたと言わんばかりに、リリースが蛭へと襲い掛かった。

「キュアシャイン！」

キュアスパークとキュアプリズムが援護に駆けつけようとするが、ソルダークが行く手を遮る。

リリースは蛭へと飛び掛かり、そのままキュアスパークたちから遠ざけるように突き放

していった。

リリースに組み付かれ、キュアスパークたちの姿が小さく見える距離まで離されたところで、ようやく蛍を解放された。

だがこれだけの距離を開けられては、こちらから2人の元に合流しに行くのは難しく、2人に救援を求めようにも、戦力の中核を成すキュアスパークが力を消耗している以上、ソルダークとの戦いもこれまでのようにはいかないだろう。

「ふふっ、また2人きりになれたわね。キュアシャイン。」

こうなった以上、蛍1人の力でリリースと戦うしかない。

蛍がそう決心しリリースを正面から見据えると、リリースはその視線を受け止め、恍惚とした表情を浮かべた。

「あははっ、ようやくあたしのことを見てくれたわね。」

それでいいのよ、キュアシャイン！」

「え？」

「もつとあたしを見て！」

あたしだけを見て！

あたしだけのことを考えて！

だってあたしがそうなのよ？

あたしはあなたのことしか見ていない、考えていないのに、あなたはあたしから目を反らすだなんて、そんなの不公平じゃない？

だから・・・。」

そして彼女の眼が、いつものように憎しみに満ちていく。

「あなたもあたしと同じになりなさい！ キュアシャイン!!」

リリスは叫びながら翼を羽ばたかせ、こちらへ爪を突き立てた。

なんて悍ましい執着心なのだろう。

言葉が言葉だけに身の毛が弥立つ思いだが、もしも向けられた感情が異なれば多少は理解する努力もできたものだ。

だが強烈な怒りと憎しみに満ちた感情をぶつけてくるのなら、そんな一方的な告白はお断りだ。

「たあつ！」

蛭は勇気を振り絞ってリリスの思いを突っぱねるかのように正面から正拳で応戦する。

拳を振り切り、リリスがよろけたところを見計らって体当たりをするも、リリスは蛭

の体当たりを正面から捉え、横へと流すように捌いた。

捌かれた蛭は勢い余って地面に激突しそうになるが、両手をついて前転する。

だが転がっている最中にリリースが接近し、尾で蛭の腹部を叩いた。

その勢いで蛭は石柱に体をぶつけるが、リリースは追撃の手を緩めない。

行動隊長随一のスピードを誇るリリースは、その手を休めることなく苛烈な連撃を浴びさせる。

たったの一度だけ訪れた攻撃のチャンスを逃した蛭は、防戦一方の状態に持ち込まれた。

「浄化技を使う気がないのならそれでもいいわ！」

このまま堕ちなさい！キュアシャイン！」

蛭は攻撃を捌ききれず、左、右と襲い来る爪の一撃を交互に受けた後、尾で地面に叩き付けられる。

「うう……。」

やはり自分一人では行動隊長には敵わない。

改めて突き付けられる実力の差に、蛭は情けない呻き声をあげてしまう。

だがそれほどにリリースに勝てる手段が思いつかなかった。

「今日こそ、終わりにしてあげるわ。キュアシャイン。」

そんな蛭を、リリースはその赤い双眸で見下ろした。

：

キュアスパークは心を強く念じ、ふらつく足を立たせてキュアプリズムの隣に立つ。

「キュアスパーク、力の方は大丈夫？」

「浄化技は使えんけど、何とか戦うことはできるよ。」

プリキュアの浄化技は気力、体力ともに消耗が激しいことはこれまでの戦いからわかっていた。

だから要はこれまでソルダークを弱らせ、確実に当てることができると作ってから浄化技を放ってきたのだ。

そして以前のキュアプリズムのガムシヤラな戦いを見て、要は自分たちの力についてまた一つわかったことがある。

ダークネスの力である絶望の闇が、人の迷いや不安から生じるように、プリキュアの力である希望の光は、信じる気持ちや望みから生まれるのだろう。

ならばどんな逆境にも屈せず、自分の意思を強く持つことができれば、希望の光が生まれてくる。

要はそうやって僅かながら力を回復させているのだ。

「そう、それなら何としてでも、あいつに浄化技を当てる隙を作らないと。

急がないと、キュアシャインが……。」

不安を滲ませた声色でそう付け足すキュアプリズム。

「キュアプリズム、焦ったらあかんよ。」

あんたの浄化技まで防がれたら、もう手の打ちようがないよ。」

「……ええ、わかっているわ。」

先ほどはソルダークの生み出した障壁に浄化技を防がれてしまったが、障壁を使ってまで身を守ったということは、本体には受け止めるほどの防御力はないのだろう。

キュアシャインはまだ自分の意思で浄化技を使うことができない。

今この場でソルダークを浄化することが出来るのはキュアプリズムだけなのだ。

「いくよ！キュアプリズム！」

急ぎキュアシャインの元に駆けつけるためにも、早くこのソルダークを倒さなければ。

2人は呼吸を合わせて連携を取る。

これまで通りソルダークの攻撃をキュアプリズムが受け止め、その隙について要が一撃をお見舞いする。

「ガアアアア!!」

だが力を消耗し、スピードが低下しているキュアスパークの攻撃が決まる前に、ソルダークの迎撃が追いついた。

盾で防がれた方とは反対の拳で、要のパンチを迎撃する。

「このっ!」

そしてソルダークと真つ向からの力比べが始まる。

だがパワーも低下している要にはソルダークの迎撃を受け止めるだけの力が残っていないかった。

力負けした要はそのままソルダークの拳に押し切られ、地面に叩きつけられる。

「キュアスパーク!」

キュアプリズムがその光景に気を取られている隙に、ソルダークは拳を振り下ろした。

盾の展開が間に合わないと判断したキュアプリズムは咄嗟に後退するが、振り下ろされた拳が目の前の地面を抉り粉塵を巻き起こし、それに巻き込まれたキュアプリズムは後方へと吹き飛ばされる。

「ちっ……このままじゃ。」

舌打ちしながら要は立ち上がる。

このソルダーク、素の強さもかなりのものだ。

いくら自分が消耗しているとはいえ、プリキュア2人がかりでこの有様だ。

その上今キュアシャインは、行動隊長を1人で相手にしている。

あちらもかなり危機的な状況のはずだ。

だが迂闊な浄化技を放とうものなら、障壁で簡単に防がれてしまう。

どうすればいい？ どうすればこの場を打開できる？

「ガアアアアアアアアアア!!」

そんな要をあざ笑うかのように、ソルダークは闇に染まった天へと吠えるのだった。

∴

蛭はリリースに胸倉を掴まれ、そのまま投げ飛ばされた。

アスファルトの上を転がるその身には、既に多くの切り傷が刻まれている。

蛍は痛みと涙を堪えて立ち上がると、目の前でキュアスパークとキュアプリズムがソルダークの攻撃を受けてこちらへ飛ばされてきた。

「ぐっ。」

「きゃあっ！」

「キュアスパーク！キュアプリズム！」

蛍は2人の元へ駆け寄ろうとするが、その行く手をリリスが阻む。

リリスはその場で爪を払い衝撃波を生み出し、蛍へぶつける。

衝撃波を受けた蛍は、再び後方へ飛ばされアスファルトに身を打つが、その時横からソルダークと似た絶望の闇を感じ取ったのだ。

「っ!？」

その方へ目を向けた蛍はシヨックを受ける。

そこには黒の瘴気に覆われ、虚ろな目で横たわるミカの姿があった。

だが彼女の名を叫ぼうとしたとき、リリスの放った衝撃の余波が彼女手元に転がるものを、蛍の目の前へと運んできた。

「あっ！」

蛍は目の前に転がったものを慌てて拾い上げる。

これはミカが、彼女の母へのプレゼントとして買った大切なカーネ이션だ。

こんなリリスの私怨に満ちた戦いの中で失われていいものではない。

「キュアシャイン、何をしているの？」

なんであたしから目を反らすの？」

するとリリスが困惑と失望の入り混じった言葉で蛭に問いかけていた。

それは物理的な意味だけでなく、蛭の心が目の前にあるカーネーションに向けられたことに対してでもあるように思えた。

だが蛭はその問いに答えずに、どうすればこの花を守ることができるとかを考える。

守りながら戦うことができれば一番良いが、自分にはキュアプリズムのように守りに面した能力はなく、キュアプリズムにバリアを張ることを頼める状況でもない。

だがこのまま両手が塞がった状態で勝てるほどリリスもソルダークも甘くはない。

それならば一度安全な場所へ隠そうとも思ったが、目に映る範囲では先ほどのように戦いの余波に巻き込まれて飛ばされかねない。

そしてここよりも遠くへ避難することはリリスが許さないだろう。

「あたしよりもそんな花のことが大事だと言うの!？」

先ほどまで恍惚とした表情で蛭と戦っていたリリスは、徐々にその表情を歪めていく。

眉が吊り上がり、口元から笑みが消え、声を荒げていく。

そんなリリスを前に、蛍は手に持つ花を守るように身に寄せた。

その仕草が、リリスに対して決定的な宣告を与える。

「っ!? だっ! たらいいわ!」

あなたの目の前でその花、八つ裂きにしてあげる!!」

怒りを爆発させ、リリスは蛍の手にある一輪のカーネーション狙いを定めて飛び掛かってきた。

迫り来るリリスを前に、蛍の内では様々な思いが渦巻く。

ミカの母を好きと思う気持ち。

そのミカの思いに応えてくれた花屋の店員による心温まる対応。

そしてミカの不安を取り除いてくれたリリンの言葉。

みんなの思いが込められた大切なプレゼントが、年に一度しかない明日を、母の日を、ミカと彼女の母にとって幸せな一日へと変えてくれるのだ。

だから蛍は、ミカの大切なプレゼント、手に持つ一輪のカーネーションを守りたいと強く願った。

そして、

「だめえええええええ!!」

蛍は大声で叫ぶと同時に、体中から強烈な光を解き放った。

それは柱となって天へと登り、蛍の周辺を明るく照らす。

「その力……。」

その光を前にしたリリスは怯み後退する。

「キュアシャイン……?」

キュアスパークとキュアプリズムも、突如強大な希望の光を解放した蛍を前に言葉を失っている。

「これは……このお花だけは……わたしがぜったいに！まもってみせる!!!」

蛍が強い決意の言葉を口にする度に、身体を纏う光は更に輝きを強めていき、溢れ出る光が蛍の周囲を渦巻いていく。

「くっ、ソルダーク!!」

リリスは後退しながらソルダークを呼び寄せた。

リリスの命を受けたソルダークは溢れ出る希望の光さえ恐れず、蛍へと容赦なく飛び掛かる。

「キュアシャイン！危ない!!」

キュアスパークが叫ぶ。

いくら強大な希望の光を纏っているとはいえ、今の蛍は一輪の花をかばうように両手で持っている状態だ。

つまり両手を使えない以上、積極的な肉弾戦を仕掛けることは勿論、迫るソルダークを満足以迎撃することさえできないのだ。

だから蛍は、

「すう、わあああああああああああああああ!!!」

その場で大声で叫んだ。

だが叫びと共に蛍の周囲を渦巻く膨大な光が、更なる力の奔流を生み出しソルダークを飲み込む。

飲み込まれたソルダークは、近づくことすらできずに跳ね飛ばされ、蛍の希望の光を真正面から浴びたソルダークの体が綻び始めた。

キュアスパークとキュアプリズムが2人がかりでも苦戦するソルダークに対して、蛍はただの叫びで圧倒したのだ。

「キュアシャイン……?」

目の前の出来事が信じられずに、呆然とするキュアスパーク。

だがソルダークは綻ぶ体を修復させて立ち上がった。

「ひかりよ、あつまれ! シャインロッド!!」

そんなソルダークを目にした蛍は、シャインロッドを生成する。

だが蛍はシャインロッドを手にとらず、自分の目の前に浮遊させた。

そして周囲を渦巻く希望の光を、シャインロッドの先端へと集約させていく。
「待つてキュアシャイン！」

ソルダークに隙を作らないとまた防がれてしまうわ！」
蛍に対してキュアプリズムが注意を呼びかける。

そしてソルダークは自身の体を囲むように障壁を発生させた。

これではどの方向から浄化技を飛ばしたとしても障壁に阻まれてしまうだろう。
だが蛍はそれを見ても光の集約を止めない。

いや、止めることができないのだ。

解放された希望の光は、既に蛍の意思でも制御しきれないほどに膨れ上がっている。
それならばいっそ、持てる力の全てを引き出して、全てぶつけてやるだけだ。

「プリキュア！シャイニング・エクスペローション!!」

蛍は全ての力を集約させ、解放した。

解放された希望の光は巨大な光線となってソルダークへと放たれる。

そしてソルダークの生み出した障壁は、真っ向から来る蛍の浄化技を受け止めた。

「ガアアアアアア!!」

だがそれは1秒にも満たないほど一瞬のことだった。

次の瞬間、ソルダークを守る障壁は瞬く間に瓦解し、巨大な光線に飲み込まれたソル

ダークは断末魔と共に消滅していった。

「ウソやろ……?」

「なんて、威力なの……。」

キュアスパークとキュアプリズムは目の前の光景に呆然とする。

「……っ、キュアシャイン……。」

そしてリリスは、唇を噛みしめながらこの場を飛び去って行った。

「はあっ……はあっ……やつ……た。」

ソルダークを浄化し、リリスの撤退を確認すると、目の前に浮遊するシャインロッドは地に落ち粒子となって消え、螢はその場で膝を崩した。

そんな螢の元へ、キュアスパークとキュアプリズムが駆け寄る。

「キュアシャイン、大丈夫?」

「うん……だいじょうぶ。」

ちからぜんぶ、つかっちやっただけだから……。」

力なくその場で仰向けに寝転んだ螢は、静かに呼吸を整えていく。

その胸には一切傷のない一輪のカーネ이션がしっかりと握られていた。

「わたし……ちゃんとまもることができたよ……。」

「……ええ、お疲れ様。キュアシャイン。」

キュアプリズムから労いの言葉を貰い、螢は少しだけ誇らしげに微笑むのだった。

：

闇の世界へと帰還したりリスを、サブナックとダンタリア、そしてアモンが迎えた。「ふっ、またしても敗北してきたようだね。」

顔を合わせて早々、イヤミを飛ばしてくるダンタリアをリスが睨み付ける。原因はわからないが、キュアシャインが再び希望の光を解放したのだ。

そして初めてやつと戦った時と同じ結末を迎えた。

あれほど強大な力を前には、リスは一切の対抗策を持ち合わせていない。つまり自分一人の力ではキュアシャインには敵わない。

それを見せつけられてしまい、リスの胸中には黒い衝動が渦巻いていた。

「こちらでも十分に感じ取れたぞ、強大な光の力。

まさかあれが、貴様を負かしたキュアシャインの力だと言うのか？」

サブナックの問いかけにもリスは答えなかった。

行き場を失った衝動がリリスの全身を駆け巡り、頭を強く叩き始める。

「その通りだよサブナック。」

リリスが初めて敗北した時も、先ほどと同じ力を感じ取れた。」

沈黙を続けるリリスに代わり、アモンがサブナックの疑問に答えた。

それを聞いても尚、サブナックは疑うように眉を顰め、やがてしばしの間考え込む。

「であれば、あれだけの力が相手では貴様一人では荷が重いだらう。」

次はオレたちも……。」

だがサブナックが言わんとしていることを悟ったりリリスは、彼の言葉を遮った。

「余計なことをしないで!!」

キュアシャインは、キュアシャインだけは！あたしがこの手で墮としてやるの!!

あなたたちに邪魔なんてさせない!!」

黒い衝動を吐き出すかのようにリリスは激昂する。

自分一人では敵わないと分かりながらも、この2人にキュアシャインを取られてしま

うと思うと耐えられなかった。

何が何でも自分の手でキュアシャインを闇に墮としてやる。

そんなリリスの様子にサブナックは僅かに困惑し、ダンタリアは興味深そうな笑みを

浮かべた。

そして

「リリース、何を怒っている？」

「え．．．？」

アモンの問いかけにリリースは言葉を失った。

「あたしが．．．怒って．．．？」

その問いの意味を理解していくと共に、リリースの困惑は増していく。

「ちが．．．あたしは怒ってなんか．．．。」

怒るはずがない。怒れるはずがない。

怒りの感情なんて自分にはわからないはずだ。

行動隊長は、感情に駆られ支配される人間と違って不条理な行動は行わないものだ。

だから与えられた命令に対して一切の疑問を持つことなく、最善の策を持って、最良の手段を持って果たしていくことができるのだ。

「あれ．．．？」

だがそれなら自分はどうなのだ？

自分一人でキュアシャインを倒すことに固執し、協力を拒み、他の行動隊長を邪推する自分の行いは、最善の策なのか？

それに感情を持たないと言うのなら、この胸を焦がす黒い衝動は一体何だ？

そして自分は、この衝動が何と呼ばれているかを知っている。これは……。
「ちがう！ちがうちがうちがう!!」

あたしは……あたしは行動隊長だ！」

リリスは必死で、自分の脳裏を過った答えを否定する。

そんなはずがない。そんなことはあり得ない。

だがこれまでの行いはどう説明できる？この衝動はどう説明付ける？

「あたしは……。」

「もう良いリリス。戦いの後で少し疲れているのだろう。」

しばしの間休むといい。」

「……はい、アモン様。」

アモンはそれだけを言い残し闇へと姿を消した。

(キュアシャイン……あなたさえいなければ、あたしはこんなことにならなかつたんだ……。)

胸に渦巻く不愉快な衝動も、理由の付けられない自分の行動も、何もかも全てキュアシャインへの憎しみに変えて押し付けたリリスは、頭を抱えて呻きながら闇へと姿を消していった。

:

闇の牢獄が完全に消滅し、ミカを覆っていた絶望の闇が消えたのを確認した蛍たちは、変身を解除し、彼女の元へ駆け寄った。

「ミカちゃん、ミカちゃん、だいじょうぶ？」

「あれ？ほたる・・・おねえちゃん？」

「よかった。どこか具合、わるいところない？」

「んくん、だいじょうぶ。」

話ながら蛍はミカの体を支えて起こす。

そして手に持ったカーネ이션をミカへ差し出した。

「はいこれ、ミカちゃんのたいせつなプレゼント。」

「あ・・・。」

だがそれを見たミカは、目に不安を宿し口をごもらせた。

「・・・さつきね、こわいゆめをみたの・・・」

ミカが、ミカがおかあさんはミカのこときらいだつて、

だからはたらいてばつかで、ミカのことかまってくれないって……

それで、ミカがおかあさんのことだいすきだつていったら……

ホントはおかあさんのことなんて、だいきらいなんじゃないのつていうの……」

闇の牢獄で起きた出来事を嗚咽交じりで話すミカを、螢は優しく抱きしめた。

「だいじょうぶ。ミカちゃんが不安になるのも、心配になるのも、ミカちゃんがおかあさんのこと大好きだからそうなるんだよ？」

大好きだからずつとそばにいてほしくて、大好きだからかまつてほしくて、だからちよつとでも一緒にいられなかつたり、あそんでもらえなかつたりするだけで、こわくなつちやうの。」

「ミカが……おかあさんのことだいすきだから？」

「うん、それからね、リリンおねえちゃんも言つてたでしょ？」

ミカちゃんがそんなにおかあさんのことが大好きなら、おかあさんだつて、ミカちゃんのことを大好きだつて。だから、」

螢は一つ区切り、両手でカーネ이션をミカへと差し出す。

「あしたはおかーさんに、大好きと、ありがとうつて気持ち、このお花でつたえよ？」

そうすればおかーさんも、ミカちゃんにたくさんの大好きつて気持ち、くれるはずだから。」

嘘偽りのない蛍の言葉に、ミカの瞳は少しづつ輝きを取り戻していく。

「……うん、ミカ、ちゃんとあした、おかあさんにつたえるよ。」

いつもありがとうって、だいすきって！」

そしてミカは闇の牢獄に囚われる前の、笑顔と元気を取り戻すのだった。

：

翌日、母の日を迎えた各家庭では、それぞれが母への感謝の気持ちを込めたプレゼントを送っていた。

ミカの家庭では、一輪のカーネーションを受け取った母が、涙を流しながらミカを優しく抱きしめた。

母の愛を改めて受け取ったミカは心の不安が取り除かれ、母の胸で嬉し泣きをするのだった。

森久保家では、要と瞬が2人でカーネーションの造花をプレゼントした。

母が受け取った後、瞬が、それは要が選んだものであると暴露すると、要は顔を赤くし大慌てで取り繕い始めた。

その様子を見た母は要の頭に手を伸ばす。

普段拳骨による制裁を受けている要は反射的に目を瞑るが、グーではなくパーで添えられ、優しく頭を撫でられた。

要は今度は気恥ずかしさで顔を背けながらも、抵抗せずにそれを受け入れていた。

藤田家では父と母そして祖母が揃い、家族全員で休日を過ごしていた。

雛子が母にハーブティーをプレゼントすると、母はさっそく使ってみると言い、ティーポットの準備をする。

すると祖母も立ち上がり、茶菓子の準備をし始めた。

今年に入ってからほとんどなかった一家団欒のひと時を迎え、雛子は家族の前だけに見せる、年相応の笑顔を浮かべていた。

：

「おかーさん。」

陽子は夫の健治とソファに座りテレビを見ていると、後ろから蛍の声が聞こえた。

振り向くと、両手を後ろにプレゼントを隠した蛍が、恥ずかし気に顔を俯かせながら立っていた。

「なに？ 蛍。」

陽子はソファから立ち上がる。

後ろに何を隠しているのか勿論わかっているが、それは言わぬが花と言うもの。

陽子は蛍からの言葉を待っていた。

そんな自分を前に蛍は少しはにかみながら、後ろに隠したプレゼントを差し出した。

「これ、おかーさんへのプレゼント。」

「開けてみていいかしら？」

「うん。」

蛍が両手にプレゼントを持った状態のまま、陽子は上に被せている箱だけを取る。

中に入っていたのはイチゴのタルト。

イチゴのジャムでカーネーションが描かれており、それだけでも陽子の胸はいっぱいになった。

毎年この日は、陽子にとっても素敵な一日だ。

愛娘からこんなにも愛情のこもったプレゼントをもらうことができるのだから。

「素敵。とても綺麗で、とても美味しそうで。

ありがとう蛍。

こんな素敵なプレゼントを貰えるなんて、お母さん、とても幸せよ。」

陽子は偽りのない本心の言葉を目の前にいる愛娘に送る。

そんな自分の言葉に蛍は満面の笑顔を浮かべてくれた。

そして蛍から、毎年この日に聞くことができるステキな言葉を待つ。

「いつもありがとう、おかあさん！大好き！」

蛍の大好きは、陽子にとって何よりも最高のプレゼントだから。

「お母さんも、蛍のこと大好きよ。

ほら、こっちにいらっしやい。

せつかくだからみんなと一緒に食べましょ？」

「うん！」

年に一度、陽子にとっても蛍にとっても最も大切な日は、笑顔の絶えない幸せな一日となるのだった。

:

次回予告

「今日も頑張つてキュアブレイズを探すわよ！」

「この街にいるのは間違いない。必ず見つけてみせるさ！」

「レモンお腹すいた〜。」

「ダークネスもどんどん強くなっている。みんなのためにもキュアブレイズを見つけないきゃ〜。」

「レモン喉かわいた〜。」

「俺たちに出来ることはこれくらいしかないからな。待っていてくれみんな！」

「レモンたこ焼き食べたい〜。」

「レモン！真面目にやりなさい！」

次回！ホープライトプリキュア！第10話！

探し人はどこへ!?妖精たちの奮闘記！

希望を胸に、がんばれ、わたし！

第10話

第10話・プロローグ

「ゴールデンウィークが明け、チエリーは一週間ぶりに学校へ通う蛍とともに玄関を出る。」

「それじゃ、チエリーちゃん。いってくるね。」

「いってらっしゃい、蛍。楽しんできてね。」

学校へ行くのが楽しみと言わんばかりの、蛍の明るい笑顔を久しぶりに見たチエリーは、蛍を見送った後に天を仰ぐ。

今日は雲一つない晴天、絶好の外出日和だ。

キュアブレイズとアツプルを探すにはもってこいの天気である。

「さてと、私も頑張らないと。」

周辺に人がいないことを確認したチエリーは、サクラへと変身して噴水広場へと向かうのだった。

蛭ガリリンに会うために良く訪れるこの噴水広場は、中央に立つ大時計が良く目立つ。

それを目印に集まるようになってから、気が付けば妖精たちにとつても集合場所となっていた。

到着したサクラは、時計の前でベルとレミンの姿を見つける。

「お〜い、サクラ〜。」

「2人ともお待ちませ。」

「いや、俺たちもさつき来たばかりさ。」

3人集合した後、サクラは改めて周囲を見渡した。

蛭と一緒によく見るテレビに映る、この国の首都と比べれば、夢ノ宮市は決して大きな都市ではないはずだ。

それでも僅か3人で回るには十分すぎる広さであり、商店街とその周囲の住宅街より外へはまだ出たことがない。

この都市全域を探して回るものなら、とてもじゃないが徒歩では無理だ。

以前ショッピングモールまで訪れたようにバスを使う必要がある。

そろそろ行動範囲を広めて、隣町にもいかなければならないかなと思いつながらも、サクラはこの街にキュアブレイズたちがいるように思えてならないのだ。

それは漠然とした直感でしかなく根拠もないが、それ故に否定できる材料も持っていない。

だからサクラはベルたちにも事情を話し、気が済むまでこの街を何度も探して回るようにしていた。

「必ず、見つけてみせましょう。私たちの大切なあの人を……。」

「……ああ。」

「もちろんだよ。」

キュアブレイズはサクラたち3人にとって、否、フェアリーキングダムに住まう人たちにとつてとても大切な人だ。

だから知りたい。なぜ姿を隠しているのか。

そして不安なのだ。フェアリーキングダムでの出来事を一人で抱え込んでいないのかと。

アツプルと一緒にいることはわかっているので、その心配は杞憂だとは思うが、サクラもベルもレミンも、指をくわえて待つだけのことは出来なかった。

自分たちにとつて大切な人である、キュアブレイズの力になりたいから。

「……必ず、見つけ出してみせますからね。」

この街のどこかにいるはずのキュアブレイズに、サクラは強く誓うのだった。

第10話・Aパート

探し人はどこへ!?妖精たちの奮闘記!

約1週間にも及ぶ連休明けの学校と言うものはかくもダルいものだと思ひながら、
要は雛子とともに教室へと入った。

「うつつ、要、雛子。久しぶり〜。」

「お〜う真。」

「2人とも久しぶり。」

「愛子、おはよう。」

要は真に、雛子は愛子に、それぞれ挨拶を交わしながら席へとつく。

「要、連休中の練習試合どうだった?」

要が席に着くや否や、真が部活動の練習試合について聞いてきてきた。

そう言えば女子バスケット部の練習試合と同じ日に、女子サッカー部の練習試合もあったか。

余談だが、愛子は当日自分たちの誘いを断り、

誰かが真の練習試合を見に行つてあげないと拗ねちゃうよ

と言つて真の方に付き添いにいった。

「バツチシ。華々しいデビュー戦を飾りましたぜ。」

「かく羨ましいね。」

「つてことはそつちは？」

「言うまでもなく、負けました。おかげで私の晴れ舞台が雨舞台になりましたよ。」

雨舞台なんて言葉は始めて聞いたが、とにかく真の初試合は苦い結果に終わったよう
だ。

するとこちらの会話を耳にした愛子が苦笑いを浮かべた。

表情から察するに、あまり詳しいことは聞かない方がいい試合内容だったようだ。

「くつそく、緑川のやつ。私の連勝記録に泥を塗つて。」

「いやデビュー戦やったんやろ。」

後から聞いた話によるとその緑川と言う生徒は同じ学年で、1年からレギュラーを務めるチームのエースストライカーであるとのこと。

それほどの実力者がいるチーム相手では、真の言う雨舞台というのも領ける結果だが、それでも自分と並ぶスポーツバカの真をここまで悔しがらせるほどのスポーツ少女が他校にもいるとは。

機会があればぜひ一度、一緒にサッカーをしてみたいものである。

「へえ、森久保もデビュー戦、勝てたのか。」

すると同じく連休中に野球部の練習試合があつた健太郎が話しかけて来た。

彼もまた、自分と真と同じで、初のレギュラーに抜擢されたのだ。

「おつ健太郎。もつてことは、健太郎も?」

「ギリギリだったけどな。でもみんなと協力して、何とか先輩たちの顔に泥を塗らずに済んだぜ。」

そう得意げに話す健太郎の姿からは、かつて卒業した先輩たちのプレッシャーに追われていた時の様子は見られなかった。

しかもその時の自分の言葉を冗談に変えられるあたり、すっかり吹っ切ることができたようだ。

そんな彼の様子を見て、要は安心と嬉しさを覚える。

「それは何よりで。」

「だくもう!みんなして勝ち自慢ばかりして!」

「悔しければ柳原も勝てばいいだけだぜ?」

「言つたな上田!よつし次こそは必ず勝つてやるから、私が勝つたらクレープ奢れよ!」

「いや、なんでだよ!」

「あつじやあウチはもう勝ったから、健太郎クレープゴチ。」

「買わねえよ!？」

スポーツバカが3人集まり、やかましくも賑やかな会話を繰り広げると、

「かなめちゃん、ひなこちゃん。おはよー。」

「蛭、おはよう。」

その満面の笑みを浮かべながら蛭が教室へと入って来た。

その様子見れば、学校へ行きたくて仕方がなかったであろうことが想像に難くない。

自分とは正反対だなど思いながらも、要もなんだかんだで、久しく顔を見る友人たちとお喋りに夢中になり、担任の長谷川先生が来るまでの間ずっと話し込むのだった。

∴

昼休み、雛子は蛭と要を誘って久しぶりに学食堂へと訪れた。

いつも通り角側の席を取り、各々がお弁当を食べ始めたところ、

「わざわざ学食に誘ったことは、プリキュアに関してなにか話したいことがあるの

「？」

さつそく要が本題をついてきた。

雛子は一旦箸をおき、蛍の方を見る。

「別に重要な話ってわけではないのだけれど、蛍ちゃん、体の方は大丈夫？」

「え？」

「一昨日の戦いで蛍ちゃん、とんでもない量の光の力を使っていたから。」

プリキュアの力である希望の光については扱っている自分たちも詳しいことは知らないが、これまでの戦いから、気力と体力を消耗するものであることはわかった。

雛子も以前、夢ノ宮ドリームプラザで愛子を助けるときに、希望の光を無茶な使い方酷使したが、その後の疲労感は今までの戦いよりも大きいものだった。

そして一昨日の戦いで蛍が使った希望の光は、あの時の自分が使った量を遥かに上回っていたのだ。

「ありがとう、でもだいじょうぶだよ。」

あの日はおうちにかえって、はやめにグッスリねたから、つぎの日にはもう、げんきになったの。」

顔色を窺ってみるが、確かに疲労らしき色は見当たらない。

箸の進み具合から見て食欲もある。

普段と変わらぬ蛍の様子に、雛子はホツと胸を撫で下ろした。

「そう、良かったわ。」

「正直びっくりしたもんな。蛍が使った浄化技。」

要の言う通り、蛍ことキュアシャインの放った浄化技は、要ことキュアスパークの浄化技を受けても物ともしなかつたソルダークの障壁を易々と撃ち砕いたのだ。

自分の浄化技とキュアスパークの浄化技を足しても尚、あの威力の足元にも遠く及ばないだろう。

「えと・・・でも、こんかいは前とちがって、じょうかわぎをつかったことはおぼえてるんだけど、やっぱり、なんでつかえたのかは、わからないんだ・・・。」

「つまり、もつかい使えって言われても使えないってこと？」

「うん・・・ごめんなさい。」

俯きしよんぼりとする蛍。

そんな仕草も可愛いが、彼女が気に病む必要はない。

あの時戦ったソルダークは、自分と要が2人がかりでも勝てるかわからないほどの強敵だった。

もしも蛍が浄化技を使っていなかったら、敗北していた可能性もある。

「謝ることないよ。蛍のおかげでウチらは助かったんやし。」

「要の言う通りよ。蛍ちゃん、ありがとう。」

「……えへへ、どういたしまして。」

顔を赤くしながらはにかむ蛍。可愛い。

しょんぼりとする蛍も可愛いが、やはり一番は笑顔である。

蛍の気も取り戻せたことだし、この話題をこれ以上続けるのは彼女を余計に刺激してしまう。

雛子はここへ2人を呼んだ、もう一つの話題を振ることにした。

「それから、リリスのことなんだけど。」

「リリス?」

「蛍ちゃん、要。」

あの子だけ、他の行動隊長とは何か違う気がしないかしら?」

雛子がリリスと対面するのは一昨日で2度目だが、それでも彼女が他の行動隊長とは違うの是一目瞭然だ。

サブナックとダンタリアは、方や力押しを好み、方や人の弱みに付け込む等、手段と性質に違いはあれど、世界を絶望の闇で覆うと言う目的は一致している。

だがリリスは蛍を、キュアシャインを手にかけることのみを目的としているように見える。

「・・・あの子だけ、わたしをたおすために、うごいていること・・・かな?」

リリスのことを思い出したのか、蛭が声を震わせながらそう呟く。

蛭に怖い記憶を思い出させてしまったことを雛子は申し訳なく思いながらも話を続ける。

「でもそれは、ウチらがやつらにとって邪魔だから、プリキュアを倒すために動いてるっただけやないの?」

「それだと私たちを無視する説明がつかないわ。」

リリスが狙っているのは、あくまでも蛭ちゃんだけよ。」

「ダークネスのもくてきは、せかいを、ぜつぼうのやみでとじこめること。」

ほかの行動隊長はそのためにうごいているのに、リリスだけが・・・わたしのことが憎いからねらってきている・・・。

だから変なんだよね?」

「・・・確かに、そう聞くと妙な話やな。」

なんでリリスだけがそんな感情的に動いとるんやろ?」

蛭と要も、自分が感じた違和感に気づいてくれた。

これまでサブナツクとダンタリアを退けても、2人は自分たちを憎むような面を見せなかった。

だがリリスだけが蛍に対して強烈な憎しみを抱いている。

そしてサブナックとダンタリアは、ダークネスとしての活動を粛々と行っているのに
対し、リリスは憎しみの感情を剥き出しにして蛍に襲い掛かってくるのだ。

その行いはもはやタチの悪いストーリーカーそのものと言ってもいい。
いずれにしても、リリスは行動隊長の中でも異端な存在である。

「でも、目的がはっきりしているなら、打つ手だつてあるつてことや。

リリスが蛍のことしか狙わないんだつたら、ウチらが全力で邪魔すればいい。」

「ええ、蛍ちゃん、次こそ私が必ず守つてあげるからね。」

「ありがと、でもわたしだつて、こわがつてばかりいられないもん。」

つぎにリリスがなにをしてくるでも、わたし、こわがらないでちゃんとたたかうから。」

「蛍……。」

蛍もまた、彼女なりにリリスと戦う決意を固めているようだ。

彼女の意を汲みながらも、蛍を守ると言う思いの下に、雛子と要も決意を強めるの
だつた。

：

夕方、チェリーが家に帰ってから程なくして、蛍が学校から帰ってきた。

「ただいま。」

「おかえり蛍。」

「どう？ キュアブレイズはみつかった？」

「いいえ、今日も見つけられなかったわ。」

「そっか。はやくみつかるといいね。」

ひとしきり会話を終えた蛍は私服へと着替え始める。

「ねえチェリーちゃん、わたしにもなにか、おてつだいできることあるかな？」

「え？」

蛍の申し出にチェリーは悩む。

確かに人手は大いに越したことはないし、蛍だけでなく、要や雛子といったこの街に詳しい人に協力してもらえるのなら、自分たちだけで探すよりもよっぽど良いだろう。

だが

「別にいいわよ。これは私たちの役目なんだし、蛍は蛍の時間を大切にしてい。」

要と雛子と友達になれたことで、蛍の毎日は充実している。

かつて蛍の両親が思ったように、チェリーは蛍に自分の時間を、自分のために大切に
使ってほしいのだ。

「でも……。」

「それに来週からテストなんでしょ？ 少なくとも今週中はそんな時間ないんじゃないの
？」

「あつ……そっか。」

なおも食い下がろうとする蛍だったが、テストの話聞いて諦めてくれた。

蛍の話によれば、夢ノ宮中学校の授業のレベルは、元いた学校のものよりも高いよう
で、蛍は日々の予習、復習でも頭を抱えていることがある。

だから自分たちに気を遣い、試験勉強を疎かにさせるわけにはいかないのだ。

「今週末だっけ？ みんなで勉強会をするの。」

「うん！ ひなこちゃんのお家にあつまって、みんなでべんきようするんだ！」

そして休日友達と集まって勉強会をすることも、蛍が望んでいた友達との過ごし方
の1つだ。

それがついに実現することの喜びは、今の蛍の笑顔が物語っている。

やっぱり彼女の時間を自分たちの都合で割くわけにはいかない。

これ以上気を遣わせないためにも、一刻も早くキュアブレイズを見つけよう。

蛍の笑顔を見たチェリーは改めて決意するのだった。

：

週末、チェリーは勉強会のために要の家へと出かけた蛍を見送ってから、噴水広場へと足を運ぶ。

いつも通り人気のない場所でサクラへと変身してから広場に着くと、程なくしてベルが姿を見せた。

「あら、今日はレミンは一緒ではないのね？」

普段妖精たちは、各々のパートナーが家を出るタイミングで一緒に出かけることが多い。い。

そして要と雛子は学校がある日は一緒に登校することが多く、休日も2人で出かけることがあるので、パートナーであるベルとレミンも一緒にいることが多いのだ。

「今日の勉強会、会場は雛子ちゃんの家だろ？」

「ああ、それで珍しく一緒じゃなかったのね。」

「別に要と雛子は常に一緒にいるわけじゃないよ。」

「私の知る限りでは一緒にいる方が多いからね。」

小学生の頃からの付き合いで、家も近所と言うほどではないが遠くもない。

プライベートでの親交がとても深い要と雛子に対して、蛭は2人と知り合つてまだひと月。

家も徒歩で通える距離だがそれなりに遠く、物理的に埋められない時間と距離は、蛭と2人にとつての溝にならないか、チエリーには少しだけ不安だつたりするのだ。

無論、要と雛子は蛭にとても良くしてくれるし、2人に限つて蛭を仲間外れにするなんてあり得ないが、それでも一度抱いた不安と言うものはなかなか払拭できないものだ。

(全く、健治さんと陽子さんの過保護がうつっちゃったかしら?)

我ながら甘いと思うが、仕方がないとも思う。

容姿性格ともに幼く、臆病で人見知り強い。

その割には、一度決めたことはテコでも動かず無茶なこともやつてのける危なっかさまである。

そんな蛭に対しては彼女の両親のみならず、要と雛子といった友人さえも過保護気味だ。

本人は年下扱いされることを快く思っていないが、誰からでも大切にされ、可愛がられ、つい守ってあげたくなると思わせる彼女の性格は役得と言える。

「いたいたく、2人ともお待ちせう。」

と、蛸のことを考えている内にレミンがようやく姿を見せた。

「よし、今日も頑張って探すわよ！」

「おっつ！」

そして3人の妖精たちは今日もキュアブレイズとアップルを探すために街を回るのだった。

…

ベルは街を歩き交う人々に目を向けながら、初めてキュアブレイズと出会った日を思い出す。

故郷のフェアリーキングダムでは、ベルはこの世界で言うところの炭鉱夫を生業としており、その日も仕事で仲間の妖精や人間たちと共に鉱山を訪れていた。

その時、仲間の妖精が闇の牢獄に囚われソルダークを生み出してしまった。

そしてベルも闇の牢獄に囚われかけた時、間一髪のところできュアブレイズに助けられた。

その後キュアブレイズは自分を守りながらソルダークと戦い、勝利したのだ。

その時既に、ベルはキュアブレイズの正体に関する噂を聞いており、実際に本人を前にしてその正体を確信した。

彼女の正体が本当に自分の思う人ならば、フェアリーキングダムを守るために戦うことを躊躇ったりはしないだろう。

それでもベルは、妖精とはいえ男の身でありながら、自分よりも幼い女の子に戦うことを強要しているに等しい状況が許せなかった。

だがそのことを謝罪すると彼女は、力がないこと、戦えないことは罪ではない、と優しく諭してくれたのだ。

それでも全ての責任をキュアブレイズに負わせているのに変わりはないと話すと、彼女はこう言った。

「私は誰からも強要されてるわけじゃないのよ。

この世界に住む全ての人々が、私にとつてとても大切な宝物なの。

そして私にそれを守る力が、戦う力があるのだから、私は私自身の意思で、私の全て

を賭けて戦うただそれだけよ。

私は、好きでやっているのよ。」

木漏れ日のように穏やかな優しさの内に、灼熱のように燃え盛る情熱を秘め、太陽のように眩しい笑顔を持つ少女。

ベルはその後何度かキュアブレイズの優しさと強さに助けられた。

だがそんな彼女も半年にも及ぶダークネスとの戦いの末、ついに敗れてしまった。ベルはこの世界に逃げる際に流したキュアブレイズの涙を忘れられないでいる。

もしも彼女がまだ、自分の故郷を守れなかったことを悔やんでいるのだとしたら、「あの時助けてもらった分、今度は俺が助けにならないと。」

その決意を胸に、ベルはキュアブレイズの搜索を続ける。

すると芝生公園の方が何やら騒がしかった。

「こちら嬢ちゃん！それは売り物だつての!!」

何事かと思ひながら騒ぎのする方を向くと、たこ焼きの屋台が目にと留まった。

そしてそこには一心不乱にたこ焼きを貪る『黄色のワンピース』を着た少女の姿がある。

「冗談だろおい……。」

現実逃避したくなるような光景を目の当たりにしたベルは、先ほど新たな決意を胸に

再開された

キュアブレイズの搜索を慌てて断ち切り、騒ぎの元凶たる少女の元へと駆け寄っていった。

：

噴水広場からやや離れた芝生公園へ訪れたレミンは、芝生の上に腰掛けて辺りを見回す。

「ん〜、見当たらないな〜。」

そんな簡単に見つかかるようならこれまで苦労はしていない、と思いつつもレミンは芝生公園を一望する。

キュアブレイズの姿はなく、代わりに目に映るのは幼い子どもたちが無邪気に遊ぶ姿だ。

ふと空を見上げると真つ白な雲が気持ちよさそうに浮遊している青空。

空の青色と芝生の緑色を見比べたレミンは、故郷でお気に入りの場所であった丘の上

の風車小屋を思い出した。

よくキュアブレイズと一緒に昼寝をした、レミンにとつての思い出深い場所だ。

「早く会いたいな〜。」

自分がマイペースでちよつぱり我儘な性格であることは自覚している。

キュアブレイズはそんな自分にも目くじらを立てることなく優しくしてくれた。

自分に対してと言うよりは幼子たち全般に優しいのだ。

ゆえに城下街に住む子どもたちからも姉のように慕われていた。

だからこそ早く彼女に会いたい。

また昔のように甘えたいと思う気持ちが半分、もう半分は、甘やかしてもらえた分、彼

女に恩を返したいからだ。

「よくし、頑張って探すか〜。」

一息ついたレミンが腰を上げたその時、

「ん?。」

何やらとても香ばしい匂いがした。

クンクン、と匂いの元を探りながら振り返ってみると、そこにはたこの絵柄が書かれていた看板に大きく『たこ焼き屋』と書かれている屋台があった。

「たこ焼き・・・あれが噂のたこ焼き!」

雛子の家のテレビを見せてもらったとき、『本場のたこ焼き屋特集』と言う番組を見たことを思い出す。

『たこ』と呼ばれる水棲類の肉をころもで包み専用の鉄板で揚げて作られる料理だったはずだ。

雛子が商店街の outlet で時々売られているから、機会があれば買ってきてくれると言っていたが、まさか買ってもらえる前に店を見つけてしまうとは。

「ゴクリ……」

熱を帯びた鉄板から湯気とともに漂う匂いがレミンの食欲を刺激する。

食事の必要がない妖精に食欲と言うのも変な話だが、とにかくあれを食べてみたいと言いう欲求に駆られた。

テレビで見かけた、柔らかな食感を連想させる独特の色をした肉にパリッと小気味よい音を立てて割れる揚げたてのころも。

そして食したレポーターの美味しそうな笑顔がレミンの脳内で再生される。気が付けばレミンは匂いにつられて屋台の目の前まで立っていた。

「いらっしやい嬢ちゃん。」

頭に鉢巻を巻いた恰幅の良い男性の店員は目に入らず、レミンは目の前で揚げられている出来立てのたこ焼きに視線が釘付けになる。

「嬢ちゃん？」

これは商品だ。商品である以上お金を払って買わなければならない。

それは故郷でも常識とされている事であり、レミンも当然そのことは理解できているはずなのだが、目の前に置かれたたこ焼きを前にそんな理性はあわくも消し飛んだ。

「いただきます！」

その後レミンは、ベルに止められるまでの間、自分が何をしていたのか覚えていないが、初めて食したたこ焼きの味だけはしっかりと記憶されたのだった。

∴

サクラが騒ぎを聞きつけると、口を青のりでベタベタに汚したレミンがベルに抑えられ、ベルはしきりに店員に頭を下げていた。

その光景だけでサクラはこの場で何があったのかを全て悟った。

「本当にすみません！今手元に財布がなくて・・・いつか必ず払いますから！」

「いや、いつかって言われても、今払ってもらわないと困るんだが・・・。」

会話の内容を聞いたサクラは自分の手元にあるものを見る。

『これ』を使えば問題は解決できるが、このような使い方は想定外であり不本意でもあるのだ。

だがこのままだとベルが責任を負わされ、最悪警察に通報されて・・・

「いくら嬢ちゃんが相手でも、無銭飲食は立派な犯罪だよ。悪いけどここは警察を呼んで・・・。」

と言う予想はあつさりとの中してしまい、サクラは反射的に店の前まで飛び出し、

「わっ！私がいいます！私がいいますから!!」

「サクラ!?!」

手元にある『財布』からレミンが食した分の代金を支払うのだった。

「はあっつ。」

サクラが代金を支払うことで何とかあの場を切り抜けた妖精たちは、ベンチに腰掛けて休憩する。

そしてサクラとベルは深いため息を吐いた。

「はっタコ焼き美味しかった。」

一方でレミンは呑気にそんなことを言つてのける。

だが今のサクラは怒る気力すら沸かず、沈んだ表情のまま俯いていた。

「助かったよサクラ。しかしよくこの世界のお金を持っていたな。」

「・・・うう・・・。」

「サクラ？」

ベルの言葉を聞いたサクラは低く唸りながら顔を両手で覆う。

その様子にベルは戸惑うが、やがてサクラは静かに口を開いた。

「これね・・・蛍が私に貸してくれたお金なの・・・。」

「蛍ちゃんか？」

サクラはベルに、このお金を預かった時の蛍との会話を話した。

1週間ほど前、キュアブレイズを探すために家を出ようとしたチェリーは、蛍に呼び止められた。

「チェリーちゃん、これ。」

蛍はチェリーに財布を手渡した。表面が色褪せており、使い古されたものであるようだ。

「蛍、どうしてこれを？」

「もしもなにかあったときのために、念のためかしてあげる。」

ほんの、5千円くらいしかはいってないけど。」

「5千円!?!」

金額を聞いてチェリーは驚く。

蛍と一緒にお願いに出かけることもあるチェリーは、この世界の通貨の単位も多少なりとも理解している。

そして5千円と言う金額は、蛍の年代の子が持つものとしては、高価な金額である。「このせかいでは、だいたいのことはお金があればなんとかなるはずだから。」

キュアブレイズをさがすために、ちよつと遠くの街へいくのにも、バスや電車がひつようだし、

もしたりなくなったら、いつでもいってね。」

「こんなに沢山いらないし、これ以上はもらえないわよ!」

「だいじょうぶ、こうゆうときのために、ちゃんとおこづかい貯金してるから。」

それにわたし、じつは趣味でつかってる分のおかねは、おつかいのおきにあずかっているおかーさんの、内緒ですこしつかつてるの。」

そう言いながら蛍は珍しく、悪戯めいた笑みで舌をペロつと出した。

確かに、蛭は趣味である料理とお菓子作りの材料を、お遣いのついでに買っていることがある。

だが彼女の言う通り、使っている金額は少しでしかなく、母の陽子にはその分の清算がきちんと書かれているレシートを渡しているの、内緒にしているといいながらも口では言っていないだけだ。

それに蛭は作った料理とお菓子を陽子と健治にも振る舞っているの、陽子も蛭が趣味にお金を使っているのを黙認しているのだろう。

だが蛭は、評判の良いスイーツを買ったり料理やお菓子の本を購入したりと、それ以外にもお金を使うことが多い。

そして5千円もあれば、それらの趣味も心行くまで満喫できるはずだ。

その分を削ってまで自分に預けるだけでも申し訳ないのに、蛭の言う通りお金がないとこれ以上の行動範囲を広げることができないので、チエリーは受け取るべきか断るべきか悩み出す。

「あつ、つかれたら、なにかおいしいものでもかってたべてもいいんだよ？」

チエリーちゃん、いつつもキュアブレイズをさがすのにがんばってるんだから、そのためにおかねをつかうことは、ぜんぜんもったいなくないし、わたしがてつだえるのなんて、これくらいしかないから。」

「蛍……」

そんな蛍の優しさと気遣いがチエリーの胸に染みる。

ここまで自分のことを思ってくれるのなら、その心遣いを拒否するのも失礼な話だ。

「ありがとう蛍。私、このお金大切に使うからね！」

このお金は大事に使って行こう。

私欲のためではなく、どうしても使わざるを得ない状況でのみ使って行くのだ。

と、心に決めたはずなのに、

「どうしてこんなことで使わなきゃいけないのよ！」

あの時の蛍の優しさを思い出したサクラは意気消沈しながらも大声で叫ぶ。

初めての活用が食欲で我を忘れたレミンの弁償代だなんてあんまりである。

「お金のことに気が回るなんて、さすが蛍ちゃんだな。」

一方、ひとしきりサクラを聞き終えたベルは感心の表情を浮かべていた。

毎日家事に取り組んでいる蛍ならではの気遣いと言える。

「このお金は絶対に無駄に使わない。大切に使うって行こうって決めたのに……」

故郷であるフェアリーキングダムはこの世界よりも文明は発展していないが、貨幣経

済の概念は存在している。

漁業や農業などの一次産業で生計を立てている農村では未だに物々交換が主流だが、城下街は硬貨が流通しており、力のある男が働きに出て稼ぎ、女は家事に努めて家を守っているのだ。

労働条件が男女平等となっているこの国では前時代的な在り方かもしれないが、貨幣に対する根本的な価値観は同じであり、子どもは親の庇護の下、次世代を担うべく勉強に励んでいるのも同じで、その中で大人が我が子に貨幣の大切さを身をもって教えるために幾つかの硬貨を子に授ける、所謂お小遣いという考えも、故郷では自然と生まれたのだ。

つまりサクラには、稼げに出不られない子どもにとって、お小遣いと言うものがどれほど貴重なものであるかもわかっていたのだ。

しかも当然、サクラには返す当てがない。

貸してあげると言われているが、このお金は蛍から貰ったようなものなのだ。

「……えと、サクラ、ごめん。あとでちゃんと蛍にも謝るから……。」

すると話を聞いていたレミンが、蛍のお金で自分の食欲を満たすことができたと言うことをようやく自覚したのか、細々と謝り出す。

だがその程度ではサクラの怒りは収まらない。

蛭からもらったお金の大切さを改めて認識したサクラは、それをレミンに叩き込むと言わんばかりに怒りを飛ばす。

「当たり前でしょ！ 蛭にちゃんと頭を下げて謝らないと承知しないからね!!」

「はっはい……。」

そんなサクラの剣幕に、さすがのレミンも気圧されるのだった。

∴

レミンの食い逃げ未遂事件に怒りを爆発させたサクラがようやく落ち着きを取り戻し、十分な休憩を終えた頃、ベルは兼ねてより気になっていた疑問をサクラへと投げた。「ところでサクラ、君は俺たちと会う前に、この世界でキュアブレイズと会っているんだよね？」

「え……そうだけど。」

一呼吸をおいてサクラが返答する。

この世界でサクラと再会してから、彼女にキュアブレイズの話話をふると、いつも決

まりの悪そうな顔をするのだ。

ベルはその理由を知りたかった。

「その時、何かあったのかい？」

君はキュアブレイズの話を聞くたびに、あまりいい顔をしなくなったから。」

「・・・やっぱり、気づいていたのね。」

「サクラ、キュアブレイズに何かあったの？」

レミンも不安を帯びた声でサクラに尋ねる。

「・・・実はね・・・。」

そしてサクラは寂し気な表情の口元に淡々とした言葉を連ねて、この世界でキュアブレイズと再会した時に何かあったかを話してくれた。

蛭が初めて変身したとき、ソルダークと戦うことから逃げ出した彼女を糾弾したと。

蛭がリリスを退けたとき、蛭からのお礼の言葉を聞かずにその場を立ち去ったこと。

そして常に険しい表情を浮かべるようになり、物言いもどこか刺々しくなってしまうていたことを。

「そんなことがあったんだな・・・。」

話を聞く限りでは信じられない内容だった。

戦いを恐れる蛍を糾弾するなんて、自分の知る優しいキュアブレイズがやることとは思えない。

そして何よりも、あの太陽のように眩しい笑顔を見せなくなったことが信じられなかった。

「それ．．．本当なの．．．？本当にキュアブレイズが．．．？」

レミンが目には涙を浮かべて言葉を詰まらせる。

彼女のことを姉のように慕っていただけに、ショックが大きかったようだ。

「ええ．．．でもキュアブレイズは、私がソルダークにやられて傷ついたとき、心配するような表情を見せてくれたの。」

それに最初は私のこと、迎えに来るって言うてくれた。

変わってしまったように見えるけど、心はきつと、優しいキュアブレイズのままのはずよ。

だから早くキュアブレイズを見つけてましょ！」

サクラの言う通り、キュアブレイズが優しさを失うとは思えない。

だがもしもキュアブレイズがフェアリーキングダムを守れなかったことに負い目を感じていたとしたら、変わってしまった原因はそれかもしれない。

それを確かめるためにも、いち早くキュアブレイズを見つけたさう。

ベルだけでなく、サクラもレミンも同じ思いを胸に秘め、キュアブレイズの搜索を再開するのだった。

：

蛍が時計に目を向けると、時刻は正午に差し掛かっていた。

先ほどまでは勉強に集中していたが、ちょうど昼食の時間だと意識した途端、思い出したかのように空腹に見舞われ、

グウウウ

自分からではなく隣に座る要のお腹から虫の音が鳴り響いた。

「いや〜お腹空いた。雛子、お昼も近いし少し休憩しよっさ。」

腹の虫を盛大に聞かれたのに恥じらう様子を見せない要と、そんな彼女に対して呆れた表情でため息をつく雛子。

「あはは、そうだね。ひなこちゃん、そろそろきゆうけいにしない？」

そんな2人に苦笑しながら、蛍も要に同意する。

一度空腹を意識してしまうと、勉強にもなかなか集中できなくなるものだし、どのみちそろそろ食事と休息を十分に取らないと集中力が続く状態でもなかっただろう。

それだけ今回の勉強会はなかなかハードな内容だったが、友達と一緒に勉強ができる環境にすることが、蛍のモチベーションを最大まで高めていた。

結果蛍は、今までないくらい勉強に集中することができたのである。

「蛍ちゃんと言うなら。」

それよりも要、ちゃんと教えたこと覚えてるでしようね？」

「はいはい大丈夫大丈夫。」

一方要は、雛子の問いを軽くあしらいながら本棚にある数少ない漫画に手を伸ばしている。

すっかり休憩モードに入っており、そんな彼女を見習い、蛍も姿勢を崩して寛ぎ始めた。

そんな自分たちの様子をみた雛子は苦笑しながら自身のノートを閉じる。

「もう、しょうがないんだから。」

午後もビシバシ行くから覚悟しなさいよ。」

「お手柔らかにお願いしますよ、雛子先生。」

『雛子先生』と言うワードに思わずクスリと笑ってしまう蛍だが、他人事ではなかった。

読書好きでメガネをかけた文学少女は総じて成績も優秀、なんて先入観を持つつもりは無いが、雛子に関してはそのイメージ通りだ。

自分も午前の間、わからない箇所を何度も雛子に質問したが、その全てに答えてくれたし何より教え方がとても上手い。

人に教えるにはその2倍の知識が必要と言われているように、他者に教えるには相応の知識は勿論、それをわかりやすく伝えるための表現力も必要となってくる。

特に夢ノ宮中学校は、進学校に匹敵するほどのレベルのはずなのに、それを分かりやすく丁寧に教えることの出来る雛子の学力は、蛍から見れば計り知れないものである。（せっかくなこちゃんがりややく勉強をおしえてくれるんだし、わたしもがんばらないと！）

2年生に進学した分、勉強の難易度が上がったというのもあるのだろうが、日々出される宿題でも頭を痛めることが多い現状では、満足のいく結果を出すことは難しいだろう。

もしも低い点数を取ってしまったら、この場を設けてくれた雛子に申し訳がないし、両親にも、家事に時間を取られたために勉強する時間がなくなつた、なんて余計な心配をかけたくないのだ。

別段、両親を安心させるために学校の勉強を頑張っているわけではないが、負担にな

りたくないと思つてゐる以上、少しでも不安に思わせるような要素は極力なくしたい。

だから今回の試験は、最低でも平均点は目指しておきたいのだ。

「ヒナちゃん、みんな。お昼ごはんであつたわよ。」

すると雛子の祖母である菊子が、部屋のドアを開けてきた。

「あつども、ゴチになります菊子さん。」

まるで家族を相手に接するかのよう、砕けた口調で菊子と話す要。

「あつありがとうございます！」

蛸は蛸で、緊張の面立ちで深々と頭を下げる。

「じゃあ、お昼ごはんを食べて、少し休憩しましょうか？」

そして雛子がこの場を収め、3人は昼食をとるためにリビングへ向かうのだった。

∴

リビングを訪れると、食卓の上には既に料理が並んでいた。

ご飯と味噌汁、焼き魚にこんにやくと蓮根の煮物、そしてほうれん草の白和え。

どちらかと言えば和食派の蛸は、綺麗に並べられた一汁三菜に目を輝かせる。

「「いただきまーすー」」

「はい、召し上がれ。」

以前、雛子の家に泊まったときも、朝食に菊子の手料理ご馳走してもらったが、シンブルながらも味わい深い菊子の料理はとても印象的で、とても美味しかった。

菊子の料理は、料理を始めてから10年も満たない自分の腕では到底並び立つことが出来ないほど熟練されている。

人はどんなに努力しても時間を早めることは出来ない。

重ねて来た年月は絶対に覆らないからこそ、自分たちよりも遥かに長い年月を経験している年寄りの知識と技術は素晴らしいものなのだ。

と言う母の言葉を蛸は思い出す。

そして菊子を見て、その言葉を肌で実感した。

自分が彼女の技術に追いつくには、彼女と同じ年月を重ねなければならぬだろう。

「よし、昼ごはん食べたらちよつと街まで出かけない？」

「「いらー要ー」」

すると食事をしながら要が外出の提案をしてきた。

さすがに今回は遊ぶためでなく、勉強会として集まっているので、本来の趣旨とはズ

レている要の提案に、雛子は眉を潜めながら注意する。

「ほんのちよつとお菓子とジュースを買っただけやつて。

少しくらいは気分転換は必要でしょ?」

「またそんな調子の良いこと言つて。」

「なつ? お願ひ! ほんの30分くらいでええから!」

さすがに朝からずつと勉強尽くしで部屋に引きこもりつてのは辛いんだつて。」

両手を合わせて懇願する要。

日がな一日部屋に籠つての勉強漬けは、スポーツ少女の要にとつては相当窮屈なのだ

ろう。

それに少しばかり外出して、日光に当たり体を動かすことで気分転換を図るといふのは決して悪くない提案である。

「もう、しようがないわね。おやつを買つたら寄り道しないですぐに帰るわよ?」

「サンキュー!」

親指を立てサムズアップをしながら喜ぶ要。

勉強の合間に食べるおやつであれば、甘いものが良いだろうか? そんなことを考えながら、蛭たちは昼食を取り終えるのだった。

…

リリンが噴水広場にある時計を見上げると、時刻は正午を過ぎかかっていた。

今の時間は一般的には『昼食』と呼ばれる食事の時間を終えるころだ。

休日のこの時間帯は、虫と遭遇する可能性が最も高い時間であることは、これまでの経験から立証されている。

だからリリンは今、この地へと降り立ったのだが、

「……なぜあなたたちまでついてきてるの？」

今回はサブナックとダンタリアも共に降りて来たのだ。

はつきり言って2人がいても邪魔でしかなく、リリンは2人を邪険する。

「別に、僕は僕の目的のためにここに来ただけさ。」

そろそろ新しい素材を探す頃合いだと思っただけさ。

いつも通り人を逆なでする口調で答えるダンタリアは、水色の髪に青の瞳を持つ人間の姿をしていた。

ダンタリアの人間としての姿を見るのは初めてだが、リリンには興味のないことだ。

「それと、君がその姿の時はリリンって名前があるように、僕にもこの姿の名前があるの
さ。」

この姿の時は、僕のことは『グリモア』って呼んでくれよ。」

興味がない、と言う意を込めてリリンはダンタリア改めグリモアから視線を外す。

するとグリモアは隣に立つサブナックの方へ視線を向けた。

サブナックもまたグリモアと同様、人に姿を変えている。

「ところで、君にもその姿の時の名前はあるのかい？」

「一応、考えて来た。」

こちらにも興味はない。

リリンがそう思つてこの場を立ち去ろうとしたその時、

「聞こうか？」

「サブローだ。」

「……。」

あまりにも予想外な答えが耳に届いてしまい、つい足を止めてサブナック改めサブローへと振り向く。

一方グリモアはその名前を聞いた途端、額に手を当てて呆れ交じりのため息を吐いた。

「・・・なんだ？」

自分たちの様子を見て流石のサブローもおかしいと思ったようだが、聞き返してくるあたり、彼が如何にバカな名前を考えたのかわかっていないようだ。

行動隊長は人間の姿に変えられるとは言っても体型まで変えることができない。

そして体型が10代の少女とさほど変わらない自分や、細身で成年男子の平均身長をやや上回る程度の身長を持つグリモアと違い、サブローは2mを優に上回る高身長に加えて、筋骨隆々とした肉体を持つ。

オマケに肌は褐色で髪は銀色と、明らかにこの国の人間の基準を逸脱した容姿だ。

その姿で名前が『三郎』？

この国では前時代的な名前だと言う以前に、この国の人とあまりにもかけ離れや容姿で名前がサブローだなんて、傍から見たら怪しい人物ことこの上ない。

このバカはこの世界の常識について未だに何も学んでいないと言うのか？

「くれぐれも、こつちの方には近寄って来ないでよね？サブロー。」

「同感だね。君が側にいるとイヤでも目立ってしまうよ。サブロー。」

例によってサブローが邪魔だと言う意見が一致したりリンとグリモアは、各々目的のために動き出す。

「・・・サブローの何がいかんと言うのだ？」

そこじゃないわよバカ。
そこじゃないだろバカ。

そしてこれまた例によって、最後まで意見が一致した。

「ちよつと、そこの君。」

「ん?」

すると一人の男性がサブローに声をかけてきた。

服装からその男がこの世界の行政機関に勤める『警察官』であることがわかる。

案の定さつそくこの国の行政機関に目を付けられたようで、リリンとグリモアはやや早足でこの場を離れる。

「見たところこの国の人ではないようだけど? パスポートは持っているか?」

「なんだそれは?」

「え?・・・君、名前は?」

「サブローだ。」

「・・・少し同行してもらおうけどいいか?」

そしてサブローはさつそく警察官に連れられ、近くにある交番まで連行されることに

な
っ
た。

リリンとグリモアは他人の振りをし、連行されるサブローを心から侮蔑するのだっ
た。

第10話・Bパート

商店街へと訪れた蛭たちは、おやつを買うためにスーパーへと向かう。すると、

「ほたる。」

自分の名を呼ぶ声が聞こえ、振り向くとそこにはリリンの姿があった。

蛭は笑顔を浮かべて彼女の元へ駆け寄る。

「あっ！リリンちゃん!!」

「ほたる、偶然ね。こんなところで。」

「うん！」

リリンは偶然と言うが、蛭は心のどこかでリリンと会えるのではないかと思っていた。

休日この時間に会うことが多かったし、会うときは噴水広場を暗黙の待ち合わせ場所としているのだ。

そしてこの商店街は噴水広場への通り道である。

「ねえほたる、今日も一緒にお話ししない？」

いつものようにリリンから誘いを受ける。

だがリリンとこの場で会えたことは、蛍にとつては嬉しくも悲しい誤算である。

来週にはテストが控えているのだから他の事に時間を割ける余裕はないのだし、今日は自分の願いを聞いてくれ、わざわざ私室を勉強会の会場としてくれた雛子の厚意を無駄にするわけにはいかない。

蛍は惜しみながらも、今回はリリンからの誘いを断ることにした。

「えとね……今日はちよつと、ようじがあつてね。」

浮かない顔でリリンから視線を外しながら、蛍は彼女の誘いを断る。

「え……?」

だがリリンから困惑の声が漏れ、蛍は思わず彼女の方を見なおす。

リリンは口元を微かに震わせ声を詰まらせていた。

「……リリンちゃん?」

恐る恐る尋ねてみるが、リリンから言葉が返つてこない。

「……用事つて……どんな?」

そしてようやく出た彼女の声は擦れていた。

初めて見る彼女の困惑する姿に、蛍は戸惑いながらも理由を話す。

「えと……来週から学校でテストがはじまるんだ。」

だから今日はね、みんなであつまって、おべんきようをしなきゃいけないの。」

「……。」

だが理由を話しても、リリスは押し黙ったままだった。

蛍が気まずさを感じたその時、雛子から声がかかる。

「蛍ちゃん、買い物は私と要でやっておくから。それまでリリンちゃんと一緒にいたら？」

「え？でも。」

確かに買い物のために使う時間をリリンと過ごすための時間として使うのであれば、勉強時間を割く必要はない。

雛子の提案は蛍にとってありがたいものであるが、そのために2人に自分の買い物まで押し付けてしまうのには申し訳なく思う。

「別に大した量買うわけやないし、ウチら2人いれば十分だよ。」

せっかくリリンが誘ってくれたんだし、ウチらが買い物している間だけなら、一緒にいてもええよ？」

だが要も雛子の提案に賛同してくれた。

こうなると2人の厚意を無駄にする方がよっぽど申し訳ないと言うものだ。

「かなめちゃん、ひなこちゃん。うん、ありがとう！」

「蛍ちゃん。何か買って置いて欲しいお菓子はある？」

すると雛子は欲しいおやつのリクエストまで聞いてくれた。

2人に内心深く感謝しながらも、ここまで来たらとことんまで厚意に甘えよう。

「ありがとう！えつとね、板のチョコレートがいいな！」

「わかったわ。」

「それじゃ、リリンちゃん。いつもの場所にいこう？」

「ええ……。」

そして蛍はリリンの手を引き、いつもの場所を通じるほど2人で過ごした、噴水広場へ向かうのだった。

…

噴水広場にあるベンチに腰掛けたリリンは、蛍とお喋りをしながら昂る気持ちを落ち着かせる。

蛍と商店街で会えたのは当然、偶然なんて行き当たりばったりなものではない。

普段蛭が、自分との待ち合わせの場所に行っている噴水広場を訪れる時、決まって商店街の方角から来ていた。

だからもし彼女が今日、自分を尋ねることがあるのならば、商店街を徘徊していれば遭遇するだろうと睨んだのだ。

最もあのバカ（サブナック）が余計なことをしなければ、いつも通り噴水広場のベンチで待っているだけで良かったのだが、結果として目的を果たすことができた。

だがこれまで蛭は自分からの誘いを断つたことはないのに、今日初めて、テストに向けた勉強会があるから無理だと、拒否の意を示されたのだ。

あの時、キュアシャインの時と同じ衝動がリリンから沸きあがってきた。

（あたしよりもテストの方が大事だと言うの・・・？）

あの一瞬、リリンの思考をよぎったのはそんな言葉だった。

学校のテスト。学校と言うのが教育施設の名であったはずだから、学力を測るために行うものなのだろう。

だからトモダチである要と雛子と共に試験に備えるための集会へ参加すると言う理由はわかるし、わざわざ施設で学力を測定する以上、その成績は記録され蛭の評価に繋がるところも予想がつく。

であれば、蛭が自分の用事よりも学校のテストに纏わる作業を優先するのも理解でき

ているはずなのに、湧き上がる黒い衝動を抑えることができなかつたのだ。

雛子と要が自分にとって都合のいい提案をしてくれたことで事なきを得たが、危うく湧き上がる衝動が決壊しかけるところだった。

もしそれに身を委ねていれば、彼女の恩人である『リリン』でいられなくなっていたかもしれない。

「リリンちゃん。」

すると蛭が怪訝な表情を浮かべながらこちらの顔を覗き込んできた。

「なに？ほたる？」

「えと・・・なんだかむずかしそうな顔をしていたから、ちよつと心配で・・・。」

そうさせた本人が何を言う、とリリンは心中で毒づく。

「ひよつとして、つかれてる？」

「え？」

「なんだか、顔色わるそうなきがして、だいじょうぶ？」

だが蛭は、思いの外深刻そうに自分の様子を伺ってきた。

肌色が変わるなんて現象は行動隊長に起こりえないが、であれば、彼女に顔色が悪いと思わせるほどの雰囲気の変化が今の自分にあつたと言うのか？

(・・・疲れている。あたしが・・・?)

肉体的な疲れは起こり得ないし闇の力の補充も十分だ。

それでも疲れていると思わせるのであれば、この身の内に拮がる黒い衝動のせいだろう。

以前キュアシャインと戦った後、アモンに指摘された『何を怒っている?』と言う言葉がリリンの頭から離れない。

そんなはずはないと思いつつもこの衝動を表す言葉が他に思い当たらなかった。

それはキュアシャインにのみ抱くものだと思っていたのに、先ほど蛭にも同じ衝動を抱いてしまった。

それも自分でも訳の分からないことが原因だ。

なぜあのような思考で蛭に対して同じ衝動を抱いてしまったのだろうか?

自分自身のことであるのに理解できないししたくもない。

何もかも思い通りにいかない現状が、リリンを大いに混乱させている。

「あつ、もしかしてリリンちゃんの学校もテストが近かったりするの?」
すると蛭が的外れな予想を口にしてきた。

だが本心を語るわけにはいかないリリンは、その話に乗乗する。

「えと、そうなの。」

「やっぱり、リリンちゃん、勉強のしすぎでつかれてたんだね。」

的外れも甚だしい言葉で勝手に納得してくれた蛍。

だがこれで一先ず疑惑の目を持たれる心配はないとリリンが思うと、

「リリンちゃん。」

蛍が自分の手を両手で覆うように握った。

そしてこちらを覗き込むようにしつかりと目を合わせる。

「あんまりがんばりすぎて、ムリをしちゃダメだよ?」

「ほたる?」

「つかれたらちゃんとやすんで、からだをたいせつにしていって?」

リリンちゃんにもしなにかあつたら、わたし、イヤだからね。」

どこか不安気で、それでいて自分に対して精いっぱい笑顔で話しかけてくる蛍。

どこまでも真つ直ぐで疑いのない蛍の気持ち。

騙されているとも知らずにバカみたいと、今までなら嘲笑してきただろうが、蛍の両

手から伝わる熱がリリンの手を包み込んでいった。

彼女の瞳と笑顔が、リリンの脳裏に焼き付いていく。

そして気が付けば、自分の内に渦巻く黒い衝動が収まっていた。

(なんで・・・?)

代わりに蛍から伝わる熱がリリンの身さえも包み込んでいき、熱を帯びた衝動へと変

わっていった。

だがそれは、以前のような身を焦がす業火ではなく、凍えた氷を少しずつ溶かしていくような、微弱な熱量だが、確かに感じられる温かさだった。

「……ありがとう。」

そしてリリンは、無意識の内に蛍へ感謝の言葉を口にしていた。

「えへへ、どういたしまして。」

どういたしまして。感謝の気持ちを伝えられたときに返す定型文だが、その言葉を聞いて、リリンは自分が蛍に感謝の言葉を述べたことを自覚した。

蛍と接したことで生まれた新たな衝動。

そして感謝の言葉を口走ってしまった理由。

相も変わらず自分のことがわからないリリンだが、今回新たに生まれたそれは、これまでのように不快なものではなく、むしろずっと触れていたいと思えるほどに安堵できるものだった。

「……」

そしてはにかみ答える蛍の顔をまともに見ることができず、リリンは視線を反らしてしまう。

「蛍ちゃん、買い物終わったわよ。」

「あつ、ひなこちゃん、かなめちゃん！わかった！

リリンちゃん、それじゃ、わたしそろそろいくね。」

「うん．．．また、今度はゆつくりおはなししようね？」

「うん！約束する！」

次に会う約束をしリリンは蛍と別れる。

別れ際、遠ざかる蛍の背を見送りながら、リリンは蛍との間に生まれた新たな『感情』に包まれながら、胸に手を当てるのだった。

∴

噴水広場から少し離れた路地の裏から、グリモアはベンチに座るリリンの様子を観察していた。

彼女の隣に座るピンクの髪の少女。

あの子が以前、話に聞いた情報収集源としてアテにしている少女か。

「まさかあの子だったとはね．．．。」

あの少女には身に覚えがある。

以前シヨッピングモールであの子を一瞥した時、あの子の内側に見えた闇がとても興味深かったのだ。

強い光の中に僅かに存在する黒い焦点。

決してソルダークの素材とは成り得ないはずだが、あれほど強烈な光を持つはずなのに僅かに隠し切れない闇を抱えている。

そのようなタイプの素材を見るのは初めてだった。

「リリンも目を付けていたとは、さすがと言うべきか。」

リリンはあの『筋肉バカ』と違ってそれなりに思慮は深い。

特に今のように、一般人に扮して人間と接触すると言うスキルだけなら、自分よりも遥かに優れているだろう。

そして人とコミュニケーションを取るスキルに優れている分、人心の掌握と扇動もお手の物だ。

あの少女と仲良くできているのも、あの子の心を手中に収めたからだろうが、故にグリモアは目の前に見える光景に疑問を抱いていた。

（あれでは、まるで逆ではないか。）

あの少女を懐柔するように見えて、その実リリンの方が振り回されているように見ら

れる。

それをここ最近おかしいリリンの様子を照らし合わせてみる。

行動隊長でありながら『感情的』としか思えないような言動を見せている。

その原因はキュアシャインにあるかと思っていたが、目の前の光景を見るにそれだけではないのだろうか？

「もう少し、観察する必要がありそうだね。」

少女と別れたリリンは立ち上がり、街の中へと姿を消した。恐らく人目のつかないところへ行き、闇の世界へ帰還するつもりだろう。

そんなリリスの姿を見ながらグリモアは疑問を抱く。

もしも自分が危惧していることが現実に起こったらどうなるかと。

そんなことはあり得ないと思いつつも、懸念が払拭されるまでリリンの観察を続けることにするのだった。

：

『交番』と呼ばれるところへ連れてこられたサブローは、警察から質問の嵐を受けていた。

「だから、君は一体どこの国から来たのかと聞いているんだ。」

「知らぬと言っている。」

「ここに来た目的は？」

「散歩だ。」

「・・・怪し過ぎる。」

一体何が怪しいと言うのだ。

確かに散歩と言うのは真実ではないが、希望の光や絶望の闇に関する知識のないこの世界の常識で言えば、本来の目的の方がよっぽど嘘みたいなことだ。

であれば実質、何一つ嘘をついていないと言える。

それなのに怪しむとはこいつらの目は節穴か。

これがこの世界の行政機関の質だと言うのなら愚かとしか言いようがない。

「身分を証明できるものではなく、名前もどう考えても偽名だし。それにしても今時サブローね。」

なぜ偽名だとバレた？それにこいつも『サブロー』と言う名前をバカするののか。

あの2人と言いプリキュアたちと言い、なぜこうも自分をバカにする連中しかない

のか。

別段バカにされたからと言って何か思うことがあるわけではないが、こうも同じ反応ばかりが続いては面白くないと言うものだ。

「ちよつと一回署まで同行願おうか？」

まだどこかへ連れまわすつもりでいるのか。であればこれ以上は時間の無駄だ。

「ええい、めんどくさい。」

サブローは右手を前に伸ばし指をスナップする。

「ターンオーバー、希望から絶望へ。」

そして肌の色が褐色から黒色へ変わり、髪は色が落ち、両肩と両肘に鋭利な突起が現れ、全身に赤い文様が広がる。

そして両腕が鋼鉄のガントレットと同化した。

「なっ?!なんだ貴様は!!」

サブローはサブナックへと姿を変え、足元から闇の牢獄を展開する。

「ぐっ、うわああああ!!!」

すると目の前に立つ警察官が苦悶の声をあげた。

当初の予定では闇の牢獄を展開し、目の前にいる目障りな警察を外の世界へと追いやろうと思ったが、まさか囚われの身となるとは。

しかも発する絶望の闇の純度も高い。これは思わぬ収穫だ。
「ほう、なかなか良い絶望ではないか。」

叫び続ける警察官から絶望の闇を吸い取り、サブナックは交番を後にするのだった。

：

搜索を再開したサクラは再び街の中を見て回るも、キュアブレイズらしき姿は見当た
らなかつた。

「サクラ、どうだった？」

「ううん、キュアブレイズもそうだけど、アップルさんも見かけないわ。」

サクラだけはキュアブレイズだけでなく、アップルの搜索も行っていた。

『職業柄』、サクラだけがアップルの人間の姿を知っているからだ。

「すまないな。サクラだけ2重の負担をかけてしまつて。」

「大丈夫、これくらい負担にはならないわよ。」

話ながらサクラは一息つき、空を見上げる。

今日は快晴、空を泳ぐ雲たちも気持ちが良いそうだ。

この青空の下、どこかにキュアブレイズがいるはずなのに、未だにその姿を見かけない。

「・・・ねえベル。」

そしてサクラはかねてより思っていたことをベルに聞くことにした。

「なんだ？」

「キュアブレイズたちは、今どこでどんな生活を送っているのかしら？」

この世界に流れ着いて半年以上が経過している。

一カ月前に再会した時は気に留める余裕がなかったが、蛭と一緒に暮らすようになってから少しずつその疑問が沸いて来た。

彼女とアップルはこの世界でどのような生活を送っているのだろうか？

当たり前だがフェアリーキングダムという異世界から来た自分たちには、この世界でアテに出来る人なんていない。

そしてこれはまた当たり前のことだが、人間が生きていくための食料一つ、住む場所一つ得るにもお金が必要なのだ。

だが自分たちはこの世界の通貨は持ち合わせていない。

妖精である自分たちは食事の必要がないし、元の世界でも、人と一緒に暮らしている

妖精以外は野で生活しているのだ。

だから自分たちは野宿にも特に困ることはなかったが、人間であるキュアブレイズは話が別だ。

蛭たちがそうであるようにキュアブレイズもまた、変身する前の姿は自分よりも『幼い』人間の少女だ。

だがこの世界の通貨を持たないはずのキュアブレイズは、一体どうやって生活しているのだろうか？

「元々キュアブレイズは、君も一緒に連れていくつもりだったんだろ？」

だとしたら少なくとも、この世界でちゃんと生活できているってことじゃないのか？」

「・・・それもそっか。」

「どこでどんな生活をしているのかはわからないけど、アツプルさんも一緒にいるんだ。そこはそんなに気にしなくてもいいと思うぞ。」

確かにベルの言う通りだ。

アツプルと一緒にならば、少なくともキュアブレイズが日々の生活で困ることはないだろう。

「でもそうだな。」

これまでのようにがむしやらに探すんじゃないくて、多少は的を絞った方がいいかもな。」

「的を絞るって、例えば？」

「もしこの世界に住居を構えているとしたら、一軒家よりも共同住宅の可能性が高いろう。」

民家を当てるよりもマンションやアパートを中心に探した方がいい。」

「あつ、そつか。」

「あとは、キュアブレイズとアップルさんが普段どうしているかだな。」

「この世界で暮らしていくには当然この世界の通貨が必要だから、アップルさんはどこかで職を見つけて働いているかもしれない。」

それからキュアブレイズはもしかしたら学校に通っているんじゃないか？」

どんな生活を送っているのかの1つからここまでのことを連想できる当たりさずがベルだ。

自分たちの中で一番、この世界に馴染んでいるだけのことはある。

「なるほど、アパートにマンション、学校を重点的に当たっていくのね。」

「もう少し早くにそのことを気にかけておくべきだった。ごめんよ。」

申し訳なさそうに言うベルだが、勿論何も非はない。

自分たちを取り巻く環境もこの半年で劇的に変わったのだ。

人の目を忍んで生きていくのに精いっぱいだった日々から、僅かな力の反応を頼りにも知らないこの世界を旅して周り、1か月前に蛍と出会いようやく落ち着ける場所を得たのだ。

そしてベルもレミンも同じ思いでここまで来た。生きること探すことで精いっぱいだったので、他の事を気にかける余裕を得たのはつい最近だ。

誰が悪いわけでもない。悪いとすれば、全ての元凶たるダークネスである。

そしてそのダークネスの勢力は日々拡大している。蛍の話によれば以前戦ったソルダークは、要ことキュアスパークの浄化技を防いだというのだ。

この先ダークネスとの戦いはさらに激化していく可能性がある。

一緒に戦ってくれる3人のためにも、キュアブレイズの力はこの先必要不可欠となるだろう。

「一刻も早くキュアブレイズを見つけなきゃ。蛍たちのためにも。」

「そうだな。」

2人が決意を新たにしたその時、

「っ!?!闇の波動だ!」

「ダークネス!?!」

商店街を包み込むように広がる不穏な空気とともに、街ゆく人々が姿を消していく。ダークネスが現れたのだ。サクラとベルは余計な体力を消耗しないように妖精の姿へと戻る。

「2人とも！ダークネスが出たよ！」

すると同じく妖精の姿へ戻ったレモンが駆け付けて来た。

そして3人が集った時を同じくして、3つの光の波動を感知する。

蛭たちがプリキュアへと変身しようだ。

プリキュアの反応を掴んだ3人は合流すべくその方へ向かうのだった。

∴

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

「世界を照らす、希望の光！キュアシャイン！」

「世界を駆ける、蒼き雷光！キュアスパーク！」

「世界を包む、水晶の輝き！キュアプリズム！」

「3つの光が伝説を紡ぐ!!ホープライトプリキュア!!」

闇の波動を感知した要たちはすぐさま変身し、ダークネスの元へと向かう。

「プリキュア!」

「チェリーちゃん!みんな!」

途中、キュアブレイズの搜索をしに街を訪れていた妖精たちと合流した。

そして闇の波動を感知した場所へ辿りつくと、ダークネスの行動隊長サブナックが待ち構えていた。

「現れたな、プリキュア。」

「サブナック、凝りもせずにもたノコノコと現れたな。」

要はサブナックの姿を確認するなり挑発する。

「ふっ、減らず口を叩いてられるのも今のうちだ。」

ダークネスが行動隊長、サブナックの名に置いて命ずる。ソルダークよ!世界を闇で食い尽くせ!

だがサブナックは挑発に意を介さず、ソルダークを生み出した。

耳障りな産声とともに、ソルダークは大きく跳躍する。

「みんな!行くよ!」

「ええ!」

「はいー」

要の号令とともに、3人は一斉にソルダークへと挑みかかる。

宙を舞うソルダークを囲い、3方向から同時に攻撃を仕掛けた。だが、

「グッ……ガアアアアア!!!」

僅かに怯んだ様子を見せたかと思いきや、ソルダークが雄叫びとともに体を旋回させる。

その衝撃に我々は吹き飛ばされるが、空中で姿勢を整えて着地する。

直後ソルダークも地上へ降りた。

だがプリキュア3人の同時攻撃が直撃したのにも関わらず、ダメージを受けた様子がない。

「効いてない？ウチらの攻撃が？」

「それなりに上質な絶望から創り出したソルダークだ。これまでと同じようにはいかにぞ。」

素材、上質、熟成。

これまででやつらが発した言葉の数々から、やつら行動隊長にとって人の絶望とは、ソルダークを作り出すための材料以外の何物でもないのだ。

現実から目を背けたくなるほどの、辛くて苦しい悩みや不安を、やつらは平気で自分

たちの目的のために利用する。

そのことを改めて目の前に突き付けられた要の心に怒りの火が灯された。

電光石火の速度でソルダークの懐まで詰め寄り、雷を纏った正拳を繰り出す。

「はっ！」

だがソルダークも拳を振り正面から応戦する。

衝撃が地を払い雷光が走る中、両者は一步も後退せず、ぶつかり合う拳が鏝迫り合いのようにせめぎ合う。

やがてソルダークの膝が震え始めると、ソルダークはもう片方の拳を握り、要の元へ振り降ろす。

「たああっ！」

だが寸でのところでキュアシャインが体当たりをし、ソルダークが後方へとよろける。

その隙にキュアプリズムが飛び掛かり、ソルダークの巨体を蹴り飛ばした。

このソルダーク、力はかなりのものだが、3人で協力すれば勝てない相手ではない。

「よし、このまま一気に。」

「やはり貴様が戦力の中枢だな。キュアスパーク！」

するとサブナックが空中を蹴り、こちらに向かって飛んできた。

突然の奇襲を回避した要だが、サブナックはちょうど自分とキュアシャインたちの間に立つ。

「しまった！」

「ソルダーク！」

そしてサブナックの呼びかけに答え、ソルダークがキュアシャインとキュアプリズムの元へと

飛び掛かった。

サブナックの思惑を悟った要だが、既にサブナックが追撃をすべく目前まで迫り来る。

「くそっ！キュアシャイン！キュアプリズム！」

分断されてしまった要たちは、各々目の前に迫る敵と応戦せざるを得なかった。

：

サブナックの攻撃を受け止めた要は、彼の背後からキュアプリズムたちの戦況を見

る。

一時とは言え、自分のパワーとも渡り合えるほど強力な力を持つソルダークだ。キュアプリズムとキュアシャインの2人だけでは分が悪い。

だが加勢しようにも目の前に行動隊長であるサブナックに立たれては無視することも出来ない。

プリキュアの速度ならば一度飛ばせば加勢できる程度の距離しか開いていないと言うのに、手を伸ばすことすらできない状況に要は歯噛みする。

「視線が泳いでいるぞ。」

サブナックの声に正面を向き直ると、サブナックが拳を振り降ろしてきた。

要もまた拳を振るい正面から迎撃するが、サブナックの力に押されてしまう。

「どうしたキュアスパーク？ 貴様の力は程度ではないはずだ。」

「この・・・なめるな！」

だが押しかかる腕力を跳ね除けることができず、要は一度拳を引き距離を置く。

そしてキュアプリズムたちの方を一瞥するが、2人はソルダークの攻撃を受けて空中に飛ばされていた。

「っ!? キュアプリズム！ キュアシャイン！」

その光景に気を取られていたキュアスパークは、サブナックの接近を許してしまう。

「仲間を気にしている場合か？」

「くっ！」

そしてサブナックの攻撃に対して防御姿勢を取ろうとするが間に合わず、直撃を受けて後方まで飛ばされてしまう。

「ああっ！」

背後に立つ電柱を砕き、石垣に叩き付けられた要は、そのまま地に倒れる。

「ホープライトプリキュアの中で貴様が一番戦闘に長けている。

貴様さえ引き寄せればあとの2人はソルダークでも十分にやれると思ったが、まさかこうも上手くいくとはな。」

「くっ……そ……。」

行動隊長の中でも特に力に長けたサブナックの一撃だ。

直撃のダメージが大きく足がフラつくが、立てないほどではない。

要は気合を入れてその場に立ち上がり、サブナックを前に身構える。

「無様なものだ。

このオレと渡り合えるだけの力を持ちながら、仲間の身を案ずるあまり本気を出せないとは。

貴様にとって仲間とは、力を削ぐだけのただの足枷でしかないと言うことだ。」

「っ!？」

「貴様らの言うチームワークなど所詮、貴様個人の力をアテにしていたに過ぎない。あとの2人など浄化技と盾以外に取り柄のないただの弱者ではないか。」

サブナツクの言葉に要は怒り震える。

ダークネスとの戦いの中で、キュアプリズムとキュアシャインの力を欠いて勝てたものなど一つもなかった。

キュアプリズムがバリアと回復術でアシストしてくれ、キュアシャインは危険を顧みず囷となって浄化技を放つ機会を作ってくれる。

いつも2人が力を貸してくれたから、要は今日まで戦ってこれたのだ。

その大切な仲間を、友達を侮辱されたことが許せなかった。

「ウチの仲間を・・・バカにするなよ!」

上空から雷を呼び、自身の身に当てた要は電撃を纏った状態でサブナツクと対峙する。

「いいぞ、もつとオレを相手に闘志を燃やせ。」

もつとオレを楽しませてみせろ。キュアスパーク。」

そして雷の如くスピードで真っ向からサブナツクとぶつかるのだった。

:

キュアスパークと分断された蛍とキュアプリズムは窮地に立たされていた。

目の前に立つソルダークは、キュアスパークと一時渡り合えるほどの強さを持っている。

自分の力ではキュアプリズムのサポートがあっても対抗できない相手だ。

「きゃああー！」

ソルダークの振り降ろした拳を回避するが、その拳は地面を抉り粉塵を巻き起こす。

粉塵に目を眩まされた蛍は、ソルダークがもう片方の拳を振るってきたことに気が付かなかった。

「キュアシャイン！」

寸でのところでキュアプリズムがバリアを展開してくれたおかげで助かったが、

ソルダークは次にキュアプリズムを睨み付ける。

振るった拳が闇の力を乗せた鎌鼬を引き起こしてキュアプリズムへと迫るが、前方に

展開された盾がその攻撃を遮断する。

だがその攻撃と同時にソルダークが跳躍し、キュアプリズムの頭上から急降下した。キュアプリズムは気づくも、目の前の攻撃を防ぐことに気を取られてしまい、防御が遅れる。

慌てて螢は駆け付けようとするが遅く、ソルダークが大地に降りる衝撃に巻き込まれ、キュアプリズムは吹き飛ばされてしまった。

「キュアプリズムー！」

その光景に気を取られていた螢は、ソルダークが自分に狙いを定めたことに気が付かなかった。

ソルダークは腕を振るい、巨大な手のひらで自分を掴んだ。

「きゃああー！」

ソルダークが手を握る力を強め、螢は苦悶の声をあげる。

プリキュアに変身しているため骨が軋むようなことはないが、全身を締め付けられるような痛みは耐え難いものだった。

「キュアシャイン!!」

立ち上がったキュアプリズムがこちらを確認して叫び声をあげるが、ソルダークは再びキュアプリズムに拳を振るう。

自分のことに気を取られていたのか、キュアプリズムは盾を展開することすらできず、衝撃波に飲まれて再び飛ばされてしまった。

やがてソルダークは握撃ではこれ以上のダメージは望めないと判断したのか、握った掌を開いた。

だが解放された蛭に対して間髪入れずソルダークは拳を振るう。

蛭にはその攻撃を回避する術はなく、直撃を受けてしまいキュアプリズムと同じ位置まで飛ばされてしまった。

「うっ……。」

「キュアシャイン……大丈夫……？」

肩を抱えながらキュアプリズムがこちらの身を案じながら駆け寄る。

2対1なのに未だにソルダークに満足のいく攻撃ができず、2人ともボロボロの状態だ。

蛭はその現状を招いたのが自分にあるのだと思い、情けなくて泣きたくなった。

自分にキュアスパークほどの力があれば、今のようにならざるにやられることはなかったはずだ。

だがソルダークとまともに戦えないばかりが、キュアプリズムが自分の身を守ることについて手いっぱいであるあまり、自身に対しての守りを疎かにする状況さえも作り出してし

まった。

もつと強ければ、もつとスピードがあれば、キュアプリズムへの負担は減っていただろうし、救援にも迅速に駆け付けられたはずだ。

自分の力が足りないあまりに、彼女の力まで潰してしまっている。

(せめて・・・このまえみたいに浄化技がつかえたら・・・なんでつかえないの・・・?)
行動隊長であるリリスでさえ退けるほどの力が自分にあるのだ。

この状況を打開することができるはずなのに、力の使い方がわからない。

キュアプリズムだってピンチで助けたいと思っているのに、あの時の想いも力も沸いてこない。

(どうして・・・)

情けなくて、悔しくて、でも蛭は自分を卑下する思いをギリギリのところまで塞き止めていた。

今それをこの場でぶちまけたところで何も状況は変わらないと言う理性が、蛭の負の思考を瀬戸際で食い止めている。

でも今のままではあの時の浄化技を使えない限り勝つことはできない。だがそれも望めない。

すると蛭は逆の結論に辿りついた。

「そうだ・・・こっちはじゃなくて、あつちを先にたおしちやえばいいんだ。」

「キュアシャイン？」

「キュアプリズム！今すぐキュアスパークのたすけにいつて!!」

「えっ!？」

「キュアスパークと協力して、サブナックを先にやつつけて！」

それから3人でソルダークを浄化しよう！」

そう、これまでの逆をすればいいのだ。

ソルダークを足止めする囷役を自分が担い、キュアスパークとキュアプリズムで行動隊長を先に退治する。

恐らくそれがこの状況を打開できる唯一の方法だ。

「でも！それってキュアシャインが1人でこのソルダークを相手にするってことでしょ！

！
そんなの無茶よ!!」

「うん・・・だから、なるべく早くもどってきてね?」

自分の身を案じてくれるキュアプリズムに、螢は少しだけ本音を言っただけ甘える。

雛子に甘えることで螢は自分の中に残ったほんの少しの躊躇いを振り払う。

そして、

「はああああっ!!」

蛍はたった一人でソルダークへと立ち向かっていった。

：

ソルダークへと立ち向かっていったキュアシャインから視線を反らし、雛子はキュアスパークの方へと向けた。

彼女の表情から、ソルダークを倒せないのは自身の力が足りていないせいだと思いつめて見えたがそれは間違いだ。

あのソルダークは強敵だ。自分が戦ったとしても敵う相手ではない。

あれに勝つためにはキュアスパークの力が必要なのだ。

(待ってて蛍ちゃん！すぐに行くから！)

あれほどの力を持ったソルダークにキュアシャイン一人を残していくのが心配でならなかった。

自分にもっと力があれば彼女を守りながらも戦えたのに。

雛子は力が及ばないことの悔しさから唇を噛み締める

「どうしたキュアスパーク？力が衰えてきているぞ。」

「このっ……。」

目を向けた先に繰り広げられているサブナックとキュアスパークの戦いは、サブナックの優勢だった。

「そうか、プリキュアとはいえ所詮は人間。体力が消耗しては満足に戦えないか。」

サブナックの答えに雛子は驚愕する。

希望の光の行使は体力と気力を消耗させる。

そして行動隊長と渡り合えるには相応の希望の光が必要なはずだ。

それを行使すれば体力と気力の消耗度合も比例する。

だが行動隊長は闇の力を扱うことへの対価がないようだ。少なくとも疲労することはない。

現にキュアスパークの表情には疲労の色が見られるのに対して、サブナックは疲れの色を一切見せていなかった。

人間と怪人という覆しようのない差異が、サブナックとキュアスパークの戦いの中で露呈する。

「まあいい、もう十分に楽しませてもらった。」

これで終わりとしよう、キュアスパーク。」

そしてサブナックが膨大な絶望の闇を纏った拳を上げ、キュアスパーク目掛けて振り下ろした。

「はあっ!」

雛子は寸でのところで盾を展開し、サブナックの攻撃からキュアスパークを守る。

「キュアプリズム!」

突然の援護に驚いたキュアスパークがこちらを振り向く。

「ふん。」

だがサブナックもまたこちらへと振り向き、両手に絶望の闇を込めながら襲い掛かってきた。

「弱者の分際で。」

雛子は前方に盾を展開するが、サブナックは両手に纏う絶望の闇で、雛子の希望の光に干渉し、盾を掴み、力任せに遠方へ投げ飛ばした。

「えっ!?!」

「強者の戦いに割って入るな。」

そして丸腰になった雛子へ正拳を繰り出した。

咄嗟の判断で身体にバリアの光を纏うも威力を相殺するには至らず、そのまま正拳を

受けて後方まで殴り飛ばされてしまう。

「キュアプリズム！」

キュアスパークが叫びながらサブナックへと詰め寄るが、サブナックはキュアスパークの方へと向き直り、彼女の胸倉を掴んだ。

「言つたはずだ。貴様の仲間など、貴様の力を削ぐだけの足枷でしかないと。

弱者と群れたばかりに己が牙を失うとは、愚かだな、キュアスパーク。」

キュアスパークはそのまま雛子の方へと投げ飛ばされた。

「キュアスパーク！しっかり！」

雛子はキュアスパークの元へと駆け寄る。

だがサブナックとの戦いで消耗している彼女は、上半身を起こすだけで精いっぱいのようにだ。

「きゃあああつー！」

すると後方からキュアシャインの叫び声が聞こえた。

振り向くとソルダークの攻撃を受け、地面に叩き付けられる彼女の姿が映る。

「キュアシャイン！」

キュアシャインはその場から立ち上がらなかつた。

指が僅かに動いているので気を失っているわけではないようだが、受けたダメージが

大きく体を満足に動かせないでいる。

そんなキュアアシャインの痛々しい様子に雛子は悲痛の表情を浮かべる。

「終わりだな、ホープライトプリキュア。」

そして雛子たちの元へ、サブナックが詰め寄って来た。

：

これまで戦ってきたどの個体よりも強力な力を持ったソルダークと、行動隊長であるサブナックの猛攻を前に、3人のプリキュアたちが絶体絶命の窮地に立たされていた。

チェリーは自分の目の前に広がるその光景を前に言葉を失う。

「そんな・・・プリキュアが・・・。」

隣に並ぶベリイとレモンも一言も発することができず、ただみんなが傷つくところを見ることしか

出来ないでいた。

このまま攻撃が続けば、思いつく限りの最悪の事態が訪れてしまう。

(お願い……助けにきて……)

それでも自分たちには戦う力がない。

戦う力のない自分たちはただ願うことしか出来ない。

それがどんなに自分勝手な行いだとわかっていても、チェリーは大切な蛍たちを失いたくない

一心でひたすら『彼女』に助けを求めた。

この街のどこかにいるはずの『彼女』に。

「お願いだからみんなを助けて！ キュアブレイズ!!」

視線の先、キュアシャインが傷ついた体を無理やり起こし引きずりながらソルダークへと立ち向かおうとする。

だがその時、どこからともなく飛んできた火の玉が、振り降ろされたソルダークの腕に着弾し爆発を起こした。

「なに!？」

「え……?」

チェリーだけでなく、サブナックを含めたこの場にいる一同が、火の玉の飛んできた方向へと目を向ける。

「あ……。」

その姿を見た瞬間、チェリーの口から安堵の息が零れた。

そこには赤色のツインテールを風になびかせ、赤を基調としたドレスを身に纏い、手のひらに陽炎を揺らがせる少女が宙を浮いていた。

「あの服……ウチらと同じ……？」

「赤色の……プリキュア。まさか！」

彼女の姿を初めて見るキュアスパークとキュアプリズムが驚きの表情を浮かべる。

「キュア……ブレイズ……。」

そしてキュアシャインが、消え入りそうな声で彼女の名を呟いた。

「キュアブレイズ！キュアブレイズだ!!」

ずっと探し求めていたキュアブレイズを見つけたことを、レモンが目には涙を浮かべはしやぎながら喜ぶ。

するとキュアブレイズは宙を蹴り、ソルダークの元へと距離を詰めた。

キュアシャインをかばうようにその前に立ち、ソルダークと睨みあう。

「ガアアアアアッ!!」

そしてソルダークの方から先に攻撃を仕掛けて来た。

キュアブレイズに目掛けてパンチを繰り出す。

だがキュアブレイズは一切の無駄のない動きでそれを回避し、裏拳でカウンターの一

撃をお見舞いした。

重い打撃音が鳴り響き、ソルダークの巨体が後退するが、ソルダークは空いた距離を利用して、その場で拳を振るい鎌鼬を引き起こす。

だがキュアブレイズが円を描くように腕を回すと、そこから渦巻き状の炎が発生した。

渦巻く炎はキュアブレイズの身を守るように、鎌鼬を遠心上に吸い込みそのまま爆発四散する。

その爆発を目くらしとして利用し、今度は手のひらから陽炎を生み出し火の玉へと形を変えた。そして火の玉をソルダーク目掛けて投げつけると、それはソルダークに着弾と同時に爆発する。

「凄い……。」

「一方的やないか……。」

キュアスパークとキュアプリズムは、ソルダークを一方的に手玉にするキュアブレイズの力に感嘆する。

するとソルダークは絶望の闇を体中から噴出させ、なりふり構わず鎌鼬を撒き散らした。

攻撃の範囲内にはキュアシャインの姿もある。

危ない、チェリーがそう思った時、キュアブレイズが前方に手を払い炎の壁を発生させた。

炎の壁はソルダークの放った鎌鼬を全て受け止め焼き尽くす。

それはまるで、身動きの取れないキュアシャインを守っているかのようだった。

そしてキュアブレイズはそのまま炎の壁の中へと飛び込んでいった。

「さすがにキュアブレイズが相手では分が悪いか。」

するとサブナックがソルダークの元へ加勢しようと動き出す。

だがその前方をキュアスパークとキュアプリズムが遮った。

「ちっ、まだ動けたか。」

キュアスパークたちとサブナックが睨みあう。

だがサブナックは既に勝敗が決しているのを悟ってか、その場を強行突破しようとはしなかった。

「ガアアアアアアッ!!」

やがて炎の壁が収まると、炎柱に身を焼かれ断末魔をあげるソルダークの姿が映る。

「ふっ、とうとうキュアブレイズまで出て来たか。ますます面白くなってきた。」

そして消滅していくソルダークの姿を一瞥し、サブナックはその場から姿を消していった。

「キュアブレイズ……キュアブレイズ!!」

戦いが終わり、チェリーを含めた3人の妖精はキュアブレイズの元へと駆け寄る。
「……」

だがキュアブレイズは険しい表情のまま、一言も言葉を発さなかった。
そんな彼女の様子にチェリーは言いようもない不安を抱くのだった。

：

次回予告

「一緒に戦えないって、どうしてよキュアブレイズ！」

「私1人の力で十分だからよ。あんな弱い人たち、私には必要ない。」

「昔のあなたならそんなこと言わなかったわ！」

「私に仲間なんていない。ダークネスは私1人で倒してみせるわ。」

「待ってキュアブレイズ！一体あなたに何があつたと言うの？お願いだから答えて!!」

次回！ホープライトプリキュア第11話！

仲間になれない!?プリキュアの苦悩と1つの決意！
希望を胸に、がんばれ！わたし！

第11話

第11話・プロローグ

炎のように真つ赤な髪とドレス、強い意思を宿すかのような鋭い眼差し。

約1か月ぶりに見たキュアブレイズの姿は記憶と変わらない姿のままだった。するとキュアブレイズは蛍の方を振り向いた。

その眼光に気圧された蛍は声を飲み込んでしまうが、あの時と同じように、彼女に窮地を助けてもらったのだ。

今度こそお礼を言おうと思ったその時、

「本当に話にならないわね、あなた。

未だに満足に力を扱えないなんて。」

「え……?」

キュアブレイズから自分の不甲斐なさを指摘され、蛍は言葉を失ってしまった。

「逃げずに戦う覚悟ができて、力が使えないのであればただの足手まといよ。

先の戦いだって、あなたが浄化技を使えば、ソルダークを簡単に倒せていたはずじゃない。」

「……」

先ほど全く同じことを悔やんでいた蛍は、何も言い返すことができなかつた。

「ちよつとあんた、いくら助けてくれた恩人やからって、今の言葉は聞きずてならんわ。」

「キュアシャインが足手まといですつて？」

これまで一度も表に出てこなかつたあなたが、偉そうに言わないで。」

するとキュアスパークとキュアプリズムが、声に怒りを滲ませキュアブレイズを糾弾する。

2人とも自分をかばうように、キュアブレイズとの間に割つて入る。

「仲間同士で馴れ合い？バカバカしい。」

あなた達だつて本当は、その子のことを邪魔だと思つてるのでしょうか？」

その言葉に蛍は一瞬、不安な表情を浮かべるが、

「バカにしないでよね。誰がそんなこと思うもんですか。」

「キュアシャインはウチらにとつて重要な戦力や。」

キュアシャインがいなければ、ウチらは今まで戦つてこれんかつた。」

キュアブレイズの言葉を2人は真つ向から否定した。

そこには僅かな迷いも感じられず、2人は本心から自分を思つてくれている。

そのことに蛍は安堵するが、それでもキュアブレイズの言葉は頭から離れなかつた。

「……まあいいわ。あなたたちなんてどうせ、いてもいなくてもどちらでもいい。

今回の戦いであなたたちの力がアテにならないことはわかったもの。」

するとキュアブレイズは自分のだけでなく、2人のことも冷たく切り捨てる。

そんな彼女の態度に、チェリーがとうとう、涙声で叫んできた。

「キュアブレイズ！もうやめて!!」

チェリーの叫びを聞き、キュアブレイズは妖精たちの方へと向く。

「キュアブレイズ。一体どうしてしまったんだ？」

以前の君なら、こんな酷いことは言わなかったはずだ。」

ベリイも落ち着きながらも困惑を滲ませた声でキュアブレイズに疑問を投げる。

その隣に立つレモンは、目にいっぱい涙を溜めていた。

「以前の私？」

あなたは以前の私を語れるほど、私の何を知っていると言うの?」

だがキュアブレイズの答えは、この場にいる全員を凍り付かせる。

かつての大切な仲間であったはずのベリイに対しても、彼女は冷たい態度を崩さなかった。

それは半年以上もキュアブレイズを探して、この世界を彷徨い続けて来た妖精たちに、あまりにも残酷な言葉だった。

「キュア・・・ブレイズ・・・?」

「おいキュアブレイズ!」

ベリイたちはずつとあんたのことを探してたんやぞ!」

「あなたたちは仲間ではなかったの!?!」

絶句するベリイをかばうように、キュアスパークとキュアプリズムが声を荒げる。

だがキュアブレイズは涼しい顔のまま、妖精たちから視線を反らした。

「この子たちと一緒にいるのであれば、あなたたちはもう、仲間でも何でもないわ。」

「え・・・?」

ベリイに続きチェリーも言葉を失う。

そしてキュアブレイズは一步また一步と、妖精たちから距離を開けていった。

「私は、一人でダークネスと戦うわ。」

フェアリーキングダムにいた時からずっとそうだったように。」

「待つてキュアブレイズ!キュアブレイズ!」

レモンが泣きながらキュアブレイズのことを呼び止めるが、彼女はほんの少し、レモンに顔を向けただけですぐに目を反らした。

そしてまるで別れを告げるように、その場を飛び去っていった。

「キュアブレイズ・・・うう・・・。」

キュアブレイズの姿が見えなくなると、レモンは大声をあげて泣き出した。
チエリーとベリイは悲痛な表情を浮かべながらも、レモンをあやすように優しく頭を
撫でるのがだった。

第11話・Aパート

仲間になれない!?プリキュアの苦悩と1つの決意!

サブナックとソルダークの挟撃に、かつてない窮地に立たされた蛍たちは、絶体絶命のところでキュアブレイズによって助けられた。

だがキュアブレイズは蛍たちのみならず、妖精たちに対しても冷徹な言葉をぶつけ、この場を飛び去って行った。

これまで必死にキュアブレイズの居場所を探し続けてきたチエリーたちは、胸にも深い傷を負ってしまう。

特にレモンの受けたショックは大きく、蛍たちは変身を解いた後も、レモンが落ち着くまで今いる場所を離れるわけにはいかなかった。

「蛍ちゃん、あなたも大丈夫?」

しばらくしてレモンが落ち着きを取り戻すと、雛子が蛍の身を案ずる言葉をかけてきた。

「ありがとう。わたしは、もうだいじょうぶだよ。」

その言葉に嘘はないが、蛍自身も先ほどまではとても大丈夫と言える状態ではなかった。

元々ソルダークとの戦いで自分の無力さを改めて痛感し、泣きたい思いを堪えて戦っていたところに彼女の言葉が胸に突き刺さったのだ。

後になって、チェリーたちの方がよっぽどシヨックな出来事に苛まれたので、相対的に冷静になることができたが、もしもレモンが泣きださなかつたら、あるいは要と雛子の言葉がなければ、堪えきれずに泣いていたかもしれない。

とは言え、楽観視できるわけではない。自分に対しての言葉は少なくとも事実なのだ。

プリキュアとして戦い始めてから1か月近くが経とうとしているのに、自分だけがまだ希望の光の扱い方を知らないでいる。

キュアブレイズの言うように、もしも自分が力の使い方について熟知していれば、先の窮地も彼女の手を借りずに切り抜けることができただろう。

だがそのことについて反省するよりも、今は妖精たちにすら冷徹な態度を取るほどに、変わってしまったキュアブレイズのことが気がかりだった。

(いったいどうしちゃったんだろ……)

あるときチェリーちゃんにわたしと一緒にいていつて言ったのはキュアブレイズ

なのに・・・。

1か月前、チェリーが自分のパートナーになると宣言した時、キュアブレイズはチェリーの言葉を尊重し、彼女の背中を押ししてくれた。

それなのに今は、自分たちと一緒にいるなら仲間とは思わないと言う。

それに蛍は見たのだ。レモンを一瞥した時のキュアブレイズが一瞬、憂いを帯びた表情をしたところを。

今日のキュアブレイズの言動は、何もかもが腑に落ちない。

そう思った時、

「ごめんなさいね、キュアブレイズが冷たいことを言ってしまった。」

「えっ？」

突然女性の声が聞こえた。

それもキュアブレイズの名前が言葉に出てきており、蛍たちは慌てて声のする方へと振り向いた。

するとそこには、赤色のぬいぐるみが宙を浮いていた。

大きさ20cmほどの、猫の形をしたぬいぐるみだ。

チェリーたちと長らく共に過ごした蛍は、そのぬいぐるみが妖精であることにすぐに気が付いた。

同時に1人の名前が思い浮かんだ。未だに姿を見たことのない4人目の妖精の名前を。

「久しぶり、みんな。」

「あつ……アツプルさん！」

チエリーが大声で名前を呼ぶ。

蛍の思った通り、目の前にいるのはキュアブレイズのパートナーである妖精、アツプルだった。

「アツプルさん、無事だったんだね。」

「うわーん！アツプルさん、会いたかったよー！」

彼女の姿を見たベリイは安堵し、レモンは泣きながら彼女に飛び付いた。

「チエリー、ベリイ、レモン。心配してくれてありがとう。私はこの通り大丈夫よ。

それと初めまして、ホープライトプリキュアの皆さん。

私の名前はアツプル。

あなた達の言葉を借りれば、あの子のパートナーってことになるかしら？」

アツプルがこちらに向き直り、改めて挨拶をする。

蛍も反射的に背筋を直し、正面を向いて挨拶する。

「はっはじめまして！キュアシャインの、いちのせ ほたるっついていきます！」

初対面の相手故、緊張で声が上がってしまったが、何とか挨拶することができた。

「キュアスパーク、森久保 要です。」

「キュアプリズムの藤田 雛子と言います。」

自分に続き、要と雛子もそれぞれ挨拶をする。

だがしつかりとした挨拶をする雛子とは対照的に、要は不機嫌な表情でぶつきらぼうに言った。

「蛭、要、雛子ね。3人とも、今までこの子たちの面倒を見てくれてありがとう。」

そんな三者三様の挨拶に対しても特に眉を潜めることなくアップルは返事する。

蛭はそんなアップルを見て思った。

彼女の声から女性であることはわかるが、その口調はとても落ち着いており、大人の女性と言う印象を受けた。

人間年齢で言えば、自分よりも年上であるチェリーとベリイもアップルには敬称を使っており、彼女もベリイを含めて『この子たち』と呼んでいた。

どうやらアップルは、妖精たちの中では一番年上のようにだ。

「どういたしました。」

それよりも、あんたんとこのキュアブレイズが、ベリイたちに酷いこと言ったのはどうゆうことなん？」

一通りの挨拶を終えると、要が怒りで口元を震わせながら、キュアブレイズの言動についてアツプルに問い詰めてきた。

「要、気持ちは分かるけど、アツプルさんに当たっても仕方ないでしょ？」

「別に……ウチはそんなつもりじゃ……。」

だが雛子に注意され、要は一転、語気を弱くして呟く。

彼女の性格を考えれば、キュアブレイズの責任をアツプルに負わせるようなことは言わないだろう。だが決して当たるともりはなくても、キュアブレイズがベリイたちのことを傷つけたのが許せなくて、つい怒気を孕んだ口調になってしまったようだ。

「構わないわ。あの子についてはパートナーである私にも責任があるのだから。」

ふふっそれにしても、あの子たちのために、そこまで怒ってくれるなんて。

ベリイはステキなパートナーに巡り合えたようね。」

そんな要の態度にもアツプルは気を悪くすることなく、逆にパートナーを思っただけで怒る要の姿勢に感謝する言葉を言うものだから、要の方がバツの悪そうに押し黙ってしまった。

そんなアツプルの様子を見て蛍は確信した。

この妖精は間違いなく『大人』であると。

その雰囲気は、蛍の両親とさえ近いものが感じられる。

「ねえ、アップルさん。キュアブレイズはどうしてしまったの？
どうして・・・急にあんなことを・・・。」

この半年の間で、あの子に一体何があったのか、話してくれませんか？」
するとチェリーがキュアブレイズの変わり様について質問をしてきた。

妖精たちのなかで彼女だけが、1か月前に一度キュアブレイズと会っているものだから、今回の態度により難色を示しているようだ。

アップルは少しだけ困ったような表情を見せ、しばし逡巡してからチェリーの質問に答える。

「別に、何かあったわけではないわ。」

「え・・・？」

だがアップルの答えは、チェリーの疑問を解決させるどころか余計に混乱させてしまった。

「本当に何も無いのよ。」

いえ、故郷を闇に閉じ込められたのだから何も無いと言うわけでもないけど、それでも今回の件の理由ではないの。

あの子はこの世界に来てから、あなたたちを探すためにずっと力を尽くしてきたわ。

そして今でも、あなた達のことには大切に思ってくれている。

それだけは信じてあげて。」

キュアブレイズをかばうようなアップルの言葉に、雛子が間髪入れずに疑問を刺す。「お言葉ですが、それでは余計に説明がつきません。

そこまで大切に思っているはずのレモンちゃんたちを、どうして今になって突き放すのですか？」

彼女の疑問は最もである。

アップルの言葉が本当なら、キュアブレイズがチェリーたちに放った言葉は嘘と言うことになる。

蛭としてもあの言葉嘘だと言われた方が納得できるが、そうになると今度は、なぜそこまで大切に思っている妖精たちのことを傷つけるような嘘をつくのかがわからなかった。

「・・・言ってしまったえば、気持ちのありようかしら。」

「気持ちの?」

アップルの答えに、今度は要が眉をひそめて反応する。

そしてアップルは自分と要、雛子の3人をそれぞれ見ながら、少し俯いて言葉を続けた。

「あの子にはまだ、あなたたちのことを受け入れるだけの気持ちの整理ができていない

のよ。」

「私たちを受け入れる？」

蛭たちは、アップルの言葉の真意を掴めずに首を傾げる。

言葉を濁らせ要領の得ない答えばかりが続いたことを、アップル自身が申し訳なく思ったのか直後頭を下げて謝罪してきた。

「ごめんなさい。これ以上はあの子自身の問題になってくるから、私からあまり詳しいことは言えないの。」

ただ、あなたたちのことを受け入れることができないでいるから、あなたたちと一緒にいるチェリーたちにもつい冷たく当たってしまったのよ。」

「そんなん、ただの八つ当たりやんか。」

そんな要が身も蓋もない言葉に、アップルもつい苦笑する。

確かに、チェリーに自分と一緒にいていいと言ったのはキュアブレイズであり、その本人と一緒にいるからと冷たく当たると言うのは、八つ当たり以外の何物でもないだろう。

だが逆を言えば、この一か月の間で、キュアブレイズの心が変わってしまうほどの何かがあったと言うことだ。

そしてその原因が、自分たちを受け入れることができないと言うことにある。

「あなたの言う通りよ。

キュアブレイズが冷たく当り散らしてしまっていることについては私からお詫びするわ。

でも、勝手なお願いかもしれないけど、あの子のことを待ってあげて。

あの子が、あなたたちのことを受け入れる心の準備ができるまで……」。

まるで我が子をかばうように懇願するアップルに蛭は少しだけ悩んだ。

少なくとも今日のキュアブレイズの言動の内、八つ当たりで彼女のことを大切に思う妖精たちを傷つけてしまったことだけは看過できたものではない。

だが蛭も夢ノ宮市への引っ越しが決まったとき、不安に駆られて大好きな父に対して、本心でもない酷い言葉を言ってしまった記憶がある。

今の彼女もきつと、同じような状況なのだろう。

大切な人に心にもない言葉をぶつけてしまうほど、自分を追いつめてしまっているのだ。

その事を思うと、蛭は一概にキュアブレイズが悪いとは思えなかった。

何よりも、そんなキュアブレイズのことを大切に思う、アップルの熱意が心に伝わってきたのだ。

「はい、わかりました。」

だから蛭は、アップルの言葉を聞き入れることにした。
雛子は穏やかな笑みをこちらに向けて肯定してくれた。

要は仏頂面のままそつぽを向いてしまったが、思うままに言葉を伝える彼女が何も意を唱えないと言うことは、良いと言うことだろう。

蛭は自分の答えをくみ取ってくれた2人に内心感謝する。

「ありがとう。それからチェリー、ベリイ、レモン。」

あなたたち、今まで私たちのことを探してくれてたみたいだけど、

これからはもう、しなくてもいいわ。」

「え?」

「見ての通り、私は無事よ。」

私とキュアブレイズはこの世界でちゃんと住む場所を見つけて、この世界の『人間』として生活しているわ。

だからもう、何も心配することはないの。」

「アップルさん……。」

「あの子の心の整理がついたら。その時は私たちから、あなたたちを招待するわ。」

だからあなたたちも身を粉にするのはやめて、『この世界』で平穏な生活を満喫しなさい。」

アップルの言葉に蛭は心を痛める。

チェリーたちの故郷はダークネスによって闇の世界に閉じ込められてしまった。

だから彼女たちはもう、故郷で日常を満喫することが出来ない。

当たり前のように過ごしていた日常が突如目の前から消えてしまうと言うのは、どんな気持ちなのだろう。

今の蛭には想像もつかないことだった。

だがチェリーたちは、これまでキュアブレイズとアップルとの再会できることを思い描いて、一日たりとも欠かすことなく街中を探して回ってきたのだ。

それがこんな形で再会が叶い、アップルから止めるよう言われたのだから、妖精たちはみんな複雑な表情を浮かべて押し黙ってしまった。

「それじゃ、私はこれで失礼するわ。」

するとアップルが別れの言葉を言ってきた。

だがここでアップルとまで別れたら、またいつ会うことができるかわからない。

蛭はどうしても、今のうちに確認しておきたいことがあったのだ。

「あつあの、ひとつだけきいてもいいですか？」

「なにかしら？」

「・・・キュアブレイズって、だれが変身してるんですか？」

「蛭?」

自分の突然の質問にチェリーは驚く。

チェリーからキュアブレイズの正体は、フェアリーキングダムの人々にとって大切な人だと聞かされたことはあつたが、それ以上のことは今でも聞いていない。

だがキュアブレイズの正体について具体的なことを知ることができれば、彼女が今置かれている状況を理解することができるかもしれない。

そう、蛭は理解したいのだ。キュアブレイズが本心を騙してしまふほどに抱えている思いを。

自分の気持ちに整理がつかなくなることの辛さを、蛭も知っているから。

彼女のことを理解して、その辛さを少しでも支えてあげたい。

それが2度も自分の窮地を救ってくれた、彼女に出来るせめての恩返しだから。

「.:.:そうね。名前までは教えられないけど、あなたたちにもそれを知る権利があるわ。」
彼女の正体を知らない蛭たちが緊張の面立ちで答えを待つ中、アツプルは一呼吸をおいて答えてくれた。

「あの子は、キュアブレイズは、フェアリーキングダム現国王の娘。

つまりフェアリーキングダムのお姫様（プリンセス）よ。」

…

アツプルと別れた後、蛍たちは外出した本来の目的を忘れたまま、雛子の家へと戻った。

部屋に戻って机の上に広げられたノートやら筆記用具やらを見てようやく勉強の合間に食べるおやつを買いに行っていたと思いがしたが、キュアブレイズに纏わる出来事の衝撃が抜け切れておらず、さすがに再度外出するほどの気力はなかった。

だがそれを理由に勉強を疎かにするわけにもいかず、蛍たちは半ば無心で勉強会に打ち込んだ。

そして迎えた試験当日。蛍は学校へ向かう途中、校門の前で要と雛子の姿を見つける。

「かなめちゃん、ひなこちゃん、おはよー。」

「蛍、おはよう。」

「おはよう蛍ちゃん。」

いつも通りの挨拶を返してくれた2人の様子から、一昨日の出来事を引きずってはい

ないようだ。

「いよいよテスト当日だね！」

「ははっ・・・せやな。」

だがこちらの現実はまだに受け入れられていないのか、要が乾いた返事をした。

「要、勉強会で学習したこと、ちゃんと覚えてるでしょうね？」

「昨日まではちゃんと覚えてた。でも今朝起きたら全部忘れた・・・。」

「あはは・・・。」

要の言葉に螢は苦笑し、雛子は呆れ気味にため息をつく。

「うゝつす要く。相変わらず今のシーズンは景気の悪い顔をしていますな。」

すると要に対して親しげにかつ意地悪めいた笑みを浮かべた少女が、要の背中に体当

たりをしてきた。

茶髪のショートヘアで快活な印象を与える彼女の姿を螢は見た覚えがある。

確か要と同じ女子バスケット部に所属している子だ。

「そういう未来はどうなの？」

「ふっ、私は無駄な努力はしない主義なのさ。」

未来と呼ばれたその少女は、顎に手を当てさもカッコよさげな口調で言うが、呆れて

肩を落とす要の仕草を見るからに、その言葉は

勉強してもしなくても悪い点数を取るのに代わりはないから勉強してきませんでした。

と言う意味のようだ。

「おりよ？君は……確か蛍ちゃんであつてたっけ？」

「え？はっはい……。」

するところちに気づいた未来が、自分の姿を確認するやズバリと名前を言い当ててきた。

名乗った覚えがないので蛍が困惑すると、

「あははごめんごめん、初対面だったっけ？」

君ときどき雛子と一緒に部活の見学来てたから、要から名前聞いたんだ。」

確かに最近雛子と一緒に部活の見学をすることが増えたが、要の部活仲間に顔と名前を覚えられるほど通っていたことを自覚した蛍は、恥ずかしさで顔を赤くする。

だが彼女とは初対面であつたことを思い出し、要の友人なのだから失礼があつてはならないと、未来に対して改めて自己紹介をする。

「はっはじめまして、いちのせ ほたるっていいいます。」

「真鍋 未来。よろしくね。」

いや〜こうして近くで見るとちっちゃくつて可愛いなく。」

「ふえっ!? えと……。」

だが緊張で固まる蛍を余所に、未来は前かがみで目線を合わせてくる。

可愛いと褒められてしまった蛍は顔を赤くして慌て出した。

未来がそんな蛍の仕草をニヤつきながら眺めているところを、要が静止しようとしたその時、

「ん?」

何やら後ろが騒々しく、要が声のする方へ振り向いた。

蛍もつられて振り向くと、そこには一人の女子生徒の姿があった。

170cmに迫る高身長に、青色の長髪をサイドテールに束ねている。

一瞬高校生くらいかと思ったが、着ている制服はこの学校のものなので中学生であることは間違いなく、であれば上級生かと思いきや首元を見ると、結ぶリボンは黄色で蛍と同年代であることを示していた。

釣り上った鋭い目つきと引き締めた口元が冷たい印象を与えるが、顔立ちは整っており、佇まいもどことなく優雅だ。

ただ玄関へ向かって歩いているだけの姿が不思議と品があり、高身長とスレンダーながらも女性的な曲線はしっかりと見て取れるモデル然とした彼女の体型も相まって非常に画になっている。

そんな、自分とは真逆の意味で年齢不相応の容姿を持つ少女の姿は、端的に言つてしまえば、ちよつと怖いけどカッコよくってキレイな人だ。

それゆえか、彼女の周囲にいる女子生徒たちはうつとりとした目で見とれながら黄色い声を上げ、男子生徒たちはアイドルを見ているかのように彼女に視線を釘付けになっている。

「おつはよろ千歳。」

すると未来が親しげにその少女の名前を呼んで挨拶した。

だが千歳と呼ばれた少女は未来を一瞥しただけですぐに視線を反らし玄関へと向かつていった。

「あちやく相変わらずか。」

「未来、今の子つて確か3組の。」

「そつ、私と同じクラスの姫野 千歳（ひめの ちとせ）」

ちなみに席は私の真後ろ。」

彼女を初めて見た筈に、雛子が説明を付け足してくれる。

「去年の末あたりに転校してきた子だね。」

転校して間もない期末試験でいきなり学年1位を取ってしまったのよ。

それも噂によれば、全ての科目で1位を取ったんですつて。」

雛子の説明に未来が続く。

「それだけじゃないよ。」

運動神経抜群でどんなスポーツもそつなくこなすし、男子さえも圧倒する。

何よりあのモデル顔負けの整った顔に完璧なスタイル。

才色兼備って言葉を余すことなく体現したかのような子でさ。

でもぜんぜん誰とも仲良くしなくてね。

さつきみたいに挨拶してもそつぽ向かれるし、話しかけても何も返事してくれないの。

そんなクールなところが逆にウケちゃってね。

今や生徒から『孤高のクイーン』なんて呼ばれているこの学園の女王様よ。」

「ふわあ……」

全てを聞き終えた蛭は感嘆とした声を出す。

漫画で良くある転校生キャラのテンプレートをまとめたような人が本当にいるのかと、にわかには信じられない気持ちではあったが、千歳に見とれる生徒たちの反応を見るに、少なくともクイーンの称号をもらえるほどの人気があることは確かなようだ。

同時に千歳の姿を見た蛭は、もう一つの驚きを隠せないでいた。

(おなじ学校の生徒だったんだ……)

彼女は確か、母の日のプレゼントを買いにアクセサリーショップへ訪れたとき、ネックレスを譲ってくれようとした人のはずだ。

まさか同級生とは思わなかった螢は、存外世間は狭いんだなと思いつながら教室へと向かうのだった。

：

午前の試験が終わり、要たちは昼食を食べに食堂を訪れた。

中間試験は国数英理社の5科目が対象で、2日に渡って実施される。

今日は国数英の3科目。明日は理社の2科目だ。ちなみに午後の授業はないので、午前の試験さえ終わればもう下校だ。

とは言っても明日まだ2科目が残っているので、帰ってのんびり遊ぶと言うわけにもいかない。

試験で悪い点を取ってしまったら、また母親から大目玉を喰らってしまうのである。

「螢ちゃん、要。試験の方はどうだった？」

「えつと・・・まあまあ・・・かな？」

「聞かんどいて。」

一応答案は全て埋めたが、半分くらいが空欄のまま出すのは憚れると、万が一当たっていればラッキー程度の神頼みで埋めたものなので、この時点で点数は5割を切つていると言つても過言ではない。

赤点さえ回避できればまだ良い方だが、そんな成績であの鬼婆（母親）が許してくれるかどうかはまた別問題。もしも赤点など取るものなら間違いなく頭から角を2本生やすだろう。

例年によつて試験期間は要によつて地獄である。

親は目を光らせて勉強しろと五月蠅いし、そもそも勉強が苦手なのにこんな進学校クラスの授業を強要された上に試験で良い点を取らなければならぬなど理不尽もいところである。

そして要にとつてのオアシスと言える放課後の部活動は、試験の一週間前から休止になる。

日頃の勉強に対するストレスを発散させる場すら奪われるのだ。

毎度思うことだが、いつ自分の胃に穴が空かないか心配である。

「コホン、まあそれはそうと。」

これ以上この話題は自分の精神に多大な負担がかかるだろう。

これから昼食だと言うのに食事が喉を通らなくなるのは避けたいので、要はわざとらしく咳ばらいをしながら『この場所』へ2人を呼んだ本題へと移る。

「キュアブレイズ、なんでベリイたちにあんなこと言ったんだらうね。」

要は一昨日の出来事を思い出し、眉を吊り上げながら2人に聞く。

この街に来て以来、彼女と再会することを夢見てベリイたちは街中を探し回っていたと言うのに、あろうことかキュアブレイズは、やっとの思いで再会できた彼らを突き放したのだ。

シヨックで言葉を失ったベリイの姿を思い出すだけでも怒りが込み上げてくる。

それほどに彼女の取った言動は、要に取って許しがたいものだった。

「私たちのことを受け入れる心の準備ができていないって、どうゆうことかしら?」

雛子が質問を返して来る。

その答えが、今の彼女の現状を作り出している要因であることは想像に難くなく、同時にそれがわかれば苦勞しなまいと言うものだ。

「すくなくとも、キュアブレイズはまだ、わたしたちのことを仲間だとおもってくれてない……ってことだよね?」

蛍がそう小声で呟く。

確かに彼女の心境はわからないでも、現状は仲間と思われていないことは明白だろう。

とは言え彼女も同じプリキユアであり、共通の敵を持つ者同士のはず。

友達になれとまでは言わないまでも、一緒に戦えば互いの負担を減らせるはずなのに、なぜ共闘すら拒まれなければならないのだろうか。

特に自分と雛子は彼女と面識すらなかったのだ。

先日が初対面だと言うのにいきなり戦力外通告されるものだからたまったものではない。

「わたしが……よわいせいで……?」

すると蛭が、今にも泣きそうな声でそう答えた。

自分たちが彼女に認めてもらえるほどの強さがないから、仲間であることを拒まれていると、

蛭は思っているようだ。

だが本当にそうなのかと要は疑問を抱く。

「わたしたちが、よ。結局あの時、私もソルダークを相手に手も足も出なかったもの。」

雛子も言葉こそ蛭に同意しているが、どちらかと言えば弱気になっっている蛭を励まそうとフオーローしているように見え、本心の言葉には思えなかった。

確かにキュアブレイズは自分たちでは力不足だと言っていたが、それが原因ならアツプルがわざわざ必要以上のことは言えないと前置いた上で、原因をはぐらかすような言い方はしれないと思う。

こちらに原因があるのなら、それを直接言ってくれるだろうし、言われなければ改善のしようがないというものだ。

「・・・あつあのね、わたし、あれからずっとかんがえていたんだけどね。」

すると蛭が顔をあげて話しかけて来た。控えめだった声が徐々に大きくなっていく。

このように蛭が声量をあげていくときは、決まって何か重大なことを決心したときだと、これまでの経験から要は悟る。

「わたしは・・・。」

蛭が決意した何かを伝えようとしたその時、

「蛭ちゃん。」

雛子が片手を蛭の前に差し出し、静止の合図を出した。

そして視線を蛭の後方へと送る。

雛子につられてその先を見ると、そこにはお弁当を持った千歳の姿があった。すると千歳はこちらに目を配るや否や、空いている蛭の隣の席に座ったのだ。

「え？」

突然千歳に隣に座られ、螢は驚く。

だが千歳は『隣に失礼する』の一言もないまま、お弁当を広げて食べ始めた。

「・・・ウチらに何か用？」

要は不機嫌を表に出さないように千歳に話しかける。

「別に、空いている席に座ることの何がいけないのかしら？」

だが千歳はさらりと返事を返し、再び黙々と食事を続け始めた。

嘘をつけ、と内心で思う。

彼女の言う通り、学食堂の席は生徒たちが自由に使つていいものなので、空いている席に座るのにわざわざ許可なんていらぬし、要も別段、断りもなく近くの席に座るところにいちいち目くじらを立てるほど堅物なタチではない。

だがここは食堂の入り口から最も遠い壁際にある席だ。

そして今日は午前で学校が終わることもあり、食堂は普段ほど混み合っていない。

ここに来るまでに空いている席はいくらでもあり、わざわざこんな最果ての場所まで来ることがないのだ。

にもかかわらずこんなところまで足を運び、かつ一緒にお喋りをするわけでもなく、黙々と食事を始めたと言うことは、自分たちの会話を邪魔するのが目的なのではないかと邪推してしまう。

傍から見れば友達と楽しく食事をしながらお喋りをしている空気を知った上でぶち壊しに来ているようなものだ。

「私に気にせず、お友達同士でお喋りを続けていてもいいのよ?」

そしてあからさまに毒を含ませたその言葉に要は彼女が自分たちの邪魔をしに来たことを確信する。

いよいよ持つて堪忍袋の緒に限界が来た要はその場で立ち上がるとするが、
「はわわっ、ケツケンカはダメだよ。かなめちゃん!」

蛍の言葉に寸でのところで留まることができ、そのまま押し黙る。

だがお喋りも続けてもいいと言われても内容が内容だけに千歳がこの場には話すことも出来ない。

まさかそれを知って邪魔しに来たとも思えないが、それではなぜ彼女に邪魔をされなければならぬのがわからなかった。

『孤高のクイーン』なんてご立派な通り名でよばれている彼女の顔と名前くらいは知っているが、クラスが違うこともあり会話を交わしたこともない間柄だ。

言ってしまうばこれが初対面だ。

だから彼女の気に障るようなことをした記憶なんてあるはずもない。

そんな彼女の態度が、先日のキュアブレイズと被るものだから、要は必要以上に彼女

に敵意を向けてしまう。

要と千歳の間に険悪なムードが漂う中で会話が弾むはずもなく、各々が黙々と食事を取り続ける中、蛭だけはこの場の空気を何とかしようとしたふたしていた。

「あつあの、えと、いっしょの学校だった……んですね……？」

すると蛭の方から千歳に話しかけて来た。

背が高く目つきも鋭い千歳に気圧されてか、最後の方は萎んだ声で敬語になっていたが、要はそれよりも蛭のその発言に首を傾げる。

「蛭、こいつと会ったことあるの？」

「うっうん、おかーさんの日に、アクセサリーショップであつたんだ。

あつあのときね、わたしにネックレスゆずってくれようとしたんだよ？」

まさかそんなところで対面していたのかと要は思わず驚く。

また蛭の言葉は、冷たそうに見えるけど本当は良い人だよとフォローしているかのようだった。

「あなたのもの欲しそうな目が鬱陶しかっただけよ。」

「う……。」

だがそんなフォローも虚しく跳ね除けられてしまい、蛭もとうとう押し黙ってしまった。

結局そのまま話を再開するわけにもいかず、やがて各々はお弁当を食べ終えてこの場で解散することになるのだった。

：

要が家に帰り自室に入ると、勉強机の上にペリイの姿があつた。

「ああっおかえり、要。」

窓の外を見ていたペリイが自分の方を振り返る。

彼の表情はどこか浮かない様子だった。

一昨日まではこの時間は、キュアブレイズを探すために街を回っていた頃だが、突然それを止められたものだから、もの寂しさを感じているのかもしれない。

そんな彼の様子に要もまた、得も言われぬ寂しさを覚えた。

「・・・キュアブレイズのこと、考えてたん？」

要は少し躊躇いながらも、彼がここでたそがれていた理由を聞く。

ここで気を遣って見ぬふりをするのは簡単だが、それでは何も解決しない。

だからいつも通り思うがままのことを伝える。彼にも思うがままの気持ちを話してほしいから。

「んっ、まあね。」

情けない話だが、気が付けばあの子のことを考えていて、思った以上に堪えてるみたいだ。

今でもあれは本当にキュアブレイズだったのかと、つい疑ってしまうよ。」

ベリイは特に言いよどむこともなく話してくれた。

彼が思うことを全てを話してくれたことに要は感謝するが、同時に居た堪れない気持ちになる。

ようやく再開出来た大切な人がまるで別人のように変わってしまったのだから、そのときのベリイの心境を推し量ることなんて出来ないのだ。

「でも、あの子は間違いなくキュアブレイズだ。そこから目を背けちゃダメなんだ。

背けたら、あの子の力になつてあげることが出来ないから。」

だがベリイは、そんな受け入れ難い現実から目を反らさなかつた。

彼の覚悟を目の当たりにした要は、自分の中で芽生えた一つの決意を形にしたいと思つた。

「なあベリイ、1つ聞いてもいい？」

「なんだい？」

「キュアブレイズ。ううん、フェアリーキングダムのお姫様って、どんな子やったん？」

キュアブレイズと初めて会ったとき、要が彼女に抱いたのは怒りだけだった。

理不尽な言葉でベリイたちを傷つけたことが許せなかった。

だがそれでも彼女のことを受け入れようとするベリイの姿を見て、要はもつとキュアブレイズのことを、キュアブレイズに変身している少女のことを知りたいと思った。

わざわざ『フェアリーキングダムのお姫様』と言い直したのも、キュアブレイズとして戦う戦士のことではなく、お姫様としての彼女の素顔を知りたかったからだ。

「そうだな・・・、率直に言えばお転婆でやんちゃなお姫様だよ。」

「え・・・？」

だがベリイの思いもよらぬ感想を前に、要は初っ端から言葉を失う。

人と妖精が共存するファンタジーな世界でのお姫様と来れば、花一面に広がる野原の上に綺麗なドレスをなびかせて蝶と戯れる、童話に出てくるお姫様のイメージを勝手に抱いていただけに、真っ先に出てきた印象が『お転婆でやんちゃ』と来たものだから思わず破顔してしまう。

しかもベリイの口調から察するにそんなお姫様のことを良く知る風な言い草だ。

もしかしてベリイは元の世界では王族とも親しい、身分の高い妖精なのだろうか？

「あの子は昔からよく城下街に遊びにきていてね。」

とは言ってもフェアリーキングダムは身分や貧富の差による差別がほとんどないような国だから、王族も貴族もよく城下街を訪れ、平民である俺たちにも平等に接してくださったんだ。

特に姫様は勝ち気で強気な上に、人一倍正義感が強くてね。

良く子ども同士の喧嘩を止めるために自分から首を突っ込んでいたものだ。

男子相手でもおかまいなくね。

でもいくら王族の方々が親しみやすい人柄とは言え、次期王妃となる大事なお姫様だろ？

そんな子が男子を相手に喧嘩するものだから、一緒にみていた大人たちはみんな肝を冷やしていたよ。

それで、男子が負かされて大泣きした時は、国王様が直々に謝りに来てくださったんだ。

でも謝られた親御さんは心臓が止まる思いだったとさ。」

「はあ……。」

ますますお姫様というイメージから離れて来る。

だがキュアブレイズのことを懐かしんで話すベリーの顔はとても穏やかだった。

要は、キュアブレイズがベリィに、ひいてはフェアリーキングダムの人々にとってどのような存在であったかが少しずつ分かって来た。

「でもいつか立派なお姫様になって、世界中の人々が幸せに暮らせる世界にしてみせる。その夢を胸に誰よりも努力をしてきたんだ。そんな人柄が俺たちみんなの心を引き寄せていった。

そんなお転婆なお姫様も少しずつ成長して、今では君たちと変わらない年齢だったかな。

さすがに昔ほどやんちゃではなくなり、徐々に姫としての振る舞いを身に付けていったけど、根っこの部分は変わっていない。

真っ直ぐで優しく、国中の人たちから愛され、誰よりもフェアリーキングダムを愛している、

太陽のように眩しい笑顔を持つ少女だった。」

それだけに今の変わり様は信じられないと含まれているようだったが、ベリィの語るお姫様の人物像の通りなら、彼女が自身の世界を巣食うダークネスと戦うためにプリキュアとなることを決心したであろうことは想像に難くない。

そんな彼女の今の状況を思ったとき、要は心の中の憑き物が落ちていった。

アップルの言葉が少しずつ分かって来たのだ。

もしも、キュアブレイズが自分たちを受け入れる心の準備が出来ていないと言うのが、自分の想像通りだったとすれば。

「そう、根つこの部分は変わっていないはずなんだ。」

そしてまるで自分にそう言い聞かせるように呟くペリイをみて、要が心に思い描いた決意が形になった。

「ペリイはさ。」

「ん？」

「キュアブレイズの笑顔を取り戻したいって、思ってる？」

そして自分の気持ちを確認する意味も含めてペリイに問う。

「・・・当たり前さ。」

ペリイの答えを聞いた時、要には一切の迷いがなくなった。

∴

雛子は机に向かつて、明日の試験に備えて勉強していた。だが雛子はどうしても集中できなかった。

ふと目を横に向けると、ベッドの上で児童向けの童話集を読んでいるレモンの姿が目に入る。

いつもならこの時間はキュアブレイズを探しに街に出ていた頃だ。

彼女たちにとって何物にも変えがたい時間は、キュアブレイズ本人に拒絶される形で奪われた。

今はもう一昨日のことを引きずっているようには見えないが、それでも気になってしまふのだ。

「雛子？」

すると自分の視線に気づいたレモンが、本を畳んでこちらを見た。

「……ごめんね。レモンのせいで勉強に集中できなくて。」

するとレモンが申し訳なさそうにそう呟いた。

その言葉を聞いた雛子は余計な気を遣わせてしまったことを謝ろうとしたが、レモンのことだからさらに思い詰めてしまふだろう。

マイペースのように見えて、彼女は他人への思いやりがとても強い。

初めてあったとき、自分を巻き込みたくないと、この部屋に居座ることを拒んだこと

を思い出す。

「ただあの時と違って、今の自分はレモンのパートナーだ。」

レモンが落ちこんでいるのなら、支えてあげるのがパートナーの務め。

雛子は静かにノートを閉じてレモンの横に座った。

「その本、面白い？」

「うん、読んでいる内にね、何だか懐かしくなってきた。」

「懐かしく？」

「フェアリーキングダムにもね、似たような童話があったんだ。」

レモン、小さい頃から童話を読むの好きだったから。」

思えばレモンからフェアリーキングダムにいた頃の話聞いたことはなかった。

雛子としては妖精の住む世界と言うものはとても興味深いせいかいだったのだが、さすがに故郷を失った彼女の境遇を思えば、自分から聞くのが憚れていた。

だが今、レモンが自分からフェアリーキングダムの話を持ち出してくれた。

雛子はこれを機に、フェアリーキングダムのことを彼女に聞いてみようと思った。

レモンの思いを、そして自分の思いを改めて確認するためにも。

「そっか、フェアリーキングダムにもこんな童話があったのね。」

「うん、人間になりたいお人形、うそつきの子ども、お姫様と獣の人。」

どれもこの世界の童話と似たようなお話だったよ。」

それからレモンは笑顔で自分の好きな童話について語り出した。

一昨日以来、どことなく元気のなかったレモンだけに、彼女の笑みを見ることが出来たのは久しぶりのような気がした。

雛子は楽し気に故郷の話をする彼女の姿に安堵する。

「・・・よくね。キュアブレイズにも、お姫様にも童話を読んで貰ったんだ。」

だが不意にレモンは表情を曇らせ、キュアブレイズとも思い出を振り返り始めた。

驚く自分に対して、レモンは無理やりな笑顔を作って言葉が続ける。

「フェアリーキングダムにはね、風車小屋のある丘があるの。」

そのこの原っぱがレモンのお気に入りの場所だね、よくそこでお昼寝したんだ。

それでね、その丘にお姫様を初めて誘ったとき、実はお姫様も子供の頃よくここを遊び場に使っていたって言うの。

もうびつくりしちゃったよ」

だが話していく内に、レモンの表情から寂し気な部分が無くなっていき、彼女は楽しそうにキュアブレイズとの思い出を語り続ける。

「それからよくお姫様と一緒に丘に行くようになったんだ。

一緒に遊んだり昼寝したり、それから、レモンの大好きな童話を読んでもくれたの。」

お姫様はみんなに優しいから、いつもは沢山の人と仲良くしてるけど、あの時だけはレモンが、お姫様のことを独り占め出来たんだ。」

その言葉から、レモンが心の底からキュアブレイズのことを慕っているのが伝わってきた。

その一方で一昨日の出来事で傷ついたレモンの姿を思い出す。

だが雛子は、レモンが今、楽しそうに語るキュアブレイズの本物の姿を信じてみようと思えてきた。

「いつか……いつかね、あの丘の上の原っぱに、雛子を連れていきたいな。」

とても綺麗な場所だから、きっと雛子も好きになれるよ。」

「レモンちゃん……。」

レモンは少し申し訳なさそうにそう語る。

いつかフェアリーキングダムへ自分を招待したい。

その言葉に秘められた意味を悟ったとき、雛子は一つの決意をする。

「うん、いつか連れて行ってね。約束よ?」

「……うん、約束する。」

少し顔を俯かせながらも、レモンは嬉しそうに微笑んだ。

雛子はそんな彼女に指を差し出し、その小さな指で指切りをする。

「ねえレモンちゃん、童話、私が読み聞かせてあげよつか？」

「ええ、レモンもうそこまで子供じゃないよ。」

そして指切りが終わった後、雛子の提案に対してレモンは少し不服そうに反論してきた。

ぬいぐるみのような姿ゆえについ忘れがちだが、人間年齢で言えばレモンは10歳前後だ。

確かに母親から童話を読み聞かせてもらう年齢ではないだろう。

だがようやく、いつものように間延びした口調に戻ってくれた彼女の姿に雛子は微笑む。

レモンも少しはにかみながらも、甘えるようにこちらに寄りかかって来た。

「でも、せっかくだからおねがいしてもいい？」

「もちろん。」

そしてレモンに童話を読み聞かせながら、雛子は内に秘めた1つの決意をいつか形にする心に誓うのだった。

大切なパートナーとの約束を果たすためにも。

…

アップルからキュアブレイズの正体を聞かされた時から、蛍は彼女について思うことがあった。

チェリーたちを見れば、彼女がお姫様として慕われていたことはわかるし、彼女も、たった一人で世界を覆わんとする絶望の闇に立ち向かっていったと言うことは、フェアリーキングダムと言う国が大好きだったのだろう。

「ねえチェリーちゃん。」

「なに？ 蛍。」

「キュアブレイズは、フェアリーキングダムにいたところから、ずっと一人でたたかいつづけて

きたんだよね？」

蛍は今一度、自分の気持ちを整理するためにチェリーに聞く。

「……ええ。」

一人で置いてチェリーが答える。

一緒に戦ってくれる、守ってくれる仲間もいないまま、それでも世界を守るために戦

い続けて、でも最後にはダークネスに敗れ、故郷を守ることが出来なかった。

彼女は故郷を失ったとき、泣いたのだろうか？ 守り切れなかったことを悔やんだのだろうか？

そして彼女は今も、この世界でプリキュアとしてダークネスと戦っている。

だがそれが蛍にとって1つ気がかりなことだった。

プリキュアの力は希望の光、希望の光はその名の通り、本人が希望を抱けば生まれる力のはずだ。

と言うことは彼女は、故郷を失った今でも希望を捨ててはいないと言うことだ。

(やっぱりキュアブレイズは、つよいな．．．)

もしも自分が同じ立場だったら、希望を失わずにいられるだろうか？

きっと、いられない。故郷を失った瞬間、あつという間に絶望に飲まれてしまうだろう。

でも彼女は、まだ希望を捨ててはいない。

そんな彼女の強さは、正直なところ羨ましくもある。

でも今は、その強さの根源に少しでも近づいてみたい。

それが彼女を理解することに繋がると思うから。

「蛍。私、やっぱり明日からまた、姫様を探してみようと思うの。」

「チエリーちゃん？」

「アツプルさんは、姫様が気持ちに整理をつけるまで待つてほしいって言ってたわ。

でも・・・それっていつ？ 私たちはまた、いつまで待てばいいの？

ようやく会えたのに、姫様に会うことが出来たのに。姫様が迎えに来るまで、また待たなくちゃならないの？

そんなのイヤ、私だって、姫様の力になりたいもの！

もしも姫様が、自分の気持ちに整理が付けられないくらい、今悩んでいるのだとしたら、私はもう、待つてられない。だから探しに行くわ。」

蛭はチエリーの決意を受け止める。

彼女の言う通りだ。待つてばかりいてはダメだ。

この1か月の間で自分は学んだ。ほんの少しの勇氣を持つて一歩踏み出せば、今を変えることが出来るのだと。

だから蛭も待つているだけのつもりはなかった。

初めてプリキュアとして戦うことを決心したとき、1人で戦い続けるキュアブレイズのことを助けたいと願った。

でも結局のところ、自分は彼女について何も知らなかったのだ。

だから今はちゃんと知りたい。

彼女が何を思っているのか、そのために自分に出来ることは何なのか。

「そうだね。まっつてばかりいちゃ、ダメだよね・・・。」

もう一度キュアブレイズに会いたい。会ってちゃんとお話がしたい。

そして居場所の分からないキュアブレイズにどうしたら会えるのかも既に考えてあ
るのだ。

でもこの方法を実践するのはキュアブレイズに申し訳ないし、何よりまた、みんなに
心配をかけてしまうだろう。

それでも虫はどうしてもキュアブレイズに会いたかった。

だから虫はその時が来るまで、自分の決意を胸に秘めるのだった。

第11話・Bパート

それぞれが胸に1つの決意を秘めてから1日が経ち、2日目のテストも無事終わることが出来た。

妖精たちもキュアブレイズとの再会で起きた出来事のショックから立ち上がり、再び彼女を探すために街へと出かけることとなった。

それからダークネスの襲撃もなければキュアブレイズが見つかることもない、普段と変わらぬ日常が経過して1週間が経過した。

今日は試験結果の発表日だ。玄関にある全校掲示板に、各学年ごとの順位が張り出される。

雛子たちは昼食を終えてからその場を訪れると、既に多くの生徒が集まって自分の順位を確かめていた。

「さすが雛子、今回もベスト10位をキープね。」

雛子が見つけるよりも先に、隣に立つ愛子が順位を教えてくれた。

雛子も自分の目で張り出された2年生の順位表を見ると、10位には確かに自分の名前が書いてある。

よし、と雛子は心の中でガッツポーズを思い描く。

学力を競うことに真剣になっているわけではないが、勉強が得意と言う自負はあるし、何より好きだ。

好きこそものの上手になれ。得意なことを伸ばすための努力は惜しまないし、こうして目に見える結果として残るのであれば、より上の成績を取ってみたいと思うのだ。

その甲斐あつてか、この学校に入ってから今のところ学年10位かそれよりも少し下の間をキープできている。

未だに9位以上まで上り詰めたことはないが、担任の教師にも一目置かれているので、十分に誇れる結果と言えるだろう。

とは言っても、まだ自分よりも上の成績を持つものが同じ学年に9人もいる。

2年生全体の生徒数が約160人なので、相対的に見れば少ないのかもしれないが、雛子にとって、9人という数字は決して少なくはないものだ。

まだまだ現状に満足せず、もっと上を目指してみたい。

そしていつかは9位以内、いやそれよりもっと上の順を取ってみたいものだ。

「ありがとう、愛子。そうゆう愛子はどうだった?」

「あはは、私はいつも通り、真ん中よりもちよい下だよ。」

「そんな苦笑いしなくても、別に恥ずべき成績じゃないでしょ?」

「えへへ、ありがとね。」

彼女よりも順位が上の自分が言っただけは嫌味に聞こえるかもしれない言葉だが、愛子は素直に称賛と受け取ってくれた。

そしてそれは雛子の本心である。

真ん中よりも下、つまり学年の平均点を下回っているとさえ聞かすは悪いかもしれないが、この夢ノ宮中学校における平均点である。

一般的な公立中学校と比べると学力の水準が高いので、必然的に平均値のハードルも高い位置にあるのだ。

つまり逆説的な考え方をすれば、愛子は十分勉強のできる子と言うことになる。

「そうそう、別に恥ずべき成績じゃないよな。」

「その通り、そもそも他人と比べるのが間違い。前の自分よりも良くなっていればいいのさ。」

すると自身の順位を確認し終えた真と要が、立て続けに言い訳を並べてきた。

「あなたたちはもう少し頑張りなさい。」

愛子のときは打って変わって、雛子は呆れながら2人を叱る。

この2人はいつも通り、仲良く並んで学年下位。

最下位でこそないものの、一般的な水準で見てもとても楽観視できるレベルではな

い。

つまり勉強のできない子だ。

「別にウチらのせいじゃないもん。この学校の勉強が難しいのがいけないんだよ。」

「そくだそくだ。私らは好きでこんな難しい勉強をしたいわけじゃないんだぞ。」

反省の欠片も全くなければ力もまるで籠っていない抗議に雛子はやれやれと肩をすくめ、愛子は

呆れ交じりに苦笑する。

必死で勉強を頑張った末の結果であれば仕方がないと言うものだが、2人とも勉強する気が欠片も感じられない。

特に要は、親が目を光らせている間は少しは勉強をするがすぐに遊びに逃げるし忘れる。

以前の勉強会の成果も結局ほとんど見せぬままに終わったはずだ。

そもそも、要も真も決して勉強が出来ないわけではないのだ、

要なんかは日頃から頭を使うのが苦手と言っているが、部活動ではその頭をフルに使って、コート上の監督と言われるポイントガードとしての役割をしっかりと果たしている。

その上味方は勿論、戦った相手の得手不得手も全て記憶しているのだ。

その的確かつ瞬時の判断力と洞察力を發揮している姿を見ると、とてもじゃないが頭を使うのが苦手とは思えない。

部活動で發揮される頭の回転の良さと記憶力を少しでも勉強に回すだけでも、今よりも遙かに良い成績を取ることが出来るだろうに、勉強はできないと言う苦手意識と本人のやる気のなさのせいで損をしているだけなのだ。

「わああ・・・ひなこちゃんすごいなあ。」

すると要たちと同じく自身の順位を確認し終えた蛭が、人混みの中から小さな体をひよっこりと出してこちらに來た。可愛い。

「ありがとう。蛭ちゃんはどうだった？」

「わたしなんてぜんぜん。あんなにがんばったのに、平均点しかとれなかったよ。」

順位もちょうどまんなかだった。」

「え？」

「え？」

「え？」

「ふえ？どうしたの？」

だが蛭の思わぬ発言に真と要、そして愛子が一斉に硬直する。

雛子も僅かに驚き、みんなで蛭の順位を確認した。

すると彼女の言った通り、ちょうど真ん中の順位に一之瀬 蛍の名前があった。

何度も言うように、この夢ノ宮中学校は進学校に近いレベルの勉強が行われており、平均点のハードルも一般的な中学校よりも高い。

つまりこの学校での平均点を取れると言うことは、他校で言えば上の下、所謂優等生のレベルに相当するのだ。

「蛍ちゃん、ひよつとして前の学校では成績優秀だったりする？」

愛子が蛍にそう問いかける。

「え？えと、まえの学校ではここみたいに順位がはられることがなかったからわかんないかな。」

でも、優秀ってことにはないとおもうよ？

わたしよりも勉強のできるひと、クラスにもたくさんいたはずだよ。

わたしはいちども表彰されたことなかったもん。」

それはそうだろうと雛子は思う。

この学校でも試験の成績で教師から表彰されるのは、学年でも3本の指入る成績を取めた人からだ。

他の学校もそこまでの差異はないと思われる。少なくとも5本の指に入る必要があると思われる。

そのレベルをして成績優秀と評するのであれば、周りから勉強ができると評価され教師からも一目置かれていた雛子ですら凡人の域である。

「だから蛭は物差しの置き方が極端なんやて……。」

「なんで底辺か頂点しか目盛を置けないかなあ……。」

要と真が呆れ交じりでそう呟くも蛭は不思議そうに首を傾げるだけだった。可愛い。

「蛭ちゃんってひよつとして、私たちの中で一番スペック高いんじゃないかしら？」

愛子の言葉に蛭を除く全員が同意する。

家事全般を主婦のレベルでこなし、お菓子作りはプロの腕前。その上で学力も人並み以上。

運動だけは本人の言うように不得手だが、この分だと彼女は運動以外のことはそつなくこなせるのではないだろうかと思えて来た。

「おつ、さつすが千歳！今回もナンバーワンの座を譲らないわね！」

すると隣から未来の声が聞こえて来た。

振り向くと未来と千歳、それからもう一人の少女が並んで掲示板を眺めている。

手にはお弁当箱を持っており、恐らく学食からここまで来たばかりなのだろう。

「……。」

だが当の千歳本人は学年一位と言う輝かしい成績を飾ったにも関わらず、一切喜ぶ素

振りを見せないどころか、掲示板に書かれた自分の名前を一瞥しただけですぐに視線を反らした。

「孤高のクイーンだか何だか知らないけど、感じ悪。」

そんな千歳の仕草に要が毒を吐く。

その言葉を聞いた千歳は要の方を向き、その鋭い眼で彼女を睨み付ける。

だがその程度で動じるような要ではない。要も負けじと睨み返す。

今にも喧嘩に発展しそうな一触即発の空気が両者の間に漂い始め、この場にいる全員がその光景固唾を呑んで見守り、虫はオロオロし始めた。可愛い。

「……、要。」

とは言え全校生徒の集まるこの場でさすがに喧嘩をさせるわけにもいかず、雛子は要を注意する。

「ウチ、陰口叩くの嫌いなん。言いたいことがあるならばつきり言うわ。」

「だからと言って本人を前に堂々を悪口を言っつていい理由にはならないわ。」

だが要は退こうとしない。

そもそも彼女がこのような辛辣な言葉を冗談ではなく言うことが珍しかった。

基本的に来るもの拒まずなスタンスでいる要は、どんな捻くれた性格の持ち主だろうと受け入れる度量の持ち主だ。

その要がここまで悪辣な態度を取る当たり、先週の一件がどうも響いているらしい。最もそれは雛子にも思うところがある。

わざわざあんな離れの席を取りに来た上に仏頂面で黙々と食事を始めたことから、自分たちの会話の邪魔するのが目的であったことは明白だ。

だが当然、これまで一言も話したことのない千歳に会話の邪魔をされなければならぬ理由が分からなかった。

訳もなく一方的に邪魔をされた上に、蚩を侮蔑する言葉をぶつけたのだから雛子も内心、主に後者が原因で怒り心頭していたものである。

「別にあなたみたいな体育バカに何を思われようと気にしないけど。」

すると千歳も負けじと要に辛辣な言葉をぶつけてきた。

要もムツとなって千歳を再度睨み付ける。

だがここで雛子は1つの疑問を抱いた。なぜ千歳は要のことを体育バカと呼んだのだろうか？

確かに要はクラスで一番運動能力抜群だが、それが他のクラスにまで評判が及んでいたのか。それとも未来が話したのか。

いや、未来と千歳の様子を見る限りではとてもじゃないがそんな世間話を交わせるような間柄には見えない。

だとすれば彼女は個人で要のことを調べたと言うことになるが、何のために？

「あつあの、ケツケンカはダメだからね。かなめちゃん。」

するとオドオドしながら蛍が要を静止する。可愛い。

要もさすがに蛍に言われては食ってかかれぬのか、目つきを僅かに緩めた。

「相変わらず腰の引ける子ね。見ていて腹が立つわ。」

「え・・・？」

だが彼女の辛辣な言葉がついに蛍にまで向き始めた。

これはさすがに聞捨て置けず、雛子は眉を潜めて千歳へ踏みよる。

「ちよつと、蛍ちゃんにまで当たらなくてもいいでしょ。」

「わわつ、ひっひなこちゃん！」

喧嘩になるのを静止するつもりだった雛子自身が千歳に食ってかかったため、このまま言い争いが続くのかと思いきや、千歳はそのまま蛍から目を背けて、教室へと帰っていった。

「つたく、何やねんあいつ。」

要が声を荒げてやり場を失った怒りを吐き捨てる。

「やつでもさ、要たちって千歳と交流あったっけ？」

「はい？」

だが未来からの思わぬ言葉に、要はつい間の抜けた返事をしてしまった。

「だってさ、私らなんて何度声をかけても千歳に無視されればなしで、さつきみたいに喧嘩にすらなつたことがないんだよ？」

「さりと私を混ぜないでくれる？未来が好き勝手にやっただけじゃない。」

先ほどから未来の隣にいた少女が笑顔のまま反論する。

名前は確か、相羽 優花（あいば ゆうか）だったか。

未来のクラスメートであり親友でもある少女で、雛子も何度か話をしたことはある。

だが、要と同じ部活動に所属している縁から、それなりに親交のある未来と違い、優花は雛子にとって友達の友達の友達と言う、近しいようで遠い人なので、そこまで親しいわけではない。

ただ優花の性格はよく知っており、常に喋り通して冗談を良く言う未来の親友と言うだけあり、彼女もまた悪ノリが良くて人をからかうことが好きだ。

当然、同じ趣味を持つ要とも良く意気投合し、未来も交えた3人でコント紛いのことをやっているのを見たことがある。

多少菌に衣を着せぬところもあるが、明るくてノリがよくそして人懐っこい子だ。

そんな彼女でさえ千歳に対しては半ばお手上げのようだ。

だが未来は無視されながらも千歳に対して友好的な態度を続けているみたいだ。

「冷たいこと言うなく優花は。優花だって、本音を言えば放っておけないくせに。」
「あそこまでガードが固かったらさすがにお手上げよ。もう何を言っても聞かないって感じじゃない。」

「まったくさね、びっくりしたのよ。要とは言い争うんだなあつて。」
「……。」

だが要は複雑な表情を浮かべたまま黙り込んでしまった。

千歳と言い争いができたことを羨ましがられたわけだから無理もない。

それにしても徹底的に無視を通されているのにまだ千歳に話しかけることを諦めない当たり、未来も大概、お人好しであるようだ。

類は友を呼ぶと言うが、こんなところまで要とよく似ている。

「全く、なんであんな風に人と壁を作っちゃうのかねえ。」

そんな千歳のことをまるで憐れむように、未来は彼女の背に問いかけるのだった。

：

夢ノ宮中学校から徒歩で約10分ほど離れたところにある住宅街は、アパートやマンション等の共同住宅が一带に立ち並んでいる。

そこにある、比較的新築のマンションの302号室に千歳は住んでいた。

靴から鍵を取り出してドアを開けて中に入ると、見慣れた赤いハイヒールが既に置かれている。

そして家に上がりリビングを訪れると、キッチンに1人の女性が立っていた。

「あら、お帰りなさい千歳。」

「リン子、珍しく早いのね。」

姫野　リン子。立場上は一応、自分の母親に当たる人だ。

170cm後半と言う自分よりも高い身長に、ウェーブの入った茶髪。

赤い縁のメガネと赤色のOLスーツを着こなしている。

女手1つで2人分の生活費と自分の教育費を稼いでいる彼女は、平日はいつも夜遅くまで仕事に出ており、休日だって出勤することが多い。

そんな、普段は仕事中心である時間帯にリン子がいるものだから、千歳は少しばかり驚いている。

「娘と2人暮らしなのはわかるけど、いくらなんでも仕事し過ぎだって怒られちゃった。」

リン子は悪びれる様子もなく理由を話す。要するに上司から強制的に帰社命令が下されたようだ。

「そう……。」

だが自分のために働き詰めの生活を送っているリン子をねぎらうこともなく、千歳は乱暴に鞆を投げ捨てソファの上に寝っ転がった。

「あら？ 今日はいつになく不機嫌ね。試験の結果でも悪かったかしら？」

リン子に茶化すように言われ、千歳はさらに不機嫌になる。

言われるまでもなく、ここしばらくは不機嫌な出来事が続いていた。

本来ならば喜ぶべきことであり、自分にとっても望んでいたことだったはずなのに、『あの3人』を見てからと言うもの、自分の内に芽生えた感情を振り払うことが出来なかった。

それは自分のことでありながら目を背けたいほどの醜い感情であり、抱いてはいけなものだと分かかっていてもどうすることも出来ず、その感情に駆られるまま3人に八つ当たりをしてしまった。

それに対して自責の念を持ちながらも今更取り繕うことも出来ず、今日もまた憂さを晴らすように彼女たちに当たっている。

段々と醜くなっていく自分が嫌いになりながらも、千歳は自分を抑える術を知らな

かった。

「うるさいわね。お腹空いてるんだからさっさとご飯にしてよ。」

そして今度はリン子にまで当たってしまう。

そんな自分があります嫌になり、千歳は仏頂面のままソファに置かれた枕に顔を埋める。

「はいはい、じゃあご飯までに宿題を終わらせておきなさいよ。」

だが千歳の心境を知っているリン子は、怒ることもなく普段通りに接してくれた。

そんな彼女の優しさに甘えるように、千歳はぶっきらぼうな態度を取り続ける。

このままではダメだと思いつつも、自分の中に芽生えた感情が本来取るべき正しい行動を否定する。

それが罪悪感と板挟みになり、千歳は自分の心に整理を付けることが出来ないでいた。

本当ならあの3人に謝りたい、距離を縮めたいと思っっているのに。

(私は・・・どうしたいんだろ・・・)

自分のことなのに自分がわからない。

そんな曖昧な感覚から目を背けるように、リン子に言われた通り宿題を早く終わらせなければと思うのだった。

：

リリンは蛍と会うべく、噴水公園を訪れた。

平日の夕刻を過ぎた時間帯は、丁度学校を終えた蛍が食材を買うために商店街を訪れていることが多いのだ。

「あつ、リリンちゃん！」

「ほたる。」

リリンの狙い通り、蛍が姿を見せる。

だが今日のリリンはいつもとは別の用件で彼女に会いたかつたのだ。

「テストの結果、どうだった？」

「えつとね、ちょうどまんなかだったよ。」

あつ、ひなこちゃんね、学年で10位をとれたんだよ！スゴイよね！」

今日が試験の結果発表日であることは以前から聞いており、自然と話をするためにも記憶しておいた。

今回だけじゃない。蛍に対して自然と会話を弾ませることが出来るように、彼女の日常におけるスケジュールは全て記憶してあるし。

だから自分と蛍の会話は、有り触れた日常の中に溶け込めるほど自然な光景となつていった。

蛍から信頼を得て付け込むと言う作戦は、この上なく成功を収めていると言つてもいい。

だがそれは同時に、リリンに1つの変化をもたらした。

(やっぱり……ほたるの隣にいとなんだか落ち着く……)

自分を掻き乱すキュアシャインへの憎しみ、制御することができない怒り、それらに翻弄され自分を見失つていくことへの困惑。

それら全てが苛立ちとなつてリリンの身を焦がしていた。

だけど以前、蛍に身を案じてもらった時、身体を焼く炎が鎮火され、自分を掻き乱すざわつきが収まったのだ。

それ以降、彼女と会い、こうして日常に溶け込む度にリリンは安らぎを得られるようになった。

その理由も当然わからないが、それはキュアシャインから与えられたものとは違い、分からなくても苛立ちに変わらなかつた。

それにこの際、わからなくてもいい。

わからなくてもいいから、その安らぎに身を委ねたいと思えた。

この一時だけリリンは、自分自身を取り戻すことができるような気がするのだから。
(まさかこの子にこんな使い道があったなんてね。)

だがあくまでも虫は自分にとって道具だ。

その道具に新たな活用方法が見つかっただけのこと。

ならばそれを有効に活用させてもらおう。

キュアシャインの正体を暴き彼女を自分の手で墮とす、その悲願を達成するために。

「ほたる。」

「なに?」

だからこれは彼女を利用するための詭弁だ。

彼女の恩人、リリンとして自然に振る舞うための言葉に過ぎないのだ。

「今日のほたる、ちよつと元気がないけど、なにかあったの?」

「え・・・?」

「良ければ聞かせて、だってあたしたち。」

それなのにその言葉は、自分でも気が付かないくらい自然と口から零れた。

「トモダチでしょ?」

「つ．．．。」

蛍の笑顔は飽きるほど見てきた。だから分かったのだ。今日の彼女の笑顔には陰りがある。

そして人間が笑顔を曇らせるのは、何か悩みを抱えている兆しだ。

だが自分の発したトモダチと言う言葉に、蛍は驚いて目を見開く。

思えばお互いに友達であると言ったことはなかったか。

それでも自分たちはこうして時間さえ合えばこの場所に集まり、2人並んでベンチに座りお喋りする姿は、通りすぎる人たちから何ら疑問を抱かないほど、有り触れた日常の光景に埋もれている。

何より蛍は言ってくれた。自分のことを『大切な人』だって。

であれば、蛍は自分のことを『友達』として受け入れてくれるはずだ。

「うっうん！もちろんだよ！」

すると蛍の顔を覆っていた雲が消え、声を弾ませながら肯定する。

またしても蛍は自分の思い通りに動いてくれた。

だが彼女の姿がまた、リリンに安らぎを与えていった。

「えっとね、おなじ学校の子がね．．．。」

だから友達として振る舞い、蛍の悩みを聞くのだ。

この子の側にいれば自分は安らぐことができる。

ダークネスが行動隊長リリスとしてあり続けるため、この子のことを手放すわけにはいかなかった。

リリンはもう、その居心地の良さを忘れることが出来なくなっていた。

：

地上へ降りたグリモアは、物陰からリリンと蛍の会話を覗き見していた。

やがて蛍はベンチから立ち、リリンに手を振って商店街の方へと向かった。

どうやら別れたらしく、そのタイミングを見計らってグリモアはリリンへと歩み寄る。

「お喋りは終わったかい？」

「グリモア、一体何のようかしら？」

お互いに視線を合わせないように、他人のフリをしながら会話する。

リリンは先ほどまでとは打って変わって、不機嫌な声色で答えた。

周囲の人間たちに会話が聞こえないよう声を低くしているのだが、それを差し引いても機嫌が悪さは隠しきれていない。

一応、以前伝えた人間の名前で呼んでもらっているようだが、これは好意の印何かではない。

プリキュアの正体が分からない以上は、変身前の彼女たちがどこにいるかも分からない。

今この場でプリキュアが目の前を通り過ぎている可能性もあるのだから、迂闊に怪人態のときの名前で呼ぶわけにはいかないのを承知なのだろう。

あの脳筋バカ（サブナック）と違って、リリンはその辺りの気転が効く子だ。

「別に、随分と仲良くそうにお喋りをしているんだねって思ってたさ。

ひよつとして楽しんでるのかい？」

「っ、楽しむ？バカなこと言わないで。そんな感情、あたしが持っているわけじゃないでしょ。」

如何にも行動隊長らしい答えだが、ひと時の間があつたことをグリモアは見逃さなかつた。

やはりリリンは、彼女に対して何か思うところがあるようだ。

それを確かめるように、グリモアはリリンに話を振った。

「蛍と言ったかな、さっきの子。」

「え……?」

自分が先ほどいた少女の名前を知っていたことに、リリンは目を見開きこちらを振り向く。

その目からは驚き、疑惑、そしてどこか、妬みが混じっているように見えた。

そんなリリンの様子をグリモアは興味深そうに観察する。

驚きと疑惑はまだ理解できたが、妬みまで読み取れるとは思わなかった。

自分以外の人物が蛍の名を知ることがそんなに気に入らないと見える。

となればこの言葉を投げれば、彼女はどんな反応を見せるか。

「前に君たちの会話を偶然聞いてしまつてさ。あの子、なかなか興味深い絶望を持つているね。」

「つ!?あの子になにをやる気!!」

だがリリンが声を荒げて反応してきたので、周囲の人々の視線が一気にこちらに注目される。

幸いにも名前を呼ばれた本人の姿は既に商店街の方へと消えていたが、声を荒げて周囲から注目を受けるなど、行動隊長あるまじき失態である。

さすがのグリモアも想定外すぎる彼女の言動に驚きを隠せずにいた。

「・・・あの子になにかを期待してもムダよ。希望も絶望も不安定すぎるもの。一時は強い力を持つソルダークを創り出せるけど、あつという間に使い物にならなくなるわ。」

さすがに注目を受けたことでバツが悪くなったのか、周りに聞こえないよう小声でいつもより早口でリリンは答える。

「随分と詳しいじゃないか?」

「当然でしょ。あたしがこの世界で初めて創ったソルダークは、あの子の絶望から創り出したものなのよ。」

そう言えば蛍を情報収集の対象として選別したのも、ソルダークを創る素材を生み出す際に見つけた素材だったからと言っていたか。

一度敗北したソルダークと同じ絶望を使ったところで、また倒されることは目に見えていると伝えたいのだろうが、それだけの理由で声を荒げたりはしないだろう。

先ほどの態度は、蛍のことを『想って』怒ったようにしか見えなかった。「・・・まっそうゆうことにおいてやるよ。」

だがこれ以上言及したところで何も出て来そうにはなく、周囲からの視線は依然と外されていないままなので、グリモアは自ら話題を切り上げる。

傍から見れば年端もいかない少女が成年男子を相手に睨み付けている構図なので、こ

のままでは自分に良からぬ評判が付きまどってしまいそうだ。

この世界の人間たちからの対外的な評価なんて気にする必要はないが、人間の姿での活動に支障が出る可能性もゼロではない。

リリンほどではないにせよ、自分もこの姿でよく活動する身だ。これ以上の注目を受けるのは得策ではない。

グリモアは右手を上には伸ばしてスナップし、その姿をダンタリアへと変える。

それと同時にリリンは姿を眩ました。

「ターンオーバー、希望から絶望へ。」

そして突如現れた怪人の姿が周囲の人間たちに記憶される前に、闇の牢獄を展開して追い払うのだった。

∴

蛍の全身に悪寒が走ったのは、スーパーで買い物をしている最中だった。

「っ!?!やみのろうく!?!」

まだ商品の入っていない買い物かごをその場に置き、蛍は両手を胸に置く。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

そしてシャインパクトを具現させ、キュアシャインへと変身した。

「世界を照らす、希望の光！キュアシャイン！」

変身を終えた蛍がそのままスーパードライバーを出ると、こちらの力を感じ取ったのか、チエリーたち3人の妖精がこちらに駆けつけて来た。

「キュアシャイン！」

「チエリーちゃん。」

「あっちから闇の波動を感じるわ。」

でも学校の方からキュアスパークとキュアプリズムの波動も感じたし、2人が来るまで待ちましょう。」

「わかった。」

蛍は逸る気持ちを抑えて2人の到着を待つ。

今日の戦いで蛍は一週間前から胸に秘めた、ある『決意』を実行するのだ。

それはまたチエリーたちを心配させてしまうだろうし、無事に成し遂げられてもチエリーに怒られてしまうだろう。

それでも蛍は譲るつもりは無かった。

「キュアシャインー！」

「キュアスパーク、キュアプリズム。」

そして程なくして2人が合流し、3人は妖精たちと共に絶望の闇がする方へと向かっていった。

蛍たちが絶望の闇がする方へ駆け寄ると、そこにはダンタリアの姿があった。

右掌には黒い球体が浮いており、既に誰かを絶望させた後のようだ。

「来たね、プリキュア達。」

ダークネスが行動隊長、ダンタリアの名に置いて命ずる。

「ソルダークよ、世界に闇を撒き散らせ。」

黒い球体が巨人の形を成し、産声とともにソルダークが誕生する。

キュアスパークとキュアプリズムは以前の戦いを思い出してか、いつも以上に緊張した面立ちでソルダークと睨みあう。

だが蛍はそんな2人よりも一步先に立ち、2人の前に躍り出た。

「キュアシャインー？」

キュアスパークが怪訝そうに声をかけると、蛍は2人に自分の決断を話した。

「ふたりともお願いがあるの。あのソルダークは、わたしひとりでたたかわせて！」
「なっ!？」

「キュアシャイン!あなた、何を言っているの!？」

蛭の言葉にキュアスパークは驚き、普段自分に優しく声をかけてくれるキュアプリズムでさえ、厳しい口調で問いたです。

そんな2人に萎縮しそうになる気持ちを振り払おうと、キュアシャインはさらに一歩前に出る。

「おねがい!わたしひとりでたたかいたいの!!」

「そんなのダメに決まっているでしょう!」

この前の戦いを忘れたの!?!いくらなんでも危険過ぎるわ!」

「ガアアアアアアアアアツ!!」

だが注意を重ねるキュアプリズムを無視するかのように、ソルダークが雄叫びをあげてこちらへ向かってきた。

もう2人に理由を話している暇もなかった。

蛭はソルダークを迎え撃つべく、地を強く踏み高く跳躍した。

「キュアシャイン!」

尚も蛭を止めようとするキュアプリズムを、キュアスパークが制する。

蛭は心の中でお礼と謝罪を言い、ソルダークへと1人で立ち向かっていった。

：

キュアブレイズは遠目からキュアシャインたちの戦いを眺めていた。

だがすぐに今回の戦いがおかしなことに気が付く。

「あの子・・・何で1人で？」

キュアシャインがたった1人でソルダークを相手に立ち向かっている。

あのソルダークの力が大したことがないのであればまだわかるが、これまでの戦いを見る限り、ダンタリアと言う行動隊長が創るソルダークは強力な個体ばかりだった。

恐らくは前もって、強力なソルダークを生み出す人をリサーチしているのだろう。

未だに希望の光の使い方すらわからないキュアシャインでは勝てる見込みがない。

そのくらいのこと、キュアスパークとキュアプリズムでもわかるはずなのに、2人は一向にキュアシャインを助けようとせず、ダンタリアと交戦していた。

だがダンタリアは積極的に戦う姿勢を見せず、迫るキュアスパークの攻撃を回避する

ことに専念していた。

このままキュアシャインが1人でソルダークと戦うのであれば、戦いを長引かせるだけで、いずれキュアシャインはソルダークに敗れると睨んでいるに違いない。

キュアシャイン1人を確実に打ち倒す策に出ているのだろう。

「どうして助けがないの・・・？あなたたちは仲間じゃ、友達じゃないの？」

キュアブレイズは遠くにいる2人に届かない質問を口にする。

あの2人がキュアシャインのことを見捨てているはずがない、心配でないはずがない。

いつもキュアシャインのことを妹のように可愛がっていたはずだ。

多少過保護に映るほど、キュアシャインのことを大切に思っているはずだ。

それを証明するかのように、キュアプリズムはキュアシャインが攻撃を受ける度に振り向き、悲痛な表情を浮かべている。

一見ダンタリアとの戦いに専念しているように見えるキュアスパークの表情にも焦りが見える。

それなのに2人は敢えてキュアシャインを1人で戦わせているのだ。

だが何のために？

「どうして・・・？」

かつて自分が言った『足手まとい』と言う言葉を気にしているのだろうか？

だとすればこの状況を招いてしまったのは自分なのだろうか？

そんな罪悪感さえ覚えてしまうほど、キュアブレイズは今の状況に焦りを覚える。

このまま助けもなく、キュアシャイン1人で戦い続ける状況が続けば、彼女は……。

そしてソルダークによる一方的な暴力が終わり、倒れ伏すキュアシャインにトドメを刺そうと拳を振り上げた。

キュアプリズムは眼に涙を浮かべ、キュアスパークもついに救援へ向かおうとするが、ダンタリアが妨害する。

もう、居ても立っても居られなくなった。

キュアブレイズは手のひらに炎を宿し、全速力でキュアシャインの元へと飛び立つていった。

：

虫に目掛けてソルダークの巨大な拳が振り降ろされようとした直前、その間を炎の壁

が遮った。

その炎を見た瞬間、蛍は安堵する。

直後、ソルダークの巨体を蹴り飛ばすキュアブレイズの姿が横切った。

彼女はそのままこちらに駆け寄り、傷ついた自分の体を起こしてくれた。

「あなた、何を考えてるのよ!? 弱いくせに一人でソルダークに立ち向かうなんて!!」

いつもの冷静な態度ではなく、キュアブレイズは声を荒げて自分を叱った。

だが叱られているに、蛍はそんなキュアブレイズの姿を見て微笑んだ。

なぜなら叱ってくれたと言うことは、自分のことを心配してくれたと言う裏返しだからだ。

らだ。

目の前に映るキュアブレイズが、チェリーたちが慕う彼女の本当の姿なのだろう。

「……よかった……やっぱり、きてくれた……」

「え……?」

自分の突然の告白に、キュアブレイズは驚きの表情を浮かべる。

「わたし、どうしても、あなたとおはなしがしたかったの……」

でもあなたのいる場所は、わたしたちにはわからないから、どうやったらあなたにあ

えるのかを、ずっとかんがえて……」

そんな蛍の言葉を遮るようにソルダークが雄叫びをあげてこちらに向かってきたが、

キュアスパークがそれを阻害してくれた。

蛭は一呼吸を置いてから続きを話す。

「それでね．．．おもったんだ．．．。わたしがピンチになったら．．．きつとあなたは、たすけにきてくれるんじゃないかって．．．。」

「何を．．．言つて？」

「だってあなた、ずっとわたしたちのたたかいを、みまもつてくれてたんでしょ．．．？」
「っ!？」

キュアブレイズが息を飲む。

その彼女の仕草を、蛭は肯定として受け取る。

以前の戦いでキュアブレイズが助けに来てくれた時、蛭はそれを偶然とは思わなかった。

初めてリリスと交戦した時も、戦いが終わった後すぐに姿を見せていた。

きつと彼女は、これまでずっと自分たちの戦いを遠くから見守ってくれていたのだ。

自分たちの力だけでは敵わない敵が現れたとき、力を貸してくれるために。

「いつでもわたしたちのことをたすけられるように．．．ずっとみていてくれたんだよね．．．？」

「ごめんさい．．．そんなあなたのやさしさを利用して．．．。」

蛭は素直に謝罪する。

彼女の良心を利用しておびき寄せる真似をしたのは、謝つて許してもらえないものではない。

だが、そうしてでも蛭はキュアブレイズと会いたかったのだ。

するとキュアブレイズが自分の体を降ろそうとした。

蛭は彼女の左手を掴み、弱々しくその手を握る。

「キュアブレイズ．．．まだ．．．あなたとおはなしたいことがあるの．．．」

それまではこの手．．．はなさないからね．．．」

また行方を眩まそうとしたのか、ソルダークとの戦いに参戦しようとしたのかはわからない。

それでもまだ彼女の手を離すわけにはいかなかった。

この戦いが終わった後に、彼女に伝えたいことがあるから。

するとキュアブレイズは自分の手を優しく手放し、自分の背と膝の裏に手を回して体を抱き上げた。

「ふわ．．．」

所謂お姫様抱っこされた蛭は、思わず近くにきたキュアブレイズの横顔を見る。

その鋭く射貫くような目つきは最初は怖かったが、こうして間近で見ると、まるで童

話の王子様のようにカッコよく頼もしくも見えた。

本物のお姫様相手に王子様、何て感想を抱いてしまうのも失礼な話だが、この状況では彼女は間違いなく窮地に駆けつけてくれる白馬の王子さまであり、そんな王子様のようにかっこいいキュアブレイズに、言葉通りお姫様抱っこされていることを自覚した蚩は思わず頬を赤く染める。

そう言えば、要が初めてキュアスパークに変身したときも彼女にお姫様抱っこをされたことがあった。

あの時は直接『お姫様』と呼ばれたので、今よりも恥ずかしかった記憶がある。

と、そんなことを考えている内にキュアブレイズが自分を抱きかかえている状態で臨戦態勢へと入った。

周囲に複数の火球を出現させてから、勢いよく地面を蹴って跳躍する。

そしてキュアスパークと交戦中のソルダークに火球を飛ばす。

さながら流星群のように降りかかる火球はソルダークに次々と直撃し、ソルダークは苦悶の雄叫びをあげる。

「まさか君をおびき寄せせるための策だったとはね。存外甘いな、キュアブレイズ。」

するとキュアブレイズの元へダンタリアが飛び立ってきた。

猛禽類のように鋭い足の爪をキュアブレイズに目掛けて立てるが、キュアブレイズは

前方に渦巻く炎の円盤を盾のように出現させた。

ダンタリアは寸でのところで宙返りをして足を引っ込め、今度は闇のエネルギーを圧縮させた小さな球体を投げつける。

だがキュアブレイズの前方に展開された炎の円盤が、中心の渦の中に球体を吸い込みそのまま爆発した。

そして爆炎を目くらましとして、ダンタリアの元へ距離を詰め、背を向けて回し蹴りを繰り返す。

その姿勢は抱きかかえている自分の身を守ってくれるかのようにだった。

「ちっ。」

キュアブレイズの蹴りをガードしたダンタリアは距離を置く。

自分を抱きかかえて両腕が塞がっている状態にも関わらず、希望の光から成る炎を巧みに操り、隙のない体術で攻め立てる彼女は、まるでハンディを感じさせない。

これが頼れる仲間がはず、たった一人で戦い続けて来たキュアブレイズの強さなのだと肌で感じた蛍は、同時にそれが少し虚しくも思えた。

「プリキュア・プリズミック・リフレクション！」

そしてキュアブレイズがダンタリアと交戦している内に、ソルダークの方も決着がついたようだ。

キュアプリズムが浄化技を放ち、ソルダークを水晶の中へと閉じ込める。

「ガアアアアアアアッ!!」

そしてソルダークは断末魔をあげ、水晶とともに砕け散った。

「ふっ、キュアブレイズも本格的に参戦すると言うわけか。」

そしてソルダークの消滅を確認したダンタリアは、その場から姿を消すのだった。

：

ダークネスとの戦いを無事に終えた要はホツと胸を撫で下ろす。

キュアシャインから1人でソルダークと戦うと言ったときはどうしたものかと思っただが、まさかキュアブレイズを呼ぶための作戦だったとは。

これまでの戦いから、キュアシャインは考えなしに無鉄砲なことをする子ではないことはわかっていたので、彼女を止めずにその策に乗ったが、それでも随分と肝を冷やしたものだ。

キュアブレイズが必ず助けに来てくれると信じていたからこそ出来たことはいえ、相

も変わらず無茶をする子である。

オマケに一度決めたことは曲げない妙に頑固なところもある彼女のことだ。

仮に自分がキュアプリズムと一緒に止めに入ったとしても、1人で突っ走っていたことだろう。

帰つたらまたチェリーから大目玉を食らうのだろうなと考えていると、キュアプリズがキュアシャインを抱えたままこちらに降り立った。

そしてキュアプリズムの方へキュアシャインを差し出す。

「ありがとう、キュアプリズ。」

キュアプリズムがお礼を言い、キュアシャインを受け取る。

だがキュアシャインはキュアプリズから手を離そうとしなかった。

「・・・大丈夫よ。どこにも行ったりはしないわ。」

そんなキュアシャインに困惑しながら、キュアプリズは険しい表情のまま、だがこれまで聞いたことのない穏やかな声で彼女を諭す。

その言葉を聞いてキュアシャインも安心したのかその手を離し、キュアプリズムに抱きかかえられたままキュアプリズに話しかける。

「キュアプリズ・・・えとね・・・いままでなんでもたすけてくれてありがとう。」

わたし、ずっとあなたにお礼が言いたかったの・・・。」

「そう……。」

「ずっとひとりでたたかってきて、このせかいにきても、ひとりでダークネスとたたかつて。」

それなのにわたしはこんなによくて、あなたのちからになれなくて……ごめんなさい。」

キュアシャインのお礼に生返事で返したキュアブレイズだが、続く言葉に陰りを見せた。

「でもわたし、ずっとかながえてたの。あなたのちからになりたくて、あなたをたすけるには」

どうしたらいいかって……。

そしたらね、おもいだしたんだ。プリキュアの伝説を。」

「え?」

「4つのひかりがつどいしとき、おおいなる奇跡がおとずれん。」

わたし、この伝説をしんじてみたいとおもう。」

そしてキュアシャインは一呼吸おき、真つ直ぐキュアブレイズの顔を見た。

「だからキュアブレイズ、いっしょに、フェアリーキングダムをたすけにこう。」

「なっ……。」

突然のキュアシャインの呼びかけに、キュアブレイズは言葉を失う。

だがキュアプリズムも妖精たちも、そして自分も、キュアシャインがフェアリーキングダムを救いに行こうと考えていたのを初めて聞いたにも関わらず、一切の驚きを見せなかった。

強いて驚いたことがあるとすれば、彼女も自分と同じ決意を胸に秘めていたことだ。

そしてキュアプリズムもきつと、自分たちと同じ思いなのだろう。

「あなた・・・突然何を言い出すの!？」

この場にいる4人のプリキュアで、フェアリーキングダムを闇の世界から救い出す。

その言葉の意味を理解したキュアブレイズが声を荒げて反論した。

一方でキュアプリズムも自分も一切の反論をしない。

キュアシャインは自分たちの顔を交互に伺ってきたので、目だけで合図すると、彼女

は一瞬嬉しそうに微笑み、再びキュアブレイズの方を向く。

「わたしがあなたにできるおんがえしって、これくらいしかないから。

あなたはわたしをたすけてくれて、今日もこのまえも、はじめてあったときも、このせかいを守るためにダークネスとたたかってくれた。

だからわたしは、あなたのせかいをたすけるために、たたかいたいの。」

「ふざけないで！あなたみたいな弱い人に、私の世界の何を救えると言うの!？」

だいたい、あなたたちなんて私の仲間でもなんでもない!

前に言ったでしょ! 私は今まで通り1人で戦うのよ! フェアリーキングダムだって、いずれは私1人で……。」

「キュアブレイズ! 意地を張らないで!!」

チェリーの叫び声がキュアブレイズの言葉を中断させる。

チェリーは目に涙を浮かべながら、怒った表情を浮かべてキュアブレイズへと詰め寄る。

「チェリー?」

「フェアリーキングダムを救うことがあなたの望みじゃなかったの!？」

そんなあなたにみんなが協力してくれるって言ってるのに、どうしてムキになって手を払おうとするのよ!!」

「私は……別に……。」

徐々に言葉に詰まるキュアブレイズを見て、要は自分の憶測が当たっていることを確信した。

この言葉を伝えるべきかどうかを悩んだが、すぐに止める。

ここで彼女の機嫌を伺って遠慮するようではいつまで経っても変わらないのだ。

思うままの自分の気持ちを全て彼女にぶつけるしかない。

だから要は心を鬼にして、キュアブレイズの核心を突く言葉をぶつけた。

「そんなに妬ましいか？ウチらの世界に3人のプリキュアが誕生したことが。」

「え・・・？」

最初に虚を突かれた表情を見せたのは蛍だった。

力が足りていないせいで拒絶されてきたと思っただけに、言葉の意味を理解するまで時間がかかったようだ。

続いてチエリーとレモンも言葉を失い表情を硬くした。

彼女たちにとつても、想定外な答えだったのだろう。

一方でキュアプリズムとベリイは悲しそうな表情で目を伏せる。

そして最後にキュアブレイズは、

「ちっ違うわ・・・。そんなわけないでしょ！バカなこと言わないで!!」

今にも泣きそうな声で叫びながら反論した。

要はその反応を凶星と受け取る。

「違うない。」

フェアリーキングダムではあんたしかプリキュアになれんかったのに、この世界でウチら3人がプリキュアになれたのを妬んでんやろ？

フェアリーキングダムで誕生してくれたら、故郷を失うことはなかったって、そう

思ってるんやろ?」

「違うわ! 私は!!」

まるで自分の本心を誤魔化すように声を荒げるキュアブレイズを見て要も心を痛める。

今自分の言っていることが、どれだけ彼女の心を深く抉っているのかわかっているつもりだ。

だからこそ要は、表情を和らげて言葉を続ける。

「わかるよ、その気持ち。」

「え・・・?」

「だって、ウチがあんたの立場だったら、絶対に同じこと思うもん。」

故郷に伝わる伝説を信じて、いつか自分と共に戦ってくれる仲間が現れることを信じて、ずっと孤独な戦いに身を投じてきたのに、結局、仲間は現れずに故郷を失った。

そして恐らくは偶然流れ着いたこの地で、3人のプリキュアが覚醒したのだ。

それは自分たちに知らず内に、故郷を救うことの出来なかったキュアブレイズへの見せしめとなってしまうのだろう。

もしも自分が同じ立場だったらと思うと、考えただけで虚しくなるし腹立たしくなる。

そんな状況を妬まずに、好意的に受け入れられる自信なんてない。

それが出来るのは怒る感情を一切知らない狂った聖人君子か、世を憐む必要すらなくなつた世捨て人くらいだろう。

まして彼女はベリーの話を聞く限りでは自分たちと同じくらい歳のものだ。

この世界に住んでいるならば中学生、自分で言うのもなんだが、まだ親の庇護からも離れられない子どもだ。

そんな歳の少女が故郷を失い、見知らぬ土地で生き抜き、故郷と同じ状況に見舞われたこの世界で、自分が望んでいたことが現実になつたのだ。

自分たちのことが受け入れられないくらい、心に整理がつかないのも当然のことだ。

そうではないかと思ひ、今キュアブレイズの反応を見て確信した要は、もうキュアブレイズへ抱いた怒りなどどこにもなくなつていた。

代わりに芽生えたのは、彼女の助けになりたいと言う気持ちだ。

そこに細かな理屈なんてない。彼女が困っているから助けたいと言うシンプルなおもひだけだった。

「わかつた風な口を利かないでよ！あなたなんかは何が・・・」

「わかるよ、ウチにはわかる。だからあんたのこと、助けたいって思ったの。」

それに、あんたの気持ちかわかるのは、何もウチだけやない。」

そう言いながら要は、ベリイの方へ視線を向ける。

「ベリイ……?」

「キュアブレイズ、君はキュアスパークたちのことが妬ましくて、それを妬んでしまった自分が嫌で、ずっと俺たちを避けていたんだな。」

「……。」

さすがに自分よりも付き合いが長く、年齢的には年上に当たるベリイに諭されて、キュアブレイズは沈黙してしまった。

「不思議とね、そんなところが君らしいって思えたんだ。」

君が彼女たちに怒るのも妬むのも、全てはフェアリーキングダムを守れなかった自責の念から来るものなのだろうからね。

それは裏を返せば、君がそれほどまでに故郷を愛していたってことだ。

故郷を愛するがゆえに、守れなかったことが悔しくて、故郷を守るために望んだ力が、この世界に現れたことが許せなかった。

必要以上にキュアシャインに当たってしまったのも、彼女がそんな力を扱えなかったからだろうか?」

ベリイの言葉に、キュアブレイズは徐々に沈んだ表情を浮かべていった。

そんな彼女に、ベリイはまるで兄が自分にしてくれた時のような、穏やかな笑みを浮

かべた。

「でももう、そんな風に自分を責めるのも周囲を妬むのは止めよう。

君の願いも苦しみも、全てを理解して受け止めてくれる人たちが、こんなにもいるんだから。」

その言葉にキュアブレイズは顔をあげ、自分とキュアプリズム、キュアシャイン、そして妖精たちの顔を一人ずつ見ていく。

それでも尚彼女は晴れない表情のまま、自分たちから目を反らした。

「でも……どうしてそんな私なんかのために……。」

キュアブレイズが口にした疑問は、これまで辛く当たってしまったことへの懺悔のよう聞こえた。

そんな彼女にキュアプリズムが答える。

「あなただけを助けるためではないわ。」

言いながらキュアプリズムはレモンへと視線を向ける。

レモンはキュアブレイズの元へ歩み寄りながら、彼女に話しかけた。

「レモンね、キュアプリズムと約束したんだ。

いつか風車小屋がある丘の上で、一緒に本を読んでお昼寝しようって。」

「レモン……。」

「ねえキュアブレイズ、その時はキュアブレイズも一緒にいこっ？」

レモンね、もう一度あの丘の上で、キュアブレイズと一緒に遊びたいんだ。」

レモンの邪気のない言葉に、キュアブレイズは目を潤ませながら俯く。

「キュアブレイズ、故郷を大切に思っているのは、あなただけじゃないのよ？」

レモンちゃんも、チェリーちゃんも、ベリイさんも、きつとアツプルさんも、

みんなずっとあなたと同じ思いを抱えて来たんだから。」

妖精たちにとつてもフェアリーキングダムは大切な故郷だ。

彼女たちも、故郷をダークネスから取り戻したいとずっと願ってきた。

そんな妖精たちの思いに気が付くことが出来なかったのか、あるいは心を閉ざす余り、目を背けてしまっていたのかは分からないが、俯くキュアブレイズの表情からは、妖精たちへの懺悔の色が見て取れた。

そして最後にチェリーがキュアブレイズの説得を試みる。

「ねえ、キュアブレイズ。」

もう誰もあなたのことを怒っていない、あなたの力になりたいてって思っているわ。

だから、もう意地を張るのを止めよ？

みんなで、フェアリーキングダムを取り戻しに行こうよ？

キュアシャインだって言ってたでしょ？

4つの光が集えば、大いなる奇跡が起きるって。」

その口調は意地っ張りな子どもを優しく諭すかのように穏やかで温かみに満ちていた。

「キュアブレイズ。」

「キュアブレイズ、お願い。」

そしてベリイとレモンもチェリーに続く。

この半年の間、ずっとキュアブレイズのことを案じて探し続けてきた3人は、これまでの思いを伝えるようにキュアブレイズに強く願いかける。

「……わかったわ。」

そして3人の思いが通じたのか、キュアブレイズはゆっくりと顔をあげて了承するのだった。

：

次回予告

「キュアブレイズ、チェリーちゃん、ベリイさん、レモンちゃん、そしてアップルさん。みんなの故郷を救うために、」

「行こう、フェアリーキングダムへ。」

「4つの光が集いし時、大いなる奇跡が訪れん。その伝説を信じて、私たちは戦う！」

次回！ホープライトプリキュア第12話！

「友達のために！旅立て！フェアリーキングダムへ！」

希望を胸に、がんばれ！わたし！

第12話

第12話・プロローグ

フェアリーキングダムを救いたい。

それぞれが胸に秘め、1つになった思いを打ち明けたとき、キュアブレイズは静かにその言葉を受け入れてくれた。

「本当にいいの？キュアブレイズ？」

キュアブレイズの言葉が嬉しかったチェリーは、改めて彼女に確認する。

「何度も言わせないでよ……。」

キュアブレイズはそっぽを向きながらぶっきらぼうに答えるが、その口調は責めてる風ではなく、語気にはこれまでのような力強さはなかった。

その疲労と安堵の入り混じった声に、チェリーの目頭が熱くなる。

やっぱり彼女はずっと1人で無理をしてきたのだ。

「うん……ありがとう、キュアブレイズ。」

これまで1人で戦い続けてくれたことに。私たちの言葉を受け入れてくれたことに。様々な思いを込めてチェリーはキュアブレイズにお礼を言う。

「大丈夫さ、キュアブレイズ。皆が協力してくれる。きつとうまくいくよ。」

「キュアブレイズ、もう1人で頑張らなくてもいいんだよ?」

ベリイとレモンがキュアブレイズに励ましの言葉をかける。

2人の言葉を聞いたキュアブレイズは遠慮がちに俯くも、その言葉を否定することはなかった。

「やつと素直になれたわね。キュアブレイズ。」

するとそんな様子をどこかで見ていたのか、物陰からアップルが姿を見せた。

「アップル……。」

「ホープライトプリキュアの皆さん、ありがとうございます。」

この子の、いいえ、私たちの故郷のために戦うことを決意してくれて。」

アップルのお礼に続き、チェリーとベリイはそれぞれ蛍たちに頭を下げる。

レモンもやや遅れて2人に倣ってお礼をした。

「別にええって、ウチらにとつてベリイたちは大切なパートナーやもん。」

困つてることがあれば、力になるのは当たり前やん。」

「私たちの力では心もとないかもしれないかもしれませんが、レモンちゃんとの約束のために、精いっぱい力を尽くします。」

「わつわたしも、ちからになれるように、いっしょうけんめいがんばります!」

プリキュアたちが三者三様の決意を述べる。

その言葉一つ一つがチェリーの希望となっていく。

(ありがとう虫、みんな。あなたたちがプリキュアで良かったわ……。)

チェリーは3人に心から感謝する。

優しさと強さを兼ね備えた彼女たちだからこそ、プリキュアに変身することが出来たのだと、改めて思うのだった。

「頼もしい限りね、ところでーっ聞きたいのだけど。」

だがここでアツプルの放った一言が思わぬ混乱をもたらす。

「なに?」

「あなたたち、どうやってフェアリーキングダムへ行くつもり?」

「……あ。」

キュアシャインとキュアスパークは間の抜けた声を出し、アツプルを除く妖精たちは口を開けてポカンとし、キュアプリズムだけが呆れたようにため息を吐くのだった。

第12話・Aパート

友達のために！旅立て！フェアリーキングダムへ！

アップルの質問を聞いて、蛭は軽はずみにフェアリーキングダムを救いに行こうと考えていた自分の浅はかさを恥じる。

彼女の言う通り、自分はフェアリーキングダムへの行き方を知らないのだ。

にも関わらず、どうやったら行けるのか？と言う至極単純な疑問を抱かずにいつきまで向かう気満々だったのだから、笑い話にもならない。

心なしか、自分たちを見るキュアブレイズの目が呆れているように見えた。

「あのねキュアスパーク。

志は結構だけど、それがわからないのじや意味がないでしょ。」

キュアプリズムが呆れた口調でキュアスパークだけを注意する。

やっぱりと言うか、キュアプリズムはこちらには注意を向けようとしなかったが、その言葉は十分に蛭の胸にも突き刺さった。

「そうゆうキュアプリズムはどうなのさ？」

「勿論知らないけど、聞くアテはあるし、大体の予想はついているわ。

私が呆れてるのは、そこまで考えもせずに漠然と行けるかもと思っていたことによ。」
そして再びキュアプリズムの言葉が胸に刺さる。

聞くアテと言うのは言わずもがな妖精たちとキュアブレイズのことだろう。

言われてみれば、今まで彼女たちにどうやってこちらの世界に来たのかを聞いたことがなかった。

逆に言えば、彼女たちが何らかの方法でこの世界に来たのだから、彼女たちと一緒にからフェアリーキングダムに行くことも可能だろうと漠然とどこかで思っていたので、疑問にも持たなかったのだ、と無理やり思って自分を納得させないと、恥ずかしさのあまり突つ伏してしまいそうだ。

キュアブレイズを、大切な友達である妖精たちを助けたいと思う余りと言えば聞こえはいいかもしれないが、気持ちばかりが先行して手段を考えていなかったなんて愚行もいいところである。

「アップルさん。質問を返すようですよすみませんが、あなたたちはどのようにしてこちらの世界へいらしたのですか？」

注意を終えたキュアプリズムは、改まってアップルに質問を返す。

敬語なのはぬいぐるみ然とした容姿ながら、彼女からは大人のオーラが感じ取れるか

らだろう。

「私たち妖精が、魔法のような力を使えることはご存じよね？」

その中の1つ、転送術を使ってこちらの世界に来たのよ。所謂ワープってやつね。」

「え……？」

だが突如放たれたワープと言う言葉に蛍とキュアスパークは言葉を失う。

「ふふつ、驚かせてごめんさい。さすがに私1人の力で出来たのではないわ。

妖精1人の力だとせいぜい隣の街まで飛べる程度のものよ。

チェリーとベリイとレモン、それから主にキュアブレイズのプリキュアとしての力があつたおかげで、遙か遠くのこの世界まで飛ぶことが出来たのよ。」

つまりプリキュアの力を借りて、世界を跨いでワープしてきたと言うことだ。

相も変わらず自分のことながら信じられない力だが、考えてみれば正反対の性質である絶望の闇を持つダークネスの行動隊長たちも忽然と姿を消していたか。

となれば性質こそ違えど同じように超常的な力を持つ希望の光さえあれば、小さな妖精たちに別の世界へと瞬間移動できるSF染みた力が使えると言うのもそう、驚くべきことじゃないのかもしれない。

……と、ここで蛍は今更ながら段々と現実離れしていく自分の環境に驚きを感じなくなっていることに逆に驚いた。

この街に引越してから非現実的な出来事が続き過ぎたせいとは言え、慣れとは恐ろしいものである。

「的外れなことを聞くかもしれないませんが、この世界へ来れたのは、この世界がフェアリーキングダムと似ているからですか？」

「え？」

キュアプリズムの意図しない質問に、蛍は困惑する。

「どうしてそう思ったのかしら？」

だがアップルは特に困惑する様子もなく、まるで答え合わせを促すような言葉を返す。

「前にレモンちゃんから聞きました。

妖精が人間の姿に変身するとき、自分が人間だったらどんな姿になるのかを想像して変身してるって。

と言うことは、妖精の魔法は想像力によって引き出されるものだと思います。

この世界へワープできたのは、あなたたちが想像する世界のイメージ、つまりフェアリーキングダムと、この世界のイメージが重なったからではないでしょうか？」

「ご名答、さすがキュアプリズムね。」

キュアプリズムの答えを聞いたアップルは即座に合格判定を下した。

その答えは蛭が聞いても納得できるものであり、それは故郷であるフェアリーキングダムであれば妖精たちはより明確にイメージできるので、ここから向かうことができると思うことも示している。

とは言え、ここまで正確に堪えを言い当てられるところを見ると、キュアプリズムの言う通り、彼女は妖精たちがこちらの世界に来た手段を元々知っていた、あるいは推測出来ていたようだ。

その上で彼女はフェアリーキングダムを救いたいと決断していたのだから、何も考えていなかった自分たちに苦言する（正確には要にだけだが）のも領ける話である。

さすが学年10位の頭腦の持ち主と、ここで蛭はアツプルの言葉が引つかかった。

アツプルは先ほど、さすがキュアプリズム、と褒めていたが、さすがとはどうゆうことだろう？

以前人間の姿で自己紹介をしているので、キュアプリズムの正体が雛子であることを知っているが、彼女が夢ノ宮中学校の在學生で、学年ベスト10に入るほどの成績優秀者であることまで知っていたのだろうか？

「でも、これから向かうフェアリーキングダムは、世界中に絶望の闇が満ちているわ。

希望の光が絶望の闇を浄化するように、絶望の闇は希望の光を打ち消す性質がある。

この世界に来た時と違って、キュアブレイズ1人の力では足りないかもしれない。」

蛭が抱いた疑問について考えがまとまるよりも先に、あちらへ向かうための話が進んでいく。

「ウチらの力が必要ってことやな。」

キュアスパークの答えを聞いたアツプルは満足げな笑みを浮かべる。

「フェアリーキングダムを救いたいと言う思いは私たちも一緒です。」

私たちの力が必要であれば存分に使ってください。」

キュアプリズムも一歩前に出て力強い言葉を告げる。

蛭も2人の間で首を縦に振り、肯定の意を示した。

「ありがとう、皆さん。」

ほら、キュアブレイズもお礼を言いなさい。」

アツプルにお礼を言うよう促されたキュアブレイズは、不貞腐れたような顔を浮かべてそっぽを向く。

アツプルはそんな彼女を慈しむように微笑む。

そんな2人の姿はまるで親子のようであり、蛭は思わず頬を緩めた。

こうしてみるとキュアブレイズも、自分たちの何ら変わらない普通の女の子なのかもしれない。

ソルダークを容易く浄化できるほどの力を持ち、たった1人でダークネスと戦い続け

てきたキュアブレイズと、自分を一緒にするなんて生意気かもしれないが。

「うっし！みんなで力を合わせて、必ずフェアリーキングダムを取り戻そうな！」

するとキュアスパークが高らかに宣言しながら片手を前に差し出した。

「ええっ！キュアブレイズのためにも、レモンちゃんたちのためにも！」

その意図を汲み取ったキュアプリズムがキュアスパークの手の上に自身の手を添える。

「だっだいじょうぶ！4にんそろえば、大いなる奇跡がおきるんだから！」

蛭も自分を奮い立たせながら、キュアプリズムの上に手を置いた。

「あなたたち……」

キュアブレイズは手を置くことはしなかったが、その視線はしっかりと蛭の手に向けられていた。

それは協力してくれる意思表示のように思えた。

4人のプリキュアの思いが一つになり、1つの目的のために結集することが、

「さて、そろそろいいかしらね？キュアシャイン。」

「なに？チェリー……ちゃん？」

できたところを見計らい、声をかけてきたチェリーの表情を見て蛭は戦慄する。

口元は微笑んでいるのに目が笑っていないし声も低い。

これまでの経験から螢はチェリーがものすごく怒っていることを悟った。「無茶な戦い方をするなんて、何度言ったらわかるのかしら？」

そして怒られる理由もすっかり予想通りだった。

だが今回の場合はキュアブレイズと接触するために行ったことなので大目に見て欲しい

「言っておきますけど、こうしてキュアブレイズとお話しできたからと言って許すつもりはありませんからね。」

かったがその思考は先に読まれてしまうし、もとい許すつもりもなかったようだ。

言葉づかいが敬語になっているところが逆に怖い。

螢は怯えながら、キュアプリズムなら味方になってくれるだろうと期待し助けを求めようという視線を送る。

「ごめんねキュアシャイン、でも今回ばかりはさすがに心臓に悪かったわ。

私、とても心配したし、それにほんのちよっぴりだけ怒っているのよ？

だからチェリーちゃん、存分に叱ってあげてちょうだい。」

「ええっ!？」

だがそんな一途な望みも絶たれてしまった。

それも彼女がほんのちよっぴりだけとは言え怒っていると言うあたり、よっぽど心配

をかけてしまっていたようだ。

そのことはとても申し訳なく思うが、結果としてキュアプリズムまでがチェリーの味方につくことになったので、もう蛭はみんなに心配をかけた贖罪の意も込めて現実を受け入れるしかなかった。

「わかったわ。」

さあキュアシャイン、キュアプリズムからもお許しが出たことだし、家に帰ったら覚悟しなさい。」

「うう．．．、あつあんまりこわくおこらないでね．．．。」

「いいえ、今日と言う今日は反省してもらいますからね。」

これから待ち受けるであろうチェリーからのキツイお叱りは、闇に覆われた世界を救いに行くことさえ覚悟できた蛭でさえ、聞くのが拒まれるほどであった。

「ホント、なんであなたみたいなのがプリキュアなのかしら．．．?」

そして1人の妖精からの説教に怯えるプリキュアの姿を見てキュアブレイズはそんな疑問を口にするのだった。

：

フェアリーキングダムへ向かう日は今週末の土曜日。

そしてどんな状況にせよ、この世界の時間で日曜日の夕方までには戻ること。

それがアツプルから出された条件だった。

この世界にもダークネスの魔の手が忍び寄っている以上、4人のプリキュアが長期間この世界を離れることは望ましくなく、何より各々の家族に心配をかけるわけにはいかないのだ。

だが休日の2日間だけなら、友達の家泊まりに行つたということにすることができるので、不在となつても心配をかけることはないだろう。

無論、絶望の闇に覆い尽くされた世界をたつたの2日で救えると思うほど樂觀視してはいないが、アツプルが言うには、この世界とフェアリーキングダムとの行き来はそう難しくはないそうだ。

半年前と違い、妖精たちはこの世界についても明確なイメージを持つことができるようになったので、こちらほ帰ることも容易くなったからだ。

だがフェアリーキングダムへの移動手段こそ明確になつたものの、救うための手段自体はまだわからない。

そのため、今週末は情報収集と偵察程度に留めておき、今後何度か行き来を繰り返しながら、世界を救う方法を模索することになったのだ。

それから数日が経ち、フェアリーキングダム出発を明日に控えた日の放課後、螢はお遣いのために帰ろうとしたとき、下駄箱の前に千歳の姿を見つけた。

「あつ……。」

決して親しくはなく、むしろ彼女の方は自分を嫌っている風だったが、一応顔を見知った間柄であるため声をかけようとする。

だが緊張で上手く声が出せないでいるところに千歳と目が合った。

鋭い眼差しで見据えられ、螢は少しだけ怯むもその視線を真っ直ぐに受け止めた。

だがこの場所に留まり、こちらが来ると同時に視線を合わせてきたということは、彼女は自分を待っていたのだろうか？

「一つ聞いてもいいかしら？」

その疑問に答えるかのように、千歳が声をかけてきた。

まだ緊張で声が出せずにいる螢は、頷いて返事をする。

「もしも、あなたの目の前で困っている人がいたら、あなたは手を差し伸べる？」

なぜ彼女がそんな質問を問いかけてくるのはわからないが、偶然にもそれは今の自分が置かれた状況を表していた。

故郷を救いたいと願うキュアブレイズを助けて。

蛍はそんな思いを改めて整理するために、その問いを真摯に受け止める。

「たす．．．けます。」

声を強張らせながらも、精いっぱいの勇気を出して答える。

「どうして？」

「たすけたいって、おもうから．．．。」

みすてたら．．．きつと、後悔するから．．．です。」

困っている人を助けて。

そう思う気持ちは自然と湧きあがってくるものなので、蛍にも説明できない。

だが自分が今やりたいと思うことをやらないでいると、後々に絶対に後悔するのだ。

ほんの小さな勇気を出すことすらできなかつたために、ずっと友達が作れず一人ぼつ

ちだつたことを、蛍は今でも後悔している。

だから小さな勇気を出せるようになった今、その時自分がやりたいと思つたことは実

践したい。

これは要からの受け売りだが、やらないで後悔するくらいなら、失敗してから後悔し

た方がいい。

「それじゃあ、もしも手を差し伸べた人が、助けてもらふことを拒んだとしたら、あなた

はどうするの?」

「え?」

だが続けて出された言葉に螢は目を丸くする。

つい数日前まで、螢たちはキュアブレイズに一度拒絶されているのだ。

彼女が質問を重ねることに、ますます今の状況と酷似していく。

それが偶然であるかどうか判断に迷いながらも、螢はその質問にも正直に答える。

「たす．．．けます。」

「どうして?」

「ほんとうにこまってるひとつって．．．じぶんからはあんまり、たすけてって、いえないとおもうんです．．．。」

それが．．．やさしいひとであればなおさら、だれにもメーワクかけたくなくて．．．ひとりでかかえちゃうんじゃないかって．．．おもうんです．．．。

だから．．．たとえ拒まれたとしても．．．そのひとがほんとうにこまっているのなら．．．わたしは、たすけてあげたいです．．．。」

かつての雛子がそうであったように、他ならぬ自分がそうであったように。

誰かに助けて欲しいと心の中で思っている、それを言葉にして伝えるのは難しいのだ。

だから蛍は、そんな人にも手を差し伸べることが出来る人間になりたい。

かつて要が、孤立していた雛子に手を差し伸べたように。

かつて雛子が、この街に越してきたばかりの自分を優しく見守ってくれたように。

それが蛍の意思であり、その思いをとづくに実現している友達が2人も側にいるのだ。

だから蛍は彼女たちのようにありたい、2人と一緒に並んで歩いていきたいから。

「そう・・・お人好しのね。」

その言葉だけを残し、千歳は帰っていった。

彼女が問いかけてきたことを不思議に思う蛍だったが、ここで1つの可能性に気づく。

(・・・もしかして。)

だが蛍は、その答えを敢えて内に秘め、買い物に出かけるために学校を後にするのだった。

：

蛭が買物のために商店街を訪れると、目の前にリリンが姿を見せた。

「ほたる。」

「リリンちゃん！」

満面の笑みを浮かべながら、蛭はリリンの元へ駆け寄り、そのまま2人で噴水広場まで向かう。

2人の間で自然と行われるようになった噴水広場でのお喋りは、蛭にとって何よりも大切な日常となっていた。

「それでね、きょう体育のときに、かなめちゃんがものすごくながいシユートをきめてね、」

今日学校であったこと、最近面白かったテレビ番組の内容、新しく食べたスイーツの感想。

いつものように取り止めのない会話を続けていく内に、蛭はあることに気が付いた。(そう言えば、さいきん、リリンちゃんと会うことがおおくなくなった気がする……)

4月の半ばに再会した時は、初めて会ったときから2週間ほど経った後だった。

それから2週から1週間に一度彼女と会っていたが、ゴールデンウィークを過ぎてからは数日置きに会っているのだ。

そして蛍はいっだってリリンに会いたいから、ほぼ毎日この噴水広場を訪れているので、リリンと会えるかは、彼女の都合に左右されることがほとんどだ。

(リリンちゃんも・・・わたしにあいたいって、おもつてくれるのかな・・・?)

そう考えるのは自惚れかもしれないが、そうであれば嬉しい。

会う頻度が増えたことで、これまでよりも会話に間が空くようになったが、そんな無言の間も、隣に彼女の存在を感じる事が出来るのであれば、それは蛍にとってかけがえない幸せな時間だった。

(あつ・・・)

そのことを改めて自覚した途端、蛍の心臓はこれまで以上に高鳴る。

「ほたる?どうかしたの?」

「えっ? なつなんでもないよ。」

声の上擦つてしまい、頬が自分でも赤くなっているのがわかるほどに熱くなっている。

だがリリンはこちらの反応を特に不審に思わず、そう、と一言返すだけだった。

「えと・・・わつわたし、そろそろかいものに行くね。」

「わかった。ねえほたる、明日もおはなしできる?」

するとリリンの方から次に会う約束の話が上がり、蛍は思わず息を飲む。

彼女から次の予定を持ち掛けてくることも、これまでになかったことだ。

やっぱり彼女も、自分と2人で過ごす時間を幸せと思ってくれているのだろうか。

そう思えば思うほど蛍の心臓は高鳴るが、答え聞く勇氣は、まだなかった。

「えつと、ごめんなさい。」

土曜日と日曜日は、りょうほうとも予定があつて・・・。」

「そつか・・・。」

蛍だつて本音を言えば、リリンと過ごせる時間が欲しいが、今週の休日はキュアブレイズを助けるためにフェアリーキングダムへ向かわなければならぬ。

日曜日までとはいえ、その日のいつ頃に帰ってくるかはわからないので、迂闊な口約束は出来ないのだ。

少しだけ声に元気がないリリンの様子を見るに、彼女は落ち込んでいるようだ。

だが失礼と思いながらも、会えないことを申し訳なく思うよりも、会えないと寂しく思ってくれたことへの喜びの方が大きかった。

「あつても、来週の月曜日だったら、じかんあるはずだよ？」

だからそのとき、またきようみたいに、ここでおはなししよ！」

「・・・うん、わかった。」

だから蛍は、精いっぱい明るい声をかけて彼女と次に会う約束をする。

するとリリンは僅かに微笑んでくれた。

その後はリリンと別れ、螢は一人商店街にあるスーパーへと向かう。

(・・・やっぱり、リリンちゃんはちがう・・・。

好きって気持ちも、感じられる幸せも、リリンちゃんだけ・・・『特別』なんだ・・・)
螢は彼女へ抱いている気持ちの変化を、少しずつ自覚し始めるのだった。

∴

翌朝、朝食を終えた螢は緊張をほぐすために、私室で二度三度、深呼吸を繰り返して
いた。

「ふう〜、よし。」

「螢、大丈夫？」

「うん、だいじょうぶ。さっ、いこつ、チェリーちゃん。」

以前雛子の家でパジャマパーティをした時に使った、少し大きめのバッグの中にチェリーを入れ、空気口を開けるために僅かにチャックの閉まりを緩める。

中に入っているのはチェリーだけ。親には泊まり会に行くと言われているので、親の目をごまかすために持参するだけであり、バッグそのものはフェアリーキングダムには持って行かないのだ。

「それじゃあ、おかーさん、おとーさん。行ってきます。」

「行ってらっしゃい、蛭。」

「お泊まり会、楽しんでくるんだぞ。」

何も知らない両親は、これから自分が遙か遠くの世界へ行くなんて夢にも思っていないだろう。

そのいつもと変わらない優しい声が、蛭の胸に温かく染みこんでいく。

自分は嘘をついている。両親は、自分がこれから友達と一緒に楽しい1日を過ごすのだと信じている。

それならばこちらに出来ることは、その両親の安堵を本当にすることだ。

絶望の闇に覆い尽くされたフェアリーキングダムには、どんな危険が待ち構えているかはわからない。

それでも何があるうとも、必ず明日までに両親の元へ帰ってくるのだ。

「うん！ たのしんでくるね！」

だから蛭もまた、これまでと変わらない返事をして家を出るのだった。

商店街の噴水広場で要と雛子と合流した蛭は、そのままアップルに指定された、夢ノ宮港湾へと向かった。

港湾までは、商店街からバスで約10分。

余談だが雛子の話によれば、湾港からさらにバスで5分ほどかかる先には夢ノ宮港町があり、季節ごとの旬な海の幸が新鮮のまま味わえる他、海水浴場もあるそうだ。

指定された場所は、船の停留所から離れた倉庫の並ぶ広場だ。

蛭たちはその場所まで辿りつき、人気のない倉庫と倉庫の合間に身を潜める。

念のため左右を確認するが人の姿は見えず心配もない。

3人は互いに顔を合わせるのを合図に、一斉に変身する。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

「世界を照らす、希望の光！キュアシャイン！」

「世界を駆ける、蒼き雷光！キュアスパーク！」

「世界を包む、水晶の輝き！キュアプリズム！」

「みんな、来てくれたわね。」

すると蛭たちが変身を終えたタイミングを見計らい、キュアブレイズとアップルが姿

を見せた。

「それじゃあ、さっそくで悪いけどこのままフェアリーキングダムへと向かうわ。

チエリー、ベリイ、レモン、力を貸して。」

アツプルたち4人の妖精は四角形の頂点を結ぶような位置につく。

蛭たちはその間に、持ってきたバッグを近くに置かれていたドラム缶の裏へと隠した。

人通りが一切ないのであろうこの倉庫裏の道は当然掃除など行き届いておらず、蜘蛛の巣がうっすらと見えるようなところにお気に入りのバッグを置いていくのは勇気がいるが、見つかって持つていかれるか処分されるよりはマシだ。

そしてアツプルたちによって形作られた四角の陣の中に、蛭たちは足を踏み入れる。

「みんな、力を借りるわよ。

チエリー、ベリイ、レモン、フェアリーキングダムをイメージして。」

アツプルの合図とともに、四角の陣から光が迸り蛭の身体を包み込んでいく。

そして力が吸われていくような感覚が走る。

蛭はまだ力の使い方を知らないはずなのに、力の吸われていく感覚があるのは妙な気分だったが、この姿に変身する際にも希望の光が使われているはずであり、自分の身体能力が超人的に強化されるのも希望の光の作用によるものだ。

つまり蛍は無意識化で希望の光を常に身に纏っているのである。

「ふわっ。」

すると足元から迸る光が天へと登り始めた。

眩しさのあまり蛍は目を瞑る。

目を瞑りながらも感じられる、温かな光に身を包まれながら、やがて蛍の身に奇妙な浮遊感が訪れるのだった。

「キュアシャイン、キュアシャイン。」

キュアプリズムの呼び声が聞こえ、蛍は目を開けた。

足元を見ると視界いっぱい原っぱが拡がっているが、蛍はすぐにその光景が異質であることに気づく。

原っぱに生えている草には、一切の色が見られないのだ。

「え．．．？」

そして顔をあげ、目の前に広がる景色を見て言葉を失う。

空は太陽どころか雲一つ見えず、一面を黒く塗りつぶされている。

少し視線を下げた先には、ミニチュアのように街が小さく映っており、石垣で作られ

た街道に煉瓦の家が立ち並ぶその様相は、蛭たちの世界で言うところの、ヨーロッパの古い街並みを彷彿させた。

だが歴史の教科書で見たことがあるような風景は、街に並び立つ家も街道も、全てが色を失っていた。

唯一目に映る色は、辺り一面を染め上げる黒のみ。

そして道中には人や妖精の姿も確認できるが、壁にもたれかかり、路上で膝を抱え、歩いていても焦点の定まらぬ目を泳がせながら街を徘徊しているだけだった。

何よりも恐ろしいのは、どれだけ耳を澄ましても自分たちの息づかい以外の音が聞こえないのだ。

これがダークネスによって侵略された世界の成れの果てだと、目を背けたくなるような惨状が、蛭にこの世界がフェアリーキングダムであることを強く認識させる。

同時に蛭は身を震わせる。

今まさに世界を絶望の闇で満たさんと、リリスを始めとするダークネスの行動隊長たちが、こちらの世界に攻め込んできているのだ。

つまり目の前に広がる光景は、故郷の未来の姿になるかもしれない。

そう思うと怖くて仕方なかった。

「ようこそ、私たちの世界、フェアリーキングダムへ。」

アツプルが淡々とした声で告げる。

「ここが、フェアリーキングダム……。」

「ダークネスが侵攻を終えた世界……。」

キュアスパークとキュアプリズムも、目の前に広がる光景にショックを隠せないでいる。

「そうよ、これがダークネスとの戦いに敗れ、音も光も、一切の希望を失い、絶望の闇に飲み込まれた世界よ。」

キュアブレイズが声を僅かに震わせながらそう告げる。

蛍は試しに闇の力を探知してみた。

すると反応は蛍の周辺からのみならず、地平線の果てはおろか、空を覆い尽くす黒からも感じ取れた。

この世界の全てが絶望の闇に覆われていると言うことを改めて思い知らされる。「最初に言っておくけど、この世界にいる間は変身を解除してはダメよ。」

絶望の闇が世界中に満ちていると言うことは、世界そのものが闇の牢獄に囚われているのよ。

この意味、プリキュアとして覚醒したあなたたちならわかるわよね？」

するとキュアブレイズが自分たちを試すように忠告と問いかけを投げてきた。

「闇の牢獄は、囚われた人の五感を全て奪う。

でもウチらはその中で五感を失わずに行動できているってことは、プリキュアに変身している間は、闇の牢獄の影響を受けないってことやろ？」

「それに絶望の闇が満ちているこの世界では、闇の牢獄の強度も最大限に高められている。

プリキュアに変身して希望の光を強く持つておかないと、例えば私たちであつても絶望の声が聞こえてしまうかもしれないってことね。」

キュアブレイズの問いかけに対して、キュアスパークとキュアプリズムがそれぞれの答えを繋げて回答する。

「ご名答、だから変身を解除してはダメよ？」

2人の回答をアツプルが繋ぐが、蛭はそれを聞いて強い不安に苛まれた。

キュアスパークとキュアプリズムと異なり、自分は一度闇の牢獄に囚われたことがあるほど、心が弱い人間だ。

しかも未だに希望の光をものに出来ていない。

この絶望の闇に満ちた世界で、心身ともに弱い自分が希望の光を失わずにいられるだろうか？

かつて闇の牢獄に囚われ五感を全て失い、頭の中に絶望の声が響き続けたときの恐怖

を思い出し、蛍は防衛本能を働かせるかのように、自分の身を強く抱きしめる。

ここに来てからまだほんの僅かなのに、既に蛍の心と体に恐怖が染みこんでくる。

「怖気づいたかしら？」

そんな蛍に、キュアブレイズが声をかけてきた。

蛍は慌てて勇気のおまじないをする。

キュアブレイズを助けるためにこの世界に来たと言うのに怯えてばかりでは彼女に申し訳が立たない。

すると隣に立つキュアプリズムが、自分の肩に優しく手を添えてくれた。

彼女の持つ温かな光が、蛍から恐怖の感情を祓ってくれる。

そうだ、今の自分にはこんなにも頼りになつて優しい友達が、仲間がいるのだ。

リリンから教えてもらったおまじないもある。

一人で怖がることなんてない、怖ければみんなを頼ればいいのだ。

「だい……じょうぶ、です。」

蛍はたどたどしい言葉ながらもキュアブレイズにそう伝える。

「そう、言っておくけど、下手な絶望に引つ張られて、希望を失うことは許さないからね。」

キュアブレイズはいつもと変わらず厳しい言葉をかけるが、それは、『決して絶望に負

けてはダメ、希望を信じて』というエールのようにも聞こえた。

「うん、ありがとう。」

だから蛍はそれを励ますための言葉と受け取り、キュアブレイズに礼を言う。

キュアブレイズは一度だけこちらに目を合わせてくれたが、無表情でそつぽを向いた。

それが凶星からくる照れ隠しなのか、的外れなので呆れたのかはわからないが、少なくとも今は、キュアブレイズを助けるためにも、自分の弱さに負けるわけにはいかないと思うのだった。

：

モノクロの世界。

かの地へ向かおうとしたリリスは、直前で蛍の言葉を思い出し足を止める。

「そっか、今日と明日、あの子はいないんだっただわ。」

ここ最近、かの地に足を運ぶ頻度を増やしていたので、噴水広場に向かえばほぼ必ず

蛭に会うことができた。

かつて彼女は毎日噴水広場で待っていると言っていたが、まさか本当に実践していたとは。

あの子は自分に会いたい一心で、毎日噴水広場に足げに通い続けていたのだ。

そう思った時、リリスは蛭と言う少女が少しだけ分からなくなってきた。

「あの子にとってあたしは．．．大切な、トモダチ。」

だからリリスは蛭から盲目的な信頼を得ることができ、それを隠れ蓑にして蛭を利用することができた。

だが蛭から安らぎを得ることが出来てから、それ以外の目的がリリスの中に芽生えてきた。

「それじゃあ、あたしにとってのあの子は．．．なに？」

そしてそんなことさえ思うようになったのだ。

あの子は自分にとってただの道具。

それ以上でも以下でもなく、それにあの子がこちらのことをどう思うかは任務遂行の上で重要だが、自分があの子のことをどう思おうかなんて意味はないはずだ。

それなのにリリスは蛭に、道具とは違う意味を持たせようとしている。

その理由はリリス自身にも分からなかったが、確かなことは今のリリスは、蛭に会え

ないとわかったことで、得も言われぬ空虚な感覚にとらわれているということだ。

蛭に会う以外に満たすことの出来ない、不可思議な空白がリリスの中に生まれる。

「ほたる……。」

来週を迎えるまで会うことの叶わないあの子の名を口にする。

自分は彼女に会いたいと願っているのだろうか？なぜ？

聞こえるかね、リリス。

今すぐ、玉座の間まで来たまえ。

すると突如、頭の中にアモンの声が聞こえた。

闇の力を使った交信術だ。

相手の闇の力さえ探知出来れば、頭の中で思い描いた言葉を、距離を問わず相手の脳に直接伝えることが出来る。

リリスは頭を切り替え、額に手を当てアモンへの返事を思い描いた。

額に手を当てるといふ仕草自体は、特に意味があるわけではないが、リリスにとっては相手の頭に声を直接伝えると言うのを最もイメージしやすいのだ。

はい、アモン様。すぐに向かいます。

滅多に研究室から出てこず、かの地の侵攻も行動隊長に一任しているアモンが、交信術を用いてまでこちらを呼び出すなんて珍しいことだ。

それも『今すぐ』と言葉を添える当たり、よほど不測の事態が起きたのだろう。恐らくはサブナックとダンタリアにも同じ指示が伝わっているはず。

リリスは身を翻し、即座に玉座の間へと向かうのだった。

リリスが玉座の間を訪れると、既にサブナックとダンタリアの姿があり、玉座にはアモンが腰掛けていた。

「来たか、リリス。」

「アモン様、一体何があつたのですか？」

リリスの言葉にサブナックとダンタリアも何かを尋ねるように見る。

この様子だと、2人にもまだ事は知らされてはいないようだ。

「かの地にいる4人のプリキュアが、フェアリーキングダムへと向かったようだ。」

「えっ？」

アモンの言葉にリリスは驚く。

やつらはなぜ今になって、世界の全域を闇に飲みこまれたフェアリーキングダムへ出向いたのだ？

(まさか、フェアリーキングダムを解放するつもり？)

そんなことは不可能だと、断言することが出来る。

今やあの世界に住まう全ての人々が絶望の闇を生み出しており、闇の牢獄の強度は最大限まで高められている。

それはダークネスにとって幾つもの有利な状況を作り出すのだ。

あの世界では、やつらはソルダーク1体まともに相手することも出来ないだろう。

そもそも世界中の全ての人間が絶望の闇を生み出していると言うことは、その数だけソルダークがいると言うことになる。

単純な数に圧倒的な差がついているのだ。

いくらやつらが伝説の戦士プリキユアであろうと、たったの4人の希望の光が、世界中の絶望の闇に対抗できるはずがないのだ。

「バカな奴らだな。自ら不利な局面に足を突っ込むとは。」

「フェアリーキングダムの解放が目的なのだろう。」

そんなこと出来るはずもないと言うのに。」

サブナックとダンタリアも、リリスと同じことを考え4人のプリキュアを嘲笑する。リリスも『3人』のプリキュアに対しては同じように嘲笑したいところだ。

だが『1人』は違う。

「キュアシャイン……。」

やつらには方に一つの勝ち目もない。

フェアリーキングダムを覆う闇に敗れ希望を失い、やつらも世界に満ちる絶望の一部へと堕ちていくだろう。

だがこのままではキュアシャインまでもが自分の知らぬところで墮とされてしまう。それだけは絶対に許さない。

サブナックとダンタリア、そしてアモンにも奪われたくないのに、やつにとつて何の因果もない遙か遠くの世界なんかにはキュアシャインを奪われてたまるものか。

「アモン様！」

是非あたしを、フェアリーキングダムへと向かわせてください！」

「リリス？」

リリスの突然の申し出をサブナック訝しみ、ダンタリアはその細い目でリリスを興味深そうに覗きこむ。

だがリリスは2人に構わず、アモンに懇願する。

「あたしにはやつらを倒す任務を任されているはずです！

闇へと堕ちたあの世界でなら、あたしは力を存分に発揮できます!!

ですからお願いです！アモン様！

キュアシャインの、プリキュア討滅のために！

あたしをフェアリーキングダムへと向かわせてください！」

リリスは、咄嗟に出てしまったキュアシャインと言う言葉をプリキュアへと訂正してアモンに呼びかける。

「いいだろう。」

アンドラスへは私が話をつけておく。まずはやつの元へ向かうと良い。」

だがアモンはその言葉の変移について特に問い詰めることなく、リリスの申し出を言葉一つで了承した。

これでフェアリーキングダムまでキュアシャインを追うことができる。

そう思った矢先、久しく抱かなかったキュアシャインへの憎しみが再び込み上げてきた。

やがてそれは怒りへと変わって身を焦がしていく。

怒り、屈辱、憎悪、そしてキュアシャインをこの手で墮とせることへの悦び。

様々な『感情』が、リリスの内側から湧き上がり渦を巻いて黒い衝動へと変わってい

く。

それは瞬く間に、蛍から得られた安らぎを塗り潰していった。

（キュアシャイン……絶対に逃がさないわ。）

あなたは……あたしだけのものなのだから！

『1人』の少女から得られた感情が、リリスの全てを支配していった。

：

上を見上げて、陽の光も星の光もなく、雲の一つさえ見当たらない。

丘の下を見下ろし街に目を向けると、街灯らしきランプがあちこちに見受けられたが、一切光が灯されていない。

そして後ろを振り返ると、そこには大きな風車小屋があった。

それを見た雛子は、肩に乗っているレモンとの約束を思い出し心を痛める。

目の前に見える景色はきつと、レモンが自分に見せたかったものだ。

だがそれは残酷にも、ダークネスによってモノクロに塗り潰されてしまったのだ。

「そろそろ移動するわよ。」

この世界の時間は半年前から止まっているけど、こうしている間も、あなたたちの世界の時間は進み続けているわ。

タイムリミットの明日の夕刻までには帰らなければならないのだから、僅かな時間も無駄にはできないわよ。」

キュアブレイズの呼びかけに雛子を含めた全員が頷く。

闇の牢獄の中では、時間が停止してしまうことは以前妖精たちから聞いており、時計などの時間を測る装置も機能を停止してしまうらしい。

そのためこちらの世界に時計を持ち運ぶことも出来ず、元の世界の時間はアップルが魔法の力で身体感覚で時間を計測するタイマー（本人曰く体内時計に近いとのこと）で測ってくれるとのことなので、彼女を介して知ることができるようだ。

たまたまパートナーの妖精たちが、人間に変身する以外の能力を見せる機会がなかっただけなのか、本人が多芸なのかはわからないが、いずれにしてもアップルの力は多様に富んでいた。

さすが妖精たちのリーダー格である。

「キュアプリズム。」

するとレモンが肩に乗ったままこちらの顔を覗きこんだ。

しばしの間、言おうか躊躇う素振りを見せたが、やがて静かに告げる。

「また、ここに来ようね。」

その言葉の意味は、言われずともわかっていた。

レモンの見せたい景色は、こんな昼か夜かもわからない、暗闇と静寂に満ちたものではない。

いつかフェアリーキングダムを闇から救い出したとき、ここから見えるのどかなで平和な、レモンの大好きな景色を見せたいのだ。

そして自分も見てみたい。

大好きな本の世界を彷彿させる、フェアリーキングダムの本来の景色を。

「うん、また必ずここに来ようね。」

レモンに微笑みかけると、彼女は安堵したかのような笑顔を見せてくれた。

「それで、まずはどこに行ってみるん？」

「そうね、城下街の様子も気になるところだから、まずは……。」

キュアスパークとアップルが今後の行動について談義しているとき、

「つ!?闇の波動が3体!こっちに向かってくるわ!」

チェリーの警告と同時に、4人のプリキュアは一斉に身構えた。

力の気配の方へと向くと、風車小屋の先にある森の中から3体のソルダークが同時に

姿を現した。

「ガアアアアアアアア!!」

こちらの世界で現れる個体と同じ姿で、甲高い叫び声をあげてくる。

だがソルダークからは、これまで感じたことのない異様な雰囲気か漂っていった。

「なに・・・?このソルダーク。」

困惑する雛子を余所に、キュアスパークが拳に電撃を纏って突撃する。

「はああっ!!」

力強い叫びとともにソルダークに拳を突き立て地へとめり込ませる。

続いて飛び掛かるソルダークに裏拳をお見舞いし、後方へと吹き飛ばした。

その斜線上にはもう1体のソルダークの姿もあり、キュアスパークに吹き飛ばされたソルダークが、後方に映るソルダークに直撃し、2体とも地面へと倒れ伏す。

だがソルダークたちは平然と立ち上がり、再びこちらに襲い掛かって来た。

「攻撃が効いていない?」

プリキュアの中で最も力に優れたキュアスパークの打撃を受けてもまるで堪えた様子がない。

かつてキュアスパークの浄化技を防いだ個体もいたが、あの時は能力によって彼女の力を遮断させたに過ぎない。

直撃を受けてなお、ダメージを受けたことのないソルダークは初めてだ。

ここにいる3体が格別に強いのであれば話は別だが、雛子は自分の感じた違和感と、この世界の現状を照らし合わせて1つの結論を導き出す。

もしこの世界に満ちる絶望の闇が、ソルダークに際限なく力を与えているとしたら？
それがキュアスパークから受けたダメージを急速に回復しているとしたら？

「このっ、」

「待ってキュアスパーク！ソルダークの様子がおかしいわ！

あなたの攻撃を受けてもまるで堪えていないのよ！」

キュアスパーク再び臨戦態勢に入ったので、雛子はそれを静止する。

雛子の憶測が正しければ、この世界のソルダーク相手には勝ち目がないと言うことになる。

「だったら、浄化技で！」

だが目の前の脅威を放置できないと踏んだのか、キュアスパークがスパークバトンを呼び寄せようと、右手を横に差し出す。

「まって！じょうかわぎをつかったって、たおせるソルダークは1体だけだよ！」

ソルダークはまだ2体もいるし、じょうかわぎをつかってキュアスパークがつかれ

ちやうのはキケンだよ！」

今度はキュアシャインから忠告がかかる。

この場だけでも3体ものソルダークがいるのだ。

それら全てがキュアスパークの攻撃を受け付けないほどの強さを持っている。

それに仮にこの場にいる4人の内3人が浄化技を使いこの場を凌いだとしても、絶望の闇が満ちているこの世界ではどこにソルダークが潜んでいるかわからない。

今ここで力を出し尽くしてしまうのはあまりにもリスクが高すぎるのだ。

「じゃあどうすれば！」

「いったんこの場を退くわよ。」

ソルダークの姿が見えなくなるところまで逃げなさい。」

すると1人落ち着いた様子のキュアブレイズが撤退を呼びかける。

雛子はその様子から、彼女はこの世界のソルダークの特性について知っているようにみえるが、今はそのことを考えるよりも当面の危機を回避する方が先だ。

4人のプリキュアは各々のパートナーを抱え、全速力でこの場を離脱していった。

雛子たちは風車小屋を離れて森の中に飛び込み、後方から迫るソルダークを振り切る

ことのみを考えて突き進んでいった。

やがてソルダークの姿も叫び声も聞こえなくなったところでキュアブレイズが足を止め、先頭を切っていたキュアスパークも、後方にいる自分とキュアシャインも足を止めた。

「姿は見えなくなったわね。」

やつらも希望の光を探知することができから、今のうちに力を隠して。」

キュアブレイズの言葉通り雛子とキュアスパークは力を抑えて気配を消す。

今までやったことはなかったが、希望の光は自身の思いの力。

理屈よりも気持ちでコントロールするものなので、力の使い方さえわかっていたら抑えるのは造作もなかった。

と、ここで雛子はあることを思い出してキュアシャインの方へと向く。

「あつあれ？えと、ちからをおさえるって、どうやって？」

案の定、力の使い方方をまだ知らないキュアシャインだけが上手く力を隠せないでいた。

あたふたする姿も可愛いが、このままでは彼女の力を探知してまたソルダークたちが駆け付けてしまう。

「キュアシャイン、急いで。」

キュアブレイズが急かすが、それが返ってキュアシャインを動揺させてしまい、彼女の気配は増減を繰り返していた。

そこで雛子はキュアシャインの両肩に手を置き、彼女の力への干渉を試みる。

「ふえ？キュアプリズム？」

「落ち着いてキュアシャイン、ゆっくりと深呼吸して、あとは私で抑えてみるから。」

言われるがままにキュアシャインは深呼吸をし、少しずつ落ち着きを取り戻していった。

その間に雛子はキュアシャインの力に干渉し、自分の力で抑え込んでみる。

今度は逆に自分の力が探知されないかと危惧したが、彼女に干渉した力は上手く中和され、お互いに力を抑え込むことに成功した。

「これでよしっと。」

「あっありがと、キュアプリズム。」

「どういたしまして。」

でもこのままでいる必要があるから、窮屈かもしれないけど我慢してね。」

力の干渉が出来るのは、直接触れている間だけだ。

つまりソルダークから隠れる間は、キュアシャインの身体に触れていなければならぬ。

「ううん、だいじょうぶ。」

わたしこそ、キュアプリズムにメーワクかけてごめんね・・・。」

「迷惑なんかじゃないわよ。だから気にしないで。」

励ましの言葉をかけてみるも、キュアシャインは浮かない顔だった。

迷惑どころか四六時中キュアシャインに触れることができるなんて自分にとってはご褒美以外の何物でもなく、さらに本音を言えば肩に手を置くのだけでなく、手を繋いだりギュッと抱きしめたりしたいくらいだが、さすがにそんな私欲を『今は』グツと堪える。

「全く、いつまで仲間に負担をかければ気が済むのよ。」

そんなキュアシャインの様子に、キュアブレイズがいつものように厳しい声をかけてきた。

「キュアブレイズ、お願いだから説教は元の世界に戻ってからにして。」

キュアシャインに対する厳しい物言いを逐一非難するつもりはないが、今は状況が状況だ。

絶望の闇に満ちたこの世界では、プリキュアであっても希望を強く持たなければ絶望へと引きずりこまれてしまう。

特に人一倍、感情の振れ幅が大きいキュアシャインは、些細な不安や悩みがきつかけ

になりかねない。

キュアブレイズもそのことを悟ってくれたのか、それ以上の追及はしなかった。

「それよりもキュアブレイズ。

この世界のソルダークは、大気に満ちた絶望の闇を取り込み力に変えることができるの？」

「ええ、でも百聞は一見に如かずって言葉が、あなたたちの世界にあるでしょ？」

あなたたちに伝えなかったのはそうゆうことよ。

別に嫌がらせとかではないわ。

特にそこにいるキュアスパークは、例えば忠告したとしても自分の目で確かめるために突っ込んでいったでしょうし。」

「むっ。」

キュアスパークはムツとしながらも反論しない。

確かにこの悪友の性格を鑑みれば、先に忠告を受けたとしても実際に攻撃が通じない局面に会うまでは戦いに出ていただろう。

知つていながら敢えて伝えなかったのも納得がいく。自分でもそうしていた。

しかしこうも思考や行動を的確に見抜いてくる当たり、彼女の洞察力は相当のものだ。

加えてこちらのことを良く見ていたのだろう。

キュアシャインは彼女がずっと見守ってくれていたと言っていたが、今になって雛子もそう思えるようになっていた。

「グオオオオオオオ!!」

すると遠くからソルダークの叫び声が聞こえて来た。

「いついまの!」

「キュアシャイン、静かに。」

キュアブレイズに呼び止められ、キュアシャインは口元を両手で抑える。可愛い。

叫び声は2つ、3つと続き、それらは全て別の方向から響き渡る。

「世界中の人たちが闇の牢獄に囚われているってことは、」

「この世界中にソルダークが蠢いているってことね。」

「その通りよ。」

きつとこうして気配を消したとしても、見つかるのは時間の問題。

いずれは交戦は避けて通れないだろうけど、最低限の力だけを使ってあしらったらまた逃げるわよ。」

攻撃をしても通じない。

浄化したところで1体2体を消したところでまるで状況は変わらない。

こちらに今できることは、逃げ出せるだけの隙を作りまた見つからないところに逃げるだけだ。

これから始まるソルダークとのイタチごっこに一沫の不安を覚えながらも、雛子は決して絶望に飲まれまいと希望を強く持ったのだった。

第12話・Bパート

リリスがアモンに指定された場所へと転送すると、そこは自分たちが拠点としているモノクロの世界と酷似した場所だった。

足元には縦に長い絨毯が敷かれており、壁には冠を被った王の壁画が飾られている。

そして絨毯の先には金属製の椅子があり、そこにはアモンと同じ黒いフードを被った男の姿があった。

「久しぶりだな、リリス。」

男に声をかけられ、リリスはその場に膝をつく。

「はい、アンドラス様。」

男の名はアンドラス。

かつてフェアリーキングダム侵攻部隊の指揮官だった男だ。

この世界が闇へと堕ちた後は、別の世界の侵略を担っていたが、プリキュアたちが再びこの世界に現れたと言う話をアモンから聞き、わざわざこの地まで出向いたようだ。

「貴様がこの世界を離れてから半年ほど経っているか。」

「どうだい？ 久しく訪れたこの世界は？」

そしてリリスはほんの一時だけ、この男の下で戦っていたことがある。

侵略が佳境を迎えた頃に、アンドラス配下の行動隊長であるハルフアスとマルファスがキュアブレイズに倒されたのだ。

だが既にフェアリーキングダム of 9割ほどが闇に覆われた状況は、行動隊長を失ったところで覆せるものでもなかったたので、当時まだ『創られた』ばかりで実戦経験のなかったリリスが、試験運用を兼ねてこの男の下へ送り込まれたのだ。

その後、フェアリーキングダム of 制圧が完了し、リリスは本来の主であるアモンの下へ配属されることになる。

だが行動隊長であるリリスが、初陣を飾ったこの地に対して何か思い入れを抱くわけもなく、半年ぶりに訪れたと言われても、そもそも暦を数える習慣など持ち合わせていないので、アンドラスに言われるまで知らなかった。

その程度でしかないこの世界についての感想を求められても、答えなんて持ち合わせているはずがない。

「別に、何とも思いません。」

「ふっ、行動隊長らしいつまらん答えだな。」

だったら最初から聞くな、と心中で毒づく。

そもそもつまらないと言われても、自分たちをこのように『創った』のは他ならぬア

ンドラスたちだと言うのに。

「ならばなぜ、わざわざこの地に来た？」

「この地にプリキュアたちが来たとの報告をアモン様より受けたからです。

やつらを倒す任をあたしはアモン様より任されております。

行動隊長として、主の命に従いここに来たまでです。」

本当はキュアシャインを奪われたくないからここに来たのだが、それを言っても余計な不信感を与えるだけだろう

建前の方がよっぽど理由として納得できるものなので、リリースは敢えて自分の本心を隠す。

「妙な話だな。

やつらがこの地に来たところで自滅するのが関の山。

その程度のこととも判断できない貴様ではないだろう。

なぜプリキュアを追う必要がある？」

「主の命と、言つたはずですよ。

どうしても知りたくば、アモン様に直接伺つてください。」

リリースはあくまでも白を切る。

行動隊長が『感情』任せの行動を取ったところでこの男に理解できるものではないし、

理解されたくもない。

何よりもこの気持ちを、キュアシャイン以外の第三者に打ち明けるつもりなんてないのだ。

「まあいい、だがやつらを始末するのであれば少し様子を見させてもらおうぞ。」

「なぜですか？」

「やつらの考えそうなことなど、お見通しと言うだけだ。」

この地でやつらを屠るなら、それに相応しい最高の舞台を用意してやろうではないか。」

言葉だけを聞けば勝利を確信した慢心とも取れるが、アンドラスは用意周到な男だ。

やつらを倒すためにより確実な方法を取るつもりなのだろう。

だが、キュアシャインの潜在的な力を知るリリスからすれば、悠長に構えているようにしか見えなかった。

「お言葉ですがアンドラス様、あなたはやつらの力を侮っております。」

そのようなお戯れをなされるよりも、今すぐにでもやつらを殲滅しに行った方が、

「随分と生意気だなリリス。」

行動隊長の身でありながら我に意見するつもりか？」

アンドラスの言葉にリリスは息を飲む。

確かに既に彼の配下ではないとはいえ、立場を鑑みればアンドラスに意見するなど、行動隊長にあるまじき行いだ。

それでも、キュアシャインを相手にこれ以上の失態を重ねるわけにもいかないリリスは、アンドラスに食らいつく。

「ですが、キュアシャインの持つ潜在的な力は計り知れないものがあります。

せめてやつだけでも今すぐに……」

「なるほど、それが貴様のお目当てか。」

「っ!？」

だが自分の迂闊な発言でアンドラスに真意を悟られてしまう。

「行動隊長が一人の人間に執着するか。

まあ、それも良いだろう。

だがやつらへの攻撃は私の指示を待ってもらおうぞ。

案ずるな、そのキュアシャインとやらは貴様にくれてやる。」

「……了解しました。」

結局、行動隊長であるリリスに意見する権限はなく、アンドラスの目論見通りに事を運ぶことになった。

リリスは納得していないが、キュアシャインは譲渡してもらえることになったので、

ここは堪える。

これ以上、アンドラスの反感を買ってしまったては、この世界から追い返されてしまうかもしれない。

胸に燻るキュアアシャインへの憎しみを抑えながら、リリスはアンドラスからの指示を待ち続けるのだった。

：

モノクロの世界。

ダンタリアが広間を訪れると、壁にもたれかかるサブナツクの姿があった。

「おや？君はかの地には出向かないのかい？」

4人のプリキュアがフェアリーキングダムへ向かった今、かの地を落とす絶好のチャンスでは？」

ダンタリアとサブナツクがアンドラスより受けた命は、かの地に絶望の闇を撒き散らすこと

最大の障害となるプリキュアが全員不在となつていたのであれば、これを好機と侵攻するのが、本来行動隊長として取るべき行動だ。

「ふん、やつらのいない間を狙つて何が面白い。」

だがサブナックはそれよりも武闘派としての拘りを優先した。

分かり切つたことであるが、そんな行動隊長らしかぬ拘りを前にダンタリアは肩をすくめる。

「やれやれ、まっ君ならそうゆうと思つたよ。」

「そういう貴様は出向かんのか？」

「生憎、僕は素材の経過観察中だね。行きたくとも今は動けないのさ。」

白々しい、と言わんばかりにサブナックは鼻を鳴らす。

サブナックと同じく、ダンタリアもかの地に降りるつもりは無かつた。

素材の準備が万端でないのは確かだが、今は任務よりも気がかりとなることがあるからだ。

「リリスは、なぜわざわざフェアリーキングダムへ出向いたのだろうな？」

するとサブナックが、まさにダンタリアが気がかりとなつて口にする。

「お姫様のことが気になるかい？」

行動隊長が他人のことを気にかけるものか。と言外に含ませてサブナックに言い放

つ。

「これ以上、やつが乱れるようなことがあれば、作戦の遂行に支障がでるだろ。」

サブナツクは眉一つ動かさず、動じた様子もなく答えるも、その言葉が建前であることは直感的に理解できた。

一見すると行動隊長らしい何の感情もない返答のように見えるが、自覚があるのなのか、本音を隠して建て前を述べることで自体が、既にらしからぬ行動だと言うのに。

「確かに、君の言う通りだね。」

だが建前と知りながらも、ダンタリアはその意見に同意する。

するとサブナツクが、建前であることくらいは気が付いているだろ？と言わんばかりの訝しげな表情を浮かべた。

それでもダンタリアはそれを敢えて本音として受け止める。

そうでなければ、それが建前だと『理解できてしまった』自分に疑問を抱いてしまうからだ。

「まあいずれにしても、あの世界へ行つた以上、プリキュアが戻ってくるようなことはないだろう。」

これで晴れて、僕たちの種は綺麗に消えると言うわけさ。」
ダンタリアはおどけたような口調で話を無理やり断ち切る。

絶望の闇に満ちた世界ではソルダークは無尽蔵に力を供給することができる。そしてそれは行動隊長として例外ではない。

万に一つも、やつらが無事にあの世界から無事に帰還できることなんてあり得ない。まして世界を闇から救い出すなど、夢物語にもならないのだ。

「悩みの種、か。」

だがダンタリアが『無意識』に口にした言葉をサブナックが拾い上げる。

「言葉の綾と言うものだよ。」

ダンタリアは抑揚のない声で、静かにそう答えるのだった。

∴

キュアブレイズたちはソルダークに見つからないよう隠れ、見つければ力の消耗を極力抑えてあしらい、また目につかぬ場所へと逃げて気配を隠す、を繰り返していた。

「こちらも連戦が続くと、さすがにしんどいな．．．。」

両膝を抱えながらキュアスパークが弱音を口にする。

最低限の力のみで戦ってはいるものの、相手にしてきたソルダークの数が多すぎる。明確な時間はわからないが、体感ではもう半日ほど戦っては逃亡を繰り返している気がする。

最もスタミナのあるキュアスパークにすら疲労が表れているのだから、キュアプリズムとキュアシャインには一層の疲れが見て取れた。

かく言うキュアブレイズも疲れた仕草を表面には出さないものの、このままのペースでソルダークと戦い続ける自信はなかった。

「まだそう遠くないところに闇の波動を感じるわ。」

この先の森の奥まで進んで、そこでしばらく休憩しましょう。」
アツプルの言葉に一同は頷きながら、森の中へと入っていった。

森の中を歩いている最中、キュアシャインは周囲の景色を見渡し、時折空を見上げていた。

「キュアシャイン。」

さつきから辺りを見回してばかりいるけど、なにか気づいたことでもあるの？」
隣で手を繋ぎ歩いていたキュアプリズムが怪訝そうに声をかける。

「え？えと・・・そうゆうわけじゃないけど。」

・・・ほんとうにまっくらで、なにもみえないなって・・・。」

こちらの方を向き、やや遠慮がちに呟くキュアシャイン。

だが彼女たちのいる世界だって、闇の牢獄が展開され絶望の闇に包まれた空間は、この世界と同じく空は黒に染まり辺りは色を失っていた。

今更になってなぜそんなことを思うのか、そしてなぜそんなことを申し訳なさそうに自分に言うのかと、キュアブレイズは彼女に静かな怒りを抱く。

「せめて、おひさまのひかりがあればな・・・。」

そしてキュアシャインが続いて放った一言がキュアブレイズをさらに刺激する。

「どうゆうこと？」

彼女に抱いた静かな怒りを抑えることさえできないまま、キュアブレイズは低く抑えた声でキュアシャインに問いかける。

こちらに恐れをなしたのか、キュアシャインが一瞬、小動物のようにピクつと両目を瞑って震えた。

そんな彼女の弱々しい仕草がますますキュアブレイズの神経を逆なでる。

これから先、この世界でも彼女たちの世界でも、希望を強く持たなければ瞬く間に絶望の闇に飲まれてしまうと言うのに、なぜ彼女はここまで弱いのだ？

「えっとね・・・病は、気からって、ことばがあるでしょ？」

するとキュアシャインが恐る恐る、自分の質問に答え始めた。

「こんなにもくらくくて、なにもみえないところだと、ただいるだけでも、めいっっちゃう気がするの。」

だからせめて、おひさまのひかりでもあれば・・・ほんのすこしだけでも、あかるい場所があれば、このせかいのひとたちだって、きつとげんきに・・・」

「もういいわ、そんな世迷言聞きたくない。」

だが彼女の答えは余りにも稚拙だった。

キュアブレイズは冷たい声でその答えを遮る。

キュアシャインは目線を落として落ち込み、代わりにキュアプリズムがこちらを睨み付けて来たが知ったことではない。

絶望の闇を生み出すほどの深い悩みを内に抱えている人たちが、ただ外を出歩き陽光を浴びるだけで抱えている闇を晴らせるのであれば、この世界がこんな惨状に陥ることなんてないはずだ。

その程度のことでは気力を取り戻せるほど人の心は単純でないし、そもそも闇の牢獄に囚われている人たちは五感を全て失っている。

仮にこの場に陽光が差し込んだとしても、それを認識できるわけがない。

それくらいのこと、少し考えればわかるはずなのに彼女は思慮が浅すぎる。

(……この子の世迷言なんて聞いている場合じゃない。)

私はこの世界を必ず救いだすのよ……)

だがそうは思いながらも、彼女の言葉がキュアブレイズの頭に引つかかる。

それはまるで、彼女の答えは本当に『間違っているのか?』と問い詰めるようだった。

だがキュアブレイズはそんな迷いを振り払い、妖精たちの方へ目を向ける。

妖精たちは疲れこそ見せなかったものの、その表情には陰りが見え隠れする。

ソルダークから逃亡する過程で、半年ぶりに訪れた故郷の惨状を目の当たりにしてきたのだ。

途中で訪れた村では、城下街と同じく人も妖精も一切の言葉を発さず、生気を失ったかのように村を徘徊していた。

湖は水面に波紋一つ広がらず、中を泳ぐ淡水魚の姿すら見えない。

そして今訪れている森も、虫の鳴き声も、そよぐ風が葉を揺らすさざめきも何ひとつ聞こえない。

時を止めると言う絶望の闇の特性により、全ての光景がまるでネガの写真の中であるかのように、モノクロで停止していた。

そんな光景に喪失感を抱いたのは、キュアブレイズも同様だ。

半年ぶりに訪れた故郷のはずなのに、何の感傷も抱くことができなかった。

この世界は、自分のいた世界ではない。

元のフェアリーキングダムは半年前に失われ、ここはそれを模倣しただけの世界ではないかとさえ思えてしまう。

そんな故郷を否定してしまいかねない自分に腹が立つが、自分の知る故郷の姿は、本当にどこにも存在しなかったのだ。

もしも失われた故郷を取り戻す術さえなければ。

そんな考えさえ表れ始めるが、キュアブレイズはそれらの感情は全て絶望へと引きずり込む撒き餌となってしまうことを知っていた。

弱い感情に駆られることなく、心を強く持つように自分に言い聞かせる。

それ故にいつまでも弱い姿をさらし続けるキュアシャインが許せなかった。

そしてそれだけでなく、自分から全てを奪ったダークネスへの怒りと復讐心が少しずつ湧き上がって来た。

しばらくの間森の中へと進むと、近隣周辺にソルダークの気配がしないところまで辿りついた。

「ここまで来れば、ひとまず安心かしら？」

みんなの体力が回復するまで、ここで一休みしましょう。」

アツプルの言葉を聞き、4人はそれぞれ近場の木にもたれて腰を下ろす。

「この分だと、城下街まで向かうのも簡単じゃなさそうだね。」

城下つてなれば人や妖精の数も多くなるだろうし。」

「ええ、城下街にいるソルダークの数は、この一帯に蠢いているものの比じゃないわ。」

それでも一先ず、フェアリーキングダム城にある古い書庫まで向かいましょう。」

プリキュア伝説もその書庫にある本に書かれていたのだから、もしかしたら闇に覆われた世界を救う手がかりも見つかるとも思えないわ。」

キュアスパークとアツプルが今後の動向について話し合う。

だがキュアブレイズは、城の書庫に世界を救う手がかりがある可能性は低いとみていた。

そもそもプリキュア伝説自体、非常に曖昧で抽象的なもので、黒き闇たるダークネスの全容も、光の戦士たるプリキュアの力についても何ひとつ具体的なことは書かれていなかった。

あの伝説に書かれていたこととさえも、4人のプリキュアが揃えば奇跡が起こる程度のもので、その奇跡自体も何であるかはわからない。

そしてアップルの言葉の端端にも自信の無さが窺い知れる。

結局のところ彼女も、藁にも縋る思いでしかないのだ。

「あつあの、」

するとキュアシャインがいつものように遠慮がちな弱々しい声でアップルに話しかけて来た。

「なに？キュアシャイン。」

「あの・・・城下街って、このせかいでいちばんひとがおおくあつまるばしよ、ですか？」
「え？ええ、この世界では一番人口の多い街よ。でもどうして？」

城下街の人口比率を今この場で聞いたところで何が分かると言うのだろう。

キュアシャインの質問はアップルだけでなく、この場にいる全員を困惑させる。

「・・・だったら、書庫をめざして本をさがすよりも、城下街にいるひとたちを、たすけにいきませんか？」

「えっ？」

続けざま放たれた言葉の意味を理解できず、キュアブレイズは疑問符を打つ。

「助けるって、絶望の闇から救い出すってこと？」

だがキュアプリズムは、キュアシャインの言葉の意を捉えたようだ。

「うん、だって、このせかいのみんなが、ぜつぼうのやみをうみだしているから、せかいはやみに覆われてるんだよね？」

それなら、だれかをたすければ、そのひとの分だけ、このせかいを覆うやみは、すくなくなるんじゃないかな？」

それが嬉しかったのか、キュアシャインは少し得意げに話し出す。

「つまり、人口が最も集中している城下街の人たちを全て救い出されれば、この世界を覆う絶望の闇も大きく削ぐことができるって言いたいのか？」

「うっ、うんー！」

そしてベリイが彼女の真意を拾い、キュアシャインはそれに笑顔で応じた。

「それで、どうやって城下街にいる人たちを一時に助けるつもりなの？」

妖精も合わせれば、城下街の総人口はかなりの数に及ぶのよ？」

だがキュアブレイズは先ほどにも増して彼女に怒りを燻らせる。

ずっと甘い世迷言を口にしてきたかと思えば、今度は飛んだ理想論を振りかざしてきた。

確かに彼女の言うことが実現できれば、闇の牢獄の強度もかなり落とすことができるだろう。

そうなれば、世界を覆う闇の勢力も弱まり人々を絶望の中から救い出しやすくなる。

それは実質、この世界を救うことができたと言ってもいい。

だがそんなものはとも現実的な方法とは思えない。

「えっと、いちどにみんなたすけなくても、だいじょうぶだとおもうんだ。」

「どうしてよ、まさか1人1人ずつ助けるとでも言いたいのか？」

城下街の人口は、彼女たちのいた街の人口の比ではない。

1人ずつ救い出し始めるなんて、どれだけの時間を費やすつもりだ。

「うん。」

「え・・・？」

だが余りに迷いのない返事にキュアブレイズは声を詰まらせる。

この場にいる全員も、今度ばかりはキュアシャインの言葉の意を捉えることができず、困惑した表情を浮かべて彼女の顔を伺う。

「だって、このせいかいは、ようせいさんと、にんげんが手を合わせて生きてるせかいなんだよね？」

「あなた、急に何を言い出すの？」

「だったらきつと、たすけたひとは、ほかのこまつてるひとをたすけてくれるとおもうの。」

「っ!？」

そして続くキュアシャインの言葉に、キュアブレイズは今度こそ言葉を失った。

「ひとりのひとをたすければ、そのひとがまた、ほかのひとをたすけてくれる。

そしたら、こんどはふたりのひとが、ふたりのひとをたすけて、つぎはふたりが4人を、4にんが8にんを、そうなつてくれればきつと、城下街にいるひとたちみんなを、たすけることが・・・」

「ふざけたこと言わないで!!」

これ以上の世迷言は聞きたくない。

キュアブレイズはどうとう抑え続けてきた怒りを爆発させた。

「あなたのキレイごととはもうたくさんよ！」

城下街の人たちを救う？

本当にそんなことが本当に上手くいくと思っているの!!？」

自分の言うことを全てキレイごとと切り捨てられたキュアシャインは、怯えた様子で表情を強張らせるが、キュアブレイズの怒りに油を注ぐことになる。

この世界の現状を知りながら、彼女は理想論を振りかざすのを止めない。

立派な言葉だけを並べたところで、それは希望的な観測でしかないことを分かっている。
ない。

何より、この世界の人たちについて、知った風な口を聞いてきたのだ。

自分の語る理想論に、この世界の人たちを押し付けて当てはめたのだ。

そんなこと、許せるはずがない。

だが同時に、キュアブレイズの心の迷いも徐々に大きくなっていった。

なぜこうまでキュアシャインに怒る？なぜこうまで彼女の言葉を否定する？

彼女が言うことは全て……。

そこでキュアブレイズは思考を中断し、迷いを振り切るように声を荒げる。

「この世界のこと何も知らないくせに！簡単に言ってくれて！

今日ここに来たばかりのあなたなんか！

この世界の何が分かるっていうのよ!!」

だがその一言を飛ばした途端、キュアシャインが少しずつ眉を尖らせてきた。

キュアスパークとキュアプリズム、そしてアプルがキュアブレイズを止めに入ろう

としたその時、

「じゃあ……それじゃあ、

キュアブレイズはなにをしに、このせかいにもどってきたのよ!!?」

キュアシャインがこれまで見せたことないほどの大声で、キュアブレイズに怒鳴り返

して来たのだった。

:

荒げた声でキュアブレイズを糾弾した蛍は、その後も眉を顰めて彼女を睨み付ける。
初めてみせる剣幕に周囲は困惑して押し黙り、キュアブレイズさえも驚愕の表情を浮かべて黙り込んだ。

そんな中でも、キュアシャインは怒りの声を抑えずに叫び続ける。

「さっきから、できないできないってばかり言っつて！」

あなたはこのせかいを救いたんじやないの!?

このせかいのひとたちを、たすけたいんじやないの!?

だが続く蛍の言葉、硬直していたキュアブレイズの表情が見る見る内に怒りに変わっていった。

「救いたい．．．救いたいに決まってるじやない！」

私はずっとこの世界を救うことができるのを望んでいたのよ!?!?

あなた達が協力してくれるって聞いて、本当は嬉しかったのに!!

なのにあなたが！下らない絵空事ばかりあげてくるからよ!!」

蛍はキュアブレイズの怒りを真正面から受け止める。

激しい怒りと共にぶつけてくるその言葉は紛れもなく彼女の本心だ。

彼女がこの世界をどれだけ大切に思っているかも、妖精たちから多くを聞いてきた。

そしてようやく垣間見えた、彼女がこちらに対して抱いていた感情を知り、蛍は少しだけ罪悪感を抱くが、自分だってこの世界を救いたいと思う一心でその術を考えて来たのだ。

それらに対して一切の肯定的な意見を述べないどころか、取り付く島も無いと言わんばかりに切り捨てていく。

その姿勢は、この世界を救いたいと言う言葉とは裏腹にあまりにも消極的としか思えなかった。

「じゃあキュアブレイズはどうしたいって言うのよ!？」

キュアブレイズの怒気に気圧されないように声をあげて問いかける。

そんなはずはない思いながらも、蛍はまさかキュアブレイズは本心ではこの世界を救うことができないと諦めているのではないのかと言う疑問さえ抱き始めた。

「……この世界を巣食うダークネスを全て叩く。方法はこれしかないわ。」

だが先ほどとは一転して冷静に告げるキュアブレイズだが、その方法は、自分の言葉を甘い理想論と切り捨てることができないくらいに余りにも短絡的なものだった。

同時に蚩は彼女の言葉にこれまで感じたことのない違和感を抱いた。

「そうよ、回りくどいことなんてしないで、最初からそうすれば良かったんだわ。」

この世界のダークネスを一人残らず叩く。全員倒すのよ！

そうすればきつと、闇の牢獄が解放されてこの世界を覆う絶望の闇は全て消えてくれるはずよ。」

そして力強く発された彼女の『全員倒す』と言う言葉に、蚩は違和感の正体を悟る。

それは恐らく、ダークネスに対する怒りだ。

彼女から故郷を奪ったダークネスへの怒りが、この世界に帰還したことで表に出て来たのだろうか。

「ちがうーそんな方法じゃ、このせかいのひとたちはすくえないよ!!」

ソルダークをたおしたって、このせかいのひとたちはきつと、ぜつぼうのやみから解放されないよ！」

蚩はすぐに彼女の言葉を否定する。

ソルダークを倒して闇の牢獄から解放しても、人の悩みや不安がなくなるわけではない。ソルダークを

浄化し闇の牢獄から解放してきたが、この世界の人たちは半年にも及ぶ長い間、闇の牢

獄に囚われ続けている。

それはつまり、自分の声で、心の内に閉じ込め続けて来た言葉をずっと聞かされ続けているのだ。

蛭自身もほんの僅かな時間、闇の牢獄に囚われたことがあったが、それだけでも心が壊れる思いだった。

そんな人たちの心が、ただソルダークを倒すだけで救えるとは思えない。

「それくらいのこと！ キュアブレイズにだってわかつてるはずだよ!!」

たったの一日、この世界に來ただけの蛭でさえそれがわかったのだ。

ずっとこの世界を守るために戦い続けて來たキュアブレイズにそれがわからないはずがない。

ダークネスへの憎しみから、彼女は本当にすべきことを見失っているとしか思えなかった。

先ほど彼女が述べた言葉も、あたかもこの世界を救うための方法であるかのように語っていたが、蛭にはそれが、ダークネスへの復讐を正当化させるための大儀のように聞こえたのだ。

復讐を果たした時、全てが戻ってくるという彼女個人の、それこそ希望的観測の何物でもない願望を内に秘めて。

だけどそれは間違いだ。

ダークネスを倒したところで取り戻せるものなんて何も無い。

蛭はキュアブレイズに自分を見失って欲しくない一心で叫び続ける。

「じゃあ・・・じゃああなたはどうぞすればいいって言うのよ！」

街の人たちを助けるってどうやって助けると言うの!?

助けるための具体的な手段も言ってこないくせに偉そうなこと言わないでよ!!」

だが続くキュアブレイズの言葉に、今度は蛭が押し黙ってしまった。

彼女の言う通り、街の人たちを助けたいと言う思いばかりが先行し、どうやって助けるかと言う具体的なことまでは考えられていなかった。

この世界に来る前と同じミスを再びしてしまったことを蛭は悔やむが、だからと言って、このままキュアブレイズを許容するわけにはいかない。

「それでもあなたの方法はまちがってるよ!!」

あなたはダークネスのことが嫌いだけでしょ!!

ダークネスをたおしたいだけでしょ!!」

蛭はついに、キュアブレイズに対して核心を突く言葉をぶつけてしまった。

「っ!? 違う・・・違うわ! 私は・・・私は・・・」

だがその言葉を聞いたキュアブレイズは語気を徐々に弱めていく。

「私は……この世界を救いたいだけ……。」

声も擦れていき、拳が悲しく震えている。

彼女の様子に、蛍も吊り上がった眉を下げ心配そうな表情を浮かべていった。

「そこまでよ。2人とも、ソルダークの気配が遠いからって声が大きすぎるわ。

やつらにも音もちゃんと聞こえているのだから、これ以上声を荒げたらやつらに気づかれるわよ。」

今置かれている状況を踏まえた上で、アップルが止めに入ってきた。

少しずつ冷静さを取り戻した蛍がキュアブレイズの方を向くと、彼女は悔し気に唇を噛みしめ、瞳を潤ませていた。

「キュア……ブレイズ?」

恐る恐る名前を呼ぶと、彼女は背を向け、森の奥へと1人歩き始める。

「あつ……。」

だが暗い森の中を1人で彷徨うとするキュアブレイズに伸ばした手を、キュアスパークが止めに割り込んだ。

「キュアスパーク?」

「キュアブレイズのごときは、ウチに任せとき。」

キュアプリズム、キュアシャインをお願い。」

「ええ、そつちもお願ひね。」

私じやきつと、気の利いたことは言えないと思うから・・・。」

キュアプリズムと短いやり取りを終えた後、キュアスパークとベリイはキュアブレイズを追つて森の奥へと入つていく。

そしてキュアブレイズとの口論の中で彼女にぶつけた言葉の数々を思い出した螢は、途端に深い自責の念に駆られるのだった。

：

要はベリイと共にキュアブレイズの後を追う。

と言つても、彼女との距離はほとんど離れておらず、足音や気配を消すつもりもない。要はただ、キュアブレイズと話したいことがあるだけだ。

コソコソと隠れて彼女の動向を探るつもりは無い。

キュアブレイズも当然こちらに気づいているはずだが、何も言わず細々と森の中を進

んでいく。

ここまで来たらどちらが先に根を上げるかの根競べだが、彼女には悪いが今の要は根を上げるつもりなんて毛頭なかった。

「どこまでついてくるつもり？」

すると思いの外早くキュアブレイズが足を止め、こちらへと振り向いた。

「どこまでも、あんたと落ち着いて話ができる場所まで。」

その言葉を聞いたキュアブレイズは、わざとらしくため息を吐きながら近くにある木に背をもたれた。

どうやら話を聞いてくれるようなので、要も彼女に倣って近くの木にもたれる。

「それで、あなたも私に言いたいことがあるの？」

まだ何も言っていないと言うのに妙に攻撃的な口調で問いかけてくる。

こちらをキュアシャインの味方だと決め込んでいるような物言いの彼女に対して、一瞬どのように話を切り出そうかと思っただが、いつも通りこちらの思っただけの事を伝えるだけにした。

「別に、ただウチはあなたの言う通りだと思ってるよ。」

「なんですって？」

信じられないと言わんばかりの表情を浮かべるキュアブレイズに、要は言葉を重ね

る。

「あの子の言うことは理想論過ぎて何一つ現実味を帯びていない。

それにこの世界にいるダークネスが、みすみすウチらのことを見逃してくれるとは思えない。

この世界を救おうとする限り、遅かれ早かれダークネスとの戦いは避けられない。

「そうやる？」

キュアブレイズの言葉に同意するも、彼女は表情を曇らせた。

要にはその理由が何となく分かった。

きつと彼女は、そこまで考えていなかったのだ。

ただ、憎いダークネスを倒して故郷の仇を討ちたかっただけ。

それでも要は、彼女の心を否定しない。

故郷を奪ったダークネスを憎むのは当然だし、どのみちやつらとの戦いは避けて通れないのなら、事のついでに恨みを晴らしたところで状況が悪くなるわけでもないのだ。

だが彼女の思いを否定するつもりは無いが、要はキュアシャインの思いだって否定するつもりもなかった。

「ここまでついてきたのは、それを彼女に伝えるためだ。

「でも、キュアシャインの言うことだって、間違つてなんかいない。」

「え？」

続く自分の言葉にキュアブレイズは驚き顔を上げる。

「あなた……どっちの味方なのよ？」

「どっちもだよ。あなたの言うことは間違っていないけど、キュアシャインの言うことだって間違ってるんじゃない。」

ウチはあなたの味方だし、キュアシャインの味方だよ。」

キュアブレイズの味方だからと言って、キュアシャインの敵と言うわけではない。

大体同じプリキュア同士で、同じ目的を持ってこの世界に来たのだから敵のほずがないのだ。

キュアシャインとキュアブレイズだってそうだ。

考え方の違いからすれ違ってしまったが、敵ではない、仲間なのだ。

それに要は思う。彼女だって本当は、自分と同じ思いではないかと。

「この世界を救おうとする限り、ダークネスとの戦いは避けられない。」

でもキュアシャインの言う通り、ダークネスを倒しただけじゃ、きつとダメなんだ。

ダークネスを倒しても、あなたの知る世界が戻ってくるわけじゃない。

この世界を取り戻すには、キュアシャインの言うように、人々を絶望から助ける必要がある。

違う?」

要の言葉にキュアブレイズは再び俯き黙り込む。

そんなキュアブレイズを前に、自分の肩に乗るベリイが静かに言葉を繋げた。

「キュアブレイズ。

君の思いだけでも、キュアシャインの思いだけでも、きつと足りないんだ。

でも君たち2人が協力すれば、互いに足りていないところ埋めることが出来るんじゃないのか?」

「私が・・・あの子と・・・?でも・・・。」

悲しそうに目を伏せるキュアブレイズに、要は言葉を重ねる。

「あなたの言う通り、あの子は具体的なことは考えてなかった。

でもさ、そもそもこの世界を救うのに具体的な方法何てあるのかな?」

「え・・・?」

「絶望の闇に飲まれた人たちは五感を失う。

普通に助けようとしても、声の1つも届かない。

でもウチらの力は、希望の光は理屈で測れる力じゃないやろ?

だったらウチらは、自分たちの思いのままに、希望を抱いて行動するしかないんじゃないかな?」

「思いのまま……私の思い……私の希望……」

『希望』と言う言葉は大それたイメージを与えるが、普段過ごしている何気のない、平凡な生活の中に幸せがあつて、それが希望になるのだ。

要もそうだ。

今まで世界を救いたい何て大きな願いで戦ってきたつもりはない。

小さい頃から生まれ育つた夢ノ宮市を守りたい。

ただそれだけの思いを胸にこれまで戦ってきた。

それが自分にとっての希望の光なのだ。

だからこの世界の人たちにとっての幸せ、希望の光を見つけることができれば、きつ

とこの世界を救うことができる。と要は思うのだ。

そしてそれを見つけることができるのは、きつとキュアブレイズだけだ。

「だからキュアブレイズ、お願い。」

この世界の人々から希望を取り戻すために、あの子に力を貸してあげて。」

要の言葉を受けたキュアブレイズは、複雑な表情を浮かべて逡巡するのだった。

：

雛子はキュアシャインと手を繋ぎながら、もう片方の手で落ち込む彼女の頭を撫でていた。

「ほら、キュアシャイン、元気を出して。」

俯き黙り込むキュアシャインからは時折すすり泣く音が聞こえる。

先ほどまで今まで見せたことのない剣幕でキュアブレイズと口論していたと思えば、すっかり落ち込んでしまったようだ。

「…わたし、キュアブレイズの気持ちもかんがえないで、ひどいこと言っちゃって…。」
「そんなに気にしなくても、あなたの言葉は、自分を見失いかけていたあの子にとってはいい薬になったわ。」

むしろお礼が言いたいくらいよ。」

アツプルはそう言い、落ち込むキュアシャインを励ます。

キュアシャインは自分の心無い言葉が彼女を傷つけてしまったのだと思っており、それはその通りかもしれないが、アツプルの言うようにキュアブレイズがダークネスを恨むあまり目的を見失っていたのも事実だ。

それに雛子も、キュアシャインの言うことが間違いとは思っていない。

ただキュアシャイン、蛍と言う少女は、理屈ではなく感性で物事の真意を見抜いてしまう子だ。

論理的な考えを持って過程を経て答えに辿りつくのではなく、直感的に答えが分かっ
てしまう。

それ故に言葉には具体性がないが、彼女の言葉は物事の本質を突くあまり、どんなに
抽象的なものであっても不思議と確信することができる説得力があるのだ。

それが明確な手段を見つけられず焦っていたキュアブレイズの反感を買ってしまった
のだろうか。

もしかしたらキュアブレイズは、キュアシャインの言葉を信じたくても理屈で納得す
ることができないことに苛立ちを覚えてしまったのかもしれない。

だけどそれは仕方ないことだと思う。

それほどまでキュアブレイズは、この世界のことを大切に思っていたのだろうかから。
「本当に、昔から変わっていない。」

真つ直ぐで直情的で、そのせいで周りが見えなくなる。

でもそれだけにあの子の思いはとても強い。」

アツプルの語る、キュアブレイズの思いの強さ。

彼女の力の源である、この世界を守りたいと言う思いの強さは、半年もの間一人

ダークネスと戦い、行動隊長を2人も撃破したことが何よりの証だ。

彼女のこの世界を救いたいと言う思いは確かめるまでもなく本物だ。

だけどそれはキュアシャインだって同じなのだ。

キュアブレイズとキュアシャインの思いは同じの元にここにいる。

それなのに、立場と性質の違いからズレが生じてしまっただけなのだ。

だから雛子は思うのだ。

この2人が心から協力することができれば、この世界を救うと言う奇跡を体現できるのではないかと。

∴

キュアブレイズはベリイとキュアスパークと一緒にみんなの元まで戻っていった。

「あつ、キュアブレイズ。」

こちらに気づいたレモンが笑顔を見せて声をかける。

そしてこちらの姿を確認したキュアシャインは飛び跳ねるように顔を上げた。

恐る恐るこちらの顔色を窺い、やがて両手を胸に当てるとこちらへ駆け寄って来た。隣にはキュアプリズムが彼女の肩に手を添えている。

「あの・・・キュアブレイズ・・・」

・・・さつきは・・・ごめんなさい・・・

あなたの気持ちもかんがえないで・・・わたし・・・」

たつぷり間を置いてから、ぼそぼそとだがしつかりこちらの目を見てキュアシャインは謝罪する。

先ほどまでの囁みつくような威勢は微塵もなく、いつも通りの弱々しい姿になっていた。

(どうして・・・この子が?)

ずっと疑問に思っていた。

いつも気弱で、怯えてばかりで、希望の光も扱えず、今だってキュアプリズムの協力がなければ自分の力をコントロールすることさえできない。

およそ伝説の戦士、プリキュアとして戦うには彼女の性格は余りに似つかわしくない。

それなのに、戦う覚悟を決めたらどんな危険な戦いにも身を投じ、率先して囨となつて敵を引きつけていく。

そして強大な威力を誇る浄化技。

誰よりも弱いはずの彼女が、誰よりも強い希望の光を内に秘めているのだ。

(どうして……あなたの力はそこまで強いのか……?)

そしてキュアブレイズは、この世界の人たちについて核心を突いたキュアシャインの言葉を思い出す。

(どうして……あなたにわかるのよ……?)

彼女は今日初めて、この世界に来たはずだ。

街に住む人にも妖精にもあったことがないはずだ。

それなのに、この世界では人と妖精が手を取り合って生きているからと、ただそれだけで、何の迷いもなくみんなが助け合うのだと言いつつ切った。

理屈で考えてのこととは思えない。

彼女はその無垢な感性だけで、この世界の人々の本質も、この世界を救うために必要なことも全て感じ取ったのだ。

だがそれは、キュアブレイズにとつてとても妬ましいものだった。

この世界を救うことができず、今尚世界を救うために何をすべきかを見つけ出すことすらできない自分を酷く惨めな気分させるものだった。

だからあの時、彼女の言葉を甘い理想論と否定してしまった。

それは引いては、自分はこの世界の人たちを信じていなかったとも取られかねないのに。

だけでもう、そんなことで自分の気持ちを誤魔化すのは止めよう。

「キュア・・・ブレイズ?」

何も言わないこちらの顔を恐る恐る見つめるキュアシャイン。

今にも泣き出しそうな、こんなにも弱々しい子なのに、誰よりも早く世界の本質へと辿りついた。

「(こちらこそ)ごめんなさい、冷たく当たってしまった。」

それならば、そんな彼女の感性に賭けてみよう。

この世界を救う。その願いをかなえるために。

それにきつと、彼女の思いも自分と同じなのだから。

「キュアシャイン、あなたの言う通り、城下街にいる人たちを助けに行きましょう。」

「え・・・?」

自分の言葉が信じられないと言わんばかりに、啞然とするキュアシャイン。

当然だろう、先ほどの言葉とは正反対なのだから。

だがつまらないプライドや妬みで彼女を責めるのはもう止めだ。

彼女が本質に近づいているのなら、彼女の言葉を信じてみたい。

「でもきつと、ダークネスは妨害に来るわ。

戦うことが目的でなくとも、戦いは避けられないと見ていいと思うの。」

「うん、わかった。

このせかいのダークネスともたたかかって、それから、城下街のひとたちをたすけよう！」

キュアスパークの言葉をそのまま借りているだけなのに、さも自分の言葉のように述べるのは我ながら滑稽だが、キュアシャインはどこか嬉しそうに承諾してくれた。

「それじゃあ、まずどうやってこの世界の人たちを助けるのかを考えましょう。」

するとキュアプリズムが話に入ってきた。

「闇の牢獄に囚われた人を助ける。

言うは簡単だけど、一筋縄じゃないわよ。

この世界から脱出する前に、闇の牢獄に囚われた人に話しかけたことがあるの。

でも、うわ言のように絶望の言葉を繰り返すだけで、何も話を聞いてくれなかったわ。」

アツプルが闇の牢獄の特性を踏まえた上で簡単ではないと説く。

当時の時点でそれなのだ。

半年もの間絶望の声を聞かされ続けた今の人たちが、簡単に声を届けられるとは思わ

ないし、届ける方法何てないのかも知れない。

それでも何とかして彼らに声を届けなければならぬ。

話して悩みを聞く以外に、彼らを絶望から救う手段はないのだから。

「せめて何か、絶望の闇の影響を弱めるようなきつかけがあればなあ……。」

キュアスパークが首を傾げながら考える。

「絶望の闇を弱める……例えばこの世界の人たちにとって、なにか希望を象徴するようなものってないかしら？」

するとキュアプリズムがそんな提案をあげてきた。

「きぼうのしよろちよろ？」

「うん、厳密には少し違うけど、私たちの世界でいうところの自由の女神象みたいに、自由や希望、幸せのシンボルにみたいなのがあれば、希望を思い出すきつかけになれるかしらって。」

その言葉に思い当たるものが一つだけ思い浮かんだ。

「希望の鐘。」

「希望の鐘？」

キュアブレイズが発した単語にキュアプリズムが首を傾げ、チェリーが説明してくれた。

「城下街の中央に立つ大きな鐘よ。

年に一度、この国の生誕祭の日にだけ、王族の方がその鐘を鳴らすのよ。

その鐘の音は、聞く人々に希望をもたらし幸せを届けるとされているわ。」

「希望をもたらす鐘を音か……。」

「それ、賭けてみる価値あるんじゃないの？」

キュアプリズムとキュアスパークがその案に賛同する。

「希望の鐘を鳴らして、みんなに希望を思い出してもらってから、1人ずつ話を聞く……か。」

何とも抽象的な作戦だ。事実上のノープランだ。

鐘を鳴らしたところで人々が希望を思い出す保証なんてないし、まして五感を失っている人たちには鐘の音すら聞こえるのかも怪しい。

それでも、

「キュアブレイズ、思いをこめて鐘を鳴らせば、きっと、そのおとはせかいのひとたちにとどくよ。」

キュアシャインの言う、思いの強さに賭けてみたい。

それに希望の光を込めた鐘の音が、人々を覆う闇を祓ってその音を届けてくれると説明づけることも、一応できる。

だが今はそんな無理やりな理屈をこねてまで自分を納得させるのは止めよう。

キュアスパークにも言われた通り、心に思うままに動くを決めたのだから。

「それじゃあみんな、今のうちに出来る限り休んで体力を回復しましょう。」

城下街は言わばソルダークの巣窟。

これまで以上の激戦は避けて通れないでしょうから、疲れを残すわけにはいかないわ。」

「見張りは俺たちで交代でやる。」

「レモンも頑張つて起きるからね。」

「だからみんな、ゆっくりと体を休めて。」

「ええ、ありがとう。」

妖精たちの厚意に感謝し、キュアブレイズは近場の木に寄りかかるように座り込む。

久しく訪れ改めて目に留まった故郷の惨状、湧き上がったソルダークへの憎しみ。

そしてキュアシャインと思いをぶつけ合いながらも、最後にはこうして協力することになった。

今日一日の出来事は、知らず内に心身ともにキュアブレイズを疲弊させた。

キュアブレイズは徒労感に見舞われ、深い眠りへと誘われていくのだった。

:

キュアブレイズが目を覚ますと、周囲の景色は眠りにつく前と何も変わっていないなかった。

「今が朝か夜かもわからない景色にキュアブレイズが目を伏せると、
「おはよ、キュアブレイズ。」

この場に置いて似つかわしくない、明るく幼い声で名前を呼ばれた。
顔を上げるとそこにはキュアシャインの姿があった。

隣にはキュアスパークとキュアプリズムの姿もあり、どうやら自分が一番最後に起きたようだ。

「ごめんなさい、熟睡していたみたいで。」

「いいって、あんたにとっちゃ、昨日は色々あったもんな。」

「それに言うほど私たちも早く起きていたわけではないから。」

キュアスパークとキュアプリズムは寝坊した自分を特に咎めようとしなかった。

熟睡できたおかげで余計な感情をリセットできたキュアブレイズは、改めて3人の顔

を見る。

3人とも故郷を取り戻したいと願う自分に対しても協力的だ。

まるで自分の故郷であるかのように、この世界を救うことに親身になってくれる。

初めてあつたときから、3人に対しておよそ友好的とは言えない態度を取り続けているのに、特にキュアシャインにはこれまで散々酷いことを言ってきたのに、もうそんなことは気にも留めていないようだ。

3人とも、底抜けのお人好しとしか思えない。

だけど今は、そんな好意が純粹に嬉しかった。

「3人とも、ちよつといいかしら？」

「なに？ キュアブレイズ？」

だから今、この言葉を言わなければならぬと思った。

「今までごめんなさい、酷いことばかりを言つて。」

でも、身勝手かもしれないけど、私、どうしてもこの世界を救いたい。

私の故郷を、あるべき姿に戻したい。

だから・・・キュアシャイン、キュアスパーク、キュアプリズム。

お願い、私に力を貸して。」

謝罪と、真意と、そして懇願。

どれもこれまで3人にかけてきたことのない言葉だったから。

「何を今更？言われるまでもないよ。」

「勿論、協力するわよ。」

あなたのためにも、レモンちゃんたちのためにも。」

「キュアブレイズ！がんばろうね！」

3人の言葉がキュアブレイズの背中を強く押ししてくれる。

「みんな、ありがとう。」

この時キュアブレイズは初めて、3人の前で笑顔を見せた。

「それじゃあ、さっそく城下街へ向かいましょう。」

大広間も鐘の場所を目指して、思いを込めて鐘を鳴らす。」

「鐘を鳴らすのは？」

「勿論、キュアブレイズに決まってるじゃない。」

まるで最初から決まっていたかのようにキュアプリズムが口にするが、キュアブレイズ自身もそのつもりだった。

「この世界を救いたいと言うのは自分自身の意思なのだから。」

「だから私たちは、城下街中のソルダークを引きつけるわよ。」

「わかったーわたし、がんばるねー」

キュアシャインたちは城下街に蠢く無数のソルダークを相手にする決心をする。

キュアブレイズもまた、必ず希望の鐘を鳴らして見せると心に誓った。

だが同時に不安も押し寄せて来た。

もしも鐘の音を鳴らしても何も起きなかつたらどうするのだろうか？

敵陣のど真ん中まで飛んでいった末に何も得られず、ソルダークに包囲されるという最悪な状況も考えられる。

そしてこんなにも不安を抱えている自分に、思いを込めて鐘を鳴らすなんてある種の大役が務まるのだろうか？

「キュアブレイズ。」

そんな自分に対して、キュアシャインが心配そうな表情で顔を覗きこんできた。

少しの間表情をちらせて何を言うべきかを悩んでいたようだが、やがて真っ直ぐこちらを見て微笑んだ。

「むずかしくなんかないからね。」

「え？」

「むずかしくなんてないから、だいじょうぶだよ。」

キュアブレイズなら、キュアブレイズだからできることなんだから。

だから、いっしょにがんばろ？」

まるでこちらの悩みを見抜いているかのような言葉だった。

そしていつにも増して抽象的な彼女の言葉だが、今回ばかりはその言葉はキュアブレイズの支えとなった。

「ええ、ありがとう。」

そう、何も難しく考える必要なんてない。

この世界を救いたい。その思いだけは誰にも負けない自信があるのだから。

しばらくして、キュアブレイズたちは城下街へと辿りついた。

「ここが城下街……。」

「ソルダークの数が圧倒的に多いわね。」

周囲から感じ取れる闇の波動はこれまでの比ではなかった。

それも城下街にある中央広間はいわば街の中心。

そこへ近づくほどに人口が密集していくので、必然的にソルダークの数も多くなっていく。

「でも、やるしかないんだよね。」

いつになく表情を強張らせているキュアシャインが、固い決意を口にする。

彼女の言う通り、希望の鐘を鳴らすにはどんな無茶をしても突破するしかないのだ。

それに元々の計画では、今回は偵察程度にとどめておき、今後も長い時間を使ってこの世界を救う方法を探していくつもりだった。

だがもしこの作戦が上手くいけば、今日にでもこの世界を救うことができるかもしれない。

キュアブレイズは僅かに焦る気持ちを呼吸を落ち着かせ、みんなに強行突破を持ちかけようとしたその時、

「久しいな、キュアブレイズ。」

自分の名を呼ぶ男の声が聞こえた。

声の方を向くと、そこには黒いローブを着た男の姿があった。

フードで表情が隠れているので顔を窺い知ることはできないが、その外見と声にキュアブレイズは覚えがある。

「あなたは、アンドラス！」

「キュアブレイズ、あいつは？」

「アンドラス。」

かつて行動隊長のハルファスとマルファスを従え、この世界を侵攻したダークネスの司令官よ！」

「ダークネスの司令官ですって!?!」

突然の敵将の登場に、キュアシャインたちは驚愕の表情を浮かべるが、

「でも、敵将が自らが私たちの妨害に来たってことは、アタリってことやない?」

「・・・確かに、そうとも言えるわね。」

キュアスパークがそんな前向きな言葉を口にしてきたのだ。

キュアプリズムもすぐにそれに同調する。

こんな状況においても不敵な笑みを崩さない2人だが、それはキュアブレイズにはとても心強かった。

キュアシャインも一瞬怯えた後、すぐに真っ直ぐアンドラスを見据えた。

行動隊長までしか遭遇したことがない彼女たちだが、その上に立つ司令官を前にも怖気づいてる様子はなかった。

「ふっ、いつまでもその減らず口が叩けるかな。ソルダーク。」

アンドラスの一声とともに、街中に蠢くソルダークがこの場に集ってきた。

だが見渡す限りをソルダークの巨体が覆い尽くす中でも、キュアシャインたちは表情一つを変えていない。

「今日この地で貴様らは敗北する。このアンドラスの名の下にな。」

「キュアブレイズ！作戦通りあんたは大広間まで向かって！」

キュアシャイン！キュアブレイズの援護をお願い！」

「わかったわ！」

キュアスパークの呼びかけにキュアシャインが答える。

「ウチらはソルダークの相手をするよ。」

「もう、勝手に私を巻き込まないでよ。」

微笑みながら軽口を返すキュアプリズムは、すっかりいつも通りにリラックスしているようだ。

無数のソルダークとアンドラスを前にしても、彼女たちの戦意と希望は鈍っていない。

「ええ、わかったわ。必ず、何があっても！この世界を救ってみせる！」

だからキュアブレイズも、希望を捨てずに立ち上がる。

目指すは城下街の大広間、この世界の人たちにとって希望の象徴たる鐘の音。

それをこの世界に響かせるために、キュアブレイズは力強く大地を蹴るのだった。

:

次回予告

「アンドラス！あなたを倒して、必ず！この世界を闇から救ってみせる！だからお願い！キュアシャイン！キュアスパーク！キュアプリズム！私に力を貸して！」

「ああっ！」

「ええっ！」

「うん！」

次回！ホープライトプリキュア第13話！

フェアリーキングダム大決戦！世界に響け！希望の鐘！

希望を胸に、がんばれ！わたし！

第13話

第13話・プロローグ

フェアリーキングダムを必ず救い出す。

その思いを強く胸に秘め、キュアブレイズは城下街の大広間にある、希望の鐘の元へと向かう。

この世界の希望の象徴たる鐘の音を響かせることができれば、人々の希望を取り戻すきっかけになると信じて。

「ふん。」

こちらを鼻で笑いながら、アンドラスが目の前へと躍り出た。

繰り出される拳に対して、キュアブレイズも拳を突き付ける。

互いの拳は中央でぶつかり合い、光と闇の力の本流を生み出した。

その渦に巻き込まれて彼のフードが飛び、キュアブレイズは初めてアンドラスの素顔を見た。

外見は30代前半ほど。

白髪のアールバックで整った顔立ちの持ち主だが、その肌は青白く生氣を感じさせな

かった。

「キュアブレイズ、もう少し賢いやつかと思っていたが、存外バカだな。

おめおめと逃げ延びたと言うのに、自ら倒されるために戻ってくるとは。」

挑発的な物言いだがキュアブレイズは気に留めない。

「倒されるためじゃないわ。この世界を救いに来たのよ！」

「ふっ、ならば猶更のバカだ。

絶望の闇に満ちたこの世界を救えると、本気で思っているのか？」

すると横からキュアスパークが雷を纏った拳でアンドラスへと殴りかかった。

アンドラスはそれを回避し、空中へと飛び距離を開ける。

「本気だからここまで来たんだよ。」

「4人のプリキュアが揃えば、大いなる奇跡が訪れる。

私たちはそれを信じてここまで来たのだから。」

後ろからキュアプリズムも続き、キュアシャインも合わせた4人のプリキュアがアンドラスと正面から対峙する。

「くくっ、はははっ！あんな伝説の一文をここまで真に受けるとは。

救いようのないバカ共よな。」

だがそんな4人をアンドラスは笑い飛ばした。

キュアスパークが鋭くアンドラスを睨み付けるが、直後彼の周囲に絶望の闇が渦巻き始める。

「なっ、なに?」

驚くキュアシャインだが、キュアブレイズはその現象に身に覚えがあった。

キュアシャインが強大な希望の光を発した時も、膨大な光の奔流が渦を生み出していた。

その逆の現象が、今この場で起きているのだろうか?

「ならば貴様らに教えてやろう。」

渦巻く絶望の闇がアンドラスの体内へと吸収されていく。

そして彼の身体が一気に膨張していった。

「一切の希望の光が差す余地もない、真の絶望をな!!」

やがてアンドラスの身体はソルダークの倍はあろう巨体へと変化していく。

背には鳥類のような翼が、手には鋭利な爪が生え、下半身が4つ足の獣へと変わり狼の首が伸びて遠吠えを上げる。

身体はまるで狼の脊椎から伸びているかのようだ。

そしてアンドラスの頭も人のものではなく、フクロウのものへと変わっていた。

その姿は、人の姿を象ったフクロウが、狼に跨っているかのようだ。

「巨大化して、変身した．．．？」

ソルダークでもここまでの異形な姿は見せたことはない。

初めて相対する巨大な怪物の前にキュアブレイズたちは気圧されてしまう。そんなプリキュアたちをアンドラスは、フクロウの目で見下ろすのだった。

第13話・Aパート

フェアリーキングダム大決戦！世界に響け！希望の鐘！

巨大化し、怪物へと変貌したアンドラスを前に、要は驚愕を隠さないでいた。

さつきまで人の姿をしていた者が、肉体を膨張させ変移していく様は、まるで生物の成長を早送りで見せられたかのように生々しく悍ましいものだ。

思わず口元を抑えかけるほどのショッキングな光景だったが、アンドラスが巨大な腕を振り上げるのを見て我に返る。

「このアンドラスの名の下に果てるがいい！プリキュア!!」

壊れた機械のようにくぐもった声で叫びながら、アンドラス腕を振り降ろしてきた。

要たちはそれを跳躍で回避し、一旦距離を開ける。

いつまでもアンドラスの姿に気を取られている暇はない。

「キュアブレイズ！キュアシャイン！作戦に変更はないよ！

こいつはウチらが引き受ける！2人は早く大広間を目指して！」

そう2人に呼びかけながら、要はアンドラスの元へと飛んでいく。

そして雷を纏った拳を突き出すが、アンドラスは巨大な手のひらでそれを受け止めた。

「小娘が、この程度の力で勝てると思うな！」

巨体に似合わぬ速度で拳を振るいつける。

要は体を捻り、回転を加えた拳をアンドラスの拳へぶつけた。

両者の力がぶつかり合うも、要は徐々に苦悶の表情を浮かべ始める。

「キュアスパーク！」

「キュアシャイン！急いで！」

心配そうな表情を浮かべてキュアシャインがこちらを見るが、キュアプリズムが背を押す。

そしてキュアブレイズに目で促され、2人は大広間へと向かって行った。

「させるか。」

2人の動向に気づいたアンドラスが目を反らし、もう片方の手で要を叩き落とそうとする。

「ウチの力を甘く見るなあああ！」

だが要は全身から雷を放電し、アンドラスの拳を跳ね除ける。

「小癩な。」

アンドラスは翼を大きく広げ、無数の羽を矢のように要へと放った。

だが要の周囲にバリアが展開され、放たれた羽は全て跳ね返され地へと落ちていく。「ウチらつて、聞こえなかったの？」

キュアブレイズたちの邪魔はさせないから。」

一旦地上に降りた要は、背後からかかる頼もしい言葉に少しだけ安堵した。

「いいだろう、望み通りまずは貴様らから相手にしてやる。」

だがな。」

だがアンドラスの言葉とともに、要たちの周囲をソルダークの群れが囲い始めた。

「こちらでも一人で相手をするつもりは無い。」

これだけの数のソルダークと我を相手にどれだけ持つかかな？」

強大な力を持つダークネスの敵将とソルダークの群れ。

絶望的な戦力差を目の当たりにしながらも、要はキュアブレイズが鐘を鳴らすまでは持ちこたえて見せると腹をくくるのだった。

：

蛭は隣に並ぶキュアブレイズとともに、迎えるソルダークの群れをいなしながらひたすら前へ前へと進んでいく。

「ガアアアアアアツ!!!」

右方向からソルダークの雄叫びが聞こえるが、蛭は怯まずにソルダークに体当たりした。

そして一瞬、ソルダークがよろけた隙を突きキュアブレイズが正拳で殴り飛ばす。

続いて正面、左方向からソルダークがそれぞれ飛んできた。

蛭は跳躍し、前方に立つソルダークの頭部を思い切り踏みつけ、その反動で宙を飛ぶ。

キュアブレイズは左方向から迫るソルダークの腹部に強烈な肘鉄をお見舞いした。

そして蹲るソルダークを蛭が上から踏みつけ、キュアブレイズは先ほど蛭が頭を踏み

台にしたソルダークを蹴り飛ばす。

それでも尚ソルダークたちは起き上がり、再び迫ってくるが、蛭たちも距離を開けるように大広間へと疾走する。

あの程度の打撃では傷一つ付けることも出来ないが、それでも着実に大広間へと近づいている。

続いて2体のソルダークが縦に並び突撃してきたが、先頭に立つソルダークの足元に

蛍がしがみついてバランスを崩させ、キュアブレイズが後方のソルダークへと膝蹴りをお見舞いした。

そして蛍はしがみ付いた足から離れ、膝蹴りを受けて仰け反るソルダークを跳び箱のように飛び越える。

その反動で前方へと傾くソルダークの背中を、キュアブレイズが勢いよく蹴り飛ばした。

最初に蛍に足をしがみ付かれバランスを崩したソルダークへと直撃し、2つの巨体ははるか後方へと飛んでいく。

そして後方から追いかけて来たソルダークたちに直撃し、複数の巨体がまるでボーリングのピンのように一斉に散開した。

2人は呼吸を合わせて連携しながら、迫りくるソルダークの群れを蹴散らしていく。「この通りを抜ければ大広間へと着くわ!」

キュアブレイズの言葉に、ようやくこの鬼ごっここの終わりが見え始めたその時、「え……?」

全身に広がる寒気とともに、覚えのある気配が蛍に警告を促す。

気配のある方へ目を向けると、時計塔の上に翼と尾を生やした少女の姿が映った。

「キュアシャイン!!」

その少女は自分の名前を怒りを込めながら叫び、こちらへと飛んできた。

「リリス！」

自分たちの世界を侵略していたはずのリリスがこの世界にいることに蚩は驚愕する。余り考えたくはないが、まさか自分を追ってきたのだろうか？

「どうしてこんなところに!?!」

「あなたがどこへ行くこうとも、あたしはあなたを逃さない！」

あなたを墮とすためなら、どこへでも追いかけてやる!!」

そんな嫌な予感が早くも的中する。

そしてリリスは鋭利な爪をこちらに向けながらこちらへと突撃する。

蚩はその一撃を寸でのところでかわした。

「キュアシャイン！」

隣に並ぶキュアブレイズが心配そうに声をかける。

世界を飛び越えてまで追いかけてくるなんて、よっぽどリリスは自分のことを憎いみたいだが、状況が最悪だ。

キュアスパークたちがアンドラスの足止めをしている間に何としても希望の鐘を鳴らさなければならぬと言うのに、目前まで迫つての妨害だ。

それもフェアリーキングダムを救いにきたことを妨害するためであれば、行動隊長と

して真つ当な行動とも言えるのだが、彼女の狙いは変わらず自分だけだ。

どこまでもしつこく、そして容赦のないリリスに対して、蛭も怒りを燻らせていく。こうなったら徹底的に無視するだけだ。

「だいじょうぶ！ いそごうキュアブレイズ！」

「キュアシャイン！ またあたしを無視するつもり？！」

「も〜しつこいな！」

いまはあなたのあいてなんかしてるひまはないの！！」

「っ!？」

リリスが驚愕の表情を浮かべる。

蛭自身、自分がこんな暴言が言えるなんて思わなかったが、この世界を救いたいと強く願うキュアブレイズの思いには目もくれず、ただの私怨で邪魔をしに来たリリスのことが許せなかった。

蛭はこれまで以上に強くリリスのことを拒絶する。彼女の相手なんかをしている暇はないのだ。

「だつたらいいわよ！」

力づくでもあたしのことしか見えないようにしてやるわ!!」

だがこんなことで諦めるくらいなら、わざわざ世界を飛び越えてまで追いかけては来

ないだろう。

蛭は内心、分かり切っていたリリスの応対を完全に無視し、大広間へと向かおうとする。

だが次の瞬間、いつの間にかリリスが目の前に回り込んでいた。

「えっ!？」

キュアブレイズも反応できずにいたのか、彼女の表情には驚きが見られる。

その虚を突かれ、リリスが爪を蛭に突き立てる。

蛭はそれを反射的にガードするが、次の瞬間強い衝撃が蛭を襲い、足もとがめり込み粉塵を巻き起こした。

「キュアシャイン！」

「ガアアアアアアアアッ!!」

キュアブレイズがリリスに攻撃を仕掛けようとするが、直後複数のソルダークが雄叫びと共に彼女に襲い掛かる。

キュアブレイズはそれを跳躍で回避するも、そのために自分と距離が離れてしまう。

「いつもより、つよい・・・。」

リリスは行動隊長の中でもスピードに優れているが、パワーはそこまででもなかったはずだ。

だが今リリースから受けている攻撃は、そのサブナックに匹敵するか、あるいはそれ以上の力を伴っている。

そして一瞬で正面に回り込んできたスピードも不自然だ。

あんな速度で動いたところは今まで見たことがない。

「絶望の闇が満ちているこの世界では、あたしたちの力は何倍にも高められるわ。」

そんな蛍の疑問にリリースが答える。

この世界に満ちる絶望の闇は、ソルダークを強化していた。

同じダークネスである行動隊長もその影響を受けているのだろう。

だがソルダークですらキュアスパークの打撃が通用しないレベルにまで強化される

のに、行動隊長となれば、その度合いはソルダークの比ではないだろう。

リリースは強引に爪を振り切り、足もとの石垣を抉り壊した。

「きゃあっ！」

その衝撃で蛍は大きく飛ばされる。

敵うはずがない。

ただでさえこれまでの戦いでリリースの足元にも及ばなかったのに、今のリリースの力は

何倍にも高まっているのだ。

だが彼女の強さに恐れをなしている暇もない。

だが敵わぬと分かれば打つべき手は一つだ。

「キュアシャイン?」

やはりリリスのことは無視する。一刻も早く大広間へと向かうのだ。

キュアブレイズの話によれば、この通りを抜ければいいはずだ。

蛭はリリスのことはわき目も振らず、ただ真つ直ぐに大広間へと目指す。

「つ!? あたしをみなさい! キュアシャイン!!」

そんな蛭の前に、リリスが再び回り込んできた。

∴

リリスの乱入を受けてキュアシャインと分断されてしまったキュアブレイズは、一刻も早く彼女の元へ合流しようとする。

だが自分を囲むソルダークがそれを許さなかった。

1体、また1体と次々とソルダークが襲いくる。

「邪魔よ!」

右から迫るものを殴り飛ばし、左から迫るものに回し蹴り炸裂させる。

続いて2体が同時に同じ方向から襲ってくるが、キュアブレイズは両手に火球を作りだし、それを投げつけた。

火球は2体のソルダークの頭部に着弾し爆発、そのまま地上へ墜落するソルダークに目をくれず、キュアブレイズはキュアシャインの方を見る。

すると彼女は、リリスと交戦しながらも少しずつ大広間への道を進んでいた。

リリスのことは最低限の相手しかせず、ひたすら進み続けている。

彼女は自分の思いを叶えようと必死に戦ってくれている。

そしてそのための選択肢も誤らず、目前に迫る驚異よりも、今成すべきことにのみ目を向けてくれている。

「キュアシャインー！」

そんなキュアシャインの思いに応えたい。

だがそう思った矢先、ソルダークが起き上がり再びキュアブレイズに飛び掛かってきた。

キュアブレイズは迫りくるソルダークの1体の攻撃を回避し、次なる1体の攻撃を素手で受け止める。

そして上空から続く1体の攻撃を火の盾で防ぐが、さらに左右から2体のソルダーク

がひっきりなしに襲いかかってきた。

キュアブレイズはやむを得ず、全身から炎を噴出して火の壁を作りソルダークをけん制する。

そして素手で受け止めたソルダークをいなして、火の壁から脱出した。

何とか脱出に成功したものの、強化されたソルダークを複数怯ませられるほどの力を使ったのだ。

その分の消耗も大きく、キュアブレイズは息を切らす。

わずかな時間、キュアシャインの方へ目を向けただけでも、ソルダークの猛攻を受ける隙を与えてしまい、希望の光を大きく使ってしまった。

まだこの先戦いは続くと言うのに、体力と気力が持つかと不安に駆られる。

ほんの少し前、キュアシャインと共に戦っていたときはそんな不安も抱かなかったのに、とここでキュアブレイズは、ホープライトプリキュアが結成されたときのことを思い出した。

あの時キュアシャインは、弱い自分は無茶をしなければキュアスパークとキュアプリズムの隣に並ぶことができないと叫び、ソルダークの隙を作るために果敢に挑み、行動隊長を一人で足止めした。

彼女自身、自分の力について誰よりも理解し、自覚していたからこそ、身を挺して囀

役を引き受けてきたのだ。

そんな彼女とともに戦えたことで、キュアブレイズはキュアシャインの有難みを実感した。

彼女が率先してソルダークを引き付け隙を作ってくれていたので、キュアブレイズも必要最低限の力のみで敵をいなすことができていたのだ。

リリスの乱入がなかったら、大広間へ辿りついても今ののように息を切らすことはなかっただろう。

確かにキュアシャインにはソルダークと正面から戦えるだけの力も、自分の意思で浄化することもできない。

だがこれまでの戦いも、キュアシャインが囷となって敵の注意を引き付けてくれたから、キュアスパークは存分に力を振るうことができ、キュアプリズムはサポートに専念できるのだ。

そんな彼女の力も覚悟も知らず、彼女の表面的な能力しかとらえず、足手まといだ、邪魔だと酷いことを言ってしまった。

かつてキュアスパークとキュアプリズムが自分に返してきた言葉、キュアシャインは重要な戦力と言うのは、紛れもない事実だったのだ。

その言葉の意味がようやくやくわかり、同時にキュアブレイズは深い罪悪感を抱くが、そ

れを無理にでも心の内に閉じ込める。

彼女への謝罪は、この戦いが終わってからいくらだつてすればいい。

今はキュアシャインを助けることを最優先としよう。

絶望の闇が満ちたこの空間は、行動隊長の力さえも大きく高めてしまう。

かつてこの世界から脱出するとき少しだけ彼女と相對したが、あのまま戦つても勝てる見込みはなかっただろう。

重要な戦力たるキュアシャインを、今ここで失うわけにはいかないのだ。

「逃がさないわよ・キュアシャイン!!」

リリースの爪がキュアシャインを捉え、目前まで迫っていたところに、キュアブレイズは後方から追ってくるソルダークの群れに目もくれず、リリースの爪をめぐけて火球を飛ばした。

火球は狙い通りに着弾し爆発する。

あの程度でダメージを与えられるとは思えないが、爆炎が目くらましとなりリリースは目を瞑った。

その隙にこちらに気づいたキュアシャインが、安堵の笑みを浮かべてこちらに向かい手を差し出す。

キュアブレイズは差し出された手をしっかりと握り、彼女をこちらへと引き寄せた。

「大丈夫？ キュアシャイン？」

「うん、ヘーキだよ。」

ありがとう、キュアブレイズ。」

こちらの言葉に、キュアシャインは無垢な笑顔で答えた。

一切の邪気を感じない、彼女の心の底からの感謝の気持ちがキュアブレイズに伝わってくる。

少し気恥ずかしくなり、キュアブレイズは僅かにキュアシャインから顔を背けるが、そんな自分を見てもキュアシャインは笑みを絶やさなかった。

「っ!? キュアシャインに近づくな!!」

そんな自分たちが癪に障ったのか、リリスが怒声をあげながら飛んでくる。

前方にはリリス、後方にはソルダークの群れ。

だがもうキュアシャインの側を離れるつもりはない。

彼女と協力して、大広間へと向かうのだと、キュアブレイズは決意するのだった。

：

雛子は迫り来るソルダークの攻撃を捌きながら、アンドラスに立ち向かうキュアスパークをサポートしていた。

それでいて周囲に蔓延るソルダークたちへの警戒も怠らない。

最初はソルダークたちの一斉攻撃を警戒していたが、周囲のソルダークは迂闊な攻撃には出ず、アンドラスと対峙するキュアスパークが隙を見せたところを見計らって攻撃を仕掛けて来た。

それも複数で仕掛ける際も同時攻撃ではなく、間隔を開けての波状攻撃だ。

どれだけの数の敵がいようと、全ての攻撃が同一のタイミングで飛んでくるのなら、プリキュアの能力を持ってすれば、それに合わせて防御ないし回避行動に移ることで、全ての攻撃を捌くことができる。

全方位から針の糸を通す隙間もないほどの密度の高い攻撃が飛んでこない限りは、多方向からの同時攻撃を凌ぐことはそこまで難しくないので。

だが波状攻撃は初撃を捌けても次なる一手が絶え間なく飛んでくる。

それもこちらの行動を確認してから次の一手を取る事ができるし、最悪の場合、こちらの次の行動を読まれた上での攻撃まで飛んでくるのだ。

スピードに長けたキュアスパークとは言え、アンドラスと戦いながらそれを全て捌き

きるのは困難を極めるし、こちらもソルダークの攻撃を防ぎかわしながらなので、キュアスパークのサポートにばかり気を回すことも出来ない。

「はあああつー！」

そんな中でもキュアスパークは雄叫びと共に果敢にアンドラスに攻め込んでいく。

アンドラスはその巨大な手のひらでキュアスパークの攻撃を受け止め、そのタイミングを目掛けてソルダークが1体キュアスパークへと飛び掛かる。

さらにキュアスパークがソルダークに気を取られている隙に、アンドラスが手のひらを閉じ始めるが、キュアスパークは手のひらを足蹴にしてその場を飛び退いた。

そして向かう先は彼女目掛けて飛んでくるソルダークのいる方向。

飛び退いた勢いのまま全身に雷を纏い、ソルダークへと突撃した。

キュアスパークの体当たりを受けたソルダークはるか後方へと飛ばされるも、そこで足を止めた彼女へ突撃しようと、他のソルダークが身構える。

だが雛子はその瞬間を逃さず、飛び行こうとするソルダークの前方に盾を展開する。勢いよく頭を打ち付けたソルダークはその場で俯けに倒れる。

今度は雛子の元へ複数のソルダークが襲い掛かる。

雛子は正面からの突撃を盾で遮り、続いて左右から来るソルダークの攻撃に対してバリアを展開する。

すると後方にいるソルダークが一斉に雛子に飛び掛かった。

バリアを展開してしまったために雛子はこの場から動くことができない。

同時攻撃で威力を集中させてバリアを砕き、一気に包囲殲滅するつもりなのだろう。

雛子は展開したバリアを意図的に爆発させ、周囲のソルダークの目を眩ましその隙について脱出する。

そして比較的安全の位置まで距離を置き、再びキュアスパークの方へと向く。

自分が目を離れた一瞬で戦況が変わっていないかと不安になったが、幸運にもキュアスパークはまだアンドラスと対峙しており、その足元には複数のソルダークが地に倒れ伏していた。

単独でアンドラスと戦いながら複数のソルダークをあしらえる当たりさすがキュアスパークと言いたいところだが、一方で先ほどのソルダークの猛攻が全てアンドラスの指示によるものだとしたら、彼はキュアスパークと戦いながらもソルダークに指示を出せるだけの『余裕』があることになる。

それに先ほどから洗練されたソルダークの軍勢による波状攻撃も妙なものだ。

行動隊長が名を呼ぶだけでソルダークの行動を制御できるように、アンドラスは何らかの手段でソルダークに対して指示を送っているのかもしれない。

それに今は地に倒れているソルダークもいずれすぐに起き上がってくる。

戦況は一向に良くなる気配はなく、このまま戦い続けられればこちらの体力と気力は消耗する一方なのでむしろ悪くなる。

それでも雛子は弱音を決して吐かず、意識を戦いにのみ集中させる。

言葉通り絶望的な戦力差だ。

浄化技でソルダークを1体倒したところで状況は何も変わらない。

むしろこちらの体力を大きく消耗してしまうので現状はデメリットにしかならない。

もしもこの作戦が、この一帯のソルダークの掃討なのであれば、とつくに敵わぬと見て絶望の闇に飲まれていただろう。

だが目的は掃討ではない。

キュアブレイズが大広間まで辿りつき、希望の鐘を鳴らすまでの間の時間を稼ぐだけだ。

それならば言葉通り、希望がある。

アンドラスからキュアブレイズを逃すことに成功した今、キュアスパークと協力して時間を稼ぐことができれば勝ちなのだ。

だが雛子は2人の様子が気になり、気配を探ってみると、覚えのある闇の力も一緒に探知した。

(まさか、リリースがこの世界に来ているの?)

あのタチの悪いストーカーはがキュアシャインを追ってわざわざこの世界まで来たと言うのか？

悍ましいほどの執念だが、キュアシャインの気配の近くにはキュアブレイズの気配もあり、2人が引き離されていると言うことはなさそうだ。

それに2人とも大広間へと反応を近づいている。

このまま進めば作戦通りに希望の鐘まで辿りつくことができると思ったその時、

「ちっ、リリスのやつめ。足止めに失敗したか。」

まあいい、貴様らとのお遊びはここまでだ。」

アンドラスがまるでこの戦いを見戯だとしても言わんばかりに切り捨て、その大翼を飛ばたかせて突風を引き起こした。

突風はキュアスパークを飲み込み、地に倒れるソルダーク諸共彼方へと吹き飛ばす。

「うわあああつ！」

「キュアスパーク！」

強大な絶望の闇を纏った突風を前にキュアスパークは成す術もなく飛ばされてしまう。

雛子は彼女の元へと飛び立ちその体を受け止めるが、アンドラスが狼の口を向けてきた。

そして狼の口に凝縮された絶望の闇が解放され、巨大な光線へと変わり雛子の元へと放たれる。

感じられる闇の力は、これまでのどのソルダークよりも、行動隊長のものよりも強力で、雛子はキュアスパークを抱えたまま、ありつたけの力を込めて盾を展開し光線を遮断する。

だがアンドラスは攻撃を止めなかった。

狼の口から放たれ続ける光線は絶えることなく雛子の盾を蝕んでいき、やがて少しずつ盾にヒビが入り始める。

だが雛子も希望を鈍らせず、盾に入ったヒビを修復していった。

「キュアスパークにキュアプリズム、中々の力と褒めてやろう。」

それを評して貴様らに1つチャンスを与えてやる。」

攻撃を続けながらアンドラスが称賛の言葉を口にする。

だがその口調はおよそ人を褒めているようには思えなかった。

むしろこちらを小バカにしているかのような、そんな口調だ。

「追えるものなら、追ってくるの良い。その時は面白い余興を見せてやろう。」

その言葉とともに、アンドラスは盾に干渉している光線の先端を爆発させた。

爆発を前に雛子もキュアスパークも思わず目を瞑るが、その隙にアンドラスは大翼を

羽ばたかせ、その巨体で空を飛び去っていく。

「しまった！」

キュアスパークが叫び、雛子もアンドラスの飛び去る進路を見て驚愕する。

あの方向は大広間へと向かう道、つまりやつはキュアブレイズとキュアシャインの元へと向かったのだ。

そして追うことができたなら面白い余興を見せてやると言う言葉。

やつはキュアブレイズかキュアシャインを使って余興をするつもりだ。

その余興が何を意味するのかは、ダークネスの性質を鑑みれば容易に想像がつく。

「急いで向かわないと！」

焦る雛子だが、キュアスパークが自分の肩に手を添える。

「キュアスパーク？」

「周り見てみ。」

そして彼女に促されるように周囲を見渡すと、これまで以上の数のソルダークが自分たちを囲んでいた。

アンドラスの言う、追えるものなら追って見ろとは、この数のソルダークを撒けるものなら撒いてみるという言葉なのだろう。

「キュアスパーク、あなたソルダークに追いつかれない自信はある？」

だが、そもそもこちらはソルダークの相手なんてするつもりはない。

「誰に向かつてものを言ってるん？」

そしてキュアスパークも頼もしい言葉と笑みを見せてくれた。

どれだけ数がいようと関係ない。

それこそアンドラスの言う通り、追いつかれなければいいだけだ。

「決まりね。」

進路を邪魔するソルダークは私が叩き落すから、キュアスパークは全速力でお願い

！」

「おっしやー！」

その掛け声とともにキュアスパークは雛子の手を強く握り、可能な限りの速度でアンドラスの後を追う。

ソルダークが前に出れば一旦減速し、雛子が前方に盾を展開して叩き落とし、キュアスパークはそれを足蹴に再び加速する。

その後も、四方八方から飛び交うソルダークたちを雛子が盾で落としてキュアスパークが盾を足蹴に減速した分を取り戻す、を繰り返していき、2人はアンドラスに少し遅れて大広間へと向かうのだった。

:

チエリーたちは転送術を使い、大広間に続く路地裏の細道へと辿りつく。

あの場にいたところで足手まといにしかならないが、だからと言って、プリキュアの周囲をソルダークたちが囲っているあの状況では、彼女たちをこちらに呼ぶ暇もなかった。

だからせめて一足先にここに着き、彼女たちの到着を待つことにした。

周囲にソルダークの気配を感じるが、この狭い路地なら身を隠すには十分だし、見つかつたとしてもやつらも無理に追つて来れないだろう。

チエリーたちは大広間へと通じる道の出口まで歩いて進む。

途中路地の隙間から街の様子が見え隠れしたが、絶望の闇に満ちた人と妖精が道端に倒れ伏す、あるいはアテもなく徘徊しているばかりの心苦しい状況ばかりが目映る。

そして出口まで辿りつき僅かに顔を覗かせると、目の前にはモノクロに変わり果てた大広間の景色が拡がっていた。

その中央には、円形のアーチに吊るされた大きな鐘があつた。

年に一度、その年の国の繁栄を願って鳴らす希望の鐘だ。

自分たちフェアリーキングダムに住む人々にとって、その鐘の音そのものが希望の象徴だ。

その鐘を、キュアブレイズが希望の光を込めて響かせることができれば、この街にいる人たちが希望を取り戻すきっかけとなる。

キュアシャインとキュアブレイズが力を合わせて考案したその作戦を、チェリーたちもまた信じていた。

そしてキュアブレイズの思いを叶えるためにも、自分たちも希望を捨てるわけにはいかない。

「震えているけど、大丈夫チェリー？」

するとアップルが心配そうな表情でこちらを伺ってきた。

「無理もないさ。俺だって不安だよ。

本当に上手くいくかどうかの確証もない。

それでも、あの子たちを信じるって決めたのは俺たちだ。」

ベリイが、まるで自分自身に言い聞かせるようにそう語りかける。

「大丈夫、きつと上手くいくよ」

だってキュアブレイズが、みんなに力を貸してくれてるんだもん。」

そしてレモンは変わらぬマイペースな口調がチェリーの緊張をほぐしてくれた。
「そうよね、キュアブレイズが、ようやくプリキュアが4人揃ったのももの。

大いなる奇跡は、必ず起こる。」

伝説の戦士である4人のプリキュアが、黒き闇が空を覆うこの地に降りたのだ。

そしてこの地に来て初めて、4つの光が1つの元を集った。

強い力と思いを備えたあの子たちが、心と力を1つに合わせて戦ってくれている。

そんなあの子たちを信じて、自分たちの出来る限りのことをしよう。

「あつ、見て。キュアブレイズが．．．

えっ．．．?」

するとキュアブレイズの姿を確認したレモンが言葉を失う。

チェリーたちもレモンと同じ方に目を向けて絶句する。

視界の先にはキュアブレイズと、リリスともつれ合うキュアシャイン、そしてその背

後から巨大な怪物が空を覆うかのように飛翔していた。

：

キュアブレイズはキュアシャインと協力して、迫るリリスとソルダークの群れを撒きながらついに大広間へと辿りついた。

大広間には何人もの人が俯き、倒れ、徘徊しているが、その光景に心を乱すことなく、キュアブレイズはより強く決心する。

(みんな、もうすぐ、もうすぐで必ず助けて見せるわ！)

視線の先には円形のアーチ、そこには希望の鐘があった。

この世界から逃げて、いや、世界の大半を闇に失ったときからずっと思い描き続けて来た願い。

フェアリーキングダムから絶望の闇を祓い、人と妖精が手を取り、共に生きていく素敵な世界、かけがえのないこの世界をあるべき姿に戻したい。

この世界の人たちのため、ともに逃げ延びたチェリー、ベリイ、レモン、アップルのため。

そして、この世界が大好きな自分のために。

あの希望の鐘を鳴らしても、何も変わらないかもしれないと言う不安は今でもある。

だが今は自分の力を、プリキュアの希望の光を信じてみたい。

希望の光は思いの力。

自分を信じて願いを強く持てば、それはきつと形になる。

それに半年前とは違い、今は共に戦ってくれる仲間がいるのだ。

あちらの世界で誕生した3人のプリキュアが、自分と同じ思いを抱いて一緒に戦ってくれている。

それは、キュアブレイズに自分を信じる強さを与えてくれたのだ。

彼女たちの言葉がなければ、昨日の自分のように、この世界を救えるのだと心から信じることはできなかったかもしれない。

だけど今、4人のプリキュアが思いを1つにして、この世界から絶望の闇を祓うと言う大いなる奇跡をもたらそうとしている。

そう、自分を信じることであれば、伝説の通りの奇跡を起こせるかもしれない。

キュアブレイズは思いを強く拳に込めて、真っ直ぐ希望の鐘へと向かって行く。

その時、

「やはり狙いはその鐘か。」

「えっ?」

上空よりくぐもった声が聞こえる。

見上げるとそこには20mを超える巨体が大きな翼を羽ばたかせて空を隠していた。

「アンドラス!」

名を叫ぶと、アンドラスは指の爪を立て手を振り降ろしてきた。

キュアブレイズはそれをかわしながら一度距離を開けて足を止める。

同時にキュアシャインがリリスに追いつかれ、もつれ合いながら地面を転がる。

「キュアシャイン！」

キュアシャインの援護にまわろうとしたが、自分の頭上からアンドラスが降下し、四つの足で踏みつけにきた。

寸でのところかわしたキュアブレイズは、かつてアンドラスがいた方向の気配を探る。

キュアスパークとキュアプリズムと戦っていたはずのアンドラスがこちらにきたことから、一瞬最悪の事態を想定したが、2人の希望の光を感知することができ、それら多数のソルダークに囲まれ流れはあるが、少しずつこちらへと向かっていた。

状況こそあまり良いとは言えないものの、一先ずは無事であることに安堵するも束の間、アンドラスがこちらを向きフクロウの目で睨み付けて来た。

一刻も早く鐘の音を鳴らしたいし、リリスと戦うキュアシャインにも、ソルダークに囲まれているキュアスパークとキュアプリズムの援護にも回りたいが、目の前にいる怪物がそれを許してくれないだろう。

キュアブレイズはアンドラスと対峙する覚悟を決め、火球を目の前に投げつけた。

火球はアンドラスの胴体に直撃し爆発するも、アンドラスは微動だにしない。

この程度の火力では一切のダメージが通らない。ならばと、キュアブレイズは両足から炎を噴射し、推進力に変えてアンドラスへ突撃する。

だがアンドラスは巨体に似合わぬ機敏な動きで飛翔し、キュアブレイズの突撃を回避した。

そして右手を振り上げ、キュアブレイズの元へ振り降ろす。

キュアブレイズは片足を横に向けて炎を噴射し、空中で軌道を変えてその場を離脱、さらに空を蹴り宙を舞い、アンドラスの頭上を取る。

そして全身に炎を纏い、アンドラスの頭上へと突撃した。

「はああっ!!」

まるで隕石のように突撃するキュアブレイズに対して、アンドラスは距離を開けようとするが間に合わず、その攻撃を顔面に受ける。

さらにキュアブレイズは纏っていた炎の力を全面に解放し、アンドラスの顔を中心として大爆発を引き起こした。

大広間全体に巻き起こった爆風を前に、リリスとキュアシャインも驚き振り向く。

そして爆炎の中、離脱したキュアブレイズは距離を開けて地面に着いた。

荒い呼吸を整えて爆心地の方へ目を向ける。

「ククク、それで終いか？ キュアブレイズ。」

だがそんな自分の疲れをあざ笑うような声とともに、爆炎の中からアンドラスが姿を現す。

浄化技ほどでないにせよ、希望の光を大きく消耗した一撃を受けたはずなのに、まるで応えた様子を見せていなかった。

行動隊長の上に立つものとはいえ、あまりにも大きな力の差を前に、キュアブレイズは歯噛みをするも、アンドラスが跳躍してこちらに向かってきた。

悔しがる間もなく、振り降ろされる拳を避けるも、続けざまにアンドラスは両翼を羽ばたかせて突風を引き起こした。

矢継ぎ早に繰り出された突風の範囲外へと逃げる事が出来ず、キュアブレイズは吹き飛ばされ、煉瓦の家に激突する。

さらにアンドラスは狼の口を開き、絶望の闇を光線に変えて解き放った。

キュアブレイズはすぐさま炎の盾を生み出すも、放たれた膨大な絶望の闇を受け、炎の盾は脆くも砕け散った。

そして無防備となったキュアブレイズは光線の直撃を受け、背後の家と共に爆発に飲み込まれた。

「キュアブレイズ！」

こちらに駆けつけたキュアシャインとキュアスパークから叫び声上がるも、片やリリスに邪魔をされ、片やソルダークに囲まれた状態のため、救出に向かうことも出来ない。

そしてキュアプリズムもキュアスパークの援護と自身の身を守るのに手いっぱいだった。

爆発が収まり、瓦礫の下敷きとなるキュアブレイズ。

だがその闘志はまだ尽きず、瓦礫から這い出てアンドラスを睨み付ける。

「まだ……終わってないわ。私は……この世界を……。」

救いたい、そう言おうとしたその時、

「お前がここに来ることはわかっていた。」

「え……?」

アンドラスから信じられない言葉が飛んできた。

「だが、わかっていたとはいえ驚いたよ。」

まさか貴様が本当に、こんなつまらぬ希望に縋るとはな。」

話ながらアンドラスは希望の鐘へと近づいていく。

自分がこの地を訪れて、希望の鐘を鳴らすことを彼は想定していた。

だから妨害のために、キュアスパークとキュアプリズムを撒いてこの地へと飛んでき

たのだろう。

それならば、今鐘の元へと近づくとアンドラスが何を目論んでいるのか、キュアブレイズは最悪の事態を想定する。

「させ・・・ない。」

あの鐘を鳴らしに来たことがバレているのなら、やつのは目的は鐘の破壊だ。

そうはさせまいと心を強く持つが、傷ついた体は思うように言うことを聞かず、立ち上がることさえ困難な状態だった。

そしてアンドラスが鐘の元へと辿りつき、その拳を振りかざす。

「やめてー！」

キュアブレイズの叫びも虚しく、振りかざしたアンドラスの拳は真っ直ぐ鐘へと打ち付けられる。

ゴーン

だが直後、鐘の音が広間に響き渡った。

あまりにも想定外の状況が訪れ、キュアブレイズは混乱する。

なぜ彼がこちらの目的を果たすような真似をしたのか理解できなかった。

希望の鐘を鳴らすことを、ダークネスが行うメリットは何もないはずだ。

「・・・えっ?」

だがここでようやくキュアブレイズは、今の事態を認識する。

アンドラスによつて鐘の音が鳴らされたのにも関わらず、街行く人々は変わらぬ姿のままだった。

希望の鐘は、ただ虚しく大広間に響き渡るだけだったのだ。

第13話・Bパート

大広間にある希望の鐘。

年に一度の建国記念日を祝し、その日のみ王族によつて鳴らされるそれは、この世界の人々にとつて一年の平和と繁栄を持たらすものとされておられ、それ自体が希望の象徴と言えるものだった。

その鐘の音が、絶望に飲まれた人たちに希望を思い出させてくれると信じて、キュアブレイヴはここまで来たのだ。

アンドラスがこの場に現れ妨害してきたのも、その鐘が希望の鍵となると確信があったからだ、そう思っていた。

だが今しがた、目の前でアンドラスによつてその鐘が鳴らされたが、その音は大広間に響くだけで虚空へと消えていき、道行く人々には一切の変化が見られなかった。

愕然としたキュアブレイヴは、ようやく立ち上がりかけた膝を折り再びその場に崩れ落ちてしまう。

自分の信じていたことは間違っていたのかと、不安が胸に付きまとい離れなかった。

「哀れだなキュアブレイズ。」

この世界に戻りさえしなければ、このような現実を目の当たりにせず、かの地にて平穏を享受できたと言うのに。」

アンドラスの言葉と同時に、ソルダークたちは一斉に行動を止め、リリスさえもキュアシャインを解放した。

「キュアブレイズ！」

「キュアブレイズ！大丈夫?!」

だがこちらに向かおうとするキュアスパークとキュアプリズムの道を、ソルダークが阻んだ。

リリスも解放こそすれど、キュアシャインから視線を外さない。

3人のプリキュアは、キュアブレイズとアンドラスの言葉にただ耳を傾けることしか出来なかった。

「ましてこのようなお伽噺に縋るとは。お前がそこまでお目出度いやつだったとはな。」鼻で笑うようなアンドラスの声が、弱り切ったキュアブレイズの心を蝕んでいく。

この世界を救うために戻って来たはずなのに、現実には、この世界を救う術などない。残酷な答えを突き付けて来た。

こんなものを見るために来たのではない。これならいつそ来なければ良かったと、

キュアブレイズの心の奥底が訴えてくる。

だがその心情を否定するように、キュアブレイズは首を振るう。

これは絶望の闇に飲まれる兆候だと知っているからだ。

(ダメ！心を強く持たなきゃ！)

このまま負の思考に飲み込まれたら、希望の光さえ霞みプリキュアの力も失いかねない。

それに今の状況はどう考えたっておかしい。

自分たちを倒す機会はいくらでもあったはずなのに、アンドラスは敢えて自分がこの場所に来ることを見逃し、リリースとソルダークに対してキュアシャインたちへの攻撃命令さえも解除している。

プリキュアたちも含め、みんなが今自分の方を注目している状態だ。

となればアンドラスの狙いも想像がつく。やつはみんなが見ている目の前で自分を絶望させることが目的なのだ。

この状況もやつの言葉も、全てが絶望へ誘うための演出だ。

その策に踊らされてはいけない。

だが頭では理解出来ても、心はそれと逆へ作用していく。

現実として、希望の鐘を鳴らすだけでは人々が希望を取り戻すことはなかったのだ。

自分は間違っていた。来なければよかった。この世界を救う方法なんて最初からなかった。

そんな思いが次々と現れては消え、そして再生されていった。

「あるいは、そこにいる誰かの影響でも受けたか？」

「っ!？」

そして続くアンドラスの言葉に、キュアブレイズは思わずキュアシャインの方を振り向いてしまった。

キュアシャインが不安を帯びた表情でこちらを見る。

そうだ。あの子の言葉にさえ耳を傾けなければ……。

そんなあまりにも身勝手な言葉さえも、キュアブレイズの脳裏をかすめた。

確かに自分はこの子の言葉を、絵空事と馬鹿にし耳を傾けようとさえしなかった。

ただどあの子の、奇跡を信じることの出来る思いの強さを知った今は、その強さを信じてみたいと思っただけだ。

それがこの状況になって、あの子の言葉さえ信じなければだなんて、虫が良すぎる。

そう、頭では分かっている。

だがそれならばなぜ、信じた方法でこの世界を救うことができなかつたのだ？

この世界を救いたいと願う気持ちが足りていなかったのか？

いや、自分は誰よりもこの世界を守りたいと、救いたいと思つていたはずだ。

それならば、最初からこの方法では世界を救えなかつたということか？

どれだけ強くこの世界を救いたいと願つても、それは決して叶わぬ夢だつたと言ふのか？

深い哀しみがキュアブレイズの中に溢れ、そして心はまた逆に作用する。

彼女の言葉さえ鵜呑みにしなければ・・・。

他にもつと、効果的な方法があつたのではなかつたのか？

何かのせい、誰かのせいになければ、この世界を救うことができなかつたという絶望に、飲み込まれてしまいそうだった。

「ククク、凶星のようだな。

絶望の闇に飲まれた人間は五感を失う。

鐘を鳴らしたところでその音が耳に届くはずもない。

絶望の闇の特性を知るお前なら、その程度のこと深く考えるまでもなくわかることだろうに、愚かな仲間には踊らされて、つまらぬお伽噺を信じてしまうとは。」

まるで今の自分の心境を知っているかのような言葉が、心に深く刺さっていく。

ズブズブと、音を立ててゆっくりと少しずつ、心の内へと沈んでいく。

「キュアブレイズ！ やつの言葉に耳を傾けてはダメ！」

だがキュアプリズムの声が聞こえ、キュアブレイズは残る理性を必死にかき集め、心に沈みゆく淀んだ言葉を振り払う。

これは罠だ。心臓を抉るような言葉も、キュアシャインを咎めるような言葉も、全て絶望へと誘うためだ。

作戦が失敗の終わったのは事実だが、このままアンドラスの言葉に耳を傾けては、全てがやつの思い通りに運んでしまう。

「キュアブレイズよ、お前に一つ問う。」

聞いてはダメだ！

どのような問いかけであれ、それは絶望へと誘う撒き餌なのだ。

「なぜこの世界にはお前以外のプリキュアが誕生しなかったか、考えたことはあるか？」
「え……？」

だが決して聞くまいと思った言葉は、耳を傾けざるを得ない悪魔の囁きだった。

「何を……言つて……？」

「考えたことがないのであれば教えてやろう。」

お前は、この世界の人々にとって希望でありすぎたのだよ。」

問われている言葉の意味もその答えの意味もわからなかった。

だがその言葉はまるで、自分のせいだと非難されているようだった。

「私が希望でありすぎたって……どうゆう意味よ……?」

「キュアブレイズ!!」

耳を傾けるなど意を込めたキュアプリズムの叫びが聞こえるが、キュアブレイズはアンドラスの言葉から耳を離すことができなかった。

知りたくもないはずの答えを求めて、悪魔の囁きに引き寄せられていく。

「お前はここの世界の希望を背負い、人々の前に立ち、我らから光を取り戻さんと戦い続けた。」

そうだろう? この世界の姫君よ。

だがもし、お前がプリキュアとして覚醒しなければ、この世界の人々はどうしたと思う?」

誰もが己が希望を守らんとし、個々で立ち上がったとは思わんか?」

「っ!」

そこまでの言葉を聞き、キュアブレイズはアンドラスの言わんとすることを悟った。「だが不運にも、お前が最初のプリキュアとなってしまった。」

現国王の娘にして次期女王、いずれこの世界の未来を導くもの。

この世界の希望の全てを背負うのに何よりも相応しいお前が、希望の現身たるプリキュアとなった。

そしてお前は一人で我が率いる軍勢と戦い続け、2人もの行動隊長を打ち破った。ならば誰もがこう思うだろう。

自分がこの世界の希望を背負って戦う必要はない。

全てをお前に任せられる。全ての希望をお前に委ねようと。

ククク、誠に哀れよな。

お前はいつかこの世界に残りのプリキュアが誕生することを信じて戦ってきたのだろうが、お前が戦えば戦うほど、プリキュアの可能性を持つ人々の芽を摘むんでいったのだから。

フェアリーキングダム の姫君としてのお前の立場が、最初のプリキュアとして覚醒したお前の存在が、この世界の人々の希望を取り戻すどころか、自ら立ち上がる希望を奪っていったのだよ。」

「私が……みんなの……。」

かすれた声で呟くキュアブレイズの表情が見る見るうちに強張っていく。

叫びたくても声が出なかった。

否定しようとするほどの、それは都合の悪い現実から目を反らしているようにし

か思えなかった。

もしこれが事実だとするならば、

「私は……いままで何のために……？」

戦ってきたというのだろう。

ダークネスを倒し、この世界を覆いし闇を祓い、人々の不安の元凶を取り除き、また人と妖精が手を取り過ぎず平和を取り戻すために戦ってきたのに。

そんな自分が人々から希望を奪っていたのだとすれば、この惨状は……。

「だが、そんなお前も最後には我らに勝つことができなかつた。

お前によつて希望を奪われ、自らの意思で立ち上がることでできないものたちは、無抵抗のまま闇に飲まれていくことになったのだよ。」

「私の……せい……？」

その瞬間、プツリと、自分の中で何かが切れた。

糸の切れた操り人形のように、キュアブレイズは力なくその場に項垂れる。

あまりのショックに涙すら出てこなかつた。

いや、自分には涙を流す資格さえないのだろう。

なぜならこの世界が希望を失い、絶望の闇に飲まれてしまったのは、

「そうだ、全てお前のせいなのだよ。キュアブレイズ。」

他ならぬ自分自身なのだから。

悲しみ、嘆き、喪失感、罪悪感。

様々な感情が織り交ざり、絶望へと昇華していく。

それはキュアブレイズから希望の光を奪い、絶望の闇へと変えていった。

「ほら、聞こえてこないか？この地に渦巻く絶望の声が。

お前の敗北を嘆くこの世界の人々の声が。」

光も音も失っているはずのこの世界に、自分たち以外の声が聞こえるはずがない。

だがこの世界から希望を奪った元凶は自分だというキュアブレイズの強い思い込みと罪悪感が、聞こえるはずもない声さえも作り出していった。

あなたのことを信じていたのに、この世界を守ることができなかつた。

あなたは俺たちを裏切つた。

世界がこんなにも暗いのも、私たちがこんなにも苦しい思いをしているのも、全てお前のせいだ。

キュアブレイズ。

キュアブレイズ。

キュアブレイズ。

「あっ……ああっ……。」

キュアブレイズは壊れた機械のように何度もうめき声を繰り返すことしかできなかった。

「キュアブレイズ！」

「キュアブレイズしっかりして！」

キュアスパークとキュアプリズムの呼びかけにも答えることができない。

やがてキュアブレイズの身に宿る光が少しずつ失われていく。

その光景にアンドラスが勝利を確信し微笑む。

だがその時、

「アタラメなこと、いわないでよ……。」

小さく、だがはつきりと聞こえる声とともに、キュアシャインが立ち上がった。

・
・
・

リリースとの戦いで傷ついた体はもうボロボロで、キュアスパークとキュアプリズムはソルダークの大群を相手し、これまで圧倒的な力で自分の窮地を救ってくれたキュアブレイズは、アンドラスに手も足も出ずに敗北した。

その現状に蛭は震えて言葉を失っていた。

湧き上る恐怖心から、この世界をすぐに離れたいとさえ思い始めた。

そしてキュアブレイズの目の前でアンドラスが鐘の音を鳴らした時、蛭は自分の思いが間違っていたのではないかと言う不安に押し潰されそうになった。

だがキュアブレイズを陥れようとするアンドラスの言葉を聞き、蛭は怯える身体を奮い立たせながら、真っ直ぐアンドラスを見据えた。

そして彼の言葉を聞いていくうちに、沸々と怒りが込み上げてきた。

「なんだと?」

不愉快そうな声をあげるアンドラスを、蛭は正面から見据える。

視界に広がる巨体にも、獲物を狙う猛禽類の眼光にも負けないように、強い意思を込めて言葉を綴る。

「このせかいのひとたちのこと・・・なにもしたらなくせに、デタラメなこと、いわないですよ!」

「・・・そうか、貴様か。キュアブレイズにお伽噺を吹き込んだのは。」

だが、これが現実だ。

貴様がどれだけ夢を見ようとも、鐘の音を鳴らした程度で人々は解放されないのだよ。」

何かを納得したようにアンドラスは腕を組み、自分の思いを否定する。

だが蛍はもう、その程度の言葉では挫けない。

全てわかったからだ。アンドラスの目的も、そしてなぜ鐘の音を鳴らしても、人々が希望を取り戻さなかったのかも。

「・・・あなたは、どんなおもいをこめてその鐘をならしたの?」

「何?」

「このせかいのひとたちをたすけたいって、そんな気持ちですこしでもこめたの?」

何のおもいももっていないあなたが、ただ鐘をならしたって、なにも起きないよ!」

力なく項垂れていたキュアブレイズが、蛍の言葉に僅かに顔をあげる。

そして蛍はキュアブレイズに目を合わせ、彼女に語りかけるように言葉を綴った。

「思いを込める?」

ふん、バカなことを、そんなことで絶望の闇に飲まれた人に鐘の音が届くわけが」

「とどくよ、ぜったいにとどく。」

キュアシャインは力強い声でアンドラスの言葉を遮る。

「だってキュアブレイズは、だれよりもこのせかいのことが好きで、このせかいのひとたちを、たいせつに思ってるんだよ？」

キュアブレイズははつきりと目を開き、蛍から視線を外さなかった。するとアンドラスは目でリリスに合図を送る。

合図を受けたリリスは、その爪で蛍の体を引つ掻いた。

掻かれた衝撃で蛍は地面に倒れるが、再びゆっくりと立ち上がる。

「ふっ、言ったはずだ。」

そいつは人々から希望を取り戻そうとして、逆に希望を……」

「うばってなんかない。キュアブレイズはそんなことしてないよ！」

アンドラスの言葉を蛍は再び遮った。

直後リリスの尾を腹部に受け、背を叩きつけられるが、それでもまだ立ち上がる。

「忌々しい！キュアシャイン！」

リリスが爪を立てて、蛍の胸部を狙って突こうとするが、蛍はリリスの腕を受け止めた。

「なにっ?！」

だがリリスには目もくれず、キュアブレイズへ言葉を伝える。

「それに、このせかいのひとたちは、キュアブレイズのことを恨んでなんかない！」
「え……？」

絶望の闇に囚われかけていたキュアブレイズから、ようやく声が漏れた。

蛭はキュアブレイズを安心させようと、リリスから顔をそむけてキュアブレイズに微笑む。

それが彼女の反感を買うことはわかっていたが、構ってはいられなかった。

「この世界に来たばかりの貴様に何がわかる？」

苛立たしげな色を含みながらアンドラスが問いかけてくる。

「わかるもん、それくらいのこと、わたしにだってわかるもん！」

だって、キュアブレイズが、このせかいのおひめさまなんだよ！

そのキュアブレイズが、たいせつにおもっているひとたちが、キュアブレイズのことを恨むなんてかんがえられないもん！」

キュアブレイズは良い人だから、そんなキュアブレイズを慕うこの世界の人たちだって良い人だ。

そんな考えは子供染みていると、アンドラスはバカにしているのだろう。

彼は反論せず、小さくため息を一つ吐くだけだった

だがアンドラスがどう思おうと関係ない。蛭はそれを信じて疑わなかった。

理由なんて知らない。細かな理屈なんて説明できない。それでもわかるのだ。

この世界を守るために一人戦い続け、自分の窮地を何度も救ってくれた優しい戦士、キュアブレイズのことを慕う気持ちは自分にだつてわかる。

彼女を信じる気持ちを抱けば、彼女を非難する気持ちなんて湧いてこなかった。

「ふん、ならばなぜこの世界の人々は、絶望に囚われたと言うのだ？」

アンドラスがこちらを試すように再び質問を投げかける。

だが蛭はその質問に即答した。

「みんな・・・キュアブレイズのことが好きだからだよ。」

「何？」

想定外の答えだったのか、アンドラスは驚愕する。

キュアブレイズの表情にも、驚きを隠せずにいた。

「キュアブレイズのことが好きで、こちらになりたいておもつたけど、なれなくて、それがくやくくて、みんな、やみにのまれちゃったんだよ・・・。」

この世界の人たちは、キュアブレイズを除いてプリキュアに覚醒することができなかった。

その理由は蛭にはわからないが、それはアンドラスが言うように、この世界の人たち

がキュアブレイズに全てを押し付けたからとは思えなかった。

むしろその逆で、どれだけ力になりたいと願っても、一緒に戦いと願っても叶わなかったことを、悔やんだに違いない。

かつて、キュアスパークとキュアプリズムと共に戦うのに、力不足であった自分がそう悔やんだことがあるように、大切に思う人と隣に立って守ることができないどころか、守ってもらおうことしかできないのは、とても悔しくて惨めになるのだ。

彼らはそんな感情に囚われてしまったのだろう。

でも、そんな風にキュアブレイズたちは互いを想い合っている。

だからキュアブレイズの思いは必ず、彼らのもとに届くのだ。

希望の鐘の音とともに。

だってキュアブレイズは、

「ねえ、キュアブレイズ。

あなたは、この世界が闇に囚われても、半年もチェリーちゃんたちと離れ離れになっても、ずっと、プリキュアに変身できていたんだよね？」

今日までずっと

「その希望、みんなにつたえよう？希望の鐘の音にのせて……。」

希望を失わずにきたのだから。

「キュアシャイン……。」

そして彼女の希望の源が今、こんなにも近くにいるのだから。

するとキュアブレイズから失われつつあった光が、再び輝きを取り戻していった。

「リリース！」

キュアブレイズの変化を見たアンドラスが怒声でリリースの名を叫び、リリースは爪を薙ぎ衝撃波を生み出す。

衝撃波を受けて吹き飛ばされた蛭は、背後の煉瓦の壁に叩きつけられた。

「キュアシャイン！」

蛭は力なくその場に崩れ落ちる。

もう戦える力は残されていない。

アンドラスどころか、リリースにすら勝つことができない。

勝てる見込みが欠片もない戦い、このまま自分が負けたらどうなるのかと、ふとそんな思いが脳裏をよぎったとき、

「あなた……泣いているの？」

蛭の頬を、一筋の涙が流れた。

涙はあつという間に決壊し、内々に秘めていた不安が一気に溢れ出す。

「だって……こわいもん……。もしわたしたちがまけたら……。」

わたしたちのせかいが……おとーさんが、おかーさんが、ともだちが、みんな……
そうおもうと……こわくて、こわくて……」

この世界にきてからずっと抱き続けてきた不安だ。

光を失い音を失い、色さえも失ったこの世界は、自分たちの世界の未来の姿ではないかと思うと怖くてたまらなかつた。

そして勝ち目のないこと戦いの中で、その不安は一気に膨れ上がった。

必死でその思いを隠し続けて戦ってきたが、敗北を目前とした中で、その思いがとうとう溢れてしまった。

それでも、

「それでも……たすけるって、きめたんだ……」

このせかいのひとたちを、チェリーちゃんを、ベリイさんを、レモンちゃんを、アツプルさんを、キュアブレイズを！

わたしは、たすけるって、きめたんだ！」

恐怖を克服することなんて、臆病な自分にはできない。

それならばせめて、そんな恐怖に負けただけの勇気を振り絞って、一步踏み出そう。

螢は両手を胸の前で強く握り目を瞑り、自分の中にあるありったけの勇気の欠片をかき集める。

「え・・・？」

だから蛍には、この時のリリスの表情を知ることができなかつた。

「がんばれ！わたし!!」

力強く自分を鼓舞すると同時に、蛍の全身から膨大な希望の光が巻き起こる。

「・・・ほたる・・・？」

リリスの眩きは、巨大な光の本流を前にかき消されていった。

∴

(どうしてあなたが、そのおまじないを知っているの・・・?)

両手を胸の前で握る、一歩踏み出すための勇気のおまじない。

あれは蛍にしか教えたことがないはずだ。

それなのになぜ、キュアシャインがそのおまじないを知っているのだ？

それに、先ほど口にしたあの言葉は・・・。

だが直後、強大な発音音がリリスの意識を現実に戻した。

リリースは慌ててキュアシャインから大きく距離を開け、建物の屋根へと飛び退く。キュアシャインの解放した希望の光は留まることを知らず、なおも湧き上る膨大な力が嵐を作り出す。

そしてキュアシャインの周囲にいたソルダークは、光の嵐に飲み込まれて次々と浄化されていき、

大広間一体に位置するソルダークたちは、大気に満ちていく希望の光に当てられ肉体が綻び始めた。

「なんだ！何が起きている!!？」

アンドラスの巨体がたじろぎ、キュアシャインから放たれる力の本流に巻き込まれないよう空へと飛びあがる。

絶望の闇で強化されたソルダークが、キュアシャインが解放した力の余波を浴びただけで浄化されたのだ。

浄化されたソルダークの数は、全体で見れば大したものではなく、例えこの場にいる全て浄化技できたとしても、まだ世界中の至るところにソルダークはいる。

力を使い果たしたキュアシャインは後々戦闘不能になるだろうから、これで戦況が変わることはないだろう。

それでも、ただ希望の光を解き放つただけでこれほどの威力があるのは異常だ。

そしてその力はリリスにも襲いくるが、力を削ぎ落としていることに気が付きながらも、リリスは翼も足も動かすことができずにいた。

(どうして……なんであなたがそれを知ってるの?)

まるで現実を逃避するかのようには、リリスは自問自答を繰り返す。

「せめて……おひさまのひかりがあれば……。」

「ひかりよ、あつまれ！シャインロッド!!」

するとキュアシャインは自身の武器であるシャインロッドを具現化させた。

だがその杖の向き先は自分でもアンドラスでもなければ、街に蠢くどのソルダークにでもない。

シャインロッドを両手に持つキュアシャインは、自らの真上にそれを掲げた。

そしてシャインロッドに、かつてないほどの力が集約されていく。

「プリキュア！シャイニング・エクスプロージョン!!」

キュアシャインは、巨大な光線をはるか上空へと打ち込んだ。

「はあああああああつ!!!」

雄叫びとともに解放した全ての力をシャインロッドに注ぎ込み、巨大な光線は途切れることなく上空を照らし続ける。

それはまるで、キュアシャイン自体が天まで届く光の塔と化しているかのようだった。

た。

やがて光が収まると、キュアシャインはシャインロッドを手放し、力なく地面に倒れこんだ。

「いけないー！」

そんな彼女の様子を見て何か悟ったのか、キュアプリズムが前へと躍り出る。

キュアシャインから解放された光の影響を受け、肉体が綻びるソルダークは身体を動かすことができなかつたのか、彼女を止めようとはしなかつた。

キュアプリズムは、倒れるキュアシャインの体を抱え、リリスとアンドラスから背を向ける。

キュアシャインの小柄な体が、キュアプリズムの背に隠された直後、何か弾ける音とともにキュアプリズムの背中越しに光が拡散した。

だが光が拡散した後、リリスの目には映ってしまった。

背を向けるキュアプリズムの肩越しから見える、ピンク色の髪の毛を。

そして、身に覚えのある形をした髪留めを。

「っ!!？」

それを見た瞬間、リリスの頭の中は真っ白になっていった。

まるでこの時の記憶をリセットするかのよう。

：

キュアブレイズはただ呆然と、今の状況を見ていることしか出来なかった。

自分だけでなくキュアスパークも、リリスもアンドラスも、目の前に起きた出来事に
圧倒されていた。

キュアシャインを抱えたキュアプリズムは、彼女の正体を隠そうとし建物の影へと身を
潜める。

だがそんな彼女をダークネスたちは追おうともせず、自分もキュアスパークも無言の
ままその場を動けずにいた。

誰一人として口を開くことなく、無音の間がしばらく訪れる。
「クク・・・ハハハ。バカなやつだ。」

あれほどの力、直撃を受ければ我とて無事では済まなかっただろうに。

意味もなく虚空へと向けて撃つとは・・・。」

やがてアンドラスが擦れた声でキュアシャインをあざ笑うが、小バカにしているかの

ようなその言葉は、ともすれば敗北していたとも取れるものだった。

そして浄化技が放たれた空を見上げる。

だがその時、アンドラスの表情が一瞬で強張った。

「な・・・バツ、バカな!!」

狼狽え出す姿を見て、キュアブレイズは一体何を見たのかと疑問を抱くが、直後足元にうつつすらと自分の影のようなものが見えた。

手をかざしてみると、足もとに映る影が同じように手をかざす。

まさかと思い、アンドラスと同じように天を仰いでみる。

「うそ・・・?」

キュアブレイズの見上げた視線の先に拡がるのは、闇に覆われた空。

だがその一部が、まるでガラスのようにひび割れていた。

そしてひび割れた空の隙間から、僅かな光が差し込まれる。

「闇の牢獄にひびだと!!」

アンドラスは空に拡がる光景を否定しようと叫ぶ。

だが彼の叫びに相反し、空のひびは少しずつ大きくなり、差し込む光も徐々に強まってくる。

その光景にキュアブレイズは、自分が遮ったキュアシャインの言葉を思い出す。

おひさまのひかりでもあれば：：ほんのすこしだけでも、あかるい場所があれば、このせかいのひとたちだって、きつとげんきに：：。

闇の牢獄は世界に満ちる絶望の闇によって強度を極限まで高められていたはずだ。

だがキュアシャインが放った浄化技は、その闇の牢獄を撃ち抜いたのだ。

いくらひびを入れる程度とは言え、たった一人の希望の光が、世界中の人々から生み出された絶望の闇に打ち勝った。

誰もがあり得ないと否定することを、彼女は最後まで信じて、そして実現させてみせたのだ。

「グッ……ガアアア……」

「ガアアアア……」

すると大広間にいるソルダークたちが突然、苦悶の声をあげ始めた。

声とともに絶望の闇が徐々に弱まっていき、巨体を震わせる。

キュアブレイズは確信する。

闇の牢獄の影響力が弱まり、媒体となった人の心に変化が起こっているのだ。

「キュアブレイズ!!」

キュアシャインが与えてくれたチャンスや!!

目いっぱい気持ちを込めて!希望の鐘を鳴らしてやれ!!」

キュアスパークが大声で叫びながら背中を押す。

キュアブレイズもすぐさま立ち上がり、希望の光を見据えた。

「させるか!!」

これまでになく動揺しながらアンドラスが巨体を羽ばたかせる。

だがすぐ横から蒼い雷光がアンドラスの胴体に直撃した。

「邪魔はさせんよ!!」

「貴様っ!」

キュアスパークがアンドラスの相手を引き受け、時間を稼いでくれている。

キュアブレイズはありったけの願いを拳に込めて、希望の鐘へと目掛けて飛び立つ。

「みんな!お願い!!」

もう、この世界を取り戻すことができないと諦めていた。

自分のせいで人々の希望が奪われたと聞かされたときは、何もかもがおしまいだと思っただけだ。

最後に、最後まで自分のことを信じてくれたキュアシャインが、持てる力を全て使い果たしてこのチャンスを作ってくれた。

彼女の思いに応えたい。何より、この世界を救いたい。

「希望の光を、取り戻して!!」

キュアブレイズは、自分の思いを乗せた拳を鐘に突き付けた。

ゴォーン

再び大広間中に鐘の音が鳴り響く。

鐘を鳴らしてもなお、キュアブレイズは祈りながら両手を握る。

すると、先ほどまで、路に倒れ、壁にもたれ、アテもなく街を徘徊していただけの街の人たちが、空から差し込む太陽の光を見ようと僅かに顔を上げ始めた。

だが絶望の闇はまだ街の人々に纏わりついたままだ。

鐘の音だけでは絶望の闇から救い出すことは出来ない、と思った時、キュアブレイズはここに来るまでの会話を思い出す。

(そう、これはあくまでもきっかけだったわ。

みんなを絶望から救い出すには……)

キュアシャインたちが元の世界でそうしたように、彼らと話すしかない。

「みんなっ!」

だが大広間の中央から、街中にいる人々全員に声をかけようとしたとき、キュアブレイズの脳裏に再びキュアシャインの言葉が蘇る。

えっと、いちどにみんなたすけなくても、だいじょうぶだとおもうんだ。

そうだ。彼らを一時に助けようとする必要はない。

1人1人、真摯に向かい合って話していこう。

キュアブレイズはアーチから降り、街の人を捕まえて話を聞こうとする。

「ソルダーク!!」

するとアンドラスがキュアスパークと戦いながら、ソルダークに呼びかける。

だが街にいるソルダークは全て、苦悶の声をあげながらもがいていた。

「くっ！リリス!!」

続いてリリスに声をかけるが、彼女は屋根の上で金縛りにあっているかのように動かない。

「ええい！役立たずどもが!!」

「よそ見すんなよ!!」

そしてアンドラス自身はキュアスパークに足止めされている。

もはや最初の頃の余裕を失っているアンドラスを見て、妨害がないことを確信したキュアブレイズは、街を徘徊する一人の青年を捕まえた。

「お願い！目を覚ましてください！」

青年の肩を掴み、対話を試みようとしたその時、

どうして俺には戦う力がないんだ。

自分の身すら守れない、姫様の負担になるくらいならいつそ……

男の人の声が聞こえた。

自分の弱さを嘆き、戦うことの出来ない苦悩の声。

姫様は一人で戦い続けているのに、なんで俺たちは助けてあげることができないんだ。

それが彼の絶望の声だった。

だが彼の絶望は、キュアブレイズにとつての希望となる。

(キュアシャインの……言う通りだったわ……)

この世界の人々は、自分を恨んでなんかいなかった。

むしろ共に戦うことの出来ないことを、ずっと悔やみ続けてくれた。

キュアシャインへの感謝と、僅かでもそんな人たちを疑ってしまったことへの罪悪感、そして彼らなら、救い出すことができるかもしれないという希望が、キュアブレイズの胸の中を満たしていく。

キュアブレイズは青年を救いたいと言う思いを込めて、彼の肩を強くつかんで話しかける。

「そんな風に思わないでください!!」

・・・姫様？

すると青年の声が聞こえた。

先ほどとは違う、自分の言葉に反応する声だ。

「あなたたちはずっと、私の助けになってくれてました！

私の支えになってくれてました!!」

でも俺は、最後まで姫様一人に戦わせて・・・。

「私が最後まで、今までずっと一人で戦い続けることができたのも、あなたたちという希望がいてくれたおかげです!!」

フェアリーキングダムを失ってからも、なぜプリキュアに変身出来たのか。

なぜ希望の光を失わずにいられたのか。

彼を救うための詭弁なんかではない、ずっと思い続けて来た本心を彼に打ち明ける。

「私にとっての希望は……あなた方フェアリーキングダムに住む人々なのですから……」

俺たちが……姫様の希望？

「はい……」。

プリキュアの力は希望の力、希望を失わない限り、力を失うことはありません……。

あなた方がずっと、私の希望として支えてくださったのです……。

だから、力になれなかったなんてことはありません。

あなた方がいたから、私は戦うことができたのです……。

キュアブレイズはすすり泣きながらも言葉を続ける。

「ですからお願いです……自分を責めないでください。」

あなたたちは私の希望、あなたたちが支えてくださる限り、私はどんなときでも戦うことができるのですから……。」

自分自身も気づいていなかったこと。

キュアシャインの言葉を聞いて気づかされたこと。

自分はこの世界の人々を助けたいと思いつつも、ずっと人々に助けられていたのだ。

彼らが自分の希望として、プリキュアの力を与え続けてくれた。

だからこの世界を失い、彼女たちの世界へと逃げ延びても、キュアブレイズとして戦い続けることができた。

フェアリーキングダムに住む人々全てが、希望として支え続けてくれたのだから。

でも世界は……絶望の闇にのまれて。

「大丈夫です。ほら、見てください。」

青年は促されるままに空を見上げる。

そこには一筋の光が差し込まれていた。キュアシャインがもたらしてくれた陽の光だ。

太陽の光……。

この世界に光が戻ったのか……？

青年の周囲を取り巻く闇が急速勢いを弱めていく。

「はい！伝説の通りプリキュアが4人揃いました！

もうすぐ大いなる奇跡と共に、この世界に光が戻ります!!」

そしてキュアブレイズは、彼を勇気づけさせるために、力強くそう宣言した。

……そっか、俺たち、ずっと姫様の力になることができたらんだな……。

「はい！」

そして彼を纏う闇が完全に消え去り、モノクロだった青年に色が戻り、その瞳に生気が戻っていった。

「ありがとうございます、姫様。」

「礼を言うのは、わたしの方です……。

希望を取り戻してください、ありがとうございます。」

ついに絶望から救うことができた。

「ガッ……ガアアアアア!!」

すると広間にいるソルダークの1体が絶叫とともに消滅した。

そして空から差し込む光が一層に強まる。

青年の絶望の闇が消え、牢獄の影響がさらに弱まったのだ。

その事が嬉しくて感極まる思いだったが、すぐに気持ちを切り替えて、他の人へと視線を向ける。

そしてすぐ近くに路上で座り込んでいた少女に声をかける。

暗い……何も見えないよ……。

お母さんはどこ……??

お姫様、助けて……。

「大丈夫? しっかりして。」

お姫様……その声、お姫様なの?

「ええ、私よ。ずっと暗くて、怖い思いをさせてしまつてごめんなさい。でも、もう大丈夫よ。」

暗いのが無くなつて、またお日様が戻つて来たから。」

本当に？ 本当にお日様が、戻つて来たの？

「ええ、本当よ。ほら。」

キュアブレイズは少女の小さい手を掴み、陽の当たるところへと差し出した。

温かい……お日様の光だ!!

少女を渦巻く闇が瞬く間に姿を消していく。

やがて少女にも色が戻ってきた。

「お姫様！ お姫様!!」

少女は感極まつて、キュアブレイズに抱きつく。

「よしよし、偉かつたね。怖いのがずっと我慢して。」

泣きじやくる少女をあやしながらも、キュアブレイズも泣きたい気持ち堪えた。

「よし、俺もお手伝いしますよ！姫様！」

「え？」

すると先ほど助けた青年が胸を叩いて立ち上がり、まだ絶望の闇に飲まれる人に話しかける。

「みんな！いつまでも絶望の闇なんかには負けるな！」

4人のプリキュアがこの地に来て、陽の光を取り戻してくれたんだ！

だから目を覚ますんだ！」

大声で周りに呼びかけながらも、1人1人の肩を揺さぶっていく。

「あつ！お母さん！」

すると少女が母親の姿を見つけ、キュアブレイズの胸からおり母親の元へと駆け付けた。

「お母さん！しっかりして！」

お姫様が助けに来てくれたんだよ！お日様の光が戻って来たんだよ！！」

そして母親を覚ませようと、必死に声をかけ続ける。

その光景にキュアブレイズは再びキュアシャインの言葉を思い出す。

ひとりのひとをたすければ、そのひとがまた、ほかのひとをたすけてくれる。

そしたら、こんどはふたりのひとが、ふたりのひとをたすけて、つぎはふたりが4人を、4にんが8にんを、そうなつてくれればきつと、城下街にいるひとたちみんなを、たすけることが・・・

1人を助ければ2人、2人を助ければ4人を助ける。

人と妖精とが協力して生きていくこの世界では、互いに助け合うことをごく自然と行える。

その事もキュアシャインは気づかせてくれた。

いや、思い出させてくれたのだ。

(・・・ありがとう、キュアシャイン。)

みんな、あなたの言う通りだったわ。

やがて広場には多くの人の声が聞こえ始め、それに比例し地を照らす光は輝きを増していった。

：

チェリーたちの目の前で、大広間を照らす陽の光はより輝きを増していった。

それに比例して広間にいる人々が闇から解放され、ソルダークが姿を消していく。

「キュアシャイン・・・キュアブレイズ、みんな・・・」

ありがとう、と言う言葉は嗚咽に紛れて出てこなかった。

ずっと夢を見て来た日、フェアリーキングダムを闇から解放することがついに叶ったのだ。

隣にいるレモンもすすり泣き、目を擦っている。

「泣いている場合じゃないぞ、チェリー、レモン。」

俺たちもみんなを手伝うんだ。」

そんな2人をベリイが穏やかな声で注意する。

「こんなことでしか俺たちは、みんなの力になれないけど、だから今だけでも、キュアブレイズへの恩を少しでも返そう。」

ずっとキュアブレイズの力になることができず、ダークネスと1人で戦わせてしまった罪悪感。

それはチェリーたちだっけと後悔していたことだ。

例えキュアブレイズがそれを望んでいなかったとしても、彼女1人にこの世界の全て

を委ねてしまっていたことに変わりはない。

だからこそベリーの言う通り、この瞬間だけでも彼女の力になろう。

「そうね、私たちもみんなを助けましょう！」

「レモンも頑張るよ！」

「その意気よみんな。」

さあ、みんなでこの世界に光を取り戻しましょう！」

アップルの声とともに、妖精たちは広間にいる人々を助け出す。

「姫様！本当に姫様だ！」

「キュアブレイズ！」

すると目を覚ました人々がキュアブレイズの姿を見つけ、歓声をあげた。

彼女を慕う気持ちと、申し訳ないと思う気持ちとが複雑に入り乱れるも、光照らすこの地では、最後には救われた喜び、そして彼女の希望になれていたことの嬉しさが勝った。

この世界に久しくなかった多くの感情が、大広間中に満ちていく。

すると、チェリーはキュアブレイズの身体が輝きを増していくのに気が付いた。

「あれって・・・希望の光？」

キュアブレイズの希望の光がかつてないほどの大きな輝きを放っていく。

その輝きは、人々の歓声を浴びる度に強まっていった。

「・・・そっか、私たちの希望も・・・。」

「届いていたんだな・・・彼女に。」

「レモン、信じるよ。キュアブレイズのことも、レモンの希望も。」

「あの子・・・頑張つて。」

それぞれの思いを胸に、キュアブレイズはアンドラスの方へと振り向いた。

：

自分の身体から希望の光が満ち溢れていくのを、キュアブレイズは実感した。

同時に温かな思いが胸の中へと流れ込んでくる。

そして頭の中に声が聞こえるのだ。

キュアブレイズ！頑張つて！

私たちがついてるから、何も心配しなくていいよ！！

もう1人でなんて戦わせない！あなたは1人なんかじゃない！！

多くの人々の希望の声、そしてこの力は、その温かな感情から生まれてくるものだった。

自分一人の力だけではない。この地にいるみんなから今、力を貰っている。

(そっか・・・希望の光は、私一人から生まれてくるものではない。

みんなから、貰うことも出来るんだ・・・)

ずっと一人で戦ってきたと思っていた。

だがそれがそもそも間違いだった。

いつだってキュアブレイズは、みんなから希望をもらってきた。

だからこれまでずっと、ダークネスと戦い続けることができたのだ。

「うわあああつー！」

するとアンドラスと交戦していたキュアスパークが、弾き飛ばされてこちらに飛んできた。

キュアブレイズは彼女を受け止め、一旦アンドラスと距離を置く。

「キュアスパーク、大丈夫？」

「いたた・・・ありがと・・・」

あれ？キュアブレイズ、その力は？」

キュアスパークは身体中生傷だらけで、希望の光もかなり消耗していた。

だが彼女がずっとアンドラスを引きつけてくれなければ、この大広間にいる人々を絶望から解放することは出来なかったのだ。

「ありがとう、時間を稼いでくれて。

後は私が引き受けるわ。」

キュアブレイズは彼女を降ろし、バトンタッチを促すように一步前へと出る。

「キュアブレイズ。」

「なに？」

「これが最後の見せ場や。気張れよ。」

スポーツ少女である彼女らしい、素敵な声援だった。

「ええ、勿論。」

キュアブレイズはアンドラスの元へと飛んでいく。

先ほどの戦いでは手も足も出さず、かすり傷一つ付けられなかった敵だが、今のキュアブレイズは不思議と、負ける気がしなかった。

みんなからもらった希望の光が、キュアブレイズに無尽蔵の力を与え続けてくれているからだ。

「アンドラス。」

「キュアブレイズ！」

闇の牢獄が綻び、空を照らす光が強まってきた今、アンドラスには最初の頃に見られた余裕が一切感じられなかった。

「闇の牢獄が壊れた今、あなたの目論見は消し去ったわ！」

このまま負けを認め、大人しくこの世界から立ち去りなさい！」

フクロウの目で睨み付けてくるアンドラスにもひるまず、毅然とした態度で通告をする。

「ふざけるな！私は負けてなどいない！」

負けることなど！あつてはならないのだ!!」

だが当然、そんな通告を受け入れるわけもなく、敵意剥き出しに躍り出た。

だがキュアブレイズは振りかざされた爪をかわし、一瞬で懐に潜りこむ。

「なっ!?!」

これまでのキュアブレイズにない速度で急激に距離を詰められたアンドラスは対応できず、キュアブレイズは神速の肘鉄を腹部に叩き込んだ。

「があっ!!」

アンドラスが呻き声を上げ、腹を抱えようとする。

だがその暇も与えず、キュアブレイズは連続で拳を腹部に叩き込み、両手に炎を宿し

て敵に振れ、爆発を引き起こした。

「バカな……なんだその力は?」

爆風を受け後退するアンドラスは、急激なパワーアップを遂げたキュアブレイズに驚愕する。

それだけでなく、闇の牢獄が綻び、大広間にいる人々が絶望から解放された今、この辺り一帯の絶望の闇が消え去り、希望の光が満ち溢れてきているのだ。

それがアンドラスの絶望の闇を削ぎ落とし、逆にキュアブレイズに力を与え続ける。

その相乗効果で、力の差は一気に逆転したのだ。

「おのれえええ!!」

だがアンドラスは尚も退こうとせず、狼の口から巨大な光線を放つ。

だがキュアブレイズは自身の身の丈をも超える大型の炎の渦を生み出し、その光線を全て受け止めた。

そのまま炎の渦をアンドラスに放ち、光線を押し返しながら狼の頭部に直撃させる。

続いてアンドラスは飛翔し、その両翼から無数の羽をキュアブレイズにめがけて乱射した。

キュアブレイズは飛び立ち、両足から炎を噴射し推力に変え、空中を自在に飛び回りながら羽の弾幕を掻い潜る。

そしてアンドラスへと距離を詰め、炎をヴェールを生み出し、アンドラスへと薙いだ。炎のヴェールは鞭のようにしなり、飛び掛かる羽を全て焼き尽くしアンドラスの本体へと叩き付けられる。

ヴェールを二度、三度と振るう度に爆発が起き、最後は炎を圧縮し、火球に変えて投げつけた。

火球はアンドラスに着弾し、彼の身を覆い尽くすほどの大爆発を引き起こす。

「ぐあああああっ!!」

アンドラスの叫びとともに、彼の身体が徐々に朽ち果てていく。

翼がもがれ、狼の牙が抜け、よろめきながら後退していく。

あと一息だ。そう思いキュアブレイズは力の全てを右手に集中させて突撃する。

「こんなことはあり得ない……あつてはならない。」

一度闇に飲まれた世界が……再び光を取り戻すなど……。

アンドラスの眩きに耳を傾けず、キュアブレイズは彼に接近する。

「これで終わりよ!!」

「あつてはならないのだああ!!」

だがアンドラスの巨体が突如崩壊し、内側から人の姿に戻ったアンドラスが飛び出して来た。

「えっ!?!」

絶望の闇を纏い巨大化した肉体を破棄し、人の姿に戻っての奇襲。

彼の戦術を理解した時には既に遅く、こちらに向かうアンドラスの突撃が回避できない距離にまで差し迫った。

だが次の瞬間、自分とアンドラスの間に突如水晶の盾が割り込んできた。

「なにっ!?!」

アンドラスの攻撃は水晶の盾によって防がれる。

キュアブレイズは後方から盾と同じ力の気配を感じ取り、思わず振り向く。すると建物の影から、こちらの様子を伺うキュアプリズムの姿があった。

変身が解除されたキュアシャインがアンドラスの目に触れぬよう、背中越しで目だけをこちらに向けている。

いつでも盾でサポートができるようにこちらの様子を見守っていてくれたのだ。

そんな彼女の優しさに思わず気持ちが緩み、キュアブレイズは涙ぐみそうになるがすぐに正面に振り向く。

キュアプリズムの次の一手は、これまでの戦いを見て予測している。

そしてその時は、すぐに訪れた。

「きっ貴様あああ!?!」

不意の一撃を防がれたアンドラスは激昂するが、直後2人を遮っていた水晶の盾が粉々に砕け散った。

そしてキュアブレイズは間髪入れずアンドラスの肩を左手で掴み、右手を彼の胸に押し付ける。

「なっ……」

次の一撃は決して外してはならない。

キュアブレイズは彼を逃がさないよう拘束し、右手に集中させた希望の光を解放する。

「光よ、弾けろ！ブレイズタクト！」

するとキュアブレイズの右手に、指揮棒の形をした武器が出現した。

指揮棒の先端で四拍子を描き、周囲に4つの火球を生み出しながらタクトの先端に光を圧縮する。

「プリキュア！ブレイズフレアー・コンチェルト!!」

そして4つの火球を至近距離で次々とアンドラスにぶつけ、最後に圧縮した光の力を一気に開放し、アンドラスの身体を業火で包み込む。

「がああああああああああああ!!!」

燃え盛る炎とともにアンドラスは、ゆっくりと地へと落ちていく。

同時に空を覆う闇に大きな亀裂が走り、巨大な破片と共に砕け散っていった。そして空を照らす陽の光が、城下街を明るく照らしていくのだった。

：

次回予告。

「キュアシャイン、キュアスパーク、キュアプリズム。

いいえ、蛭！要！雛子！みんな、本当にありがとう！」

「え・・・？ええっつ!!？」

「あつあなたが、キュアブレイズだったの!!？」

次回！ホープライトプリキュア第14話！

「新たな仲間！真紅の戦士！キュアブレイズ!!」

希望を胸に、がんばれ、わたし！

第14話

第14話・プロローグ

城下街を覆う闇は徐々に晴れていき、大地に差す光が輝きを増していく。

先ほどまでは大広間周辺のみ輝きを放っていたその光は、気が付けば城下街の全てを明るく照らしている。

そして光差す空を見上げてみると、雲が映り、鳥が飛び交い、太陽がはっきりと見えていた。

地平線に見える空はまだ黒く覆われているが、世界から感じる闇の力は急速に衰えていくのが感じられる。

「姫様！」

街の人々がキュアブレイズの元へ集まってくる。

眠りから目覚めた彼らはみんな瞳に輝きが戻っていた。

「みんな……無事で……無事で良かった……。」

堪えきれない涙を隠すことなく、キュアブレイズは喜びを露わにした。

半年もの間続いた悪夢が、ようやく終わりを告げたのだ。

今日まで自分の希望として支えてくれたこの国の人たちに、そして力を貸してくれた蛸たちには感謝しきれなかった。

「姫様、私たちの身を案じて頂けて光栄ですが、一度お城まで戻ってみてはいかがですか？」

すると1人の女性がキュアブレイズにそんな提案を持ち掛けてきた。

その言葉にキュアブレイズの脳裏に、城にいるであろう2人の人が思い浮かぶ。

「お父様とお母様。」

闇の牢獄の影響が消えた今、2人の意識が戻っていてもおかしくないだろう。

だがこの世界に光が戻っても人々の悩みまでが消えるわけではない。

広間にいる人々は目を覚ましているが、まだ絶望の内にいる人が街のどこかにいるかもしれないのだ。

「きつと国王様とお妃さまも目を覚めておられます。」

行つてお2人を安心させてあげてください。」

「この街にいる人たちなら、我々が顔を引つ叩いてでも起こして見せますよ。」

だが同時に、父と母の安否が気がかりなのも事実だ。

キュアブレイズは力強く協力してくれる人々の厚意に甘えることにした。

「ありがとうございます。みんな、行きましよう。」

「ああつ。」

「キュアシャインを休ませてあげる場所も欲しいしね。」

言いながらキュアプリズムは蛍を抱え直す。

闇の牢獄を撃ち破るために力を使い果たした彼女は今、健やかな寝息を立てていた。

「あなたたちにも、また日を改めてお礼をさせてください。」

「別にいいって、困ったときはお互いさまって。」

「キュアスパーク、こうゆうときは素直に厚意を受け取るの。」

すっかりいつもの調子で軽快なやり取りを交わす2人を見て、キュアブレイズは改めて戦いが終わったことに安堵しながら城へと向かっていった。

：

城へ辿りついたキュアブレイズたちは急ぎ玉座の間へと向かった。

フェアリーキングダム of 初代国王の絵画が飾られた広大な空間には、まだ何人かの近衛兵と召使たちが絶望の闇に覆われ倒れている。

そして赤い絨毯の敷かれた先にある、金属製の玉座の裏に、キュアブレイズの探す人たちがいた。

「お父様！お母様！」

キュアブレイズはアップルと共に2人の元へと駆け寄る。

2人もまた、絶望の闇に覆われていたが、そこから感じられる闇はとても微弱だ。闇の影響力が非常に弱まっている今ならすぐに助けることが出来る。

キュアブレイズは希望を強く持ち2人に手を添えて話しかける。

「お父様！お母様！しっかりしてください!!」

・・・その声は・・・まさか。

荘厳だが、同時にどこか穏やかな声がキュアブレイズの脳に届く。

久しく聞いていなかった父の声を聞き、キュアブレイズの両目から再び涙が流れだした。

「はい！私です！チトセです!!」

お父様！やっと世界に光が戻ったのですよ！」

キュアブレイズは自分の『本当の名前』で必死に呼びかける。すると父と母の身体から沸き立つ闇が衰え始めた。

やがて闇は完全に気配を消し、父と母はゆっくりと立ち上がり、キュアブレイズの顔を見据えた。

「おおっ……チトセ。よく、よくぞ無事で。」

「本当に、あなたなのね。チトセ。」

ああ、まるで夢でも見ているみたい……。」

「っ、お父様!!お母様!!」

外恥も気にせず、キュアブレイズは父の胸に飛び込み大声で泣いた。

そんな自分に父と母は優しく頭を撫でてくれた。

もう二度と2人に会うことができなのではないかと言う恐怖することもあった。

だけど今、この手にははつきりと父と母の温もりが感じられる。

2人の声もちやんと聞こえる。

自分の願いがようやく叶ったのだ。他ならぬ彼女たちのおかげで。

「……ところでチトセ、彼女たちはどちらの方だ?」

「あの子たち……もしかしてプリキュアなの?」

するとキュアスパークたちに気づいた2人が質問をしてきた。

キュアブレイズも振り向くと、キュアスパークとキュアプリズムは口を大きく開けたまま目をパチパチさせてこちらを凝視している。

そう言えば先ほど、自分の『本名』を名乗ってしまったか。

そして2人の反応からして、自分の正体を気づかれたようだ。

キュアブレイズは半ば予想通りの2人の反応を見て微笑む。

もう隠すことはない。元々隠す必要さえなかったのだ。

ただ自分が意地っ張りで、素直になれなかつたから話すタイミングを見失っていただけだ。

だけど今は、感謝の気持ちを素直に伝えることができる。

だからここではつきりと、自分の正体を2人に明かそう。

「はい、私がダークネスから逃げ延びた先の世界で覚醒したプリキュアたちです。

彼女たちの協力があつたから、私はこの世界を取り戻すことができました・・・。

キュアスパーク、キュアプリズム・・・いいえ、要！雛子！」

本当の名前で呼ばれ、2人は表情をさらに硬くする。

「2人とも、本当にありがとう！」

そしてキュアブレイズは、2人の前で変身を解除した。

第14話・Aパート

新たなる仲間！真紅の戦士、キュアブレイズ！

フェアリーキングダムを舞台にしたプリキュアとダークネスと大決戦は、キュアシャインによって闇の牢獄が破壊され、この世界を支配下に置いていたダークネスの司令官アンドラスが、キュアブレイズによって討たれたことで終結した。

フェアリーキングダム全土を覆い尽くしていた絶望の闇は急速に力を失い、絶望の闇に囚われていた人たちは次々と希望の光を取り戻していった。

そんな世界に光が戻る光景を前にしても、リリスはずっと呆然自失としていた。

キュアシャインが闇の牢獄を破壊したときも、アンドラスが敗れたときも、何一つとして彼女に響かなかった。

たった一つの、他の人からすれば何とでもない程度の出来事が、ずっとリリスを縛り続けていた。

リリス、聞こえるかね？

するとリリスの脳内にアモンの声が聞こえた。
リリスは微かに残る意識でそれを汲み取る。

・・・はい、アモン様・・・。

だがその声はまだ擦れていた。

そちらの状況はわかっている。アンドラスが敗れたそうじゃないか。

もう、その世界に留まる理由もないだろう。

アンドラスを回収し、速やかに帰還しなさい。

・・・了解・・・しました・・・。

そんなリリスを訝しむ様子も見せず淡々と指令を下した後、アモンとの通信が途絶えた。

ほとんど条件反射で応答していたリリスだったが、彼から受けた指示はちゃんと記憶

しており、浮ついた思考でおぼつかない足取りのまま、アンドラスが落ちていった地域へと向かうのだった。

：

要は目の前で起きた出来事に対してどう反応して良いのかわからなかった。

キュアブレイズの正体がこの世界のお姫様だと言うことは聞いていたから、彼女が城へ戻り、見るからに王様と女王様と言うべき姿をした2人のことをお父様、お母様と呼んだことには何の違和感も抱かなかった。

だが彼女の口から『チトセ』と言う名前が出た途端、波1つない静かな海に突然のビツグウエーブが到来したかの如く、要の脳内に強い衝撃が走った。

チトセと言う名前を持つ少女を知っているがなぜあいつの名前が突然出て来たのかわからないし、それがあいつ本人だと確定したわけでもない同名なだけかもしれないがそんな偶然が果たしてあり得るのだろうか・・・と、例によって考え事がまるで纏まらない内に、キュアブレイズは王様と女王様を無事救出することができたようだ。

だがここでまた1つの事件が発生した。

キュアブレイズが突然、自分とキュアプリズムの『本当の名前』を言い当てて来たのだ。

それはキュアブレイズことチトセが、自分の知るあの『チトセ』と同一人物であることを確定づけた。

その瞬間、要の脳内は今まで見せたことのないような速度でこれまでの情報を引き出し答えを導き出した。

なぜあの時、『あいつ』が自分たちの間に割って入って来たのか。

なぜ何かとつけて刺々しい言葉を投げて来たのか。

なぜ自分のことを体育バカと呼んだのか。

そしてその背丈と雰囲気、何より鋭い眼が記憶にある少女の目と重なり……

「なっ……なんですと〜!!?」

「あなたがキュアブレイズだったのお!!?」

今、目の前でその答え合わせが行われた。

キュアブレイズが変身を解除すると、目の前に夢ノ宮中学校2年3組、孤高のクインこと『姫野 千歳』が姿を見せたのだ。

「ふふっ、そうよ。今までずっと隠して来てごめんなさい。

でも、なかなか言い出しづらくて。」

悪戯つぱく微笑む千歳の姿に、要は今度は別の意味で混乱してしまう。

孤高のクイーンと呼ばれていた千歳は、誰に対しても態度が冷たく、常に無口で無表情と評判だった。

親身に接してくれていたクラスメートの未来に対してもその態度を崩したことはなく、はつきり言って、嫌なやつだという印象が拭えなかった。

その千歳が今、口元に手を当てて微笑んでいるのだ。

自分の知る千歳の姿とはあまりにも印象が違い、要は再びフリーズしてしまう。

「そうか、君たちが力になってくれたのか。」

「娘を、チトセを。そしてこの世界を救っていただき、感謝の言葉もありません。」

そんな要たちに、この国の国王と女王が礼を述べる。

冷静に考えてみれば、どこにでもいるごく普通の女子中学生である自分たちに対して、一国の主が頭を下げてお礼を言う、恐らくこの先2度と訪れることがないであろう体験のはずだ。

確かにこの世界は異世界ではあるが、同じ世界でだって外国には今まで行ったことがないので、要からすれば誤差の範疇である。

そんな国王たちからの謝礼ですら、今の要には頭の片隅にしか残らなかったものだから

ら、よつぼど目の前の衝撃が大きかったようだ。

ついでに言えば、魔法少女のように変身し、特撮ヒーローの如く悪の手先と戦い世界を守る『普通の女子中学生』なんかがいてたまるかと、自分の思考に対して自らツツコミを入れてしまいそうになり、要は大慌てでそんな無粋なツツコミを頭から払う。

だが払い落とした後の要に残ったのは、結局目の前に対する困惑だけだった。

「アップル、それからチェリーもご苦労だったな。」

「いいえ、私たちは職務を果たしたままでです。」

「わっ私は、ほとんど何もしておりませんでしたし……。」

そんな要を余所に、アップルとチェリーが親し気に国王と会話する。

「お父様、お母様、お話したことはたくさんありますが、今は一先ず、彼女たちを休ませてもよろしいでしょうか?」

そして千歳はキュアプリズムが抱える蛭に目を配りそう告げた。

「是非、そうしてくれたまえ。状況が状況だけに何もおもてなしは出来ないが、せめて戦いの疲れが取れるまでこの城でゆっくりとしていくといい。」

「いついいえそんな、おもてなしだなんて。」

国王の言葉に慌てるキュアプリズムは勿論、要もつい先ほど絶望の闇から解放されたばかりの人たちに対して、厚かましくおもてなしを強請るような常識知らずではない。

ダークネスがいなくなった今、自分たちがこの世界の人たちのために出来ることなく、むしろ復興の邪魔にしかならないだろうから、早急に元の世界に帰った方が良くらいだ。

「それじゃあ、私の部屋へ案内するわ。」

だがせめて、蛍が目を覚ますまでは帰るわけにもいかないのです、要たちは千歳の厚意に素直に甘えることにするのだった。

変身を解除した要と雛子は、千歳に案内されて彼女の私室を訪れる。

部屋に入ると要たちはまず、雛子の私室よりもさらに広い部屋の面積に圧倒された。

「いやあ・・・想像通りっちゃ通りだけどやっぱり広いな。」

「ホント、私の部屋より広いわ・・・。」

この世界で一番偉い王族たちが住むお城、しかもお姫様の寝室を訪れているのだ。

そのお姫様が多少顔の見知った相手とは言え、初めて足を踏み入れる高貴な部屋に少しばかり緊張してしまう。

「そんなに難くならなくてもいいわよ。リラックスしてちょうだい。」

千歳が苦笑交じりに話すので、要は気を紛らわそうと部屋を観察する。

まず目に留まったのは、赤いカーテンがかけられたベッドだ。

内側を見ることができないが、かけられたカーテンの大きさからして、自分たち4人が寝転がってもまだ有り余るであろうスペースを持つことは想像に難くない。

来客用と思われるテーブルと椅子が4つ、テールクロスも椅子のクッションも見るからに高価そうな素材だ。ベッドの側には複数の引き出しを持つ机があり、その上にはランタンが置いてある。

部屋の作りだけなら、テレビの中でしか見たことがないヨーロッパにある城の一室にとっても近かったが、ベッドの向かいある本棚に飾られた本の表紙には見たこともない文字が書かれており、それだけがここが異世界であることを物語っていた。

「これだけ広いと掃除も一苦労よ。」

特にこの子は自分のことはいつても他人任せなんだし。」

「それがあなたたちの仕事でしょ?」

アップルが苦笑し、千歳がやや動揺した様子でそれに答える。

そんな2人のやり取りに、要はある疑問を抱いた。

「もしかしてアップルさんってメイドか何かなん?」

「正解よ。」

私の仕事はこの城のメイド長兼料理長、そして千歳のお世話役よ。」

メイド長にして料理長と言うバイリンガルな職務に多少驚くも、要にとつては概ね予想通りの答えだ。

この世界は人と妖精が共存していると聞かし、自分たちの世界の創作物では、妖精が人に仕えて世話役を担うと言うのはよくある設定だからだ。

「ついでに言えば、チェリーはこの見習いメイドで、私の下で実施研修を受けていたのよ。」

「えええっ!!?」

が、直後予想だにしない不意打ちを受けてしまい、要と雛子は声を揃えて叫ぶ。

「えへへ、まだ仕事も覚えただだし、お城の中も覚えきれていないのだけどね。」

「それでも城の妖精メイドは、この世界では妖精の女の子に一番人気の高く、同時に倍率の高い職業でもあるんだ。」

それに合格するのだから、チェリーは大したものだよ。」

「もうやめてよベリイ、私のスキルなんて蛍と比べてもまだまだなんだから。」

遠回しに蛍が、この世界ならば城に仕えるメイド並みの家事スキルを持つと言っているようなものだが、家事にしても何にしても要たちの世界には機械と言う便利な道具がある。

勿論、蛍のスキルが優れていることに変わりはないが、言葉の通り住む世界が違うの

だから一概に比較できないだろう。

「ほら、いつまでもお喋りしないで、蛍ちゃんを休ませましょう。」

そんな妖精たちをアツプルが窘め、千歳はベッドのカーテンを開けた。

赤いカーテンの開けた先には、赤一色で染められたシーツや枕があり、千歳は赤い色を好む傾向があるようだ。

雛子は蛍が起きないようにゆっくりとベッドに寝かせ、チェリーが飛びながら頭の方まで回り枕を置く。

闇の牢獄を撃ち破るために力の全てを使い果たした蛍はずっと眠ったままだが、雛子が言うには呼吸は安定しているし脈拍も正常とのことなので、寝床を確保出来た今、これで一安心だ。

「お疲れ様、蛍。」

チェリーが蛍を労い、頭を優しく撫でる。

千歳もベッドに座り、蛍の頬に優しく手を添えた。

「この子がいてくれて良かった．．．。」

この子がいなくなったら私は今頃、絶望の闇に囚われてしまっていただろうから．．．。かつて蛍の弱さを糾弾し、邪険していた頃には見せたことのない、深い慈愛に満ちた表情で千歳はそう呟く。

「ありがとう、蛍。」

そして千歳は蛍の頬に両手を添え、まるで眠れるお姫様にキスをするかのように、蛍の額に自身の額を優しく当てるのだった。

：

モノクロの世界に帰還した後も、リリスの動揺は収まらなかった。

どうしてキュアシャインが蛍にしか教えたことのないおまじないを知っていたのか？

どうしてキュアシャインが蛍と同じ言葉を口にしたのか？

その答えは1つしかないが、それが脳裏を過る度にリリスは思考を遮断する。そして再び同じ自問を繰り返していた。

「まさかやつらがフェアリーキングダムを取り戻すとはな。

ホープライトプリキュア、ますます面白くなってきた。」

そんなリリスを余所に、サブナックはいつものように闘志を燃やす。

「それよりもリリース、キュアシャインがたった1人で闇の牢獄を破ったと言うのは本当かい？」

一方でダンタリアが珍しく、自分に疑問の言葉を問いてきた。

「・・・ええ、そうよ。」

正確にはヒビを入れた程度だけど、あいつが作ったヒビから光が零れて、あの世界の闇を消し去っていったわ。」

リリースは一旦自問自答を打ち止め、ダンタリアの質問に答える。

「信じがたい話だね。」

ヒビ程度とは言え、たった1人の希望の光が世界の絶望に勝ったって言うのかい？そんなことはあり得ないだろう。」

だが答えを聞いてもダンタリアは納得しなかった。

彼が言うまでもなく、1人の希望が世界の絶望を撃ち破るなんてことは普通ならば考えられないことだ。

希望の光にせよ、絶望の闇にせよ、個体あたりの力の総量は必ずしも等しいわけではないので、個々で力に差は出てくるだろう。

それでも一時とは言え、キュアシャイン個人の持つ力が、世界中の人々からかき集めた力の総量を上回った。これは明らかな異常事態である。

だがそれでも答えを最初から聞き入るつもりのないダンタリアの態度に眉を潜める。

「じゃあ、あなたはあたしがウソをついているとでも言いたいのか？」

「その方がよっぽど、信憑性があるね。」

「何ですって……。」

ついには虚言扱いされてしまい、リリスが今にも爪をダンタリアへと向けようとしたその時、

「ダンタリア。」

アモンの低い声が両者の間に割って入った。

リリスは爪を引っ込め、ダンタリアはアモンに少し頭を下げる。

「では一つ聞くんが、君は闇へと飲まれた世界が再び光を取り戻したと言う事象を聞いたことはあるかね？」

だが続くアモンの問いに、ダンタリアは珍しく顔をしかめた。

「……いえ、聞いたことはございません。」

ダンタリアは呟くように答える。

それはリリスもサブナックも同様だ。

一度闇に堕ちた世界は二度と光を浴びることはない。

自分たちはそう学んできたのだから。

「その通り。」

過去の戦いにおいても全ての光を失い闇へと落ちた世界が、再び光を取り戻すなんてことは『あり得なかつた』。

だが今の現実はどうだ？

確かにフェアリーキングダムは光を取り戻している。

これまで『あり得なかつた』ことが実現したのだ。

ならばその原因もまた、これまで『あり得なかつた』ことだとは思わないか？」

アモンの言葉にダンタリアは反論しないが、顔はしかめたままだ。

屁理屈のように聞こえたのだろう。

だが目の前でその光景を目の当たりにしたりリスには、実に説得力がある言葉だった。

それにダンタリアも、アモンの言葉を否定しないだろう。

前例のないことをあり得ないことだと目を背け続けては、現実には強大な力を解放したキュアシャインへの対抗策を講じるのを怠ることになる。

ダンタリアほどの慎重派なやつが、たった一人で世界の力を覆してしまうほどの脅威から目をそむくとは思えない。

それでもやはり、当の力を目の当たりにしなければ納得ができないのだろう。

もしも自分が又聞きした立場であれば、同じ感想を抱いていたはずだ。

「だが、たった1人で世界を変えるほどの希望の光か……」

やつの力、逆に利用できるかもしれないな。」

「え？」

だがアモンの予期せぬ言葉にリリスだけでなく、サブナックとダンタリアも困惑の表情を浮かべた。

アモンはそんな行動隊長に構うことなく言葉を続ける。

「リリス、プリキュアの正体を暴くと言う任は、どうなっている？」

「……まだ、進展はございません。」

リリスは心のつつかえを表に出さないように、努めて冷静に返答する。

「そうか、ならばちようどいい。」

「と、言いますと？」

「君のその任に、新たな指令を追加する。」

キュアシャインの正体を優先的に暴くのだ。」

「え……？」

「そしてやつの正体を暴き次第、キュアシャインを絶望させる。」

「っ!!？」

続く指令にリリスは言葉を失った。

口元が震え、声が絞り出せないほどに動揺する。

キュアシャインを絶望させると言うことは、つまり……。

「……なつ、なぜ、やつを優先的に……？」

だがリリスは再びそこで思考を中断した。

代わりに擦れた声を絞り出し、アモンの真意を探る。

「その時が来ればわかるさ。今はその任務に専念するのだ。」

「……了解しました。」

だがアモンの真意を窺い知ることができなかつた。

それでも行動隊長にとって司令官の命令は絶対だ。

自分の、行動隊長としての存在意義のためにもその命は必ず果たさなければならな

い。

だが指令を受けたリリスは終始、虚ろな表情を浮かべたまま広間を離れるのだった。

：

蛭が目を覚ますと、見知らぬ景色が目の前に拡がっていた。

古き時代のお城の一室を彷彿させる部屋模様、身を柔らかく包む赤いシーツのベッド、そして

「蛭、目が覚めたのね。」

自分を覗きこむ千歳の顔が映り、蛭の意識は一気に覚醒する。

「あつあれ？なんでちと．．．ひめのさんが？」

思わず名前で呼ぼうとしてしまい、慌てて名字に訂正する。

同時に気を失う前までの出来事を徐々に思い出して来た。

キュアブレイズたちと共にフェアリーキングダムに来て、世界を救うために城下街の大広間の鐘を鳴らしに行こうとしたところ、ダークネスと遭遇して戦いになり．．．とここまで思い出した途端、気を失う直前の光景がフラッシュバックした。

「そうだ、リリスは!? たたかいはどうなったの!？」

フェアリーキングダムのひとたちは!？」

蛭は思わずベッドから飛び上がる。

戦いの中で気を失っていたはずなのに気が付けばベッドの上だったのだ。

何が起きてこうなったのか状況もわからぬまま、悠長と寝ていることなんて出来な

い。

「落ち着いて蛍、戦いは無事に終わったわ。」

だがそんな蛍の両肩に千歳が手を乗せ優しく制した。

「え……？ そうなの？」

あつ、そだ、なんでひめのさんがここに？ ここはどこ？」

「だから落ち着いて、1つずつちゃんと説明するから。」

思考がまとまり切らず慌てる蛍だったが、千歳に優しく諭されて少しずつ落ち着きを取り戻す。

だが今度は別の違和感を覚え始めた。

千歳がなぜここにいるのか、そもそもここはフェアリーキングダムなのか元の世界なのかもわからないが、それ以上になぜ彼女がここまで自分に優しい声をかけてくれるのかがわからなかった。

彼女のこれまでの態度から、自分に対して良い印象を抱いていなかったと思っていたからだ。

「蛍、聞いて驚くなよ？」

なんとキュアブレイズの正体は千歳だったのだ!!」

すると本人の口よりも先に要が、やたらと芝居がかった口調で正体を明かして来た。

「えっ!?!・・・あつ。」

だが虫は一瞬だけ驚くも、フェアリーキングダムに行く前に、千歳と会話した時のことを思い出す。

「そっか・・・。」

すると自分でも驚くくらいに、冷静にその現実を受け止めることができた。

「あれ? 思ったより反応薄いな?」

一方で要は想定していた反応を得られなかったのか、肩透かしを受けているようだ。

「ここにくるまえにね、ちよつとおはなししたことがあつて、そのときに、もしかしたらつておもったの。」

「ああ、あの時の。」

その言葉に千歳はどこか納得した様子を見せた。

今にして思えば、確かに千歳とキュアブレイズには共通点が多かった。

背丈と近寄りが見たい雰囲気、そして意志が強く鋭い眼差し。

それでも今まで気が付かなかつたのは、プリキュアに変身すると服装は勿論、髪形や髪の色は瞳の色までも変わってしまうので、外見からは判別がでなからである。

「なくんだ、気づいてたんだ。つまんないの。」

「要。」

特に残念がる様子もなく軽く言う要と、半ばお約束のようにツツコミを入れる雛子。そんな2人のいつも通りのやり取りに蛭は安堵の笑みを浮かべる。

この様子なら、戦いが終わったと言うのは本当のことのようだ。

何よりキュアブレイズである千歳がここまで穏やかな姿を見せていると言うことは、フェアリーキングダムの人々を無事助けることも出来たのだろう。

と、ここで自分の失態を思い出した蛭は、申し訳なさそうな顔を千歳に向ける。

「えと……ごめんなさいひめのさん。」

わたし、途中で気をうしなっちゃって……なにもちからになれなくて。」

蛭は自分の力を解放した時のことを思い出し謝罪する。

あの時は確か、ガムシヤラに太陽の光を取り戻そうと願い、浄化技を空へと目掛けて頭上に放ったはずだ。

あれではアンドラスやリリスは勿論、ソルダークの1体も浄化できていなかっただろう。

力になりたいと、助けになりたいと思いつつもながらも結局、大事なところで自分の意思を優先してしまい足を引っ張ってしまったのだ。

と、当時の記憶がない蛭はそう考えていた。

「えっ？」

「……ふっつそつか、あなたは気を失っていたから、自分がしたことの凄さがわかっていないんだ。」

「え？」

すると千歳は穏やかな笑みを浮かべ、何やら意味深なことを言ってきた。

「あなたはあの後、浄化技で闇の牢獄を撃ち破ってくれたのよ？」

そのおかげでこの世界は光を取り戻すことができたのよ。

それだけじゃない、みんなあなたの言う通りだった。

あなたが私に言ってくれたことが、全て現実となってこの世界を救うことができたの。

だからありがとう、蛍。この世界を救ってくれて。」

思わぬ千歳からの感謝の言葉に蛍は困惑する。

だが彼女の言葉に嘘は感じられないので、自分の放った浄化技が闇の牢獄を撃ち抜いたのは事実なのだろう。

それでも蛍には、自分が世界を救ったと言う実感は沸いてこなかった。

「わたしじゃないよ。このせかいを救ったのは、ひめのさんだよ。」

「え？」

「わたしがほんとうに、やみのろうごくをこわしたのだとしても、きっとそれだけじゃ、みんなが希望をとりもどすこともなかったとおもうの。」

でも、それを成し遂げたのは、ひめのさんなんでしょ？」

希望の光は絶望の闇を祓う力なのだから、プリキュアの浄化技は闇の牢獄だって打ち破ることができるだろう。

でもそれだけでは人の抱えている不安や悩みは消え去らない。

希望の光だけでは、人を絶望から救い出すことは出来ないのだ。

それを成すには、言葉で思いを伝えるしかない。

そして千歳は、半年もの間絶望の闇に囚われていた人たちを、彼女自身の言葉だけで救い出したのだ。

それは彼女がみんなに好かれ、慕われ、そしてこの世界の人々を心から大切に思っているからこそ現実となったこと。

だから自分が凄いのではない。

本当に凄いののは、この世界の誰からも好かれていない千歳なのだ。

「だからわたしは、なにもスゴイことなんてしていないよ。」

屈託なく笑う螢に千歳は目を丸くする。

「……全く、あなたには敵わないな。」

千歳は穏やかながらも、やや呆れたそう呟いた。

「ひめのさん？」

敵わない、の意味が分ならず蛍は千歳の表情を伺う。

「千歳。」

「え？」

「姫野さん、なんて他人行儀な呼び方しないで。」

私のことも、要や雛子と同じように名前で呼んで欲しいな。」

すると千歳が名前で呼んでもらえるように頼んできた。

ほんの1，2度しか会話をしたことがない相手を名前で呼んで良いのかと、蛍は少しだけ不安になる。

「だって、もう私たち」

「だけどそんな蛍の不安も、次の一言で全て吹き飛んだ。」

「友達、でしょ？」

千歳から出た友達と言う言葉に、蛍の胸に温かな感情が宿る。

初めて彼女の力を目の当たりにしたから、蛍は彼女のように強くありたいと仄かな憧れを抱いていた。

一方で彼女の言葉を、理不尽と思って怒ったときもあった。

そして弱い自分では彼女の力になれないと言う不安、自分たちを妬んでいた真意を知ったときの困惑、自分の言葉を否定された時の怒り、その全てを乗り越えて、隣で戦うことができたときは本当に嬉しかった。

何よりも、1人で戦い続けてきた彼女を助けたいと思う気持ちだが、自分がプリキュアとして戦うきっかけの1つだったのだ。

これまでキュアブレイズに、千歳に抱いていた思いの数々が、千歳と友達になれた喜びへと昇華されていく。

「うん！わかった！ちとせちゃん!!」

力の差、思いのすれ違い、世界の壁、多くの垣根を超え、新しい友達ができたことを、蛍は心から喜ぶのだった。

：

蛍から名前でも呼んでももらえたことに、千歳は喜びと安堵を覚える。

自分がこれまで彼女にぶつけてきた言葉の数々を鑑みれば、断られてもおかしくな

かったからだ。

それでも蛭は、これまで自分が言ってきたことを気にしていないのか、それ以上に嬉しかったのかは分からないが、その申し出を満面の笑顔で応じてくれた。

その無邪気な笑顔は、彼女が心の底から喜んでい何よりの証だった。

「ありがとう、蛭。」

そんな蛭と友達になれたことで、千歳は一つの決意をする。

(私は、この先何があっても必ず、蛭のことを守って見せる。)

誰よりも弱くて、誰よりも強い。

弱さと強さを両極端に兼ね備えた彼女のことを、これからは守って行こうと。

それが自分の出来る、彼女への謝罪と恩返しだから。

そして弱きを助け強きを挫くのは、自分の生まれ持った性質なのだから。

「あれ・・・? あっ!」

アツ、アツプルさん! いま何時ですか!？」

すると蛭が突然素っ頓狂な叫びをあげて時間を尋ねてきた。

慌てようからして恐らく彼女の世界での時間だろう。

「ちよつと待ってね・・・日曜日の夕方4時ごろかしら。」

「たいへん! おうちかえってごはんのしたくしなきゃ!!」

「えっ？ 蛍？」

大慌てでベッドから下りる蛍を見て、千歳は目を丸くする。

「そんなに慌てなくても、身体は大丈夫なの？」

「うん、たつきさんお昼寝したからね！」

それよりもはやくかえらないと、おかーさんとおとーさんがまつてるの！」

両親思いの蛍の決心は固く、要と雛子も蛍の言葉に微笑んでいる。

「どうやら2人も彼女の意思を尊重するつもりようだ。」

「ふふっ、わかったわ。」

千歳も蛍の思いを尊重し、慌てる彼女をなだめてから玉座の間へと向かうのだった。

「そうか、もう帰られるのか。」

「あなた方はこの世界の恩人、是非ともそのお礼をしたかったです。」

「自慢ではないが、ここはこの世界一番のお城だ。」

せめてそなたたちをもてなそうと、来賓用の客間に豪華な幸をと思っていたが。」

両親の元へ蛍たちを連れていき事情を話すと、2人とも惜しむ言葉を述べた。

それは千歳も同じだったが、蛍が畏まった姿勢で深々と頭を下げる。

「ごつごめんなさい！」

でもわたし、かえっておかーさんとおとーさんのためにお夕ご飯をつくらなきゃいけないんです!!」

その一言に、父と母は優しく微笑む。

千歳もせめてものお礼にと、蛭たちの世界の基準で見ても豪華な食事で持て成そうと思っていたが、一国の王の謝礼よりも両親への孝行を優先するところが蛭らしい。

隣を見ると要は少し残念そうに、雛子はいつものように慈しむ表情を蛭に見せていた。

「そうか、そう言われては無理に引き留めることも出来んな。」

「ええつ、そうね。」

「あつ、ありがとうございます！」

蛭は再び深々と頭を下げる。

そんな彼女たちを見て千歳は少しだけ物思いにふける。

ダークネスの脅威がこの世界から去った今でも、まだ世界から絶望の闇が完全に消え去ったわけではない。

この世界のどこかにまだ、絶望に囚われている人がいる。

何よりも半年もの間この世界は一切の時間が止まっていたのだ。

一日も早く復興させるためにも、姫の身である自分はここに残るのが王族の責務だろう。

「ただ今今は、別の思いも生じてきている。」

「千歳、お前は どうするつもりだ？」

すると父が真つ直ぐにこちらの目を見据えてきた。

自分がこの悩みを抱くの察していたのかもしれない。

父の言葉を受けた千歳は、自分の素直な思いに従うことにした。

「お父様、お母様。」

私はしばらくの間、彼女たちの世界に滞在しようと思いません。」

「えっ?」

蛭が驚き、要と雛子もこちらを見る。

千歳は彼女たちを一瞥してから言葉が続ける。

「ダークネスの脅威は彼女たちの世界にも及んでおります。」

彼女たちは私たちの世界を救うために戦ってくれた。

だから私も、彼女たちの世界を救うために戦いたいです。

彼女たちへ恩を返すために、プリキュアの使命としてダークネスと戦うために、そして、」

千歳は一呼吸を置き、3人へ微笑む。

「友達として。」

新しく出来た友達を助けるために戦いたい。それが千歳の何よりの本心だった。

「そうか、チトセ。お前の思うがままに行くときよい。」

この世界からダークネスの脅威が去った今、世界が復興するのもそう遠くはない。

悩むものがいれば誰かが自然と手を差し伸べてくれる。ここはそういう世界だから。」

「お父様……。」

「せつかくあなたに大切な友達ができたのですもの。」

あなたの気が済むまで、そちらの世界へいてもいいのよ?」

「お母様……ありがとうございます!」

両親の温かな言葉に千歳は目を潤ませる。

「女王様、ご安心を。」

私も千歳についていきますので、私生活については何の心配もございません。」

「ちよつとアップル!」

「ええ、アップルがついてくれるのなら、私も安心よ。」

チトセのことをよろしくね。」

「お母様まで！」

2人のやり取りに今度は顔を赤くして抗議する。

「それじゃあ、まだいつしよにいることができるんだね……」

千歳の言葉に蛍が目を少し潤ませたが、見る見るうちに表情を輝かせていき、

「やったあ!!」

千歳に向かって飛び付いてきた。

「きゃっ、ちよつと蛍？」

「だって！せつかくおともだちになれたのに、いきなりお別れだなんてさびしいもん！」
蛍は僅かに涙を流しながら、一緒にいられることを心から喜んでくれた。

千歳はそんな蛍をあやすように頭に手を置いて優しく撫でる。

だけど嬉しいのは彼女だけじゃない。自分だって嬉しかった。

心のどこかでずつと願っていた、彼女たちと一緒に過ごすことができるようになったのだから。

「それじゃ、改めてよろしくな千歳。」

「よろしくね、千歳ちゃん。」

すると要と雛子が手を差し伸べてきた。

「ええ、これからよろしくね。蛍、要、雛子。」

これまで冷たく当たってしまった分、素直な自分で接していこう。そう思った千歳は、笑顔で交互に握手をするのだった。

妖精たちの力を借りて、千歳たちは夢ノ宮湾港まで戻って来た。

アップルの言う通り、時刻はちょうど夕方に差し掛かってきたころ。目に映る水平線は赤く揺れており、太陽は少しずつ傾いてきている。

ここに来たとき蛍たちが隠した荷物を拾った後、バスに乗って夢ノ宮商店街まで向かった。

そしてバスを降り、商店街を抜けた交差点でそれぞれの帰路へと着く時、蛍は千歳の方へ振り返り大きく手を振った。

「ちとせちゃん！またあした、学校でね!!」

満面の笑みを浮かべ明日を楽しみにする蛍の姿に、千歳にも明日学校で彼女たちと会えるの楽しみが生まれていく。

「ええーまた、明日学校で会いましょう!」

元の日常へと回帰したプリキュアたちは、それぞれのパートナーの妖精とともに家へと帰っていくのだった。

：

翌朝。

リン子が朝食の支度をしていると、私室から千歳が制服に着替えた姿で起きてきた。

「リン子、おはよう。」

「え？ええ、おはよう。」

千歳が笑顔で『おはよう』と言うものだから、リン子は少し驚く。

『この世界』に来てから、あの子が自分におはようと挨拶したことはなかったからだ。

それに、あの太陽のような眩しい笑顔を見るのはいつ以来だろう。

故郷を失った憂いとダークネスへの憎しみが、これまで彼女の笑顔を曇らせていた

が、全てが救われた今、彼女は本来の姿に取り戻したのだ。

リン子はそのことを心から喜んだ。最も、本人に自覚はないだろうけど。

「リン子？どうかしたの？」

「・・・ふふつ、いいえなんでもないわ。」

「そう?」

そんな自分の様子がどこかおかしいと思ったのか千歳は首を傾げて椅子に座る。

しばらくして千歳が朝食を取り終えたので、リン子はいつも通り彼女の髪とリボンを結ぶ。

そして玄関の前で靴を履く千歳に微笑みかける。

「千歳。」

「なに?」

「学校、楽しんでらっしゃい。」

「・・・うん!行ってきました!」

千歳の表情からは、学校が楽しみで仕方ないと言う思いが、ありありと伝わってくる。故郷を取り戻し、新しい友達に恵まれるという最高の形で、千歳の日常が帰って来たのだ。

リン子はそのことを喜びながら、仕事へ行くための支度を整えるのだった。

∴

いつものように要と並んで登校する日常の中、雛子はフェアリーキングダムでの激闘を振り返ってみた。

今にして思えば、強化され倒すことも出来ない無数のソルダークに囲まれ、行動隊長であるリリースもパワーアップし、キュアブレイズさえ歯が立たなかったダークネスの司令官とも対峙した。

あの戦いにおける自分たちの状況は、考えれば考えるほど絶望的なものであり、こうしてまた要と2人で学校へ行けることが奇跡である。

その奇跡を実現してくれた蛍と千歳に、雛子は内心感謝していると、ちようどその体現者の1人である蛍の姿が目の前に映った。

「かなめちやくん！ひなこちやくん！」

大きく手を振りながらはしゃいでこちらに駆け寄ってくる蛍。可愛い。

「蛍、おはよう。」

「蛍ちゃんおはよう、今日はいつになく嬉しそうね。」

「えへへ、またこうしてみんなといっしょに学校にいけるのがうれしくて！」

はにかみながらも喜びを笑顔いっぱい表現する蛍。可愛い。

可愛い、と思いながらも雛子は彼女がフェアリーキングダムで流した涙を思い出す。

フェアリーキングダムを一目見たときからずっと、蛍の表情には陰りがあった。あの時打ち明けた不安をずっと、胸の内に秘めていたのだろう。

(私たち、無事に帰って来れたんだね……。)

要と一緒に登校し、蛍を可愛いと思うことができる。

当たり前と思っていた日常への回帰。

変わらない2人の友達の姿を見て、雛子は改めて日常へ帰って来られたことを喜ぶ。それに今日からは、その日常がほんの少しだけ形を変えるはずだ。

「蛍！ 要！ 雛子！」

噂をすれば何とやら、校門へと辿りつく直前、もう1人の奇跡の体現者で、雛子たちの日常を変える人物が後ろから声をかけてきた。

「あつーちとせちゃん！ おはよー！」

蛍は、学校から反対方向にも関わらず、千歳の元へと駆け寄る。

「おはよう、蛍。要と雛子もおはよう。」

そんな蛍の頭を、千歳は優しく撫でながら挨拶をした。

「おはよう、千歳ちゃん。」

「もってウチらはいいでかい。」

要はさほど不快でもない声で千歳に毒づく。

「あら？それなら要へのおはようだけは、ついでにしておくわ。」

千歳も負けじと毒で返す。

だが以前のような険悪な雰囲気はなく、むしろ友人同士が憎まれ口を叩きあうようなやり取りだった。

現に2人とも笑っており、蛍も、2人の様子も気にも留めていない。

「ねーねーちとせちゃん！きよう、いっしょにごはんたべよ!!」

すると蛍が幼い口調で千歳を昼食に誘っていた。可愛い。

友達になれたとはいえ、千歳とは別のクラスだ。

せつかくこの場で会えたのだから、今の内に約束をした方がいいだろう。

「ええ、勿論いいわよ。」

「やったー！じゃあね、おひるやすみむかえにくね!!」

「ええ、待っているわ。」

雛子はそんな2人のやり取りを見守る一方で、道行く生徒たちを伺っていた。

すると雛子の『予想通り』の反応が多く、生徒たちから見て取れた。

ふと要の様子を伺うと、彼女もどこか安堵したような、呆れたような表情を見せている。

千歳はこのことに気づいているのだろうか？そして自覚があるのだろうか？

雛子は今日から千歳の学校生活が、急激に変わるであろうことを予期するのだった。

第14話・Bパート

蛍たちと別れた千歳は、自分の教室である2年3組へと入る。

「みんな、おはよう！」

そして大声でクラスメートたちに挨拶をした。

公共の場で大きな声で挨拶をすることは、場の空気を明るくするとともに、他者と親睦を深めるきっかけにもなると言うのが故郷では一般的であり、故郷以上に高度な人間社会を形成しているこの国においてもそれは同様だろうと思っただ。

だが挨拶を受けたクラスメートたちは、返事をして来ないどころか全員銅像のように固まってしまった。

だがみんな視線だけは自分に向けている。

もしかして服装がおかしいのだろうか？

いや、身だしなみは毎日リン子に整えてもらっているから心配はないはずだ。

となれば、挨拶に問題があったのだろうか？

と疑問に思いながらも千歳は自分の席につく。

すると前の席では未来と優花が周りと同じようにこちらの見ながら固まっていた。

「おはよう、未来、優花。」

試しに2人にだけ挨拶をしてみるが、何も反応がない。

さすがに様子がおかしいと思った千歳は少し不安を滲ませて話しかける。

「えと……私、どこか変だったかしら？」

「……いや、変も何も千歳、あんた今まで私らに挨拶してきたことあった？」

「え……？」

だが、ようやく口を開いた未来の一言で今度は千歳の方が凍り付いてしまう。

そしてこれまでの自分の学校生活における記憶が急速で脳内に再生されていく。

故郷を失った悲しみと喪失感から、この世界で平和を享受している人たちのことを妬ましく思い、自分から距離を置くように冷たく振る舞っていたのだった。

そしていつしか『孤高のクイーン』だなんて呼ばれ、望んだとおり多くの生徒たちから距離を置かれるようになり、ずっと気にかけてくれた優花からも見放された。

未来だけは最後まで自分のことを気にかけてくれたが、それさえも疎ましく思い徹底的に無視を決め込んできたのだ。

今まで何の落ち度もあるはずがない彼女たちにならずと八つ当たりしてきたのだ。

それを思い出した途端、千歳は冷や汗をかく。

いくら昨日の出来事が夢のようなひと時だったとはいえ、決して忘れてはいけないこ

とを忘れてしまっていたのだ。

「あなた、本当に千歳なの？」

優花が訝し気に話しかけてくる。

先週まで徹底して無視されていた相手から突然、挨拶がきたのだから当然の反応だ。

千歳自身も、先週までの自分が今の姿を見たら別人だと思うだろう。

だが彼女たちに本当のことを話すわけには当然いかなないので、どう説明しようかと考えながらも、まずはこれまでのことを謝罪することにした。

「えと……ごめんなさい。今まで冷たい態度を取ってしまった。

その、今までいきよ……じつ実家のゴタゴタに色々巻き込まれちゃって、それであちよつと心に余裕がなかったと言うか、とつとにかくごめんなさい!!」

戸籍上はこの国の人間である手前、故郷と言う言葉は不適切と思つたが、それにしただつて物事の輪郭を捉えているかどうかすら怪しい説明である。

こんな答えで果たして納得してくれるだろうか？

「まつなんでもいいわ。もうそのゴタゴタとやらは解決したの？」

「えつ? ええ……」

だが未来は何の迷いもなく……いや、正確には特に興味もない様子ですんなりと受け入れてくれた。

「そっか、良かったじゃない。

で、今はもう心に余裕が持てたってやつ？」

「ええ……。」

「未来、あなたそれで納得できたわけ？」

「納得も何も細かいこと気にしなくてもいいじゃない。

ようやく千歳が話しかけてくれるようになったんだよ？

私にはそれだけ十分だよ。」

そう屈託なく笑う未来の姿に千歳は救われた気がした。

「優花だって、本当はもう根に持ってもいないんでしょ？」

「まあね。と言うわけでこれからよろしくね千歳。」

「あつ！私が先に言おうとした台詞！よろしくね千歳!!」

「つええ、よろしくね。未来、優花。」

蛭たちもそうだったが、未来と優花もとても優しい子たちだ。

千歳は自分がどれだけ恵まれた環境にいるのかを実感しながら、周りにいる人たちに心から感謝するのだった。

昼休み。約束通りであればそろそろ蛭が迎えに来てくれる頃だ。

「千歳く、良かったら一緒に昼食べない？」

前に座る未来が振り向きながら話しかけてきた。

彼女からの申し出は素直に嬉しいが、蛭との約束を破るわけにもいかない。

「ごめんなさい、今日はもう先約が入っているのよ。」

「先約？先約ってどなた？」

「それはね……。」

「しっ、しっつれいします!!」

すると教室のドアが開く音とともに、蛭が緊張で裏返った声と共に入って来た。

だがこちらに気づくや否や、強張っていた表情が一転明るくなり小走りでこちらへと駆け寄ってくる。

「ちとせちゃん！」

「蛭、わざわざありがとう。」

「あく、先約って要たちのことか。」

「そつ、だから今日はごめんね。」

蛭にお礼を言い、誘ってくれた未来に謝罪すると、未来の隣に座る優花が何かに気が付いたように手のひらをポンッと叩いた。

「なるほど、やっぱり君のことだったのね。」

「ふえ？」

突然優花に話しかけられ、蛍は困惑する。

「休み時間中にチラつと聞いたの。」

孤高のクイーンが突然変わったのは、その凍てつく心（アイスハート）を溶かした小さなお姫様（リトル・プリンセス）がいたからだって。」

「・・・へ？」

そして優花の言葉の意味がわからないのか、ますます困惑の表情を浮かべていた。だが千歳はその言葉の意味を捉えて微笑する。

「あくそつえばそんな噂流れてたね。リトル・プリンセスか。」

確かにこの学校だと蛍ちゃんくらいしか思い当たる子はいないね。」

困惑する蛍を差し置き、未来も納得したようだ。

すると優花が自席から立ち、蛍の方へと近づいてくる。

「えつ、えと・・・？あの・・・。」

一方、蛍は向かってくる優花を見て、強張った様子を見せる。

未来と違い、優花とはほぼ初対面のはずだ。

人見知りの強い彼女のことだから緊張しているのだろう。

「ああつ、脅かしちゃってごめんね。」

君、要のとのクラスメートだよね？」

そんな蛍の反応を察してか、優花は膝を屈ませて蛍と目線を合わせた。

「はっはい……。」

「初めまして、私は相羽 優花って言うの。よろしくね。」

「よっ、よろしく、おねがいます……。」

ぎこちないながらも挨拶を終えた蛍の前に、優花は少しずつ頬を緩ませていく。

優花の様子がどこかおかしいと思った矢先、

「いや、未来から話は聞いていたけど、君って本当に小つちやくて可愛いね。」

「はわわわっ……。」

優花が緩んだ表情のまま、蛍の頭を撫でまわしてきた。

そんな彼女を前に蛍は困惑しながらも、自分が子ども扱いされていると思い反論する。

「あつ、あの！わつわたし、こうみえてもおないどしなんです！

だったからその……あのつ、こどもあつかいは……ええと……。」

だが反論しようにも、初対面の人が相手ではなかなか強気に出られないのか、徐々に尻すぼみな言葉になってしまった。

そんな態度が優花をさらに刺激してしまい……。

「かゝわゝいゝゝいゝ!!」

「ひゃああつ!」

優花はおもむろに蛍を強く抱きしめた。

他のクラスの教室で見知らぬ人たちを前に、初対面でしかも同い年の人から強く抱きしめられる。

そんな状況で恥ずかしがり屋の蛍が無事でいられるわけもなく、顔から蒸気を出す勢いで真っ赤になっていった。

「優花、その辺にしなさい。」

「あははつごめんね蛍ちゃん。苦しくなかった?」

「はっはい……。」

さすがに蛍が気の毒に思ったので止めに入ったが、優花は特に悪びれた様子もなく謝罪する。

だが一方で千歳も、顔を赤くして困惑する蛍の姿はとても愛しく見えたのだ。

一昨日までは蛍の弱気な様子が嫌いだったはずなのに、もうその時の記憶が風化している。

代わりに芽生えたのが、誰よりも彼女のことを愛しく思う気持ちだった。

どうも自分の頭の中と違うのは都合よく出来ているみたいだと、千歳は自分のことながら呆れるが、もう以前のように蛍を嫌うことが出来なくなっていた。

「それじゃ蛍、要と雛子も待っているでしょうし、そろそろ行きましょう。」

「うっうん、・・・あの。」

すると蛍は未来と優花の方を見て、両手を自分の胸の前に当てた。

千歳にはそれが何を意味しているか何となくわかっている。

あの子は今、勇気を振り絞り絞ろうとしているのだ。

「なに？蛍ちゃん。」

「よっ、よかったら！みんなでいっしょにぐいはんたべませんか!」

「え?」

蛍の突然の申し出に、今度は未来と優花が困惑する。

人見知りの強い彼女に誘われたことがよっぼど意外だったのだろう。

「えと、いいの？私たちも一緒して。」

「はっはい、こうゆうときは、大勢のほうがたのしいって、かなめちゃんが言ってたから。」

「それじゃ、お言葉に甘えましょうか?」

頬を赤くしながら頼む蛍の申し出を断れるはずもなく、優花は同意し未来も頷いた。

「あつありがとうございます！えと・・・。」

「未来、でいいわよ。」

「私も、優花って呼んでちょうだい。」

「はっはい！いっしょにいこつ！みくちゃん、ゆうかちゃん！」

未来と優花とも輪を広げることができた螢は、飛び跳ねんばかりの勢いで喜ぶ。

そんな彼女の様子を見て、千歳は昨日の自分の決意を思い出す。

『これまで』螢を傷つける言葉をぶつけてきた過去を消すことはできないが、それならば代わりに『これから』の彼女を守り続けて行こう。

そう思った時、千歳の頭に1つの言葉が思い浮かんだ。

「2人とも、1ついいかしら？」

「なに、千歳？」

千歳は未来と優花の方を振り向きながら声をかける。

『孤高のクイーン』って名前、結構気に入ってけどそれは今日限り返上させてもらわ。」

「気に入ってたんかい。」

未来が小声で入れたツツコミは千歳の耳には届かない。

そして千歳は腰に手を当て、2人を見据えて宣言する。

「その代わり、これからは私のことを、

『小さなお姫様（リトル・プリンセス）の守護騎士（ガーディアン・ナイト）』

と呼びなさい！」

蚩を、小さなお姫様を守る騎士となるのだ。

立場だけで言えば自分の方が姫のはずだが、千歳にとつてのお姫様は紛れもなく蚩であり、そんな彼女を誰よりも守りたいと思うのなら、自分は彼女の騎士であると言つても過言ではないのだ。

そしてこの世界で学んだ言葉を用いて千歳は思いつく限りのカッコイイ通り名を2人の前に発表し

「……はい？」

……たのだが、未来と優花はどこか呆れた表情を浮かべた。

通り名のカッコよさを称賛する反応を期待していただけに、この反応は予想外過ぎて千歳までも困惑してしまう。

一体だが何かいけなかったのだろうか？

ただ『騎士（ナイト）』と表現するだけではシンプル過ぎると思ったので『守護（ガーディアン）』を頭に付けた方が響きが良く何よりカッコイイと思ったのだが、どうも2人の反応を見るにあまりよろしくはなかったようだ。

「ちとせちゃん！はやくいこー！」

「あつ、はい。ほら、2人とも蛭を待たせてるわよ。」

「うっうん。」

だが何をカッコイイと思うかは人それぞれの感性によるものだろう。

千歳はあまり気にせず、自分がカッコイイと思うならばそれでよしと思うようにした。

だが2人からはひそひそと、「千歳ってひよつとして・・・？」、「みたいね。」なんて会話が聞こえてきた。

結局、ひよつとして、の後に聞こえなかった千歳には2人が呆れた理由がわからず、そのままと雛子が待つ食堂へと向かうのだった。

：

食堂の隅にある席、蛭たちがプリキュアについて話をする時に使っているこの場合は、今日は多くの人たちで賑わっていた。

要、雛子、千歳、クラスメートの真に愛子、それから千歳のクラスメートである未来と優花、そして蛍自身を合わせた8人で談笑しながら昼食を取っている。

「蛍ちゃんの料理うつまー！」

「うちの親のより美味しいわ！」

「あつ、ありがとう……。」

未来と優花に料理を絶賛され、蛍は恥ずかし気にお礼を言う。

例によって千歳に手料理を振る舞おうと思ひ、お弁当を多めに作つて来たのが幸しいた。

「本当に美味しいわ。ありがとう蛍。」

「えへへ……。」

千歳に喜んでもらったのが嬉しくて、今度は照れくさそうに微笑む。

「それにしても、まさか孤高のクイーンと一緒にお昼を食べられるとはね。」

「びつくりしちゃったわ。いつの間にか仲良くなっているんですもの。」

「あはは、まあ色々あつてね。」

真と愛子の言葉に要は苦笑いを浮かべるが、2人ともそれ以上のことは言及せず、かつて人を遠ざけていた千歳のことも特に気にせず接してくれた。

「千歳つてさ、スポーツも得意なんだよね？ サッカーとかできる？」

「授業でしかやったことがないけど。」

「現役女子サッカー部員をごぼう抜きしてたよね。」

「ちよつと未来。」

「千歳ちゃん、漫画とか興味ある？」

「えつと、あまり読んだことはないけど、でも興味はあるわ。」

仲良くお喋りをするみんなの姿を見ながら、蛭は要たちと友達になつてから初めてみんなでお弁当を食べた日のことを思い出す。

あの時は要と雛子、真と愛子の4人と一緒だったが、今日は千歳たち3人も一緒だ。蛭にとつて友達と考える人が今、8人もいるのだ。

その数は、男女ともに友達の多い要と比べれば決して多くはないだろう。

だが今年の4月まで友達と言える相手が1人もいなかった蛭にとつて、8人も友達に恵まれるなんて夢のような出来事なのだ。

蛭はあの時と同じように、リリンを想い勇気のおまじないをする。全て、始まりのきつかけとなったこのおまじないのおかげだから。

「それって、おまじない？」

そんな蛭に千歳は、あの時の雛子と同じ質問をしてきた。

「うん、一歩ふみだせる勇気がだせるおまじないなの。」

「一歩踏み出す勇氣か……素敵なおまじないね。」

「うん！」

千歳にリリンから教えてもらったおまじないを褒められ、蛭は上機嫌になる。

「確かリリンちゃんって子から教えてもらったのよね？」

「うん、リリンちゃん……。」

愛子の言葉に蛭は頷きながら、リリンを想い窓の外に広がる青空を見る。

今日は彼女と会う約束をした日だ。

学校が大好きになった蛭にとって、放課後が楽しみで仕方ないと言うのも珍しいことだが、彼女に会える喜びは、今の蛭には何物にも変えられないものになっていた。

「ホント、恋する乙女みたいやな。」

要はあの時と同じ言葉を蛭へとかける。

「……えへへ。」

だが蛭の反応は、あの時と違っていた。

その言葉に反論せず、はにかむのだった。

そんな蛭の反応に要はポカンとし、他のみんなも言葉の意味を深読みしたのか、表情に疑問を浮かべている。

そんなみんなの疑念をとりあえず晴らそうと、蛭は本心を口にする。

「恋なんて、わたしにはわからないよ。」

だけどそれは、蛍にとつては否定の言葉にはなっていないかった。

確かに自分は恋を知らない。

父親以外の男性と会話したことなんて指で数える程しかなく、そもそも同性の友達ですら要たちが初めなのだ。

そんな自分に異性の友達なんているはずもなく、恋をする機会だつてあるはずもなかった。

(・・・でも)

そんな自分でも分かる。リリンに対する好きは、他の誰とも異なる好きなのだ。

友達とも、両親とも違う、リリンにだけ感じることが出来る『特別』な好き。

彼女のことを想うだけで幸せになれる。一緒にいるともっと幸せになれる。

もしもこの気持ちに、『恋』だと言うのであれば・・・。

「・・・それでも、いいかな・・・。」

そう思えるほどに、蛍の心は、リリンに強く惹かれていた。

：

夕刻に差し掛かった時間を目掛けて、リリンは噴水広場を訪れる。

いつもの通りならそろそろ蛍が現れる時間だ。

幸いにも今日は一緒に会う約束をしている。あの子が自分との約束を破ることなんてしないだろう。

「確かめ……ないと……。」

本当にあの子だったのかどうか、それをちゃんと確かめなければならぬ。

だが確かめたところで自分の任務には何の影響もないはずだ。

むしろアモンから与えられた新たな任務を遂行するには好都合のはずだ。

それなのになぜ今、こんなにも苦しいのだ？

「ほたる……。」

待ち人の名を呟きながらリリンが商店街の方へと目を向けると、ちょうど目の前に蛍の姿が映った。

「あつ、リリンちゃん!!」

蛍の方もこちらに気づいたらしく、駆け足で寄って来た。

その後ろには要と雛子、それから初めて見る青髪の少女の姿がある。

「ほたる、こんにちは。」

「うん！あつ、しようかいするね、リリンちゃん。」

わたしのあたらしいトモダチで、ちとせちゃんっていうの！」

「初めまして、姫野 千歳です。」

あなたがリリンね。蛍から話は聞いているわ。」

「リリンです、よろしく」

蛍が紹介する新しい友達とやたらに怪しまれないよう、リリンも形式ばかりの挨拶を交わす。

(・・・あれ?)

だがここでリリンの頭に1つの疑問がよぎった。

フェアリーキングダムでの戦いで、確かキュアブレイズはキュアシャインと共闘戦線を張っていた。

そしてそれを終えた今日、蛍が新しい友達を紹介してきた。

このタイミングは偶然なのか？

さらにリリンは、キュアブレイズと千歳の背丈が近いことに気がつく。

千歳だけではない。よく見ると要と雛子も、キュアスパークとキュアプリズムと背丈が近くないだろうか？

そして蛭は……。

「あつ……。」

そこまで思い当たり、リリンは顔を強張らせてしまう。

「リリンちゃん？」

蛭が心配そうに声をかけてくるが、リリンの耳には入らない。

蛭みたいな肉体的、精神的に幼く弱い少女がプリキュアであるはずがないと決めつけていた。

だから今まで彼女の身の回りのことなんて気にも留めていなかった。

だけでもし、彼女の正体が……だとしたら？

蛭がプリキュアを知っている素振りを見せたこと。

自分を巻き込みたくないと言っていたこと。

背丈の近い蛭の友人たち。

先週の休日は用事があると言う言葉。

そして、キュアブレイズの加入とともに姿を見せた蛭の新しい友達。

これまで蛭と過ごした出来事の全てが、見えなかった点と線で一気に結び始める。

全ての要素が、リリンに1つの事実を押し付けてくる。

何よりもキュアシャインは、恐れあまりソルダークから背を向けて逃げ回り、戦士

とは思えないほど身体能力が低く、自分の力一つ満足に扱えていないほど脆弱な戦士だった。

戦場で突然泣き出すほど精神的にも弱い存在だ。

その特徴は、蛍と一致しないだろうか？

「リリンちゃん！」

「えっ……？」

「だいじょうぶ？なんだか、かおいろがわるそうだけど。」

「えっええ……ごめんなさい。」

ちよつと体調がすぐれないみたいで……。」

「えっ!?!リリンちゃんぐあいわるいの!?!」

リリンの言葉に蛍は動揺し、表情は心配に満ちていく。

彼女の心は揺れていない。

今なお自分に対してトモダチとして信頼を置いてくれている。

「だいじょうぶよ、ほんのちよつとだけだから、おはなしする分には問題ないわ。」

「でも……。」

「あたし、今日ほたと会えるの、ずつと楽しみにしてたんだから。」

だからいつも通り、ここでお話しましょ?」

「うっうんー！」

それなら自分は彼女の信頼を裏切らないように、いつも通りに接するだけだ。

そう、いつもと変わらず、ただ任務のために、彼女を利用するために。

だがそんないつもと変わらないはずの日常は、今回はリリンに安らぎを与えることはなかった。

：

リリンと2人で談笑する蛍の姿を、千歳は要たちとともに少し離れたところで見守っている。

「・・・蛍、随分嬉しそうじゃない。」

千歳は少しだけ口を尖らせる。

ここに来る前に蛍から前もって予定を聞いていたとはいえ、紹介したい友達がいると呼ばれてついてきたかと思えば、一言挨拶を済ませただけで2人きりの世界へ入ってしまふものだから面白くない。

だからと言って2人の間に割り込んでいくほど千歳も子供ではないが、そこがまたちよつとだけ面白くなかった。

「リリンちゃんと一緒にいるときはいつもあんな感じよ。」

「蛭にとつては、自分を変えるきっかけを作ってくれた恩人だしな。」

今日のお昼に少しだけ話を聞いてはいたが、なるほど、確かにリリンと一緒にいるときの蛭は、これまで見せたことのない笑顔をしていた。

要が彼女を恋する乙女とからかっていたのも領けるし、あんなにも幸せそうな蛭の姿を見せられては千歳としても見守るしかない。

「あのリリンって子も、今年の4月からここに越して来たんだっけ？」

「ええ、蛭ちゃんからはそう聞いてるわ。」

蛭も確か4月から引越して来たはずだ。

似たような境遇と言う共通点も、2人を結びつける強いきっかけとなつているのかも
しれない。

千歳はそうぼんやりと考えていたが、

「つてことは、背丈からしてあの子は夢ノ宮小学校へ通つていいのかしら？」

「あれ？そう言えばリリンってどこの学校通つてるんだっけ？」

「え？」

ほんの何気ない疑問の1つが千歳の中で波紋を生み出す。

「言われてみれば聞いたことがないわね。蛍ちゃんなら知ってるかもしれないけど。」

「どこの学校へ通っているのかもわからないって、あなたたち友達ではないの？」

「いやあ、実はウチらは一言二言会話したことがある程度で、いつもは蛍とベツタリやらねあの子。」

「ほら、今日みたいに蛍ちゃんのお邪魔しちゃ悪いからね。」

でもそれがどうかしたの？」

千歳の頭をよぎった疑問がふつふつと膨れ上がっていく。

彼女たちは何も疑問に抱いていない。だけどそれは仕方のないことだ。

背丈的にリリンは小学生に見えるから、同じ学校に通っていないなくても不思議ではないし、2人が蛍に気を遣って敢えて距離を開けていたのであれば、通う学校を聞けるほどのプライベートな話も出来ないだろう。

それに2人は『あのこと』については知らないはずだ。勘付けと言うのも横暴な話だ。

「千歳ちゃん？」

雛子の声を聞き、千歳は我に返って再び蛍の方を見る。

蛍は変わらず、幸せそうな笑みを浮かべてリリンとお喋りをしている。

でも自分の抱いた疑問は、彼女の幸せを真っ向から否定するものだ。

「・・・いいえ、何でもないわ。気にしないで。」

そもそも素性を知らないだけで決めつけるのも酷い話だ。

千歳は、今は蛍のための思い、自分の抱いた疑問を静かに胸の内に収めるのだった。

：

「それじゃあまた今度ね、ほたる。」

「うん、またね！リリンちゃん！」

蛍と別れてからもリリンは、一人で噴水広場の周辺を歩き回っていた。

どこかへ行くアテがあるわけではない、ただ歩いていないと思考の渦に飲み込まれてしまいそうだったのだ。

(ほたる・・・あなたは・・・。)

だが結局、リリンは思考を中断することができないでいた。

しばらくの間、リリンはずっと街を歩き回る。

(本当に・・・あなたなの・・・?)

もしそうだとすれば、これまで自分は彼女のことを……。

「っ!？」

そこまでの考えに至った瞬間、リリンの喉から湧き上がる熱い衝動が吐息となつて吐き捨てられる。

そうだ、まだ覚えている。キュアシャインに抱いたあの衝動を……。

「キュア……シャイン……。」

もう、どうだつて良いことだ。

自分にはまだこの黒い衝動が残っている。いつも通りこの衝動に身を委ねるだけだ。例えやつの正体が誰であろうと……。

「ターンオーバー……、希望から絶望へ……。」

だがいつもと違い覇気のない声で、リリンはリリスへと姿を変えるのだった。

：

千歳は虫たちと談笑しながら、商店街から帰路へと向かっていた。

最も会話の内容はもっぱら、蛍が今日リリンと何を話したのかであり、甘い表情と甘い声で終始嬉しそうに話す蛍の姿を、要は呆れてげんなりした表情で、雛子は頬を緩み切った恍惚とした表情でそれぞれ聞いていた。

そんな3人の姿に苦笑しながら、千歳は今日に抱いた疑問の1つを蛍に聞いてみようと思った。

「ところで蛍。」

「なに？ちとせちゃん。」

「リリンって、4月からここに転校してきたのよね？」

「どこの学校に通ってるかとか、どこに住んでるかとか聞いたことある？」

「リリンちゃんの学校？そういうえば、きいたことなかったかな。」

「リリンちゃん、あんまりじぶんのおおはなししたくない感じだったから。」

「それじゃあ、彼女の連絡先とかは？」

「んつと、携帯電話とかもってないみたいだよ。」

それに、リリンちゃんはわたしが会いたいっておもえば会うことができるから……。」
頬に両手を当てておもむろにノロケだす蛍に要は深いため息を吐くが、千歳はそれどころではなかった。

リリンはあれだけ蛍に親しくしていると言うのに、自分のプライベートに関する情報

を徹底的に伏せているのだ。

「ちとせちゃん、それがどうかしたの？」

「えっ、ええ、とても仲が良さそうに見えたから、ちよつと意外に思っただけよ。」

「えへへ、リリンちゃんとはいつもあの噴水広場で待ち合わせするのが日課になってたからね。」

だからあんまり、気にしたことなかったんだ。」

確かに友達同士とは言え私生活の隅々までひけらかす必要はないだろうし、彼女の言うように本当に必要性がないのであれば、連絡先や住所などを聞くこともないのかもしれない。

それでも蛍の答えに千歳は眉を潜めるのだった。

「じゃあちとせちゃん、また学校で会おうね！」

「ええ、今日一日ありがとう、またね。」

「うん！かなめちゃん、ひなこちゃんもまたねー！」

「バイバイ。」

「おう。」

「要と雛子も、今日はありがとうね。」

「だからウチらはずいであって。」

「要。」

「冗談冗談、またな千歳。」

「また明日ね。」

「うん、また明日。」

蛍たちと別れの挨拶を済ませ、千歳は一人帰路についていた。

また明日、この言葉を言える日が来たことを千歳は心から喜ぶ。

また明日から友達と一緒に過ごせる日々が訪れる。

だが千歳の脳裏に囁く疑念が、そんな喜びに暗雲をもたらし始めていた。

蛍でさえリリンのことを知り得ていない。

だけど一方で、こちらの一方的な言いがかりである可能性の方がまだ高いのだ。

この疑念は蛍を傷つけてしまうどころか、その幸せを奪いかねないものだ。

それは本意ではないから、確証がない以上答えを急ぐべきではない。

それでももし、この疑問が真実だとしたら……。

(……念のため、警戒しておいた方が良さそうね。)

もしもリリンが本当にただの友達であれば、彼女への仕打ちは到底許されるものではないだろう。

それでも全ては蛍のため、自分は彼女のこれからを守ると決めたのだ。

彼女の守護騎士として、心を鬼にしてもリリンを疑ってかからなければならぬ。
その時、

「っ!?闇の波動!？」

先ほどまでいた商店街の方から闇の波動を感じられた。

この波動には覚えがある。リリースだ。

彼女の出現が千歳の疑惑をさらに深めていく。

だけど今はそれどころではない。

やつが現れたと言うことは、またこの街に住む誰かが闇の牢獄に囚われたのだろう。

そして蛭の身に危険が迫っている。

この世界を、蛭たちの大切な世界を守るために自分はここへ戻って来たのだ。

千歳は虚空からパクトを生み出し、右手に持って天へと掲げる。

「プリキュア!・ホープ・イン・マイハート!!」

直後、パクトから赤色の光が解き放たれた。

赤き光はヴェールとなって千歳の全身を包み込む。

そして千歳が光のヴェールを指で弾くと同時に着火音が鳴り響き、炎がヴェールの上を走り出す。

やがて炎は隅々まで燃え移っていき、轟音と共に爆炎を生み出し赤いドレスを形成し

た。

そして降り注ぐ火の粉がリボンとなってドレスを飾り、自身の髪を指でなぞり赤色に染め上げていく。

最後に光が千歳の髪をツインテールに結び、瞳の色を赤く染め上げる。

「世界に轟く、真紅の煌めき！キュアブレイズ!!」

そして名乗りと同時に千歳の周囲に爆発が巻き起こり、その名の通り世界に轟かンばかりの爆音を鳴り響かせた。

プリキュアとしての使命のため、この世界を守るため、そして蛍の幸せを守るためにこの地へと舞い戻った千歳は、再び闇の牢獄へと身を投じていくのだった。

千歳がその場を訪れると、目の前にはリリスとソルダークの姿があった。

「リリス！あなたもこの世界に戻っていたのね！」

「キュアブレイズ・・・？」

あなたなんてどうでもいい。

キュアシャインは？キュアシャインはどこなの!？」

さっそく自分のことをないがしろにされ、リリスはキュアシャインを求めて辺りを見

回す。

相変わらずキュアシャイン以外は眼中にないようだが、別にリリースにどう思われようがなんてこちらとしても知ったことではない。

重要なのは放っておけばキュアシャインの身が危ないと言うことだ。

「あの子の元へは行かせない！」

千歳が臨戦態勢に入ると、リリースは顔をゆがめて睨み付けてきた。

「あなたはいつでもいいって言ってるでしょ！」

ソルダーク!!

そしてソルダークの名を呼ぶと同時に、ソルダークが両手を伸ばしてきた。

伸びた両手は鞭のようになり、千歳へと襲い掛かってくる。

だが千歳はその攻撃を僅かな動作で回避し、両足から炎を噴射して一気に距離を詰

め、ソルダークの腹部にショルダータックルを叩き込んだ。

そして腹部を押さええよるめく巨体を蹴り上げ、両手から火球を飛ばして追撃する。

空中で2つの火球を受けたソルダークは煙とともに地面に落下していった。

「ちっー！」

その戦いを見ただけでソルダーク1体では分が悪いと見たのか、先ほど千歳のことをどうでもいいと言っていたリリースが爪を尖らせて襲い掛かる。

千歳は身体を反らせて回避するが、リリスは尾を振るい追撃する。

千歳は迫る尾を肘で落とすと、続けざま空中で身体を反転させたリリスが両爪を薙いで来た。

行動隊長の中でも特に速度に秀でるリリスの連撃は、千歳と言えど捌くので手いっぱいだ。

五月雨に飛び交う攻撃を全て受けきるも反撃の糸口をつかむことができない。

「ソルダークー！」

するとリリスの掛け声と同時に、後方に倒れていたソルダークが起き上がり、両手を伸ばしてきた。

リリスの攻撃を捌くので手いっぱい千歳が、回避できないタイミングを計ってソルダークの両手が迫り来る。

このままでは当たってしまう。千歳がそう思ったその時、
「おらあつ!!」

千歳の目の前を青色の閃光が通り過ぎ、迫るソルダークの手を叩き落した。

青い光はそのまま千歳を抱えて後方へと飛んでいく。

そして千歳が地に足をつくとき、彼女の周りにはキュアシャイン、キュアプリズム、そして青色の光から姿を見せたキュアパークの姿があった。

「キュアブレイズ、まだ一人で戦う癖が抜け取らんの？」

キュアスパークがやや呆れながらも千歳を見て微笑む。

「キュアスパーク。」

「遅れてごめんなさい。」

でも私たちもいるのだから、待つてくれていても良かったのに。」

キュアプリズムが申し訳なさそうな表情を浮かべながらも注意する。

「キュアプリズム。」

「キュアブレイズだいじょうぶ？ケガはない？」

そしてキュアシャインが心配そうな表情でこちらの容態を伺ってきた。

「キュアシャイン・・・ええ、大丈夫よ。」

3人の姿を見た千歳に喜び安堵し、そして少しだけ反省する。

「っ!?キュアシャイン・・・。」

するとキュアシャインの姿に気づいたリリスが顔を歪めながらキュアシャインを睨

み付けてきた。

その表情がこれまでキュアシャインに見せたどの表情とも異なっていたが千歳は気

にしない。

何がどうあれやつの目的はキュアシャインだけなのだ。

千歳はキュアシャインを守るようにキュアプリズムと並び前に立つ。

「みんな、この場を借りて改めてお願いするわ。」

私を、キュアブレイズを、あなたたちの仲間、『ホープライトプリキュア』の1人として戦わせて。」

ホープライト、希望の光。

プリキュアを体現する存在、そう、『世界を照らす希望の光』を守るものとして千歳は戦いたい。

すると要が白い歯を見せてニヤリと笑い、

「よし、キュアシャイン。4人でアレ言ってみる?」

「ええっ!? またわたし!?!」

蛭に何かを振ったようだ。蛭の方もその意味を気づき少し顔を赤くする。

「キュアシャイン、よろしくね。」

それにキュアプリズムも便乗する。

彼女たちの戦いを見守って来た千歳にも、アレが何を意味するのか分かっていた。

初めて見たときは嫉妬の対象だったが、今はその1人として加われることがとても嬉しかった。

するとキュアシャインが恥ずかし気にこちらの顔を伺ってきた。

千歳はそれに笑顔だけで答える。

観念したのか、蛍は少しだけ俯いた後、大声で名乗りを上げた。

「よっ4つのひかりが、でんせつをつむぐ!!」

「「「ホープライト!プリキュア!!」」」

∴

恥ずかし気に名乗りをあげながらも、蛍はキュアブレイズの方を見る。

彼女とともに戦い、彼女の助けになることをずっと望んでいた蛍にとって、千歳がこうして共に戦ってくれるようになったことが嬉しかった。

「よっし!みんな行くよ!!」

するとキュアスパークが手のひらに雷を発生させ全員に呼びかける。

次にみんなで何を言えば良いのか、視線の先にいるキュアブレイズは察した表情を浮かべており、蛍にも何であるかがわかった。

「「レツツ!」」

「Go!!」

「プリキュア!!」

4人揃っての掛け声とともに、一斉にソルダークの元へと向かう。

「キュアシャイン!!」

その行く手をリリスが阻むが、蛍はリリスへと突撃する。

リリスの目的は自分だけだが、こちらの目的はソルダークを倒すことだ。

それならば彼女の望み通り、このまま囹役を引き受ける。

蛍とリリスは正面からぶつかり合い、空中でもつれ合った。

「っ、キュアシャイン!」

だがその時、リリスの顔に困惑の色が見えた。

これまで憎しみに満ちた表情か、2人きりになれたことを悦ぶ表情しか見せたことが

なかっただけに、蛍は違和感を覚える。

だが直後、リリスが爪を蛍へと突き立ててきた。

リリスの様子がおかしかったことで反応の遅れた蛍は思わず目を瞑ろうとするが、次

の瞬間、雷鳴とともに目の前を蒼い雷が横切った。

「うっ……」

リリスが呻きながら距離を開ける。

その隙に後ろを振り向くと、指の先を放電させているキュアスパークの姿があった。先ほどの攻撃は指先から雷を放ったものだろう。

キュアスパークが見せる攻撃の中では初めての遠距離攻撃だった。

もしかしたら火球を飛ばすキュアブレイズの攻撃からヒントを得て、彼女なりにアレンジしたのかもしれない。

ふと、ソルダークの方が気になり横で見ると、キュアブレイズが交戦していた。

ソルダークの攻撃をキュアプリズムが盾を使ってソルダークの防ぎながら、キュアブレイズが炎を纏わせた拳を叩き付けている。

キュアプリズムのサポートを受けながら戦う彼女の姿は、蛍の心配を一瞬で吹き飛ばすほどの頼もしさがあった。

「もうキュアシャイン1人だけに戦わせはしないよ。リリース。」

そして蛍の隣にもう1人、とても頼もしい仲間がいてくれる。

「っ、邪魔をしないで!!」

キュアスパークにも怒りを剥き出しにし、リリースが翼を羽ばたかせて襲い来る。

だがキュアスパークはリリースの振るった爪の一撃を大きく距離を開けて回避し、直後その距離を閃光とともに瞬時に詰め雷を纏った肘鉄を繰り出した。

リリースは両手を交差させてガードするが、重い打撃音と共に後方へとたじろぐ。

「くっ。」

両手を力なくたらしながら苦悶の声をあげる。

キュアスパークのパワーは、行動隊長の中で最も腕力に優れるサブナック相手にも引けを取らない。

同格のリリスとさえど、彼女の一撃を防ぎきることが出来なかつたみたいだ。

「このっ！」

するとリリスは空中を縦横無尽に飛び回り、速度を活かした攪乱戦術に出てくる。

蛩は目にはリリスの残影しか映らず、彼女を補足することが出来なかつたが、キュアスパークは違つた。

雷を纏い、彼女の軌跡の先を回り込む。

何かがぶつかり合う衝撃と同時に、雷鳴と打撃音が鳴り響いた。

雷と一体化しているキュアスパークのスピードは、リリスにも勝るとも劣らない。

そしてキュアスパークの方がパワーが上だ。

やがて雷鳴の音の方が良く響くようになり、リリスが傷ついた腕を抱えながら姿を見せた。

サブナックに並ぶパワーとリリスにも劣らないスピード。

そして希望の光の扱い方をさらに磨き上げ、遠距離攻撃も身に付けてきた。

キュアスパークの能力の高さを改めて思い知った蛭は、彼女のことをますます頼もしく思うと同時に助けてくれたことを感謝する。

そしていつまでも助けてもらってばかりにはいられない。

リリスがキュアスパークとの戦いに集中している内に、キュアスパークに決定打を入れる隙を自分が作るのだ。

「どいつもこいつも！邪魔だつて言ってるでしょ!!」

リリスが両手の爪を立てながら左右に開き、手のひらに闇の力を集中させる。

今がチャンスだ。

「たああああっ!!」

蛭は雄叫びとともにリリスの元へと飛び掛かる。

「えっ!?!」

意表を突かれたリリスはかわすことができず、蛭の体当たりの直撃を受けた。

「きやああっ!!」

リリスは上空へと打ち上げられ、無防備な姿を晒す。

「キュアスパーク!!」

「光よ、走れ!スパークバトン!!」

その隙をつきキュアスパークがスパークバトンを召喚し、雷を身に纏う。

「プリキュア！スパークリング・ブラスター!!」

そしてリリス目掛けて浄化技を放った。

「ナメ・・・ないでよね!!」

だがリリスは翼を力任せに羽ばたかせ、無理やり方向を切り替えた。

雷とともに迫るキュアスパークの浄化技はリリスの爪と羽の先端を掠めるだけで終わってしまう。

だがリリスも、掠めたとはいえ浄化技を受けてしまったためか、力なく空を浮くだけだった。

：

千歳はキュアシャインのことを気にかけてながらも、キュアスパークを信頼して任せソルダークとの戦いに専念する。

そして迫り来るソルダークの両手はキュアプリズムが全て守ってくれる。

1人で戦っていた時は、敵への攻撃も身を守るのも全て1人でこなしていくしかな

く、複数の敵が同時に現れた場合でも、全ての敵を1人で捌いていくしかなかった。

だけど心強い仲間ができた今、キュアブレイズは目の前の敵と戦うことだけに集中でき、かつ自分が最も得意とする戦い方に専念することができた。

炎を拳に纏いソルダークの腹部に叩き付ける。同時に炎を爆破させ、爆炎でソルダークの視界を奪った。

その隙に今度は手のひらに火球を生み出し、ソルダークの頭部へと投げつけ爆破させる。

そしてソルダークの巨体が大きくよろめくと同時に、千歳は空高く飛び上がってその巨体を踏みつけた。

巨体が地面の中へとめり込み、ソルダークは一切の身動きが取れなくなる。

1人の時には絶対に出来なかった、敵へ攻撃することに全力を尽くすと言う戦いが、これまで以上の速度でソルダークを追い詰めたのだ。

「光よ、弾けろ！ブレイズタクト！」

4拍子を描き周囲に炎を出現させると同時に、タクトの先端に希望の光を圧縮させていく。

「プリキュア！ブレイズフレアー・コンチェルト!!」

周囲に浮遊するの炎を連続でソルダークに叩き込み、最後に圧縮した光を突き付け

た。

直後光は大爆発を引き起こし、ソルダークの巨体を火柱に包み込む。

「ガアアアアアアアアッ!!!」

燃え盛る炎の中、ソルダークは断末魔をあげて消滅していった。

「……ちっ。」

そしてリリスは、傷ついた体を支えながら姿を消していった。

「キュアブレイズ!」

戦いが終わると、キュアシャインが嬉しそうな笑顔を浮かべてこちらにきた。

彼女に続き、キュアスパークとキュアプリズムもこちらへと歩み寄る。

「これでようやく、プリキュア4人揃ったな。」

4人揃った。その言葉に千歳の胸が熱くなってきた。

自分の身を案じて、隣に立って戦ってくれる仲間がいる。

ずっとこんな仲間が欲しかったはずなのに、素直になれない自分の我儘のせいで飛ん

だ遠回りをしてしまった。

それでも今は、正式に彼女たちの仲間、ホープライトプリキュアの1人になれたこと

がとて嬉しかった。

「ええ……これからは4人一緒に、ダークネスと戦ってきましょう!!」

どの口が言うのか、と自分でも思う言葉を口にし、キュアスパークは少し呆れの交じった表情で苦笑し、キュアプリズムは優しく微笑みかける。

「うん！」

そしてキュアシャインは、千歳の大好きな笑顔で肯定してくれた。

伝説に語られし4つの光が、ついに1つに集うのだった。

：

ソルダークを失った後も、リリスはモノクロの世界に帰らずにいた。

人知れず場所で黄昏ながら、ずっと自問自答を繰り返している。

「まだあの子だって決まったわけじゃない……。」

自分の考えは全て憶測だ。

例えどんなにそれらしい答えを並べたところで、直接変身したところ見ない限り確証は得られない。

「そうよ……まだ虫だって……あれ？」

だがそこで自分の考えがおかしなことに気づいた。

十中八九答えが決まっていると言うのに、なぜそうまでして確証を得ようとするのだ？

むしろ確証が得られなければ肯定出来ないのをいいことに、この答えから目を背けようとしていないか？

「なんで……？」

そもそも彼女だったとして何の不都合がある？

自分の任務は、キュアシャインを絶望させることだ。

不都合あるはずがない、むしろ好都合のはずだ。

なぜなら

「わからない……。」

あたしは……

「わからない……。」

ほたるにとって……。

どれだけ頭に思い描いても、答えは帰ってこない。

どれだけ彼女の名を呼んでも、答えは聞こえてこない。

「ほたる・・・。」

未だに自分の心を理解できないでいるリリンは、夜が訪れるまで自問自答を繰り返すのだった。

∴

次回予告

「フェアリーキングダムを取り戻せて、お姫様に笑顔が戻って、元の世界に帰って来れたし、これで一安心ね！」

「ああ。」

「レモンこれから毎日お昼寝するんだ〜。」

「そんなわけにはいかないわよレモン。まだこの世界のダークネスが残ってるんだし、

私たちにだって出来ることがきつとまだあるはずだわ！」

「・・・そうだといいな。」

「どうしたのベリイ？さつきから元気なくて。」

「俺たち、まだこの世界にいる意味ってあるのかな？」

次回！ホープライトプリキユア第15話！

「ベリイの憂鬱!?!パートナーとしてできること!」

希望を胸に、がんばれ、わたし！

第15話

第15話・プロローグ

季節が春から夏へと移り変わった最初の週末。

蛍はお出かけ用のバッグにチエリーを入れ、要たちとの待ち合わせの場所へと向かった。

場所は夢ノ宮中学校への通学路にある十字路。

ここは蛍の家と学校、要と雛子の家がある住宅街、そして商店街を結ぶ合流地点となっているとおりであり、自分たちに限らずよく生徒たちの待ち合わせ場所として使われている。

蛍がそこへ着くと、既に要と雛子の姿があった。

2人とも少し大きめの鞆を持っている。中にはベルとレモンが入っているのだろう。

「蛍、おはよう。」

「蛍ちゃんおはよう。」

「かなめちゃん、ひなこちゃん。おはよう！」

「朝から上機嫌やな蛍。」

「えへへ、だつてちとせちゃんのお家にあそびに行くの、はじめてなんだもん！」

そう、蛭たち3人は、千歳から週末に家に来ないかと誘われたのだ。

千歳の家に初めて遊びに行ける喜びから、蛭は話を聞いた時から今日が楽しみでたまらなかつたのだ。

「ふふつ、それじゃあ千歳ちゃんを待たせても悪いし、さつそく向かいましょうか？」

「うん！」

蛭は大きな声で頷き、3人で千歳の家へと向かう。

事前に教えてもらった住所は、ここから夢ノ宮中学校の方面へと向かい、学校を通り過ぎてさらに約10分ほど先にある、アパートやマンションが多く立ち並ぶ住宅街とのこと。

1人暮らしの世帯が多く集まるところだが、ファミリー向けの物件もあるようだ。

蛭たちがその場所へ辿りつくと、目の前には比較的新しいタイプのマンションがあった。

部屋番号は確か302号室と聞いている。

要と雛子がマンションの管理人に会釈し、302号室を尋ねに来たと説明する。

そして302号室の前まで辿りつき、呼び鈴を鳴らした。

「はい、どちらさままででしょうか？」

呼び鈴の隣にあるスピーカーから、千歳の声が聞こえてきた。

「えと、いちのせ ほたるです！きようはちとせちゃんから・・・。」

相手が千歳とわかっていながらも、インターフォン越しで話すのは初めてなので蛭はつい緊張して敬語になってしまふ。

「ああ蛭ね。ちよつと待つて、今鍵を開けるから。」

だが蛭が言葉を言い終わる前に千歳がインターフォンを切ったようで、スピーカーから音が聞こえなくなった。

程なくして鍵が開錠される音とともにドアが開かれ、千歳が姿を見せた。

「3人ともいらつしやい。」

簡単な挨拶を済ませて千歳は玄関へと移動し、蛭たちを迎え入れる。

GW以来に見る千歳の私服は、青いラインと胸に髑髏のマークが入ったTシャツに、オリーブ色のカーゴパンツと言う服装だ。

さらにアクセサリーにシルバーのネックレスとブレスレットを身に付け、チェーンベルトを巻いている。

一見すると男子が好みそうなクールなファッションであり、動きやすさを重視しシンブルな服装である要とはまた違った意味でボーイッシュな印象をうけるが、モデル顔負けの面立ちとスタイルを持つ千歳が着こなすことで、男勝りなカッコよさと女性らしい

可愛さが互いの持ち味を潰すことなく同居している。

そんな千歳だからこそ成せる姿に蛍はつい見とれてしまうが、自分が先頭に立っていることを思い出して慌てて玄関へとあがった。

「「おじやましませ。」」

ふと、玄関に並ぶ靴の中に赤いヒールがあることに疑問を持ちながら、蛍たちは千歳に誘われてリビングへと足を運び入れる。

するとキッチンの方から茶髪の女性が姿を見せた。

「いらつしやいみんな。」

だが目の前にいる女性の姿に身に覚えはなく、なぜ千歳と同じ部屋にいるのかもわからず、何よりなぜ初対面であるはずの人が自分たちを知っているのかがわからなかった。

「・・・?」

ああつ、あなたたちに『この姿』を見せるのは初めてだったわね。」

だがその落ち着いた口調と『この姿』と言う言葉、さらに赤一色の服装が千歳と繋がり深い『ある人物』と結びつき、蛍は驚愕の表情を浮かべる。

「もつもしかして、アップルさん!?!」

「ふふつ、正解。」

「……ええっつ
!!!?」

千歳の家について早々、驚愕の真実を知るのでった。

第15話・Aパート

ベリイの憂鬱!? パートナーとしてできること!

キュアブレイズの正体が千歳であることが分かり、彼女が正式にホープライトプリキュアの一員として迎えられてから数日が経ったある日のこと。

要たちは千歳から、この週末に家に来ないかと招待されたのだ。

目的は、千歳とアップルからまだ知り得ていないダークネスの情報について教えてもらうため。

それを踏まえた上で、今後4人でどのように活動していくかを改めて話し合うため。

そして単純に友達として遊びに行くためだ。

先週末では千歳のことを、不愛想で覚えもないことに突っかかってくる嫌なやつだと思っていたはずなのに、友達になれた今はその時の不穏な空気もどこへやら、すっかり打ち解けることができた。

そんなこんなで要もまた、新しく出来た友達の家に行くのを楽しみに思いながら迎えたこの週末。

千歳の家にお邪魔した要は、さっそく目の前の事実には驚愕とする。

「ホッ、ホントにアツプルさんなん？」

「ええ、そうよ。」

ふふつ、でもそんなに驚かなくても、ベリイたちの人間の姿だつて普段のイメージから離れているでしょうに。」

たしかに彼女の言う通り、大きさ20cm程度の犬のぬいぐるみから、アメリカンスタイルの金髪長身の青年を連想しろだなんてよつほどフリーダムな発想を持たなければ難しい話だが、要の驚くところは別にあつた。

その1つが人の姿に変わったアツプルの容姿だ。

目測175cm以上はありそうな高身長は、同学年だけでなく成人女性の平均身長を軽く凌駕する千歳さえも上回っており、玄関に置いてあつた彼女のものと思しきハイヒールを履こうものなら180cmを超えるであろう。

さらに白いワイシャツの上に重ねる赤いスーツの上からも体のラインが十分に現れ、赤色のスカートから伸びる足はスラリと長い曲線を描いている。

それだけに留まらず顔立ちも整っており、着用している赤いフレームのメガネは彼女の知的な雰囲気を一層引き立たせるファッションとなつている。

要約すると、千歳に負けず劣らずモデル顔負けの美しいOLにしか見えなかったの

だ。

千歳と並ぶその姿は芸能人親子と聞かされても全く違和感がないだろう。

そしてもう1つの理由が、彼女が人間の姿でいること自体にあった。

「えつとでも、人間の姿でいる時は疲れるんじゃないの？」

要は思った疑問をそのまま口にする。

ベリイたちからは、妖精が人間の姿を維持するには体力が必要と聞かされたのだ。

ベリイたちも、かつて千歳を探し回っていたところは朝から夕方まで街中を人の姿で探し回っていたので、一日人間の姿を維持することは可能なようだが、それでも普段の日常の中で積極的に人の姿でいることはなかった。

「ああ、確かに人間の姿でいるには体力がいるけど、私こう見えても体力には自信あるし、慣れれば意外と何とかなるものよ？」

「そんなもんなんですか・・・？」

そんな疑問を『慣れ』の一言で片づけられてしまい、要は肩をすくめる。

それを聞いたベリイとチェリーがどこか呆れたような様子を見せたことから、『普通』は慣れでどうにかなる問題ではないようだ。

「仕事が休みの日くらいは妖精でいればって、いつも言ってるんだけどね。」

「この姿でいた方が家事とか色々捗るのよ。」

呆れたような心配しているような千歳の言葉にアップルは涼しくそう答える。

と、ここで要は『仕事』と言う言葉に疑問を抱いた。

「あの、『仕事』ってことは、アップルさんはこの世界では人間の姿で働いているんですか？」

すると雛子がさっそくその疑惑ワードについて質問をしてきた。

「ええそうよ、私はこの世界の人間として、職に手をつけているわ。」

ちなみにこの姿の時の名前は姫野　リン子。

戸籍上はこの子の母親ってことになっているの。」

『戸籍』と言う言葉が出てくるあたり、アップル改めリン子はベリイたちと違い、この世界では『人間』として生活しているようだ。

リン子が千歳の母としての立場を取っているのは、自分の正体をカモフラージュするためでもあるだろうし、千歳の年齢を考えればこの世界では保護者がいた方が都合が良からなのだろうが、それ以上に千歳に対して厳しくも優しいリン子と、リン子に対してどこか素直になれない千歳のやり取りは、傍からはみても反抗期の娘に手を焼く母親にしか見えないほどの自然体だった。

「だからいつも怪しまれないように『お母さん』って呼びなさいと言ってるのに、この子ったら頑なにそう呼んでくれないのよ？」

するとリン子が悪戯つぼく微笑みながら千歳を見た。

千歳は仏頂面でそつぽを向いて返事をする。

「あくまで戸籍上の話でしょ。」

それに知らない相手ならまだしも、この子たちは私たちの正体を知っているのだから別にいいじゃない。」

「そんなに照れなくても。」

実質私が『お母さん』みたいなものなのに。」

「そつ、それは今は関係ないでしょ!!」

リン子の言葉に千歳は顔を赤くして反論する。

そんな千歳の様子を見て面白いと思つた要は、興味半分からかい半分でニタニタ笑いながらリン子に問う。

「ひよつとして千歳つて、リン子さんに育てられたん？」

「要！わざわざ聞かなくてもいいでしょ!?!」

「ええそうよ。赤ん坊のころのこの子にミルクをあげたのも、幼いときから勉強を教えあげたのもこの私。」

一緒に過ごした時間だけなら女王様よりも長いのだから。」

千歳の反応を見て凶星であることを悟り、リン子の答えが花丸となる。

アニメやゲームから得た知識ではあるが、身分の高い人が召使いに子供を育てさせると言うのはよく聞く話だ。

「それでも私の母はお母様ただ一人よ。」

最もらしい理由をつけて反論する千歳だが、頬を赤くして膨れっ面で反論しているところを見るとただの照れ隠しにしか見えなかった。

そんな千歳の反応を楽しむようにリン子がそう微笑む。

「ふふっ、照れ隠ししちゃって。」

「・・・あれ？これって・・・。」

すると蛍が何かを見つけたようだ。

彼女と同じの方へ視線を向けると、リビングに飾られているインテリアの中に、ハイトマークの中心に赤いカーネーションが添えられたネックレスが置かれていた。

「ちとせちゃん、あれ、おかーさんの日に・・・。」

「ほっ、蛍！」

突然大声で名前を呼ばれて言葉が遮られた蛍はびっくりして目を瞑ってしまふ。

「ええ、蛍の言う通りよ。あれは千歳が母の日に・・・。」

「リン子も！いい加減にしないと怒るわよ!!」

「もう怒ってるじゃない？」

要も雛子も妖精たちも、千歳がリン子に対して抱いている思いを察するのだった。

：

頬を膨らませて拗ねてしまった千歳の機嫌が直るのを待つてから、雛子たちはリビングに置いてあるソファに腰掛けた。

ソファにかけながら雛子は周囲を見渡す。

リビングは隅々まで掃除の行き届いており、雛子たち4人が寛いでも全く窮屈さを感じさせないほどの広さだ。

妖精たちが人間の姿になったとしても、まだスペースに余裕があるだろう。

リビングの向かい側には大きめのテーブルと2つの椅子があり、その奥にはキッチンがある。

キッチンから見て左奥の方にはドアがあり、その先には恐らく寝室や洗面所があるのだろう。

寝室の数は恐らく2つ。2LDKのファミリー向けマンションだろう。

リン子の正体を考えても一つでも事足りるだろうが、彼女のことだから戸籍上、親子の関係である2人が暮らしていても周りから怪しまれないように気を配るはずだ。

さらに玄関のドアはオートロック式であり、暗証番号で開錠するタイプだ。

カメラ付きのインターフォンまで完備されているのだからセキュリティ面の設備も充実している。

雛子にはマンションの家賃の相場なんて分からないが、それでも高価な物件としか思えなかった。

「随分広くて綺麗なマンションよね。」

直接家賃を聞くのはさすがに憚れるので、雛子はやんわりと言内に含ませて千歳に伺う。

「こんな立派なマンションでなくても、私は夜露を凌げるのならボロ屋で十分って言ったんだけどね。」

するとこちらの意図を汲み取ってくれた千歳が少し呆れ交じりにそう話す。

「何を言ってるのよ？あなたは曲がりにもお姫様なのよ？」

いくらここが故郷でなかったとしても、あなたに貧乏暮らしなんてさせたら私が国王様たちに合わせる顔がないわ。」

千歳の言葉を聞いたリン子が真顔でそう答えながら、テーブルの上に紅茶を並べる。

「そのせいで毎日夜遅くまで仕事してるじゃない。」

「それが私の務めよ。」

それに毎日夜遅くまで仕事だなんて、お城にいたときからずっとそうだったでしょう？」

千歳の心配そうな言葉にもリン子は涼しい顔、と言うよりは彼女は彼女で千歳のことが心配なのだろう。

今更の事だが、フェアリーキングダムから来た千歳が普通に学校に通っていると言うことは、リン子が生活費だけでなく教育費もちゃんと払っていると言うことになる。

リン子が生活水準を大きく落とさないように、身を粉にして働いているのも、きっとこの世界でも、千歳に普通の生活を送ってほしいと思つての事だろう。

千歳も言葉の割にはリン子に対してそこまで非難の色を見せていない。

彼女もリン子の気持ちを理解しているからこそ、その思いを受け入れているのだ。

互いに互いを思い合うその姿は、まさしくパートナーであると雛子は思えた。

「それじゃあ、そろそろここへ来た本題に入りましょうか？」

一通りの雑談を終えたところで雛子が全員に声をかける。

友達同士の雑談と言うものは不思議と長引くもの。

ここらで無理やりにも流れを断たないとこのまま一日中喋り倒してしまうだろう。

それも悪くはないが、ここへ来た本来の目的を忘れたつもりはない。

が、雛子の言葉を聞くや否や要が持参したスーパ一の紙袋をがさり、ポテチとポツキーを取り出しテーブルの上に置き始めた。

その姿を見た雛子は2か月前の出来事を思い出し額に手を当ててる。

「それじゃ、改めまして、第二回プリキュア作戦会議の開催をここに発表します!!」

そんな雛子を余所に要は高らかに開催宣言をしながらティーカップを高く掲げる。

「かんぱーい!」

そしてあの時要の部屋で行われたのと同じように、プリキュア作戦会議の開始宣言代わりに乾杯をするのだった。

雛子は大きいため息をつき、千歳も苦笑する。

「かんぱーい!」

そんな雛子の疲れた心を癒すかのように、蛍が笑顔で要に做って乾杯をするのだった。可愛い。

：

第二回プリキュア作戦会議の開幕宣言から少しの間、蛍たちはテーブルに広げられたポテチやらポッキーやらを食べながらリン子の入れた紅茶を堪能していた。

が、千歳が真面目な話をしようとする空気を感じ取り、蛍も要もすぐさま真剣な表情に戻り千歳の言葉に耳を傾ける。

ちなみに雛子はいつものように呆れながらもちやつかりとお菓子を口にしていた。

「まず、何から話したら良いかしら？」

紅茶を飲み一息つきながら、千歳は蛍たちの顔を伺う。

すると雛子が僅かに身を乗り出し、千歳に質問をした。

「アンドラスって言ったかしら？」

あのとときフェアリーキングダムで戦った黒いフードの男。

彼について詳しく教えてくれないかしら？」

その質問はここに来た誰もが一番に疑問に思ったことだろう。

何せ蛍たちはこれまで行動隊長としか接触したことがなく、司令官に当たる人物がいるだなんて思わなかったからだ。

「あの時話した通り、やつはフェアリーキングダムに侵攻してきたダークネスの司令官よ。」

行動隊長のハルファスとマルファスがそれらしきことを仄めかしていたから、ほぼ間違いないと見ていいわ。」

「行動隊長が？」

千歳の言葉に要が疑問符を打つ。

「ええ、ハルファスとマルファスはこう言っていたわ。」

我らはただ主が命を真つ当するだけ。

そしてやつらを倒した後に、アンドラスが姿を見せてこう言ったわ。

ハルファスとマルファスを打ち破るとは、貴様の力を少しは認めてやろうって。

この言葉、行動隊長の上に立つよう言い方に思えない？

それにこの前の戦い、ソルダークは勿論リリースもやつへの指示に従っていなかった？」

「そういわれてみれば……。」

蛸はあの時の戦いを思い出す。

確かリリースと大広間で戦っていた時、アンドラスが一度希望の鐘を鳴らしたのを合図に、あのリリースが自分への攻撃を止めたのだ。

そしてアンドラスの呼びかけとともに攻撃を再開した。

千歳の言う通り、アンドラスの指示に従って行動していたように見える。

「ってことは、この世界にいる行動隊長たちも、アンドラスの指示に従ってたんかな？」

そんな要の疑問は、ともすれば願望とも捉えることができるものだ。

もしそうであるならば、アンドラスが倒された今、リリスたちは司令官を失ったことになる。

指令を下せるものがいなくなったのであれば、彼女たちがこの世界から脱出してくれるかもしれないのだ。

「それは・・・まだ何とも言えないわね。」
「ですよー。」

だが現実はそう甘くないようだ。

要は大袈裟に肩を落としてため息をつく。

「アンドラスがフェアリーキングダム侵攻部隊の司令官として、行動隊長のハルフアスとマルファスを率いていたのは間違いないわ。」

でもこの世界の行動隊長にも、アンドラスと同じ立場にいるやつがいる可能性が高いわ。

フェアリーキングダムではサブナックとダンタリアは姿を見せなかったし、それについこの前、リリスが再びこの世界に現れたじゃない？

つまりリリスたちを従えている別の司令官の命令で、リリスはフェアリーキングダムとこの世界を歩き来していたと思わない？」

千歳の言うことは的を得てはいるが、蛍はそれとは別の疑問を抱く。

「いやあ、でもあのリリスのことだからなあ……。」

「あの子は個人的な恨みで蛍ちゃんをつけ狙っているから、あまりアテには出来ないと思う……。」

蛍の疑問に答えるように、要と雛子が呆れ交じりで呟いた。

2人の言う通り、リリスはダークネスの目的さえも蚊帳の外に置き、自分への恨みから行動している。

アンドラスの命令には従っていたが、それも恐らくは自分を追うことが命令に組み込まれていたからとしか思えない。

リリスの執念を考えれば、仮に司令官を失ったとしても迷いもなくこちらを狙いに来るだろう。

ともすれば自惚れとも取れる考えかもしれないが、そうとしか思えないほど、リリスのストーカー行為は悍ましいものなのだ。

「個人的な恨み……か。」

すると千歳は雛子のその発言に眉を潜めた。

そしてしばらく逡巡してから自分たちを見据える。

「私にはどうしてもそこが腑に落ちないのよね。」

リリスは本当に蛍のことを恨んでいるのかしら？」

「え……？」

予想だにしない千歳の言葉に蛍は勿論、要と雛子も顔を合わせて驚く。

「それ、どうゆう意味？」

「やつら、行動隊長には恐らく心がないのよ。」

「えっ!？」

そして続いた言葉があまりにも衝撃的過ぎたので、蛍はしばらくその意味を測りかねていた。

「私がハルフアスとマルファスと戦ったときのことだけど、私が劣勢になったときも、逆に優勢にたったときも、やつらは無表情で声にも抑揚がなかったのよ。」

私に倒される最後の瞬間さえ、やつらからは一切の感情を感じられなかったわ。」

だが千歳の説明に蛍は訝しみながらも、思い当たるところもいくつかあった。

サブナツクとダンタリアの2人は、この世界の侵攻については肅々としているように見える。

それに人を躊躇いもなくソルダークの素材にしてしまうのも、そもそも心がないのであれば情なんて抱くはずもない。

「でも、リリスの蛍ちゃんに対するあの態度、とてもじゃないけど感情がないようには見

えないわ。」

だが同時に雛子が問いかけたように、リリスを見る限りではその定義に当てはめるのも難しい。

サブナツクとダンタリアも、片や好戦的、片や挑発的な言動こそ見せている。いずれも心が無いもの取る態度とは思えなかった。

だが千歳は想定内の質問なのか表情を変えずに答えた。

「それがもし、演技だったとしたら？」

「演技？」

千歳の言葉に今度は眉を潜める。

「ええ、リリスの蜚に対しての言動が全て、蜚を動揺させるための演技と言うのは考えられない？」

それだけではないわ。

サブナツクとダンタリアがあなたたちに見せた言動も、全てあなたたちを挑発して戦況を優位に立つたためのものだとしたら？」

「リリスたちのことばが、ぜんぶ演技……？」

「千歳ちゃんはどうしてそう思うの？」

その、ハルフアスとマルファスって行動隊長と戦った時に、なにかそう思うことが

あったの?」

困惑する蛭の隣で雛子が質問を続ける。

千歳の言葉が信じられないと言うよりは、確信を得たいようだ。

確かに千歳が何の根拠もなく行動隊長の言動が全て演技だと言うとは思えない。

何か考えてのことなのだろうか、雛子の言葉に千歳は待つてましたと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「ええ、行動隊長にはね、人間の姿に化ける能力があるのよ。」

「人間の姿に!?!」

千歳の言葉が更なる衝撃を呼び、要は身を乗り出し雛子も驚愕の表情を浮かべた。

蛭自身も驚きに言葉を失い、どう反応をしたらいいのか分からなくなつた。

「ハルフアスとマルファスも、この世界にいる行動隊長たちと同様、半身半魔の姿をしているのだけれど、あの2人は普段人間に扮して城下街に身を潜めていたのよ。」

私はそれを一度だけ見たことがある。でも最初は気づかなかつたわ。

外見は勿論だけど、闇の波動も全て隠すだけでなく、人として自然な立ち振る舞いも身に付けていたわ。

偶然闇の牢獄を展開するところを押さえることが出来たけど、それがなければあの2人は完全に街の人々の中に溶け込んでいたのよ。」

千歳の言葉に雛子が何かを思いついたように頷く。

「心がないってことは、どんな人格でも躊躇わずに演じることが出来るってことね。」

心がない。それは遠慮や羞恥といった行動を躊躇わせる感情さえも持たないと言うことだろう。

「ええ、その通りよ。」

雛子の答えに千歳が頷く。

「それって、サブナックたちもいつの間にか夢ノ宮市に紛れ込んでいる可能性があるってことだよね？」

そして千歳の言葉の意を得た要がそう質問をした。

その言葉に蛭は肌寒さを感じる。

この世界にいる3人の行動隊長も、普通の人と何ら変わりのないように日常に溶け込んでいるのかもしれない。そう思うと怖かった。

もしも正体がバレたら、いつどこで襲われるのかわからない。

今更ながら、蛭は初めてチェリーが自分にしてくれた忠告の重さを思い知る。

「その通りよ。だから見知らぬ人の姿を見かけたときは警戒して。」

素性を知らない相手には特にね。」

千歳の警告を蛭は飲み込むが、どう警戒して良いのかも分からなかった。

要や雛子のように昔からこの街に住んでいたわけではない。蛍には、まだ見知らぬ他人の方がよっぽど多い。素性を知らないも何もあったものではないのだ。

「まあ、夢ノ宮市と言っても広いしな。」

この街にずっと住んでるウチらだってそこまで顔広い訳やないし。」

「商店街の人たちはある程度顔見知りだけど、モールとか港町の方面まで行くとさすがに知らない人の方が多いものね。」

でもせめて商店街だけでも警戒しておきましょう。」

「せやな、怪しい人を見かけたらすぐに知らせるね。」

こちらの不安を悟ってくれたのか、要と雛子が交互に自分の顔を伺いながら励ましてくれた。

蛍はホツとしながら、2人の優しさに内心感謝する。

「ありがとう、要、雛子。私から話したいことはこんなところかしら。」

「ありがとう、ちとせちゃん。」

おかげでわからなかったことが、たくさんわかったよ。」

蛍のお礼に千歳は少し気恥ずかしそうに微笑む。

だが同時に、蛍にはまだ納得できないことがあった。

リリースに心が無いと言うのは本当なのだろうか？

確かに自分は、これまでの彼女の言動に今でも少なからず恐怖している。

それが恐怖させるための演技だと可能性もゼロではないだろう。

だが蛭は覚えている。

リリースが自分と2人きりとなったとき、彼女は狂気的な笑い声を上げていた。

確かに怖かったが、あそこまでの悦びさえも演ずる必要性があるのだろうか？

何よりも、これまで彼女の言葉を真正面から受けてきた蛭には、あれが全て演技だなんて到底思えなかったのだった。

：

行動隊長に指令を出す指揮官がいること。

行動隊長には心がないこと。

そして人の姿に変身できる能力を持ち、知らずに日常に潜んでいる可能性があること。
と。

千歳からもたらせた情報は、これまでダークネスについてわからないことだらけだっ

た雛子たちにとつてとても衝撃的な内容だった。

特に司令官がいたことは一番驚いた。

初めてアンドラスを相対し千歳の言葉を聞いたときは、一瞬理解が追いつかなかつたほどである。

「しかし、行動隊長たちに司令官がいたとはね。」

こちらの心中を察したわけではないだろうが、要がちょうど良いタイミングで同じ疑問を口にしてくれた。

だが改まつて考えてみれば、確かにリリースを除く行動隊長たちには主体的な言動を感じられなかった。

もしも司令官に与えられた命令のままに動いているだけなのであれば、サブナックとダンタリアがこれまで粛々と行動を起こしていたことにも頷ける。

だが今何よりも雛子が疑問に持つのは、ダークネスにおける司令官の立場だ。

「その司令官って言うのが、ダークネスのトップに立つものなのかしら？」

「……ごめんなさい。それはわからないわ。」

ダークネスの全容は私も把握しきれていないの。

フェアリーキングダムとこの世界を侵攻している、行動隊長とそれを束ねる司令官つて言うのも、もしかしたら冰山の一角である可能性だつて十分にあり得るわ。」

だが雛子の質問に、千歳は少し申し訳なさそうに答えた。

半年もの間ダークネスと戦い続けてきた千歳でさえ、ダークネスの全容に触れることが出来なかったのだ。

リリスたちを率いる司令官がいる可能性も浮上し、依然ダークネスの勢力については未知数な部分が多い。

それでも彼女からもたらされた情報は、雛子たちにとつて決して無意味ではない。

わからないことだらけだった2か月前と比べれば大きな前進である。

「つてことは、当面ウチらのやるべきことは変わらんつてことだね。」

「ええ、行動隊長たちを迎え撃つて、絶望に飲まれた人たちを助ける。」

「そうね、私たちが成すべきことは変わらないけど、これからは私も一緒に戦う。」

私が一緒に戦う以上、この世界をフェアリーキングダムのようにはさせないわ。絶対に。」

「ありがとう千歳、頼りにしてるよ。」

「あなたが一緒に戦ってくれるほど心強いものはないわ。」

「ちとせちゃん、いっしょにがんばろうね!」

それぞれが千歳を歓迎し、共に戦えることを喜ぶ。

「ええ、私が得意とするのは要、あなたと同じ接近戦よ。」

これからは、私があなたの隣で戦うわ。」

そして嬉しそうに微笑む千歳が、雛子の期待通りの言葉を言ってくれた。

火球を飛ばす遠距離攻撃から渦巻く火の盾の展開など、千歳ことキュアブレイズの能力は多岐にわたるが、以前の戦いで彼女をサポートしてわかったことがある。

彼女はその中でも、近距離での戦いを最も得意としているのだ。

「そう……これで。」

これで要の負担を減らすことが出来る。

雛子はその言葉を心に飲み込みは要へと目を向ける。

これまでの戦い、戦闘力に長けた要ことキュアスパークへの負担がとても大きかった。

適材適所、チームワークと言えば聞こえはいいかもしれないが、結果として要1人に前線を任せてしまっていたことに変わりはなく、その弱点を突かれてサブナックに戦力を分断され、窮地に追い込まれたこともあった。

だが彼女と同等かそれ以上の戦闘力を持ち、行動隊長を2人も撃破した戦歴を持つ千歳が隣で戦ってくれるのであれば、これまでのように要1人が前線を張ることもなくなる。

それに以前の戦いで要は、雷を飛ばしての遠距離攻撃を行ってみせたのだ。

恐らく千歳の火球を参考にして新たな技を生み出したのだろう。能力を縦横無尽に使いこなすプリキュアの先輩たる千歳の存在は、要にも新たな刺激を与えて彼女の成長を促進させる。

それも含めて千歳の加入は戦力の大きなプラスとなるのだ。

「まっ、ウチの隣に並んで戦うつもりなら、せいぜい置いてかれんように気を付けな。」

「あなたこそ、私の足を引つ張らないように気を付けてよね？」

要と千歳は言い合いながらも、不敵な笑みを浮かべている。

漫画でよくある、互いの実力を認め合うライバル同士のいがみ合いのようなものを見せられた雛子は、やれやれと肩を落として2人を一瞥する。

これからは要だけでなく、千歳もサポートしなければならぬ。

自分への負担だけならばこれまでよりも大きくなるだろうが何も問題はない。

要も千歳も等しく大切な友人だ。

心の底から守りたいと強く思っている。

その気持ちは必ず、自分の力に応えてくれる。

それに先ほどのやり取りを見てはつきりとわかったが、千歳は一見知的でクールな印象を与えるが、その実要と同じタイプのようだ。

戦い方も酷似しており、要と同じ感覚でサポートできるのは雛子にとっても有難い話

である。

要を2人サポートすると考えると少々胃が重たいが。

「よし、わたしも、かなめちゃんとかとせちゃんにおいていかれないように、がんばるね！」

すると蛍が両手をグッと握りしめて力強く宣言した。可愛い。

「蛍、あなたはもうこれ以上無茶な戦いをする必要はないわ。」

だがそんな蛍の決意を千歳がやんわりと拒否した。

「え?でも……。」

「これからは私が前に出るのだから、あなたが囹役なんて危険な真似しなくていいのよ。

それにもしもあなたの身に危険が迫ったら、私が必ず守つてあげる。」

だからもうあなたはもう無茶しないで、もう少し自分のことを大切にしてください。」

千歳が柔らかく諭すも、蛍は落ち込み黙り込んでしまった。

だがこればかりは雛子も千歳の言葉に同意する。

確かに蛍が囹役を担つてくれたことで勝機を得たこともあるし、彼女の潜在的な力に窮地を救われたことも多かったが、それを差し置いても蛍の戦いは傍から見てもいられないほど無茶で無謀なものだった。

自分だって何度も肝を冷やしたし、無茶をする度チエリーから厳しい説教を受けてき

た。

だがこれからは千歳が要とともに前線に出てくれるのだ。

蛍がそんな無理をしてまで困役を担う必要はなくなる。

それは雛子としてもとても嬉しいことである。

それに蛍を守ると言うのは、恐らくそれだけが理由ではない。

「それに、蛍を守ると言うのは何も、私の意思つてだけじゃない。

恐らくこれから先、あなたはダークネスから優先的に狙われるようになるわ。」

「え……?」

続く千歳の言葉に蛍は驚いて顔をあげるが、雛子も要もその言葉には驚かなかった。

「あなたはフェアリーキングダムで、たった一人で世界の闇に打ち勝ったのよ?

あの場にはリリースがいたから、他の行動隊長たちにもきつとその情報は伝わっている。」

だからダークネスは絶対にあなたの力を危険視するわ。

でも同時に、あなたは私たちプリキュアにとつての切り札でもあるのよ。

あなたは絶望の闇に覆われた世界に、再び陽の光をもたらしてくれたのだから。」

「わたしが……きりふだ……?」

千歳の言われたことに実感が沸かないのか、蛍は惚けた顔で千歳の言葉を復唱した。

可愛い。

「ええ、だから私があなたのことを守るの。

だから蛍、あなたは自分のことを大切にしていちようだい。

あなたの力が、ダークネスの闇を打ち破る最後の希望となるのかもしれないのだから。」

千歳が蛍にそう優しく告げる。

千歳の言うことは自分も、そして恐らく要も思っていたことだ。

だから彼女が言うようにダークネスから蛍を守ることが自分たちにも望むところだ。

それで蛍がもう無茶な戦いをしないのであれば、雛子の心配の種が一つ消えることになる。

だが千歳の言葉を聞きながらも、蛍は黙り込んだままだった。

そしてずっと蛍のことを見守って来た雛子には、彼女が千歳の言葉をどう受け止めたのか何となくわかり、心の中で苦笑するのだった。

：

その後もこれからの活動について話し合いながらも、最後は半ば雑談交じりとなりながら第二回プリキュア作戦会議は無事に終了した。

要はポテチの袋を片付けながら時計に目をやると、時刻は正午に差し掛かるところだった。

「そろそろお昼の支度をしなくちゃね。せつかくだから、あなたたちも食べていきなさい。」

リン子の言葉に、お昼前にはお暇する予定だった要は目を丸くする。

「え? いいの?」

「勿論、せつかく千歳がこの世界で初めて友達を呼んだのですもの。」

これくらいのおもてなしはしないと。」

「あっじやあわたし、おてつだいます!」

すると蛍が元氣よく拳手をし、リン子にそう申し出た。

「そんな悪いわよ。蛍はお客様なんだから、」

「ううん、てつだわせてください。」

わたし、料理長のリン子さんの料理、となりでみてみたいんです!」

料理が趣味な蛍のことだ。

フェアリーキングダムで料理長を務めているリン子の腕前が気になるのだらう。

リン子もそのことを承知してくれたのか、クスクスと笑って静かに頷いた。

「そこまで言うなら、わかったわ。」

「わーい！ありがとうございます！」

はしゃいで喜びながら、蛭はせつせと後片付けを進めていく。

早く隣で料理を手伝いたいと思いが溢れる蛭に苦笑しながら、要はふとキッチンの方に目を向ける。

ガスコンロの上には鍋とやかんが置かれており、炊飯器にトースターそして冷蔵庫など、キッチンに必要な設備はちゃんと揃っている。

普通ならば特に気にとめるものではないが、ここが千歳とリン子の家となれば話は別だ。

要は千歳の方へ向いて話しかける。

「しかしリン子さんも多芸やな。」

フェアリーキングダムには機械はないはずだよな？」

あれだけのものがキッチンに揃っているのだから、リン子がこの世界の文明の機器を十二分に使いこなしていることは想像に難くない。

するとそんな話し声が聞こえたのか、リン子の方から答えが聞こえてきた。

「この世界に来たときは機械なんて見たことも聞いたこともなかったから驚いたけど、さすがに半年も住めば使えるようになるわよ。」

リン子の答えに千歳は苦笑しながら言葉を続ける。

「初めてこの部屋に住み始めたときは、暖房の入れ方もわからなかったものね。

部屋のどこに暖炉があるのか探して、ないことに啞然としていたっけ？」

要はその言葉を聞いて苦笑する。

ベリイたちの話によれば彼女たちがこの世界に来たのは12月の頭頃。

寒冷な地方ならとつくに雪が降り始めるであろう時期に、暖房を付けずに生活するなんて修行僧もいいところである。

「1週間くらい、毛布に包まれたまま生活していたかしら？」

懐かしいって言うほど昔の話ではないのに、私たちもすっつかりこの生活に馴染んでいくわね。」

リン子が千歳にそう話す。

感慨深そうに半年前を語る2人だが、千歳のこれまでの状況を考えれば、この世界に来た当初のことを思い出話のように話せること自体、彼女に心的余裕が生まれた証である。

この世界に来たばかりのことを楽し気に語る千歳の姿を要はどこか嬉しく思いながら、ベリイが初めて自分の家に来たときのことを思い出した。

「そういえばベリイはウチに来たときは、あんまり驚かんかったね？」

「ん？まあ、知識だけは何とかして身に付けたからね。」

それに俺はリン子さんと違ってあまり機械の類を触ることもなかったからな。」

言われてみればベリイが自分の部屋以外に出た記憶はない。

が、それとは別に異世界から来た人たちが現代社会の文明にカルチャーショックを受ける、という昨今のアニメによくあるリアクションを求めていただけに、要は内心、ちよつとだけ面白くないと思う。

「チェリーちゃんがはじめてお家に来たときは、料理のおいしさにびつくりしてたよね？」

「あれは蛍の料理だからびつくりしたのよ？」

蛍の料理は私が今まで食べた中で一番美味しかったんだから。」

一方でチェリーは蛍の料理をべた褒めし、不意打ちを受けた蛍は頬を赤くして俯いた。

「雛子の方は……。」

と、雛子に声を掛けようとして要は思った。

レモンに限らず妖精たちはみんなぬいぐるみのような姿をしている。つまり雛子にとっては『可愛いもの』にカテゴライズされているはずだ。

となるとこの悪友の趣味を鑑みればレモンが初めて雛子の家に迎えられた日、『何かあつたのではないかとつい邪推してしまう。』

「・・・何よ?」

突如言葉を中断した自分を見て察したのか、雛子は仏頂面で声をかけてきた。

「レモン、雛子の家に初めて招かれた日、何かなかった?」

「何かとは何よ。」

話題の矛先を敢えてレモンの方へと向けるが、雛子は構わず要を睨み付ける。

「んく別ににも・・・あくでも初めてお風呂に入るとき雛子が一緒につて・・・」

「レモンちゃん!!」

するとレモンが何か思ったことを雛子が大声で遮る。

だが言葉にせずとも言わんとしたことが分かった要は雛子をじつとりと見ながらでニヤつく。

「ほく、お風呂ねえ。」

「違うわよ!レモンちゃんこの世界のお風呂に入るの初めてだったから!シャワーとかの使い方わからないだろうなって思っただけよ!!」

何も聞いていないのに何が違うのだろうか。

ついでに言えば、雛子が純粹に善意でこの世界の生活に慣れていなかったであろうレモンを助けよと思っただけだなんて、腐れ縁の自分には容易に想像できることだし、妖精とは言え女の子同士だ。

そんな顔を赤くしてまでムキに反論するほどのことではない。

つもるところ要の思惑通り、悪友の善意を知つていながら敢えてそれを話のタネに弄ることに成功したわけであり、要は次の予定通り、今度は蛍の方を見てニヤついた。

「雛子、間違つてもまた蛍を家に呼んだときに同じようなこと言つたらダメだよ？」
「ふえ？わたし？」

困惑する蛍をよそに、雛子は口をパクパクさせた後鋭く要を睨み付け、

「すーるー！わ！け！な！い！で！しよっ!!」

先ほど以上に大きな声で一音ずつ区切りながら反論をしてきた。

そんな反応を楽しみながら要は一層ニヤつく。

「蛍ちゃん安心して！私絶対そんなことしないからね!!」

すると今度は蛍の方を振り向き必死の声色で弁解してきた。

「へ？うっうん、べつに真に受けてないから・・・。」

自分が言わんとしていたことはしっかりと伝わっていたようだが、本人は特に気にも

留めていないのか、ポカンとした表情を浮かべる。

雛子を信頼してのことなのだろうが、それなればここまで必死な表情で弁解するのは返って怪しまれるのではないだろうか？

すると雛子が再び要の方へと振り向き睨み付ける。

「大体、いくら蛍ちゃんが幼いからって、1人でお風呂に入れないほど子どもじゃないでしょ!!」

「わたしおないどしだよ!!?」

だがここで蛍が全く予期していなかった方向で、雛子の裏切りが発生した。

蛍を妹のように可愛がっている雛子は時としてごく自然に蛍を年下扱いする傾向にある。

知ってて敢えて年下扱いしてからかっている自分よりもよっほどタチが悪いやつだと思いつつも、より面白い展開になってきたと思った要は、それに便乗してターゲツトを蛍に切り替える。

「おつ、蛍はちゃんと風呂場の蛇口とシャワーの切り替え方が分かるんかい?」
すると今度は蛍が口をパクパクとさせ始めた。

そして両手をブンブン振り回しながら要へ猛抗議を開始する。

「わっわたし! おうちのおしごとぜんぶひとりやってるって言ったよね!?

おふろの掃除もおふろの準備もぜんぶわたしがひとりやってるんだから!!」

実年齢以前に、毎日家事全般をこなしている蛍がそんなのことも知らないはずがない
と言うことくらい要だつて承知だ。

承知の上でからかっているのだが、蛍の反応は相も変わらず全力である。
その姿が面白いからついついからかいたくなってしまうのだ。

「お〜エライエライ。」

言葉こそ褒めているが、口調は完全にからかいモード。

すると蛍はどうとう両手を手を振り回しながら要へと駆け寄ってきた。

「も〜!!かなめちゃんはいっつもそうやってわたしのことバカにして!!」

だが本人は懐に飛び込んで両手でポカポカと叩きたかつたのだろうが、要は身体を側
面に向けて片手をそつと伸ばして手のひらを蛍の頭に添えることで前進を止める。

蛍が振るう両手は虚しく空ぶり続けていった。

そんな要にあしらわれてる蛍の姿を、雛子はいつもの様に恍惚とした表情で眺めて
いた。

「こらつ、2人とも、蛍を子ども扱いしてからかうのは止めなさい。」

そんなやり取りを見かねた千歳が、蛍の隣に立って要と雛子を注意する。

千歳が味方についてくれたのか、蛍は珍しく強気な表情で要と雛子を睨み付けてい

た。

「ごつごめんなさい蛍ちゃん、私はそんなつもりじゃ……。」

「ふん！」

我に返った雛子が謝罪するも、すっかりへそを曲げてしまった蛍は珍しく雛子を相手に頬をぶつくりと膨らませてそっぽを向く。

だがその程度で怯むような要ではない。

「いやあ、蛍が怒る姿が可愛くてついね。」

「うれしくない!!」

半分本音が混じった言葉で尚をも蛍をからかい続ける。

「あつ、それには同意。」

「どういしちゃうの!!?」

どこまでも自重しない雛子の言葉に蛍はどうとう涙目になる。

「あなたたち!!」

すると千歳が蛍の後ろに立ち、力強く彼女の両肩に手を置いた。

怒った表情で要たちを睨み付けてきたので、説教でも始まるかと思いきや

「わざわざからかわなくて、蛍は十分可愛いでしょうが!!!」

「……はい?」

「……そつち?」

千歳から飛んできた余りにも想像の斜め上を駆け上がる言葉に場の空気が一瞬にして凍り付く。

意味を捉えれば、蛍をからかうのは止めなさいと言っているようなものだが、言葉のチヨイスから何まで間違っているとしか思えない。

それも恐らくこの子、天然で言っているのだ。

「あ……あわわ……ちつ……ちとせ……ちゃん……」

そんな爆弾発言を直に受けた蛍はと言えば、湯気が出ている錯覚が見えるほどに顔を真っ赤にし、口元を震わせ千歳の方へと振り向いた。

「それ……さすがにちよつと……はずかしい……」

そしてそのまま千歳の胸に顔を埋めて抱きついて離れなくなってしまった。

「蛍?」

一方で千歳本人はきよんとした表情で蛍の頭に手を置いた。

自分の飛ばした爆弾の破壊力がまるでわかっていないようだが、あの雛子さえも言葉を失っているのだから相当なものである。

(……まさか雛子以上の蛍バカが出てくるとはな。)

雛子さえも上回る『究極の蛍バカ』が誕生するとは夢にも思っていなかった要であつ

た。

第15話・Bパート

リン子の作った昼食を食べ終えた千歳たちは、それからしばらくの間リビングで雑談をしていた。

真面目な話をしてきた時間はほんの3分の1くらいで、それ以外は取り止めのない話と要と雛子の漫才を見ていただけだったが、千歳にとつてはこの世界に来て一番有意義で楽しい時間だった。

「それじゃあ、そろそろお暇しましょうか?」

「そうだね。お昼までご馳走になっちゃったし。」

それだけに終わってしまうのは名残惜しかったが、千歳はそれを口にしない。

元々の予定では昼前にはみんな帰るはずだったのに、わざわざ昼食にまで付き合ってくれたのだからこれ以上は贅沢な我儘だろうし、何より

「そっか、それじゃあ、またいつでも遊びに来てね。」

これから先、いつでもみんなと遊ぶ機会があるのだから。

「うん、またぜったいにあそびにくるね!」

蛍の笑顔が千歳に温かく染みこむ。

「そうだあなたたち、これを持っていきなさい。」

するとリン子³がチェリーたち³人の妖精にそれぞれカードを配っていった。

「これって、私たちの身分証明書？」

カードを見たチェリーとベリイは驚き、レモンは眠そうに瞼を擦る。

チェリーのカードを覗きこんで見ると、そこにはチェリーの人間の姿、サクラの顔写真が貼られており、名前の欄には『サクラ・ヒメノ・テイターニア』と書かれている。

テイターニアとは千歳の本来の名前、『チトセ・テイターニア・フェアリーテイル』から取ったものであり、フェアリーキングダムでは妖精の女王を意味する言葉だ。

見るとベリイとレモンにも同じ苗字が書かれており、恐らく³人兄妹、それもベルの容姿を考慮して外国の名前を当てはめたのだろう。

サクラとレモンは比較的この国の人に近い容姿を持つがそこも問題はない。

なぜならミドルネームが『ヒメノ』、間違いなく自分の名字である姫野だ。

この身分証明書によれば、ベリイたちは自分の親族と言うことになる。つまり³人はハーフと言うことになるのだ。

「ええそうよ。あなた達もこの世界でしばらくは人として振る舞う機会も多いでしょうから、持っておいた方が何かと面倒がなくて済むわ。」

確かにチェリーたちは外へ出る時は人間の姿でいる。

何らかのトラブルに巻き込まれてしまったときもそうだが、パートナーである蛍たちと一緒に行動する際にも注意が必要だ。

引越して来たばかりの蛍はまだしも、昔からこの街に住んでいる要と雛子は商店街の人たちとも顔見知りなほど街の人々とは縁が強い。

そんな要や雛子と一緒に行動するベルたちの身元が不明のままでは、彼女たちが素性の分からない人と一緒にいると言う噂が広まりかねない。

特にベルは成人男性だ。なおの事注意が必要である。

だがこの身分証明書があれば、要たちと友達である自分の親戚と一緒にだと言う既成事実が成り立つ。

あらぬ噂が立つたとしても誤解を解くことが出来る材料となるのだ。

リン子のことだからそこまで考えた上でこの身分証明書を作ったのだろう。

「ありがとうリン子さん。」

レモンも、無くさないように気を付けろよな?」

「はい、えへへく姫様と同じ苗字だ。」

形式上、自分と親族になれたことを喜ぶレモンに千歳は頬を綻ぼすが、一方でベリイは浮かない様子を見せている。

「それじゃあちとせちゃん、また来週学校であおうね!!」

「え？ええ、また来週。」

だがその原因もわからぬまま、蛍たちは千歳の家を後にするのだった。

：

翌週、蛍たちが家を出たタイミングに合わせて、サクラたちは1週間ぶりに噴水広場に集まった。

噴水広場には既にベルと、寝ぼけ眼を擦るレミンの姿がある。

「どうしたんだサクラ、昨日いきなり交信術を使って呼びかけて。」

交信術とは妖精の持つ能力の1つで、対象の脳内に直接声を送るものだ。

声を送る相手のことをイメージしなければならぬので、親しい間柄でしか使えないが、能力の届く範囲内であれば場所を問わずに声を届けられるので便利である。

ちなみに能力の届く範囲は転送術とほとんど同じ。

蛍の家からだとドリームプラザまでは遠すぎて届かないが、要と雛子の家、そして千歳のマンションまでなら送ることが可能だ。

「私たちのこれからについて話し合おうと思つてね。」

「レミンたちのこれから？」

「ええ、一昨日蛭たちは姫様からダークネスに関する新しい情報を聞いて、姫様と一緒に戦う決意を新たにしたらわ。」

でも私たちはこの街に来た目的、姫様とアップルさんを見つけるって目的を既に達成している。

だから私たちにはもうやるべきことがないんじゃないかなって思つてたの。」

サクラの言葉に、ベルは少し沈んだ様子を見せる。

「じゃあレミンはゆっくりお昼寝したいな。」

ベルとは対照的にどこまでもマイペースなレミンは呑気なことを言うが、サクラは片手のひらをレミンに突き出し、ノーの意思を表明する。

「でも私、昨日一日考えたのよ。まだ私たちに出来ることがあるんじゃないかって。」

それで思い出したのよ。姫様が話していたことを。

行動隊長には人間の姿に変身する能力があるってことをね。

だからベル、レミン。私たちでこの街をパトロールしていかない？」

「パトロール？」

「ええ。」

ベルは疑問符を打ち、レミンは面倒くさいと言わんばかりに嫌な声をあげる。

「ええ、街中をパトロールして、怪しい人を見かけたらすぐに蛍たちに交信術で知らせるの。」

まあ、蛍たちにも学校があるし、人前で変身するわけにはいかないでしょうから、結局闇の牢獄が展開されるまでは動けないかもしれないけど、それでも前もって知らせておけることは意味がないことはないと思うの。」

「まあ確かに、何もしないよりはマシか。」

それに俺たちが行動隊長の人間の姿を見つけることが出来れば、その情報を要たちに伝えることも出来るしな。」

「そうゆうこと。ほら、レミンも面倒くさがらないで。」

雛子と姫様を助けるのだと思ってやるわよ。」

「仕方ないな。」

嫌々ながらもレミンも重い腰をあげてくれたので、サクラたちは街中のパトロールを開始する。

だがサクラが今回集まった目的は、何もパトロールだけではなかった。

サクラは未だに浮かぬ顔を時々見せるベルを見ながら、いつその話を切り出そうかと考えるのであった。

：

モノクロの世界。

ダンタリアが広間に壁にもたれ、かの地の本を読んでいるところにサブナックが歩み寄って来た。

「・・・何か用かい？サブナック。」

ダンタリアは本を閉じ、サブナックの表情を伺う。

「貴様に一つ、頼みたいことがある。」

「なに？」

サブナックの言葉にダンタリアは珍しく驚いた様子を見せる。

この男が自分に話しかけること自体珍しいと言うのに、その上で頼み事と来たのだ。

ダンタリアは皮肉を込めた笑みを浮かべ、いつもの様にサブナックを嘲笑する。

「へえ、君にしては殊勝な心掛けだね。」

「ようやく腕力だけじゃ物事は解決できないとわかったのかな？」

だがいつもの皮肉に対しても、サブナックは何も反応せず無表情のままこちらを見据えていた。

そんな彼からただならぬ雰囲気を感じ取り、ダンタリアも笑みを消す。

「・・・本気のようなだね。それで、頼み事と言うのはなんだい？」

「貴様は強力なソルダークを生み出すために、素材の選別とやらをしていたな。

その方法を教えろ。」

およそ人にものを頼む態度でないばかりか、その頼み事も行動隊長であれば知っていて当たり前な内容だけにダンタリアは内心呆れるが、それでもこれまで自身の力のみをアテにし、ソルダークを戦力と考えていなかっただのがサブナックからの申し出だ。

彼にとって『現状』はよほど由々しき事態なのだろう。

「教えるとはまた随分な言い草だね。」

「いいから教えろ。これ以上貴様の戯言に付き合うつもりはない。

キュアブレイズがホープライトプリキュアに加入し、やつらも戦力を強化してきた。

ならば我らもこれまでのようにはいかん。打てる手は打っておく必要がある。」

最もらしい理由をつけてきたが、ダンタリアには彼の真意がわかっていた。

ダンタリアはサブナックを試すように質問を重ねる。

「サブナック、その前に一つ、こちらからも聞きたいことがある。」

「なんだ?」

「リリス。君はいつから彼女の様子がおかしくなってきたと思う?」

ダンタリアからの唐突な質問にサブナックは黙り込む。

だがこれはダンタリアにとっても気がかりなことであり、同時に『答え合わせ』でもあるのだ。

行動隊長であるはずのリリスが感情任せの言動を取り続けている。

そんな彼女の変化が何を起因としているのか、ダンタリアにはその答えがわかっていない。

「やつがアモン様に怒りの感情を指摘された時から。」

サブナックの答えを聞き、ダンタリアは嘲笑する。

確かにリリスの言動が顕著に見られるようになったのは、キュアシャインを相手に3度目の敗北を喫してからだ。

だがそれは答えではないはず。兆候はもっと以前から見られていたからだ。

やはり所詮、筋肉バカのこいつにはわからなかつたわけか。

「、という答えをお前は望みか?」

「なんだって?」

だがサブナックの唐突な言葉にダンタリアは思考を中断する。

「俺をみくびるなよ。やつの言動に乱れはここへ来たときから既に見えていた。

キュアシャインを相手に初めての敗北を喫した時、リリスに異変が生じたのはそれからだ。」

サブナックにいつぱい食わされたことも驚きだが、それ以上に彼が自分と『同じ答え』を持つていたことに驚く。

そう、アモンから招集命令を受けてこの地へ来たときから、既にリリスには行動隊長らしからぬ言動が見え隠れしていたのだ。

今の言動はそれが出撃を重ねるごとに大きくなつていたに過ぎない。

「・・・さすが、お姫様のことはよく見ているね。」

珍しくこちらから褒めるが、サブナックは意に貸さない。

「キュアシャイン、やつこそが全ての元凶だ。」

やつの存在は危険だ。一刻も早く消し去らなければ、これ以上は・・・。」

サブナックはそこで言葉を止めたが、続きはダンタリアにも想像出来た。

「だけどいいのかい？」

アモン様はやつを絶望させるとリリスに指令を出している。

やつを消すことはアモン様の命に逆らうことにはならないかい？」

「その命を受けているのはリリスだけだろ。」

俺たちに与えられた指令が撤回されたわけではない。」

サブナツクの答えにダンタリアは不敵な笑みを零す。

確かに彼の言う通り、自分たちに与えられた指令はまだ活きている。

かの地を絶望の闇へと誘う過程で邪魔になるものが現れたなら排除することも厭わない。

だがアモンがリリスに急きよ指令を追加したことから、キュアシャインを絶望させると言う任務は最も優先すべき事だ。

その程度の意は汲み取り、主のために力を尽くするのが行動隊長として本来取るべき選択だが、確かに自分たちはその任務を最優先しろと直接の指示されたわけでも、元の指令を撤回されたわけでもない。いくらでも逃げ道もあると言うものだ。

それにダンタリアもまた、キュアシャインのことを危険視している。

癪なことだが、結局のところ自分もサブナツクと同じ考えなのだ。

「わかった。そこまで言うならバカの君にもわかりやすいように教えてあげるよ。」

「無駄口を叩くなど何度言わせるつもりだ。」

リリスを乱す元凶たるキュアシャインをこれ以上見逃すわけにはいかない。

キュアシャインを討つまでの間、ダンタリアとサブナツクは共同戦線を張るのだった。

：

時刻が正午に差し掛かったころ、ベルたちはベンチに腰掛け休憩していた。

特に怪しい人物を見かけず、レミンがまたたき焼きを食べたい衝動に必死に抗っていたこと以外は見慣れた街の光景が拡がっていた。

「はく、たき焼き……。」

「この前食べたでしょ。少しは反省しなさい。」

「ねくサクラく頑張ったご褒美に買つてく。」

「いやよ。前にも言つたけどこれは蛍のお金なの。」

あとそうゆうのは人に頼むものじゃないでしょ。」

未だ駄々をこねるレミンにサクラが厳しく反対する。

そんな2人のやり取りにベルはやれやれと苦笑しながら、視線を下げ表情を沈ませる。

「ベル、どうかした？」

そんな自分の様子に気づいたレミンが顔をこちらに向けて尋ねてきた。

「え? いや、別に……。」

「嘘。ベル、こっちの世界に戻ってきてから、ずっとそんな顔をしてるよ?」

サクラもこちらに視線を向けてきた。

「……気づいていたのか。」

バツの悪そうに言いながら、ベルは2人から視線を反らす。

まわりに心配をかけまいと振る舞っていたつもりだったが、知らず内に表情に出ていたあたり、自覚はないだけで相当堪えていたようだ。

「あなたって、時々やせ我慢するときがあるからね。」

ねっ、話してみてよ? 私たちは仲間なんだし、それにこっちの世界では私たちは兄妹なんだよ?」

「ベルがお兄ちゃんだなんて頼りないけどね。」

「いらっ。」

酷い言われようだがレミンは冗談めかしく笑っており、サクラのにも先ほどのような語気の強さを感じられない。レミンなりに場を和ませてくれようとしたのだろう。

年下の女の子にまでここまで気を遣われるなんて尚をのこと立つ瀬がないが、このまま1人で悩んだところで答えが見つかるとも思えなかった。

だがベルはこの悩みを2人に明かすべきか悩んでいた。

もしかしたら2人を傷つけるかもしれないからだ。

でも一方で、2人の思いも聞いてみたいと思う。

「・・・それじゃあ、正直なことを2人に聞けどきさ。」

だからベルは、思い切って2人に悩みを打ち明けることにした。

「俺たち、まだこの世界にいる意味ってあるのかな？」

「え？」

ベルの言葉にサクラは不思議そうに首を傾げる。

たつた今、自分たちにも出来ることを探すためにパトロールをしている中で言葉だから無理もないだろう。

一瞬、これ以上話を続けてよいのかという思考がよぎるが、すぐさま振り払う。

「元々俺たちがあの子たちのパートナーとしてこの世界にいたのは、この街に姫様たちがいる可能性があったからと、みんなに俺たちの知っていることを教えてあげる必要があったから、そして俺たちにはもう帰る世界がなかったからだろう？」

でも今は姫様が見つかり、フェアリーキングダムもみんなのおかげで取り戻すことが出来た。

それに俺たちがあの子に教えてあげることがもう何も無い。」

要と出会った当初の頃は、希望の光についてもダークネスについても知る限りのことを伝えてきた。

だが優しさと強さを兼ね備えた要は元々戦士としての素養が高く、この2か月の戦いで瞬く間に成長していき、希望の光を自在に操れるようになっていった。

「アップルさんはこの世界の人間として、姫様の生活を支えるために働いている。

でも、俺たちにはもう、あの子たちのパートナーとして出来ることってないんじゃないかって思ってます……。」

ベルは寂し気に以前アップルからもらった身分証明書に目をやる。

千歳の元にいるアップルは『姫野 リン子』と言う名の人間としてこの世界に身を置き、日々千歳の生活を支えるために身を粉にして働いている。

それに働いていると言うことは、彼女にはこの世界の人間としての証があり、職場の人を始めとした人間関係も築き上げているのだろう。

それらが『姫野 リン子』と言う人間がこの世界で生きていることを証明している。

ただど自分は違う。リン子から身分証明書を貰っているが、今ならまだベルと言う人間は要たちの前でなければ成り立たない。

そして自分にはもう要のパートナーとして、してあげられることはないのであれば、このままこの世界を立ち去り、故郷の復興に尽力した方がよほどいいのではないか？

フェアリーキングダムから帰還してから、ベルはそんなことをどこかもの寂しい思いを抱いていたのだ。

「あるわよ。私にはまだ、パートナーとして蛍にしてあげられることがある。」

だが話を聞き終えたサクラが何の迷いもなく宣言してきたので、ベルの方が驚いてしまふ。

彼女は自分と違い、全てが終わったと思われた今でもパートナーとして成すべきことが分かっているようだ。

ベルはその事が気になり、真面目な表情でサクラに伺う。

「聞かせてくれ。」

「だって、私があの子の側についていなきや、誰があの子に厳しくするのよ?」

「・・・は?」

しかしその答えに面食らったベルはしばしの間無言になってしまい、代わりにサクラが言葉を続ける。

「みんなが蛍のことを甘やかすから、あの子はいつまで経っても無茶な戦いを止めないのよ。」

大体、みんなあの子に対して甘すぎるのよ。

陽子さんも健治さんも、雛子も姫様も、要だって、口ではああ言ってるけど、結局蛍

に対して甘いじゃない。

私くらい虫に厳しく接してあげなきゃ、いつかあの子、大好きなお菓子よりも甘い子に育っちゃうわよ。」

甘やかすと無茶な戦いをするこの因果がわからないばかりか、みんなの名前以外にも聞いたことのない名前が飛んだ上に最後の方はもう何を伝えたいのかわけがわからなくなつてしまつたが、とにかくサクラは虫のことを厳しく躰けるためにこの世界に残ると言いたいようだ。

「私は、あの子のパートナーだからね。」

それでも胸を張つて言うサクラの姿には微塵の迷いも感じられなかった。

「レミンはね。」

するとサクラの話が終わるのを見計らい、レミンが話し始める

「パートナーとしてやらなきゃいけないことなんてわかんないし、レミンの方が雛子に面倒を見てもらつてる立場だから、ベルよりもよっぽど出来ることなんてないと思うんだ。」

でもね、レミンはまだ雛子と一緒にいたいのだ。

雛子優しいし、隣にいと落ち着くし、そんな雛子のがレミンは大好きなんだ。」

いつもの様に間延びした口調で、レミンは雛子と一緒にいたい理由を言ってきた。好きだから側にいたい、ただそれだけのシンプルな理由だった。

「・・・そっか。」

もしかしたら自分は、難しく考えすぎていたのかもしれない。

パートナーとして、要の力になれなければ一緒にいてはいけないのだと思っていた。今まで彼女たちの戦う力になれなかったことを今でも引きずっているのかもしれない。

でもサクラもレミンも結局のところ、パートナーのことが大好きだから一緒にいたいだけだった。

パートナーのことを好意的に思うと言う理由でなら、ベルにだってこの世界に残る理由はある。

ベルは胸につつかえていた疑問が晴れていくのを感じた。

「それに、あなたはもう十分に、要の力になれているわよ。」

「え？」

だがここでサクラが思わぬことを言ってきた。

自分が既に要の力になることが出来ているとはどうゆうことだろうか？

いや、そもそもなぜ自分でもわからないことが彼女にわかるのだ？

「それってどうゆう意味だ？」

ベルは思い当たった疑問を即座にサクラにぶつける。

「・・・は、あなたって紳士気取っている割にはそうゆうところ疎いのね。」

「は？」

だが返って来たのは悪口とも取れる非難の言葉だった。

紳士を気取っているだなんて失礼だが、それ以上に疎いとはどうゆうことだ？

「言ってる意味が分からないんだが・・・。」

「さつもう十分に休んだでしょ？そろそろパトロールを再開するわよ。」

「おっおい。疎いってどうゆうことだよ。」

だが結局、サクラから強引に話題を切られベルたちはパトロールを再開することになった。

とその時、

「・・・ねえ。」

レミンがある一点を凝視し、その場を動かなくなっていた。

「どうしたのレミン？」

「・・・あの人。」

レミンが視線の先の人物を指差す。

本来なら人に指を差してはいけけないと注意していたところだが、その先にいる人物を見てベルも、そしてサクラも凝固してしまった。

視線の先にはタンクトップにハーフパンツというラフな服装からボディビルダーのごとき筋肉を惜しみなくさらけ出している2mを超えた褐色の大男の姿があった。

言うまでもなく、街行く人々の中でもひと際目立っており、道行く人々はみんな視線を向けていく。

小さな子どもなんかは「ムキムキのゴリマッチョだ！」だの「筋肉モリモリモッチョマンだ！」だの好き放題言っていた。

そして2mを超えた筋肉バカでこの街に出没しそうな人物が3人の頭に一齐によぎる。

「サブナック・・・。」

パトロールを開始から1日目、早くも1つの成果を得るのだった。

：

昼休み。

蛭たちが学校の中庭でお弁当を食べていたところに、突然頭の中にチェリーの声が届いた。

「もしもし蛭、聞こえる?」

「え? チェリーちゃん!」

蛭は思わず大声を出してしまい周りの様子を伺うが、要と雛子も驚きの表情を浮かべ、ただ一人千歳だけが冷静に話を聞いていた。

「そっか、妖精同士じゃないから、こつちから声を届けることしか出来ないんだったわ。聞こえているといいのだけど、商店街でサブナックらしき人を見かけたの。」

「ええ〜っ!!?」

再び大声を出してしまい、また周囲の様子を伺う。

今のはさすがに他の生徒たちも怪訝そうにこちらを見て来たので、蛭は慌てて両手で口を塞いだ。

「そつちはまだ学校よね? でももしかしたら闇の牢獄が展開されるかもしれないから、念のため警戒して・・・あつ!」

「あつちよつと、チェリーちゃん。」

ふと、何かがプツンと切れたような感覚が頭を走り、チェリーとの会話は一方的に会

話が終わってしまった。

それと同時に周囲にいる生徒たちが姿を消し、全身に悪寒が走る。

「闇の牢獄!?!」

要が立ち上がり、つられて雛子たちも立つ。

「・・・今の、チエリーちゃんの声だったよね?」

「ええ、みんなにも聞こえてた?」

千歳と雛子にも同じようにチエリーの声が届いていたようだ。

蛭と要はうん、と頷く。

「とにかく今は急ぎましょう。また誰かが闇の牢獄へ囚われてしまう前に。」

チエリーの声がなぜ頭に響いたのか、彼女はサブナツクの人間の姿を見かけたのか、聞きたいことは沢山あるが、今はダークネスを迎え撃つのが先だ。

蛭たち4人は自身のパクトを召喚する。

「[[プリキュア!ホープ・イン・マイハート!!!]]」

「世界を照らす、希望の光!キュアシャイン!」

「世界を駆ける、蒼き雷光!キュアスパーク!」

「世界を包む、水晶の輝き!キュアプリズム!」

「世界に轟く、真紅の煌めき!キュアブレイズ!」

「……4つの光が伝説を紡ぐ！ホープライトプリキュア!!!!」

初めての4人揃っての変身を終え、蛭たちは急いで商店街へと向かうのだった。

：

千歳たちが商店街へ訪れると、チェリーたちがこちらの方へと飛んできた。

「みんな！良かった。ちゃんと聞こえてたのね。」

「チェリーちゃん、さっきの声は……？」

「後でちゃんと説明するわ！サブナックはこっちよ！」

蛭に交信術について説明する暇もなく、チェリーたちに案内されるままに街を進むと、サブナックが蹲る人から絶望の闇を吸い上げているところだった。

「サブナック!!」

一足先に飛び込むキュアスパークに気が付き、サブナックがこちらを振り返る。

「お前たちか、今日はやけに到着が早いな。」

サブナックは迫るキュアスパークの拳を跳躍で回避し、宙へと浮かぶ。

「まあ、これだけの力が集まれば十分か。

ダークネスが行動隊長、サブナツクの名に置いて命ずる。ソルダークよ、世界を闇で食い尽くせ！」

サブナツクの呼びかけとともにソルダークが誕生する。

「みんな！行くよ!!」

こちらもキュアスパークの呼びかけとともにソルダークの元へと飛んでいく。

得意の雷を纏った拳を繰り出すが、ソルダークはそれを真正面から受け止めた。

「なにっ?」

直後、ソルダークはアルマジロのように体を丸めてキュアスパークへと突撃する。

キュアスパークが正面から雷を放ちソルダークに直撃させるが、ソルダークの勢いは留まることなくキュアスパークの元へと転がっていく。

「キュアスパーク！」

だが直前にキュアプリズムが盾を展開し、何とか難を逃れるのだった。

「ありがとうキュアプリズム。しかし、厄介なソルダークやな。」

態勢を立て直したキュアスパークは尚もソルダークと応戦し、キュアプリズムはキュアスパークの援護をする。

一方、千歳は前線から一步退き、サブナツクの様子を伺っていた。

サブナツクの目は彼が実力を認めるキュアスパークに対してではなく、キュアシャインの方へ向けられていたからだ。

「キュアシャイン。」

「え？」

サブナツクの方から声をかけられ、キュアシャインは困惑する。

だが直後、サブナツクが空を蹴り、キュアシャインの元へと距離を詰めよって来た。

「っ!？」

これまでサブナツクがキュアシャインを優先的に狙うことはなかったのですが、意表を突かれたキュアシャインは反応が遅れてしまう。

だがこのことを予期していた千歳はすぐさまキュアシャインの前へと立ち、サブナツクと正面から激突した。

「キュアブレイズ！」

「キュアシャイン下がりなさい！やつの狙いはあなたよ！」

「でも！」

「いいから下がって！」

渋るキュアシャインに大声で避難を命じ、キュアブレイズはサブナツクと睨みあう。

「邪魔をするな、キュアブレイズ。」

だがサブナツクはこちらのことなど眼中にないと言わんばかりの態度で、千歳に拳を振り降ろして来た。

千歳はそれを両手でガードするが、サブナツクの腕力は凄まじく、両手に受けた衝撃が全身に駆け回る。

「くっ……」

一瞬怯んだこちらを一瞥し、サブナツクは尚もキュアシャインの元へ迫ろうとした。

「どつちが邪魔よ!!」

だがそれだけは絶対に許さない。

キュアブレイズは右手に火球を生み出し、サブナツクへと押し付けた。

サブナツクはそれをガントレットでガードするが、千歳は火球を爆発させる。

そして爆風とともに一度後退し、再びサブナツクへと詰め寄る。

「はあああつ!!」

爆発の際に発生した煙の中へと、千歳は拳を突き付ける。

だが煙の中の拳からは冷たい感触とともに金属音が鳴り響いた。

直後、サブナツクが全身から衝撃波を放ち煙を吹き飛ばす。

煙が晴れた先、千歳の拳はサブナツクのガントレットによって防がれていた。

視界を奪った上での攻撃だったが、その程度でダメージを与えられるほど甘くはな

かったようだ。

「ちっ。」

「キュアブレイズ、さすがハルフアスとマルファスを破っただけのことはあるな。

貴様と戦うのも楽しそうだが、今は貴様の相手をするつもりはない。」

サブナックは尚も自分には興味を示さず、キュアシャインへ狙いを定めていた。

だがあの子には指一本も触れさせはしない。

自分はあるの子の守護騎士になると決めたのだ。相手が誰であろうと守って見せる。

そう思い、千歳がサブナックの前に再び立ち塞がろうとしたその時、

「はあああああつ!!」

背後からキュアシャインが雄叫びとともにサブナックへと突撃していった。

「なにっ!?!」

意表を突かれたサブナックはその体当たりを直撃で受ける。

キュアシャインはそのままサブナックにしがみついた。

「キュアブレイズ!いまのうちにソルダークをやっつけて!!」

「キュアシャイン!」

「自ら挑んでくるとは好都合だ。」

突然の出来事に千歳は動揺するも、サブナックが力任せにキュアシャインを引き離

し、彼女に正拳を繰り出すのを見て我に返る。

キュアシャインはサブナックの一撃を両手でガードするも、後方へと吹き飛ばされた。

「きゃあああつー！」

サブナックが追い討ちをかけようと空を蹴るが、それよりも前に千歳がキュアシャインを抱きとめその場を離脱する。

「キュアシャイン！もう無茶な戦いはしなくてもいいって言ったでしょ!？」

抱えたキュアシャインを降ろすも千歳はつい怒鳴ってしまった。

彼女のことを守ると誓ったのに、それを目の前で裏切られた気分だ。

それに自分が注意したように、ダークネスはキュアシャインの力を警戒して集中的に狙いを定めてきたと言うのに彼女にはまるで危機感が足りていない。

千歳は今一度、キュアシャインを諭すように話しかける。

「あなたのことは私が守るから！あなたは安全な場所へ……。」

「そんなのイヤ!!」

だがキュアシャインは真つ直ぐこちらを見据えたまま拒絶してきた。

その態度に千歳は言葉を失う。

「みんなが世界をまもるために戦ってるのに、わたしだけが守られてばかりなんて絶対

にイヤだ!!」

「キュアシャイン……。」

「わたしだって、わたしだってみんなをたすけるために、プリキュアとして戦うってきめたんだから。」

それに、わたしだって、キュアブレイズのこと、まもりたいんだから!!」

続くキュアシャインの言葉に千歳は衝撃を受ける。

キュアシャインのことが大切だから、友達だから守ってあげたいと思っていたが、キュアシャインもまた自分に対して同じ思いを抱いていてくれていた。

それなのに彼女を大切に思うあまり、その思いを踏みにじろうとしまった。

そのことを思い知らせ俯く千歳に、キュアシャインは心配そうに声をかける。

「ねえキュアブレイズ、わたし、ぜったいに足手まといにならないってやくそくする。

だから……。」

キュアシャインは自分から視線を反らし、サブナックの方へ目を向ける。

「わたしもいっしょにたたかわせて!!」

そしてそのままサブナックに向かって突撃した。

だがサブナックも同じ攻撃に二度は引つかからない。

ガントレットで体当たりを防ぎ、そのまま拳を振り降ろそうとするその時、水晶の盾

がサブナックとキュアシャインの間に割って入った。

「もう、こうなると思ってたわ。」

呆れたような、それでいてどこか慈しむような声でキュアプリズムが静かに告げる。

「キュアブレイズ、あなたの気持ちもわかるけど、あの子だつて強い思いを持って、プリキュアとして戦つてるの。その思い、私たちが支えてあげよ？」

「キュアプリズム……。」

「そういうこと！」

するとキュアスパークがソルダークをサブナックに向けて殴り飛ばしながら、こちらへと着地した。

キュアシャインも一旦距離を置き、千歳の方へ合流する。

「前に言ったやろ？この子だつてウチらの重要な戦力。」

守られてばかりのお姫様なんかやないよ？」

そう言いながらキュアスパークはキュアシャインの肩を叩く。

キュアシャインは少しこそばゆそうに微笑んだ。

そんなキュアシャインたちを見て、千歳も考えを改める。

キュアシャインのことが大切だから出来れば戦わせたくない、それは本心だ。

だけどそんな自分の思いのために、彼女の思いを踏みにじりたくもない。

それに、戦いながらも守る手段はいくらでもある。

「・・・わかったわ。キュアシャイン、一緒に戦いましょう。」

「うん！」

キュアシャインは戦場に似つかわしくない笑顔で頷いた。

その笑顔に千歳もつい頬を綻ばせる。

「相談事は終わったか？ソルダーク!!」

これ以上は敵も待つてはくれなかったようだ。

サブナックがソルダークとともにこちらへと迫り来る。

「キュアブレイズ！行くよ！」

「ええっ！」

それを千歳とキュアスパークと2人で迎え撃った。

先ほどとは相手を変え、キュアスパークがサブナックへ、キュアブレイズがソルダークへと突撃する。

ソルダークは再び体を球状に丸め千歳へと突撃してきたが、千歳はそれを炎のヴェーリで縛り付け、爆発させた。

爆発を受けたソルダークは上空へと吹き飛ぶも、空中で回転して再び迫り来る。

だがそれをキュアプリズムの盾が遮り、回転を止めたところでキュアシャインが飛び

掛かった。

片手にしがみつきの、相手が球状になるのを力任せで食い止める。

そして千歳は、キュアシャインにしがみつかれ空中で動きを止めたソルダークに対して、炎を纏わせた拳を叩きつけた。

ソルダークはさらに上空へと飛ばさせるが、頭上にキュアプリズムが盾を展開、頭長を打ったソルダークは後頭部を押さえながら落下していく。

ふと、キュアスパークの方へと目を向けると、彼女はサブナツクの拳を至近距離でかわし、カウンターで正拳をお見舞いしていた。

サブナツクはそれをガントレットでガードするが、キュアスパークはガードされた拳をそのままサブナツクの頭へと向け、雷を放ち顔面に直撃させた。

「初めて見る技だ。また腕を磨いたな、キュアスパーク。」

だが顔面に雷を受けてもサブナツクは平然としていた。

それでもキュアスパークは怯みはしない。

サブナツクはふとこちらに目を向けるが、キュアスパークはそれを逃さず再び雷を放った。

「ちっ、っ、っまでか。」

今度は首を横へと傾け回避するが、キュアスパークに足止めされ、ソルダークが3体

1の状況に持ち込まれたことでサブナツクは敗北を悟ったようだ。

キュアブレイズはソルダークへと目を戻し、右手を正面に掲げる。

「光よ、弾けろ！ブレイズタクト！」

自身の武器であるブレイズタクトを召喚し、4拍子を描く。

一拍置きに火球が生み出させ、タクトの先端に希望の光を集中させる。

「プリキュア！ブレイズフレアー・コンチエルト！」

4つの火球とともにソルダークへと突撃し、タクトの先端を突き付け一気に力を解放する。

「ガアアアアアアアッ!!」

そして赤い炎に身を包まれたソルダークは、断末魔とともに消滅していった。

「あれ程のソルダークもまるで相手にならないとはな……」

だが次はこうはいかんで、ホープライトプリキュア。」

サブナツクの撤退とともに、闇の牢獄が晴れていくのだった。

：

ダークネスとの戦いを終えた蛍たちは急ぎ学校へと戻っていった。

幸いにも人の目につかず、時間が止まっていたこともあり、蛍たちは一時中庭を離れていただけとなったので、特に怪しまれることもなかった。

「それにしてもびっくりしたな。ペリイたちにあんな力まであったなんて。」

戻った後、蛍たちは千歳から妖精の交信術について教えてもらった。

確かにそれにも驚いたが、蛍はそれ以上にチェリーたちが街中をパトロールしていたことに驚いた。

同時にチェリーたちの気持ちも純粋に嬉しかった。

今日の夕ご飯はチェリーへの感謝の気持ちも込め、彼女のリクエストを聞こうと思つたその時、

「蛍。」

「なつなに、ちとせちゃん……?」

千歳が神妙な面立ちで話しかけてくる。

だが今日の戦いで、自分は彼女の厚意を無下にしてしまったのだ。

戦う力の弱い自分が一緒に戦いたいだなんて、今にして思えばただの我儘なだけかもしれない。

そんなマイナス思考が今になって働き始め、蛍はまた彼女に怒られるのではないかと
思い少し萎縮するが、

「……ごめんね。あなたの気持ちも考えないで、下がってだなんて言つて。」

「え……?」

怒られると思つていたところが謝罪されてしまい、蛍は困惑する。

「あなたが戦いたいと言ふのなら、もう私は止めはしないわ。」

でも今回の戦いで分かつたと思うけど、あなたは本格的にダークネスから狙われるよ
うになったつてことをわかつてちょうだい。

あなたはもう今のように、力の使い方もわからないつていうわけにはいなくなつた
の。」

「……うん。」

千歳の言葉が蛍の身に染みる。

そもそもプリキュアとして戦つて2か月ほど経つのに、未だに使い方を分からないつ
て言うのが問題だ。

そんな自分を敵が優先的に狙つてくるのだから、千歳も自分の身を案じてくれたの
だ。

そうなれば自分のすべきことは1つだ。本格的に力の使い方を身に付けなければな

らないと思ったその時、

「だから、私があなたに力の使い方を教えてあげるわ。」

「・・・え？」

千歳から思わぬ申し出がきて、蛭は目を丸くする。

だがこの中の誰よりも自在に使いこなしている彼女からレクチャーを受けられるのは、蛭としても願ってもないことだ。

その一方で彼女に迷惑になるのではないかという遠慮が生まれてしまう。

「えと・・・いいの？　メーワクじゃないかな？」

「そのくらい迷惑にならないし、あなたが力の使い方を覚えてくれた方が私は安心するわ。」

笑いながらそう言ってくれる千歳の厚意を、蛭は今度こそ受け止めようと思った。

「ありがとうちとせちゃん！」

「それから、例えばあなたが戦うとしても、私はあなたのことを守るからね。」

「え？」

「だって私は、あなたの騎士（ナイト）になるって、決めたのだから。」

「これだけは誰にも譲るつもりは無いわ。」

ナイトになってくれるだなんて、守られるお姫様みたいで恥ずかしいが、同時に彼女

の力強い宣言に、蛭は彼女に守ってもらえろと言う安心感を抱いた。

友達になれたときから、彼女はまるで姉のように自分に優しく接してくれている。

ともすれば子ども扱いされているとも取れるのだが、自然とそう接してくれる千歳に對して、蛭もどこか甘えたいと思ってしまうのだ。

雛子に對してもそうだが、どうも自分は大人びた女性に弱みたいだ。

「……うん、ありがとうちとせちゃん。」

はにかみながらお礼を言うのと、千歳は笑顔でどういたしましてと言ってくれた。

その時の彼女の笑顔を見て蛭は確信した。自分は一生、この人には敵わないのだなと。

…

学校を終え家が帰ると、既にベリイが帰宅していた。

「ただいまベリイ、パトロールは終わったん？」

「お帰り要。あの後すぐに家に帰ったよ。」

「そっか。」

いつもの様に机の上に座っているベリイを見て、要は今日一日の事を思い出して微笑む。

「なんだ？」

「ありがとなベリイ。ウチらのためにパトロールまでしてくれて。」

突然自分からお礼を言われ、ベリイは困惑する。

「……まあ、お礼を言われるほどのことじゃないさ。」

俺が今君のパートナーとして出来ることなんて、もうこれくらいしか残ってないから
「さ。」

そして少し俯きながら顔を反らしてしまった。

照れ隠し、とは少し違う気がする。

フェアリーキングダムから帰還してからのベリイにどことなく元気がないことは気づいていた。

きつと千歳とアップルが見つかり、故郷も救われたので自分のやるべきことを見失っていたのではないかと思う。

それにベリイは元々、自分の力では戦うことができないことを悔やんでいたのだ。

だからベリイはパートナーである自分と一緒に戦うことが出来ない代わりに、自分に

出来ることをずっと探していた。

要はそんな、パートナーとして自分の力になろうと奮起するベリイの気持ち嬉しかった。

「そんなこと言わんでも、ベリイは今でも十分、ウチの力になってくれてるよ。」

だから要は自分の思う素直な気持ちを彼に伝える。

ベリイは目を白黒させているが、少なくとも今まで自分は彼への言葉に対して遠慮をしたことはない。

いつかベリイがパートナーとして自分のことをもつと理解したいと言ってくれた時から、要は自分の思いは素直に伝えてきた。

だから今更、自分の発言が気休めではないかと疑われるような心配はしていなかった。

「こんなこと言ってもベリイは納得できないかもしれないけど、ベリイが側にいてくれるだけで、ウチにとっては十分なんよ？」

今日みたいに帰って来たとき、ただいまって言うてくれるだけで、どこか安心できるの。

だから、力になってあげられないなんてことはない。

ウチからすればベリイには感謝してもし足りないくらいやもん。」

「・・・そうか。」

自分の言葉がウソではないとわかってくれたのか、ベリーの表情から不安の色がなくなつた。

代わりに僅かに困惑が見て取れるが、それも仕方ないだろう。

行動と言う点で見れば、確かに彼は『何もしていない』のだから。

でもパートナーとして、何かを成さなければ力になれないなんてことはないと思う。

普段毎日を楽しく過ごしている要にだつて、プリキユアとしての戦いの中で多くの悩みを抱えてきた。

プリキユアとして戦い、絶望の闇を抱える人々たちを助けること。

孤立していた千歳とどう接していいか悩んだこと。

でもそんなとき、隣にいてくれた彼が優しく励まし見守ってくれたから、要はそんな悩みを乗り越えられた。

それに、そんな理屈を抜きにしても、彼の隣は凄く居心地がいいのだ。

「でも、どうしてそれだけで十分なんだ？」

それでも納得の出来ない彼は、首を傾げながら質問してきた。

実はその答えは自分でもわからない。

でも答えではないかと思う言葉が一つだけ思い当たる。

「・・・内緒っ。」

でもこればかりはいくらベリイが相手でも、否、ベリイが相手だからこそ言うことはできない。

要は少しはにかみながら、デリカシーのない質問をしてくるベリイに対して意地悪気に微笑むのだった。

・
・
・

次回予告

「夏も本格的に暑くなって来たな。」

「そろそろなつのおようふく買わないとね。」

「それなら今度、みんなで購入に出かけましょうよ。」

「それは楽しみだわ。」

「あつ、だったらひなこちゃん、わたしのおようふくみつくりしてもらってもいいかな？」

「え・・・？」

「ひなこちゃん、かわいいものすきだし、こうゆうの得意そうだから・・・ダメかな？」

「・・・私が・・・蛍ちゃんを好きに・・・。」

「・・・ひなこちゃん？」

次回！ホープライトプリキユア第16話！

「オシヤレにチェンジ！コーディネートは雛子にお任せ！」

希望を胸に、がんばれ！わたし！

第16話

第16話・プロローグ

春が過ぎてから一週間が経ち、少しずつ夏の暑さが訪れ始めた頃、夢ノ宮中学校では夏服へ衣替えする時期が訪れていた。

雛子も要も今週に入ってから夏服に変えており、教室に入ると真と愛子を始め、一部寒がりな生徒以外はみんな夏服へと移り変わっている。

ちなみに夢ノ宮中学校の制服は、ワイシャツとブレザーの色を自由に選ぶことが出来る。

要は橙色、雛子は薄紫色とそれぞれ好きな色を選んでおり、制服1つとっても着ている生徒の個性が垣間見ることが出来るのだ。

「ひなこちゃん、おはよー。」

すると雛子が愛でてやまない蛍も夏服で登校してきた。夏服も可愛い。

蛍の着るワイシャツは予想通り薄いピンクである。可愛い。

「いや〜最近暑くなって来たね〜。」

半袖の割合が多くを占めている教室を見て要がボヤク。

何年か前の自分なら、夏の日でも四六時中クーラーの効いた部屋で本を読んでいるだけだったので暑さは大して気にならなかつたが、今はこの身体を動かさなければ逆に疲れてしまうようなスポーツバカが炎天下の陽の元だろうとお構いなしに連れまわしに来るので外へ出る機会も多くなつた。

この先どんどん気温が上がってくると思うと少し億劫である。

「わたしもそろそろ、なつもののおようふく、買おうかなつておもつてたところなの。」
「そうね、そろそろ買いそろえた方が良いかしら。」

本来なら夏の入り始めか春の終わり頃には買い換えているところだが、今年はプリキュアの活動で週末に時間が取りづらく、今も私服は去年のお下がりを使っている。

だがお洒落に無頓着な悪友と違い、雛子はそれなりに気を遣う方だ。

その年の流行りものに飛びつくほどミィハーでもないが、かと言つて去年着ていたものと同じ服をいつまでも着るつもりはない。

今年は今年で気持ち新たに、他の洋服を着てみたいのだ。

「それじゃあさ、今週の末みんなまで洋服買いにドリームプラザまで行つてみない？」
すると要からそんな提案が上がつて来た。

この悪友にとつては単にみんなまで遊びに出掛けるための口実作りでしかないのだから、とはいへ悪い案ではない。

雛子としてもみんなと一緒に買いに出かられるのであればそれは有意義な時間だし、何より目の前にいる天使が大喜びするからだ。

「わはっ！そうしよう！みんなでいっしょに、おようふく買いにいこっ!!」

雛子の予想通り、要の提案を聞いた蛍が満面の笑みを浮かべてはしゃぐ。可愛い。

そんな蛍の天使の笑顔（エンジェルスマイル）を見ながら、雛子は蛍ならどんな洋服が似合うのだろうかとしばしの間妄想にふけるのだった。可愛い。

第16話・Aパート

オシャレにチェンジ！コーディネートは雛子にお任せ！

昼休み。蛍たちは教室に千歳を招き、真と愛子を交えた6人で机を囲んでいた。

蛍が要から受けた提案を千歳たちに話すと、3人とも快く承諾してくれた。

「ドリームプラザか。そう言えば私はまだ行ったことがなかったわ。」

「え？そうだったの？」

「ええ、行くほどの余裕もなかったからね。」

「あつ・・・そっか。」

千歳の言葉に蛍は自分の浅はかな疑問を恥じる。

彼女のこれまでの状況を鑑みれば、ショッピングモールに足を運んで娯楽に興じられるほどの余裕なんてなかったはずだ。

それでも名前だけ知っているのは、アップルから話を聞いていたのかもしれない。「じゃっ、千歳にとっては初ドリームプラザになるわけだな。」

「お洋服以外にもいっぱい楽しいお店があるよ。」

良かったら本屋やCDショップも案内しましょうか？」

「ええ、お願いするわ。真、愛子。」

楽し気に談笑する千歳を見ながら、螢は千歳の心にゆとりが生まれていることを改めて喜ぶ。

同時に螢も、みんなと一緒に洋服を買いに出かけるのが楽しみだった。

なぜならこの街へ引越す前、螢が元々住んでいたところは、山と田んぼに囲まれた有体に言えば田舎だったのだ。

町内にある洋服店は人口の半数を占めるシニア向けのものが多数で、螢のような若い世代がお洒落を求めるものなら、親に頼んで車を出してもらい片道一時間以上をかけて隣の市まで向かわなければならなかった。

それだけに、子どもだけでも徒歩とバスを利用すれば20分足らずで、しかもそれ以上のショッピングモールへと行けるようになったのだから、さながら夢のような環境である。

「どんなおようふく買おうかなあ。

ドリームプラザって、かわいいおようふくがたつくさん売ってあるからまよっちゃうよね！」

「店舗の数も多いものね。洋服だけでも5店舗くらい見かけるし。」

夢ノ宮市最大のショッピングモールであるドリームプラザは、類似するお店を一か所にまとめたエリアごとに分割されている。

そして衣食住の内、衣の店舗をまとめたエリアには安さを売りとした大型チェーン店から、性別、年齢ごとの専門店、果ては和服店までズラリの並んでおり、男女問わず子供から大人まで幅広いニーズに応えている。

それだけに量と質を兼ね備えており、蛭は一之瀬家の日課である週末の外出で何度かドリームプラザに立ち寄り品定めをしてきたが、未だに買いたい洋服を選び抜くことが出来ないでいるのだ。

「それならば、蛭ちゃんの着るお洋服、雛子から見繕ってもらったらどう?」

「え?」

すると愛子からそんな提案が上がって来た。

蛭だけでなく雛子も目を丸くして愛子を見る。

「雛子って可愛い人形を集めるのが好きだけあって、服のコーディネートも結構上手いのよ?」

前に私の洋服を見繕ってくれたこともあったし。」

確かに雛子の家には着せ替え人形が置いてあったし、その着せ替え用の洋服もバリエーションに富んでいた。

人と人形の違いがあるとはいえ、コーディネートと言う点ではそこまで大きな違いはないのだろう。

「ねっ？ 雛子だって蛍ちゃんのお洋服選んでみたいと思わない？」

「こら、蛍は着せ替え人形じゃないのよ？」

「あつごめんごめん、そんなつもりで言ったのではないのだけど。」

千歳に窘められ謝る愛子に蛍は首を横に振って応える。

千歳の気遣いは嬉しいが、相手の言葉尻をいちいち捉えて糾弾するほど蛍も神経質ではない。

それに彼女の提案通り、雛子からアドバイスがもらえると言うのは、蛍にとっても願ったり叶ったりだ。

なぜなら雛子は蛍の友人の中で一番少女的な趣味が強いからだ。

要の動きやすさを重視したスポーティーなラフスタイル、千歳の男子寄りのクールなファッションセンスも、2人の個性と魅力を引き立たせる素晴らしいセンスだと思いが、蛍の望む可愛いものであれば、雛子が一番近いセンスの持ち主であると思われる。

「メーワクじゃなければ、わたしからもおねがいしていいかな？」

ひなこちゃん。」

蛍は少しねだるように目線を上げて雛子にお願いする。

だが雛子は目を丸くして口元を緩めたまま、要するに愛子から提案を聞いた時の表情のまま固まっていた。

否、表情だけでなく手に持つ箸もエビフライを持ったまま硬直しており、こちらの声どころか愛子の話さえ耳に入っていたのかどうかも疑わしいような状態である。

「・・・ひなこちゃん？」

一体どうしたのだろうかと蛍が心配そうに雛子の顔を見上げたその時、

「はうっ!!？」

「ひなこちゃん!？」

突然雛子が謎の奇声を発して仰け反った。

漫画なら絶対に鼻血を出しているであろうリアクションに蛍のみならず千歳たちも驚き、ただ要だけが何かを察したかのように呆れ切った顔でじつとりと見ていた。

「ひっひなこちゃん! だいじょうぶ!？」

「ごっ、ごめんなさい・・・ちよつと想像が膨らみすぎて・・・。」

何を想像していたのかは聞かない方がいいと思つた。

「うん分かつたわ了解したわ任せて蛍ちゃん私が蛍ちゃんに一番似合う洋服を見繕つてあげるわね!!」

「へ? えっ、えと・・・おねがいます・・・。」

そして稀に見せるハイテンションで早口で捲し立てながら了承してくれた。
雛子のテンションに困惑する蛍の様子に、要と真と愛子はなぜか同情した視線を送るのだった。

：

放課後、今日は部活が休みなので、要は久しぶりに真とサッカーをする予定だ。

5人で下校する途中で千歳とも合流し校門を通り過ぎると、雛子が家とは別の方向へと体を向ける。

「それじゃあ、私はここで。」

「雛子、どこか寄り道するの?」

愛子が聞くと、雛子はメガネの縁を手に取りくいつと上げ下しドヤ顔でこちらを見据える。

「これからドリームプラザまで洋服の下見に行ってくるわ!」

「えっ!?!」

これに驚いたのは当然、雛子から洋服を見繕ってもらう立場の蛍であり、それ以外の人は要も含めて「そこまでやるのかよ・・・」と言わんばかりの呆れた表情を浮かべる。「ひつ、ひなこちゃん、なにもそこまでしてもらわなくても・・・」。「何を言ってるの蛍ちゃん！

せつかく蛍ちゃんの洋服を任せられたのに妥協なんて出来ないわ！

今日の内に蛍ちゃんのサイズに合う服を調べ尽くして週末までにその組み合わせのパターンを全て洗い出すのよ！」

「え・・・えと・・・」

遠慮がちに雛子に話しかけていた蛍だが、雛子の異様なテンションに圧倒されてしま

う。趣味に没頭したら周りが見えなくなるタイプである雛子にとって、一番のお気に入りである蛍のコーディネートを任せられたものだから心血を注ぎたくなる気持ちも分かるが、もう少し自重しろと言いたい。

今の発言、雛子は蛍のスリーサイズをしつかりと把握していると宣言しているようなものだし、それに気づいた蛍が若干引き始めているぞ。

「それじゃあ蛍ちゃん！週末楽しみにしててね！バイバイ！」

当の本人が一番楽しみなテンションで蛍に別れの挨拶をする。

「うっ、うん、バイバーイ。」

そして雛子に終始圧倒されたまま、蛍も挨拶を返すのだった。

雛子が嵐のように過ぎ去ってからもしばらく無言の間が続いていたが、やがて蛍が微笑む。

「……ふふっ、ひなこちゃんたのしそっだったね。」

雛子に振り回されるであろうことは本人が一番良く分かっているのだろうが、それでも雛子のことだから間違っても蛍が気を悪くするようなことはしないはず。

そんな絶対的な信頼があるからこそ、蛍は雛子の思うがままに任せるつもりなのだろう。

それに蛍の表情からも、週末が楽しみであることが伝わって来る。

彼女にとって友達と一緒に過ごす時間は大切なものなのだろうから、ここは温かく見守るのが一番だろうと要は思うのだった。

校門前で千歳と別れ、途中の道で愛子とも別れた要は、真と蛍の3人で談笑しながら歩いていく。

やがていつもの交差点まで辿りついて足を止めた。

「じゃつ、ウチらもここで。」

「うん、……。」

別れ際、螢は商店街の方へと目を向ける。

「いつものようにリリンに会いに行くの？」

「え？うつつうん、そうだね。ちよつと噴水広場までいつてくるね。」

「それじゃ、また明日な螢。」

「螢ちゃん、またな。」

「うん、バイバーイ」

螢は急ぎ足で商店街へと向かって行くが、そんな彼女の様子に要は違和感を覚える。

リリンに会いに行く前の螢は、いつもなら「まさに幸せの頂点！」とでも言うべき顔を見せていたはずだが、別れ際の螢の表情はどこか憂いを帯びていた。

「リリンって子によつぽど惚れこんでるみたいだな。螢ちゃんって。」

「ん……そうだね。」

隣に立つ真がニヤけながらそう言うが、要はそれに生返事で答える。

今になって思い出したが、ここ一週間くらい螢からリリンの話題を聞いていない気がするのだ。

「……要？なにボヤつとしてんの？」

さつさと市民体育館へいこつさ。」

「え？あつ、ああ、うん。」

どこか引つ掛かりを覚えながらも、要は真につられて市民体育館へと向かうのだつた。

：

噴水広場に着いた蛭は、いつもリリンと一緒に座っているベンチの前に視線を向ける。

そして不安げな表情で街行く人々を見渡していく。

(・・・やつぱり、今日もきていない。)

最後にリリンと会ってから、既に1週間ほどが経過していた。

これほど長い期間、彼女と顔を合わせないのは2か月前以来だ。

2週に1度くらいの頻度が、次第に1週に一度、今では3日に1度くらいの間隔で彼女と会っていたのと言うのに、また昔のように戻ってしまったのか、最悪の場合、もう

2度と・・・。

そんな不安が蛍の胸に広がり始めていた。

「リリンちゃん・・・どうしちゃったんだろ・・・？」

最後に会った日、確かにリリンの様子が少しおかしかった。

彼女は何でもないと言うし、話している最中はいつものリリンだったが、どこか悩みを抱えているような、具合が悪そうな、一言では表現できないような不穏な空気を彼女から感じていたはずだ。

それなのに彼女に何もしてあげられなかったことを、蛍は今になって悔やみ始める。

こんな時彼女の連絡先はおろか、住んでいる場所さえも知らないのが心苦しい。

もし何か悩みを抱えているのなら力になりたいし、体調を崩しているのなら、お見舞いに行つてあげたい。

「リリンちゃん・・・。」

彼女から教えてもらった勇気のおまじないをし、蛍はリリンのことを強く想う。

強く想えば、またいつものように彼女に会えるのではないかと信じて。

だがいつまで待とうともリリンの姿は見かけられず、蛍は気を落としながら家に帰るのだった。

…

その日の夜。

パジャマ姿の雛子はお気に入りの人形を胸に抱き、ベットの足を転がりまわっていた。

「ふふふつ…ふふふつ…」

思わず笑い声が零れる。

今日の成果は上々だ。ドリームプラザ内にある洋服店を全てしらみつぶして回り、蛍のサイズに合う洋服を全て記憶してきた。

ちなみに誰に対しての言い訳でもないが、蛍のスリーサイズを把握しているのは断じて彼女の知らぬうちに直に測ったからではない。

興味のあることについてはとことんまで知り尽くしたくなる雛子の性分が観察眼と洞察力を徹底的に磨き上げた結果、あいてのスリーサイズを一見しただけで当ててしまう特技を心得ただけだ。

目を付けてきた洋服の組み合わせを頭の中に次から次へと当てはめていく。

その度に雛子の脳内にいる蛍の姿が七変化の如く変わっていく。そしてそのいずれも可愛い。可愛いのだ。

想像上の姿だけでこれほどの可愛さなのから、現実の世界で再現できれば一体どれだけの可愛らしさになるのか、それこそ想像できないと言うもの。

頭に浮かぶ組み合わせを忘れずにメモしたいところだったがそれどころではない。

メモを取る暇もなくアイディアが次から次へと浮かんでくるのだが、その全てが雛子の脳内に強烈な閃光と共に焼き付いてくる。気分はさながらレーザーに焼かれる記録媒体だ。

これだけ脳内に焼き付いてくれるのであれば、万に一つも忘れることはないだろう。

「はあ……どれが一番似合うかしら……？」

本当なら今日見てきた洋服を全て蛍に買い与えてあげたいところだが、さすがに持ち帰れないほどの手荷物になるだろうし、彼女の私室を見たことはないが、一般的な家庭なら部屋に置くスペースもないだろう。

何よりも一番可愛いコーディネイトをすると宣言した以上、一番に絞る必要がある。

だが蛍の可愛さを全て肯定する雛子にとって、一番を決めると言うのは非常に難しいことだ。

どの組み合わせもとても甲乙付け難い。だがそれに悩む時間さえ雛子にとっては楽

しいひと時だ。

それに少し打算的な話になるが、蛍に似合う一番可愛い洋服をプレゼントできれば、ご褒美に自分の我儘の1つ、ようするに蛍のことをまたギューツと抱きしめたいと言う頼みを聞いてくれるかもしれない。

彼女なら恥ずかしがりながらも了承してくれるだろう。

そして新品の服の肌触りと一緒に蛍の抱き心地を堪能でき……

「はうっ?!」

想像が限界を超えて再びはうっしてしまう雛子。

だがすぐに立ち直り、再び頭の中で服選びを再生する。

「はあく、早く週末にならないかな。」

雛子は今まで一度もしたことがないであろう緩み切った表情でベッドの上を転がり続けるのだった。

：

ニヤケ顔でベッドの上を転がりまわる雛子の姿を、レモンは机の上からじつとりと眺めていた。

いつもなら自分の寢床は雛子の枕元なのだが、この様子の雛子の枕元で寝ては間違いなくのしかかられるか、ベッドから弾き飛ばされるだろう。

蛍から作ってもらった妖精サイズのベッドを壊されたくもないし、レモンは仕方なく机の上に避難していた。

「雛子……」

雛子の蛍に対する思い入れの強さは、日常的に彼女から蛍が可愛い可愛いと耳にタコが出来るほど聞かされているレモンには身に染みている。

そんな蛍から洋服の見繕いをお願いされたのだから嬉しいし楽しみな気持ちはわかるが、何もここまで異様なテンションを見せなくてもとも思う。何度ベッドの上を転がり回れば気が済むのだろうか。

家に帰ってからずっとこの調子で、ご飯の時もお風呂の時もずっと蛍にはどんな洋服が似合うだろうかとばかり話していた。

要するに、自分のことが眼中に入っていないようなのでレモンはちよつとだけ寂しかったのだ。

自分よりも蛍の方が大事なのかと、少しパートナーとしての信頼関係を疑ってしま

う。

今回ばかりは少し蛭へ嫉妬を抱いてしまったレモンだが、何よりも問題なのは……
(ちよつと気持ち悪いよ……)

それでも雛子が終始幸せそうな姿を見せるものだから、なかなかそんな本音が言えないレモンであつた。

：

週末。

今日はみんなで夏服を買いに夢ノ宮ドリムプラザまで行く予定だが、蛭は朝食を食べ終えた後、まず千歳の家にお邪魔した。

待ち合わせの時間までの間、千歳と以前、約束した希望の光の使い方を教えてもらうことになつたのだ。

蛭はカーペットの上に正座し、千歳と向かい合う形になっている。

「ゆっくりと息を吸って少しずつ吐いて。」

まずは身体の力を抜いてリラックスするのよ。」

向かいに座る千歳からの指示通り、長く間を置いた深呼吸を繰り返す。

「希望の光は思いの力、あなたが強く念じた思いがそのまま力へと変わるの。

だからまず、あなたの本当の思いを知るためにも、心を落ち着かせて自分自身と向き合うのよ。」

以前教えてもらったことを、千歳は今一度復唱する。

身体と心と言うのは得てして不可分であるもの。

心的ストレスから体調を崩すと言う話はテレビでも良く聞くし、身体の具合が良くない時は気が滅入りやすくなることは蛭にも経験がある。

病は気から、健全な身体には健全な精神が宿ると言う言葉があるように、心と身体のバランスは肉体的な面でも精神的な面でもとても重要なことだ。

そしてそれは思いを源とするプリキユアの力、希望の光の使い方にも大きく関わってくる。

つまり身体が強張ったままだと集中力を欠いてしまい、余計な雑念を挟みやすくなってしまう。

だからまず深呼吸を繰り返すことで心身ともにリラックスさせる所謂『瞑想』が大事だと言うのが千歳の教えであり、蛭は今日までそれを『宿題』として毎日こなしてきた

のだ。

だが気持ちをリラックスさせて雑念を祓うと言うのはやってみると意外と難しいものだった。

つい今日のご飯は何を作ろうか、あのお菓子の隠し味には何を使われていたのだろうか、リリンは今頃どうしているのだろうかと思いが挟んでは集中力を乱してしまい、その度にチェリーに注意された。

それでも今日までの5日間で、チェリーから何とかギリギリの合格点をもらうことができ、今日はその成果を千歳に見てもらおうのだ。

「こころをおちつかせて・・・自分のきもちとむきあう・・・。」

「そう、特にあなたは感情の振れ幅が大きいから、こうゆう精神統一はなおさら重要よ。」さらに千歳が言うには、蛭が未だに力を上手く扱えないでいる理由は、常に不安や恐怖と言ったネガティブな感情が強く出ているからとのことだ。

確かにソルダークや行動隊長のような、巨大な怪物や悪魔と戦うことに今でも恐怖しているし、みんなの足枷にならないかという不安も抱いている。

それでも要たちからは重要な戦力だと認めてもらっているが、それは裏を返せば、常に危険と隣り合わせの状況に自分を追い込み、チェリーが言うところの無茶な戦い方をしなければ戦力としてカウントされないと言うことだ。

そしてダークネスとの戦いが熾烈を極めている中、そのような無茶な戦い方をいつまでも続けるわけにはいかない。

みんなには心配をかけるし、次の戦いも無事でいられる保証なんてないのだ。

だが自分の強さに自信が持てず、思考が後ろ向きになりがちと言う根本的な問題点は、元来の性格に大きく由来している。

千歳から指摘されただけですぐに改善できるようなものなら、13年間友達が1人もいない人生なんて送っていなかっただろうし、そもそも臆病で自虐的になりやすい性格だと言うことは自覚しており、恥ずかしながらこれまで克服しようと思っても出来なかったのだ。

今は友達に恵まれているので、昔よりは多少マシになったとは思いますが、それでも初対面の人の前では相変わらず目を見て話すことはできないし、どれだけ自分のことを高く評価されても、なかなか自分の能力を誇ることが出来ないでいる。

このままでいることを良しとするつもりはないが、生まれつきの性分と言うのはなかなか変えられないと言うのも、虫はこれまでの人生で重々に思い知っているのだ。

「でも大丈夫、あなたは自分の弱さを自覚しながら、それを乗り越えようとする前向きな姿勢も持ち合わせている。

そんな強い思いは、必ずあなたの力になるわ。」

「うん．．．すー．．．はあー。」

千歳に励ましてもらいながら、蛍は深呼吸を繰り返す。

悩みのない人間なんていない。

でも抱えている悩みを乗り越えることが出来る強い気持ちがあれば、希望の光は必ず応えてくれると、千歳はそう言ってくれた。

現に蛍は今まで3回ほどでしかないが、希望の光を解放したことがある。

希望の光を扱うことができない、なんてことはないのだ。

少なくとも目下の足枷になっている自分の弱い心を乗り越えることが出来れば、あの時と同じとまではいかずとも、少しでも扱うことが出来るようになるはず。

「大丈夫、今は私がついているから、何も不安に思わず安心していいのよ。」

「うん．．．。」

蛍はこれまで以上に緊張するが、千歳が側にいてくれると言う安心感のおかげか、いくらか気持ち落ち着かせることが出来た。

そして少し瞬きをして再び目を瞑り、深呼吸を繰り返す。

今一度自分の気持ちをクリアすることで、心の奥底に眠っている、希望の光を紡ぐための純な思いを呼び起こすために。

だが．．．。

「・・・蛍、脈拍が少し上がっているわ。

もう少しリラックスしていいのよ？」

「うっうん・・・。」

急に落ち着かなくなってきた。

千歳のおかげで緊張がほぐれたはず、いや、だからこそこの思考が蛍の頭を遮ってし

まい集中力を乱していく。

「顔も少し強張っているし、ほんのりと赤いわ。

緊張するのはわかるけど、心を落ち着かせて。」

「うっ、うん・・・。」

千歳に優しく諭される度に、むしろ頬が熱くなっていく。

心臓が高鳴り余計に落ち着かなくなる。なぜなら・・・

(ちとせちゃん、ちかいよ・・・。)

千歳との距離が非常に近いのだ。

実はお互いに正座して向かい合うだけでなく、千歳はずっと蛍の右手首に指を添え脈を測っており、もう片方の手のひらで蛍の手を優しく包んでくいた。

それは蛍がリラックスできている状態であるかを確かめるためであり、もしも蛍が希望の光を解放してしまったとき、すぐに中和して力の気配を隠すためでもある。

プリキュアに変身しない状態で希望の光を解放しても何の現象も発生しないが、気配だけは探知されてしまうらしい。

ダークネスがこの街のどこかに潜伏している可能性がある以上、不用意な力の解放は彼らに居場所を教えてしまう危険性があるのだ。

だがフェアリーキングダムにいたときに雛子に力を中和してもらったときのように、力への干渉を行うには、物理的な意味で相手と接触する必要がある。

オマケに目を瞑っているせいも、視覚以外の五感が妙に研ぎ澄まされてしまっている。

右手を包み込む柔らかか感触と温かい体温が、肌と肌を通して伝わってくる。

鼓膜に微かに届く千歳の吐息も聞こえてくるものだから、虫は恥ずかしさでいっぱいだった。

女の子同士なんだから何を大袈裟な、と思うかもしれないが相手はあの千歳である。

自分のピンチの時に颯爽と駆け付け、窮地を格好良く救ってくれる千歳は、虫にとつて白馬の王子さまであり、同時に背が高く、スタイルも良く、子どもっぽい自分とは何もかも正反対な容姿を持つ憧れのお姫様でもある。

そんな女性的な美しさと男性的な格好良さを併せ持つ千歳に何度見とれてきたことか。

今の状況を例えるなら憧れのアイドルを至近距離で生で直視しているようなものだ。そんな状態で心身共にリラックスなんて出来るはずもないのだ。

「ちよつとごめんね。」

「ひゃうっ！」

すると千歳が少し前に屈み、蛍の肩に手を添えた。

思わず目を開くと、視界いっぱいには千歳の凛々しい横顔が映り込み、彼女の長いサイドテールが鼻をかすめシャンプーの甘い香りが鼻腔をくすぐる。

視覚と嗅覚まで魅了されてしまった蛍はあつという間に顔が真っ赤になる。

「肩も少し強張っている。」

ちよつと一旦楽になりました。正座も崩していいわ。」

「はっ……はい……。」

「そんなに落ち込まなくてもいいわよ。」

いきなり言われて出来るほど簡単なものではないし、これから少しずつ力を制御できるように頑張りますよ。」

「うう……ごめんささい……。」

まさかあなたに見とれてしまっていたから集中できませんでした、なんて言えるわけがない蛍は一人俯きながら千歳に謝罪する。

「はい蛭、紅茶でも飲んで落ち着きなさいな。」

「あつリン子さん、ありがとうございます。」

リン子が運んでくれた紅茶を手に取り、それを飲みながら一息つく。

だがふとリン子に目を向けると、彼女は口元に手を当てて微笑んでいた。

もしかして自分が集中できていない理由に気づいたのだろうか？

「蛭、どうしたの？」

「ひゃい!?! なつなんでもないよ!!」

不意に千歳から声をかけられ、蛭は思わず素つ頓狂な声をあげてしまう。

千歳は不思議そうな表情を浮かべながらも、それ以上は言及してこなかった。

そのことにホツと胸を撫で下ろすが、リン子は殊更クスクスと笑いだす。

悟られたことを確信した蛭は猶更顔を赤くした。

「それじゃあ、少し休憩したら時間いっぱいまで頑張ってみましょうか？」

「うっうん、よろしくおねがいます・・・。」

結局千歳のことを意識してしまったせいで、心を落ち着かせることは出来なかった。

情けなくため息をつく自分に千歳は優しく励ましてくれるが、これから先も彼女を意

識するあまり集中力を欠いてしまうようでは、その厚意を無駄にしてしまう。

千歳に言われた通り・・・とは少し意が異なるが少しずつ慣れていくしかない。

それだけにもし千歳に知られてしまったら、これから先彼女にどんな顔をすればいいのか分からなくなってしまうので、蛍は心中で絶対に千歳には今日のことを言わないでほしいとリン子に懇願するのだった。

：

約束の時間が近づいてきたので、千歳はリン子と蛍と一緒に、待ち合わせの場所として指定した夢ノ宮中学校前のバス停へと向かった。

「おっ来た来たって、蛍も一緒やったんか？」

「うっ、うん。」

「みんな、お待たせ。」

「私たちも来たばかりだから大丈夫よ。」

バス停には要と雛子、真と愛子の姿があつた。

「千歳、その人は？」

リン子と初対面の真が首を傾げて聞いてくる。

「初めまして、千歳の母で姫野 リン子です。

いつも千歳がお世話になってるわ。」

「ふわあ、美人なお母さんだね千歳ちゃん！」

「えっええ……。」

真と愛子が交互に会釈し、リン子に挨拶を交わす。

予想できていた光景とは言え、リン子が自分の母親として挨拶する姿はどうもこそばゆい。

相手がプリキュアの事情を知らない真と愛子なので猶更である。

「これで全員揃ったんじゃないの？」

リン子と挨拶を終えた真が点呼を取るように全員を見渡す。

「あつ、ちよつと待つて。」

「どうしたの要？」

要の言葉に愛子が疑問符を打つが、まだ自分たちにとっての大切な友人たちが来ていないのだ。

「あついたいた、ごめんね遅くなって。」

「待たせたな、レミンがたこ焼き屋の前でまた動かなくなって……。」

「うえくん雛子。ドリームプラザでたこ焼き買って。」

すると待ち人である3人がようやく姿を見せた。

真と愛子は再び目を丸くする。

彼女たちからすれば、初対面の人が親し気に話しかけてきているのだから、困惑するのも無理はない。

「えつと・・・雛子、こちらの方たちは？」

「初めまして、千歳の親戚でベル・ヒメノ・テイターニアと言います。

こっちは妹のサクラとレミン。」

「外国に住んでいる私の遠縁でね、わけあってしばらくの間この街に滞在することになったのよ。」

「私たちとは、前に千歳ちゃんの家にお邪魔した時に一緒になって。

その縁で私たちとも親しくしてもらってるの。」

立场上、長男であるベルが率先して自己紹介を始め、千歳と雛子がそれぞれ助け舟を出す。

プリキュアの事情を知らない真と愛子が一緒にいると聞いた時、最初はベルとサクラは一緒に来ることを拒んだが、虫と要が仲間外れにしたいとせがみ、レミンと一緒に出かけたいと駄々をこねるので、千歳と雛子はどのような形で自然と接するかを前もって話し合っておいたのだ。

わざわざベルたちが3人揃って少し時間を遅らせて合流したのも、事情を知らない真と愛子の前に、蛭たちが一緒に来ては不審がられると思っただからである。

「へー、外国人の親戚なんて、何かカッコいいじゃん。」

「正確にはハーフだけだな。」

妖精の中でも特に適応力の高いベルが、さっそく決められた設定を活かして自己紹介する。

サクラは勿論、レミンもマイペースに見えてしつかり者だし、これなら3人の正体がバレる心配もないだろう。

「初めまして、宮内 愛子と言います。」

「私は柳原 真、以後お見知りおきを。」

「改めて、サクラです。よろしくお願いします。」

「むにや〜レミンだよ〜。」

「こらレミン!」

特に不審がられる様子もなく、真と愛子は3人と親し気に挨拶を交わす。

人間としての振る舞いが上手くいっても真と愛子からすれば赤の他人な上に歳も離れているので仲良くできるか不安だったが、妖精たちもさることながら、真と愛子も親しみやすい子たちなので、初対面の印象は悪くなさそうな様子だ。

これなら蛭たちがいつものように接していても問題ないだろう。

心の不安が取れた千歳は、初めて訪れる夢ノ宮ドリームプラザへと改めて思いを馳せるのだった。

バスに乗り、10分ほどして千歳たちは夢ノ宮ドリームプラザへと到着した。

「いつ来てもここは広いわね。」

到着一番、サクラが感嘆とした声をあげる。千歳も彼女につられて周囲を見渡す。

中央の開けた広間から上の階層の店まで見ることが出来、視界には色とりどりの店が立ち並んでいる。

そして多くの人々が来客していながら狭さを感じさせない程度にはスペースに余裕があり、それだけでもこの空間の広さを十分に物語っている。

「本当に、こんな沢山のお店が並んでいるだなんて・・・。」

千歳は初めて訪れるショッピングモールに圧倒されながら、視界いっぱい広がる店の数々に視線が釘付けとなる。全てのお店を見回るだけでもどれくらいかかることだろう？

「はははっ、千歳はリアクションがオーバーだなあ。」

真の言葉に千歳は我に返る。

「え？ああ、ごめんなさい。」

地元だと中々こうゆうところには来れなくて……。」

地元もとい故郷では、中々来れないどころかまず存在しない。

モール中を見て回って探検したいと気持ちが逸るが、今日ここへ来たのはみんなで夏服を探すためなので、千歳は一旦冷静を取り戻す。

とは言つても千歳は新しい服を買うつもりは無い。

今着ている服で間に合っているしリン子に負担をかけたくないからだ。

それでも友達の間を探して選ぶだけでも十分に楽しそうだし、真と愛子から本やCD ショップも案内してもらええる予定だ。

「ねえねえ、ひなこちゃん。」

すると蛍が目を輝かせながら雛子に呼びかける。今日を楽しみにしていたと言う気持ちさが表情からありありと伝わってきており、逸る気持ちを抑えていたのは自分だけではないようだ。

「はやく、おようふく屋さんに……。」

「さあ蛍ちゃん！早く洋服店に行くわよ!!」

「へ？」

が、それ以上に雛子が異様なテンションで食いつき、蛍さえ言葉を失ってしまう。「ふふふつ、この日のために頭の中で何度もシミュレートして来たわ。」

ドリームプラザ中の洋服店を無駄なく回るためにお店の順番から服の組み合わせまでもれなく最適化して今日中に全パターンを試着できる算段はついているから何も心配しなくていいわよ!!」

「え……えと……。」

そして雛子の熱の籠った力説に誰もが圧倒され、ただ一人『見慣れている』のである。う要だけが白々しい目でため息をついていた。

「あの、ひなこちゃん、わざわざありがとう。」

「だけどそこまでしてもらわなくても……。」

「何を言ってるの蛍ちゃん！」

「蛍ちゃんに一番似合う服を探すと言う使命に一切の妥協は許されないわ！」

元を辿ればただの『お願い』だったはずがいつの間にか『使命』にまで昇華されている。

蛍は歯切れの悪い口調でやんわりと断ろうとするが、そんな腰の低い態度でかけた水は瞬く間に蒸発していった。

そして次の瞬間、

「へ．．．？」

雛子がおもむろに蛍を所謂お姫様抱っこで持ち上げたのだ。

「ひっ、ひなこちゃん！」

「さあ！この先は一分一秒も無駄に出来ないわ!!」

さっそく最初のお店に向かいましたよ!!」

雛子は幸せ満開と言える笑顔で全速力で洋服店へとダツシユする。

そして全力で走るものだから当然、周囲からの注目が集まる。

「まっ、まってひなこちゃん！はずかしいよおっ!!」

公衆の面前でお姫様抱っこされているところを注目された蛍は顔を真っ赤にして抗議するが、当然雛子の耳には届いていなかった。

それよりも、要と違つて雛子は運動は得手でも不得手でもなかったはず。

それがあそこまでの速度で走ることが出来るのに驚いたが、もしあれが蛍を思うが故に成せる技だとしたら．．．。

「．．．凄いわね、雛子って。」

蛍の守護騎士を志す身としては感服すると言わざるを得ない。

「なんでちよつと感心してるのさ．．．。」

こちらの言葉を拾った要が、2重に疲れたような表情を浮かべていた。

失礼な、と思いなながらも普段の要と雛子とはまるで逆の立場になっ
ていることに思わず苦笑する。

それにあれだけの速度で走っているながら道行く人々の邪魔に全くな
っていない当たり、雛子も完全に周りが見えなくなっているわけではないよ
うだ。

その割には耳元で叫ぶ蛍の声には全く気が付いていないわけだが……。

そんな雛子の様子に要は再度頭を抱え、愛子と真は目が点になり、サ
クラとレミンは深々とため息を吐き、ベルは呆れ交じりに苦笑する。

「そっそれじゃ、私たちも向かいましょうか？」

「そうだね……とりあえずあのお店は後回しにしよつか？」

「ああ、雛子のテンションに巻き込まれるのはごめんだからな。」

千歳たちは雛子の相手を蛍1人に押し付けたまま、別の洋服店へと足
を運ぶのだった。

…

雛子に抱えられ身動きが取れないまま、螢は彼女が取り決めたであろう最初のお店に辿りついた。

入つてすぐに雛子は降ろしてくれたが、同世代の友達にお姫様抱っこされているところを道行く大勢の人たちには勿論のこと、この店の店員にも見られてしまったのだから、はつきり言つて穴があれば入りたい気持ちである。

千歳の家での一件から始まり、今日は恥ずかしい思いをすることばかりが続いたせいで螢の思考はショートしてしまっているが、そんな螢を余所に雛子は店に入るや否や狙いを定めていたのであろう商品に手に取り始めていた。

雛子の姿を見て本来の目的を思い出した螢は、徐々に平静さを取り戻していく。

同時に雛子の一連の動きが、歩幅から商品を手取る動きの細部に至るまでまるで機械のように一切無駄がないことに気が付く。

この時間を一分一秒も無駄には出来ないと言う彼女の思いは本物であることを改めて思い知り、何もそこまでしなくても申し訳なく思う気持ちが半分、そこまでしてくれたことへの感謝と照れくさい気持ち半分、そして常軌を逸した情熱を向けられたことにほんのちよっぴりだけ背筋が凍えるが、

「螢ちゃんお待たせ！」

最初はこれとこれの組み合わせよ！さつ、さつそく試着してみて!!」

彼女が自分のためにここまで念入りな下準備をしてくれたのは事実なのだ。彼女がこれだけの情熱を燃やして自分の望みを叶えてくれようとするのなら、こちらもその厚意にしつかりと応えよう。

そう思うとこの時間も少しずつ楽しく思えてきた。

友達と一緒にショッピングして回る、というのも蛍の憧れていたものなのだ。

最も現実には、互いに見て回るのではなくこちらが一方的に見てもらっているわけだが……。

「うん、わかったー」

恥ずかしさから立ち直り、蛍は雛子から差し出された服を手に取り試着室へと向かう。

雛子が時間を無駄にしないように動いてくれているのだから、こちらも無為に時間を浪費させるわけにはいかない。

試着室の中で雛子の選んでくれた服を見てみると、確かに可愛らしくかつ自分でも着れそうなサイズの洋服だ。

改めて心中でお礼をしながら着替えを終えた蛍は、鏡の前で自分の姿をチェックする。

少し肩の開けたショートワンピースに夏用のカーデイガン、そして白いキャペリンを

被った自分のはどことなくシックな雰囲気があり、普段よりもほんのちよつぱり大人びているように見える。

自分のセンスではまず選ぶことのできないファッションに身を包んだ蛍は少し高揚する。

早く雛子に見せてみたい。一体どんな反応をするのだろうか？

とそんな期待を胸に試着室のドアを開けると・・・

「ねーねーひなこちゃん！どう・・・え・・・？」

試着室の前に立つ雛子がいつの間にか両手から溢れんばかりの洋服を持っているのを見て、先ほどまでの気持ちの昂りが一瞬にして凍り付く

「はうっ?!?! 蛍ちゃん！とても似合ってるよ!! 私の想像通り、いえ！想像の遥か上を行ってるわ!!」

「え・・・えと・・・」

以前にも見たような反応と一緒に褒めてくれたのだが、蛍は雛子の両手から目を離せないでいた。

いくらなんでもあれだけの洋服を全て試着するのは無理だろう、と思つたが、雛子は此処に来る前に全てのパターンを最適化してきたと言つていた。と言うことは、全て試着させるつもりなのだろう。

「あつ、最初はカーディガンと帽子を取つて、こつちのネックレスとむぎわら帽子を着けてみて。」

それから、次はワンピースじゃなくて、このノースリーブシャツとホットパンツにカーディガンを組み合わせさせて見て……。」

しかも今着ているものも、他の洋服と組み合わせるようだ。

単純に1着ずつ着ていくだけでもかなりの時間がかかりそうなのに、全ての組み合わせとまでなると一体どれだけの時間がかかるのか、考えたくもない。

「ささっ……これから先まだ回りたいお店もあるんだし、どんどん試していこうー！」

そして忘れていたが、まだ『一軒目』だった。

つい先ほど抱いた楽しい気持ちは早くも吹き飛び頭痛まで覚える蛍だったが、満面の笑みを浮かべる雛子を見ては水を指し辛く、雛子が手に取る洋服を着るのを楽しいと思えたのも嘘ではない。

こうなれば自分も雛子がとことん満足するまで付き合うしかない、蛍は覚悟を決めるのだった。

第16話・Bパート

蛭が雛子に拘束されている最中、要たちは3軒ほど先にある洋服店に足を運んでいった。

雛子や愛子が良く利用するこの店は、レディースの洋服を多く扱っているところであり、そのためかベルはどこか居心地が悪そうだった。

「ねえ真、この洋服似合うかしら？」

「ん？まあ、いいんじゃない？」

「もく、ちゃんとよく見てよく。」

真と愛子が付き合いたてのカップルのような会話を繰り広げているが、要は特に気にも留めずに洋服を見て回る。

やがて余計な模様の無いシンプルなTシャツが目にとまり、要はそれを手に取り肌触りを確認する。

「要って、あまりお洒落には興味ないの？」

「ん？」

すると千歳がそんなことを聞いてきた。

「まあ、興味ないってわけじゃないけど、あんまり積極的にしたって思うもんでもないかな。」

ボーイッシュとよく言われる要も青春真っ盛りの女子中学生。

女の子らしくキュートでポップなデザインの洋服を着てみたいと言う気持ちがないわけではないが、要が服を選ぶ基準の中で最も優先されるのが、動きやすいか否かだ。

そして女の子のオシャレと言えば、コーディネートを重視した重ね着や、下着が見えないように気を遣うスカートを着用しなければならぬと言うイメージがどうしても付きまとう。

学校でもなるべく体操着でいたいと思う要にとって、それは例えるなら西洋の甲冑に身を包むようなものなのだ。

結果、要の服装は季節を問わず、Tシャツにデニムと言う服装になりがちであり、それらもメーカーのロゴが刻まれている程度のシンプルなデザインに纏まってしまう。

これが悪友からお洒落には無縁と言われる所以である。

「ふくん、あなたスタイルいいんだし、どんな服を着ても似合うと思うけど。」

「えっ……?」

千歳の思わぬ言葉に、要はつい声を詰まらせてしまう。

確かに日頃からスポーツ少女として体調管理にはそれなりの気を遣っている。

良く身体を動かすのは勿論、こう見えてもお菓子やジュースの食べ過ぎ飲みすぎに注意しているし、夜更かしだつてあの鬼母が常に目を光らせていると言うのもあるが、友達との泊まり会の時くらいしかせず、平日だけでなく日曜朝のおかげで休日でも早起きする習慣が身に付いている。

その甲斐あつてか、身体には程良く筋肉がついており、背丈だつて同世代の女の子の中では高い。

肥満ではなく健康的な容姿であると言う自負はあるが、同時に悲しいくらい起伏がないことも自覚している。

凹凸がほとんど見られないこの身体には、少なくとも女の子としてのスタイルの良さがあるとは思えない。

一体全体どう見たらそんな感想が出るのかと一瞬、千歳の視力を疑つたがそれ以上にそんな褒め言葉を堂々と言われては照れくさいのだ。

(この子……こうゆうこと平然と言えるから困るわ……)

かつて千歳が蛍を指して『わざわざからかわなくても十分に可愛い』なんていけしやあしやあと云つてのけたことを思い出し、要は少し頭を抱える。

どうも千歳は相手に対する好意を包み隠さず伝える性分のようなのだ。

同性ならまだしも異性が相手なら多少勘違いしてしまうのではないかと不安である。

「そうだよ。こんなのはどうかしら？」

すると千歳が自分で見つけたTシャツを差し出して来た。

「・・・はい？」

だが差し出されたTシャツは紫外線をこれでもかと遮断するほどの漆黑に染まっており、2本の大鎌がクロスを描いている中心にフードを被ったドクロが存在感を全面にアピールしているデザインだ。

その様相はどこからどう見ても人の命を刈り取りにくる神様のそれである。

「・・・却下。」

「え〜。」

千歳が不服そうな声をあげるが、デザインのセンスを横に置いたとしても、この先夏真っ盛りを迎えるであろう時期に、そんなお天道様に堂々と喧嘩を売るようなTシャツを着たいとは思わない。

それに自分は暖色が好きだ。何から何まで好みが真逆なのである。

「つか、ようそんな服見つけたな。」

仮にもここはレディース用の洋服を多く扱っている店だ。

一体どんなニーズに答えて、そんな特定の男子中学生が喜んで飛び付くようなデザインの服を仕入れているのか。

男性用の商品も多少はあるので、一瞬男性用のTシャツを持つてきたのかと嫌味を疑ったくらいである。

「そう？カッコイイじゃない。」

だが千歳の言葉に、彼女が着ているドクロマークのTシャツと腰に巻かれたチエーンベルトを見て要はため息を吐く。

「いましたよ。その特殊なニーズに对应してくれる顧客が。目の前に。」

「あら？じゃあせつかくだし買ってあげようか？」

するとリン子が千歳に件のTシャツを薦めてきた。

今更ながら千歳の好みは、年頃の女の子としてはあからさまに浮いていると言うのに、リン子はそんな千歳の好みを否定せず受け入れてくれていたようだ。

そんなところもパートナーと言うよりは母親のように見える一因である。

「いいわよ。」

私の分の夏服は十分に間に合ってるし、似たようなデザインシャツも持つてるからね。」

持つてるのかよ。と要は心の中でツツコミを入れる。

「ああ、そう言われてみれば似たようなものを買ってあげたわね。」

買ったのはあなたかよ。と要は再び心の中でツツコミを入れる。

「まあ本当は鬮體の目が丸いものよりも少し傾いている方が好きなのだけどね。」

なんだその拘りは。と要は三度心の中でツツコミを入れた後、ワザとらしくため息を吐く。

「なあ要、こうゆうのだったら着てみてもいいんじゃないか？」

するとベルが洋服を手に取りながらこちらに来た。

要の好きな橙色のTシャツに水色のキュロットだ。

確かにキュロットならスカートほど気を遣う必要がなく、かつ女の子らしいお洒落を少しは体験できるかもしれない。

「いやあ、でもそれちょっとヒラヒラしすぎやない？」

とは言え、見た目はスカートに近いので要は少しばかり抵抗を覚える。

何せこれまでスカートは制服以外ほとんど身に付けたことがないし、制服のそれはここまでヒラヒラしていない。

それを着た自分の姿を想像しただけでも、普段とイメージとかけ離れているものだからどうも躊躇してしまうのだ。

「あら、素敵じゃない。きつと要に良く似合うわよ。」

「私もそう思うわ。言っただでしょ？あなたは何を着ても似合うって。」

「2人まで……。」

だがリン子と千歳も一緒になって乗せに来たので、要は顔を赤くして明後日の方を向く。

ここまで素直に薦められると返って恥ずかしさが先行してしまうが、一方で一度でいいから着用してみたいと思う自分もいる。

「物は試し、試着でもいいから着てみたらどうだい？」

「……ん、わかった。着るだけ着てみるよ。」

何より、ベルがわざわざ自分のために選んでくれたのだ。

無理を頼んでベルと一緒にドリームプラザまで来たのだから今日は特別だ。

要はほんのちよつぴりだけ自分に素直になり、ベルから受け取った服と一緒に試着室へ向かうのだった。

それからもう何件か見て回り、それぞれ夏服の購入を終えた後、要たちは一旦蛍と雛子がいる店の様子を見に行った。

だがそこには目を星のように輝かせた雛子がひたすら蛍に服を押し付け、サクラとレミンが遠い目でそれを見守っている光景が映った。

あの様子ではまだ時間がかかりそうだったので、要たちは少し寄り道をすることにし

た。

若干、蛍の顔に疲れが見えていたので放っておくのも少し憚れたが、いくら雛子が有頂天な状態でも蛍の機嫌を伺うことすら疎かにすることはないだろうと思い、そのまま任せることにしたのだ。

そして本やCDなどを一括で扱うエリアまで訪れ、千歳は当初の約束通り、真と愛子と一緒に本屋に、要はベルと一緒にCDショップへと向かった。

「おつ、まこぴーの新曲の発売日、今日やったんか。」

店の入り口前に置かれたモニターから、大人気アイドルまこぴーの新曲『トランプ王国のディーヴァ』のプロモーションムービーが流れている。

「要、アイドルに興味なんてあったか？」

「いや、そうゆうわけじゃないけど、こうゆうのって自然と耳に入ってくるからさ。」

交友関係が広いと流行りものの情報と言うのは自ずと聞きかじってくるもの。

物は試して友達から勧められたまこぴーのデビュー曲を聞いたときに彼女の歌声につい聞き入ってしまった、以来新曲があれば自然とチェックするようになっていた。

CDを購入したことはまだないが、今のように店頭映像でサビの部分は聞けるし、音楽番組でも聞くことが出来るので特に困ることはない。

余談だが、以前真が得意げな表情で「私、まこぴーと同じ名前なんだぜ。」と自慢にも

ならない自慢をしたことがあったか。

「・・・な必要。」

「なに？」

するとベルが神妙な面立ちで話しかけてきた。

「俺、店の外で待つてようか？」

「は？」

周りを伺いながらそんなことを言ってくるベルに要はつい不機嫌な声を出してしま
う。

要もベルにつられて周囲を見渡してみると、何人かがこちらをチラチラと伺ってい
た。

傍目から見れば女子中学生と成人男性が一緒にいる上、ベルは容姿が外国人なので親
兄弟にも見られないだろう。

そもそも夢ノ宮市は観光地らしいところは何もないので、外国人がいること自体珍し
い。

自分たちが一緒にいる光景が余計に物珍しく映っているのだ。

だからベルは気を遣ってくれているのだ。

その気遣いが彼の優しい証なのだからそれは嬉しいのだが・・・

「むっ。」

「なっ、おい要。」

一方で『つまらない』という感情だつて芽生えてくる。

要は強引にベルの腕を引き、自分の腕に組ませる。

「別に、何がいかんの？」

ここに来てるのは『パートナー』としてじゃなくて『友達』として来てるんやろ？」

つい語気も強くなつてしまう。異性だから、年齢差があるからなんて関係ない。

友達と一緒にシヨップिंगモールに買い物へ来ることの何が疚しいと言うのだ？

そんなことで噂の尾ひれが立つことを気にしていたら、同性の友達以外と一緒にいること自体できなくなる。

第一こんな時のために怪しまれないように、わざわざアップルがベルたちの身分証明書を作つて渡してくれたと言うのに、何を気にする必要があるのだ。

仮にここにいる人たちが、『見知らぬ外国人旅行者』が女子中学生と一緒にいた、なんて噂を流したとしても、その身分証明書があれば自分が一緒にいたのは『友達の親戚の人』であることを立証できるし、そもそもここへは2人きりでなく雛子たちを含む大勢の友人たちと一緒に来ている。

証言してくれる人は千歳たちは勿論、ベルのことを『千歳の親戚である外国人』と認

識している真と愛子だっているのだ。

噂が立ったところで晴らすことは簡単だ。

それでも疑う人たちがいたとしても、そんなゴシップ好きの連中のことなんて、いちいち気にするだけ時間の無駄である。

「……つたく、どうなつても知らないぞ。」

するとベルはバツの悪そうな表情を浮かべてそっぽを向いた。

こうなればこちらだつて意地だ。

駄々をこねてまで連れてきたのに、ここで気を遣われては一緒に来た意味がない。

そうでなくても、ベルは普段から自分と一緒に外へ出たがらないのだ。

妖精のままでは人前に出られないし、人間の姿では青年だから、と言うのが彼の言い分だ。

初対面の時、自分のことをお子ちゃまだから意識しないなんて失礼なことを言っていたくせに、余所の目だけはしっかりと気にするのだ。

でも言葉通り、自分の事を特に異性として意識しているわけではない。

同じ部屋に住んでいるのだから、それはイヤでも思い知らされた。

そんなベルの優しさが嬉しくて、でもつまらなくて、自分の気持ちに気付いてくれないことがもどかしくて、でも結局彼の優しさは嬉しくて……。

色々な気持ちが必要の頭を駆け回り、モヤモヤとした霧が頭にかかり始め、要はそれを振り切るかのようにベルのことを強く引き寄せる。

「・・・ヘタレ。」

でもここまですても相変わらずそっぽを向くベルに、要は彼に聞こえないようにポツリと本音を呟くのがだった。

：

真と愛子に本屋まで連れて行ってもらえた千歳は、愛子がオススメする漫画の試し読みをしていた。

故郷にはない漫画やアニメと言った娯楽作品は話だけは聞いていたが、千歳は故郷が救われるまでの間、自分への戒めとして娯楽の類にはほとんど触れていなかった。

テレビはニュース以外ほとんど見なかったし、本も教科書と辞書以外は手に取らない。

強いて娯楽をあげるとすれば、この世界の言葉を勉強するときには自分の趣味に合う

カッコいい言葉を探していた程度である。

今読んでいる漫画は、1人の少年が自由を求めて海賊となり世界を旅する冒険物語であり、愛子が言うには世界的に大ヒットしている名作とのことだ。

「・・・面白いわ。」

「でしょ?!? 凄く面白いでしょ?!?」

好きな漫画を褒めてもらえたことを愛子は喜んでる。

海賊と聞いて千歳が最初に思い浮かんだのは、本来の意味通り海を縄張りとする無法者の窃盗団だったものだから、そんな悪党を主人公とする漫画の何が良いのかと訝しんでいた。

だが劇中で主人公一派が盗みを働くような描写はなく、ただ国にも法にも縛られずに自由気ままに旅をしたいがために、無法の身に投じていただけであった。

どうやらこの漫画における海賊とは、国や法律に縛られずに自由に海を旅する者を指す言葉のようで、愛子によれば漫画を始めとする創作物には、実際の意味とは異なる意味を持つ言葉が使われることがあるとのこと。

言われてみれば自分の身近にだって、プリキュアの力である希望の光と言う本来の光とは異なる性質を持つものがある。

人の意志でどこからともなく生み出されるばかりか、雷や炎、果ては水晶にまで性質

を変えただけだから、つまりはそういうことなのだろう。

少し思考が逸れたが、それでも主人公が無法者であることには変わりなく、王族としての自分の立場を鑑みれば、いくら創作物上の人物とはいえ、国にも法にも一切従わない人を好意的に思うのはどうかと思つたが、自ら危地に身を投じ、常に危険と隣り合わせの旅さえも楽しんでしまう主人公の大胆不敵な姿に魅力を感じるのも事実だった。

そして物語だけでなく、様々な手法を使つて描かれた絵は、愛子が言うところの実際に人が動いているように錯覚するほどであり、結果として自分をこの作品に引き込むには十分すぎる魅力が込められていた。

「良かったら1巻から全て貸してあげましょつか?」

「いいの?」

「勿論!その代わり、読み終えたら感想を聞かせてね!」

「ええ、わかつたわ。」

先週要たちが遊びに来たときは、特撮のヒーロー番組である『無限戦隊オルレンジャー』なるものを薦められ、今度雛子から録画したものを全て借りる予定だし、虫が好きと語る『魔法少女ピュアキュア』と言うアニメも見るともりだ。

漫画にテレビ番組と、娯楽に興じる時間が多くなりそうだが、故郷にはない洗練された作品の数々に、千歳はすっかり心を躍らせていた。

「あつ、あつたあつた。」

すると愛子が探していた本を手を取った。表紙を見ると、漫画を描くための参考書のようだ。

「愛子って、漫画を描くことにも興味があるの？」

「ええ、私、将来の夢は漫画家だから。」

まあとは言つても、私は絵は全然得意じゃないんだけどね……。

愛子が苦笑いをしながら少し俯く。

「それでも少しずつ上達してきたじゃん？」

参考書を買つても描こうとすらしなかつた頃と比べたら十分な進歩だよ。」

近況を知る真の言葉に、愛子は恥ずかし気に本で口元を隠す。

「雛子にあんなことを言われたら、頑張るしかないもの。」

愛子が笑顔でそう話すが、思わぬところから現在進行形で蛍を振り回している雛子の名前が上がり、千歳は目を丸くする。

「雛子に？」

「下手でもいい、失敗したっていい。それでも将来叶えたい夢があるから、私たちは今、この夢ノ宮市で勉強しているのだからって、私が将来の夢を諦めかけていたとき、雛子がそう言ってくれたの。」

それから、悩みがあればいくらでも聞いてくれるって。

雛子は優しいから、いくらでも甘えさせてくれるのだろうけど、いつまでも雛子に頼りっぱなしってわけにはいかないからね。

それに雛子だって、将来の夢のために頑張って勉強をしているのだから、私もあの子のように頑張らなきゃ恩返しできないもの。」

愛子はそう言いながら両手をグツと握りガッツポーズを取る。

雛子の厚意に甘んじるつもりはないと言いながらも、自分が困っているときは彼女が必ず力になってくれると、愛子の言葉からは雛子への感謝と信頼が見て取れた。

その様子に千歳は雛子の力の本質を思い出す。

彼女の力は守りの力、それは誰かを助けたいと思う気持ちが由来しているのであれば、彼女の思いは普段の日常の中にも見て取ることが出来るだろう。

今日だって、蛍の願い事を叶えるために粉骨碎身の思いで動いている・・・あれは彼女自身の趣味も多分に含まれているからだろうが、雛子は友達のためとあらば、自分の持てる全て尽くして力になろうとする子なのかもしれない。

(あの子・・・本当に凄いい子かもしれないわね。)

ここに来ているみんなと友達になつてから一週間しか経っていない千歳だが、特に雛子の人柄にはあまり触れたことがない。

蛭が絡むと暴走しがちなところは以前から知っていたが、普段は大人しくて要領も良く、物事を論理的に考えられる子だから、自分の気持ちに正直な蛭や要と比べると感情的になることが少なかったのだ。

だが今、雛子の言葉を語る愛子の姿に、千歳は雛子の力の、思いの本質を垣間見ることができた。

：

手に持つ洋服を最適化した順番通りに蛭に渡し、試着室から出てきた蛭の姿を一目見てまた服を渡す。

しかし一目見ただけのはずなのに蛭の姿は全て、雛子の脳にピントがボヤけることなく正確に記憶されていく。

花柄のチュニックとショートレギンス、フリルのついたブラウスにホットパンツ、ノースリーブのワンピース・・・etc。

可愛い！可愛い！！可愛い!!!

雛子の思考の9割ほどが既に可愛いと言う言葉で埋め尽くされているが、残りの1割で何とか理性を保ち蛍の洋服をとつかえてはひつかえ・・そんな機械的な作業を延々と繰り返す中でも、目の前の愛しき天使が七変化を繰り返り広げることでは何とか心を失わずにいた。

(うふふ・・まだまだ、このお店だけでもまだ半分ほど残っているし、これからもつと沢山のお店を見て回るものね。)

想像を遥かに上回る蛍の姿を前に何度も意識を持つていかれかけたが、まだ最初の一軒目だ。

至福のときはまだまだ続くと言うのに、ここで気を失うわけにはいかない。

何せ次のお店はここよりもさらに品の数が多くなるのだから、今よりもさらに多彩な蛍の姿を拝むことが出来るのだ。

このペースだと、この店の品を全て見終わるころにはお昼を迎えるだろうが問題ない。

『今日一日』かければ全てのお店を見て回れる算段は十分についているのだ。

「蛍ちゃん！次は・・・あれ？」

だがふと、蛍の様子を見ると、彼女は目が点のまま肩を落としていた。

「蛍ちゃん、疲れた？」

「うっうん……まだまだいじょうぶ……。」

声からして明らかに疲れている。

そんな蛍の様子をみた雛子は、先ほどまでの高揚感はどこへやら、急速に冷静さを取り戻していく。

頭の中を埋め尽くしていた可愛い文字もすっかりなくなっていた。

こんな時でも気を遣ってくれる彼女には申し訳ないが、蛍がウソをつくのが苦手であったかと思ってしまう。

もしも見抜けなかったら、疲れ切った彼女を相手に自分の趣味を押し付けていたところだった。

「蛍ちゃん、少し休憩にしましょうか？」

こんな状況で何をとも思うが、蛍にもこの時間を楽しんで欲しいと思っている。

彼女に楽しむ余力が残っていないのなら、続ける意味なんてないのだ。

ここへ来たのは自分のため、そして蛍のためなのだから。

「え？ いったいいよ、まだつかれてないから……。」

「蛍、そんなこと言っていると、雛子本気で終わるまで蛍のこと離さないよ。」

するとこれまで自分たちの様子を見ていたレミンが間に入ってきた。

否定できない言葉だけに心にグサリと刺さる。

「そんな様子で言つても説得力ないでしょ？ほら、着替えるわよ。」

そしてサクラが半ば強引に蛍の手を引き試着室まで連れて行つた。

こんな時、蛍に対して厳しくできるサクラの存在は有難い。さすが蛍のお姉さん役である。

雛子は蛍が試着室から出るまでの間に、手に持つ洋服を全て元の位置に戻していくのだった。

夢ノ宮ドリームプラザ一階の中央は休息用の大広場となつており、周辺にはスイーツを始めとする屋台や、日替わりで特産品の販売店などがある。

雛子は要たちと合流し、蛍をベンチに腰掛けさせて休ませ、真と愛子はそれぞれ周辺にある屋台へと向かつた。

「ごめんね蛍ちゃん、ちよつと調子に乗りすぎちゃつて……。」

彼女の可愛さに有頂天になるあまりちよつと調子に乗つてしまったのは認めるが、蛍の様子を伺うのを疎かにしていたつもりはない。

確かに少しばかり疲れている予兆は見られたが、蛍は特に嫌がるような様子も見せず、積極的に洋服を手を取つており、着替えのペースだつて落ちていなかつた。

だが突然どつと疲れが訪れたようだった。1か0しか取れない彼女のことだから急にスイッチが切れてしまったのだろう。

だがそんな彼女の性質を知っていながら考慮できていなかったのだから、結果として自分の配慮不足が原因である。

「ううん、わたしの方こそごめんなさい。

せつかくひなこちゃんが、おようふくをえらんでくれてたから、わたしも、できるかぎりがんばろつておもつただけど……。」

蛍の言葉を聞いた要が、少し呆れた様子で肩を落とす。

「全く、雛子のテンションについていこうなんて無茶するからだよ。」

何が無茶な、と少し眉を顰めながらも要の言葉で雛子は蛍の思いを知る。

彼女なりに自分の思いに応えてくれようとしてくれていたのだ。

「えへへ、ひなこちゃん、ありがとうね。」

わたしのために、こんなにもがんばつて、おようふくさがしてくれて。

わたし、とつてもうれしかったんだよ?」

「蛍ちゃん……。」

その言葉が建前ではないということくらい、蛍の表情を見ればすぐにわかった。

元を辿れば自分の趣味に付き合ってもらい、疲れ果てるまで振り回してしまったと言

うのに、彼女は自分との時間を楽しんでくれていた。

彼女にも楽しんでほしいと願っていただけに、そんな蛍の言葉に雛子は少しだけ救われる。

「あつでも、着るおようふくがおおすぎるのは・・・ちよつとだけ、キツかったかな？」
「うぐつ・・・。」

が、いくら楽しいひと時だったとしても、さすがに彼女にはオーバーワークだったよ
うだ。

キツかった、と蛍が直接的な表現をしてくるのだから雛子は殊更落ち込むが、同時に
嬉しくも思う。

蛍の思いには精いっぱい配慮をしているつもりだが、かといって彼女の心の全てが
読めるわけではない。

本当はどう思っているのかは、言葉にしてくれなければつきりとはわからないの
で、嫌なことを嫌だと言ってもらえるのは、自分の欠点を受け入れるきつかけにもなる。
良いところも悪いところも全て受け入れてこそその友達なのだ。このあたりは要の受
け売りだが。

結果として、自分の趣味を優先するあまり蛍に負担をかけてしまったことを雛子は猛
省する。

となれば残りの店を見て回るのは控えるべきだ。

自分の気持ちに正直に従えば当然、これから先の店も全て制覇したいところだが、それが蛍にとって苦になることも望んではない。

「わかったわ蛍ちゃん。それじゃあ、お昼を食べたらあと一つだけ試着してもらってもいいかな？お昼の間に、蛍ちゃんに一番似合うコーディネートを必ず考えて見せるから。」

疲れた彼女にあと一回付き合ってもらうのも憚れるが、これで最後だ。

彼女の着る夏服を何としてでも見つけてみせると雛子が意気込む。

「えっと、それなんだけどね。わたし、さつきのおみせで気になるおようふくを見つけたの。」

「え？」

蛍からのそんな申し出に雛子は驚く。

彼女なりに自分が選んで着せた服を吟味してくれていたようだ。

つまり自分の選んだ服を彼女は気に入ってくれたということになるので、それはそれで本望である。

「わかったわ。じゃあ、少し休憩したらまたお店に……。」

そう言いかけたその時、突然全身に悪寒が走った。

「闇の波動!？」

隣にいるレミンが声をあげると同時に、モール内の人たちが姿を消していく。

ダークネスが現れたのだ。

「こんなときに……。」

せつかく螢自身が選んだ服をこの目で見てみたいというのに、こんなタイミングで現れるなんてなんて空気の読めない連中だ。

雛子は怒りを滲ませながら希望の光を生み出す。

「みんな、行く……。」

「みんな!行くわよ!」

「へ?」

要の言葉を割って入り、雛子はプリズムパクトを掲げる。

「プリキュア!ホープ・イン・マイハート!世界を包む、水晶の輝き!キュアプリズム!」

そして真っ先に変身を遂げ、そのまま一目散にダークネスの元へと飛んで行った。

「……雛子に遅れないでいくよ!」

「えっええ。」

「うっうん。」

「「プリキュア!ホープ・イン・マイハート!」」

そして雛子に続き、3人も変身して遅れないように飛び立つのだった。

：

千歳が闇の波動の気配を・・・正確には先頭を飛ぶキュアプリズムの後を追うと、そこにはダンタリアの姿があった。

隣にはソルダークもおり、既に誰かを闇の牢獄に閉じ込めた後のようだ。

「待っていたよ、プリ・・・。」

「ダークネス！性懲りもなくまた現れたわね！」

「んっ？」

要に続き、ダンタリアの言葉をも割って入り、キュアプリズムが啖呵を切る。

その普段とはかけ離れた彼女の姿に、ダンタリアさえも困惑する。

「今日ばかりは許さないんだから！行きなさいキュアスパーク！」

「へっ？ウチ？」

突然の啖呵からの指名にキュアスパークは混乱する。

その表情から『お前が行くんやないんかい!』と言うツツコミが見て取れた。

「背中が私がいちばんと守るからさっさとあんなやつとつちめちゃって!!」

「あつ、はい。」

理不尽なのか頼もしいのかわけのわからない言葉にただただ頷くしかなかったキュアスパークは、言われるがままにソルダークへと突撃する。

千歳も隣で呆然とするキュアシャインと顔を合わせて逡巡した後、ひとまずソルダークを浄化するために一拍遅れてソルダークへと飛び交った。

「まあいいさ、僕のやるべきことは変わらない。ソルダークー!」

ダンタリアもこれ以上のことは気にかけて、ソルダークに呼びかける。

するとソルダークの身体から黒い布のようなものが複数、一斉に飛び出して来た。

「なっ?!」

先頭を切るキュアスパークは驚きながらも空中で身体を捻り回避する。

千歳たちもキュアスパークにならってソルダークの攻撃を回避したが、素通りされた黒い布は真つ直ぐに地面に突き刺さる。

直後、ダンタリアが空を蹴り、手に黒い球体を浮かべてキュアシャインの元へと飛び掛かった。

「キュアシャイン!!」

千歳は慌ててキュアシャインの元へと振り向くが、直後目の前を黒い影が横切る。

ソルダークが身体に繋がれた黒い布を地面から引き抜き、闇雲に振り回し始めたのだ。

千歳は寸でのところでそれを回避するも、このままではキュアシャインへの救援が間に合わない。

そう思ったその時、ダンタリアとキュアシャインの間に水晶の盾が現れる。

「なにっ?」

今度はダンタリアが虚を突かれ、その隙についてキュアプリズムが駆け付け蹴りを繰り出す。

ダンタリアはそれをガードしながら、蹴られた勢いのまま後退して態勢を立て直す。

「僕の奇襲を読んでいたとはね。」

「前にサブナックがキュアシャインを狙ったときから、この状況は警戒していたわ。」

キュアシャインには指一本も触れさせないから。」

キュアプリズムは、キュアシャインの背後から来る攻撃を盾で防ぐだけでなく、ソルダークへ向かうキュアスパークに飛び交う攻撃も全て防いでおり、懐まで潜りこめたキュアスパークが、雷を纏った一撃でソルダークの巨体を地に付かせた。

先ほどまで怒っていたように見えたがキュアプリズムは極めて冷静だ。

いつも以上の視野の広さで戦場に散る攻撃をくまなく防御している。そんなキュアプリズムの様子に千歳は関心する。

「邪魔した挙句キュアシャインにまで手を出して、ほんとうに許さないんだから!!」
・・・と思いきや、キュアプリズムは自身の両手足にバリアを纏って果敢にダンタリアに殴り込みに行った。

『さっさとこの戦いを終わらせて蛍の夏服を見てみたい』という気持ちがありありと見て取れる。

怒りのあまり周囲が見えなくなるどころか、一周回って冷静さを研ぎ澄ませているあたりが何とも雛子らしいが、彼女が一人でダンタリアを抑えてくれている今が好機だ。

千歳はキュアスパークと挟撃するべく、ソルダークへと飛び掛かる。

地から起き上がったばかりのソルダークの顔面を目掛けて火球を投げ込み、続けてキュアスパークが腹部へ拳を叩きつける。

「ソルダーク!」

だがダンタリアの呼びかけと共に、ソルダークは倒れながらも複数の布を操作し、一斉にキュアシャインへと向かわせた。

そうまでしてキュアシャインを優先的に狙いたいようだが、キュアスパークも千歳も動じない。

なぜなら、キュアシャインがその場を一步も動かなかったからだ。

それはキュアプリズムへの信頼の表れである。

「やらせないから。」

直後キュアプリズムの声とともに、キュアシャインの周囲に複数の盾が同時に展開され、ソルダークの放った布を全て弾き飛ばした。

そしてキュアシャインは飛び出し、弾かれた布を全て手に集めてそのまま背負い投げの要領で力の限り引つ張り上げる。

「えーい!!」

引つ張られた布はそのままソルダークの巨体を持ち上げ、ダンタリアのいる方向へと投げ飛ばした。

ダンタリアはその場を離れ、ソルダークは再び地に叩き付けられる。

「光よ、降りろー！プリズムフルートー！」

そのままキュアプリズムが、倒れるソルダークを浄化しようとしたその時、

「今日は随分とお怒りのようだね。よほどお楽しみを邪魔されたのが気に入らなかったのかな？」

「何ですって?」

突然ダンタリアがキュアプリズムに話しかけてきた。

:

リズムフルートを手に持ったまま、雛子はダンタリアの言葉に耳を傾ける。

行動隊長の中でも口数の多い彼だが、これまで戦いを中断してまで話しかけてくることはなかった。何かの企みがあると警戒し、キュアスパークとキュアブレイズも迂闊な攻撃をせずに静止する。

「こんな猪突猛進な戦い方、君らしくないと思っただけだよ。」

ダンタリアの口調、表情、仕草の全てが人の神経を逆なでするような小バカにする態度を表している。

自分を煽っていることは火を見るよりも明らかだが、雛子は敢えてその手に乗る。

「ええそうよ。せつかく友達と一緒に楽しいひと時を過ごしていたのに、あなたが水を差したせいで台無しよ。」

怒りを滲ませた雛子の答えをダンタリアは鼻で笑った。

「ふっ、そういうことか。」

「わかったのならさつきとここから出ていきなさい。これ以上あなたなんか構って……。」

「その時間、本当に友達にとっても有意義なものだったのかい？」

「えっ？」

割って入ったダンタリアの言葉に、雛子は困惑する仕草を見せる。

「楽しいひと時、と君は言っていたが、楽しんでいたのは君だけで、お友達はつまらないと思っていたんじゃないのかい？」

「何を言ってる……。」

「そうだね……例えばキュアシャイン、君は彼女と過ごす時間が楽しかったかい？」

「えっ……?！」

雛子がキュアシャインの方を振り向くと、彼女は不安を滲ませた表情を浮かべていた。

それを見たダンタリアは狙い通りと言わんばかりに口元をニヤリと歪ませる。

「本当は一緒になんていたくなかったんじゃないかい？」

自分はいくらも楽しめないのに、無理やり付き合わされていたんじゃないかい？」

「やめなさい……。」

雛子は声を震わせてダンタリアに呼びかけるが、彼は言葉を無視してキュアシャインに言葉を投げていく。

見る見るうちにキュアシャインの表情には不安に満ちていき、それを一瞥したダンタリアは視線を自分の方に戻した。

「ほら、彼女の表情を見てみなよ？」

自分が楽しいと思う時間を、他の誰もが楽しいと思つてゐるとは限らない。

君の言う楽しいひと時なんて、所詮自分だけが得をする自己満足の時間でしかないんだよ。」

悪徳な笑みを浮かべながらこちらを見下ろすダンタリアは、すっかり勝つた氣になつてゐるようだ。だがここまで『乗せてやった』雛子はダンタリアの目論見を見抜いて不敵に笑う。

不安を煽り、自分たちの戦意を喪失させる。それがダンタリアの狙いだ。そしてこの中ではキュアシャインが一番感情を表に出しやすい。

彼もそれを見抜いているから、キュアシャインをターゲットにしたのだ。

それにダンタリアの言葉は、先ほどまでの自分たちの状況を捉えているかのようである。その実まるで要領を掴んでいない。

自分たちの行動を監視して把握していたのであれば、洋服を買いに来たこと、試着し

ていたことをもつと具体的に言い表すことが出来ただろうし、不安を煽るならばその方が効果的のはずだ。

それなのに彼の言葉は不安を抱える人ならば誰にも合致するような、言わばテンプレートの羅列でしかなかった。

それさえわかれば、こんなハツタリに動じることなんてない。

「バカにしないでよね。」

「なに？」

自分の言葉がよっぽど意外だったのか、今度はダンタリアが眉を潜める。

「楽しかったに決まってるじゃない。キュアシャインだって、ずっと楽しんでくれたいたのだから。」

キュアシャインが彼の言葉に不安を感じてしまったのは、今回のことを楽しいと思ってくれた一方で『少しキツかった』と一沫の不満を抱いていたからだ。

それがダンタリアの言葉によって揺さぶられ、言葉を重ねることに不安が膨張していった。

でも友達と一緒に過ごす時間だって、1から10まで全てが楽しいひと時であることは滅多にない。大なり小なり不満を抱くのは当たり前のことだ。

自分だって要への不満点なんかいくらだって挙げる事が出来るが、それでも一緒に

いたいと思うのは、そんな不満を吹き飛ばすくらい楽しい時間の方が多からだ。

キュアシャインが今日を楽しんでいると思ってくれた気持ちだが、今の不安な気持ちに負けないように、彼女の心を和らいであげよう。

そう思いながら雛子はキュアシャインの方へと振り向き、優しく彼女に微笑みかける。

「いい？キュアシャインはね。隠し事が苦手なの！

思っていること、考えていることがすぐに顔に出るんだから!!」

「へ？」

だが突然のカミングアウトにキュアシャインは勿論、キュアスパークとキュアブレイズも困惑の表情を浮かべる。

「でも、だからこそわかるの。彼女はとても楽しんでくれていた。だから私も嬉しかった。

私が楽しいと思う時間を、彼女と共有することが出来たから。

そりゃあ、私が少し調子に乗っちゃって、キュアシャインに少ししんどい思いをさせてしまったけれど、でもね、最後には笑顔でこう言ってくれたのよ？

きょうはありがとうって。」

「キュアプリズム・・・ふふっ。」

自分の言葉がおかしかったのか、キュアシャインが笑みをこぼす。

その表情にはもう先ほどまでの不安の色はなくなっていた。

そんな彼女の様子に雛子はホッと胸を撫で下ろす。

「その言葉が、表情がウソではないとなぜわかる？ 君は彼女の何を知っていると言うんだい？」

尚もダンタリアは不安を煽る言葉を続ける。

だがその程度ではもう、キュアシャインだつて揺るがない。

それにダンタリアの言葉は、雛子にとっては『予想通り』の言葉だ。

アニメに登場する悪役が、主人公たちの絆を引き裂くための決まり文句。

あまりにも使い古された陳腐な定型文だ。

そして言われた側の主人公は、自分たちの絆を強調して絶対に分かる、と断言するの
がお約束だが、残念ながら自分は捻くれ者だ。そんな気持ちの良い主人公役は要で間に
合っている。

そして捻くれ者の自分はお約束を返してやるほど優しくくない。

「教えてあげてもいいけど、あなた程度じゃ一生理解できないでしょうね？」

雛子は不敵に微笑みダンタリアを嘲笑する

するとダンタリアは眉を潜め、こちらを睨み付けてきた。

思い通りに動いてくれなかったのがよほどつまらなかったのか。

と思った次の瞬間、倒れるソルダークの身体から再び黒い布が飛び出した。

キュアスパークとキュアブレイズは身構えるが、飛び出した黒い布はまるで見えない壁にぶつかつたかのように突如として地に落ちていく。

「ちっ。」

ダンタリアが舌打ちしながらこちらを再び睨み付ける。

彼が話しかけて来た時から、いつ実力行使に移られても迎撃できるように、目に見えないバリアをソルダークの周りに展開していた。

力の気配を悟られないように、ゆっくりと時間をかけて少しずつ展開していた。

だから時間稼ぎの意味も兼ねて、彼の会話に『付き合つてあげた』のだ。

キュアプリズムはバリアを爆発させ、ダンタリアの目を眩ましながらソルダークへと跳躍する。

「させるか。」

ダンタリアが止めにかかろうとするが、キュアシャインがダンタリアに飛び掛かり、動きを封じる。

「キュアプリズム！ いまだよ！」

「プリキュア！ プリズムミック・リフレクション！」

「ガアアアアアアッ!!!」

そして水晶に閉じ込められたソルダークは、乱反射する光に包まれ、断末魔とともに浄化された。

「キュアプリズム、君のことを少し悔っていたよ。」

そしてダンタリアも後を追うように姿を消すのだった。

：

ダンタリアを退けた蛭たちは、急ぎ元にした場所へと戻っていく。

幸いにも真と愛子はまだ屋台に並んでおり、2人の合流を待つてからもう一度お店へと向かった。

そして蛭は、自分が気に入った洋服を試着し、試着室から出てみんなの前で見せた。

「どっとうかな・・・?」

白いTシャツの上に半袖のピンクのパーカー、そして赤のフレアースカート。

1つ1つは雛子が選んでくれたとは言え自分好みのものをチョイスしたので、彼女の

センスには及ばないものになってしまったが、自分の思いつく限りの精いっぱいのおしゃれだ。

「ふふつ、いいじゃない。蛍ちゃんらしくてとても似合ってるわ。」

雛子は優しく微笑みながら、自分のコーディネートを褒めてくれた。

自分が選んだ服を認めてもらえたことが嬉しくて、蛍は試着室から飛び出す。

「ああこら、蛍。会計はまだなのだから少し落ち着きなさい。」

「あつ、そだった。」

サクラに注意され、蛍は浮かれた気持ちから戻り、改めてみんなの前で服を翻して見せた。

そんな自分の様子を見て、みんな頷き笑ってくれた。

みんなで一緒に買い物をし、洋服を一緒に決める。

また一つ願いを叶えることができた蛍は、改めて雛子にお礼を言う。

「ひなこちゃん、今日はほんとうにありがとう。」

こんなにステキなおようふくをみつけることができたのも、ぜんぶひなこちゃんのおかげだよ。」

「ううん、私こそありがとう、今日はとても楽しかったわ。」

先ほどまで自分と一緒にいたときの有頂天さはどこへやら、雛子は少しはにかみなが

らお礼を返してくれた。

「あのね、それから、よかったら、こんどは冬のおようふくをかうときも、いつしよにさがしてくれないかな？」

「え？」

雛子と一緒にまた素敵な洋服を見つけることが出来る。そう心から思ったからこそ願いだ。

「もつもちろんよ！私で良ければ春夏秋冬、どんな時でも力になるわ!!」

すると今度は先ほどまでの奥ゆかしさはどこへやら、上機嫌なテンションでうんうんと頷いてきた。

「蛭は少し戸惑いながらも、彼女が了承してくれたことを喜ぶ。

「ありがとう！」

あつでも、きょうみたいにたくさんのおようふくをきるのは、ちよつとつかれるから……。」

今度は少しパターンを絞り込んで欲しいと蛭がお願いしようと思ったその時、

「わかったわ！次は50パターンくらいまで候補を絞り込んでおくわ!!」

「50!!?」

思いはしっかり通じたのだが、肝心の基準が大きくズレていた。

しかもそれで絞り込んだ数字となれば、一体今日はどれだけのパターンを着せるつもりだったのだろうか、蛍は今になって身震いする。

「せつせめて10パターンくらいまでにして!!」

大きな声で懇願するも、このまま昇天してしまいそうなくらい緩み切った表情を浮かべる雛子の耳に果たして届いているのか届いていないのか。

また遠くない内に雛子に振り回されることになるのだろうかと思いつつも、不思議と蛍はその日のことを待ち遠しく思うのだった。

∴

次回予告

「やってきました運動会!」

「嬉しそうですね、要。」

「そりゃあ勿論! クラス一丸で団結して身体を動かさし、汗と涙と友情が舞い散る年一度のビッグイベント!」

「友情を散らせてどうするのよ。」

「細かいツツコミは言いっこなし。ね？ 蛍も楽しみでしょ？」

「うう〜。」

「ってどうしたの蛍!?! 学校の行事は楽しみだって言ってたやん!」

「わたし運動は苦手なんだってばあ!」

「あ・・・。」

次回! ホープライトプリキュア第17話!

「クラス団結! 夢ノ宮中学校大運動会!」

希望を胸に、がんばれ! わたし!

第17話

第17話・プロローグ

週明けの朝、要は隣に並ぶ雛子が呆れるほどの上機嫌で登校していた。教室に入ると、自分の後ろの席には既に蛍の姿がある。

「蛍、おはよー。」

「おはよー、かなめちゃん……。。」

少し元気がないように見えたが、要は特に気にせず自分の席に着く。すると真と愛子がこちらに話しかけに来た。

「要、雛子、おはよう。」

「おう。」

「どうしたの要？随分と機嫌がいいじゃない？」

「家を出てからずっとこんな感じよ。」

怪訝そうにこちらを伺う愛子にため息をつく雛子。

そして真が何かを悟ったように手のひらを叩く。

「あつわかった。今週末に運動会があるからだろ!？」

「へへん、正解！」

犯人はお前だ！と言いたげな勢いで指をピシッと刺す真に、要は親指を立てて太鼓判を押す。

彼女の言う通り今週末の土曜日、この夢ノ宮中学校で運動会が開催されるのだ。

最近では夏の暑い時期に開催すると熱中症の危険性が高まるとかで、開催時期を夏から秋に変更していく学校も多々あるようだが、ここ夢ノ宮中学校では昔からの伝統を引き継ぎ夏に開催されている。

時期的にもまだ夏の暑さが本格化する前なので、去年の運動会も特に気にならなかった。

最も自分は夏だろうが冬だろうが外に出て身体を動かしたい他称・スポーツバカなわけだが、ともかく運動が大好きな要にとって、一日中体育の授業をすと言っても過言ではない運動会は、休日を返上するだけの価値があるのだ。

「それに、今日から運動会の予行練習やる？」

それも楽しみで仕方なくてね。」

運動会までの一週間は、体育の時間を使い予行練習を行うことになっている。

さらにこの間は、グラウンドや競技に使う道具の整備点検のために全校の運動部が一律休止となり、代わりに運動部に所属する生徒たちはその準備を手伝うことになってい

る。

一週間バスケットに触れないのは残念だが、試験前の休止期間と比べれば遥かに天国だし、待つのが祭なんてことわざがあるように、この準備期間も要にとつては楽しいひと時なのだ。

「な？ 蛍も運動会楽しみやろ？」

そう言いながら要は後ろに座る蛍の方へ振り向くと・・・

「ううう・・・。」

要の言葉を聞いた途端、蛍は机に突っ伏してしまった。

声から雰囲気から何からまで非常に億劫だ、と言う思いが伝わってくる。

「あつあれ？ なんで!？」

蛍、クラスのみんで学校行事に取り組むの楽しみやうて言うてたやん!？」

友達と一緒に人並みの学校生活を謳歌したいと言うのが夢だと語る蛍のこと。

クラス全員が団結して一つの行事に取り組むのは彼女にとって楽しみなはずだと思っただけに、要だけでなく、雛子と真、愛子も驚いた様子を見せる。

同時に要は自分がこれほどに楽しみにしていたことを真つ向から態度で否定されてしまい、少しショックを受けるが、一方で何か大事なことを忘れているような、という引っかかりを覚える。

「わたし運動はにがてなんだってばあ!!」

「「「あ・・・。」」」

だが、蛍から発せされた嘆きを聞いて4人は一斉に納得する。

同時に要は、以前蛍が友達と叶えたかった夢想の数々をフルバーストで語ったとき、『運動会』だけはスルーしていたことを思い出すのだった。

第17話・Aパート

クラス団結！夢ノ宮中学校大運動会！

天気予報によれば今日は一日晴天。

その通りに見渡す限り雲一つのない青空の下で、雛子たちのクラスは運動会の予行練習のためにグラウンドに整列していた。

今行われているのは50m走の予行練習だ。

横6列で並びながら、空砲を合図にクラウチングスタートの練習を行っている。

ちなみに運動会の予行練習中は、各クラスの担任が授業を受け持つことになっているので、長谷川先生が空砲を手に合図を送っていた

雛子と愛子は同じ列に並び、自分たちの番を待ち続けているのだが、額には既に汗が浮かんでいる。

まだ春の余韻を残す季節とはいえ、空からは容赦なく陽の光が降り注いでおり、インドア派の雛子にとっては立っているだけで嫌になる天気である。

「さすがにちよつと暑いわね〜。」

隣に並ぶ愛子が小声でぼやく。

普段の体育の時間ならまだ身体を動かしている分、気が紛れるが、今はどの競技の練習でも立って並んでいるだけの時間の方が多い。

一点に留まるだけで他に何もしないので、身に浴びる太陽の光と言うのを普段以上に意識してしまうものだ。

「本当、どうせなら本番みたいに応援席のキャンプで待機だといいいのに。」

愛子に答えるように雛子がぼやく。

当日は競技に参加するときと開幕閉幕の挨拶以外ときは、三角テントの下で応援することになっているので、四六時中太陽光の真つただ中に晒されることはない。

そのこともあつてか、運動会の時期は本番よりも練習の方がキツイと言う生徒も多いのだ。

「あつ見て雛子、蛍ちゃんたちの番だよ。」

雛子と愛子は、何列か前にいる蛍の列に目を配る。

身長の高い雛子にはそのままスタート位置の様子が見え、愛子は列の隙間から顔を覗かせる。

蛍の列には要と真も並んでおり、要は右手の拳を左手のひらで叩き、真は格闘家の構えのように両手を腰の位置まで引いていた。

なんでそんなに気合を入れているのか、と雛子と愛子は揃ってため息を吐く。

と言うのも夢ノ宮中学校の予行練習は、一切の実演を行わないことになっているのだ。

曰く、予行練習の内に勝敗が分かっては何も面白くないからとのこと。

余談だがこの言葉に、我らが2年1組を代表するスポーツバカども、要、真、そして健太郎の3人は首を大きく縦に振って頷き、雛子は今みたいにため息を吐いた記憶があるが、要するにこの50m走の練習も、空砲の合図と同時に3歩走るだけで終わりなのだ。

確かにこの世には練習は本番のように、本番は練習のようにと言う言葉があるので、どれだけ些細な練習であろうと本番と同じ気持ちで取り組むことは大事かもしれないが、あんな如何にも『誰が相手だろうと関係ない！まとめかかってきやがれ！』と言わんばかりの気合の入れ方をする必要までは流石にあるとは思えず、ついでに言えば50m走で見せる気合の入れ方でもない。

「要も真も相変わらずなんだから。」

「あははっ、そうだね。」

雛子の言葉に愛子も同意する。

毎年この時期の要と真は、遠足前の小学生だつてあそこまではしゃがないだろうと思

うほどにテンションが高くなる。

何よりも体を動かすことが好きな2人だから気持ちが高ぶるのは分かるが、特にスポーツが生命源と言っても過言ではないスポーツバカの要は、日頃の暑苦しいノリがさらに5割ほど増しているので、隣にいただけで気力を吸い取られる思いである。

「位置について。」

と、そんなことを考えている内に、要たちの列の予行練習が始まった。

雛子は要から視線を反らし、蛍の方へと目を向ける。

例年通りテンションの上がっている悪友はさておき、運動は苦手と語る蛍の方は心配だ。

自己評価が極端に低い彼女のことだから、運動は苦手だと言いながらもなんだかんで人並みにはこなせるだろうと思っていたが、こればかりは彼女の評価通りだった。

日頃からある種の労働といえる家事を毎日こなしているので、体力が極端に劣っているとすることは無いと思うのだが、あの緊張しやすくアガリ症な性格のためか力が空回りしやすく、130cmと言う小柄な体格から来るハンデも合わさって体育の授業もまともにこなせたことがない。

学校内では可愛い笑顔でどんな授業も楽しんでいた蛍でも、体育の授業だけはどこか億劫な雰囲気を見せているくらいだ。

そんな彼女からすれば、休日を返上して一日中体育の授業を行うと言っても過言ではない運動会は紛れもなく地獄なのだろう。

「蛭ちゃん大丈夫かな？」

愛子も不安そうに尋ねてくる。

案の定蛭は、緊張で身体をガチガチに固めていた。

クラウチングスタートなのに全然腰を落とせておらず、あれでは『よーい』の姿勢とほとんど変わっていない。

かと言って無理やり腰を落としたら間違ひなく倒れるだろう。それほどに体のバランス取りが悪いことが一見にしてわかる姿勢である。

「よーい。」

よーいの合図がかかるが、案の定腰をほとんど浮かせていない。

パアーン!!

「ひゃあああつ!!」

そして直後、空砲の発砲音が鳴り響くと同時に蛭は驚きのあまりその場でしりもちをついてしまった。可愛い。

ついでにその姿が前に立つ生徒の影に隠れてしまったことに内心舌打ちをする。

「蛍、大丈夫?」

隣に並んでいた要が蛍に手を差し伸べる。おい、ちよつとそこを代われ。

「いたた・・・ありがとかなめちゃん。」

「あはは、びつくりするよな、空砲の音。」

「うん、あのおと、びつくりするからキライだよ・・・。」

空砲の音に腰を抜かす蛍をバカにすることもなく、要は蛍の手を引いて立ち上がらせる。

「それじゃあ、一之瀬たちの列はもう一回やり直すぞ。」

一之瀬、今度は大丈夫か?」

「はっはい!」

「蛍の叫びに驚いて全員がスタートを上手く切れなかったのもう一回やり直すことに。」

「では、位置について、よーい。」

パーン!!

今度は空砲の音に驚くことなく、全員がほぼ同時にスタートを切り、「あいたつ！」

蛍だけが勢い余って前のめりに倒れ込んだ。可愛い。

「蛍、大丈夫？」

すると3歩走った要が身を翻して蛍に再び手を差し伸べる。羨ましい。

「いたた・・・ありがとかなめちゃん。」

「焦らない焦らない。これは練習なんやし、もつと気楽にしてこ？」

「うっうん・・・。」

「一之瀬、もう1回やり直すか？」

「はっはい！」

先生の言葉に蛍は頷く。

とは言えこれ以上次の生徒たちを待たせるわけにも行かず、蛍と同じ列に並んでいた生徒はグラウンドの中央に並んで待機し、蛍は次の列の人たちと並び、外線で行うことになった。

「それでは、位置について、よーい。」

そして迎えたTAKE3

パアーン!!

空砲の音とともに蛍が地を蹴り走り出した。

2度の失敗を乗り越えついに走ることに成功した蛍の姿に、クラスメートから思わず「おおっ!」と感嘆の声漏れる。

が・・・

「あれ? 蛍ちゃん! 3歩走ったらおしまいだよ! おしまい!!」

だがグラウンドの中央で待機していた真が、蛍の様子がおかしいことに気付いて注意する。

一緒にスタートを切った他の生徒たちが全員3歩で止まったのに、蛍はそのままわき目も振らず走り出したのだ。

しかも走らなければならないと言う思考で頭がいっぱいのせいか、真の言葉が耳に届いていないようだ。

すると真の隣に並んでいた真が、蛍の元へと全速力で駆け出した。

学年1位の駿足を武器にあつという間に蛍の正面へと回り込み、そのまま彼女を抱き止める。何て役得な。

「わっふっ。」

蛭からすれば、突然目の前に要が現れそのままぶつかつたようなものだろう。驚いて声をあげるも、要が衝撃を全て受け止めたので特に痛がるような様子はなかつた。

「蛭、練習なんだからホントに走らんくてもいいんだよ？」

「あ……。」

そして要の言葉に予行練習であることを思い出した蛭は、顔を真っ赤にする。

その後、要と手を繋ぎながらグラウンドの中央に向かう蛭の姿を見て、雛子は羨ましいところを全て要に独り占めにされたことを密かに悔しがるのだった。

∴

昼休み。

いつもの食堂を訪れた要たちは、千歳と未来、優花の含めた6人で昼食を取っていた。「なるほど、それで今日はこんなに元気がないのね。」

出会いがしらさつそく蛭の様子がおかしいことに気付いた千歳に、要は今日の体育で

起きた出来事を全て話す。

ちなみに蛭が今顔を俯かせているのは、落ち込み半分と千歳に話を聞かされた恥ずかしさ半分でだ。

「やゝ、蛭ちゃんにも苦手なものがあつたとはね〜。」

未来が意外そうにぼやく。

要も普段の体育の様子を知らなければそう思つただろう。

それだけ蛭は一通りのことを器用にこなせる子なのだ。

「去年の運動会とか大丈夫だったの？」

「わたし、きよねんはかせでおやすみしてたから……。」

興味本位で聞いてきた優花の質問に、蛭が元氣のない声で答える。

と言うことは今回の運動会が、蛭にとつて初めて中学校で行われる運動会と言うことになる。

「ほら蛭、いつまでも落ち込んでいないで元氣出しなさい。」

「ちとせちゃん……。」

「足を引つ張るかもしれないって思う気持ちはわかるけど、落ち込んだって何も変わらないわ。」

自分のベストを尽くして頑張る。それしかないのだから、もつと前向きに行きましょう

「？」

「……うん、そうだね。」

千歳が厳しくも優しい声色で諭し、蛍はゆっくりと顔をあげる。すると千歳は自分のお弁当から卵焼きを取り蛍の口元へと運んだ。

「はい、あーん。」

「あつ、あーん。」

やや恥ずかしがりながらも蛍は千歳に卵焼きをあーんしてもらい、無事元氣を取り戻したようだ。

「そういえば、千歳もこの学校では初めての運動会だね？」

「ええ、そうね。」

蛍が元氣を取り戻したところで、要は千歳に話を振るう。

千歳がこの学校に転校してきたのは昨年度の末だし、何より彼女はフェアリーキングダム出身だ。

あちらの世界の学校については何も知らないが、彼女にとっては、運動会そのものが初めての可能性だってある。だから要は一つ氣になることがあったのだ。

「どう？この学校の運動会は？」

要にとっての運動会とは何も当日だけに当てはまらない。

準備期間の中でクラス全員が勝利のために自然と一致団結していく。

そんなムードも大好きで、それは他のどのクラスだって変わらないはずだ。

最近千歳が、何かとこちらに近い思考を持つのだなと薄々感じてきたので、千歳ならこの空気を分かち合えると思っただけだ。

「ええと……。」

千歳はどこか渋い表情を浮かべてなぜか未来と優花の様子を伺った。

その予想外の仕草に要が首を傾げていると、未来がため息一つ吐いた後に理由を話す。

「うちのクラス、千歳をめぐってちょっとゴタゴタがあつてね。」

「え？なんで？」

理由がわからず困惑する要に優花が言葉を綴る。

「どの個人種目に出るかで、千歳の取り合いが発生しちゃったの。」

「ああ……。」

そして語られた理由に要と雛子は揃って頷く。

生徒1人が運動会に参加できる種目の数は、複数の全体種目と、クラスの代表者が出場する個人種目が1つとなっている。

そして個人種目を決める場合、クラスからその競技をこなすのに最も必要な能力に長

けている人が推薦されることが多い。

例えば要の場合、足の速さを買われて女子400mリレーに推薦された。

ちなみに去年も同様である・・・と言うか最も優れたものが推薦されると言う都合上、大体の生徒が毎年同じ個人種目に出場しており、毎年順位を競い合うライバルが自然と生まれることも多いほどだ。

積もるところ、個人種目の参加者を決める場合、誰が一番適正かをクラスで話し合つて決めることになるのだが、千歳は文武両道のハイスペックオールラウンダー。

あらゆる能力に突出しており、全ての競技で切り札と成り得る能力を持っているのが災いして、クラスメートから引つ張りだこの状態になつてしまつたようだ。

「千歳つて体育の授業でも、長距離走も短距離走もサッカーもバレーも何でも、現役部員をコテンパンに打ち負かしちゃうくらいだしね。

ちなみにバスケの時間、私はボロ負けしました！」

同じバスケット部員として少々聞きずてならない言葉があつたように思えたが、今は気にしないことにする。

その後も千歳を巡つてクラス内で派閥が生まれ、団結するどころか空中分解してしまい、見かねた未来が何と全員を説得してようやく出場する種目が決まつたようだ。

まさか千歳の能力がこんな形で裏目に出してしまうとは、思いもよらない話である。

「そんなことがあったんか……。」

要は千歳に同情する。

最終的に丸く収まったとはいえ、初めての運動会で自分の力を巡ってクラスがバラバラになってしまったのだから複雑な心境だろう。

そのことを思い出したのか千歳は苦笑いを浮かべていた。

一方で、そうまでして取り合いになった千歳が最終的にどの種目に落ち着いたのかは気になるところである。

「それで、結局何に決まったん？」

「ちっちゃっち、そう簡単には教えられないわよ。」

要もわかるでしょ？

わざわざ敵に情報と言う名の塩を送る必要があると思う？」

未来は指を振りながら要の申し出を断る。

だが彼女の言う通り、運動会前の情報アドバンテージはとても大きいものだ。

相手がどの個人種目に出場するかを前もって知っておけば、対抗力たる生徒を推薦することだってできる。

逆に偽りの情報（フェイクニュース）を流し込めば、相手側の油断を誘ったり、上手く行けば選出メンバーの扇動さえも可能だ。

現に今の時期は、他クラスからスパイが差し向けられたり、逆に自分たちから差し向けたり、クラスの違う友達からこっそりと情報を引き出したり、嘘八百な情報を流したりと、熱い情報戦が学校の各地で行われている。

それはこの場においても変わらない。

今日の前にいる真鍋　未来は、部活仲間であり、友人であるが、運動会するときには敵になる。

そう、昨日の友は今日の敵・・・

「別にいいじゃない、教えてしまっても。」

「ちよっ！」

が、当の情報源たる千歳はそんな高度な情報戦と言う名のスパイごっこにノツてくれるつもりはさらさら無かった。

要と未来は揃ってガツクリと肩を降ろす。

「それに、私たちには分かっているんだから、教えなければフェアじゃないじゃない。」
だが直後、何やら含みのある言葉を放ちながら、千歳は要に挑戦的な視線を送ってくる。

その意図が分からず、要は首を傾げるが。

「私が出場するのは、女子400mリレーよ。」

その言葉で千歳の視線の意味も、なぜ未来が3組の生徒たち全員を説得できたのかも全て理解した。

要は自分が2年生の中で、いや、学校内で一番足が速いと言う自信がある。

現に去年の運動会における400mリレーでは、他のチームを圧倒する高得点を叩き出したのだ。

そして部活仲間である未来は自分の足の速さをいつも間近で見しており、去年の傾向から今年の女子400mリレーでも要が推薦されることを確信したのでろう。

だから対抗馬として千歳を推薦した。

そしてその予想はバツチリと的中していたのである。

「なるほど、ウチに対する挑戦状ってわけか。」

要は答えを教えるように、挑発的な言葉と視線を千歳に送る。

「挑戦状？違うわ。これは必勝宣言よ。」

「ほう、随分な自信やないか。」

あんたかて、ウチの速さを知らないわけやないやろうに。」

「ええ、だからこそわかるわ。」

要、あなたは決して勝てない相手ではないってことをね。」

要と千歳は不敵な笑みを浮かべながら挑発に挑発を返して一步も引かない。

その様子を雛子と優花は呆れた眼差しで、未来は面白そうと言わんばかりの表情で見て、蛍だけは場の空気についていけないのか、ポカーンとした表情を浮かべていた。

「蛍ちゃんほどの競技に出るの?」

そんな空気に付き合い切れないと言わんばかりに、優花が蛍に話を振って来た。

「えつとね、わたしはひなこちゃんといっしょに二人三脚にでるんだ。」

「え? 雛子と一緒に大丈夫?」

蛍の答えを意外に思った優花がそんな疑問を口走る。

「ああ、むしろ雛子だからこそ任せられるんだよ。」

そんな2人の会話をちゃんと聞いていた要が、千歳との睨めっこから帰って来て答える。

「雛子だから?」

「そつ、だって2人を二人三脚に推薦したのはウチやもん。」

優花が疑問に思うのも当然だろう。

なにせ蛍と雛子の身長は30cm近くも差があるのだ。

互いの歩幅が合わないのは火を見るよりも明らかであり、それは二人三脚をする上で致命的な欠点となりかねない。

だが本番になれば蛍は間違いなく緊張するだろうから、例えば体格が近い人と組んだ

としても足並みが合わなくなる可能性が高い。

最悪の場合、転倒を繰り返してまともに歩を進められないこともあり得るのだ。

だがここで、蛍バカ代表である雛子が蛍と組むのであれば、蛍の緊張による変化も瞬時に察して彼女のペースに合わせるように素早く軌道を修正してくれるであろう。

・・・ともすれば、リリースとはまた別の意味で一種の畏怖を抱く話だが、それはそれとして雛子は蛍のためとあらばあらゆる労力を辞さないし、蛍もなんだかんだで雛子には大きな信頼を抱いている。

2人の歩調が上手くかみ合えば、運動が苦手という蛍の短所をカバーすることできる。そしてそのための適任者に雛子以上に相応しい人はいない。

これには蛍と雛子を含めたクラス全員が、良いアイデアだと納得してくれた。

我ながらナイイスな采配であると要も自画自賛したものである。

本音を言えば、完走することができれば蛍も達成感を得ることができらうと言う打算もある。

そうなれば、少しでも運動会の楽しみを分かち合えると思ったからだ。

「なるほど、そうゆうことね。」

どこことなく感心した様子で未来が頷き、要は得意げに腕を組む。

「私が一緒に走るからには大丈夫よ。蛍ちゃん、安心してね。」

「うん、ありがと、ひなこちゃん。」

これまでも雛子の内に秘めた情熱に振り回されてきた蛍だが、相も変わらず雛子には信頼を寄せている。

人を疑うことを知らないお人好し、というよりは一度信じた相手のことはとことんまです信じ抜くタイプなのだろう。

愚直なままで純真と言えるが、そんなところが蛍の良いところだと思うし、だからこそ彼女の周りには自然と彼女を助けたいと思う人たちが集まってくるのだろう。

かく言う要自身もその一人である。

「協力すると言うのは力と力を合わせることにじゃない。

心と心を合わせることだ。ね。」

すると雛子と蛍のやり取りを見ていた千歳がそんなことを言ってきた。

その言葉に要は昨日の朝に見ていた番組のことを思い出す。

「あつ、それって昨日のオルレンジャーでオルレッドが敵怪人に言ったセリフやん。」

「ええそうよ、これまでの分と合わせて週末に全部見てみたのよ。

とても面白かったわ。

「そうだ、ありがと雛子。わざわざ全部貸してくれて。」

「どういたしまして、楽しんでもらえて何よりだわ。」

そう言えば先週雛子からこれまで録画しておいた分を全部借りたとか言っていたか。

千歳と同じ趣味を共有できることを要は嬉しく思う。

お互いに異なる話題に触れ合うのもまだ見ぬ世界が広がるので良いものだが、互いに語り合える共通の話題があるのは嬉しいことである。

「へへ千歳もオルレンジャー見ることにしたんだ。」

「未来と優花は？」

「私は普段見ないけど、要の家に遊びに行ったときにたまに見せてもらってるわ。」

「私はピュアキュアが見たいからその流れで軽く見てるね。」

未来と優花がそれぞれ答える。要から言わせれば、2人ともよほどマニアックな会話でない限りはついていけるレベルである。

「さっきのセリフもそうだけど、昨日のレッドは終始カツコよかったよな。」

要はそう感慨深そうに語る。

オルレンジャーのリーダーであるオルレッドは、正義感が強く曲がったことが大嫌い、仲間との友情と絆を信じて果敢に悪に立ち向かうステレオタイプのヒーローだ。

だがそんなオーソドックスなヒーロー像が要は大好きだ。

正義の味方には愛と勇気とド根性は欠かせないのである。

そんな要の言葉に、千歳は予想通りと言わんばかりに口元に手を置いてクスリと笑

う。

「やっぱり、要はレッドがお気に入りのね。ちなみに私は・・・」

「ブラックやろ？」

そんな千歳に仕返しするかのようによに要は彼女の言葉に割って入る。

「え？どうしてわかったのよ？」

「やっぱり。」

オルブラックは冷静沈着でクールな一匹狼な青年だ。

普段はみんなと離れて単独行動を取っており、秘密基地にもよほどのことがない限り顔を出さない。

馴れ合いを好まない上に口数も極端に少なく、一見すると冷たい印象を与えるキャラだが、本心は情に熱く、そして美味しいところだけをかっさらっていく役回りが非常に多い。

これまたステレオタイプな二枚目キャラなのである。

そして千歳の『そっちの好み』を十分に理解している要にとつては予想通りも予想通り過ぎる答えである。

「だってカッコいいじゃない。」

普段は群れることを嫌い一人でいるけど本当は仲間のことを大切に思っていてピン

千の時は颯爽と駆けつけ窮地を救ってくれる。口数は少ないけどそれゆえに一言の重みがとても大きいまさに私の憧れのキャラよ！」

その割にはその憧れとやらを軽く早口で捲し立てているわけだが、千歳のブラックに對する情熱と、ハマリ出したら凝り出す性分であることだけは理解した。

「え．．．？」

するとその言葉を聞いた蛭は、なぜか不安げな表情で千歳に視線を向ける。

「ちとせちゃん．．．ひよつとしてわたしたちといっしょにいるの、ホントはイヤだったりするの．．．？」

「え．．．。」

そんな蛭の思わぬ言葉に、千歳の顔が見る見る内に青ざめていく。

「ちつちがうわ！」

私が憧れているのはその姿勢と言うか、窮地に颯爽と駆けつけてくれるところって言うか．．．

とにかく！私がみんなと一緒にいる時間を嫌だなんて思ったことはないから！

渡しは蛭たちと一緒にいる時間が好きだから！」

目を潤ませる蛭を前に、さすがの千歳も動揺を隠せず、継ぎ接ぎながらも質問に答える。

「そつ、そつか、よかった・・・。」

すると蛭はホツとした様子で安堵の笑みを浮かべた。

先ほどの破壊力満点の潤んだ表情と言い、隣にいる悪友なんかは思わず・・・

「キュン♪」

「早いよ!!」

自分が頭に思い描くよりも先に反応した雛子に対して要は思わずツツコミを入れる。

「あはは・・・蛭ちゃんはあるの中で例えるならオルピンクだね。」

「え?」

そして一連のやり取りを見た優花がそんなことを言ってきた。

オルピンクはメンバー内では最年少の女の子で、自分に自信のない消極的な性格だ。

能力も一番弱く、敵との戦いでピンチに陥ったりする回数もダントツに多い、所謂囚

われ系ヒロインポジションである。

そんなヒーローらしからぬ立ち位置に批判的な意見も見受けられるが、一方でどんな逆境でも決して諦めない芯の強さも持ち合わせており、健気に頑張る姿には多くのファンも存在している。

余談だが、他のメンバーからはやたらと大事にされており、特にフェミニスト気質な紳士のブルーと、世話焼きのお姉さんポジションであるイエローはそれが顕著である。

余談だがこの5人に加えて、オルレンジャーのレギュラーキャラには司令官もいるのだが、こいつが相当な曲者であり、普段はのんびりでだらしがなく、イエローとピンク、特にお気に入りのピンクに対して度々セクハラ発言をかましてくる、時間帯を考えると割ととんでもないキャラクターである。

だがメインとなるターゲット層が層だけにストレートな発言こそ飛んでこないものの、比喻表現を多用するのが災いしてやたらと語彙力の高いキャラとなってしまう、その遠回しかつ絶妙な言葉選びから繰り出させるお子様お断りなセクハラ発言の数々は、大きな友達相手から多大な指示を得るに至ってしまった、ある意味今作最大の大人の問題児キャラである。

「確かに、蛍ちゃんはピンクって感じだね。」

優花の言葉に雛子も同意する。

ちなみにこれには蛍がピンクのプリキュアであるからという意味は含まれていない。

「わっ、わたしは、あんなに可愛くないよ……。」

「なくに言ってるの。蛍ちゃんも十分可愛いじゃない。」

「そうよ、蛍ちゃんも負けないくらい可愛いわよ。」

優花と雛子に褒めの嵐を受けた蛍はさっそく顔を真っ赤にして俯いてしまった。

そう言えば優花は小動物好きで、雛子とは別の方面で可愛いものが好きだったか。

この2人、これまではあまり接点がなかったから会話したことがあるのもほんの数回だが、こうしてみるとかなり厄介な組み合わせかもしれない。主に蛍絡みで。

「迂闊だったわ……」。

確かにブラックに憧れると言うことはそうゆうことになるわよね……」。

すると先ほどまで頭を抱えていた千歳がようやくやく我に返ってきた。

「いや、そこまで真剣に思い詰めんでもええで？」

だが思い詰めていた内容が内容なだけに今度は要が頭を抱える。

創作物上のキャラクターに対する好意や憧れといった感情は、現実とフィクションの境界線がしっかりとできていけば、現実味のない遠い世界を見ているような漠然としたものでしかないのに。

その感情が実際に人格に影響を及ぼしてしまうのが常ならば、悪役が好きな人たちはもれなく犯罪者予備軍である。

……ここまで考えて要は、今まさに『現実』に変身して悪の手先と戦い、真隣に異世界から来た友達がいる自分とはとくに空想と現実の区別がつかなくなってしまうたのでは？と少し未恐ろしくなったのは内緒である。

「はっ！私はブラックではなくブルーに憧れるべきかしら!？」

「蛍のために好きなキャラ変えるの!？」

先ほどの話題はすっかり聞いていたのか、蛍をピンクと例えるなら、ピンクに対して過保護なブルーこそが理想とするキャラではと考えたのだろうか、つい先ほど、溢れ出る憧れを語り尽くされたのにあっさりと捨てられるブラックが不憫でならない。

一体どれだけ蛍バカなのだこいつは!?

「それなら私は司令官のおじさんがいいかな?」

そんな千歳のボケに優花がさらにボケを重ねる。

「そのチョイスは女の子としてどうかと思うよ?」

だが優花の言葉に未来がごもつとも過ぎるツツコミを入れる。

ピンクがお気に入りと言う共通点から名乗り出たのだろうが、優花にはあの司令官ほどの語彙力は期待できない。

遠回りなど一切せず豪快にド真ん中ストレートをぶち抜いてくるだろう。クレームの嵐どころか、放送中止ものである。

「じゃあ私はイエローに・・・」

「収拾つかんからお願ひ黙って!」

雛子のボケを先読みした要が無理やり割って入って言葉を遮る。

「はあ、千歳、あんた悪の手先よりもまずあの2人からお姫様を守るべきじゃない?」

そんな優花と雛子を見て一抹の不安を感じたのか、未来がため息を吐いて呆れながら

千歳に問いかけた。

「何を言っているの？2人が蛭に酷いことをするわけじゃないじゃない。」

だが千歳はキョトンとした様子で未来の不安は杞憂と語る。

お姫様で通じてしまうのもどうかと思うが、確かに千歳の言うように、いくらあの2人が蛭にお熱と言ってもさすがに彼女の嫌がる真似をするとは・・・

「それに、」

「ん？」

「2人の言っていることは何も間違っていないからね！」

千歳の言葉に要と未来の頭の中に一気にブリザードが吹雪く。

(・・・あ、ダメだこいつら。)

(・・・あ、ダメだこいつら。)

そしていつもの様にキリッとした最高にカッコ良い顔で最高にカッコ悪いことをのたまう千歳に、要と未来の考えていることが見事シンクロするのだった。

∴

放課後の教室、要と雛子は、買い物があるからと早くに帰る蛍を見送る。

「それじゃあ、かなめちゃん、ひなこちゃん。またあしたね。」

「また明日。」

「蛍ちゃん、バイバーイ。」

だが別れの挨拶をする蛍の笑顔にはいつもの明るさはなく、足取りもどこか重たそうだった。

よっぽど運動会が憂鬱なのかと要は少し心配になる。

「蛍ちゃん、やつぱり元気がないみたいね。」

「かな子。」

そんなことを考えていると、後ろから声を掛けられた。

振り向くと、そこには2年1組の学級委員にして生徒会役員も務めている女子、東條かな子（とうじょう かなこ）が立っていた。

少し生真面目で堅物なところがあるが、誰もが笑いながら楽しい学校生活を過ごせるような学級を作ると言う理念を持ち、学校行事があれば率先してクラスを牽引して盛り上げてくれる。

高いリーダーシップと行動力を併せ持つ、我らが2年1組のリーダーである。

「まあ、普段の授業でも体育だけは本当に苦手そうなものね彼女。」

「そうだね。」

でも虫にも運動会を楽しんでももらいたいし、ウチも何とかしてあげたいとは思ってるんだけど。」

「運動が苦手な虫に運動の楽しさを教える、なんてハードルの高いことは要求しないが、クラスが一丸となって学校の行事に取り組むことの楽しさだけは、何としても彼女に教えてあげたい。」

彼女がずっと独りぼっちで、友達と過ごせる学校生活に憧れていたと言うのであれば猶更である。

確かに学校行事だけに限れば、この先も修学旅行や文化祭もあるだろう。

だが運動会には運動会にしかない楽しみと、乗り越えたときの達成感がある。

自分本位な考え方もかもしれないが、何よりもそれが好きな要だからこそ、その気持ちを虫に教え、一緒に分かち合いたいのだ。

「ねえ2人とも、ちよつといいかしら？」

するとかな子がメガネをクイツと上げながら聞いてきた。

彼女がメガネを上げる仕草をしたときは、良いアイディアがある合図である。

「何？改まって。」

「2人に蛍ちゃんに頼んで欲しいことがあるのよ。」

「それなら、かな子から直接蛍ちゃんに伝えればいいじゃない。」

「私よりも、友達であるあなたたちが頼んだ方が蛍ちゃんも気が楽だと思うの。」

あの子、結構人見知りするタイプでしょ？」

「ふふつ、まあ確かにね。」

いくら蛍が傍から見てもわかりやすい性格をしているとはいえ、先ほどの蛍の様子を見抜いた発言と言い、相変わらずクラスメートのことは誰よりも見ているなど要は感心する。

クラスメート1人1人をよく見て個性を尊重し、困っているのであればこうしてさり気なく手を差し伸べられるのが東條かな子と言う少女だ。

彼女のこうした陰ながらの努力もあってか、自分たちのいるこの2年1組は他のクラスと比べても明るく、和気藹々としたクラスであると思っている。

そんなクラスの雰囲気を作り出せるかな子の事を、要は内心尊敬しているのだ。

「なるほどね、それで、頼み事って？」

「実はね、運動会当日に蛍ちゃんにお願いしたいことがあるのだけど……。」

その頼みごとを聞いた2人は、これなら蛍も一緒に運動会を楽しむことができるだろ

うと思うのだった。

∴

モノクロの世界。

リリスは壁を背にして膝を抱えていた。

キュアシャインの正体を暴く。

それが自分に課せられた指令であり、現状最も最優先とすべきことはわかっているはずなのに、リリスは行動を起こす気になれずにいた。

「いつまでそうしているつもりだ？」

そんなリリスにサブナックがいつもと変わらぬ口調で問いかけてくる。

「あなたには関係ないでしょう？」

リリスはそれを冷たくあしらう。今は誰とも会話したくないのだ。

「行動隊長でありながら主の命を無視するつもりか？」

「っ……」

だが直後のサブナツクの言葉にリリースは齒噛みする。

そんなつもりは毛頭ない。

ただ主の命令に従い動く、それ以外に行動隊長に価値はない。

自ら任務を放棄するのは、自分自身の価値を捨てるも同然だ。

「そんなこと言っていないでしょう……。」

だがリリースの言葉はか細く途切れる。

もしも行動隊長としての価値をなくしたら、自分はどうなるのだろうか……？

存在そのものがなくなるのか、それとも全く別の……。

そんな意味のない疑問が頭をよぎり始めたので、リリースは思考を断つべく立ち上がる。

「……2週間ぶりかしらね。かの地に行くのも。」

それだけを言い残してリリースはその場から姿を消した。

だがほんの、何気ない一言のつもりだったが、サブナツクはリリースの言葉に眉を潜めるのだった。

：

夕食の買い物に商店街を訪れた螢は、落ち込んだ表情で噴水広場へと足を運んだ。

運動が好きでない自分にとって、運動会はできれば参加したくないのも事実だが、今年是要たちが一緒にいてくれる。

運動会に向けて懸命に取り組む要たちの姿を応援するのは楽しいので、今年の運動会に参加することは、実際のところそれほど嫌でもないので。

それなのに、いまはとても気分が重たい。

僅かな楽しみを震めてしまうほど、螢の心には陰りがあつた。

「リリンちゃん……。」

彼女に会えなくなつてから、はや2週間が経過していた。

ここ最近彼女と会う頻度が増えて来たかと思つたら、急に2か月前まで時間を戻されたかのようだ。

声だけでも聴きたいと思つても、リリンは携帯電話を持たない。

住んでいる場所も知らないから直接会いに行くこともできない。

「……そういえば、わたし……。」

リリンのことについて、知らないことばかりだ。

以前千歳に問われたことを今になって実感する。

それでも、これまで不安も不満も持つことはなかった。

この噴水広場に来れば会うことが出来たから、ここでリリンとお喋りをするだけでも、自分にとってはおかけがえのない時間だったから。

「リリンちゃん……。」

再び彼女の名前を呼ぶ。もう一度会いたいと言う願いを込めて。

その時、

「あれ……?」

いつも2人でお喋りをするときに使っていたベンチの隣に、身に覚えのある少女の姿があった。

「ほたる。」

「リリンちゃん!」

ずっと待ち焦がれていたリリンの姿がそこにはあったのだ。

たまらず螢はリリンに抱きつく。

「きゃっ。ほたる、どうしたの?」

「どうしたのじゃないよ! きゆうにいなくなっちゃって!」

わたし心配したんだから! もうあえないんじゃないかっておもったんだから!!」

泣きじやくる蛍にリリンは困惑しながらも、優しく頭の上に手を置く。

「・・・そっか。」

ただその一言だけを呟き、リリンは蛍が落ち着くまでその場に佇むのだった。

：

蛍の様子が落ち着くのを確認したリリンは、2週間ぶりに2人で並んでベンチに腰掛けた。

「ごっごめんね・・・はずかしいところみせちゃって・・・。」

恥ずかしい、の感情を知らないリリンには彼女が何に謝っているかはわからないが、一先ず言葉を続ける。

「ううん、あたしのほうこそ、急に連絡もなしになくなっちゃったりしてごめんね。」

自然と出た言葉で会話を綴りながらも、リリンも内心、落ち着いていられなかった。

2週間ぶりの再会を喜んで泣いた蛍の姿に、彼女と2回目に会ったときのことを思い出したからだ。

だが当時は、彼女の流した涙も、笑顔の意味もわからなかったはずなのに、今のリリンにはそれが臍気ながらも分かってしまった。

そして再会に気持ちが昂っているのは、蛭だけではなかったのだ。

(あたしも・・・よろこんでるの?)

自分の気持ちにも昂りが見える。

キュアシャインと2人きりになれたときのそれと似て、でもそれとはまったく違う性質の昂り。

「リリンちゃん?」

そんな様子を不思議に思ったのか、蛭が首を傾げてこちらを覗きこむ。

「え? ううん、なんでもない。

それよりも、ひさしぶりに会えたのだから、またいつもみたいにおしゃべりしよ?」

「うん!」

今は自分の気持ちを落ち着かせるためにも、いつも通りに振る舞おう。

そう思いながらもリリンは、今の自分を満たす気持ちがあるのかを、ずっと心の片隅で思うのだった。

∴

久しぶりにかわしたリリンとの会話は、まさに時間を忘れるかのようなひと時だった。

気が付けば蛭は、予定していた時間よりも10分近くをオーバーしていた。

「あつ、もうこんなじかんだ。」

名残惜しいけど、これ以上は帰りが遅くなってしまう。

でも蛭はもう、リリンと会えなくなるのではないかと言う気持ちを抱きたくなくなかった。

「ねえリリンちゃん。」

「なに？ほたる。」

だから蛭は、今回は少しだけ彼女に強引に聞き寄ることにした。

「リリンちゃんのおうちのでんわばんごう、おしえてくれる？」

「え・・・？」

だがその言葉を聞いたリリンは、なぜか驚き言葉を失ってしまった。

「でんわばんごうがダメなら、せめてすんでいるおうちの住所とか・・・。」

「どうして?そんなものおしえなくても、あたしはいつだつてここに……。」
「わたし……もうヤダよ。」

リリンちゃんが急にいなくなっちゃったりするの。」

そう言いかけたリリンの言葉を螢は遮った。

ようやく再会できたのに、また忽然と姿を消してほしくない。

もうリリンと会えないのではないか、なんて不安を抱きたくない。

もうリリンの声が聞こえないのではないか、なんて思いたくない。

もう、リリンちゃんとはなれたくない。

ほんの少しだけ、自分の内を焦がすような黒い感情が湧き上がり、螢は泣き継ぎようにリリンに詰め寄る。

「……ほたる、明日はじかんある?」

「……え?」

「明日がダメなら、明後日は?今のうちに、次に会いたい日をおしえてよ。」

もう、だまってどこかにいったりしない。ほたるがきてほしいときに、またここにくるから。」

リリンの突然の提案に螢は驚くが、同時にとんだ失礼な我儘を言ってしまったのではないかと言う罪悪感に駆られ、急激に頭の中が冷え込んでいく。

彼女の事情を何ひとつ聞いていないのに、勝手に行方を眩ませてしまったと、非難してしまったのだ。

だがそれでも、リリンとまた会う約束が出来るのは嬉しかった。

「じゃっ、じゃあ、またあした!」

様々な感情が渦巻くなかでも、螢は今の正直な気持ちを抑えることが出来なかった。

飛び付くように彼女の申し出に答える。

「わかった。またあしたここにくるね。」

「うん!それじゃ、またねリリンちゃん!」

「うん、またね。」

そして螢は、来た時とは打って変わって明るい笑顔で別れの挨拶を交わした。

明日またリリンと会うことが出来る。

それだけで軽くなった足取りで螢はスーパ―へと向かう。

だけどその一方で、螢の脳裏に僅かな疑問が生じてきた。

どうして彼女は、頑なに自分の事を話そうとしないのだろうか?

上手くはぐらかされたような、話題を変えられたような気がする。

でもどうしてそんなことが気になるのだろう？

リリンとさえ会うことが出来れば、他にになにも望まなかったはずなのに……。

だが今回、リリンと再会したことで螢の心には少しだけ変化が訪れ始めた。

(リリンちゃんのこと……もつとしりたいんだ。わたし……。)

どこに住んでいるのか、どんな生活をしているのか、どんな学校に通っているのか、どんな学校生活を送っているのか。

友達はあるのか、部活は入っているのか、勉強は得意なのか、料理はできるのか、家族はどんな人たちなのか……。

リリンのことをもつと知りたい。もつと知ることが出来れば、もつと彼女と距離を縮められるから……。

そう思うのはきつと……おかしなことではないはずだ。

だつて自分は……彼女に……。

「……かいもの、いかなきゃ。」

急に頬が熱くなって来た螢は、目前に迫った自分の気持ちから目を反らすようにスパーへと向かうのだった。

:

数日が経過し、ついに迎えた運動会当日。

雛子はさっそく、クラス内に沸き立つ熱意に当てられたのか冷ややかな視線を送っていた。

「ついにこの日が来たな！」

「1組の大和魂見せたるで!!」

「それ使うところ間違っているからね。」

健太郎と要が声高らかに手を叩き、雛子が落ち着いてツツコミを入れる。

だが1組の熱量は既に熱量がオーバーヒートするのではないかと言うくらい、クラス中が熱気立っていた。

体育バカ代表たる健太郎と要がそれぞれ男女を牽引している影響か、2年1組はお祭り思考の生徒たちがやけに多い。

そんな暑苦しい面々たちの脇をしつかりと締めつつ、かつ一層勢いづかせているの

が、リーダーたるかな子である。

「はいみんな！去年に引き続きいつものやるわよ!!」

かな子の呼びかけとともに、2年1組は円陣を組む。

「2年1組！ファイト!!」

おおーっ!!!
!!!

そして体育バカの要と健太郎が代表して声を上げ、多数のお祭りバカはその大声に負けないように声を張り、一部呆れてめんどくさがる生徒はため息と一緒に声を出し、最後に恥ずかしがり屋の可愛い声はあつという間に途切れていった。

そんなまとまっているのかどうかもわからない円陣を終えた後、雛子たちは開幕式のためにグラウンドへと集合する。

「相変わらずよね、うちのクラス。」

「ホントにもう、暑苦しいんだから。」

そうは言いながらも、愛子も雛子もこんなクラスの雰囲気は嫌いではなかった。

気が滅入ってしまうような淀んだ空気のクラスよりも、いつそ悩んでいることがバカバカしく思えるような賑やかなクラスの方が気が楽なのである。

・・・そんな風に思ってしまったこと自体、自分も大概あのスポーツバカの影響を受けているのかもしれないが。

そして全国のテンプレートと化した校長先生による長い開幕の挨拶がつつがなく終わると、3組の列から千歳と未来、優花がこちらに来了。

「うつつす要、手加減しろよ。」

「誰がするかっての。」

「ええ、手加減は必要ないわ。本気でかかってきなさい。」

「言われなくても。」

400mリレーで対決することになっている要と千歳がさつそく火花を散らせる。

「千歳、いくら愛しの小さなお姫様（リトル・プリンセス）が相手だからって、手加減しちやダメだからね。」

すると未来がからかい交じりで千歳にそう忠告してきた。

が、当の本人はその言葉を聞いて困惑する。

「え？でも・・・。」

「いやする気だったんかい・・・。」

流石に予想外の反応だったのか、未来の方が肩を落とした。

とは言え仕方ないことだ。

自分が千歳の立場でも同じことを思うだろう。

「そうだようちとせちゃん！」

すると蛭がやけに気合の入った様子で、で舌の足りていない言葉で千歳に強気に話しかけてきた。可愛い。

「わたしたちは、いま、てきどーしなんだから、いつしよにがんばろうね。」

と思いきや気合の入りが一周して非常に幼い声でそんなことを言ってきた。可愛い。

「いやいや、一緒に頑張っちゃダメでしょ？」

優花が最もなツツコミを入れる。

恐らく蛭自身は『互いにベストを尽くして戦おう』と言うニュアンスを含んだ言葉のつもりなのだろう。

だが言葉の選び方から声の覇気から何から何まで間違えたとは思えないチョイスである。可愛い。

「・・・千歳、前言撤回。」

「やっぱこの子相手なら手加減していいよ。」

「ええ、蛭ちゃん相手に本気を出すのは、何と言うか・・・大人げないわ。」

「(っ)っ、(っ)らっ。」

そんな蛍の態度に未来も優花もすっかり棘を抜かれたようだ。

ついでに言えば千歳も2人事を注意しながらも声にはなんの敵しさもない。

そんな様子を蛍はポカーンとした表情で眺めていたのだった。可愛い。

「おーいお前ら、敵さんと馴れ合っていないでちやつちやと応援席に戻ってこい。」
すると3組の担任、吉川先生が千歳たちに呼びかけてきた。

雛子たちは自分のチームの色を示す鉢巻を巻いて各々の応援席へと向かうのだった。

第17話・Bパート

夢ノ宮中学校は全ての学年が4クラスなので、運動会におけるチームもクラスごとに分かれることになっている。

要たちが所属する1組は赤、2組は白、千歳たちのいる3組は青、残る4組が緑組だ。そしてついに戦いの火蓋が切つて落とされた。

「赤組〜！がんばれ〜！」

「白組ファイト〜！」

「青組負けるな〜！」

「緑組押せ押せ〜！」

応援席にいる生徒たちから一斉に応援が響き渡る中、選手たちは各々の種目で鎬を削り合う。

「蛍ちゃん、作戦通りお願いね。」

「はっ、はい！」

そんな中、赤組のテントではかな子が蛍に『作戦開始』の指示を送っていた。

「すう〜、ふれ〜！ふれ〜！あかぐみ!!」

そして蛭は恥ずかしい思いを堪えて、大声で赤組を応援する。

これがかな子が蛭に伝えた『作戦』だが、この効果が発揮されるのはしばらく後のことになるだろう。

要も自分の出番が来るまで、クラス一丸となつて応援に専念する。

グラウンド内の熱気は夏の暑さにも負けずにどんどんヒートアップしていく。

そして4組のチームは次々と得点を重ねていく中、ついに要たちの最初の出番がやってきた。

「よーしー2年1組ファイター！」

「おおーっ!!」

要と健太郎がそれぞれ声を出しクラスメートの士気を高める。

最初の競技は全員参加型の種目であり、運動会でも特にポピュラーな球入れだ。

当然、蛭も参加するので要は少しだけ不安を覚えたが、

「よーしー！がんばるぞー！」

そんな心配など無用と言わんばかりに、蛭はやる気に満ちていた。

「蛭、随分とやる気満々やな。」

「うん！わたし、たまいいだけには唯一できた競技なの！」

数少ない自力でもこなせる種目だから気合十分なのだろうが、それだけではないこと

は要は知っている。

以前リリンと久しぶりにお話ししたと聞いた時から、彼女は元気を取り戻していたのだ。

何にしても、クラス全員が一致団結して運動会に臨む楽しみを知ってほしいと願う要にとつて、彼女が前向きに取り組んでくれることは喜ばしいものだ。

「・・・カメラ持ってきた方が良かったかしら？」

「アホか。」

そんな蛍の姿を見た雛子の言葉に、要は冷たいツツコミを入れる。

当たり前だが、カメラなんか持参してグラウンドに出たら間違ひなく失格だ。

せつかく土気高揚している1組に冷水を浴びさせるような真似は控えて欲しいものである。

「それでは、よいいドン!!」

そんなことを考えてる内に、実行委員の合図と同時に一齐に球入れが開始された。

「えーい!」

蛍も近くに転がる赤い球を拾い、自軍の籠にめがけて力いっぱい投げ飛ばす。

「・・・あれ？」

が、蛍の投げた球は籠へと到達する前に虚しく落下していった。

「えい！やー！たー！えーい!!」

蛭は球を拾つては投げ続けるが、その全てが籠へと到達する前に落ちていく。

最後には下から掬うように勢いをつけて投げたが、それさえも籠へ掠りもしなかった。

そして蛭は口元を震わせ、世紀の大発見をしたと言わんばかりの表情で要の方を振り向く。

「小学校のころよりもカゴがたかくなってる〜!!」

「ここは中学校やで・・・。」

昨年の運動会には参加していなかった蛭にとって、今年が初めて中学校で行われる運動会。

中学生の背丈に合わせて僅かにレベルアップされているのだが、それは蛭に精神的ダメージを与えるには十分すぎる威力があったようだ。

「ううう・・・やっぱり、わたしにできるきよーぎなんてないんだ・・・。」

『唯一』できた競技と自信を持つて参加しただけに、無情にもそれを打ち砕かれた蛭は膝を抱えて落ち込んでしまう。

「わー蛭！今試合中！落ち込むなら後にして!!」

だが気の毒とは思いつつも要は蛭に厳しい言葉を投げる。

勝負の世界は非情だ。

こうしている合間にも刻一刻と時間は過ぎていき、他の3チームはどんどん球を籠に入れて得点を積み重ねていく。

こんなところで落ち込んでいる場合ではないのだが、蛍は一向に顔を上げようとはしなかった。

「・・・くつ、やっぱりカメラを持参してくるべきだったわ。」

「雛子〜!!」

オマケにそんな切羽詰まった状況の中でも一切自重する様子を見せない雛子などはやアテにできない。

こうなればイチかバチかだ。

蛍がこれで納得できるかは知らないが、今から蛍が競技に参加出来て、かつ勝利を掴むためにはこれしか方法がない。

「蛍! 零れた球を片っ端からかき集めて!

そしてウチのそこへ持ってきて!!」

「え・・・? かなめちや・・・。」

「はやく!!」

「はっ、はい!!」

有無も言わさず命令に近い形で蛍に指示を出し、要は目の前に転がる赤い球をガムシヤラに拾っては投げを繰り返す。

そして零れ落ちた球を蛍がかき集め、再び要の元へと運んでいく。

「初戦から負けてたまるかああああ!!」

そんな要の情熱が実り、なんとか2年1組は1位で初陣を飾ることに成功したのだつた。

試合終了の笛と同時に、要はその場にへたり込む。

「はあく……疲れた……」

遅れた分を取り返そうと必死で動き回っただけに疲労も倍増だ。

体力には自信があるから全てを使い果たしたなんてことはないが、明らかなオーバーワークである。

「かつ、かなめちゃん!」

するとそんな要の元へ蛍が駆け寄って来た。

勝つためとはいえ、半ば雑用も同然な役割を押し付けてしまったので、要は今になって彼女に悪いことをしたと思つたが、

「わっ、わたし!がんばったよ!」

がんばって、たまいっばいあつめたよ!!」

当の本人はそんなことを気にしないばかりか、達成感に溢れる笑顔で嬉しそうに語ってきた。

「ははっ、ありがと、ほたる。」

手に付いた砂を払い蛍の頭を撫でると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

少なくとも自分の望んだとおり、蛍にも団結して勝利をつかみ取る楽しみを共有できたようだ。

それならばこの程度の疲労、安いものだと思う要であった。

：

その後もいくつかの種目をこなしていき、ついに午前最後の種目が来た。

雛子は応援席から、競技に参加する要の姿を一瞥する。

そう、午前最後の種目は女子400mリレーである。

空砲の合図とともに一斉にスタートを切り、午前最後の部ということもあつてか応援の声にも気合が入っている。

「フレー！フレー！赤組！フアイトー！」

「ふれ〜！ふれ〜！あかぐみふぁいとぉ〜！」

「あはは、蛍ちゃん・・・。」

舌足らずな蛍だけが、周りから一拍遅れたテンポで応援していた。可愛い。

そんな蛍に愛子が苦笑する様子を見せるが咎めはせず、周りの生徒も注意しない。

それがリーダーであるかな子の『指示』だからだ。

そして迎えた試合終盤、ついにアンカーたちによる一騎打ちが始まった。

現在先頭を走るのは4組のアンカー、竹田 理沙だ。

要と並び、学年内でもトップクラスの瞬発力を誇る彼女が先頭に立ったことで、4組

の応援席からは大歓声が上がっている。

だがその期待には応えられないと雛子は確信を持つ。

そして我ら1組のアンカー、要の姿がついに応援席を過った。

「あつ、かなめちやくん！がんばって〜！」

要の姿を見かけた蛍が声援を送った次の瞬間、要がこれまで見せたことがないほどの

速力で一気に理沙との距離を縮めていった。

蛍の声援を受けたことで要が自身の潜在能力を100%にまで引き上げたのだ。

余りにも突然の覚醒に会場はどよめき、1組からも困惑の声が上がっていく。

だが雛子には要の考えていることが手に取るようにわかっていた。

蛍の前でカツコ悪いところは見せられない！

瞬く前に理沙を追い抜き一気に先頭に躍り出る。そのあまりにも一瞬の出来事にさすがの理沙も困惑の色を見せた。

誰もが要の勝利を確信した。が、その時

「あつ、ちとせちゃん！がんばって〜！」

何と遅れてきた3組のアンカー、千歳に対してまで蛍がエールを送ってしまったのだ。

「ちよつと蛍ちゃん！」

慌てて愛子が止めに入るが時すでに遅し。

その声援は千歳の耳にバツチリと届き、次の瞬間、

ビュオオオツ！！

風を切る音とともに、千歳が要に輪をかけてとてつもないスピードで一気に距離を詰

めていく。

蛍の声援を受けた千歳が潜在能力の限界を超えて200%の力を引き出したのだ。

まるで鎌鼬を纏っているのではないかと錯覚させるほどのスピードに、会場は驚きを通り越して言葉を失い、あつという間に抜かれた理沙を含む他の走者はみんな呆気に取られて足を止めてしまった。

そしてゴールの手前、要がテープを切ろうとした瞬間、後方から千歳が追いついていく。

「えっ・ちよっ、ウソやろ!？」

走ることに集中していた要もつい千歳に気を取られてしまい、その一瞬が勝敗を決してしまった。

だが要を含む誰もが呆気にとられる中、雛子だけは千歳の考えていることが手に取るようにわかっていた。

蛍の前でカッコ良いところを見せたい!

小さなお姫様（リトル・プリンセス）の前ではカッコつけたい。

そんな男子的思考を持った守護騎士（ガーディアン・ナイト）2人による熾烈な争い

は、要自身が『究極の蛍バカ』と認める千歳に軍配が上がるのだった。

：

午前の部が終わり、雛子たちは昼食を取るためにブルーシートの上に腰掛けていた。

雛子は、蛍がみんなと一緒に食べるためにとわざわざ作って来てくれたお弁当を受け取り、シートの上に広げていく。

「ほくたゝるゝ?」

その傍らで、女子400mリレーで見事千歳に負かされた要は、不機嫌な表情で蛍の両頬をつねっていた。

「なくんで千歳のことまで応援しちゃうかな?この子は?」

「だつ、だつれ、だつれひとれひやんがならつれるんらもん・・。」

「頑張っているからと言って敵を応援していい理由にはなりません。」

「いく、いらい、いらいをかなえひやん、いらいを・・。」

頬をつねられているせいで、蛍は上手く言葉が話せないでいた。可愛い。

そして要の八つ当たりに雛子はため息を一つ吐く。

蛍にとつては、要も千歳も等しく大切な友達。

だから蛍が要を応援するように、千歳のことを応援する権利はある。

それを今は敵チームだから応援するなど言うのも酷な話だろう。

とは言え、要の気持ちも、まあわかる。

何せ蛍の応援を受けて張り切ってゴールしようと思った矢先に、同じく蛍の応援を受けた千歳に敗れたのだから、半ば裏切られた気分になるのも仕方ないことだ。

「要、その辺にしなさい。」

すると3組の応援席から千歳が姿を見せた。

千歳に咎められた要は、口を尖らせながらも蛍を解放し、蛍は両頬を撫でながら涙目で千歳の後ろに隠れた。可愛い。

「蛍、ありがとう。」

あなたの応援のおかげで私は勝つたのよ。」

が、蛍が解放されることを確認するや否や、千歳が彼女の元まで行き、優しく頭を撫でた。

「ちとせちゃん……。えへへ。」

「和むな!!」

そんな微笑ましい2人の様子を見かねた要が声を荒げてツツコミを入れる。

「千歳ちゃん、お疲れ様。どの競技でも大活躍だったわね。」

雛子自身は例え敵だとしても、どの競技でもチームを勝利に導くほどの活躍を見せた千歳のことは純粋に凄いなと思っている。

改めて彼女のオールラウンダーな能力に少し戦慄を覚えたほどである。

「ありがとう雛子。あつ、私も手伝うわ。」

「わたしも。」

「ほら要、いつまでも不貞腐れてないでお昼にするわよ。」

「ぐぬぬ……。」

未だ納得する様子を見せないでいながらも、一先ず4人で昼食の準備をしているその時、

「蛍。」

どこからか蛍を呼ぶ声が聞こえた。

声の方に顔を向けると、そこには一組の男女の姿があった。

女性の方は、蛍と同じピンクの髪をしており、一見して雛子は女性の正体を悟る。

「あつ、おかしさん！おとしさん！」

蛍が嬉しそうな声をあげ、2人の元へと駆け寄る。可愛い。

雛子の予想通り、2人は蛍の両親のようだ。

「蛍、とても頑張っているじゃない。偉いわよ。」

「えへへ。」

「運動が嫌いだからあれほど参加したくないって言ってたのにな。」

「も〜おとーさん、それはいわないでよ〜。」

ひとしきりの会話を終えた後、蛍の両親は改まって雛子たちに挨拶をしてきた。

「初めまして、蛍の母の一之瀬 陽子です。」

「初めまして、蛍の父の一之瀬 健治です。」

「いつも娘がお世話になっている。」

「いつ、いえ、それほどでも。」

雛子たち3人は、慌てて頭を下げる。

「初めまして、ウチは……。」

「スポーツ万能でバスケットが大好きな森久保 要ちゃんね。」

「え?」

すると要が挨拶をするよりも先に、陽子が要の名前を当ててきた。

それも簡単なプロフィールも含めてだ。

「それで、あなたが読書家で可愛いものが大好きな藤田 雛子ちゃん。」

「はっ、はい。」

自分の事も言い当てられ、雛子は少し強張って挨拶をする。

「そしてあなたが、運動も勉強もトップで孤高のクイーンと呼ばれている姫野 千歳ちゃんね。」

「はっ。」

最後に千歳のプロフィールも言い当てた陽子は、少し満足げに微笑んだ。

自己紹介もしない内にここまで言い当てられたと言うことは、蛭は普段から自分たちのことを、性格だけでなく容姿も含めて両親に多く話しているのだろう。

ついでに雛子には、とても嬉しそうにそれを語る蛭の姿がすぐに目に浮かんだ。可愛い。

「みんなありがとう、蛭と仲良くしてくれて。」

蛭、この学校に転校してきてから、毎日とても楽しそうにしているのよ?」

「学校へ行つて友達に会えるのが楽しみで仕方ないって。」

君たちのような素敵な友人に巡り合えて、親としてとても良かったと思っている。

ありがとう。」

「おっおかーさん、おとーさん……。」

両親から改めて胸中を暴露された蛭は、少し恥ずかし気に微笑む。

ついでに言えば雛子たちも蛍の両親からお褒めの言葉を預かり、少しこそばゆい感じがした。

「うーす、要。」

「げっ、お兄！」

すると要の兄である瞬も姿を見せた。

「ちゃんとこの目に見届けたで。お前の盛大な逆転劇をな。」

「それウチが逆転される立場やつたろが!!」

そして蛍の両親が見ている目の前にも関わらず、いつも通りの兄妹喧嘩と言う名の漫才が勃発する。

「千歳。」

今度はリン子がベルたちを連れて姿を見せた。

「みんな、来ていたのね。」

「千歳、見てたよ。」

要をビュン！って追い抜くのカッコよかつた。」

「ぐっ……。」

「ちっ、千歳！リレー1位おめでどう。」

「ぐぐ……。」

すっかり呼び捨てになれたレミンと、未だに自国の姫君である千歳に軽口を叩くことに抵抗のあるサクラが、揃って千歳を褒めたたえると同時に要に追い打ちをかけていく。

そんな様子をベルが苦笑しながら見守っていた。

「あら？そちらの方々は？」

するとリン子陽子の方を向きながら千歳に問いかけてきた。

「蛍の母の陽子さんと、父の健治さんよ。」

「あら、そうでしたの？」

初めまして、千歳の母の姫野　リン子です。」

「つと、要の兄の森久保　瞬です。いや、美人なお母さんやな。」

「こらつ、お兄。」

リン子と瞬が陽子たちへ挨拶し、要が瞬の軽口を注意する。

だが雛子の目から見ても、蛍の母はとても綺麗な人だ。

サラリとしたピンクのストレートヘアに端正な顔たち。

蛍の母なのだから30代は過ぎているとは思われるが、外見は20代に見間違えるほど若々しい。

蛍と並ぶ姿なんて親子と言うより姉妹である。

ちなみに夫の健治の方も、メガネをかけたとても整った容姿の持ち主だ。

自分たちの担任、長谷川 勇人と並べばインテリ系イケメンに弱い女子などその場で卒倒するだろう。

さらに言えば、2人の血を引く蛍の容姿が人形のように可愛らしいことにも頷ける話である。可愛い。

「そいや、お袋とオヤジも見に来とるで。

今あつちで菊子ばあちゃんたちと挨拶しとる。」

「げっ、見にくくなつて言つといたのに……。」

心底嫌そうな声をあげる要を一瞥しながら、雛子が瞬の指さす方を向くと、自分の両親と祖母が、要の両親と談笑している姿が目映った。

「それじゃあ、私も挨拶してこようかしら?」

2人の会話を聞いたリン子が、千歳の『母』として挨拶に向かう。

「俺も一応挨拶しておくか。

サクラとレミンは先に食べていいぞ。」

「やった〜。」

「失礼の無いようにね。」

そして戸籍上、3兄妹の長男となっているベルも、3人を代表してリン子について

いった。

「じゃあ私たちも、要ちゃんたちのご家族に挨拶に行きましよう？」

蛭、午後も頑張つてね。お母さんたちも、向こうで応援しているから。」

「うん！ありがとうおかーさん！おとーさん！」

そんなリン子たちにつき、陽子と健治も挨拶に行くためにこの場を離れていった。

「・・・優しそうなお母さんやなあ。

ウチのオカンと交換したいわ。」

「何バカなこと言ってるのよ。」

一之瀬親子のやり取りを見て、ぼそりと呟く要の言葉を雛子は一蹴する。

確かに一見すれば、陽子は子どもを相手に一切叱らない、とても優しくそして甘やかしてくれる、要にとつての理想の母親像に見えるだろう。

だがそれは、一重に蛭が娘だから許されるのである。

親孝行のために毎日家事をこなし、宿題を忘れてきたこともない。

本人の話によれば日々の予習と復習も欠かしたことはなく、試験の成績からもそれが真実であると伺える。

何より両親に対して一切反抗的な態度を見せていないのだ。

対して要は家事は親に任せきり、宿題は忘れる、予習と復習はしない、体育以外の授

業は居眠りな上に両親に対して常に反抗的な態度しか取ったことがない。

飯に要が娘だとしても、今とそう変わることはないだろう。

そんな考えが伝わったのか、要は渋い表情を浮かべて黙り込んでしまった。

「ほら、いつまでもお喋りしないで、お昼にするわよ?」

そんな雛子たちにサクラが声をかける。

ちなみにレミンは待ちきれなかったのか既に何口か先に食べていた。

「おっ、じゃあゴチになります。」

「お兄は帰れ!!」

最後に要が強引に瞬を追い返し、サクラとレミンを交えてようやく昼食にありつくのだった。

∴

賑やかな食事の中で先ほどまでの不満はすっかり消え、お弁当とシートを片づけていた要の元に2人の女子がやってきた。

「おーつす要。」

「凄いわね1組。今のところ3組と並んでトップじゃない。」

要が所属する女子バスケット部の3年、キャプテンの水瀬 薫と副キャプテンの加々山 菜々子だ。

「キャプテンに副キャプテンやないですか。」

「こくら、部活以外はその呼び方止めろって言ってるだろ?」

「あつすんません、水瀬先輩に加々山先輩。」

「私は別にどちらでも構わないけど?」

「公私分けないと私の肩が凝るっての・・・ん?」

すると千歳に気付いた薫が彼女の方へ視線を向ける

「君は確か孤高のクイーンなの。」

「姫野 千歳ちゃんだったかしら?」

「はい、初めまして、姫野 千歳です。」

友達になつてからすっかり忘れていたが、元々千歳は孤高のクイーンと呼ばれるこの学校一の有名人。

学年の異なる2人にまで顔と名が知られているところを見ると、改めて彼女の人気が伺える。

最も、さすがに目の前にいる先輩2人はその有名人を前に黄色い声をあげるほどのミーハーではなかったようだが。

「こいつの所属している女子バスケット部のキャプテン、水瀬 薫だ。」

「女子バスケット部副キャプテンの加々山 菜々子です。よろしくね。」

千歳への挨拶を終えた2人は、今度は雛子と蛍に目を配る。

「それからつと、君たちは確かよく部活の見学に来てる子だよな？」

「はい、クラスメートの藤田 雛子です。」

「えと……。」

雛子は礼儀正しく会釈するが、蛍の方は言いよんどんで俯いてしまう。

「ん？どうしたんだよ？私の顔に何かついてるのか？」

そんな蛍に詰め寄りながら薫が首を傾げるが、それを見た蛍は小さな体をピクリと震わせた。

その一瞬で何が起きたのかを悟った要は思わず口元に手を当てる。

「ひいっ……。」

そして思った通り、蛍は小さな声で悲鳴を上げながら、雛子の背後に隠れてしまった。

「……はいっ。」

一方で薫は困惑した様子で首を傾げる。

だが彼女からすれば普通に挨拶しただけのつもりなのだろうが、薫は千歳に並ぶほど背が高い。

本人にその気はなくてもただ目線を下げるだけで、背の小さい蛍からすれば自分を見下ろしているように映ってしまうのだ。

オマケに蛍は、部活動での薫しか見たことがない。

つまり蛍は薫に対してスパルタ全開の『鬼キャプテン』と言うイメージが強く定着している上に年上の『上級生』。

人見知りが強くて臆病な蛍が、声を震わせて怖がってしまうのも無理もない話である。

「こんにちは。」

すると困惑する薫を差し置いて菜々子が蛍へと歩み寄っていく。

菜々子は蛍と目線を合わせるために少しだけ屈み、温和な笑みを浮かべて挨拶する。

「……こつ、こんにちは……。」

すると蛍の方も雛子の背からひよっこりと顔を出して小声で挨拶を返した。

「君、要のお友達よね？お名前は何て言うの？」

「いちのせ……ほたるです……。」

「蛍ちゃんか。よろしくね。」

優しく差し出された菜々子の手を一瞥した螢は、恐る恐る自分の手を伸ばして握手する。

これも最近わかってきたことだが、螢は母親つ子な故か、どうも包容力を感じさせる大人な雰囲気の女性に弱い傾向があるようだ。

同世代でも大人びた容姿を持つ雛子や千歳に対してもそうだし、・・・悲しいことに自分是对象外のようなだがそれは一先ず置いておいて、とにかく温和でいい意味で老成した雰囲気を持つ菜々子が相手であれば怖がることはないのである。

ついでに言えば、菜々子の方も小さな子どもの扱いをだいぶ心得ているようだ。

怖がらせないためにわざわざ膝を屈めて視線を合わせに来たところなんて顕著である。

「ちえつ、なんだよいつも菜々子ばかり。」

そんな菜々子と螢の様子に薫は不満そうに舌打ちした。

心なしか少し傷ついているようにも見える。

「ダメじゃない薫。」

あなた背が高いんだし、子ども相手にはちゃんと視線を下げてあげないと、怖がらせちゃうわよ?」

「はあ・・・これだから子供は苦手なんだよ・・・。」

薫と菜々子の会話にあからさまに子ども扱いされた蛭は少し複雑そうな表情を浮かべたが、さすがに今回ばかりはいつものように反論しなかった。

相手が歳上と言うこともあるのだろうが、あれだけ怯えた反応を見せてしまつては仕方ないと思つたのだろう。

「いやゝさつすが先輩、眼力だけで相手を凄ませるなんて鬼キャプテンの鏡ですな。」

そしてこの状況が正直『面白かつた』要は、薫を相手にニヤリと笑う。

「・・・要、お前だけ次の部活で2倍しごいてやろうか？」

「2倍何かじゃ物足りないです、通常の3倍でお願いしまゝす。」

自分に対してはバスケットの練習量を増やすなんて罰どころかご褒美である。

「言つたな？ 望み通り3倍にしてやるから覚悟しろよ？」

「こゝら、そんな部活中の顔なんかしたら蛭ちゃんがまた怯えちゃうわよ。」

要が先輩であるはずの薫をからかい、眉間にしわを寄せる薫を菜々子が宥める。

それがおかしかつたのか雛子と千歳が口元に手を当てて笑うが、そんな状況の中、蛭も自然と緊張が解れてクスクスと笑うのだった。

：

午後の部が始まり、運動会も後半戦に突入。

現在の種目は全体競技だが、競技を終えた人から順に応援席へと戻っていく。

2年1組の応援席からは気合の籠った声援が響き渡る中、真も周囲に負けないうる声を張り上げていた。

「フレイヤー・フレイヤー・赤組！」

個人種目と団体種目が混合している運動会では、個々の能力とチームワーク、その両方とも重要な要素となっている。

そして我ら2年1組は、団体競技での団結力ならば全学年でトップと言い切れるだけの自負があるのだ。

健太郎と要の2人がそれぞれ男子と女子を牽引し、かな子はその脇をしつかりと固めている。

リーダーとしての素質に優れた3人が上手くクラスをまとめてくれているおかげで、団体競技における団結力と結束力は非常に強固なものとなっているのだ。

それに加えて今回はかな子が立てた『作戦』の効果もバツチリと効いており、2年1組は例年以上の活躍ぶりを見せ、現在、2年1組を有する赤組がトップ。

2位の青組が僅差で詰め寄ってきているが、今の勢いを維持できれば振り切れる点差である。

1位をキープしていると言うことから自然と土気も高まってきている。

「いい感じにリードを取れているわね。」

隣にいる愛子が嬉しそうに声をかけてくる。

「ああ、これもかな子の『作戦』のおかげだな。」

そう言いながら真と愛子は視線を少し離れた席に移す。

「ふれ〜！ふれ〜！あかぐみ〜!!」

そこには精いっぱい声をあげて応援する蛍の姿があった。

「ね？私の作戦、上手く言ったでしょ？」

かな子が少し得意げにメガネを上げながらこちらにきた。

蛍は無理して周りと合わせなくていいから、マイペースに、だが全力で応援するように。

それが今回、かな子が要と雛子を通じて蛍に伝えた『作戦』だ。

蛍の応援はみんなの士気を高めてくれる。そう睨んでのものらしい。

そしてその効果を、真は身を以って実感したのだ。

蛍の応援は、行事として決められたことだからと言う義務的なものでもなく、かと

言つて周りに合わせるだけの日和見なところも感じさせない。

心の底からみんなに頑張つてほしいと、応援したいという気持ちが自然と伝わってくるものだった。

こればかりは理屈では説明が出来ない。

強いて言うならば、彼女は思っていることが非常に表に出やすいから、言葉にも感情が大きく乗るのだろう。

だからこそ、蛍の声援は、一切邪念のない純な思いが、応援される人の心に素直に届く、とても不思議なものだった。

そして人間の心と言うものは存外単純な構造をしており、上辺でなく心から自分を応援してくれる声援があれば、出来る限りの力を尽くして頑張つてみようと思うものなのだ。

結果、蛍の声援を受けた2年1組の生徒たちはみんな、自分の持ちうる限りの力を尽くして競技に取り組んでいる。

最たる例はやはり要と雛子だろう。

要は元より、雛子はあそこまで運動が得意だったかと思つてしまうほどの能力を發揮しているのだ。

「さすが、かな子。」

真は素直にかな子を称賛する。

正直なところ、かな子と蛍にはほとんど接点がない。

生徒会のプリントを配るときに少し声をかける程度である。

それなのに蛍の個性を見抜き、それを士気高揚のための作戦に活用している。

さすが我らがリーダーである。

「蛍ちゃんみたいな小さい子があそこまで応援してくれているんじや、男としてカッコのつかねえ真似はできねえよな。」

すると少し離れた応援席から健太郎の声が聞こえ、男子たちがうんうんと頷いていた。

「あんたたち絶対にそれ蛍ちゃんの前で言っちゃダメだからね？」

そんな男子たちをかな子が釘刺す。

子ども扱いされることを気にしている蛍が聞けば間違いないく気落ちするだろう。

それは彼女の声援にもダイレクトに影響を及ぼすはず。

今の好調な流れを断ちかねないので、絶対に言ってはならない言葉である。

「おっ、おう、わりい。」

そんな男子との会話もほどほどに、真は競技の方へと視線を戻す。

赤組の快進撃はまだ勢いを衰えてはいない。

このままいけば今年優勝を狙える。

だが一方で、この作戦はただ1つだけ不安要素を抱えていたのだ。

「まあこの作戦、1つ問題があるとすれば……。」

と、思っている内にその不安要素である人物が蛍の目の前を過る。

「あつーちとせちゃん！がんばって〜!!」

その人物に対して蛍がまた声援を送ってしまふ。

直後声援を受けた千歳は再びつむじ風を纏うが如く速度でグラウンドを駆け回っていった。

その様はさながら人の姿を借りた台風である。

「……孤高のクイーンの本気を出させてしまうところね……。」

真の言葉に続き、かな子がやや呆れた様子で頷く。

女子400mリレーに始まり、蛍の声援を受けた千歳は超常的な能力を発揮し幾つもの競技を蹂躪していった。

その結果、千歳を有する青組だけがトップを独走する自分たち赤組に迫る活躍を見せているのだ。

とは言え今のところ僅差でこちらが勝っているし、仮に追い抜かれたとしても蛍に責任を負わせるのは理不尽な話だ。

敵チームとは言え、友達を応援するのは彼女の自由だし、それを禁じなければならぬ理由もない。

そもそも、如何に蛍の応援が士気を高めるものであるとしても、あそこまでドーピングを疑うレベルの極端な影響を受けるのは千歳だけであり、応援するのが蛍で、応援されているのが千歳でなければこのような珍事は起きなかつたのである。

「千歳ちゃん、蛍ちゃんの事大好きだもんね。」

愛子が呑気な口調で語る。

「てゆうか・・・『バカ』だよ。あそこまで行くと。」

真はストレートに本音をぶつける。

「『バカ』よね。」

そんな真の言葉を拾った愛子がニコニコ笑いながら、珍しく毒を含んだ言葉を投げたのだ。

：

これまで応援に全力を注ぎこんでいた蛍だったが、ついに個人競技の出番が来てしまった。

いつも以上に緊張した面立ちで蛍は雛子と一緒に列に並ぶ。

要と雛子が協力してくれたおかげで、何とかゴールまでの距離を走れるようにはなったが、本番を迎えたことによる緊張から、得も言われぬ不安に駆られていた。

(だいじょうぶかな・・・ちゃんと、ゴールまではしれるかな・・・?)

もしも失敗してしまつたら、クラスのみんなに迷惑がかかるだけではない。

練習に付き合ってくれた要と雛子に申し訳ないし、応援してくれている両親たちを落胆させてしまうかもしれない。

失敗することの恐れから、蛍が今にも泣きそうな表情を浮かべたその時、
「蛍ちゃん、何も心配しなくていいわよ?」

隣に並ぶ雛子が優しく声をかけてくれた。

「今日までの練習を思い出して、その通りにすればきつとゴールできるよ。」

それに、私がついてるんだから大丈夫。

もし倒れそうになつても、ちゃんと支えてあげるから。」

「ひなこちゃん・・・。うん、ありがとう。」

雛子の優しい言葉が胸に届く。

失敗を怖がる必要はない、いつも通りにやれば大丈夫。

蛭はそう自分に言い聞かせて、勇気のおまじないをする。

そして、

「位置について、よーい！」

パアーン！

スタートの空砲が鳴り響き、みんなが一斉に駆けだした。

先頭を行くチームとはどんどん距離を離されていくが、蛭は焦らず雛子と歩を並べる。

「1、2！1、2！1、2！1、2！」

走っている最中に少しよろめきかけたが、雛子がすぐに支えてくれたおかげで持ち直す。

歩のペースが掴めず、度々歩幅を乱してしまうが、雛子がすぐに合わせてくれた。

自分の不規則なペースに合わせてもらえるほど、自分の事を理解してくれている雛子
のことを蛭は嬉しく思いながらも、懸命にゴールを目掛けて走る。

そしていよいよゴールが目前まで迫ってきた。

だがその時、蛍たちの前を走るチームが、ゴール目前で転倒したのだ。「あつ。」

転倒した瞬間をみて蛍は驚き、倒れた生徒を案ずるが、同時にこのままいけば最下位は免れると言う打算的な思考もよぎり、その一瞬の試行錯誤が焦りを生んでしまう。

「蛍ちゃん。」

だが雛子の呼びかけに蛍は我に返った。

そうだ。

2年1組のみんなには申し訳ないけど、今は勝ち負けに拘るのを止めよう。

自分のペースでいいから、ゴールできることを目指すのだ。

一瞬生まれた焦りを打ち消し、蛍は再びゴールへと視線を戻す。

「1、2！1、2！1、2！」

そしてついに、ゴールまで辿りついたのだった。

「赤組！3位！」

転倒した組が持ち直すよりも早くにゴールでき、蛍たちは最下位を免れる。

だが蛍にはその言葉が耳に入っていなかった。

胸の内が高揚する。

ずっと運動が苦手だった自分が、2人3脚で一度も転倒せずにゴールまで辿りつけた

のだ。

先ほどまでの不安が全て消え去り、代わりに競技を成し遂げられた達成感が生まれてくる。

「ひなこちゃん・・・わたし・・・ゴールできたんだ・・・。」

「うん、お疲れ様、蛍ちゃん。」

雛子が足に結ばれた紐を解きながら、笑顔でそう称賛してくれた。

「やったあ!!」

「きゃっ、蛍ちゃん。」

嬉しさで感極まった蛍が、雛子に飛びつく。

驚きながらも優しく頭を撫でてくれる雛子に抱きつきながら、蛍は競技を達成できた喜びを噛みしめるのだった。

：

夢ノ宮中学校の方面を見ながら、リリンは商店街を歩いていった。

(もし本当なら……やつらは今頃あの場に……。)

蛍の話によれば、今日は運動会と言う催し物が中学校で開催されているはずだ。

さらに生徒以外の一般客による観戦も可能なため、今日は学校が出入り自由となっている。

(今……あそこにいけば……。)

きつと、全てがわかるはずだ。

自分の胸中に引っかかっている全てが。それなのに……。

(どうして……行こうとしないの……?)

リリンの歩く速度が徐々に遅くなっていき、ついには立ち止まってしまう。

わかるはずなのに、わかりたくない。

わかってしまうと、きつと今までのようにいられなくなる。

(あたしは……。)

もうあの子の側にいられなくなる。

あの子とあの場所でお喋りできなくなる。

(こわいの……?)

あの子との関係が壊れてしまうことが。でもなにを恐怖する必要がある?

あの子は任務を遂行するための道具、ただそのためだけの存在のはずだ。

・・・いや、違う。

自分は今もう、あの子のことを道具とだけに見ることが出来なくなっている。

だから迷っているのか・・・？

違う、なぜならこの迷いは、もしもあの子が・・・。

「・・・ターンオーバー、希望から絶望へ。」

いくつもの自問自答を無理やり断ち切るように、リリンはリリスへと変わり闇の牢獄を展開する。

だがそれから間を置かず、夢ノ宮中学校の方面から4つの気配が確認され、リリスの心は尚も乱されるのだった。

：

競技が全て終わり、これから結果発表と閉会式を迎えようとした矢先、螢たちは闇の牢獄が展開されたのを感じ取った。

すぐさまプリキュアに変身し、闇の波動を探知する。

「商店街の方角ね。」

「くそつ、こんな時に。」

キュアブレイズが位置を特定し、キュアスパークが毒づく。

蛭としても苦手な運動会をようやく終えられたことで体力も気力も疲弊していた時に限って来られたのだ。

正直弱音を吐きたいところだがそうも言っていられない。

すぐにもダークネスを退けて闇の牢獄を解除しなければ。

だがその時、遠くから感知した力の反応が近づいてきた。

「こっちに向かっている?」

キュアプリズムが驚くも、蛭は動じない。

行動隊長の中でただ1人、こちらに向かってくる相手に心当たりがあるからだ。

やがて目の前には、案の定思い描いた人物が辿りついた。

「キュアシャイン。」

左手に黒い球体を浮遊させ、宙を浮いているリリスの姿があった。

「リリス。」

彼女ならば間違いなく自分だけを狙ってくるだろう。

先ほどまでの疲れを無理やり押し込め、蛭はリリスを見据える。

「……っ、ダークネスが行動隊長、リリースの名に置いて命ずる。

ソルダークよ、世界を闇に染め上げろ！」

だがリリースはなぜかこちらに一度視線を外した後、舌打ちをしてソルダークを召喚した。

その姿に螢は違和感を覚えるが、ソルダークが現れたことで戦いに意識を集中させる。

「ちやつちやと終わらせるよ！」

運動会を邪魔され気が立っているのか、キュアスパークが雷を手に纏い一步踏み出す。

「ガアアアアアアアアッ!!!」

だが直後、ソルダークが雄叫びと共に全身から突風を引き起こした。

「きゃああっ！」

目も開けられないほどの激しい暴風に飲まれ、キュアプリズムが叫びをあげる。

螢も両手で顔を覆い風を遮るが、直後、腕の隙間からこちらに迫るリリースの姿を捉える。

「させない！」

だが寸でのところでキュアブレイズが火球を投げ飛ばし、迫る気配を追い払った。

蛍たちは跳躍して一度距離を置き、ソルダークの生み出した暴風から逃れる。そこへ上空からリリースが飛来するが、蛍は地を蹴り自らリリースを迎え撃った。

「キュアシャイン！」

キュアブレイズがこちらに向かって叫ぶ中、蛍は空中でリリースと組み合う。

だが正直なところ、リリースが相手であれば都合だ。

真つ先にこちらに向かってきてくれるだろうから、キュアスパークたちがソルダークの浄化に専念できる。

だがリリースは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら、どこか憂いのある目で睨み付けてくるのだ。

先ほど感じた違和感が徐々に大きくなっていく。

「リリース・・・？」

リリースが困惑しているようにしか見えない。

そうでなくても、これまで自分に対して必ず見せてきた気性の荒さも悦びも見せない。

一体彼女の身に何が・・・。

「キュアシャイン!!」

だが直後、リリースがいつものような形相を浮かべてこちらに爪を薙いできた。

不意を突かれた蛍は防御しようとするも反応が遅れてしまう。

だが次の瞬間、リリスに向かって炎を纏ったヴェールが真つ直ぐに飛んできた。リリスは一旦こちらと距離を取り、その一撃を回避する。

そしてキュアブレイズがこちらの手を引き、一度地上へと降り立った。

「キュアシャイン、大丈夫？」

「うん、ありがとうキュアブレイズ。」

キュアブレイズにお礼を言いながらも、蛍は再びリリスの方へ視線を戻す。

視線の先にあるリリスの表情には、いつもの様に敵意に満ちていた。

…

キュアシャインのことはキュアブレイズに任せ、要はソルダークと対峙する。

「ガアアアアッ!!」

ソルダークが先ほど同じ暴風を放つ。

さすがにあの暴風を前に正面から立ち向かうことは出来ないだろう。

「それならー！」

要は得意のスピードを武器に横へ避け、そのまま回り込み視覚外から攻めこもうとする。

だが暴風の範囲は広く、ソルダークが僅かに体を傾げるだけで射程に入ってしまった。

「キュアスパークー！」

暴風を受ける寸でのところで、キュアプリズムの展開したバリアが身を包む。

この暴風の中では正面に盾を展開しても、側面から流れ込む風までは防げないと判断したからだろう。

だがバリアの中にいたままでは、こちらが身動きを取れない。

するとキュアプリズムが両手に光を纏い、上空からソルダークに目掛けて飛来した。

「はあああつー！」

バリアを纏い強度を高めたキュアプリズムの拳がソルダークの脳天を直撃する。

次の瞬間、ソルダークがよろめくとともに暴風が収まった。

この好機を逃すまいと、要は雷を纏って一気にソルダークまで接近する。

「ガアアアアアアアアッ!!」

だがあと一步及ばず、ソルダークが態勢を立て直し再び暴風を放った。

かわすことも出来ず、要は吹き飛ばされてしまうが、そのままの流れに身を委ねて着地し、一旦後退する。

ソルダークは今度はキュアプリズムを睨んできたが、彼女も1人じゃ対処できないと判断したのか一旦、こちらへと合流した。

「結構手強いソルダークやな。」

「ええ、私たち2人じゃ少し厳しいかも。」

せめてあと1人、ソルダークの気を引くために欲しいところだが、キュアシャインとキュアブレイズはリリスと交戦中だ。

だがこれまでキュアシャインもキュアブレイズも、自分たちがダークネスと戦う意味を見失ったことはない。

ソルダークの浄化を最優先すること。挟撃できるチャンスは必ず来るはずだ。

要はその瞬間を伺うべく、なるべく力を温存して立ち回るのだった。

：

キュアブレイズの援護を受けながら、蛍はリリスと対峙する。

正面から向けられた爪を受け止めるも、こちらの拳を振るえば距離を開けてかわされる。

だがその一瞬を逃さずにキュアブレイズが火球を撃ちこみ、怯んだリリスの隙を縫うように再び蛍は彼女に接触する。

キュアブレイズの力を借りることで、蛍は初めてリリスと渡り合えていた。

(だいじょうぶ・・・たたかえる！)

今までずっと、リリスの怒りに満ちた言葉に、憎しみに満ちた攻撃に、その恐ろしい執念に怯えてきた。

だけど今日は違う。彼女のことなんて怖くはない。

「キュアシャイン！」

いつもの様に怒りに震える声を聞いても怯えない。

鋭利な爪を正面に向けられても怖気づいたりはいしない。

(きょうのわたしは・・・だいじょうぶ！)

「なぜ・・・？なぜいつものように怯えないの？」

こちらの様子を不審に思ったリリスの方が困惑する有様だ。

だが蛍はそれを好機と捉えた。

「いまのわたしなら・・・きつとだいいじょうぶー」

キュアブレイズが、千歳が背中を守ってくれるから。

そして何よりも、今日が運動会だったから。

要と雛子にたくさん支えてもらえた。

クラスメートのみんなからも応援してもらえた。

そのおかげで2人3脚を完走することができた。

今まで苦手と思っていたこと。

自分の力だけでは絶対に成し得なかったことを、みんなから支えてもらえたおかげで成し遂げることが出来たのだ。

それは確かに、蛍に自分を信じる自信を与えたのだ。

「きょうのわたしは、ほんのちよっぴりだけつよいんだからー」

蛍が叫んだ次の瞬間、右手に僅かな光が灯るのだった。

「え・・・？」

それを見たリリスが驚愕する。

隣に立つキュアブレイズも不思議そうな目でこちらを見る。

右手に宿る希望の光の力を、蛍も確かに感じられた。

手に宿る希望の光はうつすらとボヤけて、今にも消え入りそうなほど儚いが、それで

も蛍の意味で手のひらを踊る。

今まで無心に引き出していた力を、蛍は微量ながらも初めて自分の意思で操ったのだ。

「……よし。」

それもまた、蛍の自信へと繋がる。

「ついにやったわね。キュアシャイン。」

戦闘中にも関わらずキュアブレイズが優しく褒めてくれた。

その言葉に蛍もはにかみ、再びリリスを見据えてから右手を差し出す。

例えどんなに微弱だとしても、これまでのように何も持たないよりは遥かにマシだ。

「っ!? ソルダークー!」

そんな小さな力にもリリスは驚いて飛び退き、ソルダークを呼び寄せた。

ソルダークがキュアスパークたちを無視してこちらに向かつて暴風を放つ。

「はあああっ!!」

だがそれに対して蛍は、正面から爪を薙ぐように手のひらを振り降ろした。

次の瞬間、蛍の正面から来る暴風のみ、まるで抉り取られたかのように薙ぎ払われる。

「えっ!?!」

横で見ていたキュアブレイズが回避することも忘れて驚愕する。

キュアスパークたちも一瞬、何が起こったのか分からないと言った表情を浮かべたが、すぐに我に返ったキュアスパークがソルダークに重い打撃を打ちこんだ。

「ガアアアアアアッ!!」

雄叫びとともに後退するソルダークは、再びキュアスパークに狙いを定める。

それを確認した蚩はすぐさまキュアスパークの元へと飛び、合流する。

「キュアスパーク！」

わたしがみちをひらくから、そのうちにソルダークにこうげきして！」

「わっ、わかった！」

再び正面からソルダークの暴風が飛んでくる。

だけど蚩は怯まない。

今の自分は絶対に負けない。

今日一日を乗り越えた蚩には、そう思える自信が湧いてきたのだ。

「はあああっ!!」

蚩は再び光を纏った拳を地面に向かって振り降ろす。

次の瞬間、拳が振り降ろされた直線上の暴風だけが跡形もなく消し飛ぶだけでなく、側面から流れ込む風もまるで壁に遮られたかのように遮られた。

まるでその空間だけ、全ての力が消失したかのような不思議な現象が起きたが、キュ

アスパークはその機を逃さず、正面からソルダークに殴りこむ。

腹部にキュアスパークの一撃を受けたソルダークは前のめりに倒れ込み、続いてキュアブレイズとキュアプリズムが側面から追い討ちを仕掛け、最後に蛍が跳躍し、頭上からソルダークを踏みつけた。

完全に地面に倒れ込んだソルダークを正面から捉えたキュアスパークが、右手を横にかざす。

「光よ、走れ！スパークバトン！」

キュアスパークがスパークバトンを構えた姿を確認した蛍は、ソルダークから距離を置く。

「プリキュア！スパークリング・プラスター！」

キュアスパークの浄化技を受けたソルダークは、断末魔とともに消滅する。

「・・・キュア・・・シャイン・・・」

そしてリリスは、自分の名前をか細い声で呟き姿を消すのだった。

∴

リリースを退けた蛍たちは無事に閉会式を迎えることができた。

生徒たちはみんな列に並びながら、自分たちのチームがいつ名前を呼ばれるかを待ちわびる。

「第4位！白組！続いて第3位！緑組！」

2組と4組からは落胆の声、1組と3組からは安堵の声が聞こえる。

残るは自分たち1組の赤組と、千歳のいる3組の青組だ。

途中経過を覆すことなく、1組と3組による一騎打ちとなった。

「そして第1位は！」

1位が決まれば2位も自動的に決まる。

だから夢ノ宮中学校での運動会は、先に1位を発表するのが定番となつていと要から聞いたことがある。

1組と3組の間に緊張が走り、生徒の中には両手を握って祈る人たちも見られた。

そして……

「赤組！優勝おめでとうございます！」

結果発表の後、周囲にいる生徒たちが一斉に喜びで湧き上がる。

だが賑やかな周囲に対して蛍は、言葉の実感が持てず放心状態でその場に佇んでい

た。

「やったな蛍！」

「私たちの優勝よ！」

だがそれも、要と雛子に抱きつかれてようやく実感が出てきた。

直後蛍の心から、喜びと達成感が爆発した。

「やったあ〜！」

要と雛子に挟まれながら、蛍は嬉し涙を流す。

「ありがとう、蛍ちゃんのおおかげだよ。」

そんな自分の元に、学級委員のかな子が声をかけてきた。

だがその言葉の意味が分かりかねず、蛍は首を傾げる。

「え？」

「あなたの精いっぱいのおおかげが、私たちに力をくれたの。」

かな子の言葉に、クラスメートたちは全員笑顔で頷いてくれた。

要と雛子も優しく背中を押してくれた。

本音を言えば、自分の応援なんかでそこまで力になれたのだろうか？と思ってしまうが、彼女たちの表情からは遠慮が感じられなかった。

「……うん、ありがとう！」

「もう、なんで蛍ちゃんがお礼を言うのよ?」

クスクスと笑うかな子に蛍も恥ずかしそうに微笑む。

でも本当に、お礼を言いたいのはこちらの方なのだ。

運動が苦手だったから、運動会でみんなと力を合わせることなんて出来ないと思って
いたから。

でも自分はきつと、みんなを応援することですの輪の中に入ることが出来たのだか
ら。

「蛍。」

名前を呼ばれた蛍は要の方を振り向く。

「運動会、楽しかったやろ?」

「うん!」

蛍はそれに迷いなく答えることが出来た。

みんなで力を合わせて協力し、1つの学校行事に取り組む。

また1つ、夢を叶えることが出来た蛍は、クラスの輪の中で喜びを分かち合うのだっ
た。

…

次回予告

「アツプルさんが出張!？」

「帰ってくるまで千歳ちゃん1人暮らしってことよね?大丈夫?」

「平気よ。出張と行ってもほんの3日だし、何も問題はないわ。」

「でっでもちとせちゃん、家事とかしたことあるの?」

「ないけどアツプルが横でやっているのいつも見ていたもの。何も心配はいらないわ。」

「アツプルがいなくても、3日くらい私1人で大丈夫なんだから!」

「不安だ・・・。」

次回!ホープライトプリキユア第18話!

「リン子が出張!?千歳の一人暮らし初体験!」

希望を胸に、がんばれ!わたし!

第18話

第18話・プロローグ

夢ノ宮中学校より少し離れた住宅地の一帯。

そこにあるファミリー向けのマンションで、千歳はいつもと変わらぬ朝を迎えていた。

ベッドから起きて身だしなみを整え、リビングへと足を運び入れる。

「おはよう、千歳。」

「おはよう、リン子。」

既にリン子が朝食の支度を済ましており、テーブルの上にはトーストパンと目玉焼き、サラダにモーニングコーヒーが並べられていた。

千歳が起床する時間に合わせて食事の支度をする、というのは昔からリン子が得意とする技である。

こちらの世界に来てから、秒単位で時間を測れ指定された時間にベルを鳴らす目覚まし時計を活用するようになり、故郷にいたときよりも正確な時間に起きる習慣を身に付けているので、リン子も故郷にいた時よりもさらに正確なタイミングで朝食が出るよう

になっていた。

「いただきます。」

さつそく椅子に座りパンを一口。

サクつと気味の良い音と共に焼きたてのパンを美味しく頂く。

こちらの食事の好みを知り尽くしている彼女ならではの焼き加減だ。

リン子もテレビを付けた後、座って食事を始める。

「そろそろ期末試験の時期だけど、勉強の方は大丈夫？」

食事をしながら、リン子が要が聞いたら肩を落としそうな話題を振って来た。

期末試験の実施は来月の上旬。

今月がもう半月を切っているので、そろそろ試験対策も本格化してくる時期だろう。

「何も問題ないわ。」

だが千歳はあっさりそう答える。

この世界に来たばかりの頃、生きていくために必要な知識を身に付けようと思い、学校の勉強には必死に取り組んできたのだ。

結果として、生活する上で必要な知識と言うものは学校からほとんど学ぶことは出来なかったが、故郷にはない多くの分野に関する学問や、この世界の歴史についての知識は非常に興味深く、千歳にとってはキラキラと輝く宝石のようなものだった。

以降、日々の予習と復習に積極的に取り組んでいる。

そして試験と言うのは日々の勉強の成果をみせるものなので、言うなれば千歳は毎日試験勉強を続けているようなものだ。

だから試験の日程が近づいたからと言って特別焦る必要はない。伊達や酔狂で学年1位を取り続けているわけではないのである。

「そう、それなら良いわ。」

しばし会話が途切れ黙々と食事が続くが、リン子にはいつものような落ち着いた様子がなく、どこか忙しないように見えた。

時々こちらの様子をちらちらと伺い、話を切り出すためのタイミングを見ているようだ。

「リン子、どうかしたの?」

さすがに彼女の様子が気になり、千歳自らが助け舟を出す。

するとリン子はしばし頬をかいて目線を逸らし

「あくえ〜つとね。」

らしくもなく歯切れの悪い様子で話題を切り出し、こちらを伺いながら「私、来週3日間だけ出張することになったの。」

「……ええ〜つ!!!?」

千歳の日常を吹き飛ばす発言をサラリと飛ばしてくるのだった。

第18話・Aパート

リン子が出張!?千歳の1人暮らし初体験!

いつもと変わらぬ朝に突然、リン子から爆弾発言を飛ばされた千歳は大いに驚きながらも、朝食を終えて学校へ行く支度を始める。

そしていつものようにリン子に髪を結ってもらいながら、千歳は出張について聞いてみた。

「出張って、いつから?」

「今週の日曜日から水曜日までね。」

日曜の夕方ごろにはここを出るわ。」

「そつそう、でもリン子と私が2人暮らししてるの、上の人は知ってるはずよね?」

千歳は少し声を震わせながら、リン子の上司を遠回しに非難する。

3日間とはいえ、立場上、母子家庭である自分たちに対して親に出張を命令するなんて、この世界の常識で考えれば理不尽な話である。

「ええ、でもお得意先との打ち合わせとご挨拶も兼ねて、是非ついてきて欲しいって、上

の人が頭を下げてまでお願いしたのよ。

だからさすがに、断りきれなくて。」

少し自分に申し訳なきようにリン子が事情を説明する。

リン子が今の職についてから約半年。

それだけで出張を任されるほどだから、彼女がどれだけ職場で重宝されているかが伝わってくる。

そんなリン子の事は内心、育ての親として誇りに思っているが、同時に一人残されることになる自分よりも仕事を優先してしまったのかと思ってしまう。

それにほんの3日間なのかもしれないが、一度それを許容してしまったら、この先3日間程の出張であればもう断ることが出来なくなるだろう。

これからも先、1人で過ごさなければならぬ日が来るのだろうかと思うと、それだけで気が落ち着けなかった。

そんなことを考えている内にリン子が自分の髪を結び終わり、制服のリボンを結んでくれた。

「これでよしと。」

「・・・ありがとう。」

リン子にお礼を言いながら、千歳は鞆を手に取り玄関に立つ。

「それに、3日くらいならあなた1人でも大丈夫でしょう?」

「なっ……。」

が、家から出ようとした矢先、リン子から発された言葉に千歳の思いは盛大に反転する。

「とつ当然よ! 3日くらい1人で過ごすことなんてわけないわ!」

そしてリン子への反抗心からつい強気な態度を取ってしまった。

先ほどまで1人置いていく事を不満に思いながら、今度は露骨に子ども扱いされたことについてムキになってしまう。

しかもそれが所謂子供心から来る反発心となれば、自分は遠まわしに彼女のことを『母親』と同質の存在だと認めてしまうことになるので、殊更膨れた様子を見せて顔を背けてしまう。

「ふふっ、あなたならそう言うと思った。」

が、微笑むリン子の様子を見て、千歳は彼女の口車に上手く乗せられてしまったことに気が付く。

だがもう後の祭り。

一度見栄を張ってしまった手前、引くに引けない状態に自分を追い込んでしまった千歳は、せめてもの強がりです堂々と胸を張って登校するのだった。

:

夢ノ宮中学校2年1組の教室。

雛子たちは千歳を誘ってお弁当を食べていたところ、千歳から衝撃の言葉を聞いてしまふ。

「リン子さんが出張!?!」

さつそく話題に上がった言葉に要が驚いて身を乗り出す。

「そんなに驚かなくても。」

「驚くわよ。」

だつてリン子さんが家を空けるってことは、千歳ちゃんしばらく1人で暮らすってことですよ?。」

「と言つても、ほんの3日だけよ?。」

「でつても、ちとせちゃん、家事とかできるの?。」

驚き心配する雛子たちを前に千歳はあくまでも平静を装うが、蛍さえも心配そうに尋

ねてきたので少し困惑した様子を見せる。

だが千歳には申し訳ないが、彼女の日常で世話役にして母親代わりでもあるリン子一人に身の回りのことを全て任せている姿はありありと想像できても、一人で家事をこなしている姿はどう頑張っても想像できないのだ。

それに忘れたわけではないが彼女は異世界（フェアリーキングダム）出身だ。

こちらの世界では日常生活においても大なり小なり機械の恩恵を得ているが、あちらでは機械と言う概念そのものが存在していない。

洗濯1つとっても今の時代、昔話のように川で洗濯と言うわけにはいかないのです、家事するには機械の類に触れることは避けて通れない。

そして雛子が見た限りでは、千歳がこれまで触れた機械の類はインターフォンとテレビやエアコンのリモコンくらいである。

家事をするにあたって必要な機械である掃除機や洗濯機の使い方をちゃんと覚えているのだろうか？

「やったことはないけど、リン子がいるところを横で見ただことはあるから、何とかわかるよ。」

一方千歳は殊更何もないかのようにあつさりと言つてのけるが、案の定の答えに雛子たちの不安は増す一方だった。

如何に彼女が勉強もスポーツも共にそつなくこなす完璧超人なイメージがあつたとしても、それは基礎能力に裏打ちされたものであり、家事の類に関する経験値は全くないはず。

そんな千歳から隣で見えていたから大丈夫だなんて根拠のない自信を言われても何も説得力がない。

何の脈絡もない自信を持ちだすところまで隣の悪友と似てなくてもいいのに・・・と、雛子は全く関係のない方向でも呆れながら小さくため息を吐く。

「あつそうだ、チエリーちゃんに3日だけちとせちゃんのお家にお泊まりするようにたのもつか？」

すると蛍がそんな提案をあげてきた。

そう言えばチエリーは、フェアリーキングダムにいた頃はメイド見習いとしての研修をリン子の元で受けていたと言っていたし、常に家事を担っている蛍からわざわざ提案が上がったということは、チエリーは家事に必要な機械を使ったことがあるのだろう。

蛍の両親は共働きなので夜までいないことが多いようだし、その間に蛍と一緒に家事をしたことがあるのかもしれない。

いずれにしても名案だと思い、雛子も要も首を縦に振って頷く。

「それまでしてもらわなくてもいいわよ。」

が、千歳本人はそれをやんわりと断る。

どう見ても意地を張っているだけなのは明白だが、ここまで来ると今は何を提案しても流されてしまいそうだ。

雛子たちは仕方なく、千歳の様子を見ることにするのだった。

：

日曜の夜。

リン子は私室で出張の支度を終えたところだった。

この街から出張先のビジネスホテルまでおよそ3時間ほど。

今から家を出れば、向こうへの到着は夜の10時を回るころになるだろう。

本来ならば今日の夕方にはホテルへ到着する予定だったが、ギリギリまで千歳の様子を見て起きたかったリン子は、上司に頼み何とかこの時間まで出発を後らせてもらったのだ。

が、そのことをすっかり千歳に知られてしまい、子ども扱いをされたのだと思った彼

女は猛反発。

普段なら自分に任せっきりの皿洗いを、一人で出来るから出張の支度をしていろとりピングを追い出されたのだ。

1人でも家事をこなせるから大丈夫だとアピールするのが目的なのだろうが、そんな千歳の『子供心』を汲んだリン子は何も言わず彼女に任せることにした。

そして身支度を終えたリン子がリビングを訪れると、千歳がちょうど夕飯で使った食器を洗い終えたところだった。

どこか誇らしげに胸を張っている姿は面白可笑しく、同時に微笑ましいものだと思いつつ、リン子は玄関の前に立つ。

「リン子、もう出るの？」

すると両手を吹きエプロンを外した千歳が、玄関前まで来てくれた。

「ええ。」

あれだけ威勢よく意地を張っていた千歳だったが、今の姿はどこか元氣のないように見えた。

いざこの時が来れば寂しいと言う思いが隠しきれてないのだろう。

産まれたときから今日までずっと、この子の側についていたから。

それにほんの数日とは言え、自分から離れて1人で生活するのは、彼女にとって人

生で初めての経験となる。それが不安でたまらないのだろう。

リン子は赤いハイヒールに足を入れながら千歳に目配せをする。

その意味を捉えた千歳が、不思議そうに首を傾げながら側に来る。

「わっ。」

そんな千歳の頭をリン子は優しく撫でる。

「ちよつと、リン子。」

「ちゃんと良い子にしているのよ?」

あの時は千歳を煽るような言葉で乗せてしまったが、ああでも言わなければこの子は納得しなかつただろう。

だが不安なのはこちらも同じだ。

千歳の身の回りのことを全て請け負うのが仕事だったから仕方ないとはいえ、自分はこの子に家事のいろはを教えたことがないのだ。

こちらの世界に来てそのスタンスを変えなかつたことが、こんな形で裏目に出てしまった。

一応、部屋は隅々まで掃除したし洗濯物も全て乾かしてある。

ご飯だって3日分は作り置きしてあるので、数日間家事をしなくてもは大丈夫なよう下準備はしたが、それでもこの子の様子を近くで見ることが出来ないのだ。

「もう、子ども扱いしないでよ……。」

千歳は少し不貞腐れるように顔を俯けて呟く。

不安と反発の入り混じったその言葉を聞き、リン子は優しく千歳を抱く。

「ご飯は冷蔵庫に作り置きしてあるから、レンジで解凍して食べるのよ?」

「それも聞いた。」

「あとコンロは絶対に使ってはダメ。」

「それも聞いた。」

「それから洗濯と掃除は無理にしなくてもいいからね。」

空けるのは3日間だけだし、替えの服も3日分くらいはあるはずだから。」

「もう、それくらいなら出来るわよ。いつまでも子ども扱いしないで。」

突っぱねるような言い方をするも、千歳の言葉には覇気がなく、自分から離れようと

もしなかった。

これ以上はこちらの方が名残惜しくなりそうだから、リン子は千歳から手を離す。

「ふふつ、わかったわ。それじゃあ行ってきます。」

何かあったら遠慮なく連絡しなさいね。」

そう言いながら携帯電話をかざすリン子を一瞥し、千歳はそっぽを向いて一言言う。

「……いつてらっしやい。」

ドアを開けて外に出て、最後にもう一度だけ、千歳の姿を一瞥する。寂しさと不安が滲み出ていた表情を見ながら、リン子は少しずつドアを閉めるのだった。

：

翌朝、起床した千歳はいつものように身支度を整えてリビングに向かう。

「おはよう、リン……。」

いつもの癖で呼びかけてしまいそうになった千歳は、台所にリン子の姿がないのを確認して寸でで止まる。

「つと、リン子は昨日出てったばかりじゃない。」

気を取り直して食パンをトースターに入れ、冷蔵庫から牛乳とジャムを取り出してテーブルに並べるが、心に潜む寂しさを隠しきるには至らない。

こんがりと焼けたパンを口にするが、普段とは焼き加減が明らかに違う。

そして牛乳を飲む度に、リン子の入れたモーニングコーヒーの味が頭をよぎった。

これまで感じたことのない、非常に味気ない朝食の中で千歳は今頃、出張で都心にいるリン子のことを心配する。

「リン子……どうしてるかな？」

今でこそこの夢ノ宮市は住み慣れた街となり、この世界の常識についても多くを身に付けることができているとはいえ、千歳たちにとつてこの世界が異世界であることに変わりはなく、夢ノ宮市以外の世界を知らない。

テレビで都心の映像が映し出されるのを見たことはあるが、それだけでも人の数も建物の数もこの街の比ではないことは一目瞭然であった。

そんなところに今彼女がいると思うと心配でならない。

「……もう、初日からこんなんじや、帰ってからリン子に笑われるわよ。」

と、ここで千歳は無理やり思考を遮断する。

冷静に考えればこの世界で既に社会人として働き、チェリーたちの身分証明書まで作り出せる彼女は、自分よりも遥かにこの世界に馴染んでいる。何も心配なんていらなはずだ。

リン子の恋しさにこんなことにまで思考が回ってしまったかと思うと恥ずかしい。

これではまるで親離れできない子どもではないか。

「そうよ、いつまでもリン子に頼りっぱなしじゃダメ。」

私だつてもう子供じゃないんだから。」

食器を片付け皿を洗い、髪とリボンを結んだ千歳は学校へ行くための支度をする。だがこの時、今日は独り言が多くなつていたことに、千歳は気付かなかつたのだつた。

∴

要が雛子と一緒に登校していると、手を大きく振つて笑顔でこちらに駆け寄る蛍の姿が見えた。

「かなめちやくん！ひなこちやくん！」

「蛍、おはよう。」

「おはよう、蛍ちゃん。」

蛍と合流し、3人でお喋りしながら登校していると、ふと先週の会話を思い出す。

「そう言えば、リン子さんの出張つて今日からだつたっけ？」

要が話題を振ると、蛍も雛子もあつ、とした表情で顔を見合わせる。

「ちとせちゃん、だいじょうぶかな？」

「さすがに登校できないってことはないと思うけれど……。」
「それはちよつと心配し過ぎじゃない?」

さすがに千歳に対して失礼なほどに大げさな心配だなと思い、要は雛子の言葉に肩を落とすが、その気持ちもまあ、わかる。

赤子の頃からリン子に育てられてきた千歳のことだから、彼女が私生活の大半をリン子に面倒を見てもらってきたことは想像に難くないし、何よりリン子はなんでも出来る。ぎる。

この世界にきて半年で機械の扱い方をマスターし、自分の戸籍を獲得し身分証明書さえも作り出してしまふほど、この世界の情緒に対して詳しい。

既に社会人として大成で来ていることを考えると、下手をすれば自分たちよりもよっぽどこの世界の社会に馴染んでいるのだ。

だがその分、いなくなったときの影響と言うのは決して小さくはないはず。

さすがに千歳が一人で服も着られないほどにリン子に依存しているとは思えないが、例えば寝坊はしないか、朝食はちゃんと取れているのか、家の戸締まりを忘れていないか等、パツと思いつくだけでも心配の種は多い。

一瞬、母親か!と自分でツツコミを入れたくなつたが、こればかりは仕方がないだろう。

「みんな、おはよう。」

すると学校前で千歳がこちらに向かってくるのが見えた。

制服はちゃんと着用できており、カーデイガンもシャツも、スカートにもシワは見られない。

シャツがはみ出ていることもなく、身だしなみはしつかりと整っており、さつそく着替えまでも世話役のリン子に任せつきりではないのかと言う疑念が払拭されたのだが……

「……あれ？」

彼女の姿を見た途端、要は声を詰まらせる。

隣を見ると雛子と蛭も目を丸くしていた。

「ちとせちゃん……。」

蛭が言いずらそうに口を開く。

こればかりはリン子に任せていたのだと言う箇所が一見してわかってしまったのだ。

「どうしたの蛭？」

「えと……せいふくのリボン、むすびかた、ちよつと変じやないかな？」

「えっ？」

千歳は驚きながら自分のリボンと蛍のリボンを見比べる。

左右対称、しっかりと中心に結び目が作られている蛍のリボンと違い、千歳のは左右の長さがバラバラ、結び目も中心になく何よりも結び方が明らかに違っていた。

二重三重に交差結びを繰り返して、無理やり形をよく見せようとしているだけなのだ。

ついでに言えば、オシャレに無頓着な要でさえ一見して気づいたレベルだから、『ちよつと変』どころのレベルではない。

「あと髪形の位置、少しズレてない？」

「ウソ!？」

困惑する千歳に雛子が追い討ちをかける。

普段千歳は、長い青髪をまとめてサイドテールで束ねており、髪は耳に被さらない程度の位置にピッタリと合わせている。

だが今日はいつものよりも手前の位置で束ねており、彼女の長髪が耳に覆いかぶさっていた。

これも普段の千歳を見ていれば一見してわかるレベルの違いである。

蛍と雛子に立て続けに指摘された千歳は、大いに慌てながら周囲を見渡す。

すると登校中の生徒たちはみんな、千歳を一瞥しては不思議そうな表情を浮かべてい

た。

「・・・そういえば今日、周りからの視線が妙におかしかった気がしたけど・・・。」

そんな千歳の言葉に要と雛子はそろってため息を吐く。

道行く生徒たちもみんな、今日の千歳の違和感に気が付いていたのだ。

そう、歩く姿さえもモデルのように映る千歳は、決して持つて生まれた容姿だけでそこまでの魅力を引き出しているわけではない。

服装と髪形もビシッと決めていたからこそ、彼女の容貌は引き立てられていたのだ。

だが今日はそれが瓦解してしまっている。

それも制服だけならばいつもの様に綺麗に着こなしているのに、猶更りボンと髪の前れ具合が強調されてしまったのだろう。

余談だが、彼女の今の姿だつて決して見るに堪えないと言うほどの酷い有様ではない。

これが平凡な容姿の生徒だとしたら道行く生徒の中に溶けこんでいたのだ。

そう、千歳でなければ明るみに出るような問題ではなかったのだ。

「もしかして私・・・かなり目立っていた・・・？」

そう、恐ろし気に聞いてくる彼女を前に、要たち3人は揃つて頷くのだつた。

:

雛子たちは急いで教室まで向かう千歳の後を追ひ、2年3組に足を運んだ。

着くや否や千歳は挨拶も無しに自分の席に着き、リボンと髪を必死に隠そうと俯いてしまう。

「千歳ちゃん、俯いて隠したって、一日中そうしているわけにもいかないでしょ？」

「それは・・・そうだけど。」

「私が直してあげるから、ほら、顔を上げて。」

雛子がやんわりとした口調で千歳を諭すと、ゆっくりと顔を上げてくれた。

まずは制服のリボンを解き、千歳に教えながら結んでいく。

「これでよしと。」

「わざわざありがとう、雛子。」

頬を赤くしながらも、千歳は雛子にお礼を言う。

「どういたしまして。結び方はこれで覚えられたかしら？」

「えっ、ええ、もう失敗はしないわ。」

やや歯切れの悪い千歳の返事を聞いて微笑みながら、雛子は千歳の髪を解き、鞆から携帯用の櫛を取り出し千歳の髪をとき始める。

「いや、教室に入って来た時からなんか変だなとは思ってたけど。」

こちらの様子を見ながら未来が割って入ってくる。

「・・・そんなに目立ってたかしら？」

「かなりね。」

「千歳は元が良すぎるからね。ちよつとした綻びも命取りよ。」

未来のストレート過ぎる感想と、優花の褒められているのか責められているのか判断に困る言葉を重ねられ、千歳は深くため息を吐いた。

「それでもリボンの結び方知らなかったのはびつくりだよ。」

普段お母さんにしてもらってるの？」

「まあ・・・そんなところ。」

未来の言葉には『私は一人で出来るけど?』と言う意味が含まれていたからか、千歳が煮え切らない返事をする。

最もそれ以上に、リン子を母と認めてしまうことについて反抗的になってしまったのだろう。

「千歳のお母さんって明後日まで出張なのでしょ？」

初日からこんなんで大丈夫？」

どこまでも遠慮のない、だが千歳のことをしっかりと案じている優花の言葉に、千歳は言葉を詰まらせる。

その内に雛子は彼女の髪を結び終わっていた。

「はい、おしまい。」

「おっ、いつもの位置に落ち着いたな。」

要の感想に雛子は少しだけ鼻を高くする。

人の髪をとかして結うのは初めてだったが、存外上手く行くものだ。

特に千歳の髪はとて澄んだ青色でサラサラのストレートだったものだから、彼女には悪いが人形遊びをしていたようで楽しかった。

これがプライベートだったら色んな髪形をセットして遊んでいたかもしれない。

「髪を結うときはちゃんと鏡を見てやった方がいいわよ？」

「そうしたつもりだったのだけど・・・。」

雛子の忠告に千歳は渋い表情を浮かべる。

「自分でもわからなかった？」

「・・・。」

雛子はその沈黙を肯定と受け取り、要と未来、そして優花からやれやれと言ったため

息が出る。

どうも千歳は自分でしていることと、リン子に任せていることの習熟度に大きな差があるようだ。

制服は乱れることなく着ていることから恐らく自分で着替えているのだろう。

だがリボンと髪結びがこのありさまと言うことは、こちらは普段からリン子に任せつきりだったに違いない。

そして千歳は、家事はリン子が行っているところを見ただけだと言っていたはずだ。

だから雛子を含むこの場にいる全員が確信しただろう。

千歳は絶対に家事ができないと。

「あつ、あの、ちとせちゃん。

やっぱりきようはサクラちゃんにきてもらったほうがいいよ。」

同じ懸念を抱いた蛍があわあわしながら以前の提案を再び突き付ける。可愛い。

そんな中でもチェリーたちのことを知らない未来や優花の前なので、ちゃんと人間の名前を使い分けるあたり流石の気遣いである。可愛い。

「サクラちゃん？」

「千歳んとこの近所に住んでる、親戚で家政婦見習いの女子高生だよ。」

初めて聞く名前に未来が首を傾げ、要が答える。

なぜか『女子高生』と言う単語を強調していたような気がするが気のせいだろう。

「だから大丈夫だって。」

だがこの期に及んでも千歳は強がりを止めなかった。

蛍の手前、カツコつきたいと思う気持ちは分かるが、これ以上は無益だと言うのに向に止める気配がない。

千歳がここまで意地っ張りだったとは知らなかった雛子たちは、友達の新しい一面が見られたことを楽しく思う一方で、何もこんなときに意地を張らずとも思ってしまう。

「千歳ちゃん、あまり無理はしない方が。」

「無理なんかじゃないわよ。」

リン子がいなくても、3日くらい私1人で何とかしてみせるんだから。」

だがどこまでも、リン子への反抗期と言う子供心が邪魔をするみたいだ。

これはもういつそのこと、その決心が折れるまで1人で任せてみようと思う雛子であった。

…

学校を終えて家に帰った千歳は、鞆を部屋に置いてさっそくりビングへと向かった。「よし、まずはリビングの掃除からね。」

千歳は気合を入れて掃除に臨む。

リン子には3日くらい放っておいても大丈夫と言われたがそうはいかない。

この世界では意味を成さないとはいえ、自分はフェアリーキングダムの姫だ。

それを誇りに思っているし、その矜持を捨てるつもりもない。

そして人の上に立つものは常に人の模範とならなければならない。

姫たる自分が埃の残った部屋で生活しているだなんて、あつてはならないのだ。

だが何も心配はないはずだ。

何せこの世界には掃除機と言う便利な機械がある。

如何な自分が家事の経験が無いとは言え、フロアの上を滑らせるだけで塵も埃も吸い取ってしまう、この世界の文明の結晶ともいうべき代物の力を持つてすれば、すぐに部屋中をピカピカにすることが出来るだろう。

千歳はさっそく掃除機を見つけて手に取りスイッチを探す。

掃除機を使うのはこれが初めてだが、これまでの経験から、電化製品の電源を入れるスイッチは、ものによって場所こそ違えど、名前は大体共通しているはずだ。

即ち『入』または『切』、あるいは『ON』または『OFF』。

その文字を見つけないことが出来れば掃除機を動かすことが出来るはずだ。

そして探してみると案の定、『入』または『切』のスイッチを見つけないことが出来た。

これで掃除機を動かすことが出来る！

「よし！やるわよ！」

気合を入れ直していざスイッチオン！・・・と思いきや

「・・・あれ？」

何度『入』のスイッチを押してもうんともすんとも音を立ててくれない。

『この掃除機は音も小さく騒音にならない！』と銘打ったCMを見たことはあるが、それ

とは明らかに形が違うし、何よりも小さいどころか一切の無音なのだ。

「まさか壊れた？」

いえ、そんなはずは・・・ならどうして？」

さすがにこれはおかしいと思いつつも、これまで掃除機を使ったことのない千歳は大いに困惑しながら、分けもなく周囲を見渡す。

するとコンセントの差込口が目にとまった。

「そうよーコンセントだわー！」

電化製品はコンセントにコードを刺して電気を供給しないと動かないと言うことを今になって思い出す。

この世界の常識として知識は得ていたが、実際にはコンセントにコードを刺さなくても、テレビのリモコンのように電池で動く機器も存在していたので、千歳にはその切り分けが出来ていなかったのだ。

だがここで千歳は必死になって、リン子が掃除機を使っていた姿を思い出す。

臆気ながらも、掃除機から長いコードが引かれ、それがコンセントに差し込まれていた記憶が浮かんでいた。

「間違いないわ。」

掃除機はコードをコンセントに差し込むタイプね。

これで何とかかなりそうだわ！」

思い当たったが吉。千歳はコンセントに刺しこむためのコードを探してみるが……。

「……おかしいわね。どこについてるのかしら？」

掃除機をくまなく見てみても、コードらしきものが一切見当たらない。

記憶の中の映像では、リン子がこのリビング中を掃除機を使って掃除している姿が再生される。

目の前にあるコンセントに繋がれながら、リビング中を走らせられるのであれば、コードはかなりの長さがあるはず。

となると、コードは外付けなのかと思ったが、これまでリン子がコードを掃除機にかけていた姿を見たことはなかった。

再び行き詰った千歳は、額を抱えて記憶の糸を懸命に辿る。

そこで思い出して来たのは、リン子が掃除機を片付ける時、本体についているボタンを押した途端、コードが掃除機の中に吸い込まれていった光景だ。

つまりコードはこの掃除機の本体に収納されているのだ。

「それなら、きつと取り出すことも出来るはずだわ。」

リン子がボタン一つでコードを回収したと言うことは、逆に1つのボタンで取り出すことも出来るはず。

そう思い当たった千歳は、改めて掃除機のボタンをくまなく探してみる。

すると本体の中央に、何やらひと際目立つボタンがあった。

試しにそれを押してみると、本体のカバーが外れてしまった。

それだけではない。カバーと一緒に大きな袋のようなものが出てきた。

「もしかしたら、この袋の中にコードが巻かれて収納されているのかしら？」

千歳は何とかして袋を開けられないかと、掃除機のカバーと袋を無理やり引き剥がそ

うとし・・・

「きやあつー！」

『ゴミ袋』の中に積もっていたゴミを盛大に床に撒き散らすのだった。

：

放課後、蛍は雛子と一緒に要の部活動の見学に来ていた。

体育館では要と理沙が協力して練習に取り組んでいる。

雛子の話によれば来月に地区大会が開かれるようで、それに優勝出来れば県大会に出場できるらしい。

そして以前の練習試合で、要はチームの主力選手としての力を発揮し始めたので、エースである理沙とのチームワークを促すための練習が多くなっているようだ。

要のバスケに対する情熱と実力は流石だと思いつつも、普段ライバル心を剥き出しにしている理沙と手を取り協力し合う姿は中々に新鮮である。

だがそんなどこか微笑ましくもある光景を見ながらも、蛍の表情はどこか浮かないま

まだった。

「千歳ちゃんのこと、心配？」

隣に並ぶ雛子がそう声をかけてくる。

彼女の前では嘘をついても意味がない・・・と言うよりも多くの人から分かりやすいと言われている自分がウソをついたところで隠せるわけもない。

だから虫は今の素直な気持ちを持ちを打ち明けることにした。

「・・・うん。いまごろ、お家にいるころだよね？」

だいじょうぶかな・・・」

千歳には家事の経験が一切ないからやってはダメだ、と言うつもりは無い。

誰だつて最初は未経験なのだから、そんなことを言いだしたら何も体験出来なくなってしまう。

だが問題はそれを見守ってくれる人、失敗してもフォローしてくれる人がいないということだ。

特に一番心配なのが火の元の扱いだ。

最近ではガスを一切使わない電子コンロと言うものも増え始めているようだが、あのマンションではガスコンロであることは、以前リン子の料理を手伝ったときに確認済みだ。

そして料理をしたことなければガスコンロに触れる機会だつてないだろう。

リン子の性格を考えれば、千歳にガスコンロを使わせないために、前もって料理を作り置きして、電子レンジで解凍するだけで食べられるように準備をしてくれている可能性はあるが、問題は千歳の性格を考えれば、リン子の見よう見まねでガスコンロを使う可能性も否めないと言うことだ。

あまり千歳のことを疑いたくはないが、どうも彼女は普段はクールで思慮深いのに、リン子の前だと背伸びしがちな傾向があるので、不安が拭えない。

一歩間違えれば、ご近所を巻き込んだ大惨事に成りかねないのだから猶更である。

「それならさ、様子を見て来たらどう？」

すると雛子がそんな提案をしてきた。

確かにここまで心配ならば直接様子を見に行くのが一番だろう。

失敗しているようなら助けてあげればよいし、上手く行っているのであれば心配は杞憂に終わる。

だが一方で行ってもいいかと言う懸念もある。

「でも・・・メーワクにならないかな？」

チェリーに手伝いに行つてもらえばと言うこちらの提案を、千歳は常に否定してきた。

母親代わりであるリン子から自立するために自分の力だけで家事をこなそうとしている彼女の決意に泥を塗るような真似にならないだろうか？

それとほんの少し、断られてしまったらどうしようと思うところもある。

千歳のプライドを傷つけてしまうのではないかと言う不安と、拒否されるかもしれな
いと言う恐れが蛍の決心を鈍らせていた。

「蛍ちゃんだからこそ、行っても大丈夫だと思うな。」

雛子がそう優しく声をかけてくれる。

「千歳ちゃん、今絶対に困ってると思うの。」

でもああ見えてすっごく意地っ張りで、見栄っ張りだから、なかなか自分からは手

伝ってって言ってこないじゃない？」

その雛子の言葉に蛍はクスリと笑う。

まるで普段、要の事を話しているかのような言い方だったからだ。

「だから、蛍ちゃんから行ってあげなよ？」

どのみち私や要が行ったところで、私たちも家事が出来るわけじゃないからね。」

その言葉に、蛍の迷いはなくなった。

本当に困っている人は自分からはそう言い出せない。

そんな人たちの助けにもなりたいと言うのが、蛍の思いなのだから。

「うん・・・ありがとうひなこちゃん！」

雛子にお礼を言い、蛍は千歳の家へと真っ直ぐ向かう。

そんな蛍の様子を雛子は優しく見守るのだった。

：

部屋を綺麗にするどころか盛大にゴミを撒き散らしてしまった千歳は、しばし呆然とした後に洗濯機のある洗面所へと向かった。

自分の不甲斐なさに泣きたい気持ちに駆られたが落ち込んでいる暇はない。

制服に埃が付いてしまったのだからすぐに洗濯をしなければならぬ。

撒き散らしてしまったゴミは後で箒と塵取りを使えば良いことだ。

・・・そもそも最初から使ったことのない掃除機よりも箒を使えば良かったのでは？と今更ながらに思い自分に呆れるが、今はそれよりも制服についてしまったゴミを落とすのが先だ。

だがここでまたも同じ問題が発生する。

自分は洗濯機を使ったことがない。

さらに言えばリン子が洗濯機を使うところをほとんど見たことがない。

そもそも意味を成していなかったことは置いておくにしても、掃除機のように記憶を辿ることもできないのだ。

そしてこればかりは掃除機の代わりに箒と塵取り、というような原始的な手段を取ることもできない。

故郷にいた頃、メイドが川原で洗濯をしていたのを手伝った経験があるが、あのときのような洗濯に使うほどの大きさのタライは残念ながら手元にはなく、そもそもこの世界では化学物質による環境問題が世界的に大きく問われている。

家にある洗剤がどんな成分で作られているのか判断することが出来ない以上、迂闊に川で洗濯なんてできないのだ。

「だつ大丈夫よ。」

これだつて電化製品、きつとスイッチ一つで簡単に出来るはずだから。」

それでも千歳は自分を鼓舞して、恐る恐る洗濯機を覗きこむ。

これまでと同じように『入』、『切』に加えて『水量』と書かれたものや『すすき』、『洗い』等々のスイッチが見受けられる。

これを順に押して洗濯を実行していくのだろう。幸いにも故郷での経験からその手

順は覚えられている。

だがここで千歳は1つの問題に直面する。

「15リットル、30リットル、50リットル……水の適量ってなに!」

水量のスイッチには必要な水量が幾分かの刻みで書かれていたが、千歳には洗濯物比の水量がわからないのだ。それだけではない。

「そもそもこの洗濯機、どうやって水を入れるのよ!」

洗濯機の中に水を満たして洗濯物と洗剤を入れるまでは想像できたが、この洗濯機をいっぱい満たせるほどの水量をどこで調達すれば良いのだ?

まさか機械文明がここまで発達しているこの世界で、洗面台からコップいっぱいの水をすくって運んでいくなんて原始的な方法を使うわけがないわけだろう。

と、悩んでいる内に千歳は洗濯機の横に長いホースが置かれていることに気付く。

そして洗濯機の隣には風呂場がある。

「もしかして、これを使ってお風呂から水をくみ上げるのかしら?」

千歳は風呂場の扉を開けてホースの長さを見比べてみる。

この長さなら浴槽まで十分に届くだろう。これで水の問題点は解決だ。

「あとは、洗剤ね。」

再び辺りを見回してみると、洗濯機の上の棚に洗剤らしき箱を見つけた。

ホースを足元に置き、箱を手に取り中をみると、粉末が箱いっぱい詰めており、取っ手のついたカップも入っている。

間違いなくこれが洗剤だ。

「よう。」

あとは洗濯機の中に衣類を入れ、ホースから水を汲みこの洗剤を入れてスイッチを入れるだけ。

何だか諸々の問題事項を忘れていている気がするが、少なくとも掃除機の時とは違い成すべきことは明確になった。

千歳が力強く意気込み、洗濯籠に向かって足を運び込む。

だが慣れない家事に戸惑い冷静さを欠いていたことと、ようやく上手く行けるのではないかと光明が差してきたことで注意力が散漫となっていた千歳は、足元への注意が疎かになっていた。

「あ……。」

しまった、と思った時には既に遅し。

足もとに置いたホースに足を取られた千歳は、手に持つ箱を宙に放り投げながら転んでしまう。

次の瞬間、地面にうつ伏せで倒れた千歳は、放り投げた洗剤を盛大に被るのだった。

：

千歳の住むマンションに着いた蛭は、顔を覚えていてくれていた管理人にお辞儀をしながら302号室を目指す。

そして部屋の目の前まで来た蛭は、少しだけインターフォンを押すことを躊躇するも、すぐに迷いを断ってボタンを押す。

しばらくの間応答がなく、もしかしたら家事に集中していて気づかなかったのかと思いい、もう一度押ししてみようかと思つた矢先、スピーカーから千歳の声が聞こえてきた。

「はい・・・どちら様ですか？」

覇気のない、疲れ切つた様子が伝わってくるような声が聞こえ、蛭はここへ来て良かったと思つた。

「ちとせちゃん、ほたるだけど。」

「えっ!?! 蛭?!?!」

千歳が素つ頓狂な声をあげて驚く。

「えつとね、ちとせちゃんきつと、はじめての家事でたいへんだとおもったから、おてつだいにきたの。」

たどたどししながらも千歳にここへ来た目的を話す蜚。

「べつ、別に大丈夫よ！言つたでしよ？これくらい私一人でも出来るつて！」

わざわざ蜚に手伝つてもらうほどのことでもないわよ。」

この場でも一人で大丈夫だと主張する千歳だが、声が微かに震えており普段のような堂々とした余裕を感じられない。

それが強がりだと言うことは蜚にもわかつた。

彼女は今、困っているのだ。

初めての家事が上手く行かず、いつもの堂々とした振る舞いに余裕が持てないくらいに。

だから蜚は……

「……ねえ、ちとせちゃん。」

助けてあげたいと、心から思つた。

今困り果てている、自分の大切な友達を。

「うまくいなくても、カッコわるくなんてないんだよ？」

「え……？」

「はじめのことだもん、うまくいかないのはあたりまえだよ。

わたしだって、はじめておかーさんのおてつだいしたとき、ぜんぜんうまくいかなかったもん。」

そう言いながら、螢はまだ小学校に上がる前のころを思い出す。

あの時は料理をすれば食材を床に落とし、洗濯物はまともにたたためず、掃除すれば前よりも散らかしてしまいと、まだ幼かったことを考慮しても散々な有様だった。

母の負担を減らすために始めた家事のお手伝いなのに、逆に負担をかけてしまった。

自分には向いていないと何度もしじけて止めようと思つたほどだ。

それでもめげずに精いっぱい頑張り続けたから、螢は一人でも家事をこなせるまでに成長した。

多くの事を失敗から学び、今に繋いで見せたのだ。

だから初めての家事で上手く行かなかつたことを、恥じる理由なんてどこにもない。

「……。」

「ちとせちゃん、まえにもいったよね？」

ちとせちゃんはいつもわたしのことをたすけてくれて、わたしのこと、まもってくれて。

でも、わたしだって、ちとせちゃんのたすけになりたいっておもってるんだよ?。」

尚も沈黙を続ける千歳に螢は自分の思いを素直に伝える。

勉強も運動もそつなくこなせる千歳と自分では能力に大きな差があるから、彼女が自分の助けを必要とすることなんてないと思つていたから。

だけど今、彼女の力になれる。

自分の特技を彼女のために活かすことが出来る。

自己満足かもしれないが、蛍にはそれが嬉しかった。

ほんの少しでもいいから、千歳へ恩返しがしたかったから。

「だから……ここをあけて、ちとせちゃん。」

懇願する蛍の言葉から少し間を置き、ドアが開く音がした。

玄関前に立つ千歳は頭に粉洗剤を被り、服は埃まみれの状態で、肩を落として表情を沈ませていた。

普段の堂々としたカツコイ彼女の姿からはおよそ想像もできないものだが、それでも蛍はそんな千歳を笑わなかった。

それは彼女が、初めての家事に一人の力で頑張った証なのだから。

第18話・Bパート

蛍を家にあげた後、千歳は彼女に促されてシャワーを浴びることにした。

蛍に背を向いてもらい、急いで服を脱いで風呂場に入った千歳はすぐさまシャワーを出す。

シャワーの音が耳元で響いている中でも、向かいの洗面所からは物音が聞こえてくる。

戸で遮られているとはいえ、すぐ側に蛍がいると思うと落ち着かない。

やがて洗濯機の動作音が聞こえてきたので、蛍が洗濯機を動かしてくれたようだ。

となれば、当然蛍に預けた自分の衣類を、彼女が今洗濯機に入れたわけで……。そこには勿論制服だけでなく下着まであったわけで……。思い返した瞬間、顔から火が出るほど恥ずかしくなる。

ただでさえ蛍にだけは見せたくなかったカッコ悪いところを見られてしまった後なので、このまま風呂場に閉じこもりたい気分である。

だがその全てが自業自得だと言う自覚はあるので、これ以上蛍の厚意を無下にすることとは出来ない。

彼女が来てくれなければ、今日一日を無事に乗り切ることすら危うかったのだから。蛍の厚意も自分の羞恥も全て甘んじて受け入れることにした千歳は、とりあえず盛大に洗剤を被った髪をいつも以上に入念に洗い落としていく。

やがて洗面所のドアを開け閉めする音が聞こえ、蛍が出て行ったのが分かって尚、時間をかける。

両親とアップルから綺麗な青髪だと褒められたこれは、千歳にとって密かに自慢の髪なのだ。

そして気が済むまで髪を洗った千歳は戸を開け、ここに来る前に準備しておいた服に着替える。

髪をドライヤーで乾かしながら辺りを見ると、洗濯機がいつもの調子で音を立てながら動いており、洗剤をひっくり返した床は綺麗に掃除されていた。

蛍が掃除までしてくれたのだと内心感謝しながら、千歳はその場を後にしてリビングへ通じるドアを開ける。

すると、目の前にはキッチンの前に立つ蛍の姿があった。

「あつ、ちとせちゃん、おふろあがったんだね。」

リビングを見渡すと自分が撒き散らしたゴミは影も形もなくなっており、フローリングは綺麗に掃除されていた。

「蛭、私がシャワー浴びている間に全部終わらせちゃったの?」

いくらゆつくり時間をかけていたとはいえ、あの間に彼女は風呂場とリビングの掃除をあつという間に終わらせてしまったのだ。

直接見てなくとも時間でわかる彼女の家事スキルに千歳は驚愕する。

「えへへ、でも、ゆかは掃除機かけただけだし、せんたくものは洗濯機のスイッチをいれるだけだから、なにもむずかしいことはしてないよ?」

「うっ……」

彼女が来るまで全く同じことを思っていながら何一つとして上手く出来なかった身としては耳に痛い言葉である。

肩を落とす千歳に首を傾げながら、蛭は冷蔵庫の中を確認する。

「やっぱり、リン子さんごはん作り置きしてくれてるね。」

「えっ、ええ、ガスコンロを私に使わせたくないから、電子レンジで解凍できるものを作っておくって。」

確かサラダと肉じゃが、それから焼き魚なんかも作ってくれたはずだ。

ご飯も多めに炊いてくれたし、古いものはタッパーに入れて冷凍庫に保管してある。

ちなみに蛭が来なかった場合、家事が上手く行かないことに意固地になって一人で料理に挑戦していた可能性は大いにある。

そしてリン子の言いつけを守らずにガスコンロを使っていたことも恥ずかしながら否定できない。

一歩間違えればリン子の帰ってくるこの家を丸焼けにしていたかもしれないと思うとさすがに背筋がゾツとする。

千歳は今までで一番、蛍が来てくれたことを感謝すると同時に、こればかりはさすがに秘密にしておこう・・・と思つたが、その言葉を聞いた蛍がクスリと微笑んでいたの、とつくに自分の考えなんてバレていたようだ。

千歳は少しだけバツの悪そうに顔を俯かせる。

「でもちとせちゃん、ごはんがあるのにお味噌汁がないときみしくない？」

「え？それはまあ、あればいいけど。」

蛍の突然の質問に千歳は困惑しながらも答える。

一汁三菜。

ご飯と味噌汁そして3品の副菜と言うのがこの国の伝統的な食卓だと言うのはリン子から教えてもらった。

とは言え現代では他国の食文化も多分に取り込んでいると聞き、千歳も朝食にトースターと目玉焼きを食べることが多い。

必ずしもその伝統に乗っ取っているわけではなく、そもそも異世界出身の千歳には、

自分が口に行っている食事がどの国の発祥であるかなんてまだ多くを知らないのだ。

だがそんな千歳でも、朝昼夕問わずご飯を食べるときは必ずと言っていいほど味噌汁がセットでついてきた。

それが食卓として当たり前だったのだから、味噌汁がないとどこか侘しく思うのも仕方ないと言うものだ。

「でも私はガスコンロは使えないから、今作ってもらっても冷めちゃうわよ?」

だが今回ばかりは諦めるしかない。

蛭がここでコンロを使つて味噌汁を作ってくれるのであれば嬉しいが、夕飯の時間まではまだ少し遠い。

さすがに冷めてしまうだろうし、コンロを使えないから温めることもできない。

かと言って蛭に夕食の時間までいてもらうわけにもいかない。

彼女だつて両親のために夕食の支度をする時間が必要のはずだからだ。

「だいじょうぶ! わたしにまかせて!」

だが蛭はそう言いながら冷蔵庫から油揚げと葱を取り出し、包丁を手に料理に取りかかった。

少し遠目で見ても分かるほどに包丁さばきが様になっており、瞬く間に油揚げを均等な大きさに切り揃え、葱を細かな輪に切っていく。

そして広げたラップの上に味噌を置き、さらにその上に先ほど切った油揚げと葱、乾ワカメを添えて球状に包み込んだ。

「はい、インスタントお味噌汁のできあがり。」

これなら電子ポットでお湯をわかして溶かせばいいだけだから、コンロをつかうひつようはないよ。」

ものの数分で作り上げてしまった蛭特性・インスタント味噌汁を見て、千歳は驚き目を丸くする。

千歳にとってインスタント食品の利便性と言うのは十分に身に染みているものだ。

リン子が料理を作り置きする間もないほどに忙しい時期には、電子ポットでお湯をわかすだけで簡単に作れるインスタント食品によくお世話になることがある。

故郷ではまだ保存食の技術がそこまで発展していないのもあって、安価で調理行程が単純でかつ美味しく、ものによっては年単位で長持ちするインスタント食品の存在には、最初は目と舌を疑ったほどである。

だがそんなインスタント食品を、料理する暇がないからあるいは作ることができないから『買っておく』と言うイメージしかなかった千歳には、『作る』すると言う発想が湧いてこなかったのだ。

単純な料理の腕だけでなく、料理を創作出来る蛭のスキルに千歳は改めて驚愕する。

普段気の弱い蛍が、料理に関しては自身気な姿を見せるのも頷ける話だ。

自己評価の低い彼女が自分に自信を持てると言うことは、裏を返せばそれだけ秀でた能力なのである。

「・・・なにからなにまでありがとね、蛍。」

「えへへ、どういたしまして。」

はにかみながら笑う蛍の笑顔には、照れくささと嬉しさが入り混じっているように見えた。

友達役に立ちたい、困っている人を助けてあげたいと誰よりも思う蛍にとって、彼女の得意分野が自分の助けになったことが嬉しかったのだろう。

最初から素直に蛍の助力を得ていれば、もつと早くにこの笑顔を見ることが出来たかもしれない。

そう思った千歳は、これまでつまらない意地を張り続けてきたことが急にバカバカしく思えてきたのだった

それからしばらくして洗濯が終わり、蛍と協力して服を干し終えた頃には陽が傾き始めていた。

「それじゃあ、わたしはこれでかえるね。」

「こんな時間までごめんね。」

「ううん、ぜんぜんへいきだよ。」

これからゆうごはんの支度にかかれれば、おかーさんがかえってくるころにはまにあうから。」

「そう。」

おとーさんはいつもかえりがおそいんだけどね。

と最後に付け足した蛭を見ながら、千歳は今日の出来事を振り返る。

そして1つのことを決意する。

「・・・明日。」

蛭が不思議そうにこちらに振り向く。

「明日、チェリーに手伝ってもらえないか、聞いてもらってもいいかしら?」

蛭の前はカツコ良くありたいから、家事の1つも満足に出来ないなんてカツコ悪いところを見せたくない。

そんなつまらない意地を張ってしまったせいで、結局彼女に一番カツコ悪いところを見せてしまったのだ。

だから千歳は思い知った。

出来ないことを出来ないと言つて助けを頼むことよりも、出来もしないことを無理やりやろうとして空回りしてしまうことの方がよっぽどカッコ悪いと。

だから明日は、素直に助けてもらおう。

それでも蛍に頼まなかったのは、今日一日助けてもらったからと言う遠慮と、2日も続けて彼女のお世話になるのは、いくらなんでもカッコが付かなすぎると思つたからだ。

こればかりはどうしても譲ることが出来ない。

「うん、わかつた。チエリーちゃんにそうつたえておくね。」

「ありがとう、蛍。また明日学校でね。」

「うんーまたあしたー！」

笑顔の蛍を見送つた後、千歳は静かにソファに座る。

たった一日で家事の大変さを身に染みた千歳には驚くことばかりだったが、何よりも驚いたのは、初めて目の当たりにする蛍の能力の高さだった。

文武を測る学校では、蛍の評価は失礼ながら平凡なものだ。

運動も勉強もより秀でたものが蛍の周りにはいるから、相対的に彼女の能力は埋もれてしまう。

一方で千歳は、学校ではトップの評価を得ていると言う自負がある。

相応の努力を積んできたし、相応の評価をもらっているからだ。

だから千歳は無意識の内に、蛍のことを下に見てしまっていたのかもしれない。常に彼女の前に立っているのだと思いついていたのかもしれない。

だが学校では評価され難い、家庭で発揮されるスキルは、蛍の能力は千歳は勿論、校内でも右に出るものはいないだろうと思えるほど優れたものだった。

13年の歳月の中で確かに培ってきた蛍のスキルに、千歳は助けられたのだ。

「すごいな・・・蛍は。」

無意識とは言え彼女を下に見てしまっていたことを千歳は恥じる。

それでも千歳は、蛍の前ではカッコよくありたい。

彼女にとってカッコいいと思われる守護騎士でありたいのだ。

それが自分の信条だし、自分にとってのお姫様である蛍の前ではカッコよくありたいと思つて何が悪い。

だからもう、無様な醜態を晒すのは止めだ。

「明日から、また頑張ろう。」

明日はチエリーから家事のいろはを一から教えてもらおうと、千歳はそう決意するのだった。

：

リン子が出張に出てから2日目の朝。

千歳は朝食の準備をしながら、昨日蚩に作ってもらったインスタント味噌汁を冷蔵庫から取り出す。

電子ポットでお湯をわかし、お椀に入れて解凍する。

昨日の残り物の煮物とご飯を添えて1人椅子に座る。

「いただきます。」

まずは味噌汁を一口。味噌特有の上品な塩気が口の中を満たしていく。

そこにご飯を一口。まだ塩気の残る口の中に白米特有のシンプルな味わいが広がっていく。

「・・・美味しい。」

いつも思うがこの組み合わせは抜群だ。

やはりご飯に味噌汁は付き物である。

リン子が出張に出た日から、3日の間は味噌汁は諦めるしかないと思っただけ

に、作ってくれた蜚には感謝しきれない。

程なくして朝食を終えて洗い物を済ませた千歳は、昨日雛子に教えてもらったリボンの結び方をなぞっていく。

「これでよしと。」

教えてもらった通りに結んだので今回は大丈夫だ。

だが髪を結びリボンだけはまだ位置が良く掴めていない。

「・・・これは、また雛子に頼むしかないわね。」

一人で無理なことは無理してやらない。昨日の一件でそれを学んだ千歳は、髪を結ぶリボンを鞆に入れて学校へと向かうのだった。

：

昼休み。お弁当を食べ終えた要たちは教室で千歳を交えて談笑していた。

「今日は妙なところなかつたな、千歳。」

ニヤリと含み笑いを浮かべながら要がからかい気味に千歳に言うが、言われた側はな

ぜかどこか得意げな表情を浮かべた。

「まあね、さすがに同じ間違いを二度はしないわよ。」

彼女が得意げに語る通り今日はリボンの結び目がバッチリだった。

たった一度教えただけでしつかりと身に付けてくるあたり、彼女の飲みこみの早さが伺える。

髪だけは昨日のように雛子に結って欲しいと頼んでいたが、こればかりは普段から自分の姿を鏡で見えていなければ中々わからないものだろう。

リン子に任せつきりだったのであれば、一朝一夕で自覚できるものではない。

逆に言えば、リン子に任せておけば身だしなみについて気にかけることはないと言う信頼の表れともいえる。

ちなみに余談だが、そのせいで千歳は今朝ロングヘアの髪形で登校してきたわけだが、これが普段とはまた違った印象で大人びて見えたので、道行く生徒たちの視線をいつも以上に釘付けにしていた。ついでに蛸も見惚れていた。

「さすが。もう一人暮らしはバッチリって感じ？」

雛子が千歳にそう話題を振ると、今度は一転、彼女は静かに首を横に振った。

「まだバッチリってほどではないわ。」

何も出来なかった昨日よりはマシだけど。

それから蛭、インスタント味噌汁作ってくれてありがとう。とても美味しかったわ。」

「えへへ、どういたしまして。」

「え？何それ？インスタント味噌汁作ったって。」

真が目を丸くして千歳に問いかけ、千歳が蛭から作ってもらったと言うインスタント味噌汁について話す。

みんな蛭の家事スキルの高さに関心する中、蛭は恥ずかしさから顔を赤くして俯いた。

「でも千歳ちゃん、1人の食事って寂しくなかった？」

そんな中、愛子が少し心配そうな表情で千歳にそんな質問をしてきた。

「・・・正直、少し寂しかったわ。」

確かに普段から一緒に夕飯を食べていたわけではないけど、それでも家に帰ってくれば、一緒にいるんだって思えたから。

「それさえないって思うと、ちよつとね・・・。」

「そっか・・・そうよね。」

帰りが遅いとその日は顔を見ることもないけど、それでも家にはいるもの。

でも出張してて、家にすらいないって思うと、寂しいわよね・・・。」

そんな千歳の正直な答えに雛子が微笑みながら同意する。

そう言えば雛子の両親は会社を経営しており、家に帰らないことも多かったか。

普段は祖母の菊子がいるが、菊子は老人会の人たちと一緒に旅行をすることもあり、両親不在の日が重なると雛子は家に1人であることもあるのだ。

そんなとき、寂しさに耐え兼ねた雛子が寝るまで要を長電話に付き合わせたこともあるのは内緒の話だ。

だがそんな雛子だからこそ、誰よりも千歳の心境を察することができたのだろう。

「今の言葉、リン子さんが聞いたらどんな顔するかな〜?」

少し寂し気なムードになってきたので、要は悪戯っぽく笑いながら千歳の顔を見る。

「要、もし話したらどうなるかわかってるでしょうね?」

千歳が先ほどまでのしよんぼりとした顔はどこへやら、目つきを鋭くしてこちらを睨んでくる。

「にひひ、さあどうなるのか興味あるなあ。」

こちらにも気圧されまいと殊更わざとらしく笑う。

だが千歳はこちらを睨み付けながらも、笑みを隠せずにいた。

明るい雰囲気を取り戻した要たちは、その後も冗談を言い合いながら賑やかに昼食を終えるのだった。

:

学校から帰った千歳は、少し晴れ晴れとした気分で玄関を通る。

昨日違い、リボンの結び方はバッチリだったらしく、その他も特に注意されたところはない。

強いて言うならば昨日とはまた違った意味での視線を浴びていたが、昨日のような訝し気な視線ではなかったので、特にミスなく学校生活を終えることが出来たのだ。

「よし、この調子で今日の家事も頑張るわよ。」

と、意気込んでみたはいいものの、正直なところ今日の一日は特にやらなければならぬことはない。

洗濯は昨日終えたばかりだし、昨日蛍が隅々まで掃除をしてくれたので埃も目立っていない。

この様子だと、今日来る予定のチェリーたちの手を煩わせることもなさそうだ。

ピンポーン

すると千歳が帰宅してそれほど間を置かずに呼び鈴が鳴らされた。

「はい。」

「もしもし、サクラです。」

「わーい千歳、遊びに来たよ。」

「こら、サクラが会話してる最中に割り込むな。」

インターフォン越しから3人の妖精による賑やかな会話を聞き、千歳は微笑みながら玄関のドアを開ける。

「いらつしやい、みんな。」

「お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「えへへく姫様のお家だ。」

礼儀正しく挨拶をするベルとサクラとは対照的に、家に入るなり自分の呼び方を戻したレミンははしやぎ回る。

公私をしつかり分けているところを褒めるべきなのか、リビングを走り回るなど叱るべきなのか判断に悩むところである。

「こらレミン、家の中を走り回らないの。」

「すいません、サクラの話を聞くなり付いていくの一点張りです。」

「別に気にしてないわよ。」

あと、こつちの世界ではお姫様じゃないんだから、普通に接してくれてもいいのよ?」
「そうゆうわけにはいきませんよ。」

むしろ人の目を気にしなくて良い場所だからこそ、しっかりと姫様の従者としての務めを果たさせて頂きます。」

「それにここがどこであろうと、どこにしようも、あなたは俺たちにとっての姫様に変わりはありませんから。」

「レミンはサクラが口うるさく言わなければ、普通にするつもりなんだけどね。」

「レミン!!」

故郷から遠く離れたこの地でも3人は自分を姫と慕ってくれている。

千歳はそのことに内心感謝をしながら、今日ここへ3人を呼んだ目的を話す。

「それじゃあ、さっそくで悪いけどサクラ。」

今日は私に家事のいろはを教えてくれないかしら?」

「わかりました。」

まだ見習いの身ではありませんが、何なりとお申し付けください。」

堂々と胸を張ってそう宣言するサクラの姿に頼もしさを覚える。

「それじゃあ、まずは掃除機の使い方とリビングの掃除の仕方を教えてくれないかしら？」

「お任せください！」

掃除機と洗濯機、その他家事に必要な道具の使い方や今日の内にマスターするのだ。張り切るサクラに微笑みながら、千歳も気を引き締めて教えを乞うのだった。

：

学校を終えた蛍が噴水広場を訪れると、いつもの場所にリリンの姿があった。

「リリンちゃん！」

「ほたる。」

またリリンと会える頻度が増えた。

そのことを蛍は心から喜びながら、リリンとのお喋りに夢中になる。

彼女の側にいる時だけに感じられる幸せが、蛍の心を満たしていく。

「それでね、いまちとせちゃん、おかーさんがかえってくるまで、ひとりでせいかつしてるんだ。」

「そっか、たいへんだね。」

「うん、でもね、今日はおともだちがたくさんくるよていで……。」

話ながら蛍はリリンの様子の変化を感じ取る。

彼女の表情に幾らかの笑顔が戻り始めているのだ。

「……ふふっ。」

蛍はそれをまるで自分の事のように喜ぶ。

「ほたる?」

「リリンちゃんに、げんきがもどってよかった。」

「え……?」

困惑するリリンを余所に蛍は言葉が続ける。

「ここのとこりリリンちゃん、ずっとげんきなさそうだったもん。」

でもきょうは、いつもみたいにわらっているから。」

以前見せたような不安な表情や仕草を、ここ最近は見せたことがない。

彼女が何を悩み、どのような不安を抱いていたのかはわからないが、きつとそれが解

決できたのだろうか、蛍は微笑む。

「・・・ほたるが。」

「え？」

「ほたるが・・・そばにいてくれるから・・・。」

するとリリンが歯切れの悪い口調でそんなことを言ってきた。

彼女からこのような好意的な言葉を聞くのは、実は初めてのことだったので、螢は顔を赤くする。

「そつ、そつか・・・。」

お互いに俯き口を瞑る。

しばし無言の間が続いた後、リリンは少し慌てた様子で立ち上がった。

「それじゃ、あたし今日はこのへんで。」

「うっうん・・・。」

気まずい、とは少し違う微妙な雰囲気能耐え兼ねたところだったので、螢も立ち上がる。

「・・・つぎは、いつここで会おつか？」

「えつとね・・・こんどは・・・。」

それでも次に会う約束をちゃんと交わすのだった。

:

蛭とリリンが談笑している中、グリモアは遠目からリリンの様子を観察していた。

一挙手一投足逃すまいと注意深く観察するつもりだったが、すぐにその必要性がないことを悟る。

(・・・なんだ、その表情は?)

リリンの見せた表情が、明らかにおかしかったからだ。

蛭と会話しながら見せるどこか楽し気な笑顔、別れ際の悲し気な仕草、再会を約束した時の安堵を覚えたかのような雰囲気。

『かつての』あの子なら大した演技力だと褒めていたところだが、『今の』あの子ならば話は別だ。

あの表情は、仕草は、決して演技などではない。

それが一目でわかるほど、リリンの表情には『感情』が映し出されているのだ。

(君は、それが何を意味しているのか理解しているのか?)

否、きつと理解できていないのだろう。

あの子にとっても恐らく、無意識の内に訪れた『変化』なのだろうか。だからこそ厄介なことに、リリンにはその自覚がない。

そして自覚のない変化とは、望むと望まざるとに関わらず、そのものの存在を全く別のものへと作り変えてしまう。

「・・・そろそろ、本格的に対策を打つべきかもしれないね。」

やがて蛍を見送ったリリンは、どこか浮かれた表情を見せながら物陰へと姿を眩ます。

そんな彼女の姿を見送ったグリモアは、物陰に姿を隠し、ダンタリアへと変身する。

「ターンオーバー、希望から絶望へ。」

これ以上リリンを、行動隊長でない何かへと変えるわけにはいかない。

ダンタリアは、リリンが自身の存在意義を失う前に、決着をつけないなら思いうのだった。

∴

掃除機を始めとした家事に必要な機械の使い方を、サクラから一通り教えてもらった千歳は、レミンが見よう見まねで入れてみた紅茶を飲んで一息ついていた。

「しかし、サクラも機械を使い方が様になっていたな。」

ベルが感心した様子でそう言い、サクラは少し得意げに鼻を鳴らす。

「レミンはテレビのリモコンくらいしか使ったことないからね。」

「ベルとレミンと違って、私は家で蛍と2人きりになることが多いからね。」

あの子の家事を手伝うことも多いから、機械の使い方は一通り覚えたのよ。」

要の家は母が専業主婦なので家に常におり、雛子は普段祖母と一緒にいると聞いている。

だからベルとレミンは家にいる間は、要と雛子の私室から出る機会があまりないようだ。

一方、サクラの場合、蛍の両親が共働きなのもあって、ほとんどの場合、蛍と2人きりで家にいる。

サクラが見習いメイドなこともあって、一緒に家事をする機会も多いそうだ。

そしてサクラの機械の習熟度は、リン子と比べても遜色のないほど・・・いや、単に自分が低すぎるだけかもしれないが、とにかく家事をする上で必要な練度には十分であった。

「でも、本当に助かったわ。ありがとうサクラ。」

「いえ、礼には及びません。」

姫様のお役に立てたのであれば、従者として光栄であります!」

お礼を言っているのはこちらなのに、サクラの方が畏まってしまふのだから千歳は苦笑する。

ふと時計を見ると、既に夕刻を過ぎており、そろそろ夕食の支度に取りかからなければならぬ時間になっていた。

「それじゃあサクラ、最後に夕食の支度、手伝ってくれないかしら?」

「お任せください!」

「それから、3人に1つだけ頼みたいことがあるのだけど、いいかしら?」
「何でしょうか?」

自分の申し出にベルとレミンもこちらに視線を向ける。

千歳は一拍置いて、今の自分の胸中を素直に打ち明ける。

「良かったら今日、一緒に夕飯を食べてくれないかしら……?」

その……1人の食卓って、少し寂しいものがあるから……。」

顔をほんのりと赤くしながらも、3人から視線を反らさずに千歳はお願いする。

1人で夕食を取るとは別に珍しいことではない。

リン子が帰りの遅いときはいつも1人だったからだ。

それでもリン子が、この家に帰ってこないのだと思うと、ひとりぼっちの食事が急に心細くなったのだ。

昨日一日はそんな寂しさを我慢して1人で食事を取ったのだから、今日くらいはちよつぱり、我儘を言いたい。

そんな子供心で千歳は3人に心中で懇願する。

3人は自分を一瞥した後、互いに顔を合わせて。

「はい、わかりました。」

「その程度、お安い御用ですよ。」

「わくわく、姫様とご飯。」

笑顔で快諾してくれた。

「みんな、ありがとう。」

3人にお礼を言いながら、千歳は今日の食卓に思いを馳せる。

「それじゃあ、先に蛭に連絡しますね。姫様、お電話お借りします。」

サクラがそう言つてソファから立ち上がったその時、

「つ！闇の波動だよ！」

レミンの声とともに全身に悪寒が走る。

急ぎ気配を探ると商店街の方面から絶望の闇が感じ取れた。

「ダークネス……。」

リン子のいない間を寂しく思い、サクラたちの好意を嬉しく思っていたところに水を差された千歳は不機嫌そうに呟く。

自分たちの心境などお構いなしに来ることは分かり切っているが今日ばかりは最悪のタイミングである。

「姫様！急ぎましょう！」

「ええっ！」

妖精の姿に戻ったチェリーに先導され、千歳は家を離れる。

そして商店街までの道を走りながら手にブレイズパクトを具現化させる。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

全身に灼熱を纏った千歳の姿は一瞬にしてキュアブレイズへと変わる。

「世界に轟く、深紅の煌めき！キュアブレイズ！」

そして妖精たちを肩に乗せ、商店街へと飛び立つのだった。

：

商店街から闇の波動を感じ取った螢はキュアシャインへと変身し、キュアスパークとキュアプリズム、そして妖精たちを乗せたキュアブレイズと合流した。

「みんな、ダークネスの反応はこっちだよ。」

闇の波動を感じした噴水広場を訪れると、そこにはダンタリアとソルダークの姿があった。

「待っていたよプリキュア。」

「待っていたとは随分な言い草やな。」

「そろそろ、君たちのことが目障りになってきたからね。」

今日こそ終わらせてあげるよ。ソルダーク！

ダンタリアの呼びかけとともにソルダークが跳躍し、こちらへ飛び掛かってくる。

螢たちは散開してその一撃を交わすも、螢はダンタリアの言動に違和感を覚えた。

彼はサブナックやリリスと異なり、行動隊長の中で最も戦いに消極的だった。

それなのにこちらへの敵意をむき出しにし、まるでこちらと戦うことを待っていたかのような言葉を投げてきた。

「まずは君からだ。」

そしてダンタリアは蛍を真つ先にターゲットに絞り込み、自ら挑みかかって来た。だが以前、ドリームプラザでも同じように奇襲を受けた蛍は、今回は後れを取らずにその一撃をかわして見せる。

続いてキュアスパークが雷を纏って蛍をかばうように割って入り、キュアプリズムとキュアブレイズがソルダークを牽制する。

「キュアスパーク、ありがとう。」

「どういたしまして。」

それにしても、またあんたから攻撃を仕掛けてくるとはね。

キュアシャインを優先的に狙おうとしているの、もう隠すつもりないみたいやな。」

キュアスパークの疑問に対してもダンタリアは涼しい顔だ。

だが彼女の言う通り、これまでソルダークに戦いを一任し、ギリギリまで傍観する姿勢を見せていたダンタリアが、序盤から積極的に蛍を狙い交戦してきた。

蛍を弱者と切り捨て見向きもしてこなかったサブナツクも以前、蛍を優先的に攻撃してきた。

その対応の変化に、蛍は以前キュアブレイズが予期したことを思い出し、身構える。

ダークネスが、フェアリーキングダムを解放した自分の力を危険視し、最優先にターゲットとしてきている可能性が高まってきたのだ。

もう、そんなに危険視されるほどの力を持っている自覚はない、なんて甘えた言葉は通らない。

リリースを含め、行動隊長全員に狙われるようになった事実を自覚しなければ、自分の身を守ることさえできなくなってしまふのだ。

「ソルダークー！」

ダンタリアはソルダークを呼び、挟撃を仕掛ける。

だがソルダークへはキュアスパークとキュアブレイズが、ダンタリアへはキュアプリズムが応戦する。

蛭もキュアプリズムの援護をするために彼女の後を追うが、

「ガアアアアアアッ!!!」

ソルダークが甲高い雄叫びとともに、正面を埋め尽くすほどの吹雪を生み出した。

立ち向かっていったキュアスパークとキュアブレイズは回避が間に合わず吹雪に飲み込まれる。

「くらくらいー！」

吹雪の中、負けじとキュアスパークは突き進もうとする。

だが次の瞬間、キュアスパークの身体に触れた雪が瞬く間に凍結したのだ。

「なっ……。」

「キュアスパーク！」

隣に並ぶキュアブレイズが声をかけるが、キュアブレイズの身体も凍り付いていく。「このっ！」

すぐさまキュアブレイズは全身に炎を纏い、身体に付着した雪を溶かそうとするが、吹雪の勢いはそれを凌駕していた。

キュアスパークもキュアブレイズも両手足が凍り始め、身動きが取れなくなる。

「2人とも！」

キュアプリズムが2人へ振り向くが、ダンタリアはその隙を逃さずキュアプリズムに闇の球体を投げつけた。

「あぶない!!」

蛭が寸でのところでキュアプリズムに飛びつき、何とか攻撃を回避する。

だがキュアスパークたちは吹雪の中にいたままだ。

「まずい、このままじゃ……。」

吹雪で熱を奪われ、能力を封じ込められたキュアブレイズが、身動き取れぬまま苦し気に声をあげる。

彼女を助けなければ、と蛭が思ったその時、

「キュアブレイズ！ちよつと歯あ食いしばれ！」

「えっ?」

全身に雷を纏ったキュアスパークが、凍り付いた両足を無理やり電熱で溶かし始めたのだ。

キュアブレイズの炎さえも封じ込めた冷氣の中では、キュアスパークの電熱さえも奪いに来たが、僅かに足が動くようになった瞬間、溶けた雪が再び凍り付く前に駿足でその場を飛び去り、直進上にいるキュアブレイズ目掛けて体当たりして無理やり吹雪の外へと脱出したのだ。

「いたた・・・ちよつと強引すぎじゃない?」

「助けてやったんやから礼くらい言えや。」

軽口を叩きあいながら、キュアブレイズの熱で雪を溶かす2人を見て螢は安堵する。

そして一旦キュアプリズムとともに2人と合流する。

ダンタリアも無理に追い撃ちをかけず、ソルダークの元へ合流した。

恐らく次のソルダークの攻撃と同時に仕掛けてくる算段なのだろうが、おかげで螢たちも一度態勢を立て直すことができた。

だが脅威が過ぎ去ったわけではない。

キュアスパークとキュアブレイズの2人を同時に足止めできるあのソルダークは強敵だ。

「あの吹雪は厄介ね。」

前に戦ったソルダーク同様、私の盾でも防げそうにないわ。」

キュアプリズムが状況を分析する。

以前、突風を生み出すソルダークと戦ったときも、盾では側面から風が流れ込んでしまい、バリアでは身を守ることはできても反撃に転じられなかった。

一定の空間全域に効力を及ぼすような攻撃では、キュアプリズムの盾を活用できない。

さらに今回の敵が生み出すのは、キュアブレイズやキュアスパークの能力さえも奪う冷気だ。

3人のプリキュアの持つ能力全てと相性が悪い敵を前に、無言の緊張が走るが、蛍はこの状況でも臆してはいなかった。

今までなら怯えて泣いていたかもしれないが、今は不思議と自分の気持ちに自信を持っている。

「だいじょうぶ、わたしなら。」

「キュアシャイン?」

キュアスパークが不思議そうにこちらを見るが、蛍は精神を集中する。

怖いと言う気持ちはいつだってある。

でもそれはあっても良いと千歳が言ってくれた。

そして大切なのは、その気持ちに負けないこと。

怖いと思う気持ちを乗り越えることだと教えてくれた。

「いまのわたしなら、だいじょうぶ。．．．はあっ!!」

一拍置き、気合を入れた雄叫びとともに、蛍は片手に光を纏った。

「キュアシャイン、それ．．．」

「自由に使えるようになったんだ。」

キュアスパークは驚き、キュアプリズムが嬉しそうに微笑む。

2人の様子に蛍もつられて笑みを零すが、ダンタリアはそんな蛍を忌々し気に見ていた。

「とうとう力を使えるようになってしまったか。ソルダーク!」

ソルダークが呼びかけとともに再び吹雪を放つ。

キュアブレイズたちは身構えるが、蛍はみんなよりも一歩前に立ち、右手をソルダークへと差し出す。

「キュアシャイン、何をやる気?」

キュアスパークが驚いてこちらを注視するが、蛍は構わず右手を振り降ろす。

「はあああっ!!」

そして放たれた光の波動を、ソルダークに目掛けてぶつけるのだった。

：

キュアシャインが力を自由意志で引き出せるようになったことを、千歳は戦いの最中でありながらも喜ぶ。

そして彼女がソルダークを迎撃すべく自分たちの一歩前に立つのも止めようとはしなかった。

守るべき姫を戦線に立たせるなんて守護騎士あるまじき行為だと思いながらも、千歳は彼女の力をこの目で確かめたかったのだ。

そしてキュアシャインが放った光の波動は、ソルダークの吹雪と正面から激突する。

だが次の瞬間、光はソルダークの吹雪をかき消し、ソルダークの本体に直撃したのだ。

「なにっ!？」

ダンタリアが驚愕の声をあげる、無論、驚いたのは彼だけじゃない。

キュアスパークもキュアプリズムも、目の前の状況に釘付けになった。

なぜならソルダークの吹雪は、光の波動が通った箇所だけが、まるで削り取られたかのように消し飛んでいたからだ。

「くっ、ソルダーク！」

だがこれで終わるソルダークの攻撃ではない。

ソルダークは両手に吹雪を纏わせると、鋭利な剣へと変形させた。

物理的な攻撃手段へと転じたソルダークはそのままキュアシャインへと切りかかる。だがキュアシャインはそれに臆することなく、光を纏わせた拳を剣へと突きだした。

普段ならここで、危ないと一言声をかけて呼び止めているところだが、自分もキュアスパークも、キュアプリズムでさえも止めようとはしなかった。

みんな、わかっているのだ。次の瞬間、何が起こるかを。

「はああっ！」

雄叫びとともにキュアシャインが光を纏わせた拳を剣へと叩き込む。

次の瞬間、氷の剣はキュアシャインの拳を境に、真っ二つに割れるのだった。

その光景を見て千歳は自分の想像通りであることを確信する。

「やっぱり、思った通りだわ。」

「思った通りって、何が？」

キュアスパークの問いかけに、キュアブレイズは微笑みながら答える。

「あの子の力の『特性』よ。」

あなたの力は『雷』、キュアプリズムの力は『守護』、私の力は『炎』。

私たちプリキュアの持つ希望の光には、『個性』とも言える特性がある。

そしてキュアシャインの持つ特性は、恐らく『浄化』よ。」

自分の答えに、キュアプリズムは眉を潜める。

「でも私たちだって、浄化技を使うことが出来るよね？」

キュアプリズムの言う通り、『浄化』は希望の光が持つ、絶望の闇を祓う基本的な力のことだ。

それだけならば確かに、キュアシャインの個性とまではならないだろう。

「ええ、あなたの言う通りよ。」

浄化技さえ使えば、私たちの誰でもできることね。

でももし、あの子の力がその浄化に『特化』しているとしたら？

誰しもが持っている能力でもひと際ずば抜けたものとなれば、その人の『個性』ってことにならない？」

例えばキュアスパークこと要のように、『走る』ことは誰でも出来ても、誰もが追いつけないほどの『速さ』を持てば、それはその人を特徴づける立派な『個性』となる。

その意味を悟ったのか、2人とも驚きながらキュアシャインの方を向く。

視線の先、キュアシャインはたった一人でソルダークと応戦していた。

ソルダークの生み出す吹雪をかき消し、氷の剣を砕き、そして今、ソルダークが身に纏った氷の鎧さえも苦も無く打ち砕いた。

見かねたダンタリアがキュアシャインに闇の球体を投げつけるが、キュアシャインはそれを片手で払い除け、一瞬で消滅させる。

ソルダークと、ダンタリアが絶望の闇を用いて生み出した力を、キュアシャインはここごとく打ち消していったのだ。

そして前回の戦いでも、キュアシャインはソルダークの放った暴風を、『力の干渉した空間のみ』をかき消した。

そこで2人は何かに気が付いたように顔を見合わせて驚く。

「『浄化』の特性って・・・もしかして。」

「『絶望の闇』だったら、何でも消せるってことか?」

「その通りよ!」

あの子の力は、ダークネスの源、『絶望の闇』そのものを『消す』ことに長けているのよ!」

興奮を抑えきれない様子で千歳が答える。

ありとあらゆる超常現象、技、武器に関わらず、絶望の闇によって引き起こされた事

象であれば、キュアシャインは全てを打ち消すことが出来る。

どれほど強力な能力だろうと、どれほど強力な武器だろうと、どれほど強固な盾だろうと、キュアシャインの力の前では何も意味を成さないのだ。

それだけでは終わらない。

キュアシャインがソルダークの腹部に打撃を叩きこむと、ソルダークが苦悶の声をあげて地に膝をつく。

これまで彼女が打撃でソルダークにダメージを与えたことはほとんどなかったはずなのに、希望の光を制御できるようになったことでキュアシャインの基礎能力も大幅に強化されたのだ。

そして絶望の闇を打ち消す彼女の『浄化』の特性により、ソルダークの力を削ぎ落す相乗効果が生まれ、ただの打撃がソルダークへの致命の一撃となつて襲い来る。

さらに未恐ろしいことに、これでもまだキュアシャインは、力の『一部分』しか制御できていないはずだ。

そう、自分の故郷を救った、世界中の人々の絶望に勝った、あの膨大な希望の光をまだその内に秘めているのだ。

その、ほんの僅かな力の片鱗でしかないはずなのに、キュアシャインは既にソルダークが手も足も出ないほどの力を振るっている。

余りにも桁外れの強さを前に、ダンタリアさえも戦慄していた。
「間違いないわ。」

キュアシャインは、ダークネスにとつての天敵と言える存在。

あの子が、私たちホープライトプリキュアの切り札よ！」

あれほど強力な力を持ったソルダークさえも、余りにも一方的に叩き伏せるキュアシャインを見て、キュアスパークとキュアプリズムも啞然とする。

そしてキュアシャインが力を目の前に集中させ、シャインロットを召喚し……

「あつ、あれ？」

ようとした瞬間、キュアシャインの身に纏われていた光が一気に霧散し、気配一つ残さず消えていった。

その状況に千歳たちは勿論、ダンタリアも呆気に取られる。

「えっ？えっ？あれ？なっなんで急にちからがきえちやったの？」

あれ？え？どして？」

一方でキュアシャインは突然力が消えたことであたふたし始めた。

「……まだ、力を使いこなすまでには至ってないようやな。」

「ふふつ、そうみたい。」

慌てふためくキュアシャインを見て微笑みながら、キュアスパークとキュアプリズム

は、ダンタリアに奇襲されないようにキュアシャインの元へと駆け寄る。

「まだまだ、先は長いみたいね。」

クスクスと微笑みながら千歳はキュアシャインの側による。

「キュアブレイズ?」

「でも、お疲れ様。後は私が引き受けるわ。」

視界の先ではキュアスパークとキュアプリズムがダンタリアを足止めしてくれている。

千歳は優しく触れるようにキュアシャインの頭を撫でた後、ソルダークへと立ち向かった。

「ガアアアアアッ!!」

ソルダークは吹雪を生み出して反撃するが、千歳は炎のヴェールを薙いで雪を吹き飛ばす。

キュアシャインとの戦いで力を削がれた今、先ほどまでの威力は発揮できない。

今が叩くチャンスだ。

千歳は火球をソルダークに投げ飛ばし、直撃させて怯ませている内にブレイズタクトを構える。

「プリキュア!ブレイズフレアー・コンチエルト!」

千歳の浄化技を受けたソルダークは、炎に包まれながら消滅していった。

「キュアシャイン、君はつくづく邪魔のようだね。」

ダンタリアはその言葉を残し、姿を闇へと眩ませるのだった。

：

次の日。学校から帰って来た千歳が夕食の支度をしていると、ドアが開く音が聞こえた。

「ただいま。」

3日ぶりに聞く声に千歳は玄関へと勢いよく振り向き、駆け足で向かう。

「リン子！．．．えと、おかえりなさい．．．。」

つい声を上ずらせてしまい、千歳は恥ずかしそうに顔を俯ける。

「その．．．もうすぐ夕ご飯の支度ができるから、先に荷物を部屋に置いて来たら？」

「ふふつ、ええ、そうさせてもらうわ。」

そんな自分の様子を見て微笑んだリン子は、そのまま家にあがって寝室へと向かう。

しばらくして、リン子が部屋から戻ってくると、食卓の上には夕食が綺麗に並べられていた。

「あら？私がつけてない料理まで置いてあるわね。」

「昨日、チェリーと一緒に作った分の余りよ。」

「そっか、それじゃあ。」

「いただきます。」

久しぶりにリン子と唱和する『いただきます』に、千歳はどこかホツとする。

「あら？美味しいじゃない。」

「何よ、その意外そうな声は。」

「ふふつ、だってあなた、料理なんてしたことないでしょ？」

「むっ……。」

突然突き付けられる事実で千歳は顔を顰める。

何せそのなにも経験がないことで、今回は多くの友達に迷惑をかけてしまったからだ。

「この3日間、大丈夫だった？」

「……全然。失敗続きで恥ずかしかったわ。」

千歳はこの3日間のことを包み隠さずリン子に話した。

リボンの結びが滅茶苦茶で雛子に直してもらったこと。掃除をするつもりが汚してしまい、たまたま様子を見に来てくれた螢に全て片付けてもらったこと。

寂しい思いをしていたところを要に励まされたこと。

そしてチェリーから一通りの家事の手解きをしてもらったこと。

話ながら千歳は改めて自分の不甲斐なさを思い知る。

そして1つの決意を固めてリン子に申し出た。

「ねえ、リン子。1つお願いしてもいい？」

「どうしたの？改まって。」

「今度から私にも家事の手伝いをさせてくれないかしら？」

「え？」

リン子が驚いて目を開く。

「別に大丈夫よ。」

それに、これも私の仕事の内のだからそんなこと気にしなくてもいいわ。」

案の定、彼女も従者としての務めだからと断りを入れてきた。

そうでなくてもリン子の立場を鑑みれば、きつと失礼極まりない申し出だ。

リン子にとっての家事は自分の従者、メイド長としての務め。

つまり今の申し出は、主たる自分が従者から仕事を奪うも同義だからだ。

それでも千歳は、首を静かに横に振る。

「ねえリン子。私はこの世界ではお姫様でも何でもないのよ?」

「え?」

自分の言葉にリン子が意外そうに驚く。

「私は、この世界ではただの中学生。」

夢ノ宮中学校2年3組、姫野 千歳でああなたの『娘』よ?」

『娘』が『母親』の家事を手伝うことって、そんなにおかしいことかしら?」

この世界に来てからも、自分はフェアリーキングダムのお姫、次期王位継承者としての矜持を捨てたつもりはない。

先ほどの言葉は勿論、ただの詭弁だ。

そして詭弁であることくらい彼女も承知だろうが、同時に理性的なリン子のことだから、屁理屈でもいいから、それらしい理屈を並べれば納得してくれるはずだ。

「千歳……。」

そんな千歳の言葉にリン子は、どこか納得したような、それでいて呆れたような表情を浮かべていた。

「それに、今回みたいにもまたリン子が出張でいなくなったときのために、私にはこの世界

での家事を覚えておく必要があると思うのよ。

リン子、今回3日程度の出張ならって引き受けてしまったのでしょ？

立つたらこの先も、3日くらいの出張ならって、また頼まれることがあるのじゃないの？」

後の理由は、蛍にもうカツコ悪いところを見せたくないからと言うのもあるが、こればかりは心の中にとどめておく。

最もリン子にはそんな見栄っ張りはお見通しだろうけど。

「……そこまで言うならわかったわ。」

私も『母親』として、『娘』であるあなたの将来を考えて、家事を教えることにするわ。」

そして妙に芝居がかった口調で苦笑しながらもリン子は了承してくれた。

その事を千歳は喜びながら、これまでリン子にどれほどお世話になってきたのかを、今になって自覚する。

「リン子。」

「なに？」

「……ありがとね。今まで私の面倒を見てくれて。」

だから千歳は自分でも珍しいと思うほど、リン子に対して素直な感謝の気持ちを伝えた。

自分とリン子は主と従者。親子という関係はあくまでこの世界での隠れ蓑。

それでも赤子の頃から自分を育ててくれたのは、紛れもなくリン子だった。

そしてそんなリン子に、実の母と同じくらい『親』であると慕っている。

「それから・・・これからもよろしくね。」

同時にまだ自分には、彼女から離れて一人立ちするなんて、無理であることをイヤでも理解した。

「ええ、どういたしまして。」

そんな千歳に対してリン子は、正直見飽きたと言つてもいいほど、まるで母親が娘を慈しむかのように微笑んだ。

それでもその微笑みを3日ぶりに見ることの出来た千歳は、久しぶりのリン子との食卓を心から嬉しく思うのだった。

：

次回予告

「えへへ、リリンちゃん、げんきになってよかった。」

「そう?」

「うん、わたしずっとしんぱいしてたんだから。」

「そっか・・・。」

「これからもまた、いつものようにあの場所であおうね!」

「うん・・・。」

(もしもあなたの正体を知ったとき・・・あたしは・・・。)

次回!・ホープライトプリキュア第19話!

大ピンチ!? キュアシャインの正体がバレちゃった!!

希望を胸に、がんばれ! わたし!

第19話

第19話・プロローグ

音も光も時さえも失い、永遠の暗闇と静寂が支配するモノクロの世界。

その中でリリスは、蛍たちの住むかの地へ向かうための準備をしていた。

（今日は確か、季節の変わり目。

時間は・・・そろそろ学校が終わるところかしら？）

時の概念を持つかの地で、日付と時間を正確に数えられるようになったのは我ながら良い進歩だ。

以前なら行き当たりばったりでかの地に赴くこともあったが、今では必要な時を見定めた上で出向くことができる。

何より蛍に会う時間を正確に測れるようになったし、一緒に過ごす時間を有効に使うことが出来るようになった。

噴水公園で一緒にお喋りをする時間。

屋台を一緒に見回る時間。

つい最近では夕食の買い物とやらに同伴させてもらった。

こちらと違い蛍の時は有限だ。

その限られた時間1つ1つを無駄なく使うことが出来るのは、この習慣を身に付けたことの一歩の収穫と言える。

(来週から試験があるって言ってたし、今日は少し早めに行きましょう。)

来週からは期末試験が始まり、その期間中は会うことができないから、今日はその分も沢山お喋りをしようと言っている。

だから今日はいつもより時間に余裕を持たせないといけない。

以前、蛍の前から姿を眩ませたときの間、彼女に相当な不安を与えてしまったことがある。

ここまで来て妙な疑いを持たれ、蛍から得た信頼を失うようなことはあつてはならないから、しばらくはなるべく彼女の要望に応えよう。

そんなことを考えながらリリースは、それとは『異なる感情』から目を背けるように、リリンへと変えてかの地へと降りるのだった。

モノクロの世界から一転、華やかに彩られ様々な音で賑わうかの地へとリリンは降り立つ。

半年前、初めてここを訪れた時はなにも思わず、意識してみると眩しくて耳障りな世界でしかなかったが、蛍との出会いがリリンの見る景色を変えた。

蛍と過ごすこの空間、音、時の全てが自分に安らぎをもたらしてくれただけだ。

ただその安らぎに暗雲が立ち込めてきていることをリリンは知っている。

もしもあの子が、自分の心を掻き乱すあいっだとすれば・・・。

それでもリリンはまた、ここに来てしまう。

行動隊長としての任務を忘れたつもりはない。

主たるアモンから受けた指令を忘れたつもりもない。

蛍に近づく本来の目的だって忘れていない。

自分はいくまでもトモダチの仮面を被っているだけなのも自覚している。

「あつ、リリンちゃん〜」

それでもリリンは、この瞬間を手放すことができないでいた。

名前を呼ぶ、あの子の声が聞きたいから。あの子の笑顔を見ていたいから。

「ほたる。」

蛍の前に零れた笑みは、もはやリリン自身が意識できていないほどに自然なものとなっていた。

第19話・Aパート

大ピンチ!? キュアシャインの正体がバレちゃった!!

ここは、ダークネスが拠点としている古城の一室。

床には広々としたカーテンが敷かれ、宙にはシャンデリアが吊られている。

壁には人を凌ぐ大きさの絵画が飾られ、部屋の中央には宝石の飾られたベッドが置かれていた。

恐らくはこの城の主の部屋かと思われるそれは、ダークネスによって陥落され色を失つても尚、かつての権威が至るところに散りばめられているのだが、窓際は巨大なモニターによって封鎖され、その下には大型の液晶パネルが設置されていた。

古き時代の名残を見せるこの城の佇まいとはあまりにも不釣り合いな、科学の英知と言うべき大型の機械が部屋の空間を圧迫しているが、現部屋の主たるアモンは、かつての主の意向など全く鑑みない様子で、高速でパネルを叩き続ける。

そしてパネルの隣には不気味な気泡を生む液体によって満たされたカプセルがあり、その中には10cmほどの大きさしかない黒い塊が、まるで生命のように脈動してい

た。

「・・・そろそろ、完成が近いか。」

アモンの研究室へと改造された部屋には、アモンにしか聞こえない気泡とパネルを叩く音が絶え間なく鳴り響く。

アモンがパネルを叩くたびに、カプセルの中にある黒い塊が少しずつ歪な形を正していった。

これが完全なる形を成したとき、アモンの生涯最高傑作と言える作品が誕生する。

だからこそ焦りは禁物だ。

ここで失敗してはこれまでの苦労が全て水の泡となる。

アモンは一旦休息のために手を休め、椅子に深々と座り込む。

その時、

「侵攻が遅れていると言うのに、随分と悠長だな。」

突然、何も映し出されていないはずのモニターから、女性の声が聞こえてきた。

だがアモンは特に焦ることなく、何も映し出されていないモニターへと視線を向ける。

低く抑えながらも傲岸さを隠しきれていないその声は、アモンのよく知るものだからだ。

「まさか君の方から連絡があるとはね。今宵は流星群でも降ってくるかな？」
「ふざけているのか？」

貴様が侵略しているかの世界、未だどこにも闇の牢獄を展開出来ていないではないか。」

声の主は僅かに怒りを滲ませているが、アモンは動じない。

「そう怒るな。君たちにも情報は伝えてあるだろう？」

光の使者たる伝説の戦士プリキュア。やつらがまた姿を現したのだよ。

やつらの抵抗で侵略が遅れるなど、今までだつてあつたことではないか。」

「まさかその一言で済むと思つていないだろうな？」

その光の使者にアンドラスが敗れ、闇に堕ちた世界が解放されたと報告したのは貴様だろう。

これまでにない由々しき事態であるはずだが、貴様は一向に行動を起こさずそこに引き籠つていてではないか。

それとも何もせず『両足』共々、地に膝をつくつもりか？」

確かに彼女の言うように、自分たちが侵略した世界が解放されたことは前例のないものだ。

アモンも当然、楽観視できるものではないと考えている。

なぜならこれまでに侵略してきた多くの世界も、全て解放される可能性が生まれましてしまったからだ。

だが同時にアモンは、その対抗策を見出している。

現代のプリキュア、その中心たる存在。

キュアシャインを打ち倒すための対抗策を。

「それを攻略する切り札（カード）を造るために、ここに籠っているのだよ。」

「その隣にある不気味な物体の事か？」

「どうやら女性の方はこちらの様子をモニター出来ているようだが、アモンは気に留めない。」

「その通りさ。これさえ完成すれば、我らの戦いも終わりを告げる。」

「随分な自信だな。」

自慢の行動隊長とやらが2人も倒され、今も敗戦続きだと言うのに。」

中々に痛いところをついてくるのは昔から変わらないな、とアモンは思う。

だが過程における失敗の数など、最終的に結果を出すことができれば意味はなくなる。

「それに、『1人』妙な行動を起こしているそうじゃないか。」

すると女性は、どこか訝しむ口調で問いかけてきた。

「行動隊長たちのデータはこちらでもモニタリングしていることは知っているだろう？」

アモン。貴様リリースをいつまで放置しておくつもりか？」

その言葉にアモンはこの場で初めて不敵に笑う。

「案ずるな。」

事体がどう転ぼうとも、我らにとって不都合にはならんよ。」

そんなアモンの言葉に呼応するように、カプセルの中の物体が静かに脈動するのだった。

…

休日を間近に控えた金曜日の昼休み。

千歳たちは4人揃って学食堂で昼食を取っていた。

「それにしても、蛍の力にあんな特性があつたなんてびっくりしたわ。」

食事を取りながら要は前回の戦いを振り返る。

「本当、あんな厄介なソルダークを1人で追い詰めちゃうなんて」

雛子も素直に感心した様子で言葉を綴る。

確かにあの時戦ったソルダークは、蛍を除く3人の力を封じ込められるほど強大だった。

蛍が力を使えていなかったら、窮地に陥っていただろう。

「でも、まだぜんぜん力をつかいこなせてないし……。」

だが蛍はそんな自分の力を誇らないどころか、使いこなせていないことを悔やんでいた。

相も変わらず、謙虚な態度を通り越して自分を卑下する蛍に、要と雛子は苦笑する。

「これから少しずつ制御の仕方を覚えていけばいいわよ。」

そう励ますと、蛍の表情に少しだけ明るさが戻って来た。

だがそう言いながらも、蛍の力は非常に不安定なものだから不安に思う気持ちもわかる。

前回のように不意に消えてしまうこともあれば、何かのきっかけで爆発するときもある。

そんな不安定なところはまるで、蛍の心をそのものを表しているかのようだ。

と思ったとき、千歳は改めて自分たちの力について疑問を抱く。

「希望の光か。」

そう言えば私たち、希望の光についても、プリキュアについても多くのことを知らないわね。」

千歳の疑問に雛子が続く。

「希望の光は思いが形になる力。

だから私たちの力の特性は、私たちの思いがそのまま形になったもの。

という解釈はできるのだけど、具体的にはわからないことだらけね。」

例えば要の雷の力は、彼女の真っ直ぐな正義感の表れ。

雛子の守りの力は、大切な友達を守りたいと言う思いの表れ。

自分の炎の力は、確かにちよつと気性が荒い自覚があるのでその表れだろう。

雛子の言葉に要と千歳はそれぞれ頷くが、蛍だけは首を傾げていた。

彼女はまた、希望の光の基となる自分の思いに無自覚なのかもしれない。

「どうして私たちがプリキュアになれたのでしょうか？」

すると雛子が希望の光に続いてそんな疑問を口にしてきた。

「正直自分でもよくわかんない内に変身して、よくわかんない内に力を使っているもんな。」

要の言葉に、千歳も過去の記憶を思い出してみる。

自分が初めて変身したときは、ダークネスが城下街を襲撃するところに遭遇した時

だ。

あの時、既にダークネスが故郷を侵略しているとの情報を聞いており、自分の故郷が闇に閉ざされてしまうのではないかと言う不安を抱いていた。

その不安が自分を絶望の闇へと誘ったのだろう。

だけど故郷を守りたい一心で絶望の闇から聞こえる声を払い除けたとき、プリキュアの力に目覚めたのだ。

だが言おうように、千歳はプリキュアの力を渴望したわけではない。

絶望の闇から立ち上がったとき、気が付いたら変身していたのだ。

故郷にプリキュア伝説が伝えられていた千歳ですら無意識の内に覚醒していたのだから、この世界の住民である要たちは猶更、訳の分からないうちに覚醒したのだろう。

「ねえ、千歳ちゃんがプリキュアに覚醒したのも、やっぱり自分の声を振り払ったからなの？」

すると雛子が少し遠慮がちに聞いてきた。

自分の声、と言うのは絶望の闇の中で聞こえてくる声のことだろう。

自分の中に潜む本音。否定することの出来ない黒い感情。

確かに自分はそれを乗り越えたとき、プリキュアへと変身した。

そして恐らく要と雛子も、同じ体験をしたのだろう。

内側に閉じ込めてきた自分の闇を無理やりに曝け出されることの辛さを知っているから、声はどこか遠慮がちなのだ。

千歳は雛子の気遣いに内心、感謝しながら質問に答える。

「ええ、そうよ。」

と言うことはやっぱり、みんな自分の声を聞いたことがあるのね。」

「うん……。」

「まあでも、それを乗り越えてきたから、ウチらはきつとプリキュアになれたんやろうな。」

要がその一言でまとめる。

確かに絶望の声に抗い乗り越えてきたのは、プリキュアの共通点なのかもしれない。

「ふわあ……やっぱりみんなすごいね。」

わたしなんて1回、リリスにぜつぼうのやみに閉じこめられちゃったことがあるのに。」

「え……?」

だが突然の蛍のカミングアウトに要と雛子が声を揃えて硬直する。

「あつ、あれ?ふたりともどうしたの?」

「蛍、絶望の闇に囚われたことがあるの!?!しかもリリスに!?!」

蛍の言葉は間接的にソルダークを造り出してしまったことがあると語っている。

それが要と雛子に2重の意味で衝撃を与えたようだ。

「うっ、うん。」

でもそのあとプリキュアになれたから、すぐに脱出できたんだけどね。」

「えっ!?!」

それって闇の牢獄が解除される前に意識を取り戻したってこと!?!」

「えと・・・うん、そうだよ。」

あつ、あのとき、ちとせちゃんとはじめてあつたんだ。

リリスがわたしからつくったソルダークを、ちとせちゃんがたおしてたすけてくれた

の。」

要と雛子は衝撃を隠せない様子だが無理もない。

プリキュアとして戦う目的は、ソルダークを倒して闇の牢獄を解放し、絶望の闇に囚われた人を救うためだ。

それなのに蛍は、闇の牢獄の解放を待たずに自力で脱出できたのだ。

千歳だつてあの時、絶望の闇に囚われた蛍の姿を偶然見つけることができたから、早い段階でその疑問に行きつくことができたが、そうでなければ、今の言葉に耳を疑っていただろう。

「ふふっ、そんなこともあったわね。」

当時のことを思い出し、千歳は少し懐かし気に微笑む。

最も当時の自分は蛭に八つ当たりで酷く無責任なことを言ってしまったので、今となっては複雑な思い出となっているが、蛭は初めて自分と出会ったきっかけとなる当時のことを嬉しそうに語っていた。

(・・・あれ?)

その時、千歳の脳裏に妙な違和感が引つかかる。

(そう言えばあのときのソルダーク……)

最初は凄まじい力を持っていたけれど、途中で急激に弱くなったわよね……?)

蛭の絶望から生み出されたソルダークは、千歳が戦った限りでは最も強い個体だった。

フェアリーキングダムでも、そしてこの世界での戦いの中でも、あれほどの力を持ったソルダークとはまだ相対していない。

そのソルダークが急速に力を失ったとき、確かちようどキュアシャインが駆け付けなかっただろうか?

(・・・なんだろう、この妙な胸騒ぎは……?)

「ちとせちゃん。」

「え？」

怪訝そうにこちらを伺う螢に声を掛けられ、千歳は我に返る。

「どうかしたの？ なんだかむずかしそうなかおをしてるけど。」

「ううん、なんでもないわ。」

「そう？」

「・・・あつ、そういうえば、あの日はじめてリリンちゃんともあつただく。」

「まゝたりリンか。」

前触れなく始まるリリンとの惚気話に要は苦笑し、雛子は微笑む。

だが千歳は、胸中に渦巻く漠然とした不安を払うことができずにいるのだった。

：

昼食を終え、各々のお弁当を片付け終わるタイミングを見計い。雛子は要たちの顔を一瞥してから声をかけた。

「ねえ、今回も試験前に勉強会をしない？」

「げっ、マジで?」

さっそく勉強嫌いの要が苦虫を嘔み潰したかのような声をあげるが気にしない。

素直に首を縦に振ることのないこの悪友はどうせ強制参加なのだから意見を聞くつもりなんてない。

重要なのは千歳と蛍の意見である。

「うっ、うん!また、みんなでべんきようかいしよ!」

すると蛍が早速天使の笑顔で応じてくれた。可愛い。

「いいわね、賛成するわ。」

そして千歳も快く承諾してくれた。

「よし、決まりね。」

「ウチの意見は!」

「要は強制参加。」

「え〜。」

「え〜じゃないわよ。」

どうせ部活もないんだから試験前日くらい体じゃなくて頭使いなさいよ。」

「バスケだつて頭使うも〜ん。」

要が屁理屈をこねだすとキリがないのでここらで無視を決め込む。

「ちえつ、ところで場所は どうするのさ？ また雛子の家？」

すると観念したと言わんばかりの表情を浮かべて要が場所を提案する。

「私のマンションでもいいわよ。」

あそこならチェリーたちも気兼ねなく過ごせるでしょうし。」

「あら、いいわねそれ。」

確かに妖精たちが気兼ねなく過ごせる場所と言うのは貴重だ。

このままだと千歳の家が自分たちのたまり場になりそうだがしてならないが・・・、
今回はお言葉に甘えよう。

と思ったその時、

「あつ、あの、ぼしよなんだけさ・・・。」

蛭が恐る恐ると言った様子で挙手してきた。可愛い。

「えと、わたしのおうちじゃ・・・ダメ、かな？」

「蛭ちゃんのこと？」

「うっうん、みんなのおうちには、なんでもお世話になってるから、たまには、わたしからおもてなししたいなって・・・。」

えつえとあの、むっむりにとはいわないよ？

わたしのおへや、あんまりひろくないし、ひろい方がべんきように集中できるだろう

し、ちとせちゃんはいえならチエリーちゃんたちも気をつかわなくてすむだろうし、みんなのおうちからだとちよつと距離があるし・・・あつあの、でもね、もしほんとうにメーワクでなければ・・・。」

まだイエスもノーも言っていないのに、期待と不安の入り混じった蛭は一人で願望と言葉がまるで一致していないループを繰り返していく。可愛い。

そんな蛭を見た要は、やれやれと言いたげな様子で苦笑いを浮かべていた。

「それじゃ、お言葉に甘えてお邪魔しよつか?」

「ほっほんと!」

すると要の言葉に蛭は一転、満面の笑みを浮かべる。可愛い。

「ええ、私も蛭ちゃんのお家にいつかお邪魔してみたいと思っていたし。」

「私も大丈夫よ。だからみんなで蛭の家に行きましょう?」

自分と千歳も勿論、その提案を受け入れる。

「それじゃあ蛭ちゃん、またこの前と同じように朝からでもいい?」

今回の目的はあくまでも勉強会だ。

勉強をする時間は少しでも長く確保しておきたい。

そう、『私利的』な目的でお邪魔をするのはまたの機会にしよう。

「うっ、うん!わたし、お菓子いっぱいつくってまつてるからね!!」

「あはは、勉強会だったこと、忘れちゃダメだからね？」

そんな際限なく浮かれる蛍に、雛子も苦笑いを浮かべるのだった。でも可愛い。

そして迎えた土曜日。雛子は大きめの鞆にレモンを入れ、蛍の家へと向かった。

道中、要と千歳とも合流し3人で蛍の家へと向かう。

「そのバッグ。ベリイとレモンが入っているの？」

千歳が自分と要の、少し大きめのサイズのバッグを見て質問する。

「そつ、今回は外に出るわけやないから、人の姿じゃいられないしね。」

「アップルさんは、今日はお仕事？」

「ええ、お昼には終わるそうだけど、一緒には来られなかったわ。」

そう話す千歳の表情はどこか憂いを帯びていた。

つい数日前まで出張で3日間家を不在にしていたのに、その週末に休日出勤。

傍から見ても多忙であることが見て取れるので、アップルの体調が心配なのだろう。

それだけでなく、チェリーは蛍の家にいるだろうから千歳だけがパートナー不在ということになる。

そのことをどこか寂しく思っているのかもしれない。

「そいや、蛍の家に遊びに行くのは初めてだね。」

そんな空気を感じ取ったのか、要が明るい調子で話題を切り替えてきた。

こんな時、意外と空気が読めて持ち前の明るさで強引に話題を変えられる要は本当に頼りになる。

「遊びじゃなくて勉強でしょ？」

目的をはき違えているかのような悪友の物言いにツツコミを入れながらも、雛子自身、初めて蛍の家を訪ねることを楽しみとしていた。

お気に入りの蛍の家だからというのも勿論あるが、親しい友人が普段どんな家でどのように生活しているのか、初めて訪れる友達の家と言うのは不思議と好奇心が疼くもの。

とは言え蛍のご家族と顔を合わせることになるだろうから、失礼なことはあつてはならない。

何せ蛍の両親とお会したのは、運動会のとくに挨拶した時だけだ。

良き友人としての信用を落とさないうよう、今日はいつもより言動を『自重』しなければならぬ。

隣の悪友が少し調子に乗り過ぎないか少し心配だが、あれでもTPOは弁えられるはずだ。その程度には信頼している。

そうではなくても今日は勉強のために集まるのだから、普段よりもハメを外すことはないだろう。

「それを言えば、私はまだ2人の家にも訪れたことがないわね。」

すると千歳がそんなことを言ってきた。

「今度時間があれば遊びにおいでよ。いつでも歓迎するわ。」

「こいつの家に遊びに行っても本しかないで。」

「くらっ!」

「ちなみにウチの家には煩い兄貴がおるから来るのはオススメしないよ。」

「あなた千歳ちゃんを家に呼びたくないの!？」

そんな自分たちの漫才を聞いている内に、千歳の顔に明るさが戻ってくるのだった。

∴

一之瀬家。

蛭は朝早くから起きて要たちの到着を今か今かと待ちわびていた。

「蛍、そんなにそわそわしなくても、家に来る時間は聞いているのでしょ？」
「うっ、うん、でもなんだかおちついてられなくて・・・。」

母に声を掛けられながらも蛍はそわそわしてならない。

みんなが来るのを待つだけの時間が不思議と遅く感じられる。

(はやくこないかな・・・。)

友達が家に遊びに来てくれること自体が、蛍にとっては初めての経験だ。

と思ったその時、

(あ、あれ？おともだちを家によぶとききつて、どうすればいいんだろ・・・?)

これまで考えたことのない不安が急に押し寄せてきた。

何せ初めてなものだから勝手がわからない。

そしてこういう時に限って記憶も曖昧になるものだから、普段自分が要たちの家にお邪魔したときどのように迎えられるのかが思い出せなかった。

もしかして失礼な上がり方をしていたのではないだろうか？と別の不安まで押し寄せて来たものだから、蛍はたちまちパニックになってしまう。

「あつあの、おかーさん。」

「え？どうしたの蛍？」

先ほどから一転、急に不安に満ちた様子で狼狽え出す蛍を見て陽子が不思議そうに首

を傾げる。

「えと、えと、お菓子かかってきてあるよね？」

「え？ 蛍が昨日作ってたじゃない？」

緊張のあまり自分でも訳の分からないことを口走ってしまい、母は大いに困惑する。

昨日帰ってからチョコやクッキー等お菓子も沢山作ったから、お客様に出すお茶菓子の万端だったはずなのになぜ忘れてしまったのだろう・・・。

それが蛍のパニツクをさらに加速させてしまう。

「じゃなかったじゃなかったええと、いつ、今のうちにおへやのそうじをしておかないと。」

「それも、昨日の内に終わらせておいたって言ってたじゃない。」

「あつ、あれ？ そっそうだっけ？」

母の言う通り、昨日の内に私室は勿論、家の中も隅々まで綺麗にしておいた。

庭だつて今朝母に付き添って手入れをしておいたはずだ。

となると最後に問題になってくるのは・・・

「じゃあつじゃあ、みんながきたときって、なんてあいさつしたらいいのかな？」

初めて友達が家に来てくれる喜びと緊張と、わざわざ来てくれたみんなをガツカリさせるようなことがあったらどうしようかという不安が入り混じってしまった蛍のパ

ニツクはついに頂点に達してしまふ。

「ふふつ、落ち着きなさい蜚。」

いつも学校で会つてるように、おはようだけでいいのよ?」

「そつ、そうなの?」

「うん、あとは、いらつしやいって一言加えればいいわ。」

「うつうん、わかつた。おはようと、いらつしやいだね。」

「おはよう」と「いらつしやい」を交互に連呼して練習する蜚。

初めて友達が家に来ることで期待と不安が入り混じっている蜚の様子を、陽子と健治は優しく見守るのだった。

∴

3人でお喋りをしながら歩いている内に、要たちは蜚の家の前まで辿りついた。

一軒家としては大きすぎず小さすぎない面積に、白を基調としたシンプルな色合いだが、家の庭に添えられた花壇が家を鮮やかに彩っている。

蛭が花壇まで好きであるとは聞いたことがないので、恐らくは母親の趣味か何かだろう。

ピンポーン

呼び鈴を鳴らすと、ドタバタした足音がドア越しから聞こえてくる。

そしてドアが開き、蛭が姿を見せ・・・

「みつ、みんな！おひやよ・・・。」

初っ端から盛大に挨拶を噛んでしまった。

「あはは、蛭、緊張し過ぎ。」

「ううう・・・いついらつしやい・・・。」

顔を真っ赤にして俯きながら出迎えてくれた蛭に、要たちは揃って静かに会釈する。

「それじゃ、お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「蛭、お邪魔するわね。」

「はっはい！どーぞ！」

尚も緊張する蛭に玄関を開けてもらい、要たちはそれぞれ家に入る。

すると螢はようやく安堵したのか、恥ずかし気な笑みを浮かべてくれた。

本音を言えば、今日の集まりは勉強会なのだから当然、勉強嫌いの自分は乗り気ではなかった。

だが恥ずかしそうに顔を俯かせた仕草で家に来てほしいと懇願されては断れるわけもなく、こんな天使の笑顔（エンジェルスマイル）を見せられては、むしろ来て良かったとすら思ってしまう。

相も変わらぬ天然のあざとさ。

そしてチェリーの言うところの得な性格、ここに極まれりである。

「いらっしやいみんな。」

するとリビングの方から螢の母、陽子が姿を見せた。

「ふふっ、今日はありがとね、この子のわがママを聞いてくれて。」

「もっもう、おかーさん……。」

陽子の言葉に、螢は再び頬を赤くして黙り込む。

それにしても口元に手を当てる微笑む姿がとても画になる母である。

「螢、お友達が来たのかい？」

するとリビングから螢の父、健治も姿を見せた。

「あつ、おとーさん。」

「みんな、いらつしやい。

特におもてなしはできないけど、今日はゆっくりしていつてくれ。」

「いえ、こちらこそ邪魔します。」

謙虚な健治の言葉に雛子が深々と頭を下げる。

しかし改めてみると非常にレベルの高い一家である。

蛭と並ぶ姿が親子というよりは姉妹に見えるほど若々しい陽子は言わずもがなだが、蛭自身も雛子が一番のお気に入りにと太鼓判を押すほど、人形のように可愛い容姿の持ち主だ。

そんな妻と娘を持つ健治はさぞ男子にとって憧れと僻みものになるだろうと思っていたが、本人もそれと並んでもまるで違和感のないほどに整ったハンサムメンなものだから、やっかみなど通り越して心をへし折ってくるレベルである。

(一之瀬家、恐るべし……)

ごくごく普通の一般家庭でありながら美男美女揃いの一之瀬親子に、要は軽く戦慄を覚える。

「それじゃ、わたしのおへやまであんないするね！」

そんなこんなで初めて一之瀬家を訪れた要たちは、はしやく蛭に連れられて私室へと案内されるのだった。

蛍の部屋に入った要たちは、まずバッグからベリイとレモンを解放し、部屋を見渡してみる。

第一印象は『質素』。この一言に尽きた。

机の上は筆記用具立てとノート。本棚には漫画と料理本が少し。

壁にかけられている制服にはしっかりとアイロンが当てられており、綺麗に整理整頓されているのはさすが蛍の部屋だと思うが、私物らしい私物が最低限のものしか見当たらないのだ。

要の部屋みたいにゲームソフトや漫画が積まれていたりポスターが貼ってあるわけでもなく、雛子の部屋のように本が溢れ人形が飾られているわけでもない。

唯一、ピンク色のカーテンとシーツだけがこの部屋を彩っており、全体的に控えめな印象ながらも健気な鮮やかさをアピールする佇まいは、蛍の私室であることが妙に納得できてしまう雰囲気を感じられる。

その部屋の中央には脚を折りたためる机があり、座布団が4枚置いてある。

今回の勉強会用に準備したのでらう。

「ちよつとせまいかもしれないけど、ゆっくりしてつてね。」

蛭はそう言うが、部屋の広さは要の私室と同じくらい。

決してスペースに余裕があるわけではないが、4人で過ごす分には困らない程度だ。

「それじゃあ、時間も大事にしたいし。パッツと始めましょうか。」

雛子の合図とともに、4人はそれぞれの勉強用具を取り出す。

「わからないところがあれば、遠慮なく聞いてちょうだいね。」

そして千歳からありがたいお言葉を頂く。

学年一位の彼女が味方に付いてくれるのであればまさに鬼に金棒、ヒーローに巨大

ボ……なんてことを考えながら要は今更過ぎる疑問を抱く。

「今更だけど、千歳ってフェアリーキングダム出身だよな?」

「本当に今更ね。それがどうかしたの?」

「なんでこっちの勉強で学年1位取ってるの?」

彼女が転校してきたのは去年の12月。

この世界に来た具体的な日にはわからないが、ベリイたちの話を総括すれば少なくとも転校してきた日からそう遠くはないはずなのに、転校早々の期末試験で学年1位を取っている。

なぜ今まで気が付かなかったのが不思議なほど、要からすれば異常事態である。

「なんでって、勉強したからに決まってるじゃない。」

「いやそうじゃなくて……。」

あまりにも根本的過ぎる答えに要はため息を吐く。

「ちとせちゃん、べんきようとくいなんだね〜。」

「そんな次元の問題やないやろ!!」

そして久々に繰り出された蛍の純度100%の天然ボケに勢いよくツツコミを入れる。

「千歳ちゃんはこつちに來たばかりのころは当然、この世界の知識なんてないはずよね？」

それなのにほんの1か月にも満たない期間で、学年1位を取れるほどの学力を身に付けるなんて凄いことだと思ふのよ。」

すると見かねた雛子がようやく助け舟を出してくれた。

これまた久々の悪友からの助け舟に要は内心感謝する。

「ああ、そうゆうこと。」

別に全てを1から学んだわけではないわよ。

フェアリーキングダムだって妖精と人間が共存しているって違いこそあれど、王国という立派な社会を作った歴史があるのよ。

だから人間社会が成り立つための学問の基礎的な知識は、実はこの世界とほとんど共

通しているのよ。」

「えっ？」

でもこつちの世界と違って、機械とかないし街並みもなんか昔っぽくなかった？」

意外な事実には要は驚きの声をあげるが、雛子はどこか納得した様子で言葉を綴る。

「例えば私たちの世界でも、数学の誕生は紀元前にも遡るわ。

でもフェアリーキングダムは私たちの世界で言う中世のヨーロッパに近い雰囲気だったでしょ？」

その当時の文明と同じだったとしても、私たち中学生が学ぶレベルの基礎的な学問から共通していても何も不思議ではないわ。」

「なっ、なるほど……。」

雛子の言葉には要は驚きながらも頷く。

なまじ機械がない世界なだけに、こちらの世界と比べると学問の面で一步引いていると言う先入観を抱いてしまっていたが、言われてみれば当たり前のことだ。

ものは単純な考え方であり、中学生レベルの知識もない人たちに社会を造れるはずがないのである。

……もしかしたら、勉強が苦手な自分は仮にフェアリーキングダムの学校を通ったとしても成績下位なのではないかと言う疑問がよぎり、要は慌ててそんなネガティブな

思考を振り払う。

「と言つても、機械がないから理科の電気エネルギーを始めとする機械が関わってくるところは当然1から勉強したし、当然、地理や歴史だつて学び直したわ。」

「1から覚えるのつて大変じゃなかった？」

1か月満たない期間内で1から理科社会を学び直すなんて要からすれば頭痛で学校を休むレベルの話であるが、千歳は涼しい顔……どころかどこか好奇心に満ちた表情を見せる。

「全然、むしろどんどん勉強したいくらいよ。」

それにもしもこの先、フェアリーキングダムで機械工学を開拓する時代が来たとき、この世界で学んだ知識を活かすことができるかもしれない。

私がこの世界で学べることはとても多いのよ！」

そう興奮気味に語る千歳を見て、こいつは根っからの勉強好きなのだないと要は悟つた。

同時に何かと思考が似通ることの多い彼女だったが、こればかりは同調できないと白い目で見える。

「ふふっ、そっか。」

一方で雛子は千歳の様子をみて楽しそうに微笑む。

同じく勉強好きな悪友のことだ。

共通の趣味を持てる相手を見つけられたのが嬉しいのだろう。

「ねえ千歳ちゃん。

私もわからないところがあつたら聞いてもいいかしら？」

「勿論よ。」

そして学年10位の学力を誇る雛子が勉強を教わる立場となったことが決定打となり、要は急に千歳の存在が遠のいていくのを感じるのだった。

∴

モノクロの世界。

サブナックがリリスの様子を見に来ると、彼女は物思いにふけっている様子だった。

「リリス。」

声をかけると、リリスは鬱陶しそうな表情でこちらを睨み付けてくる。

「何のようかしら？」

彼女の不機嫌な言葉で反応されることにいい加減『慣れてしまった』サブナックは、殊更顔を顰めてリリースを見据える。

「今日はかの地へ赴かんのか？」

「必要ないわ。」

「なぜだ？」

「あなたに言う必要があるの？」

突っぱねる態度を変えないリリースだったが、サブナックは彼女を試すような言葉を口にする。

「かの地の少女と会う日ではないと言うことか？」

「っ!？」

その言葉にリリースは驚き、こちらを睨み付けてきた。

リリースがよくかの地で会う、蛍と言う少女がいることを、サブナックは前もってダンタリアから聞いている。

リリースを試そうとかまをかけてみたが、どうやら上手くつてしまったようだ。

「・・・だったらどうしたと言うのよ？」

「なぜその少女に拘る必要がある？」

情報を集める手段など他にいくらかもあるだろう。」

「・・・あの子はプリキュアに関する情報を持っているのよ。」

今から他の情報源を当てるよりも、あの子から吐かせた方が確実だと思わない?」

淡々とした口調でさも正論のような言葉を口にするリリスだが、僅かに間があったことをサブナックは見逃さなかった。

そしてその時に、リリスが僅かに表情を曇らせたことも。

「その成果はいつになったら得られるのだ?」

「うるさいわね。」

これ以上あなたに話すことなんてないわ。」

先ほどのように理屈で反論しようともせず、リリスは強引に話を打ち切る。

だがその態度は、蛭と言う少女から情報を得られる可能性は低いことを肯定しているようなものだ。

それなのにリリスは蛭と接触することを止めようとはしない。

情報を得られないと分かっているながら、本来の任務を放棄して会いに行っているのだ。

「・・・最後に一つだけ聞かせろ。」

この場を去ろうとするリリスをサブナックは呼び止める。

「何かしら?」

「かの地の少女と次に会うのはいつだ？」

「5日後の水曜日よ。それがどうかしたの？」

リリースはその答えを即座に口にしてしまった。

「……もういい。貴様と話すことはない。」

「……？」

リリースは少しだけ困惑するも、この場を立ち去っていった。

彼女が去った後、サブナツクは腕を組み近くの壁にもたれ掛かる。

時の概念を持たないダークネスであればまず問わないであろう質問のはずなのに、リリースはまるで疑問を抱いていない様子だった。

「あの子はどこまで変わるつもりなのだろうね？」

すると闇の中からダンタリアが姿を見せた。

「どこから聞いていた？」

「かの地へは赴かんのか、からかな。」

要するに徹頭徹尾盗み聞きされていたと言うことだ。

だがサブナツクはダンタリアを咎めようとはしない。

むしろ彼に情報を伝える手間が省けたと言うものだ。

「ダンタリア、リリースをこのままにしておいて良いと思うか？」

サブナツクは声を低くして問いかける。

リリスは行動隊長でありながら感情的な言動に身を委ね、任務を放棄し一人の少女と戯れ、あまつさえ『時』を詠む習慣さえも身に付けている。

そう、あの子はかの地の『人』を演じていたつもりが、少しずつその『人』へと変わっているのだ。

「そんな簡単な疑問に答えられないほど、君はバカだったかい？」

ダンタリアはその問いにいつもの皮肉を飛ばすも、その表情も声色もいつもの嘲笑う雰囲気を見せなかった。

ダンタリアも現状を重く見ているのだ。

リリスが人に近づきつつあることに。

だが当の本人にはその自覚がない。

そして自覚がないからこそ、その変化は自然と起きているものなのだ。

そしてあの子自身が知り得ていないからこそ、その先に待ち受ける『結末』など気にも留めていないのだろう。

「貴様の言う通り愚問だったな。」

「君にしては珍しく殊勝だね。」

「貴様は変わらず無駄口が多いがな。」

「なら、こちらからも逆に問おうか？」

「なんだ？」

「サブナツク、君はキュアシャインの正体について心当たりはあるか？」

売り言葉に買い言葉を返しながらも、サブナツクとダンタリアは互いに質問を返す。

そしてサブナツクはダンタリアの質問に眉を潜めた。

それをやつは肯定として受け止めたようで、珍しくこちらに同情するかのような苦笑した様子を見せる。

「……やはり、バカの君でも気づいていたか。」

「気づかぬはずがないだろう。」

あれほどの憎しみを抱いていた相手を、そう簡単に許すことができると思うか？」

全てのきっかけは、リリスがフェアリーキングダムに赴いたときだ。

リリスは心を乱すほどにキュアシャインへ強い憎しみを抱いていたはずなのに、キュアシャインを倒す絶好の機会と言うべき指令をアモンから下されたとき、あの子は不可解な反応を見せた。

そしてキュアシャインへの憎しみが急速に薄れていき、一方でかの地の少女、蛍への執着を垣間見るようになっていった。

主からの使命を全うすることが行動隊長の意義であることを知りながら、それを放棄

してまで虫との接触を望んでいる。

だがキュアアシャインへの憎しみだって完全に消え去ったわけではない。

今のリリスは、2つの感情の狭間に揺れ、これまで以上に不安定な状態となっているのだ。

これだけの判断材料があれば、答えを出すのはあまりにも容易かった。

「気づいていないのは、リリスだけか。いや……。」

ダンタリアが言葉を区切るも、サブナックはその続きを悟る。

気付いていないわけがない、むしろ気づいているからこそ、リリスは今、不安定なのだ。

だからこそ、これ以上見過ごすわけにはいかない。

「次にリリスが行動を起こす時、」

「ん？」

サブナックは手のひらを強く握りしめる。

「俺が現実を突きつけてやる。」

その手のひらは、僅かに震えていたのだった。

:

午前中に課していた勉強のノルマを達成した蛭は、少し背伸びをして一息をついていた。

期末考査は基本教科の5科目だけでなく、実技教科である音楽、美術、保健体育、家庭科も試験として出題される。

そのため、今回は蛭も要も教えてもらうだけの立場ではなく、各々の得意科目である家庭科と保健体育について、雛子と千歳に教えることもあったのだ。

初めて人に勉強を教える側に立ったが、そこで得られたものは大きかった。

相手に理解できるように慎重に言葉を選ぶ過程で、自分自身の理解力をいつそう深めることが出来たし、雛子と千歳からは、教えるのがとてもうまくてすんなりと理解できたと褒めてもらえた。

中間考査のときに雛子の家に集まって勉強をしたときもそうだが、1人よりも複数人で集まって互いに教え合う方が、より効率良く勉強ができるものだと言うことを改めて実感する。

初めて自分の家に友達を招いたこともあり、最初は舞い上がりたくなる気持ちを抑え

て勉強をしていた蛍も、みんなから教わり、時々こちらから教えている内に勉強に熱中して時間を忘れ、気が付けばあつという間に正午に差し掛かっていた。

「そろそろ一息入れましょうか？」

「さんせ〜。」

千歳の言葉とともに、要はまるで軟体動物のように手を揺らしながら机に突っ伏せる。

「要、気を抜き過ぎ。」

「も〜数字も漢字も見たくない〜。」

要の言葉に千歳はやれやれと言った様子で苦笑する。

するとドアをノックする音が聞こえた後、母の陽子が部屋に入ってきた。

「みんな、そろそろご飯でできるけど良かったら食べていく？」

「え？いいんですか？」

陽子の言葉に要が顔を上げて反応する。

「ええ、勿論。」

「やった！じゃつゴチになります!!」

「もう、要つたら。すみません、わざわざ気を遣っていたいて。」

ガッツポーズではしゃぐ要とは対照的に、雛子は会釈する。

「では、私もお手伝いさせていただきます。」

千歳がそう言いながら挙手をする、陽子は静かに首を振った。

「そんな気を遣わなくていいわよ。」

せつかく家に来てくださったのだし、ゆつくりと寛いでいつてよ。

その方が蛭も喜ぶから。」

「おつ、おかーさん……。」

母の心を見透かされたような言葉に、蛭は顔を赤くしながらもはにかむ。

「蛭って、確かお母さんから料理を教えてもらったんだよね？」

そんな蛭に、要は何かを期待するような眼差しで質問をしてきた。

その意味を汲み取った蛭は笑顔で答える。

「うん！」

おかーさんのりょうり、すつごくおいしいから、きたいしててね！」

「こらつ蛭。ハードル上げるんじゃないやありません。」

少し困った様子を見せながらも、陽子は蛭の言葉に微笑む。

「それじゃあ、準備ができたらまた呼びに来るから、もう少し待つててね。」

「はい。」

陽子がそう言って部屋を出ていくと、要は羨ましそうな目で蛭を見ていた。

「かなめちゃん?どうかしたの?」

「は、ウチもこの家の子どもとして産まれたかったな。」

「へ?」

だが要からの予想だにしないカミングアウトに蛭の目が点になる。

「まくたそんなこと言つて。」

前にも言つたけど、例えば要がこの家の子だとしても今と変わらないわよ。」

「いやいや絶対そんなことないって。」

あんな優しいそうなお母さんなら怒られても怖くなさそうやん。

ウチんとこの鬼おかんと一緒にしたら失礼やわ。」

その言葉の方がよっぽど失礼だと思つたが、蛭は心にとどめておく。

「なあ、蛭はお母さんに怒られたことあるん?」

「もくあたりまえだよ。怒られるなんてしよっちゅうあるもん。」

「え?ホントに?意外やなあ。」

要の言葉に蛭は少しだけ眉を潜める。

どうやら自分の母は子供を叱らない優しいだけの母だと思われているようだが、そんなことはない。

自分のことをしつかりと怒つてくれる母だからこそ、蛭は心から尊敬しているのだ。

勿論、優しきだつて世界一だ。

優しくて厳しくて、でもやっぱりとても優しい自慢の母なのである。

「あく、この子の言う『怒る』には『注意』や『警告』も含まれているからアテにしない方がいいわよ。」

少なくとも私の見た限りじゃ蛍が陽子さんに怒られたことはないわ。」

「え？チエリーちゃん？」

が、間に入って来たチエリーの言葉に蛍は衝撃を受ける。

自分が今まで母に怒られていたと思つていたことは、他の人から見れば怒るの内に入らないというのだろうか？

そう思つてみんなの方を見てみると雛子と千歳は苦笑し、要はどこか納得した様子で肩を落としていた。

自分だけが『怒られる』の認識が少しズレていたことに蛍はショックを受ける。

「そんな顔しないでよ蛍ちゃん。」

単に蛍ちゃんが要と違つて問題児じゃないってだけだから。」

雛子がフオローしてくれるも、蛍は釈然としないままだった。

「はくそれでも羨ましいなあ。蛍のお母さん。」

一方で『怒らない母』と認識した要はとめどなく溢れる憧れを口にする。

そんな要の様子に千歳は苦笑し、雛子は諦めるようなため息を吐いていた。

「あつ、でもそうなった場合、ウチが蛍のお姉ちゃんになるってことか。」

「わたしおないどしだよ!？」

「ここで要から全く予期していない方向から子ども扱いされ、蛍はついいつものツツコミを入れてしまう。」

「いやほら? 同い年なら双子ってことになるやない?」

「それでもなんでかなめちゃんがおねーちゃんなの!？」

要は4月生まれだと聞いたことがあるから、確かに自分の方が誕生日は遅い。

だが双子と言う仮定で行くなら同じ日の生まれと言うことになるのに、強制的にこちらを妹のポジションに置こうとしていると言うことは、いつも通り子ども扱いしていると言うことに他ならない。

蛍が目いっぱい頬を膨らませて抗議する。

「じゃあ蛍は誰がお姉ちゃんなら納得するの?」

「へ?」

だがここで要から思わぬ話題を振られてしまった。

「例えば、雛子とか?」

「私?」

「え？ひなこちゃんか・・・？」

そもそも同い年なのに妹扱いされてしまったのが問題なのだから、誰が姉であろうと納得はできないはずなのだが、相手がかつて母性を求めてしまったことがある雛子と仮定されたので、虫はついでに要の話に乗ってしまう。

もしも雛子が自分の姉だったらと・・・。

雛子は自分のことをごく自然に年下扱いする傾向があるが、実は彼女から可愛がられることを内心嬉しく思っている自覚はある。

それを思えば、彼女がもしも姉であったとしても、そこまで不快には思わない。むしろ嬉しく思うだろう。

だが一つだけ懸念がある。

雛子と姉妹になると言うことは当然、雛子と一緒に住むことになるのだ。

となれば、『あの寵愛』を日々受けることになるわけだろう・・・。

月に何回か遊びに行ったときだけならまだしも、あれを『毎日』受けなければならぬと思うと・・・。

「・・・身がもたないかも。」

「え？」

「え？」

「ブフっ!!」

蛭がうっかり声に出してしまった言葉を聞いて、雛子と千歳は声を失い、要は盛大に吹きだした。

「わっはっはっははは!!」

そして要は腹を抱えて爆笑し始めたのだ。

「要!!いくらなんでも笑いすぎでしょ!!」

雛子が顔を赤くして反論するも、要の爆笑は収まらない。

「だって良いの雛子!? 蛭にここまで言われちゃっていいの!!?」

「はわわっ! ふたりともおっおちついて!」

「ごっごめんなさい、ひなこちゃん!」

なんだかとてもでもない爆弾を投げてしまったと蛭は慌てて仲介に入る。

そうでなくても、日頃雛子にあれだけお世話になっておきながら、『本音』とは言えあんなことを言うなんて失礼すぎる。

「別にあれくらいいつもの通りじゃない。放っておきなさいよ。」

「でもちとせちゃん……。」

すると千歳が隣に立ち、そんなことを言ってきた。

確かに要が笑い雛子が怒るなんて『いつもの通り』で片付いてしまうほど見慣れた光

景ではあるのだが、今回ばかりはこちらの発言がきつかけとなつてゐる以上、どうしても後ろめたさを感じてしまう。

そんな自分の心境を察してくれたのか、千歳が優しく肩に手を添えてくれた。

ふと、見上げると千歳のいつもの凛々しい横顔が映り、先ほどまでの会話の流れで蛭はつい考えてしまった。

もしも千歳がお姉ちゃんだったら……。

「蛭? どうかしたの?」

「えっ?! ええと……。」

千歳をじつと見ていたところを彼女に不思議がられ、蛭は声を上ずらせてしまう。

「……ちとせちゃんが、おねーちゃんだったら、わたし、ちょっとうれしかった……。」

少し逡巡し、顔を赤くしながら蛭は本音を打ち明ける。

綺麗でカッコよくて、勉強も運動も出来て、優しくて面倒見が良い。

そんな千歳が姉だったら、間違いなく自慢の姉となつていただろう。

そして千歳にも弱いことを自覚している蛭は、彼女が姉であればと言う仮定には何の抵抗もなかったのだ。

「……あなた、人には子ども扱いするなつて言うのに、私の事は大人扱いするのね。」

「えっ!!」

だがここで千歳から思わぬ言葉を受けてしまう。

千歳の言う通り、彼女の事を姉と思ったと言うことは、同じ年であるはずの千歳を無意識の内に年上扱いしてしまったと言うことだ。

年下だろうと年上だろうと、実際の年齢として扱っていないと言う点では、要の態度と何ら違いはない。

普段要に怒っておきながら、自分も相手を同じ年と思わないなんてさすがに理不尽な話である。

蛭は大慌てで千歳に謝罪する。

「ごっ、ごめんなさい！わたし、そんなつもりでいったわけじゃ……。」

「ああつ、ごめんごめん。ほんの冗談よ？」

「え……？」

だがそう言った本人は特に気にしている様子も見せず、クスクスとこちらの反応を見て笑っていた。

本当に気にしていないことに安堵すると同時に、初めて彼女にからかわれたことに蛭は少しだけ複雑になる。

「ふわっ……。」

だが直後、千歳に柔らかく頭を撫でられ、そんな気持ちも一瞬で吹き飛んだ。

「私も、蛭みたいな妹だったら大歓迎よ。」

言葉の意味だけなら要と同じ。

だがその言葉はからかう風でもなく、表情も意地の悪い笑顔とは違い、見ていて安堵する笑顔だった。

そんな笑顔で、そんな口調で、そんなことを言われては、怒る気もわからないどころか、どこかくすぐったく思えてしまう。

何よりも千歳が姉であれば良いと思つた蛭にとって、彼女に妹として扱われることは、ある意味本望とも言えるものだ。

「えへへ……。」

照れくさそうに、でも嬉しそうに笑う蛭。

「ふ、ふっ。」

蛭を可愛がるように微笑む千歳。

「……鼻肩やろ。」

そんな2人の様子を要が納得のいかない顔で見ている。

「人望の差よ。」

そして雛子が情け容赦ない言葉で一刀両断するのだった。

第19話・Bパート

勉強会から数日が経過し、無事期末考査を終えることが出来た千歳たちは、真と愛子、未来と優花も交えた8人で学食堂を訪れた。

中間考査の時と同様、午後で学校が終わるので、今日の学食堂はいつもよりも生徒の数が少ない。

各々席についてお弁当を広げ始めるが……

「えと……」

「……」

「あつあの……みんな、だいじょうぶ……?」

「気にしなくていいわよ。蛍ちゃん。」

愛子が困惑し、雛子が無言でジト目し、蛍が不安げにあたふたする様子を優花がフオローしている。

期末考査終了を祝ってみんなでお昼を食べよう!と言う蛍の企画に乗っ取ったのだが、場の空気はそんな祝杯ムードとは程遠かった。

なぜなら……。

「むくり。」

「おわった・・・。」

「頭使い過ぎてオーバーヒート・・・。」

要、真、そして未来の3人がまるで世界の終わりを見たかのような絶望的なオーラを纏つてテーブルに突つ伏しているからだ。

言葉の通り、要と真は試験の手応えがまるでなかったから、未来は頭の使い過ぎて疲れたからと理由に違いがあるものの、このメンツの中でムードメーカーとしての役割を担う3人がこぞつて機能不全に陥っているものだから、明るい場なんて作れるはずもない。

「みっみんな、おつかれさま！」

試験がおわったから、あとはなつやすみをまつだけだよ！」

そんな中でも蛍は健気に3人を励まそうとする。

「夏休み！」

「そうだった！」

「青春のアバンチュールが私らを呼んでるぜ！」

「この単純バカ。」

そして蛍の励ましに露骨に復活する3人に対して、雛子が冷ややかな目でツツコミを

入れる。

「あつても、その前に来週試験の結果発表があつたわね。」

「……。」

さらに続く優花の言葉に、要と真は急転直下、露骨にテンションを落としてしまった。ちなみに試験の結果なんてまるで気にしていない未来だけは、いつもの調子を取り戻していた。

「はわわっ！かなめちゃん！まことちゃん！」

「そんじゃ！いただきまーす！」

そして1人復帰した未来のマイペース過ぎる合図とともに、何とも言えない微妙な空気で昼食が開始された。

「ふっふたりとも、げんきだして。」

きょう、デザートにシュークリームつくってきたから、みんなでたべよ？」

「マジで！シュークリーム!？」

「蛭ちゃんの手作り!?!ゴチになります!」

「え?えと……。」

蛭が持参したシュークリームにつられて瞬間に元気を取り戻した2人に蛭は困惑する。

全く現金な子たちであると千歳は思うが、蛍がシュークリームを作ってきたと聞いた時目の色を変えたのは2人だけでなく、愛子と雛子も楽しみだと言わんばかりの表情を浮かべていた。

優花に至っては我先にとお弁当を食べ始めているくらいである。

「まあ、何にしてもようやく試験が終わったって感じよね。」

ようやく楽しく昼食ができるムードを取り戻した中、愛子がどこか肩の荷が下りた様子でそんなことを言ってきた。

「ええ、いつも思うけど、この開放感は言葉にならないわ。」

そんな愛子の言葉に雛子が同意する。

「あら？勉強好きの雛子もそんな風に思うことあるのね。」

それを意外に思ったのは愛子だけではないようで、真と要も目を丸くして雛子の方を見ていた。

雛子はややはにかみながら愛子に言葉を返す。

「さすがに毎日試験対策続きじゃ肩も凝るわよ。」

それに読書の時間が削られるのは嫌だし。」

「それもそっか。」

そんな2人の会話を聞きながら、蛍も箸を止めて天を仰ぐ。

「そっか、今日からまた……。」

「蛍ちゃんも嬉しそうね。」

「試験が終わって遊びたいこととかあるの？」

「え？」

そう優花に質問された蛍は、少し逡巡した後ほんのりと頬を赤く染める。

「リリンか。」

「リリンちゃんだな。」

「噂のリリンちゃんね。」

そして要、真、愛子にあっさりと心境を見透かされてしまい、蛍は顔を真っ赤にして俯いた。

「今日はリリンちゃんと会う約束をしてるの？」

「うっ、うん、おひるたべおわったら、いつものばしょにいくんだ。」

蛍の言う、いつもの場所とは噴水公園のことだろう。

「そう言えば、最近あまりリリンとは会ってなかったみたいね。」

「うん、なんだかいそがしかったみたいで。」

今回はわたしがテストあるから、また日があいちやったけど、そのぶん今日はいっぱいおしゃべりするやくそくなんだ！」

嬉しそうに蛭は語るが、千歳の胸中にかけてリリンに抱いた懸念が蘇っていく。

(リリンが姿を見せなくなつたのは、確か先月の頭から半ばまで。

・・・その期間は確か、リリスも姿を見せなかつたはず。)

そしてリリンと蛭が再会したのが確か運動会の前日。

その翌日にリリスが姿を見せた。

だがそれ以降リリスは今日まで襲撃にくることはなかつたが、蛭はリリンと何度か会っている。

そして今日に至るまで蛭の身に何かあつたわけではない。

自分の懸念が本当であつた場合、あいつが変身前の蛭を何度も逃すようなことがあるだろうか？

(・・・まだ、結論を急ぐ必要はないかもしれないわね。)

僅かではあるが、こちらの考えすぎである可能性もまだ捨てきれない。

それに蛭は今日、リリンと会えることを楽しみにしている。

リリンと過ごす時間は、間違ひなく蛭にとって代えがたい幸せのひとつなのだ。

であれば、そんな時間に水を差すようなことはしたくない。

懸念が全て晴れたわけではないが、蛭が幸せな一時を過ごせるのであれば、温かく見守つてあげようと千歳は思うのだった。

：

モノクロの世界。

ダンタリアはかの地へ向かおうとするリリスの様子を観察していた。

リリスは姿をリリンへと変えた後、黒霧に飲まれて姿を消す。

だが姿を消す直前、ダンタリアは彼女が微笑むところを見てしまった。

まるでかの地に赴くのを楽しみにしているかのように。

「あいつは出たようだな。」

すると闇の中からサブナックが姿を見せた。

「ああ、とっておきの笑顔と一緒にね。」

よつぼど、あの子に会えるのが嬉しいと見えるよ。」

「・・・そうか。」

そう言いながら、サブナックは僅かに顔を顰める。

それが行動隊長としてのリリスを侮蔑するものなのか、それとも別の何かであるか

は、ダンタリアにはわからない。

ただ一つわかつていることは、サブナックがこれから何をなさうとしているかだけだ。

「君も行くのかい？」

「これしか方法はあるまい。」

その言葉を残し、サブナックはリリスに続いて黒霧へと消えていった。

ダンタリアはその残滓を見送りながら一人思う。

使命を全うすること以外に価値観を見出すことができない行動隊長でありながら、リリスは一人の少女に惹かれている。

なぜそんなことが『あり得た』のだろうか？

そんな疑問についてしばらく考えると、一つだけ思い当てることがあった。

(・・・まさか、だがそんなことがあり得るとしたら、あの子はどうなるのだ?)

一人考察を続けるダンタリアは、やがてアモンの研究室へと足を運ぶのだった。

：

噴水広場へと着いたリリンは、少し辺りを見渡してみる。

今日が『テスト』とやらの最終日で、螢はお昼を食べ終えたらここへ来ると言っていた。

だからいつもよりも少し早い時間、正午を少し過ぎたあたりにこの世界に来たのだ。

広間の大時計を見てみると、ちょうど13時を回り始めたところ。

時を詠む能力は日に日に正確さを増していることに、リリンは少しだけ得意げになる。

(また・・・螢に会える。)

心の引つ掛かりが取れたわけではない。

あの子と会うたびに胸が軋むのは変わらない。

それでも、

「あつ、リリンちゃん!」

「ほたる!」

この子の笑顔を見たいと思う自分がある。

この子の側にいたいと思う自分がある。

「ひさしぶり!リリンちゃん!」

「ほたる、あいたかった。」

「うん！わたしも！」

いつものようにベンチに座り、いつものようにお喋りをする。

テストの手応えがどうだったか、友達はどうな反応を見せたか、これから先何をして遊ぶか。

昨日までの思い出、今日の出来事、明日への願望。

多くのことが蛍の口から語られ、リリンはそれに相づちを打ち続ける。

そんないつも通りの時間が、リリンの胸に染みこんでいく。

(やっぱり……この子という時間は、特別だわ……。)

フェアリーキングダムでの一見以降、忘れられていた安らぎが再び戻ってきている。

もしかしたら彼女が……。

そんな疑問ももはやどうでもよくなってきたほどに。

それでもリリンはまだ、自分の中に刻み込まれた存在意義を否定することができないでいた。

(でもあたしは……行動隊長だ……。)

ダークネスの行動隊長リリース。

この世界を闇へと堕とすことが使命であり、それが絶対だ。

それを忘れたつもりはないし、行動隊長としての自分を捨てたつもりもない。

いずれはこの世界も、この子も、闇に墮とすつもりでいる。

それが分かっているながらも、リリスは目の前にいる少女を、蛍と一緒にいる時間を求めてしまう。

蛍と一緒にいると、これまで得ることの出来なかつた何かが、手に入るような気がしたから。

その時リリンの脳裏に、1つの考えがよぎる。

(・・・そうだ。

せめてこの子がいる間だけでも、『リリン』として過ごすことができないかしら・・・)

ダークネスに時の概念は存在しない。

悠久の時を経ても朽ち果てることはない。

だが人間の寿命は長くてもせいぜい100年程度。

それは限らない時間の中では、塵ほどの価値もないものだ。

だからダークネスの使命を捨てることにはならない。

ただ100年近い間だけ『リリン』でいるだけだ。

(だから、いいのよね?)

この子がいる間は、この子と一緒にいることを選んでも・・・)

自分の抱いた疑問から目を背け、耳を塞げば『答え』なんて何も見えてこない。知ろうとさえしななければ、この時間を失うことはない。

それにプリキュアの正体が人間の少女であれば、やつらの時間にも限りがあるはずだ。

今いるキュアシャインがどれほどの脅威だとしても、100年も経てば存在しなくなる。

だからもう……。

「リリンちゃん？どうしたの？ボーツとしちやつて。」

「え？ごっごめんね。ちよつと考え事してて。」

今の任務を放棄してしまっても、問題なんてないはずだ。

「ねえほたる。今から一緒にクレープたべにいかない？」

「うん！いいよ！」

今の間、任務を放棄することになれば、もうキュアシャインへの憎しみを晴らすことは出来なくなるだろう。

それでもこの子と一緒にいられるのなら……。

そして、この子と離れるときが来たら……。

(そのときに、ダークネスの行動隊長リリスに戻ればいいんだわ……。)

そのときにはもう、自分を縛るものは何もかもなくなっているはずだ。

キュアシャインへの憎しみも。

キュアシャインへの怒りも。

そして、蛍への……。

そう思い当たったとき、リリスの胸に柄も言えぬ空虚が生まれるのだった。

：

ダンタリアは2度、3度ノックをした後、アモンが研究室として活用している王族の寝室を尋ねた。

「何か用かね？ダンタリア。」

椅子に腰かけ、モニターから目を離さぬままアモンが話しかけてくる。

「アモン様。」

あなたは今、リリスの身に何が起きているのかご存知ですか？」

「ほう……。」

「あの子は今、人間の少女に絆され、行動隊長としての使命を放棄しています。」

「だがなぜリリスにそのような変化が訪れたのか、我らを『造りになった』あなたなら、何か知っているのではないですか？」

「・・・クツクツク。」

自分の質問を聞き終えたアモンは、フード越しでも分かるほどの笑みを漏らしている。

「何が可笑しいのです？」

「いや、すまんな。」

「思っていたよりも『遅く』その質問をしてきたものでな。」

「なっ・・・。」

「だがアモンから予期せぬ言葉を返されてしまう。」

「ただ時期が『遅かった』だけで、アモンはこちらがその質問をしてくることを想定していたのだ。」

「リリスの身に変化が訪れていたことは、君たちも前からわかっていただろう。」

「それとも、君自身が事の状態を受け入れられなかったから遅くなったのかな？」

「まるで心を見透かされたかのような言葉を続けられ、ダンタリアは黙り込む。」

「そう、全てアモンの言う通りだ。」

リリスの変化には前々から気が付いていた。

ただその変化があまりにも『信じられない』ことだったから、別の可能性を探ろうと観察を続けていたのだ。

「ダンタリア、これを見たまえ。」

するとアモンは目の前の大型モニターにある画面を映し出す。

そこには、リリスとサブナック、そして自分のものと思われるシルエットが映し出されていた。

「これは……僕たちですか？」

「その通りだ。君たちのデータは常に私の元で監視されている。」

『創造主』である私が『作品』である君たちの監視をするのに、理由なんているまいな？」「ええ、おっしゃる通りです。」

だが監視されていたことはダンタリアにとつても想定内だ。

それについて特に思うことはない。

そんなダンタリアの淡々とした返答に、アモンはどこか満足そうに頷く。

「クククツ、君たちはそれでよいのだよ、ダンタリア。」

「どうゆう意味ですか？」

「モニターに映し出されている君たちのシルエットを見比べてみたまえ。」

言われるままにダンタリアは、自分たちのシルエットを見比べる。

自分のものと、サブナックのものには幾つかの線が水平に引かれていた。

その一方でリリスの線は、不規則な曲線を描いている。

波打つかのように描かれているそれは、かの地で見かけた心電図に似ているようだった。

「これは、まさか……。」

「そう、君たちの『感情』の波形だよ。」

「っ!？」

そしてアモンの口から予想通りの、そして的中して欲しくなかった答えが語られた。

「今ごろ、かの地の少女と会っている頃だろう。」

「この時間帯は良く、あの子はこの波形を見せている。」

「やはりリリスには……でもなぜリリスに感情が?」

これまでの傾向から予期していたとはいえ、実際にその答えを見せつけられると動揺は隠せないものだった。

「我らに感情なんてないはずだ。」

アモン様、あなたがそのようにお造りになられたはずでしょう?」

「その通りさ、時も、心も、そして『命』さえも君たちには与えていない。」

「それならばなぜ、あの子だけが！」

声を荒げて問いかけるダンタリアを、アモンは薄く笑いながら問いを返す。

「君ならわかるはずだよ。」

リリスが感情を得てしまった理由をね。」

「なんですって……?」

「君たちに与えたのは、私の命令を遂行するための力と知恵だけ。」

だが皮肉にも、それがあの子に感情をもたらしてしまった。」

「……まさか。」

少し考え込んだダンタリアは1つの答えに辿りつく。

その時、サブナツクのシルエットに先ほどとは違う色の波形が現れた。

「アモン様、この波形は?」

「絶望の闇の波形さ。どうやらサブナツクが力を使ったようだね。」

その言葉を聞いてダンタリアは黙り込んでしまう。

リリスに現実を突きつけるために、サブナツクがついに行動を起こしたのだ。

：

サブローは遠目からリリンの様子を観察していた。

目に映る彼女の表情は、普段モノクロの世界では見せないものばかり。

行動隊長の中でも最も演じることを得意とするのが彼女だが、サブローにはその表情が演技とは思えなかった。

そしていつまで眺めていても、リリンは行動を起こそうとはしなかった。

(そこまで絆されたか、リリス……。)

この辺りが限界のようだ。

このままではあの子は、行動隊長として使い物にならなくなる。

「リリス、悪く思うなよ。」

あの子の躊躇いを断ち切らなければならない。

サブローはリリンと話し込んでいる『螢』に目を向ける。

「ターンオーバー、希望から絶望へ。」

そしてサブナックへと姿を変え、闇の牢獄を展開する。

直後、変化はすぐに見て取れた。

「え……?」

「ほたる・・・なんで・・・?」

リリンと一緒にいる蛍が姿を消さなかったのだ。

闇の牢獄は、心に闇を抱えるもの以外は空間の外へと弾き飛ばされる。

この場に残るものは闇を抱えしものと、我らダークネス、そして・・・。

「リリンちゃん!? だいじょうぶ? ぐあいわるくない?」

「え・・・ええつ、あたしならだいじょうぶよ・・・。」

闇を祓う光の使者、プリキュアだけだ。

そして蛍は牢獄の中に残りながらも、絶望の闇を発していない。

そのことを悟ったリリンの表情が見る見る内に青ざめていった。

だが蛍はそんなリリンの動揺を、不調と感じ取ったようだ。

不安げな表情でリリンの具合を気遣っている。

一方でリリンは視線を泳がせ、目の前の現実を直視しようとはしなかった。

「この期に及んでもまだ、目を背けるつもりか? リリス。」

それならば、こちららも最後の手段を使うしかない。

サブナツクは2人の元へと跳躍するのだった。

∴

「リリンちゃん！しっかりして！」

突然の悪寒に見舞われ周囲が色を失った瞬間、蛭は闇の牢獄が展開されたことを悟るが、同時に目の前の出来事に驚愕する。

リリンの姿が闇の牢獄の中でも見えるのだ。

闇の牢獄の中に取り残されるのは、プリキュアとダークネスを除けば、心に強い迷いを抱く人だけだ。

彼女が残されたと言うことは、絶望の闇に囚われる予兆が現れているのではないかと思った蛭は、必死にリリンに呼びかける。

「だいじょうぶよ．．．それよりも、なんでほたるが．．．。」

大丈夫と言うが、どこか顔色が悪く声も震えている。

どうにかしてリリンをここから助けなければと思うが、直後巨大な着地音が近くから鳴り響いた。

「え．．．？」

目を向けた方向からは粉塵が巻き起こり、その中から行動隊長の1人、サブナックが

姿を見せる。

「なんで……。」

リリンが目を見開いて呟くが、サブナックは右手に黒い球体を浮遊させる。

「ダークネスが行動隊長、サブナックの名に置いて命ずる。

ソルダークよ、世界を闇で食い尽くせ！」

そして目の前でソルダークを生み出し、こちらを睨み付けてきた。

(もしかして……わたしたちをねらってるの?)

これまでダークネスが、闇の牢獄に取り残された人たちを直接襲うようなことはなかったはずだ。

それなのになぜ、と疑問を抱くが、螢は隣にいるリリンをみて「1つの可能性を思いつく。

もしかしたら今までは機会を必要としなかったかもしれない。

取り残された人たちは、絶望の闇に飲まれ意識を奪われるので、ダークネスが直接手を下す必要なんてないのだ。

だけど今回は違う。

自分も、そしてリリンもまだはつきりと意識がある。

もしサブナックが自分たちを絶望の闇へと誘うために実力行使に出てきたのだとし

たら？

そんな最悪の事態が蛍の脳裏を過る。

「はああっ！」

その時、蒼い雷がソルダークの巨体を吹き飛ばし、続く紅い炎がサブナックに目掛けて放たれた。

キュアスパーク、キュアブレイズ、そしてキュアプリズムの3人が駆け付けて来てくれたのだ。

その後ろにはチェリーたちの姿もある。

恐らく日課となっているパトロールの最中にキュアスパークたちと合流したのだろう。

「えっ？どうして？」

こちらに気付いたキュアスパークが驚くも慌てて言葉を濁す。

もしこの場で自分の名前を呼んでしまったら、プリキュアが自分の事を知っているのだとサブナックに悟られてしまう。

そしてそれは、自分の正体がこの場にはない『キュアシャイン』であると伝えてしまうようなものだ。

蛍はその気遣いに内心感謝しながら、みんながサブナックを足止めしてくれている今

がチャンスだと思った。

「リリンちゃん！いまのうちに逃げよ！」

「ほたる？」

リリンの手を引き、この場を後にする。

本来ならばすぐにでも変身したいところだが、今はできる限り離れた場所に彼女を避難させることを優先しよう。

もしもリリンに正体がバレてしまったら、彼女もこの戦いに巻き込まれる危険性がある。

それだけは絶対にあつてはならない。

何が何でもリリンのことを守るのだ。

闇の牢獄に取り残されたリリンが、いつまで正気を保つていられるかは分からない。

だからこそ急いで彼女を避難させなければならぬ。

蛭はわき目も振らず、無我夢中で全速力で走るのだった。

：

サブナツクと交戦しながら、千歳は蛭とリリンの様子を横目で見る。蛭が変身していないのは、闇の牢獄が展開されたときにリリンが隣にいたからだろう。

リリンの目の前で変身することはできない。

そして彼女から離れる間もなく、サブナツクが現れてしまったのだ。

問題は、なぜリリンがこの空間に取り残されているかだ。

闇の牢獄に囚われるものはみんな心の中に不安や悩みを抱えている人のはずだ。

そしてその心の闇が、絶望の闇となって周囲の空気を侵食していく。

だが彼女からはそれが一切感じられなかったのだ。

そればかりか意識さえもはつきりとして見えるように見える。

この、一切の色と音を失ったモノクロの空間の中で、普段と変わらない様子を見せているのだ。

さらに言えばサブナツクの行動も妙だ。

先ほどから蛭とリリンの方を何度か一瞥している。

(まさか・・・サブナツクのやつ。)

ここで千歳は思い描く最悪のシナリオを想定する。

もしもリリンの正体が、自分の思い通りだとしたら？

もしもあいつが既にキュアシャインの正体を掴んでいるとしたら？

そしてやつらが今、キュアシャインを倒すために結託しているのだとしたら・・・？

それならば一刻も早く、蛍をリリンから引き離さなければならぬ。

だがその時、蛍がリリンの手を取ってこの場を走り出したのだ。

「っ!?待って!!」

危うく名前を呼びかけてしまうところだったが、その一瞬の隙をつかれてサブナツクの攻撃が飛んでくる。

間一髪のところまでガードすることはできたが、サブナツクに苦戦している間にも蛍たちとの距離が離れていく。

「そこをどきなさい!」

キュアブレイズは渾身のパンチを繰り出し、サブナツクを後退させる。

「はあっ!」

キュアスパークの方も、雷を纏ったパンチでソルダークを殴り飛ばしていた。

このまま一気に畳みかけて、すぐに蛍の元まで向かわないと。

だがその時、

「ソルダーク!」

サブナツクの呼び声とともに、ソルダークから黒い霧が放たれる。

直後、その黒い霧はソルダークの形を取り、その場に実体化したのだ。

「分身した!?!」

キュアスパークが驚き、2体のソルダークを一度に相手にしなければいけないのかと思いつめるが、分身したソルダークは後方へ振り返る。

そして、千歳がまさかと思つた矢先、ソルダークの分身は蛍たちの元へと跳躍したのだ。

「なっ!」

キュアブレイズが慌てて駆けつけようとするが、サブナツクが行く手を塞ぐ。

キュアスパークもソルダークによつて道を塞がれてしまい、蛍との距離は開く一方だった。

「キュアプリズム!早くあのソルダークのところに!」

「分かつてるわ!」

だがキュアプリズムが飛び行こうとしたところを、ソルダークが黒い霧を周囲の空間へと放つた。

そして対峙していたキュアスパークの視界を封じ込め、その隙にキュアプリズムへと拳を繰り出す。

「きゃあっー！」

ガードが間に合わなかったキュアプリズムはそのまま地面へと落下する。

キュアスパークとキュアプリズムはソルダークに足止めされ、自分もサブナツクの相手に手いっぱいだった。

「どきなさいと言ってるでしょ！サブナツク!!」

サブナツクはこちらの言葉には一切反応しないが、この一連の動きで千歳は確信した。

ダークネスに蛍の正体がバレてしまったこと。

そしてリリンの正体が間違はなく、やつだと言うことを。

だからリリンと蛍が一緒にいるタイミングを見計らって、サブナツクが闇の牢獄を展開させソルダークを蛍の元へと送り込んだのだ。

リリンと一緒にいる以上、蛍は変身することができないのだから。

「邪魔をするなあああ!!」

千歳は自分の甘さに歯噛みし、今の状況を悔やむ。

こちらの一方的な思い込みである可能性が否めなかったから。

蛍の幸せを壊したくなかったから。

そんな甘い考えがこの事態を招いてしまった。

せめて蛍に無事でいて欲しい。そう願いながら千歳は目の前のサブナックと対峙するのだった。

：

蛍に手を引かれながら、リリンは噴水公園を離れていく。

誰もいなくなった屋台を通過し、路地を曲がって突き進む。

だがリリンは、目の前の蛍以外は目に映らないほど困惑していた。

(どうして……ほたるがここに……?)

いや、以前自分は蛍からソルダークを造り出したことがある。

それほど心の弱いこの子なら、闇の牢獄に取り残されても不思議ではない。

だけど……

(どうして……ここで普通にいられるの……?)

そう、問題は蛍が闇の牢獄の中ではつきりとした意識を保っていること、そして絶望の闇を発していないことだ。

こうして手を引かれ、彼女に触れていても絶望の声が聞こえてこない。

それなのに蛍は、闇の牢獄に取り残されているのだ。

「はあ・・・はあ・・・リリンちゃん、だいじょうぶ・・・？」

走るのに限界が来たのか、蛍が足を止めて呼吸を整える。

こんな状況でも、蛍は自分のことを気にかけてくれている。

だがそれがリリンの心に、刃物のように深く突き刺さる。

「うん、だいじょうぶ・・・。」

そう言いかけたその時、リリンは背後から異様な気配を感じる。

そして振り向いてみると、ソルダークがこちらを追ってきたのだ。

「えっ!？」

蛍が驚き、こちらの手を握りながら後退する。

リリンは噴水公園の気配を探るが、サブナックと3人のプリキュア、そしてソルダーク

クの力が感知された。

それも目の前にいるソルダークと同じ気配がする。

恐らくはソルダークが能力で分身を作ったのだろう。

問題は、なぜサブナックがこちらに分身を送り込んだのかだ。

それを考えている内に、目の前にいるソルダークが拳を振り上げてきた。

「リリンちゃん！」

蛍は無理やりリリンの手を強く引き、走り出した。

直後ソルダークの拳が振り降ろされ、大地に強く叩きつけられた。

その衝撃がでリリンは蛍と手を繋いだまま躓いてしまう。

「きゃあっ！」

ソルダークの攻撃はこちらを直接狙ったものではないが、人間である蛍相手には攻撃の余波だけでも十分な威力だった。

蛍が叫び声を上げながら倒れる。

「ほたる！」

繋いだままの手を引き、蛍を立たせるが、彼女は膝を擦りむいていた。

「ほたる、だいじょうぶ!？」

「へいき・・・、それよりも、はやくここからにげないと・・・。」

明らかに痛みを堪えている様子だったが、それよりも蛍は安全を確保することを優先する。

だがリリンはその態度にいつそう困惑する。

ソルダークのような巨人はこの世界では存在し得ないものなのに、蛍はそれをまるで

『知っているかのような』反応を見せたのだ。

目の前の出来事に困惑しながら、リリンは蛍と路地裏まで着き、そこに身を潜める。
「……リリンちゃん。」

すぐにもどつてくるから、しばらくのあいだここにかくれててね？」

「え……？」

どこか決意に満ちたその言葉は、蛍のものとは思えないほど力強い言葉だった。

「まっつてほたる。」

「たすけてくれるひとをよんでくるから、おねがいだからここにまっつてて。」

いつもとは違う、凜とした雰囲気。蛍はそう言う。

だがなぜこの場に自分を一人取り残すのか？

なぜ一人で出て行こうとするのか？

(……ほんとうに……あなたなの……?)

蛍が闇の牢獄に取り残された理由。

サブナツクに目を付けられた理由。

ソルダークを見ても怯えなかった理由。

今自分一人を残してどこかへ行こうとしている理由。

人見知りが強くて、臆病で、ソルダークを生み出すほどの闇を抱えていたこの弱い少

女が、本当に……？

リリンの脳裏に、これまで幾度となく考え、そして否定してきた最悪の事態がよぎる。ずっと目を反らし続けてきた答えが、逃れようもない現実として目の前に迫ってくる。

そしてリリンは……。

「ほたる……。」

気が付けば、ここを立ち去る蛍の後を静かに追っていた。

彼女に気付かれないように、気配も物音も消して。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

「……っ!!？」

そして目の前に突き付けられた『現実』は、リリンから全ての安らぎを奪っていった。

蛍がキュアシャインへと変身する姿をこの目に捉えたリリンは、その場に膝から崩れ落ちる。

「はあああっ!!」

そして希望の光を纏ったキュアシャインの打撃がソルダークに炸裂し、たったの一撃でソルダークを葬り去った。

そんな光景を前にしてもリリンは、呆然と座り込むのだった。

:

キュアシャインへ変身した蛍は全身に希望の光を纏い、たったの一撃でソルダークの分身を撃破する。

これまでよりも大きな力を解放でき、それを自由意志で制御できているのだが、蛍の心境はそれを喜ぶどころではなかった。

リリンが牢獄に囚われたと言うことは、心に悩みを抱えている証拠だ。

それなのに今、彼女を1人で取り残してしまっている。

出来ることならあのまま側について、悩みがあるなら支えてあげたかったが、サブナックが直接リリンを狙ってきているのであれば、悠長になんてしては行かない。

ソルダークの浄化を優先すべく、蛍は噴水広場へと飛んでいく。

そしてサブナックとキュアブレイズが交戦しているところを見つけ、その場に降り立った。

「んっ?」

「キュアシャイン！」

2人がこちらに気付いて振り向く。

だが蛍には2人の声は届いていなかった。

震える手を握り、唇を強く噛みしめる。

心に渦巻く感情、『怒り』を、蛍は抑えきることができなかった。

「ゆるさない……。」

「何？」

「リリンちゃんを危険な目にあわせたあなたを、わたしはぜつたいにゆるさない!!」

サブナックがこちにはソルダークを送り込んだのは、闇の牢獄に囚われたリリンを力

づくで絶望させるために違いない。

闇の牢獄に囚われるほどの不安を抱えているリリンを、あんな危険な目に合わせてま

で絶望させようとしたのだ。

それが許せなかった。

次の瞬間、蛍の全身から希望の光が解放される。

内から湧き上がる怒りが決壊し、その全てが力へと変わり蛍の周囲を渦巻いていく。

「はああああっ!!」

そして蛍は、解放したありつたけの希望の光を拳に纏い、サブナックへと繰り出した。

サブナックはそれをガントレットでガードするが、次の瞬間ガントレットが砕け散り、光の粒子となって消滅した。

「何っ!!?」

サブナックが目を見開いて驚くが、蛍はその隙を逃さない。

続けざま拳を振るうが、サブナックも反射的にもう片方のガントレットでガードする。

だが蛍の拳は再びガントレットを打ち抜き粉々に砕いた。

「くっ！ソルダーク!!」

ソルダークの名を叫びながらサブナックは後退する。

直後ソルダークがサブナックの盾になるように目の前へと降り立った。

ソルダークを盾にしながら反撃の機会を伺うつもりなのだろうが、そうはさせない。

蛍はありったけの力を目の前に集中させる。

「ひかりよ、あつまれ！シャインロッド!!」

シャインロッドを召喚し手に取り、全ての力を先端に集中させる。

「プリキュア！シャイニング・エクスプローション!!」

そして全ての力を解放し、巨大な光線を解き放った。

解き放たれた光線は瞬間にソルダークを包み込み、一撃で葬り去った。

ソルダークを盾にしていたサブナツクは、宙へと飛び上がり回避しようとするが、螢はそれを逃さない。

「はああああああっ!!!」

螢は光線を放ちながらシャインロッドの方向を変え、サブナツクの後を追従する。

巨大な光線がまるで持ち上げられるかのように向きを変え始め、跳躍するサブナツクの足元から迫り来る。

そして焦りの表情を浮かべたサブナツクの足元を掠め始めた次の瞬間、
「っ……っ。」

全ての力を使い果たした螢は、その場に膝をついて脱力する。

次の瞬間、サブナツクへと迫っていた巨大な光線は一瞬で消え去り、シャインロッドも光の粒子となって散っていった。

「間一髪だったか……。」

サブナツクは擦れた声で呟き、この場から姿を消すのだった。

…

モノクロの世界。

帰還したサブナツクの元に、ダンタリアが姿を見せた。

「その傷、随分と手酷くやられたようだね。」

両手のガントレットを失い、手足に深い傷跡を残してしまった。

しばらく経てば傷もガントレットも再生するだろうが、これほどの深手を負うとは思ってもよらなかった。

「あれが2度に渡ってリリースを打ち破り、フェアリーキングダムを解放したキュアシャインの力か……。」

初めて力を解放したキュアシャインと相對したが、こちらの想像を遥かに超えていた。

打撃1つでガントレットを砕かれ、浄化技を足に掠めただけなのに、膝元まで焼けただれている。

かつて自分の身に傷一つ負わせることができなかつたはずなのに、今では逆に一切の勝算が見えなかつた。

もしもまた、あの力に真つ向からぶつかることがあれば、……ダンタリアとリリースの力を合わせてもあれには到底及ばないだろう。

そう思った時、

「正直、震えたよ。」

サブナツクの手が止めようもなく震え出した。

左手で抑えようとしても収まらない震えが、サブナツクの全身を支配していく。

「なんだって?」

そんなサブナツクの様子にダンタリアが眉を潜める。

だがサブナツクは冷静に自分に起きた現象を分析する。

敵対する力を前に震え、再び合間見ることに『畏れ』を抱いている。

「なるほど……これが『恐怖』か。」

サブナツクがその意味を悟った瞬間、リリースの身に起きたことも実感した。

キュアシャインの影響でリリースが『感情』を学べたことを、サブナツクは身を以って

証明してしまったのだ。

そんなサブナツクの様子をダンタリアが訝しむ。

「サブナツク!!」

その時、かの地から帰還したりリリースが、声を荒げてサブナツクに詰め寄って来た。

「なんだ?」

彼女が怒る理由は大体察しがついているが、サブナツクは敢えて口にせず、リリースか

ら直接聞きだそうとする。

「どうして……どうしてほたるを危険な目に合わせたのよ!？」

「なに……?」

だが、てつきりリリスの元にもソルダークを送り込んだことに怒っているのかと思っ
たが、返って来た答えは、その予想を裏切るものだった。

サブナツクは眉を潜めながら嘆息する。

「……開口一番、出てきた言葉がそれか……リリス。」

サブナツクはどこか憐れむような声でそう呟く。

「え……?」

そして自分に指摘されて初めて、リリスはその言葉がおかしいことに気付き狼狽え出
したのだ。

全てにおいてタチが悪いのは、リリス自身が『無意識』だと言うことだ。

そう、リリスには自覚がない。

限りなく『人』に近い感情を抱き始めていることを。

「あたしは……。」

狼狽するリリスを見て、サブナツクは事の限界を悟る。

「リリス、キュアシャインの正体を暴くと言う任務はどうなった?」

「っ!!?」

リリスの顔が一瞬で青ざめ、足もとがおぼつかなくなる。

その様子を見てサブナツクは、リリスが既に答えに辿りついたことを悟る。

だからこそ、これで全てを終わりにするのだ。

答えに辿りついておきながらずっと目を背け、一人の少女と共に過ごし、人に近い感情を得てきたリリスのひと時を。

「なんで・・・なんであなたがそんなことを聞くのよ!!?」

「キュアシャインの正体を知ることとは出来たのか?」

逃れることの出来ない現実を持って、サブナツクはリリスを追い詰めていく。

「・・・あたしは・・・」

「リリス。」

もう逃げ道など残さない。

サブナツクはリリスが白状するまで彼女を追い詰めていく。

「・・・っ、ええわかったわよ!」

あなたのせいで何もかも全てわかったわよ!!

キュアシャインの正体も!あの子の正体も!全部・・・」

リリスの怒鳴り声はやがてか細くなり、最後には大きく肩を落とす。

そんな彼女の姿を見下ろしながら、サブナックは最後の一言を押す。

「ならば、次の任務はわかっているな？」

「っ……」

キュアシャインの正体を暴くことだけが、与えられた任務ではない。キュアシャインの正体を暴き、そして。

「あなたなんかに言われるまでもないわよ！

いいわよ！やればいいんでしょ!!？」

自暴自棄になって叫びながら、リリスはその場を後にしていった。

そんなリリスの後ろ姿をサブナックは見送る。

「これで良かったのかね？」

事の成り行きを見ていたダンタリアが、珍しく神妙な面立ちで質問してきた。

「……これ以外にあるか。」

あいつが行動隊長であり続けるには、これしか方法がなかったのだ。」

あの蛍という少女は所詮人間、100年も経たぬ内に存在は終る。

悠久の時を在り続けるダークネスからすれば、あまりにもちっぽけな存在だ。

だからせめてあの少女が存在する僅か100年の時の中だけでも、リリスはそんな考えを持っていたのだろう。

だがその考えは甘すぎる。

あの蛍と言う少女は、今日までの僅かな時の中でリリースに劇的な変化を与えたのだ。

もしもこの先、あの少女が終わりを遂げるまでリリースと共に過ごすようなことがあれば……。

リリースがどのように変わってしまうかは想像もできない。

だが少なくとも行動隊長として使い物にならなくなるのは明白だ。

そしてリリースは、永遠を在り続けるものだ。

限りあるもの同士が、互いに終わりを迎える時まで共に過ごすのとはわけが違う。

リリースは必ず取り残される。

そして取り残されたリリースが行動隊長としての価値さえ無くしてしまえば、あの子はこの先、無限に続く時の中を無為に過ごさなければならぬのだ

それを思えば、蛍がプリキュアであることはせめてもの幸運だったとしか言いようがない。

敵として認識できる対象であれば、リリースにはまだ未練を断つ理由を持つことができるだろう。

そしてプリキュアと戦うことができれば、リリースは行動隊長としての価値を維持できる。

あの子をこの世界に、ダークネスのモノクロの世界に繋ぎ止めるには、蛍を敵として認識させるしかなかったのだ。

「結局俺たちには、行動隊長としての以外に価値などないのだ。

リリスが儂い願いを抱いたところで、所詮それは叶わぬ運命。

叶わぬ夢を抱かせるくらいならいっそ……」

サブナックは一呼吸を置く。

「碎いてやるのが、『慈悲』つてもものだろう。」

サブナックの言葉にダンタリアは少し呆気にとられる。

「らしくない言葉だね。」

「……俺もそう思う。」

「らしくないついでにもう一言。」

含みのある言葉を重ねた後、ダンタリアは静かに呟く。

「『損』な役回りをさせてしまったね。」

そのダンタリアの言葉に、今度はサブナックが眉を潜める。

「らしくない言葉だな。」

「本当、僕自身もそう思うよ。」

どうやら自分も、ダンタリアも、リリスも、今回の出来事で疲れているようだ。

サブナツクたちはそれ以上は言葉を交わさず、各々闇へと姿を眩ますのだった。

：

戦いが終わった後、千歳たちは家に帰る蛍とチェリーをみんなで見送っていた。

「それじゃあ、また明日ね。」

「うん・・・またあした・・・。」

「蛍、リリンならきつと大丈夫よ。」

また会うのを約束したのでしょうか？その日になればまた会えるわよ。」

「うん、そうだね・・・。」

落ちこむ蛍をチェリーが励ましながら、2人は家へと帰っていく。

戦いが終わった後、千歳たちは蛍を追ってリリンを避難させたところに訪れてみたが、彼女の姿はどこにも見当たらなかったのだ。

あの時蛍たちを追ったソルダークの分身は、蛍が浄化したのだから、リリンの身に何かがあったわけではない。

ただ恐ろしい出来事を目の間にしたからすぐにこの場を立ち去りたかったただだと、雛子がそう励ますと、螢は俯きながらも納得してくれた。

それでも螢が未だに元気がないのは、リリンの安否を直接確認できていないからだろう。

だが、千歳は全く別の可能性を考えていた。

「それで、ウチらに話つてなに？」

要がこちらを振り向き尋ねてくる。

この場にいるのは今、要とベリイ、雛子とレモン、そして自分とアップル。

螢とチエリーにはまだ話すべきではないと思いき先に帰したが、これ以上問題を先延ばしにもできないと思った千歳は、かねがね胸中に抱いていた疑問を要たちに話すことにしたのだ。

その話を切り出すために、千歳は先ほどの戦いで得たことをまず話し出す。

「今回のダークネス、どこか妙な動きをしていたと思わない？」

「妙な動き？」

「……。」

首を傾げるベルたちとは対照的に、要と雛子は、共に顔を顰めた。

「螢ちゃんとリリンちゃんを直接狙ったことよね？」

「ええ、その通りよ。」

「やつぱり・・・2人にもそう見えたんやな。」

自分たちの意見が一致する一方で、ベルとアップルは困惑する様子を見せる。

「蛭ちゃんはプリキュアだから、闇の牢獄下でも絶望の闇を発しない。」

だから力づくで絶望させようと考えただけじゃないのか？」

「闇の牢獄に取り残される人で絶望の闇を発さないのは、やつらにとつても珍しいものでしょうし。」

恐らくこの場にいる全員が同じことを考えただろう。

だが千歳はそうではないと考えている。

「それでも、その目的の行きつく先は、結局ソルダークを造り出すかどうかでしょ？」

でもあのときは既にソルダークがいたわ。

いくら珍しいからと言って、やつらがそんな回り道をすると思う？」

「でも、それならなんでわざわざソルダークを分身させてまで蛭たちを？」

要が反論するが、千歳は逆に要の『たち』と言う言葉に眉を潜めた。

「たち、じゃないわ。要。」

あの時サブナツクが狙いを定めたのは、恐らく蛭だけよ。」

「え・・・？」

「……」

驚く要に対して雛子は唇を噛みしめ、アツプルは目を見開いて言葉を綴った。

2人は自分の言葉の意味を悟ってくれたのだろう。

「それってまさか……」

「ええ……、恐らく蛍の正体がやつらにバレたのよ。」

「なっ……!!?」

声を失う要に千歳は言葉を続ける。

「やつらが突然、キュアシャインを集中的に攻撃するようになったことから、やつらはキュアシャインの希望の光を警戒しているのは間違いないわ。」

そして力では敵わないと判断したやつらは、キュアシャインの正体、蛍を変身する前に倒そうとした。

そう考えると、今回の行動、全て説明がつくと思わない?」

「まっ、待つて。」

確かにそれなら今回のことは説明付くけど、どうして蛍の正体がバレてまったん?

ベリイたちが毎日街をパトロールしてくれてるけど、最近は全然怪しい人は見ないって言うてたよな?」

「ああ、それに蛍ちゃんはあるでかなりしっかりしているし、迂闊に人の前で変身なんて

しないだろ？

普段君たち以外の人と行動することもないから、プリキュアであることを話すような場面もないはずだが。」

ベリーの疑問に要が頷く。

確かにその通りだが、たった『1人』だけ例外がいるのだ。

「いるじゃない、たった1人だけ。」

蛍が良く会う『私たち以外の友達』が。」

その言葉に、要の表情が青ざめていく。

要だけじゃない。雛子もレモンもアップルも、みんな同じ人物を頭に思い描いたのか、目を見開いた。

「まさか……。」

千歳は全員の表情を一瞥し、静かに口を開く。

「リリン。あの子が蛍の正体をサブナックたちに伝えたのよ。」

「待って！それってリリンがダークネスだってこと!？」

「ええ、その通りよ。」

「いくらなんでもあんな小さな子が……あつ……。」

そこまで言って、要は声を失い啞然とした。

思い当たってしまったのだ。

たった1人だけ、リリンと背丈の近い敵に……。

「あなたの予想通りよ、要。」

千歳は1つ呼吸を置き、改まってみんなの前で言葉を綴る。

「リリス。やつがリリンの正体よ。」

日が傾きかけた夏の夕方を、底知れない静寂が支配していくのだった。

：

次回予告

「リリスの正体がリリンだって？」

「そうよ、あいつが自分の事を話さないのも、蛍に友達として近づいたのも、全てキュアシャインを倒すためよ。」

「やつは心を持たない行動隊長。」

「友達のフリをして蛍を騙すことだって、何も躊躇わないわ。」

「千歳ちゃんは本当にそう思ってるの？」

本当にリリンちゃんが騙しているだけだと思うの？」

「雛子。」

やつをこのまま放っておけば蛍が危険な目にあうわ。それでもいいの!?!」
「そんなこと言っていないわ！」

ただ私は、リリンちゃんの全てが演技だなんて思えない！」

次回！ホープライトプリキユア第20話！

たのしいってなに？揺れ動くリリスの心！

希望を胸に、がんばれ！わたし！

第20話

第20話・プロローグ

「リリンが、リリスだって・・・?」

雛子の隣で、要が口元を震わせながら呟く。

目を見開いた表情は、とても信じられないと言いたげな様子だ。

「ええ、そうだとすれば全て説明がつくのよ。」

リリンがなぜ蛭に自分のことを話さないのかも、ダークネスが蛭の正体を知ったことも、あのときリリンが絶望の闇を発してもいないのに、闇の牢獄に残されたのかも。」

だが千歳は淡々とその証拠を口にする。

要は一瞬、何かを言おうとしたがすぐに唇を噛みしめて俯いた。

反論しようにも、その根拠となる証拠がないのだろう。

「それに、蛭が言ってたじゃない。」

この街に来て初めてリリンと会った日に、闇の牢獄に閉じ込められた。

そしてその時に自分からソルダークを造り出したのがリリスだって。

いくらなんでも、偶然が過ぎると思わない?」

「つ……。」

そのままは黙り込んでしまった。

そして少しこちらに目配せする。

何か反論してくれるのではないのかと期待をしているのだろうが、雛子は、それに応えてあげることとはできなかった。

「……雛子は、そんなに驚かないのな。」

「……ええ、可能性の1つとして考えてたことだったから。」

そう、雛子も千歳と同じことを考えていたのだ。

千歳から行動隊長の特徴を聞いたあの日、自分の頭に真っ先に浮かび上がったのがリンの存在だった。

蛍とあれだけ親しくしているのにプライベートに関する情報は頑なに話そうとしない。

それにこれまでリリスが現れる時は、リリンが蛍と一緒にいる時と重なることが多かった。

偶然とするにはあまりにもタイミングが良すぎる。

気のせいとするにはあまりにも言動が不審過ぎる。

だから自分が、リリンの正体をリリスだと仮定するまでにそう時間はかからなかつ

た。

「……わかんなかったのは、ウチだけか……。」

「要……。」

自嘲気味に呟く要をベリイが気遣うように肩に手を置く。

だけど雛子は、要が悪いとは思わなかった。

要は優しいから、友達である蛍が大切に想っている相手のことを、疑おうと思わなかっただけだ。

今回はたまたま、そんな人の好きが裏目に出てしまっただけ。

だから何も気にする必要なんてないのだ。

他者を無条件に受け入れることができるのは要の美德は、まず人を疑ってかかるような捻くれ者な自分にとっては、眩しく憧れるところだから。

「要、気持ちはわかるけど蛍のためにも、ここは私たちが心を鬼にしなくちゃいけないのよ。」

リリン、いいえ。リリスは心を持たない行動隊長。

蛍のことなんて何とも思っていないはずだわ。

だから私たちが、あの子を守るために……。」

喉元まで出てきた言葉を千歳は飲みこむ。

だ。言わんとする言葉が、虫にとってどれだけ残酷な意味をするのか、わかっているから

第20話・Aパート

たのしいってなに？揺れ動くリリスの心！

リリンの正体がりリスである可能性が高い。

蛭とチェリーが不在の場で、千歳からもたらされた情報は要たちに大きな衝撃を与えた。

だがここで脳裏を過つたのは当然、この場にはいない蛭のことだ。

千歳がわざわざ蛭とチェリーを外した上でこの話を振ってきたと言うことは、まだ2人は知らず、そして知らされていないと言うことなのだろう。

「でも、どうするん？」

蛭を呼び止めなかったことは、まだ蛭に話すつもりはないんやろ？

「・・・ううん、蛭に話せるわけないやん。こんな話・・・」

「それは・・・」

その言葉に、今度は千歳が黙って俯いてしまう。

当たり前だ。いくら事実である可能性が高いとはいえ、リリンの正体がりリスだなん

て、リリンのことを大切に想っている蛍に話せるはずがない。

リリンがリリスだと言うことは、これまでの戦いで多くの人を傷つけ、絶望させてきたと言うこと。

そして何よりも、リリンは心底では蛍に深い憎しみを抱いていたと言うことになるのだ。

要はこれまでリリスがキュアシャインにぶつけてきた言葉の数々を思い出す。

あの全てが、リリンが蛍に向けていたものだなんて、そんな残酷な話を蛍は受け止めることができるだろうか？

信じてもらえないならまだ良い方だ。

だが最悪の場合、立ち直れないほどのショックを負わせかねない。

一体どうすれば良いのかと各々が考えているのか、一度会話の流れが途切れてしまった中、雛子が千歳の様子を伺うように口を開いた。

「・・・ねえ、千歳ちゃん。

こんなことを言うのも変かもしれないけど、もう少しだけ、リリンちゃんの様子を見てみない？」

「え・・・？」

雛子の言葉に千歳は驚いて目を見開く。

「あなた、何を言ってるの？」

確かにまだあの子がリリスであると言う確証はないかもしれないけど、あなただつて、ほとんど間違いないことだつてわかるでしょ？」

「でも……。」

互いの言葉が互いの声を打ち消し、話は一方向に進む様子を見せない中、千歳は一呼吸おいて雛子を見据える。

「それに蛍の正体が知られた今、やつらは蛍の家族のことも知ることができるかもしれない。」

ううん、家族だけじゃない。

蛍の周りにいる人たち全てに危険が及ぶかもしれないのよ。

この戦いでやつらは変身する前の蛍に攻撃を仕掛けたでしょ？」

やつらには心がないから、人間だつて躊躇わず平気で攻撃できるのよ。

このまま悠長に様子見なんてしていたら、蛍を傷つけてしまうどころの話じゃなくなってしまうわ。」

「っ……!?!」

千歳の言葉に、雛子は声を詰まらせるが、その言葉には要も同意する。

もしもリリンの正体がリリスで、蛍の情報が全てダークネスに伝えられているとすれ

ば、蛍の家族や交友関係だって知れ渡っている可能性がある。

なぜそんな情報が必要なのかと言えば当然、絶望させるためだ。

やつらは人を絶望させるためならどんな手段も厭わない。

やつらにとって最も厄介な敵である蛍を止めるために、蛍の周りの人たちを傷つけて絶望させる、と言う手段に出てもおかしくはないのだ。

それにもし、蛍の知人として自分たちの情報さえ知れ渡っているとしたら、自分たちの正体にさえ辿りついている可能性もある。

そうなれば、同じ手段を取るためにこちらの家族にも危害が及ぶかもしれない。

キュアシャインの正体がバレてしまったことに、蛍に責任を問うつもりは毛頭ない。

だが現実的な問題として、蛍一人が危険に晒されると言うものでもなくなっているのだ。

「私にはまだ・・・リリンちゃんがリスだとは思えない。

ううん、仮に本当だとしても、リリンちゃんの全てが演技だとは思わない。」

「何ですって・・・?」

だが尚も雛子は、リリンのことを割り切れずにいるようだ。

キュアシャインの正体がバレたことのリスクを、雛子が想像できないはずはない。

それでも雛子がこんな風に反論するのは、蛍のことを思っていると言うのもあるが、

雛子自身迷っているからだろう。

リリンは本当に心を持っていないのかと。

確かにリリンはまだしも、リリスのキユアシャインに対する態度は感情がないとは思えないほど苛烈だ。

だからと言ってあれが演技でないと言い切れるだろうか？

リリンに心があるのか、ないのか、それを判断することは自分にはできない。

だからせめてと、2人の様子を見た要は1つの提案をする。

「だったらさ、こういうのはどう？」

蛭がリリンに会いに行くとき、ウチらの内、誰かが必ずついていく。

蛭を守るためと、リリンの監視のためにね。」

「要？」

「千歳、ごめんな。でもウチだって雛子と一緒に。」

蛭の大切な友達であるリリンを、まだ切って捨てることなんて出来ない。

でも、あなたの言う通りこのまま放っておいていい問題とも思わない。

だからせめて、ウチらだけでも警戒しておこつて話。

何もなければ万々歳。

もしもリリンが少しでも怪しい行動を見せたら、そんなときは遠慮なしで行く。」

「・・・でも、そんな悠長な。」

「千歳だって、今すぐに蛍の幸せを奪いたくなんてないやろ？」

「だからウチらにしか話さなかった。」

「・・・。」

千歳の無言を要は肯定として受け取った。

もし本当に蛍の身を案ずるなら、今の話を全てを包み隠さずに蛍に伝えて、2度とリリンに近づくなと言えばいいのだ。

だけど千歳は蛍のことを気遣い、自分たちだけに思いを打ち明けた。

きつと、千歳だってまだ確信があるわけではないのだ。

そして千歳も、蛍の幸せを奪いたくないと思っている。

ただ最悪な事態を想定して、蛍を守るために冷徹に構えているだけなのだ。

そんな千歳の覚悟を、要も無駄にしたくない。

「街中で怪しい人がいないかは、ベリイたちが毎日パトロールしてくれている。

街のことはベリイたちに任せれば問題ない。

だからあとはリリンをウチらで見張っていけば、何があっても蛍のことを守れるよ。」

「ああ、任せてくれ。」

「レモンも精いっぱい頑張るからね。」

ベリイだけでなく普段面倒くさがりのレモンも気合十分に答えてくれた。蛍のことを心配してくれたことに要は内心、お礼を言う。

「……でも、私たちの情報だつてやつらに漏れている可能性があるのよ？」

急に私たちの誰かが蛍に付き添うようになったら、それは私たちがプリキュアだつてことを確証させるものじゃない？」

そんな千歳の最もな疑問に要はニヤリと笑う。

「上等やん。蛍のことを守るんやろ？全面衝突のつもりで行こうや？」

リリンがリリスであるかどうかをさしておいても、今回の戦いで、蛍がダークネスに直接狙われたのは確かだ。

その原因として考えられるのは、蛍の正体が知られてしまったからの可能性が高い。蛍を通じてこちらの正体に行きつくのもきつと時間の問題だろう。

だが、どうせいつかバレるのであれば、逆に細かいことは考えなくて済むと言うものだ。

蛍を守るために、そしてリリンの真実を知るために、要はダークネスと真つ向からぶつかる決意を固めるのだった。

：

週明けの月曜日。

学校へ登校した千歳たちは、先週実施された期末試験の結果をみるために全校掲示板を訪れた。

「おつ千歳、相変わらず学年1位をキープですか。」

未来がそう言いながら、自分の肩をポンポンと叩く。

「ふふっ、まあね。」

からかい交じりの言葉とは言え、未来に褒められることに悪い気はしない。

千歳が少し得意げに鼻を鳴らすと、優花が不思議そうな表情で自分の顔を覗き込む。

「千歳、試験の順位褒められて得意げになるの、初めてだね。」

「え?」

「うんうん、今まではちよつと掲示板見てすぐにスーツで帰っていったもんね。」

優花に続き未来が同じ意見を重ねる。

千歳からしてみれば、元々こういつた競争ごとには好きだったはずなので、その中で1位の成績を収めることができたのは嬉しいし、誇りたいものである。

だが、確かにこれまで試験の順位なんて特に意識したことはなかった。

ほんの2か月ほど前のことのはずなのに、千歳はあの頃の荒んでいた自分の記憶があつという間に風化していたことに驚く。

「……ふふつ、そうだったかしら？」

少し照れくさそうに微笑む千歳を、未来と優花はどこか安堵した表情で見ている。

荒んでいた当時を思い出せなくなるほど、今の楽しいひと時を与えてくれる未来たちに、千歳は改めて内心、感謝する。

「雛子！あなたの順位上がってるわよ！」

すると愛子が本人よりも先に順位を見つけ、雛子を手招きしていた。

「え？本当に!？」

雛子が普段よりも高いトーンで反応し、愛子に招かれるままに順位を確認する。

千歳もその方を見てみると、掲示板に張られた順位表の2学年、9位の位置に『藤田雛子』の名前が書かれていた。

「やったね！初の学年9位よ！」

愛子がまるで自分のことのようにはしゃいで喜び、雛子に抱きつく。

そんな愛子とは対照的に、雛子は無言のままだった。

だがその表情からは隠し切れない喜びが伝わってくる。

余りの嬉しさに呆然としているだけのようだ。

「千歳ちゃん。」

すると雛子がこちらを振り向いてきた。

「ありがとう、千歳ちゃんが勉強を見てくれたおかげよ。」

そして微笑みながら勉強会のお礼をしてきたのだ。

「……ううん、どういたしまして。」

だけどそんな雛子の言葉を聞いて、千歳は少し返答に困る様子を見せてしまった。

愛子の言葉から察するに、雛子が一桁の順位に入ったのは初めてのことなのだろう。

あの勉強会で自分が雛子に教えたことがどれほどその順位に影響しているかはわからないが、言葉を失うほどに喜んでる雛子の力になれたのであれば、こちらとしても嬉しいことだ。

だけどつい、先週の出来事が頭をかすめてしまう。

リリンを巡って雛子と意見が真っ向から対立してしまったものだから、千歳は今日、雛子とどう接すればいいのか悩んでいたのだ。

それでも雛子は普段と変わらぬ様子で話してくれた。

あの時のことを気にしていない……と言うよりは割り切っているのだろう。

あの件と、自分との仲は別問題だと。

実際、蛍のことを大切に思い、彼女の幸せを奪いたくないと言う気持ちは一緒なのだから、仲が悪くなるようなことなんてないはずだ。

それでも後ろめたさを感じてしまふのは、友達を相手にあそこまで正反対の意見をぶつけ合ってしまったのは初めてだからかもしれない。

雛子はそんなこちらの考えを表情から悟ったのか、少し苦笑した様子を見せた。

理性的な雛子らしい態度に対して、どこまでも感情的な自分がどこか子供っぽく思えてしまい、千歳は少しバツの悪そうに視線を反らす。

そんなこちらの様子を愛子が不思議そうな目で見ていた。

「はあ．．．．」

「もうダメかも．．．．」

そんな中、要と真がまるでこの世の終わりと云わんばかりの重苦しい雰囲気でこちらに来た。

要と真の様子に、雛子と愛子が揃って大きくため息を吐くが、雛子との間に少し重苦しい雰囲気となっていた千歳にとっては、そんな空気を吹き飛ばしてくれたものだからつい感謝してしまった。

最も、当の本人たちはそれ以上に重たい空気を纏っているが．．．。

「2人とも．．．またダメだったの?」

「ダメだった……。」

「要、あれだけしつかりと勉強してきたじゃない。」

「朝起きたら全部忘れてた……。」

大きく肩を落としながら要がポツリと呟く。

先週、蛍の家で行われた勉強会では、文句こそ言えど最後まで参加していたし、サボる様子も見せずにちゃんと勉強に励んでいた。

そして少なくともあの時は、学んだことをしつかりと記憶していたように見えたのだが、たった一夜で全てを忘れてしまうとは……。

バスケットボールについての知識なら、細かな専門用語まで全て網羅出来ているほどに深いのに、どうも要は興味のあることとないことに関する記憶力に大きな差があるようだ。

それがこの試験の結果と、彼女の部活動の成果の両方に繋がっているのだと思うと、長所なのか短所なのか、わからないところである。

「ひなこちゃん！ちとせちゃん！」

すると蛍が目を輝かせながらこちらの方へと駆け足で来た。

「わっ、わたし！ほんのすこしだけだけど、順位あがってたよ！」

そして嬉しそうに両手をパタパタさせながら報告してきたのだ。

「ふふつ、おめでとう蛍ちゃん。」

「良かったじゃない、勉強会の成果が出たみたいで。」

隣で要の空気が一層重くなっているのを感じたので多少申し訳ないと思いつつも、
喜ぶ蛍を褒めないわけにもいかない。

「わかんないところをおしえてくれた、ふたりのおかげだよ！」

「ありがとうひなこちゃん！ちとせちゃん！」

少し頬を赤くしながらも、満面の笑みで喜ぶ蛍のことを、雛子と千歳は優しく見守る。
だけどその笑顔を見る度に、千歳は自分の決心が揺らいでいくのを感じるのだった。

…

放課後、蛍が日直の仕事で席を離れているときに、雛子と要は1組の教室にきた千歳
と3人で、今後のことを話し合っていた。

「今日蛍ちゃん、リリンちゃんに会いに行くって言ってたわ。」

「そう……。」

「それなら、今日から行動開始やな。」

要の言葉に、雛子は意を決した表情で千歳たちを見る。

「今日は私が蛍ちゃんについていくわ。」

「雛子？」

「千歳ちゃんには悪いけど、私はまだ、リリンちゃんのことを信じていたいから。」

「そう……。」

千歳が複雑そうな表情を浮かべる。

千歳がリリンを敵視するのは、あくまで蛍を守りたいからだ。

その思いは自分と同じなのだから、彼女と衝突してしまうことはこちらとしても悲しく、そして申し訳ない気持ちでいっぱいだが、どうしても拭いきれない違和感があるのだ。

それはフェアリーキングダムでの戦い以降、リリスのキュアシャインに対する態度が明らかに変わっていることだ。

今までのような怒りや憎しみの感情をぶつけるだけでなく、時折困惑した様子、そして悲しそうな表情も見せるようになってきた。

結果として、リリスはこれまで以上に情緒不安定な様子を見せるようになったのだ。

それと同じタイミングで、リリンの様子にも変化が見られている。

蛍と一緒にいる時、リリンはどこか憂いを帯びた表情を見せるようになったのだ。

この時点で雛子は既に、千歳の立てた仮説に半ば同意しているようなものだ。

だからと言って、リリンとリリスに訪れた変化を無視していいとは思えない。

これに目を背けたままリリンを、リリスを敵とみなして蛍の前から排除してしまうと、取り返しのつかないことになるのではないかと？

そんな漠然とした嫌な予感がするのだ。

「それなら、明日はウチが……。」

「ダメよ。要は明日部活でしょ？」

すると要が明日の蛍の付き添いに申し出てきたので、雛子は人差し指を立てて遮る。

「あつ……そうだった。」

「あなたが部活の日を忘れるなんて、明日は霰でも降ってくるのかしらね？」

「むっ……。」

少しばかり意地悪な冗談を飛ばしながらも、雛子は驚きを隠せずにいた。

常に部活第一、バスケ第一のスポーツバカである要が部活の日を忘れるなんて異常事態である。

「いやでも、さすがに蛍のことが心配だし。」

それでも要は、彼女にとって何よりも大切な部活の時間を削ってまで、蛍に付き添う

つもりだ。

それだけ要も蛍のことを大切に思う要の気持ちはわかるが、雛子は要が部活を休むことだけは看過できなかつた。

「今は夏休みの試合に向けての特訓中でしょう？」

だから要は部活を優先させなさい。」

要たちの所属している女子バスケット部は夏に大きな大会を控えている。

今はその総仕上げの時期のはずだ。

休日の部活動も活気だつて行われている。

そして蛍は休日にもリリンと会うことが多いから当然、この先自分たちは休日も蛍を見守らなければならない。

だが要にとって将来の夢に繋がる部活の時間を削るわけにはいかない。平日は勿論、休日もだ。

「・・・でもさ、言い出したのはウチからなんやし。」

だけどこんな時、この悪友は驚くくらい律儀だ。

今回の件、提案したのは確かに要であり、だから要は自分自身が一番に取り組まなければならぬと思っているのだろう。

そんな律儀で責任感のあるところは、この悪友の美德だが、今回ばかりはこちらに

譲ってもらおう。

「蛍ちゃんに怪しまれたらダメなのに、あなたが部活を休んだら一番に怪しまれるわよ。それに、自分のために、あなたが部活動の時間を潰さなければならぬことを、蛍ちゃんが望んでいると思う？」

「……。」

勿論、蛍には内緒で決行するが、ずっと隠し続けていられる保証もない。

もしも全てが明るみに出たときに要が部活の時間を削っていたことを知れば、蛍はきつと、傷つくだろう。

それに元を辿ればこちらの我儘がきつかけとなったことだ。

我儘に我儘を重ねるようだが、自分のせいで要の部活を潰したくはない。

「……雛子の言う通りよ。蛍の付き添いは私たちが主だつてやるわ。」

だから要は、部活を大切にしなさい。要の夢に繋がることなのでしょ？」

「千歳ちゃん……ありがとう。」

自分の言葉に同意してくれた千歳に、雛子は感謝する。

「……わかったよ。でも部活がない日はウチも加わるからな。」

少し不貞腐れた様子を見せながらも、要は納得してくれたようだ。

「ただいま。」

すると日直の仕事を終えた蛍が職員室から帰って来た。

「おかえり、ねえ蛍ちゃん。今日商店街まで行くのよね？」

「うん、そーだよ。」

「良かったら、私もついていいかしら？」

ちようど商店街に用事があつて。」

「んっ、わかつた。」

何も疑う様子もなく、蛍はその言葉に同意する。

そんな彼女を騙して、大切な人であるリリンの監視をしなければならぬことに雛子は心を痛めるが、蛍のため、そしてリリンの真実を知るために、その痛みを隠して蛍に付き添うのだった。

∴

噴水の水面に映し出される自分の姿を見ながら、リリンは時間を潰していた。

雲一つのない晴れ晴れとした青空の下、道行く人々は額の汗を拭いながら億劫な表情

を浮かべており、それとは対照的にベンチに腰掛ける人々は、噴水の音に耳を澄ませ一時の涼しさに身を委ねている。

そんな本格的に訪れ始めた夏の暑さも、清涼感のある噴水の音も感じるこの出来な
いリリンは、俯きながら数日前の出来事を思い出していた。

『あの子』がキュアシャインに変身するところを目の前で見ってしまった。

それを思い出す度に、リリンは胸の内を強く握られたような感覚を覚える。

そして脳裏を過るのは、アモンが自分に課した任務だ。

今日、ここに来たのは当然、『あの子』と会うため。『あの子』に会って、自分の使命を果たすために……。

「あつ、リリンちゃん！」

やがて待ち望んでいた『あの子』、蛍が姿を見せた。

こちらを見かけるや否や、蛍は自分に飛び付いてくる。

「よかった！ぶじだったんだね！」

あのあと急にいなくなっちゃったから、わたし心配してたんだよ！」

もはや慣れてしまった彼女からの抱擁を受けながら、リリンは蛍の様子をみる。

蛍は僅かに目を潤ませながら、蛍は自分の安否を気遣ってくれた。

「ほたる……。」

だけどそれが、再びリリンの心を揺さぶっていく。
すると視界の端に雛子の姿が映った。

「こんにちは、リリンちゃん。」

「こんにちは。」

いつもは蛍だけがこの場に來ているものだから少し意外に思うが、ここは商店街の一角だ。

雛子が何か用事があつて一緒に來ただけかもしれないし、特に訝しむことはないだろう。

それよりも考えなければならぬことは、課せられた使命をどうするかだ。

自分に与えられた使命の内一つは、不本意な形ながらも達成することができた。

そしてもう一つの使命も、達成の瞬間が目の前まで訪れている。

キュアシャインを絶望させる。つまり、目の前にいる蛍を……。

「リリンちゃん？」

だが怪訝そうな蛍の表情を見た途端、リリンは鉛を括りつけられたかのような重苦しい感覚に見舞われた。

自分は目の前の少女を、蛍を絶望させることを躊躇っているのだ。

(躊躇う必要なんてない……だってあたしは既に……。)

既にこの子を一度、闇の牢獄へ閉じ込めたことがある。

あの時と同じことをすればいいだけなのに、なぜ躊躇う必要がある？

(あたしは……行動隊長。

この子を絶望させるために……あたしは……)

微かに身を震わせながら、リリンは螢の顔を見据える。

一点の疑いもない、自分を信じ切っている表情だ。

この子からこれだけの信頼を得た今なら、それを裏切るだけで簡単に目的は達成できる。

「……なんでもないわ。心配をかけてごめんね。」

「ううん、げんきそうでよかった。」

「うん、またいつもみたいに、ふたりでここでお喋りしよ。」

それでもリリンはまだ、いつもと変わらぬ日々を過ごすことを選んでしまった。

キュアシャインの正体と知った今でも、リリンは踏み切ることができないでいる。

本当にバカで、愚かな子。

どうしてあたしのことを信じているの？ どうして疑わないの？

なんで躊躇っているの？ あたしはこの子をどうしたいの？

この子はキュアシャインよ。あたしをずっと傷つけてきた・・・。

だけどリリンの内側は、これまで以上に不安定な感情が渦巻いているのだった。

：

モノクロの世界。

研究室へと改造した王の寝室で、アモンはモニターに映し出されるリリンのデータを観察していた。

「まだ、躊躇っているようだね。君は。」

リリンから見られる感情の波形は、今も大きく揺れ動いている。

キュアシャインの正体を知りながらも尚、リリンは手にかけることを躊躇っているのだ。

「まさか君が、そこまでの影響を受けるとはね。」

モニターの様子をどこか愉快そうに眺めながら、アモンは再びパネルを叩き始める。

その時、別のモニターから女性の声だけが聞こえてきた。

「行動隊長か。」

「ん？」

アモンは女性の言葉に耳を傾ける。

「かつてお前とアンドラスが共同で創り出した、心を持たぬ『人形』ども。

ただ与えられた使命を果たすことのみを存在意義とするものたちを、お前たちはなぜ欲したのだ？」

モニター越しにいるであろう彼女は、今になって行動隊長の必要性を問い始める。

だがアモンとて、意味もなく創り出したわけではない。

行動隊長を創る前は、アモンとアンドラスが世界を侵略するために前線へと赴いていた。

その一方で、敵対者である『光の使者』を打ち破るべく、絶望の闇について研究する必要もあった。

だが『光の使者』と戦いながら、ソルダークを率いて世界を侵略し、希望の光を破るべく絶望の闇の研究を並行して行うと言うのは、アモンたちの力を持つてしても難しいものだった。

結果、戦いに敗れて侵略を放棄せざるを得なかった世界も多い。

そして何より、『光の使者』との戦いは世代を超えることに激化していったのだ。「我らダークネスが強くなればなるほど、『光の使者』たちもその力を増している。」

此度の使者など、これまでと比較しても遙かに厄介な部類だ。」

たった1人でアンドラスの率いる部隊と渡り合ってきたキュアブレイズに始まり、キュアスパークとキュアプリズムもそれに比肩する実力の持ち主だ。

そして何よりも計り知れない潜在能力を秘めているキュアシャイン。

やつはこれまでであり得ないことだと思われていた世界の解放をたった1人でやってのけた。

「それがどうした？」

どれほど強大な力を秘めていようと所詮は人の子。

限りある時の中でしか存在できないやつらをなぜそこまで警戒する必要がある？」

だが女性は取るに足らないと言わんばかりの様子だ。

そんな慢心にアモンは釘を刺す。

「君は、この戦いが永遠に続くものだと思うのかい？」

「……やつらが我らの存在を終わらせると？」

女性の声には僅かな怒りを宿っているが、アモンは気にせず言葉が続ける。

「物事に絶対はない。」

やつらとの戦いで『万が一』のことがあってからでは遅いのだ。

だからやつらの誕生を待つことなく世界を侵略するための兵士が必要だったのだ。

そのために私は、ソルダークにはない知性を持った兵士を創ったのだよ。」

ダークネスの侵略手段は人を絶望させること。

だがソルダークには知性がない。

だから圧倒的な武力を以って人を恐怖に落とし込む手段しか講じることが出来ない、それも一つの手段だが、人の心の弱みに付け込み、内面的に追い込んでいくのも人を絶望させるために有効な手段だ。

だからより効率よく、効果的に、力だけでなく知恵を駆使して人を絶望へと誘うために、自ら考え行動を起こせるだけの『知性』を持った兵士があれば、侵略の速度を飛躍的に高めることが出来る。

そう思い、アモンとアンドラスは行動隊長を創り出したのだ。

だが行動隊長を創り出すハードルは決して低くはなかった。

こちらの指示を絶対としなければならぬのに、言われるがままに行動するだけではソルダークとは変わらない。

行動隊長には自分たちへの絶対服従と、自発的に行動できる自我を両立させなければならなかった。

そして光の使者と渡り合えるだけの超人的な身体能力も必要となってくる。

結果、行動隊長の素体となった被験者には、魔人の姿を与えるための強化実験に耐えられるだけの生命力と、徹底した洗脳（マインドコントロール）を施しても自我を保てる精神力が要求された。

心身ともに優れた資質を持つ素体でなければこの条件を満たすことが出来なかったのだ。

実験の中、ある被験体は肉が朽ち、ある被験体は精神に異常をきたして廃人となり、行動隊長を創り出すまでに一体どれだけの被験者が闇に葬られていっただろうか。

そして長い時間を費やし、ようやく4人の行動隊長を創り出すことに成功したのだ。

それがサブナックとダンタリア、そしてハルフアスとマルファスだ。

4人はこれまでに幾つもの世界を『光の使者』が誕生する間もなく闇へと落としていった。

フェアリーキングダムではキュアブレイズの誕生を許してしまい、ハルフアスとマルファスを失う痛手を負ったが、それでも侵攻を終えることが出来た。

アモンたちが創り出した行動隊長は、確かに期待通りの戦果をあげたのだ。

「だが結局、光の使者の誕生を許すばかりか、その行動隊長とやらのために不測の事態を迎えているのではないか。」

女性が皮肉を口にする。

サブナックたちに遅れて完成し、行動隊長の中で最後にロールアウトされたりリスだけが、不可解な行動を取り始めている。

だがアモンは不敵に笑い返す。

『不測』の事態などではないさ。

行動隊長たちに『知性』与えることの意味は、これまで何度も議論してきたことだからね。」

『知性』を持たせることは行動隊長のメリットであると同時にデメリットでもある。

どれだけ強力なマインドコントロールを施したとしても、行動隊長が自我を持って動く以上、外部から知識を吸収してしまうリスクを避けることは出来なかった。

無論、そのリスクは可能な限り抑えたつもりだ。

行動隊長は常に絶望の闇を内包しているが、絶望の闇には時を止める性質がある。

それは行動隊長の肉体に作用し、生命活動が停止させている。

そう、行動隊長は『生きていない。』

そして生命活動が停止している故に『五感』を持たないのだ。

見て、嗅ぎ、聞き、味わい、触れることは『生きる』と言う行為そのものだが、行動隊長はそれができない。

そんな『生きていない』やつらが普段活動できるのも、絶望の闇の力によるものだ。動かぬ身体を無理やり動かし、絶望の闇を通じて映像と音だけを情報として受け取っているだけ。

だがそれは、操り人形を糸で動かすようなもの、ディスプレイに映し出された映像を見て、スピーカー越しで音を聞いているようなものだ。

全てが与えられた仮初ものだから、行動隊長には『生』の実感がない。

行動隊長から『生きる』ことそのものを奪うことで、アモンは『感情』を学ぶことを防いでいたのだ。

それでも物事に絶対はない。

現にリリースは今、少女と触れ合う中で『感情』を学び始めている。

いずれ彼女が自分の中に芽生えた感情を自覚するのも、時間の問題だろう。

「それに、何もリリースだけが特別ではないのだよ。」

だがアモンから言わせれば、サブナックとダンタリアも同じようなものだ。

当初は2人とも淡々と任務をこなしていたが、いつの日か各々が思う効率の良い侵略手段を取るようになった。

サブナックは力業を好み、ダンタリアは知略を好み、互いの趣向の違いで言い争い、手柄を奪い合い競い合ってまでいる。

徹底して効率のみを重視するならば、協力して侵略に当たれば良いものを、彼らの行いは行動隊長として見れば、余りにも矛盾している。

だがそれも全て、知性を持ってしまったため。

知性を持ち、各々が学んだ先に、行動隊長は『個性』を得てしまったのだ。

「だがハルフアスとマルファスは、今のような醜態を晒すことはなかったぞ？」

なぜ貴様の手駒だけが余計な行動を見せているのだ？」

かつてアンドラスの配下であったハルフアスとマルファスを引き合いに出すが、アモンは動じない。

「あの2人はアンドラスの『教育』が特に行き届いていたからね。

確かに彼らはある意味、最も理想に近い行動隊長だったよ。

でも『完璧』過ぎた。

それが原因であるの2人はキュアブレイズに敗北したのだよ。」

ハルフアスとマルファスは私情や趣向を一切挟まず、侵略するための最善の手段を常に講じていた。

力と知恵の双方を駆使し、時には人に紛れて社会に溶け込んでいた。

傍目から見れば、確かに行動隊長としての必要な能力を全て満たしていただろう。

だけどあの2人は、確率の低い事象は全て切り捨てる傾向にあった。

その結果、キュアブレイズに敵わぬと見て、逃亡すら困難と判断した2人は、一切の抵抗をせずに敗北を受け入れたのだ。

反撃することも、逃亡に成功する可能性も決してゼロではなかったのに、徹底した効率主義を突き詰めた末に、自身等の価値にさえ希薄になった。

抗おうともせず、無為に失われる兵士が、果たして完璧な兵士なのだろうか？

アモンはそうは思わない。

それならば多少の侵略の効率が落ちようとも、不利と見れば即座に撤退するこちらの配下の方が、よっぽど優秀だと言える自負がある。

「そこまで言うからには、今の事態を覆す手立ては既に考えているのだろうか？」

「言われるまでもないさ。」

アモンにとつて今の事態は十分に予期していたこと。

そして予期していたと言うことは当然、対抗策も万全だ。

だからこそ行動隊長の創造に踏み切ったのだから。

「ついに完成が近づいてきたからね。」

光の使者との戦いに終止符を打てる『切り札』を。」

アモンは、モニターの近くにあるカプセルに目を向ける。

自分が前線から離れ、希望の光を打ち破る研究に専念することが出来たのも、行動隊

長を得たメリットの1つだ。

伊達にこの研究室にずっと引き籠っていたわけではない。

長い時間をかけてようやく、光を討つ闇の切り札が完成しようとしているのだ。

「後は、あの子に最後の仕上げを任せるだけだ。」

不敵に笑うアモンの視線の先、カプセルの中で浮かぶ一枚のカードは怪しげな光と共に脈動を続けるのだった。

：

1週間が経った日の昼休み、要たちは4人で学食堂を訪れ、昼食を食べているところだった。

「要、今日は随分と上機嫌ね。」

やや訝しむような表情を見せながら千歳が要に視線を向ける。

「今朝からずっとこんな感じよ。」

そんな千歳に、要よりも先に雛子が言葉を返す。

心なしか視線がジツトリとしてるが、要は気にせず白い歯を見せてニヤリと笑う。

「にしし、なにせ今週が終われば夏休み入るからな！」

そう、今週は要にとって念願の1学期最後の週だ。

この一週間が終われば1か月にも及ぶ長い夏休みが始まる。

毎日がホリデイ！遊び三昧、部活三昧、自分にとっての天国がもう少しで訪れるのだ

！

・・・何か大事なことから目を背けているような気がしてならないが敢えて気にしない。

とにかく楽園を目前に控えた要は、いつも以上に上機嫌かつ高いテンションで学校に登校し、隣の悪友の白けた視線を気にせずに1学期最後の週の暇を潰すことにしたのだ。

「夏休みか。」

でも1か月も休みがあると、どう過ごしたら良いか迷ってしまうわね。」

そんな千歳のボヤキに要が大いに同意する。

「わかるわかる、ウチもやりたいことが多すぎてスケジュール組むの大変だよ。」

大体スケジュール通りにならないがそこは敢えて言わない。

「いつもスケジュール通りになんていかないくせに。」

と思つたら隣の悪友が余計な一言を挟んでくる。

「うぐつ・・・とつとにかく！夏休みが楽しみやな！」

要は雛子の一言を無理やり吹き飛ばしながら機嫌を上げていくが、蛭がなぜかしよんぼりとした様子を見せ始めた。

「蛭？どうしたの？夏休み楽しみじゃないん？」

「ううん、そんなことないけど・・・」

がつこうおわつちやうと、みんなと会うことができなくなつておもつちやつて・・・」
夏休みを楽しみにしている要に遠慮してか、どこか控えめな声色で、でも思つたことを正直に口にする蛭。

蛭にとつての学校は、友達と毎日会うことができる特別な場所だから、自分たちと会う機会が減つてしまうことを残念に思っているのだろう。

それにしても全くこの子は、言うのも聞くのも恥ずかしい言葉をそんなしんみりとした表情で言うなんて、相も変わらぬあざとさである。

そして友達としてそこまで大切に思われているのは純粹に嬉しいものだから、こちらも頬を綻ばせざるを得ない。

雛子も千歳も、そんな蛭を慈しむように微笑んでいた。

「なくに言つてんの？」

夏休みは長いんだし、いくらでも一緒に遊べる機会があるやない？」

その言葉に螢は少し惚けた顔をするが、その意味を知つてすぐに瞳をキラキラと輝かせる。

「ホッ、ホントに？」

なつやすみ、いつしよにあそんでメーワクにならない？」

「なるわけないやん。」

そもそも初めて友達になつた（と螢は思っている）あの日、自分たちと一緒に叶えた願いをマシガンガンの如く放つたとき、ちやつかり夏休みも一緒に遊びたいと言つていたではないか。

「じゃあねじゃあね！まいにち一緒にあそぼ！！」

が、さつそく飛んできた爆弾発言に要は笑顔を強張らせる。

テンションが上がるとわき目も振らなくなるのも、あの時から変わらない。

そして普通ならばこの言葉、膨張表現の軽いジョークで済むだろうが、相手は加減のかの字も知らない上に冗談が一切通じない螢だ。

この子の言葉を迂闊に了承してしまうと、本当に毎日遊びに来かねないから困つたものである。

「いや、毎日はさすがに？」

ウチは部活あるし、蛍だって実家に帰省するとかって用事ないの？」

「あつ、そうだった！」

要のやんわりとした否定に蛍は弾けるように答える。

祖母の代からこの街に住む雛子と違い、蛍は春に引越してきたばかりだから、実家は別にあるのだろうと思ったが予想通りのようだ。

ちなみに父母ともに関西出身である要も、お盆の期間は関西にある両親の実家を訪ねる予定である。

ついでに横にいる異世界出身の千歳は故郷に帰るのだろうか少し気になるところである。

「まつ、とは言っても遊べる日の方が多いから、今の内に簡単な予定を組んでみるのもええかもな。」

すると蛍の瞳がますます輝きを増して来た。

本当にこの子の全力全開の感情表現は見ていて飽きないものである。

「じゃあねじゃあね！どこかでみんなと海にいきたくないな！それからそれから！またお泊まり会を……。」

しばらくの間要たちは、3カ月ぶりに蛍の口から発せられるマシンガンの如き夢想の数々をしつかりと記憶することになるのだった。

第20話・Bパート

蛍のテンションが落ち着いたところを見計らって、千歳は一旦咳払いをして全員の顔を見渡してきた。

「さて、そろそろここへ集まった本題に入ってもいいかしら？」

「あつ、そうだった。ごめんねちとせちゃん。」

「別に謝らなくてもいいわ。」

でも浮ついてばかりいてはダメよ？ダークネスがいつ来るかもわからないのだから。」

そう、学食堂にこの4人で来たと言うことはつまり、夏休み中のプリキュア活動について話し合うために集まったのだ。

特にダークネスに蛍の正体が知られた可能性が極めて高い今、夏休みだからと油断するわけにはいかない。

要として、遊びと部活に心血を注ぐつもりでいながらも、ダークネスについて忘れていたわけではないのだ。

「一応ベリイたちは夏休み中もパトロールしてくれるって言ってたで。」

「それなら夏休み中は私たちも協力して、って思ったのだけど……。」

雛子が苦笑いしながら自分と蛍の顔を交互に見る。

その表情を見て言いたいことを悟ったのか、蛍が微笑しながら言葉を続けた。

「わたしはチェリーちゃんに、気にしなくていいから、ほたるはなつやすみを存分にたのしみなさいって言われちゃった。」

「私はレモンちゃんに、これはレモンの仕事、雛子の仕事は、レモンがダークネスを見つけた後からだよって、言われたわ。」

「ウチはベリイに、君は夏休み中にも大事な部活があるだろ？だからそつちを優先してくれって言われた。」

「ふふつ、私もアップルから、せつかくの夏休みなのだから、お友達と一緒に遊んで過ごしなさいって言われたわ。」

結局のところ、自分たち全員、パートナーの妖精たちに気を遣われたのだ。

「ここまで気を遣われちゃうと、断ってしまうのもなんだか悪いわね。」

「まつせつかくだし、ベリイたちの厚意に甘えちゃおっか？」

もしかしたらまだベリイたちは、自分たちだけに戦いを任せていることに負い目を感じているのかもしれない。

そんなことは気にしなくていいのんじゃないかな、ここまで気にかけてくれるので

あれば、その厚意を無下にするわけにもいかない。

「あつ、でもでも、わたし、なつやすみ中も、買い物のために商店街までいくから、そのときはチエリーちゃんたちのおてつだいをするね。」

「私も図書館とかに出かけるときは、身の回りに注意してみるわ。」

「ウチは部活のために学校行くから、その間は任せてよ。」

「それなら私は、街の散歩がてらパトロールでもしましょうか。」

ベリイたちの思いを無駄にしたくはないが、存分に甘えて遊んでばかりと言うのも負い目を感じる、

だから要たちは、自分の出来る範囲で妖精たちを手伝うことを決意するのだった。

∴

「それじゃあふたりとも、またあしたね！」

「うん、また明日。」

放課後、要たちが別れの挨拶をする蛍を見送ると、ちょうど千歳が3組の教室を訪れ

てきた。

「あつ、ちとせちゃん。」

「蛭、今帰るところ？」

「うん、今日はおゆうはんのおかいものしなきやいけないから！」

いつもより声がワントーン大きくテンションの高い蛭を見て、千歳が表情を一瞬だけ曇らせる。

「そう、それじゃあまた明日ね。」

「うん！またあした！」

ギリギリ走らない程度の早足で教室を後にする蛭を見送った千歳が、こちらへと足を運ぶ。

「今日も、つて考えていいのよね？」

そして千歳は自分たちに確認を取って来た。

「あのテンション見ればわかるやろ？」

「そう、それなら今日は私が見に行くわ。」

「お願いね。」

決意を固めた千歳の言葉を聞いて、要は少し顔を俯かせる。

あれから一週間、要たちは交代で蛭とリリンの様子を見に行っていた。

先週の内に蛍とリリンが会った回数 は休日を含めて3回。

毎回蛍に付き添うのは、リリンは元より蛍にも怪しまれる可能性があるもので、雛子以外は影ながら見守る形で様子を見てきたが、いくら蛍のためとはいえ、内緒で監視しているようなものだから、はつきり言つて気分の良いものではない。

そして蛍とリリンの様子を見る内に、要は1つ気づいたことがあるのだ。

「なあ、ウチの気のせいかもしれないけどさ……。」

自分らしくないなと思ひながらも、要は隣にいる千歳の様子を伺ひ少し言葉を詰まらせる。

「リリンちゃんの様子がおかしかったことかしら？」

だが自分が言わんとした言葉を、雛子があつさりと拾つてのけた。

「うっうん……。」

少し戸惑いながらも要は雛子に同意する。

「リリンちゃんの顔色、少し悪かったわね。」

蛍ちゃんの前ではいつも笑顔を見せるのに、ダークネスに襲われて以来、表情を曇らせるようになっていた。そう思わない？」

雛子がさらに言葉をつづけるが、案の定、千歳は眉を潜めてこちらを見据えた。

蛍の幸せをすぐに奪いたくないからと、千歳はこちらに合わせてくれているが、一方

で彼女はリリンをリリスと断定している。

蛭を守るためならば、迷わずリリンを切り捨てるだろう。

その決意を固めるためにも、千歳はリリンに対する温情を捨て去りたいと考えている。

そうでなくても千歳は個人として、リリスを、ダークネのことを許せるはずないのだから。

彼女の故郷を侵略し、一度全てを奪っていったあいつらのことを……。

そんな千歳のことを思えば、リリンにだって情があるとも捉えられる発言はなるべく控えたかったが、かと言って隠すわけにもいかなかった。

蛭の幸せを思うからこそリリンを監視すると決めたのだから、リリンのことはあくまでも、平等に見ていかなければならないのだ。

「それだけじゃない。フェアリーキングダムから帰って来た後にリリンちゃんと会ったときも、少し戸惑いを見せていたわ。

これ、さすがに気のせいだとは思えないの。」

「……。」

一見すると黙り込む千歳に雛子が追い討ちをかけているように見えるが、雛子は意見の違う相手に自分の意見を一方的に押し付けるよう子ではない。

雛子の視点は誰よりも平等だ。理性的で、かつ客観的な視点に立つてものを言う。つまり雛子の言うことは客観的に見た事実だ。それが事実だとわかるからこそ、千歳も黙り込むしかないのだ。

だけどそれは自分も雛子も既にリリンがリリスであると認めていると言うことだ。だからこそ要は、千歳にどこか負い目を感じているのだ。

リリンがリリスであると言う千歳の意見には同意しているのに、まだ千歳の側に立つことができないのだから。

「・・・そんなもの、気のせいかもしれないわよ。」

行動隊長に心はない。どんな性格だって演じることができるのであるから・・・。」

震わせた声でそう呟く千歳の言葉は、どこか自信のない様子だった。

「それじゃあ私、蛍の様子を見に行ってくるわね。」

「ああ、気を付けてな。」

「・・・うん、お願いね。」

少し寂し気な様子を見せながら、千歳は教室を後にする。

蛍を大切に思うからこそ、自分たちはリリンを捨てられないでいる。

でも千歳は蛍を大切に思うからこそ、リリンを切り捨てても守ろうとしている。

本質的な思いはみんな同じなのに、情を捨てられない自分たちの甘さが、情を捨て去

ろうとする千歳の覚悟を鈍らせてしまっている。

要にはそれが、とても悲しかった。

「……何が一番、正しいんやろうな？」

「……それがわかってたら、千歳ちゃんにあんな顔させてないわよ……。」

結局のところ、みんな迷っているのだ。

蛍のために何をするのが正解なのか、その答えがわからないままなのだから。

：

学校を後にした千歳は、商店街の路地から蛍の様子を見守っていた。

ちようどりリンと合流したところで、蛍はいつものように幸せに満ちた笑顔を見せている。

その笑顔を見る度に胸がチクリと痛むが、千歳はそれを抑えて2人の様子を観察する。

満面の笑顔で話す蛍とは対照的に、リリンは笑みを見せたと思えばふと目線を落と

し、そして再び蛍に微笑んでいた。

そんなリリンの様子に、学校内での要と雛子の会話が脳裏を過る。

確かにあの表情は、演じているようには見えない。

あんな不安定な様子では、蛍にも勘付かれてしまう危険があるし、蛍の友人を演じるにあたって、憂いを帯びた顔を見せる必要なんてないはずだ。

(・・・何を考えているの。私だけでも、あの子を疑わなきゃならないのに・・・)
千歳はそんな甘い考えを振り払う。

要と雛子が間違っているとは言わない。でも相手はダークネスの行動隊長だ。

故郷で人の姿に扮したハルファスとマルファスに初めて遭遇した時、やつらは喜怒哀楽の全ての表現を駆使し、心持たないなんて思えないほどに完璧に人を演じていた。

それを知る自分には、リリンはそうでないと切り切ることはできない。

蛍の情に訴えて、懐柔させるための策だと言う可能性が1ミリでも残っている限り、リリンを疑い続けるしかないのだ。

例えその度に心が痛むとしても、それが明るみに出たとき、蛍に嫌われたとしても・・・。

(私はあの子を守る騎士になるって、決めたのだから・・・。)

要と雛子は優しいから、友達である蛍が大切に思うリリンを敵だと切り捨てることな

んてできないだろう。

だからこれはきつと自分にしかできないことだ。

蛍を守るためなら、一切の情を切り捨てて鬼になつて見せる。

千歳がそう改めて覚悟を決めたその時、リリンがふと、こちらの方に視線を向けて来た。

千歳は反射的に身を隠し、僅かに視線をリリンに向ける。

だがこちらを一瞥しただけのリリンは、辺りを適当に見回すとすぐに蛍に視線を戻した。

だけどリリンは間違いなく、自分の視線に気づいたのだろう。

同時に少しばかり不注意だった自分を戒めるが、そこでかつての要の言葉が蘇る。

上等やん。蛍のことを守るんやろ？ 全面衝突のつもりで行こうや？

そうだ。蛍の正体に気付かれた時点で、こちらの正体が発覚するのも時間の問題だったはずだ。

だから要は正体がバレる覚悟で、リリンの監視をすると提案したのだ。

そしていくら幼い少女の姿をしていたとしても、相手はダークネスの行動隊長。

4度にも及ぶ監視を受ければ、その視線に気づくのも無理はないだろう。「……ええ、上等よ。化かし合いなんてもう必要ないわ。」

だけどこれでもう、正体がバレようが警戒されようが関係がなくなつた。蛍さえ守ることができればそれでいい。

千歳は今一度決意を改め、リリンの監視を続けるのだった。

：

蛍と会話しながら、リリンは少し辺りを警戒する。

先週、あの雛子と言う少女が蛍と一緒に来てから、蛍との会話の最中にどこから視線を感じるようになっていた。

だから今日は、いつも以上に周囲を警戒してみると、遠くの物陰からこちらを見る視線を見つけたのだ。

その方へと目を向けると、物陰に隠れる蒼い髪が一瞬だけ目に映つた。

間違いない。あれは蛍とよく一緒にいるトモダチの1人だ。

名前は確か姫野 千歳。

(間違いないわ、あいつもプリキュア。それも恐らくはキュアブレイズ。)

キュアブレイズが蛍たちの仲間に加わった時期と、やつが蛍と友達になった時期は同じ。

背丈も似通っているし、何よりあの鋭い瞳はキュアブレイズを彷彿させるものだ。

そして他の友達である森久保 要と藤田 雛子。

やつらも自分を監視してきたと言うことは、残りのプリキュアであることは間違いないだろう。

同時にそれは、こちらの正体もバレたと言うことだ。

(あのバカが余計なことをしたせいで……)

前回の戦いでサブナックは、自分がいるにも関わらず闇の牢獄を展開した。

絶望の闇の影響を受けていない自分が牢獄に取り残されること自体、やつらからすれば不可解なことなのに、その上でこちらにソルダークを送り込むものだから、自分とソルダークで蛍と挟撃しているように映っただろう。

だがあの一件がなくとも、フェアリーキングダムでハルファスとマルファスと交戦したキュアブレイズが加わった時点で、行動隊長の特徴を知られるのは時間の問題だったのだ。

そして自分が蛭に素性を隠しているのを知られれば、真つ先に疑われることになっただろう。

だけどそれだって、本来ならば何も問題なんてなかったのだ。

(そうよ……何も問題なんてないはずなのよ。

だって、こんなにも『長い時間』一緒に過ごすつもりなんてなかったもの……) 蛭のことはただ、この世界の情報を集めるための道具として利用するだけのつもりだった。

やつに手を差し伸べた恩に付け込んで、少しでも情報を引き出せるだけで良かった。それさえ終われば二度と会うつもりなんてなかった。

怪しまれるよりも先に、この子の目の前からいなくなるつもりだったのに、気が付けばこんなにも長い間、蛭と時間を共にしてしまった。

そして蛭は、こちらがどれだけ素性を明かさずとも盲目的に慕い、一切の疑いもなく側にいてくれたのだ。

今でもまだ、自分のことを『信じてくれてる』に違いない。

だからやつらが監視していることも、蛭は知らないはずだ。

蛭は隠し事が苦手だから、自分に対して負い目があればそれがすぐに表に出て来るから。

だけど今はそれが見られない。

蛍は今でも一緒にいる時間を『楽しむ』表情を見せて……。

(……あれ?)

その時リリンは、自分の気持ちに1つの違和感を覚えた。

(……楽しい? 楽しいって……なに……?)

理解できていないはずの言葉が、自然と胸中に浮かんできたのだった。

(どうして……なんでわからないの……?)

そして理解できないことへの不安と不満が、少しずつリリンの心を支配していった。

…

リリンと会話をしている最中、蛍は彼女の様子がどこかおかしいことに気付いた。

どこか表情に落ち着きがないし、時折上の空になっている。

「リリンちゃん?」

「えっ? なっなに、ほたる。」

声をかけてみると、弾け飛ぶようにこちらを向いて、すぐに表情を戻した。

それでも蛍の抱いた違和感は拭えない。彼女がここまで落ち着きのない様子を見せること自体珍しいことだからだ。

それだけでなく、ここ最近のリリンはどこか憂いを帯びた表情を見せるようになって
いる。

自分と会話しているとき、どこか上の空になることが多くなっているのだ。

(・・・もしかして、リリンちゃん。)

蛍は1つの可能性に思い当たる。

(たいくつ、してたりするのかな・・・?)

リリンと一緒にいる時間は、蛍にとっては代えがたいほどに楽しい時間だ。

でも、果たして彼女にとってもそうなのだろうか？

かつてリリンが笑顔を見せたとき、一緒にいてくれるおかげだと言ってくれたから、彼女にとっても決してつまらない時間ではないだろう。

それでも自分がリリンからもらっている幸福度と、彼女が抱く幸福度が釣り合っているとは限らない。

彼女が自分と同じくらい、この時間に満たされているとは限らないのだ。

(そうだよね、わたし、ずっともらってばかりだったよね・・・。)

蛭はリリンと一緒にいるだけで満たさせる。

だからここでお喋りが出来ること以外を望んだことはない。

でもリリンはどうなのだろうか？

ずっとここに座ってお喋りをするだけでは、きつと退屈ではないだろうか？

例えば要なら体を動かしたい、バスケがしたいと思うだろう。

雛子ならば本が読みたいと思うだろう。

千歳なら勉強がしたいと思うだろう。

それならリリンはどうだろうか、と思った時、蛭はリリンの趣味を知らないことに気付いた。

彼女はあまり自分のことを話したがらない性分なのもあるから、直接聞くことをずつと避けてきたのだ。

その一方で、蛭はリリンのことをもつと知りたいと思っている。

結局のところ、踏み込んでしまうと彼女との関係が壊れてしまうのではないかと臆病になっているのだ。

(・・・でも、きつとだいじょうぶだよね。)

だけでも、臆病になるのはやめよう。自分とリリンは友達なのだから。

少しくらい踏み込んだって、それだけで壊れるような関係じゃない。

それを信じずに臆病になると言うことは、リリンとの友情を疑うと同義だ。何よりも自分は、リリンのことをもつと知りたい。

リリンともつと距離を縮めたい。

リリンの事を知ることができれば、彼女にとって『楽しい』ことが何であるかを知ることが出来るから。

それを知って、与えることができれば、リリンからもらった幸福をほんの少しでも返してあげることが出来るのだろう。

だから蛭は、

「ねえ、リリンちゃん。」

勇気を出して踏み込んでみることにした。

「なに？ほたる？」

「リリンちゃんにとつて、たのしいことつてなあに？」

リリンと言う少女の内側に。

「え・・・？」

「わたし、リリンちゃんと一緒にいるだけで、すごくたのしいの。

だからね、いまの時間も、すつごくたのしくて、すつごくしあわせなの。

でも、リリンちゃんはどうなのかなって、おもって。」

「あたし・・・?」

「ねえ、リリンちゃん。」

もしリリンちゃんがほかにしたいことがあるなら、言ってみて?

わたし、そのためならなんだって、おてつだいするよ。

リリンちゃんがたくさん、わたしにたのしい時間をくれたように、わたしも・・・すこしくらい、リリンちゃんに、たのしいを返したいんだ。」

頬を赤く少し俯きながら蛍は自分の胸中をリリンに語る。

リリンに少しでも恩返しをしたいと言う思いと、彼女のことをもっと知りたいと言う思いで。

「・・・なに、それ?」

「え?」

だが返ってきた言葉は、蛍が想像からは程遠いものだった。

「たのしいって、なに?」

「リリンちゃん?」

拒否されること、怒られることは最悪でも予期していた。

だけど今のリリンの言葉は、意味すらわからなかった。

なぜ彼女はそんなことを聞いてくるのだろうか?

「たのしい時間ってなに？しあわせってなに？

あたしがあなたに何を与えたと言うの？

あなたがあたしに何をくれると言うのよ!？」

「リッ、リリンちゃん、どうかしたの？」

突然取り乱し、これまでの穏やかな口調とは真逆の、刺々しい物言いです。リリンは蛍を問い詰めてくる。

突然の彼女の豹変と、語られる言葉の意味を測りかね、蛍は目の前の状況を受け入れきれずにいたのだ。

「蛍ー！」

すると遠くから千歳が自分の名を叫びながらこちらへ駆け寄って来た。

「えっ？ちとせちゃん？」

一方でリリンは千歳の姿を見かけるや、下唇を噛みながらこの場を走り去る。

「あつ、まつて！リリンちゃん！リリンちゃん!!」

呼び止めようと彼女の名前を叫ぶも、リリンはこちらを振り向かず、商店街へと走り去っていく。

「蛍、大丈夫!?!何もされなかった？」

「リリンちゃん……。」

千歳の言葉にも耳を傾けることなく、蛍はその場で放心する。

「・・・いったい、どうしちゃったの・・・？」

リリンちゃん、なにがあつたの・・・？」

目の前で起きたことが信じられないまま、蛍の胸中を得も言われぬ不安が渦巻いていくのだつた。

：

胸中を渦巻く黒い感情に身を委ねながら、リリンは路地裏に身を潜める。

「なによ・・・なんなの・・・？」

壁にもたれかかりながら、両手を交差し肩に爪を這わせる。

「なんで・・・こんなに・・・。」

どれだけ爪を這わせても、爪を肩に食い込ませても何も感じない。

それなのに・・・。

「なんで、『くるしいの』・・・？」

それなのに確かな『痛み』が体を支配する。

抗い難い苦しみがリリンの心を支配していく。

「たのしいってなんなの？ しあわせってなに？」

なんであたしなんかと一緒にいるだけでそんなに嬉しいの!?

あなたがあたしに返そうとしているものってなんなの!?

それがわからないから今、苦しいのだろうか？

蛍の考えていること、蛍が感じていることがわからない。

あの子が自分を信頼し、トモダチだと思っていることはわかってても、蛍の心を、感情までを知る術がリリンにはなかった。

自分があの子に何を与えて、あの子が自分に何を返そうとしているのか、リリンには何もわからない。

「あたしは……。」

でもどうしてそんなに知りたいと思うのだろうか？

どうして知らないことがこんなにも苦しいのだろうか？

もう、あの子と会うことに意味なんてない。

ダークネスの行動隊長として、あの子を絶望させることが自分の使命なのに、まだ未練を断ち切れていないのか？

「たのしい……たのしい……たのしいって……」

様々な思考が混濁し、リリンは蛍に言われた言葉だけを復唱していく。

そして……

「キュア……シャイン……」

1つだけ、思い出すことができた。

自分が『悦ぶ』ことのできる唯一の時間を。

「キュアシャイン……キュアシャイン……」

やつと2人きりになれる瞬間、やつを墮とすことを思い描く瞬間、自分は『楽しんではいないか?』

「そっか……これが『楽しい』って言うのなら……」

蛍の正体はキュアシャインだ。

そしてあの子は自分に『楽しい時間』を返したいと言っていた。

「返してくれんだよね……蛍。」

『楽しい時間』……あたしにくれるって言ってたものね……

うふふっ……」

行動隊長としての使命を全うすることで、キュアシャインをこの手で墮とすという悲願を果たすことで、あの子の言う『楽しい』を理解することができる。

蛭はリリンにかけた言葉を後悔しながら、ベンチに座り塞ぎ込んでいた。

「リリンちゃん……。」

彼女がなぜ突然取り乱したのかわからない。

そう、わからないのだ。

蛭はリリンのことを何一つわかっていなかったのだ。

それだけじゃない。

リリンが楽しいことが何なのかを分かっていたと言ふことは、自分と過ごす時間なんて、リリンにとっては退屈でしかなかったと言ふことになる。

結局のところ、リリンが共に過ごして来た時間なんて、全て自己満足でしかなかった。

リリンは内心、楽しくも何とも思っていないのに、自分だけが楽しいからと彼女に無理やりつき合わせていたのだ。

「ごめんね…….なにもしらないで……。」

それが何よりも辛く、そして彼女に申し訳なかった。

出来ることなら今すぐにでもリリンにこれまでのことを謝罪したかったが、肝心のリリンの姿はもう追うこともできない。

そして次に会う約束をすることもできなかったので、またいつリリンに会えるのかは

わからない。

「わたし……じぶんのことばっかりで……。」

もつとリリンのことを知れたかったから。

そんな浅はかな欲をかかなければ、こんなことにはならなかったのだろうか？

いや、今回の件がなければ、自分と過ごす時間を退屈に思うリリンの気持ちになんて

気づかず、自分だけが幸せだけを嘯みしめていただろう。

そんな自己中心的で、リリンの事を顧みることができなかった自分のことが、一番許

せなかった。

「……蛍。」

落ちこむ蛍に、千歳がどこか遠慮がちな声をかけてくる。

その時、

「っ!?!闇の波動!」

闇の牢獄を感じた千歳が顔を上げて周囲を見渡す。

蛍もつられて周りを見てみると、人々が姿を消し、街の景色がモノクロ色へと変わっ

ていった。

「蛍、大丈夫?」

千歳が優しく、心配そうに声をかけてくれた。

「・・・だいたいじょうぶ、はやくダークネスをさがさなきゃ。」

こんな気持ちを抱えたままプリキュアに変身できるか不安だが、そんな甘えたことは言っていない。

蛭は心を強く持ち、千歳と並んでパクトを取り出す。

「プリキュア!!ホープ・イン・マイハート!!」

「世界を照らす、希望の光!キュアシャイン!」

「世界に轟く、真紅の煌めき!キュアブレイズ!」

2人で変身し、闇の力を探知すると、蛭が最も良く知る力の反応が感じられた。

「リリース・・・。」

するとその力は、急速でこちらまで向かってきた。

今では3人の行動隊長に狙われるようになってしまったが、この、自分の力にのみ真つ直ぐに向かってくるような反応は、間違いなくリリースのものだ。

「・・・やつぱり。」

すると千歳が不意にそんな言葉を口にした。

その意味が分からず、問いかけようとしたその時、両翼を羽ばたかせてこちらに向かうリリースの姿が確認された。

「キュアシャイン・・・。」

いつものように自分の名を呟き、リリスは左手に黒の球体を浮かべる。

「ダークネスが行動隊長、リリスの名に置いて命ずる。」

ソルダークよ、世界を闇に染め上げろ！」

「ガアアアアアアアアッ!!」

そして生み出されたソルダークが、甲高い産声をあげた。

「キュアシャイン！」

「キュアブレイズ！」

するとキュアスパークとキュアプリズムが遅れて駆けつけた。

その後ろにはアツプルを除く妖精たちの姿もある。

「リリスか・・・性懲りもなくまた現れて。」

どこか訝し気な表情を見せながらキュアスパークが舌打ちをする。

「あなたたちに用はないわ！ソルダーク!!」

だがリリスの方は相変わらず蛍以外は眼中にないのか、キュアスパークの言葉に耳を貸さずソルダークを差し向ける。

そして翼を飛ばたかせ、蛍へと真っ直ぐに飛んできた。

「させない！」

キュアブレイズが蛍とリリスの間に割って入り、火球を飛ばす。

「いつもいつも、邪魔をするなって言ってるでしょ!!」

だがリリスは火球の直撃を受けながらも、勢いを落とすことなく向かってきた。

これまでのリリスだって見せたことのない鬼気迫る表情と捨て身の突撃に、蛭もキュアブレイズも困惑する。

その動揺の隙をつくように、リリスはキュアブレイズに爪を突き立て、力いっぱいに薙ぎ払った。

「きゃあつー!」

攻撃を受けたキュアブレイズは遠くまで飛ばされてしまう。

「キュアブレイズー!」

だがキュアブレイズの身を案ずる間もなく、リリスが蛭に攻撃を仕掛けた。

蛭はその攻撃を受け止めるが、希望の光を解放できていない今の状況ではリリスの力に敵わない。

リリスに体重をかけられ、徐々に押し倒されていく中、リリスは歪んだ笑みをこちらに向けてきた。

「楽しいことっですつて?」

「えっ?」

だが続いて発せられた言葉に、蛭はさらに困惑する。

「ええ、楽しいわよ！」

この瞬間だけ、あたしにも楽しいの意味がわかるわ！

あなたと2人きりで、あなたを追い詰め、あなたを絶望に墮とせると思うと、楽しく楽しくてたまらないのよ!!」

「なっ、なにを言ってるの・・・?」

どこか身に覚えのあるリリスの言葉に蛍の記憶が混乱する。

「あたしにくれるんでしょ?あたしに返してくるんでしょ!?

だったらこのまま一緒に、あたしに全てを寄越して堕ちなさい!!

キュアシャイン!!」

リリスの言葉の意味がわからず、でも何か引つかかり、自分の中で無意識の内にその答えを避けようとする流れが発生し、蛍の頭の中は混沌とした渦を巻いていく。

だけどその中でもわかることは、リリスは自分と戦い倒すを楽しんでいる。

それ自体は今までの戦いでわかっていたことだが、その感情をここまで剥き出しにぶつけられたのは初めてだ。

でもそれならこちらだって、無理やりにもそんなもの、突っぱねてやる。

「そんなの・・・たのしいなんかじゃない・・・。」

「なんですって・・・?」

「じぶんだけがたのしくて、あいてのことをかながえないなんて、そんなのぜんぜん、たのしいなんかじゃないよ!!」

わたしはあなたといたって、なにもたのしくない!

だからそこをどいて!!」

蛍が今日、リリンに犯した過ちと一緒だ。

自分だけが楽しいと思えることを相手に一方的に強要する。

そんなものは本当に楽しい時間なんかではない。

蛍はリリンにも、楽しいと思える時間を共有したかった。

そんな後悔の念を押し返すように、蛍はリリスを力任せに押し返す。

「なんで……。」

だが先ほどの言葉は、リリスに更なる動揺を呼んだようだ。

リリスの顔が見る見るうちに歪んでいく。

「なんであなたがそんなことを言うのよ!!」

リリスの言葉の意味も分からぬまま、蛍は彼女の激情を受け続ける。

「はあっ!」

そんな中、復帰したキュアブレイズがリリスに奇襲を仕掛けてきた。

炎を纏った拳を繰り出し、リリスを無理やり後退させる。

「きゃああつ!!」

「キュアシャイン、大丈夫?」

「うっ、うん……」

キュアブレイズの言葉に曖昧に頷きながら、リリースの方に目を向ける。

すると、背後で行われていた戦闘も終わりを迎えつつあるようだ。

傷つき膝をつくソルダークの前に、キュアプリズムがフルートを構えている。

「プリキュア、プリズミック・リフレクション!!」

「ガアアアアアアッ!!!」

キュアプリズムの浄化技を受けたソルダークは、水晶と共に消滅していった。

そしてキュアスパークとキュアプリズムがリリースの背後に立ち、蛍たちはリリースを包囲する。

「っ、キュアシャイン!!」

この状況でも尚、リリースは激情のままに蛍に突撃してきた。

だがキュアブレイズたちがそれを許すはずもなく、キュアブレイズの火球とキュアスパークの電撃を受けたリリースはその場に膝をつく。

「リリース、覚悟しなさい。」

キュアブレイズがブレイズタクトを構え、浄化技を放つ態勢に入った。

それを見たりリリスは翼から突風を引き起こし、キュアブレイズたちを牽制する。

「……どうして？ どうしてあなたなの……？」

どうして……あなたがキュアシャインなの……？」

そしてリリスは蛍の方を見ながらそう呟き、突風の中で姿を消すのだった。

「……リリス……？」

去り際にリリスが残した言葉の意味さえもわからず、蛍は混濁する思考の中、その場に佇むのだった。

：

戦いが終わり、家に帰った後も蛍は混濁した思考の渦から抜け出せていなかった。

夕ご飯の支度をしようにも手元がおぼつかず、結局その日はチェリーに代わりに作ってもらった。

やがて両親が帰って来て、一緒に夕食を取る中でも、蛍は今日のことをずっと考え込んでいた。

(なんでリリースは、急にあんなことを．．．?)

彼女からぶつけられた言葉が蛍の脳内に繰り返される。

楽しいの意味、自分に拒絶された時の反応、そして．．．。

「蛍、大丈夫？」

「え．．．？」

ふと顔を上げると、母の陽子が心配そうにこちらの様子を見ていた。

「ボクツとしているけど、具合でも悪いの？」

「うっ、ううん、だいじょうぶ．．．。」

その声は、自分でもわかるくらい擦れていた。

そんな声では当然、両親を安心させることなんてできず、母が席から立ち自分の肩に手を添える。

「気分が悪いようなら、今日はもう早く寝なさい。」

片付けはお母さんの方でやっておくから。」

「．．．うん、ごめんなさい．．．。」

これ以上両親を誤魔化すことなんてできないと思い、蛍は部屋へと戻っていく。

「．．．蛍、どうしたんだろうな。」

こつちに来てからあんな顔、ほとんど見せたことなんてないのに。」

「……そうね。」

そんな蛍の様子を、陽子と健治は心配そうに見送るのだった。

今日はもう、起きていられる気がしない。

蛍はチェリーに断りを入れて、早々にベッドにつき布団を被る。

だがいくら寝ようとしても寝つくことができず、渦巻く思考の中をどんどん進んでいく。

(リリスは……どうしてあんなことを……。)

少しずつ、思い当たることが見つかって来た。

リリスの言葉は、自分がリリンに問いかけた言葉と似ていたのだ。

そして今思い返せば、リリスの言葉はその問いに対する答えのように思える。

(それじゃあ……まるで……。)

まるで、『リリンの代わり』に答えているようではないか……？

その考えに辿りついたとき、蛍は急に心臓を握られたような錯覚を覚える。

「っ!!?」

突然ベッドから上体を起こし、両肩を抱える。

息詰まった喉で無理やり空気を吸いて吐き出し、無意識の内に呼吸を落ち着かせようとす。

「蛭！」

そんな蛭の異変に、チエリーは慌ててサクラへと変身し、蛭を優しく抱きしめた。

それでも蛭の心は落ち着かない。

これまで混濁としていた思考の渦が次から次へとパズルのピースを拾い上げていく。

そのピースが組みあがり、1つの答えを作っていく度に、蛭の心は凍てつき、身体が震え出す。

「そんな・・・わけないよね？チエリーちゃん・・・。」

サクラに抱かれながらも身体を震わす蛭は、擦れた声で呟く。

千歳からの忠告。

リリンが素性を話さない理由。

そして今日に起きた、リリンと『リリス』に訪れた異変。

これまで見向きもしなかったピースが、蛭に最悪の答えを指し示していく。

「リリンちゃんが・・・そんなわけ・・・ないよね・・・。」

それでも蛭は涙ながらに、その答えを否定する。

そんな答えを、肯定するわけにはいかないから。

もしもそれを受け入れてしまったら……。

これまでの幸せが、全部壊れてしまうから。

「そんなわけない……そんなの……あるわけない……。」

「蛍……。」

縫るように言葉を繰り返す蛍を優しく抱きながらも、サクラは蛍にかけてあげる言葉が見つからなかったのだった。

…

モノクロの世界。

アモンはモニターの側に置かれたカプセルに目を向ける。

その中にある黒い塊から感じられた激しい脈動が落ち着き、歪な形状が一枚のカードへと変わってから大きな変化を起こしていなかった。

そしてモニターに映し出される数値は全て正常値を示している。「クククツ、ついに完成したか。」

光の使者プリキュアとの戦いに終止符を打つ切り札（カード）が。」

アモンは高揚を抑えきれない様子で、カプセルを展開する。

培養液が流れ落ち、黒いカードを引き抜く。

アモンが創り出したその黒いカードからは『何も感じられなかった』が、それが逆に実験の成功を物語っていた。

「いや、まだ完成とは言い難かったか。」

だが後はこれに力を注ぐだけだ。」

アモンは黒いカードを天に掲げる。

どの力を注げば完成するのか、既にその目星はついている。

そしてその手段も、その実行者さえも。

「クククツ・・・最後の一仕事を頼むよ、リリース。」

その実行者の名を口にしながら、アモンはくぐもった笑いを続けるのだった。

：

次回予告

「みんな、どうして?どうしてリリンちゃんをうたがうの!?

どうしてリリンちゃんをきずつけようとするの!!」

「蛍、あなただつて本当はわかつているはずよ!

あの子はリリンじゃない、あの子は……。」

「ちがう!リリンちゃんだよ!だれがなんて言おうと、リリンちゃんなの!

リリンちゃんをきずつけるつもりなら……たとえばとせちゃんでも許さない!!」

次回!ホープライトプリキュア第21話!

幸せの終わり!闇の戦士、ダークシャイン誕生!

嘘でしょ……蛍……蛍!!

第21話

第21話・プロローグ

この日の学校が終われば夏休みが始まる。

そんな1学期最後の登校日だが、蛍の表情は暗かった。

以前の戦いでリリスが問いかけた言葉が、頭の中で反復されている。

そしてその度に蛍の脳裏に最悪のシナリオが通り、それを無理やり振り払っては否定する。

それをここ数日、ずっと繰り返しており、蛍自身も知らない内に身も心も疲弊していたのだ。

「おーっす、蛍おはよう。」

「おはよう、蛍ちゃん。」

「蛍。」

学校まで近づくと、偶然登校の時間があつたのか要と雛子、そして千歳の3人が声をかけてきた。

「みんな、おはよ。」

今の自分に出来る精いっぱいの元気を見せて笑うが、3人とも心配するような顔をする。作り笑いでしかないのは蛍自身もわかっており、それゆえにどうしようもないことだった。

「ん、おはよう。」

「今日で学校は休みだし、お昼はみんなで学食にいかない?」

「そうね。」

しばらくは学食のカレーが恋しくなりそうだし、そうしましょう。」

それでも要たちは、いつもと変わらない様子で接してくれる。

「うん、みんなでおひるごはんたべよ。」

そんなみんなの気持ちは素直に嬉しいから、蛍も普段のように過ごすように努める。

いつもと変わらぬ日々を過ごしている内にリリンとの日常も元通りになり、今日までの不安は夢の中へと消えていくことを、心のどこかで願いながら。

∴

モノクロの世界。

リリスは壁にもたれ掛かりながら、かの地にいる蛍のことを考えていた。

彼女の正体がキュアシャインだと知っても尚、自分は蛍を絶望させることを躊躇っている。

「どうして……何を躊躇う必要があるの……？」

そう自問しても、答えは帰ってこない。

脳裏をよぎるのはいつだって、自分のことを信じて、自分と一緒にいることを幸せと語る蛍の笑顔ばかりだ。

「なんで……そんなにまであたしのことを……？」

リリスは蛍のことなんてただの道具としか思っていない。

利用するだけ利用して、最後には捨ててやろうとすら思っていたのに。

結局あの子は、自分の事なんて何もわかっていない。

そんな愚かな子のことなんて、簡単に切り捨てていいはずなのに。

それにあの子は、キュアシャインは自分の事を否定したのだ。

自分が楽しいと思つた気持ちも、あの子が与えてくれると言つたものを切り捨てた。

それなのに、まだ捨てていけないのか？

そんな愚かな子が、自分の事なんて何もわかつてくれない子が、与えようとしている

ものを……。

「あたしは……。」

もう何度目かもわからない自問を繰り返す中、リリスの脳内にアモンの声が響く。

リリス、君たちに話したいことがある。玉座の間まで来なさい。

「……はい、アモン様。」

恐らくまた、プリキュアに関する新たな任務だろう。

あの子との繋がりを断ち切るチャンスとなるかもしれない。

リリスは行動隊長に戻るべく、アモンの待つ玉座の間へと向かうのだった。

第21話・Aパート

幸せの終わり！闇の戦士、ダークシャイン誕生！

学食堂で昼食を終えた千歳たちは、その後も残つて談笑していた。

「終わった〜！明日から楽しい夏休みの始まり始まり〜！」

「要、声が大きいわよ。」

はしやぐを雛子が注意する。

勉強嫌いの要は学校から解放されたことを大いに喜ぶが、一方で千歳の心境は複雑だった。

この世界の学問について学ぶことが大好きな自分からすれば、学校を休まなければならないのは少々物寂しいものだし、そもそもまだこの世界の娯楽に精通していないものだから、1か月も休みを貰ったところでどう時間を過ごせばいいのか分からないのだ。

「真と愛子、未来と優花と遊ぶ約束しとるし、あつ、健太郎と野球やる予定もあつたな。

それからかな子とも・・・。」

一方で要は、友達と遊ぶだけでもポンポンと予定が飛んでくる。

この街に住んでいる期間が自分よりも長いことを差し引いても、彼女の交友関係の幅の広さは1つの美点であると思う。

「何でもいいけど、私たちと過ぐす予定もちゃんと空けておきなさいよ。」

そんな要に雛子が釘を入れるが、要は螢の方を見てニヤリと笑う。

「わかつてるって。」

みんなで海と、泊まり会やる?」

「うん、ありがとう。」

螢はそれに静かに微笑む。

だが登校時よりは多少良くはなつたものの、未だにいつもの元気な様子は見られなかった。

「あつ、でもわたし、お盆は実家にかえらなきゃいけないから。」

すると聞き覚えのない言葉を螢が口にする。

「お盆?」

「この国に伝わる風習で、ご先祖様の霊を祀る祭りのことを言うの。」

千歳が首を傾げると、雛子が簡単に説明してくれた。

8月の中ごろに行われるこの祭事では、家元のお墓を参拝するために帰省する人が多いそうだ。

雛子はこの街の出身だが、蛍と要は違う。

蛍は元々住んでいた田舎に、要は関西へと帰るようだ。

「ひさしぶりにおばーちゃんに会えるの、たのしみなんだ。」

「蛍ちゃんのところのおばあちゃんって、どんな人？」

「とつてもやさしくて、料理が上手なおばーちゃんなの。」

おかーさんは、おばーちゃんから料理をおそわったんだって。」

雛子が問いかけると、蛍は嬉しそうに祖母のことを語り始める。

少しだけ明るさの戻った様子に千歳は少しだけ胸を撫でおろす。

「あつそれとね、この髪留め、小さいころ、おばーちゃんからもらったプレゼントなの。」

「あら、そうだったの。」

蛍の髪留めをよく見てみると、確かに僅かに色褪せており、年季が入っているのがわかる。

だが傷らしい傷はついておらず、蛍はこれ以外の髪留めを付けてきたこともない。

蛍が祖母からのプレゼントを大切にしているのは見れば明らかであり、それは蛍が祖母のことを母親と同じくらいに慕っている何よりの証拠でもある。

「ふふつ、そっか。機会があればお会いしてみたいな。」

そんな蛍の話を、雛子はどこか嬉しそうに聞いていた。

そういうえば雛子との会話では、彼女の祖母についての話題がちよくちよく上がった。た。

もしかしたら雛子はおばあちゃんっ子なのかもしれない。

祖母を大切に思う気持ちを誰よりも理解しているのだろう。

「ウチもおじいとおばあからお駄賃貰えるの楽しみやな〜。」

「こらっ、祖父母に集るんじゃないの。」

一方で要は蛍とは全く別の次元で祖父母に会うのを楽しみにしており、雛子が鋭くツツコミを入れる。

そんな相変わらざるの対応の違いが面白いものだから、千歳はつい吹きだしてしまふ。

「そういう雛子のところは、ふー姉が帰ってくるんじゃないの?」

「ふーねー?」

すると要から聞いたことのない人物の名前が挙がった。

自分だけでなく蛍も首を傾げていると、要がニヤリと笑いながら説明する。

「雛子のお姉ちゃんのこと。」

「えっ?!おねーちゃん!?!」

要からの思わぬカミングアウトのようで蛍がびっくりして身を乗り出して来た。

「ひなこちゃん、おねーちゃんいたの!?!」

「あらつ、そう言えばまだ言つてなかつたわね。」

「藤田 風子つて言つて、ウチはふー姉つて呼んでるの。」

今は都会の大学に通つてゐるから、実家を離れて一人暮らししてゐるつてわけ」

なぜか雛子ではなく要が、雛子の姉について説明する。

「だからなんで要が話すのよ。」

まあ今年の夏は色々忙しいから、顔だけ見せてすぐに帰るつて言つてたけどね。」

「そつか・・・さみしいね。」

姉との再会がすぐに終わつてしまうことを螢は寂しく思つたようだが、当の雛子本人はどこか呆れた様子でため息を吐く。

「それでもないのよ・・・。」

姉さんすつごい気まぐれで、思いついたら連絡もなくいきなり家に帰つてくるような人なの。

螢ちゃんがここに引つ越して来てからも、実は何回か家に来たことがあつて。」

「え・・・そだつたんだ。」

「ああ、相変わらずやなあの人・・・。」

と思いきや、雛子の言葉に螢は呆気に取られてしまう。

兄弟姉妹は得てして似るものではないと言うのは知つてゐるが、それでも大人びて知

性的な雛子の姉、と言うイメージからは想像できないほどの自由人な姉であるようだ。

この中では割と自由な要ですら苦笑しているのだから、よほどの人なのだろう。

「千歳ちゃんは、故郷に帰る予定とかはないの？」

「えっ？私？」

すると雛子が話題を変えようと思ったのか、そんな質問を千歳に飛ばして来た。

だがフェアリーキングダムにも祖先の霊を祀る祭事はあるが、その季節は夏ではない。

この時期に故郷へ帰る、と言う感性は千歳にはピンと来ないものだ。

「ほら、お盆ってことを考えなくても、夏休みは1か月もあるのだし、どこか時間を作ってフェアリーキングダムに戻ることも出来るのじゃないかなって。」

疑問に思っていた千歳に対して雛子が言葉を足してフォローする。

「ああ、そうね。それも少し考えたけど、今回は止めにしておくわ。」

「どうして？ウチらの力が必要やからとか、そんな遠慮だったらいらんよ？」

そんな要の気遣い千歳は苦笑する。

確かにこの世界からフェアリーキングダムへ向かうには、プリキュア全員分の力が必要になってくる。

だけど今更この子たちにそんな遠慮なんていらぬのは、千歳にもわかっているの

だ。

それでも気を遣ってくれたことに内心、お礼を言いながら千歳は事情を話す。

「そうゆうわけじゃないから、安心して。」

ほら私、この世界で暮らしていくことを意識し始めたのって、フェアリーキングダム
の一件が終わってからのなの。

だからもし、今の時期に故郷に帰ってしまったら、故郷を恋しく思う気持ちが強く
なってしまう気がして。

だからここでの生活に慣れるまでは、故郷に戻るべきじゃないって考えているだけ
よ。」

この世界言うところの『ホームシック』に当たる心理状態だ。

フェアリーキングダムが救われるまでは正直、生きた心地がしなかったものだから、
千歳がこの世界生きていることを意識し始めたのはつい最近のことである。

そして前回、アツプルの出張騒動で実感したが、自分はまだここでの暮らしに慣れて
きたとは言い難い。

加えて少なくとも、ダークネスを退けるまではこの世界に滞在するつもりなので、そ
れなりの長期間ここで生活していくことになる。

今のタイミングで故郷に帰ってしまうと、故郷を懐かしむ気持ちがこの世界での生活

に影響を及ぼす可能性があるのだ。

「千歳は真面目だね。」

そんな千歳に要が、どこか感心したような呆れたような声をかける。

千歳もその言葉に苦笑する。

自分でも自覚があるくらい、不器用な選択だと思っている。

父と母に会いたい気持ちは山々なのだから素直に帰ればいいとアップルにも言われたくらいだ。

だけど本音を言えばそれだけではない。

みんなにはまだ話していないことだが、ここで暮らすようになってから千歳には一つ、考えていることがあるのだ。

その考えがまとまったとき、そのことをまず父と母に話さなければならぬだろう。

故郷に帰るのはきつと、その時でも遅くはないはずだ。

「それじゃ、千歳ちゃんもお盆休みはこっちに残るんだ。」

「ええ、そうするつもりよ。」

「それなら、この街の図書館とか案内しよつか？」

この国の歴史や世界史の本とか、千歳ちゃんが好きそうなものを紹介するわ。」

「それは、是非目を通してみたいわ。」

雛子からの思わぬ申し出に、千歳に早速夏休みに楽しみが1つ生まれるのだった。

：

みんなで夏休みの予定について話している中、蛍はふと、リリンのことを考えていた。最後に会ったとき、リリンと次に会う約束をすることができなかった。

かつてと同じ、リリンとは2度と会えないのではないかと言う不安が蘇ってきたのだ。

「蛍ちゃん、どうかしたの？」

そんな蛍の様子を見て、雛子が心配そうな声をかけてきた。

「んんっ、なんでもないよ。」

何でもない、と言いながらも、蛍の胸中に広がる不安は収まらない。

「なつやすみは、リリンちゃんにあえるかなっておもっただけ……。」

だから蛍は、無意識の内に不安を口にしてしまった。

そんな蛍の言葉に、千歳が眉を潜めて口を開く。

「ねえ、蛭。」

「なに？ちとせちゃん。」

どこか神妙な面立ちで千歳が声をかけてくる。

「・・・もし、もしもだけど、リリンが・・・。」

「わたし、かえるね。」

だが蛭は、千歳が言い切るのを待たずに、冷たい声で遮った。

そのまま席を立ち、帰り支度を始める蛭に、3人とも驚いた様子を見せる。

「え・・・？蛭。」

「ごめんね、夕飯のおかいものしなきゃいけないの、わすれてたの。」

だからみんな、またね。」

その言葉を残し、蛭は3人から立ち去るようにいそいそと学食堂を後にするのだった。

商店街へ向かいながら、蛭は千歳が自分にかけてようとした言葉を思い出す。

「・・・もう、ちとせちゃんったら、なにを言いだすのさ・・・。」

違う。千歳はまだ何も言っていない。

何も言っていないはずなのに、虫にはあの時の言葉の続きが分かってしまったのだ。「そんなわけなんか・・・ないのに・・・。」

千歳だけじゃない。要も雛子もきつと気づいている。

みんな、自分と同じでリリンのことを・・・。

「そんなわけない。そんなわけない。そんなわけない。」

違う。自分の考えだつてきつと間違っている。

ううん、間違っているに決まっている。

それなのにどうして、こんなに苦しいの？

どうしてリリンのことを疑うの？

リリンがいてくれたから、自分は幸せになれたのに。

リリンの優しきがあつたから・・・。

「そうだよ。みんな、まちがってるよ。」

千歳も要も雛子も間違っている。

自分だつて、間違つて・・・

「・・・あれ？」

自分だつて間違っている？でも何を間違っているの？

みんなと同じだから間違っているの？

だとしたら、やっぱりリリンは……。

「ちがう……。」

違う。でも正しいとしたら、リリンは誰なの？

リリンはどこに住んでいるの？家族は？学校は？友達は？

リリンがどこの誰なのか、答えられるの？

「ちがう……。」

自分は正しいの？間違っているの？

間違っているとしたらどっち？正しいとしたら誰が？

「ちがう、ちがう、ちがうちがうちがう。」

ちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが
ちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが
ちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが
ちがうちがうちがうちがうちがうちが

何度も何度も何度も、螢は頭の中で同じ言葉を繰り返していく。

自分の思いも、千歳の言葉も、全てを否定するために。

「……はやく、買い物終わらせて帰ろ……。」

ふと、脳裏に噴水広場の光景が広がった。

蛭は継るような思いで広場へと足を運ぶが、結局リリンとの再会は叶わないのだった。

：

重たい足取りと空気の中、雛子は要と千歳と一緒に下校していた。

「蛭の様子を見て思ったのだけど。」

千歳がこちらを見据えて声をかける。

「もしかして、気づいたのじゃないの？」

リリンの正体に。」

「……やっぱり、そう思う？」

「つ……。」

その言葉に頷く要とは対照的に、雛子は息を飲むしかできなかつた。

何よりも恐れていた事態が、ついに来てしまったのだ。

「元々蛭は聡明な子よ。」

これまでリリンの正体に気が付かない方が不思議だったくらいに。」
千歳の言う通りだ。

物事の真理を直観的に見抜くことができるほど蛍の感性はとても鋭く、的を得ることが
できるものだ。

かつてフェアリーキングダムを救ったとき、蛍はその感性で世界を救うために必要な
ことを間違うことなく揭示したことがある。

そんな彼女ならば、リリンの言動がどこかちぐはぐで不可解であることに気がつくは
ずだ。

少なくとも千歳から行動隊長に関する情報が持たされた時点で、リリンの素性を怪し
むことができたはずだ。

それなのに蛍は、つい最近までリリンを疑うことはなかった。

リリンを疑うなんて選択肢が、蛍には最初から用意されていなかったのだ。

「それだけ、リリンのことが大切やったってことなんやろな……。」

要が辛そうな表情でそうぼやく。

要自身も、蛍の友達だと言うだけでリリンの事を無条件に信頼していた。

リリンを心から慕っている蛍はその比ではないだろう。

それだけに今の蛍の心境は、想像することもできない。

リリンがリリスであること。

蛍のことを憎み嫌い、何度も襲い掛かって来たと言う事実を、急に突き付けられたところで受け入れられるわけがないのだ。

「……ねえ雛子、このあたりが限界だと思わない？」

「え……？」

すると千歳が真剣な表情で問いかけてきた。

その言葉の意味するところを、雛子は理解しながらも言葉を返そうとはしなかった。

「……蛍とリリンが再会する前に、リリスを……倒すのよ。」

「っ……。」

だが千歳はそんな逃げ道を与えてくれなかった。

正面から突き付けられた言葉に、雛子はただ俯くしかできない。

「まだ蛍は、リリンと次に会う約束をできていない。

蛍に知られる前にリリスを倒すことができれば、リリンはもう2度と、蛍の前には現れないわ。

蛍とリリンを再会させないまま、全て『無かった』ことにする。

それが……蛍にとつて、一番良い選択肢だと思わない？」

苦しげな表情で千歳がそう提案する。

今のうちにリリスを倒すことができれば、蛍はリリンの正体を知らないままに、リリンと一生別れることになる。

だがそんなことが蛍にとつて良い選択なわけではない。

真実を知ってしまふこととどちらが残酷かなんて知らないが、リリンと一生会えなくなることは蛍を深く悲しませることになるなんて分かり切っていることだ。

千歳だって、そのことを知っているはずだ。

だから彼女は今、とても辛い顔をしているのだ。

それでも千歳は蛍を守るために、リリスを倒す覚悟を決めている。

例え蛍を悲しませる結果は変わらないとしても、蛍のことを守るために、苦しい思いを抱えて戦おうとしているのだ。

「でも……」

それに対して自分はどうか？

何が正しくて、何が間違っているかなんてわからない。

まして蛍のために何が一番良い選択肢かなんてわかるわけではない。

それでも蛍のことを悲しませたくないから、リリスを……リリンを蛍の前から消してしまふことには、同意することができなかつた。

「雛子、もうこれしか方法がないのよ。」

「でも、私は……。」

「……わかつたよ千歳。」

「要！」

そんな中、沈黙を続けてきた要が千歳の意見に同意した。

「どのみち、リリスと戦うことは避けられないやろ？」

それにもしリリスが本当に蛍のことを傷つけるつもりなら、ウチだつて容赦しない。

だからウチは千歳の話に乗るよ。

蛍よりも先にリリスを、リリンを見つけて……戦う。」

「ありがと、要……。」

要の言葉に千歳はどこかホツとした表情を浮かべた。

要の言葉を注視してみれば、全面的に千歳に同意しているわけではない。

あくまでも千歳の想定通り、リリスが蛍を傷つけるのであれば賛同すると言っているだけだ。

それには千歳も気づいているだろう。

それでも以前、千歳が一人でリリンのことを疑っていた時、自分たちは彼女の意見に賛同しなかった。

だから要が協力する意思を見せてくれたことが嬉しかったのかもしれない。

それに、要の言葉だつて本気だ。

もしも最悪の状況が待ち受けていた場合、リリースを倒すことを躊躇わないのだ。要も千歳と同じだ。

例え蛍を傷つける結果になったとしても、蛍を守るためにリリースと戦う覚悟を決めている。

「私は……。」

「無理しなくていいよ、雛子。」

「……誰よりも蛍を大切に思っているあなたには辛い決断だものね。ごめんなさい。」
要と千歳が優しく声をかけてくれるが、その言葉はいつそう、雛子のことを追い詰めた。

誰よりもなんてことはない。

この場にいる全員が蛍のことを同じくらいに大切に思っている。ただ自分は、2人のように覚悟することができないだけだ。

このままリリースを放っておけば、蛍の身に危険が迫ることを知っている。

2人の決断は正しいと分かっているはずなのに、蛍のことを傷つけないからと我儘で駄々をこねているだけだ。

でも2人の判断は正しいから止めようとも思わない。

蛭を傷つけてしまう苦しみも、罪悪感も、全てを2人に押し付けてしまっている。そう、自分はただの卑怯者だ。

自分の代わりに2人が苦しい思いを抱えることを、蛭が傷つくところを見ることしか出来ない、どうしようもない卑怯者なだけだ。

「それじゃあ、今日から噴水広場の見張りをしていきましょう。」

「了解。リリンの狙いが蛭なら、必ずまたあの場所に姿を見せるだろうしね。」

「・・・待つて。」

だからせめて、雛子も1つだけ覚悟を決めた。

「・・・私も、ついてくわ。・・・戦うことはできないかもしれないけど、ついてく。」

せめて、2人の覚悟を最後まで見届けようと。

それが2人につらい決断を押し付けた卑怯者の自分にできる、精いっぱい償いだから。

...

モノクロの世界。

アモンより招集を受けたリリスが玉座の間へ訪れると、既にサブナックとダンタリアの姿があつた。

そして玉座にはアモンが腰掛けている。

「来たか、リリス。」

「はっ。」

行動隊長が3人揃い、アモンの前で片膝をつく。

「君たちが集まってもらつたのは他でもない。」

光の使者プリキュアを倒すための切り札が、直に完成するのだよ。」

「なんですって……?」

リリスは驚きながら顔を上げる。

サブナックとダンタリアも、その言葉に驚愕を隠せずにした。

これまでアモンはずっと研究室に籠りつきりでの地の地への侵略は自分たちに一任してきたが、全てはその切り札とやらを創るためだったのだろうか?

「アモン様、その切り札とは?」

「その前に1つ聞きたいことがある、リリス。」

「なんででしょうか?」

「キュアシャインの正体を突き止めることはできたかね？」

「っ!？」

アモンの問いに、リリスは苦い表情を浮かべて言葉を失うが、やがて擦れた声で答える。

「・・・はい。やつの正体なら既に突き止めてあります・・・。」

「そうか、ご苦労だったな。ではもう1つの任務の方は？」

アモンの言うもう1つの任務とは当然、キュアシャインを絶望させることを指している。

「そちらは・・・まだです。」

正体を突き止めてから早2週間と2日が経過しているが、まだリリスは任務を達成できていなかった。

キュアシャインを絶望させる。

その任務の意味を今一度噛みしめたりリリスは、殊更苦しい表情を浮かべる。

そんな様子を、アモンはフード越しでも伝わるほど興味深そうに眺めていた。

アモンのことだから自分が正体を突き止めたこと、そして続く任務を達成できていないことくらい、わかっているだろう。

分かっていながら敢えて問いかけているのだ。

自分の様子を観察するために。アモン自身の観察欲を満たすために。

そのことをリリースは不快に思いながら、アモンから視線を反らす。

「クククッ、それなら逆に好都合だ。

もし絶望させていたら、これの完成がまた遅れるところだったからな。」

リリースはアモンの言葉に首を傾げる。

アモンがキュアシャインの潜在能力を危険視しているからこそ、正体を暴き絶望させ、戦力を奪うと言う任務が下されたのだと思っただけに、自分が任務を達成できていない状況を好都合と言う意図がわからなかった。

サブナツクとダンタリアも、その言葉を訝しむ様子を見せている。

「それは一体、どういう意味でしょうか？」

「リリース、君にこのカードを授けよう。」

だがアモンはこちらの疑問など無視して、1人話を進めていく。

フードの袖から一枚の黒いカードを取り出し、こちらに投げつけて来た。

「これは……?」

「『デイスペアー・カード』。この戦いを終わらせるための切り札だよ。」

アモンの言葉を聞きながら、リリースはそのデイスペアー・カードを手に取り観察する。

かの地の紙札とは異なり、金属で作られたのかと思うほどに硬く、厚みもあるので強

く握つてもしなることはない。

だが不思議なことに重さは感じられず、まるで空気を手に取っているかのようだ。

「そのカードをソルダークに与えれば、ソルダークを超えた最強の兵士、『ネオ・ソルダーク』を生み出すことができるのだ。」

「ネオ・ソルダーク……。ソルダークを超えた兵士。」

アモンから聞かされた名前をリリスは反復する。

ソルダークに代わる次世代の兵士を創り出すことが、アモンの目的なのだろうか？

それもプリキュアとの戦いを終わらせることができるほどの、強大な力を持つ兵士を。

だがここでリリスは疑問を抱く。

デイスペアー・カードから感じられないのは重量だけではない。一切の闇の力を感じないのだ。

ソルダークにプリキュアを倒せるほどの力を与えるのがこのデイスペアー・カードの役割だと言うが、どうしてもそのようには見えなかった。

「だが、そのカードにはまだ何の力も込められていない。謂わば空っぽの器だ。」

そのカードを完成させるには、多くの人々から絶望の闇を集め、注ぐ必要がある。」

そんなこちらの疑問に答えるかのように、アモンがデイスペアー・カードについて語

る。

だが絶望の闇を集めるだけならば、この世界に無尽蔵に蔓延する絶望の闇を注げば済むだけの話だ。

アモンがわざわざ『多くの人々』と言うからには、人から直接、絶望の闇を抽出しなければ意味がないのだろう。

最も、絶望の闇については使い手であるリリスたちも全容を把握していないが、リリスは特に興味を抱いたことはない。

戦うための力として自在に操れるのであれば十分だからだ。

説明は目の前にいるアモンがやればいい。

「つまり、かの地から絶望の闇を集め、このカードを完成させろと言うわけですか？」

だからリリスは何の疑問を抱くこともなく、アモンが自分に下そうとしている指令を先に口にする。

「その通りだよ。」

「ですが、より多くのと言うからには、相当数の人間が必要となるのでしょうか？」

この切り札とやらは、すぐには使えないと言うことですか？」

ここでリリスは、アモンの説明から疑問に思ったことを口にする。

科学者であるアモンが『多くの』なんて不確定な言葉を使うと言うことは、どれほど

の人から絶望の闇を集めればいいのか、その数は検討が付いていないのだろう。つまりこの切り札とやらは、いつ完成を迎えるかは想定することも出来ない。

そんな不確定要素を多く含むこれが切り札たりえるとは思えなかった。

「そこで君に与えた任務と結びつくのさ。」

だがアモンの答えにリリスは目を見開き、その意味を悟る。

「キュアシャイン。そのカードに込めるのはやつ絶望だけでいい。」

予想通りの答えを聞き、リリスは2つの意味で衝撃を受けた。

1つはキュアシャインを・・・蚩を絶望させなければならぬことを今一度突き付けられから。

そしてもう1つは・・・。

「それは、そのカードを完成させるのに必要な力を、キュアシャインの絶望1つで賄えると言うことですか？」

ダンタリアが疑問を口にしたように、キュアシャインの絶望がアモンの言う不特定多数の『多くの人々』に匹敵すると言われたからだ。

「その通りさ。」

あの子の絶望ならば、デイスペアー・カードを完成させるのに十分な力を秘めているだろう。

そしてリリス、今の君ならばキュアシャインを絶望させることは容易いだろうか？」
「っ……っ。」

どこまでもこちらの内側を見透かしているようなアモンの言葉に、リリスは再び唇を噛みしめる。

アモンは全て見通しているのだ。

自分がキュアシャインから、蛍から信頼を得ていることを。

その信頼さえ裏切ってしまうえば、容易く絶望に墮とすことができることを。

「……ええ、あの子を絶望させることくらい、造作ありません。」

「クククツ、期待しているよリリス。」

君にはいくつもの指令を下していたが、それもこれで終わりだ。

君に最後の一仕事を頼むよ。

キュアシャインを絶望させ、デイスペアー・カードを完成させるのだ。」

「……はっ。」

アモンから下された最後の指令をリリスは受け入れる。

だがリリスは、かつて蛍からソルダークを生み出したときのことを思い出す。

あのソルダークはキュアブレイズを相手に互角以上に戦って見せた。

途中で急激なパワーダウンがなければ、間違いなくこれまでのソルダークの中で最も

強い力を秘めていただろう。

それを加味しても、アモンがプリキュアとの戦いを終わらせる『切り札』と称するほどの力があつたとは思えなかつた。

「・・・本当に、それほどの力が秘められているの・・・？」

リリスは静かに疑問を口にするが、その声はアモンに届いていたようだ。

「リリス、希望と絶望の因果について考えてみなさい。」

だがここでアモンの口から思いもよらない言葉が飛んでくる。

彼がこれまで、自分たちに特定の事象について思考してみろと言う指示が来たことはなかつた。

行動隊長として必要な知識は全て、製造される過程で脳内に情報を与えられているはずだからだ。

「なぜですか？」

「そこに答えがあるからだよ。」

私が君にこの指令を託した答えがね。」

「答え・・・？」

だが結局、その言葉の意味もわからぬまま、リリスはかの地へと向かうのだった。

：

学校を終えてからの週末。

蛭は土日とも商店街を訪れ、噴水公園も屋台のある広場も見回ってみたが、リリンの姿を見つけることはできなかった。

結局、心に抱えた不安が晴れないまま、蛭は夏休みを迎えることになった。

去年とは違う、一緒に遊ぶ約束をした友達のいる夏休みなのに、リリンに会えないと思うだけで蛭の心に影が生まれる。

それ今回は、訳も分からないうちにリリンが行方を眩ましてしまったのだ。

これまで以上に、もう会えないのでは？と言う不安が生まれてしまい、蛭はこの数日、心ここにあらずと言える生活を送っていた。

「……おはよう。」

「おはよう蛭。」

最近寝ぼすけさんね。学校が終わって気が抜けちゃったの？」

「……ううん、そうゆうわけじゃないけど、ちよつと長めに寝てたかっただけ。」

「そう……。」

そんな蛍の様子を、両親が心配しないわけがない。

だけど母にも父にも、どう説明したらよいのかわからなかった。

この胸に渦巻く不安は、リリンと会えないことだけじゃない。

答えのない……『知りたくない』と思う漠然とした靄がかかっているのだ。

説明の出来ない、言葉通り言いようのない不安が蛍の心を覆い尽くしている。

自分でも、今の自分の事がわからないのに、両親に話すことなんてできるわけがないのだ。

「もう朝ごはん出来ちゃってるから、食べたなら流しに出しておいてね？」

そう言いながら母は仕事に行く支度をする。

蛍は夏休みでも、両親はお盆まで仕事だ。

「ううん、わたしが洗っておくよ。」

「蛍、起きてたのか。」

すると母と同じく仕事へ行く支度を終えた父が、階段から下りてきた。

「おとーさん、おはよ。」

朝食の前に両親を見送ろうと蛍は玄関に立つ。

すると両親が優しく微笑みながら話しかけてきた。

「蛍、今日はお母さん少し早く帰ってくる予定だから、夕飯はお母さんが作るわね。」
「え?」

「せっかくの夏休みだし、最近あまり元気がなさそうだから、蛍はのんびり休んでいなよ。」

「毎日お母さんのために、お家の仕事頑張ってるものね。」

「おとーさん、おかーさん……。」

毎日仕事を頑張ってるだなんて、2人の方がよっぽどそうなのに、この数日元気のない自分の事を両親は気遣ってくれている。

そんな両親の気遣いを嬉しく思う一方で、何も話せないことを申し訳なく思う。

少しでも両親の助けになりたいからと、今まで家事も勉強も頑張ってきたのに、結局自分は2人に心配をかけてばかりだ。

「ありがとう。いってらっしゃい。」

「いってきます、蛍。」

「それじゃ、いってきます。」

せめて両親を笑顔で送ろうと無理を試してみたが、作り笑いであることは見抜かれているだろう。

「蛍、本当に大丈夫?」

すると両親を見送りドアを閉めたタイミングで、チェリーが姿を見せた。

「チェリーちゃん……。」

大丈夫、なんて強がりにはチェリーの前では通用しない。

思えばこの数日、夜寝るときはチェリーに沿ってもらっていたし、ずっと彼女にも甘えっぱなしだった。

それでもこの鬱屈とした気持ち晴れることはなかった。

「ねえ、チェリーちゃん。朝ごはんたべおわったら、噴水公園まで散歩にいかない？」

もう一度、リリンと会うしかない。

みんなにこれ以上の迷惑をかけないためにも、そしてこの気持ちを片付けるためにも、それ以外の道が思いつかなかった。

「……うん、わかったわ。」

そんな蚤の言葉を、チェリーは少し寂しそうな顔で承諾してくれたのだった。

…

夏休み初日。

千歳たちはリリンを探すために商店街を訪れていた。

要と雛子の他にもベルとレミンが、そして今回は珍しくリン子も一緒だ。

「平日なのでつきり仕事かと思いましたがよ。」

「この前休日に働いた分休めって言われちゃった。」

要の言葉にリン子は微笑みながら答え、千歳は深くため息を吐く。

つまり上司に言われなければ今日も仕事に行くつもりだったのだ。

2人分の生活費と自分の学費を稼ぐためとはいえ、上からストツプが入るなんて働き過ぎである。

「だから今日くらいは家で休んでなさいって言ったのに。」

「蛍のことを考えれば、家でのおんびりなんてしていられないわよ。」

「……わざわざ、ありがとうございます。」

仕事のない僅かな時間の中で協力してくれるリン子に、雛子が神妙な面立ちでお礼をする。

その隣でレミンは悲しそうな表情を浮かべていた。

千歳と雛子が違う意見で衝突していることを、そして蛍の知らぬ間に彼女からリリンを奪うことを、レミンは悲しく思っているのだ。

雛子とレミンの様子を見て、千歳は表情を曇らせる。

自分がこれからすることは、2人の思いを踏みにじることになるのは分かっている。それだけじゃない。

蛭に全てを隠す以上、蛭はこれから起きる出来事を知らぬまま、リリンとの別れを経験させることになる。

そう、誰も救われず、みんなを悲しませるだけの結果に終わってしまうのだ。

そんなことは分かっている。分かっているのだ。

それでも……

(それでも……私がやるしかないのよ。)

これ以上、リリンを友達と慕う蛭の心を利用されるわけにはいかないから。

リリスは行動隊長、かつて自分の故郷を侵略したハルファスとマルファスと同じ存在。

やつは人の姿を真似た悪魔だ。

幼き少女の姿を偽っていても、その本質は変わらないはずだ。

蛭を騙すも利用するも、そして慕っていると知ってその手にかけることも、何も躊躇わずにできるはずだ。

かつて故郷であるフェアリーキングダムは、人を真似たハルファスとマルファスに気

を許すあまり侵略を容易に許してしまった。

あのような過ちを、もう2度と繰り返すわけにはいかない。

行動隊長の本質をこの目で見てきた自分だけでも、非情に徹して構えなければ、本当に守りたいものも守れないのだ。

(そう・・・あの子を守るために、私は・・・。)

一瞬、自分が守りたいものは本当に、蛍のことだけなのか?と疑問が脳裏をよぎるが、千歳はすぐさま心を立て直す。

今の自分に弱気なんていらぬ。

必要なのは、非情に徹することのできる強さだけだ。

「2人とも、あそこ。」

すると要が、噴水公園に佇む1人の少女の姿を見つけた。

長い黒髪をなびかせながら、見慣れた場所に佇む、見慣れた少女の姿を。

「リリン・・・。」

千歳は震える拳を無理やり抑えながら、リリンの姿を見据える。

「みんな、行くわよ。」

毅然とした声で千歳は全員に声をかける。

心のどこかでほんの少し、全て間違っていてほしいと願いながら。

:

5日ぶりにかの地へと降り立ったリリンは、いつもの噴水公園で蛭を待っていた。以前蛭の言葉に取り乱してしまい、次に会う日を約束することができなかつたが、蛭のことだからあれから毎日、自分がここに來ているのかを確かめに來ているだろう。

そう、今まであの子がずっと、そうしてきたように。

まだ時の感覚を上手く掴めず、蛭と会うのも不定期だった頃も、彼女は自分に会いたい一心でここを頻繁に訪れていた。

だから蛭は今日もここに來るはずだ。

そうリリスは『信じている』。

こちらの正体に気付かず、疑わず、ただ一步踏み出す勇気を与えてくれた恩人として、蛭は自分の事を慕っているから。

(・・・本当に、バカな子よね・・・)

自分がどんな目的を持って近づいたのかも知らずに。

そして今日、何のためにここへ来たのかも知らずに。

リリンはデイスペアー・カードを忍ばせたポケットに手を当てながら、これまでのことを振り返る。

ソルダークを造るために蛍に近づき、道具として利用するために再会し、信頼を得るためにトモダチの仮面を彼女の前で被り続けた。

だがいつしか、あの子と一緒にいる時間から安らぎを得るようになっていった。

今にして思えば、キュアシャインに乱された心を、あの子に安らいでもらっていたなんて、何と滑稽な話だろうか。

それでもいつしか蛍は、自分にとって道具以外の価値を見出せる存在となっていた。

そしてキュアシャインの正体を知ってしまったとき、蛍のことをどうすれば良いのかわからなくなっていた。

キュアシャインへの憎しみを消すことも、蛍から得た安らぎを手放すことも出来ず、答えを見つけれないまま、ここまで来てしまった。

だけでもう・・・

(もう、終わりにするのよ。

今日で何もかも・・・全て・・・)

サブナックとダンタリア、そしてアモンにまで蛍の正体を知られた以上、もう後戻りなんてできない。

仮に自分が躊躇ったところで、キュアシャインの力を危険視しているサブナックたちと、利用しようとする目論むアモンが彼女を逃すはずがないのだ。

それならばいつそ・・・自分の手であの子を・・・。

「ほたる・・・。」

整理できない多くの感情が混濁する中で、リリンは蛍の名前を呟く。

その時、

「リリン。」

こちらの名前を呼ぶ少女の声が聞こえた。

ハッと顔をあげたりリリンは、待ちわびた少女の名前を呼ぶ。

「ほたる？」

だが目の前に映ったのは蛍の姿ではなかった。

「残念、私よ。姫野 千歳。

覚えているかしら？リリン。」

恐らくはキュアブレイズに変身する青髪の少女、姫野 千歳だった。

その隣には森久保 要と藤田 雛子の姿があり、さらにその後ろには1人の成年と千

歳たちよりも若い少女、そして長身の女性の姿もあつた。

「……何のようかしら？」

普段虫には見せたことのない、冷たい言葉で千歳に質問する。

千歳は以前、こちらの様子を監視していた。

自分の正体に間違いなく気づいているだろう。

そして恐らく、後ろについている要と雛子も。

だけど同時に、あの2人がキュアスパークとキュアプリズムであることも間違いはないはずだ。

「少し話があるの。ついてきてくれるかしら？」

千歳の言葉には怒りの感情が隠しきれておらず、ほとんど脅迫に近い形の物言いだ
が、どうにも様子がおかしい。

こちらの正体を暴き、こうしてわざわざ接触してきたと言うことは、間違いなく自分
を倒すために来たはずだ。

それなのに最も強い力を持つ虫の姿がない。

ここでリリンは1つの仮説を立ててみた。

もしも虫に自分の正体を明かしていたら、あの子は間違いなくショックを受けるだろ
う。

自分が蛍を絶望させるために、同じ手段を取ろうとしているように。千歳たちはきつと、蛍のことを気遣って彼女には伏せているのだ。

そして蛍に内密のまま、自分の事を倒しにここに来たのだとしたら？

「・・・ええ、いいわよ。」

リリンは千歳の言葉に承諾する。

蛍にはまだ正体を知らされていない。

そして千歳たちは蛍を置いてここまで来た。

もしこの状況を上手く利用することができれば・・・

(こいつらからほたるを、奪うことができれば・・・)

リリンは千歳たちに案内されるままに噴水公園を離れるのだった。

∴

噴水公園を訪れた蛍は、リリンの姿を探しながら初めて彼女と会ったときのことを思い出していた。

まだこの街へ引越して来たばかりの頃、人見知りの強くて臆病な自分が不安に押し潰されそうになっていたとき、リリンは優しく声をかけてくれた。

悩みは話すだけでも楽になるからと、抱えていた不安と悩みを全て聞いてくれた。

そして、一步踏み出す勇氣のおまじないを、教えてくれた。

リリンとの出会いがあつたおかげで、自分はほんの少しの勇氣と一緒に今の幸せを手に入れることができた。

リリンがいたから今、幸せな日々の中を生きているのだ。

(リリンちゃん……どこなの……?)

その幸せが今、蛍の手から零れ落ちようとしている。

以前リリスと戦ったとき、どうして彼女がリリンと交わしたときの会話に答えるような言葉をぶつけてきたのか？

どうしてリリンはこれまで一度たりとも、彼女自身のことを話そうとしなかったのか。

そして脳裏に蘇るのは、千歳がかつて送った忠告。

見知らぬ人の姿を見かけたときは警戒して。素性を知らない相手には特にね。

素性を話そうとしないリリン。

リリンに問いかけたはずの答えを代わりにぶつけてきたリリス。

それらが蛍に1つの事実を突きつけてくる。

(ちがう・・・そんなはずない。)

何度も何度も繰り返し自分に言い聞かせ続けてきた言葉だ。

だがどれだけ言い聞かせても、脳裏を過る1つの答えを消し去ることはできなかつた。

それが蛍の心を蝕んでいき、幸せに満ちていたはずの世界を黒く塗りつぶしていく。

(リリンちゃん・・・)

もう、1人で抱え込みたくない。

でも誰にも打ち明けられる相手がいなかった。

要たちはリリンを疑っているし、事情を知らない両親には打ち明けられるはずもない。

チェリーにだって、胸中に抱えた不安を語ることが出来なかった。

自分を見るチェリーの視線で分かってしまったから。チェリーもきつと、気づいていなかったから。

今の不安を振り払うには、もう一度リリンと会う以外なかった。

リリンと会って、話をして、そして・・・否定してほしい。

自分の悩みなんて、不安なんて、全て考えすぎだと。

リリンは大切な友達で、恩人で、特別な人で、それ以上のなものでもないのだと：：

(リリンちゃん・・・)

商店街を抜け、噴水公園を後にし、クレープ屋の前まで来てもリリンの姿は見当たらなかった。

意気消沈した蛭はその場に佇み、沈んだ表情で視線を落とす。

「蛭、闇雲に探し回ったって見つからないし、一度噴水公園へ戻って待つてみてはどう？」

すると鞆から首だけひょっこりと出していたチェリーが、蛭のことを案ずるように声をかけてきた。

「チェリーちゃん、うん、そうだね・・・。」

「リリンだつてきつと、蛭に会いたいわって思つてくれるはずよ。」

あの子が2度も蛭に黙つて姿を見せなくなるなんてことはないわ。

だから、元気を出しなさいって。」

「・・・ありがとう。」

そんなチェリーの励ましを受けても、今の蛭の心が晴れることはなかった。

それでも今は、落ち込んでいるわけにはいかない。

もしまた会えたとき、自分に元気がなければ、リリンはきつと心配するだろう。

自分とリリンは・・・友達なのだから。

「それじゃあ、公園までもどつろつか？」

蛍が気を取り直して、噴水公園の方まで戻ろうと思ったその時

「・・・あれ？」

急に、妙な胸騒ぎを覚えた。

蛍はザワつく胸をおさえて辺りを見回す。

「蛍、どうしたの？」

「・・・なんだろう・・・これ？」

周囲を見渡したところでリリンの姿が見つかるはずもない。

それなのになぜか・・・

「リリンちゃん・・・？」

リリンに、呼ばれているような気がした。

胸に広がるザワつきはやがて蛍の感覚を研ぎ澄ましていく。

「蛍、大丈夫？」

チエリーが不安げな様子で話しかけてくるが、蛍は気が付かなかった。

意識は感覚を研ぎ澄ますザワつきにのみ集中され、やがて蛍は辺りを見回すのを止め、ある一点を凝視する。

「……あそこに、リリンちゃんが……?」

あの方向は確か、川原のあるところだ。

人気あまりないところなので、子どもたちがスポーツをするために時々集まることがあると、要から聞いたことがある。

これが所謂直感だとしても、どうしてそんな人気のないところにリリンがいるのだろうか?

そしてなぜ、こんなにも胸騒ぎがするのだろうか?

「蛍?」

心配そうにこちらの顔を覗きこんでくるチェリーに、蛍は目線を合わせないまま答える。

「チェリーちゃん、川原のほうまでいってみよ。」

「え?」

「リリンちゃんが……いるかもしれない。」

「ちよつと、蛍!」

チェリーの抗議も聞かないまま、蛍は川原へ向かって全力で走り出した。

何だかよくないことが起こるかもしれない。
そんな漠然とした不安を胸に抱えながら。

第21話・Bパート

リリンを連れて川原まで訪れた千歳たちは、まず周囲を見渡して人がいないかを確認する。

この辺りは街の子どもたちの遊び場になることも多く、今は夏休みだ。

既に子どもが来ているか心配だったが、まだ昼も迎えていない時間のためか杞憂に終わってくれた。

これならば周囲を気にせず腹の内を探ることができると、千歳は改めてリリンを睨み付ける。

「それで、こんなところでまで連れて来て、あたしに何のようかしら？」

こちらからの視線に怯むことなく、リリンは余裕な様子でそう聞いてくる。

密かに微笑みながら目を細めるその姿は、どこか見下されているようにさえ思えた。

その様子には、普段虫と一緒にいるときの優し気な雰囲気は微塵も感じられなかった。

そんなリリンに要と雛子は息を飲むが、千歳は怯んでいられない。

着々と、自分の考えが正解に近づきつつあるからだ。

「リリン、あなたに聞きたいことがあるの。

あなた、どこの学校に通っているの？」

正面切つて尋ねたところで適当に誤魔化されるだけだ。

だからまずは小手調べ。

リリンの実態から暴き始めてやる。

「なんで今、そんなことをあなたに言わなきゃならないの？」

彼女は答えようとはしなかった。

蛭にすら話していないのだから当然だろう。

だがその対応は想定済みだ。

「いいから答えなさい。少なくとも夢ノ宮中学校ではないわよね？」

だから、こちらから逃げ道を一つずつ潰してやる。

「それはそうよ、だつてあたしは……。」

「小学校、でもないんやろ？」

「えっ？」

リリンの言葉に先回りし、要が一つの逃げ道を潰す。

「こう見えてもウチ、この街だとちよつと顔が広いの。」

夢ノ宮小学校にも知ってる子おるけど、リリンって子は小学校にはいないって言って

たよ。」

リリンの背丈は目測140cm。この世界で言えば小学生の平均的な身長だ。

だから小学生だと答えれば誤魔化せると考えていたのだろうが、こちらには交友関係の広い要がいる。

彼女に頼んで調べてもらったが、案の定、リリンと言う生徒は近辺の小学校には見当たらなかった。

このまま言い逃れの出来ない状況を作つてやる。

「この夢ノ宮市のどこに住んでいるの？」

「ご両親は？兄弟はいるの？虫以外の友達はあるの？」

「私たち以外に、あなたのことを知る人がこの夢ノ宮市にいるの？」

「別にあなたには関係のないことでしょうか？」

「どうしてそこまで自分のことを隠すの？」

「何か答えられない理由でもあるの？」

千歳の矢継ぎ早に質問に対しても、リリンは依然として涼しい顔で受け流し、答える様子を見せない。

否、最初から答えなんて『持っていない』はずだ。

だが話を背ければ背けるほど、リリン自身の逃げ道を塞いでいくことになる。

「答えなさい、リリン。」

あなた、本当にこの街に住んでいるの？」

そして蛍がこの場にいない今、自分たちを止める相手だつていない。

ここから逃すつもりは無い。そう千歳が思ったその時。

「……うふふつ、あはははは、あたしのこと、そこまで怪しむだなんて。」

リリンが不気味な笑みを浮かべながら、こちらに挑戦的な視線を送ってきた。

それが核心に近づいていると感じた千歳は、妖精たちに後ろに引くように促す。

そして……。

「まるであたしのことを、『リリス』と疑っているみたいじゃない。」

「っ!？」

リリンは狂気的な笑みを浮かべたまま、自白も同然の言葉を吐き捨てた。

そこにはもう、蛍の親友『リリン』の面影は微塵も感じられなかった。

人の心を平然と利用し、騙し、陥れ、絶望へと誘う邪悪な存在。

行動隊長のリリスとしての顔が、リリンの姿を通して映り込んでいく。

千歳と要は身構え、目の前にいるリリンを敵として認識する。

「『リリス』だなんて一言も言つてなかったはずだけど？」

「この期に及んで化かし合いを続けても意味なんてないわ。」

あなたは最初からあたしのこと、リリスだと確定付けていたのでしょうか？ キュアブレイズ。」

不覚にも彼女の言う通りだ。

それにお返しとばかり、こちらの正体にも気が付いていたと挑発されるが、千歳は気にせず敵意を剥き出しにした目でリリンを睨み付ける。

「やっぱり、あなたがリリスだったのね。」

「うふふつ、さすがにあなたたちたちの目までは誤魔化せなかつたようね。」

正体が発覚したにも関わらず、リリンは涼しい顔だ。

こちらの正体を暴いた以上、もう欺く必要がなくなつたのかもしれない。

「なんで正体を隠して蛭に近づいたん？」

すると要が、リリンにそんな質問を投げかけた。

自分と違い、要の表情からはまだ苦心が見られる。

彼女は以前、リリンが本当に蛭を利用するだけの邪悪な存在ならば、戦いに協力すると言っていた。

だからこの場で確かめるつもりなのだろう。

本当にリリンには心がないのかを。

「あの子はプリキュアに関する情報を知っていたから。」

だから利用するために近づいた。それだけよ。」

「蛭はあんたのこと、心から友達だと思ってるよ。それなのに……。」

「おかげで何も疑われることなく、あの子に近づけたわ。」

「っ!？」

事もなくそう述べるリリンに、要は目を見開く。

「そしてあの子の正体を知り、あなたたちの正体にも辿りつくことができた。

だからあの子には本当に感謝してるのよ。」

あんなにも扱いやすく、あたしにとって都合良く動いてくれたからね。」

千歳は怒りで唇を噛みしめ、要もどこか諦めた表情を浮かべる。

結局、リリンは心なんてもの、持ち合わせていなかったのだ。

蛭から向けられた好意なんて何とも思っておらず、彼女の純粋な思いを利用していただけ。

それならばもう、躊躇う理由なんてない。

全てが自分の想像通りの結果に終わってしまったことに千歳は失望しながら、ブレイズパクトを手取る。

隣に並ぶ要も、覚悟を決めた様子でスパークタクトを手取る。

だけど雛子だけは悲しそうな表情のまま、妖精たちの位置まで後退した。

ここまで来ても、雛子にはリリンと戦う覚悟が生まれなかったようだ。

一瞬だけ、そんな彼女への罪悪感が過る。

だけどすぐにそれを振り払い、迷いのない敵意をリリスへと向ける。

「リリス、あなたを倒すわ。」

「悪く思わんどいてな。」

こうなった以上、もうあんなのことを放っておけんよ。」

だが敵意を向けられても尚、リリンは余裕の笑みを浮かべたままだ。

「あら、良いのかしら？」

あたしと戦って。」

「……どうゆう意味かしら？」

「もしこんなところを蛍が見たら、あの子はどう思うでしょうね？」

「っ!？」

続くリリンの言葉に千歳は目を言葉を失う。

「あの子はあたしのことを信頼してくれてる。」

あの子はあたしのことをトモダチだと思ってくれてる。

そんなあたしに、あなたたちが牙を向けたところをあの子が見たら、あの子はどつちの味方をしてくれると思う？」

リリンの余裕に満ちた言葉からは、蛍は彼女の味方をしてくれると確信している様子だった。

だが悔しいことに、もしも蛍がこの場を訪れたら彼女の言う通りになる可能性が高い。

こちらの言葉に、蛍は耳を傾けてくれなかった。

あの子は頭の中で分かっている、リリンへの信頼を捨てるのが、裏切ることが出来なかったのだ。

それだけに、リリンが言うことが許せなかった。

蛍から盲目的な信頼を得ているのに、リリンはそれを利用価値のある程度にしか思っていない。

蛍の優しさを、純真さを利用してずっと騙してきたくせに……。

蛍がどれだけリリンのことを信じて、どれだけ心を救われたのかも知らないくせに……。

そして今、リリンの正体に勘付いてしまい、どれだけ苦しんで傷ついているのかも知らないくせに……。

「……あなただけは許さない。」

千歳が今にも爆発しそうな怒りを堪えながらリリスを睨み付ける。

例え蛍を傷つけることになったとしても、こいつだけは必ず倒さなければならぬのだ。

これ以上、蛍の心をこんなやつに利用させないために。

千歳が握りしめるブレイズパクトに、強く光が灯り始める。

だがその時。

「リリンちゃん!!」

「えっ……?」

後ろから、リリンを呼ぶ声が聞こえてきた。

振り向くとそこには、鞆にチエリーを入れた蛍の姿があった。

「蛍……どうしてここに……?」

千歳も、要も雛子も妖精たちも、驚愕の表情で蛍の方を見る。

そんな中リリンだけが、クスリと静かに微笑むのだった。

∴

蛭が胸騒ぎに誘われるまま川原へ訪れると、すぐにリリンの姿を見つけることができた。

それに一瞬安堵するも、信じがたい光景が広がっていた。

千歳と要がパクトを構えながらリリンと向き合っている。

その後方には、人に変身した妖精たちと雛子の姿もある。

居ても立っても居られなくなった蛭は反射的にリリンの名前を叫び、リン子の側にチェリーを入れた鞆を置いてから、リリンと千歳の間に割って入る。

「蛭……」

千歳は驚愕の表情のままこちらを見るが、蛭はそんな千歳を睨み返す。

「ちとせちゃん……なにやってるの!?!かなめちゃんも!」

どうしてリリンちゃんにパクトなんかむけてるの!?!」

パクトを手に取った時点で、2人がプリキュアに変身するつもりであることは明白だ。

そしてそれをリリンに向けていたと言うことは、2人はリリンを敵だと思っているのだ。

そんなはずはない。リリンに限ってそんなこと、あるはずがないのに。

2人はリリンのことなんて何も知らないのに、勝手に敵だと決めつけ、自分に秘密で、

内緒で戦おうとしていたのだ。

(リリンちゃんは……なんかじゃないのに……)

心中でそう思いながらも、逆の疑問が脳裏を過る。

ならば自分は、リリンの何を知っているのだ？

どこに住んでいるのか？ 学校はどこなのか？ 家族はいるのか？ 友達はいるのか？

リリンのことは何も知らない。それなのになぜ、『なんかじゃない』と言い切れる？

むしろ2人の方が……。

「つ……ひなこちゃんも!! どうして止めようとしなかったの!!?」

そんな思考を断ち切ろうと、蛍は怒りの矛先を雛子にも向ける。

雛子だけはこの場に立っていないと言うことは、彼女はリリンのことを信じてくれて
いるはずだ。

それなのに、2人を止めようとする様子を見せてない。

そんな傍観に徹している雛子のことも許せなかった。

だが蛍の糾弾を聞いた雛子は、手を強く握りながら唇を噛みしめた。

見るからに辛そうな、今にも泣きそうな雛子の様子に、蛍も心を痛めるも、再び迷い
を振り払うように再び千歳たちを睨み付ける。

千歳と要はパクトを取り出した。雛子も妖精たちもそれを止めようとしなかった。

この場にいる誰もがリリンのことを信じず、敵とみなしているのだ。だったら、自分だけでもリリンのことを信じなければならぬ。

自分だけでも、リリンの味方をしなければならぬ。

「蛭！あなただつてもうわかつているはずよ！リリンは……。」

だが千歳の言葉に、心の内側に渦巻くもう一つの疑念が拡大していく。

「ちがう！リリンちゃんはリリンちゃんだよ！だれがなんて言おうとリリンちゃんだよ！！」

千歳の言葉を、自分の内側に眠る疑念を、蛭は大声で叫びながら否定する。

正しいとか間違っているとか、そんなことはもう、どうでもいい。

ただリリンのことを信じたい。リリンが敵だなんて信じられない。

だつてリリンは、大切な人だから。

大切な人だから信じたい。側にいたい。守りたい。ただそれだけだ。

だから……。

「……リリンちゃんをきずつけるつもりなら……。」

リリンのためなら自分は、何だつて出来るはずだ。

「例えちとせちゃんでもゆるさない……。」

それが例え、友達と戦うことになつたとしても……。

「嘘でしょ……蛍……?」

「蛍……あなた、そこまで……。」

「蛍ちゃん……。」

千歳が悲しそうな声で呟く。

要が憐れむような視線を向けながら、一步後退する。

後ろにいる雛子は、堪えきれない涙を流していた。

自分は今、大切な友達たちを傷つけて悲しませている。

それが蛍の心を抉り、深い傷跡を残していくが、それでも蛍は止まるわけにはいかなかった。

自分だけでもリリンの味方をしなければ、今度こそリリンが遠くへ行ってしまうような、そんな不安に押し潰されそうだから。

リリンを守るために千歳たちと戦う。

覚悟を決めた蛍が、シャインパクトを召喚するために両手を胸の前に置いたその時。

「……あれ……?」

異変は、すぐに感じられた。

「なんで……どうしてパクトがでてこないの……?」

今まで無意識ながらも感じられた力が、希望の光が欠片たりとも感じられなかった。

「どれだけ強く願っても、どれだけ心を込めても、希望の光が一切沸いてこない。なんで……どうして……？」

「蛍……？」

千歳と要も、蛍の異変に気付いたようだ。

先ほどとは打って変わって、蛍を案じるような視線を向ける。

だけどそれは、今の蛍には慰めにならなかった。

これまで希望の光を自在に操れなくても、シャインパクトを召喚できないことはなかつたはずだ。

プリキュアに変身できた時点で、無意識ながらも力を行使していたのだ。

それなのに今は、シャインパクトの召喚さえできない。

それはつまり、今の自分には一切の希望がないと言うことになってしまう。

そんなはずはない。リリンのを守る。リリンの力になりたいって願っているはずだ。

リリンとずっと一緒にいられることが、希望の光に変わってくれるはずだ。

それなのに……どうして？

「どうして……変身できないの……？」

失意に満ちた声で蛍が呟いたその時

そんなこと、わたしにはわかつているはずだよ。

「え．．．？」

頭の中に、声が聞こえてきた。

：

リリンの目論見通り、蛍は自分の味方をしてくれた。

千歳たちの敵意を煽って自分と戦うように仕向けることで、蛍をやつらから奪うと言う目論見は上手く行ったのだ。

だが、その後の蛍の様子に異変が見られた。

プリキュアに変身するためのアイテムが、いつまで経っても召喚されない。

それだけでなく、顔色が見る見る内に青ざめていき、頭を抱え始めた。

蛍の身に、何か良からぬことが起きている。

千歳たちもそう感じたのか、蛍の元へ駆け寄ろうとしたその時

「え．．．？」

蛍が目を見開いて両手を凝視する。

視線につられて蛍の両手に目を向けると、黒い霧が僅かに漂っていたのだ。

「なん．．．で．．．？」

今にも泣きそうな声で蛍がそう呟き、リリンは蛍の身に起きた異変を知る。

蛍の身体から、絶望の闇が生まれているのだ。

その光景を前に、千歳たちも何が起きたのかを悟ったようだが、同時に周囲を見渡し始め、困惑と驚愕の表情を浮かべている。

当然だ。なぜなら自分はまだ．．．。

「なんで？ 闇の牢獄はまだ展開していないのに．．．？」

蛍の様子を見たリリンが、困惑した声色で呟く。

そう、リリスはまだ、闇の牢獄を展開していない。

闇の牢獄がなければ、絶望の闇からは何の力も生まれないどころか、視覚すらできないはずだ。

それなのに今、蛍の身体からは確かな絶望の闇が感じられ、それは少しずつ目に見える形を成していく。

まだ目を凝らさなければ気が付かないほどに薄く、靄がかかっている程度にしか見えないが、蛍の両手から放たれた黒い霧は、やがて彼女の全身から生み出されていき、彼女の身体を包み込んでいった。

「いや・・・いやだ！どうして!?!なんでそんなことを言うの!?!」

やがて蛍は誰からも話しかけられていないのに、一人泣き叫び苦悶の表情を浮かべていた。

「ちがう！そんなことない！そんなことぜったいにないもん!!」

「ほたる・・・。」

いつも自分に笑顔を見せて、安らぎを与えてくれた蛍が、張り裂けそうな声をあげて泣いている。

そんな光景を目の当たりにしたリリンは、気が付けば蛍の元へ駆け寄っていた。

「ほたる！だいじょうぶ!?!」

こんなこと、自分は望んでいない。

蛍をやつらから奪うことができれば良かっただけなのに、訳も分からず苦しむ蛍を見ることなんて望んでなんかいない。

蛍に声をかけようとした千歳を差し置き、リリンは蛍の肩に手を乗せる。

その時、

本当は信じてなんかいないくせに。心の中で疑ってたくせに。

(え．．．?)

蛍の声が聞こえてきた。

蛍の纏う絶望の闇を通じて、リリンの頭に蛍の声が響き渡る。

リリンちゃんのこと何も知らないくせに、なんであの子を信じられるの？

あの子の言葉が本心だなんて、何も知らない私にがどうしてわかるの？

(なに．．．これ．．．?)

なんでほたるがこんなことを．．．?)

絶望の闇を通じて聞こえる言葉は、全てその人の本心だ。

その人が内側に抱えている悩み、苦しみ、心の闇が曝け出されるものだと言っている。だとすれば、これが蛍の本心？ 蛍は本当は自分のことを．．．。

「リリンちゃん！」

肩に手を置かれた蛍は、振り向きながらリリンに抱きつく。

だがリリンは、頭の中に聞こえる蛍の声を聞く度に、自分の中の何かが崩れ落ちていくのを感じていた。

わたしだつて本当はわかつてるはずだよ。ちとせちゃんが正しいって。

頭の中に聞こえる蛍の音が、リリンの心を砕いていく。

「やっぱり……ちがうよね……？だつてリリンちゃんは、こんなにやさしいんだもん……。」
懇願するように綴られる蛍の言葉が、リリンの心を乱していく。

そして……。

本当はリリンちゃんが、リリースだつて、わかつてるはずだよ。

「リリンちゃんが……リリースだなんて、ありえないもん……。」

「つ……。」

無意識に呟いてしまった蛍の音が耳に届く。

曝け出された蛍の音が、頭に響く。

リリンの中で、これまで積み重ねてきた思いの数々が、全て瓦解していった。

そして気が付けばリリンは、蛍のことを冷たく突き放していた。

「え……？リリンちゃん……？」

「なによ……それ……？あなた、本当はあたしのこと、疑っていたの……？」

「つ!?ちつ、ちがう!ちがうよ!リリンちゃん!!」

蛍が必死になって弁明するが、耳に届いた言葉も、頭に響いた言葉も、どうしようもないほどにリリンの心に届いていた。

まるで胸の内を抉り取られて作られた空洞から、得も言われぬ虚構が生まれていく。

「あたしのことトモダチだって!大切な人だって言つてたくせに!」

心の中ではあたしのこと、ずっと疑つてたんだ!!」

「ちがうよ!リリンちゃん!!」

「その名前で呼ぶなあああ!!!」

怒りも、憎しみも、虚構も、彼女に抱いていた特別な想いも、全てを吐き出すような叫びをあげる。

蛍から得た安らぎを、蛍への思いを否定されたリリンに残ったのは、堪えようのない痛みと、空虚だけだった。

「……あくあ、バツカみたい。

今までなんのために、こんなトモダチごっこを続けてきたのかしら……」
その言葉に、螢は悲痛の表情を浮かべる。

だけどそんな表情を見ても、もう何も感じなくなっていた。
まるでこの世界に来る前の自分に戻ったような気分だった。

心を持たない行動隊長に……。

(……そうだ。まだ任務が残ってたわね。)

今までなぜ、この程度のことを躊躇っていたのだろうか？

だけでもう、自分を抑えるものは何もない。

アモンから与えられた指令、キュアシャインの正体を暴き、そして……。

「いやだ……やめて、リリンちゃん……。」

懇願する螢の目の前で、リリンは左手を横に伸ばす。

「リリン……やめなさい!!」

それが何を意味するのか悟ったのか、千歳と要が止めに入ろうとする。

だけでもう、遅かった。

「ターンオーバー、希望から絶望へ。」

リリンはリリスへと姿を変えて、闇の牢獄を展開する。

その直後、螢の周囲から感じられた絶望の闇が、より強い力となって周囲に解き放た

れていった。

：

蛍の目の前でリリンが、リリスへと姿を変えた。

それはずつと、心のどこかで引つ掛かっていたことだった。

ただどそんなはずはないと信じていれば、あり得ないことだと目を背けていれば、ずつと変わらぬ日々を送ることができると思っていた。

でも、そんな甘い幻想は許されなかった。

リリンから与えられた幸せな時間が、思い出が、リリンからもらった小さな勇気で積み重ねてきた蛍の世界が、目の前に突き付けられた残酷な現実によつて、全て手のひらから零れ落ちていく。

それと同時に、蛍の頭の中に聞こえる声が、より大きな声となつて脳内を支配していく。

ほら！わたしが信じてあげられなかったから、こんなことになったのよ！！
わたしがリリンちゃんを裏切った！わたしのせいでこうなったのよ！！

「いや……。」

リリンちゃんはずっとわたしを恨んできた！！
わたしが信じてあげられなかったからよ！！

そう、リリンがリリスだったと言うことは、自分はずっとリリンに恨まれてきたことになる。

頭の中に響き渡る声が、蛍に残酷な現実を次々と突き付けていく。

「いやだ……。」

小声で呟く言葉は、周囲に渦巻く黒い霧によって遮られていく。

「蛍！！」

千歳が蛍に近づこうとするが、蛍の纏う黒い霧によって弾かれる。

蛍を纏う黒い霧は、徐々に蛍を周囲から閉ざしていった。

「ほたる。」

そんな中でも、リリンの声だけははつきりと聞こえてきた。

リリスの姿で、リリンと変わらぬ口調で蛍に話しかけてくる。

だけどそれは、身も心も闇に染まり始めている蛍に追い打ちをかけていく。

「やだ……。」

「あたしがリリンとしてあなたに近づいたのは、あなたからプリキュアの情報を引き出すため。」

あなたに教えた勇気のおまじないも、ただのデタラメよ。」

「やめて……。」

支えとなっていたおまじないを否定された蛍は、涙ながらに懇願する。

だがリリスは動じずに言葉を続ける。

そして……。

「リリンは最初から、あなたのトモダチなんかじゃなかったのよ。」

わたしは最初から、リリンちゃんとトモダチなんかじゃなかったのよ。

リリースの言葉が、自分の声が、最後の支えになつていた想いを奪つていく。
「いやああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

友達も、思い出も、勇気も、全てを失つた蛍は、喉が裂けるほどの叫びをあげる。
そして蛍の意識は、暗い闇の中へと堕ちていった。

なんでわたしにこんな酷いことをするの？

なんでこんな辛い目に合わなきやいけないの？

なんでわたしばかりが不幸な目にあうの・・・？

頭の中に聞こえてくる、自分の声に身を委ねながら。

みんなキライだ。キライだ。キライだ。キライだ。キライだ。キライだ。キライだ。大キライだ。

やがて蛍の心は冷たく凍てつき、絶望が憎しみへと変わっていく。

みんな、キライだ。ダイキライだ。ワタシノキライナモノゼンブ。

自分から幸せを奪った全てを呪いながら……。

ゼンブ、コワレチャエ。

蛍の幸せは終わりを告げるのだった。

∴

リリースを止めようとしても、蛍を助けようとしても、蛍から放たれている絶望の闇に遮られてしまい、千歳はただ、蛍が泣き叫びながら絶望していく様子を見ていることしか出来なかつた。

そして蛍の周囲から、これまで以上に膨大な絶望の闇が解き放たれた。

「きゃああつ!!」

「うわああつ!」

蛍の近くにいた千歳と要は、その余波を受けて吹き飛ばされてしまう。

「くっ……プリキュア!」

「ホープ・イン・マイハート!!」

千歳と要は吹き飛ばされながらもなんとか変身し、再び蛍の元へと駆け寄る。

「プリキュア!ホープ・イン・マイハート!」

雛子も遅れて変身し、バリアを展開して妖精たちを守っていた。

だが蛍から解き放たれた絶望の闇は、一瞬の内に天まで届き、夢ノ宮市全土に渡って急速に広がり始める。

蛍1人から、街1つを飲みこみかねないほどの膨大な絶望の闇が絶え間なく生み出され、その勢いは尚も留まろうとはしなかった。

「なに……この力……?」

リリスが唾然とした様子で、蛍から生み出される絶望の闇を凝視する。

蛍を絶望させた張本人でさえ、これほどの力は予期していなかったようだ。

だが我に返ったリリスは、1枚の黒いカードを取り出して蛍に向けて掲げる。

「常闇に囚われし暗き心よ。深淵の牢獄に泡沫の如く集いて、全ての光を奪う力を顕現せよ!」

ダークネスが行動隊長、リリスの名の下に、その力を示せ!デイスペアー・カード!」

そしてリリスの詠唱とともに、黒いカードは蛭を纏う闇を吸い上げていく。

この期に及んでリリスは、蛭の負の心さえも利用するつもりなのだ。

だが止めようにも、蛭を覆う絶望の闇が強力過ぎて近寄ることすらできない。

「蛭ちゃん!! 蛭ちゃん!!」

キュアプリズムが蛭の名前を呼びながら無理やりにも駆けつけようとするが、キュアスパークが片手でそれを制止する。

蛭を覆う絶望の闇は、まるで暴風雨のように荒れ狂っている。

近寄ることさえできないのに、あの中に無理やり駆け込んだらどうなるのか想像もできない。

だけど闇の暴風雨の中で、蛭は泣き続けていた。

姿は見えないのに、声だけは聞こえる。

辛く、悲しく、今にも裂けてしまいそうな声が絶え間なく聞こえてくる。

それだけでも胸が潰される思いだった。

そして蛭が今苦しんでいるのに、何もできない自分が不甲斐なくてどうしようもなかった。

やがてリリスのかざしたカードが蛭の絶望の闇を吸い尽くしたようだ。

蛭を囲む暴風雨は収まり叫び声も止んだが、蛭はその場に倒れ伏した。

「蛍ちゃん!!」

キュアプリズムが急いで駆けつけ、倒れる蛍の身体を揺さぶる。

だけどその体は既に色を失い、絶望の闇は勢いこそ収まれど、依然と身体中から発しているままだった。

「蛍ちゃん! しっかりして!!」

キュアプリズムが蛍の身体を抱きかかえようとして持ち上げる。その時、

ダラリと、蛍の両手は力なく宙をぶらついた。

グニヤリと、蛍の首が力なく仰向けに垂れた。

「蛍……ちゃん……?」

まるで糸の切れた操り人形のように、蛍は力なく抱え上げられた。

キュアプリズムが首を抱えて顔を覗きこむが、蛍の瞳は生気を失っており、焦点を合わせることなく虚空を見ていた。

ただ目に浮かぶ一筋の涙だけが、今も頬を伝いながら。

「あ……ああつ……」

キュアプリズムが悲痛に顔を歪ませる。

「あああああああああつ!! 蛍ちゃん!! 蛍ちゃん!!」

いつも明るくて、笑顔で、みんなに愛されていた蛍からかけ離れた凄惨な姿に、キュ

アプリズムが泣きながら、蛍の身体を強く抱きしめた。

それでも蛍は動かず、ただ目に涙を流しながら虚空を見つめているだけだった。

「・・・リリス!!」

その光景を目の当たりにした千歳にかつてないほどの怒りと憎しみが湧き上がる。

それは蛍を傷つけたリリスに対しての憎しみであり、同時に自分の不甲斐なさへの怒りでもあった。

蛍のためと思って事態を遅らせた結果、最悪な結末を迎えてしまった。

怒りに身を委ねた千歳は、リリスへと挑みかかる。

だがリリスが左手に持つ黒いカードを目の前に掲げた直後、カードから強大な力が放たれ、千歳は成す術もなく吹き飛ばされた。

「きゃああつ!」

「千歳!!」

キュアスパークが吹き飛ばされた千歳を受け止める。

だが態勢を取り直して再びリリスに挑もうとした矢先、リリスの持つカードが宙を浮き、黒い光を放ち始めた。

「何・・・あれ?」

キュアスパークが驚愕しながら黒い光を放つカードを凝視する。

するとカードから放たれた黒い光が、人の影を照らし始めた。

その人影は黒いカードを飲みこみ、少しずつ明確な人の形を成していく。

やがて黒い光が収まると、そこには少女の姿は宙を浮いていた。

「え．．．？」

だがその姿を見たとき、自分も、キュアスパークも言葉を失った。

黒いカードが形を成したそれは、「キュアシャイン」の姿そのものだった。

：

リリスの目の前でデイスパー・カードが、キュアシャインへと姿を変えた。

だが外見こそキュアシャインと同じだが、全身は黒く染まっており双眸は赤く光っている。

その容姿はむしろソルダークに近いもので、感じられる力も絶望の闇だった。

黒いシャイン、『ダークシャイン』と言う名がリリスの脳裏に浮かび上がる。

リリスはこれがアモンの話していたソルダークを超えた兵士、『ネオ・ソルダーク』か

と思つたが、それだと話が異なってくる。

アモンの言葉通りならネオ・ソルダークとは、デイスペアー・カードの力を与えられて強化されたソルダークのこのはずだ。

だがこのダークシャインは、デイスペアー・カードが直接形を変えたものだ。

そして何よりもダークシャインからは、ソルダークとはまた異質な雰囲気を感じられた。

「キヤアアアアアアアアアアアア!!」

ダークシャインが着地と同時に、ソルダークのような叫び声をあげる。

だがその声は、ソルダークの発する獣のような咆哮ではない。

その声は、紛れもなく蛍の声だった。蛍の声で、まるで泣いているかのようなだった。

「・・・もしかして、ほたる? ほたるなの?」

リリースが不思議そうにダークシャインに話しかける。

もしもカードに封印した蛍の絶望が、闇の心がそのまま具現化したものがこのダークシャインだとしたら、彼女は蛍の心そのものと言うことになる。

「ダークネスが・・・これ以上蛍を利用するなああああ!!」

するとキュアブレイズが、かつてないほどの怒りを爆発させてこちらに飛び掛かって来た。

この子がキュアシャインの姿を模っていることが、やつの逆鱗に触れたのだろう。炎を纏わせた拳をダークシャインめがけて振りかざす。

だがダークシャインは、キュアブレイズの拳を事もなく片手で受け止めたのだ。

そして全身から闇の波動を放ち、キュアブレイズを一撃で吹き飛ばす。

「くっ、はああああっ!!」

だがキュアブレイズは吹き飛ばされながらも両足から炎を噴射し、態勢を立て直す。

そしてダークシャインにめがけて幾つのも火球を放つが、彼女はそれを片手を薙ぐだけで打ち消していった。

続けてキュアブレイズが炎のヴェールを生み出し鞭のように薙ぎ払うが、ダークシャインは攻撃をかわした後、キュアブレイズにめがけて跳躍する。

互いに拳を振り空中でぶつかり合うが、力はダークシャインが凌駕しており、力負けたキュアブレイズは勢いよく地面に叩きつけられた。

「千歳!!」

キュアスパークがキュアブレイズの元へと駆け寄ろうとする。

だが次の瞬間、ダークシャインは一瞬でキュアスパークの目の前まで距離を詰めた。

驚くキュアスパークは後退しようとするが、ダークシャインの攻撃が間に合っとう。う。

間一髪のところ腕を交差し、咄嗟のガードが間に合ったキュアスパークは、殴り飛ばされながらも態勢を立て直してダークシャインへ挑みかかろうとする。

だが突然、キュアスパークの視界からダークシャインが姿を消した。

そして一瞬で、キュアスパークの背後へと回り込んだのだ。

「なにっ!？」

再び意表を突かれたキュアスパークは距離を開けようと跳躍するが、ダークシャインはその更に先へと回り込む。

プリキュアの中で一番の速度を誇るキュアスパークを容易く先回りしているのだ。

「嘘やろ。ウチより速く・・・。」

言葉を言い終わる前に、ダークシャインはキュアスパークを蹴り飛ばす。

「要！2人で挟み撃ちにするよ！」

「あつ、ああ！」

それでも尚、闘志を絶やさないキュアブレイズとキュアスパークは、互いに炎と雷を纏ってダークシャインへと突撃する。

だがダークシャインは、キュアブレイズの打撃をかわし、続けて飛び掛かるキュアスパークの突進を片手で抑え、キュアブレイズから放たれた火球をもう片手で払い落とし、キュアスパークが拳に電撃を発するのを見てから、宙へと投げ飛ばした。

続いて宙に放り投げられたキュアスパークが放った雷撃と、炎を纏ったキュアブレイズの突撃が同時に襲い来るも、ダークシャインは立ち位置を僅かにずらすだけで上空から来る雷撃をかわし、こちらに向かうキュアブレイズを炎ごと蹴り飛ばした。

そしてキュアスパークが反応できない速度で跳躍し、瞬時にキュアスパークの頭上を取って再び地面へと蹴り落とす。

「うふふ、あはははははははっ。」

その光景をずっと見ていたリリスは、妙な笑い声をあげ始めた。

ダークシャインは、蛍の絶望から生まれた存在。

蛍の絶望から成る力が、4人のプリキュアの中でも特に戦闘力に優れている2人を、一方的に手玉に取っている。

希望の戦士たるプリキュアたちが、同じプリキュアの絶望に手玉に取られるのが滑稽で、蛍の絶望の闇が、想像を遥かに上回るほどに強大で、そして何よりも……。

「すごい……すごいわ、ほたる！」

あなたの絶望が！あたしをまもってくれ！

あなたの絶望が！あたしの力になってくれてるのよ！」

自分はおの子に一切命令をしていないのだ。

それなのにおの子は、まるで自分のことを守るかのように、キュアブレイズとキュア

スパークと戦っている。

圧倒的な力で、2人を蹂躪しているのだ。

「あははっ!!あはははははははははっ!!ねえ、ほたる!!ほたる!!」

蛍に裏切られ、蛍を裏切り、そして蛍の絶望によつて守られる身となつたりリスは、蛍の名を呼びながら狂つたように笑い続けた。

それが悲しみからか、嬉しさからか、滑稽さからか、それとも他の何かから来るのか。心がぐちゃぐちゃになつてしまつたりリスには、もう何もわからなくなつていた。

∴

要は傷ついた身体を引きずりながらも、痛みを堪えて立ち上がる。

目の前には正気を失い笑い続けるリリスと、そんな彼女を守るように一歩前に立つ黒いキュアシャインの姿があつた。

(蛍・・・。)

要は悲しさで唇を噛みしめる。

あの黒いキュアシャインは間違いない、蛍の絶望の闇から生み出されたものだ。

そして自分の力も速度も敵わず、キュアブレイズの技も全て叩き伏せられているほどの強さを誇っており、かつ底が知れない。

仮に雛子が、キュアプリズムが援護に入ったとしても、勝てる可能性は低いだろう。はつきり言つて、異常な強さだ。

フェアリーキングダムで巨人化したアンドラスと戦つたことを思い出しても、あれと同等かそれ以上のプレッシャーを感じられる。

だけどそれは、今の蛍の絶望が、それほど強大な力を持つ闇の戦士を創り出してしまふほど、深く暗いものであることを物語っているのだ。

こうなつたのも全て、こちらの考えが甘かつたせいだ。

もし蛍に隠そうとせず最初から話していれば、せめて蛍とちゃんと話し合った上で、リリンとどう接するかを決めていれば……。

「これ以上……蛍の名前を口にするなああ!!」

そんな状況でも尚、キュアブレイズはリリスへの憎しみを滾らせる。

要も悲観に暮れる感情を払い、キュアブレイズの横に並ぶ。

そうだ。今は悲しんでいる暇なんてない。蛍の方がよっぽど辛く、悲しい状況にいるのだ。

蛍を闇の牢獄から助け出す。

それが今の自分にできるせめてもの償いだ。

目の前にいる黒いキュアシャインは、蛍の絶望の闇から生まれたものであるなら、本質はソルダークと同じはず。

浄化させることができれば、蛍の絶望の闇を少しでも祓うことができるかもしれない。

そうでなくても、あれだけの力を持つ黒いキュアシャインを野放しにしておくわけにはいかない。

このままでは彼女一人のために、この世界を失うことになりかねないのだ。

「千歳！ タイミングを合わせて攻撃するよ！」

「ええっ！」

リリースへの怒りを抑えきれなくとも、キュアブレイズは我を忘れていない。

あるいは、冷静であるように努めているのかもしれない。

蛍を助けるために、蛍を助けたいと言う思いだけは忘れてはいないのだろう。

キュアブレイズの思いを無駄にしないためにも、このコンビネーションで全てを決める。

「光よ、弾けろ！ ブレイズタクト！」

「光よ、走れ！スパークバトン！」

黒いキュアシャインの力は絶大だ。

まともに戦ったところでこちらの力では敵わないだろう。

それならば、自分たちの思いと力を全てこの一撃に込める。

全力の浄化技による同時攻撃。

これならば、ほんの一時だけでもあの子の力を上回る可能性がある。

「プリキュア！ブレイズフレアー・コンチエルト！！」

「プリキュア！スパークリング・プラスター！！」

キュアブレイズが火球を次々と放ちながら、自らも炎を纏って突撃する。

それに合わせて自分も雷を全身に纏い突撃する。

初めての同時攻撃なのにタイミングはドンピシャだ。

この一撃に全てを賭けるしかない。

「キュアアアアアアアアアアアア！！」

だが黒いキュアシャインが突然、大声で叫び出した。

その叫び声に乗り、膨大な絶望の闇が嵐のように要たちに襲い掛かる。

そして次の瞬間、要の纏う雷が、キュアブレイズの纏う炎が、跡形もなく消し飛ぶのだった。

「え．．．？」

「ウチらの浄化技が．．．？」

そのまま絶望の闇の奔流に飲み込まれ、要たちは元いた地点まで吹き飛ばされる。

黒いキュアシャインが叫んだと同時に浄化技が打ち消され、無効化された。

何が起こったのか全く理解できなかつたが、要とキュアブレイズの目の前でさらに信じられない出来事が起こる。

黒いキュアシャインが、前方の空間に絶望の闇を集中させているのだ。

そして次の瞬間、小さな杖が彼女の目の前に現れる。

その形はまるでシャインロッドのそれに酷似しており．．．

「まさか、」

要の脳裏に嫌な予感が過つた次の瞬間、杖から巨大な黒い光線が解き放たれる。

「蛍の、浄化技．．．。」

隣に並ぶキュアブレイズが静かにそう呟いた次の瞬間、要の視界は黒い闇に覆われていった。

：

「千歳ちゃん！かなめえええ!!」

蛍の身体を抱きかかえながら、雛子は2人の名前を叫ぶ。

黒いキュアシャインの放った闇の光線が、2人の姿を完全に飲みこんでいった。

やがて光線が収まると、そこには変身が解除され、身動き取れずに横たわる要と千歳の姿があつた。

「そんな・・・ウソよ・・・。」

まるで悪夢でも見ているかのような気分だった。

ホープライトプリキュアの中でも特に戦闘に長けている2人が、黒いキュアシャインを前に手も足も出ずに敗北した。

それだけでも絶望的な力の差を見せつけられたのだが、雛子が感じたのはそれだけではなかった。

だが考える間もなく、黒いキュアシャインがこちらの方へと視線を向ける。

「さあ、あとはキュアプリズムだけよ。ほたる。」

リリスが話しかけた後、黒いキュアシャインがこちらへと飛び掛かって来た。

背後には妖精たちもいる。バリアで守られているが、雛子の脳裏に1つ嫌な予感が過

る。

かつて蛍は、フェアリーキングダムを一人で照らすほどの強大な希望の光を解き放つたことがあった。

その蛍から生み出された黒いキュアシャインが、たった一人で夢ノ宮市全てを絶望の闇で飲みこもうとしている。

「みんな！逃げて！！」

雛子は反射的に妖精たちに逃げるよう促し、せめてもの抵抗のために、さらに盾を展開する。

だが黒いキュアシャインの拳が盾に触れた次の瞬間、雛子の盾はガラスのように砕け散った。

「きゃあああつ！！」

アンドラスの攻撃さえも防ぎ切ったことのある雛子の盾が、たったの一撃で破壊された。

それだけに留まらず、盾を砕いた余波だけで妖精たちを守っていたバリアをも破壊した。

幸いにも距離を取っていた妖精たちにも、自分が抱えている蛍にもケガはなかったが、今の一撃で雛子は確信する。

黒いキュアシャインの力は、蛍の持つ力が全て反転させたものに間違いない。

つまり、蛍が秘めていた潜在的な希望の光が、全て絶望の闇に変わっているのだ。それだけでなく蛍の持つ特性さえも反転している。

黒いキュアシャインの絶望の闇は、プリキュアの希望の光を打ち消す力が秘められているのだ。

だからキュアスパークとキュアブレイズの浄化技も、自分の盾も、ダークシャインの前では容易く無力化されたのだ。

「みんな……のままでは危険よ！一先ずこの場を離れましょう！」
するとリン子が全員に撤退を呼びかけてきた。

その言葉と同時にベルが、倒れる要と千歳の元へと走り出し、リン子もその後を追う。彼女の言葉通り、今は逃げるしかない。

黒いキュアシャインと戦っても、勝ち目なんてどこにもない。

キュアシャインがダークネスの天敵であったように、あの子は自分たちプリキュアの天敵なのだ。

「レミン！しっかりしなさい！」

サクラが、ショックのあまり安心してしまったレミンを揺さぶっている。

だがレミンは呆然としたまま動こうとせず、やむを得ずサクラは彼女を抱きかかえ

る。

「逃がさないわ。」

だがリリスは、この場での撤退を許してくれるほど優しくはなかった。

その声と共に黒いキュアシャインが、要たちの元まで走るベルとリン子に視線を向ける。

「させないー！」

蛍が絶望し、要と雛子が敗れ、自分の力が一切通用しないことがわかっていても、そのまま絶望するわけにはいかない。

蛍を必ず、絶望から救い出す。

ただそれだけを心の支えにして、雛子は希望の光を生み出し、黒いキュアシャインをバリアの中に閉じこめた。

そしてバリアを意図的に爆発させ、彼女の視界を奪う。

「まだ抵抗するつもりね。」

するとリリスが直接、ベルたちの元へと飛び出して来た。

だが雛子はすかさず、リリスの目の前に盾を展開し進行を防ぐ。

黒いキュアシャインには壊されても、リリス相手なら有効だ。

そしてベルとリン子が要と千歳を抱えたのを合図に、雛子は自分と妖精たちを全員囲

うほどに広域なバリアを展開する。

「ほたる！」

リリスの呼びかけに応え、黒いキュアシャインがバリアの破壊に迫った矢先。

「みんな！目を瞑って!!」

雛子は妖精たちに呼びかけてから、全身から強烈な光を発光させた。

雛子の放った光はバリアの内側を眩しく照らし、リリスたちの視界を奪っていく。

「くっ！」

そしてリリスと黒いキュアシャインが光に目を眩ませたのを確認した後、バリアを自ら爆発させるのだった。

…

バリアの爆発によって起きた粉塵が収まった後、リリスの目の前には誰の姿もなかった。

恐らくは妖精たちの持つ力、転送術を使ってこの場から逃げたのだろう。

だがそれは、やつらはダークシャインの力には敵わないと判断したことになる。それだけでも上々だ。

このダークシャインの力を持つてすれば、キュアシャインを欠いたプリキュアなんて恐れるに足りない。

それに例えやつらが力を隠そうとも、居所を見つけるのは容易いはずだ。

なぜならキュアプリズムが抱えている蛭は、今も際限なく絶望の闇を生み出し続けているのだ。

(・・・見つけたわ。)

案の定、遠方からダークシャインと同じ力が感じられた。

キュアスパークとキュアブレイズは戦闘不能、そして蛭を抱えるキュアプリズムも、相当な力を消耗しているはず。

今から追つて追撃すれば、やつらとの因縁に決着をつけることができる。

だがそう思った次の瞬間。

「ウツ・・・アアアツ・・・。」

「ほたる、どうしたの?」

突然ダークシャインが微かな呻き声をあげだした。

少し苦しそうに頭を抱えると同時に、その身体が霞み始めている。

聞こえるかね、リリス。

すると頭の中にアモンの声が聞こえてきた。

(はい、アモン様。)

そちらの状況はある程度把握している。深追いは無用だ。
一度ここまで戻ってきなさい。

(ですが、あと一息でプリキュアが……。)

デイスペアー・カードの化身がいるのだろうか？

まだ力が安定していないようだ。

このまま無理に酷使すれば、存在すら保てなくなるかもしれないぞ。

(……了解しました。)

逸る気持ちを抑えながら、リリースはアモンの指示に従う。

このダークシャインは、間違いなくダークネスの切り札だ。

今焦って失うわけにはいかない。

それにキュアシャインを失った今、やつらとの決着はついたも同然だ。

その意味が成すことに、リリースは少しだけ胸を痛めながら、ダークシャインの方を向く。

「ほたる、帰るわよ。」

「……。」

ダークシャインは何も言わない。

だが自分の言葉に従い、共にモノクロの世界へと帰還するのだった。

：

要が目を覚ますと、ベルが自分の顔を覗きこんでいた。

「気が付いたか、要。」

「ベル……?」

辺りを見回すと、どうやら住宅街の一角にいるようだ。

目の前にはこちら覗きこむベルの顔、ついでに言えば今、自分はベルに抱えられた状態で見たいだ。

いつもなら少し気恥ずかしく思うシチュエーションかもしれないが、残念ながら今は心を躍らせるほどの余裕はなかった。

すぐさまここに至った状況を把握し、ベルの腕から下りようとする。

「まだ無理しなくてもいいぞ。」

「平気、もう大丈夫だよ。」

「要、気が付いたのね。」

ややよろめきながらも立ち上がった要に、未だ変身を解かずにいる雛子が話しかけてきた。

その隣にはサクラの姿もある。

「良かったわ、あなたも無事みたいで。」

リン子に肩こそ借りているが、千歳も無事な姿を見せてくれた。

「それはお互いさまやろ、千歳。」

その後ろには空を見上げるレミンの姿もある。

そして雛子の両手には、未だに起きる気配のない蛍の姿もあった。

一応のところ、全員無事。

だがそれを喜べるほど、今の事態は楽観視できるものではなかった。

要も千歳も、黒いキュアシャインに成す術もなく敗北した。

雛子に大きなケガは見られないので、交戦を避けながらみんなを連れて撤退したの
ろ。

その事に感謝しながらも、黒いキュアシャインを倒せないと言うことは、蛍を助け出すこともできないと言うことになる。

今も蛍の身体は黒い霧に覆われており、気を失った瞳は虚空を覗きこんでいるのに、自分たちには彼女を助ける術を持たないのだ。

「蛍……。」

要が蛍に触れようと手を伸ばしたその時、

「待って！要！」

雛子が大声で静止にかかった。

だが要は伸ばした手を引くことができず蛍に触れてしまう。

どうしてわたしにウソをついたの？

どうしてみんなわたしにだまってたの？

どうして？なんで？

リリンちゃん、かなめちゃん、ひなこちゃん、ちとせちゃん。

みんなきらいだ、きらい、きらい、だいきらいだ！

「つ！つ！うわあああつ！！」

突然頭の中に、蛍の声が流れ込んできた。

リリンに裏切られ、騙され、そして、自分たちにさえ裏切られた、蛍の声。

嘆き苦しむ絶望の聲が、激流のように頭に流れ込んでくる。

それに堪えきれなくなった要は、慌てて蛍から手を離す。

だがそれでも、頭の中に聞こえてきた蛍の聲が、まるで張り付いたかのように離れなかった。

「絶望の闇はね、触れた人を通じて声が聞こえてくるの……」

だからみんな、今の蛍ちゃんに触れたらダメ……」

苦し気な表情を見せながら、雛子がそう説明する。

妖精たちと千歳はその言葉を聞いても特に驚いた様子はなく、代わりに蛍を思つて辛そうな表情を浮かべるだけだった。

きつとフェアリーキングダムにいたときに似たような経験をしたことがあるのだから。

「でも雛子、あんたは大丈夫なん？」

大丈夫じゃない、なんて見れば分かるのに、要は敢えて質問にする。

いつも無邪気な笑顔で、表裏のない純な心で、自分たちと一緒にいてくれた蛍のことが大好きだっただけに、そんな蛍の絶望の声は、心が裂けるほどの辛い言葉だった。

蛍はリリンのことだけじゃない、黙って行動を起こそうとした自分たちのことさえも恨んでいる。

蛍に嫌われるほどの辛い思いを与えてしまったこと、それがこちらの招いた結果とわかっていても、蛍から『きらいだ』と言う本心の言葉を聞かされたことがショックだった。

「何を言ってるの……？一番辛いのは蛍ちゃんなんだよ？」

これくらい……へっちゃら……だよ……。」

だけど雛子は、そんな辛い思いさえも無理やり抑え込み、蛍を助けるためだけに全てを受け止めようとしているのだ。

もしも自分が蛍の声を聞き続けたら、ショックと罪悪感で間違いなく絶望の闇に引きずり込まれていただろう。

誰よりも蛍を大事に思う雛子だからこそ、耐え続けることができている。

それでもキュアプリズムの変身を解除しないのは、絶望の闇の影響を少しでも緩和するためなのかもしれない。

「雛子……。」

「一先ず、私のマンションに避難しましょう。」

ダークネスがいつ追ってくるかもわからないし、幸いにもここからなら近いわ。」

リン子の提案に要と千歳は頷く。

雛子のためにも、蛍をどこか安全なところに降ろしてあげたい。

「……せやな、一度安全なところで休んで、これからどうするか考えよう。」

そう思い、要たちが移動しようとしたその時、

「……ねえ、ダークネスの気配って、もうしないよね。」

突然レミンがそんなことを聞いてきたのだ。

「レミン、どうしたの?」

「もう、リリスの気配も、黒い蛍の気配もないよね?」

「なのに……なんで、空が黒いままなの……?」

「えっ……?」

サクラがその言葉に驚き、空を見上げる。

要たちもつられて上を見上げると、レミンの言った通り、空が絶望の闇に覆われたままだった。

それだけじゃない。

先ほど辺りを見回したときから、不審に思うべきだった。

住宅街なのに人の気配が何も感じられない。

「どうして？ ダークネスは既に撤退しているのに、なんで闇の牢獄が解除されていないの？」

サクラが不振に思いながら、疑問を口にする。

リリスたちがこの世界を離れたのに闇の牢獄がまだ解放されていないのだ。

「まさか・・・蛍？」

その時、要の脳裏に嫌な予感が過る。

雛子の手に抱かれる蛍は、未だに絶望の闇から解放されていない。

もしもこの力が、闇の牢獄を維持しているのだとすれば？

そして蛍が絶望の闇を放ち続けていると言うことは、この闇の牢獄の強度は今も・・・。

「おい、要。」

するとベルがこちらを呼びながら指を差した。

要が指の指す方に目を向けてみると、そこには絶望の闇に覆われて横たわる男性の姿

があった。

やがて辺りには、黒い霧に覆われた人が次から次へと姿を現していった。

「そんな……ウチらの街が……。」

蛍の絶望が黒いキュアシャインを生み出し、夢ノ宮市の闇の牢獄を強固なものへと作っていく。

自分が守ると誓ったあの子が……自分が守りたいと願う街を奪っているのだ。

「蛍ちゃん……。」

雛子が苦しそうに蛍の名前を呟く。

それさえもまだ始まりなのではないかと、要は漠然と思うのだった。

：

次回予告

「リリスだけは絶対に許さない。私はあいつを必ず倒す！」

「でも、ウチらの力だけじゃあの黒いキュアシャインには敵わない。」

「どうすれば……。」
「……1つだけ、あるわ。」

蛍ちゃんを助ける方法が、たった1つだけ……。」

次回！ホープライトプリキユア第22話！

届かない想い！蛍の希望とリリスの絶望！

待っててね、蛍ちゃん。必ず助け出して見せるから！！

第22話

第22話・プロローグ

絶望の闇が空を覆い始め、夢ノ宮市の景色から色が失われていく。

そんな中、千歳は要たちと共に自分のアパートに戻るところだった。

帰り道の中、千歳は先ほどの戦いを思い返す。

リリンの正体を知ってしまった蛍が絶望し、その闇から生まれた黒いキュアシャイン。

その力は凄まじく、千歳と要が2人がかりでもまるで歯が立たず、一方的に敗れてしまった。

その後意識を失い、気が付けばリリスたちは姿を眩ましたが、蛍が今も、雛子の腕の中で絶望の闇を生み出し続けている様子を見るに、黒いキュアシャインは健在のようだ。

あいつを倒さなければ蛍は救えないのだろうか？そして自分たちに倒すことが出来るのだろうか？

そんな不安を抱いている内にアパートに着き、そのまま自室へとみんなを案内する。

そして雛子が螢をそつとベッドの上に寝かせた直後、彼女は急に力が抜けたように膝をつく。

「雛子！大丈夫!？」

要とレミンが心配そうに駆け寄り、雛子に手を差し出す。

「平気よ……少し疲れただけ……。」

疲労が滲み出る声色で雛子が返事をする。

彼女は螢が絶望してから、ずつと螢のことを抱えていた。

つまりその間、螢の絶望の声をずつと聞き続けていたことになる。

それが雛子の精神を蝕み、心身ともに疲弊させていたのだろう。

雛子の顔色は見るからに悪く、息も切らしているが、それでも手を差し出してくれた

2人に微笑みながら、その手を取って立ち上がる。

だがそんな雛子の気丈な振る舞いも、この場の重い空気を払い除けるには至らなかつた。

それはこの街が、夢ノ宮市が絶望の闇に覆われてしまったからだではない。

いつも明るく、無邪気な笑顔を見せていた螢が、まるで壊れた人形のように虚ろと横たわっているからだ。

その様子を見たベルは悔しさに拳を握り、リン子は目頭を押さえている。

サクラとレミンは必死に涙を堪え、要と雛子も悲痛に顔を歪めていた。

(リリース……)

こうなったのも全て、あいつのせいだ。

やつが蛍の弱みに付け込んで、トモダチのフリをして利用し、そして最後には絶望させて捨て去った。

あいつさえいなければ、こんなことにはならなかったのだ。

その目的は間違いなく、あの黒いキュアシャインを生み出すためだろう。

トモダチであり恩人でもあるリリンに裏切られたとなれば、蛍が強大な絶望の闇を生み出すと思つたに違いない。

だけどその一方で、心のどこかにまだ引っかけかりを覚えている自分もいる。

本当にそれが真実なのかと、自分は何か重大なことを見逃しては……。

(絶対に……許さない……)

だがそんな一沫の迷いさえも振り切るように、千歳はこれまで以上にリリースへの怒りを燃やすのだった。

第22話・Aパート

届かない思い！蛍の希望とリリスの絶望！

モノクロの世界。

ダークシャインを連れて帰還したりリスが玉座の間を訪れると、アモンが興味深そうな目でダークシャインを見ていた。

「無事キュアシャインを絶望させ、デイスペアー・カードを完成させたようだな。

よくやったリリス。」

「はっ。」

アモンから労いの言葉を受け取るが、リリスには何の感慨も湧いてこない。

「そこにいるキュアシャインの力、この地からも十分に感じられたよ。」

ダンタリアが、少し畏怖を込めた様子でそう語る。

感じ取れたダークシャインの力に怖れを覚えたのだろう。

無理もない。なぜならこの力は、リリスの想像さえも遥かに超えていたからだ。

素の戦闘力だけでもソルダークは勿論、行動隊長さえも凌駕しており、プリキュアの

技をことごとく無力化し、浄化技すら叫び声一つでかき消す能力も備わっているのだ。

もしかしたら、アモンたち司令官クラスさえも上回っているかもしれない。

フェアリーキングダムで見たアンドラスの巨獣形態でさえ、この子ほどの力も能力も見られなかったのだ。

「これが、あなたの言っていたネオ・ソルダークですか？」

一方でサブナックは、純粋にダークシャインの力に興味を示しているようだ。

「いや、違うな。」

「なに？」

アモンの答えはサブナックにとって予想外のものだったようで、彼は眉を潜める。

だがダークシャインを隣で見ているリリスには、その言葉の意味が朧気ながらも理解できた。

彼女は命令されずとも自らの意思でプリキュアたちと戦っていたのだ。

まるで自分を守るように……。

「以前にも話したが、ネオ・ソルダークはソルダークにデイスペアー・カードを与えて強化させた形態のことだ。

そして私の目的はあくまでも、キュアシャインの絶望を利用してデイスペアー・カードを完成させることだった。

これは、想定外の事態だよ。」

「想定外、だったのですか？」

ダンタリアが不思議そうに問いかけ、サブナックも眉を潜めたままだ。

2人ともダークシャインを作りだすことが、アモンの目的だと思っていたようだ。

「そのキュアシャイン……そうだな、仮に『ダークシャイン』とでも呼んでおこうか？
それはキュアシャインの絶望の闇を取り込んだデイスペアー・カードが、そのまま形を成したものだ。

「そうだね？リリース。」

「おっしやる通りです。」

『ダークシャイン』。アモンの仮称は、奇しくもリリースの脳裏を過つたものと同じ名前だった。

名の冠する意味は『闇の光』。

何とも矛盾に満ちたその名前だが、どこかの得得しているとも思えた。

光より生まれた闇が、本来守るべき世界を闇に染めようとしているとは、何とも皮肉な結果だろう。

最もその結果をもたらしたのは、他の誰でもない自分自身だが。

「つまりダークシャインはキュアシャイン、蛭と言う少女の絶望の闇そのものが、デイス

ペアー・カードを媒介として具現化した存在だ。

私はそんな機能をディスプレイ・カードに備えた覚えはない。

だが現実には、カードに吸収した絶望の闇が明確な意思を持ち、その身を媒介として実体化したのだ。

これは思わぬ副産物だよ。嬉しい誤算とも言える。

そしてそんな事態を引き起こすほどに、キュアシャインの絶望は計り知れないものだったと言うことだろう。」

アモンの言葉を聞いたリリスは、これまで蛭と共に過ごした日々を思い出す。

出会った当初、蛭からソルダークを造り出したときならまだしも、今の蛭は自分と一緒にいるとき、常に笑顔を浮かべていた。

いや、自分だけじゃない。千歳を始めとする友達と一緒にいるときの蛭はいつも笑っていた。

そしてそれが、蛭にとっての日常であったはずだ。

一寸の闇も刺す間のないほどに、蛭の世界は眩しいほどに光に満ちていた。

「まさかあの子が、ここまでの絶望を秘めていたなんてね……。」

そんな蛭がこれほど強大な力を持つダークシャインを生み出し、さらにはかの地を闇で覆わんとするほどの絶望を秘めていたなんて、リリスが一番驚いていることだ。

「それは違うよ。リリス。」

「え？」

だがアモンの言葉に、リリスは驚いて顔を上げる。

「キュアシャインがこれほどの絶望の闇を秘めていたわけではない。

彼女の持つ希望の光が、全て絶望の闇に変わったのだよ。」

「希望の光が、絶望の闇に？」

その言葉に疑問符を打ったのはダンタリアだ。

彼だけでなくサブナツクも、そしてリリスも、その意味を測りかねずにいる。

「希望の光と絶望の闇は、常に表裏一体なものだ。

希望の光が強まれば強まるほど、その希望を失ったときの絶望が大きくなる。

そしてキュアシャインはかつて、フェアリーキングダムと言う世界に満ちた絶望の闇

を、たった一人で祓うほどの希望の光を発現したことがある。

だがそれは裏を返せば、彼女はたった一人で世界を覆うほどの強大な絶望の闇を生み

出すこともできると言うことになるのだ。」

言われてみればダークシャインの力は、蛍が絶望の闇を消したときの力に酷似してい

る。

ダークシャインには、蛍の浄化の特性を反転させた能力が備わっていると見ていいだ

ろう。

底の知れない強大な力も、相反する力を打ち消す特性も、全て蛍の希望の光が絶望の闇へと変わったと考えれば納得がいく話だ。

「だからアモン様は、リリスにあのような命令を？」

ダントリアがアモンに問いかける。あのような命令、と言うのは、キュアシャインの正体を暴き絶望させることを指しているのだろう。

「その通りだ。だが希望の光の大きさは、そのまま個人の意志の強さに直結する。

それほどまでに大きな希望であれば、その意思を壊し、奪うことは容易くはない。だからこそ君が適任だったのだ。リリス。

キュアシャインと親交を深め、彼女から信頼を得ている君がね。」

アモンの言葉にリリスは俯く。

そう、自分は蛍の持つ強大な希望を容易く奪うことができた。

その希望を与えたのは、蛍の希望の光を大きく育てたのはきつと……。

そしてそれを奪い、プリキュアを容易く退けるほどの絶望の闇を生み出したのも……。

そう思った時、胸に鋭い痛みが走った。

自分は蛍の気持ちも、ことごとく弄び踏み躪って行ったのだから……。

「リリス、本当によくやってくれた。」

君が3か月にも渡って演じ続けてきた『トモダチ』は、最高の結果をもたらしてくれたよ。」

アモンが賛辞を重ねるが、その度にリリスの心に重りがのしかかる。

リリスはその、3カ月の中で得て来たものを全て、捨て去ってここにいるのだ。

その結果得ることができたのが、螢の絶望から生まれた戦士、ダークシャイン。

このダークシャインの力を以ってすれば、世界を絶望の闇に沈めるなんて容易いことだ。

自分は行動隊長として、最高の成果を上げたと言っても過言ではない。

それにも関わらず、リリスの心は晴れないままだった。

濁り切った思いが胸中を渦巻き、柄も言えぬ不快感と虚脱感に苛まれている。

無関心や無感動だったらまだどれほど良かったことか。

「先の戦いで疲れただろう。君は少し休むといい。

ダークシャインもまだ形を成して間がない。

存在を安定させるには少し時間が必要のようだ。」

「……了解しました。」

これ以上この場に留まると余計に気を害してしまいそうだ。

リリスはこの場から逃れるように、急いで離れようとする。

「ああ、リリース。

最後に1つだけ言い忘れたことがあった。」

そんなリリースを、アモンは急ぐ様子で呼び止めた。

「なんですか？」

「希望と絶望の因果を、今一度良く考えてみなさい。」

「え……？」

だが急いだ様子で呼び止めた割には、その言葉は以前自分にかけてたものと同じだった。

そればかりではない。先ほどアモン自身がその答えを述べたはずだ。

希望と絶望は表裏一体。どちらかが強まればもう片方も強まると。

それが希望と絶望の因果を意味することではなかったのか？

「それは、どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味だよ。」

希望と絶望の因果を、改めて考え直してみると良い。

君自身を『守る』ためにね。」

『守る』？」

守るため？余計に意味がわからなくなってきた。

なぜ希望と絶望の因果を知ることが自分を守ることに繋がるのだ？
そもそも、守るとはどういうことだ？

「それから、そのダークシャインはソルダークではない。
扱いはくれぐれも気を付けるのだよ。」

さらに言葉を重ねるアモンだが、それがリリスに更なる混乱を招く。

確かにダークシャインはソルダークではない。

デイスペアー・カードの創造者であるアモンでさえ、誕生を予期していなかったイレ
ギュラーな存在だ。

だがその言い方では、まるでダークシャインが自分に危害を加える可能性があると言っているようなものだ。

でも彼女は今、こちらの命にちゃんと従っている。

それに先ほどの戦いでは、まるで自分を守るためにプリキュアと交戦していたのだ。
ダークシャインが、『ほたる』が、自分に危害を加えようとするなんて考えられない。

「・・・了解しました。」

だがわざわざアモンから忠告してきたのだから、全くの無意味と言うわけでもないだろう。

リリスは忠告を頭の片隅に受け止め、この場を後にするのだった。

：

重苦しい空気の中、要たちは千歳の部屋で沈黙を続けていた。

2重、3重にシヨックな出来事が続き、今もただ、絶望の闇を放ち続ける蛍を見守ることしかできない状況にみんな疲弊してしまっている。

もしも次のリリスたちの襲撃を許してしまった場合、果たして無事に助かることができるのだろうか？

きつと、無理だと思う。

そう思うほどにダークシャインの力は、こちらの力を遥かに凌駕している。

そんな不安に駆られる中、結局待つことも動くこともできず、ここに着いてからずっとこんな空気が続いていた。

夢ノ宮市が絶望の闇に覆われている今、周囲の時間は停止しているので、実際にはこの時間は1秒にも満たないはずだが、それでもどれくらい時間が経っただろうかと、ふと思ってしまうほどだった。

すると、この部屋に来てからずっと座り込んでいた雛子が、そんな沈黙を破るように立ち上がった。

「雛子、もう大丈夫なん？」

「ええ、いつまでも疲れているわけにはいかないし、これからどうするかを考えないと。」

先ほどよりは幾分か顔色が良くなり、呼吸も整っている様子だ。

だが雛子は要や千歳と違い、まだキュアプリズムの姿を維持している。

きつとまだ、その姿でやるべきことがあると考えているのだろう。

「でも……今のウチらにできることって何なんやろうな？」

要は心中の不安を吐露する。

ダークシャインと戦ったところで敵う術はない。

それならば戦わずにして蜚を助ける方法はないかと考えたが、かつて千歳がフェアリーキングダムの人を救ったときのように、絶望した人と直接話すことで闇の牢獄から解放する手段は、恐らく危険だ。

要が蜚に触れたとき、彼女の絶望を少しだけ感じ取ったが、あの時一瞬で心臓が凍え、一切の温もりを奪われていくような、そんな冷たい感覚に囚われた。

そして蜚の怨嗟の声が、雪崩のように押し寄せ頭の中を一瞬にして埋め尽くしていった。

蛍を守ることができず、傷つけてしまったことを悔やんでいる今の自分が、大切な友達で、守ってあげたいと思っていた蛍からそんな怨嗟の声を聞き続けたら、きつと心が壊れてしまうだろう。

ダークシャインの力に及ばない自分には、彼女を倒すことができない。蛍を救えなかったことを悔やむ自分には、彼女を助けることも出来ない。

何もできない歯がゆさが、要の心を強く縛り始めていた。

「……出来ることならあるわ。リリスを倒す。」

すると千歳が、怒りを灯した鋭い眼でこちらを見据えながら、静かに答えた。

「千歳？」

千歳の様子に、リン子が心配そうに声をかける。

「あいつと、あいつと一緒にいる黒いシャインを倒せば、蛍の絶望の闇を少しでも抑えることができるかもしれない。」

あくまでも落ち着いた様子で千歳は話すが、言葉の端々からリリスへの憎しみを隠し切れないのが見て取れた。

「だから、リリスを倒しましょう。」

元々、もつと早くにあいつを倒していれば、こんなことには……。」

「待って、千歳ちゃん。」

そんな千歳の言葉を雛子が遮る。

「何？雛子？」

千歳が鋭く雛子を睨み付けるが、雛子もその視線に怯むことなく、語気を強くして千歳に問いかけた。

「リリスを倒せば全てが解決する。」

本気でそう思ってるの？」

「じゃあ、あなたはリリスを倒すべきじゃないとも言おうの？」

千歳の問いに、雛子は一拍置いて静かに答える。

「……ええ、その通りよ。」

今日のリリス、どこか様子がおかしかった。

蛍ちゃんの言葉を聞いて、とても動揺していた。

心のない人が、そんな態度を取ると思う？

もしかしたらリリスは、本当は蛍ちゃんのこと……。」

雛子の言葉に、千歳が顔を顰めて激昂する。

「つ!?この期に及んでまだあいつをかばうつもりなの!？」

今回でわかったでしょ!あいつは蛍のことを騙して、利用して、その上絶望させたのよ!

そんなことができるなんて、あいつは最初から、蛍のことを友達とも何とも思っていないからに決まってるじゃない！」

そう叫ぶ千歳の様子には、どこか焦りも感じられた。

彼女の決心が揺らいでいる。要はそんな風に見て取れたのだ。

そして言葉を遮られた雛子は、動じることなく千歳に叫び返す。

「これ以上、目を背けないで！」

今リリスを倒してしまつたら、本当に取り返しのつかないことになる!!

それくらい、千歳ちゃんにだつてわかるでしょ!!」

「っ!？」

最後に黙り込んでしまったのは、千歳の方だった。

要はそんな千歳の様子を見て目を伏せる。

そう、千歳だつて頭ではわかっているのだ。

リリスは決して『心を持たないもの』ではないと。

要もこれまで半信半疑だったが、今回の件でそれを確信した。

あの時蛍とリリスの交わした会話を思い返す。

蛍はリリンのことを疑いたくない、リリンは蛍に疑われるわけがないと互いに思つて

おり、それがすれ違った結果が、今の事態を引き起こした。

それはとても悲しいことだが、裏を返せば蛍もリリンも互いに想い合っていたことにならないうか？

「じゃあ……私はどうすればいいのよ……？」

蛍のことを助けたいのに、リリスを倒すことが出来ないなんて……。」

一方で千歳は、失意の様子でそんな弱音を口にした。

リリスを倒して憎しみを晴らしたい。

そんな千歳の思いは、要にだって痛いほどわかる。

蛍を傷つける元凶となったリリスのことが憎いのは要も一緒だ。

きつと雛子も、内心ではリリスのことを恨んでいる。

でもリリスと黒いキュアシャインを倒すことで、蛍に纏わる絶望の闇を弱まる確証はない。

これまではソルダークを浄化し行動隊長が撤退すれば、闇の牢獄が解放され絶望した人を救出することができたが、今は蛍の力で闇の牢獄が維持されている。

そう、フェアリーキングダムの時と同じ現象が、蛍に局地的に発生しているのだ。

それだけ蛍の闇は深く、強固なものとなっている。

だけでももしもリリスに心があれば、そこに希望がある。

「……まだ、私たちにはできることがあるわ。」

雛子がそう切り出し、自分たちに残された希望を話し始めた。

：

モノクロの世界。

古城の広間でリリスはダークシャインとともに休息をとっていた。

リリスはダークシャインの姿を眺めながら、玉座の間での会話を思い返す。

この子の誕生は、デイスペアー・カードを創り出したアモンですら予期していなかったものだ。

だがそれ以外のことは全て、アモンの思惑通りだった。

自分が蛍と接触しトモダチを演じていたことも、キュアシャインの正体に迫っていたことも、全て見抜かれていたからこそ、彼は自分にこの使命を与えたのだ。

結局、こちらの思いなんて全てアモンには筒抜けだったのだ。

そしてアモンは彼の目的のために、そんな自分を体よく利用し、目論見通りにデイスペアー・カードを完成させた。

それは、行動隊長としてはとても名譽なことだろう。

でも蛍への思いを利用されたことを知ったリリスには、ただ不快なものでしかなかった。

同時に虚しさに囚われた。

結局自分は、蛍と一緒にいることなんて出来なかつたと思ひ知らされたから。

「ほたる。」

リリスがダークシャインに呼びかけると、彼女はそれに反応してこちらに目を向けた。

この子は蛍の闇の化身、言つてしまえばもう1人の蛍だ。

行動隊長としての任務を果たして蛍を絶望させた結果、もう1人の蛍とも言えるこの子が手元に残つてくれたのは、せめてもの幸いなのだろうか？

「こつちにきて。」

ダークシャインは特に訝しむ様子も見せず、こちらへ距離を詰め寄つてきた。

素直に言うことを聞くところまで、蛍に似てるのかもしれない。

そんなことを想いながら、リリスは空虚な思いを埋めるように、何も言わずに彼女を抱きしめる。

かつて蛍が何度も自分にそうしたように、ダークシャインを手放さまいと強く抱きし

める。

「・・・冷たい・・・。」

自分には五感がない。だから冷たい、と言う感覚なんてあるはずなのに、リリースはふとそう思ってしまった。

どれほど強く抱きしめても、どれだけダークシャインを近くに感じてても、あの時のような安らぎを得ることはできなかった。

もう、あの安らぎを感じることは2度と出来ないのだ。

もう1人の蛭がこんなに近くににいるのに、蛭とは2度と会えない気がした。そう思った時、最後に見た蛭の虚ろな目が、リリースの脳内に映し出される。

「・・・ちがう。あの子がわるいのよ・・・。」

あの子が、あたしを信じてくれなかったから・・・。」

まるでダークシャインに語り掛けるように、リリースは思うことを口にする。

でも本当にそうなのだろうか？蛭は本当に自分のことを信じていなかったのか？

自分では行動隊長だ。蛭に近づいたのは利用できると思ったからだけだ。最初からあの子のことをトモダチだなんて思っていなかった。

最初からあの子のことは利用価値のある道具としか思っていなかった。

蛭はその真実に近づいただけ。裏切るも何も、全ては本当の事だ。

それなのにリリスは、あの時の蛍の言葉に酷く動揺した。

蛍なら自分のことを盲信してくれると思っていたのに、当てが外れたから？

あの子が簡単に利用できる道具だと思っていたのに、疑い始めたのが気に入らなかつたから？

いや、そのどちらでもない。

「・・・あたしは、ただあの子に・・・。」

その答えは、もうわかっているはずだ。

蛍の正体を知ったときに、蛍に正体を疑われたときに、そして蛍を失ったときに、イヤでも思い知らされた。

だけでもう、全てが終わった後だ。

今更蛍のことを、本当はどう思っていたかなんて、もう意味のないことだ。

そう思うと、ダークシャインから伝わる冷たさが、どこか心地よくさえ思えてきた。
「・・・いっつ、ほたる。」

ダークシャインの力を見たところ安定している。

これならもう一度戦うことができるだろう。

リリスはダークシャインと共にかの地へ向かう準備をする。

蛍と一緒に過ごした思い出を、時間を、そして場所を、何もかも全て消し去るために。

：

「蛭とリリンを、もう一度合わせるですって・・・？」

「ええ、そしてリリンちゃんの本当の気持ちも、蛭ちゃんに伝えるの。」

それがきつと、蛭ちゃんを救い出せる唯一の・・・。」

「いやよ！そんなこと絶対に認めないわ!!」

雛子の話を聞き終えた千歳は、声を荒げて彼女の言葉を否定する。

いくら蛭を助けるためだとしても、その提案だけは受け入れるわけにはいかなかった。

「千歳ちゃん・・・。」

雛子が少し哀れむような目で千歳を見る。

分かつている。自分にだって本当は分かっている。

蛭が絶望した時はあまりのショックで、リリスのことがどうしても憎くて、そんなこと考えもしなかったけど、落ち着いてあの時の状況を振り返ってみればわかることだ。

リリースは蛍のことを心配していた。

そして、蛍に裏切られたと思ひショックを受けていた。

だから自暴自棄になって、蛍の前で正体を晒した。

そう、リリースに心が無いなんてことはない。

リリースには、蛍を想う心がちゃんとあるのだ。

それでも、受け入れるわけにはいかなかった。

雛子の提案は、リリースが今でも蛍のことを大切に想っていることが前提の話だ。

でも蛍に裏切られたと思っているリリースが、今でも蛍を想っている保証なんてない。

もしも心から蛍のことを恨んでいるようなことになれば逆効果だ。あまりにも危険

過ぎる。

でも本当の理由は、そんな理屈めいたものではなかった。

「蛍をあいっくに託さなきゃならないなんて、そんなこと絶対に許さない！」

千歳はまだリリースのことを許せていない。リリースのことが憎い。

かつて故郷を奪い、そして今、大切な友達を絶望させたリリースのことが、心の底から

憎い。

そんな相手に蛍を預けなければならぬのが、我慢できなかつた。

「蛍のことは私が何とかしてみせる！」

私が、蛍のことを助けて見せるわ！

私が・・・絶対に・・・。」

声を荒げながら自分を奮い立たせるも、その声は徐々に擦れていく。

蛍のことを助けたい気持ちは誰にだって負けないのに、気持ちだけが先走った結果が今の状況だ。

仮に自分の思う通り、蛍に内緒でリリースを倒すことに成功したとしても、リリンを失った蛍の悲しみは、今に匹敵する絶望を生み出していたかもしれない。

だからこそ今は、本当の意味で蛍の幸せを取り戻す方法を探さなければならないのだ。

そのための最善策が恐らく、雛子の提案する方法だけだ。

でも、どうしても譲りたくない。あいつにだけはこの役目を譲りたくない・・・。

「千歳。」

その時、要が千歳の名前を呼び、そして優しく抱きしめてくれた。

要から感じられる温もりが、千歳の心をついに決壊させた。

「どうして・・・どうして私じゃダメなの・・・？」

あの子は、蛍は私が辛かった時、私のことを救ってくれたのに・・・。

どうして私じゃあの子の力になれないの・・・？

なんであいつじやなきや、ダメなのよ……？

なんで、よりにもよって、あんなやつに……。

うっ……うわああああん!!」

決意も、覚悟も、全て崩れ去った千歳は、要の胸で赤子のように泣き出した。

蛍の守護騎士になるって決めたのに、彼女を守ることができず、一番辛い時に力になることもできず、何より一番憎い相手に、自分が望む役目を譲らなければならないなんて、それが悲しくて、情けなくて、悔しかった。

そう、リリースのことを認めたくなかった本当の理由は、リリースなんかには蛍を助けると言う役目を奪われたくなかっただけだった。

自分は蛍の窮地を救う、カッコいい守護騎士でありたかったから。

そんな子供染みた自己満足と、どうしようもない我儘でしかなかった。

「……辛い、よね。」

蛍のことを助けたいのに、どうしたらいいのかわからなくて。

あんな、蛍を傷つけたやつに、全部任せなきやいけないなんて……辛いよね。」

要が声を震わせながらも、優しく慰めてくれた。

きつと、要も同じ思いを抱いていたのだろう。

泣き続ける自分の背中を、要があやす様にさすってくれた。

泣き続ける自分の頭を、リン子が慰める様に撫でてくれた。

「イヤだ……あんなやつに任せるなんて、そんなの納得できない……。」

私が、蛍のことを助けるの……。私が……蛍を……。」

自分の心境を全て吐露し、ひとしきり泣き終えた後、雛子がこちらを見据えてきた。
「千歳ちゃん。今のあなたの本当の気持ちはなに？」

あなたは今、なにをしたいって思っているの？」

雛子の言葉を千歳は考える。

自分が今したいことはなんだろう。

リリスに復讐したい。

恨みを晴らしたい。

ダークシャインを倒したい。

ダークネスそのものを滅ぼしたい。

その全てが、自分がしたいことだ。

だけど自分が今、一番望んでいることは？

それは、考えるまでもなかった。

「蛍を……助けたい。」

それが何よりも大切な千歳の願いだった。

「だったら・・・だったら。」

そんな千歳の言葉を聞いた雛子が、泣くのを堪えきれずに、涙を流しながらこちらを見る。

声を震わせ、擦れた言葉で、そして・・・。

「がまん、して・・・。」

千歳にとって最も残酷な言葉を、口にするのだった。

∴

かの地に降り立ったリリスは、ダークシャインと共に商店街を歩き回っていた。

道行く景色は色を失い、時折絶望の闇に覆われた人たちを見かける。

そんな普段とは異質な景色の中でも、リリスはこれまで蛭と過ごした日々を思い出していた。

蛭と一緒に、母の日のプレゼントを探した店。

蛭と一緒に、クレープを食べた場所。

脳裏に蘇る蛍との思い出の数々を、モノクロの景色に捨てていく度に、リリスの心は冷たく凍り付いていくようだった。

まるで何も感じなかった頃の自分に、少しずつ戻っていくようだ。

やがてリリスは歩みを止め、噴水公園の前で立ち止まった。

「ほたる、ここにへおいで。」

ダークシャインにそう呼びかけると、彼女は自分の隣に立ち並ぶ。

この子の力は自分を遥かに凌いでいる。それでもこの子は命令に従順だ。

その意味は、この強大な力を自分の意のままにできるに等しい。

この子の力を使って、今日こそプリキュアを倒す。

「あとは、ここで待っているだけでいい。」

自分の力もダークシャインの力も敢えて隠していない。

やつらが力を探知すれば、間違いなくここへ飛んでくるだろう。

敵わぬとわかっていても、この地を脅かす敵が現れたら見過ごすことができないのが

プリキュアだ。

だからここにいる限り、やつらは必ずここへ現れる。

そして、ここが戦場になるのだ。

「全部、メチャクチャにして、全部無くしてしましましょう。」

蛍を失った今、もうリリンが存在する必要はない。

最も長い時間、蛍と一緒に過ごしたこの場所を壊すことで、蛍との思い出を全て捨てる。

そのときは、リリンと言う存在も一緒に消えてなくなる。

そしてこの地で全てを失ったとき、自分は行動隊長リリスへと戻ることができるのだ。

∴

要は一瞬だけ、地球の重力が何倍にも増したかのような錯覚を覚えた。「今の感じ、もしかして?」

リン子が驚きながら周囲の気配を探る様子を見せる。

するとベルが先に正体を見つけたようだ。

「黒いキュアシャインだ。」

今噴水公園の方に、蛍ちゃんと同じ反応を感じたよ。」

「噴水公園ですって?」

その場所を聞いて千歳が驚く。

噴水公園は、蛍とリリスが約束の場所として良く指定していたところだ。

「リリスの反応もある。

でも動く気配がないわ。」

サクラがリリスの行動を不思議に思う。

こちらから向かってくるのを待っているつもりなのだろうか?

確かにダークネスがこの世界に現れた以上、要たちには見過ごすことはできない。

あるいは、蛍を絶望させたリリスにこちらが復讐しに来ると思っっているのかもしれない。

だがこちらを誘っているのだとしたら、リリスは噴水公園を戦いの場を選んだと言うことになる。

偶然か、それとも……。

「どうする、要?」

ベルが不安そうな表情でこちらを伺う。

戦ったところで、黒いキュアシャインとの力の差は歴然だ。

そうでなくともあの子の力は、希望の光を跡形もなく消し去ってしまう。

勝算は、ゼロだ。

絶対に勝つことの出来ない戦いに身を投じないか、ベルは心配してくれているのだ。だけど要は、そんなベルに『心配はない』と意を含んだ笑顔を見せる。

「千歳、行ける?」

そして千歳の方を向いて声をかけた。

「・・・ええ、大丈夫よ。」

千歳は泣き腫らした目を拭いながら、頼もしい言葉を返してくれた。

リリスがわざわざ噴水公園で待ち構えているのなら、お望み通りに向かつてやる。

それに蛍を覆う絶望の闇は未だに途絶える様子がないのだから、リリスがこの場所を探知するのは容易いだろう。

このまま放っておけば、こちらから来ないことに痺れを切らしたりリリスがここに来る可能性がある。

それだけは防がなければならぬ。

これから雛子が、蛍の心を助けるためにこの場に残るのだから。

「俺もついていくよ。」

「ベル?」

すると隣にいるベルが神妙な表情を浮かべていた。

「正直、ついて行っても何も力にはなれない。

それでも俺は、君を側で見守っていたいんだ……。」

「ベル……。」

もしかしたら自分が今、相当『無理をしている』ことを見抜かれているのかもしれない。

蛍を守ることが出来なかった後悔は、今も胸に渦巻いている。

絶対に敵わないとわかる黒いキュアシャインの力に、恐れを抱いている。

それでも今は、こんなところで弱音を吐くわけにはいかなかった。

蛍を助けるための方法がようやく見つかった今、自分には絶望している暇なんてないのだから。

だから、ベルが側にいてくれることが嬉しかった。

ベルが側にいてくれることは、この上ない支えになってくれるから。

「何言ってるの？側にいてくれるだけで心強いよ。」

「ありがと、ベル。」

「要は心の底からお礼を言う」

「何だか気恥ずかしくなるセリフだが、ベルの気遣いが純粹に嬉しかった。」

「私もついていくわ。」

するとベルに続き、リン子も名乗り出てきた。

「リン子？」

「今のあなたを放っておくことはできないし、無茶しないように見張っておかなきゃ。何とも茶目つ気溢れる、リン子らしい心遣いである。」

「……うん、ありがと。」

そんなリン子に普段は反発ばかりしている千歳だが、今回ばかりは素直にお礼を述べた。

千歳も相当、疲弊しているのだろう。だからリン子が支えになってくれることが嬉しいのだ。

「それじゃあ雛子、蛍のことをお願い。」

「うん。」

部屋を出る前に、雛子に蛍のことを託す。

蛍を絶望から救うために雛子が提示した作戦には、雛子自身の力が不可欠だ。雛子の身にも危険が及ぶ可能性は非常に高いが、彼女にしかできないことだ。

少し不安気な様子を見せてしまったが、雛子は気丈に振る舞っていた。

この悪友が無理して強気に振る舞うときは、不思議と頼りになる。

少しばかり安堵した要は、千歳と共に部屋を後にするのだった。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！」

噴水公園へ向かいながら、要と千歳はプリキュアへと変身する。

妖精の姿に戻ったパートナーたちを肩に乗せ、商店街めがけて高く飛び上がった。

「要。」

すると千歳が、どこか照れくさそうな様子を見せながらこちらから視線を反らし

「ありがと……。」

ほんのりと頬を赤く染めながら、か細くお礼を言うのだった。

先ほど彼女に胸を貸してあげたことを思い出し、要は微笑む。

蛍を守ることができず、助けることも出来なかったことを、彼女はずっと心の中で泣いていたのだろう。

でも泣きたい思いを堪えてまで、憎い仇であるリリスへの復讐心を滾らせていたのに、それさえ叶えることが許されなかった。

何ひとつとして千歳の思いを叶えてあげることのできず、辛い選択肢を押し付けてしまっている現状でも、千歳は自分たちに協力してくれる。

他の誰でもない、蛍を助けるために。

要にはそれが嬉しく、そして心強かった。

「こつちこそ、ありがとう。ウチに付き合ってくれて。」

「私は、蛍を助けるために最善を尽くしたい。それだけよ。」

これから向かう戦場には、一切の勝機のない戦いが待ち受けている。

千歳をそれに巻き込んでしまったことを、要はどこか申し訳なく思っていたが、当の本人は何とでもないと言わんばかりに、そう言い切った。

そう、自分たちはまた、フェアリーキングダムの時と同じように、勝ち目のない戦いへと身を投じている。

だけど、あの時と同じように『希望』はある。

雛子が蛍をリリスの元へと連れてくることができれば、きつとまた『奇跡』が起きる。こちらに出来るのは、その時間稼ぎだ。

「見えてきた。千歳、気合入れていくよ。」

「ええ。」

やがて噴水公園が見え、リリスと、そして黒いキュアシャインの姿が確認された。

「あなたたちだけ？」

まあいいわ。今日こそ決着をつけてあげる。」

雛子の姿が見当たらないことを不審に思いながらも、リリスは黒いキュアシャインと

並びこちらを見据える。

「ほたるの、ダークシャインの力で闇に墮ちるといわね。」

黒いキュアシャインのことをダークシャインと呼んだリリスは、闇の力を手に宿す。

だが勝ち目のない戦いが始まるうとしている中でも、要と千歳の希望の光は、不思議と途絶える様子を見せないのだった。

：

商店街の方角から光と闇の激突を感じる。

レミンがふと蛍の方へと目を向けてみると、蛍を覆う絶望の闇がどことなく揺らめいているように見えた。

間違いない。黒いキュアシャインと千歳たちとの戦いが始まったのだ。

それと時を同じくして、雛子が蛍の元へと近づいた。

「始めるのね。」

「ええつ。蛍ちゃんを助けるために。」

サクラと雛子が一言だけ会話を交わした後、サクラは少し距離を置いた。

雛子がこれから始めようとしていることは、レミンにも分かっている。

でも分かっているからこそ、レミンはこれ以上黙り続けることができなかった。

「雛子、大丈夫？本当に大丈夫なの……？」

「私なら平気よ。これくらい、何てこと……。」

そしてあくまでも平静を装う雛子に、レミンの我慢は限界に達した。

「嘘……つかないですよ！」

「レミンちゃん？」

突然叫び出した自分を雛子は不思議に思うが、レミンの言葉は止まらない。

「あれだけの絶望の闇を受けて、大丈夫なわけじゃないじゃない！」

それなのにまた、蛍の闇に触れるんでしょ!!」

雛子が提案した作戦は、蛍にリリースの本心を伝えること。

雛子たちはこれまでのリリースの言動から、彼女も本心では蛍のことを想っていると確信を持っている。

だが蛍を絶望させたことで自暴自棄になっている今のリリースに、話が通じるとは思わない。

だから雛子は、蛍の『意識』だけでも絶望の闇から救い出し、直接こちらから会いに

行くと言うのだ。

絶望の闇を纏う状態でも、リリースと話せるように。

そして蛍の言葉ならきつと、リリースに届くと信じて。

絶望の闇は触れた相手の心の声が直接聞こえてくる。

雛子はその性質を逆手に取り、こちらから蛍の心に声を届けようと言うのだ。

闇に閉じこもった蛍に呼びかけ、せめて意識だけでも救い出すために。

だけどそのために雛子はまた危険を犯そうとしている。

それが我慢できなかった。

「レミン、前に言ったよね？」

人のために力を使つてばっかりだと、その内疲れて倒れちゃうって……。

蛍のために、雛子が精いっぱい頑張ってるのはわかるよ？

でも……でも！これ以上無理したら……雛子が……雛子まで……。」

雛子が蛍のことをどれだけ大切に思っているかは分かっている。

自分が何度も嫉妬してきたくらいだからだ。

そこまで大切に思っている蛍の、暗い闇の声をずっと聞き続けてきたのだ。

雛子の心は今、とても傷ついているはずだ。

それだけじゃない。

雛子がプリキュアの姿を維持しているのは、希望の光で絶望の闇を中和し、自分への影響を少しでも抑え込むためだ。

でも希望の光を使えば体力を消耗する。

まして黒いキュアシャインを生み出すほどの強大な絶望の闇に触れ続けていれば、体力なんてあつという間に底を尽きるに決まっている。

そう、今の雛子はもう心身共に、とつくに限界のはずだ。

そんな状態でもう一度、蛍の絶望に触れて大丈夫なのだろうか？

今の疲れ切った心で、また蛍の声を聞いたら……。

今の疲れ切った体で、また希望の光を消耗したら……。

「レモン……やだよ……。雛子まで倒れちゃうなんて……やだよ……。

だからもう……やめてよ……。雛子が傷つくのなんて、見たくないよお……。」

雛子までが倒れてしまう。その危険性の方が遥かに高かった。

もう、自分の名前を取り繕う暇さえなくなったレミンは、嗚咽を漏らしながら雛子に懇願する。

これまではプリキュアがいる限り、雛子たちがいる限り、どんな絶望的な状況だって必ず覆せると思っていた。

故郷であるフェアリーキングダムが救われたことで、レミンの中でその安心感は一層

高まった。

「ただどそんな思いは、あまりにも容易く破壊されてしまった。」

「そして今、要と千歳は、再び勝ち目のない戦いに身を投じている。」

「もしもまた負けてしまったら、大好きな要も、大好きな千歳も、もう戻って来れないかもしれない。」

「そんな不安の中で、雛子までが危険に身を投じようとしている。」

「意識だけを絶望の闇から救い上げるなんて、これまで試したことすらないから、失敗する可能性の方が遥かに大きい。」

「そして失敗は、雛子が倒れることを意味している。」

「自分がどれだけ酷いこと言っているかなんてわかっている。」

「雛子に蛍を見捨てることなんてできないこともわかっている。」

「ただ、蛍が倒れ、要と千歳が敗北し、雛子が疲弊している今の状況で、レミンはこれ以上、誰かが傷つくのを見ていることなんてできなかった。」

「レモンちゃん。」

「そんな自分を、雛子は微笑みかけながら優しく抱きしめてくれた。」

「ありがとう、心配してくれて。」

「レモンちゃんの気持ち、とても嬉しいわ。」

でも、私なら大丈夫だから。」

雛子に励まされながら、レミンは自分の身を包む温かな光を感じ取る。

「雛子……?」

「レモンちゃんがそうやって、私のことを心配してくれる限り、私のことを想ってくれる限り、私の希望の光は絶対に潰えたりなんかしない。」

そう力強く語る雛子の光が、ますます強さを増していく。

こちらが懸念なんて吹き飛ばすほどの力強い光が、雛子を通じてレミンの身体を包んでいった。

「だから私は必ず、蛍ちゃんを助け出して見せるよ。」

そして雛子の言葉が、雛子の光が、レミンの抱えていた不安を吹き飛ばしていった。

だけど同時にレミンは、みんなの希望を信じられなくなっていたこと、そして何よりも蛍のことは見捨てようとしたことへの罪悪感を抱き始めた。

「雛子。レミンのことは私に任せて。」

するとこれまで会話を聞いていただけのサクラが、自分の頭を優しく撫でてくれた。

「チエリー?」

「私たちはリビングで待っているから、蛍のこと、お願いね。」

「ええっ、任せて。」

雛子の頼もしい言葉を聞いた後、レミンはサクラに連れられながら千歳の部屋を後にするのだった。

：

サクラはレミンを落ち着かせるために、リビングへと訪れる。

レミンをソファに座らせながら、窓から外を一望すると、色を失った街の景色が広がっていた。

目の前に映るモノクロの世界が、自分たち以外の音が聞こえない静寂な世界が、今の蛍の心を表しているのではないかとさえ思い始めた。

「チェリー……。」

するとレミンが、堪えきれない涙を流しながらこちらを呼んだ。

「ごめんなさい……レモン……蛍に、蛍に酷いことを……ごめんなさい……。」
「レモン……。」

酷いこと、と言うのは、雛子の身を案ずるあまり、蛍を助けようとする雛子を止めて

しまったことだろう。

それは暗に、蛍を見捨てようとしたのだと、きつとレミンは自分を責めているのだ。ただサクラは、そうは思わない。

サクラはレミンを優しく抱きしめ、頭を撫でる。

「謝らなくていいわ。ずっと不安で、怖かったものね。

レモンはよく、頑張ってるわ。偉いよ。」

レミンが蛍のことを見捨てようと思ったわけではない。それくらいは分かっている。ただ今日は、あまりにもシヨックな出来事が立て続けに起きてしまった。

自分ですら、いつそ夢であって欲しいと思っっているくらいなのに、まだ幼いレミンにとっては、殊更シヨックが大きかったはずだ。

そんな中でもレミンはずっと、泣くことも嘆くことも我慢して、みんなに迷惑をかけるないように振る舞ってくれた。

それでもついに、抱え込んでいた不安が爆発してしまったのだ。

相手が姉のように慕っている雛子の身に関わることであれば、猶更だ。

だから、彼女を責めるつもりなんてない。

むしろ、ずっと堪えていたことを褒めてあげたいくらいだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……。」

それでもレミンはすすり泣きながら、サクラの胸に顔を埋めてずっと謝り続けた。謝らなければきつと、レミン自身が納得できないから。

だからサクラは何も言わず、レミンの気が落ち着くまで謝罪を聞き続ける。

彼女のごめんなさいを聞き続けながらふと、千歳の部屋の方へと視線を向けた。
(蛍……)

出来ることなら自分の方こそ、蛍に謝りたいところだった。

あの子がリリンのことで悩んでいたのはわかっていたはずなのに、リリンの正体がリスではないかと言うことにも、蛍の態度から勘付いていたのに、そして何よりもパートナーなのに、何も出来ず、何もしてあげられなかった。

何て声をかけていいのかわからなかったから。どう接していいのかわからなかったから。

事の成り行きを見守ることしか出来なかったから。

でも今は、そんな蛍のために力を尽くしてくれる人たちがいる。

今でも蛍を助けるために、身を危険に晒してまで全力を尽くしてくれる人たちがいる。

蛍を助けてあげられなかった言い訳なんてたくさん思いつくのに、蛍にしてあげられることが何も思いつかないなんて、自分への情けなさの不甲斐なさでいっぱいだ。

それでも蛍を助けようとしてくれる3人の心が、サクラには純粋に嬉しかったのだ。た。

：

1つ深呼吸を置いた後、雛子は改めて蛍と向き合う。

これから自分は、かつて千歳がフェアリーキングダムの人にそうしたように、絶望の闇に触れて彼女に直接話しかけようとしている。

あの時千歳の声を聞いた人たちはそのまま闇の牢獄から解放されたが、今回ばかりはそう、上手く行くとは思えない。

蛍を闇から救い出せるのは、彼女が想いを寄せるリリスだけ。そんな確信が雛子にはある。

それならばリリスを説得して、ここまで連れてこようかとも考えたが、ベッドの上で横たわる蛍は、変わらず虚空を見つめながら絶望の闇を発しており、時間が経つにつれて漆黒さを増している。

このまま時間が経てば経つほど、蛍の心はより深い闇へと沈んでいく。手遅れになる前に、自分がせめてもの足掛かりになるしかないのだ。

（レモンちゃん、心配してくれてありがとう。）

チエリーちゃん、あなたの分まで頑張るわ。）

かつてレモンに注意された時も、愛子を助けるために相当な無茶をした。

でも大切な友達を助けたいと、守りたいと思えば思うほど、希望の光と言うのは不思議と輝きを増していった。

だからきつと、今回も大丈夫だ。

例えどれだけ絶望に触れようとも、希望は潰えたりしない。

もう、絶対に迷わない。自分の望みはただ一つ、蛍を助けること。

蛍に許してもらいたいなんて思っていない。嫌われたままだつていい。

自分ただは、あの子の笑顔をまた見たい。それだけなのだ。

「……よし。」

両手に希望の光を込めた雛子は、蛍の手を優しく握る。

キラキライキライ

みんな大キライ!!

その瞬間、蛍の絶望の聲が一気に頭の中に流れ込んできた。

「うっ……。」

幸せを壊された悲しみと嘆き。そして全てへの憎悪。

ありとあらゆる負の感情が渦巻き、雛子の脳内を掻き乱していく。

「蛍……ちゃん。」

絶望の聲が頭を掻き乱す中、雛子は自我を強く保つ。

そして必死に蛍の名前を呼び続ける。

「蛍ちゃん、蛍ちゃん、蛍ちゃん!!」

自分の手に纏う絶望の闇を通じて、蛍に声が届くことを信じて。

∴

ダークシャインの熾烈を極めた攻撃は、瞬く間にキュアスパークとキュアブレイズを
追い詰めていく。

その強烈な一撃が炸裂する度に、目の前に広がる景色が歪み、リリスの思い出の欠片を砕いていった。

「はあっ！」

キュアスパークが片手から雷を放つも、ダークシャインは片手をひと薙ぎするだけでかき消す。

そのまま手に闇を纏い、キュアスパークへと距離を詰めていくが、キュアブレイズが炎の盾を展開しながら割り込んでくる。

だがキュアブリズムの盾さえ一撃で破壊したダークシャインだ。

案の定、炎の盾は1秒も持たずに砕かれたが、その一瞬の隙を突いてキュアスパークが背後に回り込みキュアブレイズと挟み撃ちを仕掛ける。

だがダークシャインは空中で身体を捻り、手刀でキュアスパークを、足でキュアブレイズを蹴り飛ばした。

そして2人に向けて黒いロッドを構え、闇の光線を放つ。

蛭の浄化技がそのまま反転した闇の光線は、ソルダークの巨体さえも飲みこむほどの大きさだ。

「千歳！・当たるなよ！」

「わかってるわ！」

キュアスパークとキュアブレイズは寸でのところで回避するも、直線状にある建物は全て破壊されていく。

だがダークシャインは再び2人に狙いを定めた後、闇の光線を続けざまに放つて見せた。

浄化技を一度放てば力を使い果たしていた蛍とは違い、2度、3度と連続で光線を放っていく。

やがてダークシャイン光線が、噴水公園の中心に向けて放たれた。

そして蛍と一緒に過ぎ去った景色が闇に飲み込まれた後、そこには何も残っていないかった。

噴水も、中央にそびえ立つ大時計も、2人で過ぎ去ったベンチも、何もかも。

「それでいいのよ、ほたる。」

その光景を見ながらリリスは、無表情で淡々と呟く。

「あなたも、あたしも、思い出も、この場所も。」

胸の奥が冷たく凍てついていくのを感じる度に、自分が自分でなくなっていく。

「なにかも全部、壊れてしまえばいいわ。」

否、きつと、戻っているのだ。

心なき行動隊長だったあの頃に……。

：

要はダークシャインの攻撃を必死で掻い潜りながら攻めの機会を伺うが、ダークシャインが闇の光線を放つ度に、夢ノ宮商店街の景色が壊されていく。

これまでのように戦いが終わり、闇の牢獄が解除されれば全てが元通りになるのはわかっているが、幼き頃から育った町が廃墟と化していく様を見るのはとても心苦しかった。

それでも今は、そんな感傷に浸ることは許されない。

前と同じで、あの一撃を受けたらそれで終わりだ。

だが攻撃している間、ダークシャインはその場から一步も動く気配がなかった。

あれほどの強大な攻撃だ。ダークシャインとは言え反動の制御で手一杯なのだろう。

そこに付け入る隙があるはずだ。

要は持ち前のスピードをフルに駆使して、ダークシャインの猛追を掻い潜りながら隙を伺う。

幸いにも、千歳も自分に追従してくれている。

隣に走る千歳にアイコンタクトを送ると、向こうもこちらの意図に気付いてくれたようだ。

そして少しずつダークシャインと距離を詰めていく中で、要は千歳のスピードとダークシャインの攻撃のタイミングを計りながら、その時を見極める。

(今だ！)

そしてダークシャインが闇の光線を撃つタイミングに合わせて、軌道を反らしながら彼女目掛けて直進する。

真横擦れ擦れを闇の光線が走る中、要はついにダークシャインへ肉薄した。

そして反対方向からは千歳が同じタイミングで飛来する。

予想通り、攻撃中のダークシャインはその場から動く様子がない。

こちらに気付いたダークシャインは即座に光線を撃つのを中断するが、それよりも早く要は彼女を間合いに捉えた。

「これで、どうだ!!」

ありつたけの雷を込めてダークシャインへと繰り出す。

その反対側から千歳が炎を纏った拳を繰り出す。

ダークシャインとはいえ、この挟撃はかわせない。

だが要がダークシャインに触れた瞬間、手に纏う雷が一瞬で消し飛ぶのだった。「なっ！」

驚きながら反対側を見ると、千歳の纏う炎も同じように打ち消される。

それでもこちらの攻撃はダークシャインを捉え、後退させることには成功するも、彼女はまるで応える様子を見せずに全身から衝撃波を放った。

要と千歳は吹き飛ばされながらも態勢を整える。

「希望の光を打ち消すあの子の特性は、常に身に纏っている力にも付与されている、と思つて良さそうね。」

先ほどの現象を千歳は冷静に分析する。

こちらの手応えは確かにあつたから、意識的に発動していない能力では削げる力に限界はあるのだろう。

それでもダークシャインはまるでダメージを受けている様子がない。

こちらの渾身の攻撃を叩きこんだところで、無意識化で発動する彼女の特性に無力化されてしまう。

要するに、自分たちの攻撃なんて最初から届きもしなかつたのだ。

「ははっ、こりゃ敵わんわ。」

要は自嘲気味に呟く。

元より勝てる見込みのない戦いとは思っていたが、まさか一矢報いることすら敵わないとは。

ここまで圧倒的な力の差があると、もう乾いた笑いしか出てこなかった。

「絶望した？」

そんな要に千歳がどこかからかう様子で声をかける。

「まさか。」

要は余裕の笑みを浮かべて千歳の質問に答える。

今、この場において重要なのは、なぜリリースがこの噴水公園を戦いの場にしたのか、だ。

この場所はリリースと蛭が最も長い時間を過ごした場所だ。

もしかしたらリリースは、この場所を壊すことで、この世界への未練を断ち切ろうとしているのかもしれない。

だが未練を断ち切ると言うこと自体、なんて『人間的』な考え方だろうか。

心を持たないようなものが、そんな価値観を抱くとは思わない。

未練があると言うことは、リリースはこの場所に僅かながらでも価値を感じていると言うこと。

それが分かった今、いくらでも粘り続けることが出来る。

蛍が、リリスの前に戻ってくるその時まで……。

「つても、このまま続くとちよつとキツいかな？」

だがそれはそれとして、要は自分でも素直だなど思う言葉を呟く。

「今は雛子と、蛍を信じて戦いましょう。」

そして千歳の言葉を受けて、再び己を奮い立たせる。

そして今一度、蛍を助けると言う決意を胸に秘めながら、千歳と共にダークシャインに挑むのだった。

第22話・Bパート

暗く深い闇の中、螢は膝を抱え、顔を俯かせていた。

自分の声、絶望の声以外が何も聞こえず、何も見えないこの暗闇は、初めてここへ閉じ込められたときと変わらなかった。

だが、自分はあの時と違う。

声が、絶望に嘆く声が木霊し、何度も何度も頭の中に響き渡っていくが、螢はその声に耳を傾けていた。

そして……。

どうしてわたしをだましたの？

どうしてわたしに酷いことするの？

「なんでみんなおしえてくれなかったの？」

なんでみんなリリンちゃんをきずつけようとするの？」

キライだ。キライだ。

「みんな……大キライだ。」

頭の中に響く声を、ずっと復唱していた。

自分が得た幸せは、リリンからもらった勇気のおかげで手に入ったものだ。

一步踏み出す勇気のおかげで友達ができて、大嫌いな頃の自分から変わることが出来たと思っていたのに、それは全て偽りだった。

リリンの正体はリリスで、あのおまじないは自分を貶めるために思いついた全くのデタラメだった。

そしてリリンは、ずっと自分を騙して利用していた。

リリンからもらった勇気も、リリンと過ごした思い出も、全て嘘偽りのものでしかなかったのだから、自分の幸せは全部、嘘だったのだ。

そんな偽りの幸せも、リリスによって壊された。

もう蜚には、何も残されていない。

勇気のおまじないも、幸せな世界も、友達も、何も無い。

全てを失った蜚は、この闇から脱出しようと言う気力さえ起きなかった。

「なんでリリンちゃんはわたしにウソをついたの？」

なんでみんな、わたしから幸せをうばおうとするの？

なんで？ どうして？ なんでわたしにヒドいことするの？」

これが真実の世界なのだと、それを受け入れて、自分の声に耳を傾ける。

それくらいしかもう、自分に残されたものはないのだから……。

蛍ちゃん！

そんな時、自分の声でない。別の人の声が聞こえてきた。

「……だれ……？」

蛍ちゃん！ 蛍ちゃん！！

不思議と、どこか懐かしいと思えてくる声だ。

ぼんやりとした記憶を辿りながら、蛍は声のする方へと目を向ける。

するとそこから、僅かな光が差し込んで見えた。

辺りを照らすには心もとないほど細い光だが、その光はどこか温かく、揺り籠の中にいるような優しさに包まれていた。

「ひな……ちゃん……？」

黒く塗りつぶされた記憶の中から、蛍は雛子の名前を呼ぶ。

同時にぼんやりとしていた記憶が急に鮮明になり、雛子の声と強く認識されていっ

た。

蛍ちゃん？良かった！声が届いたのね！！

こちらの声も届いていたのか、雛子が少し安堵を含んだ声で返してくる。

姿も何も見えないけど、雛子の声だけは確かに聞こえてきた。

でも、

「いまさらわたしなんかにかまわないで！！もう放つと聞いてよ！！」

蛍は雛子の声を拒絶する。

雛子は、要と千歳がリリンを傷つけようとしたとき、リリンを助けようとしなかった。雛子ならどんな時だって、自分の味方をしてくれると信じていたのに。

蛍ちゃん……ごめんなさい。あなたの気持ちも考えないで。

結局あなたのことを、傷つけてしまって……。

「そんな言葉！ききたくない！！」

あの時蚩は、雛子に『失望』した。

大切な友達である雛子のことを、『嫌いになってしまった』。

何よりも、友達を嫌いになってしまった自分が、一番嫌いだった。

嫌いなことだらけの世界が壊れて、何も無い暗い世界だけが残って、ずっと、この暗闇の中においても良いと思っていた。

だから謝罪の言葉なんていらぬ。励ましの言葉なんていらぬ。

そんな言葉を聞いたら、元の世界が恋しくなってしまうから……。

「わたしはもう、なにもいらぬの!!ともだちも!幸せも!なにも!!」

もう、元の世界にもどりたくなんかない!!」

もう、戻りたくない。

戻ったところで自分の幸せはない。

友達のことが嫌いになってしまったから、もうみんなとこれまでのような仲ではいらぬ。

何より……。

「リリンちゃんはもう、いない。

リリンちゃんのいない世界なんか!わたしはもどりたくない!!」

リリンがいない世界に、自分の幸せはない。

だからもう、自分の幸せは二度と帰ってこない。
だってリリンはリリースだから。

自分のことをずっと騙して、利用して、そしてずっと、恨んでいたのだから。
千歳は言っていた。ダークネスに心はないと。

だからリリースは自分のことなんて何とも思っていないはずだ。

だからもう、全て元には戻らない。

みんなへの友情も、リリンへの想いも、自分の幸せも。

・・・本当に、そう思ってるの？

蛍ちゃん、本当にリリンちゃんはもういないって、本気で思ってるの？

「だって・・・。」

リリンはリリースだ。心のない行動隊長だ。

そしてキュアシャインを、自分のことをずっと恨んでいた。

それが現実で、それが事実だ。

だけどその事実には、大きな矛盾を孕んでいることに蛍は気づいていた。

気付いていながら、目を背けている。

だから雛子の言っていることがわからない・・・いや、『わかりたくなかった』。だってそんな都合の良いことは、あり得ないのだから。

蛍ちゃん。わかっているはずだよ。

リリスは蛍ちゃんのことを恨んでいた。

でも恨むこと、憎むことって、心のない人に出来ることだと思う？

そんなこちらの思いを逃さないように、雛子が答える。

心がないのに、人を恨むことが出来るのか？心がないのに人を憎むことが出来るのか？

それが恨みや憎しみといった感情だったとしても、心を持っている証拠にはならないか？

そして心があるのなら・・・。

だからリリンちゃんの中にはきつと、蛍ちゃんを想う心だってあるはずだよ。

雛子がそう、言葉を綴る。

そんなはずはない。といつそ切り捨てることができれば、どれだけ良かっただろう。でも雛子の都合の良い言葉が、蛍の記憶を鮮明に蘇らせていった。

そして記憶の中のリリンは、笑い、怒り、そして失望して・・・それはとても、心のない演技には映らなかった。

ねえ、蛍ちゃん。ここから出て、リリンちゃんに会ってみよ？

会って、リリンちゃんの本当の想いを確かめて・・・

「いや!!!」

だが蛍は、これまで以上に強く拒絶の言葉を叫び返す。

その言葉は蛍を照らす光を掻き乱し、これまで聞こえていた雛子の声が途切れていく。

「そんなのぜったいにイヤだ!!リリンちゃんになんか会いたくない!!」

だって・・・だって・・・」

本当はこんな暗い世界なんかはずっといたくない。

元の世界に戻って、みんなと、リリンと、これまでのような幸せな時間を取り戻した

い。

それでも……

「(わいもん……)。」

リリンの思いを、確かめるのが怖かった。

もしも本当に自分のことなんて何とも思っていないかつたら？

友達のフリをして、自分を利用していただけと言う事実が残ってしまえば……そう思うと、怖くて怖くて仕方がなかった。

雛子の言葉通り、もし本当にリリンが……、それなら自分の幸せは確かに帰ってくる。

だが今よりもさらに深く、傷ついてしまう恐怖のせいで、蛍は一歩前に踏み出すことができないでいた。

怖いのは、わかるよ。リリンちゃんの心は、私たちにはわからない。

本当はどう思っているかなんて、想像もできない。

でも、蛍ちゃん。

リリンちゃんが蛍ちゃんに見せてきた言葉は、笑顔は、本当に全部嘘だったと思う？

蛍はその言葉を聞いて沈黙する。

『リリス』ではなく、『リリン』が自分に見せた顔は、多くが偽りの顔だったのだろう。でもリリンはかつて、自分が側にいたおかげで、元気が戻ったと言ってくれた。

あの言葉は、果たして嘘だったのだろうか？

そしてそれ以降、リリンが見せた笑顔はとても自然で、心がないものとは思えなかった。

リリンちゃんの思い、少しでもいいから信じてあげて、一歩前に踏み出してみよう？

雛子の言葉が、優しく蛍の胸に染み渡る。

「リリンちゃん……。」

リリンの名前を口にする、これまでリリンと過ごした時間が頭の中を駆け回り始めた。

「リリンちゃん……。」

あの時だって、自分が絶望の闇に覆われたとき、リリンは心配してくれた。

そして彼女のことを信じられなくなったとき、リリンは傷ついていた。

「リリンちゃん……リリンちゃん……リリンちゃん！」

あの時互いを傷つけあったことで、初めて相手の想いが分かってしまうなんて。

どうしてこんな形でしか想いを通じることができなかったのだろう・・・？

とても悲しいことだったが、それでもその想いが、蛍の希望へと少しずつ変わっていく。

あなたに足りないものは、ほんのちよつとの勇氣。一歩踏み出すための、小さな勇氣。

そして蛍は、初めて会ったときのリリンの言葉を思い出し、勇氣のおまじないをした。リリンはデタラメだったと言う。それはきつと真実だ。

でもあのおまじないのおかげで自分が持てた小さな勇氣は、確かに存在していたはずだ。

そして今、自分の胸の中に、リリンと会うためのほんのちよつとの勇氣が生まれてきた。

「がんばれ！わたし!!」

デタラメでもいい。偽りでもいい。

でも今はここから出たい。

ここから出て、リリンの本当の想いを聞きたい。

次の瞬間、蛍の周囲が光に照らされ、視界が白に満ちていった。

：

がんばれ、わたし。

久しぶりにその言葉を聞いた次の瞬間、雛子の両手に伝わる闇の力が急速に衰えていった。

ベッドに横たわる蛍へと目を向けると、蛍を覆う絶望の闇が徐々に薄れていく。

そして……

「……ひなこ……ちゃん？」

虚ろだった蛍の瞳に光が戻り、名前を呼んでくれた。

やがて蛍はベッドから起き上がり、ぼんやりとこちらを見つめる。

「ひなこちゃん……。」

「蛍ちゃん!!」

蛍が目を覚ました。

そのことがわかった雛子は、たまらず蛍を抱きしめた。

時が止まっている今、蛍が意識を取り戻すまでの時間は言葉通り一瞬にも満たない出来事なのだろう。

それでも雛子にとってはとても、とても長く感じられる時間だった。

「良かった．．．本当に良かった．．．。」

蛍の意識が戻ったとはいえ、身体を纏う絶望の闇はまだ残っており、色も失われたまままだ。

今はまだ、彼女から声が聞こえてこないが、再び聞こえるようになるのも時間の問題だろう。

悠長に事を構えているわけにはいかないが、それでも今は、蛍が戻って来たことが嬉しかった。

「ひなこちゃん．．．ごめんさい。わたし、みんなにヒドイことをおもって．．．。」
蛍の抱えていた思いは、絶望の闇を通じて全てこちらにも伝わってきた。

彼女の言う酷いこと、と言うのは自分たちを嫌いになってしまったことを言っているのだろう。

だから彼女は、ここに帰ってくることを怖がっていた。

一度でも嫌いだと思ってしまった相手と、友達でいられるかが不安だったから。

でもそう思わせてしまったのは自分たちだ。だから彼女が気に病む必要なんてない。
「ううん、私たちこそごめんなさい。」

蛍ちゃんにずっと、秘密にしてて。」

雛子は謝罪と共に、蛍の身を包むように抱きしめる。

かつて彼女が自分に母の温もりを求めた、あの時と同じように。

「・・・ひなこちゃん、ありがと・・・。」

やがて蛍はか細い声で自分にお礼を言った。

それが仲直りの印だと分かった途端、雛子の胸にようやく安堵が訪れた。

「わたし・・・リリンちゃんにあいたい。リリンちゃんにあつて、たしかめたいんだ。」

リリンちゃんの・・・本当の気持ち。」

だけどまだこれで終わったわけではない。

ふとリリスのいる方へ気配を探ると、まだ黒いキュアシャインの反応も残っていた。

蛍のことを完全に絶望の闇から救い出せたわけではない。

自分の役目は、蛍とリリンの架け橋となる役目はまだ残っているのだ。

「わかったわ。いこつ、リリンちゃんのところへ。」

雛子は蛍の手を取り、彼女を立ち上がらせる。

絶望の闇の影響からか、蛍の足取りはどことなくたどたどしかったが、歩く分には問

題なさそうだ。

そのまま蛍の手を引きながら、雛子たちは千歳の部屋を後にするのだった。

：

雛子に連れられ部屋を出た蛍は、ここでようやく今自分が千歳のマンションにいることを知る。

それから遠くの方から自分と同じ闇の力を感じられた。

またリリスが自分の絶望を使ってソルダークを生み出したのかと思っただが、感じられる力はソルダークとは異質のものだった。

自分が闇の牢獄に閉じ込められている間に何があったのか気になるところだが、今はリリスに会いに行くことが先だった。

リリスの、リリンの本当の気持ちを確認するために。

そう思いながらリビングを訪れると、ソファにはサクラとレミンの姿があった。

「蛍!!」

こちらの姿に気付くと、サクラが目には涙を浮かべながら駆け寄る。

「チエリーちゃん、心配かけてごめんさい。」

思わず、本当の名前で呼びかけてしまったが、サクラはそんなことは気にも留めずに優しく抱きしめてくれた。

「良かった・・・蛍ごめんね。」

私パートナーなのに、何もしてあげられなくて・・・。

「ううん・・・ありがとう。」

心配をかけたことを謝罪したばかりなのに、自分のことをそこまで心配してくれたサクラの優しさが嬉しかった。

それに、何もしてあげられなかった、なんてことはない。

自分がリリンの正体に気付き落ち込んだとき、サクラはずっと励ましてくれた。

まるで本当の姉のように、優しくしてくれた。

「蛍・・・。」

するとサクラの背後から、涙を拭うレミンが姿を見せた。

彼女にも心配をかけてしまったことを申し訳なく思ったその時、

「わあああん！」！蛍！ごめんさい！！」

突然レミンがレモンの姿に戻り、こちらに泣きついてきたのだ。

「レモン、蛍のこと見捨てようとして．．．ごめんなさい!!」

『見捨てる』の言葉の意味が分からずに雛子の方を見てみると、雛子が口元に手を当てながら苦笑していた。

そんな雛子の様子とレモンの様子を見比べて、蛍は少しだけ察する。

雛子は自分を絶望の闇から救ってくれたけど、きつと彼女の身に危険が伴うような手段を講じたのだろう。

レモンは雛子のことを思ってそれを止めようとした。

それが自分を見捨てると言う行為に紐づいたのだ。

「ううん、レモンちゃんもありがとう。」

だから蛍は素直にお礼を言う。

自分のことも雛子のこと、レモンはずっと心配してくれていたのだから。

「蛍。リリスに会いに行くの?」

するとサクラが、不安げな表情でそう尋ねてきた。

「うん。」

蛍はそれに迷いなく答える。

「リリスの、リリンのことを信じてるのね。」

続くサクラの問いに、蛍は少し深呼吸をしながらリリンとの思い出を遡る。

そして、自分の胸の内にある、本当の気持ちに問いかける。

「・・・うん、だってわたしは、リリンちゃんのことか・・・。」

だけど蛍は、その先の言葉を敢えてとどめた。

この言葉を最初に伝えたいのは、他ならないリリン本人だから。

：

サブナツクがかの地に降り立ってみると、確かに闇の牢獄が維持されていた。

アモンの話通りならば、それを実現させているのはキュアシャインに変身していた少女、蛍の絶望だ。

最初は耳を疑ったが、こうして当たりを見回してみると改めて戦慄する。

たった1人の少女の絶望が、この街一帯を絶望の闇で食い尽くすとは。

かつてキュアシャインの力に恐怖を覚えた自分だからこそ、その凄まじさが理解できた。

「まさか、本当にこんなことになっていようとはね。」

サブナツクの隣でダンタリアが興味深そうに呟く。

「貴様まで付いてくることはないだろ。」

「別に君に付いてきたわけじゃないさ。僕は僕の目的のためにここにいる。

あのデイスペアー・カードの化身、ダークシャインの力とやらをこの目で見るためにね。」

ダンタリアの視線は、遠方にいるリリスとダークシャインへと向けられる。

サブナツクもつられて目を向けてみると、キュアスパークとキュアブレイズが徹底的に追い込まれていた。

サブナツクが強者と認めたキュアスパークでさえ、ダークシャインに一方的に打ち負けている。

「とはいえ、まさかここまで力の差があるとは思えなかったよ。」

余裕めいた言葉とは裏腹に、ダンタリアの表情は険しかった。だが無理もない。

あの力はプリキュアは勿論、行動隊長のレベルをも遥かに凌駕している。

例え行動隊長3人が力を結集しても、ダークシャインの足元にも及ばないだろう。

そして力を存分に振るわれた噴水公園は見る影もなく無残に破壊され、その中央にはリリスが愁いを帯びた様子で立ち止まっていた。

「そんなことよりも、お姫様の様子が気になるかい？」

少し嫌味の交じった言葉でダンタリアが自分をあざ笑う。

だがダークシャインの力に興味があるなんて最もな建前を言っておきながら、やつも自分と同じであることはわかっていた。

リリスは未だに、この世界への未練を断ち切れていない様子だ。

それはまだ、あの子には『感情』が残っていると言うことになる。

蛭さえ絶望させてしまえば全てが元の鞘に収まると思っただけに、彼女を失つても尚、リリスが心を持ち続けていたことは想定外だった。

だからサブナツクは、リリスの様子を見るためにこの場へ降りたのだ。

そして考えた。なぜリリスは噴水公園を戦場を選んだのだろうか？

蛭と過ごした場所さえも破壊尽して、未練を断ち切るためだと言うのか？

もしもそうであるならば、その考え自体リリスが心を捨てきれない証拠になるが、達成できたことであの子が心を捨てられるのであれば、それも良いかもしれない。

そう思ったその時、

「おい、サブナツク。」

ダンタリアが何かに気付き、指を差した。

サブナツクが目を向けると、突然ダークシャインが頭を抱えて苦しみ出していた。

「なんだ？」

不審そうにサブナックが様子を伺っていると、リリスの方にも異変が訪れる。

リリスがある一か所を注視して目を見開いていたのだ。

そしてリリスと同じ方へ目を向けると、そこにはキュアプリズムと・・・

「なにっ?」

彼女に抱えられている、蛍の姿があつた。

「まさか、闇の牢獄から脱出したのか?」

ダンタリアがそう言いながら空を見上げるが、空は黒い闇に覆われたままだ。

そして蛍を注意深く見て見ると、まだ絶望の闇が被いきれておらず、色も失われたままだった。

闇の牢獄から脱出できたわけではないのに、蛍の目は確かにリリンの姿を捉えている。

まさか闇の牢獄から、意識だけを外界へ解放したと言うのか?

「どうする? サブナック?」

珍しくダンタリアが自分の判断を伺ってくるが、サブナック自身どうすれば良いのか戸惑っていた。

このまま放っておけば、ようやく未練を断ち切ろうとしていたリリスに再び大きな影響を与えてしまうのは明白だ。

蛍をこのまま野放しにしておくわけにはいかない。

そんなことはわかっている。

だが……

「サブナツク？」

行動を起こそうとしないサブナツクをダンタリアは不審に思う。

「少し……様子をみておきたい。」

「なにっ？」

だがサブナツクは、敢えて行動を起こそうとはしなかった。

1人の少女と触れ合い心を学んだリリスがどのような結末を迎えるのか、それをこの目で確かめてみたかったから。

：

雛子に抱えられたまま、蛍は噴水公園『だった』場所へと辿りついた。

思い出の場所は、懐かしの面影を欠片も残すことなく、無残に破壊され尽くしていた。

その光景を目の当たりにしたとき、自分の身体に纏わりつく闇が、一瞬だけ大きくなった。

身体から熱を奪い、五感を奪い、蛍は身体が冷たくなっていくのを感じた。視界が霞み、耳がぼやけ、意識を失いそうになる。

「蛍ちゃん。」

その時、雛子が名前を呼んでくれた。

彼女のおかげで蛍は寸でのところで意識を保つ。

だがこうしている間にも、自分の絶望の闇の影響は少しずつ強まっていく。早くしないと、あの子に会う前にまた暗い闇へと落ちて行ってしまう。

そう思った時、

「リリンちゃん……。」

ずっと待ち焦がれていた人の姿、『リリース』の姿を蛍は見つけた。

彼女の姿を見たとき、様々な思いが蛍の中を駆け回る。

信じていたのに裏切られて、騙されたとわかって絶望して、彼女のことを恨んだこともあったけど、その一方で、ずっと彼女に秘めていた想いが失われることはなかった。

そして、リリースの姿を見た蛍の中で、最も強く抱いた感情が、『安堵』だった。

これならきつと、大丈夫。

後はほんの少しの勇気があれば、彼女に想いを伝えることができる。

(がんばれ、わたし。)

蛍は勇気のおまじないと一緒に、リリスの元へと一歩踏み出す。

自分の本当の気持ちを伝えるために、そしてリリスの本当の気持ちを知るために…。

：

蛍が目の前に現れたとき、リリスは目の錯覚だと思った。

それなのに蛍の瞳は、確かにこちらを見ていた。

「リリンちゃん…。」

そして蛍の口から、確かに自分のもう1つの名前が呼ばれた。

「ほたる…どうして…？」

蛍の身に纏う絶望の闇は依然として晴れておらず、色も失われたままだ。

彼女が絶望を完全に克服できたわけではないことは、見れば明らかだった。

それなのになぜ彼女の意識がここにある？なぜ今、自分の目の前にいる？

「よかった・・・また、あえて・・・。」

そういうしながら蛍は、支えていたキュアプリズムの手を離れて一人でこちらに歩み寄る。

「わたし・・・リリンちゃんに、つたえたいことがあるの・・・だから・・・。」

彼女が平気でないのは見れば分かる。

足取りはおぼつかず、声もか細く、そして今にも倒れてしまいそうだ。

それなのにわざわざここまで来たのは、自分に伝えたいことがあるから・・・？

「こないで!!」

だがリリスは、蛍を強く拒絶する。

「今更何しに来たのよ！あたしの正体はわかったでしょ!？」

あたしは、リリンはあなたのトモダチなんかじゃない!!

あなたなんてあたしにとって、何でもない!!

それなのにどうして!!どうして・・・。」

どうして、あたしのところに戻って来たの？

リリスの喉元まで出てきた言葉が、か細く消えていく。

このままでは、全ての意味がなくなってしまう。

蛍を絶望させたことも、蛍との思い出を捨て去ったことも、この場所を、噴水公園を

壊してしまったことも・・・。

自分の世界の全てを壊して、ようやく行動隊長に戻れると思っていたのに。

「あなたの言葉なんて聞きたくない!!」

あなたのことをトモダチって言ったのも、あなたに教えたおまじないも全部嘘よ!!
最初からなかったのよ!! いい加減にわかってよ!!

じゃないと・・・あたし・・・。」

全てを捨て去りたかったのに。

蛭とこの世界の思い出を全部捨てる覚悟だったのに。

どうしてわざわざ戻って来たのだ?

そしてどうして今・・・こんなにも切ないのだ?

切ないなんて思う必要もない。

だって自分はどう、彼女を見捨てたはずだ。

あの子はもう、トモダチでもない、何でもないと言うのに、どうして・・・?

「なかったことになんて・・・できないよ・・・。」

「え・・・?」

蛭は小さな声で、だけどはつきりと聞こえる声で、涙を流しながら微笑む。

「リリンちゃんにとってはデタラメでも・・・わたしにとってはホンモノだったの・・・。」

リリンちゃんからおしえてもらったおまじないのおかげで・・・リリンちゃん側に来てくれたおかげで・・・わたしは幸せをみつけることが、できた・・・。

わたしが幸せなのは・・・全部リリンちゃんのおかげ・・・。

だからもう・・・いまさらなかったことになって・・・できないよ・・・。

「っ・・・。」

蛍の告白に、耳を塞ぎたくなつた。

だけどなぜか塞ぐことができず、彼女の言葉に耳を傾けていた。

そして無意識の内に、リリスは涙を流していた。

その意味すら知ることも出来ず、ただ止めどなく溢れる涙を拭うことしか出来なかつた。

「ねえ・・・リリンちゃん・・・。」

「やめて!!」

それでもリリスは、蛍を拒絶する。

「その名前で・・・あたしを呼ばないで・・・。」

これ以上その名前で呼ばれると、思い出してしまいそうだから。

蛍と一緒に、この世界で過ごしていたころの自分を・・・。

「それなら・・・リリス、でもいいよ・・・。」

「え．．．？」

「ただど蛍は、その言葉を受け入れた。そして自分の本当の名前で呼んできた。

「リリンちゃんでも．．．リリスでもいいよ．．．」

「わたしがことばをつたえたいのは．．．あなただから．．．」

「リリンでも、リリスでもいい。」

「リリスとして恨んでいたことも、リリスとして利用していたことも、リリン言う友達の仮面を被っていたことも、蛍は全てを受け入れている。

「全てを受け入れても尚、蛍は自分のことを．．．」

「なんで．．．どうしてよ!!あなたはキュアシャインでしょ！」

「あたしが、あたしがずっと恨み続けてきたキュアシャインで!!」

「あたしの敵で．．．プリキュアで．．．ほたるで．．．」

「蛍の想いと、自分の想い。」

「その狭間に揺れながらリリスは、涙を止めもせず蛍を見据える。

「あなたは．．．あたしの．．．」

「リリス．．．」

「その時、足もとをふらつかせた蛍が、俯けに倒れ込もうとした。

「っ！ほたる!!」

気が付けばリリスは、蛍の元へと飛び出し彼女の身体を支えていた。

蛍の足にはもう力が入っていない。

顔を覗き込むと、薄っすらと虚空を見つめていた。

もう、彼女の意識は限界に近いのだ。

「ほたる！ しっかりして!!」

リリスは今、自分の言っている言葉の意味が理解できているのだろうか？

そんな余計な思考さえ入る余地もなく、リリスは蛍の身を案じていた。

「・・・がんばん・・・ばれ・・・わた・・・し・・・」

蛍の口から、彼女がいつも己を奮い立たせる時に言う言葉が聞こえる。

そして蛍はリリスに身を委ねながら、虚ろな瞳でこちらを見据える。

「わたし・・・リリスのことが・・・好き・・・」

蛍の言葉に、リリスは静かに息を飲んだ。

「リリスのことが・・・大好き・・・」

ずっと・・・いっしょにいたい・・・

ずっとずっと・・・そばにいたい・・・」

蛍の口から語られる、自分への想い。

ずっと利用して、酷く傷つけてきたのに、尚も消えることのなかった想い。

その言葉を聞いた時、リリースは改めて、自分の想いを知った。

彼女のことは、キュアシャインのことはずっと憎かったはずだ。

そんなキュアシャインを倒すための道具として、彼女に近づいたはずだ。

最初は、扱いやすい道具程度にしか思っていなかった。

それなのに気が付けば、蛍と一緒に過ごす時間が心地よかった。

同じ楽しいを共有できないのが寂しかった。

彼女の正体がキュアシャインだと知った時は、ショックだった。

出来ることなら間違っていてほしいと思った。

どうして自分がそこまで彼女のことを想っていたのか、ずっと不思議だった。

いや、知っているはずなのに、それから目を背けていたのだ。

いずれは彼女と一緒にいられなくなると、心のどこかでわかっていたから。

でも、

「ほたる……。」

もう、自分を偽るのは止めよう。

蛍の本心を聞いたことで、リリースはようやく、自分の気持ちに素直になろうと思った。

「あたしもね……。」

嘘偽りのない、純な気持ちを、彼女に届けたい。

「あたしも、本当は、あなたのことが」

そんな都合のいいこと、許されると思ってるの？

「え．．．？」

だけどその時、リリスの頭の中に声が聞こえた。

今まで蛍のことを騙し続けてきたのに、今更友達になれると思ってるの？

「リリンちゃん？」

蛍が戸惑う様子を見せるが、リリスはそれどころではなかった。

突然頭の中に、『自分の声』が聞こえてきたのだから。

「いや．．．どうして？なんであたしの声が聞こえるの．．．？」

自分の身に何が起こっているのか分からず、リリスは頭を抱え出す。

手を離れたことで、蛍はその場で座り込んでしまうが、リリスは蛍を案ずる余裕すらなかった。

「まさか．．．リリンちゃん!!」

蛍が何かに気付いた様子を見せたその時、

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

突然、耳をつんぎくほどの叫び声^{!!!}が聞こえてきた。

声のする方に目を向けると、宙に浮いていたダークシャインが頭を抱えながら叫んでいた。

「わたし・・・?」

ダークシャインの姿を初めて見たであろう蛍は、困惑した様子で空を見上げる。

だが次の瞬間、ダークシャインがリスの背後に降り立ち、後ろからしがみ付いてきた。

「っ!?!ほたる!?!」

「リリンちゃん。」

そしてダークシャインが、初めて喋り出した。

蛍と同じだが、少しくぐもった声だった。

「わたしね・・・リリンちゃんがリスだってしったとき、すごくつらかったんだよ?

とてもつらくて、くるしくて、もうこのせかいのぜんぶ、こわれちゃえっっておもったの。」

ダークシャインの口から語られる、蛍の絶望。

それだけではない。

ダークシャインの身体から伝わる凍てつくような寒気が、リリスの全身を回って行く。

まるで凍り付いたかのように、リリスはその場から動くことができないでいた。

そのまま、ダークシャインの言葉に耳を傾けるしかなかった。

「だけどリリンちゃんのことをきいていれば、ずっといつしよにいられるっておもったの。」

だから、みんなともたたかったのに……。」

自分が命じたわけでもないのに、彼女が戦ってきたのは、全て彼女がそう望んだから？

自分と一緒にいる道を選ぶために、友達を捨てようと思ったから？

「それなのにリリンちゃんは、わたしを置いてそっちにいくんだった。」

「え……？」

そして続く言葉に、息を飲んだ。

突然ダークシャインの声色が変わり、身体を抱く力が強くなっていく。

「こんなわたしのことをきずつけて、それでもわたしはリリンちゃんのためにがんばったのに、わたしを置いて、みんなと幸せになるつもりなんだ……。」

彼女が何を言っているのかわからなかった。

ダークシャインは蛍の絶望が形を成したものの、蛍と同一の存在のはずだ。それなのに彼女を置いていくとはどういう意味だ？

置いていくはず何てない。

リリースはたった今、蛍と一緒にいる道を選ぼうとしていたのに。

そのダークシャインはソルダークではない。

扱いにはくれぐれも気を付けるのだよ。

その時、リリースはアモンの忠告を思い出す。アモンは気づいていたのだ。

ダークシャインは決して、自分の命令で動いているわけではないと。

明確な自我を持ち、目的を持って行動していたことを。

そして、自分の制御を離れる危険性があったことを。

否、最初から彼女を制御なんてできていない。

ただ彼女は、自分と一緒にいるために、プリキュアと戦う道を選んでいただけだ。

それが叶わぬとわかれば、どんな強行策にも打って出る。

何よりダークシャインは自分よりも遥かに強い。

彼女に強行策を取られた時、自分には止める術なんてない。

「いや・・・やめて、ほたる・・・。」

リリスは懇願するも、ダークシャインは手を緩めてはくれなかった。

ダークシャインは、蛍なのに、蛍の幸せを否定しようとしている。

自己矛盾としか思えない行動の中で、彼女からの束縛が強くなっていく。

「そんなこと、ぜったいに・・・。」

そして

「ゆるさないから。」

ダークシャインの口元が歪んだ次の瞬間。

ほら？ 蛍だって怒っている。蛍はあたしのことを許してなんかいない。

最初から叶わない夢だったのよ。だからあの子のことを捨てたんでしょ？

たくさん傷つけて、たくさん辛い思いをさせて、今更元に戻れると思うの？

あたしは、蛍に嫌われた。だからもう、一緒になんていられない。

頭に響く自分の声が、一斉に木霊した。

「いやあああああああああ!!!」
次の瞬間、リリースの身体から、絶望の闇が解き放たれるのだった。

：

自分の身に何が起こっているのか、蛍には理解が追いついていなかった。

突然、リリースの身体を通じて、彼女の声が聞こえてきた。

もしかして、と思った次の瞬間、黒いキュアシャインが彼女に抱きついた。

そして今……

「リリンちゃん!!」

目の前でリリースが、絶望の闇を放っていた。

彼女の元へ駆け寄るために、蛍が立ち上がろうとしたその時。

あたしが蛍のことを何度傷つけてきたと思ってるの？

蛍だってあたしのことを恨んでいるに決まっている。
今更仲直りできると思ってるの？先に見捨てたのはあたしの方なのに？

再び頭の中に、リリスの声が聞こえてきた。

リリスには触れていないのに、リリスの声が頭の中を駆け巡っていく。

だけど目の前には、さらに信じられない光景が広がっていた。

リリスの身体が突然、黒いキュアシャインの身体の中に沈んでいくのだった。

「リリンちゃん!!」

まるで底なしの沼にはまったかのように、リリスは黒いキュアシャインの身体に飲みこまれていく。

「いやーいやだ!!助けてほたる!!」

リリスが泣き叫びながら、こちらに助けを求めろ。

黒いキュアシャインがリリスを取り込もうとしている。

何とかして助けなければいけないのに、蛍の身体は動かなかつた。

「え・・・?」

自分の身体をよく見てみると、黒い霧のようなものが身体に巻き付いていた。

その霧を辿ると、黒いキュアシャインの身体へと繋がっている。

彼女の身体から放たれた霧が、自分の身体を縛り付けているのだ。

「ダメだよ、リリンちゃん。ずっと、一緒にいてよ。」

泣き叫ぶリリスとは対照的に、黒いキュアシャインはどこか恍惚とした声で語り掛けている。

リリスの身体はほとんど飲みこまれており、左手と顔だけが外に出されている状態だった。

蛍は必死に手を伸ばすが、当然リリスの元へなんて届かない。

黒いキュアシャインの放つ霧に縛られ、身動一つ取れなかった。

「蛍!!」

こちらの異変に気が付いた駆け付けた千歳が駆け寄って来る。

「ほた・・・。」

やがてリリスは蛍の名前を言い終えることもなく、黒いキュアシャインに飲み込まれていった。

だけど黒いキュアシャインはそれだけでは終わらず、蛍の身体を縛る霧を、彼女の元まで手繰り寄せていく。

「ちとせちゃん!!」

黒いキュアシャインに身体を引きずられながら、蛍は差し出された千歳の手へと、自

分の手を伸ばす。

だけど2人の手が結ばれる直前、絶望の闇によって遮られてしまった。

次の瞬間、蛍もリリスの後を追うように、黒いキュアシャインへの飲みこまれていくのだった。

：

リリスが絶望の闇を発したとき、遠くで見守っていたサブナックは反射的に彼女を助けに向かおうとした。

「リリス！」

「よせ！サブナック！」

そんなサブナックを、ダンタリアが慌てた様子で静止する。

「くっ……。」

このまま駆けつけたところで間に合わない。

仮に間に合ったとして、ダークシャインと相対したらただでは済まないだろう。

どちらにしてもリリスを助け出せた可能性はゼロだ。

サブナックは歯噛みしながらも、現状を冷静に分析する。

突然ダークシャインが異質な様子を見せ始めている。

リリスを取り込み、さらに蛍のことも取り込もうとしているのだ。

だけどそんなことよりもまず、サブナックには疑問に思うことがあった。

「なぜだ！なぜリリスが絶望の闇を!？」

リリスの身体から放たれた絶望の闇は、これまでずっと彼女が身に宿していたものだ。

今まで難なく制御できていたはずだ。それがなぜ今になって暴走を起こしたのだ？

「君は、どうして僕たちが絶望の闇を扱えるのか、考えたことはあるのかい？」

「何？」

そんなサブナックにダンタリアが問いを返す。

「俺たちが絶望の闇を使いこなせる強者だからではないのか？」

そう思うからこそ、サブナックは現状が信じられなかったのだ。

幼い少女の姿をしてもリリスはれっきとした行動隊長だ。

どれだけ人の子に絆されようとも、リリスが強者である事実に変わりはない。

現に蛍に影響されて感情を宿すようになっても、リリスの力に衰えはなかった。

今になって突然、絶望の闇のコントロールが効かなくなったなど考えられない。

「ふっ、そんな格好の良い理由だったら、どれだけ良かったことか。」

だがダンタリアは、暗に自分の答えが誤っていると含ませながら、どこか自嘲気味に笑った。

「どういう意味だ？」

「・・・僕たちにはね、『希望』がないんだよ。」

「何だと・・・？」

ダンタリアの口から語られた言葉の意味が、サブナックにはわからなかった。困惑するサブナックの様子を一瞥してから、ダンタリアは言葉を続ける。

「僕たちは、『希望』を持たない。」

『希望』を持たないから僕たちは『絶望』を知らない。

だから僕たちは絶望の闇の影響を受けないのさ。

ただ、それだけのことだよ。」

「そんな、バカな・・・。」

知らないだけ。ただそれだけの理由で自分は今まで絶望の闇を使えていたのか？
だがサブナックは、そんなはずがない、と否定することができなかつた。

希望とは何か？絶望とは何か？そう問われても答えることが出来ないからだ。

答えられるとしてもせいぜいプリキュアの力、ダークネスの力くらいだ。

なぜなら行動隊長には心がないから。

心がない何も感じない、何も思うことが出来ない。

だから希望や絶望なんて具体性にかける言葉の意味なんて、わかるわけがないのだ。だから希望を抱くことがない。絶望することもない。

絶望の意味さえ知らない自分に、絶望の闇の影響なんてわかりようもないのだ。

「・・・それなら、リリースは。」

「『希望』を、抱いてしまったんだろう。大方、あの少女と似たような希望をね。」

だから行動隊長の中で、虫と心を通わせ、感情を得たりリリースだけが、絶望の意味を知ってしまった。

心を得て希望を知った代償に、その身に宿す絶望の闇に食われてしまったのだ。

ここでサブナツクは、アモンがリリースにかけて言葉を思い出す。

希望と絶望の因果を、改めて考え直してみると良い。

君自身を『守る』ためにね。

あの言葉は恐らく、今の状況を指していたのだ。

アモンはリリスが希望の意味を知ったとき、絶望することを知っていたのだ。「リリス……。」

心を持たない行動隊長が、人に絆され心を持ったとき、同時に襲い来るのは絶望だった。

そしてこれまで御していた絶望の闇が暴走を起こし、闇の牢獄へと囚われる。

これが感情を学び、心を知り、希望を抱くことが出来たりリスの末路だとしたら……。「哀れな最期だと、そう思わないかい？」

ダンタリアがこちらの心境を代弁するかのよう語る。

蛸と過ごした時間も、この世界で見つけた居場所も、最後にはリリスの意思に関わらず、全てを失う運命だったのだ。

「……バカやろうが。」

やがて黒いキュアシャインに飲み込まれたりリスに、サブナツクは顔を歪めて呟くのだった。

…

千歳の目の前で、蛍がダークシャインに飲みこまれていく。

千歳はただそれを、見ていることしか出来なかった。

あの時、絶望した蛍を助けたくても助けられなかった時と同じように。

また同じことを繰り返してしまったのかと千歳は悔しさと顔を歪めるが、悠長に後悔している暇すらなかった。

「ウフフ……これで、ずっといいしよだよ……リリンちゃん……。」

ダークシャインが自身の身体を、愛おしそうに抱きしめながらそう呟く。

「うふ……あはは……あははははは!!」

そして狂ったように笑いだした。

蛍の声で、蛍の姿で、狂気に満ちた言動を見せるダークシャインを見ると胸が苦しくなるが、今は感傷に浸っている場合ではない。

リリスと蛍を吸収したはずなのに、ダークシャインの体積はまるで変化が見られなかった。

だが2人の力の反応がダークシャインの体内から感じられる。

2人とも無事なのは間違いないが、同時にダークシャインの体内に閉じこめられてしまったのも事実だ。

何とかして2人とも助け出さなければならぬ。

「あははははははは……うっ……うっ……」

だが突然、ダークシャインは笑うのを止め、身体を抱えて苦しみ出した。彼女の身に何が起きているのか分からず、千歳も要も、雛子も困惑する。

「あ……ああつ……きゃアアアアアアアアアア!!」

ダークシャインが叫びをあげた次の瞬間、彼女の背中から巨大な翼が出現したのだ。

まるで生物の手のひらのような形をしているその翼は、ダークシャインの身の丈を遥かに上回る大きさへと巨大化していく。

それに合わせてダークシャインの身体が一気に膨張を始めた。

「千歳ちゃん！危ない!!」

ダークシャインの身体が膨張するとともに、彼女の周囲から膨大な絶望の闇が解き放たれる。

それに気が付いた雛子が千歳に飛びつき、そのまま距離を置くことに成功する。

だがその間も、ダークシャインの身体は急速に変化していった。

スカートの丈が地に着くほどに伸び、そのまま地中へと侵入し木の根のようにコンクリートを這い回る。

両肩を掴んで交差した腕はそのまま胴体と一体化し、代わりに背中から生える巨大な

絶望の闇に飲み込まれてしまった。

全ての光が、音が失われ、絶望した人々が戦いの影響を受けることなく、街を徘徊してまわる。

リリスを吸収し、その絶望さえ得たダークシャインの力は、ついに1人で世界を飲みこむまでに膨張したのだ。

かつて蛭が、1人で世界の闇を祓ったように……。

「2人とも、まだ希望は失ってないよな？」

そんな中、要だけは真つ直ぐな瞳でダークシャインを見ていた。

彼女につられてダークシャインを見ると、まだ体内に蛭とリリスの反応が感じられた。

「蛭がリリンを連れて戻るまでの辛抱や。」

そして蛭とリリスが戻ってくることを信じていた。

ダークシャインが巨大化し、世界を一瞬で闇に飲み込むほどの力を発揮した。

そんな相手に敵うはずがない。

だが元々、敵う見込みのなかった相手だ。

それならば今の自分たちに来ることはせいぜい、蛭が無事に戻ってくることを、信じて待つくらいだ。

それしかないのであれば、ただひたすら、信じ続けるだけだ。

蛍は必ず、戻ってくと。

そしてそれを信じている限り、プリキュアの希望の光は、決して潰えることはない。

「2人とも、気張れよ。」

要の呼びかけに、千歳と雛子は決意を新たにダークシャインを見据える。

蛍は必ず戻ってくると、ただそれだけを信じて・・・。

：

何も見えない暗闇の世界。何も聞こえない静寂の世界。

自分が今どこにいるかもわからぬまま、蛍はひたすらリリンの名前を呼び続けた。

リリンちゃん!!リリンちゃん!!リリンちゃん!!

自分の声さえ聞こえない今、本当にその声が出ているのかもわからない。

リリンちゃん!!リリンちゃん!!

それでも虫は叫び続ける。

リリンちゃん!!

その声がかきつと、あの子の元へ届くと信じて。

∴

何も見えない暗闇の世界。何も聞こえない静寂の世界。

リリスは虚ろな瞳で、何もない空間を彷徨い続けていた。

なんでわたしにウソをついたの? どうしてわたしにヒドイことするの?

あたしがどれだけあの子を傷つけてきたと思ってるの？今更友達になれると思ってるの？

頭の中に聞こえてくる。自分と蛍の声を聞きながら。

：

次回予告

リリンちゃん、あなたから教えてもらったおまじないは、わたしに確かな勇気をくれた。

それはほんのちっぽけな勇気ではないけど、それでもわたしは、あなたがいたから幸せになった。

だから、あなたがくれたちいさな勇気、一步踏み出すための、ちいさな勇気。いま、あなたにかえすね。

次回！ホープライトプリキユア第23話！

絶望の果て！2人のラスト・レクイエム！

ほたる・・・あたし、ほんとうは、あなたのことが・・・。

第23話

第23話・プロローグ

上を見上げれば、一切の光の差す間もなく、暗き闇が広がっている。

辺りを見渡せば、地平線の彼方まで果てなく黒に染まっている。

一瞬にして、絶望の闇に飲みこまれた世界の中、山のように高く聳え立つ黒き女神像は、2人の少女の声で悲しい叫び声をあげていた。

彼女が叫ぶ度に世界を覆う黒は一層深みを増し、人々の嘆き声が蔓延していく。

そんな中でも、要と雛子、そして千歳の3人は光を失わずにいた。

蛭とリリンは必ず帰ってくる。その希望だけを胸に秘めて。

「来るわよ。」

やがて女神像の赤い双眸が、地上にいる要たちを捉えた。

訳もなく叫び続けているように見えたかと思ったが、こちらのことは認識できているようだ。

「キヤアアアアアアアアア!!!」

女神像が叫び声と共に、両翼から絶望の闇をしなる鞭のように伸ばして来た。

要たちは後退しながらその攻撃を回避するが、闇の鞭は地面に深々と突き刺さり、地面を抉り取るほどの衝撃が巻き起こる。

一撃で地盤を沈下させるほどの威力に要は衝撃を受けるも、次の瞬間、女神像の叫びと共に黒い衝撃波が襲い来る。

「2人とも下がって!」

雛子が前に躍り出て盾を展開するが、それは1秒も持たずに砕け散った。

だがその僅かな時間を利用して、要と千歳は速さに任せて雛子を引つ張りながら攻撃を逃れる。

女神像へと形を変えても、ダークシャインが持っていた希望の光を打ち消すと言う特性は残されているようだ。

それを思えば、彼女の力が蔓延しているこの世界で、自分たちが変身状態を保てること自体が奇跡に近いのかもしれない。

「キヤアアアアアアアア!!」

女神像の叫び声は、蛍とリリンの声が入り混じったものだ。

それを聞いた要の脳裏に、蛍に触れたときの言葉が思い出される。

みんなキライだ! ぜんぶこわれちゃえ!!

あの時、絶望した蛍は世界の全てを壊したいと願った。

その暗く深い闇が、ダークシャインを生み出した。

そしてリリスは、蛍との思い出を捨てるためにこの街を壊そうとした。

かつて自身の希望であり、世界であった全てを壊したいと言う絶望の思い。

2人の希望と絶望は、恐らくとても近いものだったのだろう。

その2つの思いが共鳴し、目の前の女神像を誕生させた。

となれば、自分たちに逃れる術はない。

なぜなら彼女にとって壊すべき『希望』の1つとして認識されているはずだから。

それならばいっそ、好都合だ。迷う必要がなくなる。

元より自分も、雛子も千歳もみんな、ただ蛍が帰ってくることを信じて、戦う以外に道は残されていないのだから。

「2人とも、絶望なんてするなよ。」

「勿論。」

「偉そうに。」

片や頼りになる言葉、片や聞き慣れた毒の言葉。

よし、大丈夫だ。2人とも希望を失っていない。

3人は無謀とも言える決意を胸に秘めて、黒い女神像を正面から見据えるのだった。

第23話・Aパート

絶望の果て！2人のラスト・レクイエム！

リリスと蚩を飲みこみ、巨大な女神像へと姿を変えたダークシャインを、サブナックは複雑な表情で見上げていた。

その身から放たれる絶望の闇は、瞬く間に世界中に蔓延し、至るところから新たな絶望の闇が生まれていくのが感じ取れる。

最早この世界は、ダークネスの手に堕ちたも同然だ。

にもかかわらず、サブナックの表情は晴れないままだった。

そんな彼の脳内に、アモンの声が聞こえてくる。

リリスが絶望したそうだな。

淡々とした状況確認。

ただそれだけを告げるアモンに、サブナックは僅かに声を震わせながら問いかける。

「アモン様、あなたはこうなることを知っていたのか？」

知っていた、とは違うな。

だが十分に予期していたさ。

あの子がかの地の少女と接触したことで心が芽生え始めていたのは、君たちだって気づいていただろう？

悪びれもせず、躊躇いもせず、あつさりアモンはこの状況を予期していたことを認める。

「ならばなぜ、それをリリスに直接伝えなかったのですか!？」

そんなアモンの返答にサブナックは声を荒げる。

リリスが出撃する前、アモンはリリスに、希望と絶望の因果を考えろ、と忠告していた。

それがこの事態を予期したうえで言葉だとしたら、なぜ回りくどい忠告などせず、希望を抱けば絶望が生まれると、それだけを伝えようとしなかったのだ？

伝えれば、リリスを救えたとも思っているのかい？

もしもあの時、直接その事を伝えていけば、リリスはあの場で希望を自覚し、そして絶望していただろう。

そうなればただリリスを失うだけの結果に終わっていた。

それくらい、君にだって分かっているはずだよ。

まるでこちらの心境を読んだかのような言葉に、サブナックは歯噛みをする。

だがアモンは本当に、リリスを守るために忠告したのだろうか？

サブナックは脳裏によぎった新たな疑問を、隠すことなくアモンへとぶつける。

「ではあなたは、この地でリリスを絶望させるために、忠告を持って延命させたのですか？」

ダークネスが根城としている闇の世界で絶望しても、リリスを失うだけに終わってしまふ。

だからあの場でリリスに忠告して絶望への延命を図り、あの女神像を生み出すためにこの地での絶望を望んだのだろうか？

それも違うさ。

そもそもダークシャインの存在自体がイレギュラーなものだ。

私にはどうあっても、この状況を想定することなんてできなかつたよ。

私がリリスに忠告したのは、リリスに少しでも長く行動隊長として戦ってもらうためさ。

君たちはまだ代替の効かない、貴重な戦力だからね。

アモンの言葉が真実であることは、サブナックにもわかっている。

かつてフェアリーキングダムを侵攻していたアンドラスは、配下であるハルフアスとマルファスを使い捨ての手駒のようになかっただが、アモンは自分たちのことを貴重な戦力として扱っている。

行動隊長の作るには素体の選別が不可欠であり、それに適応するほどの生命力を持つ人間はそういない。

未だ量産体制が整っていない以上、行動隊長の損失はアモンの計画に大きな支障をきたすことになるのだろう。

『まだ』と言う言葉も含めて、アモンの言葉は全て真実だ。

何も知らぬままでは、リリスが自滅の道を進むのは目に見えていた。

だから、忠告だけに留めておいたのだ。

全てが終わわり、リリスの希望さえも潰えたときにでも、彼女がその意味に気付けるようにね。

最も、彼女は私の言葉の意味を考える余裕さえなかったようだが。

アモンの言葉に、サブナツクは一切反論することができなかった。

行動隊長であるリリスは体内に絶望の闇を内包している。

だから希望を自覚したその瞬間に、内なる力に飲み込まれて自滅してしまう。

そしてキュアシャインと接触して心が芽生えたりリリスは、いつ希望を抱いて自滅してもおかしくないほどに不安定だった。

だからアモンは遠回しな忠告をし、リリスのことを守ろうとした。

そして本来であれば、リリスは守られるはずだった。

彼女にとっての希望の象徴である、蛍が絶望の闇へと堕ちて行ったから。

この地での戦いが全て終わったその時、リリスは希望を失い、かつての行動隊長に戻るはずだったのだ。

だがそれも全て無意味な結果に終わってしまった。

蛍が意識を取り戻し、再びリリスの前に現れてしまったからだ。

その結果、ついにリリスは希望を自覚してしまった。

そして絶望して、ダークシャインと融合した。

こんな状況を、どうすれば想定することができようか？

自分に無理なことであれば、アモンを責める道理はない。

そして何よりも、自分は今の状況を作りだすことに加担していた。

リリスの行く末を見守るために、静観を決め込んでしまったのだから・・・。

だが、これは好機だと思わないか？

キュアシャインは最後の最後まで、私の予想を上回る結果を出してくれたよ。

リリスの絶望さえも取り込んで、たったの1人で世界を闇に飲み込むとは。

「・・・」

アモンはリリスを守ろうとした。

だけどそれは、彼女のことが大切だからではない。

彼女の『力』が、大切だからだ。

アモンにとって行動隊長は『まだ』代替の効かない戦力だ。

だがダークシャインが変化したあれは、行動隊長の力を遥かに凌駕している。

替えが効くなんてレベルではない。

明らかにリリスを失った分の損失を遥かに上回っている。

アモンがリリスを守ろうとしたことは今更疑うつもりはないが、リリスと引き換えにあの力が得られたことを、アモンは好都合だと思っているのだ。

確かに戦力的には間違いなく大幅なプラスだ。

行動隊長として、合理的に判断を下すならば、間違いなく今は最大の『好機』だ。それでもサブナックは、その言葉に顔を顰めた。

ダークシャインが変化した存在、そうだな・・・仮に『ラスト・レクイエム』とでも名付けておこうか。

もはやあれに敵うものなど存在しない。

サブナック、ダンタリア。

ラスト・レクイエムと共闘し、今度こそプリキュアたちを討て。そしてかの地を闇へと誘うのだ。

色欲の鎮魂歌（ラスト・レクイエム）

愛を抱いたリリスの成れの果て。とでも言いたいのだろうか。

そしてこの状況ならば当たり前の指示がアモンから下された。

彼の言う通り、今がプリキュアを倒す千載一遇のチャンスだ。

そしてプリキュアを倒してしまえば、あとはラスト・レクイエムを放置するだけでこの世界は闇に堕ちるだろう。

自分たちの任務が、ついに達成されるのだ。

だがサブナックは

「悪いが、俺はここで傍観させてもらおう。」

アモンからの指令を拒否するのだった。

なに？

アモンの声からは疑問が感じられるが、サブナックは構わず言葉を続ける。

「プリキュアたちはダークシャインにすら手も足も出なかったのだ。

ならばやつらにラスト・レクイエムを倒せる道理はない。

我らの助力など、不要でしょう。」

ラスト・レクイエムはたったの1体で世界の全てを闇に閉じこめた。

その上、対を成す力を持つキュアシャインはもういない。

残された3人のプリキュアだけではこの戦況をひっくり返すことは不可能なのは明

らかだ。

それならば、こちらがわざわざ戦う理由などない。

と、ここまでは事実確認も踏まえた上での『建前』だ。

サブナックはそれだけで終わらず、自身の『本音』を打ち明ける。

「見届けたいのだ。希望を抱いてしまったリリスの末路を。」

この状況を引き起こしたのは、静観を決め込んだ自分にも原因がある。

それならばせめて、最後までリリスの辿る結末を見届けたい。

リリスの選択を、希望を抱いてしまった答えを、この目で見てみたい。

例えそれが、哀れな自滅と言う結果に終わろうとも……。

「僕も、静観させてもらうよ。」

すると隣に立つダンタリアまでもが同調してきた。

「お前……?」

「このような事態は非常に興味深いものだ。戦いに参加するなんて勿体ない。

この場でじっくりと観察させてもらうよ。」

やつらしい最もな理由だが、それが『建前』であることはサブナックにはわかっ

た。

恐らくアモンにも見透かされているだろう。

だけどダンタリアはサブナックと違い、『本音』を語ろうとはしなかった。

私からの指令を拒否すると？

これまで任務に失敗しようとも、特に非難することのなかったアモンが、珍しく高圧的な言葉を取っていた。

だがサブナックもダンタリアも態度を崩さない。

「必要な指令ならば受け取っていた。だが、それは不要だ。

我らが手を借さずとも、やつ一人で世界は終わる。」

「それならば、この事態を観測した方がよほど有意義だ。

僕たちは、行動隊長としてその判断を下したまでです。」

これまでのアモンからの指令は、いずれも必要だと判断したから従っていたまでだ。だけど今回は、必要ない。それならば『拒否』しても良いはずだ。

行動隊長はソルダークと違い、与えられた任務にただ従うだけの兵士ではない。

知恵を持った行動隊長だから、そしてそのように造ったのは、他ならぬアモンだ。

・・・クククツ、いいだろう。

ならばリリスの行きつく末路を、その目で確と見届けなければいさ。

そこでアモンとの交信は途絶えた。

仮にも命令拒否と言う、行動隊長あるまじき態度を取ったのにも関わらず、アモンはいつも通り興味深そうに笑いながら、こちらの提案を受け入れたのだ。

やつにとつては、知恵を持った行動隊長がこのような判断を下すことさえも、観察の対象なのかもしれない。

それはそれで釈然としないが、それ以上に現状が覆ることはないのアモンが確信しているのが最たる理由だろう。

アモンは何よりも結果を重視する。

結果さえ伴えば過程を問うことはないタイプだ。

この世界が闇に堕ちると言う結果が確定した今、命令違反など些細な顛末でしかないのだ。

「二先ず、許しは出たようだね。」

「・・・まあな。」

ダンタリアの言葉にサブナックは一言で返す。

自分もダンタリアも、戦わずにリリスの行く末を見届ける選択をした。

だけどそれが、行動隊長として同じ過ちを繰り返さないためか、ただ単に前代未聞の事態を観測したいためか、それとも、別の理由があるのか。

サブナックもダンタリアもその理由については言及しなかった。

：

暗く深い闇の中、リリスは自分の身を抱き、小さく身体を震わせていた。

あたしは蛍を傷つけた。

あたしは蛍を裏切った。

蛍はあたしのことを恨んでいる。

絶対に許してなんかくれない。

「いや……もう止めて……。」

周囲を見渡しても何も見えない。音の1つも聞こえない。

そのはずなのに、頭の中にならずと自分の声が絶え間なく聞こえてくる。

自分がどこにいるのかもわからない闇の中、頭の中では自分の声が怨嗟の言葉を響かせる。

それが『怖くて』仕方なかった。

身体が凍てつくような冷たい恐怖が、リリースをゆつくりと包み込んでいく。

どうしてリリンちゃんはわたしを騙したの？

なんでわたしにヒドイことをするの？

やがて自分の声だけでなく、蛍の声も聞こえて来た。

「ほたる……。」

蛍の声を聞いた時、朧気ながらも思い出して来た。

自分は確か、ダークシャインに取り込まれたはずだ

もしもここがダークシャインの内部だとすれば、彼女の絶望の声が聞こえてくるのも頷ける話だ。

ダークシャインは、蛍の絶望そのものだから……。

そしてそんな彼女を作り出したのは、他ならぬ自分自身だから。

リリンちゃんはわたしの友達じゃなかった。

わたしはリリンちゃんのことを信じてたのに、裏切った。

だから、虫に恨まれて当たり前なのだ。

彼女を裏切り、傷つけ、こんな暗い闇を生み出してしまったのだから。

それでも・・・

「もう・・・いや・・・」

例えば自分が招いた結果だと分かっているけど、虫の絶望の声を聞きたくはなかった。

あの子の痛みが、あの子の苦しみが、嫌と言うほどに突き付けられてしまうから。

その度にこの身を裂きたい衝動に駆られた。

だが、この闇の中では己の身を傷つけることさえできなかった。

身体の痛みと引き換えに心を惑わそうとしても、それさえも許されることはなかった。

安易な罰も逃げ道も許されず、心が壊れて沈んでいくまで、声を聞き続けるしかなかった。

(・・・これが・・・絶望の闇・・・)

やがて抗うことを諦めたリリスは、かつて蜚からソルダークを生み出したことを思い出す。

(・・・あたし・・・ほたるにこんなヒドイことをしてたんだ・・・)

この暗闇そのものが闇の牢獄だとすれば、自分はこれまでに2度も、蜚をこんなに怖い空間に閉じこめたことになる。

それを自覚した途端、リリスは罪悪感でいっぱいになった。

(・・・ほたるだけじゃない・・・あたしは・・・たくさんの人たちを・・・)

ソルダークを創るためだけに絶望させてきた。

中には自分のことを慕ってくれた、ミカと言う幼子もいた。

それはこの世界だけではない。

フェアリーキングダムでも多くの人々を絶望させて、ソルダークを創ってきた。

行動隊長としての任務だからと、一切の迷いもなくそれを実行してきた。

それがこんなに怖くて冷たい空間だと知らずに、身を以ってリリスは、初めて自分がしてきた行いが、どれだけ酷く、惨たらしいことなのかを実感した。

絶望の闇が、こんなにも辛くて、苦しくて、そして怖いものだと思っていれば・・・

(・・・なんて、都合の良い話よね・・・)

知らなかったからと言って、これまで自分のしてきたことが許されるわけではない。

こんなにも辛い思いを、大勢の人に、蛍に与えたことが許されるわけではない。そう、既に取り返しのできないところまで来ているのだ。

沢山の人を絶望させ、蛍を傷つけて、そして、2人の思い出の場所を……。

もう、元になんて戻らないよ。

あたしは全てを壊した。あの子との全てを。

だからもうあたしは、二度とあの子には会えない。

もう二度と、蛍と会うことができない。

それが何よりも辛くて、悲しかった。

(ほたる……ごめんなさい……)

出来ることなら、蛍の前で謝罪したかった。だけどそれは叶わない。

己の身を以って絶望の意味を知ったりリスは、罪悪感に苛まれながらより深い闇へと堕ちていった。

∴

暗い闇の中、螢はひたすらリリンの名前を叫び続けていた。

音も光もないこの空間では、リリンは勿論、自分が、今どこにいるのかわからない。耳を澄ましても音が聞こえないから、どれだけ叫んでも自分の声さえ聞こえない。

リリンちゃん!!リリンちゃん!!

それでも螢は叫び続けていた。

だけどそれは、リリンに声を届けたいからだけじゃない。

(リリンちゃん．．．どこにいるの．．．?)

ただ、『怖い』のだ。

自分の姿が見えず、声さえ聞こえないこの空間が。

闇の牢獄の中では全ての五感が閉ざされてしまう。

何も感じる事ができないのだから、自分が『生きているのか』さえもわからない。

それは今の螢の弱りきった心を容易く蝕み始めた。

リリンに会いたい。

その願いを心の支えにしなければ、とつづくに精神が崩壊していたところだ。

(リリン．．．ちゃん．．．)

それでも心を蝕む恐怖は、身体さえも凍てつかせるように蛍の全身へと駆け回る。それに堪えるように蛍は両肩を抱くが、自分の身体のはずなのに『触れた』実感が沸いてこなかった。

もしかしたらもう……。そんな嫌な予感にすら囚われ始める。いつそ大声で泣き叫んだ方がどれだけ楽だったろうか。

だがこのまま恐怖に耐え切れず、発狂して泣き叫んでしまったら、もう正気に戻ることが出来ないだろう。

だから蛍は、リリンのことを想いながら耐え続けるしかなかった。

それ以外に正気を保つ手段がないから……。

そして永遠に続く闇の回廊を、蛍が彷徨い続けていたその時、

(……声……?)

微かに声が聞こえてきた。その声は、徐々にはつきりと聞こえてくる。

女の子の声。それも自分の知っている声だった。

「リリンちゃん?」

自分の知っている女の子の声。その条件から蛍はリリンの声を連想する。ただ聞こえてきた声は、リリンのものではなかった。

「どうしてわたしのジヤマをするの?」

「え．．．？」

自分の声だった。

聞き覚えがあるのは当たり前だが、蛍にはなぜその声我突然聞こえてきたのかわからなかった。

「わたしのために、わたしはずっとリリンちゃんと一緒にいる道を選んだのに。

どうしてわたしが、わたしのジヤマをするの？」

そしてその声が言っていることは、支離滅裂だった。

蛍が望んだことを蛍が成し遂げて、でもそれを今、蛍が邪魔しようとしている？

そこにはまるで、自分が『2人』かのような物言いだ。

だがここで、蛍は今の状況に陥った時のことを思い出す。

確か自分と同じ姿をしていた『あの子』に取り込まれたはずだ。

「あなたは．．．だれなの．．．？」

五感を閉ざされている今、蛍には周囲の景色が分からない。

それでも、なぜだかすぐ側に『あの子』がいることだけはわかった。

「わたしは、ほたるだよ。」

自分の声で語りかける『あの子』は『ほたる』を名乗った。

そして蛍は、『ほたる』の正体が何であるかも感じ取れた。

黒いキュアシャインの姿をした『ほたる』は、きっと自分の絶望から生まれたものだ。ソルダークと同質の存在。

それでいて明確な自我を持ち、言葉を喋る異質な存在。

なぜそんなイレギュラーな存在が誕生したのかはわからない。

だが少なくとも言えることは、『ほたる』は、自分の感情から独立した存在だと言うことだ。

だから異なる自我を持ち、彼女自身の思いで動く。

『同じ』であって『異なる』存在。

有体な言葉を借りれば、もう一人の『自分』だ。

だが蛭が彼女のことを『あの子』と認識しているのとは異なり、彼女は蛭のことを同一の存在と捉えている。

だから一人称と二人称が同じなのだ。

「リリンちゃんはダークネスだった。

リリンちゃんはずっとわたしのことを騙していた。

だからわたしにだってわかってはいるでしょ？

わたしはリリンちゃんと一緒にはいられないって。」

一人称と二人称が同一なのにも関わらず、蛭はその言葉を自然と受け止められた。

そしてその言葉に対して無意識に同調する、否、『同じこと』を考えていたのだから、同意も同調もあつたものじゃない。

改めてほたるは、彼女が『同じ存在』なのだ実感する。
だから……。

「だからわたしは、リリンちゃんと1つになったの。

こうすればずっと一緒にいられるから。」

「つ……。」

彼女の考えが、目的が『分かってしまった』。

それは蛍自身、心のどこかで望んでしまったことだから……。

「でも、わたしはそれをジヤマするんだよね？」

わたし、ここからリリンちゃんのことを連れ出そうって思ってるんでしょ？」

今度は本当の意味でこちらの心境を見透かされてしまう。

きつと彼女にも、自分の心がわかってしまうのだ。

「わたしは、これを望んでたんじゃないの？」

「ちがう……わたしはこんなこと望んでない……。」

リリンのことが好きだから、リリンとずっと一緒にいたい。ずっと側にいたい。

それは蛍が心の中で思い描いていた願いだつた。

その思いが、リリンに裏切られて叶わぬものになったことで、もう一人の蛍である『ほたる』が無理やり実現させたのが今の状況だ。

「どうして？ リリンちゃんとずっと一緒にいられるのに？」

「リリンちゃんのことを傷つけてまで、叶えたいなんて思わないもん!!」

この子は同じ思いを抱えている。

でも彼女の思いは、酷く歪んでいる。

自分の想いを叶えたいことばかりが先走り、リリンのことを全く考えていない。

だからこんなこと、蛍は望んでいない。

蛍の望みはリリンと2人で……。

「それが叶わないから、こうするしかなかったのよ。」

だけどほたるは、蛍の言葉を遮る。

「リリンちゃんはわたしを傷つけた。わたしを裏切った。」

リリンちゃんはわたしのことなんて、何とも思っていないかった。」

「ちがう！ そんなことないよ!!」

ここで蛍は、自分と彼女の間に感じていた『ズレ』を思い出す。

彼女はリリンのことを信じていない。

リリンのことを傷つけてまで、自分の歪んだ想いを実現させようとしている。

それは確かに、蛍も一度思ったことだ。

リリンに正体を打ち明けられ全てに絶望した『あの時』に。
でも今は違う。

雛子に励まされ、勇気を取り戻した今の蛍は、リリンのことを信じることができる。
それなのに、自分と同じ存在であるはずの『ほたる』は、同じ想いを抱えていない。
まるで『時が止まっている』かのように、彼女の心は『あの時』に取り残されたまま
なのだ。

「だったらわたしだって、わたしの好きにしてもいいよね？」

どんな手をつかっただって、わたしはわたしの望みをかなえるの。」

「ちがう。リリンちゃんは、わたしのことを……。」

蛍が言葉を綴ろうとしたその時、突然唇に掌が振れたような感触があった。

五感を失っているはずなのに、背後から口元を塞がれたような感覚が走る。

「ついてきて……。」

耳元から聞こえる『ほたる』の声に誘われるまま、蛍はより深い闇へと堕ちていった。

：

ダンタリアはプリキュアとラスト・レクイエムの戦いを少し離れた位置から眺めていた。

だが目の前で繰り広げられていたのは、戦いと呼ぶには余りにも『一方的』な攻撃だった。

プリキュアたちがどのような攻撃を仕掛けても、ラスト・レクイエムは雄叫び一つでかき消していく。

反対にラスト・レクイエムの攻撃はプリキュアたちの如何なる守りも打ち砕いていく。

それだけじゃない。

ラスト・レクイエムの力は今も尚、留まることなく膨れ上がっているのだ。

「サブナック、気づいているかい？」

ダンタリアは隣に立つサブナックに静かに話しかける。

「ラスト・レクイエムの力が際限なく高まっていることか？」

流石、筋肉バカだけのことはあって、力の変化には敏感のようだ。

「その通りさ。」

しかも力を振るえば振るうほど、やつの力は高まっている。

消耗される力の量よりも、生み出される力の量が遥かに勝っているようだね。」

「その力の源が、リリースと蛍の絶望ってわけか……。」

サブナツクが『当たるとも遠からず』な答えを口にする。

「それだけじゃないさ。」

「どうゆうことだ?」

サブナツクが疑問に思う。

ダークネスが根城としている闇の世界が無尽蔵に絶望の闇を生み出しているように、やつらが希望と言う思いから際限なく希望の光を生み出しているように、希望の光も絶望の闇も限りのない力なのだ。

それでも、使えばその分の力が消費され、体内に蓄積された力が尽きれば当然、補充されるまでは力を行使することができなくなる。

人間であるプリキュアたちの場合は、これに体力の限界、と言うのも加わるが、いずれにしても自分たちの力には、一時的に力が使えなくなる状態があると言うことだ。

だがラスト・レクイエムには、その制限がまるで見られなかった。

そう、それはまるでフェアリーキングダムで『感じた』ときの力を同じだった。

「君は、フェアリーキングダムでキュアブレイズに起きた出来事を覚えているかい?」

「ある一帯の力がキュアブレイズに集約されたことか？」

「その通りさ、そして直後キュアブレイズは常軌を逸した力を発現した。」

あの時の出来事は、モノクロの世界にいたダンタリアたちは直接見たわけではない。それでも力の変化が十分に感じられた。

そして当事者であつたりリスの言葉から、何が起きたのかも推測できた。

城下街にいた人間と妖精たちの希望の光が全て、キュアブレイズの元に集まったのだ。

そして人々の希望を一身に受けたキュアブレイズは、急激なパワーアップを遂げた。

それもあの時感じられた力は、あの場にいた人々の総量さえも上回っていた。

ただの足し算だけで終わらない。

何かしら副次的な効力が発揮され、キュアブレイズはアンドラスを破るほどの力を得たのだ。

それだけじゃない。

あの時のキュアブレイズには、力の限界が感じられなかった。

持てる力を一度に解放し、力尽きたキュアシャインとは違う。

どれだけ力を使い続けても、街の人々から希望の光を受け取り続けることで、際限なく力を行使していた。

「あの時のフェアリーキングダム状況を考えれば、人々は同じ『希望』を抱いていたんだらう。

世界を救いたい、キュアブレイズの力になりたいと、こんなところかね。

それは世界の解放を願うキュアブレイズと、本質的には同じ思いだ。

同じ思いを持つ者同士が希望の光を抱けば、より大きな力となつて人々にもたらされる。

そうだね・・・例えばこれを、力の『共鳴』とでも呼ぼうか？

ここまでは、バカな君でもわかるだらう？」

「・・・まさか。」

何か思うことがあるのか、サブナックが眉を潜める。

「そうさ。」

あの時と同じ現象が今のラスト・レクイエムに起きていると思わないかい？

希望の光も、絶望の闇も、根源となるのは人の『思い』だ。

そして蛍とリリスの絶望は、限りなく近いものだ。

近しい希望の光を持つ者同士が引き合うように、近しい絶望の闇もまた引き合う。

彼女たちは、自分の絶望を『共鳴』させた。

だからラスト・レクイエムは際限なく力を発揮し続けている。

2人の思いが『共鳴』し続ける限りね。」
「……。」

サブナツクは黙ってダンタリアの意見を聞いている。

やつが反論しないと言うのは、肯定の裏返しだ。

最も自分自身、絶望の共鳴なんて仮説でしかないことは理解している。

この話はアモンからも聞かされたことがない。

つまりこれは、フェアリーキングダムで初めて観測されたものか、あるいはアモンで

すらまだ説明できていない希少なケースかのどちらかなのだろう。

ただダンタリアは、自分の仮説が間違っているとは思わなかった。

希望と絶望、光と闇の違いこそあれど、キュアブレイズとキュアシャインに起きた現象はあまりにも類似している。

それでも人は、同じ環境に身を置いたとしても全員が同じ思いを抱くわけではない。

これまでも多くの世界を絶望に落として来たが、絶望の共鳴と思える現象は見たことがない。

最も、共鳴を起こしていたとしても大した力ではなかったと言う可能性もある。

1人で世界の闇を祓ったキュアシャインの希望が反転した力と、心が芽生えて間もないリリスの生な思いが共鳴したからこそ、あのような化け物を生み出すことができたの

だろう。

今の状況を言葉にするならば、『奇跡』と言う言葉に他ならない。

「とても、興味深いことだと思わないかい？」

「・・・そうだな。」

肉体派のサブナックにとっては絶望の闇、ひいては人の心の性質などどうでも良いことだろう。

その反応は想定内のものだ。

だがサブナックの視線には、どこか自分に対して同情めいたものが感じられた。ダンタリアは途端に顔を顰めて、ラスト・レクイエムを見上げながら呟く。

「・・・結局、心なんて手に入れるものじゃないって、ことなんだろうね。」

「そうだな。」

続くサブナックの返事は、同じ言葉なのにやけにはつきりと聞こえるのだった。

：

ラスト・レクイエムの攻撃を避けながら、雛子は希望の光を絶やさないう心強く持つ。

だけどそれは戦うためのではない。自分の力は元々攻めることに適していないこともあるが、ラスト・レクイエムはダークシャインの特性も継いでいるようだ。

攻撃するだけ力の無駄となれば、自分の役目は前線で戦う2人をサポートすること。

雛子の視界の先には、今も果敢に戦い続ける要と千歳の姿があった。

普段のように前線より少し離れた位置から2人を援護することも考えたが、今回ばかりはダメだ。

ラスト・レクイエムの攻撃は凄まじく、一撃でも受けたらその時点で終わりだろう。

2人を守るためにもバリアの展開を遅らせるわけにはいかない。

だから咄嗟に展開できるように、2人の姿が目に見える範囲にまで距離を詰める必要があるのだ。

「キヤアアアアアアッ!!!」

ラスト・レクイエムが叫び声と共に、翼から無数の黒い槍を雨のように解き放つ。

要と千歳はそれを掻い潜りながら、ラスト・レクイエムに距離を詰める。

雛子もまた、周囲に飛び交う黒い槍をかわしながら一歩離れた地点まで2人を追従する。

そして要と千歳のスピードを以ってしても、かわし切れなかった攻撃に対して盾を展開した。

盾は一瞬だけ槍の動きを止めた後、すぐに撃ち抜かれたが、その僅かな遅延を利用して要と千歳は攻撃を回避する。

これまでどんな攻撃からも守ることが出来た雛子の盾が、1秒足らずの時間稼ぎ程度にしか使い道がなくなってしまった。

それでもまだ2人の身を守ることが出来る以上、こんなことで自信を喪失してはいられない。

自分を信じられなくなることは、希望の光を絶やすことに繋がってしまう。

2人を守るためにも、挫けるわけにはいかないのだ。

やがてラスト・レクイエムを射程に捉えた2人は、雷と火球を飛ばしていく。

だが要の雷も千歳の炎も、ラスト・レクイエムに触れた途端、跡形もなく消し飛んだ。「ちっ。」

「やっぱり、攻撃が通じない。」

舌打ちする要と困惑する千歳だが、ラスト・レクイエムからの攻撃が再び迫ってきたので一度距離を開けて態勢を整える。

その攻撃は2人だけでなく、雛子の方まで迫ってきた。

だがラスト・レクイエムの攻撃を跳躍してかわすも、雛子は着地に失敗して足元を掬われてしまった。

「あつ・・・。」

バランスを取ろうと何とか踏みとどまるが、そんな雛子に容赦なく黒い槍が降り注ぐ。

「雛子!!」

すると要が慌ててこちらに駆けつけ、雛子を抱きかかえた。

そのまま降り注ぐ槍を抜き去ろうとするが、最後の1本だけ潜ることが出来ない。

「プリキュアー・ブレイズフレアー・コンチエルト!!」

だが次の瞬間、炎の浄化技を纏った千歳が、槍に突撃して軌道を反らしてくれた。

2人の助けもあつて無事に攻撃を掻い潜るも束の間、次なる攻撃が絶え間なく降り注いでくる。

「3人とも!そこを動かないで!!」

だが槍が降り注ぐよりも先に、4人の妖精が全員を囲み、陣を展開した。

「みんな!」

雛子たちはそのまま、妖精たちの転送術でこの場を離れるのだった。

…

転送術のおかげで難を逃れた千歳たちは、路地裏に身を潜める。

少し離れたところからラスト・レクイエムの力が感じ取れたので、それほど距離は離れていないようだが、あちらから攻撃が飛んでくる気配もない。

見つかるのは時間の問題だろうが、多少の休息を入れる猶予はあるようだ。すると、隣に立つ雛子が突然バランスを崩して倒れ込んだ。

「雛子ー！」

要が慌てて身体を支えてくれたおかげで何とか転倒せずに済んだものの、雛子の目は焦点が合っておらず、息も上がっている。

「ごめんなさい、迷惑かけちゃって……。」

「雛子……あなた。」

どうしてこうなるまで気が付いてあげられなかったのかと、千歳は後悔する。

雛子はずっと蛍の絶望の闇に触れ続け、蛍の意識を助けるために彼女の心の闇と接触したのだ。

そのために大量の希望の光を使っていたはず。

そして希望の光が消費されれば、体力も消耗する。

そう、雛子の体力はもう限界なのだ。

「だい……じょうぶ。」

それでも雛子は、気丈に振る舞う。

「体力の限界で倒れるのなら、とつくに倒れているわよ……。」

私はまだ、倒れるわけにはいかない……。

蛍ちゃんを助けるまでは、倒れるわけにはいかないの!」

そう力強く宣言しながら、雛子は要の手を離れ、一人で立ち上がる。

心身ともに疲弊し、本来ならばとつくに倒れているはずなのに、彼女は今、気力だけでこの場に立っているのだ。

「雛子……。」

そんな雛子にレモンは、心配そうに見つめながらも笑ってみせた。

まるで彼女の意思を尊重するかのよう。

「ベリイ、みんな、助けてくれてありがとう。」

でもここから先は、ウチらだけで行くから、みんなは安全な場所まで避難しといて。」

「要……。だが。」

「ウチらにもしものことがあったら、誰がウチらのことを助けてくれるん？」

食い下がろうとするベリイに対して、要が縁起でもない言葉で説得する。

「ただ千歳にはわかる。それは本心からの言葉ではない。」

「要は負けるつもりも、まして倒れるつもりもない。」

「ただ、ベリイを説得するために心にもないことを言っているだけだ。」

「それでも多少、保険の意味は込められているのだろう。」

「自分たちが今戦っている敵は、どう頑張っても勝てない相手なのだから、先ほどのよ」

「うに妖精たちの力を借りて転送してもらおう必要が出てくる可能性はある。」

「そうなれば、せめてみんなだけでも安全なところにおいてもらわないと、最悪な事態で」

「共倒れになってしまう。」

「ベリイにもきくと、その意味は伝わっているはずだ。」

「・・・わかった。」

「俺は万が一に備えて避難させてもらおうよ。」

「少しやりきれない表情を見せながらも、ベリイは要の意見を受け入れる。」

「ありがとう、ベリイ。」

「そんなベリイに要ははにかんだ笑顔を見せる。」

「雛子、また倒れそうになったらいつでも助けに行くからね。」

「ふふっ、ありがとうレモンちゃん。」

一方雛子は、先ほどまでフラついていた様子を見せずにいつもの調子に戻っていた。
「千歳、くれぐれも気を付けて。」

いつもなら軽口の1つでも挟むアップルが珍しく、千歳の身を素直に案じる。

「ありがとう、アップル。」

だから千歳も、珍しく素直に感謝の気持ちを知る。

最後に千歳は、不安そうな様子を見せるチエリーに視線を向けた。

「大丈夫、虫は必ず帰ってくるわ。．．．あの子と一緒に。」

「姫様．．．。」

チエリーを励ますつもりだったけど、ちゃんと最後の言葉を言えただろうか？

表情が険しくなっていないだろうか？

少し余計なことを気にしてしまったが、チエリーはその言葉に僅かに微笑んでくれたので、杞憂に終わったようだ。

やがてラスト・レクイエムの力の反応が真っ直ぐこちらを捉えたように感じられた。

どうやら見つかってしまったようだ。

このままこの場に留まればアップルたちにも危険が迫る。

「みんな、行くわよ。」

「おう。」

「ええっ。」

少しの休息を終え、千歳たちは再びラスト・レクイエムに立ち向かう。

希望の光も、気力も、体力も全てを賭して、蛍が戻ってくるまでの時間を稼ぐために。

第23話・Bパート

プリキュアとラスト・レクイエムが戦っている最中、チェリーたちは戦いに巻き込まれないよう場所を移していた。

だが世界の全てが闇の牢獄に覆われた今、安全な場所なんてどこにもないだろう。

だからせめて、みんなの足を引っ張らないように戦場から少しでも遠い場所へ、でもみんなの戦う姿を確認できるところまでは離れよう。

要の言う万が一の時が起きた場合、すぐに転送術で救助するために。

そして、ラスト・レクイエムの様子を見るために。

「キヤアアアアアアアツ!!!」

ラスト・レクイエムが蛍の、リリスの声で叫びをあげる。

その声を聞かされた時に、チェリーの心は強く締め付けられる感覚に囚われた。

(蛍……)

あれはダークシャインが姿を変えたもの、そしてダークシャインは、蛍の絶望そのものが形を成した存在だ。

そのためか、あの子のことは他人事のように思えなかった。

あの子の叫びを、嘆きを聞くたびに蛍が泣いているような気がして……。
何よりも今、蛍があの子の中に囚われているのだ。

だからラスト・レクイエムの様子を確認しなかった。

それが危険なことであるとわかっていても、チェリーはあの子から目を反らしたくなかった。

やがてチェリーたちはひと際開けた場所へと辿りついた。

その場所は、ダークシャインの攻撃によって廃墟と化した噴水公園だった。

チェリーは静かにその場を見渡す。

蛍がリリンと共に、幸せの一時を過ごしてきた場所。

2人の思い出が沢山詰まっている場所。

でもその場所の破壊を命じたのがリリスで、実行したのはダークシャイン、蛍の絶望だった。

幸せな思い出が沢山詰まったこの場所は、絶望した2人にとっては苦しい記憶の象徴でしかなかったのだろうか？

だからリリスは全てを壊そうとして、ダークシャインも、蛍もそれを実行したのか。

そう思うととても切なくて、そして悲しかった。

2人の幸せの記憶が、今の2人を苦しめているのだから……。

「チェリー、大丈夫？」

そんなチェリーにアップルが優しく声をかけてくれた。

「……はい。」

「この戦いが終われば、ここだって戻ってくる。」

蛍ちゃんと、リリンと一緒に。」

「だからチェリーは、その時に備えて笑ってなきやダメだよ。」

「2人とも……ありがとう。」

ベリイとレモンも自分のことを気にかけてくれた。

チェリーは目に浮かんだ涙を拭いながら、天高くそびえるラスト・レクエイムを見据える。

ほんの一瞬の間に、この街の景色も、世界も全て変わってしまった。

道行く最中にも大勢の人々が、絶望の闇に覆われ、嘆いていた。

このまま放っておけば、この世界もソルダークに溢れることになるだろう。

かつての故郷のように……。

だけどもまだ、闇の牢獄が展開されてから時間が浅いはず。

ラスト・レクエイムを打ち破り、闇の牢獄を解放することが出来れば、大勢の人たち

にとつては、『一時の悪夢』で終わってくれる。

チエリーにはもう、2人の帰還を信じて待つことしか出来ないのだから、全てが終わった後は2人を笑顔で迎えてあげよう。

この場所がまたかつてのように、蛍とリリンに幸せな時間を与える場所に戻ることを信じて。

：

背後から口を塞ぐ手の感触がある。左手を強く掴まれた感触がある。

目が見えない以上、蛍は今自分がどこにいるのかはわからないが、『ほたる』を名乗るもう1人の自分の気配を背後に感じたまま、蛍は暗闇の中を彷徨い続けていた。

どこへ連れて行かれるのかと言う不安はあるが、どのみち今の自分に抗う術はない。

何よりも、先ほどまで生きている実感すら沸いてこない暗闇を1人で彷徨い続けていたので、こんな状況でも自分以外の誰かの気配と感触があれば、不思議と恐怖が和らいでいくのだった。

だが、やがて身体に触れる手のひらの感触がなくなり、ほたるの気配も感じなくなる。再び無音の闇に1人放り込まれた螢は、心細さで身を震わすが、すぐに頭の中に声が聞こえてきた。

バカな子、騙されているとも知らないで。

「これって・・・。」

「そう、リリンちゃんの心の声だよ。」

どこからともなく聞こえて来たほたるの声が、その疑問に答える。

そして頭の中に、いくつものリリンの声だけが響き渡る。

あんなデタラメなおまじないを信じるなんて、なんて単純な子。

あたしはトモダチなんかじゃないのに、信じちゃって。

ふふっ、とても利用しやすいわ。これならすぐにキュアシャインの正体に辿りつける。

出会ったばかりの、まだ自分の正体がキュアシャインだと知らなかった時の声だろう

か。

プリキュアの正体を探るために自分に近づいたこと。

単純で扱いやすいから、トモダチのフリをしていたこと。

頭の中に聞こえてくる声は、かつてリリンが自分にかけて言葉の通りであることを立証させてしまった。

「いや……。」

蛍は堪えきれず涙を流しながら、頭を抱える。

だけど頭の中に響く声は途絶えることなく広がり続ける。

闇の牢獄に囚われた時、自分の声を遮ることができなかつたことと同じ。

そして絶望の闇の中に響く言葉は、全て本心からの言葉だ。

リリンは本当に自分のことを、扱いやすい道具程度にしか思っていないなかつた。

「これでわかつたでしょ？リリンちゃんかわたしのことをどう思っていたのか？」

続くほたるの言葉が冷たく突き刺さる。

リリンの本心を聞いた蛍は、シヨックのあまり反射的に耳を塞ごうとする。

(ダメっ！)

だけど蛍は、寸でのところで踏み止まった。

自分にとって都合の良いリリンの一面しか見ないで、他のリリンは嘘偽りだと切り捨

ててしまうのは、ほたるが個人の都合でリリンを束縛しようとしているのと何ら変わらない。

蛭が知りたいのは、ありのままのリリンの心だ。

この言葉が信じられないからって、目を背けるわけにはいかない。

「リリンちゃんはわたしのこと、トモダチだなんておもってなかった。

でもわたしは、リリンちゃんのことを好きだって気持ち捨てきれなかった。

だからわたしは、リリンちゃんと1つになったの。

そうすれば、永遠にリリンちゃんと一緒にいられるのだから。」

ほたるから語られた言葉は、リリンの言葉なんかよりも遥かに恐ろしい、自分の本心だった。

ずっとリリンと一緒にいたい。ずっと側にいたい。

それが叶わないくらいなら、こんな世界なんていらぬ。

壊れてしまえばいい。

そして、リリンのことを閉じ込めてでも、自分の側に置いておきたい。

確かに蛭はそれを望んだ。

心のどこかで、そんな独占欲を抱いていただろう。

そしてリリンの言葉にこれまでの幸せを壊された絶望が、その歪んだ想いを形にして

しまった。

それがダークシャイン、『ほたる』の存在だ。

だから彼女は、自分の望みを実現させようとしている。

絶望によって歪められた望みを。

だけど、今の蛍にはそれ以外の思いがある。

リリンと一緒に幸せになりたい。リリンも一緒に幸せになつてほしい。

リリンを傷つけてまで、自分の幸せを叶えたくはない。

みんなを傷つけてでも幸せになりたいと言う思い。

みんなと幸せになりたいと言う思い。

今の蛍には、相反する2つの思いがある。

例えば正反対であっても、どちらも自分の本心、本当の気持ちなのだ。

それならばきつと・・・。

「まだ・・・わからないもん。」

蛍は体に纏わりつく絶望の闇を振り切るように、気丈にほたるに反論する。

今聞こえて来たリリンの言葉は、紛れもなく彼女の本心だ。

だけど彼女にだって、それとは反対の本心だってあるかもしれない。

「そう・・・それならもういいわ。」

どうせわたしはずっと、ここにいろしかないのだから。」

ほたるはどこか諦めた様子でそう呟き、気配を消していった。

1人残された蛍は、頭の中に響くりリンの言葉に耳を傾ける。

鬱陶しいわね。いつまでプリキユアについての情報を隠すつもりよ？

あたしのことが大切？何をバカなことを言っているの？

頭に響く言葉は真実。だけど今の言葉だけが全てじゃない。

リリンの言葉を、全部受け止めて見せる。

身体に纏わりつく絶望の闇が徐々に強大になっていく中、蛍はリリンの言葉を受け入れていくのだった。

：

どれだけ心の中で謝罪しても、どれだけ心から懺悔しても、頭に聞こえる声が途絶え

ることはなかった。

延々と繰り返される、自分の絶望の声と、蛍の絶望の声。

それを聞き続けている内に心が疲弊してしまったりリスは、やがて謝ることも止めてしまった。

そして気が付けば、蛍と一緒に過ごした記憶を振り返っていた。

(なんで……今気づいちゃったんだろ……)

だがその時の記憶を思い出せば思い出すほど、リスの心はより深い絶望の闇へと堕ちていく。

(あたし……あのとき『幸せ』だったんだ……)

今更気づいたところで、もう戻ることの出来ない過去。

自分の手で壊してしまった世界。

例えば自分が行動を起こさなかったとしても、アモンが蛍の力を利用してしようと目論んでいた以上、いずれはこうなっていただろう。

今の事態は、決して避けられることのできない出来事。

有体によれば、逃れられない運命だったのだ。

自分の望みは、どう足掻いても叶うことなんてなかった。

だからあたしは、蛍のことを裏切った。

叶わないと思い知らされたから、他の誰でもない自分の手でいつそのこと壊してやる。

その結果リリースは、取り返しのつかないことをしてしまった。

蛍のことを傷つけ、絶望させ、蛍の絶望に2人の思い出の場所を壊させた。

蛍は最後まで自分のことを信じて受け入れようとしてくれたのに……。

結局リリースは、自分のことが一番信じられなくて、最悪の結果を生み出してしまった。もう、望むことさえ許されてない。

希望を抱くことも、懺悔することも、償うことさえも許されず、ただ絶望のままに闇に落ちていくしかないのだ。

(……仕方ないよね……だってこれがあたしへの……。)

『罰』なのだから。

この世界の人々を絶望させた罰。

フェアリーキングダムを闇へと堕し入れた罰。

そして、蛍を利用し裏切った罰。

これが自分の行いに対する罰だとすれば、もう受け入れる以外の選択肢なんて、ない。

すると背後から、身体に抱きつく人の感触があつた。

「そうだよ、リリンちゃん。」

これまでのように頭に響く声ではなく、耳元で囁く声。

背後から触れる感触も、耳に届く声も、とても冷たかつた。

だけどその声は、自分が良く知る声だつた。

「ほたる……。」

誰かなんて、見なくてもわかる。

『ほたる』、ダークシャインが今、背後から抱きしめているのだ。

「リリンちゃんはわたしをきずつめた。

わたしはリリンちゃんをゆるさない。

それでもわたしは、リリンちゃんといっしょにいたかつたから。

だから、こうするしかなかつたの。」

身体を抱きしめるダークシャインの力が強くなる。

「ずっと、ここにいよ。リリンちゃん。ずっとふたりで……。」

ダークシャインがずっと一緒にいることを望んでいる。

ずっと側にいてくれると言ってくれている。

ダークシャインもまた、蛍の一面。彼女だつて蛍なのだ。

だからこれは、自分が何よりも望んだ言葉のはず。
それなのに……。

(やっぱり……冷たい……。)

ダークシャインからは、何の温かさを感じなかった。

蛍の時に感じられた安らぎを得ることが出来なかった。

ずっと一緒にいてくれることに変わりはないのに、どうしてダークシャインからは冷たさしか感じないのか？

やがてリリースは、その答えがわかってしまった。

ダークシャインの、蛍の本心が……。

(……この子は、あたしのことがキライなんだ……。)

ダークシャインは、蛍は自分のことを憎んでいる。

あれだけ酷いことをしてきたのだから、嫌われて恨まれるのは当たり前だ。

だからこの子は自分に罰を与えるために、復讐するために、この闇の世界に閉じ込めたのだ。

それなのにダークシャインは、忌み嫌う自分の側にいると言う。

それはきつと、この子の中で朽ち果てた想いの残滓が、まだあるからだろう。

そう、ダークシャインはかつての蛍の想いをなぞっているのだ。

だが、どちらにしても全て自分が招いた結果だ。

これが受け入れるべき報いと言うのなら……。

「……うん……。」

全て、受け入れて楽になろう。

もう、蛍と一緒に過ごした、あの光ある世界に戻ることが出来ないのだから……。

：

千歳は複数の火球をラスト・レクイエムに放ちながら、同時に炎のヴェールを振るう。だが火球はラスト・レクイエムの元まで届くことなく消し飛び、炎のヴェールは降り注ぐ槍に貫かれた。

ラスト・レクイエムが身に纏う絶望の闇は、ダークシャインの時よりも遥かに強大だ。千歳の放つ攻撃は、ラスト・レクイエムの身体に届くことさえなく消し飛んでいった。それでも千歳は攻撃を止めない。

攻撃が効かずとも、ラスト・レクイエムの注意を引きつけることができる。

現にラスト・レクイエムはこちらを視界に捉え、攻撃を集中させてきた。

すると今度は、ラスト・レクイエムを挟んで反対方向にいる要が、雷撃を放って攻撃を仕掛ける。

要の雷撃も自分の炎と同様に、ラスト・レクイエムに触れることなく消し飛ぶが、攻撃を仕掛けられたラスト・レクイエムは、今度は要をターゲットに絞り込んだ。

そして視界から逃れた千歳は、再び注意を引くために攻撃を仕掛ける。

こうして千歳たちは、交互に攻撃を仕掛けることで、ラスト・レクイエムの注意を分散して時間を稼いでいた。

だから自分が攻撃を仕掛けなければ、その分の負担が要と雛子にかかってしまう。

1人にかかる負担を少しでも軽くしなければ、ラスト・レクイエムからの集中攻撃を受けた時点で終わりだ。

そして1人が倒れたらその分、負荷の分散が出来なくなり、そのまま引きずられるように倒されるだろう。

勝つことが叶わない戦いを少しでも長引かせるためには、これ以外に打つ手はないのだ。

「はあっ……はあっ……。」

だが攻撃を続けていく内に、千歳の息があがってくる。

ダークシャインから連戦が続き、先ほど浄化技も使ってしまった。

その上で注意を引きつけるために絶え間なく攻撃を続けてきたので、体力の限界が来てしまったようだ。

「まだ・・・倒れるわけには・・・。」

ラスト・レクイエムから再び黒い槍が放たれ、嵐の如く降り注ぐ。

一拍、動きが遅れてしまったが、雛子の盾が目の前に現れる。

盾が砕け散る直前に動くことが出来た千歳は、そのまま攻撃を掻い潜りながら反撃に移る。

雛子の方が何倍も辛いはずなのに、いつもと変わらず一步引いた視点から守ってくれている。

体力の限界を当に超えている彼女は今、蜚を助きたい一心で気力だけを振り絞って立ち上がっている。

雛子が頑張っている以上、自分が弱音を吐くことなんて許されない。

今までずっと衝突してきたけど、自分の思いと彼女の思いがようやく一つに通じているのだ。

だから千歳は、雛子の思いを叶えてあげたいと思っている。

彼女の盾で守ってもらいながら、千歳は再び反撃に転じる。

そして雛子を挟み、反対の方向では要が雷撃を放ちながら攻撃を仕掛けていた。一か所に固まっては注意を反らすことが出来ないが、距離が空き過ぎると孤立してしまふ。

咄嗟にカバーし合える距離を適度に保ちつつ、三角形を描くフォーメーションを形成して攻撃を続ける。

千歳と要が攻撃をしかけて互いに注意を引きつけ、対応できない攻撃を雛子がカバーする。

雛子に攻撃が及びそうになれば、千歳と要がカバーする。

3人でコンビネーションを決めながら、千歳たちはギリギリのところまでラスト・レクイエムと渡り合っていく。

「キヤアアアアアアアア!!」

だが突然、ラスト・レクイエムが叫びを上げると同時に大地が大きく揺れ出した。

「なっ、なに?」

困惑する要が辺りを見回し、周囲を警戒する。

次の瞬間、雛子の背後の大地から巨大な尾が出現した。

「えっ!?!」

「雛子!!」

要が慌てて駆けつけようとするが、その隙を逃さずラスト・レクイエムが黒の槍を放つ。

「危ない!!」

千歳が炎の盾を出現させて攻撃を削ぎ、要は危機一髪のところ回避する。

一方雛子も、寸でのところで尾の攻撃を回避するが、大地から隆起する尾の数は一本ではなかった。

ラスト・レクイエムを囲むように多数の尾が地面から飛び出してくる。

突然の強襲に千歳たちの足並みは乱れてしまい、ラスト・レクイエムはその隙を逃さなかった。

大地から迫る尾の攻撃と、上空から降り注ぐ槍の攻撃が容赦なく襲い来る。

「きゃあああつ!!」

バリアによる抵抗も虚しく、雛子は尾が地面を叩く衝撃に巻き込まれる。

「くっ! ああつ!!」

上空から降り注ぐ槍をかわし切ることが出来ず、槍を掠めた要がその衝撃で飛ばされる。

「雛子!! 要!!」

そして2人に気を取られた千歳も、槍が着弾した衝撃に飲まれて飛ばされた。

捌ききれないほどの物量で圧倒された3人は、一撃で倒れ伏してしまった。

「みんな……大丈夫……?」

千歳は身体を引きずり起こそうとするが、力が入らずにその場に伏してしまう。

元々体力の限界だったところで、ラスト・レクイエムの攻撃を掠めてしまった。

掠めただけでも内包する希望の光の大半を削がれてしまい、変身状態を保つのがやっ

とだった。

「まだ……やれる……。」

「倒れるわけには……いかないの……。」

要と雛子がそう強がってみせるが、2人とも立ち上がる気配がなかった。

やがてラスト・レクイエムの赤い双眸がこちらを捉える。

倒れるいちどの元にアツプルたちが飛んで駆けつけようとするが、ラスト・レクイエ

ムの攻撃がそれを許さない。

もしも彼女たちからの救援も、間に合わなかったら……。

「……ほたる……。」

傷つけてしまつてごめんなさい。

助けてあげられなくてごめんなさい。

千歳の脳裏に幾つもの謝罪の言葉が思い浮かぶも、それを伝えることができない。

千歳にはそれが一番辛く、そして悔しかった。

：

蛭は身体を丸くしながらリリスの言葉を聞き続けていた。

鬱陶しい子ね。なんであたしがここまで付き合わなきゃならないのよ。

キュアシャイン、あなただけは絶対に許さない。

さっさとプリキュアの情報を教えなさいよ。役に立たないわね。

あなただけはあたしが必ずこの手で墮としてやる。

聞こえてくる声は自分への嘲笑と罵倒、キュアシャインへの怒りと憎しみ。

その繰り返しだった。

言葉の端々から、その時の情景も思い浮かぶ。

今の言葉はきつと、彼女と再会して間もなかった頃、一緒に母の日のプレゼントを買

いに言った時のことだ。

あの時蚩は、リリンのアドバイスを受けて素敵な一日になったと思っていたのに、リリンの心境は自分への呆れと憎しみでいっぱいだったのだ。

そして、あの後リリスが現れたと言うことは、あの時ミカを闇の牢獄に閉じこめたのは……。

聞こえてくるリリンの心の声は、蚩の心を少しずつ蝕み始める。

だけど蚩は、心が凍てついていく感覚に苛まれながらも耐え続けていた。

(まだ……きつとリリンちゃんの心はそれだけじゃない……)

だって、リリンちゃんは……わたしのことを心配してくれてたはずだから……) リリンはずっと自分を騙して、心の中では嘲笑い、そしてキュアシャインを恨み続けてきた。

その事実は変わらない。

でもリリンの本心はきつと、それだけじゃないし、そう言い切れる根拠だってある。絶望の闇に飲まれそうになった時、彼女は自分の身を案じてくれた。

ほたるに取り込まれる前だって、足元を崩した自分に駆け寄ってくれた。

そう……。リリンだってきつと……。

(その声を聞くまで……わたしは……)

いつまでも抗い続けてみせる。

自分の心の弱さに、自分の絶望に。

本当の思いを全て知るまで、この闇に飲まれるわけにはいかない。

泣きたくなる思いを堪えて、叫びたくなる衝動を抑えて、壊れゆく心を必死に繋ぎ止め、リリンの言葉に耳を傾け続ける。

その時……。

楽しいってなに？ 幸せってなに？

その声は、これまでとは違う声色だった。

どうしてあたしといると嬉しいの？ どうしてそんな風に笑えるの？

あたしにはわからない……わからないのがなんでこんなに苦しいの？

(リリンちゃん……。)

楽しいの意味が、幸せの意味がわからなくて苦しむリリンの声。

どうしてあなたがキュアシャインなの？
なんであなたと戦わなくちゃいけないのよ？

自分がキュアシャインの正体だと知り、苦悩するリリスの声。
そして……

ほたる……あたし、本当は……。

続く言葉に、蛭は涙を流した。

ようやく辿りつくことが出来た。

リリンの内に隠されていたもう一つの想いに……。

「リリンちゃん!!」

もう、迷う必要も悩む必要もなくなった。

蛭はただひたすら、リリンの名前を叫び続ける。

「リリンちゃん!!リリンちゃん!!リリンちゃん!!」

これまでよりも強く思いを込めて、必ずリリンに届けると信じて。

「リリンちゃん!!!」

何も見えない暗闇の中、自分の声も聞こえない中、リリンにだけは届くようにと、螢はひたすら彼女の名前を叫び続けた。

：

リリンちゃん!!

声が、聞こえたような気がした。

自分の絶望の声でも、螢の絶望の声でもなく、ダークシャインの声でもない。

リリンちゃん!!

リリンちゃん!!

その声が、どんどんはつきりと聞こえてくる。

その声が、名前を呼ぶ声であることがわかってくる。

リリンちゃん!!

これは都合の良い幻聴なのかと一瞬疑ったが、その声は幻ではなかった。
「ほたる? ほたるなの?」

リリンちゃん!!

その声は、紛れもなく蛍のものだった。

もしかして、自分を助けるためにここまで来てくれたのか?

あれほど酷い仕打ちをして絶望させたのに、それでも蛍は自分のことを想っていてくれたのだ。

「ほたる!!」

蛍の呼びかけに応えるように、リリスも彼女の名前を叫ぶ。

今更あの子が受け入れてくれると思っっているの?

あれだけあの子のことを傷つけたのに、あたしと一緒にいる資格があると思うの?

この世界を受け入れることがあたしの罰じゃなかったの？

「うっ……。」

だが次の瞬間、自分の頭に響く声が一層大きくなった。

ダメだよりリンちゃん。ここにいてくれなきや。

あなたはこの世界から出てはいけない。

2度と光を浴びることなんて許されないの。

身体を抱くダークシャインの力が強くなる。

頭に響く声も、ダークシャインの言葉も正しい。

自分にはもう蛍の隣にいる資格はない。

この世界を受け入れることが自分への罰なのだ。

多くの人々を絶望させ、蛍を裏切り、この世界さえも闇に誘おうとしたのだから、光のある世界に戻る事なんて許されるはずがない。

それでも……

「自分勝手なのはわかってる!!」

「どうしようもない我儘だつてことくらいわかつてる!!」
それでもあたしは……

「それでも、あたしは……あたしは!!」

あの子の側にいたい。

「ほたる!!ほたる!!」

暗闇に向かって、リリスは螢の名前を叫び続けた。

自分の想いを乗せた言葉が、この暗闇の中でもあの子に届くと信じて。

「ほたるううううううううう!!」

そして闇に向かって叫びながら片手を伸ばした次の瞬間、リリンは誰かに手を取ってもらえた感覚が走った。

とても温かくて、優しい手に……。

この手のひらの感触は、温もりは、リリンが良く知るものだった。
ずっと求めていたものだった。

次の瞬間、リリスの視界が眩い光に照らされていった。

光が収まった時、リリスの目の前に1人の少女がいた。

自分よりも背が低く、ピンクの髪をした幼い少女。

この暗闇の中でも、自分を探そうと決して光を失わなかった少女。

「リリンちゃん！」

「ほたる！」

幾度となく切り捨てようと思っても、最後まで捨てることの出来なかった少女。

蛭と再会することができたリリスは、彼女と強く抱き合う。

「ほたる……ごめんなさい……」

あたし……あなたにヒドイことをして……」

最初の出てきたのは、謝罪の言葉だった。

決して手放すことの出来ない大切な人だとわかっていたのに、彼女の思いから、自分の思いからずっと目を背けてきた。

彼女の思いを利用して裏切り、心に深い傷を負わせてしまった。

何よりも、彼女の思いをずっと受け取ることができなかった。

数えきれないほどの懺悔の念を込めて、リリスは蛭に謝り続ける。

そんなリリスに蛭は、優しく微笑んでくれた。

「……ふしぎだね。」

そしてどこか嬉しそうに話しかける。

「じぶんの声も、じぶんの姿もみえないのに、リリンちゃんの声だけは聞こえる。

リリンちゃんの姿だけは、はっきりとみえるよ。」

その言葉に、リリスは改めて周囲を見渡してみる。

蛍の言う通り、周囲は未だに暗闇に満ちていた。

そして視界には、自分の両手は映っていない。

先ほど発した謝罪の言葉も、自分には聞こえていない。

それなのに、蛍の姿だけははっきりと見えた。

まるで彼女の周りにだけ光が灯っているかのように、暗闇の中、蛍の姿だけは見ることが出来た。

そして蛍の声ははっきりと聞こえた。

先ほどまで頭の中に聞こえていた自分の声も、蛍の絶望の声も、ダークシャインの声もなく、ただ目の前にいる蛍の声だけが耳に届いていた。

「うん・・・あたしも、ほたるの姿だけ見える。」

ほたるの声だけは聞こえる。」

その言葉に蛍は嬉しそうに微笑みながら、改めてこちらを見据える。

「ねえ、リリンちゃん。わたし、リリンちゃんのことを好き。」

そして、かつて聞いたことがある言葉を、再び目の前で復唱した。

「リリンちゃんのこと、大好き。」

ずっといつしよにいたい。ずっとずっと、そばにいたい。」

その言葉は再び、リリスの胸に浸透していく。

彼女から温もりを得たリリスの心は、急に熱くなっていくのを感じた。

だからリリスも、あのととき言葉に出来なかった言葉を、今度こそ彼女にちゃんと伝えたいと思った。

「だからきかせて、あなたのきもちを。」

蛭も自分の想いを聞きたいと、同じことを望んでいた。

彼女の望みに応えるためにも、今度こそ言葉にしよう。

そう思うリリスだったが、

「あたし・・・あたしもね・・・。」

いざ言葉にしようと思った瞬間、急に声が出なくなった。

先ほどもで温かくなった心が、今度は急に冷えていく。

本当にこの想いを伝えていいのだろうか？

自分にその資格があるのだろうか？

もし蛭が自分を恨む気持ちを捨てきれいでいなかったら？

もしも蛭に想いが届かなかったら？

そんなことはあり得ないとわかっていても、拒絶されたらどうしよう、急に怖くなってしまうた。

まだ、心のどこかで迷っている。自分自身の罪を、受け止めきれないから。蛍の想いを受け取ることに、躊躇いを感じているから。

だけどそんなリリスを見ながら蛍は、目の前で勇気のおまじないをした。

「ほたる・・・？」

そしておまじないを終えた後、蛍は優しくリリスの胸に触れるのだった。

初めて蛍と出会い、勇気のおまじないを教えた時、リリスがそうしたように・・・。「あなたからもらったちいさな勇気。

一歩ふみだすための、ちいさな勇気。

いま、あなたにかえすね。」

そう言つて蛍は、リリスを応援するように再び勇気のおまじないをする。偽りのおまじないだったはずのそれは、蛍に確かな勇気を与えてきた。

そして蛍から返してもらった小さな勇気は・・・

「あかし・・・。」

リリスにも、小さな勇気を授けるのだった。

「あたしも！ほたるのことが好き！」

堪えきれず涙を流しながら、リリスは素直な想いを打ち明ける。

「ほたるのことが大好き！」

ずつと一緒にいたい！

ずつとずつと！側にいたい!!」

小さな勇気を得たリリスは、一步踏み出して想いを伝える。

蛍と同じ想いを、蛍と同じ願いを。

「リリンちゃん！」

笑顔を見せながらも、涙を堪えきることの出来なかつた蛍が、泣きながらリリスに抱きついた。

ずつと互いに傷つけあつてきたのが苦しかった。

ずつと互いに暗闇の中にいたのが怖かった。

蛍の絶望、リリスの絶望、蛍の悲しみ、リリスの憎しみ。

そして互いを想いあう心。

様々な想いが交錯しながらも、2人は互いの想いを全て受け入れ、ようやく通じ合えることができた。

それが嬉しくて、リリスと蛍は2人で喜びながら泣き続けた。

そして次の瞬間、リリスの胸から強烈な光が解き放たれるのだった。

:

モノクロの世界。

研究室でかの地の力を探知していたアモンは、困惑した様子を見せていた。

「なんだ？この光は？」

先ほどまで、かの地で感じられる希望の光は、キュアスパーク、キュアプリズム、キュアブレイズの3つだった。

それらの力はいずれも風前の灯火となっている。

だがそれらとは別に、ひと際強大な希望の光が、突然かの地から解き放たれた。

これほど大きな力はキュアシャインのものかと思っただが、その波動は、これまで感じたことのない、新たな力だった。

それだけではない。

その希望の光が感じられるのは、ラスト・レクイエムの内部からだ。

ラスト・レクイエムの中で、新たな希望の光が生まれようとしている。

「・・・まさか。」

アモンは慌てた様子で、デイスプレイにリリスの生体モニターを映し出す。するとリリスから、先ほど感じられたものと同質の希望の光が探知されたのだ。

「バカな！こんなことが!!」

行動隊長であるリリスが希望を持つばかりか、希望の光まで解放した。それだけではない。

感じられる希望の光は、『彼女たち』に近い力を放っている。

だけどそんなことはあり得ない。

4つの光、空を照らすべく大地に降りる。

伝説で伝えられた通り、プリキュアは4人までのはずだ。

『これまでの戦い』だって、4人を越えたプリキュアが誕生したことはない。

けどあの者は、キュアシャインは、これまでもあり得ないと思われたことを実現させて来た。

もしも彼女がまた、あり得ないことを引き起こしたとしたら・・・。

「こんな・・・はずが・・・。」

まるでこれから起こり得ることを予期したように、アモンはリリスのすぐ側で感じられる希望の光、キュアシャインの力に戦慄するのだった。

：

リリースから強烈な光を感じた蛍は、驚いた様子で彼女と抱き合うのを止める。

見るとリリース自身も何が起きているのか分からないと言った様子だった。

やがてリリースから解き放たれた光は、蛍の周囲にある暗闇を全て消し飛ばした。

まるで晴天の空のように、青々とした空間へと景色が変わる。

そして蛍は、自分の姿が見えていることに気付いた。

目だけじゃない。聴覚にも触覚にも感覚が戻ってくる。

絶望の闇からようやく、脱出することができたのだ。

同時に蛍は、リリースの身に起きた変化についても感じ取る。

「ほたる・・・これって・・・？」

リリースが不思議な様子で、だがどこか確信を持っているような様子で話しかけてくる。

きつと、彼女も感じ取ったはずだ。

頭の中に思い描かれたイメージを、『自分と同じ』イメージを。

「リリンちゃん。」

どこか『懐かしい』とすら思ってしまう自分に内心苦笑しながら、蛍は勇気のおまじないをしながらか、リリスに微笑みかける。

「くぐよ。」

蛍の呼びかけに、リリスは頷く。

次の瞬間、蛍の胸から放たれた光と、リリスの胸から放たれた光が交差し、それぞれが全く同じ形のシャインパクトを生み出した。

そして『リリス』から生まれたシャインパクトを『蛍』が、『蛍』から生まれたシャインパクトを『リリス』が手に取る。

「プリキユア！ホープ・イン・マイハート!!」

それぞれのパクトを受け取った2人は、同時に変身の言霊を唱える。

すると晴天と見紛う青の空間に、一輪の太陽が映り込んだ。

青空を照らす太陽から放たれた光は蛍へと降り注ぐ。

次の瞬間、世界は反転し夜空を思わせる黒の空間へと変わった。

夜空を照らす星々の光がリリスへと振り注ぐ。

蛍の身を包む光がこれまでとは異なる純白のドレスへと、リリスの身を包む光がその

対となる漆黒のドレスへと形を成す。

蛍の髪がこれまでと同じ光沢を帯びたピンクの髪へと変わり、リリスの髪が同じく光沢を帯びたエメラルドの髪へと変わる。

そして蛍の身に付けるヘアピンの片方がリリスへと渡り、蛍のヘアピンが白い羽に、リリスへ渡ったヘアピンが黒い羽へと形を変えた。

最後に蛍の右肩から天使を思わせる白い翼が、リリスの左肩から墮天使を思わせる黒い翼が現れる。

新たな姿へと変身した蛍とリリンは、互いに手を繋いだまま、円を描くように空を飛ぶ。

「伝説を超えた！2つの光!!」

そして地上に降り立つと同時に、蛍とリリスはそれぞれ名乗りをあげる。

「キュアシャイン・サハクイエル！」

「キュアシャイン・レリエル！」

・
・
・

次回予告

「リリンちゃんの勇気が、わたしの勇気！」

「ほたるの希望が、あたしの希望！」

「そう、わたしたちは！2人で1人のプリキュア!!」

次回！ホープライトプリキュア第24話！

伝説を超えた戦士！キュアシャイン・サハクイエル！キュアシャイン・レリエル！
希望を胸に、がんばれ！わたし！

第24話

第24話・プロローグ

ラスト・レクイエムの胸部から強烈な光が解き放たれる。

突然の出来事に要たちは困惑し、身を起こして様子を見守っていると、放たれた光の中から2人の人影が飛び出してきた。

その影は背に片翼の翼を羽ばたかせており、まるで天使のように思えた。ただ必要は、すぐにその天使の正体を知る。

その身から放たれるのは希望の光だ。

そしてその希望の光は、要の良く知る力だった。

助けたいと心から願っていたあの子。

無事できて欲しいと心から祈っていたあの子。

その子はもう1人の天使と手を繋ぎ、自分たちの目の前に舞い降りる。

「かなめちゃん、ひなこちゃん、ちとせちゃん。」

その子は、蛍は、自分たちの名前を笑顔で呼んでくれた。

「蛍……。」

要は目を潤ませて蛍の姿を見る。

身に纏うドレスはこれまでのピンク色と違い、純白に染まっており、右肩には白い翼が現れている。

これまでの蛍の、キュアシャインの姿とは大きく異なっているが、もう一度見たかったあの天使のような笑顔を見ることが出来た。

それだけで今は十分だった。

だが少しばかり感傷に浸った後、要はすぐに現実へと戻る。

蛍が無事であったことには安堵するが、まだリリンの姿が見当たらない。

彼女がただの心ない行動隊長でないのなら、要だつてリリンのことを助けてあげたい。

それに、蛍の隣にいる見慣れない少女のことも気がかりだ。

けどそのエメラルド色の髪には見覚えがある。

あれがまるでリリスを彷彿させるものであり……

「あれ？……あんた、まさか。」

と、ここで要は目の前にいる少女の正体を悟る。

「リリン……ちゃん？」

隣にいる雛子が、恐る恐ると言った様子で尋ねて。

「ええ、そうよ。」

その少女は笑顔で肯定した。

「・・・えく!!？」

要と雛子が驚愕な声をあげ、千歳も声こそあげないものの、表情から驚きが見て取れる。

それは、リリンがこれまで見たことのない姿に変身していたからだが、最大の原因はその容姿にあった。

漆黒のドレスに、左肩には黒い翼を持つその姿は、蛍の対となっており、そのドレスはレースとリボンで可愛らしく飾られ、パクトを入れる小物入れが腰部に付けられている。

それはまるで、『プリキュア』と同じようなドレスなのだ。

そして、彼女から希望の光の力が感じられる。

自分たちと同系統のドレスを身に纏い、希望の光を発している。

ここから導き出される結論は一つしかないが、それはこれまでの前提を覆すことになる。

「どっ、どごうゆういっどっ」

プリキュアは全部で4人だけのはずじゃないの・・・？」

誰もが抱いたであろう疑問を、千歳が震えながら口にする。

伝説では、4つの光が大地に降りると伝えられている。

だからプリキュアの人数は、自分たち4人までだと思っていたのだ。

「5人目じゃないよ。」

そんな困惑を極める自分たちに、蛍が答える。

「もともと、わたしのきぼうのひかりは、リリンちゃんからもらった勇気のおまじないから生まれたものなの。」

わたしはそれを、リリンちゃんに返しただけ。」

蛍の告白にリリンが続く。

「ほたるは、あたしが与えたおまじないを、本物の勇気へと育ててくれた。

そして蛍が返してくれた勇気が、あたしの希望となった。」

リリンが蛍に与えた勇気が希望へと変わり、蛍がリリンへ返した勇気が、同じく希望へと変わった。

そこまでの意を読み、要はリリンの力の正体を悟る。

目の前にいるのは『2人の』プリキュアではない。

「リリンちゃんの勇気が、わたしの勇気！」

「ほたるの希望が、あたしの希望！」

「そう、わたしは、」

「あたしたちは！」

「ふたりでひとりのプリキュア!!」

1つのプリキュアの力を2つに分けた、『一心二体』のプリキュアなのだ。

黒と白、天使と悪魔、対となる2人のキュアシャインが、ここに舞い降りたのだった。

第24話・Aパート

伝説を超えた戦士！キュアシャイン・サハクイエル！キュアシャイン・レリエル！

絶望の果て、常闇の世界で心を通わすことができた蛭とリリンは、2人の希望の光を1つにし、一心二体のプリキュアへと変身した。

蛭が変身するのは、白き片翼の天使・キュアシャイン・サハクイエル。

リリンが変身するのは、黒き片翼の天使・キュアシャイン・レリエル。

2人のキュアシャインは互いに手を繋ぎ、彼女たちの絶望の化身、ラスト・レクイエムを正面から見据える。

そんな2人の姿を、千歳は少し複雑な表情で見守っていた。

出来ることなら千歳も蛭と並んで戦いたかったが、希望の光が残っていない自分では足手まといになるのは分かり切っている。

今は蛭と、リリンの力に全てを託すしかできない。

そのことが、少しでも悔しかった。

「いくよ、リリンちゃんー！」

「ええっ、ほたる！」

蛍とリリンは互いの翼を羽ばたかせ、ラスト・レクイエム目掛けて飛翔する。

「キヤアアアアアアアアアアアッ!!!」

ラスト・レクイエムが2人と同じ声で泣き叫び、世界を包む闇が一層強くなっていく。ただ蛍もリリンも怯まず、放たれる絶望の闇に正面から向かい打つ。

「はあああっ!!」

2人とも、全身から希望の光を一気に解き放つ。

次の瞬間、放たれた希望の光が絶望の闇が全て打ち消し、ラスト・レクイエムへと降り注いだ。

「ウソっ!?!」

目の前の出来事に要が驚愕し、目を丸くする。

千歳も驚きを隠せずにいた。

ラスト・レクイエムの纏う絶望の闇の前に、千歳たちの攻撃は一つも通らなかつたのに、2人はそれを真っ向から打ち破つたのだ。

だがラスト・レクイエムの攻撃はそれだけでは止まらない。

翼から放たれた無数の黒い槍が蛍とリリンに飛んでいく。

だが蛍とリリンは手を繋いだまま、それぞれの片翼だけを羽ばたかせて優雅に空中を

飛び回り、全ての攻撃を回避していく。

「キヤアアアアアアアッ!!」

続けてラスト・レクイエムは、地から無数の尾を伸ばし2人元へと差し向けた。

尾は蛭とリリンを包围し、退路を封じ込めて襲い来る。

「光よ、集まれ! シャインロッド!」

だが蛭とリリンは同じ形状のシャインロッドをそれぞれ手に取り、円を描くように腕を振るう。

次の瞬間、シャインロッドより放たれた希望の光が刃のように薙ぎ払われ、取り囲む尾を全て両断した。

間髪入れずにラスト・レクイエムが再び黒い槍を放つが、蛭とリリンがシャインロッドを振るうと同時に、球状の光弾がラスト・レクイエムの元へと放たれた。

光弾は飛び交う黒い槍を全て撃ち落としても尚余り、ラスト・レクイエムの本体へと直撃する。

「キヤアアアアアアアッ!!」

ラスト・レクイエムが先ほどまでとは異なり、苦しむように叫びをあげる。「効いている。あの子に攻撃が通じてるんだわ。」

その状況を雛子が冷静に分析する。

新たな姿へと変身した蛍からは、これまで以上に強い力が感じられるが、それ以上に千歳が驚いたのは、リリンからも同じ力が感じられたことだ。

蛍とリリンの希望の光が、2人の想いが1つとなつて強大な力を生み出した。

その光景に千歳は身に覚えがあつた。

そう、かつて自分がフェアリーキングダムでアンドラスと戦つた時、自分の身にも同じことが起きたではないか。

城下街の人々から希望をもらい、みんなの希望が1つとなつてアンドラスを破る力を開眼した。

あの時と同じ現象が、今の2人に起きているのだ。

それが、元々計り知れない潜在能力を秘めていた蛍の力を全て解放し、自在に制御することが出来るようになったのだ。

それならば今の状況にも、納得がいく。

なぜなら蛍は、まだ力を制御できていない頃から、たった1人で世界を覆う闇を打ち払つたことがあるのだから。

「ウウツ・・・キヤアアアアア!!!」

蛍とリリンの攻撃を受けたラスト・レクイエムの力が、急激な衰えを見せ始める。

やがて空を覆う絶望の闇も少しずつ削がれていくのだった。

:

片翼の翼を羽ばたかせ、リリンと一緒に空を飛び回りながら、蛍はラスト・レクイエムを追い詰めていく。

あれが自分の絶望から生まれた子、『ほたる』の変異した姿であることは一目見たときから感じ取れた。

その力がこの世界の全てを覆い尽くしていると感じ取った時は戦慄したが、同時に蛍は、今の自分たちなら絶対に負けないと言う自信を持つ。

常闇の世界で互いの負の憎悪をぶつけ、それでも希望を通わせて、大嫌いも大好きも全て受け入れて、新たな希望を見つけていることが出来たからだ。

あの子はこちらの絶望を力の源としているけど、今はその絶望を乗り越えてきたのだから。

「キヤアアアアアアアッ!!」

ラスト・レクイエムが蛍と、リリンと同じ声で泣き、巨大な闇の光線を放つ。

蛍とリリンは互いの手を離し、散開しながらそれを回避する。

ラスト・レクイエムは光線を連射するが、蛍もリリンは軽やかに空中を飛び回り、放たれた光線を全て避けていく。

そしてラスト・レクイエムの懐まで潜りこみ、それぞれシャインロッドを構えた。

「プリキュア！スカイライト・エクスペロージョン！」

「プリキュア！ナイトライト・エクスペロージョン！」

そしてそれぞれのロッドから巨大な光線を放つ。

自分とリリンが放った光線をその身に浴びたラスト・レクイエムは、翼を折り、頭を垂れた。

その光景を見て、蛍は戦いの終わりを悟る。

「ほたる、やるよ。」

「うん！」

次の一撃で、全てを終わらせる。

蛍とリリンは再び手を取り、ラスト・レクイエムの頭上へと飛んでいく。

そしてそれぞれのロッドを交差させると、2つのシャインロッドが1つの武器へと融合した。

「光よ、集まれ！シャインロッド・エクステンション！」

蛍の身の丈ほどの長さ誇るロッドを、蛍とリリンは2人で手に持ち、ラスト・レクイエムへと向ける。

ロッドの先端から放たれた光がラスト・レクイエムを囲い込むように陣を描き、そこから放たれた光がラスト・レクイエムを拘束する。

「せいなる光よ。」

「闇夜を照らし」

「暗き想いを光に導け！」

「プリキュア!!ホーリーナイト・サンクチュアリ!!」

蛍とリリンは互いの力を一つに集約し、ラスト・レクイエムさえも包み込むほどの巨大な光線を解き放った。

「キヤアアアアアアアアアアアツ!!!」

次の瞬間、光に包まれたラスト・レクイエムの身体が、光の粒子となって崩壊するのだった。

：

リリンは、ラスト・レクイエムの身体が光の粒子となり消滅していく様子を見守っていた。

ラスト・レクイエムの力はもう回復する様子を見せず、世界を覆う絶望の闇も急速に衰えていく。

だけどあの子の、ダークシャインの気配がまだ微かに感じられた。

「どう……して……？」

すると滅びゆくラスト・レクイエムの内部から、ダークシャインが姿を現した。

だけでもう力はほとんど感じられず、肉体も綻び始めている。

「なんで……わかってくれないの……？」

リリンちゃんはわたしを裏切った……また裏切るにきまっているのに……。」

ダークシャインがか細い声で嘆き、身を震わせている。

「わたしはリリンちゃんとはいっしょにいられない……。」

いっしょにいることなんてできない……。」

どうせ最後には別れるんだ……裏切られるんだ……。」

ダークシャインが絶望を口にする度に、蛍の表情が引きつる。

あの子がまだ存在を保っていると言うことは、蛍の心は完全に救い切れていないから

だろう。

蛍はまだ、不安を抱えているのだ。

自分が与えてしまった絶望への不安を……。

だから自分に来ることは……。

「大丈夫。」

蛍の心を救ってあげることだ。

リリンはダークシャインに歩み寄り、優しく彼女を抱きしめる。

「もう二度と、あなたを傷つけたりなんかしない。

あたしはもう、あなたの心を裏切るようなことはしないから。

だから……安心して、ほたる。」

裏切られて絶望しても尚、蛍は側にいてくれた。

どんなに想いを歪められても、暗闇の中でも光の中でも、蛍と一緒にいられることを選んでくれた。

もう二度と、蛍のことを傷つけないためにも、蛍の想いを裏切らないためにも、彼女の想いに応えたい。

何よりもそれが自分の望み、希望でもあるから。

「……ほん……とうに……？」

リリンの言葉を聞いたダークシャインの身体が、強い光に包まれていく。

「うん、約束する。」

「ぜったい……だからね……。」

最期にリリンの身体を力なく抱きしめながら、ダークシャインも光の粒子となって消滅した。

そしてその残滓は蛍の元へと届き、蛍の身と一体化する。

蛍はそれを受け入れるように、自分の身を抱きしめる。

「ほたる、大丈夫?」

「うん、ありがとう、リリンちゃん。」

蛍が笑顔でお礼を言う。

そこには一切の絶望を祓い、曇りのない蛍の笑顔があった。

リリンの大切な記憶にある、安らぎを与えてくれたあの笑顔を、リリンは取り戻してあげることができたのだ。

「……よかった。」

蛍が本当の意味で絶望から帰還したことを、リリンは心の中で喜ぶ。

そして最後にダークシャインが消滅し、残ったディスプレイ・カードを手にとろうとする。

だが次の瞬間、デイスペアー・カードが何かの引力に引かれたかのように、突然地上へと落ちていった。

「えっ?」

驚いて地上に目をやると、そこにはサブナックとダンタリアの姿があった。

「サブナック! ダンタリア!」

サブナックはデイスペアー・カードを手に渡った後、それを天高く掲げる。

「急げサブナック、この牢獄ももう持たないぞ。」

「分かっている。」

そしてデイスペアー・カードに牢獄内の絶望の闇が集まっていった。

「させない!」

サブナックの狙いが分かったリリンは、慌てて彼の元へ駆けつける。

ラスト・レクイエムが消滅した今、この世界を閉じ込めている闇の牢獄が崩壊するの
も時間の問題だ。

だが彼はそれまでの間に、世界中の人々から絶望の闇を集めようとしているのだ。

元々デイスペアー・カードの完成条件は、不特定多数の人々から絶望の闇を集めると
言うもの。

サブナックは残された時間を使い、ある意味正規の手段でカードを完成させようとし

ているのだ。

闇の牢獄が展開されてからまだ間もないので、フェアリーキングダムのように全ての人が牢獄に囚われているようなことはないだろう。

それでも絶望の声を聞き牢獄に囚われてしまった人の数は決して少なくはない。

ダークシャインのようなイレギュラーな戦士が誕生することはもうないだろうが、アモンが切り札と称していたネオ・ソルダークの誕生は許してしまう。

「遅い。」

だがサブナックはカードをリリに向けて掲げ、闇の波動を放って牽制した。

リリンは攻撃をガードしその場にとどまるが、気づくのが遅れたせいで、あと一歩のところでデイスペアー・カードの完成を許してしまった。

「これは貴様の形見代わりにもらつていくぞ。」

そう言いながらサブナックは、どこか複雑な表情でこちらを見る。

「・・・次に戦うときは、敵か。リリス。」

「えっ?」

「ならば容赦はしない。」

ただその一言だけを残し、デイスペアー・カードと共に姿を消す。

「・・・なぜだ。なぜ君だけが・・・。」

一方でダンタリアは、忌々し気にこちらを睨み付けながら姿を消していった。

「サブナック・・・ダンタリア。」

モノクロの世界で、数えようのない時間を共に過ごした2人と言葉も交わさない内に、リリンはダークネスと袂を分かつたのだった。

：

戦いが終わりダークネスが去った後、世界を覆う絶望の闇は一瞬で消えていった。

やがて闇の牢獄もなくなり太陽の光が差し込むと、戦いで荒れ果てた夢ノ宮市が、まるで一時の幻だったかのように、元の姿を取り戻していった。

そして蛍とリリンが変身を解き、後ろを振り返ると、そこには要、雛子、千歳、チエリー、ベリイ、レモン、アツプル。

みんなの姿があった。

「蛍。」

要が優しい声で、蛍を招くように両手を広げる。

「お帰りなさい。」

その言葉に、螢は堪えきれずに涙を流した。

「かなめちゃん……みんな……。」

うつ……うわああああん!!」

泣きながら螢は、要の胸に飛び込む。

そんな螢を要は、強く抱きとめてくれた。

少し苦しいけど、要の温もりに身を委ねたかった。

ずっとずっと、暗い闇の中で不安だったから。

みんなのことを一度嫌いになってしまったから、もうみんなと一緒にいることなんてできないと思ったから。

もう、みんなと一緒にいる日常に、帰って来られないと思っていたから。

だから……。

「ごめんなさい……。」

でも、でも、わたし今……すごくうれしい……。」

みんなへの謝罪の気持ちよりも、嬉しさの方が勝っていた。

「また、みんなとともだちでいていいんだよね？」

みんなといっしょにいられるんだよね？」

あれだけ酷いことをして、酷いことを言ったのに、みんなは自分のことを許してくれたことが嬉しかった。

また友達として、受け入れてくれたことが嬉しかった。

そして、みんなのことを嫌いだと思った気持ちも、もう欠片も残っていないことが嬉しかった。

またみんなのことを好きでいられる。

蛍にとつてはそれが何よりの救いだった。

「そんなん、当たり前やないか。」

当たり前。そんな要の言葉が胸に響く。

「蛍ちゃん、もう何も不安に思うことはないよ。」

私たちはずっと、蛍ちゃんの友達だから。」

「ひなこちゃん……。」

雛子がそう言いながら、蛍の頭を優しく撫でる。

「蛍、私こそごめんなさい。」

あなたが一番辛い時に、側にいてあげられなくて。」

千歳が悲しそうな顔でそう言うが、蛍は首を左右に振るう。

「そんなことないよ。」

ちとせちゃんはいっだって、わたしのことを想ってくれてたんだよね。だから、ありがとう。」

自分の騎士になると言ってくれた千歳は、何時だつて自分を守ることを第一に考えてくれていた。

その厚意を踏みにじってしまったのは、他の誰でもない自分自身だ。

だから彼女が謝ることなんてない。

むしろ謝らなければならぬのはこちらの方だ。

「蛭……」

どこか憑き物が取れたような千歳に、蛭は笑顔を見せる。

今回の件で、みんなに沢山の迷惑をかけてしまった。

後でその事を目いっぱい謝罪しよう。後でその事で目いっぱいお詫びをしよう。

それでも今は、今だけは要の、雛子の、千歳の、みんなの優しさに甘えていたかった。

：

蛍がみんなとの再会を喜び合っていたことを、リリンも喜んでいた。

蛍の笑顔を取り戻すことが出来たから、あの暗闇から、蛍を救い出すことが出来たから。

ただどすぐにリリンの表情から笑みが消える。

そして再会を喜びあう蛍たちの光景を、リリンは直視することが出来なくなっていた。

なぜなら自分には、それを喜ぶ資格なんてないのだから……。

(もとはと言えば、あたしが自分の気持ちから目を背けていたから……。)

蛍が助かったことを喜ぶ、と言えば聞こえはいいかもしれないが、それはリリンが、蛍に友達を失うと言う悲しみを与えてしまったせいでは生じたものだ。

そもそも蛍を絶望させなければ、こんな事態なんておこらず、蛍はもつと友達と過ごす時間を楽しむことができたはずだ。

自分は彼女から、その時間を奪った。

今日のことは時が止まった以上、一瞬にも満たない時間だろうが、これまでだってずっと彼女に負担をかけていたはずだ。

それがどれほどの時間を蛍から奪ったかわからない。

それにどちらにしても、止まった時の中で蛍を苦しめたこと、要たちを悲しませたこ

とに変わりはない。

自分に、彼女たちと一緒に蛍の帰還を喜ぶ資格なんて、あるわけがないのだ。

(それに・・・これから、どうしよう・・・?)

それ以外にも、この先の問題は山積みだ。

ダークネスから離反した事について悔いるつもりはないし、元より悔いなんて『感情』を抱くような時間を向こうの世界で過ごした記憶はない。

だけど現実的な問題として、リリンには帰る場所がない。

それならばいっそ、蛍を絶望させた報いを受けるために消えてしまおうかとさえ思ったが、そんな逃げ道も用意されていない。

自分がいなくなれば、蛍が悲しむ。

それは蛍と交わした約束を破ることになる。

もう蛍のことを悲しませたくないから、自分のためじゃなくて蛍のために、否が応でも生きなければならぬ。

そして生きなければならぬのであれば、この世界で生きていく術を身に付けるしかない。

蛍たちにはみんな親がいて家族がいて、住んでいる家がある。

家族は血縁のある親族のことだから当然、得られないとして、生活の基盤となる家を

どうすれば手に入れることが出来るかなんてわからないし、そもそも時の止まったダークネスの世界では、生きると言う概念すら軽薄であり、食事や睡眠の必要すらなかったのだ。

蛍に近づくために、この世界の常識や時間の概念については多少学んだものの、この世界で『生活』することまでは考えてなかったから、生きていく上での必要な知識までは身に付けていない。

生物がこの世界で生きていくために必要な要素が、リリンには全て欠落している。

これから先、どのようにこの世界で生活すればいいのか、リリンは早速路頭に迷う思いだった。

(ほたるに聞けば、きつと快く教えてくれると思う。・・・でも。)

裏切り傷つけても尚、蛍は自分への想いを捨てなかった。

そんな彼女なら、困っていることを伝えれば喜んで力になってくれるだろう。

だけどそうしてはいけけないと、リリンの中の何か警告している。

かつてのリリンなら、蛍の好意を利用することを躊躇わなかったのに、今はその考え方をしてはいけけないと否定している。

何よりも今、蛍の隣にすることが辛いのだ。

蛍のことが嫌いになったわけじゃない。むしろその逆だ。

ずっと好きだったと言う自分の本当の気持ちと向き合ったはずなのに、なぜか蛍の隣に
いるのが辛いのだ。

蛍の隣にいと、胸が張り裂けそうになるのだ。

(罪悪感・・・なのかな・・・?)

知る限りの言葉の中で思いつくものがあるとすれば、それしかない。

まだ、蛍に負い目を感じているのだ。

だけど不可思議な事に、その感情は捨ててはいけないと自分の心が訴えている。

まだ、感情を自覚して間もないリリンには、自分自身の心を全て理解するのは難しく、
それがなぜなのかまでは相変わらずわからないままだ。

それでもその思いに素直になるのであれば、この辛い気持ちをずっと抱えていなければ
ならないと言うことになる。

(ほたる・・・)

このままここに居座れば、この罪悪感に押し潰されてしまいそうだった。

押し潰されて、自分の心をまた壊してしまつては本末転倒だ。

一旦、気持ちを整理するためにも、この場は立ち去った方がいいのかもしれない。

そう思い、リリンは蛍たちから視線を反らして立ち去ろうとしたその時、

「あつ、まつてリリンちゃん。

どこにいくつもりなの？」

こちらに気付いた蛍が呼び止めてきた。

リリンは立ち去ろうとした足を止めて、蛍たちの方へ振り返る。

「リリンちゃん。

あなた、この世界に帰る家はあるの？」

雛子が早速、今抱えている問題について質問をしてきた。

そしてそれは、ダークネスから離反したことを彼女たちも認識したことを裏付けている。

「あるわけ、ないよな。

あれば住む場所くらい答えられただろうし」

要がリリンに代わってそう答える。

彼女の言う通りだ。

これまで素性を一切隠し続けてきたのは、一重にこの世界に生活の基盤を置いていなかっただからだ。

それが千歳に疑われるきっかけともなった。

ここにいる誰もが今、リリンが置かれている現状を悟ったような様子を見せる中、ただ一人千歳だけが、複雑な表情を浮かべて黙り込んでいた。

千歳は一度、リリンに帰る場所を奪われたことがある。

そんな自分に千歳は今、何を思っているのだろうか、リリンがそれを考える暇もなく、蛭が真剣な表情でこちらを見据える。

「ねえ、リリンちゃん。

ちよつとついてきてもらってもいいかな？」

「え？」

蛭の申し出を断ることも出来ず、リリンは彼女に案内されるままこの場を離れるのだった。

∴

蛭とリリンを見送った後、要たちは並んで帰路を歩いていた。

道行く景色は元の景色を取り戻しており、人々も特におかしな様子もなく往来している。

世界中が闇の牢獄に閉じこめられ、多くの人々が囚われたはずだが、フェアリーキン

グダムの時と違い、閉じ込められていた時間が短かったおかげか、道行く人々から絶望の闇は一切感じられなかった。

それだけでなく、住み渡る青空からの果てからも闇の気配は感じられない。

きつとこの世界の人々にとっては、一時の悪い幻を見た程度のものでしかなかったの
だろう。

それは何よりも幸いだった。

少しでもダーククシャインの影響を引きずる人がいれば、きつと蚩は負い目を感じてしま
う。

そう、蚩にとつても、世界中の人々にとつても、そして自分たちにとつても、今回の
戦いは『一時の悪夢』でしかなかったのだ。

だけど悪い夢から覚めた後も、目を反らすことの出来ない現実が待ち受けている。

「蚩ちゃんたち、これからどうするんだらうね？」

雛子が心配そうに問いかける。

だが、どうする？と聞いてくるものの、雛子は既に、蚩が何を思つてリリンを誘つた
のか察しているのだろう。

勿論、要も、そして恐らくは千歳も、蚩が取ろうとしている選択がわかっているつも
りだ。

同時に、ここにいる誰もがその選択を拒否する権利なんて持ち合わせておらず、拒否するつもりもないのだろう。

元々要たちの望みは、蛍の幸せを守ることだったのに、彼女を思うあまり事を急いってしまったのが、今回の悪夢のきっかけとなってしまった。

だからもう、道を誤ってはいけない。

蛍の選んだ道が、彼女の幸せに繋がるものであるのなら、それを見届けてあげたい。

「どうもこうも、上手く行くことを祈るしかないやろ？」

だから要に今出来ることは、それが上手く行くかを見守ること。

そして……。

「それよりも、ウチらだってこれからどうするか、ちゃんと考えなあかんやろな。」

蛍の選択を受け入れた上で、『リリン』とどう接していくかだ。

要はそう思いながら視線を千歳に向けると、千歳は少しバツの悪そうに顔を下げた。

「なあ、千歳。あんたはこれからどうするん？」

そんな千歳に、要は心を鬼にして問いかける。

「どうって……。」

「正直ウチらには、あの子に対して特に思うことなんてないの。」

直接何か被害を受けたわけやないし、今回の件はさすがに腹が立ったけど、蛍が許す

ならウチらもとやかく言わない。」

ごく自然と『ウチら』と雛子を勘定に入れているが、今回ばかりは彼女からの反論はなかった。

「でも千歳、あんたは違う。」

あんたにはあの子を恨む明確な理由があるし、権利もある。」

その言葉に千歳は表情を曇らせ、それつきり黙り込んでしまった。

そんな彼女の様子に要も表情を曇らせるが、それでも視線を外さない。

今自分が彼女に言っている言葉が、どれだけ残酷なものかは分かっている。

かつて千歳が1人であの子と敵対する姿勢を見せたとき、要も雛子も彼女の考えに賛同しなかった。

その結果、彼女1人を孤立させてしまった。

そして今、あの時と同じ状況にまた陥っている

要と雛子は、もうリリンを恨んではいけないが、千歳はそう簡単に割り切ることが出来ないはずだ。

わざわざ指摘しなくともわかっていたことだが、それでも要はこの場ではつきりときせたかった。

千歳に、彼女自身の思いをうやむやにして欲しくないから。

「それじゃあ、私はここで。」

気が付けば、雛子の家に通じる分かれ道まで着いていた。

「うん、またな雛子、レモン。」

「雛子、今日はお疲れ様。レモンもまたね。」

「私だけじゃないよ。みんな、お疲れ様。また今度ね。」

「姫様、夏休み一緒にたこ焼き食べに行こつ。」

「うん……。」

それぞれ別れの挨拶を交わして、雛子とレモンは帰っていった。

別れ際、雛子は穏やかな視線を少しこちらに向けていった。

その意味を要は理解している。『後はお願ひ』、と。

それを十分に承知しているからこそ、要は改めて千歳と向き合うのだった。

：

要たちと別れた帰り道、雛子は途中までの会話を思い出していた。

蛭はあの子を、リリンを受け入れた。

ならば自ずと、蛭の取る選択は決まっていく。

だけど千歳にはリリンを恨む権利がある。

だから千歳にはリリンを拒絶する権利があるが、それは蛭の思いと相反する。

だが、蛭がどれだけリリンのことを大切に想っていても、彼女が千歳の故郷をメチャクチャにした罪は消えない。

フェアリーキングダムが元通りになった今でも、決して許されることはない。

もしもリリンへの憎しみから千歳が拒絶の答えを出したとしても、自分たちにはその思いを否定する権利はない。それが蛭であつてもだ。

どのような答えになろうとも、千歳の思いは尊重されるべきだ。

だけどそれは、リリンを受け入れている自分たちと、受け入れることが出来ない千歳と言う構図を作ってしまう。

かつてと同じように、千歳を一人だけを孤立させてしまう。

そんなことは誰も望んではいない。

だけどそれを回避するために、千歳に本心を我慢して欲しいと言うのは間違っている。

蛭とリリンが戻ってきた今でも、自分たちの抱える問題は山積みだ。

(でも・・・大丈夫よね?要)

それでもこの事をそんなに深刻に捉えていないのは、今の千歳には要が側にいてくれるからだ。

こんな時の要は、本当に頼りになる。

要には悪いが、今は全てを彼女に委ねよう。

そして千歳にも悪いことだが、今の自分にはもう、これ以上の彼女のことを気にかけていられる余力は残っていないかった。

もう、この帰路を歩くことさえ相当な負担になっているほど、今の雛子は疲れ切っていた。

「雛子、お家に着いたよ?」

そんなことをぼんやりと考えている内に、気が付けば家の前まで来ていた。

レモンが心配そうに雛子の顔を見る。

今日はレモンにたくさんの心配をかけてしまった。

彼女に辛い思いをさせてしまった。

だからもう、今日は素直に休もう。

これ以上無理をしては、またレモンに心配をかけてしまう。

「ただいま・・・。」

疲れ切った表情を隠すことなく、雛子は家にかかる。

「お帰りヒナちゃん、ちょうどお昼ご飯が出来たところだけど……。」

ヒナちゃん、どうしたの？ 顔色が悪いわよ。」

「おばあちゃん。ちよつと疲れちゃって……。」

お夕飯までには起きるから、少しお昼寝するね……。」

昼食の準備をして出迎えてくれた祖母には申し訳ないが、もう限界が近かった。

祖母は少しだけ怪訝そうな様子を見せたが、部屋に戻る雛子に何も言わなかった。

部屋に戻った雛子は、そのままベッドの上に倒れるように俯せた。

枕を両手で掴みながら、顔を横にして埋める。

まだこれで、全てが解決したわけではない。

蛭とリリンがこれからどうなるのか？

リリンとどのように接すればいいのか？

そして千歳はどんな答えを出すのか？

思うところは山ほどあり、こんな風に休んでいる暇なんて本当はないのかもしれない。

でもそれよりも今は・・・

「蛍ちゃん・・・良かった・・・。」

蛍が無事だった。ただその安堵感に包まれていたかった。

悪夢のような今日の出来事が終わったことを改めて実感した雛子は、途端に強烈な睡眠に襲われた。

「雛子、蛍が無事で、良かったね。」

そんな雛子の頭を、レモンが優しく撫でてくれた。

普段とは立場が逆になっているが、たまにはそういうのも良いかもしれない。

「うん・・・。」

レモンの手のひらの感触に浸りながら、雛子は一瞬で深い眠りにつくのだった。

∴

雛子から静かな寝息が聞こえてきたので、レモンは彼女の頭から手を離す。

彼女の安らかな寝顔を見ながら、レモンは微笑んだ。

(良かった……雛子に笑顔が戻って……。)

蛭が絶望して、絶望した蛭の怨嗟の声をずっと聞き続けて、それだけでも十分に辛かったはずなのに、雛子はその時、復讐心に駆られた千歳のことも呼び止めた。

雛子だって本当は、リリンのことを恨み、リリンに復讐したいって思っていただろうに、雛子は、その道を選ばなかった。

それでは蛭を助けることができないから。

だからあの時、雛子は千歳に『我慢して』と言ったのだ。

千歳にとってどれほど辛い言葉であったかは、雛子が誰よりもわかっていたはずなのに。

雛子は優しいから、そんな言葉を千歳にかけたときも、相当辛かったはずなのに。

そして戦いが終わった後も、先ほどまで雛子は気力だけで立ち上がり続けていた。

もし倒れたら、家で待っている祖母の菊子が心配するだろうから。

彼女はこの部屋に戻るまで、ずっと気力を保ち続けていたのだ。

「もお……頑張り過ぎたら倒れちゃうよって、注意しといたはずなのに。」

蛭に気を遣って、千歳に気を遣って、戦いに関係のない祖母のことまで気にかけて……。

全く、蛭のことを叱れないくらい、雛子だって無茶しっぱなしだ。

だがそう思いながらも、レモンの表情は穏やかだった。

雛子を非難する気持ちこれがこれっぽっちも沸いてこなかった。

むしろ彼女のことを誇らしかった。

大切な人のためならどこまでも頑張ることが出来る彼女のことだ。

自分のパートナーには勿体ないくらい、雛子は凄い人だ。

すると部屋のドアがノックされる音が聞こえてきた。

レモンは慌てて雛子の机の上に移動し、ぬいぐるみのフリをする。

「ヒナちゃん、入るわよ。」

ドアを開けて入ってきた菊子は、ベッドで眠る雛子の姿を見て微笑む。

「あらあら、お布団の上で寝るなんて、ヒナちゃんらしくないわね。」

およそ呆れているように思えない口調で、菊子は布団の側に畳まれていたタオルケット

トを雛子にかける。

「ふふっ、何があつたかはわからないけど、よっぽど、疲れているみたいね。

夕飯までに起きてこられるかしら？」

そう言つて菊子は、雛子の髪を少し撫でて、そのまま部屋を出て行った。

彼女が部屋を出ていくとき、なぜかレモンは菊子が自分と目を合わせたような気がする

のだった。

第24話・Bパート

雛子と別れ、要と並ぶ帰り道の間、千歳はずっとこれからのことを考えていた。

今回の件は、リリスを一方的に敵視した結果、蛍を傷つけてしまった自分の思慮の無さが原因だ。

その事については申し訳ないと思っっているし、こうして蛍が無事だったことは心から喜んでいる。

そして蛍が取るであろう選択も、わかっている。

だが蛍の思いを受け入れるならば、これから先リリスと接する機会が増えていくだろう。

それでも千歳にはまだ、リリスのことを許すことができない。

リリスは、かつて故郷を闇に葬った憎き敵の1人だ。

これから先、憎きリリスと共に過ごすことが出来るだろうか。

今の自分には・・・きつとできない。

いつそ、やつを許すことが出来ればどれだけ楽だったろう。

ダークネスからフェアリーキングダムを解放することはできたし、蛍も助かった今、

リリスが自分から奪ったものは全て手元に戻っている。

それでもまだ、リリスを憎む気持ちを捨て去ることが出来なかった。

全てが元通りになったとしても、やつが犯した罪は決して消えはしない。

だからと言って、蛭たちに対してリリスを許すな、というのは身勝手な話だ。

それ故に千歳は今、途方に暮れていた。

どうすることが正しい道なのか、それがわからなくなってしまったから。

「それじゃあ千歳、ウチはここで。」

気が付けば、要の帰路への分かれ道まで辿りついていたようだ。

「ええ……また、今度……。」

千歳の声が微かに震える。

その『今度』のとき、自分たちの関係はどうなってしまふのか。

それが千歳の不安を募らせていた。

かつて、リリスを敵視する千歳と、リリスを信じようとする雛子たちとで意見が対立

することがあった。

結果として雛子の方が正しかったが、それ以上に誰も自分には味方してくれないのだ

と、嫌な思いを抱いてしまったのだ。

要も雛子も、意見の違う自分のことさえ気にかけてくれていたのは分かっていたが、

それでも得も言えない孤独感を抱いてしまった。

あの時の嫌な気持ちを思い出し、千歳は鬱屈とした様子を見せる。

「千歳、これだけは言っておくね。」

すると要がこちらを見据えて話しかけてきた。

「愛想笑いだけは、絶対にしたらアカンよ。」

「え……?」

「あの子のが憎いなら、嫌いなら、蛭にもリリンにも遠慮することはない。

何より愛想繕った上辺だけの関係なんて、蛭は絶対に望まないよ。」

本心を隠したまま、上辺だけの関係を繕うこと。

千歳にとってはそれが一番、無難な選択肢だと思っていたが、要はそのことに釘を刺してきた。

それは要が、自分の本心を尊重してくれると言うことになる。

ただど要の言う通り、蛭が上辺だけの関係を望まなかったとしても、この本心のままでは、彼女の好きな人に負の感情をぶつけることになる。

それだって蛭にシヨックを与えるはずだ。

蛭を傷つけたくないと思えば、本心を隠し通すのが正しいのではないだろうか？

例え要が自分の思いを尊重してくれたとしても……。

「大丈夫、どんなことがあっても、ウチはあんたの味方だよ。」

「要……。」

「ウチだけは絶対に、あんたの味方についてやるから。」

遠慮しないであんたの思い、ドーンとぶつけてええよ。」

だけど要のその言葉に、千歳の抱いていた不安は消え去って行つた。

そして気が付けば千歳は、要の胸に飛び込み彼女に抱きついていた。

「ありがとう……要……。」

人の通りがなかったとはいえ、往来で要に抱きつくなんて何て大胆なことをしているのだろうか。

思えば今日は、彼女に助けてもらつてばかりだった。

どうすればいいのかわからず自暴自棄になりかけたときも、要は自分の本心を汲み取ってくれた。

そして今も、悩める不安を彼女が取り払ってくれた。

何よりも要は、絶対にウソをつかない子だ。

彼女が自分の味方をしてくれると言えば、必ず味方になつてくれる。

それが何よりも嬉しかった。

「それから……ごめんね。」

今日はあなたに甘えてばかりで……。」

同時に自分の全てが今、要の負担になっていることもわかっていた。

「……ホンマやて。」

ウチだつて泣きたい思はずつと堪えてるのに、みんながしつかりしてくれな、ウチはいつまで経つても泣けんやん。」

そうは言いながらも、要の表情は穏やかで声色に非難の感情は交じっていない。

それでも、その言葉もきつと彼女の本心からのものだ。

要は今日の一日、ずっと気丈に振る舞っていた。

自分と同じくらい、要だつて辛くて苦しい思いを抱いていたはずなのに、彼女はそれを表面には一切見せず、強い姿勢を見せてくれていた。

そのおかげで、立ち直ることができた。

そんな彼女だから、今日は最後までその強さに甘えていたかった。

今日はもう、自分ではどうしようもないくらい弱り切っていたから……。

そして要は、そんな千歳の気が済むまで、ずっと胸を貸してくれた。

「……もう、大丈夫?」

やがて要から離れる千歳に、彼女が少し心配そうに声をかけてくれた。

「ええ、何から何までありがとう。後はもう、大丈夫よ。」

私も、自分の本当の気持ちと向き合ってみるから。」
「そっか。」

微笑みながら要は安堵の表情をみせる。

本当に、何から何まで彼女に心配をかけて、何から何まで頼りっぱなしだ。

「それじゃあ、私はこれで。」

「んっ、また今度な、千歳……ってきつきも言ったやん。」

2人でひとしきり笑った後、千歳は要と別れる。

「本当に、良い友達を持ったわね。千歳。」

そんな自分たちのやり取りを見守っていたリン子が、どこか嬉しそうにそう話す。

「……ええっ。」

千歳も頬を赤く染めながら、リン子の言葉に静かに同意した。

要の厚意を無駄にしないためにも、自分も本心と向き合おう。

自分はリリースのことを憎んでいる。それだけは隠すわけにはいかない本心だ。

だけど自分の本当の気持ちが、その1つだけでも限らない。

リリースのことをどうしたいのか、リリースとどう向き合いたいのか。

自覚のない気持ちを、これから確かめてみよう。

そしていつの日か、要には今日の日の恩を返そう。

そう思いながら千歳は、小さくなつていく要の後姿を見送るのだった。

：

千歳と別れた後、要は安堵の表情を浮かべながら帰路を歩いていた。

携帯を取り出して時間を確認すると、ようやく昼になったところ。

まだ半日が過ぎたばかりなのに、今日はとても辛くて、苦しい一日だと思つてしまう。

蛍を守つてあげられなかった罪悪感。

蛍に恨まれたことを知つた傷心。

ダークシャインに何もできない無力感。

そして、世界が闇に覆われた絶望。

どれだけ自分を奮わせて強気に立ち上がつていても、心に抱いた不安を消すには余りにも状況が絶望的だった。

だからこそ、全てが元に戻つてくれて本当に良かったと思つている。

蛍はリリンと一緒に無事に帰つて来られたし、これから彼女が取る選択を要は受け入

れるつもりだ。

1人無理をし続けた雛子も、帰り際の様子を見る限りでは大丈夫だろう。

今日一日安静にしていけば、疲れもなくなるはずだ。

そして千歳もきつと、大丈夫だ。

闇の牢獄にいたときは、何度も最悪の事態が頭によぎったが、こうして全てが無事に終わってくれたことを改めて実感した要は、ふと気を緩めてしまった。

頼まで流れ落ちそうになった涙を、すぐに手で拭き取る。

「要……」

そんな要の様子を、ベリイが少し心配そうに見つめていた。

「別に、無理してるわけやないよ。ただ、ここで泣いちゃうと、多分止まらない。」

だからせめて家について、自分の部屋に戻ってからでないといけない。

こんなところで大泣きしては、ご近所の方々に心配をかけてしまうし、家の中でだつて、自室以外では兄が心配する。

今日の出来事はみんなにとって、ほんの一時の悪い夢でしかないのだから。

夢を夢のまままで終わらせるためにも、自分は表面上、平静でいなければならぬ。

泣くのは人知れず、ひっそりとい。

そう思いながら要は、零れ落ちそうになった涙を必死に堪える。

「……そっか。」

ベリイは一瞬、こちらに伸ばそうとした手を引つ込めた。

要は彼の氣遣いに内心、感謝する。

今の状況で彼に優しくされてしまったらきつと、涙を堪えることが出来なくなる。

でも彼のことだから、もしかしたら家に着いたとき、氣を利かせて部屋には入らないって言うかもしれない。

真面目で誠実故に、少し氣が利きすぎているのが、ベリイという青年だからだ。

「……なあ、ベリイ。」

だから要は、そんなベリイには素直になろうと思つた。

「なんだい?」

「帰つたら、ベルになつてくれへん?」

「え?」

「……胸、貸してほしいの……。」

一人で抱えきれなくなった時は、彼にだけは弱音を吐こうと、彼にだけは不安も悩みも全て打ち明けようと。

「……ああ、わかつた。」

ベリイは笑顔でそれを引き受けてくれた。

その日、要の涙を見た人は、ベリイただ一人だった。

：

蛍に案内されるままりリンが辿りついた場所は、見たことのない一軒家だった。

だが蛍がわざわざ連れてきたと言うことは、ここはもしかしたら彼女の家なのかもしれない。

「ここ、わたしのおうちなんだ。よかったらあがつてよ。」

案の定、目の前にあるのは蛍の家だったが、リンはなぜ自分が招かれたのかわからなかった。

「でも、あたし……。」

「ほんの、すこしだけでいいから。おねがい。」

今は蛍の側にいるのが辛い。

だから一人になりたかったが、蛍が自分の手を握り懇願する。

こうなったときの蛍は、普段の弱気なのが嘘に思えるほど頑固になるのは身に染みて

いる。

「・・・わかった。」

だからリリンは断ることを早々に諦め、蛍の言葉に耳を傾けることにした。

すると蛍は安堵の笑みを浮かべて、鞆から鍵を取り出し家のドアを開けるのだった。

蛍の家に招かれたリリンは、そのままリビングまで案内された。

「えと、そこにソファがあるし、てきとうにくつろいでくれていいよ。」

少し遠慮がち・・・と言うより緊張している様子で蛍が言う。

だが『寛いで』と言われても、人の家を訪れたことのないリリンには、こんな時にどう過ごせばいいかなんてわからない。

寛ぎ方のわからないリリンは、困惑した様子そのままでもなく視線を彷徨わせてる。

「そだ、そろそろおひるの時間だし、よかつたらいつしよにたべる？」

リリンちゃんも、おなかすいてるよね？」

「え・・・？」

蛍の言葉を聞いたリリンは、彷徨わせていた視線を彼女に向ける。

なぜ彼女がそんなことを聞いてくるのか一瞬戸惑ったが、蛍はきつとダークネスの性

質について知らないのだろう。

リリンには食事を取る必要がなければ、味覚もない。

かつて蛍と2人でクレープを食べたとき、味の感覚が分からずに苛立ったこともある。

蛍が自分の分の食事を準備するのも、それを振る舞うのも、まるで意味のないことだ。それなのにリリンは、蛍の申し出を断らなかつた。

「……ええ、お願いするわ。」

ここに招かれたことを断れなかつた時点で、リリンは蛍の思うように、やりたいようにさせてあげたいと思つたからだ。

反対したところで押し通されれると思つたのが半分、もう半分は、彼女の望みを叶えることで、少しでも罪滅ぼしが出来ればと思つたからだ。

「わかつた、それじゃあ、ちよつとだけ待っててね。」

「退屈だったらそこにあるテレビ、勝手に見てもいいわよ。」

蛍とチェリーは揃って台所へと向かい、昼食の仕度を始める。

実際のところ、蛍に食事を振る舞ってもらうことが、これまで彼女にしてきたことへの清算に繋がるはずもなく、リリンは苦い思いを抱えたまま、蛍に言われた通り待つことになつた。

リリンは再び、リビングを見渡す。

窓際には花瓶が、壁には風景画が飾られており、先ほど『ソファ』と呼ばれた腰掛けの前にあるのは、確か『テレビ』と呼ばれた映像機器だ。

一通り部屋を見渡したリリンが抱いた感想は、『質素』。

この一言に尽きるだった。

他の誰の家も見たことはないが、蛍の家らしいと言う雰囲気を感じ取れた。

だがここが蛍の家である以上、彼女の家族もここで一緒に暮らしているのだろう。

蛍一人の好みではないはずなのに、ここまで蛍らしさを感じると言うことは、彼女の家族も似たような好みを持っているのかもしれない。

だが、家族と言うものは血縁による共同体程度の認識しかないリリンには、家族と言うものは好みが似るものなのかどうかなんてわからない。

自分は『親』も『兄弟』もいないのだから、『家族』のことなんて知りようもない。
(家・・・家族・・・か。)

ふと、台所にいる蛍の方を覗きこむと、『冷蔵庫』と呼ばれる食料を貯蔵する家電が目につき、蛍がそこから取り出したものを『電子レンジ』を使って解凍していた。

だが『冷蔵庫』も『電子レンジ』も、もしも話題に振られたときのために自然と答えられるようと、知識として身に付けただけのもので、実物を見たのは今日が初めてだつ

た。

先ほどのテレビだって、電波を受信してスクリーンに映像が映し出されるもの、と言う知識はあるが、アモンの研究室にあった大型のモニターみたいなものだろうとぼんやりと思ったことがあるくらいだ。

当然、どの家電も使い方なんて分からない。

これまで興味さえなかったものだ。

蛭に近づくと言う任務さえなければ、知識を身に着けることもなかっただろう。

蛭の家を見渡したリリンには、知識として持つていてもその意味や使い方までは知らないことを改めて思い知る。

(本当にこんなので、この世界で暮らしていくことなんてできるの・・・?)

途端にリリンは不安になる。

蛭との会話が不自然にならない程度の知識しかない自分が、この世界でどうやって生きて行けるのだろうか？

自分が生きていくとしたら、子供に分類されるはず。

だがこの国では、子どもは親の庇護の元で暮らすのが当たり前となっている。

親を持たない自分は、そもそもどこで暮らしていけばいいのだ？

仮に運よく住居を得たところで、今の蛭のように食事の支度はできるのだろうか？

・・・と、ここまで考えてから、リリンはこの悩みには意味がないことを思い出す。
(どうせあたしはダークネスなんだし、食事なんてしなくてもいいか。)

ダークネスから離反したとはいえ、行動隊長の性質は変わらない。

食事を取ったり休眠したりと、人が生きるために必要な要素の内、幾つかは省くことができるはずだ。

そう思った時、再び胸の奥がチクリと痛む。

結局自分は、およそ生きるとは程遠い生活を余儀なくされるのだ。

この身体でいる限り・・・。

「・・・あれ?」

ここでリリンは、自分の身体に僅かな違和感を覚えた

ついさっきまであったものが、途端に消えてしまったような、不思議な『喪失感』が身体を駆け回っていく。

「リリンちゃん、どうかしたの?」

「え? ううん、なんでもないわ。」

こちらの様子を怪訝そうに伺う蛍に、リリンは適当に返事をする。

「そう、おまたせ、リリンちゃん。」

昨日ののこりものをあたためただけだから、たいしたものはいけど。」

気が付けば、蛭が食事の支度を終わらせていた。

大したものはないと言うが、どのみち味なんてわからない。

蛭に促されるまま、テーブルについたリリンだったが、その直後、蛭が並べた食卓を前にして自分に訪れた変化に気付く。

「・・・あれ？」

蛭の並べた昼食から、微かだが匂いがしたのだ。

「リリンちゃん？」

「えと・・・なんでもない。」

「ほんとうに？ なにか苦手なたべものとかあった？」

「ううん、だいじょうぶ。」

「そう？ それじゃあ、いただきます。」

蛭とひとしきり会話を終え、蛭に做ってリリンも『頂きます』をする。

蛭の隣では、チエリーがサクラへと姿を変えて一緒に頂きますをしていた。

2人に做って箸を使い、目の前にある白いご飯を口に運ぶ。

(えっ・・・?)

すると今度は、口の中で微かな熱と、得も言われぬ感覚が広がっていった。

咀嚼すると、その感覚は徐々に強く感じられていく。

今まで感じたことのない感覚にリリンは困惑するが、それらは不思議と不快なものなく、自然と箸が進んでいく。

「・・・ふふっ。」

そんなリリンを見て蛍が静かに微笑んだ。

「ほたる？」

「おいしいみたいで、よかった。」

そして彼女の言葉で気づかされた。

自分が感じた感覚が、『味覚』であつたことを。

（・・・そう言えば、あたしの身体。）

同時にわかつてしまった。自分が抱いた『喪失感』の正体が。

（絶望の闇が・・・感じられない・・・？）

リリンから五感を奪っていた力、絶望の闇が身体から消え去っていたのだった。

：

昼食を終えた螢は、3人分のお皿を片付けてからしばらくリビングで時間を潰していた。

とは言つても、リリンとどんな会話を交わせばいいかわからず、時折思いついた質問を投げては一言で返されてまた黙り込む、を繰り返していた。

こんな状況ではまともに会話が弾むはずもなく、幾つかの質問を終えたところで互いに無言のままになってしまう。

そんな螢たちの様子をチェリーが心配そうに見守っている一方で、チェリーの方から話題を振ることはなかった。

ふとチェリーと視線を合わせると、彼女からは何となく、これは自分が話さなければいけないことだからと、気を遣われているような気がした。

そんな彼女に螢は微笑みながら微かに頷く。

ここにリリンを呼んだのは、彼女に伝えたいこと、話したいことがあるからだ。リリンはこの世界に住居を持たないはずだ。

それに連絡手段もないから今日の内に話をしないと、次はまたいつ会えるかはわからない。

もう2度と自分を悲しませたくないと約束してくれたから、自分の前からいなくなることだけはないだろう。

それでも次に会うまでの間が空けば空くほど、自分はまたうじうじと悩み、決心を鈍らせてしまおう。

だからこそ螢は、今日の内にリリンに話しておきたいのだ。だけどもまだ、その時が来ていない。

この話を彼女に振るには、この場に1人いて欲しい人がいる。確か今日は早く帰ってくると言っていた。

となれば、夕方を迎える前には帰宅するはずだ。

その人の帰りを螢はずつと待っていた。

そのまましばらくの時間が過ぎたところ、ようやくリリンが重い口を開ける。

「ねえ、ほたる。あたし、いつまでここにいればいいの？」

「え．．．？」

業を煮やした様子でリリンがそう問いかけてきた。

夕方に差し掛かるまでもう少し。それまでの間、リリンを帰すわけにはいかなかった。た。

例え無言の間が続いていたとしても、螢はリリンを手放したくなかった。

あともう少しだけ待ってもらえればきつと．．．。

「あの．．．あとほんの少しだけ、ここに．．．」。

ガチャ

そう思った矢先、ドアを開ける音が聞こえてきた。

鍵はかけているはずなので、ドアを開けられる人は家族しかいない。

「あつ、きた。」

待ち望んでいた蛍は、嬉しそうに飛び上がる。

「蛍、リリン、あとは頑張つてね。」

チェリーはただその言葉だけを残し、テーブルの上でぬいぐるみのフリをした。

リリンは彼女の言葉の意味がわからず困惑したままの様子だが、蛍の視線は彼女からリビングの入口の方へと向けられる。

「ただいま蛍。良い子にしてた？」

「おかーさん！おかえりなさい！」

そして待ちわびていた母、陽子がリビングへと入ってきた。

「あら？」

さっそく陽子は、ソファに座るリリンに気付いて笑みを浮かべる。

「お友達がいらしてたのね？」

そんな母を前に、蛍はこれから話すべきことを決心するように勇気のおまじないをするのだった。

母の陽子は、少し興味深そうな様子でリリンを見ている。

リリンを家に呼んだのは今日が初めてだし、母には一言も家に招くとは伝えていなかったのだから、突然の訪問に驚いているのだろう。

そんな母の前に、蛍はこれから話す内容を、自分の願いを聞き入れてくれるだろうか不安になってきた。

その不安を落ち着かせるために、1つ、2つ、深呼吸をする。

「あつあのね、おかーさん。

この子は、リリンちゃんって言って、わたしにとって、この街でできたはじめてのもだちなの。」

簡単にリリンの紹介をすると、陽子が目を輝かせてリリンを見据えた。

「あら、あなたが蛍が良く話しているリリンちゃんね。

私は一之瀬 陽子。蛍のお母さんよ。よろしくね。」

「えと・・・リリンです。よろしくおねがいます。」

少しはしゃぐ母を前にリリンが小声で自己紹介をする。

そう言えば、リリンはこれまで名字を名乗ったことはなかった。

元々リリスが正体を隠すために使っていた偽名だろうから、名字まで考える必要もなかったのだろう。

そしてダークネス出身であるリリンは当然、この世界の生まれではない。

家がなければ、親もいない。だから名字も持たない。

そのことを改めて思い知った螢は、いつそう気を引き締めて母を見据える。

「その……リリンちゃんね。」

えと……いろいろあって、家族も、住んでいる家もないの。」

「え？」

リリンの事情を知る螢にとっては特に驚かないことでも、傍から聞けば極めて深刻な話だ。

外見で言えば自分と変わらぬ年齢の少女が、天涯孤独な身の上になっている。

流石の母も笑顔を曇らせ、少し疑念を含んだ表情になった。

それは仕方がないことだ。

なぜなら事の顛末を何ひとつ説明していないのだから。

だが当然、母にプリキュアのこと、ダークネスのこと、リリンの正体のことを話すわ

けにはいかない。

詳しい事情を話せないまま、蛭は一方的に自分の願いを押し付けるしかなかった。「それで……リリンちゃん、今ものすごくこまっついて……」。

わたし、どうしても力になりたくて……」。

でも、わたしの力じゃどうしようもなく……だから……」。

少し間違えれば、秘密にしななければならないことを口に滑らしてしまいそうだ。

たどたどしくなりながらも、慎重に言葉を選んで蛭は自分の思いを伝える。

そして今一度、大きく深呼吸し、勇気のおまじないをしてから母の目を見る。

「だからおかーさん、おねがい！」

リリンちゃんを、このお家に住ませてあげたいの!!」

「……」。

母はそのまま考え込むように黙り込み、自分とリリンを交互に見る。

優しい母はこれまでよほど無茶な事でもなければ、自分のお願いを聞いてくれた。

だけど今回は、そんなよほど無茶な事だ。

普通に考えれば、断られるに決まっている内容だ。

もしも自分が成人して、1人でお金を稼いで暮らしていれば、リリン1人を引き取るとすぐに決めていただろう。

だけど自分は、まだ子どもだ。

働くことも、お金を稼ぐことも出来ず、親から守られて親のお金で生活しているただの子どもだ。

母の家事を手伝いお金を預かることもあるが、それでも一人の生活費にどれだけかかるかは想像もできない

なぜならこの国は、子供に教育させる義務があるからだ。

リリンが学校に通うことになれば、そのための教育費だつてかかる。

だからこの願いは、リリンをこの家に住ませるために必要な生活費を、母に頑張つて稼いで欲しいとも捉えられるのだ。

それは途方もない我儘だ。聞き入れられない可能性の方が高いはずだ。

「おかねがないつて言うなら、わたしもう、おこづかいはいらさない！」

ほしいもの、なんでもがまんする！

だから！だからおねがい！リリンちゃんをたすけたいの!!」

それでも虫は我儘を続ける。

お小遣いを我慢したところで、二束三文にもならないだろう。

それでも、リリンにかかる費用に少しでも足しになるのなら、これから先、欲しいものなんて何もいらさない。

自分が一番欲しいものは、リリンと一緒にいることだから。

「・・・蛍。」

しばらくして、母が静かに口を開いた。

「孤児院って、知ってるわよね？」

「え？うっ、うん、知ってるけど・・・。」

開口一番、母が問いかけてきたことに蛍は困惑しながらも答える。

「孤児院なら、身寄りのない子どもでも安心して保護されて、ちゃんとした教育を受けることができるわ。」

この街でも、探せばきつと見つかる。

リリンちゃんの助けになりたいと思う『だけ』なら、孤児院を探してあげて、そこに預けた方が一番だと思わない？」

母の言葉に、蛍は息を飲む。

母の言う通り、金銭的な問題でリリンを引き取っていいのかわからず、この先リリンに十分な生活と教育を与えられるか不安であれば、孤児院に引き取ってもらう方が憂いはなくなる。

リリンのことを考えれば、きつとそれが一番の選択肢だ。

でも、蛍の心は晴れなかった。それでは嫌だと、心のどこかで訴えている。

「ねっ、蛭？」

母が念を押してくる。

だけどその物言いは、どこか自分を試しているかのようだ。

先ほどの会話だって、母はわざわざ助けになりたいと思う『だけなら』と、強調していた。

きつと、母は気づいているのだ。

自分の本心に。本当の願いに。

「……イヤ……。」

だから蛭は、母に自分の本心を打ち明ける。

母には隠し事はしたくないし、しても無駄だから。

「孤児院にあずけるのは、イヤ。」

わたしは、リリンちゃんとずっといっしょにいたい。

ずっとずっと、いっしょにいるって、きめたの。

だから……おかーさん、おねがいます!!」

それに、無茶な願いを母に押し付ける以上、思いを素直に伝えなければダメだと思っただから。

「……だって。リリンちゃんは、どう思ってるの？」

すると母は、今度はリリンの思いを聞いてきた。

リリンはしばしの間、悩むように顔を俯かせてから、静かに口を開いた。

「・・・わからない・・・あたしには、わからないわ・・・。」

：

リリンをこの家に住ませたい。

蛭が彼女の母、陽子に話した言葉を聞いて、リリンは驚き困惑する。

蛭が今日、自分を家に招いたのも、この話を母にするためだったのだろう。

そして彼女の提案は、リリンにとっては願ってもない話だ。

陽子の言う『孤児院』が何の事かはわからないが、会話の内容から察するに家族を持たない子どもが集まる施設があるのだろうか。

だけど食事の取り方もわからない自分では、見ず知らずの人たちの集う施設に人として怪しまれずに振る舞い生活するなんて無理だろう。

だけど蛭の家ならば、その問題点も解決される。

普通に生きている人ならば誰もが知っているであろうことも、こちらの事情を知る蛍から聞いて学ぶことができる。

この世界で人として自然と振る舞えるようになるのも、そう時間はかからないだろう。

何より、蛍が自分と一緒にいたいと望んでいる。

蛍の望みは、自分の望みでもある。

陽子が蛍の願いを聞き入れてくれたら、自分の望みも全て叶う。

だけど、陽子から話を振られた時、リリンは胸に抱えていた苦しみが、いつそう強くなつた。

「あたしには……わからない。どうしたらいいのか、わからないの。」

「わからないって……どうして？」

リリンちゃんも、ずっと一緒にいたいって言ってくれたよね？」

「言つたわよ。でも、わからないの！」

この苦しみを抱えている限り、蛍への罪悪感を失わない限り、自分は蛍とずっと一緒にいる限り、苦しみ続けることになる。

もうかつてのように、彼女の隣で安らぎを得ることができない。

でもどうすれば罪悪感が消えるのかわからない。

「あなたといっしょにいたい……」

それなのに、あなたのとりにいると、とても苦しいの……」

「リリンちゃん……でも、わたし、もう気にしてなんかいないよ?」

そんなことはわかってる。蛍はもう、自分のことを恨んではいない。

許せないのは、自分自身のことだけだ。

「あたしがあなたにどれだけヒドイことをしてきたかわかるでしょ!」

あなたが気にしなくても、あたしは……まだ自分のことが許せないの……」

行動隊長として多くの人を傷つけてきた。ソルダークを生み出す素材としてきた。

そして、蛍を裏切り、傷つけた。

そんな自分に蛍と一緒にいる資格なんて、本当はないはずだ。

それこそ蛍が望まなければ、彼女の前から永遠に姿を消すつもりだった。

でも蛍と一緒にいたいと望む以上、彼女との約束を守るためにも、その想いを受け入れるつもりだった。

それなのに、受け入れようと思っても、心のどこかで拒否してしまう。

いつそ受け入れて、彼女の隣で永遠に苦しみ続けなければならない。

どこまで行っても自分は、安易な逃げ道を作ることを選ぶことも許されない。

だからわけのわからない、答えの出ない迷宮を彷徨い続けるしかなかった。

「ねえ、リリンちゃん。」

そんなリリンに、陽子が優しく声をかけてきた。

「あなたがこれまで何をして、どんな酷いことをしてきたのかは、聞かないわ。

でも、自分のことが許せないってことは、あなたは自分のしてきたことを、悪いことだと思っっているのよね？」

「え……？」

陽子の言葉に、リリンは困惑するが、彼女は優しく微笑みながら言葉が続けた。

「本当に悪い人は、自分がやったこと、悪いとさえ思わないのよ。

でも、あなたは自分のやったことを、悪いことだと思っ、苦しんでいる。

もしもあなたに、自分のした悪いことを償いたいって気持ちがあるのなら、あなたは、悪い子なんかじゃない。

とても良い子だって、私は思うわ。

そして、良い子のあなたは、幸せになる権利があると思うの。」

「つ……。」

陽子の言葉を聞いたリリンは、目に涙を浮かべる。

自分が良い子だなんて、考えたこともなかった。

自分のしてきたことは全て罪で、何ひとつ、善行なんてしていないから、決して許さ

れないと思っていた。

例え他の人が許しても、自分自身を許してはいけけないのだと思っていた。ただ、陽子は言ってくれた。

償う気持ちがあるのなら、自分は悪ではないと……。

その言葉に、救われた気がした。

同時にリリンは、自分の内に秘めていた想いに気が付く。

「ねえ、リリンちゃん。あなたの望みはなに？」

優しく問いかける陽子に、リリンは涙を拭いながら答える。

「あたしは……ほたると一緒にいたい……」

自分がしてきたことの罪は、かならず償う。

かならず償うから、ほたるの側にいたい……。

ほたるの側にいて、あたしは……」

一呼吸置き、リリンはこれまでのことを振り返る。

蛭といると、心が安らぐ意味。

蛭に問いかけられた楽しい、という言葉の意味。

ずっと知りたかったその意味を、リリンは罪を償う覚悟と共に知ることができた。

その意味は……

「しあわせに……なりたいです。」
幸せ。

とても抽象的で、具体性のない、でもこの世界の人たちが自然と言葉にしていたもの。かつての自分が興味の1つも持たなかった言葉の意味が、これまで蛍と過ごした時間の意味を知ったことで、ようやく理解することができた。

あの時、あの瞬間、自分は幸せを感じていたのだと。

だから手放したくなかったのだ。

蛍のことを、蛍と過ごす時間を。

だから苦しかったのだ。

彼女への罪の意識と、自分への怒りから、蛍の隣で幸せを感じることができなくなっただから。

そして幸せになつてはいけな思っていたのに、心のどこかでかつての幸せを求めていたから。

でも陽子は、幸せになつていいと言ってくれる。

罪を償い、過去を清算することができれば、自分は悪い子ではなく、良い子なのだ。

「……幸せになりたい……か。うん、わかったわ。リリンちゃん。」

「おかしさん、それじゃあ……。」

「最初に言っておくけど、いきなりずっと、ってわけにはいかないわ。

お父さんとも話し合わなきゃいけないし、本当にリリンちゃんを引き取るつもりなら、軽はずみに決めつけるわけにはいかないわ。

そうね・・・夏休みの1か月間。

とりあえず、それまでは家においていいわよ。リリンちゃん。」

「ありがとう、おかーさん!!」

感極まった蛍は、泣くのも隠さずに陽子に抱きつく。

蛍の家で暮らすことができる。

1か月と言う期間が授けられているが、蛍と一緒にいることができる。

絶対に叶わないと思っていたこと、願ってはダメだと思っていたことが今、リリンの目の前に現実となったのだ。

そしてリリンは。

「あれ・・・?」

止まり切れない涙をポロポロと零していた。

何度拭いても取まらず、目の奥からずっと湧き上がってくる。

その度に、声をあげたくなった。

喉元まで引つかかる声を、リリンが堪えようとしたとき、

「リリンちゃん。」

陽子が、優しくリリンの身体を抱きしめた。

「涙ってね。辛いときにも、嬉しいときにも湧いてくるものなの。」

「そうゆうときは、我慢しないで、思い切り泣いてもいいのよ？」

「あなたはもう、自分の気持ちを抑え付ける必要なんて、ないのだから。」

自分の事情を知らないはずの陽子が、今の自分の気持ちを汲んでくれた。

そして、思い切り解放しても良いと言われたリリンは

「うっ……わああああああん!!!」

蛍と陽子、そしてチェリーが見守る中、大きな声で泣き続けるのだった。

：

その日の夜、父の健治が帰って来たときは、流星に驚いた様子を見せていた。

母から事情を聞かされたときは、少し呆れたような表情を母に見せた。

でもリリンには優しく微笑みかけ、これから1か月よろしくと、挨拶してくれた。

特に反対する様子も見せなかったことに蛍は安堵したことを振り返りながら、自分のベッドの下に布団を敷く。

「それじゃあ、リリンちゃん。電気けすね。」

「うん。」

慣れない様子で掛布団を被ろうとするリリンに微笑みながら、蛍は部屋の明かりを消した。

そしてベッドに入る前に、リリンの方をもう一度振り向く。

「ねえ、リリンちゃん。」

「なに？ほたる。」

「あしたから、たのしいこと、しあわせなこと、ふたりでいっぱい見つけようね！」

「・・・うん！」

薄暗い明かりの中でも、リリンの笑顔はしっかりと見えた。

ベッドに入った蛍は、今日の日のことを振り返る。

とても辛く、悪夢のような1日だったが、最後に大きな幸せが訪れた。

自分が心に秘めていた願いが、ずっと思い続けてきたことが、形になったのだ。

これからずっと、リリンと一緒にいることができる。

蛍にとっては、幸せそのものと言える人が、ずっと自分の側にいるのだ。

(あしたは・・・なにからはじめようかな・・・?)

まず最初にやるべきことは、リリンの生活用品を揃えることだ。

1か月も一緒に暮らすのだから、衣類や食器を買い揃えて置く必要があるだろう。筆記用具は、きつとまだ先で良いし、自分の余りを貸すこともできる。

あとは、クレープ以外にも美味しいお菓子がこの世界にはたくさんあるから、それと一緒に買ったたり、作ったりしてあげよう。

彼女が望めば、料理やお菓子作りを教えてあげられることもできるし、それから・・・。(それから・・・なにがあるかな・・・。)

リリンのためにしてあげること、してあげたいこと。

沢山の想いの数々を胸に刻みながら、蛍は幸せな気持ちで眠りにつくのだった。

：

布団を被ったりリリンは、薄明るい天井をずっと見ていた。

やがて聞こえてきた蛍の寝息を聞きながら、今日の日のことを振り返る。

ダークネスであり続ける限り、ずっと叶わないと思つていた願いが、ダークネスから解放されたことで叶うことができた。

蛍と一緒にいられること、側にいられることがとても嬉しくて、きつと今の自分の気持ちだが、幸せなのだろう。

(でも、まずはやらなきゃいけないことがたくさんある。)

まずは罪は償わなければならない。それが幸せになるための対価だから。

まずその第一歩として、蛍の友人たちへちやんと謝罪しよう。

要と雛子、そして千歳。

特に千歳と妖精たちには、一度故郷を奪うと言う大罪を犯している。

今日、自分の意思でやったこととは言え、蛍との思い出の場所を破壊し尽くした。

あの時、とても空虚な気持ちになった。きつとその時と同じ感情を、千歳たちにも与えていたのだ。

いや、感情を自覚できなかつた自分と違って、千歳たちは心を持つ人間だ。

悲しみと喪失感はこの比でなかつたはず。

だからまず、彼女たちにちやんと謝罪をして償いをするのだ。

それができなければ、陽子の言う幸せになる権利なんてない。

(がんばら……ないと……。)

自分を好きでいてくれた蛍と、許してくれた陽子、信じてくれたチエリー。

そして、自分を受け入れてくれたこの家の人たちのためにも、必ず、贖罪をしてみせる。

(そのために・・・あした・・・あれ・・・?)

そんなことを考えている内に、リリンは少しずつ朦朧とし始めた。

視界が徐々に霞んでいき、頭の中がぼんやりとする。

でも不快な気分はなく、むしろ『自然』とその状態を受け入れていく。

(なんだか・・・ねむい・・・あつ・・・)

『眠い』。無意識の内に頭に浮かんだ言葉と一緒に、リリンは初めて『眠り』につくのだった。

∴

次回予告

「これからよろしくね、リリンちゃん！」

「よろしくね、ほたる。」

「それじゃあまず、リリンちゃんのために、おようふくとか、お茶碗とかいろいろ買わなきゃね！」

みんなもてつだつてくれるって、言ってたよ！」

「みんな？みんなって、おともだちのこと？」

「うん！」

「じゃあ、ちとせつて子も、一緒に来るんだよね？」

「え？そうだけど、どうしたのリリンちゃん？」

次回！ホープライトプリキア第25話！

新たなる始まり！リリンと千歳、仲直りへの第一歩！

希望を胸に、がんばれ！わたし！

第25話

第25話・プロローグ

蛍とリリンが眠りに着いた後、健治はリビングで陽子と話をしていた。

「しかし驚いたよ。」

俺のいない間に女の子を1人引き取ることになってるなんてな。」

仕事を終えて家に帰って来てみれば、見知らぬ女の子が娘と夕食の支度をしており、話を聞けば夏休みが終わるまでの一か月、この家に住ませることになったと言うではないか。

本来ならば、自分を含めた家族全員の意見を聞いて話し合うべき重大な内容である。

「ふふつ、ごめんなさい。なんだか断り切れなくて。」

だが陽子は謝罪こそすれど、口元に手を当てて微笑むその様子はとても反省しているようには見えなかった。

健治はわかりやすいため息を吐き、言葉を続ける。

「全く、俺を差し置いてそんな大事な話を決めるなんて、一応俺がこの家の大黒柱だぞ？」

「あら？どうせ断らなかつたくせに。」

陽子が身も蓋もない言葉で返してくる。

確かにこの場にいたとしても、リリンの事情を聞く限りではこちらも賛成していただろう。

つまり妻の独断は、裏を返せば自分への信頼の表れと言える。

だからと言つて、大黒柱たる自分を除け者にして話を進めていい理由にはならない。要するに、知らぬところで話を決められたことが、少しだけ不満だったのだ。

「それに可愛い女の子が増える分には、健治さんだつて困らないでしょ？」

しかしこちらの心境を余所に陽子は悪戯っぽくニヤリと笑いながら、極めて遺憾なことを言つてのける。

「お前な、誤解を招くような言葉は控えなさい。」

「学生時代、何度も私にアプローチをかけたのはどこの誰だつたかしら？」

「いつの話だよ。いい加減それを蒸し返すのは止めるよな……。」

陽子とは高校時代からの同級生だ。

当時から陽子は、学校一の美少女だのマドンナだのと呼ばれるほどの美貌を持ち、それはそれは大変モテたものだ。

学校内の男子全員のアイドルであり、かく言う健治も彼女の魅力に一目ぼれした男子

の1人だった。

だが周囲からは美男美女のお似合いカップルだと冷やかされたものの、肝心の陽子はこちらには目もくれず、何度もお近づきになろうと声をかけ続けている内に高校の卒業式を迎えてしまった。

だが偶然にも同じ大学に進学することになり、その縁が陽子を諦めさせたのか、交際を始めるきつかけとなつたのだ。

確かに今にして思えば、節度を弁えていたとはいえストーカー一歩手前の行動だったと言えるだろう。

だが結婚してからと言うもの、陽子は事あるごとにその話題をダシに主導権をもぎ取ろうとするものだから、我が妻ながら強かな性格である。

「こういうところ、蛭には本当に似ないで欲しいよ。」

「何か言つた？」

「いや、何も。」

そんな陽子も、娘である蛭には健治以上に弱い。

案の定、蛭の名前を出した途端に笑顔のまま背後から黒いオーラが見えるような無言のプレッシャーを与えて来た。

健治はやれやれと、首を振りながら再びため息を吐くが、そこで一転、真剣な眼差し

で陽子を見据える。

「あの子を引き取ることには反対しないが、君ならわかっているよな？」
その言葉を聞いた陽子も、急に真面目な面立ちで耳を傾けるのだった。

第25話・Aパート

新たなる始まり！リリンと千歳、仲直りへの第一歩！

リリスの正体がリリンだと知った蛍が、絶望のあまり闇の牢獄に囚われ、強大な力を持つ戦士ダークシャインを生み出してしまった日の戦いは、蛍とリリンの2人が絶望の果てに伝説を超えたプリキュア、キュアシャイン・サハクイエル、キュアシャイン・レリエルへと変身を遂げ、己が絶望の化身を討ち果たしたことで終息した。

そしてダークネスを離反したリリンは紆余曲折を経て、夏休みの間だけ蛍の家に引き取られることになった。

だがここで蛍たちの事情を知らない陽子と健治が、蛍たちとは別の、極めて現実的な観点で今後のことを話し合っていた。

そして夫である健治からリリンを引き取ることの覚悟について問われた陽子は、一拍置いた後、健治を見据えてしっかりと応える。

「勿論よ。その覚悟もなしに引き受けたりしないわ。」

健治の問う覚悟とは、即ちリリンの生活費をどう稼いでいくか。

それに伴い、今後の我が家の生活スタイルがどう変わっていくかを理解できているのかと言うものだろう。

一之瀬家の生活スタイルは、子ども1人を育てることを前提に14年もの歳月の中で少しずつ確立されていったものだが、リリンを引き取る以上、その前提は崩れてしまう。リリン1人分の生活費が増えることが、家計にどれだけの影響があるかはまだわからないが、両親揃って今以上に仕事に打ちこまなければならぬ可能性だって十分だ。

それは娘である蛍と一緒に過ごす時間をさらに削らなければならず、加えて蛍に家事を任せる時間も今よりも増えてしまう。

家族で団らんする時間が段々と取れなくなっていくことが、本当に蛍のためとなるのだろうか？

それは蛍から話を聞いた時から、陽子がずっと考えていたことだ。

「……でもね。」

だが陽子が真剣な表情から一転、蛍の部屋に視線を向けながら慈しむように微笑む。「せっかくあの子が、『我儘』を言ってくれたのよ？」

幼少の頃の蛍は、人見知りの激しい性格と甘えん坊な性格が相まって、良く我儘を言っっては泣き出す、とても手のかかる子どもだった。

それが小学校に上がるくらいから途端に、我儘を言わなくなってしまった。

代わりに家事を手伝うようになり、親のことを気にかける言葉が多くなった。

最初の頃は陽子が家事を教え、勉強を見てあげたこともあったが、やがて勉強も家事も1人でこなせるようになってしまった。

今となつてはもう、我儘で駄々っ子だった面影はない。

生活費さえ渡せば、1人で暮らすことだってできるだろう。

それほどまでに蛭は、幼くして1人で自立してしまった。

「なんでも1人で出来るようになって、私はもう、親として蛭にしてあげられることなんて、ないんじゃないかって思つてた。」

だけど、どれだけしつかり者になつたとは言え蛭はまだ13歳。

来月でようやく14歳を迎える子どもだ。

元々の性格を考えれば、とても甘えたがりな子のはずだ。

本当はもつと甘えていたのに、無理に我慢していないか？

親を気にかけるあまり、蛭自身のやりたいことを抑えていないか？

親に遠慮して、子どもが自分のやりたいことを我慢しているだなんて、そんなことは望んでいない。

不思議なことに、一切手がかからない子どもと言うのは、返つて親の不安となつていったのだ。

「そんなあの子が今日、我儘を言ってくれたのよ？」

あの子が我儘を言うなんて、いつ以来のことだと思ふ？」

「……さあ、いつだろうな？」

その言葉を聞いた健治は、苦笑しながらも同じような視線を蛍の部屋に向ける。

蛍には失礼かもしれないが、その我儘がとても嬉しかった。

我儘、と言えば聞こえは悪いかもしれないが、蛍は一人で出来ることは一人でこなしてしまふ子だ。

そんな子が、我儘を言ったと言うことは、一人ではどうしようもないことに直面したと言うことだ。

そしてそれは正に、蛍にはどうしようもないことだった。

子ども一人を育てるための生活費、教育費、お金の問題はどれだけ蛍がしつかり者でも、働いてお金を稼ぐことができない蛍の手には余る問題だ。

こればかりは、親であり大人である自分たちにはしか解決できないことだった。

その事で今、蛍から頼りにされている。

「それなら、叶えてあげたいって思うのが、親心だと思わない？」

子どもの我儘を叶えてあげたい、なんて親バカな考え方にも程があると我ながら思う。

それでも虫の我儘を叶えてあげることが、幼くして娘を自立に追い込んでしまった陽子たちに来る、残された親心なのだ。

「ああつ、そうだな。」

その言葉に健治も、静かに同意してくれたのだった。

：

カーテンから差し込む陽光の眩しさに、リリンは目を覚ます。

ゆっくりと布団から起き上がり、うんっ、と背伸びしてから欠伸を1つ噛む。

「ふわあ……。」

陽の光の眩しさに目を覚ますなんて、初めての経験だ。

そもそもこれまで『睡眠』と言うものを取ったこともないはずだから当たり前のことだが、ぼんやりとした頭はまだ夢現な状態だった。

寝ぼけ眼と光の眩しさで視界が不鮮明な状態のまま、リリンは辺りを見回す。

その内に段々と昨日のことを思い出して来た。そして……

「リリンちゃん。」

自分の名前を呼ぶ声がした。

声のする方に目を向けると、ベッドの上に座り、こちらを優しく見据える蛍の姿があった。

「ほたる……。」

彼女の姿を見た瞬間、これまでぼんやりとしていた意識が覚醒し、視界が鮮明になる。鮮やかに彩られた世界が目に入り、大好きな声が耳を通じてはつきりと聞こえてくる。

昨日までの出来事は、決して幻ではなかったのだ。

「ほたる!!」

リリンは思わず蛍に飛びつき、その勢いのまま2人でベッドに倒れ込む。

蛍から伝わる体温を感じながら、リリンは夢の世界から温かな世界へ帰還したことを改めて喜んだ。

「リリンちゃん、あきこはん、たべにいこ？」

そんなリリンに、蛍は優しく微笑みながら今日の始まりを告げる。

「うん!!」

愛する人と共に過ごせる、リリンの幸せに満ちた時間が始まるのだった。

蛍に連れられリビングへ行くと、蛍の両親である健治と陽子が朝食を食べていた。

「リリンちゃん、おはよう。」

「おつ、おはよ。」

「昨夜はよく眠れたかしら？」

「うっ、うん。」

陽子ときこちなく挨拶を交わしながら、リリンは蛍に案内された席に着く。

蛍はそのままキッチンへと向かい、炊飯器からご飯をよそす。

しばらくして、蛍がトレイに乗せた食卓を持ってきてくれた。

ご飯と味噌汁、焼き魚に卵焼き、それから小鉢に入った山菜の胡麻和え。

蛍の作った朝食はとても香しく、色も見た目も綺麗なものだった。

「いいにおい……。」

「蛍ったら、リリンちゃんに美味しいものを食べさせてあげたいって、とても張り切っちゃってね。」

「ここまでのものは、普段の食卓でもあまり出てこないわよ。」

「もっ、もう、おかーさん……。」

陽子がからかうようにそう言い、蛍が顔を赤くして俯く。

だけど虫が自分のためにここまでの朝食を支度してくれた、と言うだけで胸がいっぱいだった。

ぐううううう

するとリリンのお腹のあたりから、何とも間の抜けた音が鳴り響いた。

「わわっ、リリンちゃん、ごめんね待たせちゃって。」

「ふふっ、よっぽどお腹が空いてるみたいね。たんと召し上がれ。」

リリンは今の音の意味がわからず惚けているが、虫と陽子はすぐに朝食を食べるように促す。

後から知ったことだが、先ほどの音は空腹を知らせるサインのようなものらしい。

つまりリリンは今、食事を欲しているのだ。

食べるとは、生物が生きていく上で必要なエネルギーを摂取するための基本的な行動である、知識だけならばあるが、ダークネスにいた頃は『生きていなかった』のだから、当然食事する機会なんてなかった。

だけどここの身体にはもう、絶望の闇が存在しない。

身体の時を止めることができなくなった今、生きていく上で必要なエネルギーは、こちらの知らない内に消費されている。

そして消費した分のエネルギーを補給しておかないと、生命を維持することができな

くなる。

そのために食事を始めとする、生きていく上で必要な営みを覚えて実践していかなければならない。それは一見すると不憫な身体になったと言えるだろう。

もしもダークネスにいたときの自分が知れば、きっとそう思ったはずだ。

だけど今は違う。

「美味しい……。」

こんなにも美味しくて、幸福を感じることができるのが食事と言うのなら、生きていくための対価として喜んで払っていききたい。

そう思えるほど、今日の朝食はリリンにとって大切な、そして食事の楽しみを知りきつかけとなるのだった。

∴

朝食を終えた蛭とリリンは、玄関に立つ両親を見送る。

「蛭、リリンちゃん、行ってきます。」

「いってらっしゃい、おかーさん。」

「いっ、いってらっしゃい。」

蛍の隣では、リリンがぎこちない様子で同じ挨拶を返した。

行動隊長リリスとして活動していた時は、自分は勿論、要たちと会話するときも流暢に喋っていたのに、リリンとして生きるようになってからは少しぎこちない様子を見せている。

そんなリリンが少し気になったが、健治に名前を呼ばれた蛍は彼の方を振り返る。

「蛍、今日はリリンちゃんの買い物をするって言ってたよね？」

「うん、歯ブラシとか、おようふくとか、ここで暮らすのにひつようなもの、はやめにそろえないと、リリンちゃん不憫だろうし。」

「週末はお父さんが車を出してやるから、今日買うものは最低限、必要なものだけでいいぞ。」

「うん、ありがとう、おとーさん。」

「お母さん、今日もなるべく早めに帰ってくるから、それまでリリンちゃんのこと、よろしくね。」

「はーい。」

笑顔で家を出る両親を、蛍も笑顔で見送る。

リリンを家に引き取りたい、なんて無茶なお願いをしたはずなのに、2人は快くりリンのこゝろを受け入れてくれた。

そんな両親の優しさに内心、改めて感謝しながら部屋へと戻ろうとしたとき、家の電話が鳴りだした。

慌てて電話の元まで駆け寄り、映し出された電話番号を見ると、雛子の携帯電話からの着信だった。

「はい、もしもし。」

「もしもし蛍ちゃん。雛子だけど。」

「ひなこちゃん！おはよう！」

昨日の一件があつたから、彼女たちとこれまで通り友達で過ごせるか少し不安を抱いていただけに、雛子からの電話、それも普段と変わらない彼女の声色に嬉しくなつた蛍は、つい声のトーンを上げて返事してしまう。

「ふふつ、朝から元氣そうでよかつた。」

その様子だと、うまく行つたみたいね？」

「え……？うん！」

一瞬、彼女が問うた言葉の意味に疑問を抱いたが、それがリリンを家に引き取ることを指していると分かつた途端、蛍は上機嫌に反応する。

「それでね、今日はこれから、リリンちゃんのお買い物にいこうかとおもってたんだ。」
「やっぱり。それなら、私たちも手伝うわ。」

要と千歳ちゃんも誘って、みんなでドリムプラザの方まで行ってみない？

あそこなら、大概のものは揃えることができるし、リリンちゃん、多分今までドリムプラザに行ったことないでしょ？」

「ほんとう!?!みんなきてくれるの!?!」

「今日は要も部活はないし、私から声をかけてみるわ。」

千歳ちゃんもきつと賛成してくれるだろうから、後で学校前のバス停で待ち合わせましょ?」

「うん!ありがとう!」

やっぱり、と言われたことから、雛子には自分がリリンをこの家に住ませて欲しいと頼むことを見透かされていたのだろう。

相変わらず何でもお見通しな雛子には、本当に隠し事をする事ができない。

それほどまでにこちらのことを理解してくれていることが少し恥ずかしく、それでもリリンのためにみんなが手伝ってくれることが嬉しかった。

そして何よりも、またこうしてみんなでお出かけする幸せな日常を取り戻すことができた。

それを雛子との会話で改めて実感することができた蛍は、気が付けば涙を流していた。

「それじゃあ、蛍ちゃん、また後でね。」

「うん！またあとで！」

電話越しからクスクスと微笑む雛子の声を聞いた後、蛍は受話器を置く。

「ひなこから電話？」

電話を終えると、リリンが不思議そうに声をかけてきた。

「うん、リリンちゃんのお買い物をするって、はなしをしたら、みんなてっだつてくれるって。」

まだ上機嫌な声のまま蛍は答える。

だがその言葉を聞いたリリンは、少しだけ表情を曇らせた。

「みんな……ってことは、ちとせもいるの？」

「え？そうだけど……？」

リリンは先ほどまでの笑顔を曇らせたまま、沈黙してしまうのだった。

∴

モノクロの世界

アモンは苛立った様子で玉座に拳を叩きつける。

「おのれ……リリスめ……。」

フードに隠されて見えないが、アモンは顔を顰めていた。

行動隊長であるリリスが絶望の闇から解放されたばかりか、キュアシャインの力を得てプリキュアとして覚醒した。

闇の世界の解放に続き、キュアシャインがまたしても前例にない事態を引き起こしたのだ。

しかも伝説にすら語られていない5人目のプリキュアを誕生させたと言うことは、長きに渡る光と闇の戦いの中で拮抗してきたパワーバランスを覆しかねないほどの事態を引き起こしたことになる。

「申し訳ありません、アモン様。我々が静観を決め込んだばかりに。」

ダンタリアアが膝をつき深々と頭を下げて謝罪し、サブナックも彼に倣い同じ姿勢を取る。

アモンはフード越しで彼らのことを睨み付ける。

彼らはラスト・レクエイムと挟撃しプリキュアを倒せという命令に背いて傍観を決め込んだ。

もしも命令を聞いていれば、少なくともキュアシャインとリリスを除く3人のプリキュアを倒すことができたかもしれない。

それならばまだ力の拮抗は崩れなかつただろう。

そうだ、此度の失態は全て彼らの責任・・・そう思い当たった直後、アモンは怒りに震える拳を抑える。

そして怒りで口元を震わせながらも、アモンは静かに告げる。

「いいや、君たちのせいじゃないさ・・・」

君たちは私の命令に従っただけ。

そうだろ？ サブナック、ダンタリア。」

サブナックもダンタリアも、その言葉に対して肯定も反論もしなかつた。

だが彼らはリリスと違い、行動隊長としての使命には従順だ。

もしもあの時の命令を強行すれば、彼らは無理にでも背こうとは思わなかつただろう。

彼らの命令違反さえも聞き入れ、最後に肯定したのは他ならぬ自分自身だ。

そう、彼らは行動隊長として、司令官の最終的な決定に従ったまで。

問うべき責などどこにもない。

「私は……どこで間違えたのだ？」

アモンは頭を抱えながら、此度のことを一から振り返る。

リリスの動向は常に監視していた。

やつがキュアシャインに個人的な恨みを抱き、ある時を境にその感情が揺れ動き始めたことは目に見えた。

それと同時に彼女が任務に関係なく、かの地に出向き始めたことも知っている。

だからリリスが何らかの方法でキュアシャインの正体を突き止め、惹かれていったと言っ答えに辿りつくまでは時間はかからなかった。

ここまでは自分でなくとも、サブナックとダンタリアも気づいていたことだろう。

だからリリスを利用すれば、キュアシャインの潜在的な力を絶望に反転させ、こちらの戦力として利用できるのではないかと思いついたのだ。

その計画はダークシャインの誕生を始め、想定外の事象も多発したが、計画に想定外は付き物だ。

だから常に最善と最悪の状況、この2つを最大限に考慮していた。

その上で、ほぼ思い通りに事を運べていたはずだった。

リリスは命令を完遂させ、デイスペアー・カードを完成させた。

ダークシャインの誕生自体は、こちらにプラスに働いていた。

そしてキュアシャインが万が一絶望から立ち上がったとしても、リリスに心変わりが生じたとしても、行動隊長が希望を得た瞬間、絶望に転じて自滅することは推測できていた。

その推測通りリリスは絶望の闇に沈み、キュアシャインの絶望と共鳴しラスト・レクイエムと言う究極の力さえ手に入れることができていたのだ。

全てが順調・・・だったはずだ。

だが最後に全てが覆された。

キュアシャインは幾度となく希望を失おうとも立ち上がり、終にはリリスの希望さえも蘇らせてしまった。

そして究極の力と思われたラスト・レクイエムの力は、2人のキュアシャインの力へと反転してしまった。

最後には、キュアシャインの更なる覚醒を促すと言う最悪の事態だけが残ってしまったのだ。

「キュアシャイン・・・これ以上やつを放っておくわけにはいかない。」

そこまで考え、アモンは思い当たった。

キュアシャインの力、利用すれば最強の駒になるかもしれない。

その考え方自体が、間違いだっただの。

やつの力は危険だ。

これ以上放っておけば、ダークネスにとって最悪の危機となる。

やつは今までに何度も『あり得ない』ことを引き起こして来た。

やつらの言葉を借りるならば、それは正に伝説に語られる通りの『奇跡』だ。

もしもこのまま『あり得ない』を現実に変えられたら……永久を在り続ける我らダークネスにさえ『終り』をもたらす危険性がある。

「サブナック！ ダンタリアー！」

「はっ！」

名を呼ばれ顔を上げる2人の間に、アモンはデイスペアー・カードを投げつける。

「かの地の侵攻は一先ず保留だ。」

「まずはその力を使い、プリキュアたちを倒せ。」

「デイスペアー・カード。ネオ・ソルダークの力を使うのですね。」

サブナックがカードを手に取り、興味深そうに尋ねて来る。

「その通りだ。ソルダークを創りだし、デイスペアー・カードをソルダークに与えろ。」

ネオ・ソルダークの力ならば、あの2人のキュアシャインにも多少は相手できるだろう。」

「多少は、ですか？」

ダンタリアの素振りから『戦うことはできても、敵いはしないと言うことか?』と問うてるように見えたが、アモンは少し肩をすくめて返答する。

「・・・元々、キュアシャインの絶望の闇で完成させたカードだ。

やつらとは相性が悪いかもしれん。」

今のデイスペアー・カードは、消滅したダークシャインの力の残滓を核とし、世界に蔓延していた有象無象の絶望を注ぎ込んだもの。

見方を変えれば本来想定していた手段で再生させたものだが、ダークシャインの力、つまりキュアシャインの絶望の残滓が核となっている以上、このカードはいわば諸刃の剣だ。

キュアシャインの力を打ち合った場合、希望と絶望のどちらか大きい方の力が勝る。

そして欠片程度の絶望しか残されていないこのカードと、幸せな世界を取り戻したキュアシャインの希望とでは、どちらの力が勝っているかは明白だ。

つまりネオ・ソルダークがどれほどの力を持ったとしても、2人のキュアシャインを相手にするのは困難を極めるのだ。

かと言ってソルダーク程度の力ではもはや物の数にもならない。

仮に世界中の人々から無数のソルダークを創り出したとしても、2人のキュアシャイ

ンの前では埃にも等しい。

今のままでは圧倒的に戦力が足りないのだ。

こうなれば是非もなしだ。

アモンは玉座から立ち上がり、王の寝室へと歩み行く。

「私はしばらくの間ここを離れる。」

「アモン様、どちらへ向かわれるのですか？」

去り際、2人にその声をかけると、ダンタリアが目的地について質問をしてきた。

アモンは歩みを止め、フード越しに2人の顔を見据える。

「一度本国へ戻り、救援を要請する。」

「本国に救援を？しかしやつらに敵うほどのものが……。」

そこまで言いかけ、サブナツクは表情を顰めた。

「まさか、『あの2人』に救援を？」

ダンタリアは自分の意図を読みながらも、困惑した様子で尋ねて来る。

「ああ、『あの2人』の力なら、あるいは。」

「ですが、あの者たちが我々の要請を素直に受け入れるでしょうか？」

ダンタリアの疑問は最もだ。

『あの2人』なら、キュアシャインの力に対抗できる可能性は十分だ。

だがそれだけの力を持つが故に、あの者たちは非常に我が強い。

こちらの要請など、耳を傾けてすらくれないかもしれない。

だが……。

「受け入れてもらわなければ困るのだ。」

これにはダークネスの存亡がかかっているのだからな。」

我ながら何と滑稽な言葉だと思う。

その存亡の危機を作りだしてしまったのは、他ならぬ自分自身だと言うのに。

それでも、この要請は無理やりにも通さなければならぬ。

キュアシャインは既に自分の手に余るほどの力を得ている。

これ以上、何かあつてからでは遅いのだ。

使える手は全て打っておきたい。

考えられ得る最善の手段を講じておかなければ、最悪ダークネスは滅ぼされてしま
う。

「お前たちも無理はするなよ。」

ネオ・ソルダークが敵わぬと見れば即座に撤退しろ。深追いはするな。」

アモンは2人に念を押す。

ハルフアスとマルファスが敗れ、リリスが脱退した今、現時点での行動隊長はサブ

ナツクとダンタリアの2人だけだ。

この状況で2人を失えば、此度の戦いは勿論のこと、この先の侵攻にも支障が出る。そうでなくとも行動隊長の量産体制は未だに整っていない。

代替の効かない戦力をむぎむぎ捨て駒にするのは余りにも愚策だ。

「はっ。」

2人は疑問を抱く素振りを見せず、即座に命を受け入れた。

これならば命令違反の問題はないだろうが、アモンは念のためにもうひと押ししておく。

「それから、これだけは言っておく。」

2人をフード越しに見ながら、アモンは忠告する。

「お前たちは、余計な『希望』を持つなよ。」

「えっ?」

ダンタリアが困惑した様子で、サブナツクは声こそ出さないが怪訝な表情でこちらを見る。

「リリースにとつてのキュアシャインが、貴様らにも都合よく現れると思うな。」

希望を得たところで、絶望に飲まれるだけだ。」

その言葉にダンタリアは僅かに顔を顰め、サブナツクは静かに目を閉じる。

此度のリリスは、はつきりと言えば運が良かったただけだ。

彼女の想い人がキュアシャインでなければ、絶望に飲まれて自我を失っていたらう。

キュアシャインだったから、絶望の中でも希望を救えたのだ。

だがそんな都合の良い奇跡が何度も起きるはずがない。

リリスに真似てサブナツクとダンタリアが希望を得たとしても、自滅するだけだ。

「はっ。」

2人はその忠告を受け入れたが、彼らにもまた、自我を持つものだ。

何をきっかけに希望に惹かれるかはわからないが、この様子なら当面は問題ないだろう。

そのような事態に直面する前に、此度の戦いを終わらせる必要がある。

アモンは静かに身を翻して、王の寝室へと向かうのだった。

：

先ほどまでの明るい様相から一転、リリンは沈んだ表情で膝を抱えていた。

「リリンちゃん、げんきだして。」

蛭が優しく声をかけてくれたが、リリンの表情は晴れない。

「ちとせに、ちゃんと謝らなくちゃいけないのに。」

そんな大切なことをわすれるなんて……。」

まだ自分は何の罪滅ぼしもしていない。

それが終わるまで幸せを感じる資格はないと決意したのに、昨日までの罪悪感など忘れ、都合の良いことだけを思い出して今朝の幸せを満喫してしまうだなんて、何て愚かなのだろう。

特に千歳には、故郷を闇に墮としてしまったことを懺悔しなければならないのに、そんな大切な事さえ今の今まで忘れてしまっていた。

「リリン、そうやってあまり自分を責めないで。」

チエリーがリリンの頭を優しく撫でながら慰めてくれるが、忘れてはならない。

彼女もまた、ダークネスが生み出した被害者の1人だと。

千歳だけでなく妖精たちにも謝る責任が自分にはある。

「あつ、あの、チエリー。」

だからこの場でまず、彼女に謝罪しよう。

「なに? どうかしたの?」

不思議そうに首を傾げるチェリーの瞳をリリンは真つ直ぐに見据える。

「えと・・・その・・・。」

だがいぎ、謝ろうと試みた瞬間、急に言葉が浮かんでこなくなつた。

(あつ、あれ? こんなとき、まずなんて言えばいいんだろ・・・?)

蛍の時は『ごめんなさい』と言う言葉が口から出たが、あの時は謝ること以外何も考へる余裕がなく、自然と言葉を口にしただけだった。

だけど今はきちんと誠意を込めて謝ろうと考えた途端、誠意を込めた謝罪と言うのはどういうものなのか? と言う疑問が頭を駆け回つてしまう。

(ごめんなさい、ごめんなさいって言わないと・・・でつ、でも、言つたらどうするの? 言つたらそれでおしまい? そんなことないよね。

そんな一言で全てが許されるわけないし、じゃつ、じゃあ他に何を言わなきゃ・・・何を?)

あと、謝る以外に行動で示すつて言うのもあるよね?

えつと・・・頭を下げて、それから・・・)

言葉で謝罪するにしても行動で謝罪するにしても、何が正解なのかがわからないリリンは、1人頭の中でパニックに陥る。

ついには蛍への謝罪も本当は良くないものではなかったのだろうか？と云う疑問さえ駆け回り、チェリーを見据えたまま硬直してしまふ。

「リリン。」

そんなリリンをなだめるように、チェリーは微笑みながら手を取る。

「その言葉はまずは姫様に、千歳に伝えて頂戴。」

「え・・・？」

言葉の意味がわからず、リリンは首を傾げるが、チェリーはそんな様子を気にすることなく続ける。

「誰よりもまず、その言葉を伝えなければならないのは、フェアリーキングダムの姫様である、千歳に対してだと思ふの。」

それに姫様にさえしつかりと伝えてくれれば、私からは何も言うことはないわ。」

そこまで言われて、リリンはチェリーの言葉の意図を読み取った。

千歳はフェアリーキングダムの姫。その世界の代表者だ。

だからまずは国民であるチェリーたちよりも、代表者たる千歳に謝る必要がある。

千歳への謝罪がチェリーたち全員への謝罪になる、と云う感性は、王国と言う歴史を築いてきたフェアリーキングダムの国民性と価値観によるものだから、まだリリンにはそこまでの思いに気づくことはできない。

だけど現状は、チェリーは千歳に先に謝罪することを望んでいる。それならばまず、彼女の思いに応えるべきだ。

「うっ、うん。わかった。」

「うん、頑張つてね。リリン。」

結局、謝るべき相手であるはずのチェリーに励まされて背中を押されるだけで終わってしまった。

そんな自分の情けなさを恥じつつも、リリンは千歳にどう謝るべきかを集合時間ギリギリまでずっと考え込むのだった。

∴

夢ノ宮中学校バス停前に雛子と要が立ち寄ると、既に千歳の姿があった。

「千歳ちゃん、おはよう。」

「おっす、千歳。」

「雛子、要。おはよう。ベルとレミンもおはよう。」

「おはようございませす、姫様。」

「おはよう姫様〜。」

昨日の件から千歳のことが気になっていた雛子だったが、朗らかな笑顔で挨拶をする彼女の姿からは、もう思い詰めたような様子は見えなかった。

そんな彼女の様子にベルとレミンも安堵の表情を見せる。

「雛子、もう身体は大丈夫なの?」

「おかげさまで、もう全快よ。」

オマケにこちらの体調を心配してくれるものだから、少しだけ申し訳なく思ってしまった。

昨日家に帰った後、雛子は長時間絶望の闇に当たり続けた疲労で倒れるように眠り込んでしまった。

目が覚めたときはすっかり夜も更け、祖母が1人で終えた夕食の後片付けをしていた。

そして半日も寝てしまったのだから夜は中々寝付かず、今朝は少し寝不足気味だ。

・・・そんな寝不足も電話越しから聞こえる蛍の声で一発で目が覚めるものだから彼女の存在は本当に尊い。可愛い。

蛍から直接話を聞いたわけではないが、あの嬉しそうな声色とリリンの買い物をする

るって言葉から、無事にリリンを家に招くことができたのだろう。

ダークネスから離反したりリリンがどこへ身を寄せるか、という問題はこれでクリアしたと言える。

となると、残る問題は自分たちがリリンの事を受け入れるかどうかだ。

だがこちらは既に、蛍がリリンの事を許して受け入れるのであれば受け入れるつもりでいる。

後は、故郷を闇に閉じこめられたことがある千歳と妖精たちがどう思うかだ。

特に千歳は故郷の件を差し置いても、今回の蛍の件についてまだ思うところがあるはずだ。

「千歳、ここに來たってことは、答えを見つけたってこと？」

それでも千歳がこの場に姿を見せてくれたと言うことは、要が千歳に問いかけたように彼女にはもう決心した思いがあるのだろう。

「・・・ええ、昨日一日考えて、答えを出して來たわ。」
「そっか・・・。」

リリンの事を受け入れるか、それとも拒絶するか。

千歳が見つけた答えは、その2択に収束するはずだ。

そして千歳が拒絶を選ぼうとも、その思いを止める権利はない。

それはリリンが千歳から故郷を一度奪ったと言う罪を、隠すことになるのだから。

「みんな〜！おはよう〜!!」

すると蛍がいつにも増してテンションの高い声で、こちらに手を振り駆け寄ってきた。可愛い。

隣に並んでいたリリンが、慌てて彼女の後についていき、そのさらに後ろからサクラが2人の様子を見守っている。

「蛍、おはよう。」

「朝から元氣いっぱいやな。」

「えへへ！またみんなといっしょにお出かけできるのが、うれしくて!!」

天真爛漫な笑顔で蛍が素直な言葉を口にする。可愛い。

そんな彼女の笑顔を見て、雛子は目を潤ませる。

彼女が幸せを取り戻すことができ、本当に良かった。

「……」

一方でリリンは、千歳の方を見るなり表情を沈ませた。

その視線に気づいた千歳は、久しぶりに見せる鋭い眼差しで彼女を睨み付ける。

そんな千歳の眼差しから逃れるように、リリンは視線を反らす。

だけど千歳を見て表情を変え視線を反らしたと言うことは、リリンも千歳に対して思

うところがあるのだろうか。

リリンと千歳が、それぞれどんな答えを出したのか。

答え次第ではせつかく取り戻せた蛍の幸せが再び失われてしまう可能性もある。

それでも蛍の幸せのために千歳の思いを踏みにじるようなことは、絶対にあつてはならない。

これ以上、千歳に辛い思いをさせたくない。

でも蛍の幸せもこのままであつて欲しい。

この2つの思いを、同時に叶える答え何てあるのだろうか？

(大丈夫・・・きつと上手く行くよね・・・?)

せめて全てが上手く行くような答えが出てくれるようにと、雛子は心の中で願うのだった。

：

要たちが夢ノ宮ドリームプラザに訪れると、いつにも増して人で賑わっていた。

夏休みに入ったことで家族連れの人や、自分たちのように友達と一緒に訪れた学生たちを大勢見かける。

そんな中、初めてこの場所を訪れたであろうリリンは辺りを見回して感嘆とした声をあげる。

「ふわあ・・・すごい広いところ・・・。」

「でしよ?」

「ここは夢ノ宮市で一番大きいショッピングモールなの。」

雛子がどこか誇らしげな様子でドリームプラザを紹介する。

「ショッピングモール?」

「色んなお店が一度に集まるところを、ショッピングモールって言うの。」

「そうなの?」

まるで教師と生徒のような雛子とリリンの会話に微笑みながらも、要はリリンの様子を見てふと思う。

リリンは『ショッピングモール』と言う単語自体、この場で初めて聞いたようだ。

(そう言えばリリンって、この世界についてどれくらいのこと知ってるんやろ?)

リリスとして活動していたころ、蛍とは特に違和感のない会話をしていたが、今思い返してみれば彼女の会話は当たり障りのないものが多かった。

全くの無知、と言うことはないだろうが、彼女の持つ知識は行動隊長の任務として培ったものだけしかないのかもしれない。

ただ任務をこなすために、自分の意思とは関係なく身に付けた知識ばかりだとしたら、何となくだがそれは虚しく思えてしまう。

ただ今日からリリンは興味を抱いたもの、疑問に思ったものに対して知識を貪欲に吸収することができる。

要自身は自他ともに認める勉強嫌いではあるが、どうせ物事を学ぶならば自分の知りたいこと、興味のあることについて積極的に学べた方が楽しいはずだ。

「じゃあ、商店街とショッピングモールは何が違うの？」

「え？」

だがここで無知ゆえに純粋な知的好奇心で、リリンが普段気にも留めない雑学的な疑問を投げてきた。

言われてみれば、確かに商店街もショッピングモールも多くのお店が一か所に集う場所だ。

ただ必要はその違いが何かなんて考えたことはなく、そもそも疑問に思ったこともなく、強いて言うならば住宅街の近隣にあるのが商店街で、離れた場所にあるのがショッピングモール程度の違いでしか認識しておらず、それだって正解かどうか怪しい。

それは蛸も同様だったようで、なぜかこの場に質問を受けたわけでもない要と蛸の2人が同時に首を傾げることになった。

「商店街は、人が多く集まる場所にお店と立てたいって思う人が、自然と集まった場所のことを言うの。」

対してショッピングモールは、始めから商業区とすることを目的に多くのお店が集まった場所のことを言うのよ。」

するとリリンの疑問に雛子が淀みなく答えた。

「えっと、目的意識を持つものと持たないもの・・・意識と無意識の違い?」
妙に小難しい言葉で聞き返してくるリリンに、雛子は微笑みながら答える。

「そんなところよ。」

詳しく話すそれだけじゃないけれど、商店街とショッピングモールの簡単な違いはこんなところよ。」

「ふうん・・・ありがと、ひなこ。」

「どういたしまして。」

「へー、そやったんか。」

雛子教師による講座が終わり、要はつい正直な言葉を口走る。

「なんであなたまで知らないのよ。」

「いや無茶言うな。学校でも習わんやろそんなこと。」

恐らくは普段のノリで雛子は呆れ気味に零したのだろうが、こればかりは横暴だと言いたい。

商店街とショッピングモールの違いなんて社会の授業ですら出たことのないのだから、興味を持つて調べなければ身につかない知識だ。

そして自覚のあるスポーツバカの自分と、本の虫であるこの悪友の知識量を同列に見ないでほしい。

雛子が説明できたことには素直に感心するが、知らなかったことを糾弾される筋合いはないのだ。

「えと・・・わたしもしらなかつた・・・。」

蛭も少し恥ずかし気な様子で素直な言葉を口にする。

だが恥じることなどない。

知っている方が可笑しいとまでは言わないが、知らないから可笑しいと言うことでもない。

そもそもこの中では誰よりも買い物と言うものに縁のある蛭でさえ知らないことなのだから、知っている雛子が凄いだけである。

「う・・・べつ別に、知らないからって落ち込むことなんてないからね。蛭ちゃん。」

すると雛子が慌てた様子で螢のフォローに入ってきた。

相変わらず正反対の対応だが、螢が本気で落ち込んでいる以上、敢えてこの場では指摘しない。

その代わりジツトリとした目で彼女を睨む。普段とは立場が逆である。

そんな空気の中、千歳はどこか思い悩むような表情でリリンを見ていた。

その視線に気づいたリリンは、少しバツの悪そうな様子を見せながらも千歳の方を見る。

互いに何かを言おうとして、でも口に出せない。

そんなもどかしい空気が生まれ始めていた。

「それじゃあ、さっそく買い物を始めるとして、せつかくこの人数で来たのだし二手に分かれましようか？」

すると雛子が千歳とリリンをそれぞれ見ながらそんなことを提案してきた。

要は雛子の意図にいち早く気づき、螢に目配せをする。

螢は一瞬、戸惑う様子を見せたが、すぐにその意味に気付いてくれたようだ。

「じゃあウチらは2階を見てくるから、千歳はリリンと1階を見てくれない？」

「えっ？」

要からの突然の提案に、千歳とリリンは揃って疑問の声を上げる。

「千歳もここへ何回か来てるやろ〜？」

せつかくやし、リリンを案内したれよ。」

「ちよつと、何を急に……。」

千歳に対して冗談を言いながら、要は彼女の肩を寄せ耳打ちする。

「あんたの思い、ドーンとぶつけてきな。」

「要……。」

それだけ言い終わり要はリリンの元へ寄ると、蛭が同じようにリリンに耳打ちしていた。

「でつ、でも、そんな急に……。」

「だいじようぶ。ちとせちゃん、ぜつたいにわかつてくれるから。」

「ほたる……。」

向こうも向こうで、話は済んだようだ。

リリンは遠慮がちな様子を見せながらも、千歳の元まで駆け寄る。

「それじゃあ、しばらくしたらまたここで合流しましょ。」

「リリンちゃん、がんばってね。」

「千歳、後はよろしくな。」

それぞれが挨拶を終え、要たちは千歳とリリンを2人きりにするのだった。

:

要たちの背中を見送った千歳は、彼女たちの気遣いに心の中で感謝しながらリリンの方を見据える。

今日、自分がここへ来たのは買い物を手伝うためじゃない。

リリンと話をするために来たのだ。

その上で、彼女とどう接していくのかを決めるために。

昨日、要と別れた後からずっと考えていた。

ずっと、自分の思いと向き合ってきた。

そして改めてわかったことがある。自分はまだリリンのことを憎んでいる。

かつて故郷を傷つけ奪い、そして蛍を騙してずっと利用し続けて来たことへの憎しみは、そう簡単には消えるものではない。

そのことを思い出すだけでも、心の内にある黒い感情が燃え上がるほどだ。

でも一方で、それとは正反対の思いもあったことに気付いてしまった。

リリンには心がある。

そして彼女は蜚を傷つけてしまったことを悲しんでいた。

つまり彼女には誰かを想う心が明確にあるのだ。

それが元々あつたものなのか、蜚と接したことによつて芽生えたもののかは知らないが、この際それはどちらでもいい。

重要なのは、今のリリンであれば話を通じると言うことだ。

それなら一度、彼女と話をしてみたい。

話して、彼女が今何を思つてここにいるのかを聞きたい。

リリンを許すか許さないかを決めるのは、それからでも遅くはないはずだ。

それと同時に千歳は1つだけ心に決めたことがあつた。

それは……。

「……。」

「えと……。」

リリンから先に話をしてくるのを待つ、と言うことだ。

本当に彼女に誰かを想う気持ちがあれば、フェアリーキングダムの人々に対して行った仕打ちに少しでも罪悪感があるのなら、あちらから話しかけてきてくれるはずだ。

もしもリリンが話かけてこなかったら、誰かに指摘されて初めてフェアリーキングダ

ムへの罪悪感を自覚するようだったら、その時点で縁を切るつもりだ。

故郷の人々を傷つけ、絶望の闇に墮としておきながら何も思うことのないやつと、この先一緒にいる気はない。

例え虫を傷つける結果になろうとも、こればかりは譲ることができない。

「……あの……。」

だけどその心配は、きつと無用だろう。

なぜなら今日リリンは、こちらを見ては沈んだ表情で視線を離すを、何度も繰り返していた。

自分に対して何か思うことがある証拠であり、現に今もか細い声で話しかけようとしている。

それが分かっているながら、決してこちらからは歩み寄らない。

リリンを睨み付けるように見ながらも、彼女から話しかけてくるのを待ち続ける。

そして……

「あのっ！ちとせ!!」

意を決したリリンが、ついに大声で名前を呼んできた。

道行く人が一瞬こちらを振り向くほどの声だったが、千歳は気にせずリリンに返事をする。

「・・・なに?」

とりあえず、1つの疑念は払拭できた。だけどまだこれからだ。

リリンがこれまでのことに対して何を思い、これからのことをどう考えているのか、それを聞きだした上で答えを出す。

次のリリンの言葉次第で、自分たちの関係が決まるのだ。

千歳は少しの緊張から固唾を飲んで心を落ち着かせる。

懺悔するか、開き直るか、それとも分からず問いただしてくるか・・・。

どんな答えを出し、それに対してどう答えるかは、昨日何パターンもシミュレートしてきた。

叶うのなら、自分が一番望んだ答えを出してほしい。

そう、心の中で願いながら、ついにリリンが言葉が続ける。

「あつ、あたしに! なにかしてほしいことってある!!?」

「・・・はい?」

だが飛んできた返事が早速考えてきたどのパターンにも当てはまらないどころか余りにも予想の斜め上を行きすぎていたせいで千歳は驚きと拍子抜けと困惑に飲まれて固まってしまったのだった。

第25話・Bパート

千歳はまず状況を整理するところから始めた。

今この場には自分とリリンの2人だけだ。

こちらに気を利かせてくれたみんなは、ドリームプラザの2階で買い物をしている最中である。

そして自分は未だにリリンへの憎しみをくすぶらせているのだから、リリンの方から謝罪に來なければ金輪際縁を切るつもりでいた。

幸いにも彼女はフェアリーキングダムに対しても思うところがあるようで、2人きりになった後、あちらから話しかけてくれた。

問題はここからである。

リリンの本質を知らない以上、彼女がどんな対応をしてくるかわからず、昨日の内に何パターンもの会話をシミュレートしてきた。

リリンが素直にこれまでの行いを反省し謝罪してくるか、行動隊長らしく形式ばかりの謝罪文だけを口にしてくるか、無知ゆえにどうすれば良いかわからずに聞いてくるか。

そして最悪のケースとして、罪はないと開き直ってくるか。

考えられ得る様々なケースを想像し、それに対しての幾つもの答えをいくつも持ってきた……はずだったのだが……。

「……あつ、あれ？あれ？」

リリンから飛んできた言葉は「あたしになにかしてほしいことはある？」だった。

どの予想にも的中せず、そもそもなぜそんな言葉を口にしたのかまるでわからなかった千歳は、困惑の表情を浮かべたままりリンをずっと見ていた。

否、余りにも想定外過ぎる状況を前にリリンを見たまま硬直してしまっただけである。

そんな状況に陥っているものだから、リリンも困惑してあたふたし始める。

「ええと、やつぱりこうゆうときって、先にごめんなさいって言うべきだったの？」

なぜそれを私に聞く？

と、千歳は心に思ったツツコミを入れようと思ったが、未だに混乱で身体がフリーズしているせいか口一つ動かすことができなかった。

「ちっ、ちがうの！謝るつもりがなかったわけじゃないの！」

ただあたしのしてきたことって謝るだけじゃ許されなくて思ったから！

だから謝罪のことばじゃなくて行動でしめそうかとおもって！だからええとそのね

！」

先ほどの言葉を失言だと思ったのかリリンの方が勝手にパニックに陥ってしまった。やがて言いたいことも思いつかなくなったのか、ひたすら「あの」とか「ええと」とかを連呼し始めたリリンを見ている内に、千歳の方が逆に冷静さを取り戻していく。が、ショッピングモールで小さな女の子が言葉にならない言葉を連呼しているものだから、道行く人々からの注目度も半端ではなかった。

このままでは色々な意味で迷惑をかけてしまう。

はあつ、と一つため息を吐いた千歳は、リリンの目の前に立ち彼女の両肩に勢いよく手を置く。

「ひゃいー！」

驚いたリリンは素っ頓狂な声をあげるが、それを気にせず顔を近づけ

「落ち着きなさい。」

「・・・は・・・はい・・・。」

呆れた声色と共に力づくでリリンを黙らせるのだった。

威圧でリリンを無理やり黙らせた千歳は、近場にあつたベンチに彼女を座らせる。

とりあえず、このままではまともに会話すらできないだろうから、彼女を落ち着かせるために何か飲み物を買って来てあげよう。

「何か飲み物でも買ってくるから、そこで大人しくしてなさいよ。」
「はっ、はい……。」

先ほどとは打って変わって大人しい様子で言うことを聞くリリンを一瞥し、千歳は自販機へと向かう。

財布から小銭を取り出し自販機の前に立つが、ここで千歳はリリンの味の好みなんて一切知らなかったことに気が付く。

(しまった。先に聞いておけば良かったわ。)

行動隊長の味の好みなんて考えたこともないし知りたくもないから当然のことだが、リリンを落ち着かせるために飲み物を買いに来たのに、万が一嫌いなものを買ってしまつては逆効果だ。

最初に目に留まつたのはコーラやサイダーと言つた炭酸飲料だが、子どもの中には炭酸が嫌いだと言う子もいると、以前アップルから聞いたことがある。

それなら落ち着かせるには甘いものが一番と思ひ、紙パックで販売されている果物ジュースに目を移すも、甘いものだつて結局人の好き好きだ。

幼い子どもでしかも女の子だからスイーツの類は好きだろう、と言うのはあくまでも

先入観でしかない。

ならばいいっそ嫌がらせとちよつとした報復をと思ひ青汁でも買つてやろうかなんて一瞬思つたが、そんな大人げなさすぎることをしては自分が恥をかくだけだし、そもそもこんな所には来ていない。

と、ここまで考えた千歳は、味の好みが変わらずあれこれ考えるくらいなら無難なものを選べば良いと、ミネラルウォーターを選んでそれを購入した。

(これなら大丈夫よね。この国の水はとても美味しいし。)

浄水技術に優れたこの国では、家庭の水道水さえそのまま飲料水として利用できる。

蛇口を捻れば無料でいくらでも水が得られるこの国で、わざわざお金を使って購入するのは無駄では？と最初は思つたが、アップルと2人で興味本位で買って見たところ、美味しさのあまり揃つて絶句した記憶がある。

ただの水と侮ることなかれ、口当たりや風味が良いこの国のミネラルウォーターはとも味わい深く、そして美味しいものだった。

それからしばらくの間、アップルと2人で市販品のミネラルウォーターの飲み比べにハマつてしたのは別の話である。

特に今購入したものは、癖がなく飲みやすい軟水だ。

これならリリンに買つても良いだろう、と思ひ自販機から取り出そうとした次の瞬

間、千歳は我に返る

(私、何でこんなことしてるんだろ・・・?)

なぜ憎き相手を落ち着かせるためにベンチに座らせた挙句、飲み物を買って与えに自販機まで来ているのだ?

これではまるで迷子の面倒を見るのに奮闘しているようなものではないか。

確かに要からは『リリンのことをよろしく』と言われはいるが

断じて!

このような意味で任されたわけではない。

しかも相手の好みが変わらないからと商品の吟味までした挙句、この国の水を褒め称えだしたものだから、当初の目的から大きく離れてしまったばかりか、もはや自分でも何を考えていたのかわからなくなってきた。

そんな激しい自己嫌悪から千歳は自販機の前で屈んだ状態で再び硬直してしまったが、一先ずこのままだと邪魔になるだろうからと、いそいそとミネラルウォーターを取って自販機から離れるのだった。

∴

ベンチに座りこんだリリンは、1人深々とため息を吐く。

(あたし・・・なにやってるんだろ・・・)

蛭たちが千歳と2人きりになれる状況を作ってくれたのは明らかだ。

そしてこの場を借りてちゃんと彼女にこれまでの行いを謝罪するつもりだったのに、盛大に空振りしたばかりか、彼女に余計な気まで使わせてしまった。

そもそも、謝罪の言葉だけで許されるものではないことと、謝罪しなくていいとは別の話に決まっている。

言葉よりも先に行動ではなく、まず『ごめんなさい』と謝罪するところから始めなければならなかったのだ。

こんな、少し考えれば当たり前のことにさえ頭が回らない情けなさでいっばいだっ
た。

何のためにここに来るまでの間、頭を悩ませて謝罪の仕方を考えて来たのだろうか？

(こんなとき、『リリス』だったら・・・)

自分の思慮の浅さに泣けてきたリリンは、つい後ろ向きな思考に引つ張られていく。
行動隊長としてのリリスだったら、千歳を刺激しないように慎重に言葉を選びなが

ら、体の良い定型文を組み合わせて当たり障りのない謝罪文を淡々と述べていただろう。

(ううん、それだけはぜったいにしちゃダメ……。)

言葉なんて言ってしまえば文字の羅列。

誰が何を口にしようと意味は同じで均一的だと、昔の自分なら思っただろう。

だけど今はもう、あの時の心無い行動隊長ではない。

今の自分は知っている。言葉には、人の心を、思いを乗せることができる。

同じ言葉でも、人によって意味が変わってくることを。

同じ人による同じ言葉でも、人の思いによって意味が変わってくることを。

そんな根拠もない、非科学的で抽象的なものを、今は信じることができる。

だから自分の心で、自分の思いで、自分の言葉を、ちゃんと千歳に伝えたい。

何よりも、そうしなければ意味がないと思っっている。

だが……

(結局迷惑かけちゃったし……。)

その結果がこの状況であるならばいっそ、定型文でも何でもいいから謝罪した方が良かったのでは？なんて考えさえも浮かんでしまう。

それほどに意気消沈していたリリンの前に、やがてペットボトルの水を持った千歳が

姿を見せた。

「はい、これ飲んで少し落ち着きなさい。」

「ありがと……。」

少し遠慮がちな様子で千歳から水を貰ったリリンは、ペットボトルのキャップを開けて一つ口に含む。

「あれ？美味しい……。」

口当たりはまろやかで、喉を通る感触は透明感のあるものだ。

舌だけでなく、口いっぱい広がる感覚が、味がないのに美味しい、と言う不思議な感想をリリンに抱かせた。

「……そう。」

こちらの様子をどこか興味深そうに見る千歳からの視線に気づき、慌ててリリンはペットボトルから口を離す。

今朝の件と言い、五感を得た嬉しさでつい自分の世界に浸ってしまった。

今すべきことは、千歳にちゃんと謝罪すること。

喜びを噛み締めるのはその後だ。

「あの……ちとせ。」

「なに？」

声をかけるや否や、千歳は険しい表情でこちらを睨み付けていた。

彼女の視線からは自分への怒りが、憎しみが感じられる。

その視線にリリンは気圧されつい視線を反らそうとするも、今まで彼女に怒られて憎まれて当然のことはしてきた。

だから彼女の視線から目を反らしてはいけない。それは自分の罪からも目を反らすことになるから。

しっかりと受け止めなければならぬと心に誓ったリリンは、震える拳を両手で握り、蜷から返してもらった勇気のおまじないをする。

「が……がんばれ、あたし……。」

小声で自分を奮い立たせ、千歳の視線を正面から受け止める。

そして……。

「ごっごめんなさい！」

あたし、あなたに……あなたの故郷にひどいことをして……。

微かな勇気を背に一步踏み出し、ようやく千歳に謝罪する。

「ごめんなさい……か。どうしてそう思ったの？」

「え？」

すると千歳の方から予期せぬ質問が飛んできた。

てつきり許すか許さないかの2択の答えが返ってくると思っただけに、謝罪の理由を聞かれるとは思わなかったリリンは一瞬、ポカンとしてしまう。

「だっ、だつて、あたしは、あなたの故郷を闇に墮としたのよ?」

「あなたは行動隊長だった頃、自分の意思なんて持つてなかったんでしょ?」
「っ!?!」

千歳から思わぬ核心を突かれ、リリンは言葉を失う。

「あなたは司令官に命令されるがままに、私の故郷を闇に閉じこめた。

あなたはその命令に、何の疑問も抱かなかつたのでしょ?」

それなのになんであなたは今になって、その時のことを謝罪するの?」

千歳の言葉の真意が分からず、リリンは困惑した様子で話を整理する。

彼女の言葉はともすれば、自分の意思で行ったことじゃないから気にしなくともよ

い、と取ることもできるが、それだけは絶対に違うと確信する。

そんな思いを抱いている人が、あそこまで憎しみの籠った瞳を向けられるとは思えない。
い。

彼女は間違いなく、自分のことを恨んでいる。

恨んでいて尚、このような問いかけしてくるのだ。

その言葉に隠された真意を探るべく、リリンは思考をフルに働かせる。

そして千歳が、行動隊長の性質を見抜いていたことを思い出す。元々行動隊長に心がない。

行動隊長の言葉は全て、人を演じるためだけに紡がれる心無いものばかりだ。

(もしかして……あたしを試しているの?)

自分の言葉が行動隊長としての言葉なのか、それともリリンとしての言葉なのかを……。

それならば、こちらのすることは変わらない。

「あつ、あたしは……。」

自分の想いを包み隠さずぶつけるだけだ。

「あなたの故郷の人々を傷つけて……。」

違う。こんな言葉じゃない。

リリンは慌てて口を閉じ、今一度自分の心と向き合う。

どうして千歳の故郷を闇に墮としたことを悔やんでいるのか?

どうして千歳に罪悪感を抱いているのか?

その想いを抱いたきつかけは何か?

昨日の出来事まで思考を遡ったリリンは、あの暗闇の世界の中で感じたことを思い出す。

「……あのとき、あたし、絶望の闇に閉じこめられて、そのとき初めて知ったの。

絶望の闇は、こんなにも暗くて怖いところだったんだなって……。

とても、とても怖かった。

何も見えなくて、何も聞こえなくて、でも自分の心の声だけがどんどん聞こえてきて……。」

あの時のことを思いだし、リリンは震える身体を抑える。

幾度となく泣いて、叫んで、身体を裂こうとして、その全てが無為となつて闇へと消えていく。

ただ心が壊れていくのを待ち続けなければならなかったあの世界の恐ろしさを、身をもって初めて知った時、ようやく思い知ったのだ。

自分は今まで蛩を始めとした、大勢の人々にこんな恐ろしい世界を与えていたのだと。

「それでね……わかったの。

あたしがしてきたことつて、こんなにひどいことだったんだつて……。
だからあたしは、あなたに謝りたい。

あなたに、あなたの故郷にひどいことをして、ごめんなさい。

それから、謝るだけじゃ許してもらえないことじゃないつて、わかるから。

だから、あたしにできることならなんだってする。
だから……。」

あたしのことを許してほしい。

最期にそう言いかけたリリンは、慌てて声を抑える。

許すかどうかを決めるのは千歳自身だ。

もしも許してもらえなかったら、その時は仕方がない。

だけど自業自得だと分かかっていても、千歳から嫌われるのが怖かった。

ちぐはぐながらも伝えたいことを言葉にして伝えたりリンは、そのまま口を閉じて俯く。

そして千歳からの返事を待ち続ける。

しばらくの沈黙の後、千歳がようやく重い口を開いた。

「じゃあ、今すぐ蛍の前から消えなさいって言ったら？」

「え……。」

千歳からの言葉に、リリンは言葉を失うのだった。

：

千歳はまだリリンと言う少女を知らない。

だからリリンがどうして謝るのか、その真意を知りたかった。

今のところ、彼女の言葉からは嘘は見られない。

行動隊長であれば平気で嘘をつけるだろうが、流石にこの期に及んで彼女に心がないだなんて疑うつもりはない。

だから、彼女の言葉が全て本心だと信じることができる。

だけどまだ許すわけにはいかない。

あと一っだけ、確かめなければならぬことがあるから。

「償いのためなら何だってするのよね？」

「だったら今すぐ蛍の前から消えてって言ったら？」

「……っ。」

今にも泣きそうな目で、唇を強く噛みながらリリンは身体を震わせている。

その姿を見て心が痛むが、ここで妥協するわけにはいかない。

確かめたいのだ。彼女の言葉が口先だけじゃないことを。

どんな覚悟でその言葉を口にしたのかを。

「・・・イヤ・・・イヤだ。」

やがて彼女は静かにそう口を開いた。

自分にできることなら何でもするとおきながら、口にしたのは明確な否定の言葉。

千歳は険しい表情を浮かべ、リリンを責めるように睨み付ける。

「あなたに選択権があると思ってるの？」

「おもってないよ！でもそれだけは絶対にヤダ!!」

目に涙を浮かべながら、リリンはどうとう叫び返した。

道行く人々が何事かと振り返るが、今は周りの反応を気にしている場合ではない。

千歳は気にせず彼女に詰め寄る。

「償いはするって言うっておきながら、自分にとって嫌なことなら引き受けない。

結局、あなたの言うヒドイことって、その程度のものでしかないってこと？」

「っ・・・」

自分が今、どれだけ残酷な言葉を言っているかは理解している。

リリンのことをどれだけ傷つけているのかも理解している。

堪えきれずに涙を流しながら、頭を抱える彼女を見下ろす。

こんな質問、したくはなかったと、心の奥がチクリと痛む。

それでも、千歳は言葉を止めなかった。

こうでもしなければ、心を自覚して間もない彼女の本心を引き出すことが出来ないと思つたから。

「ごめんなさい……でも……イヤなの……」

ほたるとはなれたくない……あたしは、ほたるとずっと一緒にいたい……

それ以外のことなら、どんな償いでもするから。

ダークネスとだつて戦う。この世界の人たちを守るから……

だから……おねがい……」

それ以降、リリンは口を閉じてしまった。

何だつてする、と言いながら蛭とは離れたくないと言う。

彼女の言葉はちぐはぐで、思い当たつた言葉を順に口にしていくだけだ。

それなのに……

(……はあ、不器用な子。)

心の中でため息を吐きながら、千歳はそのちぐはぐな言葉をどこか好ましく思つた。

ダークネスを離脱しても、行動隊長であつた頃の記憶は残っているはずだ。

かつて蛭の心に付け入り、言葉巧みに騙して手玉に取つていたように、口八丁で形式的な謝罪文を口にすることだつてできたはずだ。

それなのに、彼女はそうはしなかった。

必死に自分の気持ちと向き合い、慣れない言葉を使って彼女自身の想いを言葉にしようとした。

これがかつての行動隊長リリスの姿であったかと思えば滑稽だが、不器用ながらも自分の心を言葉にしようと努力する彼女の姿を見ている内に、千歳の心に焼き付いていた憎しみが、少しずつ流されていったのだ。

「・・・どうして?」

だから最後に千歳は、リリンがなぜそこまで蛭と一緒にいたいのかを知りたかった。

「だってあたし・・・ほたるといっしょにいていいって・・・言われたから・・・。」

「え?」

誰に?と問いかける前に、リリンが言葉が続ける。

「ほたるのおかーさんが・・・あたしは・・・幸せになっていいって、言ってくれたの・・・。」

だからあたし・・・幸せになるために、償いたかった。

あなたにちゃんと謝らなければ、幸せになっちゃいけないって思ったから・・・。

あたし・・・幸せになりたい・・・だから・・・ほたると一緒に・・・いたい・・・。」

その言葉を聞いて、千歳はリリンの思いを理解する。

幸せになってよいと言われて、蛭と一緒にいることを受け入れて、それでも自分への

罪悪感がその幸せを受け入れてはいけなさと、拒絶していたのだろう。

「はあく……。」

今度は心中ではなく、直接大きなため息を吐く。

「あなた、私の目の前でよくそんなことが言えたわね？」

「えっ……？あつ……。」

指摘されて、初めてリリンは自身の失言に思い当たる。

そこに気付けただけまだマシなもの、幸せになりたいから蛍と一緒にいたいと、その幸せを噛みしめるために心に残ったしこりを取り払いたいから謝罪に來ましたと、誰がそこまで喋れと言った。

確かに問いかけたのはこちらだが、例え心の中で思ったとしても口にしてはいけないうものがあるだろう。

（本当に、不器用な子……。）

思えばリリスも、蛍へ憎しみを募らせてからは1人好き勝手に暴れまわっていたから、元々感情の抑制が効きにくい子なのだろう。

人の世の中、正直者が必ずしも正義と言うわけではない。

思ったことを何でもかんでも口にしてしまうのは、流星に利点を通り越して欠点である。

「いい？世の中にはね、例え心の中では思ったことでも、言わなくていいことがあるの。それを知らないってことは、あなたには人を思いやる気持ちが無いって言ってるようなものよ。」

「……ごめんなさい。」

すつかり黙り込んでしまったりリンへ、千歳は軽く説教をする。

「あなたには、まだまだ知らないことが沢山あるみたいね。」

そんなことじゃとてもじゃないけど、この先この世界でちゃんと生活できるかわかったものじゃないわ。」

「……。」

そしてわざとらしく咳ばらいをしてから、彼女の方へ向き直る。

「だから、あなたが知らないこと、知らないやいけないこと。私も一緒に教えてあげるわ。」

「え……？」

よつぽど予想外だったのか、リリンは目を丸くしてこちらを見る。

「今のままじゃ、いつ余計なことをするかわからないし、危なつかしくて見てられないもの。」

私たちと一緒にいる以上、一緒にいても恥ずかしくないような振る舞いを身に付けて

もらわなきや困るのよ。」

素直じゃない言葉だと自分でも思う。

これが蛍たち相手だったらそのままの思いを伝えていただろうけど、リリンが相手はまだ素直になりたくはないようだ。

「ちとせ・・・ありがとう！」

それでも、ちゃんと言葉の意味は伝わっていたようだ。

リリンは闇の牢獄を知ったことで、己の罪の重さを知った。

そのための償いに、ダークネスと戦うことを決意した。

そして、その先にある幸せを求めて、蛍と一緒にいる道を選んだ。

多くの人を不幸にしておきながら何と勝手なことを、と思いましたが、リリンだって心を知って初めて幸せの尊さに気が付いたはずだ。

それならば、彼女が罪を自覚し償いのために力を尽くすのであれば、彼女が抱いた幸せと言う気持ちを大切にして欲しい。

彼女自身のため。そして・・・

「勘違いしないでよね。あなたのためじゃない。蛍のためよ。」

蛍の幸せのために。

「それでも、ありがとう！」

その言葉にリリンは嬉しそうな笑顔を返した。

彼女にとって、蛍の幸せは彼女自身の幸せと同義だ。

だから蛍の幸せを守ることは、彼女の幸せを守ることにもなる。

(やれやれ、守るべきお姫様(プリンセス)が、また1人増えたわね。)

だけど、それもいかもしれない。

不器用ながらも己の罪を向き合い、懸命に生きようとするリリンのことを、千歳はこの時応援したくなったのだから。

∴

2階のお店を適当に見て回り、雑貨諸々を見つけては買っていた蛍たちは、しばらくして1階に戻り、リリンたちを探し始めた。

リリンはちゃんと謝ることができたのだろうか？

千歳と仲直りできたのだろうか？

そんな不安が心に引つかかる一方で、なぜか蛍には上手く行くと言う確信があった。

リリンは心から千歳に謝罪したいと思っていたし、千歳はそんな子の気持ちも絶対に無下にはしないから。

「ちとせちゃん、リリンちゃん。」

「あつ、ほたる。みんな。」

やがて2人の姿を見つけたので声をかけてみると、リリンが今朝以来の笑顔でこちらに手を振ってきた。

千歳の表情もどこか晴れやかだった。

それを見た蛭たちは全てが上手くいったことを確信し、互いに顔を見合わせて微笑みながら2人の元まで向かう。

「リリンちゃん、ちとせちゃんと仲直りできたみたいだね。」

「うんー!」

リリンは満面の笑みで答える。

「千歳、答えは出たみたいやね。」

「ええ、今まで心配かけてごめんなさい。」

千歳の方も、憑き物が取れたような様子だった。

2人とも、それぞれの因縁に1つの決着をつけることができたようだ。

リリンも千歳も、蛭にとっては大切な人だ。

そんな人同士が憎み合い、いがみ合うことが無くなったことを、螢は心から喜ぶ。「みんな、こんなところにいたのね。」

「え・・・？リン子!？」

すると、この場に思わぬ人物が姿を見せた。

リン子の姿を見るや千歳は目を丸くし、要たちも驚いた様子を見せる。

それもそうだろう。大人は子どもと違って夏休みがなく、螢の両親も絶賛今仕事中有る。

そんなリン子がここにいると言うことは、彼女は休みを取ったのだろうか？と思ったが、それなら最初からついてきているだろうし何よりも千歳がこんなに驚くはずがない。

「どうしてここに？」

「ここ、うちの職場からそこそこ近いのよ。」

だから少し早めにお昼休み頂いて、様子を見に来たの。」

リン子の言葉を聞いてふと時計を見てみると、時刻は正午を過ぎていた。

「ふふ、その様子だとちゃんと仲直りできたみたいね。良かったわ。」

そう言いながらリン子は千歳とリリンを見比べて微笑む。

「もう、心配性なんだから。」

そんなリン子に、千歳はどこかバツの悪そうな様子で口を尖らせた。

「ふふ、ところでみんな、お昼はもう食べた？」

「え？いや、まだやけど。」

既に正午も過ぎてのことだし、昼食にはちょうど良い時間帯である。

「それなら、これからみんなで……。」

そう、リン子が言いかけたその時。

「っ！闇の波動よ！」

リン子が絶望の闇を感じ取り、声を上げた次の瞬間、辺り一帯の人が消え、色が奪われていった。

リン子たち妖精は慌てて元の姿に戻り、それぞれのパートナーの後ろに隠れる。

「ダークネス！」

「あつ、ちよつとリリンちゃん！」

するとリリンが突然外へ向かって走り出して行った。

恐らくダークネスの気配を感じたのだろうが、どこか鬼気迫る様子だった。

蛸は不安に駆られながらも、みんなと共にモールの外へと出る。

「ここにいたか。ホープライトプリキュア。」

リリンを追って着いた場所には、サブナックとダンタリアの姿があった。

「サブナック、ダンタリア。」

「リリス……。」

サブナックが、どこか複雑な表情でリリンを見据える。

「まさか、本当にかつての敵さえ受け入れてしまうとはね。」

つくづく甘い連中だ。」

一方でダンタリアは、吐き捨てるようなセリフとともにこちらを睨み付けて来た。

「あんたらが2人揃ってお出ましとは、珍しいやない。」

「それだけこちらも追い込まれていると言うことだ。」

やるぞ、ダンタリア。」

「ああ。」

ダークネスが行動隊長、ダンタリアの名に置いて命ずる。

ソルダークよ、世界に闇を撒き散らせ。」

既に絶望の闇の回収を終えていたのか、ダンタリアは即座にソルダークを生成する。

「ガアアアアアアアアアアア!!」

そしてソルダークが雄叫びと共に誕生するが、続いてサブナックが1枚の黒いカードをかざし出した。

「まさか!?!」

リリンが驚いた様子を見せ、要たちも表情を引き締める。虫にもあのカードには身に覚えがあった。

確かダークシャインが消滅した時に残されたカードだったはず。

だがそのカードが何なのかもわからないまま、事態は進んでいく

「暗き闇よ。深淵に囚われし絶望の化身に、光を喰い尽くす力を与えよ！」

ダークネスが行動隊長、サブナツクの名の下に、その姿を顕現せよ！ネオ・ソルダーク！

新たに聞く呪文と共に、サブナツクはかざしたカードをソルダークへと投げつけた。

次の瞬間、カードはソルダークの体内に吸い込まれると同時に、ソルダークの身体が膨張する。

「なっ、何?！」

驚いて慌てふためく虫を、リリンが支えるように手に取る。

だがソルダークの変化は止まらない。

膨張した体はやがて弾け飛び、内側から新たな姿の怪物が姿を現した。

ビルをも超える巨体の背には、その身を包まんとするほどの巨大な翼が生え、両手足は肉食竜を思わせる鋭利な爪が現れる。

尻尾が生え、地面を打つと同時に地響きを引き起こす。

頭部も変形し、鼻から口までが犬のように尖り、鋭い牙を見せるが、その形状はこの世のどの生物にも該当しないものだ。

怪獣映画に出てくるようなフォルムに巨大な翼。

その姿は、ファンタジーに登場する『ドラゴン』のように見えた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ドラゴンへと姿を変えたソルダークの進化態、ネオ・ソルダークは雄叫びを上げる。

これまでのような甲高い声ではなく、獣の咆哮のようだ。

「ソルダークが、進化した・・・?」

目の前で起きた出来事を理解しながらも、千歳は哑然とした様子を見せていた。

要も雛子も、そして蛍も、ドラゴンへと進化したソルダークを前に目を離すことができなかつた。

「ディスプレイ・カードはもともとこのために作られたものよ。」

ソルダークを超えた兵士、ネオ・ソルダークを生み出すために。」

唯一内情を知っていたリリンだけが、落ち着いた様子で目の前の出来事を説明する。

「ネオ・ソルダーク・・・。」

「でも、あたしたちは負けられない。ほたる、いくよ!」

「え? うっうん!」

未だに動揺は隠せないが、このまま惚けていても意味はない。

リリンに言われるがままに蛭はシャインパクトを召喚してリリンのものと交換する。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート!!」

蛭とリリンは1つの光に包み込まれ、新たな姿へと変身する。

「よし、ウチらも！」

蛭とリリンに続き、要たちもパクトを手に取る。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート!!」

「伝説を超えた、2つの光!!」

「キュアシャイン・サハクイエル！」

「キュアシャイン・レリエル！」

「世界を駆ける、蒼き雷光！キュアスパーク！」

「世界を包む、水晶の輝き！キュアプリズム！」

「世界に轟く、真紅の煌めき！キュアブレイズ！」

それぞれがプリキュアへと変身し、ネオ・ソルダークと対峙する。

「アツプルさん、安全な場所まで下がって！」

「わかったわ。」

雛子はアツプルたち妖精に下がるように呼びかけながら、彼女たちを守るように正面

に立つ。

「ガアアアアアアアアア!!」

ネオ・ソルダークが怪獣映画さながらの咆哮をあげるが、要は怯まずに拳を構える。
「デイスペアー・カードで強化されたソルダークか。

なんか嫌な予感しかないけど。」

「ひとまず、小手調べと行きましようか。」

要と千歳がそれぞれ構えた手に雷と炎を纏い、ネオ・ソルダークに狙いを定めた。

彼女たちの言葉から察するに、ネオ・ソルダークが何らかの力を持っているのを予感しているようだ。

「はあっ!」

要と千歳が、ネオ・ソルダークに目掛けて雷と炎を放つ。

だが次の瞬間、ネオ・ソルダークに触れた雷と炎は碎け散るように消滅した。

「やっぱり、攻撃が効いてないわ。」

やっぱり、と言うからには雛子にもこの状況が想定できたのだろう。

さほど驚いた様子を見せずに現状を分析する。

「予想通りとは言え、キツイな。」

ウチらの攻撃じゃやつには届かない。」

「ええ、それでも……。」

苦々しい表情を浮かべながら、要と千歳はネオ・ソルダークを相手に闘志を燃やしている。

だが蚩もまた、今の状況を見て不安に陥っていた。

攻撃が通じない敵なんて初めての経験だ。

もしも自分の力も通らなければ……。

「あたしが、やるしかない。」

「え？」

だがここで要と千歳よりも一歩前に出たリリンが、一言そう言った後にネオ・ソルダークへと飛び掛かっていった。

「はあ!!」

「ちよつと！リリンちゃん!!」

蚩も慌ててリリンの後を追う、そのままネオ・ソルダークに戦いを挑むことになるのだった。

∴

サブナックとダンタリアは、宙に浮遊したまま戦いを見ている。

まずはネオ・ソルダークの力がどれほどのものかを確かめるのが先だ。

手始めにキュアスパークとキュアブレイズの攻撃を無力化したところから、ダークシャインと同じ特性を秘めているようだが、問題はこれからだ。

覚醒した2人のキュアシャイン。

蛭とリリンを相手にどれだけ戦うことができるか。

「ほたる！やるよ！」

「わっ、わかった！」

リリンに促されるままに、2人は全身に希望の光を纏う。

「はああっ!!」

そして纏った光を一気に開放し、ネオ・ソルダークへとぶつけた。

次の瞬間、ネオ・ソルダークはよろめき、全身に纏っていた黒い瘴気が吹き飛ばされていった。

「よし、このまま！」

「まって！リリンちゃん！」

そのままリリンはネオ・ソルダークへと突撃し、その巨体をよろめかせる。

ネオ・ソルダークは鋭い爪をリリンに向けて振りかざすが、蛍がその手のひらを受け止めた。

続いてリリンが左肩の翼を振るい、ネオ・ソルダークの頭部へと叩き付ける。

だが次の瞬間、ネオ・ソルダークは大きく口を開き、そこから闇の破壊光線を放った。「リリンちゃん!」

今度は蛍に促され、2人は片翼の翼を羽ばたかせて飛翔し、光線を回避する。

この様子だと、2人のキュアシャインに一方的に負かされる心配はなさそうだ。

曲がりにもアモンがプリキュアを倒すための切り札として造りだけただけのことはある、と言うことか。

だが・・・

「ネオ・ソルダーク、所詮こんなものか。」

「どうやら、そのようだね。」

サブナックとダンタリアが抱いた率直な感想は『この程度の力か』と言う落胆だった。確かに旧来のプリキュア相手ならば切り札と言えるだけの脅威となっていただろうが、あの程度の力ではラスト・レクイエムはおろかダークシャインにすら及ばないだろう。

結局、そこいらのソルダークにダークシャインの力の欠片を与えた程度でしかないのだ。

あれでは、ダークシャインの力を反転させた2人のキュアシャインにも敵うはずもない。

「仕方があるまい。俺たちも出るぞ。」

だがネオ・ソルダークの誕生は、思わぬ副産物を与えてくれた。

「そうだね。これだけの闇があれば、僕たちも存分に戦えそうだ。」

欠片とはいえ、その元となる力はかつて世界中を飲みこんだダークシャインの力だ。

この辺り一帯の絶望の闇は、ソルダークの時とは比でないほどに高められている。

この空間ならば、闇の世界にいるときと遜色のない力を発揮できるだろう。

サブナツクは蛍に向かって跳躍し、その拳を叩きつけた。

「きやあつー！」

蛍は寸でのところで両手でガードするが、サブナツクはもう片手で追撃をかける。

だが次の瞬間、蛍は右肩の翼を羽ばたかせ、風を巻き起こしてサブナツクを追い払った。

「・・・ん？」

今の攻防の中でサブナツクは僅かに違和感を覚える。

蛍と言う少女は潜在する力の総量こそ凄まじいものはあったが、戦い方は素人同然だった。

単純な戦闘センスと能力の扱い方だけならば、キュアスパークやキュアブレイズの方が遥かに優れている。

勢いに任せたりくらしいしか能のなかった相手が、あの一瞬で片翼を羽ばたかせて攻撃を妨害する、なんて動きができるだろうか？

そもそも翼とは本来人間にはない器官だ。

大方、希望の光で作られた飾りものだろうが、それでも咄嗟の反応で動かせるとは考えにくい。

「たあっ！」

こちらへ向かってくる蛍の拳を、サブナックはガントレットで受け止める。

以前は一撃で粉々に砕かれたが、今回はひび割れる程度で済んだようだ。

何度も受け止めることはできないだろうが、この一撃を止めただけでも十分。

サブナックは再び拳を振り上げ、蛍目掛けて振り降ろした。

だが蛍は身体を旋回させ、拳を回避する動きのまま、こちらに回し蹴りを叩きこんできた。

「なにっ?」

蹴りを受けたサブナツクは衝撃のまま後退する。

やはり妙だ。

やつの動きが突然、歴戦の戦士と言うべき動きに変わっている。

だが考えるよりも先に、ダンタリアと交戦しているリリンがこちらの目の前を横切った。

「ダンタリア、苦戦しているようだな。」

「お互い様だろ。」

肉弾戦でキュアシャインに圧されるなんて、君らしくもない。」

憎まれ口を叩きあいながらも、サブナツクとダンタリアは2人のキュアシャインを見定める。

2人の力は想像以上のものだ。

だが同時に、付け入る隙がいくらかでもあることがわかった。

動きだけはまともになったとはいえ、戦いの素人に変わりはない蛍。

心を得たばかりに、感情的になりやすくなっているリリン。

2人には今、目の前の敵である自分たちしか見えていない。

「いぐぞ。」

サブナツクの呼びかけと共に、2人は蛍とリリンに戦いを挑む。

技は劣らずとも、力はあちらの方が上だ。少しずつではあるが劣勢に追い込まれていく。

だが……

「ネオ・ソルダーク!!」

蛭とリリンの視線がこちらに釘付けになった瞬間、サブナックはネオ・ソルダークに呼びかけた。

次の瞬間、後方からネオ・ソルダークが闇の光線を解き放った。

「あつ……。」

「しまった!」

すっかり気を取られていた2人は、迫りくる光線を回避することができなかった。

だが……

「よつと!」

「はあつ!」

蛭とリリン、サブナックとダンタリアの間を、雷と炎が横切るのだった。

∴

突然目の前を過つた炎に抱かれながら、リリンは寸でのところで光線を回避する。地上に降り立つと、隣にはキュアブレイズが、千歳が立っていた。

時を同じくして、蛍と助けた蒼い雷、キュアスパークこと要も、蛍と一緒に地上に降り立つ。

光線が直撃する瞬間、自分たちは要と千歳に助けられたのだ。

「全く、力だけ強くなっても、危なっかしいところは何も変わつとらん。」

「かなめちゃん……。」

「この分だと、まだまだ私たちの助けが必要みたいね。」

「ちとせちゃん……。」

どこか呆れたような、でも安堵したような様子で要と千歳はこちらを見る。

するとサブナックが拳を振りかざし、ダンタリアが闇の球体を撃つて攻撃してきた。

だが2人の攻撃を、水晶の盾が阻む。

「私から言わせればみんな同じよ。」

「誰もかれも突つ走つてばかり。」

「ひなこちゃん。」

自分たちの一步後ろから、雛子が不敵な笑みを浮かべて盾を展開していた。

「いいわよ！思う存分突っ走っちゃいなさい！」

みくんなまとめて、私を守ってあげるわ!!」

雛子の言葉を受けて、蛍は嬉しそうに微笑む。

そんな蛍を見ながら、リリンは全員を一瞥すると、みんなこちらに微笑みかけてくれた。

その笑みには、一人で戦わなくてもいいと、言われているようだった。

リリンは、贖罪の念から一人でも戦わなければならないと焦ったことを反省する。

自分が一人で先行しては、みんなにも迷惑をかけてしまう。

ダークネスを確実に倒し、この世界の侵略を阻止するためにも、みんなと一緒に戦うことを覚えていこう。

「よし・リリンちゃん！みんな！」

ひさしぶりに、あれ、言ってみよう！」

すると蛍が、珍しく力強くそう宣言した。

彼女の言う、あれ、の意味はみんなはわかっているようで、嬉しそうに頷きあう。

そしてリリンにも、蛍の言葉の意味することがわかった。

「5つのひかりが、でんせつをつくる！」

蛍の言葉に続いて、リリンはみんなと声を合わせる。

「「「「ホープライト!!!プリキュア!!!」」」」

敵であった頃は、この名乗りに何の意味があるのかわからず考えたこともなかったが、5人同時に名乗りをあげることに加わったりリリンは、改めてみんなの仲間になったことを実感する。

伝説を紡ぐ4人の戦士から、伝説を創る5人の戦士へ。

その輪に加わることができたことを、リリンは心から喜んだ。

「ネオ・ソルダーク!!」

サブナツクの呼びかけと共に、ネオ・ソルダークが雄叫びを上げながら、巨大な翼を羽ばたかせて空を飛び、こちらに迫る。

「みんな、いくよー!」

「「レッツー!」」

「「Go!」」

「「「「プリキュア!!!!」」」」

蛍たちも向かい打つべく、掛け声と共に散開する。

蛍とリリンは互いの手を繋ぎ、片翼を羽ばたかせて飛翔し、ネオ・ソルダークを迎え撃つ。

その最中、サブナックとダンタリアがこちらに向かってくるが、要と千歳が行く手を阻む。

そしてネオ・ソルダークがこちらにめがけて光線を放つが、雛子が盾を展開してその光線を遮った。

光線を受けた雛子の盾は碎け散ってしまいがその爆風が目くらましとなり、動きを見失ったネオ・ソルダークに向かって、蛭とリリンは一気に距離を詰める。

そしてその巨体を蹴り上げ、上空へと浮かせる。

「ひかりよ、あつまれ!! シャインロッド!!」

そして2人同時にシャインロッドを構え、空へと掲げる。

「プリキュア! スカイライト・エクスプローション!」

「プリキュア! ナイトライト・エクスプローション!」

上空へと蹴り上げたネオ・ソルダークに目掛けて浄化技を叩きこむ。

「ソード!!」

そして放った光線をそのまま剣の形に圧縮させ、ビルをも超える大きさを誇る巨大な光の剣を生成した。

蛭とリリンは剣へと形を変えた浄化技を振りかざし、ネオ・ソルダーク目掛けて振り降ろし、地上へと叩き付ける。

「ガアアアアアアアッ!!」

身体をよるめかせながらも、ネオ・ソルダークは立ち上がり、こちらに向かって羽ばたきながら両手の爪で引つ掻くように手を振った。

だが次の瞬間、行動隊長たちと交戦していた要と千歳がこちらへと振り向き、ネオ・ソルダークに向かって高速に突撃する。

「させるか!!」

サブナックとダンタリアも振り向き2人を止めようとするが、雛子がバリアを展開して2人を閉じ込める。

「プリキュア! スパークリング・ブラスタ―!」

「プリキュア! ブレイズフレアー・コンチエルト!」

ネオ・ソルダークの両手を目掛けて、要と千歳が浄化技で突撃を仕掛ける。

流星に浄化技ほどの威力となれば相殺しきれず、ネオ・ソルダークの両手の爪が粉々に砕け散った。

やがてサブナックがバリアを砕いたが、その隙を突いて蛍とリリンは光弾を放つ。

放たれた光弾はサブナックとダンタリアを牽制し、その隙に要と千歳が再び2人と交戦に入る。

そして入れ替わるように雛子が、ネオ・ソルダークに向けてプリズムフルートを構え

た。

「プリキュア！プリズミック・リフレクション！」

巨大な水晶がネオ・ソルダークを包み込み、閉じ込める。

雛子の浄化技だけあつて通常の盾よりも硬いのか、ネオ・ソルダークがどれだけ水晶の外壁に身体をぶつけてもヒビ一つ入る様子はなかった。

「今よ！2人とも！」

「うん！」

雛子が作ってくれたチャンスをものにすべく、2人は空へと飛びネオ・ソルダークの頭上を取る。

「光よ、集まれ！シャインロッド・エクステンション！」

2人のロッドを交差させ、1つの武器へと融合させる。

そしてロッドの先端から光が放たれ、ネオ・ソルダークを囲い込む陣を生み出す。

「せいなる光よ。」

「闇夜を照らし」

「暗き想いを光に導け！」

「プリキュア！！ホーリーナイト・サンクチュアリ！！」

頭上から巨大な光線を放ち、水晶ごとネオ・ソルダークを浄化する。

あたし、もう二度と、ダークネスには戻らないから。

そして、二度とあなたたちの故郷のような惨劇を起こさないためにも、あたしはダークネスと戦う。

あなたたちと、いつしよに……。」

千歳に謝った時の慌て具合はどこへやら、自分でも驚くくらい落ち着いた様子で謝罪することができた。

こちらの謝罪を聞いた妖精たちは、全員微笑み返してくれた。

「こちらこそ、これからよろしくね。リリン。」

あなたもキュアシャインってことは、あなたも私のパートナーに当たるもの。」

「サクラ。」

「君の誠意はちゃんと届いた。俺は、君のその覚悟を信じるよ。」

「ベル。」

「レミンは元々細かいことは気にしないからいいよそんなこと。」

それよりも、これから一緒に美味しいもの沢山食べてみようね。」

「レミン……うん！」

「あなたも、沢山辛いことがあったと思うの。」

だから、何でもかんでも背負い込まなくていいのよ。

あなたにはこんなにくささんの、友達がいるのだから。」

「リン子……ありがとう。」

妖精たちの言葉を受けて、リリンは涙目になりながらも喜ぶ。

涙は嬉しい時にも出ると、陽子は教えてくれたが本当にその通りだった。

今、リリンはとても嬉しかった。

みんなにちゃんと謝れたこと。

みんなから許してもらえたこと。

そしてみんなと一緒にいられることの嬉しさが、リリンの胸の中を満たしていく。

勿論、許してもらえたからと言って、これで終わったわけではない。

ベルの言う通り、ここから覚悟を見せるところだ。

ダークネスと戦う。そして、この世界を守る。

もう二度と、ダークネスが起こした悲劇を繰り返さないためにも……。

それでも……。

「よし！全部まぐるく収まったところで、腹も減ったし何か食べにいか？」

「レミンさんせう。たこ焼き食べたらい。」

「レミン、最近ずっとそればかりね。」

「もう、本当に懲りない子なんだから。」

「まあまあ、それと、ご飯が終わったらどうする？」

「夏休みは海に行くって約束したし、みんなで水着見に行かない？」

「あら、素敵な話じゃない。一緒についていけないのが残念だけど。」

今は、みんなと過ごす時間を楽しみたい。この幸せな時間を、心に刻みたい。

「リリンちゃん。いこつ。」

蛭が笑いながら手を差し出す。

「うん！」

リリンも笑いながら、その手を受け取る。

幸せのために一歩踏み出したリリンは、これから先、まだ見ぬ幸せの世界に胸を躍らせるのだうた。

∴

次回予告

「夏だ！海だ！」

「わーい！みんなでうみだー！リリンちゃん！いつしよにうみにはいるー！」
「うん！わっ、つめたい。」

「あまりはしやぎ過ぎないよう気を付けてね・・・って雛子。どうしたの固まっちゃつて。」

「私、ずっと思ってたことがあるのだけど。」

「なに？」

「リリンちゃんって、蛍ちゃんに負けなくらい可愛いよね！」

「・・・は？」

次回！ホープライトプリキユア第26話！

夏だ！海だ！カメラマン雛子の大暴走！！

希望を胸に！がんばれ！わたし！

第26話

第26話・プロローグ

夏休みを迎えてから一週間が経とうとした日。

螢は私室の鏡の前で、水着を手にニコニコと微笑んでいた。

雛子が自分に似合うと選んでくれたそれはとても可愛らしく、毎日こうして鏡の前立っては、この水着を着るその日のこと姿を想像していたものだ。

それだけでも十分に楽しかったのに、ついにその日が来た。

今日はみんなと一緒に、夢ノ宮市から少し離れた港町にある、海水浴場へと遊びに行く日だ。

それは螢が憧れていた日常の1つが、夢が叶うことを意味している。

「ほたる、たのしそうだね。」

嬉しきで半ば舞い上がっていた螢に、リリンは微笑む。

「うん！だって今日はみんなと海に行く日なんだよ!!」

夏休みは友達と一緒に、海に遊びに行つて思い出を作る。

それがただでさえ嬉しきでいっぱいだった螢のテンションを高め、水着を買つてから

の一週間、ずっと落ち着かない様子を見せていたのだ。

「もう、はしゃぎ過ぎてみんなに心配かけたらダメだからね。」

「は〜い。」

リリンと対照的に、チエリーは呆れた様子で蛍を注意する。

普段ならチエリーからのお叱りを受ければ意気消沈する蛍だったが、今日ばかりは嬉しさの方が勝っており、まるで気に留める様子を見せない。

それにチエリーだって一瞬、表情を綻ばせていたのだから、彼女も本心から呆れているわけではないのだろう。

一方でリリンは、蛍と同じく水着を手を持ちながらも、どこか困惑した様子を見せていた。

「本当にこんなものを着て外に出るの?」

普段着と比較すればそれこそ下着に近いであろう水着を着て外に出る、と言う感覚をリリンは不思議に思っているようだ。

「リリンちゃんは、海に行くのはじめてだっけ?」

「うん。まだ港町つてところの方には行ったことがないから。」

「そっか。」

リリンの答えに蛍は頷く。

一緒に暮らすようになってから一週間が経過するが、まだ夢ノ宮商店街とドリムプ
ラザまでしか案内したことがなく、以前リリンから聞いた話によれば、彼女は行動隊長
リリスとして活動していた時も、夢ノ宮商店街以外の場所に出向いたことがないとのこ
とだ。

つまり今日は、彼女にとっても初めての海なのだ。

「わたしも、今日がはじめてだから、良くはわからないけど、みんなといっしょなら、きつ
と楽しいよ！」

それでもここまで胸を躍らせるのは、要を始めとした友達と一緒にだから。

そして、リリンと一緒にだから。

「……うん、たのしみだね。ほたる。」

そんな蛍と同じ思いを抱いたのか、リリンもまた、静かにそう微笑むのだった。

第26話・Aパート

夏だ海だ！カメラマン雛子の大暴走！

少し遡り、この世界で暮らすことになったリリンの生活用品を買うために、蛍たちがドリームプラザへ訪れた日のこと。

ダークネスの尖兵ソルダークが、ダークシャインの残滓を宿したディスプレイ・カードの力によって、ネオ・ソルダークへと進化を果たした。

新たな兵力を得たダークネスを前に、リリンを加え5人となったホープライトプリキュアは激闘の末これを退ける。

その後、昼食を終えた一同は、蛍が語ったマシンガン夢想の1つ、夏休みはみんなと海に出かけるを叶えるために、各々水着を新調することにした。

「わあ、かわいい水着がいっぱい!!」

衣料店のコーナーを訪れた蛍は、店に飾られた色鮮やかな水着の数々に目を光らせる。

幼子用から大人用まで幅広く品が揃えられており、大勢の客で賑わっている。

「こんな沢山あるなんて……。どこから見て行けばいいのかしら？」

選り取り見取りな水着を前に、千歳が困惑した様子で尋ねる。

「千歳ちゃんは故郷で海に行ったことはあるの？」

そんな千歳に雛子が質問を投げる。

「小さい頃、お父様につられて漁村の下見に行った時以来ね。」

私の住んでいた城下街は海から離れていたし、それにあの時だって海で泳いだわけじゃないのよ。」

千歳が言うには父と漁村の人から、海は危ないから近寄らないようにと言われていたようだ。

その事を思い出した千歳は口を尖らせていたが、後から聞いた話によれば、彼女の故郷であるフェアリーキングダムでは、まだ海を遊泳場として活用しておらず、夏の季節に避暑目的で開放される際も海産物を生業としている地元の漁師たち、要するに海に泳ぎ慣れている人たちしか利用していないらしい。

それを聞けば、納得のいく話である。

この世界でだって全ての海で泳げるわけではない。

レジャー産業に携わる人たちが海域に応じた遊泳可能区域を厳格に設定しており、ライフセイバーを始めとする人々が常に監視を怠らないからこそ安全が保障されている

のだ。

海は危険なところ、と言う認識はこの世界でも同じであり、それでも海水浴場が老若男女問わず利用出来るのは、そう言った人々の努力の賜物なのである。

話を戻すと、千歳にとつても海で泳ぐと言うのは初めての経験のようだ。

となれば当然、水着を着用したこともないので、彼女は今どんな水着を購入すればいいのか悩んでいる。

「千歳ちゃん、こつちなら千歳ちゃんのサイズに合うものがあるわ。」

「ありがとう、雛子。」

そんな千歳に雛子がアドバイスを交えて案内をする。

「せっかくの水着なんだし、うんと大胆なものを着て見れば？」

「え?でも……。」

リン子も交えた2人からのアドバイスをもらいながら、千歳は水着を吟味する。

そんな彼女の様子を見て、蛍も改めて水着選びを続ける。

自分が買う分についても当然悩むが、今回はもう1つ悩みがあるのだ。

(リリンちゃん、どんなのが似合うかな……?)

リリンと一緒に暮らすようになったのがつい昨日のことだから、当然夏休みの計画を立てたときには彼女は頭数に入っていない。

そしてリリンもまたこの世界の出身でない以上、海水浴は初めてだろう。

となれば彼女もまた、水着を着用したことがないのだから、今雛子が千歳にそうしてあげているように、彼女の分の水着も選んであげるのが良いだろう。

だが人の着るものを選ぶと言うのは、どうしてか緊張するものだ。

もし似合わなかったらどうしよう？ 気に入られなかったらどうしようと、つい不安になつてしまい、水着を取る手も慎重になつてしまう。

「良かったら、蛍ちゃんとリリンちゃんの分の水着も、私が選んであげよつか？」

こちらの不安を察したのか、雛子が振り返り優しく声をかけてくれた。

「えっ？ いいの？」

雛子からの提案に蛍は顔を明るくする。

本音を言えば、リリンの分は自分で選んであげたかったが、そんな我儘でリリンの初めての海を台無しにしたくはない。

オシヤレ好きな雛子に選んでもらう方が賢明である。

それに以前、雛子と一緒に洋服を買いにいった時、最後まで彼女に付き合つてあげられなかったことを、実は少しだけ気にしていた。

だから今回は、彼女に全て委ねよう……そう思った時、雛子のメガネの内側に隠れた彼女の瞳がキラリと輝いたような気がした。

その瞬間、螢はあのときの出来事を隅々まで思い出して戦慄する。

「あつあの、ひなこちゃん。」

「なに？」

「こんかいは、候補は3着くらいまででいいからね？」

「えゝ．．．。」

雛子が不服そうに頬を膨らめますが、案の定、今回も店の隅々まで水着を探すつもりだったようだ。自分だけならまだしも、リリンを雛子の趣味に巻き込むのは何と云うか、色んな意味で刺激が強い。

「仕方ないわね、わかったわ。」

だがすぐさま、雛子がいつもの優しい笑顔で了承してくれたので、螢はホッと胸を撫で下ろすのだった。

：

リリンは雛子に案内されながら、店に並べられた水着に目を通していく。

「これなんかいいんじゃないかしら？」

「そうなの？」

「それとも……こっちの方が似合うかな？」

「どうだろ？」

雛子が次々と水着を手に渡してくれるが、まだリリンには『似合う』や『可愛い』と言った、五感で感じることでできない概念が理解できていない。

雛子の薦める水着に目を通して、その良し悪しなんてわからず、聞き返すしかなかったのだ。

「そもそも、どうして水着を着なくちゃいけないの？」

「え？」

ここでリリンは水着の必要性についてみんなに問いかけてみる。

海に入るために着るもの、と漠然と理解しているが、これだけ形も色も異なる中から真剣に選んでいるみんなを見ると、なぜそうまでして買わなければならないのかわからないのだ。

ダークネスにいた頃も多少の一般常識は学んでおいたので『TPO』、つまり時と場合と場所に応じた格好と言う考えがあることはわかるが、普段着と比べて水着は肌の露出が多く、ものによっては下着姿と大して変わらないものまで存在する。

リリン自身はまだ羞恥と言う感情に疎いが、そのような格好が破廉恥なものとして一般的には恥ずべきものだと言う知識はある。

それならいつそ、今着ている服のままの方がよっぽど健全なのでは？と言う疑問が絶えない。

別に今の格好でも海に入ることくらいはわけないだろう。

「えつと……。」

「それはだな……。」

この質問に対して蛭と要は言い淀む。

ここに来たとき、シヨツピングモールと商店街の違いを問いかけたときと全く同じ反応だ。

つまり2人からすれば、今の問いはこの世界で普通に生活していれば、特別意識することもない常識なのだろう。

それがわからないのは少し歯がゆいものだが、かと言ってわからないのも仕方ないこと。

そしてわからないのであれば積極的に学んでいかなければ、この先も常識の範疇に収まることを知らないままにしてしまう。

だからリリンはこうして、些細なことでも積極的に聞くことにしている。

自分の中で常識が身に付き、この世界で『当たり前』を知ることができるように。
「水着を着る理由は2つあるわ。」

1つは水の中で泳ぐのに適した格好だからよ。

普通の服のままだと、服が水分を吸収して重くなってしまうたり、ヒラヒラして水の抵抗を受けてしまうから思うように動けないのよ。

だから水着は水を吸収せずに弾く素材で作られていて、表面積も極力減らしてあるの。」

あの時と同じように、雛子が質問に答えてくれた。

「もうひとつは？」

「単純に、オシャレのためよ。」

オシャレにはね、その場所に適したオシャレって言うのがあって、海の場合、水着がそれに該当するの。」

「ふうん・・・機能面で推奨されているのかと思っただけど、個人の嗜好を表現することもできるんだ・・・。」

「なんだかおもしろいね。」

かつての自分なら機能要件さえ満たしていれば、その他は意味がないと切り捨てていただろう。

「ただ今今は、機能と趣味を両立させると言うのも、人の面白い価値観だと思うことができる。」

「きつとこれも心を得たから。そしてみんなと一緒にいられるようになったから訪れた変化だ。」

「心に訪れる劇的な変化に戸惑いながらも、リリンは今の自分を好意的に受け入れていく。」

「そつ、ハマリ出すと面白いわよ。」

「まあ今回は初めての水着なわけだし、無難に似合うものを・・・」

「リリンやったらこっちの方が似合うんじゃないの？」

「すると雛子の話に割り込み、要が声をかけてきた。」

「要の手にした水着は明るい色合いを強調しており、先ほどまで雛子が薦めてきた水着にはない色である。」

「ダメよ。」

「リリンちゃんの容姿と雰囲気には、こっちの色の方が合ってるんだから。」

「すると雛子が要とは対照的に、寒色系の水着を薦めてくる。」

「そんなん着て見なきゃわからんやろ？」

「明るい色のもの着させたら新しい可愛さが見つかるかもしれんよ。」

「リリンちゃんにとつては初めての水着だから、最初からそんな冒険しなくていいの。」
「冒険とはなんや。リリンには絶対こっちの方が似合うって。」

言い争う2人を見て分かったが、『可愛い』や『似合う』と言った感性は、人によつて大きく変わるようだ。

それも雛子と要の薦めてくる水着が真逆なものであることから、極端に覆ることも珍しくないのだろう。

「こら、2人とも。リリンが困っているわよ。」

水着両手に言い争う2人を見かねた千歳が割つて入る。

「つと、ごめんごめんリリン。ついヒートアップしちゃつて。」

「ごめんなさいね。すぐにリリンちゃんの選んであげるから。」

「うっ、うん、ありがとう。」

落ち着きを取り戻した2人は水着選びを再開してくれたが、リリンとしては複雑な心境だ。

『可愛い』と言うのは人によつて受け取り方が変わるようだから模範的な回答がない、人によつて白くも黒くもなるといふ極めて厄介な感覚だった。

それ自体は面白くもあり興味深い感性なので、時間さえあればじっくりと話を聞いてみたいところだが、この場で水着を即決することはできない・・・と思いかけたその時。

「あれ?」

ふと、1つの水着が目に残った。

その水着を見ている内に、リリンの内に何かが高鳴るような感覚が走る。

初めての感覚の正体もわからぬまま、リリンはその水着に手を伸ばしていた。

「リリンちゃん?」

蛍が不思議そうに尋ねる傍ら、リリンはその水着を手に取って凝視する。

「・・・これがいい。」

そして自然とそんな言葉を口にしていた。

「リリンちゃん・・・。」

そんなリリンを蛍がどこか嬉しそうに見つめる。

「うん、可愛いじゃない。リリンちゃんにピッタリだと思うわ。」

雛子が水着を絶賛してくれたが、リリンはその言葉を聞いてハツとする。

「・・・可愛い?」

「ええ、リリンちゃんも、可愛いと思ったからそれを選んだのよ。きつと。」

そう優しく語る雛子の言葉を反芻しながら、リリンは先ほど内に宿った感情と向き合う。
う。

確かにこの水着を手に取った時、どこか不思議と愛しく思う気持ち駆けて巡った。

これが、可愛いと思う気持ちなのだろうか？

「・・・そっか。」

まだ、その答えは分からない。

でもいつか、可愛いを自然と表現できるようにになりたい。

今日抱いた感情を忘れないようにと、リリンは心に刻みながら手にした水着を眺めるのだった。

：

この中で唯一の男性であるベルは、正直に言つて退屈していた。

女性の水着姿に鼻の下を伸ばすような軟派な輩であれば今の状況も楽しめるだろうが、生憎と自分是要曰く『堅物』、サクラ曰く『朴念仁』等々・・・悪口しか言われてないような気がするがともかくそんな趣向は持ち合わせておらず、そもそも歳の離れた女子中学生が相手では、子供の水着選びに付き合わされているようなものである。

だからと言つて、ここで1人別行動を取つても空気が読めないと思われようし、

何より要が許さないだろう。

水着を買いに来た女性の集団の中一人だけ男性、と言う立場から周囲の目が若干気になったが、幸いにも保護者と思われるからか、道行く人から白い目で見られることはない。

とは言え、買い物を楽しむ要たちと退屈している自分との間に感じる微妙な温度差のせいか、少し居心地が悪いものである。

「ベル、ちよつといい？」

すると要がこちらを手招きしてきた。

何の用だろうと思ひながら来てみると、要は両手を後ろに隠し顔を俯かせてこちらの表情を上目遣いに伺っている。

そんな普段の要が全く見せないような、照れ隠しをしている様子を見てベルは要が呼んだ理由を察し……

「えつと、これとこれ、どつちがウチに似合うと思う？」

両手にそれぞれ異なる水着を持ち、少しはにかみながら聞いてくる要を見て

(はあく……やつぱり……)

内心、深くいため息を吐いた。

要と一緒にこの場を訪れた時点でベルは心のどこかで今の状況を予期しており、そし

て予想通りの質問が飛んできたのだ。

女性が着るものを男性に問いかけると言うのは、異性に対してより良く見せたいがために参考にするためだ。

そしてそんなことを聞ける異性と言うのは、親族かよほど親しい間柄の人である。

つまりこの質問を受けた時点で自分は要にとつてそれだけ近い相手であることが証明されており、それはパートナーとても喜ばしいことだ。

だが同時に、男性側としては非常に厄介な質問である。

女性と男性では感性がまるで違う。

男性が可愛いと思ったものを女性も好ましく思うとは限らず、かと言って女性の感性を男性が理解すると言うのも難しい話である。

そもそもベル自身はファッションに対してそれほどの拘りはなく、服は何でも良いと思うタイプだ。

だが要は違う。普段の服装からオシヤレとは無縁と思われるが、その内には自分を良く見せたいと思う拘りがあるのを知っている。

彼女が明るい色を好んでいるのも、自分自身に似合うものと思っっているからであり、オシヤレに無頓着と言うわけではないのだ。

だからこそベルが選んで良いとは思えないし、そもそも選べるとも思っていない。

「えっと……要ならどつちも似合うと思うよ。」

結局ベルは悩んだ挙句、こんな薬にも毒にもならない答えでお茶を濁す以外できず

「……。」

要からじつとりした目で睨まれ

「ベル……あなたねえ……。」

サクラが呆れた視線を向けてこちらを非難し

「は〜ベル〜……いくらなんでもそれはないよ〜。」

レミンにすら大きなため息を吐かれた。

とは言え、この場を無難に凌ぐにはこの答えしか思いつかなかつたのだ。

だがそんな答えで要が納得するはずもなく、膨れつ面を浮かべながら視線のみで抗議する。

そんな要の目を見ていられず、ベルはバツの悪そうに視線を反らした。

「要なら、こつちの方が似合うんじゃない？」

そんな中、千歳が要が右手に持つ水着を指してそう答えた。

彼女からの助け舟に感謝……と思いきや、千歳はサクラと全く同じ視線をこちらに向けてきた。

「せやね、これにする。ありがと千歳。」

「どういたしまして。」

軽く言葉を交わした後、要は水着を手にレジへと向かう。

「・・・ベルが選んだの着て海に行きたかったな・・・。」

去りに要がぼそりと何かを呟いたが、こちらには聞こえない。

代わりに彼女の手前にいるサクラと千歳には聞こえたようで、2人は一斉にこちらを睨み付ける。

「・・・わっ、悪かったよ。」

「これだからヘタレって言われるのよ。」

サクラの非難に大きなお世話だ、と思うが、間髪入れずに千歳が続く。

「ベル、あなたもう少し女性の扱い方について学びなさい。」

「うぐ・・・申し訳ありません・・・。」

流星に千歳からも注意を受けてしまつては猛省するしかない。

その後ベルは、要との間に生じた微妙な空気を一日中受ける羽目になり、心の中でため息と謝罪を繰り返すことになるのだった。

∴

そして迎えた当日。

要とベリイ、雛子とレモンは、リン子と千歳が乗るレンタカーに乗せてもらい、一之瀬家を目指していた。

夢ノ宮港町にある海水浴場へはバスや電車でも向かうことが出来るが、今日は妖精たちを含めた全員分の水着と各々の着替え、浮き輪やビーチボールと言った海で遊ぶ定番アイテムを持参してきているため、リン子がわざわざレンタカーを借りて来てくれたのだ。

「でもマイカー持っていないのに運転免許証は持つてるんですね。」

この世界で社会人として、千歳の母親として真っ当に生活しているリン子が無免許運転なんて法律違反するとは思えない。

機械のない世界から来たリン子が、こうして車の運転をしているのだから教習所へ通ってちゃんと教わってきたのだろう。

だがマイカーを持っていないのに運転免許証をなぜ必要としたのかが要にはわからなかった。

「保険証と運転免許証は、身分証明書としてよく使われるの。」

だから持っておくと何かと便利なのよ。」

「なっ、なるほど……。」

『運転免許証＝車の運転に必要なもの』と言う認識しかなかった要は、身分証明書として扱おうと言う大人の世界の常識に目を丸くする。

異世界出身のリン子の方が自分よりも良くものを知っている。

やはり社会を生きる大人の女性は違うなど要が感嘆としていた内に、一之瀬家の前まで辿りついていた。

要たちが車を降りて呼び鈴を鳴らしに向かおうとすると、車のエンジン音を聞きつけたのか、こちらが呼び鈴を鳴らすよりも前に蛍が玄関から姿を見せる。

「みんな～おはよ～!!」

それはそれは元氣よく無邪気な笑顔で手を振る蛍に続いて、リリンと、蛍の両親である陽子と健治が姿を見せた。

この日をどれだけ待ち望んでいたかが一目でわかる蛍のことを微笑ましく思いながらも、要は思った疑問を口にする。

「おはよ。蛍、お母さんたちも一緒に来るん？」

蛍の姉ですと紹介されてもまるで違和感がないほどに若々しい陽子のことを『おばさん』と呼ぶのも気が引けたので、お母さんと呼び確認してみると、蛍は静かに首を横に

振った。

「ひとこと、あいさつしたいって。」

「みんな、おはよう。」

「おはよう。」

「おつ、おはようございます。」

美女美男な陽子と健治が爽やかな笑顔で挨拶をするものだから、要はつい畏まってしまふ。

「今日はありがとね。この子の我儘を聞いてくれたみたいで。」

「いえいえ、私たちもこの日をずっと楽しみにしてましたから。」

そう言いながら姿勢よく会釈する雛子の姿はとても中学生には見えないほど大人びているが、要は彼女が肩にかけている黒い鞆に目を向ける。

縦長の長方形の形をしたそれは、頑丈な機械でも入っていきそうな雰囲気だ。

・・・何となくその中身が何であるかを察した要は、先ほど雛子が見せた大人の態度の影にどれだけの欲望を秘めているのかを悟り、1人心の中でため息を吐く。

そしてひとしきり挨拶を終えた陽子は、リン子の方へと距離を詰め、深々と頭を下げた。

「リン子さん。」

こちら、つまらないものですが、良かったらみんなで頂いてください。」

そう言いながら陽子は手に持つクーラーボックスをリン子に差し出す。

軽く中身を確認してみると、水分補給用のスポーツドリンクと、西瓜が1つ丸々と入っていた。

「あらあら、わざわざありがとうございます。」

言葉こそ敬語だが、陽子とリン子はとても親し気に会話をしている。

その雰囲気は千歳にも伝わったらしく、千歳は首を少し傾げながらリン子に話しかける。

「リン・・・おっ、お母さん！って、蛍のお母様と親しかったの？」

ついいつもの癖で『リン子』と呼ぼうとしたところを大慌てで『お母さん！』と訂正するものだから、要は必死に笑いを堪える。

そんな要を千歳は顔を赤くしながら睨み付けるが、呼ばれたリン子本人は特に気にした様子もなく答える。

「運動会の時にご挨拶して以来、連絡先を交換してもらってね。」

そう言いながらリン子はスマートフォンをヒラヒラと振る。

恐らく電話番号か、あるいは無料通話アプリのアカウントを交換していたのだろう。

「そうだったんだ。」

蛭が少し驚いた様子でそう呟く。

所謂ママ友、と言うやつなのだろうが娘たちにはその情報は伝わっていなかったようで、千歳も蛭と同じで驚きを隠せない様子でいた。

「ええ、リン子さんなら安心して預けられるわ。」

蛭は普段は引つ込み思案なのに、時々危なっかしいことするし、リンちゃんは真面目だけど時々ボクッとするときがあるから、ご迷惑をおかけするかもしれませんが、今日一日蛭とリンちゃんのこと、よろしくお願いしますね。」

「おっ、おかーさん……。」

蛭の臆病なくせして突拍子もなく危ない行動に出るところや、この世界で暮らして間もないリンが物珍しい目で上の空になることには慣れていたので、みんな揃って苦笑する。

言われた蛭本人は恥ずかしさで真っ赤になった顔を俯かせ、リンは何を言われているのか分からないと言いたげな様子で首を傾げているが、そんな蛭を一瞥した後、千歳が力強く陽子の前に躍り出る。

「お母様！お父様！……安心して下さい!!」

蛭のことはこの私が！姫野 千歳が責任を持って預かりますから!!」

「ええ?」

千歳が恥ずかしげもなく大きな声で、聞いてる方が恥ずかしくなるような宣言を堂々としたものだから、蛍の目が点になる。

あんたの名前を呼んだ覚えはないとか何がお母様お父様だとかリリンのことは無視かよとかツツコミたいことは山ほどあったが、言われた当人である陽子と健治は少し面食らった様子を見せるも、やがて口元に手を押さえて小さく微笑む。

「頼もしい言葉じゃないか。」

「そうね、蛍、千歳ちゃんのことをお姉さんのように慕ってるし。」

「もっ、もお、おかーさん、おとーさん……。」

周りからすれば既知、だが蛍からすれば親からの突然のカミングアウトに、蛍は顔を赤くしながら狼狽える。

一方で千歳はそんな陽子たちの言葉を聞いてどこか誇らしげな笑みを浮かべていた。

本日2度目の、心の中で大きなため息を吐く要だったが……

「はい……この私、リトルプリンセスのガーディアン……。」

「はいはい……！」

そろそろ海へ向かわないと時間が勿体ないからこの辺で!!」

千歳の口から続く言葉を無理やり遮った要は、彼女の背を押し無理やり車に押し込める。

蛍の両親ならば彼女の風変わりな趣味も受け入れてくれるだろうが、10年後に振り返ったら絶対に恥ずかしさで穴に入りたくなくなるようなセリフをわざわざこの場で言わせる必要もない。

「じゃあ蛍、存分に楽しんでらっしゃい。」

「うん！」

「リリンちゃん、みんなの言うことを良く聞くんぞぞ。」

「はい。」

陽子と健治に別れの挨拶をし、一同は海水浴場へ向かうために車に乗り込む。

「ぶはあつ。」

車が出てから早速、蛍は鞆の中に入れたチエリーを開放する。

「チエリーちゃん、おつかれさま。」

「流石に夏場は鞆の中つてのは辛いわね……。」

「そうだね……。すこしどうしようかかんがえないと。」

一方、リん子は助手席に座る千歳に意地悪気な笑みを浮かべる。

「ほら？ 普段から『お母さん』って呼んでいれば、さつきみたいなことにはならなかったのよ。」

「うっ、うるさいわね。ギリギリセーフだったからいいでしょ？」

千歳は顔を赤くして反論する様子にみんな吹き出し、車の中で笑い声が響き合うのだった。

：

夢ノ宮海水浴場の駐車場まで着き、車を降りた蛭は早速海に向かって大きく深呼吸をする。

「ふわ、潮のにおい!!」

夏の暑さには心地よい風が、潮水の匂いを運んでくる。

駐車場に降りただけで、海に来た!と思えるのだからここがどれだけ海に面した場所であるかが伺える。

「蛭ちゃん、海はあまり来たことないの?」

「うん、まえにすんでたのは山の方だから、海ってあんまりきたことがないんだ。」

夏の間に海の幸を食べに行こうと、こことは違う港町を訪れたことはあるが、海に泳ぎに来たことはほとんどない。

そもそも両親とも運動が苦手な自分を氣遣つてか、泳ぎに行こうとはあまり言わなかったのだ。

蛍自身、今も友達と一緒にというシチュエーションでなければ、海に憧れを抱くことはなかつただろう。

先週、みんなと一緒に水着を探して見て回つた時間も、かけがえのない思い出の一つとなつている。

「この辺りは海水浴場以外にも、たくさんのお観光名所があるからね。」

続いて雛子が、夢ノ宮港町について説明してくれた。

夢ノ宮市の夏を代表する観光名所、夢ノ宮港町は海に面した街一帯が観光名所となつており、広々とした海水浴場の他、取れたて新鮮な海の幸の直売所や、海鮮料理店も沢山並んでいる。

海の幸、と言うキーワードに蛍は思わず喉と腕を唸らせるが、海水浴に興じる今日は流石に街を見て回るだけの余力は残らないだろうからと、他はまた次の機会でと言うことになった。

まだ海にすらついていないと言うのに、蛍には早くも次にここに来る楽しみが生まれるのだつた。

…

そんなこんなでたどり着いた夢ノ宮海水浴場。

浜で寛ぐもの、海ではしゃぐもの、海の家で食事を取るものと、既に大勢の客で賑わっている。

各々水着へと着替え終わり更衣室を出ると、さつそく要の耳に雛子のはしゃぎ声が聞こえてきた。

「はうー私の目に狂いはなかった！」

「蛍ちゃん、とっても良く似合ってるよ。」

「あつ、ありがと……。」

雛子が蛍のために購入した水着はピンクを基調としたワンピースタイプで、白の小さなハートマークが水玉模様のようにあしらわれている、なるほど蛍にピッタリなデザインと言える。

少し子どもっぽくも見えるが、蛍の外見を考えれば違和感がない……と言う以前に人見知りの激しい蛍のことだから、お腹を露出させるタイプの水着は躊躇いを覚えるだ

ろうし、蛍自身、趣向が幼い傾向があるから問題ないと、雛子は判断したのだろう。

デレデレとだらしのない表情を見せる雛子には内心、自重しろと思うが、当の蛍が赤くした顔を伏せてモジモジしながらも嬉しそうな様子を見せているので良しとする。

「リリンちゃんも、それとつても素敵よ！」

「そう？・ありがと。」

リリンが自分で選んだ水着は、フリルをあしらった黒のビスチェだ。

黒の水着と言えば大人びたものを彷彿させるが、フリルの装飾がとても愛らしく小柄なりリリンに似合っている。

そして黒い長髪のリリンとは色合いが統一されており、それが彼女の純白の素肌を強調させている。

だが褒められたリリンはあっさりとしたお礼を言いながら、自分の着る水着を興味深そうに観察していた。

蛍とリリン、応答も似合う水着も正反対の2人がどこか面白くて要はつい笑ってしまう。

「ひなこちゃんの水着も、とってもステキだよ。」

「ふふっ、ありがとう蛍ちゃん。」

蛍は先ほどのお礼と言わんばかりに雛子の水着姿を褒め称える。

海辺と言うこともあり、今日は珍しくメガネを外してコンタクトレンズを使用している雛子の水着はキャミソールタイプのタンキニであり、腰には膝まで届くパレオを巻いている。

この中では一番露出度が控えめだが、それには大きな理由があることを要は知っている。

良い意味で年齢不相応な大人びた面立ちと雰囲気、そして出るところが豊満過ぎる雛子の水着姿と来たら、傍から見れば女子高生を通り越して女子大生、下手をすれば成人女性と見紛うレベルであり、否が応でも異性の目を引いてしまう。

去年、ビキニで海水浴を訪れてみると、雛子は思春期真っ盛りの学生は愚か成年男子の視線もありありと受けてしまったことがある。

だがどれだけ外見が大人びていようと雛子もまだ中学生。元を辿ればインドア派の文学少女。

大勢の人が集まる場所は今でも決して得意ではないし、同年代ならまだしも年上の異性からも注目を浴びることには、流石に怖い思いをしたようだ。

そんなこんなで今回の雛子はなるべく体の凹凸を見せないように工夫した水着をこさえているが、それでも水着は水着である。

見慣れた制服姿よりも体のラインははつきりと見えてしまうし、水に濡れれば猶更際

立つだろう。

今年もまた、雛子によってくる不屈き者を成敗しなければならぬ。

そうは思いながらも、要は内心ブルーな気分沈んでいく。

(はあ・・・なんて贅沢な悩みなんやろ・・・)

雛子に悪気はないしむしろ被害者だし彼女を悪い虫から守ろうとするのは頼まれたからではなく自分の意思だし・・・それでも自分のものと見比べるとやっぱり贅沢な悩みだなと軽く妬んでしまう。

要が今年選んだ水着は、オレンジ色のフレアトップの水着だ。

今年も未だに進歩の予兆すら見せない断崖絶壁を少しでも誤魔化そうと胸元には2重にも3重にもフレアを重ねているが、そもそもこの手の水着を着ている時点で私には凸がありませんと言っているようなものだ。

やはり女性の水着姿と言うのはかくも残酷なものだ。

なにせ体のラインがはつきりと目に見えてしまうのだから。

「どうしたの要？なんだか元気がなさそうだけど。」

こちらの様子を気にしてか、千歳が心配そうに声をかけてきた。

だが千歳はどちらかと言えば雛子側の人間だ。

普段からしてTシャツにカーゴパンツと言う身体のラインが目立ちやすい格好を好

むものだから、彼女のスタイルの良さについては周知のものだ。

流石に雛子には及ばないものの、千歳もまた同年代であれば羨むほど十分に立派なものをお持ちであり、それだけでなく腰から足にかけてのラインも綺麗な曲線を描いている。

そして自分よりも背が高い。総合的なスタイルの良さでは雛子よりも上だろう。

そんな千歳の水着は涼し気な印象を与えるライトブルーと言う色ながら、女性の魅力を最大限に強調する三角ビキニであり、かつ雛子と違ってそれを恥じることなく着こなしている。

そんな堂々とした佇まいが一層、彼女のスタイルの良さを強調しており、それがまた一層、自分を惨めにしていく。

「別にい……。」

そんな千歳に励まされても逆効果なのは言わずもがな。

ついでに言えば彼女には何の落ち度もなく、今の態度もあからさまな八つ当たりなのだから細やかな自己嫌悪に包まれてしまう。

少しでも気を紛らわそうと、要は蛍の方へと視線を向けるが……。

(忘れてた……蛍ってああ見えて年相応やった……。)

小学生並みの背丈と普段の幼い印象から忘れがちだが、蛍はちゃんと年相応の成長が

見て取れる程度ものを持つている。

まして今は水着姿。彼女の慎ましくもちゃんと自己主張しているものがはつきり見て取れる。

はあ、と1つため息を吐いてならばリリンならと、要は彼女に目を向ける。

(え．．．?)

ここで要は更なる衝撃を受ける。

目測140cm。蛍よりは10cmほど高いながらも小学校中学年の平均値程度の身長と、時折見せる蛍よりも幼い一面からのせいで想像もしていなかったが、リリンのそれは蛍のような慎ましいものではない。

見た目の大きさだけで言えば千歳と比べても大差のないほど立派なものだが、リリンは千歳よりも30cmばかり背丈が低い。

山の大きさは同じなのに背丈が低ければ、低い人の方が相対的に大きさが目立つのだ。

世間一般で言うところのトランジスタなんとやら、とどのつまりとんでもない逸材だったのである。

「はあ．．．。」

やはり世の中不公平だ。人類平等など夢のまた夢だ。

海に入る前から何やら憂鬱な気分になった要は、本日何度目かわからない深いため息を吐くのだった。

：

友達と一緒に訪れる初めての海に心を躍らせていたのは、何も虫だけではなかった。千歳にとつても遊泳目的で海を訪れたのは初めてであり、当然、水着とやらを購入したこともない。

当初は布面積の少ないこの姿で人前に出ること疑問を抱いたが、いざ現地を訪れてみればなるほど、見渡す限りの人々はみんな同じような格好をしていた。

「なんだか開放的なところね。」

「ふふつ、普段こんな格好することもないもんね。」

雛子が微笑みながら答える。

リン子がせっかくだから大胆なものを着てみれば良いと言うものだから、今の自分が着用している水着も相当布面積が少ないものと思っていたが、それよりもさらに露出度

の高い水着を着ている女性客も見かける。

あのような格好をしていては当然、男性客からの注目も高いが、彼女らはそんな視線さえも楽しんでるようだ。

雛子の言うところの海に適したオシヤレ・・・と言うのはいささか度が過ぎているかもしれないが、少なくとも誰も水着姿を咎めるものはいない。

そんな周囲の空気と今の身軽な格好が合わさり、重荷が外れたかのような解放感が感じられる。

「まあ、せっかく来たのだし、見てばかりいないで泳ぎに行きましょ？」

千歳ちゃん、泳ぐのは苦手じゃないよね？」

そんな聞かれ方をされている辺り、どうも自分は運動に関しては大抵のものをこなせると思われているようだ。

「ええ、問題ないわ。」

最もその通りなわけだが。

海で泳いだ経験こそないが、幼少期は川でよく遊んだことがある。

その時、近衛兵から水難対策の一環として水泳を教えてもらったのだ。

「はやくはやく！みんなでいこう！」

蛭が待ちきれんと言わんばかりに、満面の笑みで手招きをする。

だが直後、そんな蛍を制するように要が手のひらを突きだした。

「その前に、蛍、リリン。準備運動はちゃんとやった？」

「あつ。」

「じゅんぴうんどう？」

しまった、と言わんばかりにピタリと止まる蛍に、首を傾げるリリン。

「軽い運動をして身体をほぐしておくことを準備運動つて言うの。」

身体が強張ったままいきなり運動をすると、怪我や故障の元になりやすいから、運動の前に準備運動をすることは覚えておかなきゃあかんよ。」

スポーツ少女だけあつてそこに気が利くとは流石は要であると感心しながら、千歳はリリンを促す様に先に準備運動を始める。

「そうなんだ。」

要の言葉を聞きながら、リリンはこちらを見ながら真似て準備運動を始める。

「そつ。特に海の中は冷たいから、普段よりも身体が緊張しやすく余計にその危険が高まるの。」

それに水中での事故は地上よりも危険だから、特に念入りしておくように。」

「はい。」

そんなリリンに要が注意を重ね、リリンは蛍と2人で準備運動を続ける。

人間は水中の中では呼吸ができない。

ごく当たり前のことだが、リリンはそんな知識さえも持っていない可能性がある。もしも足を攀らせて溺れてしまつては大変だ。

この世界にはライフセイバーと言う、人命救助を生業とする人たちが監視してくれているらしいが、だからと言って事故を起こしていい理由にはならない。

それにしても、相手がリリンだからより丁寧に教えているのだろうが、準備運動が必要な理由を分かりやすく説明する要の姿は、普段勉強が苦手だ頭を使うのが苦手だと言う彼女からは想像もできない饒舌っぷりである。

「ホント、普段の勉強もこれくらい頭を使えばいいのに。」

そんな雛子の零した言葉に千歳も同意する。

スポーツに入れ込む熱意を少しでも勉強に回せれば一気に成績を伸ばせるだろうに、モチベーションの差と言うのはかくも大事なものである。

「流石かなめ。スポーツバカだね。」

「え?」

「え?」

「え?」

だがここで、リリンの褒め言葉からの流れるような暴言を前に、虫と要そして雛子は

間の抜けた声で返事をする。

「あれ? なにかまちがってた?」

一方でリリンは自分の発した言葉の暴力に気が付かない様子でこちらを見る。

「いや、スポーツバカって、それ褒めてるの?」

「褒め言葉じゃないの?」

困惑するリリンを前に、要は少し頭を抱えて答える。

「バカって普通に悪口やろ・・・?」

要はどこかショックを受けたような様子でそう返す。

「そうなの? バカって、頭が悪いって意味のほかにも、特定の分野におけるエキスパートって意味があるのかとおもってた。

ほら、同音異語って言うんだっけ? こうゆうの?」

一方でリリンは悪口の意味があることを知っていたと事実上宣言をしながら、そんな言葉を口にする。

確かにこの国では1つのことに熱中する人や技能に優れている人に対して『バカ』と呼称することがあるので、同音異語とは言い得て妙である。

だが大抵の場合、『馬鹿』は本来の意味通り相手に対する侮蔑でしかない。

しかも要のことを『スポーツバカ』と呼ぶのは雛子くらいであり、これまで彼女はそ

の言葉を多少の賛辞は込められているだろうが9割方は悪意を持たせており、要自身も悪口として受け止めている。

要と雛子ほどの、所謂腐れ縁の間柄であればその程度の悪口の押収はコミュニケーションの域に達しているが、出会ってまだ間もない内のリリンがそう言ってしまうのだから、流石の要も傷ついたようだ。

「雛子、これからは言葉の使い方に気を付けような。」

要は恨めしい視線をリリンから雛子へと向ける。

「なっ、なによ。私が悪いと言うの？」

普段要の言葉を袖に流すことが多い雛子が、珍しくバツが悪そうに視線を反らす。

その様子から、雛子自身、日頃の物言いに問題があることを多少なりとも自覚をしているようだ。

「そうね。あまり乱暴な物言いはリリンに悪影響よ。」

「むう・・・千歳ちゃんまで。」

こちらにも要に肩入れするものだから、雛子は複雑気な表情で頬を膨らませる。

何も知らないリリンはこちらから得た知識を吸収して自分の中の常識を築き上げてきている。

まだ善と悪の区別もつきそうにないのだから、リリンと一緒にいる以上、これからは

言動に注意をするべきだろう。

(これじゃあ、まるで子育てね。)

子どもが最も影響を受けるのは親だから、口調や価値観は親に由来するものが大きいと言う話を聞いたことがある。

人としての生き方、身の振る舞い方がまだ見についていないリリンに対して、人としての在り方を教えていくのは、意味合いとしてはそう大きくは変わらないだろう。

ダークネスの行動隊長として姦計を巡らし、蛍の心を利用してしようと目論んでいたあのリリスが、何も知らない無知で無垢な少女リリンになるなんて誰が思っただろうか、千歳は今更ながら今の状況が奇跡の産物ではないのかと思うのだった。

・
・
・

準備体操が終わり、いぎ海へ！・・・と思った時、蛍はふと雛子が大事そうに肩から下げていた大きな鞆の存在が気にかかった。

「ところでひなちゃん、そのおっきな荷物はなに？」

雛子の鞆は、これまで彼女が持ち出したことのないものだ。

その如何にも、重たい機材を入れているように見える異様な存在感を前に蛍は興味と疑問と細やかな不安を持って聞いてみる。

「ふふっ、聞きたい?」

すると雛子は何やら怪しげな笑みを浮かべて聞き返してきた。

細やかな不安が大きな不安へと変わる中、蛍は静かに頷くと、雛子はおもむろに鞆を開け、その中に入っていたものを勢いよく取り出した。

「えっ……?」

それを見て蛍は絶句する。

「今日この日のために私が新調した最新式の1眼レフデジタルカメラよ!!」

従来のもものよりも遙かに高品質な画質に加えて動画も撮影可能!

そしてSDXCカードを搭載することにより、最大1000枚もの写真を収めることが可能なの!」

「え……えと……。」

蛍が困惑する様子をまるで楽しむかのように、雛子がカメラのレンズをこちらに向けながらニヤける。

「というわけで蛍ちゃん!! さっそく写真取ってもいい!」

「えっええっ?!?!」

海に入って遊んでいるところならまだしも、こんな何もないようなところを取るつもりとは思っても見なかった蛍は大声を上げて困惑する。

まさかとは思うが、雛子はこちらの一挙手一投足全てをカメラに収めるつもりなのだろうか？

・・・これまでの経験から雛子ならやりかねないと、蛍は自意識過剰な気持ちを遥か先まで通り越して確信する。

「あつ、あの!こんななんでもないとこ撮ったつてもつたないよ!」

先ほど最大で1000枚取ることができると言っていたから、どれだけ取り過ぎてもその枚数に到達することはないだろうと思いつつも、蛍は雛子の熱を冷やすために必死の説得を試みる。

「大丈夫!そのためにほら!!」

だが事態は蛍の想像の遥か先を飛ばしていく。

雛子はそんな反論など想定済みと言わんばかり、カメラを収めていたバッグに付属したポーチの蓋を開ける。

そこにはいくつもの小型電子記録媒体・・・要するにSDカードが収められていた。

「1枚当たりの容量は128G!合計で2560GB!!これを全て投入すれば最大で4

万枚もの写真を取めることができるわ!!」

「え……。」

「どれだけ写真を取ろうと1000枚は到達しないだろう……そんな考え方が甘かった。」

雛子からすればむしろその逆で、1000枚程度では足りないのだ。

それも予備の予備のそのまた更なる予備を重ねていき、4万枚などと言う天文学的数値を指示された蛸は、畏れ慄き凍り付く。

「あつあの……わたしだけじゃなくて、みんなも……。」

その中でも決して意識だけは失わないようにと、蛸は最後の反論を試みたが……。「大丈夫!このカメラは蛸ちゃんとリリンちゃん専用だから!」

2人の写真を平等で割つても2万枚の写真を取ることができるところから何も心配することはないわ!!」

「わたしたちせんよう?!」

最後の反論さえも敢え無くかき消された。

しかもちやつかりとリリンの名前まであげている。

自分にとつてもリリンにとつても初めての海が、楽しい思い出がこんなにも不安に満ちたスタートを切るとは。

いや、今の状況も決して心底嫌と言うわけではなく、こんなやり取りでもどこか面白く思ってはしまうのだが、ここまでありとあらゆる常識を跳ね除ける雛子の情熱の前に、蛍の血の気は一気に引いて行つた。

「あつ、ちなみにみんなの分はこっちなね。」

そう言いながら雛子はスマートフォンを持つ手をひらひら揺らす。

最近のスマートフォンはカメラ機能も優れており下手なデジタルカメラ顔負けの高画質な写真を取れると聞くが、それでも自分たちには専用のカメラまで購入し、他は携帯電話の付属機能で済ませてしまうあたり相も変わらない露骨な差別である。

・・・そしてその程度では驚かなくなつてしまつた蛍はそんな自分に驚いてしまう。

そんなこちらの様子などお構いなしに、雛子はカメラ片手にジリジリと距離を詰めてくる。

「こちら雛子、蛍が困つてるでしょ。」

見かねた千歳が止めに入るも、雛子がカメラを降ろそうとはせず隙あらばこちらの様子を伺う。

普段なら周囲から一言静止されれば落ち着きを取り戻しているところだが、今日の雛子はこれまで以上にテンションが高いせいかな、簡単には落ち着いてくれなさそうだ。

「もう、要からも一言言つて・・・あれ?要?」

ここで千歳は要に救援を求めるも、呼ばれた本人は先ほどまでいた場所からいつの間にか姿を消しており、

「ん？何か呼んだ？」

それとは正反対の方向から姿を見せた。

「つて、何食べてるのよ!？」

それも焼きそばを食しながら。

「なにつて？焼きそばだけど？」

声を荒げる千歳とは対照的に、要はあっけからんと言つてのける。

「そんなもの見ればわかるわよ！」

運動前になんでそんな油っこいものを食べてるのつて聞いてるの!」

「この程度、運動前の腹ごなしだつて。」

確かに運動すればエネルギーを消費するから多少なりお腹に入れておかなければ身体が持ちそうにないだろう。

現に蛭とリリンも家を出る前に軽めの朝食を済ませている。

だがスポーツにおける体調管理が誰よりも出来ているであろう要が、朝食を抜いてくるとは思えない。

朝食を食べた上で油を贅沢に使つて焼き上げた焼きそばなんか上乘せしたら、流石に

胃袋が悲鳴を上げそうである。

「美味しそう……。」

一方、出来立ての焼きそば特有の香しいソースにひかれてリリンがもの欲しそうな目で見てきた。

「おっ？一口食べる？」

「いいの？」

焼きそばに釣られそうになったリリンを千歳が手を差し出して静止する。

「ダメよりリン。」

運動をする前にあんなもの食べたら、気持ち悪くなっちゃうわ。」

「でも要は大丈夫だって。」

「要を基準にしちやダメよ。」

ほら、要のせいでまたリリンがおかしなことを覚えそうになったじゃない。」

「なんだよ、ウチが悪いんか？」

「あわわわわ、ふっふたりとも……。」

気が付けば千歳と要が一触即発の空気を放っており、蛍は慌てながら2人の顔色を伺う。

「さっ、蛍ちゃん、リリンちゃん。記念に一枚撮ってもいいかな？」

「ええっ!？」

こんな空気の中でも雛子は平常運転だった。

それでもこちらからの了承を得るまではシャツターを切らないでいるあたりギリギリのところまで良心が塞き止めているのだろうか? なんてどうでもいいことを思っていると……。

「あ、な、た、た、ち!!」

とうとう堪忍袋の緒が切れた千歳が、要と雛子を叱るように睨み付ける。

「これじゃあ、いつまで経っても蛍の面倒が見れないでしょうが!!」

「……え?」

が、怒りだした理由が明後日の方角を向いていたせいで、蛍はすっかり呆けてしまう。もしかして先ほどまで口論していたのも、ただ単に2人の面倒を見るのが嫌だっただけなのだろうか? なんて疑問さえ沸いてきた。

「なんやそれ! 保護者気取るんならウチの面倒もちゃんと見いや!」

「イヤよ! 私に蛍のご両親から蛍のことをよろしく頼まれたのよ!」

あなたたちにまで構ってる暇はないわ!」

「何が頼まれたや! 自分から勝手に引き受けたくせに!」

片や呆れながら責め立てる要。片やどこまでも真面目で一辺倒な千歳。

そんな2人が互いに別ベクトルでヒートアップしていく中、ふと要が何か思いついたような悪戯めいた笑みを浮かべる。

「はっ、それに蛍のことならウチと一緒に遊びがてら面倒みといたるから、千歳の出る幕はないよ。」

恐らくそれが千歳にとって最も効果的な挑発だと思ったのだろう。

「あ?」

案の定、それは効果テキメンだった。

千歳の顔が怒りで見る見る内に赤くなり、力強く要に向けて一歩踏み出して顔を近づける。

「冗談じゃないわ! 蛍の面倒を見るのは私の役目よ!」

「いいや、ウチだね。」

ウチの方が海水浴に慣れているし、この場ではウチの方が適任や。」

「いいえ私よ! 私の方が小さい子どもの扱いに慣れてるんだから!」

「え?」

「ウチだって、小さい子ども達の多いからそんなの慣れっこだよ。」

「あの、わたしおないどし・・・。」

蛍のか細い声は2人の怒声にかき消される。

「とにかく！蛍の面倒を見るのは私よ！」

「いいやウチが見る！」

「私が見る!!」

「ウチが見る!!」

「私が!!!」

「ウチが!!!」

「私が!!!」

「ウチが!!!」

なぜかどんどんヒートアップしていく2人を前に、蛍は大慌てで静止に入った。

「はわわわわ！ふっ、ふたりとも！ふたりとも〜!!」

まさか「わたしのために争わないで」なんてベタベタなセリフを言わなければならぬ状況が訪れるとは夢にも思わなかった蛍だったが、いざそのセリフを口にしようにも流石に恥ずかし過ぎて言葉にできず、動揺と困惑と口論の内容に対する羞恥の末に2人の顔を交互に見ながらあわあわとすることしか出来なくなってしまう。

「は〜、困ってる蛍ちゃんも可愛い！写真撮ってもいい？」

「ええ〜っ!!」

そしてこの期に及んでも一切自重するつもりのない雛子など当然アテにできず、蛍が

パニックに陥ってしまったその時。

「あんなたち……。」

地獄の底から這い出てきたかのような、暗く落ち着きそれでいて威圧感たっぷりのが3人の背後からかかる。

要と雛子と千歳は一瞬で冷静になり、恐る恐る後ろを振り返ると、そこには眼力だけで小動物を卒倒させ、この場から逃げる気力すら奪うほどの恐ろしいオーラを背景に纏ったリン子の姿があつた。

「蛍が困ってるでしょうがあああ!!」

「二はい…すいませんでした!!」

地鳴りが起きたのではないかと錯覚させるほどのリン子の叱責を前に、3人は一瞬で押し黙った。

事態が収束したことで蛍はホッと胸を撫で下ろすが、同時にリン子のことだけは絶対に怒らせないようにしようと、心の隅に誓うのだった。

第26話・Bパート

リン子の一喝で落ち着きを取り戻した雛子たちは、ようやく海へと足を運び入れた。
「わっ、つめたい……。」

初めての海の冷たさに身体を強張らせたリリンは、その場でピタリと足を止めてしま
う。

「リリンちゃん、急に入らないで、落ち着いて身体を慣らしていくのよ。」

「リリン、こうやって少しずつ身体に海水をかけてから入るといいわよ。」

雛子と千歳のアドバイスを聞いたリリンは、言われるがままに海水を身体にかける。

そのまま虫の動きを真似て膝を屈ませ、身体を海へとつけていく。

「……ホントだ。さつきよりも冷たくない。」

「冷たく感じないって言うのが正しいわね。」

体温が下がったから相対的に海の中を冷たく感じなくなってるのよ。」

付け足すと、前もって準備運動をしつかりとやっておくと体温が上昇するので、海水を身体に浴びても体内温度を維持しやすく、身体が緊張しにくくなる。と千歳は説明する。

先ほどの要からの説明も合わせて、準備運動の大切さを今一度理解したリリンは興味深そうに頷きながら千歳の話を聞いていた。

「・・・それで、これからどうすればいいの？」

海どころかレジャーそのものが初体験なリリンにとっては何もかもがわからないことだらけなのだろう。

『遊ぶ』と言うこと自体がぎこちないリリンの姿は初々しく、雛子は口に手を当てて微笑む。

「リリンちゃん、いっしょにあつちの方まで行ってみよ！」

蛍がリリンの手を取り、浅瀬から少し離れたところを指さした。

慣れないリリンを先導する蛍の姿が普段よりもどこか頼もしく映るのが何だか可笑しく、雛子は再び微笑むが、ふと、蛍たちが向かおうとする方面を思い出し千歳の手を引く張る。

「千歳ちゃん、ちょっとついてきて。」

「え？ええつ。」

駆け足で蛍たちよりも早く移動すると、不意に雛子の身体が胸元まで海に浸かった。

不意に水深が増したことに千歳は驚きながらも、こちらの意図を悟ってくれたように頷く。

以前、要たちとここへ来たとき、急に水深が深くなったことを思い出した雛子は、先回りして蛍たちを注意しようとおもったのだ。

自分たちの身長でさえ胸元まで浸かってしまうのだから、蛍は勿論、リリンも全身が海に沈んでしまうだろう。

無論、こうして自分たちが監視しているのだから蛍とリリンの身に大事があるなんてことは無いが、それでも怖がりの蛍に海に慣れていないリリンのことだ。

まだ海に来て間もないのに、驚きの余り必要以上に警戒心を抱いてしまつてはこの先存分に楽しむことが出来なくなるかもしれない。

「蛍ちゃん、ここから先は急に深くなるから気を付けて……。」

「ふわっ！」

「ひゃあっ！」

だが雛子の警告も虚しく、蛍とリリンはさながらバラエティのお約束が如く頭まですっぽりと沈んでしまった。

念願叶つて友達と一緒に海に来られたことに舞い上がっていたのか、はたまたリリンに夢中で周りが見えなくなっていたのか、蛍はこちらが先回りしたことにも気づかない様子だった。

とは言えこれくらいは予想していた範囲内。

さほど慌てた様子を見せずに、雛子はクスクスと笑いながら蛍を引き上げる。

「ふはっ！」

「蛍ちゃん、大丈夫？」

「うん・・・ありがとうひなこちゃん。」

少ししよんぼりとした様子で蛍がお礼を言う。可愛い。

隣では、千歳がこちらに倣ってリリンを引き上げていた。

「ふわあ・・・びつくりした。」

「リリン、海水飲んでない？」

「大丈夫。ありがと、ちとせ。」

先週以来、すっかり打ち解けた様子の2人に和みながら、雛子は改めて2人に注意する。

「ここから先、急に深くなってるのよ。」

私たちくらいなら大丈夫だけど、蛍ちゃんたちにとってはちよつと深いみたいね。」

この海水浴場では此処の深度が大人と子供を別つ境界線となっており、蛍たちと同じくらいの子供の子ども・・・要するに小学生くらいの子たちは此処よりも浅瀬で遊んでいる子が多く、それ以外は浮き輪か、保護者と一緒だ。

普段ならこの海水浴場に来ると、雛子は要につられて此処よりも奥の方へと行ってい

だが、蛭たちがいる以上、今回は浅瀬で留まった方がいいだろう。

「蛭ちゃん、泳ぐことつて出来る？」

念のため、泳げるかどうか聞いてみるが、運動が苦手を語る彼女のことだから答えは分かり切ったものである。

「えと……いぬかきくらいなら……。」

予想通りの答えだったが、恥ずかし気に手をモジモジさせながら言うものだから思わずゆつと抱きしめたくなる衝動に駆られる。

ついでに言えば彼女が必死で犬かきをしながら泳ぐ姿を想像してしまい、海の上だと言うのにこの場で卒倒しそうになるが、そこはぐつと堪える。

リリンは聞かずとも泳ぎを習ったことはないだろうし、2人を連れてこの場から離れた方がいいだろうと思つたその時、

「いたいた、おーい蛭！リリン！」

1人やることがあると浜に残つた要がようやくこちらへと駆けつけてきた。

「はいこれ。」

そしてこちらに向かつて2つの浮き輪を投げつけてきたのだ。

「あつ！浮き輪だ！」

「うきわ？」

浮き輪を前にした蛭は、はしやぎながらそれを取りに行く。可愛い。

浮き輪までたどり着いた蛭は、一呼吸置いて潜り浮き輪の中心から顔を出す。

「リリンちゃん、こうやって、浮き輪のまんなかにはいつて手をおいてみて？」

蛭が説明する傍らで雛子は浮き輪を拾い上げ、千歳が抱えるリリンに頭から浮き輪を被せる。

そして蛭に倣ってリリンが両手を浮き輪の縁に置いた後、千歳が手を離すと・・・。

「!?ほたる！あたし、水の上で浮いてるよ！」

初めての浮き輪を体験したリリンがはしやぎながら喜びを露わにした。

「でもどうして浮かべるの？」

「この浮き輪はね、ビニールって言って水を弾く素材でできていて、中に空気が入ってるのよ。」

だから水よりも比重が軽いから浮くことが出来る・・・等々リリンに分かりやすく説明する。

「そっか、面白いんだね。浮き輪って。」

彼女は満足げにそう頷き、蛭に倣ってバタ足で泳ぎ始める。

「へえ、面白い遊具があるのね。」

そんな光景を感じた様子で眺めているのは千歳だった。

「まあ本来は泳げない子ども補助に使うためのもので、足のつかないところまで遊びに行くためのものやないんだだけだね。」

だから蛍、リリン。そっち足届かんならこっちに來てな。」

「はい。」

子供の面倒を見慣れている、と言うだけあつて要が蛍とリリンを引率し、そんな光景を千歳がどこか悔し気に見ていた。

保護者代理と息巻く要と千歳に見守られながら、無邪気に遊ぶ蛍とリリン。可愛い。

「蛍もリリンも、楽しそうに遊んどるね。」

「本当、よっぽど楽しみだったのと、よっぽど楽しいのね。」

そんな2人の姿を見ている内に、雛子の内でこれまで秘めていた想いがふつつつと浮上していく。

「・・・可愛い。」

「ん?」

「私さ、実は前々からずっと思つてたんだけど。」

「何を?」

「リリンちゃんつて・・・蛍ちゃんに負けなくらい可愛いわよね!」

「はっ?」

困惑する要と千歳を余所に、雛子は普段蛭に向ける恍惚とした表情をリリンにも向けて熱弁する。

「蛭ちゃんよりも少し背が高いけどリリンちゃんも十分に小つちやくつて可愛い子よね!?」

それにあの長い黒髪に宝石のような赤い瞳！

まるで日本人形と西洋人形の良ところを総取りにしたかのような幼いながらもどこか神秘的な雰囲気！

はあつ！蛭ちゃんのことをずっと天使だと思っていたけどリリンちゃんも負けずに天使よね！

いいえ、イメージカラーが蛭ちゃんと対になるから墮天使？

墮天使ってことは悪魔いいえ小悪魔！そう、愛くるしい笑顔と仕草で人を魅了してくまさにリリンちゃんはまさに小悪魔よ!!

蛭ちゃんが天より降り立った天使だとすれば、リリンちゃんは地よりい出し小悪魔ね！

はあ・・・天使と悪魔が手を取り踊り笑いあうなんてここは天国それとも地獄？」

「知らんわ。」

雛子の熱いパトスと共に迸る独白を鼻で失笑しながら要が覚めた目つきでこちらを

見る。

普段ならその反応に気持ちの1つでも冷めるところだったが、天使と小悪魔に魅了された雛子はそれどころではなかった。

「こうしてはいられないわ！」

今すぐにもリン子さんから取り上げられたカメラを取り戻しにいかない!!」

「あつ、ちよつと雛子！」

要の方など見向きもせず、雛子は浜へと戻っていく。

「放っておきなさいよ。」

「でも千歳。」

「さすがの雛子も蛍とリリンが本気で嫌がれば止めるわよ。」

本人だつて楽しみにしていたのだから、少しくらいは好きにさせてあげなさい。」

そんな千歳の温情も耳に届かず、雛子は深々と頭を下げながらリン子から蛍とリリンが嫌がらない範疇で、と言う条件でカメラを返してもらおう。

返し際、リン子はひと際呆れた表情を見せていたが、そんな反応でさえ今の雛子の思いを冷めさせるには至らなかつたのだつた。

…

「情報通り薄着の連中が多いな。ここは暑いのか？」

「さあ？僕たちには知り様がないからね。」

モノクロの世界よりかの地に降り立ったダンタリアとサブナツクは、グリモアとサブローに姿を変えてプリキュアを追って夢ノ宮海水浴場を訪れていた。

この地では今は夏と言う、1年を通じて最も暑い季節を迎えている。

かの地の7割以上を占めている海に入るのも、今の季節だからこそ成せる娯楽なのだろう。

最も、五感を持たない自分たちにはまるで縁のない話だが。

「それよりも、本当にプリキュアたちまでこの土地にいるのだろうか？」

プリキュアの排除を最優先とすること。

モノクロの世界を離れ本国へと向かったアモンが残した命令に従い、グリモアたちはこの地の侵攻よりもまず、プリキュアを討つべくここまで来たのだ。

これまでではプリキュアが変身していなければ気配を探ることが出来なかったもので、こちらから直接やつらの元へと向かうことはなかったが、今はリリスがやつらと共にい

る。

そしてリリスがダークネスから離れたとはいえ、彼女の生体モニターは今でもアモンの端末で観測することができる。

つまりリリスの生体反応を追ってここまで来たのだが、あくまでもリリスの反応しか探知できない以上、プリキュアたちも共にいるという確証はない。

いなければリリス一人でも倒せば良いかもしれないが、そうなった時の懸念材料が蛍の存在だ。

かつてあの少女が生み出したダークシャインの力は、行動隊長は愚か司令官クラスさえも凌駕しており、その上で自我を持って行動していた。

つまりあれは誰かに御できる存在ではない。

もしもリリスを失ったことがきっかけとなり彼女が再びダークシャインを生み出すようなことがあれば、そしてそれが無差別に牙を剥くようなことがあれば……。

その危険性を捨てきれない以上、せめて蛍だけでもリリスと共に倒しておきたい。

だからリリス一人がこの地にいたところで、グリモアたちは動き様がないのだ。

そんな疑問に対してサブローが一呼吸を置いて答える。

「リリスがこの地についてどれだけの知識を身に付けているかは知らんが、流石にここで生きていくことは想定していないだろう」

だからこれまで任務の度にこの地に出向いており、この世界に長期滞在することはなかったと続き。

「あいつは必要外の知識は身に付けようとはしないやつだ。」

この世界で生きる知識に乏しいあいつが1人でこんな離れの土地に足を運べるはずがない。

ならばやつがここへ来ているのであれば・・・。」

「この世界に住み慣れているもの、プリキュアたちと一緒にいる可能性が高いと。」

「そういうことだ。」

それにもしもやつが人目を忍んで生きていく道を選んだのだとすれば、猶更このような人が集まる場所に来ようと思わないだろうしな。」

以前の戦いでリリスはプリキュアたちとショッピングモールを訪れていた。

この世界で人として生きるために必要な品々を買っていたとすれば、やつはプリキュアたちと共に生きる道を選んだことはほぼ確定と見ていいだろう。

つまり、リリスの反応が見慣れぬこの地にあった時点で、プリキュアとが同伴している結論が見えてくるのは必然である。

「流石、お姫様については詳しいね。」

珍しくサブローにしては理論整然とした言葉に、グリモアは皮肉めいた笑みを浮かべ

て嘲笑する。

だが本題はここからだ。

いくらこの地にリリスがいることが分かったとしても、詳細な位置情報まではモニターからは観測できず、希望の光は使われなければ探知できない特性上、プリキュアへと覚醒したリリスの力も変身してもらわなければ探知できないのだ。

そしてリリスにはもう絶望の闇は残されていない。

つまりリリスの生体モニターからおおよその位置を割り出しこの地まで降り立った後は、自らの足を使って彼女の搜索に当たらなければならぬのだ。

だからこの場に置いて最も怪しまれない格好をしなければならぬと思い、グリモアはハーフパンツと上半身裸に白いシャツを羽織った姿でいるのだが……。

「ところで、なぜ君はそんな格好をしているんだい？」

サブローの姿は赤い禪一丁だった。

「この場においてはこれが最も適した格好ではないのか？」

あくまでも真面目に、そしてなぜそんなことを問われているのか分からないと言った様子でサブローが真顔で聞き返してくるが、グリモアは盛大なため息を吐く。

全く、リリスが絡めば論理的な思考が出来ると言うのに、なぜ普段はこうもかけ離れているのか理解ができない。

現にサブローの注目度は大きく、物珍しさからか余計なギャラリーを増やしているではないか。

これからリリースを探してくまなく歩き回らなければならぬと言うのに、こうも人を集めては動きづらい。

「それに、注目ならば貴様も浴びているではないか。」

「なんだと?」

だがサブローからの忠告にグリモアは珍しく驚きながら自身の周囲を見渡す。

見るとサブローほどではないが、確かに自分も注目を集めていた。

「なぜだ? 他と比べても特別おかしなところはないはず……。」

さらに奇妙なことは、こちらが視線を集めているのは女性ばかりと言うことだ。

それも目の焦点がどこか合っていないような、だがしつかりとこちらを見定めているような、妙に惚けた表情を浮かべている。

男性からの視線を全く集めてない以上、老若男女問わず注目の的となっているサブローと違ってこの格好は常識の範疇であることは間違いないだろうが、もしかしたら女性から見ればどこか不審な点があるのかもしれない。

だが流石のグリモアも、性差の違いに置ける価値観にまで理解は及んでおらずその原因がわからないでいた。

「上半身がシャツ一枚と言うのがおかしいのではないのか？」

相変わらず禪一丁で仁王立ちしているサブローから聞きたくもない助言を授かる。

だが彼の言うことは最もかもしれない。

確かに道行く男性は上半身を晒しているものが圧倒的に多い。

子供から大人までそうなのだから、この場所での格好としては特に不自然ではないのだろう。

なぜ女性からのみ注目を受けているのか、と言う問いには何の解答にはなっていないかもしれないが、それこそ自分の知らぬ男女の性差による感性、が原因なのかもしれない。

「仕方がない。」

グリモアは羽織っていたシャツを脱ぎ、肩にかける。

だがなぜか余計に女性からの注目を集める結果に終わってしまった。

それも惚けるだけだったのがなぜか甲高い声まで上がり始めた。

「・・・逆に注目度が上がったぞ。」

「なら知らん。」

これ以上の問答は無用と判断したグリモアはシャツを肩にかけたまま、仕方なくリリスの捜索に向かうのだった。

…

ひとしきり海を泳いだ千歳たちは、その後ビーチボール、西瓜割等、海での遊びを堪能し、今はビーチパラソルの影の下、シートの上で寛いでいた。

それでもまだ遊び足りないのか、蛭とリリンはレミンと一緒に砂のお城を作っている。

「レミン、バケツいっぱい海水いれてきたよ。」

「ありがと〜リリン。」

砂のお城はねく、水を含ませると丈夫になるんだ〜。

「そうなんだ。レミンちゃん、ものしりだね。」

「へっへ〜ん。前にテレビで見たときそう言ってたからね〜。」

レミンが鼻を高くして得意げに〜ちる。

だが砂城を作った経験のないレミンたちでは、砂の小山を作るのが精いっぱいだろう、とは言わぬが花だ。

せつかく本人たちがこうしてやる気を見せているのだからそれを見守るのも保護者の務め。

それにリリンはレミンにも負い目を感じていたので、こうして仲良く出来ているだけでも十分である。

「ふふつ、蛍もリリンも凄く楽しそうね。」

リリンだけでなく、蛍にも笑顔が溢れていた。

元々友達と一緒に何かをやるのが夢であったと語る彼女だ。

海水浴場を初めて訪れた自分でさえ心が躍るほど楽しかったのだから、彼女の喜びようといくればそれよりも大きいことは想像に難くない。

事実、要ですら少し休憩と言つてシートの上で寛いでいると言うのに、まだ疲れを自覚する様子を見せていないのだ。

「あれだけ暑いでいちや、帰るころにはクタクタになるでしょうね。」

そうは言いながらも雛子は止める様子を見せず、楽しく砂のお城を作る3人の様子をカメラに収める。

リン子からカメラを返してもらつた雛子は、蛍とリリンの写真は1つの遊びに付き、合わせて3枚までと言う条件の下で写真を取ることを許可されたのだ。

当然、4万枚も取るつもりだつた雛子からは不服の声が上がつたが、要とリン子に一

蹴され、約束を破ったらカメラを押収して今日のデータは全て消すと脅されたので渋々と従うことにしたのだ。

それでも今はもう不平不満な様子を見せず、彼女もまた楽し気にみんなの様子をカメラに取っていた。

「カメラのデータ、後で私たちにも頂戴ね。」

「勿論、今度データを複製して渡すわ。」

あつ、蛍ちゃんとリリンちゃんの写真は私専用だからね？」

「はいはい。」

雛子の冗談とも本音とも取れる言葉を軽く受け流し、内心ガツカリしながら千歳は再び蛍とリリンに目を向ける。

レミンと一緒に無邪気に遊ぶ2人の姿はとても幸せそうで、平和な様子そのものだった。

それだけに千歳の心の奥がチクリと痛み、無意識の内に沈んだ表情を浮かべてしま

う。

「気にしてるの？」

「こちらの様子を見かねたのか、要が隣に腰掛けてきた。」

「要。」

「キュアシャイン・サハクイエルとキュアシャイン・レリエルの力。

それから、ネオ・ソルダークのこと。」

「……。」

考えが見抜かれ沈黙するこちらの様子を見た要が、我が意を得たりと言わんばかりに微笑む。

「強かったもんな、ネオ・ソルダーク。」

要の言葉に、千歳は無言で頷く。

「リリンちゃんが言ってたわね。」

デイスペアー・カードは、元々ソルダークをネオ・ソルダークへと進化させるために作られたものだって。」

要の言葉に雛子が続く。

本来の目的がそうなのであれば、ダークネスにとってもダークシャインの誕生は予想外だったのかもしれない。

だが結果として、デイスペアー・カードにはダークシャインの力が残ってしまった。

そしてその力を得て進化したネオ・ソルダークには、ダークシャインの能力が継承されておき、まともに戦えば希望の光は全て打ち消されてしまうのだ。

「ウチらの攻撃が最初通じなかったのも、ダークシャインの力を持つてるからって見て、

間違いないやろな。

蛭とリリンがいなかったら、絶対に勝てんかった。」

要の言う通りだ。

前回の戦い、ネオ・ソルダークがキュアシャイン・サハクイエルとキュアシャイン・レリエルの力を浴びた後から、こちらの攻撃が有効となった。

キュアシャインの力とダークシャインの力は、どちらも蛭の心から生まれたものだ。

本質的には同じながら相反する感情から生まれた2つの力は、ぶつかれば互いの特性を打ち消し合うのかもしれない。

つまりこれからの戦い、2人の力がなければ自分たちはまともに戦うことすら出来なくなるということだ。

だけど……。

「それでも、2人にばかり負担をかけさせるわけにはいかないよね。」

雛子が自分と全く同じ思いを口にする。

「千歳も雛子も、もうウチらの力じゃ敵わない、なんて思うなよ。」

要が元気づけるように話しかける。

「希望の光は、ウチらの思いの力。」

ウチらが負けなくて強く思い続ける限り、絶対に負けない。

相手の力の大きさなんて関係ない。

ウチらはウチらの力を、ウチらのことを信じるだけや。」

「何偉そうに当たり前なこと言ってるのよ。」

そんな要に、雛子は『当たり前』だなんて言つてのける。

要にも雛子にも、一切の迷いが感じられなかった。

どんなことがあつても決して折れないこの子たちの心は、本当に強い。

(・・・全く、私も軟になつたものね。)

ダークシャインの一件で蛍のことを守れなかった悔しさが、自分を信じる気持ちを見失つてしまつていたのかもしれない。

千歳はかつて一人で戦い続けて来たことを思い出す。

あの時の戦いはとても辛くて苦しいものだったが、少なくともあの時の自分は、どんなことがあつても故郷を救うと言う意思を持ち続けていたはずだ。

あの時の強さだけでも、今の自分には必要だ。

「勿論よ、私はただ帰りを待つお姫様でも、守られるお姫様でもいるつもりはないわ。」
むしろ守る側でいたいのだ。

自分にとっての大切な小さなお姫様（リトル・プリンセス）たちを。

例え彼女たちの方が強くなつたとしても、その思いに変わりはない。

むしろこれから先、ダークネスの矛先は本格的に彼女たちに向けられるはずだ。

それならば、彼女たちが戦うことに専念できるためにも、自分が守護騎士としてその身を守り続けるのだ。

要も雛子も、同じ決意を秘めた眼差しをこちらに向ける。

その時……。

「おい、なんか向こうの方が騒がしくないか？」

ベルが人の騒ぎがする方へと指を差す。

その方へと目を向けると、そこには2人組男性が大勢の人に囲まれながら移動していた。

「……。」

「……。」

「……。」

千歳たち3人はその姿を見て絶句する。

一方、招かれざる客のご登場を未だに知らない蛍たち3人は、今も無邪気に砂のお城を作っていた。

要は心中で大きなため息を吐いた後、それよりもさらに大きなため息を吐く。

目の前に映る男2人組の内、1人は2mを軽く超える筋骨隆々とした肉体と禪一丁と言う、現代では漢気溢れるを通り越してただの変質者にしかならない格好で堂々と歩いており、もう1人の男は水色の髪とで整った面立ちと持ち、細見ながらも引き締まった上半身を惜しみなく曝け出して女性客から黄色い声を浴びていた。

2人とも目立つなんてレベルじゃないほどに他の客から注目を浴びているが、そんな面妖な光景を目の当たりにした要たちの脳裏にある人物たちの名前が過る。

「なあ、あれ絶対……。」

「少なくとも、片方はサブナツクだ。あの姿には覚えがある。」

困惑した様子の要にベルが答える。

そう、彼ら妖精は一度サブナツクと思しき人物を街中で見かけたことがある。

その時のことを聞けば、サクラ曰く、『一目見れば分かる』とのことだったが、ここまですぐに堂々と奇人変人注目を浴びて登場するとは連中は正体を隠すつもりがあるのだろうか？

・ ・ ・ いや、少なくともダンタリアと思しき方は格好だけならかなりまともだ。

本人の容姿のせいで異性からいらぬ注目を集めているだけだろう。

それはそれで敵ながらムカつく話だが、結果としてサブナックもダンタリアも、まるで正体を隠せていない登場となった。

「ん？あそこにいるのは．．．」

「ようやく、見つかったみたいだね。」

するとこちらに気付いたサブナックとダンタリアが視線を向けてくる。

彼らからの視線を感じ取ったのか、リリンが飛び退くようにこちらを振り返り、2人の姿を確認した。

「サブナック！ダンタリア！」

リリンの言葉が2人の正体を確定させる。

「やはりここにいたかりリス、キュアシャイン。」

そしてお前たちが残りのプリキュアだな。」

「もうこの姿でいる必要性もないね。」

ターンオーバー、希望から絶望へ。」

ダンタリアの言葉と共に闇の牢獄が展開され、2人は良く知る行動隊長の姿へと戻る。

その瞬間、周囲に闇の牢獄が展開され、道行く人々は姿を消した。

だが要は彼らから視線を外さないように慎重に構えると同時に、自分の浅はかさを恥じていた。

彼らの人間態を初めて目撃したものだから対応が遅れたが、こちらが変身する前にやつらの変身を許してしまった。

やつらは特撮ヒーローに登場するような敵たちではない。

ヒーローの変身中は攻撃をしてはいけない、何てお約束なんて知る由もないだろうからそこを狙われる可能性がある。

それは千歳と雛子も気づいているようで、2人はいつでもパクトを召喚できるように構えながらも、彼らの様子を伺っていた。

どこかで一瞬のスキをついて変身するしかない。

そう思っていたその時……。

「どうした？早くプリキュアに変身しろ。」

「え？」

サブナックから思わぬ言葉が飛び出て来たものだから要はつい気を抜いてしまう。

「……変身する前に倒そうとは思わんの？」

「そんなことをして倒せても何も面白くはない。」

良かったこいつが戦闘バカで。

要は内心感謝とも嘲笑とも取れる言葉を浮かべながらスパークパクトを手に取り、「そりやどうも。武士の情けに感謝するよ。」

非情に癩だが一言お礼を述べながら変身……。

「武士とは何だ？」

しようと思つた矢先に盛大に腰を折られてズッコケる。

「かつてこの国のトップに仕えていた戦士たちの総称だよ。」

その質問に答えたのはまさかのダンタリアだった。

「いや、なんであんたが知ってんの……？」

「ここは一応、敵地だからね。」

戦士に纏わる情報は念のため集めていたのさ。

最も、既に絶えたと聞いているから無駄足だったけどね。」

妙にちゃんとした理由なのは何だか無性に癩だった。

なぜか戦う前から激しい頭痛に苛まれた要は、気を取り直してみんなと共にパクトを構え、妖精たちは戦いの邪魔にならないように距離を置いた。

「プリキュア！ホープ・イン・マイハート！！！！」

「伝説を超えた、2つの光！！」

「キュアシャイン・サハクイエル！」

「キュアシャイン・レリエル！」

「世界を駆ける、蒼き雷光！キュアスパーク！」

「世界を包む、水晶の輝き！キュアプリズム！」

「世界に轟く、真紅の煌めき！キュアブレイズ！」

「一二五つの光が伝説を創る！ホープライトプリキュア！！！！」

変身すると、ダンタリアがその間にソルダークを創り出していった。

「させない！」

リリンがディスプレイ・カードを持つサブナックへと向かっていく。

「こちらの準備は待ってくれんのか。」

貴様らには武士の情けとやらは無いようだな。」

もはやどちらが悪役なのかわからないセリフをサブナックは言いながら、カードを掲げ闇の波動を放ちリリンを牽制する。

その隙をついてダンタリアへとカードを投げ渡した。

「暗き闇よ。深淵に囚われし絶望の化身に、闇を撒き散らす力を与えよ！」

ダークネスが行動隊長、ダンタリアの名の下に、その姿を顕現せよ！」

ネオ・ソルダーク！」

ダンタリアが詠唱とともにカードをソルダークへと投げつける。

カードをその身に取り込んだソルダークは身体を膨張させ、巨大な怪物へと姿を変える。

山のように盛り上がったその身体は重力に引かれて地に落ち、その巨軀を支えるように四点から丸みを帯びた4つの手足が生えてくる。

頭部と胴体が繋がっているのではないかと思えるほどに首は短く、鯨のような顔に牛を思わせる2本角がある。

そして尻には魚類を彷彿させる鰭のついた尾が現れる。

新たに誕生したネオ・ソルダークは、中東の伝承に伝わる巨大魚『バハムート』を思わせる姿を現した。

「行け！ネオ・ソルダーク！」

「ガアアアアアアアアアッ!!!」

ダンタリアの命令とともに、ネオ・ソルダークは獣の雄叫びをあげながら、巨大な顎を開ける。

そして短い4つ足で地を這い、砂浜を飲みこみながらこちらに迫り来た。

「みんな！逃げて！」

キュアブレイズの号令とともに要たちは散らばる。

ネオ・ソルダークの通過した先の砂浜は抉られ、海水が流れ込み海を拡大させる。

「なんて無茶苦茶な……。」

余りにも強引な攻撃にキュアプリズムが呆れたような声をあげるが、ただの行進だけでとんでもない破壊力だ。

「ここが街中だったらと思うとゾツとする光景が浮かび上がる。

「ネオ・ソルダーク！ そのままこの地を喰らい尽くせ！」

サブナツクの号令とともに、ネオ・ソルダークは大顎を開けたまま進撃するのだった。

・
・
・

ネオ・ソルダークの力に圧倒される雛子たちだったが、進撃の直進上にリリンが躍り出て、ネオ・ソルダークの額を素手で受け止め進撃を食い止める。

だがサブナツクがその隙をつき、リリンの背後へと奇襲を仕掛けた。

「危ない！」

雛子が慌てて援護に回ろうとするが間に合わない、と思われた次の瞬間、リリンは振

り向きもせず左肩の翼をサブナックへと叩き付けた。

「なにっ?」

リリンから不意打ちを受けたサブナックは一度後退しようとするが、そこへ蛍が追撃する。

「たあっ!」

蛍が右手を振るい攻撃し、サブナックはそれを回避するも、蛍は右手を振るった勢いのまま身体を捻り、そのままサブナックへ回し蹴りを炸裂させた。

「ハッの動きはっ!」

サブナックは驚きながらも、蹴りをガードし後退する。

先ほどの蛍の動きに衝撃を受けているようだが、それは雛子も同様だった。

戦いどころか日常のスポーツさえも苦手とする蛍が、急に戦士の動きを見せ始めた。

そして驚いたのはそれだけじゃない。

(今の動き……どこかで……?)

あの右手の振るい方、もしも爪を立てていたなら引つ掻くような動作ではないか?

回転を加えた蹴りの動き、もしも尾があれば叩き付けていないか?

そう、あの動きはまるで『リリース』が見せたような……。

その時、雛子は先ほどリリンが振り向きもせずにサブナックを迎撃したことを思い出

す。

気配を察して迎撃した、なんてレベルではない。

あれはあらかじめ来るのを知っていた動きだ。

まるで他の方向からサブナツクの動きを監視していたようだ。

そして直後に蛍がサブナツクへ追撃を加えている。

そこまで思い当たり、雛子は1つの結論に至る。

「やはり貴様ら、思考を共有しているな。」

測らずとも、サブナツクから同じ結論が口にされた。

「えっ?」

「うそっ?」

要と千歳が驚きながら蛍とリリンの方を見るが、当人は真つ直ぐに視線をサブナツクへと向けていた。

その眼からは肯定の意が見て取れる。

彼女たちは今、一心二体のプリキユア。

心を1つにしたことで、互いの思考を共有しているのだ。

だから蛍はリリンから、戦いの知識を共有した。

だからリリンは、蛍から得た視覚情報を共有した。

「今のあたしは、ほたるの見たこと、聞いたことが分かる。」

「いまのわたしは、リリンちゃんの戦い方、考えがわかる。」

「そう、あたしたちは一心二体のプリキュア。」

「ふたりでひとり!!」

蛍とリリンが声を合わせてネオ・ソルダークへと立ち向かう。

思考を共有する能力も恐らくプリキュアの力の一環なのだろうから、日常的に互いの考えていることが分かるわけではないだろう。

ただどいくら戦闘中に限定されるとはいえ、互いの考えていることが全て分かるというのは普通ならば恐ろしいと思うだろう。

何せ隠し事が一切できないのだから。

例えば友人だろうと家族だろうと、どんなに親しい間柄でも隠したいことの1つや2つはあるのが普通だ。

それに相手の好意だけでなく、悪意だってわかってしまう。

もしも親しいと思っていた相手が自分のことを内心悪く言っていたらと思うと・・・思考を共有すると言うのはそんな不安が付きまとうものだ。

それなのに2人にはまるで不安が見られない。

「蛍ちゃんとリリンちゃんだからこそ、成せる力・・・。」

互いの希望も絶望も、好意も悪意も、愛も憎しみも、その全てを曝け出して受け入れた蚩とリリンだからこそ、何の不安を抱くこともなく思考を共有できるのだ。

「小賢しい。ネオ・ソルダーク。やつらをねじ伏せろ。」

「ガアアアアアアアッ!!」

ネオ・ソルダークが雄叫びとともに、身体を捻りその巨体を風車のように回転させる。次の瞬間、周囲の砂浜が抉れ巨大な渦巻きが発生し、膨大な海水が一気に引き込まれていく。

辺り一面の砂浜が、瞬く間に海に侵食されていった。

「足場が!」

「要……こつち!」

雛子が空に盾を作り、要とともにそこへと飛び移る。

蚩とリリンは翼で、千歳は両足から炎を噴射して飛翔し、妖精たちも浮遊することで何とかの撃つことが出来た。

だが先ほどまで海水浴場だった場所は、一瞬のうちに海の一部へと成り果てた。

天変地異すら引き起こすほどの強大な力を持つネオ・ソルダークを前に、雛子は改めて戦慄すると同時に、この状況をどう切り抜けるかを考える。

「不味いな。」

足場は何とか確保できるし、蛭たちにも影響はないとは言え。」

「下一面が海になってしまっただなんて……。」

水中戦に持ち込むのは、流石に相手のホームグラウンドで戦うようなものよね。」

先ほどのネオ・ソルダークには魚のような尾があり、あの姿は伝説上の生き物であるバハムートを思わせるものだ。

外見からの推測だが、恐らくは水中戦を最も得意としているのだろう。

現に今、ネオ・ソルダークは海に潜り姿を眩ませている。

そしてサブナックとダンタリアは宙に浮きながらこちらの状況を伺っている。

恐らく機を見てネオ・ソルダークと挟撃を仕掛けるつもりなのだろう。

何か仕掛けられる前にネオ・ソルダークの居場所を探りたいところだが、やつの姿は海深くに潜っているせいで確認できない。

そして闇の波動を感知しようにも、海一面から力の波動が感じられる。

拡大された海はネオ・ソルダークの力によって引き起こされた現象だから、一面に闇の波動が満ちているのだ。

つまり姿も力も、下の海に紛れてまるで探ることが出来ない。

指をくわえて見ている暇なんてないのに、見えない敵の姿に警戒して動けない。

それは蛭とリリンも同じだった。

「あたしたちの浄化技なら、この辺の海全部巻き込むことも……。」
「それは無理よ。海はあなたの思う以上に広いし底も深い。」

あなたたちの浄化技でも、やつを捉えることはできないわ。
そして連中はその隙を突いてくる。だから焦ってはダメ。」

今の状況に焦ったリリンが力任せな提案をするが、千歳がそれを拒否する。

2人の浄化技がどれだけ広範囲に及ぼうとも、海はもつと広大だ。
闇雲に攻撃を放つても相手には掠りもしないだろう。

もしかしたらこれも、やつらの作戦の一環なのかもしれない。

蛭とリリンがどれだけ強大な力を持つとも、敵の姿が見えなければ意味がない。
つまり間接的にこちらの切り札を封じられてしまっているのだ。

「そうだ、下二面が海なら。」

すると要が何か思いついたかのような言葉を口にする。

「どうするつもりなの?」

「ウチの力で釣り上げる!」

光よ、走れ! スパークバトン!

そう言いながら要はスパークバトンを手に取り、空へと飛ぶ。

「まさか。」

そこで雛子は要の思いついた作戦を悟る。

「ちっ、させるか!」

ダンタリアもその考えがわかったのか、要の元へと飛んでいく。

「邪魔はさせない!」

だがその進路を千歳の炎が遮った。

「バカなウチにだってわかること。水は電気を良く通すつてね!

プリキュア! スパークリング・ブラスタター!!」

そして要は雷を纏い、そのまま海へと飛び込んだ。

次の瞬間、海一面に膨大の電撃が迸り、周囲一帯にスパークが発生する。

「なるほど、考えたなキュアスパーク。」

どこか感心した様子を見せたサブナツクは、蛍とリリンの妨害へと向かう。

ネオ・ソルダークほどの巨大な絶望の化身は、2人の力でなければ浄化できない。

それを知っているからこそ先回りしたのだろうが、そうはさせない。

雛子はサブナツクの進路に盾を展開して妨害する。

「蛍ちゃん! リリンちゃん! 構えて!」

「わかった!」

「光よ、集まれ! シャインロッド・エクステンション!!」

そのまま2人に呼びかけ、浄化技の態勢を整える。

次の瞬間、海一面に広がった電流に耐え切れなくなったネオ・ソルダークが勢いよく宙へと躍り出た。

「ガアアアアッ!!!」

その巨体に迸る電流にもがきながら、ネオ・ソルダークは苦悶の雄叫びをあげる。

その直後、要もまた海から飛び出しサブナックと交戦する。

「プリキュア!プリズミック・リフレクシヨーン!」

宙へと舞い上がるネオ・ソルダークを、雛子が浄化技で閉じ込める。

「今よ!2人とも!」

「せいなる光よ。」

「闇夜を照らし」

「暗き想いを光に導け!」

「プリキュア!ホーリーナイト・サンクチュアリ!!」

そして2人のキュアシャインの浄化技が決まり、ネオ・ソルダークは消滅する。

「ふっ、流星はキュアスパーク。」

オレが認めた強者だけのことはあるぞ。」

「1人だけキュアスパークの思惑に気付かなかったくせに良くも言う。」

「貴様も防げなかったではないか。結果が変わらなければ同じことだ。」
最後に憎まれ口を叩きあいながら、サブナックとダンタリアはディスプレイ・カードを回収して姿を消すのだった。

・
・
・

戦いが終わった後、リリンたちは海の家で昼食を取ることにした。

先ほど要が食べていた『焼きそば』の味がどうしても気になっていたリリンは一先ずそれを注文しようと思ったが、他のメニューを見て目移りする。

「カレーうどん？カレーとうどんが一緒に食べられるの？」

フランクフルトってなに？

あつ、カレーライスもある！ほたる！あれ全部注文してもいい？」

見れば見るほど食べてみたいメニューがたくさんあり、リリンはここにあるもの全てを食してみたいと思ったが、蛍が苦笑しながらやんわりと否定する。

「おちついてリリンちゃん。」

そんなにたくさんたべられないから、今回は焼きそばだけにしとこ？」
「え〜。」

不服な声をあげるも、蛭は動じない。

「今日のばんごはん、カレーにしてあげるし、ここにかいてあるものもいつか全部つくつてあげるから。」

「ホント!？」

あたし、名前ぜんぶ覚えたから、いつか絶対につくつてね!!」

「はい。」

蛭とそんな約束を交わしたりリリンは焼きそばを注文し、席に着いてからも今や今やと待ち構える。

やがて美味しそうなソースの香りとともに焼きそばが運ばれてきた。

「いただきますー!」

さっそく箸を手に取り、一口食す。

出来立ての熱さが舌を刺激した直後、麺に良く絡んだソースの美味さが伝わる。

「美味しいー!ほたるー!これ、とっても美味しいよー!」

初めて口にする味に興奮しながら、リリンは満足げな笑みを浮かべる。

そんなリリンの反応を、蛭は嬉しそうに見守っていた。

「ほたる、こんど焼きそばも作ってよ！」

「わかった。」

あつ、でも今日の夜はカレーだし、明日また焼きそばだと、さすがに栄養がかたよるから……。」

隣で今後のメニューを考える蛭に感謝しながら、リリンは焼きそばを食べ続ける。

そして各々食事を終えた後、今度はガラスの器いっぱい氷の欠片を盛った、不思議なデザートが運ばれてきた。

「ほたる、これはなに？」

「かき氷って言って、なつを代表するデザートだよ。」

「かき氷？これ、ホントに氷なの？」

リリンが怪訝そうな表情でかき氷を観察する。

「そつ、細かく砕いた氷の上にシロップをかけたものよ。」

蛭の説明に雛子が続き、一緒に聞いていた千歳が感嘆とした声をあげる。

「面白い氷菓子があるのね。」

千歳に続いて妖精たちもかき氷に興味深そうに見ている。

千歳たちにとつても、かき氷と言うのは珍しいものようだ。

リリンは試しにスプーンでつついてみると、氷とは思えないほど柔らかな感触とともに

に、スプーンが差し込まれる。

掬つてみると氷の欠片同士が摩擦する小気味よい音が立ち、シロップのかかった氷がスプーンへと渡る。

隣の蛸に一度目配せし、彼女から食べて見ると目で合図を受けてから、リリンはスプーンを口へと運ぶ。

「冷た・・・甘い！美味しい！」

細かく砕かれた氷は口の中ですぐに溶け、ひんやりとした冷氣とシロップの甘さが口いっぱい広がる。

あまりの美味しさに、リリンはかき氷を次々と口へと運んでいき。

「あつ、リリンちゃん。そんなに急いで食べると・・・。」

「っ！いたた・・・。」

雛子の注意も虚しく、突然の頭痛に見舞われてスプーンを止めた。

「ぷっ、あはははははは！」

要が吹き出した後に大きな声で笑い、つられて雛子も蛸も可笑しそうに笑い出した。

そしてリリンも、笑われているにも関わらず、そんな空気につられてつい笑みを零してしまふ。

先ほど雛子が注意してきたと言うことは、かき氷を急いで食べると頭痛がすると言う

のは、ごくありふれたものか、あるいは容易に予想できたものなのだろう。

(当たり前・・・か。)

まだ自分には知らないことが多い。

みんなと同じ当たり前を共有することが出来ない。

それでもこうして少しずつみんなから教わり、みんなから学んでいけばいい。

いつかみんなと一緒に、当たり前を笑いあえる日が来るように。

そんなことを考えながら、リリンは再びかき氷を食べるのだった。

・
・
・

その日の帰り道、雛子がふと後部座席に目をやると、蛍とリリンが肩を寄せ合って静かに眠っていた。

「やっぱり、こうなっちゃったか。」

隣に座る要が同じように蛍たちを見ながら微笑む。

「2人ともすっごく乾燥していたものね。」

要ですら一息を入れていたのに、蛍もリリンも休みなしに終始遊び続けていたのだ。帰りの車の中で疲れて寝てしまうことは容易に想像出来ていた。

ちなみに同じく一緒になって遊んでいたレミンことレモンも、今は自分の膝の上で寝息を立てている。

幼い子供たちが目いっぱい遊び疲れて居眠りしてしまうのは、ある種の幸せの象徴とも言える。

リリンと過ごす時間を失うことを恐れていた蛍も、ダークネスを離反してから罪の意識に苛まれていたリリンも、きつと今日の幸せを心行くまで満喫できたのだろう。

雛子にはそれがとても嬉しかった。

そして雛子は、この幸せの光景をどうしても写真に収めたくなり、黒のポーチからカメラを取り出す。

「後でちゃんと、蛍から許可を取りなさいよ?」

助手席に座っている千歳がこちらを見てそう微笑む。

「ええ、分かっているわ。」

車が赤信号で止まり振動がなくなったタイミングを見計らって、雛子はカメラを取ってシャッターを切る。

寄り添い眠る天使と小悪魔は、ただ静かに眠り続けるのだった。

.
.
.

この地に降り立つのは、いつ以来だろうか。

錆びれた記憶の中を辿りながら、アモンは黙々と歩いてきた。

空高くまでそびえる高層ビルが周りに溢れ、迷路のように入り組んだ道路は、大地に収まらず宙にまでアーチを描くかのように広がっている。

そんな中を、アモンは迷うことなく突き進む。

かつての繁栄の絶頂を物語るこの鋼鉄のジャングルは、『あの時』から変わらぬままこの世界に佇んでいた。

変わったところがあるとなれば、道行く人々に生気がないこと。

そして空も大地も見渡す限り、一面の闇に覆われていることだ。

音も光も無くしたこの世界の惨状をこうして認識できるのは、ダークネスに身を墮としたアモンだからこそ成しえること。

そして複雑に入り組んだこの世界を迷わず進めるのは、この世界がアモンにとって勝

手知つたる場所だからに過ぎない。

やがてアモンは入り組む道路を抜け、ひと際広大な空間へと出た。

道行く広間の先には四角の倉庫があり、そこは地下シエルターの入り口となっている。

そこにアモンの尋ね人がいる。

そしてアモンは倉庫の入り口まで辿りついたその時。

「お待ちしておりました。アモン様。」

アモンの名を呼ぶ女性の声が聞こえてきた。

倉庫を封鎖していたシャツターが開き、中から2組の男女が姿を見せる。

1人は執事服姿で髭を蓄え、片眼鏡を身に付けた白髪の老人。

1人はメイド服姿で黒の傘を手にした、妙齢な白髪の女性。

闇の力を失い、悪魔から人の身に姿を墮とした2人は、アモンの出現を予期したかのように迎えに上がったのだ。

「久しぶりだな。ハルフアス、マルファス。」

・
・
・

次回予告

「ほたる、夏休みつて1か月もあるんだよね？」

「そうだよ？」

「1か月、何して過ごすの？」

「んつと、宿題やったり、あたらしいお菓子をつくってみたり……。」

「みんなは？」

「かなめちゃん、ぶかつの試合があつて、ひなこちゃんとちとせちゃんは、図書館で勉強して……あつ、わたしたちもね、お盆にはおばーちゃんに会いに行くんだよ。」

「ほたるの、おばーちゃん？」

次回！ホープライトプリキュア第27話！

それぞれの時間！それぞれの夏休み！

希望を胸に、がんばれ！わたし！

第27話

第27話・プロローグ

暗闇に覆われた夢ノ宮市にて、激しい爆音が鳴り響き、衝撃波が町全体に放たれる。

それと同時に、2つの光と巨大な闇の塊が正面から衝突した。

闇の塊は幾重にも枝分かれした巨大な角を持つ怪物『クジヤタ』を模したネオ・ソルダークであり、2つの光、キュアシャイン・サハクイエル、キュアシャイン・レリエルの力に敗れ、その巨体を大きく揺るがせ地面へと倒れ伏す。

そして横たわるネオ・ソルダークへと目掛けて、蒼い雷光と真紅の爆炎が左右から挟み込むように迫っていく。

「プリキュア！スパークリング・プラスター！」

「プリキュア！ブレイズフレアー・コンチエルト！」

蒼い雷光キュアスパークと、真紅の爆炎キュアブレイズが、それぞれの浄化技でネオ・ソルダークへと追い討ちをかける。

そこへ安らかなフルートの音色とともに、ネオ・ソルダークの巨体を閉じ込めるように巨大な水晶が現れた。

「プリキュア！プリズミック・リフレクション！」

黄色の戦士キュアプリズムが、その浄化技を以ってネオ・ソルダークの身動きを封じ込める。

それを見計らい上空に構える2人のキュアシャインが、それぞれの武器を交差し重ね、1つに融合させる。

「せいなる光よ。」

「闇夜を照らし」

「暗き想いを光に導け！」

「プリキュア！ホーリーナイト・サンクチュアリ！！」

「ガアアアアアアアツ！！」

2人のキュアシャインの浄化技が炸裂し、ネオ・ソルダークは断末魔と共に跡形もなく消滅する。

「やはりこの程度か、不甲斐ないな、ネオ・ソルダーク。」

「どうやら、ここまでのようだねサブナック。」

「ああ、退くぞダンタリア。」

「やれやれ、次はこうはいかないよ。リリス。」

ネオ・ソルダークの浄化を確認したサブナックとダンタリアは、共にこの世界から姿

を消す。

やがて世界を覆う闇の牢獄が解かれ、光が戻ると同時に道行く人々も姿を現してていった。

「やったね、リリンちゃん！」

「うん！」

「2人とも、お疲れ〜。」

「雛子もサポートお疲れ様。」

「千歳ちゃんこそ、陽動ありがとう。」

「おかしいな？ウチも一緒に戦ってたはずやけど。」

「かなめちゃんも、ありがとう！」

「くう〜、やつぱり蛍はええ子やな〜。」

「はわわわ……。」

蛍と要、雛子と千歳は、変身を解くと他愛のない雑談に花を咲かせる。そんな4人の姿を横で見ながら、リリンは空に広がる陽光を見上げる。

暗闇を切り開き、今日も世界から光を取り戻すことが出来たことを、1人ひっそりと喜ぶのだった。

第27話・Aパート

それぞれの時間！それぞれの夏休み！

8月を迎えたある日の朝、蛭は商店街へと出かけるための身支度をしていた。

「ほたる、ほたる！早く街にいこっ！」

「はいはい、もうすこしまっててね。」

自分よりも早くも身支度を終えたリリンが急かしてくるのを横に、蛭は鏡の前で最後の確認をする。

寝ぐせで崩れている様子は無し。愛用のヘアピンの位置もズレていない。

よし、と蛭は手提げバッグを手に取る。

「チエリーちゃん、おいで。」

名前を呼ぶと、チエリーは蛭の持つバッグの側面へと向かう。

この暑い夏の時期、鞆の中にあるのは流石に辛いと言うチエリーの要望に応えるために、蛭はチエリーを鞆のアクセサリーとして誤魔化せないかと思いついたのだ。

そこで作られたのが、バッグ側面に縫われた妖精用の椅子である。

木綿性でリュックサックを背負い込む要領で両側の輪に腕を通し、椅子に腰を掛けることができる。

「さすが蛭。椅子の大きさも座り心地もちょうどいいわ。」

「そつ、そう？よかった、気に入ってくれて。」

チエリーの褒め言葉に、蛭は顔を赤くして俯く。

最後にもう一度、忘れ物がないか確かめ、リリンと一緒に階段を下りて家を出てから鍵を閉める。

「さつ、リリンちゃん。いこつ。」

「うんー！」

2人で手を繋ぎ、チエリーも合わせて3人で商店街へと出かけるのだった。

・
・
・

リリンと一緒に暮らす様になってから1週間ほどが経ち、蛭は少しずつ彼女のことを理解し始めた。

これまでにリリンは蛍が気にも留めていないことに疑問を抱き訊ねてきた一方で、道路交通法についてはちゃんと理解しており、歩道から逸れたり、信号を無視したことは今までに一度もない。

買い物をする時にはお金を払うことも知っており、ある程度の社会的な常識は身に付けているようだ。

一緒に暮らし始めてからはほぼ四六時中行動を共にしているし、今では同じ部屋で就寝も共にしている。

だからこそわかることだが、リリンは今日まで特に勉強をしている様子を見せたことがないので、恐らくダークネスの行動隊長リリスとして活動するにあたって身に付けた知識なのだろう。

・・・要するにキュアシャインである自分に近づくために得た知識なのだろうが、当時のリリスの憎悪と執念が、憎き相手だった自分と一緒に暮らすための土台として功を成したなんて、リリンは勿論、蛍にとっても思いもよらなかつたことだ。

この街に引越して来てから不思議な事続きであったが、本当に世の中どうなるものかわからないなど、蛍は若干13歳にして、人生の境地に辿りつきそうな思いである。

「ねえねえ、ほたる。

あのお店はなに？なんか色んなものが点々としてるよ。」

そんなことを考えている内に早速リリンが『雑貨店』に興味を示してきた。

「あれは雑貨店っていつて、いろんな日用品が買えるところだよ。」

生活に必要なものは、あそこでひととおり買うことができるんだ。」

「え？それじゃあ毎日あそこで買いたい物をすればいいんじゃないの？」

「それでも、食料品をかうならスーパーで買った方がおいしいし、おようふくとかも、服屋さんで買ったほうが品質もデザインもいいものがおおいよ。その分おかねはかかるけど。」

「えと・・・広く浅く？大は小を兼ねるお店？」

「さいごのはちよつとちがうかもだけど、そんなかんじ。」

覚えたての言葉をとにかく使い、正しい用法を身に付けようとするのも、最近のリリンに見られる傾向である。

リリンは目に留まるもの全てに対して、興味深く観察しては質問をして、答えられる範囲で蛭が答える。

それがここ最近、蛭とリリンの間にできたコミュニケーションだ。

余談だが、蛭では答えられないものは雛子に連絡を取って教えてもらっているため、リリンにとって雛子は完全に先生のような立ち位置になってしまった。

雛子に聞けばなんでも答えが返ってくると思っっている節すらあり、でも実際、今まで

答えられなかったものはないのだから、雛子の知識の広さには驚くばかりである。

閑話休題。

要するにリリンはとにかく探求心と知識欲が旺盛なのである。

それは無知ゆえの反動もあるのだが、同時に彼女がまだみんなと『当たり前』を共有できていないことに負い目を感じているところもあるのだ。

だからこそ1秒でも早く、この世界の『当たり前』をマスターすることを望んでいる。虫もリリンのその望みを叶えたいため、協力することは惜しまないのだが……。

「ねえねえほたる！あのお店はなに!？」

当のリリンはそんな負い目以上に、純粋な知的好奇心に突き動かされるままに街中を走り回る。

ダークネスから解放されて自由を得ることができたからか、人として生きていけることへの喜びからか、はたまたその両方か、とにかくリリンの辞書には自制心なんて謙虚な言葉が存在しない。

「あつ！本屋だ！」

たくさんの雑誌とか、小説とか、漫画……だっけ？

とかが売ってるお店だよね!？」

思ったことや感じたことを直球そのまま伝えてくるだけに収まらず行動でも全力で

表現していく。

そうやって興味を抱いた方向へ所狭しと走っては回り、走っては回り……。

「ねえねえほたる！……あれ？」

「ぜえ……ぜえ……。」

リリンちゃん……まって……。」

ついに蛍の方が先に力尽きてしまった。

膝に手を置き呼吸を整えるこちらの様子を見たリリンは、ハツとなって急いで駆け寄って来る。

「ほたる！ごめんね！」

あたし……自分のことばかりで……。」

先ほどまでの笑顔はどこへやら、すっかり意気消沈してしまったりリリンは申し訳なきような顔を浮かべて蛍に手を差し出す。

そんなリリンを見て、蛍は微笑みながら手を取り、その手を引く。

「リリンちゃんはいま、幸せなんだよね？」

「ほたる？」

「とても幸せで、まいにちがたのしいんだよね？」

だったら、リリンちゃんはじぶんの心のままに、動いていいんだよ？」

「あたしの・・・心？」

「うん！だいじょうぶ！」

リリンちゃんがどこへ行くとしても、わたしがこの手をぜったいにはなさいから！」

蛍はリリンの手を力強く握る。

もう、2度とこの子の手を放したくない。

あの暗い闇の中で彼女の手を取った時、そう心に決めたのだから。

そして彼女が今幸せを求めて彷徨うと言うのなら、自分もそれを追い求めていきたい。

リリンの隣で、この先もずっと・・・。

「ほたる・・・うん!!」

リリンもまた、蛍の手を強く握り返す。

「じゃあ、次はあのお店をみにいこっ!!」

蛍が笑顔でリリンに呼びかけると、彼女も無邪気な笑顔で返す。

互いに離さないと強く手を握り合い、蛍とリリンは商店街を駆け回る。

そんな2人の甘い空気を超越しから見ていたチエリーは、人知れずそれはそれは小さなため息を吐くのだった。

・
・
・

リリンが蛍と手を繋ぎ街を回っていると、こちらに駆け寄って来る一人の少女が現れた。

「あれ？リリンちゃん、あの子……。」

「おーい!!」

ほたるおねえちゃん！リリンおねえちゃん！」

「あつ……ミカちゃん！」

「っ!?!」

蛍が少女の名前を呼び、リリンも思い出す。

こちらに手を振り駆け寄ってくるその子は、かつてリリンがリリスとして行動していた時、ソルダークを創り出すために絶望の闇へと閉じこめた少女、ミカだった。

「ミカちゃん、おひさしぶりー！」

「うん！」

きょうはね、おかあさんといっしょに、まちまでおでかけするの!!」

そう嬉しそうに話すミカの後を、1人の女性が早足で追いつく。

「こちら、ミカ。」

突然走り出したら危ないでしょ……って、その子たちは？」

「あつ、おかあさん！」

「このおねえちゃんたちがね！まえにはなしてた、ほたるおねえちゃんと、リリンおねえちゃんだよ！」

「あら、あなたたちが？」

少し驚いた様子を見せながら、ミカの母はこちらに向かって深々とお辞儀する。

「初めまして。ミカの母です。」

「この前はミカがお世話になりました。」

「いつ、いいえ……。」

「えと……はつ、はじめまして！」

「いちのせ……ほたるです！」

初対面のためか、螢はどこかおどおどした様子で挨拶を返す。

螢は良く人見知りをする、と本人から聞かされたことはあるが、自分や友達の前ではそう言った面を見せなかったので、今のような姿を見るのは実は初めてである。

「ほら、リリンもちゃんと挨拶しなきゃ。」

そんな蛍の様子を興味深く見ていると、チェリーがミカたちに気付かれないように小声で注意してきた。

我に返ったリリンは蛍に倣ってお辞儀をする。

「はっ、はじめまして、リリンって言います。」

「あの時はこの子のプレゼント選びを手伝ってくれてありがとう。」

とても素敵な一輪の花だったわ。」

「いっ……いえ、そんな……。」

蛍は困惑しながらも照れ笑いする。喜びが隠しきれないようだ。

一方、そんな蛍とは対照的にリリンの心境は複雑だった。

あの時のことをよく覚えている。

キュアシャインの情報を得ようとするこの世界に来たが上手く事を運べず、苛立ちを募らせていたところで偶然見つけたミカの、母を想う気持ちから生じた寂しさを利用してソルダークを創り出してしまった。

そして戦闘の最中、ミカが母の日のプレゼントとして得た一輪の花を、苛立ちのあまり引き裂こうとした。

そんな自分にはお礼を言われる資格などあるはずもなく、むしろ謝罪しなければなら

ない側だ。

だが当然、ミカもミカの母もそんなことは知らないし、話す事もできない。

話したところで信じてもらえないだろうが、事の真相を伝えることができない以上、自分には謝罪することすら許されないのだ。

(気持ち素直に伝えることが出来ないって、こんなに辛い事なんだ・・・)

礼の言葉を素直に受け取ることも、素直に謝ることもできないリリンは、思いをぶつける対象を見失い、心の在り処を彷徨わせる。

「あゝ、おねえちゃんたち、てをつないでるなんてラブラブであゝ。」

「ええっ!？」

「こら、ミカ。」

そんなリリンの気持ちを知ってか知らずか、ミカがニヤニヤ笑いながらリリンたちのことをからかってきた。

だが蛭が赤面して慌てる反面、リリンは言葉の意味が理解できずに小首を傾げる。

「もう、ごめんさいね。」

今はこの子の幼稚園も夏休みで、今日はたまたま仕事がお休みだったから、この子と一緒に過ごせる時間を少しでも多く取ろうと思ったの。

ずっと寂しい思いをさせてたみたいだし、たまにはお母さんらしいところを見せな

きやつて。」

ミカの母は、ミカの髪を優しく撫でる。

ミカはくすぐったそうに笑いながら、母の手を強く握る。

「ミカはいーこだから、さみしくなんてなかったもん。」

その言葉が強がりだと言うことは、リリンが一番良く知っている。

なぜならあの時、ミカの絶望となった思いは、母に見捨てられたのではないかと言う不安だったからだ。

でも彼女は、蛍のおかげでその絶望から解放され、こうして母と幸せな時間を過ごしている。

蛍たちの、プリキュアが戦い守って来たものを、リリンは今日の当たりになっている。

(これが・・・あたしがこれからすべきこと・・・)

時間は戻らない。

過ぎ去った過去を変えることが出来ないのであればせめて、これからを守り続けよう。

かつて自分が傷つけた少女を見て、リリンは改めてプリキュアとして戦うことを心に誓うのだった。

.
.
.

要がベリイと2人で暇を潰そうと商店街へ立ち寄ってみると、何と偶然にも雛子とレモン、そして千歳と遭遇するのだった。

「しつかし、ここで会うなんて奇遇やな。」

「家に引き籠つて勉強ばかりしているのもどうかと思つて、気分転換に来てみたのよ。」

「要は宿題の方は進んでるの?」

「うぐ……ウツ、ウチはほら、来週試合があるから?」

夏休みと言えば、多くの運動部に全国大会が開かれる時期である。

要が所属する女子バスケットボールも例外ではなく、その地区予選が来週に控えている。

そのため夢ノ宮中学女子バスケット部は、夏休みの真つ只中でも絶賛部活動中のはずだが、いつもなら午前にある部活が、今日だけは先輩たちの都合で午後にずらされたのだ。神の見えざる手すら感じさせるこの偶然の産物によつて揃つた一同は、噴水公園の屋台通りに設置されているテーブルを囲み、軽食を取りながら談笑していた。

後ろの原っぱでは、小さな子供たちが夏の暑さにも負けずに鬼ごっこで遊んでいる。そんな賑やかな声をBGMにパラソルの木陰でゆったりとしながら、要は駄菓子屋で購入したドロップを口に放り込む。

「夏休み中も部活があるなんて、大変ね。」

「まあウチにとつては趣味みたいなもんやし、それに日がな一日家に引き籠ってる方がウチには辛いよ。」

「それもそうね。」

「このスポーツバカ。」

雛子の悪口はいつも通りに袖に流しながらも内心、お前だつて今回は誘ったわけでもないのに外出してるやん、なんて思いながら要は来週へと思考を巡らせる。

部長である薫と菜々子、顧問である夕美はこの1週間の練習から最終的なスターティングメンバーを選定するそうだ。

今年こそは、その座を勝ち取りたい。要は寛ぎながらも午後の部活動に向けて闘志を燃やす。

「雛子、たこ焼き買ってきたよ。」

「お帰り、レミンちゃん。」

そんな要の緊張も知らずに、レミンが呑気な声でたこ焼きを手席まで戻ってきた。

ふとたこ焼き屋の方を見ると、屋台のおっちゃんが強面の表情を崩してこちらに手を振っている。

要は幼いころからおっちゃんとは顔なじみなので、あの人が見た目ほど怖い人ではないことは知っているが、それでも不愛想な表情をあそこまで綻ばせるあたり、レミンはすっかりあの屋台の常連になっているようだ。

「要、冷たい飲み物買ってきたぞ。」

「おっ、ベル、サンキュー。」

「雛子ちゃんと姫様もどうぞ。あとレミンも」

「ありがとう、ベルさん。」

「ありがとう。」

「あー、レミンだけついでだー。」

全員分の飲み物を購入していたベルが戻り、各々が飲み物を手に運ぶ中、要はふと気付いたことを口にする。

「リン子さんは今日も仕事？」

「お盆まで休みはないって。要のところのお父様もそうじゃないの？」

「まあ、そうだけどさ。」

「そんなに気にしなくても、もう慣れたものよ。」

そっか、とだけそっけなく答えながらも、要は千歳が少しもの寂し気な表情を浮かべたのを見逃さなかった。

子どもは夏休みでも、社会人たる大人は今日も仕事。

自分たちのパートナーであるベルとレミン、今や蛭とリリンの2人のパートナーとなったチェリーと違い、この世界で社会人としての籍を持つリリン子には平日に一緒にいられる時間は少ない。

それはリリン子が千歳のパートナーとして、この世界にはいない親の代わりとして千歳を養うために選んだ道ではあるのだが、時折自分たちの様子を見てはどこか侘しい表情を浮かべる千歳を見てしまうと、気にせずにはいられなくなるのだ。

「あれ・・・？」

おーい！かなめちゃん！ひなこちゃん！ちとせちゃん！

するとどこからか、こちらの名前を元気いっばいに呼ぶ声が聞こえた。

聞き覚えのあるだがもしかして・・・と思いながら声のする方へと振り向くと。

「あれ？蛭！それにリリンも！」

こちらが名前を呼ぶと、蛭は満面の笑顔を浮かべながらリリンと手を繋ぎ駆け寄ってきた。

肩から下げているバッグにチェリーの姿も確認できる。

そしておあつらえ向きと言わんばかりにこちらにはちようど2席が空いている。

神様の気まぐれもここまで来れば大安売りである。

「奇遇ね、蛍ちゃん。リリンちゃん。」

「あなたたちもこつちに来てたんだ。」

「うん！リリンちゃんを商店街に案内していたの！」

底抜けに明るい声が、僅かに訪れた寂し気な雰囲気完全に吹き飛ばしてくれるのだった。

・
・
・

「かなめちゃんは、来週に試合があるんだっけ？」

「そつ。だから今日も午後から練習。」

「がんばってね！試合にはおうえんにいけないけど・・・。」

「蛍は、来週に実家に帰るんだっけ？」

「うん、おばーちゃんに、リリンちゃんのこと紹介するんだ！」

「つてことは、リリンちゃんも一緒に行くのね。」

「うん。あたし、夢ノ宮市から出たことないから、どんなところか楽しみ。」

「えへへ、やまばかりで、なにもない田舎だけだね。」

言葉こそ謙遜してるが、楽しみと語るリリンの言葉に螢は嬉しそうにはにかんでいた。

完全に嫁を親族に紹介するノリだが敢えてそこにツツコミをいれず、要は内心ため息を吐く。

「あれ？ちとせ、そのアイスクリーム、どこで売つたの？」

するとリリンが千歳の持つアイスクリームに気付き、食い気味に話しかけてきた。

「あっちにある屋台よ。ほら、あそこ。」

「ほたる、あたしアイス食べたい。」

「え？でもでかける前はクレープがたべたいって。」

「やつぱりアイスがいい！ほたる、買いにいこ！」

言うや否や、リリンは勢いよく席を立ちアイス屋に直行する。

「ああ、まってリリンちゃん！どっちかーっただけだからね！」

螢も財布を片手に、彼女の後を追いかけていく。

「ふふっ、リリンちゃんと螢ちゃん、すっかり打ち解け合えたようね。」

「そうだね。」

仲良く手を繋いでアイスクリームの屋台へと向かう2人の姿を見ながら、雛子と千歳は感慨深い笑みを浮かべる。

「……ふっ、そう言っていられるのも今のうちよ……。」

が、その一方でチェリーはテーブルの上に俯き身体を倒しながら、どこか疲れ切った、あるいはこの世の真理を悟った菩薩のような表情を浮かべて嘆息する。

「……なにかあつたのチェリー?」

心当たりありまくりながらも、要は一応、確認を兼ねてチェリーに尋ねる。

「私もさ、最初はね、心の底から嬉しく思ったよ?」

蛭とリリン、2人が幸せになれて良かったねって。

でもね……。」

そう言いながらチェリーは一転、水を失った魚の様な目で視線を反らす。

「あの甘ったるい空気を毎日近くで当て続けられるところ……流石に胃に来るよ?」

「ああ……。」

やっぱり、と言わんばかりのため息がそこかしこから漏れてくる。

そう言えば、蛭はこれまでもリリンと一緒にいるときは終始幸せ満開な雰囲気から放っていたし、リリンと過ごした時間を語るときも非常に甘い声を出していた。

そしてリリンがリリースだったところは、蛍もといキュアシャインへの憎しみをミミリも隠さずに剥き出しにしていた。

そんな2人の共通点に、要は今になって気づく。

そう、蛍もリリンも自分の心を抑制するのが苦手で、感情を全力で表現するタイプなのだ。

そんな2人が互いの深い好き合いっぷりを全力で表現したらどうなるか……。

その答えは今のチェリーの姿が物語っている。

「蛍の作るお菓子、好きだったけどしばらく甘いものは控えようかなあ……。」

そしてプロ級の腕前を誇る蛍の作るお菓子を誰よりも多く食べてきたであろうチェリーをして、ここまで言わせるのだから、その光景は恐るべき破壊力であることは想像に難くない。

「みんなくおまたせ〜。」

そんなチェリーの心労も知らず蛍は明るい声で、リリンは手にあま〜いお菓子を持ちながら、2人揃ってそれ以上にあま〜い空気を纏ってこちらに戻ってくるのだった。

・
・
・

雛子が席に戻ったりリンに目を向けてみると、彼女はゆつくりと味わうようにアイスクリームを少しずつ舐めながら満足そうに微笑んでいた。可愛い。

「でもそっか・・・しばらくみんなとはあえなくなるんだね・・・。」

一方で蛭は、試合までの練習で忙しいと言う要の言葉を思い出し、しょんぼりとしていた。可愛い。

「蛭、この街で夏祭りがあるのは知ってる?」

「え? おまつりがあるの?」

すると要が蛭を励まそうと、夏祭りの話を持ち掛けてきた。

蛭は一転、嬉しそうな表情と共に顔をあげる。可愛い。

「そつ、再来週やったかな?」

その頃にはウチは部活終わってるし、皆の都合が合うようなら・・・。」

「いくいく! わたし、ぜったいにいく!!」

要の言葉を遮り、蛭が目キラキラさせながら大きく身を乗り出して来た。可愛い。

「わつ、わかつた。わかつたから蛭、落ち着いて。」

「あはつ、かえつたらおかーさんに、ゆかたの準備してもらおう!」

あとリリンちゃんの分も準備してもらわないと！」

久しぶりにテンションを振り切った蛍を要が宥めっていると、ふと蛍が首を傾げながらこちらを見る。

「みんなも、お祭りにはゆかたって着ていくの？」

「「え？」」

蛍の突然の質問に雛子も要も首を傾げるが、恐らく蛍の中では友達と一緒に祭に行く
|| みんな浴衣を着ていくと言う漫画やアニメによくあるイメージが定着しているの
だろう。

だが実際にはみんながみんな、浴衣を着ていくわけでもない。

普段着と異なり浴衣は着付けが難しく、何より値段が張るのでオシャレや風情に拘り
のない人は着て行かない人も多いのだ。

「いやあウチは着てかないな。あれめんどくさいし窮屈やし。」

案の定、オシャレとは無縁な悪友は首を横に振るい、蛍が少しだけシユンとなったの
が見えた。可愛い。

「私は毎年着ているわ。」

お祭りくらいじゃないと着る機会がないものね。」

そう言うのと、蛍は一転、少し嬉しそうに顔をあげた。可愛い。

「千歳のところは どうするの?」

「私がいらないうつて言っても、どうせリン子が勝手に準備するわよ。」

そう言いながら、千歳はやれやれと肩をすくめる。

確かにリン子の性格を鑑みれば、異世界とは言え姫である千歳には、祭りに相応しい格好をさせてくるだろう。

「じゃあ要も浴衣着て行かないとね。」

「え?なんで?」

「みんなが浴衣着ていくんだもの。」

「1人だけ普段着だと返って目立つわよ?」

「いや、別にウチは……。」

そう言いかけながら、要は蛍の方をチラリと見た。

先ほど蛍が要に見せた表情から察するに、彼女はみんなで華やかな浴衣を着て、祭りを見て回りたいと言う願望を実現したいのだろう。

それは要にも十分に伝わっていたようで、そして要に限らずここにいる全員が蛍に対してはやたらと弱いので。

「はく仕方ない。オカンに聞いて出してもらおうわ。」

仕方なく、と言った様子で要の方から折れるのだった。

「え？ほんとうにいいの!？」

「浴衣もつとらんわけじゃないし、祭りの間くらいなら着たげるよ。」

「ありがとう！かなめちゃん!!」

その時の蛍の喜びようと来たらまあ、満面の笑顔の後ろに輝かしい光が放たれているかのようだった。可愛い。

そんな笑顔を間近で受けた要は、気恥ずかしそうに眉を動かしながら少し身を引く。

そして照れ隠しに飴玉を口の中に放り込もうとしたその時。

「あっ。」

動揺で手元が狂ってしまったのか、放り投げた飴は口元を掠めてアスファルトの上に落ちてしまった。

「あっ、ごめんねかなめちゃん。」

ようやく元のテンションに戻った蛍が申し訳なさそうに謝罪するが、要は特に気にした様子もなく飴玉を拾い上げる。

「大丈夫、大丈夫。このくらい。」

そして服の裾で軽くはらった後、再び口の中に放り込んだのだ。

「あっ!」

落としたものを拾い食いする。

これには責任を感じていた蛍も流石に絶句する。

「かなめ、落としたもの食べちゃダメだって、ほたるが言ってたよ。」

そして蛍の教育がちゃんと行き届いているリリンから、至極当然な常識を問われる。

「ふふん、リリンはまだ知らんだろうけど、この世界には3秒ルールって言うありがたいルールがあるんやで？」

「3秒ルール？」

「そう、例えば落とした食べ物でも3秒以内だったらバイ菌が移らないから食べても大丈夫！」

「え？ そうなの？」

「わわっ！ かなめちゃん!!」

3秒ルールとは、食べ物や粗末にしない殊勝な人……ではなく落としたものでも平然と口に入れられる卑しい人が自分を正当化するために使う免罪符であり、科学的に立証されていないどころかむしろ真逆の答えが出ている所謂『俺ルール』の代表格である。

当然、これを使う側も一種のジョークとして使っているのだが、この世界に来て間もないリリンにはまだ嘘か本当かを区別することが出来ず、みんなの言うことは全て真実だと受け止めてしまうきらいがある。

現に今も、要の言うことを真に受けてしまったようで、先ほどまで要に対して申し訳

なきそうにしていた蛍が大慌てで止めに入った。可愛い。

「リリン、前にも言ったけど、要の言うことを真に受けてはダメよ。」

「はははっ、まあ飴玉くらいなら大丈夫……ってリリン！アイス！」

「え？」

すると話すのに夢中であつたこと、美味しさの余りゆつくりと味わつて食べていたこと、何より夏の炎天下でアイスを食べていたことが祟つて、

「あっ！」

リリンの持つアイスが溶けてアスファルトの上に落ちてしまったのだ。

「ごめんねリリンちゃん！」

外だとアイスはとけやすいつておしえてなか……。」

だが蛍が謝りかけたその時、なんとリリンは地面に落ちたアイスを手で拾い上げる。

「え……？」

リリンの突然の行動に絶句する蛍だが、リリンは構わず拾い上げたアイスを口元まで運び

「だいじょうぶだよ。まだ3秒たつてないから、食べられ……。」

「リリンちゃんだめえええ!!」

そして口に入れようとした瞬間、千歳が素早くリリンの手を掴み、口元から遠ざけた。

「リリン！こつち来なさい！」

「え？ちとせ？」

そしてそのままリリンの手を強引に引き、近くにある給水場まで引つ張つていく。

「まつ、まつてちとせ！まだ3秒たつてない！」

「だから要の言うことを真に受けちゃダメって言ったでしょ!!」

「いたつ、いたいよちとせ！3秒ルール！3秒ルール！」

3秒ルールを連呼しながら講義するリリンと、聞く耳持たずに無理やり引き連れていく千歳の様子を見送りながら、要は非常に申し訳なさそうな表情で蛍の方を見る。

「いや、ホントすみませんでした！」

そしてそのまま両手を合わせ、顔を勢いよく下げながら蛍に謝罪する。

「も〜…こんかいは、わたしがかなめちゃんのアメおとしちゃったのが原因だけど、リリンちゃんはまだウソかホントかわかんないんだから、きをつけてね！」

「はい、すみません。」

リリンが絡むことだからか珍しく蛍が声を大きくして怒るが、怒ってる姿も可愛い。「それにしても、リリンちゃんって本当に食べるの好きなんだね。」

ここで雛子は兼ねてより思っていたことを蛍に聞いてみる。

今日ここへ来たのは元々クレープを食べることが目的だったみたいだし、以前海に遊

びに行った時も焼きそばやかき氷をとても美味しそうに食べており、蛭にメニューを全
て作って欲しいとまで頼んだほどだ。

これらの情報から推察するに、リリンはかなり食欲旺盛のようだ。

「えつと、こっちにきてはじめてごはんたべて、おいしいって思えたことがとてもうれし
かったんだって。」

「そっか……。」

その蛭の言葉に、雛子も要もリリンの方を見る。

千歳がリリンの手についたアイスを水場で綺麗に洗い落とし、リリンがそれに対して
拗ねているところだった。

そんなごく普通の日常の風景に、雛子も要も微笑む。

リリンがリリスとしてダークネスにいたころ、どのような日々を送っていたかはわか
らない。

だが少なくとも彼女は、食事を美味しいと思える感性を抱いていなかったようだ。

もしかしたら、自分たちが当たり前前のように過ごしていることを、何も知らずに過ご
していたのかもしれない。

それを思えば、こうしてリリンが日常を満喫できていることは、彼女にとって本当に
奇跡なのかもしれない。

「でもそれじゃあ、放っておいたらリリン太っちゃうかもしれんな。」

少ししんみりとした空気を感じ取ったのか、要が明るい口調で茶化してきた。

「だいじようぶ！」

リリンちゃんの栄養管理は、わたしがちゃんとやってるから！」

すると蛭が珍しく、本当に珍しく、得意げな笑顔で胸に手を当てながら堂々と宣言した。可愛い。

「・・・ほお。」

そんな蛭の様子を、要が目を細めてニヤリと笑みを浮かべながら、わざとらしさ全開の半信半疑な反応を示す。

「え？え？」

そんな反応は予想だになかったのか、蛭は途端に慌てた様子で要とこちらの顔を交互に伺う。可愛い。

「わっ、わたし！毎日ごはんつくってるって、言ったよね!？」

栄養のバランスだってちゃんとかんがえてつくってるんだから!!」

そしてまだ何も言っていないのに1人で弁解し始めた。可愛い。

「いや〜ウチのイメージだと蛭は毎日お菓子作って毎日食べてるイメージあったからね。」

「まいにちたべてるけど、まいにち作ってないよ！」

「あつ、食べてはいるんだ。」

「でつ、でもそれだつてちゃんとカロリーけいさんしてるんだから！」

蛭はまるでダイエツトに失敗した時の言い訳のような言葉を言い出したものだから、要が新しいからかいかいの的を得たかのような嫌味な笑みを浮かべる。

「ふ〜ん、ま〜蛭のお菓子美味しいもんね〜。」

「食べ過ぎたくなる気持ちもわかるわかる。」

「も〜・ぜんぜん信じてないでしょ!!」

褒め言葉も織り交ぜながらもからからかいモードに入った要に対して、蛭が久しぶりに両手をブンブン振り回しながら抗議する。可愛い。

そんなこんなの中に、千歳とリリンが戻ってきたが、リリンの手には新しいアイス握られていた。

「あれ？リリンちゃん、そのアイスは？」

「アイス洗い流しちやつたらすつかりへそを曲げちやつてね。」

「つい甘やかしちゃった。」

そうは言いながらも悪びれた様子を見せずに苦笑する。

「リリン、今度は溶けない内に食べちゃいなさいよ。」

「うん。」

リリンは頷きながらも幸せそうにアイスを舐める。可愛い。

「ごめんね、ちとせちゃん。」

リリンちゃんには、ともだちでもお金はかんたんに借りちやダメだって、あとでちゃんといっておくね。」

そう言いながら蛍は鞆から財布を取り出す。

「別にいいわよ。これくらい。」

「ううん、おかねはだいいじだもん。」

リリンちゃんがこの世界でふつうに生活していくためにも、おかねのたいせつさはちゃんと教えなきや。」

若干13歳にして家事全般を担う蛍だからこそ、日常生活におけるお金の大切は身に染みているのだろう。

例えばそれが親しい友達同士のものであろうと、蛍は貸しをしっかりと返すつもりなのだ。

「わかったわ。ありがとう蛍。」

そして日頃母親代わりであるリン子が粉骨碎身で生活費を稼いでいることを誰よりも知る千歳にも、蛍とはまた違った視点でお金の大切さを理解している。

だから蛍の思いを理解できるのだらう。

千歳は蛍から小銭を受け取り、財布へとしまい込む。

「ふわっ……ちとせちゃん？」

そして蛍の頭を優しく撫でたのだ。

「蛍はきつと、良いお姉ちゃんになれるよ。」

「もう……ちとせちゃん。わたし、おないどしなんだから……。」

そう反論するも、頭を撫でられる蛍も決して悪い気ではないようだ。

次第に頬が綻び始め、千歳の手に身を委ねていく。

「ふわっ。」

「……えへへ。」

そして恥ずかしそうに顔を赤くしながらも、蛍は嬉しそうに微笑む。

「……差別やろ。」

そんな様子を要が面白くなさそうな表情で見る。

「人徳の差よ。」

そして雛子が情け容赦ないツツコミを入れ、要は千歳を相手に、人望に続き人徳まで負けるのだった。

・
・
・

永久の闇の世界。

倉庫の前でアモンを向かえたのは、かつてフェアリーキングダムでキュアブレイズによつて倒されたはずの行動隊長、ハルファスとマルファスだった。

「身体の具合はどうだい？」

アモンが2人に尋ねる。

キュアブレイズの浄化技を受けて絶望の闇を失った2人は、この永久の闇の世界で治療を受けていたのだ。

「何も問題ありません。絶望の闇もやがて元に戻るでしょう。」

執事風の老齢な男性ハルファスがそう答えるが、その『やがて』と言う単語にアモンはフードに隠れた眉を擡める。

「やがてか……。それはあと『何百年』先になるのかな？」

「さあ？我らには刻の概念がありませんので、お答えしようがありません。」

メイド風の妙齢な女性マルファスが、淡白な口調でそう答える。

だが浄化技を受けて力の大半を消失したとなれば、少なくとも此度の戦いで回復が間に合うことはないだろう。

つまり彼らはもう、戦力として数えることは出来ない。

にも関わらず彼らは冷静・・・否、無感情だ。

アンドラスの調整を受けた彼らは、行動隊長の模範とも言えるが、それ故に自己がない。

ただあるがままの事実を受け入れ袖に流すだけの彼らの態度を、アモンはどこか苛立った眼で睨み付ける。

「まあいい。早く『彼女』の元まで案内してくれ。」

アモンが苛立ちを抑え、ここへ来た本来の目的に移ろうとしたその時。

「その必要はない。下がれ、ハルフアス、マルファス。」

倉庫の中、暗闇から女性の声が聞こえてきた。

ハルフアスとマルファスが道を開けると、アモンと同じ黒のローブに身を包んだ女性が姿を見せた。

外見は30代後半、背丈は女性としては高めの180cm超え。

薄がかった紫の長髪に、蛇のような鋭い目付き。

「久しいな、『レヴィア』。」

レヴィア。

アモンと同じダークネスの司令官にして、このダークネスの『本国』たる『永久の闇の世界』の守人。

そしてアモンがかつてモニター越しで通信をしていた女性、その人だ。

「アモン、貴様よくもおめおめと戻って来れたな。」

「『何百年ぶり』の再会だと言うのに、随分と冷たいじゃないか。」

「ふざけているのか？」

貴様が犯した失態の数々、忘れたとは言わせないぞ。」

アモンの冗談も通じず、レヴィは怒気を孕んだ口調で非難する。

「忘れてなどはいないさ。」

その件で君に頼みたいことがあってここへ来たのだからな。」

「頼みだど？」

「単刀直入に言おう。君『たち』の力を貸してほしい。」

ここでアモンはようやくやく本題へと入ったが、その言葉を聞いたレヴィアは、侮蔑の眼差しを向けながら一笑する。

「はっ、頼みだど？」

恥知らずめ。貴様がものを頼める立場だと思っっているのか？」

「ああ、思っていないさ。」

だからこそ恥を承知でここまで来たのだ!!」

レヴィアの言葉にアモンは突然、声を荒げて反論する。

「全てが私の失態であることは認める！」

非難も侮辱も後でいくらでも聞こう！

だが今はそれどころではないのだ！

このままでは取り返しのことになるかもしれないのだぞ！」

そう言いながら、アモンは何を都合の良いことをと自嘲する。

その取り返しのことかない事態を引き起こしたのは他ならぬ自分だと言うのに、こちら

の失態の償いを彼女たちに委ねようとしているのだから。

だが現実的な問題として、事をこのまま放置しておくわけにはいかない。

「我らに刻はない。」

此度の光の戦士がどれだけ強かろうと所詮は限りある人。

敵わぬと言うのなら、また次の機を見計らえば・・・。」

「君だつてわかっているだろう。」

『リリス』があちらについたことの意味が。」

アモンはレヴィアの言葉を遮る。

「ダークネスの本国であるこの世界は、これまでのプリキュアには知られたことがない。」

「なぜならこれまでの戦いは、こちらから他の世界へと侵略し、その世界で覚醒したプリキュアと戦うだけだったからだ。」

「だが今回は状況がこれまでと明らかに異なる。」

「行動隊長であつたりリスが寝返つたからだ。」

「それはやつらに、この世界の存在を知られてしまうことを意味する。」

「そう、これまで侵略する側だった自分たちが、侵略を受ける側になるのだ。」

「それに加えてキュアシャインが起こして来た数々の奇跡。」

「あり得ないと思われていたことを実現させてしまうほどの希望の力。」

「やつの存在がダークネスそのものを終わらせる可能性さえ否定できなくなった今、ダークネスの未曾有の危機であり、もはやアモンにはどうすることもできない事態にまで発展しているのだ。」

「貴様の失態を我らに押し付けるか。随分なご身分だな。」

「事の顛末を熟知しているレヴィアから嫌味を言われるが、アモンは震える拳を抑えたまま彼女を見据える。」

「……貴様、以前言っていたな。」

我らの存在を終わらせるものが現れると。」

「ああ。」

「あの小娘が、キュアシャインがそれを成すと?」

「その可能性を否定することは、今の私には出来ない。」

アモンが迷うことなくそう言うと、レヴィアの怒気を孕んだ眼差しが呆れたものになり、やがてため息を一つ落とす。

「いいだろう。貴様がそこまで言うのなら、力を貸してやる。」

だが私は『盾』としてこの世界を守る使命がある。

本当にダークネスの終わらせる者が現れたのであれば尚の事、私がここを動くわけにはいかないだろう。」

「では……。」

アモンが言葉を言い終わるよりも先に、レヴィアがその答えを述べる。

『剣』の方に命じておこう。

何、所詮やつは暇な『破壊者』だ。

此度のプリキュアに手応えがあると聞けば、揚々と駆けつけてくれるだろう。」

「すまない、恩に着る。」

アモンが礼を述べながら深々と頭を下げる。

気が付けば、2人の間に張りつめていた空気が無くなっていた。

「貴様はこれからどうするつもりだ？」

あいつが駆けつけるまでの間、プリキュアたちの相手をするのか？」

「いや、今しばらくはここに残るつもりだ。」

『やつ』の容態も気になるところだし、後のことはサブナックとダンタリアに任せてある。」

「行動隊長が全滅、と言うことにならなければいいがな。」

「あの2人なら心配は無用だ。」

勝てぬ勝負を挑むことも、素直に敗北を受け入れることもしないさ。」

そう言いながらアモンはハルフアスとマルファスに侮蔑の視線を送り、レヴィアはつまらなさそうに嘆息する。

「ところで、『あの子』はどこにいる？」

ここでアモンは、ふと思いついたようにレヴィアに問いかけるが、その質問にレヴィアは再び眉を顰める。

『『あの子』、だと？』

「ああ、失礼したよ。『あの方』は今どこにいる？」

「さあな。あの方は気まぐれだからな。」

今頃この世界のどこかを旅して回っているのではないか？」

闇に覆われた世界のどこかにいる者を気にかけてながら、アモンとレヴィアは永久の暗闇に覆われた空を見上げるのだった。

第27話・Bパート

夢ノ宮中学校女子バスケット部の地区大会当日。

先週末までの猛練習が実りついにスターティングメンバーに選ばれた要だったが、序盤こそ相手の舌を喰らせるような活躍を見せたが、少しずつ対応され始めたことで焦りを覚え始める。

「要！持ち続けないでボール回して！」

「わかってます！けど……。」

地区大会初戦の相手は、前年度の優勝チームであり、過去の全国大会において好成績を収めたこともある強豪校だ。

デイフェンスにおけるプレッシャーも凄まじく、要は得意の速さを武器としても攻めあぐねている。

「あつ！」

そして焦りから精彩を欠き、ついにボールを奪われてしまう。

「要！ポツとしてないで走れ！」

「はい！」

ターンを奪い返されてしまい、要は一瞬動揺してしまうが、部長の薫に一喝されすぐさま相手を追いかける。

ふと理沙の方を見てみると、複数の相手選手に抑え込まれ思うように動けない。

理沙個人の實力に敵う者は例え相手チームだろうといないが、バスケは5人で行うチームスポーツ。

1人の能力が優れているなら、複数人でかけて抑え込めばいい。

その分他の選手のマークが空くが、主戦力である理沙が實力を發揮できなければ、要たちの得点力は半減する。

そうやってジリジリと点差を付けられていき、更に中核を成す要が精彩を欠いた今、相手チームの雪崩れ込むような攻めを凌ぐことが出来ず、得点差は開く一方だった。

「……こりやあしよがないか。」

要たちの顧問兼監督を務める夕美が、審判と話をする。

やがて試合中断の笛が響き、夕美が要を手招きした。

「要、交代。」

「……はい。」

どこかやるせない様子の夕美の言葉を、要は静かに受け入れる。

ベンチに座ると、未来が優しく肩に手を置いてくれたが、要は震える拳を抑えること

が出来なかった。

結局、取られたリードを取り返すことも出来ないまま試合終了の笛が響き、要の初めての公式試合は、初戦敗退と言う苦い結果に終わるのだった。

・
・
・

試合が終わった後、薫と夕美も試合中の厳しさから一転、優しい口調で要に労いの言葉をかけてくれた。

試合の最中に柔らかな言葉をかけるのは、時としてチームの戦意を損なうこともあり、勝つために勝負をしているわけだから、調子の悪い選手を下げるのも当然の判断である。

そんな勝つためには冷静かつ客観的な判断を下さなければならぬところは、ポイントガードとして試合中にチームを牽引しなければならぬ要にとっても、見習わなければならないことだが、それでも試合を降板させられたというのは、遠回しに役立たずと言われたようなものである。

「そう気を落とすなつて。要は頑張つたよ。」

「そうそう、最初の方なんて絶対調だつたじゃない。」

会場となつていた市民体育館の広間で寛いでいた要は、未来と優花からそれぞれ励まし言葉の言葉を貰うが、未だにシヨックから立ち直り切れていない。

「別に落ち込んでなんか・・・。」

「先輩たちも先生も言つてたでしょ？」

初めての公式試合なんだから緊張して当然！

しかも相手が相手だしね。」

「要だつてロボットじゃないんだから、気持ちがいっぱいいっぱいになつて空回りしちゃうことだつてあるつて。」

「そうは言つてもさ・・・はあ。」

「やっぱり気にしてるじゃない。もう。」

そんな煮え切らない態度に優花が容赦ない言葉を投げるが、要としてはこの場で変に気を遣われるくらいなら、いつそこれくらい本音をぶつけてくれた方がまだマシである。

「あれ？あの人、さつきこつちの方を見たような。」

すると未来が誰かの視線に気付き、要も同じ方を見る。

そこには、長身金髪の青年の後ろ姿が映っていた。

「……もおく。」

あの後ろ姿は間違いなくベルである。

そして要はなぜ彼が背を向けているのかも理解した。

ベルはガールズトークの真っ只中に首を突っ込むような無粋な神経を持ち合わせてはいない。

大方自分のことを探してここまで来て、見つけたから声をかけようとしたものの、未
来と優花と一緒に会話しているところを見たので、気を遣って身を引こうとしたのだろ
う。

そうわかっていても、今回ほど要はベルの紳士と言う名のヘタレな態度が癩に触った
ことはなかった。

「ベル!!」

要が大声で声をかけると、ベルは足を止めて恐る恐るこちらを向く。

その表情にはありありと『バツが悪い』と『面倒くさい』が書かれていた。

あの様子ではあちらから来てくれないだろう。

要はベルのところまで駆け寄る。

「要の知り合い?」

後からついてきた未来が当然の疑問をぶつける。

「ひよつとして彼氏？」

優花が予想通りの疑問を、これまた予想通りニヤニヤした表情で聞いてくる。

「ただの友達だよ。千歳の親戚の人でベルって言うの。」

「ああ、この人が千歳の話してた外国人の親戚さんか。」

要の説明に未来が納得したように頷く。

いつか2人が対面することを見越して、千歳が自前に説明してくれていたのだろう。

千歳の気遣いに内心、感謝しながら要はベルに自己紹介をするように促す。

「初めまして。ベル・ヒメノ・テイターニアと言います。」

非常に気まずそうな表情で挨拶するベルを、未来と優花は興味深そうに見る。

「すげえ、本物の外国人さんだ。」

「背も高くてカッコイイ。」

「ほらほら、ベルは見世物じゃないから。」

ベルも、わざわざ応援に来てくれたのは嬉しいけど、あんなところで突っ立つてたらいやでも目立つやろ。」

物珍しさでベルに近寄ろうとする未来と優花を牽制しながらも、要はあからさまに責めるような口調でベルに詰め寄ってしまう。

「いや・・・仲良さそうに話してたから邪魔しちゃ悪いと思つて。」

そして案の定な答えに要はわざとらしく盛大なため息を吐く。

「はく。そんな遠慮はいらんで、いつも言ってるやん。」

要が不機嫌な様子を隠さずベルを注意していると、優花が何かを察したような顔を浮かべてニヤリと笑う。

「それじゃあ未来、私たちはこの辺で帰りましょつか。」

「ん？それなら要も・・・。」

「いいから、私たちは帰りましょ。要、また今度ね。」

「え？ああうん、また今度な。」

優花が要にだけわかるようにウィンクをした後、未来を連れてこの場を立ち去っていく。

何かと聡い彼女のことだ。こちらの様子を見て気を遣ってくれたのだろう。

そんな心遣いがくすぐったくもあるが、要は素直に内心、お礼を言う。

「・・・要。」

「ベル、帰ろ。」

要は今度は逃がさまいと、ベルの腕を掴みながら体育館を後にするのだった。

人目を忍んでベルはベリイへと姿を戻し、要は肩に乗せながら帰路を歩く。

道中、ベリイは気まずそうな様子で要の表情をチラチラと伺いながら、ようやく口を開く。

「なあ、要。」

「なに？」

「あのさ……今日の試合だが……。」

だが歯切れが悪く、何か言おうと思っても後ろが続かない。

きつと慎重に言葉を選んでくれているのだろう。

要はそんな彼の意を汲み、自分から答える。

「悔しかったよ。とても。」

「えっ？」

不思議そうに顔を見上げるベリイに、要は言葉とは裏腹に悔しさを感じさせない朗らかな笑顔を浮かべながら続ける。

「とても悔しくて悔しくて、泣きたくなつたよ。」

でもね、これで良かったとも思ってるんよ。」

「負けから、得るものがあつたからか？」

ベリイの言葉を聞いた要は、自分のことを理解してくれているのだなと嬉しそうに頷く。

今回の試合、相手が地区大会の優勝候補と言うだけあり、個々の選手の実力もチームワークも、これまで戦ったことのあるどのチームとも別格だった。

その強さに焦って、周りが見えなくなってしまった。

バスケはみんなで勝利を掴むスポーツだと日頃、自分に言い聞かせていたのに、今回はそれが出来なかった。

まだまだ心身ともに鍛錬が足りていない証拠だが、それは同時にまだまだ伸び代がある証拠でもある。

「相手がどんなに強かったって、その空気に飲まれちゃいけない。」

今日はそれを心掛けるいい教訓になったから、次はもつと良い試合にしてみるよ。」

そうやって負けから学んだことを、要は成長の糧としていく。

勝負は勝っても楽しい。負けても楽しい。

例えこの先どんな強豪チームを相手にしようとも、要はそれだけは忘れないように今一度心に誓う。

「そっか、いらぬお節介だったな。」

そんな要の様子を見たベリイが、少し寂しそうな口調で言ってきた。

そんなことはない、と意を込めて要は静かに首を横に振る。

「ベリイが応援に来てくれて、こうして励ましてくれるから、ウチだってすぐに割り切れるんよ。」

ベリイは何かと自分のことを強い人だと思ってくれようだが、こうやってあつさりと立ち直れたのも、先生と薫、友達である未来と優花、そして何よりもベリイがこうして励ましてくれるからだ。

それなのにこのヘタレ紳士と来たら、自分がどれだけベリイのことを必要としているか相変わらず自覚がないようだ。

「そう、なのか?」

現に今だって、こうして不思議そうに首を傾げながらこちらの顔を伺っている。

そんなベリイに対して要は、そうだよ、と言う言葉を込めて優しく笑いかけるのだ。た。

・
・
・

今日は朝から妙な胸騒ぎがする。

雛子はいつものように部屋で読書をしながらも、珍しく周囲に気を配っていた。

そしてこれまでの『経験』から、この胸騒ぎは『ある人物』が現れることの予兆だと思に至る。

ドタバタ

やがて廊下を忙しく走る足音が聞こえてきた。

その瞬間、雛子の直感確信へと変わり、近くにある枕を手に取る。

「はあ〜。」

この家の廊下をこんなやかましい足音を立てながら走るなんて、あの悪友ですらやらないことだ。

そんなことをやらかす人はたった一人しか思い当たらない。

そしてその人はこれまでに……。

「雛子〜！元気だつ……ふがつ〜！」

自分の部屋のドアをノックするなんて、マナーの良い行いをした試しがない。

雛子は部屋のドアが開けられた瞬間、勢いよく入ろうとするその人に目掛けて枕を投げ、正確無比に顔面へとぶつける。

「いつもノックしてって言うてるでしょ？『姉さん』。」

「いったいなく。それが久しぶりに会う姉への態度かい？」

「久しぶりって、ついこの前も帰ってきたばかりじゃない。」

「そうだっけ？そんな昔のことは覚えてないなく。」

雛子は心の底から盛大なため息を吐く。

このいい加減極まりない女性の名は『藤田 風子（ふじた ふうこ）』。

天井天下唯我独尊、ゴーイングマイウェイをひたすら全力疾走する、究極のマイペー
ス大学生。

そして悲しいかな、自分の実姉である。

「いやはやゝ相変わらず本の虫だね〜雛子。」

おっ、この推理小説初めて見るやつだ！

「ドアはちゃんとノックして、廊下は静かに……。」

「あく！私のお気に入りのお説がなくなってる〜！

雛子どこに隠した！物置か！

「本を読んでもんだから集中したいっていつも……。」

「あら可愛い〜、何これテイペアのぬいぐるみ？あんた相変わらずいい趣味してるわ
ね〜。」

「ちよつと姉さん！聞いているの!!？」

全く聞く耳を持つてくれない姉に雛子がとうとう声を荒げる。

「聞いている聞いている。」

読書に集中したいからドアはちゃんとノックして欲しいし、廊下は走るなでしょ？」

「だったらちゃんと……。」

「そんな硬い事言うなよ。私と雛子の仲じゃないか。」

当の本人はちゃんと聞いていたようだが、こちらの言い分を受け入れてくれなければ話す意味もない。

「はあ……もう、姉妹の仲にも礼儀ありよ。」

「それよりもこの子なんて言うの？ テディちゃん？ ペアちゃん？」

あつそれとも黄色いテディベアだからキディちゃん？

うわつ、なんか一気にパチモン臭くなつたわ。」

「……。」

それでもマイペースな態度を一向に崩さない姉に、雛子は怒りを通り越して完全に呆れ果ててしまい、ジツトリとした目で睨み付ける。

この人はいつもこうだ。

空気が読めないのではなく、意図して空気を読もうとしない。

確信的にこの振る舞いをしているのだから、夕子の悪さも10割増しである。

「ちよつと、見るのはいいけど触らないで頂戴。」

机の上に置かれたレモンに近づこうとする風子に対して、雛子は机の前に立ちながら注意する。

「なんでさく、抱き心地良さそうだし少しくらい触らしてよ。」

「ダメ、こればかりは姉さんでも絶対にダメ。」

これだけは流石に譲るわけにもいかず、雛子は表情を険しくして抗議する。

レモンがこの家に来てからも風子が部屋を訪れたことはあるが、レミンとして商店街や千歳の家に遊びに行ったりで、実はこれまで対面したことがないのだ。

そして外見こそぬいぐるみなレモンだが、実際は妖精と言う生き物なので、手触りや体温は生々しく、心臓の鼓動だつて感じられる。

触つた瞬間、少なくとも生き物であることがバレてしまう。

それを知られるわけにはいかず、ふと見るとレモンの表情もどことなく強張つており、正体がバレないか不安でいる様子でいるようだ。

「ちえつ、わかつたよ。可愛い妹の頼みだから仕方ないか。」

こちらが本気であることを悟つてくれた風子は引き下がり、何とか事なきを得るが、諦めた風子は今一度、雛子の部屋にある本棚を物色し始めた。

本音を言えばこの姉に自分の本棚を荒らされるのも嫌なのだが、レモンから気を反ら

すために今は黙認する。

「あれ？」

やがて風子は一冊の本を手に取り、雛子に見せる。

「これ、まだ読んでなかったんだ。」

その本は、小説家を目指す人に向けた入門教材。

かつて雛子がい、それ以来本棚から一度も出したことのないものだ。

「……なんでわかったの。」

「この本だけ全然折れ目がないから。雛子の本にしちや綺麗すぎる。」

少しずつ、姉の雰囲気が変わって来たのを悟った雛子は、露骨に仏頂面を浮かべて

そっぽを向く。

「……姉さんには関係ない。」

「関係ないわけではないですよ。」

可愛い妹が将来のことで悩んでるんだから。

ほら、お姉ちゃんに話してみ。」

そう言いながら風子は、雛子の隣に腰掛ける。

口調こそ先ほどまでと変わらないが、その目はえらく真剣だ。

(全くもう……姉さんは……。)

普段はどうしようもなくいい加減なくせに、こんな時だけ姉風を吹かせてくる。

自分が本気で困っているのが分かれば、真剣な顔をして相談に乗ってくれる。

そして年の離れた姉は大学に通いながらアルバイトにも精を出しており、知識、見解、経験の全てに置いて自分の上を行く。

非常に癪なことだが、それに裏打ちされた風子のアドバイスは、これまでも何度も雛子の助けになって来たのだ。

「・・・別に、大したことないよ。まだ書く自信がつかないだけ。」

要するに、何かと人から頼られることが多い雛子にとって、姉の風子は頼りにできる数少ない人物なのである。

だから結局、雛子は胸中に抱えている悩みを風子に打ち明ける。

「だからもつと本を読んで、表現力を養ってから書きたい？」

「・・・。」

言葉にしようとしたことを先に言われてしまい、雛子は口を閉じる。

「それ、どのくらいかかるの？」

自分が納得できるまでつてなると、多分一生やってこないよ？」

続く風子の言葉に、雛子は視線を落とす。

だが厳しい言葉とは裏腹に、風子の声色は穏やかだ。

自分のことを親身になって心配してくれている。そんな思いが伝わってくるほどに。

「案ずるより産むが易しって言う言葉があるでしょ？」

雛子、失敗してもいいから、物は試して書いてみなよ。」

「そんな、物語なんて、そう簡単に思いつかないわよ……。」

雛子が筆を執る勇気が出せないのは、何も文章力に限った話ではない。

雛子が読んできた物語の本はいずれも、魅力的なストーリーと世界観、そして登場人物に満ちており、自分を本の世界へと引き込んでくれた。

つまり書き手の立場となれば、今度は自分がそれを創らなければならないのだ。

その自信が、今の自分にはない。

数多くの本を読んできて様々な空想を広げたことはあつても、自分から生み出すとなれば話が変わってくる。

結局のところ、勇気が出せない言い訳でしかないと分かっている、雛子は踏み切る
ことが出来ないでいる。

「ねえ、姉さんは自分の趣味が嫌いになること、怖いと思ったことはないの？」

なぜなら、上手いかなければ本のが嫌いになってしまうかもしれない、そんな不安を抱えているからだ。

もしも上手に書けなかつたら、もしも何も思いつかなかつたら、もしも自分の書いた

物語が酷評されたら・・・。

そんな不安は、読み手としてずっと本を受け取る側でいるのなら抱くこともなかったものだ。

「そうだね、ないって言ったらウソになるよ。」

そんな雛子の不安を聞いた風子は、シャッターを切る真似をする。

風子は昔から写真が好きで、アルバムに乗っている自分の写真なんかはほとんど彼女が撮影したものだ。

将来的にはカメラマンになることを目指し、大学で芸術、デザインの勉強に励んでいる。

つまり自分と同じで風子も、趣味を将来の夢に繋げようとしているのだ。

だからこそ、彼女の意見が聞きたかった。

好きなだけではダメだから。

人に見てもらい、評価してもらうためには相応の技術が必要となるから。

それを学ぶ過程で、無理だと挫折したことはなかったか。

理想と現実のギャップのあまり、好きなことが好きでなくなってしまったことがなかったか。

雛子は不安げな様子で風子を見つめ、風子は苦笑交じりで答える。

「勉強がしんどいって思うことはあるし、投げ出そうと思ったことだって何度かあるよ？

それでも自分の写真が綺麗に取れたって、友達や先生が褒めてくれたときにね、凄い達成感を感じるんだよ。

その度に思い知るの。やっぱり私は、これが好きなんだなって。」

「そっか……。」

「だからね雛子。やってみないと、わからないものだよ。

自分がどれだけ好きなのかは勿論、嫌いになるのかさえだって、やらなきゃわからない。

なに、嫌いになりそうになったら、その時は書くのを止めればいいさ。

自分の好きなことを嫌いになってまで、続ける必要なんてないんだから。」

趣味を嫌うことになるくらいなら、趣味の範疇に留めておけばいい。

風子の言葉をそう受け止めた雛子は、ほんの少しだけ、気持ちが軽くなる。

「そうだ。試しに自叙伝とか書いてみたらどう？自分のことなら書けるでしょ？」

「自分の事……か。」

風子のアドバイスに雛子はクスリと笑う。

確かにこの半年の間に、妖精と出会い、魔法少女に変身し、怪物と戦い、異世界へと

旅立ち、そしてお姫様と妖精と小悪魔と友達になった。

下手な創作物顔負けの摩訶不思議な出来事が続き、それだけでファンタジー小説一冊分書けるレベルである。

だけど姉の言う通り物は試しで、自分がこれまで見たこと、感じたことを本に書いて見るのもいいかもしれない。

「・・・そうだね・・・試しに書いてみようかな。」

私の物語・・・。」

そんな気持ちささえ生まれた雛子は、何だかんだで姉が帰ってきてくれてよかった。

「姉さん・・・あり」

「それじゃあ、しみりとした空気を忘れるために。」

「え?」

と思いかけた瞬間、風子が突然、雛子の肩に手を置いてくる。

「久々の姉妹再会を祝して、商店街でパァーツとやりましょうや!」

「わっ、ちよつと姉さん!」

「雛子何食べたい?お姉ちゃんが全部奢っちゃうぜ!」

「もう、もうすぐおばあちゃんがお昼出来るって・・・。」

「成長期なんだからガンガン食べなきゃダメだよ。」

朝食抜きダイエットとかしてないでしょうね？」

「そんなのするわけ……。」

「女の子は少しふくよかな方が健康的で可愛らしいものだけ！」

てなわけで商店街へレッツゴー！」

前言撤回。やっぱり鬱陶しい上にやかましい姉である。

少しでも頼りになるかもしれないと思った自分がバカだった。

雛子はそんな後悔の念を抱きながら、風子に力づくで街まで引つ張り出されてしまった。

「あれが雛子のお姉ちゃん……。」

レモン、雛子に拾われて良かった……。」

最後に部屋に1人取り残されたレモンが、風子の超マイペースっぷりを見てそんな本心をポツリと呟くのだった。

・
・
・

1 か月もある長い休みをどう活用するか。

要たちからアドバイスを貰いながら、千歳は宿題をしたり、愛子から借りた漫画を読んだり、要から借りたアニメを見たり、雛子から借りた特撮の録画を見たり、リン子の家事を手伝ったりしながら過ごしていた。

そんな中で特に時間を使いたいと思ったのが、この世界について多くを学ぶことだった。

千歳は今も机の上に本を広げながら、その内容をノートに清書する。

以前、雛子と一緒に図書館を訪れたときに借りたものであり、この世界の歴史について記されたものだ。

フェアリーキングダムに帰り、将来王女となった時、故郷をより良き国にするためにも、自分の世界よりも遥かに優れた文明を持つこの世界で出来る限りの知識を吸収したい。

その熱意が千歳を動かし、朝食を食べてから今までずっと机にしがみついていたのだ。

「千歳、入るわよ。」

ドアをノックする音が聞こえたので返事をする、エプロン姿のリン子が姿を見せる。

「勉強に集中するのはいいけど、息抜きも大事よ？」

「そろそろお昼ができるから、キリの良いところでやめなさい。」

「わかったわ。」

内心、どちらに息抜きが大事なのかと思いつつ、千歳は椅子に座りながらうんつと背伸びをする。

時間を忘れるほど熱中していたため、午前中はずっと座りっぱなしだ。

今になって身体の凝りに気づき、椅子から立ち上がって少しストレッチをしてからリビングを訪れる。

すると出来立て料理の香しい匂いが鼻をくすぐり、空腹を思い出させてくれた。

勉強に熱を入れるあまり身体の凝りと空腹を忘れてしまうなんて、リン子のことは言えないなど自嘲気味に微笑しながら、千歳は食器の準備を手伝う。

「いただきます。」

2人で頂きますを合唱し、昼食を食べる。

白いご飯に味噌汁、大根おろしを添えた焼き魚、山菜の胡麻和えと野菜の煮物。

この世界に来てから慣れ親しんだ和食だが、いつ見ても色合いが良く、質素ながら味わい深い。

「美味しい……。」

自然と零れた千歳の感想に、リン子は微笑みながら味噌汁を吸う。

「勉強の方はどう？」

「とても楽しいわ。」

私たちの世界よりも文明が進んでる分、この世界の歴史から学べるものはとても多いの。」

リン子の問いかけに、千歳は心から楽し気に答える。

特に興味を引いたのは、初めて機械文明が取り入れられた時代、19世紀のヨーロッパで起きた『産業革命』だ。

現代において機械の利便性を・・・使いこなせているかは置いて身をもって体験した千歳は、将来的にはフエアリーキングダムにも機械文明を取り入れたいと思っている。

だからこそ、この時代について重点的に学んでいきたい・・・とここで千歳の脳裏に1つの疑問が過る。

「千歳？」

突然箸を止めて物思いに耽り始めた千歳に、リン子が心配そうに声をかけると、千歳は少しだけ声を震わせて答える。

「ねえ、リン子。私たち、いつまでこの世界にいられるんだろう？」

元々自分たちがこの世界に来たのは、故郷を失いダークネスの手から逃れるためだった。

だが故郷が救われた今となつては、その気になればいつでも帰ることが出来るが、それでもこの世界に今留まっているのは、未だにこの世界に巢食うダークネスの脅威が続いているからに過ぎない。

「ダークネスを倒したら、私たち、フェアリーキングダムに帰らなきゃならないんだよね？」

故郷に帰りたくないわけでは勿論ない。

そもそも自分の将来の夢はフェアリーキングダムの王女として、故郷をより良い国へと発展させることだ。

それにプリキュアの力があればこの世界と故郷を自由に行き来することだって出来る。

仮に戦いが終わって帰ることになったとしても、それは決して今生の別れではないのだ。

それでも千歳がこの世界に留まりたいと思うのは2つの理由がある。

1つは大切な友達と過ごす時間を手放したくないから。

蛍、要、雛子、そしてリリン。未来と優花を始め学校の友達。

みんなと一緒に過ごせる時間は、千歳にとって一生の宝物だ。ただドフェアリーキングダムに帰れば自分は王族。

今のように気軽に会いに行くことは出来なくなるだろう。

かけがえのない友達たちと過ごせる時間を手放すことを、千歳は惜しんでいる。そしてもう一つの理由が……。

「私はまだ、この世界で学べるものはとても多いと思うの。

だから……。」

自分の夢のためにも、この世界で学べる限りのことを学びたい。

だからこの世界に残りたい。千歳はそう言いかけて口を閉ざす。

それを言ってしまうと、姫としての矜持を失ってしまうような気がしたから。

「……ふふつ、千歳もみんなと一緒にね。」

するとリン子は、そんな千歳を責めることなく、微笑ましそうに笑った。

「え？」

「今、みんな将来について悩んで、努力している時期じゃない。

あなたも自分の将来について何をすべきか悩んでいる。

何も気にすることじゃないわ。」

異世界の行き来と言うことでスケールを大きく捉えがちだったが、言われてみれば自

分の悩みも結局のところ将来についての展望だ。

その意味では、要や雛子とも大きくは変わらない悩みである。

「ねえ、千歳。」

それなら他の子たちがやっているのと同じような事をしてみたらどう？」

「同じような事？」

意味ありげな言葉に千歳が首を傾げると、リン子は少しだけ悪戯っぽく笑いながら答えた。

「将来のことについて、ご両親に話してみなさいよ。」

・
・
・

車で夢ノ宮市を離れてからしばらく経った後、蛍にとつて見慣れた、でも懐かしい景色が見えてきた。

窓の外には水田が広がり、その後方には山々がそびえ立ち、そんな景色の中に住宅が点々としている。

有体に言えばよくある田舎の風景だが、ここが蛍の生まれ故郷。

窓一面に広がる長閑な景色を見てみると、自然と帰ってきたと言う気持ちになる。

やがて一軒の大きな家が見えて来て、健治はその車庫に車を止め、蛍は逸る気持ちを抑えながら、玄関へとぱたぱた駆ける。

夢ノ宮市の家と比べても大きく、庭や畑も含めれば更に土地面積が広いが、この辺りの家々は大体こんな感じである。

「ただいま。」

玄関の施錠を確認するまでもなく、鍵のかかかっていないドアを開ける。

今年の春まで住んでいた、蛍の実家。

ここでたった一人住んでいた、蛍の大好きな人。

間もなくして、その女性が姿を見せた。

年齢は60代、和服姿に割烹着と古風ながら上品な佇まいを感じさせるこの人こそ

「蛍ちゃん、おかえり。」

「おばーちゃん！ひさしひさし！」

蛍の祖母である、一之瀬 舞子（いちのせ まいこ）である。

久しぶりの祖母との再会に、蛍は勢いよく舞子に抱きつく。

引越してからまだ半年も経っていないが、それでもずっと一緒に暮らしていた祖母と

離れて暮らす時間は、蛍にとっては長く感じられたのだ。

「その子が、話に聞いてたリリンちゃんね。」

「うん！」

リリンちゃん、この人がわたしのおばーちゃんだよ。」

「えと・・・リリンです。初めまして、おばーちゃん。」

「初めましてリリンちゃん。蛍ちゃんの祖母の舞子よ。」

ぎこちない様子で挨拶をするリリンに、舞子は優しく微笑む。

「ふふつ、蛍ちゃんから話には聞いてたけど、可愛い子ね。」

「えと・・・。」

「お母さん、ただいま。」

「お義母さん、ご無沙汰です。」

リリンが少し困惑した表情で首を傾げていると、車庫入れを終えた健治と陽子が姿を見せた。

「お帰り、陽子。健治さんもお帰りなさい。」

ささっ、立ち話もなんですし、上がっちゃいなさいな。

もう直にお昼もできるところだし。」

「わあっ！おばーちゃんのごはん！」

舞子の言葉に螢は歓喜の声をあげる。

「おばーちゃんのご飯って、そんなに美味しいの？」

「うん！わたしのつくるごはんよりもずっとずっとおいしいよ!!」

「ほたるのよりも、美味しい・・・？」

「おばーちゃん！おてつだいするね！」

小首を傾げるリリンを余所に、螢はドタバタとせわしなく台所に向かおうとする。

「まっつてほたる、あたしもおてつだいするから。」

「こら、螢。家の中を走らないの。」

「螢ちゃん、そんなに慌てなくてもご飯は逃げないわよ。」

ご飯が待ち切れないと言わんばかりの螢の様子に、舞子と陽子は苦笑する。

向かう途中、螢の鞆でぬいぐるみのフリをしているチェリーも、螢の様子に思わず喉を噎らせるのだった。

・
・
・

蛭とリリンが手伝い、すぐに昼食の準備を終えると、早くも香しいご飯の香りが食卓に漂い始めた。

「……いいにおい。」

炊き立てのご飯特有の澄んだ香りにリリンは自然と笑みを零し、全員でいただきますを合唱する。

そしてご飯を一口食べると、リリンがさつそく目の色を変えたのだ。

「ごはんが美味しい！」

「あらあら、白米の違いがわかるなんて、リリンちゃんも味覚がいいのね。」

舞子が嬉しそうにそう言うと、リリンは殊更高いテンションで跳ね上がるように話し出す。

「だってこんなにふんわりしてて！甘くて！」

「やっぱり、ここであべるごはんがいちばんだね！」

蛭も満面の笑みで箸を進める。

舞子の得意とする和を中心とした献立は、質素ながらも非常に味わい深く美味しいもの。

家の畑で採れた新鮮な野菜と、一之瀬家が保有する田んぼで収穫した米。

そして夢ノ宮市よりも澄んだ水道水。

料理が美味しくなる要素をこれだけ備え、そこに料理上手の舞子の腕が備われれば、もうこれ以上はないと思えるほどの美味しい食卓の出来上がりである。

「どうして家で食べてるのよりもごはんが美味しいの？」

リリンがほっぺたに米粒を付けたまま、蛍に質問する。

「つかつてるお米はおなじなんだけど、こつちの方が水が澄んでてキレイなの。

水がちがうだけで、ごはんの美味しさって変わってくるんだ。」

蛍がリリンのほっぺたについたご飯を取りながら、それに答える。

「どうして？」

「えつとね、こつちの水道水の方が、お水の硬度って言って……。」

水とご飯の相性による味の違いについての講義が突然始まる中、舞子がふと嬉しそうに微笑みながら、蛍に話しかける。

「蛍ちゃん、前よりも明るくなつたわね。」

「えっ？」

「向こうの生活は楽しい？」

「うん！ともだちがいっぱいできて！がっこうもたのしいよ！」

「ふふっ、そっか。」

満面の笑顔で答える蛍に、舞子は安堵の様子を見せる。

そんな祖母の様子に蛭が首を傾げていると、陽子が続いて話す。

「おばあちゃん、ずっと心配していたのよ？」

蛭が引越しするのをずっと嫌がっていたから。」

その言葉を聞いた蛭は一転、表情に影を落としながら引越し当日の出来事を思い出す。

祖母はこの土地に畑も田も持っている以上、誰かが手入れをしなければならぬからと、この家に残ると言ったのだ。

だけどその言葉は、ただでさえ新しい自分に変わろうとした決心を折られ、住み慣れた土地を離れてしまうことへの不安が重なる蛭にとってまさに絶望的なものであり、あの時の自分は自暴自棄に近い状態になりかけていたのだ。

祖母と離れて暮らすのが嫌で、ついてきてほしいと袖を引張って泣き、最後には引越し寸前までずっと部屋に引き籠ってしまった。

思えば祖母とこうして普通に会話するのも、引越しのことを告げられる前以来である。

「あのときはごめんなさい。いっぱいメーワクかけちゃって……。」

蛭は目に涙を浮かべながら、あの時のことを謝罪する。

「いいのよ。今の蛭ちゃんがとっても幸せそうで良かった。」

それでも舞子は優しく、温かい声でそう言ってくれた。

子どもの頃からずっと好きだったその声に励まされた螢は、ほんのりを頬を赤くして照れくさそうにはにかむ。

「・・・えへへ。」

そんな螢を見て、健治と陽子も自然と笑みを零す。

半年ぶりに集まる一之瀬家の団欒は、穏やかで安らぎの一時を過ぎていく。

そんな螢たちを横で見ながら、リリンはご飯の味を精一杯堪能しながら、ぬいぐるみのフリをするチェリーにご飯をあげるのだった。

・
・
・

昼食を終えたリリンは、螢と一緒に家の庭が見渡せる縁側に腰をかけていた。

全開にされた障子の襖から、心地よい風が家の中を吹き抜けていく。

「涼しい・・・エアコンも扇風機もつけてないのに。」

蛭の実家は庭も含めた敷地面積が広く、隣の家まで距離がある。

そのおかげで風通しが良く、風鈴の心地よい音色も相まって夏場でもエアコンいらす
である。

「この鐘の音・・・聞いてると涼しく感じるね。」

「ふしぎだよね。どうしてすずしく感じるのかな?」

聴覚から触覚に伝わる共感覚のことを知らない2人は、風鈴の音を聞きながら並んで
首を傾げる。

「帰ったら、ひなこに聞いてみよつか?」

「そうだね。」

そんな会話をひとしきり終え、リリンはぼんやりと外の景色を見渡す。

緑が生い茂る庭の隣には、旬な夏の野菜が実った畑が並び、その上を蜻蛉が飛び回っ
ている。

夢ノ宮市の商店街とも、海水浴場とも違う。

人の活気だった空気にはない、静かで長閑な空間。

何もない、その意味ではダークネスの世界とそう変わらないかもしれない。でも...。
「なんだか・・・おちつくね。」

こんな感情は、ダークネスにいた頃にはなかった。

何もないのに、あるいはそれ故に不思議と安らぎの気持ちがりリンの心を包み込んでいく。

こんな世界もあるんだなと、リリンはまた新しい世界の一端に触れる。

「2人とも、西瓜どう？」

そんな時間を過ごしている中、舞子が西瓜を持ってきた。

「わっ……おつきい……」

スーパーで一口サイズの大きさに切られた西瓜しか見たことのないリリンは、大きく半円に切られた西瓜を見て驚く。

「今朝、うちの畑で取れたばかりの新鮮よ。」

採れたての新鮮ってことは、これもいつも食べている西瓜とは比べものにならないほど美味しいのだろうか？

リリンは早速喉を唞らせるが、ふと気が付く。

「あれ？つまようじとフォークは？」

普段、つまようじかフォークに刺して食べていたものだから、リリンは食べ方が分からずに困惑する。

「リリンちゃん、こうやって食べるんだよ。」

すると虫が小さな口を目いっぱい開けて、まるで要のように豪快に西瓜に齧り付い

た。

蛭に倅い、リリンも輪切りの西瓜を両手で持ち、赤い果肉に齧り付く。

「とっても甘くておいしいー！」

想像以上の甘さとみずみずしさに、リリンは今日何度目かもわからない感嘆とした声を上げる。

「はいリリンちゃん、お塩をかけるのもっとおいしいよ。」

「え？甘いものにしよっぱいものをかけるの？」

「うん、試してごらん。」

再び蛭に倅い、リリンは西瓜に塩を少しだけふりかけ、食べてみる。

「ホントだ！最初しよっぱいかと思ったけど甘い！」

「塩気は甘みをひきたてる効果もあるの。」

リリンちゃんも、おせんべいとか食べた後、あまいものを飲みたくなる時ってない？」

「言われてみれば・・・そうだね。」

自分で意識していなかったことも、蛭から教えられることで身に付けていく。

本当に、この世界に住むようになってから、リリンは毎日が新鮮で刺激的なことばかりだった。

「あら？蛭ちゃん。今日は種飛ばししないのね？」

そして今、舞子の何気ない一言から、リリンは新しい遊びを覚えていく。
「えっ……?えと……。」

ちゅーがくせいにもなつてそれはちよつとはしたないかなつて……。
「ほたる、種飛ばしつてなに?」

興味津々な目で見てくるリリンに、蛍は諦めたように苦笑する。

「えつとね……こうやるの。」

少し恥ずかし気に頬を赤くしながら、蛍は西瓜に齧り付き、やや置いてから種を吹いて吐く。

「えくと……はむ……ぺっぺっ。こう?」

「そうそう!」

むかしはよくそれで、おかーさんとどっちが遠くまで飛ばせるか競争したんだ。

そうだリリンちゃん。どっちが遠くまで種とばせるかしようぶしよ!」

「いいよ、おもしろそう!」

蛍とリリンは西瓜を堪能しながら、互いに種飛ばしで競い合う。

そんな光景を舞子は、昔を懐かしむかのように見守る。

「リリンちゃん……つよい……。」

「えへへ、コツさえつかめば、意外と簡単だね。」

そんな2人の勝負は後半、リリンの圧勝で終わる。

「あつ、そうだリリンちゃん。」

今日の夜、つれてきたところがあるんだけど。」

すると蛍が何か思い出したかのように、話題を変えてきたのだ。

その言葉にリリンはふと疑問に思う。

このように本題を隠すような言い方は蛍らしくないし、何よりも夜に出歩くななんて怖がりの蛍が言うセリフではない。

「つれてきたいところって、どこ？」

そんな至極当然の疑問を口にしてみるが、蛍は秘密、と言わんばかりに口元に指を当て

「わたしのとつても大切な場所。」

と、だけ一言言うのだった。

・
・
・

その日の夜。

リリンは蛍につられるまま、近くにある川のほとりを訪れていた。

家までの距離はそう遠くなく、よく見ると陽子と健治がこちらを見守っている。

蛍が夜に外に出られたのもこれが理由だろう。

1つ目の理由に納得出来たリリンは、2つ目の疑問を口にする。

「ほたる、ここに何があるの?」

「見たところ、普通の川っぽいけど。」

家で見守る両親に声が届くほどの距離ではないため、チェリーも普通に会話に加わる。

すると蛍は静かに微笑みながら、川辺を指さした。

リリンとチェリーはそれにつられて視線を追ってみると、そこには点々とした小さく

光りが幾つも飛び交っていた。

「キレイ……でもなんの光?」

月明かりを頼りにリリンが周囲を見渡しても、電線1つ見つからない。

光源の正体を知らないリリンが疑問に思っていると、蛍が水滴を垂らした草を光に向

かって差し出した。

すると光が草の上に止まり、蛍はそつとその光の正体をリリンに見せる。

「・・・虫? 光る虫なの?」

「このむしはね、蛍って言うの。」

「蛍・・・? ほたると同じ名前?」

「うん、わたしのなまえ。」

蛍と同じ名前の虫が住む場所。そしてここは蛍の大切な場所だと言う。

その意味を考える前に、蛍が話を続けてくれた。

「おかーさんがね、つらいことや、かなしいことがあつたとき、よくここに來てたつて言つてたんだ。」

こんなにちっちゃいのに、がんばつて小さなひかりを出してるのをみると、自分もがんばらなきゃつて、思うようになるつて。

だからおかーさん、ずつと蛍のひかりをみて、元氣をもらつてたの。」

すると蛍は一息つき、草の先に留まる蛍を見ながら静かに微笑む。

「それでね、わたしが産まれるとき、おかーさん、すごく苦しくて、辛かつたつて言つてた。」

でもそのときにね、ここにいる蛍の光を思い出して、がんばつたんだつて。」

リリンも少しだけ聞いたことがある。

人間の母が子を産むときは、半身を引き裂かれるほどの激痛が走るそうさ。

当然ながら、そう聞かされてもリリンにはおよそ想像できない。

それでも陽子が蛍を出産するとき、耐えがたい痛みに苛まれたことくらいは分かる。

「わたしは、その勇気のおかげで生まれた。」

だからわたしは、この子たちから名前をもらったの。

おかーさんを勇気づけてくれた蛍の光のように、ほんの少しの輝きだけで、勇気を与えるような人になりますように。」

初めて聞く、蛍の名前の由来。

蛍の親である陽子から、こうあって欲しいと願い付けられた名前。

「そんな意味があったのね……。素敵な名前だね、蛍。」

「えへへ、ありがとチェリーちゃん。」

チェリーの言葉に蛍は頬を赤くする。

そしてリリンは、これまでの蛍との出会いを思い出す。

自分の知る限りで、蛍は母から託された思いを体現している。

彼女の儂くも大きな光に、こうして救われたのだから。

「……今日、ここにきてよかった。」

リリンは自然と、そんな言葉を口にする。

「ほんとうに?」

「うん。ほたるのこと、もつといっぱい知ることが出来たから」

「素敵なおばあさんを知ることでも出来たし、ご飯もとても美味しかったしね。」

「うん！また、ここに来たいな・・・。」

リリンとチェリーは互いに頷きあいながら、川に舞う蛍の光を見つめる。

蛍の生まれ故郷、蛍の大切な人、そして蛍の名前。

きつとその全てが蛍の軌跡として、今の蛍を作り上げてきたのだろう。

蛍の原点となる場所を、2人は知ることが出来たのだ。

「・・・ふふつ、そっか。」

蛍は少し照れくさそうに笑いながら、再び川の方へと視線を戻す。

点々と灯される小さな光を見ながら、蛍とリリン、そしてチェリーは、これまでの戦いを忘れる程の穏やかな気持ちに浸るのだった。

・
・
・

「もうすぐなつまつりだよリリンちゃん！

みんなで浴衣きて、屋台をまわって！あとそれから、それから、花火をみて！」

「屋台には美味しいものもたくさん売ってるって聞いたよ。」

綿あめにチョコバナナに、リンゴ飴！早くたべたいな。」

「と言うことだから要。」

「2人の期待を裏切ったら許さないからね。」

「え〜・・・。」

「？」

次回！ホープライトプリキュア第28話！

「宿題が終わらない!?要、地獄のお泊まり会！」

希望を胸に、がんばれ！わたし！